
不思議の国のアリス*幕

天流希美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のアリス*幕

【Nコード】

N8348F

【作者名】

天流希美

【あらすじ】

「ねえ、アリス。俺のものでいて？」
小さい頃に祖母を亡くし、父に捨てられ、母にまで虐待という名の狂気に溺れられたアリス。ある日ひょんなことからウサ耳超美形変質者に攫われて見も知らぬ世界に閉じ込められてしまった。何もかもに彼女の常識が通じないこの狂った世界につれてこられたアリスは、何とかして帰り道を捜すが、それにはアリスの“失クシモノ”を見つける必要があるという……。いくつもの思いが絡み合い、歪みあい、壊しあうこの世界で、アリスが引き出した答えとは……？ ストーカー白ウサ

ギ、変態チエシヤ猫、性別 の女王、爺臭い帽子屋、そしてツンデレアリスが織りなす、ダーク恋愛ファンタジー。【 R 1 2

残酷・流血】【現在受験勉強につき、更新遅延中。毎月14日

に番外編 アイギョウ シリーズを更新してます】

【Prelude】Lure Melody or Intention

(前)

本作は不思議の国のアリスを原作として描いた作品です。

といっても物語がガタッと違います。

出るキャラが出なかったりでないキャラが出たりといろいろと改造
していますが、どうかご容赦を…。

基本シリーズ、恋愛も多め、ギャグは後書きか番外編に多いです。

【Prelude】Lure Melody or Intention

荒廃した空。

吹きすさぶ冷たい風。

色を失った花。

それらを順々に思い浮かべて、黒髪碧眼の青年は小さな溜息を洩らす。

退屈そうに片肘をついてちらりとよこに目配せをすると、やはりそこには暇を持って余した男の年若き主が座っていた。

こちらの視線に気付くとむっと顔をしかめる。昔は可愛かったのに、なんでこんなに生意気に育ってしまったのか……。

「限界、ですよ」

男は苦々しげに、だが瞳には微かな嘲笑を浮かべて呟いた。

それを合図にするかのように、辺り一斉からため息の連鎖は繰り返される。何度繰り返されたやり取りであろう。

「“侵食”は日に日に速度を増していつてます。もう、あの門も何の役にも立たないでしょう」

「まったく……“門番”は何をやっておるのじゃ……」

「いや、これは奴らのせいではあるまい。致しかたないのじゃよ……この世界は朽ちる運命なのじゃ」

老人は諦めたようなため息をつく。年の功を積んだ者……前の“アリス”にあったことのある者でさえ、そのようなことを言っていないのか。

いや、あったことがあるから、こそなのだろうか。彼らはもう二度と、彼女をこの世界へ招きたくないと思っっているような態度だ。

(それもそうか。なにしろ前の“アリス”といったらとんでもない暴れん坊だったらしいしな)

黒髪の青年は老人らに見えないようにくすりと笑った。

しかしそんな“アリス”にも一度会ってみたいような気がする。そんなことを口にしようものなら老人達が真っ青になりそうなものだが。

あえて言うのであれば、血気の多いもの…主に若い者共は新しい“アリス”をこの世界に招くことに賛成していた。

ただ別にこの世界の先行きを案じていたからではない。単なる興味本位というのが若者たちの本音である。

アイタイ……

そんな願望だけが彼らを突き動かす。そう、いわばそれは、抗いようのない衝動であった。

若者の筆頭である彼も、例に洩れない。青年は優しげな微笑を仮面に浮かべ、閉じていた瞼をゆっくり開いた。何度か瞬かせる。そうすれば灰色のこの世界が、鮮やかに色づくとも言わんばかりに。

長い睫毛からのぞくのは、深く昏い赤。それは、誘惑^{ルア}の字。

見えない糸で操られた人形は、操られているとも知らずに楽しげに唇をなめる。

「そうですね……。どうでしょう、皆さん。これから皆で、ゲームをしませんか？ 僕らの“アリス”を含めた、ゲームを……。ね？」

勝てば光、負ければ崩壊。棄権してもやはり待つは死のみ。
どちらにしろ、道は一つしかないのだ。

さあ、アリス。

早く正しい答えを見つけないと、ここから抜け出せなくなってしまつよ。

まあそれでも、僕は構わないけど。

「んー？」

風が、変わった……。

木の上で腹這いになって青みがかつた月を見ていた青年は、チロリと赤い舌を出して冷たい風を舐めた。

少し、空気が甘くなつた気がする。青年は頭についてある猫耳を夜風に揺らしながら、楽しそうににたりと笑った。

「ようやく動き始めたんだ、白ウサギの奴」

ねえ、貴女は俺に何をくれる？

おやおや、アリス。どうしたんだい？眠れないのかな？

それじゃあ、おばあちゃんがお話をしてあげようね。

おばあちゃんはね、昔々暗い穴に落ちたんだよ。暗い暗い、深い穴へとね。

でもそこは光が満ちていた。おや？ああ、すまんすまん。満ちているじゃわからないね。光でいっぱいだったのさ。

やさしい人たちもいっぱいいたんだよ。なぞなぞ好きのチェシヤ猫さんに時間に煩い白ウサギさん、ちよつと頭がおかしい帽子屋さんに三日月ウサギさん、いつも眠そうな眠りネズミさんに双子の門番さん、伯爵夫人に……女王様は少し変わった人だったけどね。

みんなとってもいい人たちだったよ。

そうしてね、おばあちゃんは

……

そのあと、どうしたの、おばあちゃん。

ごめんね、ごめんね、おばあちゃん。もうおはなしのとちゅうでねちゃったりしないよ。

ちゃんときいてるから、ね、つづきをおしえて、おばあちゃん。

めをさましてよおばあちゃん。ねえ、つづきをおしえて、おばあ

ちゃんはそれでどうしたの。

ずるいよおばあちゃん……わたしだけのこしてねちゃんなんて……。

ねえ、めをあけて、おばあちゃん。

つづきをきかせて、おばあちゃん

……

その夜、祖母は安らかな眠りについた。

ちょうど1年、父は突然家を出て行った。

そうしてすぐに、母は狂気に吞まれ私を殴るようになった。

同時に、私は“私”を殺した。

「アリス！ アリスッ！！」

階下で怒鳴り声がある。が、当然のごとく私は無視を決め込んだ。いつものことだ。このまま返事をしなければ彼女は荒々しく階段を駆け上がってくるだろう。それまで待てばいい。動くのすら億劫だ。

たえその後殴られることをわかっていたとしても、そんなことごときで大事な時間を割いてやるほど馬鹿ではない。一分一秒が金なり、だ。

しかし怒声がいつの間にか悲鳴に近づいてきている気がして、私は顔を上げた。読みかけの本「サルでもできる！金儲け全集」をしぶしぶと閉じ、階段を下りる。

「どつしたの、母や……」

ドアを開いた途端、鋭い痛みが右頬を突き刺した。どこか聞きなれた響きが鼓膜をたたく。

呆然としていたのはたいして長い時間じゃなかった。日常茶飯事だからか、すぐにぶたれたのだとわかる。

「アリスツ、あんたねっ！ こ、この汚いウサギ……っ」

唾をまき散らしながら怒鳴る母は、どこか狂気を帯びていた。いつもはただ怒りに顔を染めて怒鳴るだけなのに……どうしたというのだろう。

じんじんと痛む頬を抑えながら、私はいぶかしげに眉をひそめる。

視界に映るのは、確かに汚れ果てたウサギ。容姿も一風変わっていて、うすい水色の瞳、真っ黒な毛並み……なのに耳だけが真っ白という、見ようによっては滑稽な色合いだ。

活発なのか、それともただ頭が悪いのか、状況も知らずにそこら辺を歩き回っている。

ふと、目があった。ウサギは動きを止め、水色の瞳で私を見据える。私のほうもその瞳に捕らえられ、金縛りにあつたかのように動けなくなった。

そのガラス玉のような瞳が悪寒を感じるほど綺麗で……。

にこりと、ウサギが嗤った ような気がする。

「だいたいあんたはいつつも変なもの……ちよつとアリス！ 聞いているの?!」

「……え、あ、はいっ！ な、なに？」

「さつさとそのウサギを捨ててきなさい、このろまっ！ それが終わったら夕食を作るのよっ！」

母はまるでシンデレラの継母のような台詞を残すと、足音高く自室へと駆け込んでいってしまった。

私はため息をつき、もう一度ウサギを一瞥する。土と埃にまみれてしまっていて、あまりに見てられない。

先ほどの不思議な感覚を頭の隅へ押しやり、私はそっと黒い体を抱き上げた。

「おいで。体を洗ってあげるから。……水って大丈夫なのかしら」

独り言を言ったつもりが、思いもせずウサギは首を縦に振った。

……意外と利口なのね。

「結構綺麗じゃない、あんた」

私の目の前には見慣れない黒ウサギがいる。漆黒の美しい毛並みは先ほどの佇まいからはとても連想できないものだ。

シャワーひとつでこうも変わるものなのか、それとも相当汚かっただけなのか。……おそらく後者のほうだろう。

「ほら、どっから入ってきたか知らないけど戻りなさい。……帰

つててば。あの人は動物が嫌いだから……動物に罪はないのにな」

はあっ……。

沈痛な溜息が重なった。

……え？重なった？

「優しいんですね、アリス……。僕なんかこんなによくしてくれるなんて……。これからやるのがちょびつと引けてしまいます……」

……は？だ、だれ……？

私はあわてて周りを見回す。

当然のごとく、もともと人気の少ない向かいの通りには誰もいない。ましてや若い男の声　しかも聞く限りかなりの美声だ　など、聞こえるはずが……。

ま、まさか、ねえ……。私は恐る恐る足元に視線をずらした。顔がどうしてもひきつってしまっ

しかしそのまさかであった。

ウサギが喋っている。しかもにこやかに。先ほどの水色の瞳が薄く細められて、笑いじわができて、とても愛らしい。

……。笑ってる。笑って喋ってるよ、このウサギ。

ついに私もイカれてしまったか……。いや、しかし精神科に行く前にちゃんと眼科にいつておこう。耳鼻科にも……。

16歳の若さで目と耳、もしくは頭に異常をきたすなんて……！

「あ、でもちょびつとですよ、ちょびつと。計画を変更するつもりは全くありませんので覚悟してください」

「……………誰」

「ああ、そうでした。アリスは人間の姿のほうが馴染みがあるんですよね」

にこやかに言うことではない。しかし頭を抱える前に、現実逃避するよりもさらに前に、それは起こった。

一瞬、まばゆい光と白い煙がその場を包む。光には目を閉じずにいられないし、煙には鼻をつままずにはいられない。

むわりとした濃厚な香水の匂い、いい匂いなのだが使いすぎて逆効果といった感じのにおいをもろに浴びた私は、一瞬意識が飛びかける。

私はなんとかその場を離れようと口をおさえながら立とうとした。しかし動揺のためか、足がもつれる。

「ちよつと！ なにするのー！」

「あ、ああすみません、大丈夫ですか、アリス？」

「……………あんた誰よ」

煙が晴れた……………途端、目の前がしつかりと見えた。

曇った空。緑色に生い茂る芝生。そして、思わず息をのむほど美しい黒髪の男。

しかし私が呆然としたのは、そんなことではなかった。

狼狽えたような声の主には……………耳が生えていた。

肩を過ぎた程度のさらさらした黒髪の上に……………純白の長い耳。うすい水色の瞳によくあった……………純白の耳。高い背をさらに高くする……………長い耳。

耳、耳、耳。そればかりに目が行って端正な顔立ちがかすんでしまふ。いや、てかそんなのはどうでもいいんだ。

何これ、コスプレ？ってことは私やばいんじゃない…。

「はじめまして、僕らのアリス。僕は白ウサギの……って、え、ちよっと、アリス?! なんで逃げるんですか!」

変質者だからです。

その一言が喉まで出かかったが、寸前で思いとどまる。変質者を煽るのは危険だ。テレビで言ってた。

いつものことだが、数秒遅れて動揺が体の奥から湧いてくる。私は衝動に駆り立てられるようにしてあまり長いとは言えない足を必死で動かした。

今日に限って着ていた可愛いスカートが憎らしくも足に絡みつく。

「ったく、本気で逃げるんですか。だったら逃がすつもりはないですよ」

男は小さく舌打ちをして私を追いかけてくる。

全速力で逃げるが、狭い庭なうえ相手は大学生くらいの立派な(変質者だけど一応体格上は)男性だ。すぐに追いつかれてしまうのは目に見えていた。

腕をとらえられる寸前、私はこのシチュエーションに既視感を感じた。

逃げるアリス。追いかけるウサギ。

え……ちよっと待ってよ、これって……。

逃げるウサギ。追いかけるアリス。

そう考えた、刹那。

腕を強くひかれた。思わず痛みで力が抜ける。その隙を突いて男が私の体を強引に抱き上げた。

「言っただでしょう？逃がすつもりはないって」

「え、ちよ、放せコスプレイヤー！ 外道！ 変態！」

「何とでも言ったださい。さ、行きましょう」

抵抗する余裕もないままに、私を抱えた男は勝利の笑みを浮かべ走り出す。

数十メートル走ったところで

不意に、体が軽くなった。

嘘。

そんな短い単語でさえ眩くことも叶わない圧迫感。嫌悪感がにじみだすようなすさまじい浮遊感。

え。

「さあ、アリス。一緒に穴へ落ちましょう。あ、耳元で叫ばないで下さいね。うるさいですから」

嘘。嘘、嘘、ウソウソウソォー！！

「冗談きついつてエエア

！！」

暗い暗い、漆黒の穴に、悲鳴が響いた。

ウサギを追いかけていったアリスはウサギの穴へ落ちま

した。

迷いが生み出す、深い深い、幻想の穴へ

……

さあ、ワタシをむかえにきて。
だって、約束だもの。

白ウサギさんはね、女の子を穴へと誘惑するんだ。

女の子は白ウサギさんと一緒に堕ちて、堕ちて、堕ちて……

でもね、勘違いしてはいけないよ、アリス。

白ウサギさんは招き入れる存在。

入れることは出来るけど、帰り道は知らないんだよ。

だからね、アリス。白ウサギさんには気をつけなさい。

早く、来て。

約束したでしょう？

迎えに、来て。

私をここから連れ出して、 さん

早く、早く。

だって、約束したでしょう ……

ようこそ、不思議の国、ワンダーランドへ。

ここから、出たいかい？

なら、君が失くしたものを見つけることだね。

さあ、扉は開かれた。

闇の中で、誰かの聲が聞こえた。一人…いや、二人、だろうか。痛い痛いと言ったただ泣きじやくる幼い少女の聲。謳うような、それでいて嘲笑うような少年の聲。

ワンダーランド……不思議の国？ どのような意味だろう。それに失くしたものって…。

「……ス？ アーリースウー？ 大丈夫ですか」

大丈夫よ。思わず毅然とした声で答えてしまう。

が、次の瞬間思考がフリーズした。

今の声、だれだ。というか大丈夫って何のことだ。

思考の整理が追い付かない。えっと……ウサギを放そうとしていて、それでウサギが突然人間（変質者）に化けて……無駄に美形なウサ耳コスプレイヤーが追いかけてきて、それで…。

それで、私は穴に墮ちた。

「ああ、よかったです！ やっぱりこの通行手段はなんとかしたほうがいいと思うんですよねえ……。毎回通るたびに屍餅をつく羽目になる」

端正な顔をわずかに歪めながら文句を言うのは例の「無駄に美形なウサ耳コスプレイヤー」である。

私はくらくらする頭をもたげて何とか起き上った。

男が手伝おうと手を差し出してきたのがわかったが、その手を取ろうとはしない。

心配してもらっているのはわかるのだが、変質者疑惑が晴れたわけではないのだ。

「あの……耳……」

「ん？　どうかしましたか、アリス？　ああ、耳ですね。先ほどはお騒がせしました。人間は驚きやすいということを忘れていまして

……」

「人間じゃなくても驚くわよ……」

「そういうあなたは冷静なんですね」

男はどこことなく感心するように言い、誇らしそうに笑った。彼の体が小刻みに震えるたびにウサギ耳が　びよこびよこ動くさまが実に愛らしい。

その邪気のない笑顔に、私は微笑み返そうとしてしまう。寸前で目の前にいるこいつが“変質者”ということを書いて出して、あわてて眉じりを上げた。

何事も簡単には信用してはいけない。

しかし、確かにこの男の言うとおりだ。先ほども狼狽えることなく真っ先に踵を返した。

ふつうは叫びをあげるとか間違付くとか女の子らしい反応するはずなんだが……。女性ホルモンが不足気味か？

「別に……驚きよりも先に防衛本能が働いたんでしょうよ」

今だつてそうだ。明らかに不審な男が目の前にいて、記憶にない場所にいるというのに、私はたいして動じていない。

こいつは誰だ、ここはどこだ。そんな疑問は絶えず浮かぶというのに、おかしな話だ。

まるで……そう、なんだか、知らないというより覚えていないに近い。いや、でもそんなはず、あるわけがない。

「ここは、どこなの。あなたは一体誰？」

わざと一音一音はつきりと言ってやった。少しはこっちが不機嫌ということにも気付いてほしい。

しかし肝心のウサギは同じ笑顔ではきはきと答えるだけだ。殺意がわく爽やかさだ。

この野郎……もしかしてものすごいニブチンか？

「そうそう、自己紹介の途中であなたが逃げてしまったんですよ。はじめまして、僕らのアリス。僕は“白ウサギ”のルア。貴女がいた現実とこの世界を結ぶ“案内人”です」

そう言つて優雅にお辞儀する。安心させるためだろうか、男は視線を合わせるかのように腰をおろした。

目の前に、吸いこまれそうな水色がある。またその瞳が秘める魔力に引き込まれそうになり、私は慌てて顔をうつむかせた。

「えっと……ルア、さん？」

「ルアと呼んでくださつて結構です」

硬い敬語を返されて、私は視線を上げないままそっけなく言った。

「別に敬語じゃなくていいわ。あんまりそついうの……好きじゃないし」

「うわぁ……可愛くない言い方。しかも目をそらしてるし。どうしてこんなきつい言い方しちゃうのかなぁ……」

「思ったとおり、ルアは驚いたように目を見開いている。」

「私は自己嫌悪のため息をつき、それでも目を合わせないよう、言った。そんな自分に嫌気をさしながらも……」。

「……ごめん。可愛くない言い方だけど……これしか言えないし」

「あ、いえ、そんなこと……。ただ……意外だなあって……」

「意外？」

「先代の“アリス”はとても乱暴者で礼儀もへったくれもあつたものじゃなかつたんですよ。先代の“白ウサギ”も同じような自己紹介をしたんですが……その際頬を殴られたそうでしたね……グーで「は……？」」

「いや、さすがにそれはないだろう。うん、きっと大げさに言ってるのよ。そう勝手に解釈するときながら真剣に耳を傾けてしまう自分が心底憎い。」

「しかしこの時そちらの方向に話がいったために、彼が意味ありげに言った“アリス”のことを聞く機会を失った。」

「すごい人だったのね。波乱万丈っていうの？」

「というより支離滅裂で口よりまず手が出る人でしたね。殴ってほこぼこにしてから質問攻めにしたそうです。まあそういう件が何件も何件も出ましたから一時監禁したんですが……」

「したんだけど……？」

「何しろ視線で人一人殺せるような女性ですからねえ……大人しくしてくれるはずもなく、指揮者は二度と歩けないようになり、協力

者は全治1年以上のけがを負いました」

「な、なんていうか……過激ね……」

「ええ、そのお孫さんがこんなに大人しいとは思っていませんでしたから……」

大人しいとは言えないけど……まあその人に比べちゃマシね。あんまり人を殴ったこともないし……。

いや、でも比べる基準が　え？い、今なんて……？

「……お孫さん？」

「はい。先代はアリスのおばあ様と聞いてますよ」

「聞き間違いだわ、きっと。耳鼻科……じゃないわ、動物病院行ってその耳直してもらいなさい。聞き間違いよ、聞き間違い」

のはず。だって私の知ってるおばあちゃんは……

何?!　アリスがいじめられたあ?!　どこのどいつだくそつたれっ!

お義母さん落ち着いてください!　ただのからかいですよ!

ほお、からかい上等!　それなりの覚悟してやってんだろう

なあ、くそがきがっ!

大人げないこと言わないでくださいってばお義母さん!!

大人げない?!　あんたこそ少しは母親らしい顔を見せたら

どうだい?!　この根性無しがっ!

普通の母親は等身大のハンマー持ち出して復讐なんてしません!!

余計な記憶が都合悪く浮き上がってきた。

ま、まって……そういえば私にだけはでろでろに甘かった気が……き、気のせい……？ てか、もしそうだとしたら……おばあちゃんよく死んだわね……。

「その血を引き継いでるといふのにこれだけおとなしいといふのは……意外としか言えませんでしょう？」

「……そうね。他人事じゃないかも……」

他人事ならば心おきなく笑えたといふのに。

私は一息ついて周りを見渡す。つい彼に目を奪われてしまい、他のものを見るのを忘れていた。

……ううん、でも奪われて当然よね。ウサギがしゃべったり化けたりウサ耳ついたり……あり得ないことが頻発しているのだから。

私は考える。湧きあがってくる疑問を、不安を、恐怖を……捻じ込むようにして、無理矢理思考を働かせる。

……どうせ、ただの夢よ。醒めれば消える、儂い泡沫……
うたかた

夢なら、今見ていることにだつてすべて説明がつく。

澄み渡った蒼い空……今日のお天気は曇りだったわ。

春のように暖かい風……今は夏の終わりのはずなんだけど。暖かすぎよ。

これでもかというほど豪華に咲き誇る花々……見ない品種ね。

どう考えても“東京”にはこんな場所はなかった。

それに、決定的な決め手はこの男だ。艶やかな黒髪に澄み渡るような水色の目。そして……見るには少しばかり痛いウサ耳。

あり得ない以外にどう表現しよう。

(何? いわゆる妄想ってやつかしら。 にしても)

私はゆっくり手を伸ばして花にとまる美しい蝶を捕まえた。やはり、見たことのない種……。

ここは一体、どこなのだろう。

もし、どこか別の場所にいるのだとしたら自分のやるべきことは一つだ。

「私、帰るわ」

「はい?」

「ここはどこなのかしら。まだ未発見の島とやらだったらちよつと大変でしょうけど……ここにこうしているわけにもいかないわよね」

「さつきから何を言っているんですか、アリス」

「いろいろと教えてもらって悪いけど、とりあえず帰り方を知っている?落ちてきた……ってことはどこかに階段が……」

「……帰り道なんて、ありませんよ」

彼の声が、1オクターブ低くなった気がした。水色の瞳にぞつとするような冷たさが宿る。

握りしめられたままの手を、私はひそかに振りほどこうとしたが、その動きに気づいた彼はそれを許そうとはしなかった。

強くはないけれど、決して逃げられないように握り返される。

「……はなして」

「僕が放したとしても、貴女は僕から逃げられない」

「いいから放して」

「それに帰り道も見つからない。ここは夢の世界じゃない、貴女が夢から覚めるなんてこともない」

「余計なお世話よ。現実主義者をなめないで。こんなの……現実なはずがない」
「現実ですよ、僕らの“アリス”。君はこの“ゲーム”で勝利しない限り決して帰れない」

ゲーム。それはひどく奇妙な響きだった。

恍惚とその単語を呟く彼の水色の瞳が、ひどく狂気じみている気がして、私は思わず身を縮める。

「ゲームって何よ」

「ゲームはゲームです。貴女が勝てば大人しく貴女を解放してあげます。そうすればゲームセット。僕らが勝てば、ゲームオーバーですよ」

「……あなたが勝った時は……？」

「この国とともに朽ちましよう、アリス。永遠に

……」

次の瞬間、私は無我夢中で彼の手を振りほどいて走り出した。

どこに行けばいいかなんてわからない。

帰り道だってわからない。

ただ彼の狂ったような忍び笑いが、耳に張り付いてはなれなかった。

ねえ、どこへ行くの、アリス？
楽しい遊びは、これからだよ。

なんなの……なんなのこれは……っ、この世界は……！

私は珍しく心の底から動揺していた。背中に嫌な汗が流れおちる。べったりと身体に纏わりつく下着が気持ち悪かった。

誰もいない、いない。あるのはひたすら続く花畑。知らない花が、私の前に自己主張するように咲き誇るだけ。

「どこよ……っ！ ここは何処だって言うの?!」

「どこへ逃げてても無駄ですよー？ いい加減疲れたから終わりにしましょうってば」

私たちはそんな中、馬鹿みたいに追いかけてつこを続けていた。私は全速力で逃げて、ウサ耳をはやした美貌の男は余裕の笑みを浮かべながらそのあとを追いかける。

明らかに相手は手を抜いているのに、距離が縮まることはない。

怖い。怖い。怖い……っ。

私は足をもつれさせながら、必死で頭を強くふった。

(だめ、そんなこと考えないで。集中、集中するのよ。とにかく今は逃げないと……！)

しかし一度騒ぎ出した心臓は言うことを聞いてはくれず、耐えがたい恐怖にバクバクとなり続けている。

私はこみあげてくる涙をおし殺しながら、後ろに視線を向けた。

男は疲弊した様子もなく、間延びした言葉を投げかけてくる。

「ついてこないでっ！」

「といわれましても。アリスは迷子になっても構わないんですか？」

「あなたと一緒にいるよりマシっ！！」

「ははっ。ずいぶん嫌われちゃいましたねえ。困りました」

と、全然困っていない様子で笑う彼を、私は憎々しげに睨みつけ
もう一度前方を見た。

目の前には長い長い花畑が敷き詰められている。その中心に一本、
まるでそこへ誘導するかのように小石の道が作られていた。

どこまで続くのだろう、この道は。そもそも、終わりはあるのだ
ろうか。

「ああ、もうすぐ森ですね」

私の心の声にこたえるかのように、のんびりとルアは呟いた。

よかった……じゃあ、逃げ道も何とかして見つかるかもしれない。

私はほっと胸をなでおろす。

しかし、そんな安堵もつかの間。

「さて、そろそろアリスを捕まえますか」

どこか楽しげに吐き出された彼の呟きに、ぞくりと全身が泡立っ
た。わざわざ後ろを振り向かなくてもわかる。

私の荒い息。彼の落ち着いた息。

だんだん落ちていく私のスピード。どんどん加速していく彼のス
ピード。

彼との距離はあと何メートル？

……あと5メートル。

……3メートル。

……2メートル。

ほら、すぐ後ろに、彼の手が伸びてきて。

いやだ、いやだ、いやだっ……！！

そう思うのに疲れ切った足はもつれていくばかりで。

あ、やば……っ

ついに、転んだ。なにもないところで、馬鹿みたいに大げさに。私は声にならない悲鳴をあげながら、すぐに来るだろう衝撃に目を閉じて備える。

背後でルアがあわてて私の体を支えようとする声が聞こえたが、さすがにもう遅い。

「むぐっ」

「むぐ？」

私とルアの声が見事に重なった。

え？ これは何？ ベタな展開？ 転んだ矢先に相手の唇がありそのままお互いファーストキスをしちゃうとか？

うっそー、今更そんなばればれな展開ないよね？ な、ないよね？ つてええええええ！！

しかし幸か不幸か、重なったのは唇と唇ではなかった。ぴったりと収まりよく重なったのは、「ベタな展開」を反射的に

避けるために体をよじらせた私の肘と、大量の花畑に隠れて見えなかった人物の肋骨より少し下……そう、人はここをみぞおちという。

文字には表せない擬音が、被害者の唇から洩れた。

一瞬の沈黙。

この沈黙の間に、警察に連行される自分の姿が私の脳裏に描かれる。

「う、うそつ、ちょっと、し、死んでないよね?!」

案外反応が早かったのは私のほうだった。呆然と突っ立っているルアを置いてきぼりにして私は起き上がり、彼の肩に触った。

その時、自分がノックアウトした男の顔が視界に入る。無意識に、私は目を見開いて彼の顔を凝視した。

こちらを朦朧と見つめるオニキスの瞳、彼が少し動くたびにさらりと落ちる黒髪、いささか整いすぎている顔、露出度の高い黒い服、おそらく18、19辺りかと思われる華奢な体つき、そして……闇色の大きな猫耳。

『チエシヤ猫さんはね、道をおしえてくれたりもしたんだけど、それ以上にアリスを惑わしたんだよ……』

亡き祖母の言葉が耳に蘇る。しかしそんなことよりもまず最初に頭に浮かんだことは……。

(目に痛いわ……)

ルアといい、この男といい、どうしてこんなにも頭に変なものをつけているのだろう。

そりゃあ、日本でも確かにあった。見たことはないけど確かにあった。だが、それは女の子が付けるものであって、男の子が付けるとその人の持つ威厳が半減するというか、間抜けに見えるというか、正直ドン引きするというか……。

「おい」

耳元でひどく機嫌の悪そうな声が聞こえた。私は恐る恐る考え込んでいた頭をあげる。

すぐ目の前には涼しげな……というかもはや氷点下零度の域に達している冷たい瞳。

「どげよ」

絶対零度の声音に、私は一瞬何を言われたのかわからなかった。呆然と、そのきれいな瞳を見上げる。

「重いんだよクソ女。どけ」

「アリス、動かないでください」

「ちょ、ちよっと、同時に逆のこと言わないで……ってルア?!」

文句を言おうとウサギのほうを向いた私は、目の前に突き付けられた“それ”を凝視した。

黒い、黒い物体。一度だけ見たことがある。一度だけ、テレビで。

「じゅ、銃刀法違反!!」

「はあ?」

私の腹背に構えるウサギ耳と猫耳の目に痛いやつらは、まるで聞きなれない単語を耳にしたかのように首をひねった。

揺れるウサ耳を可愛らしいと思うよりもまず先に、すぐ目の前に突き付けられた銃口の昏い殺気に恐怖を覚える。さすがにこんな時まで冷静になれる私ではなかった。

「じよ、冗談じゃないわよ！ ほ、本物じゃないでしょうね！！」
「え……本物ですよ？ じゃなきゃそいつを殺すことなんかできませんし」

そう言いながらレボルバーを鳴らす彼の瞳に、私は悪寒に似た吐き気を感じた。

口元だけは、楽しそうに、嗤っている。

この人……本気だ……。

どうしてこの人は笑いながらこんな冷たい光を瞳に宿せるのだろう。

玩具ではないのだ。遊びではないのだ。こんな平気な顔をして、人を殺せる武器を振りかざすなんて 狂ってる。

「あ、アリスは動かないくださいね。大丈夫ですよ、こんな至近距離で外すほど馬鹿じゃありません」

「十分馬鹿でしょ！ な、なんで殺すのよ！ この人あんたに手え出してないじゃない！」

はあ？ と、再びわけがわからないとでも言うように首をかしげたふざけんな、わけわかんないのはこっちだ。何が悲しくていきなり見知らぬ変態に誘拐されて、見知らぬ土地に連れていかれて、見知らぬ人にどけと脅されて、見知らぬ人に銃向けられなくちゃいけないんだ。

神様、私が何かしましたか？

「何言ってるんです、アリス。殺らなきゃ殺られるでしょう？」

「てめえら、誰の上でごちゃごちゃ話してると思ってた？」

ドスの利いた声が私のすぐ耳元から聞こえたのと、私の体が高く浮き上がったのと、ルアが引き金を引いたのとはほぼ同時の出来事だった。

声を上げる暇も状況を把握する暇もない。ただわかるのは、自分をきつく抱きしめる長い腕。目の前の、というよりも鼻の先にある端正な顔。

「へ？」

「騒ぐな。舌かむぞ」

耳元で、低く囁かれる。年頃の、しかも超絶美形の男にそんなことをされて赤くならない女性はいない。もちろん、私も例外ではなかっただろう。こんな状況でなければ。

飛んでいた。いや、跳んでいた。

高く高く、私を抱きかかえたまま、ルアの頭上を。

つまり、ここは半空中。えーっ、もっと言ってしまうば、もうたぶんこれ以上上には跳ばない。

端的に言つと。

「う、うそっ！」

「黙れ女。つたく……せつかく昼寝してたっつーのに、ツいてね」

んなことを言っても。ほら、こうしているうちに、地球の自転によって発生する重力が、体を。ふ、ふわっと……。

「うっ」

落ちてる。

「がぎやあああああああ

！！！！！」

「待てっ！チエ^{ロキ}シャ猫！」

「じゃあな。白ウサギ^{ルア}」

仲良く別れの言葉を交わしている二人を余所に、私は一人意識を手放した。

P・Sにつくき神様へ

今度異世界へ飛ばすときはどうか重力のないところへ飛ばしてください。

危つくトラウマになってジェットコースターに乗れなくなりそうです。

「 申し訳ありません。抜かりました」

黒髪の青年は純白のウサギ耳を垂れ下げて膝をついた。跪かれています。少年は優雅に微笑みながら「顔をあげて」と言う。

それは単に、彼がどんな顔で失敗の報告をしているのかを知りたかっただけ。一度も仕事を失敗したことはない、自尊心プライドの高いこの青年は、どんな顔をするのか。

しかし少年が期待した青年の顔には、何の表情も浮かんでいなかった。

いつも笑顔を浮かべている彼が。優しくする時も、……殺すときも、“アリス”のことを話すときは“笑顔”の仮面を決して外そうとしなかった彼が。

へえ。少年は口角をあげて呟いた。なかなか、面白いことになってきた。

「うーん、まさか君が逃すとは思わなかったからなあ……。予定が狂った」

「にしては嬉しそうですね」

「うん、君が不機嫌そうだから？」

びっくりと、彼の耳が怒りに震えた。しかし何も言わずに青年は深呼吸をしただけでなんとかやり過ぐす。つまりないなあ……。

「ずいぶんと悪趣味になりました」

「まあ、他人の不幸は蜜の味っていうし。でも、君に興味をどういふ言われたくはないなあ。どうせまた“アリス”と遊んでいるうちに“チェシャ猫”に邪魔されてたんでしょ」

「……………」

「あれ、凶星？ははっ、どーせ君のことだからふざけて鬼ごっこもどきでもやってたんだね！」

「……………」

「……まず、凶星？」

嘘だろ。口の中でそう呟く。まったくもって冗談でしかなかったのに……………。

「えーっと、なんていうか、それはやっぱり、ちょっとまずいと思うんだよ、人として」

「……………仕方ないでしょう。必死に逃げることが、怒ることが、すっごく可愛かったんですから……………」

「君、Sなの、Mなの？」

くすくすと、少年は声を抑えて笑う。なるほど、これは面白い。とても面白い。まさかこの男が不機嫌そうな顔のまま「可愛い」などと口にするとは！

少年は待ちきれないとしても言うように窓の外をぼんやりと眺めて笑った。きつと会えるのはそんなに遅い話でもないだろう。この男

ルアに任せておけば、どうとでもなる。

「会ってみたいなあ、僕のアリス」

少年はうつつとりと呟く。まるで、まだ見ぬ恋人に向けるように

……………

『…………お母さん、お父さんは?』

少女は母の袖をひっぱりながら舌つたらずな言葉で聞いた。母は答えるところか、少女のほうを見向きもしない。

ガランとした部屋。気づいてみれば、父の所有物であった年代物のパソコンや古びた本棚などが、あるべき位置から消えていた。

テレビの上にも飾ってあった写真は……父の部分だけが輪郭を残して、切り取られている。家族3人でピクニックに行ったときに撮ったそれには、人型のブラックホールがあった。

父の箸も、父の椅子も、父の仕事用具一切も、すべて、ない。まるで、そう、まるで　　父という存在自体が消えてしまったか
のようだった。

『ねえ、お父さんはどこ?』

少女はもう一度母の袖を引っ張ってみる。母は顔をあげてこちらを見た。

とたん、体がすくむ。ぎらぎらとした目が、少女を睨んでいた。爬虫類のそれに似たものが、憎しみで醜く歪む。

バンッ

少女には何が起こったかもわからなかった。ただ、背中と腕が燃え上がるように熱い。

熱い、熱い、痛い、熱い　　っ!!感情のままに泣き叫ぶと、同種の熱さが頬にも襲いかかってきた。

また遠くに飛ばされ、ぶたれた頬を抑えながら少女は痛い、熱いと繰り返す。

母が狂ったように何かを叫ぶ。幼い少女にはうまく聞き取れなかったが、ただ、母が狂いながら泣いているように見えた。悲しくて悲しくて、憎い。

そんな母の感情が直接流れ込んできたような気がして　　少
女はあえなく意識を手放した。

母は、自分を捨てた父が好きだった。

好きだったから、悲しかった。

悲しかったから、憎かった。

憎かったから、“父”をすべて壊した。

すべて壊したから、父が残した私も、壊そうとした。

壊そうとしたから、私は

……

「　　っ！！」

私は飛び起きるようにして夢から目覚めた。動悸が早い。息が荒い。目の前が見えない。恐怖に、震える。

「　　あっ……」

唇の間から小さな喘ぎ声が漏れた。何年振りだろう。久しぶりに見る夢だった。もう……もういい加減、乗り越えられたと思ったのに。

「起きたか」

聞いたことのある低い美声に、私は驚いて後ろを見た。まず最初に、そのとがった耳が目に入る。ピコンピコンと小さく動く黒いそれは、とても愛らしい。ただし　　いまにも目がく

らみそうに綺麗な青年が付けていなければ。

(つくづくこいつらって損なものを持っていると思うわ……)

その鋭い漆黒の瞳に愛くるしい猫耳など、天地がひっくりかえっても似合わない。どころか、ただの変態にしか思えないです。

せっかく女の私よりきれいな顔をしているのに……。いや、まあ自分を卑下するわけじゃないけどね、こんなモデルさんみたいな人に敵うわけありませんって。

「おい、なにため息ついてんだよ」

不機嫌そうな声には我にかえり、もう一度彼を見た。

黒い猫耳、黒い尻尾……間違いない。ルアが“白ウサギ”なら、彼は“チェシャ猫”だ。ただ……チェシャ猫はピンク色をしていると祖母から聞いていたのだが……。

しかし何にしても、自分はこの人に助けられたのだ。拳銃を片手に笑っていた、あの白ウサギから。

私はごくりと息を飲むと、緊張した面持ちで言葉を紡いだ。

「あ、あの……助けてくれて、ありがとう」

「別に、助けようと思ったわけじゃない。アンタが勝手にしがみついてきただけだろ」

うわ、何こいつ。人が素直に感謝してんのにぶすつとした顔で生意気なことを言いやがる。

教訓。チェシャ猫と書いてウザいと読みます。

ルアみたいに礼儀正しい奴もいれば、こういう奴もいるわけね。つくづく謎の世界だわ、ほんと。

私は先ほどまでの意気消沈もどこへ行ったのやら、不機嫌そうに目

を眇めて彼に問う。

「そう、わかったわ。じゃあ聞いてもいいかしら？ここは一体どこなの？」

「森」

見ればわかる。うっとおしいほど木々が生え茂って、日の当たるところがほとんどない、暗い森だ。

いや、聞いているのはそんなことじゃなくてね？確かに「不思議の国」と答えられるよりは「森」の方が幾分細かい説明だけどね？

「じゃあ、帰り道はどっちかわかるかしら」

「アンタ、どっから来たんだ」

あれ、普通の会話になったわ。相も変わらずにらみ合ったままだけど。

しかし不機嫌そうに目を細める彼に反比例して、猫耳は興味深そうに動く。あ、ちょっと可愛いかも…。

ルアの場合、なんだかんだ言っではぐらかされてきた。この人には真剣に聞いてもらえそうだと直感した私は、意気込んで答えた。

「と、東京！日本の東京！」

「トーキョー？聞いたことねえな……。もしかして、門の外側にあるのか？」

驚いたように彼は目を見開いた。門、という言葉に私は引っかかったが、とりあえずこんなところではないと思ったので頷いておく。チエシヤ猫の眉がさらに寄った。難しそうなうめき声をあげて、聞き取れないほど低い声で何事かを呟く。

「アンタ、よく入ってこれたな。あそこの門番、かなり厄介だぞ」

「門番……?」

「いや、でもあそこ入る者は拒まずなんだっけな? まあどっちでもいいや。とりあえず、そこへ行きたいんだな?」

「えーっと、まあ、……はい」

私は曖昧に頷く。しかし実際のところ、どう答えればいいのかわからなかったのだ。

ただ、こんなところにいるもきつと状況は動かない。とりあえず今は白ウサギから逃げたほうがいい。

「だとしたらまず、よるところがある」

チエシヤ猫は軽々しく身を起こして、さっさと歩き始めた。

私は一瞬彼の動きに見惚れたが、その軽い身のこなしに倣って自分自身を起こそうとする。

硬い地面に横たわっていたせいか、体はボキボキ言うし、服には泥がつくしで散々な姿だ。私は葉っぱがついてとれない髪をいじりながらため息をついた。

(帰りたいなあ……)

どんなに母に暴力をされても、もとの世界が恋しかった。こんな言い方、変かも知れないけど、今では東京のあの汚い空気が懐かしい。虐められていた学校も懐かしい。

どんなことがあっても、あそこが私のいるべき場所なのだ。

「おい、何してんだ。早くいくぞ」

「あ、うん」

「帰るんだろ?」

「……………うん」

そうだ、帰らなきゃ。帰りたんじゃないやなくて、帰ってみせる。私はもう一度胸に手を当てて小さく「帰らなきゃ」と呟くと、前にいるチエシヤ猫を睨むようにして見る。チエシヤ猫は私の強い瞳を見て、ちよつとだけ微笑んだ気がした。口角をあげて、目を細めて……………優しく。

「じゃあ行くぞ、えーつと……………あんた、名前はなんていうんだ？」
「アリスよ」

彼が口ごもるまで気付かなかったが、そういえばお互い名前を知らない。ルアが一回だけ言ってたような気がしたんだが、なんだったけ……。ロックじゃなくてロッキーじゃなくて

「俺はロキだ」

私の考えを見透かしたらしい、彼はぶすつとしながら言った。せつかくの笑顔が台無しだ。

「ロキ、ロキね、わかった」

覚えやすい名前でもかったと思う。私はちよつとだけ笑って、もう一度名前を呟いた。

「あの、ありがとね」

いろいろ助けてくれて。そうつけたすと彼は一瞬身を固くして、勢いよく前を向いて歩きだした。それもかなり大股で。

あわてて追いつこうと私も歩き始めると、ちらりと彼の横顔が見えた。猫耳はピンと立って、ちょっと怒ったような顔。でもその顔は、明らかに赤かった。

……さっきのウザいっていうの、取り消してもいいかな。

私は目を細めてロキに見えないように笑い、不器用で優しい彼にもう一度「ありがとう」と呟いた。

こんな無茶苦茶な世界にも平和というものは本当にあるらしい。

3時間も前のことではないはずなのに、銃をぶっ放したルアの姿が夢みたいだ。

平和、平和、平和……っというか……

(私、なんでこんなところにいるんだっけ?)

ある意味ここは本来の目的を忘れてしまっという点ではとても危険な場所だった。

私の隣に座り意外にもきれいな所作で紅茶を飲む彼も目的を忘れていたらしく、一口紅茶を口に含んだところで我に返った。ガチャンと音を立てて乱暴にコップを置く。

「おい帽子屋^{レーテ}！」

「ああ、マルスたちは今買い物に行っているからいないんです。すみません、せつかく貴方から会いに来てくれたのに」

「え、いや、別にあいつらに会いたいわけじゃないから……じゃなくって！」

「そう言えばロキ、こちらの可愛らしい女性は誰ですか？ 珍しいですね、貴方が女の子を連れてくるなんて」

「いや、こいつは……っーか可愛くも何ともねえだろ。っておい！」

私は呆然と言い争う二人を見ていた。一人はもちろん言葉使いが荒いプラス無礼極まりないチェシヤ猫、ロキだ。もう一人は……

『こいつは帽子屋のレーテだ。平和ボケと呼べ』
『はあ……』

人を紹介するのにそんな言い方でいいんだろうかと思いつながら私は頷いた。私は紹介された青年をまじまじと見る。

とにかく黒い人だと思った。黒い服、黒い髪、黒い瞳、黒い靴、黒い帽子。唯一黒くないのといえれば白のシャツと、銀のボタンと、白の手袋と……それから、左胸を大きく飾る赤い薔薇だけ。

薔薇と帽子と帽子を取ってしまえば完璧葬式に行く人だ。ロキには劣るが、これまた美形。性格も含めれば彼のほうが人気を持つだろう。そう、綺麗な顔だ、綺麗な顔なのだが……。

明らかに人の良さそう、というか間抜けそう、というか騙されやすそうな彼、レーテは困ったような微笑みを友人であるロキに向けた。

『ひどいですねえ。僕は別にボケているわけじゃありませんよ』

『十分ボケてるだろ。人一人満身に殺せそうもない顔して』

『違いますよ。確かに平和は好きですけど、そういうわけじゃない。単に僕が殺すまでもなくマルスやレストが殺るんです』

おかげで僕はなんの煩いもなくお茶会ができます。

そんなことを言いながらレーテは優雅にカップを口に運んだ。も

のすごく様になっている。

『えーっと、お取り込み中、ちょっといいかしら?』
『なんだよ』

友との会話にいらついていたのか、ロキはぶっきらぼうにそう言った。

『その帽子の下にはどんな耳があるの?ウサギ?猫?』

『は?』

呆然とロキが声をもらったのとレーテの大爆笑が辺りに響いたのは同時であった。

そんなこんなで私たちはいつの間にかお茶会に誘われていた。ほんと、何しに来たのだろう。

足を組みふんぞりかえって紅茶を飲むロキと、目を見張るほど優雅に紅茶を飲むレーテと、甘い香りのする美味しい紅茶とで忘れてしまう。

しかし穏やかな空気を破ったのはやはりロキであった。憤慨してレーテを鋭く睨みつける。

「こんな馬鹿らしいお茶会をするためにここに来たんじゃねえこと

「ぐらいはお前もわかってんだろレーテ！」

「そうそう、そろそろお嬢さんにさっきの質問を答えてあげないといけませんね。ええっと、僕の名前はさっきロキが言ったようにレーテ。“帽子屋”と呼ばれる存在です。一応役割としては“人間の帽子屋”ってことになってますから。残念ですけど、耳や尻尾はありません」

「へえ……やつぱりロキやルアみたいな変な人ばかりじゃないんだ」「変な人ってなんだよコラ！」

ぶすりと呟くロキに苦笑を向けながら、レーテは紅茶を口に含んだ。

「そうですね。彼らのような獣耳持ちは“獣人”と呼ばれます。身体能力が人よりもずば抜けて高いんですよ。その代わり決定的な弱点もありますけどね。まあもつとも僕ら“カードもち”は全員、ただの欠陥品でしかないんですけど」

「 やめる、レーテ」

先ほどまでの怒りは何処へ行ったのやら、ロキは静かな声で止めにかかる。低い、低い、地獄の底から聞こえるようなその声は、辺りの温度を10度以上下げたようだった。

私はぞくりと体を震わせる。怖い、怖いけど、わけがわからない。動揺の色を見せながらレーテのほうを見ると、レーテはいわくありげに微笑んでいた。先ほどの優しい微笑みとは違う。もつと、寒気を催すような、怖い笑み。

「なんです、ロキもとぼけていたわけじゃないんですか」

「やめる。余計なことまでこいつには聞かせるな」

「ですが、アリス。貴女は家に帰りたいんでしょう？ だったら“帽

子屋”の助言は聞いておくべきですよ」

私はびくりと震えた。変だ、おかしい。だって、そんなはずは

……

「どうして私の名前を……」

ロキは一度も私の名前を呼んでいないはずだ。たった一度としてそれに私も家に帰りたいなんて一言も言っていない。なのに、なぜ……。

私はまじまじと笑顔の仮面を張り付けているレーテを凝視した。

「君が“アリス”で、僕達が“カード”だからですよ」

……カード？またなんだかわからない単語が飛び出してきた。しかし隣のロキには十分伝わったらしく、不服そうな呻きをあげる。

「あー！ もう勝手にしやがれっ！ アリス、後悔してもしらねえからなっ」

「……貴方もちゃんと役目を果たしなさいってば。サボりはいけないと思います」
「いいんだよ俺はっ。どーせ今は“チェシャ猫”じゃねえんだからなっ」

意味がわからない。目の前で繰り返される理解不明な状況に、私はついにしびれを切らした。

人差指で白いテーブルクロスを強くたたく。コツンコツンと固い音がした。

「ちょっと、少しは私にもわかるように話してくれない？」

レーテは快活に笑う。まったく、こっちは全然笑えない状況だといふのに。

私がさらに不機嫌そうに目を眇めると、すみませんと笑いながら謝った。だから笑っている場合じゃないってば。

「でもアリス、それはだめですよ。ルール違反。僕は“相談相手”です。ルールの説明は彼に聞かなきゃ」

「ルール違反……？」

「禁じられているんです。僕らは決して掟には逆らえない。……詳しい説明は僕の口からは言えません。彼に聞いて下さい」

「彼……って誰」

「おやおや、君を迎えに来たはずですよ。彼は“案内人”ですからね」

案内人。私は呆然とその名前を呟く。聞き覚えのあるその言葉。そう、これは確か、あの男が。

思い出せば、今でも体が恐怖に震えそうになる、あの男が。

「ルア」

「大正解」

ぱちぱちとレーテは私に拍手をささげた。

なんだか馬鹿にされているようで全然嬉しくない。あんなにしつこく言われて覚えられないわけがないのだ。

『貴女がいた現実とこの世界を結ぶ“案内人”です』

『僕が放したとしても、貴女は僕から逃げられない』

『この国とともに朽ちましよう、アリス』

『殺らなきゃ殺られるでしょう?』

彼が残した様々な言葉が今になって思いだされる。

温和そうに見えた彼は、至極当然のように私を捕まえようとした。ロキを殺そうとした。

別に、彼が嫌いなわけではない。むしろ好意すら覚えたのだ。しかし今は　よくわからなくて、怖い。

優しいかと思えば、突然冷たくなる。安心が、不安に変わる。信用が、疑惑に変わる。

もしかして、この笑顔は、この安堵は、この信頼は、すべて彼が意図的に作ったものなのではないかと。

「あの人は……敵、なの?」

恐る恐る、聞いてみる。こんなことをこの人に聞いていいものだろうか。そもそも彼……レーテの素性さえ知らないのに?

彼にとって敵だったらあえなく敵と答えるだろう。味方だったら味方と答えるだろう。それは本当に…信頼に値する言葉だろうか? しかし私の心配をよそに、彼はにっこりと笑って首を横にふつた。

「いいえ。“カード”が“アリス”を嫌いになることはありませんよ。だからこの世界に貴女の敵なんていません。ただし

“チェシヤ猫”にとっては“白ウサギ”は敵ですけど」

“チェシヤ猫”　?

私は驚いて彼のほうを見た。

ロキは行儀の悪いことに、手足を組んで冷めた紅茶を一気飲みしていた。ガチャンと大きな音を立てて　カップを置くと、不機嫌そうな目をレーテに向け、次に私に向ける。

なるほど、確かに出会ったとたんに銃をぶつ放すなんておかしい

ものね。小さくそう呟くと、ロキには聞こえていたのか、鼻を鳴らして笑い飛ばした。

「奴は俺でなくても“アリス”に触れた奴なら遠慮なく殺してるよ」「うん、確かに彼はアリス信者の筆頭ですからね。貴女も気をつけたほうがいいです」

「気をつけるって言うても……でも、ルアに聞かなきゃわからないんでしょ？」

さつき自分で「自分には言えない」と言っておいて、手のひらを返したかのように「彼には気をつける」という。

もしかしたらこのレーテも、見かけによらずかなりの曲者じゃないだろうか。

「いいえ、確かに僕はできないと言いましたよ。しかし、もう一人、“案内人”を受け持つやつがいるんです」

「もう一人…？」

「そう。いるでしょう、最初からルール違反をしているやつが。案内をしなきゃいけない“白ウサギ”から“アリス”を奪い、先に“女王”に謁見させるはずが、“帽子屋”のところに案内してきた、イカれた奴が」

「散々ないいようだな、おい」

横から“イカれた奴”が不満げな声を上げる。私は一度瞼を閉じると、心を決めてそちらを見た。

わからないことは山の数ほど。答えを出さなきゃいけないのは星の数ほど。

『帰るんだろ？』

だけど、そう言つて手を差し伸べてくれた彼なら、きっと。

視線がぶつかった。彼の暗い藍色の瞳に、自分の毅然とした表情が移る。彼の姿もまた、私の瞳に映っているのだろう。

私は息を吸い込んだ。冷たい空気に、のどがひりひりと痛む。

「教えて、ロキ。この世界のすべてを」

この世界は通称ワンダーランド……Wonderlandと呼ばれているんだ。別に名前なんてどうでもいいけどな。

何故こんな世界があるのかなんて俺らだつてわからない。ただ、そこには、“一般人”と“カードもち”がいた。

普段は“カードもち”も“一般人”も変わりはない。こんな世界でも平和は平和だしな。何年も平和な時が続いたよ。

だけど、平和なだけじゃ俺たちは飽きる。だから数十年に一度、“アリス”を招くんだ。

“アリス”って言うのは、アリス＝プレゼンス＝リデルの子孫たちだ。あんたもその血を継いでるんだろう？だから代々“アリス”として招かれるべき女は同じ名前を付けられる。

別に、招いてどうこうつてわけじゃない。ただ、そういう遊びなだけだ。“アリス”を“カードもち”に案内させて、一緒に遊んでいい思い出作つて終わり……それだけ。

それを俺たちは総称して“ゲーム”と呼んでいるんだが、勝ちも負けもない、ただ楽しめばもとの世界へ戻してもらえる。

“アリス”がいるときだけ、“カード”は発効する。といっても、ただ“アリス”と一緒に遊べるっただけだな。

“カード”にはそれぞれ役割があつて、それをやらなかったり、ましてはほかの役割をやつたらしたら、そこでそいつはゲームオーバー。まあ十中八九死刑だな。

“ルール”を破るのもご法度だ。破ったら……どうなるのかはよくわからないが、なんか身体が爆発するらしいぜ。

「あれ、でもロキは思いっきり破ってるじゃない」

私が話の途中で口をはさむと、ロキはむっとしたように眉を寄せた。

「最後まで聞いてから質問しろ」

「まあまあ、ちょっとずつでいいから話してあげましょう。どうぞせいで全部知ることになるんですから」

どうやら話の腰を折られたのが気に食わなかったらしい。文句を言うチエシヤ猫にレーテはまるで幼稚園児をなだめるかのようにやんわりといった。

同年代のように思えるが、明らかにロキのほうが子供っぽい。いや、いろんな意味でレーテはジジくさい。

「ええ、アリスが疑問に思うのも無理ないと思います。例えば、これが僕が持っている“カード”なんですけどね」

そう言いながらレーテは懐を探り始めた。

「ああ、これです！……あれ？」

彼の手に握られていたのはダージリンのティーパック携帯用。

間違えた間違えたと笑って、再び何かを取り出す。

自分が写っていない修学旅行の写真、薄青色の汚れたハンカチ、

誰かほかの……とてつもなく長い名前の人の名刺、輪ゴムの束、メガネをかけていないのに眼鏡ケース……次々と机に積まれていくガラクタに私は啞然とした。

うん、あつたよね、こういうポケット。某ドラちゃんが持っているあれ。いや、でもどれもこれもたいして役に立ちそうにもない……。

「てめえ少しは整理しろ！　なんでそんなもん持ってんだ！」

ついにしびれを切らしたロキは立ち上がって彼の帽子を取りあげた。ごそごそとその中を捜す。え、そんなところにもあるの……？

すでに彼の懐、ポケットなどからは実に様々なものが出されている。間抜けな音が鳴るおもちゃ、あたりと書かれているアイスバー、お菓子のくず、使用期限の切れた処方箋の紙、レシートの上……。

「いやあ、このごろポイ捨てをしている人が多くて。拾ってたらいつの間にやらこんなことに……」

「拾うな！　落ちているものを拾ってはいけません！　じやなきやポイ捨てをしているやつ見掛けたらぶつ殺せばいいだろ？！　そうすればゴミが減る」

いや、そういうわけでもないと思う。むしろ死体という大型のゴミが残されると思うんだ。

常識はずれな二人のやり取りにあきれていると、突然レーテの口から歓喜の声が漏れた。

「さっすがロキ！　まさか帽子に隠されているとは！」

「ふ、ふん。お前がアホなだけだろ」

キラキラと目を輝かせて見つかったカードを握りしめるレーテの

言葉に、ロキは満更でもなさそうに頭をかいた。

先ほどの言葉は撤回したほうがいいかもしれない。やはりレーテは異常に子供っぽい。

テーブルの上はガラクタだらけ。もはやあの優雅なお茶会は見ると余地もなさそうだった。

「ほら、これが僕の“カード”です」

嬉しそうに、彼は“カード”を私に手渡した。

感触からして、それはとても硬い。ちよつとやそつとの力じゃ割れそうもない。しかしそれにしても軽いし、薄かった。

その中央には黒い影で帽子をかぶってお茶を飲んでいる人間を輪郭づけた絵がある。上には英語でThe Hatter（帽子屋）と。下にはadviser（相談相手）と。周りは赤いバラの絵が縁取っている。

「へえ……綺麗なカード。トランプかしら？」

「綺麗？ 本当にそう思いますか？」

レーテはまたあのいわくありげな微笑みを見せた。

私はむつとしてそのカードをつき返す。こつやつて秘密にされるのはむかついて仕方がない。

「綺麗だから綺麗といったのよ」

「気づかないですかね？ まあしょうがないか：僕のは目立たないですし。“カード”って言うのはですね、アリス。ふつうは完璧なんです。傷一つなく、傷つくことも、燃えることもない。よく見てくださいよ」

そう言っつき返そうとしたカードをやりわりと押しやっつて、私

のほうへ返す。私はしわを寄せながらもう一度よく見えた。

確かに言われてみれば、あらゆる所に細かい傷が走っている。右端のところなどはひどく、小さな亀裂が数え切れないほどあった。

「確かに、あるわね。でもこれがどうかしたの？」

「ロキも見せてあげて下さい。貴方のほうが説明しやすいです」

「勝手に人を資料にするな」

「説明さぼっている駄猫が何を言います。ほら早く」

「……つたく。ほら」

彼は嫌々とだが右ポケットに手を突っ込み、それを私に投げてよこした。

掌でなんとかはさんでキャッチした私は、その“カード”を見て息をのんだ。

ロキの“カード”は、レーテのそれと比べようもないほど、無残な姿だった。傷というよりも、ほとんどが亀裂。文字も何とか読める程度で、絵のところなどは無数の傷で塗りつぶされていてとても見られる状態ではない。

「えつと……th-e……ch-es-hi-re……ca-t……Th
e Ch-es-hi-re Cat(チェシャ猫)?それにこれは……v
i-o-l-a-t-o-r……v-i-o-l-a-t-o-r(違反者)?どうということ
?」

「それがおれの役割なんだよ。つまり、“違反”をすることが」

ルール違反をすることがチェシャ猫のルール?うわ、なんてひねくれた……。

そんな考えが読めたのか、ロキは素早く自分のカードを私の手から奪い取ると、懐にしまいなおした。本人はもう何も言う気がしないらしく、すべてレーテに任せようという魂胆だ。やはり話の腰を

折った私が悪いのだろうか……。

「そう。彼が唯一、実質的には“ルール”に縛られない人間です。それ以外は、僕も、ルアも、これから謁見しなくちゃいけない“女王”も、“カードもち”は全員ルールを守らなきゃいけないんですよ。そう考えると結構“カード”も面倒なだけかもしれないですね」

「あの……その、ルールって、例えば何？」

さつきはほかの役割をやってはいけないと言っていたが、それだけではないとも思う。「じゃあ当ててみて下さい」と面白そうにレールはなぞなぞをかけてきた。

話からして、これは一種のパーティーだと思う。“アリス”を誘って、一緒に踊って、時間になれば返してもらおう。少し大がかりなパーティー。

「えーっと、例えば、アリスと遊ぶのは誰だとかで取り合いになつたとしても、相手に危害を加えない、とか？」

「ははっ。はずれです。それはむしろ積極的に殺すべきですよ。誰だって“アリス”と遊びたいに決まっていますからね、本当に欲しかったなら邪魔な奴は殺さなきゃいけません」

……………今ものすごく、いけないことを聞いたよ
たよんな気がする。このあどけない笑顔から、何か黒いものが見えた気がする。

「こ、殺す？この通称“平和ポケ”と呼ばれている彼が、そんなことを発言したのかしら？」

悪い冗談だわ。じゃなきゃ幻聴だわ。うん、それ以外あり得ない。あり得ない。

私はとりあえずこの場は流しておくことにして、つづきを促した。

「“アリス”は危害を加えられないの？」

「ああ、それに関しては大丈夫。“アリス”を殺すことはルール違反ですから」

「……………私は危害を加えることについていたんですけど。まるでそれじゃ傷つけるのは全然かまわないけど殺すのはだめって言うっているみたいじゃない。」

私のそんな視線を感じたのか、レーテは安心させるように優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ、アリス。“カードもち”は少なくとも、貴女を守る騎士たちですから。まあ“一般人”も貴女を嫌いになる奴なんていないと思いますけど……………間違いなく貴女は守られるから大丈夫。それに、君が“アリス”だなんてわかるのは黙っていれば“カードもち”だけですすね。こう、直感が働くんです。あ、この子が次の“アリス”だ！って感じて」

そんなもんなのかしら。私は不思議に思いながら頷いた。つまりこいつらの頭には“アリス探知機”が埋められているのだな。

あれ、だけど。レーテは完璧安全といってくれたが、何かが引っ掛かる。

「……………確か、ルアは“カードもち”なのよね？でも確かあいつ、私にもものすごく不吉な言葉を浴びせたような……………ゲームに勝てなかったら、この国と一緒に朽ちましようとか何とか……………」

次の瞬間。

バンッ

大きな音に、私はびくりと震えてレーテを見上げた。たたかれた机が、まだ震えている。

コロコロと、先ほどのガラクタの中からフィルムケースが転がり、乾いた音を立てて地面に落下した。

その場に、静寂が満ちる。立ち上がったまま、漆黒の瞳を見開いているレーテと、何も言わずに慥然と冷めた紅茶をすするロキ。私は困惑したまま、二人を交互に見た。

「あの……私、何かまずいこと言った？」

「ああ、言ったな。レーテ、お前少し休んでこい。ここは俺が何とかしとくから。どうせマルスたちのことだ、あと1週間は帰ってこないだろ」

「あ、ああ……。悪いですが、ロキ……。ちょっと今日は、頼みます」

「……あんま気に病むな。あいつと俺らはもう終わったんだ」

レーテはのろのろと頷くと、顔色の悪いまま、その場を立ち去った。

ただ一言、「ふざけてる……貴方は、そんなことがしたかったですか……？」とだけ残して。

「お茶、冷めちゃったね」

私は重い沈黙から逃れるように声を押し出す。腕を組んでずっと考え込んでいるロキは、「ああ」と一言呟いただけだった。

レーテが顔を真っ青にしながらかこの場から退場してから、わずか5分。それだけの間にその場の空気は一気に重みを増していった。

ロキと二人つきりでこの場所へ行く途中でも、あまり会話はなかったが、まるで比にならない。それは、息をすることさえも許されていないかのような、完璧な静寂。

「あ、あの……もうそろそろ日が暮れかけてきているからさ、場所を移動しようよ」

恐る恐る提案してみるが、ロキは小さくうなづいたまま動こうとしない。

私たち、この寒い中このままなのかしら。そんなことをぼんやりと思っていた時、ロキが静かに口を開いた。

「詳しいことは、“俺”にはわからないんだ」

「え……？」

「この世界の世情なんて、知ってんのは白ウサギと女王くらいだと思う。ただ、もしかしたら、“チェシャ猫”も知っているかな、ってな。思ってたんだ」

私はようやく納得する。まだその話だったんだ。

とつくのとうに切り上げたと思っていたのに。私は心の中でそう呟き、じんわりと胸が熱くなるのを感じた。こんな時にも気にかけてくれるなんて、ちょっとうれいかもしれない。

「あの、別に……知らないんだつたらしようがないと思うわよ」

「“俺”は知らないさ。“チエシヤ猫”は知っているかもしれないつて言つてんだ」

わけがわからない。ロキはチエシヤ猫ではないのか？

レーテもそう言つていたし、カードにもそう書いてあつた。間違いない、彼はチエシヤ猫だ。

なのに、“ロキ”は知らなくて“チエシヤ猫”は知っている。

私の困惑を知つてか知らずか、ロキは悪戯っぽく笑つてみせた。

その笑顔も、なんだかわざとらしくてぎくしゃくしている。

「言つたろ？ “俺”は“チエシヤ猫”じゃないつて」

「じゃあ……誰が“チエシヤ猫”だつていつの？」

「そのうちわかるよ。いやでも、な。さて、そろそろい
くか」

一瞬の沈黙の後、ロキは腰を上げる。私はほつと安堵の息をついて同じように席を立った。平和なお茶会は終わった。そろそろ帰る時間だ。

そして、ふと、思い出す。帰るつて どこへ？

「ちょ、どこ行くの?!」

気付けばロキは早足で歩き始めている。こんちきしょう、コンパスが違いすぎて追いつけやしねえ。

「どこつて、レーテの家だろ。ここから全然遠くないし、門までいくにはもう遅いし、あんたも野宿はしたくないだろ？」

「し、したくないわよ！　ってちよつと、待っててば！」

私はその広い背中を怒り顔で追いかけるながら、心の奥底で安心していた。きつと、大丈夫。この人だったらきつと、信用できる。

きつと、この人だったら……。

確かに、レーテの家は近くにあった。というよりもむしろなんで今まで気づかなかったのかと疑問に思うほど、近かった。

お茶会場が森にあるなら、その人の家も森の中にあるものなのだろうか。いやしかし、鬱蒼とした森の木々を全部ぶったおして立地するとか……。環境破壊反対。

私はただただ、啞然としていた。家が森の中にあっただのもそうだ

が、主な要因は一つ。

「でか……」

テレビの中でしか見ない、豪邸だったことだ。といっても、門から玄関までが100メートル、というわけではない。むしろ門などではなくて、あたりは森の壁となっている。

しかし、その規模の大きさが異常であった。玄関から何まで、でかい高い、きらびやか。そう、あえて例えれば……パルテノン神殿、みたいなの？

「まあ……奴はああ見えてやり手の商業者だからな。言っとくが、使用人は少ないぞ」

「にしてもでかすぎない?! 何に使うのよこれ!」

「地下は全部僱用。丈夫な作りなうえ使用人が限られた奴しか入ってこれないからな。良い友達を持つといろいろと便利で助かるよ」

「いったいどういう友達ですか。棒読みなところがものすごくわざとらしいんですけど。」

「こ、これ、入っていいの?」

「豪邸を目の前にして野宿するか?」

はい、すみません。入らせていただきます。是非入らせていただきますすとも。

私は一つ息をつくとき、覚悟を決めてドアを思いっきり押した。予想以上に重くて固い。

この後はお決まりの展開。使用人がズラーツといて、「いらっしやいませ、ロキ様」とか言っって一斉にお辞儀するの。そして執事ら

しき人がロキの前に歩み出て、「このお嬢様はどなたでしょう」「つて聞いて……。

「……………あれ？」

しかし、いつまでたっても期待していた歓声は聞こえなかった。ただ、どたばたとあちこちで足音が聞こえるだけで。

十数名がそこらじゅうを縦横無尽に走っている。みんな腕まくりをして、メイドはスカートを上までたくしあげて、そりゃあもうすごい形相で……。こちらに気づく様子もなくひたすら自分の仕事をやっている。

「あ、あれれ？」

使用人勢揃いのお出むかえは？使用人の行列は？執事らしき人は？いくら見渡しても、ひたすら勇ましい人たちが無言に働いているだけで。しかもよく見ると、男でも女でも両腕両足が筋肉で盛り上がっている。正規の兵士でもなかなかこうはならない。

「あ、あの、ロキ、ところで……ここの使用人は大体何人くらいなの？」

「はあ？なんでそんなこと聞くんだよ。そうだな……12、いや、この間一人が音を上げて出ていったから11人かな。あ、話しかけんなよ。仕事中に邪魔されるとそいつらすぐ怒るから」

まって、ちょっと待って！　そ、そんなもんなの？！　物腰の柔らかな使用人じゃなくて、猛烈に働く労働者……。

ひそかに豪邸にあこがれていた私は体中から力という力が抜けていくのを感じた。そう……こんなもんなのね。現実リアルはいつだって仮想バーチャルの世界とは異なるもの……。

「おい何してんだ。早くいくぞ」

脱力する私の気持ちも知らずに、ロキは豪邸の中へと入っていく。
私はようやく我にかえり、足早に彼の後を追った。

背後の鋭い視線に、気づくことなく

……

「これが俺の部屋」

「へ、部屋って……これ檻じゃない!」

私は呆然とその“部屋”を凝視した。剥き出しの蒼い大理石でできた狭い部屋に、金剛石でできているであろう豪華な檻。

部屋の奥に打ち付けられた鎖に、手枷と足枷と……首枷まである。まるで、誰かをここに閉じ込めるかのような設備に、私は背筋に冷たいものを感じた。

しかも決してそこは綺麗ではない。清潔そうではあるのだが、あちこちがへこんでいたり深い傷がついていたりした。凶暴な獣が抉ったような爪痕まである。一体何を閉じ込めていたらこんなことになるのだろう。

「部屋ですよ。“彼”を閉じ込めるための」

背後からの突然の声に、私は驚いてそちらを向く。

声をかけた本人もそこまで驚かれるのは予想外だったらしい。少しだけ目を見開いて地下の入り口に佇んでいた。

「な、なんだ、レーテか……。びっくりさせないでよ……心臓が止まるかと思った」

「すみません、まさかそんなにびっくりするとは思わなくて」

「そ、そんなことより、さっきは大丈夫だった? ごめんなさい、私余計なこと……」

「ああ、気にしないで下さい。別に貴女のせいじゃないんですから。それより僕のほうこそすみません、いきなりのごことで動揺しちゃって」

慰めるようにレーテは私の頭を撫でた。華奢で少し暖かいその手は思いのほか心地よくて、妙にくすぐりたい。まさにお父さん、つて感じた。

しかしすぐに横から不機嫌そうな声が空気をぶち壊す。

「おいレーテ。お前大丈夫ならこれつけんの手伝え。一人じゃできねえんだよ」

「はいはい。まったく、せっかくなにいっせいであったのに。ロキのやきもちやき」

「ハアツ?! てめえぶつ殺すぞ! やきもちなんかじゃねえっ!」
「はいはい、わかったわかった」

レーテは笑いながら私の横を通ると、一足先に牢獄の中に入っていたロキのもとで膝をついた。私がか言つよりも先に、自由を奪うモノたちを次々とロキの体に付けていく。

最初は首枷、次は足枷、手枷をつけて、余った鎖を彼の体に巻きつける。その手早い作業に私は啞然としたままおそろるレーテに尋ねた。

「あ、あの……何やってんの?」

「何って、“チェシヤ猫”が暴走しないように縛ってるんです。大丈夫ですよ、口は自由にさせておきますから」

大丈夫って……。私がそう呟いている間にも彼はそこにある黒い布でロキの目をふさいでいく。

ガチャンと、最後に檻の鍵が閉められた。重い音に緊張が増して、

空気はちきれそうになる。私は無意識に唾を飲み込んでいた。

「はい、これ鍵。僕が持つてると絶対なくしますから。アリス、たとえ何があっても、何を言われても、ここを開けちゃだめですよ。少なくとも明日の明け方までは、ね」

「え…で、でも…この状態で、夜を過ごすの？」

「そうですね。まあ、そういうことになります」

「どうして！ このままじゃロキ、あんまりにも…。大体こんな、部屋なわけじゃないじゃない！ 牢獄、そう、牢獄よ！」

「ですから言ったでしょう。これは部屋です。“彼”を閉じ込めるために作った、ね」

「閉じ込めるって何！ “彼”って一体…っ」

「その説明は“彼”に聞いて下さい。貴方は鍵を持って、決して開けないで、“彼”に質問をすればいいんです」

ヒステリックになり高いトーンで喚く私を宥めながら、レーテは檻の鍵を私の手に握らせる。

彼は開けないでといったけれども、今すぐにでも開けたいくらいだ。このまま一晩中檻に繋がれているなんて、ロキが可哀想すぎる。

レーテはそれ以上は取り合わないとでも言うように一歩下がると、改めてロキの方を向いた。

「気分はどうです？ ロキ」

「サイアク」

「ははっ、そう言っているうちは大丈夫ですよ」

「どういう意味だ」

レーテとロキは笑いながら他愛ない会話を繰り返す。しかし私にはそれが、気分を落ち着かせるために用意された小芝居のように思えた。言いようのない不安が心に広がっていく。

ロキが繋がれている部屋の、唯一取り付けられている小さな窓が夕日に赤く染まっていた。赤みが色を増して逝き、絶頂を迎える。やがてその赤も衰退して黒に塗りつぶされていった。

太陽が完全に隠れた、その瞬間。

ガクッ

「っ……ロキ?!」

ロキの体が、突然崩れ落ちた。まるで操り人形の糸が切られたかのように、ぶらりと鎖にぶら下がる。私は彼の表情を覗き込んで安否を確かめようとした。

カチャ

表情は見えなかったが、ロキが鎖を鳴らしながら起き上ったのを見て、安堵のため息をつく。

小さく深呼吸をすると、今さっきの動揺が嘘のように心が落ち着く。いきなり倒れたりして……まったく。

「まったく、心配させないでよ、ロキ」

「アリス。よく見て下さい。あれは、“ロキ”じゃないですよ」

しかしひと時の安心もつかの間、レーテがひどく冷静な口調で諭してきた。私は言われている意味がよくわからず、もう一度、動かなくなった“ロキ”を観察する。

「……あ……」

知らず知らずのうちに、驚愕の音が漏れた。

“ロキ”じゃない。レーテはそう言った。

“チエシャ猫”じゃない。ロキはそう言った。

今更になってようやく、彼らの言葉の一部がわかったような気がする。

ゆらり、ゆらりと動く細長い尻尾は、ロキの黒色のものとは似ても似つかない、ピンクと紫の縞模様。

静止したふわふわの大きな猫耳は、ロキのものは黒かったはずなのに、これもまたショッキングピンク。

漆黒で綺麗とも思った癖の強いはねっ毛もまた、毒々しいほどに明るいピンクにかわっていた。

「誰」

無意識のうちに、唇はその言葉を紡ぐ。誰って……訊くまでもない。ロキであるはずだった。縛られて、抜け出せるはずもないこの牢獄にいるのはロキ唯ひとり。誰かがとってかわるということは万に一つもないこの状況でだ。

ロキのはずなのに。その尻尾も、耳も、髪も、そして彼を取り巻く雰囲気さえ、ロキのものとは似ても似つかぬものに変色していた。

私は恐怖に震える体を抱きしめながら、じりじりと後ずさりする。

“ロキ”は声に反応してゆっくりとした動作で頭をあげた。

びくりびくりとピンクの猫耳が動き、私の息遣いを聞き分ける。

ゆっくりと、私のほうへ向き……黒い布越しに、ありえないはずなのに、その異質な瞳と目があったような気がした。

その口が、三日月の形に歪む。

「アリス」

「アリス」

「　　っ?!」

ただ、名前を呼ばれた。それだけなのに、私の体は耐えられなかった。全身を駆け巡るすさまじい悪寒に、なすすべもなく足が崩れていく。

地面にへたり込んだ私は、シニカルに笑う彼を泣きそうな顔で見上げた。相変わらず鎖に縛られていて体の自由は聞かないはずなのに、彼はとても楽しそうに笑う。

「帽子屋あ。貴方もひどいよね、また俺をこんなところに閉じ込めてさ。これじゃアリスの怖がる顔も見れないじゃん」

「一度野放しにしてひどい目に遭いましたからね。同じ失敗は繰り返さない主義なんです」

“ロキ”の明るい声に対して、レーテはひどく冷たく、慎重に受け答えをしていた。首を回してそちらを見ると、凍りつくような冷たい表情がそこにはある。私の視線に気づくと、レーテは安心させるように作り笑顔をこちらに向けた。それが余計に私の恐怖心を駆り立てるとも知らずに。

「アリス、大丈夫ですか？ 心配しないでいいです。こいつはここにっついていないし、もし出たとしても僕が君を守るから」

誰もが一度は彼氏に言ってもらいたいセリフ。女性のがれ、
「僕が君を守る」。それをさらりと saying しまったよ、この男……。
私が思わぬ不意打ちに顔を赤くしていると、牢の中で“ロキ”が
声をあげて笑う。まるで嘲笑のような、冷たい声。

「あははっ！ 誰からアリスを守るって？ ねえ、帽子屋は忘れた
の？ 貴方が俺に勝ったことは今までにあつた？」
「75回挑んでいます、全敗しています」

こともなげにレーテは言う。私は体から力が抜けるのを感じた。
そ、そんなに弱いのか……？

レーテはそんな私の思考を読んだのか、キツと私を睨みつけた。
悔し紛れなのか、目にはうつすら涙が膜を張っている。

「僕は弱くありませんよ、こいつが化けモンなだけです」
「うん、そうだね。貴方は決して弱くない。俺が強いんだ」

自慢するでもなく、“ロキ”はただ楽しそうに笑う。純粹、とは
違う。無邪気、なんてこともない。ただ、そう、皮肉屋シニカルなのだ。
祖母の中のチェシャ猫はいつもこのようだった。祖母の周りをう
ろつき、なぞなぞを仕掛けてくるかと思えば答えを言わずに去って
いく気分屋。助けるでもなく、突き放すでもなく、ただニタニタ
と笑いながら祖母についていく、猫。

目の前で笑う彼は無愛想な“ロキ”よりも、ずっと“チェシャ猫”
らしい。そんなことをふと思ってしまった私はふるふると頭を振
って考えを追っ払った。

ロキ自身が言っていたことなのだが、やはりそんなことを思えば
罪悪感がわいてくる。まるでロキ自身を否定しているようで……。

「落ち着いたから。いい加減教えてよレーテ。この人は、誰？ ロキじゃないわよね、まさか」

「まさか。俺は“影”じゃないよ、アリス」

レーテに聞いたのに、笑いながら答えるのは檻の中のこいつだったりする。私はなんとか立ち上がって、毅然と彼を睨みつけた。

正直、怖くないわけではない。檻の中の彼からはいまだに誰に向けているのかもわからない殺気が駄々漏れであるし、形の良い唇は不気味な笑みに歪められたままだ。

怖い、怖い。ここでレーテに泣きついては、何も始まりはしない。

「じゃあ誰よ」

「俺はチエシヤ猫だよ。正真正銘の、ね。名前はロキでもあつてるんだけど、俺専門の名前だつてあるんだぜ？ “影”^{ロキ}と一緒にしてほしくないからさ、イオつて呼んでよ。はじめまして、アリス」

さっきのさつきまで一緒にお茶会をしながら騒いでいた相手に「はじめまして」というのもなんだか妙な気分だ。

私は小さく「はじめまして……イオ」とあいさつした。先ほどは全然違うと思つたが、やはり顔立ちは変わっていない。

変わっているのは毛の色と雰囲気だけだ。ロキが髪をピンクに染めて大掛かりなイメチェンをすればイオみたいになるのだろうか。

……想像したくないが。

「ロキとイオは同一人物なのよね。二重人格みたいなもの？」

「まあね。ロキは俺の“影”でしかないけど。二重人格、とはちよつと違うかも。俺のほうが格段に強いし、“チエシヤ猫”としての能力も全て俺に備わっている。ただ俺は夜行性だから、夜しかこっちに出られないの。まあ、昼の光景はちゃんと意識を起こしてれば

見えるけどね。それをやると夜に眠くなるから滅多にやらないけど」

一気にしゃべられて頭の整理が追い付かない。しかし楽しげに話す彼を遮るわけにもいかなかった。

つまりあれか。一つの体に二つの魂がいて、この場合は夜のやつのほうが主導権を握っている…そんな感じか？

なんてめんどくさい体に生まれてきてしまったんだ、ロキめ。私は心の中でそう毒づくくと、檻のほうへ近づいた。

なるべく足音をたてないようにしたのだけど、イオはしっかりと聞いていたらしい。私が近付くと、例のシニカルな笑みを浮かべた。

「で、俺をこうやって縛ってどうしようっていうの？」

「そう聞いているっていうことは、今日の光景は見ていなかったってこと？」

「昼にそんなに起きていたらせつかくの夜を眠ってすごすことになるからね。それに、アリスがここに来るなんて知らなかった。ほんと、驚いたよ。起きた途端に体中に電撃が流れるんだもの。敵襲かと思ったんだけど、まさか貴女とはね」

なるほど、“カードもち”の皆さんの頭の中に埋め込まれている“アリス探知機”は電撃でアリスってことを教えるのね。

先ほどから実にどうでもいい答えばかりが出ている。私はいい加減しびれを切らしていた。

しかしそんな私に構いもせず、彼は一人話を脱線させる。

「この拘束具は何、S Mプレイ？俺は逆の方が好みだなあ……」

……ここに真正正銘の変態がいた。

いや、今のはスルーしよう、スルー。変態は構えば構うほど恐ろしい怪物に成長すると、誰かが言ってた。

「実はあなたに聞きたいことがあるの」

「……華麗に無視したね、アリス。残念、俺に用なんて、それぐらいしかない……か。じゃあアリス　　貴女は、俺に何をくれるの？」

「え　　？」

嫌な予感がした。レーテが、後ろで何かを言っている。「そいつと取引をしちゃだめです」とか何とか。

彼が焦っているのはわかるのだが、その声は霞がかかったようであまり聞き取れない。

「うるさいなあ、帽子屋は。ロキは好きなのに、俺のことは嫌い？」
「ええ、嫌いです、大っ嫌いです。アリス、どういわれてもこいつの条件なんて飲んじゃだめですよ。こいつは貴女が思っているよりもずっと狡猾で……残虐な奴なんです」

私は戸惑いの視線をレーテに向けた。私にもロキにもあんなに温和に接していたのに、イオに対しては憎しみを隠そうとしない。

一瞬、憎悪の炎に揺れる瞳を怖いとさえ思ってしまう。

「狡猾で残虐、ねえ……まあいいや。ねえアリス。じゃあ、俺が3つの質問に答えたら、俺の願いも1つ聞いてくれる。それでどう？」

「……そのお願いって言うのを教えて」

「アリスッ！」

背後のレーテがきつい口調で怒鳴る。私はそんな彼を睨みつけた。

「レーテは黙ってて。これは私の取引よ。私が決める。誰の指図も

うけないわ」

「アリスツ…まったく、もう……」

もつとしつこく粘るかとも思ったが、レーテは案外あっさりと降参のポーズを示した。両手をあげて、部屋の出口へと歩く。

不思議そうにその背中を見てみると、どこかさびしげな笑顔が返ってきた。

「僕がそいつを嫌いなのは、昔いろいろあったからです。でもそれはアリスには関係のないことですから、アリスに押し付けるのはどうも違うような気がしまして……。アリスは、気のすむまで頑張ってみて下さい。僕は退場します。 ちょうど、お客さんも来ているようですよ」

最後の言葉は、あまりにも小さすぎて私には聞こえなかった。檻の中にいるイオはしっかりと聞きとって笑みを深めたのだが、それにも気付かない。

私は本当に久しぶりに感動したような気がした。本を読むよりも映画を見るよりも、「気のすむまで頑張れ」という言葉は心にしみる。背中を優しく押されているようで、不思議と安心できた。

「……レーテも、ロキも、優しいのね」

「ルアだって優しいですよ。それに……。イオも優しいやつなんです。でも、僕は いまは、イオを許すことはできません」

レーテの呟きを最後まで聞くことはなかった。ひっそりといなくなった彼の残像を想い浮かべながら、うっとりとしたため息をつく。大人だ子供だと言っていたが、今はそんなことどうでもいい。ただ彼の背中がまぶしかった。

何と呼ぶのだろう、この気持ち。

「……アリスつてさあ、帽子屋のこと、好きなの？」

「いや、それはないわ。恋愛感情では絶対ない」

「うわっ、手厳しく。じゃあ憧れとか？」

「ははは……ガラクタの山に埋もれてそんな人を憧れの対象にするほどあんばんたんじゃないわよ、私も」

「うっわあ……」

「あえて言うなら、そうね、初めての常識人に超感激しているってことかな。……って何私たち普通に喋ってんの?!」

気付けばごく普通に、とてもなれなれしく喋っていた。危ない危ない、こいつは警戒すべき相手なのだ。

しかし会話が途絶えたのを察知すると、イオは不満げに口を尖らせる。そうすると不自然に子供っぽく見えた。

「別にいいじゃん、そんな堅くなんなくても」

「よくないの。さあ、教えてよ。あなたは私に何をしてほしいの？」

「うん、とりあえず檻の鍵を開けてくれればいいかな。次は目隠し、次は首枷、次は足枷、で最後は手枷を外してもらって言うのはどう？」

つまり質問はとりあえず15個はできるというわけだ。それだけあれば十分すぎるほどだ。私は慎重に頷いた。

「じゃあ、まずこの世界の情勢を教えてちょうだい」

「この世界の情勢？　なんだ、そんなこと。ずいぶん色気のないことを聞くんだ？」

「質問に色気も何もないわ。いいから答えてよ」

「うん、何から話せばいいやら……この世界はね、その存在自体が歪んでいるんだ。“アリス”が長時間いないと住人に狂いが生じ

るし、この世界も歪みだす。この世界を構成するのは住人であり“アリス”だからね。“アリス”がいないと住人は飽き飽きして発狂しだすんだよ、面白いことにね。町も死んだように静まりかえる」

つまりあれか、これはいわゆる不況デフレションというやつか。なるほど、そうか。“アリス”がいるだけでこの世界は好況インフレーションになるんだな。

……って私はなんかの公共事業か。

「アリス、なんか今自分に突っ込まなかった？」

「はいはい、突っ込んでない突っ込んでない。先話してよ」

「わかつたわかつた……。で、今回もそうかと思っただけ、なんだか違うみたい。まず前の“アリス”とそんなに間は開いてないはずだし、それに今回は明らかに異常だ。“チェシャ猫”のカードは見た？」

「ええ、一応。何かいてあんのかよく分かんないくらいにズタボロだったけど……」

「そうだよ。カードだけじゃない、俺だつてズタボロなんだ」

「は？ 嫌ってほどピンピンしてるじゃない。嫌ってほど」

「貴女ね……。そう言う意味じゃないの。最初に俺……。じゃない、ロキを見たとき、貴女はどう思った？」

ロキとの初対面……は思い出したくないほど慌ただしかったんですけど。というか初対面で思いつきりあいつに躓いたしね。鳩尾に肘鉄しちゃったしね！

私はロキの容姿、性格を一つずつ思い出してみる。端正な顔立ち、漆黒の髪と大きな猫耳、露出度の高い黒の服と深い闇色の瞳、ぶっきらぼうな口調に照れ屋、ときどき悪戯っぽく笑ったりして……。

「……チェシャ猫というよりどの純情少年かと」

「うん、そうそれ。ロキは純情少年すぎる。もっと汚れるべきだよ、

うん

……純情少年がどうした。

「あ、じゃなくて、ほら、チエシヤ猫って感じじゃなかったでしょ？」

「そうね……むしろあなたのほうがしっくりくるわ」

皮肉を言っただけなのに、イオは満足げに口を笑いの形に変えた。

「当たり前じゃん。俺が本体で、歪みから生まれた“チエシヤ猫”なんだもん」

「……歪み……」

「そ、歪み。ここ数十年と、“カードもち”を対象にして本来だったらあり得ないことが起こってるんだ。俺の場合はロキと一緒に俺が生まれちゃったことだし、ほかのやつらにもあるよ。白ウサギのとかさ、当ててみてよ」

ルアの、歪み。本来だったらあり得ないこと。

「……性格が歪んでるよね」

「……貴女もね。はずれー。正解は、髪と目の色でしたー」

「ああ、確かにあれミスマツチだよ。白いウサ耳に黒い髪の毛ってどうよって最初思ったもの」

「そ。本来“白ウサギ”は銀髪に赤い目ってことで生まれてくるのが普通なんだ。チエシヤ猫がピンク色であるようにね。じゃあ、帽子屋は？」

「あの整理能力に決まってるじゃない。あれさえなければ完璧な常識人なのに……」

「そこ、舌打ちしない。帽子屋はね、普通であることが普通じゃない」

いんだよ」

普通であることが普通でない。私は口の中で反芻する。まったく、この世界の人たちは言い回しがわかりづらくってかなわん。

「帽子屋と三月ウサギはね、先頭に“イカレ”がつくほど狂っているはずなんだよ。それがこんなこの国屈指の常識人ときた。人一人まともに殺したことがない。それが彼の歪みだよ。狂ってるよね」

くすくすと楽しそうに笑う彼のほうがよほど狂っていると思うのだが。私はあきれながら頷いた。

「わかったわ。このごろ珍現象が起こっているのね。じゃあ次の質問いいかしら。今回の“アリス”が参加しなければならないゲームの内容を教えて」

二つ目の質問を、言う。私はもともと3つしか質問をしないつもりでいた。一つはこの世界の情勢、二つ目は白ウサギに突き付けられたゲームの内容。そして三つ目は私が帰るにはどうすればいいか。そして3つ聞き終わったらあとは走って逃げる。少々せこいが、まあこれくらいは神様も許してくれるだろう。

私の思惑を知ることなしに、イオは笑顔でこたえる。

「今回は内容が変わったんだっけ？ 前までは“カードもち”全員参加のパーティーに10回参加すれば帰させてもらったんだけど。そうそう、今回のゲームはね、“失くしモノを見つけること”」

「……失くし、モノ？」

「そ、失くしモノ。アリスが失くした、アリスにとってとてもとても大事なもの。もっとも、それがどんなものかは誰も知らないけどね」

「だ、だめじゃん！ 何そのいい加減なルール！」

半ば本気、半ばふざけて言ったせりふだった。だが、ほんの少しのことで、この部屋の空気が凍りつく。イオの口元は、笑っていない。その視線も布越しからこちらを冷たく睨んでいるようだった。

ずん、とその場の空気が重くなる。私はわけがわからなくてイオを困惑の表情で見た。そんな大した時間もかからず、また明るい口調でイオは話し始める。その言葉は、どこかとげとげしかったが。

「いい加減じゃないよ。アリスはもう少し、自分に責任をもったほうがいい。言ったでしょ、この世界を構成しているのは“アリス”の君でもあるって。この世界が歪んでいるのはね、貴女が歪んだからじゃないかって白ウサギや女王は思っているんだ」

「な、なんで私が、そんなっ……………」

「根拠なんてないよ。根拠なんて。でもね、俺もずっとそう思っていた。“アリス”によってこの世界は左右される。なら狂うのも共に…………ってね。アリスが狂えばこの世界も歪む。アリスが死ねばこの世界も朽ちる。あは、安っぽい諧謔曲だね」

ルアの言った言葉が思い出される。この世界とともに朽ちましよう。それはつまり…………私を、殺すの？この世界が狂ってしまった代償に？

私は唇をきつくかみしめた。気をしっかり保っていないと、たまらない恐怖に足を取られて溺れそうだ。

「…………ふっざけないでよ。突然連れてこられてそんなこと言ったら、私に何をしろって言うの？この世界を救えって？私は…………家に帰るんだから。イオ、帰り道を教えてちょうだい」

「はは、その意気だよ、アリス。この世界に同情して、帰り道を忘れないようにね。でもアリス、先に檻の鍵開けてよ」

そつだ、帰ると決めたんだ。帰らなきゃ。この世界に構っている
余裕は、ないんだから。とにかく今は帰ることが先決。この男に聞
けばきつとわかるはず……。

……………え？

「ちょ、ちょっと待って。まだ私の質問1つのごつてるわよ」

「そつちこそ何言ってるのさ。俺は3つ答えたよ」

「そんなはずないでしょっ」

「だって、今のでしょ、この世界の情勢でしょ？」

私は指折り数えていく。うん、やっぱり2つだよ。何言ってるんだ、
このクソ猫。

「それに、俺のお願い！」

……………あ。

「あ、あれってカウントすんの?!マジで?!」

「当たり前じゃん。ほら、3つ。だからさ、ここを開けてよ、ア
リス」

私は自分の馬鹿さ加減に頭痛を覚えた。約束は守らなきゃいけない、
と思うほど堅物ではなかったが、おそらくこのままではこれ以
上なに一つとして彼は答えてくれないだろう。

まだ帰り道を聞いていない。聞かなきゃいけない。そんな思いが、
私の中でレーテの警告よりも一回り上回った。

「ここを開けて? 俺のアリス」

まるで恋人の耳元にそつと囁くかのように、イオは甘い声で誘う。くらくらする……。なんだかお酒にでも酔っているみたいだ。

私は鍵を握りしめて、鍵穴にそれをぴったり合わせた。

重い音がして、扉は開かれる。私は彼に話を聞こうと檻の中へ一歩を踏み出した。

その瞬間。

「だめですっ、アリス！」

聞き覚えのある声がして、地下の扉が勢い良く開かれた。

そこに立っていたのは、白いウサ耳に漆黒の髪、薄青色の瞳、黒いきちんとしたスーツ……

私は呆然と、その影の名を呼んだ。

「ルア……」

黒い布の中で、金色の瞳がしっかりとアリスと白ウサギを見据え

……嗤った。

「久しぶりだね、ルア」

「アリス……」

そう呼ぶ声は、どこか懐かしい。私にとっては敵であるはずなのに、どうしてもこの傷ついた瞳を突き放すことができなかつた。思わず彼のもとへ駆けつけて、「大丈夫だよ」と頭をなでてしまいそうになる。

彼の優しい笑顔が、驚いたように見開かれた瞳が、優しく手を包み込んだぬくもりが、忘れられなかつた。それと同時に、彼の歪な笑いが、狂気に染まった瞳が、拘束しようとする手が、目の前のその人に重なる。

白ウサギは、アリスをこの世界へ迷いこませる“案内人”

…… 惑わされてはだめ。あれだけ怖い思いをしたのに、まだ信じるといふの？そんな声が、頭を中心に響く。

私はその声に従うようにごくりと唾を飲み込んだ。

「アリス、あとでいくらでも謝ります。貴女をむやみに恐がらせてしまいました。本当に、そんなつもりじゃなかつたんです。どうか怖がらないで下さい。僕は、貴女を傷つけるつもりは……」

ルアは泣きそうな顔のまま、一步私に近づいてくる。やめて……やめてよ！ 泣きたいのはこっちなのに……わけがわからないのはこっちなのに！

私はせめて彼の誘惑の言葉を聞かないようにと、耳を両手できつく塞いだ。そのことが彼の目には拒絶に映ったらしい。ひどく傷ついたような顔で私を見る。

今だけは、イオがうらやましい。彼の目を覆うあの黒い布がありさえすれば、私は彼の悲しげな顔を見ずに済むのに。そんなことを心の中で呟きながら、私はルアから一步離れた。当然、イオのほうへ一步近づく形になる。

イオもそれを察したのか、声をあげて笑うと私に毒をくるんだ甘言を投げかけてきた。

「アリス、白ウサギに何をされたのか知らないけど、俺はこいつのことは信用しちやいけないと思うな。こいつは城側の人間だからね、きつとこの国の歪みを正すためなら何でもするよ」

「アリスに危害を加えることは絶対にありません、絶対に」

ルアは拘束されたままのイオを一瞥すると、懐から何かを取り出すようにした。その黒光りする銃身を見た途端、全身の血が凍りつく。森の入り口での出来事が、フラッシュバックのように脳裏を駆け巡った。

「だめっ!!」

「っ?! アリス?!」

私はとっさにルアの手元に平手打ちをお見舞いした。渾身の一撃は、少し軌道をそれたが十分に効果があったらしく、ルアは取り出すようにした拳銃を無様にも取り落とす。

私が安心したのも束の間、ルアは打たれていないほうの手で私の手首をつかんだ。込められた力に、思わず小さな悲鳴を上げる。

「なにすんのよっ! は、放してっ」

「放しません。お願いです、アリス。僕の傍にずっといて下さい。この世界を……救ってください」

お願い、こんなに手に力を込めているのに、口では懇願するようなことを言わないで。悪役になるならとことんなつてよ。いっそのこと暴力でもなんでも振るって強要してよ。

そうすれば、こんなに揺れずに済むんだから。

「……レーテはどこ」

「何もしていません。少し眠ってもらっただけです」

「人質に取ったりはしないのね」

「彼は僕の友です。それに、そんなことをしたらきつと、貴女は僕に心を開いてくれなくなるでしょう?」

ルアはさびしそうな笑顔を見せる。その笑顔が一番こたえるのを、この人は知っているのだろうか。計算し尽くしてやっているというのなら、この男はとんでもなく悪質な腹黒だ。

私はその蒼い瞳を見ていられなくて、目をそらした。だめだ、これ以上この人と話していたら、彼の誘惑に乗ってしまいそうだ。同情だけで傾いてしまいそうだ。

「こんな世界……私は知らないのよ。突然連れてこられて、この世界の救世主になれですって。無理に決まってるじゃない、私なんか……」

「ははっ、アリスは自分を卑下するのがずいぶんとお得意なようだけど。できるかできないかじゃないよ。貴女はね、やらなきゃいけないんだ」

イオのおかしそうな笑いが耳に障るが、彼に顔を向ける気力もない。

何をすればいいのか、わからなかった。たった今道が見つかったと思えば、ルアが別の道を示す。私をこの場にとどめようとする。もう、私にはわからない。

「じゃあ、教えてよ。私は一体何をすればいいの？」

私は顔をあげて、ルアに乾いた笑いをむけた。

もう、どうなったっていい。こうすることでしか帰り道が見つからないなら、やってやろうじゃない。

どんな回り道をしたって……私は帰るんだ。そのためには、くだらない救世主にでもなんでもなつてやる。どんな道だって、私が私の出口まで繋げてやるんだから。

「僕と一緒に来て、貴女が失くした失くしモノを、貴女自身の手で探してください」

「あなたが行くのは、城？ そこにあるっていの？」

「いえ、それはわかりませんが……」

「じゃあ、行かない」

行く必要がないもの。私はそう呟いてつかまれた手をそつと振りほどこうとした。

やんわりとした拒絶に、ルアは戸惑ったような目で私を見る。つかんだ手を放してくれる気はないようだった。

私がつい目で真っ直ぐ睨みつけると、ほんの少しだけ怯む。可哀想と一瞬思うが、気をしっかり持っていたかった。頭の中で整理をしながら私は理路整然と振る舞う。

「……私は、あなたと一緒にはいかないわ。あなたの謝罪も聞いてやらない。……あなたは、優しいけど、やっぱり違うもの」

「……そんなに、僕は信じられませんか」

「そうよ。あなたはロキやレーテとは違う。あなたが見ているのは“アリス”であって私じゃないわ」

信じるわけにはいかない。ロキも、レーテも、私を見て、私を氣遣って、私に優しくしてくれた。だから私は、彼らを信じる事ができた。

彼らがもし私じゃない誰かを私に重ねていただけなら、「帰るんだろ?」だなんて言わないと思う。

もしかしたら、私が知らないだけで彼らにも思惑はあるのかもしれない。

だけど……誰も信じられなかったとき、私を慰めてくれたのは、空虚な心を満たしてくれたのは、彼らだ。

今ようやく、誰を信じればいいのかかわかった気がする。

レーテは、ルアは優しいし敵ではないと言っていた。彼がそう言うならそうなのだろう。

だけど　私はルアについていくわけにはいかない。

「あなたを信じることは、出来ないわ。だからついていけない。せいぜいここで夜明けを待って、それからどうするか決めることにするから。だからルア　　帰って」

「……わかりました」

ルアはポツリとつぶやいて、悲しみに染まった青い瞳を伏せた。その姿に少し心が痛むが、もう揺らがない。

私は再びその視線をつかまれている手に落とし、白い手袋をつけた手を私の腕から外そうと試みた。

その瞬間、今までないほどに強く、手に力を込められる。

「いったあ……っ！　ル、ルア?!」

「仕方ありません。女性に強引な手を使うというのはあまり好きではありませんが、こうなったら強硬手段です。アリス、僕と一緒に来てもらいますよ」

「だ、だから嫌だって言ってるでしょ?!」

ルアの声が、恐ろしいほど冷たい。私はその底しれぬ怒りに、忘れていた恐怖を感じる。

必死で腕を振りほどこうとするが、自分より年上の男の人にかなうわけもなく、あっさりともう片方の手も捕らえられた。強引に、ルアと視線を合わせられる。

私は無意識のうちに息をのんだ。その瞳に映るもの……それは、怒りでも悲しみでもなかった。深い深い……暗い絶望。

「ル、ルア……?」

「嫌われても構いません。憎んでくれても構いませんから 僕の傍にずっといてください」

ふざけないで。私はとつとと帰りたいのよ。

本来だったらそう言うはずが、言葉は喉の奥に詰まって出てこなかった。彼の悲しい悲しい絶望に、押しつぶされそうになる。

ルアは手を放すと、強い力で私の体を抱きしめた。あまりの圧力に、息が苦しくなる。抱きしめてくる腕からあふれ出す悲しみに、泣き出しそうになる。

ここまでして、どうしてあなたは私を揺らがそうとするわけ……?」

私はそれでも何とか拒絶しようと、彼の胸を押し返す。しかし彼はより一層抱きしめる力を強めただけだった。

どうしよう……。私が本気でそう思った時。

カチャン…

「えっ ？ ぐおっ」

「あーあ、色気のない声。もっと扇情的な悲鳴を聞かせてよ」

聞きなれた鎖同士がこすれあう音に気を配る前に、私はものすごい力で引き戻された。そのまま、熱い別の胸へ飛び込む羽目になる。嘘、もしかして……レーテ？ 来てくれたの？

私は夢中で顔を上げた。レーテ以外には考えられなかった。レーテ以外には。なのに。

私の瞳を覗き込んでいたのは、金色にきらめく瞳であった。

「……あ……」

「改めてはじめまして、アリス。それと白ウサギ、貴方俺のアリスに触りすぎ。アリスに触っていいのは俺だけなのー」

そんな無茶苦茶な理論を言う彼は、にやりとシニカルな笑みをルアに向けた。そのピンク色の頭では、これまたピンク色の猫耳がピクリピクリと小刻みに動いている。どうせ考えていることもピンクなのだろう、このど変態め。

「イ、イオ…… あんた、まさか鎖を引きちぎって……?!」

「だって俺のアリスが貞操の危機なんだもーん。あのね、アリス。あのまま貴女たちを放置してたらどうなるかわかった？ウサギって万年発情期なんだよ？」

お前にだけは言われたくないと思う。さりげなく「俺のアリス」だなんて言いやがって。

文句を言おうとした時、カチャツという聞き覚えのある音がすぐ近くで聞こえた。私は、恐る恐るそちらを向く。

思ったとおり、ルアは取り落とした拳銃をいつの間にか拾って、それをイオに向けていた。先ほど聞いた声に似た、冷たい声で静かに言う。

「なるほど、相変わらずの馬鹿力ですね。繋がれていたからといって油断してました」

「俺はロキとは違って容赦ないからねー。貴方に俺が倒せるの？腕はかなり上達してるみたいだけど」

「ありがとうございます。いざという時は尽力しますが、アリスをこちらに渡してくれば、今は貴方と争うつもりはありません」

「んー、俺も今日は人殺しって気分じゃないからなあー……」

気分で決めるな気分で。

私はイオの黒いシャツを強く握りしめた。

お願い、渡さないで……！！

そんな思いが言わずとも伝わったのか、イオは舌をぺろりと出して実にあっさりルアを振った。

「ごめんねー。でもアリスは、俺のだから」

「そうですね。では、死んでください」

冷たい一言とほぼ同時に、ルアは遠慮なく引き金を引いた。耳元で聞く銃声に、私はイオに抱きしめられたまま悲鳴を上げる。しかしその弾は、誰に当たるでもなく大理石の壁にめり込んだだけであった。

二発、三発とルアは立て続けに銃を撃つ。イオは私を抱きかかえながら。こともなげにすべてかわしてみせた。

「アリスうー、貴方どこへ行きたい？」

弾を全発紙一重でかわしながら、イオはからからと笑う。私はパニックになりながら「ここじゃないどこか」と叫んだ。弾丸の飛び交うこの部屋にこれ以上いたら、そのうち確実に私の心臓が止まる。

「了解。じゃあ、またねー」

イオはひらりと翻ってルアの横を通り過ぎた。な、なんちゅー身のこなし……。マトリックスだってこんなにしなやかにはいかない。

「アリスっ」

最後の弾丸と一緒に、彼の悲痛そうな言葉が私を追いかける。しかしこれ以上意識を保っていられるほど私の神経は図太くなかった。

「楽しかったねー」などというチェシヤ猫の言葉を聞きながら、私はあえなく意識を手放した。

楽しくなんかない。いつ殺されるかもわからないこの状況で、誰が楽しめるって言うんだ。

帰りたい。

そう思うのに、意識を失う手前、私は縋りつくようにイオの黒いシャツをつかんでいたんだ。

いらないと言われた。

お前なんか、いらないと。

どうしてと泣かれた。

どうしてお前がいるのかと。

泣かないで、母さん。

そう言っても、届かない。

いららないなんて、言わないで。

そう思っても、伝わらない。

いつからだろう。

私は、母の壊れた瞳を、見ようとはしなくなった。

私を、あの子を、要らないだなんて言わないで

……

何か、熱いものが私の頬に触れている。頬だけでない、背中や、腕、あらゆる所が温かかった。ただ、頬に触れる柔らかいそれは異常なくらいに熱いだけ。

熱が、頬から額へ、また頬へ、そして頬から唇へと移っていく。私はそのぬくもりが心地よくて、まどろみかける意識をそのまま放置していた。

熱い、疲れた、眠い、熱い、気持ちいい……。自然と、夢への誘いがかかる。しかし、それを妨害しようとする甘く低い声が耳元で聞こえた。

「アリスうー？どうしても起きないなら、ファーストキス奪っちゃおうかなあー？」

ガバツ

無論、私は飛び起きた。ざあーっとな音がしそうなほど急激に、意識が冷めていく。

安眠を邪魔された。いや、でも先にファーストキスのことについて言及すべきか。いや、そもそも、怒るべきなのか？むしろここは

冷たい笑顔で「それがどうしたの？ただの皮膚接触じゃない」と言
ってやったほうが打撃を与えられるのではないか？

……というか。なんだ、この状況は。

「……あんた」

「起きた起きた。あー、でもアリスの唇、奪って見たかったかも。
きつと柔らかいんだろうなあ」

……目の前で胡散臭い笑顔を振りまきながら変態発言をしている
こいつの名前は……確か、イオ。紫の尻尾と紫の猫耳と紫の髪とい
う、目に痛い組み合わせがトレードマークの変態野郎だ。

いや、そんなことより。私の今のこの状況は何だ。

まず、足が地面についていない。というか、地面が見えない。た
だ見えるのは、緑色の木、木、木……。そして、私をいわゆるお姫様
だっこしているこのクレイジー青年だけだ。彼の左手の指は、私の
唇に触れていた。

……夢の中で、熱が動いた、その場所に。

(……つまり何？私はこんな奴の手を、気持ちいいと思ったわけ
？)

「あれ？どうしたの、アリス。なんだか怖い顔しちゃってえ」

「おろせ」

「にゃ？」

「おろせて言うてんだよ……こんの……変態がっ！！」

私は変態猫の胸倉をひつつかんで激しく揺さぶった。

「何が『にゃ？』だ！私よりもきれいな顔をしておいて私よりも

可愛いことを言うな変態のくせにっ！ 最低最低最低っ！ 『ファーストキスを奪っちゃうぞ』なんて軽々しく口にする変態最悪野郎に！ こんな奴に私が安心感を抱いてしまうなんて……！ 死ぬっ！ ひゃっぺん死ぬ！ 死んでこんなことを思わせた私に謝れえっ！！」

「な、なに訳わかんないこと言っつてんのアリスっ。うんにやあゝ、姫がご乱心遊ばれたあゝ！」

私は何かが頭の中でぶちぎれたかのように暴れまくった。変態紫は最初は可笑しそうに笑っていたが、暴れ方が本格的になると、さすがに笑みを引っ込めた。

ぐらりとバランスが一瞬崩れ、彼は私を抱きとめる腕に力を入れる。反発して暴れる私を無理やり抑え込み、耳元で甘く優しく囁いた。熱い吐息が耳たぶにかかり、私は思わず息をつめる。

「アリス、落ち着いて。落ちる……」

とんでもない美形に強く抱きしめられて、甘く囁かれて、落ち着いていられる女がどこにいる。このボケが。

「んきやああああ　　っ！！」

「あ、アリス？」

「触るな触るな触るなあっ！！」

私は思いつきり彼を突き飛ばした。とにかく今は、彼のあの温もりから逃れたい。絡めとられて、動けなくなる前に……。

しかし、突き飛ばした場所が悪かった。そこは、一本の巨木の下っぺん。詳しく言つと、森の全景が見渡せるほど高いところに位置する枝。足元にはむろん、地面などない。ただ1メートルくらい下に、森の木々があるだけで。しかも地面と木々とは結構離れている

わけで。

詰まるどころ。落ちるのは必然的事項であった。

「ふ……」

ふわりと、本日3回目の浮遊感が私を襲う。イオが何かを叫びながら手を伸ばしてくるけど、もう遅いようだ。

あ、もしかしたら私これでダメかも。巨木のてっぺんでチエシヤ猫と戯れていたら転落死。あは、笑えない。

笑えない、ほんと、笑えない。私、こんなところで死ぬの？　こんなわけのわからない世界で？　こんな知りもしない奴の目の前で？　どうせ死ぬなら、……虐待されていたとしても、母さんの前で死にたかった。

母さん……ごめん、もう、あえないのかな……？　ごめんね、ほんとに、ごめんなさい……。

迎エニイケナクテ、ゴメンナサイ

「アリスっ!!」

落下し始める寸前、イオが私の名前を叫びながら、手を伸ばす。だから届かないってば……。バイバイ、変態猫……残念だけどあなたにはこれっぽっちの未練もないわ。

しかし不思議なことに、彼の熱い手は涙をこぼしかけていた私に触れた。そのまま、グイッと私の腰を引き寄せ、再び強く抱きしめ

る。午後のお茶会のと看についたのだろうか、仄かなバラの香りが鼻をつく。

ウソ。私は泣きそうな声で呟く。馬鹿じゃない？何やってんのよ、この猫は。

あんたまで、私と一緒に死のうと思つたわけ？

重力が、私と、私を抱きしめるイオの体を容赦なく地面にたたきつけようとする。息が、出来ない……！

私は自分のために枝をけつて宙に浮いてくれた優しい猫の胸に顔をうずめ、死の覚悟をした。

しかし、いつまでたつても予想していた衝撃は訪れない。

1秒が経過する。

2秒、3秒、4秒……。

あれ……？私は恐る恐る眼を開いた。光すら差し込まない暗い森だったが、闇の中で妖しく金色の目が光る。

「なに死にそんな顔してんの、アリス。貴女らしくないね」

目の前に、チェシャ猫のシニカルな笑いがあつた。しかしその端正な顔にはところどころ擦り傷が付いていて、笑い方もひきつり気味だ。彼の左手は相変わらず私の腰にある。そして右手は……。

「……あ……」

別の、太い枝をつかんでいた。きつと下にあつた木のものである。う。ということ、やはりかなり落ちたということになる。イオの体は傷だらけだ。それに比べて私の体は……。

「女の子の体を傷つけちゃあまずいでしょ？」

私の考えを読んだかのように、イオは小さく笑つた。地面からは

そんなに遠くないと踏んだのか、勢いをつけて地面に降り立つ。私は次いで来た浮遊感に目を閉じたが、今度はそれほど長くはなかった。

ふわりと、チエシヤ猫は軽やかな調子で着地した。抱き留めていた私をそつとおろし、心配そうな表情を浮かべて顔を覗き込む。

「怪我とかしてない？アリス」

「~~~~~」

そういう顔は反則だと思う。私は顔を真っ赤に染めながら、小さな声で「ごめん」と謝った。あくまで、小さな声でだ。変なことを言ったり私を命懸けで守ろうとしてくれたり、こんな顔をするこいつがもとも悪い。

どうしよう、顔がなおらない。体が馬鹿みたいに熱い。胸がドキドキする…。

「あはは、アリス顔真っ赤」

……やっぱり、計算なのか？今のは計算なのか？

私はしゅんとしかけた胸を押さえて、ひきつった笑みを浮かべた。こんな変態にときめくなんて言語道断。っていうかあり得ない。錯覚だ、錯覚。

「あはは、もつと木が茂ってたらもうちょっと傷が深くなったのね。残念残念」

「ひどいなあ、アリス。俺本気で貴女のこと助けようとしたんだよ？ 実際貴女今にも昇天しそうな顔だったし」

「そんな簡単に死ねるかっ！ 意地でも生き残って元の世界に帰ってやるんだからっ」

「あは、その意気その意気。それぐらいの意思がないとこのゲーム

はクリアできないもんねー」

私はふんつと鼻を鳴らしてイオを好戦的な眼で睨みつけた。もう口が裂けても弱気になっていたことをいうことはできない。

しかし、不思議だ。さっきのさっきまで恐怖やら何やら暗い感情が私の胸に渦巻いていたというのに、今はもう欠片も感じられない。

(もしかして、元気づけてくれた……？ まさかね……)

私は考えを追っ払って、息をすつと抜いた。自然、小さな笑みがこぼれる。その笑顔を見たイオの耳がぴたりと静止したのに気づくことなく。

「でも、ありがとう。本気で助かったわ」

「……そういう顔こそ反則だと思うんだけど」

「え、何？」

「んにゃ。なんでもない。今思ったんだけどさー、アリスってもしかしてツンデレ？」

「ツン？」

私は妙に聞きなれたアクセントに笑顔を強張らせた。そういえば、クラスメイトの中にそんな言葉を連発しているやつがいたような気がする。「ツンデレ萌え〜」とかなんとか。私だってもう16歳になる。その意味くらいは何となくだが知っている。

決して褒め言葉ではないだろう、それは。しかしそれにも関わらずに目の前のクソ猫はシニカルな笑みを浮かべながらうなづいた。

「そ、ツンツンデレデレ症候群」

「や、その略違っし」

正確にはツンツンデレデレだけで良し。ってここまで詳しい自分にも泣けてきた。そういえばあのオタクも何かと私にかまってきたような気がする。そのたびに鬱陶しくて追っ払ったけど。

そんなことを考えていると、イオは慣れた仕草で私の頭の後ろで腕を組んだ。逃げ出そうにも彼の腕が檻となつてできない。

耳元で、鎖の鳴る音がした。そういえばこいつ、あそこの鎖全部引きちぎって助け出して…いや、誘拐してきたんだっけ？なんていう怪力だ。

しかし、それはいいとして。なんだ、この状況は（2回目）。

「はなせ変態野郎」

「あははー。アリス怖ーい」

全然怖がつている様子もなく、チエシヤ猫は笑う。その悪戯っぽい笑顔に、私は不覚にも胸を高鳴らせた。こんな至近距離で、こんな美形青年に。

イオの顔がゆっくりと近づいてきて、顎が私の頭の上へのせられた。かたい感触はあるのに、重さは全くといっていいほど感じない。彼が本気で体を預けているわけではないことはすぐに分かった。ただ、包み込むように、閉じ込めるように、抱きしめている。アリスは甘く、危険な檻の中。

「俺ねー、アリスがツンツンしてんの結構好きなんだあ。デレデレよりずっと好き」

声が真上から響いてくる。まるでイオが私の頭の中に居座って囁いている感じだ。先ほどと違う浮遊感が私を襲った。どうしよう、私、舞い上がっちゃってる……。

しかし、その浮遊感は笑い声とともに捧げられた言葉によって終結を迎える。

「だからさ、アリス、俺を好きになんないでね？」

ドクン

時が止まったかのようにだった。ざわざわと、夜の森の狂騒がやけに耳につく。

好きになんないでね？

その言葉が、耳に、頭に、心に焼き付いて、離れようとしな

好きになんないでね？

どうして私はこんなに動揺しているの。気丈に「誰が好きになるもんですか」って言うってやればいいじゃない。

好きになんないでね？

好きなもんか。好きなわけじゃないでしょ、こんな変態男。お望みどおり、好きになんか絶対ならないわよ。

俺を好きになんないでね？

なのに、声が出ない。

「アリス？」

「安心して。そんなこと、ないから」

何かがはちきれたように、私は声を絞り出した。少しだけ、掠れたような気がする。でも十分普通の冷淡な声だ。

よかった。そう思うと同時に、私は無償に泣きたくなった。

チエシャ猫の顔は見えない。この位置からだ

とチエシャ猫も私の顔を見ることはかなわないだろう。ただ、気配からして彼は嬉しそうに笑っていた。本当に、嬉しそうに。

お互い、見えなくてよかったと思う。彼の笑った顔なんて見たくなかった。私の傷ついた顔なんて見せたくなかった。

傷ついた、そう、これは傷ついたんだ。でも、どうして。

「よかったあ。あ、でもロキのことは俺にかまわず好きになってくれて構わないからね。ロキには笑顔を見せるのに黄昏を境に突然冷たくなるって最高じゃん」

全然良くない。こいつの趣向なんて、私は知らない。私はわからない。

なのにこの男は、私の心に次々と言葉というナイフを突き立ててくる。

「それに俺ね、アリスの傷ついた顔が結構好きなんだ。怒る顔とかも」

「っ?! やめっ……」

突然、顎を荒々しくつかまれ、無理やり上へ向かせられた。たてられた爪の痛みに、涙がにじむ。

彼の妖艶な視線と私の涙まじりの視線が、交わった。逸らしたくても、顎をしっかりとらえられていて、出来ない。逃げられない。そう直感した瞬間、私の体が恐怖で震えた。

「やっぱり、そそるね」

彼は妖しく、笑う。ポロリと、ためていた涙があふれ出た。私はもう逃げようと体をじたばたさせてもいなかった。だってもう、きつと無理。私は、彼の腕から、彼の視線から、彼から、逃げられない。

彼は私を自分自身でがんじがらめにして、逃げられないように閉じ込めておくのに。そのくせ、自分を嫌いになれという。

「あんななんか、嫌い」

私は心の底から言った。本心以外の何物でもない。こうすれば彼はきつと笑って言うのだろう。「よかった」って…。

彼は、自分勝手だ。

なのに、イオは私の予想と全く反対の表情を浮かべた。というより、すべての表情を、消した。完璧な無表情で、少し不機嫌そうに目を細める。

「アリス」

そう呼ぶ声も、先程よりも1オクターブ低い。私はじわじわと底知れぬ恐怖を感じ、何とか彼から距離を置こうとした。こんな状況で、男を怒らせる。それがどんな危険なことかは、女として理解している。

しかし彼は思いのほか私をきつく抱きしめていて、逃れることはおろか、私は腕一本として動かすことができなかった。彼は私もがこうとしていたのに気づいたのか、にやりと口だけ笑いの形に歪めて、さらに顎を上向かせる。

「アリス、俺から離れるのは、許さないから」

ドクンと、心臓が大きくなる。聞かれたくないと思うのに、今回ばかりはさすがに聞かれてしまっただろう。

「だから、帰るのも許さない」

いつか、同じことを言っていた奴がいた気がする。そいつには激しく反抗できた。ルアにはまだ甘さと優しさがあつたから。私を傷つけたくないという思いが、私に逃げる隙を与えてしまった。

でも今は、なすすべもなく抱きしめられるだけだ。彼には、甘さ

も優しさもない。あるのは、歪みきつた独占欲。

「ねえ、アリス。俺のものでいて？」

イオは、まばゆいばかりの笑顔で言う。私は瞬きもできず、ただ呆然とその笑顔を凝視した。彼の顔が近付き、唇が私のそれと重なる。

触れるだけの、軽いキス。ただの、遊び。だったら、もう何も

何も感じないわ。

私は、無抵抗のまま遊びのキスが終わるのを待った。熱い舌が、唇をなぞるようにしてなめる。そっと、私を戒めていた腕が解けた。最初と同じように、耳元で鎖がなる。

「アリス？　もしかして、はじめてじゃなかった？」

動かない私を不思議に思ったのか、イオは体を放していぶかしげな視線を向けた。私は離れていった熱に名残惜しさを感じながら、金色の瞳を見詰めた。優しげな笑顔を、作る。

さよなら、最低最愛の人。

「はじめて、だったわっ！！」

瞬間。

私は渾身の一撃を目の前の変態猫に食らわせた。突然のことに防衛できなかったイオはもろに右ストレートを顔面に食らう。

かなり痛そうな音を立てて、イオは後方3メートルまで吹っ飛ばされた。そんな彼を確認するまでもなく、私は彼が吹っ飛ばされた方とは逆方向に走り出した。

全速力で。少しでも遠く、彼から離れたかった。彼の「アリス、待って！！」なんて叫びは聞こえない。聞きたくない。

彼はあまりの痛みのせいか、起き上がる様子はない。そのままくたばっていて。お願い、遊びなら…私に近づかないで。走りながら、瞳から涙がこぼれたのに気づく様子もなく

……

アリスはがむしゃらに走る。

さよなら、さよなら、最低最愛の人。

「……見失っちゃった……」

イオはアリスに殴られた頬をさすりながら、ため息をついた。あれからすぐアリスを追いかけたが、女の本気というのは怖いらしい、数秒とたたないうちにはぐれた。

彼女は、泣いていた。それを思い出した彼は、顔を曇らせた。不機嫌そうになるのではなく、無表情になるのでもなく、ただ、悲しそうに。

彼女は泣き顔ですら可愛かったが、その顔を見て気持ち良くはならなかった。怒った顔が好きというのは事実だ。傷ついた顔も……すぐく、そそる。なのに、さっきの顔は、怒っていたはずなのに、傷ついていたはずなのに、ただ痛々しいだけだった。

「だって仕方ないじゃん。ロキだってきつと、“アリス”のこと好きになるんだからさあ。俺があきらめなきゃ、俺とロキがアリスを取り合うことになるんだよ？ 昼と夜で、アリスは別の人を愛せるの？」

誰もいない空間に語りかけてみても、虚しただけだ。そうとわかっていても、このこみ上げる感情をどこに向ければいい？

イオは、一瞬顔をゆがめて泣きそうな顔をした。

「アリス、好きだよ ……」

どうしようもないくらい。

だから、どうか貴女だけは俺を好きにならないで。

そうになったらきつと、俺は貴女を手放せなくなってしまうから。

チエシャ猫の恋心などつゆ知らず、アリスは
ご乱心だった。

……

「ぐうおおええああえあつ

!!」

私は自分でも解読不明な叫びをあげながら何度も手近の木に蹴り
を入れている。

「このっ!!」

右ストレート!

「クソっ!!」

左振り上げ大足っ!!

「変態っ!!」

左踵蹴り！

「猫があっ！！！」

奥義、頭突きいつ！！

「~~~~~っ……！！！」

最後のは痛かった。さすがに頭突きは痛い。私は額を押さえながらその場にうずくまった。きつとおでこは赤くなっているだろう。木よりも自分がダメージを受けるなんて……。

情けない。そう思った瞬間、こらえられなくなって私は涙をこぼした。こうなったら、どうしようもない。涙が枯れるまで泣き続ける以外ほかに手だてなどないのだ。

情けない、もう一度口の中で呟く。

好かれているのだと、思った。イオは、自分のことを好きでいてくれるのだと自惚れていた。恋愛感情なんかじゃなくて、ただ、友達としてやっていけるかもと思った。レーテや、ロキと同じように。

「……違っっ……」

好かれてなど、いなかった。彼が向けていたのは、親愛の情じゃなくて、ただの歪んだ独占欲。好かれていたどころか、本当は嫌われていた。ただ、珍しい玩具を手放すのがおしかっただけ。

情けない。誤解していた自分が情けない。意味もないのにこんな風に物に八つ当たりをしている自分が情けない。そしてそれでもまだ、ふっ切ることができない自分が、情けない。

たぶん、好きなのだ。恋愛感情とか、そういうことは一切除いて彼のそばが、不思議と安心できた。最初は目を合わせられただけでもあんなにおびえていたのに、おかしい話だ。

好き。その言葉が頭に浮かんだ瞬間、私は再び発狂した。全身全霊でその言葉を否定する。

好きじゃない好きじゃない好きじゃない！！　だが、いくらそう叫んでも、自分の考えを追い払うことはできなかった。

「むっかつくのよっ！！」

私は声の限り雄たけびを上げた。

彼の熱が、まだ消えない。頬に、額に、唇に、残ってこびり付いている。そのことがさらに私をいらだたせたのは言うまでもない。

「あんな奴っ！！　あんな奴あんな奴あんな奴うっ！！」

あの悪戯っぽい笑みが、シニカルな笑いが、心配そうな顔が、私を苛める。

もう、やめてほしかった。こんなにはなれているのに、心はまるで粘着テープのようにしつこく彼から離れようとしなない。体だけでは、心を取り戻せなかった。

「だ、大っ嫌いっ…！！」

涙が枯れるよりも先に、声が枯れた。私は掠れた声でひたすら大嫌いと繰り返すが、掠れ切った声は葉々のざわめきにかき消されてしまう。

もしかしたらこの声を聞きつけて彼がやってくるかもしれないと、まだ未練がましく期待している自分が、たまらなく嫌いだった。もういつそのこと死にたかった。

「なに死にそんな顔してんの、アリス。貴女らしくないね」

彼の優しい声が脳裏に浮かんで来て、私は即座に木に頭をぶつけた。痛みで一瞬、気が遠くなる。アリス、乙女心に傷を負い、森の中でご乱心遊ばせた拳句、木に頭を強打し、死す。はは、これまた全然笑えない。

しかし、マジで痛い……。このまま森でのたれ死ぬってパターンもありかな。すっごく阿保っぽいけど。そんなことを考えていた、その時。

「だ、大丈夫?! どうしたの、きみ！」

あれ、マジでやばいかな? 心配そうな顔で駆け寄ってくる常識人の幻覚が見える……。そんなに常識人を欲していたのかあ、私……。そうよね、きつと私の天国というのは辺り一面常識人だらけで、平々凡々な所なんだろうなあ……。

なんてことを考えていると、私の額に手がのせられた。冷たくって気持ちいー……。

私は閉じかけた目をうつすらとあけて、その人の顔を見ようとしたり。ぼんやりと、赤い髪が見える。赤い髪、赤い髪ってアリですか? いや、でも紫のやつがいるんだから大したこと……。ってあー!!!

またついあいつのことを思い出してしまった私は考えを追い払おうと、バツと起き上がった。

瞬間。

ガンッ

「ぐあっ」

「いっ……」

おでことおでこが、接触した。いや、接触したなんて生ぬるいものではない。もつとはつきり言えば一撃必殺頭突きを交わしあったというかなんというか。

アリス、森の常識人と頭突きをしあい、双方死す。……今ままで一番笑えない。もう一人巻き込んで死ぬところが特に。

私と常識人はそれぞれの悲鳴をあげて、おでこをさする。もちろん、色気のないほうが私の悲鳴だ。私はさらなる痛みを与えた張本人を思いつきり罵倒しようとして……。

「き、きみ、大丈夫?! ごめん、痛かった?」

気がそがれた。いや、でもここで何か文句を言ったら人間としてだめだと思う。私はバツが悪そうに眼をそらすと、「いえ、それほどでも……」とお茶をにこした。ほんとは頭の中でひよ子が泣くほど痛かったけどね。

というか、この人誰だ。ようやくその疑問にたどり着くと、マジマジと私を見ている彼と目があつた。

赤い人。私はポツリと心の中で呟いた。

目の前には私と同じくらいか、1歳年下かくらいの少年。その髪も、瞳も、燃えるような赤だった。薔薇を連想させる赤い瞳は丸すぎず細すぎず、流れている感じた。短い赤髪は後ろで一つ結びにしている。知的な印象を受ける細めのメガネ。中世的な体つきを包むのは、質素なTシャツとジーパン。ところどころ汚れていて、おでこはさつきぶつけたせい、赤い。

ああなんだ、ただの美形か。私はもう慣れた様子で納得してしまつた。言つては悪いが、そこまでかつこいいというわけではない。これならむしろイオのほうが断然……

「だからなんでものクソ猫なんだよおおっ!!」

「あ、アリス……？」

再びガンガンと木に頭をぶつけ始める私に少年は戸惑ったような声を上げた。

い、いけない。この人はれっきとした常識人だ。人が怒るのを見て楽しそうに笑う変態猫とはちが……

「いや違うよ?! 違うんだけどさあっ!! なにも例に出すのがあいつじゃなくなっついていいじゃんかよおおっ!!」

「ちよ、お、落ち着いてよ……」

なんとかなだめようと少年は私の肩を叩いた。

だから、落ち着けて私。相手は貴重な常識人なんだって。絶対変な人に思われてるって。

少年の声と心で何とか平静を取り戻した私は、人の良さそうな笑みを浮かべる少年のおでこに目をやり、とたんに罪悪感に襲われた。白い肌なのにそこだけ赤くて、せっかくの美形が台無しになっている。

「あ、あの、ごめんなさい……」

「いえいえ、それより君の方も大丈夫? かなり傷んでそうだけど……」

う、優しい……。今までであった中で一番まともな人も……。

少年は心配そうに私のおでこに手をやった。その細い指が触れた途端、鋭い痛みを感じて私は思わず顔をしかめる。

「あの、痛み止め飲みますか? 湿布も貸しますよ?」

「あ、ありがとうございます……」

私は痛みに涙目になりながら少年から小瓶を受け取った。

今まで耐えていたのが不思議なくらい、痛い。きつと痛みよりも怒りのほうが勝っていたんだらうな……。

私はぼんやり考えながら、何一つ疑わず、その小瓶に口をつけ、一気に飲み干した。それを見ていた少年の赤い瞳が、眼鏡越しにきらりと光ったのも知らずに。

「本当に、ごめんなさい。ところであなたは一体……」

質問は最後まで続かなかった。少年のまばゆい笑顔が、歪む。いや、違う。視界全体が歪んでいるのだ。

まるで酔ったみたいだ。私は心の中で呟いた。なんで、なんてことはすでに考えられる状態じゃない。ゆらりと倒れた私の体を、冷たい腕が受け止める。少年の声が優しい子守歌となって上から降ってきた。

「疲れたんだね、アリス。いいよ、精々休むがいい」

あれ、そういえば、この人なんて私の名前を知っているんだらう……。

不思議に思っただけで閉じようとした瞼を必死で持ち上げようとするが、私の抵抗もむなしく、意識は次第に闇に引き込まれていった。

「なにこれ、チヨロいじゃん」

くすりと、少年は少女の無防備な寝顔を眺めながら笑った。

細い指でアリスの茶髪交じりの黒髪をすく。頬に手をやると、無防備な少女は気持ちよさそうにむにゃむにゃと寝言を言いながら笑みを浮かべた。その素直な反応に誘われて、少年はさらに指を這わせる。

しかし、それを止めた者がいた。

「寝ている女性を襲うなんて紳士的じゃありませんね」

少年はそこにいるのがだれかを知っていても、胸を期待にいつぱいにして振り向かずにはいられなかった。思ったとおり、そこには黒いスーツの青年が不機嫌な顔で佇んでいた。その黒髪の上には、白いウサ耳。

黒いスーツの合間から見えるシャツは、ことごとく赤に染まっている。自分の好きな色だ。

少年は血まみれの満足そうに笑って、アリスをいじるのをやめた。近づいてきた彼に、アリスを指で示す。

「お帰り、ルア。はい、アリスを運んで。どうしたの？ 君にしては遅かったね」

「仕方ないでしょう。途中でレーテが起きて、説得せざるを得なくなっただからですから」

「説得？ あの石頭を説得したんだ？」

「いえ、少し手荒なまねを。アリスはどこだっけって聞いてきたので、こっちが知りたいと銃身で殴りつけました」

「ふふっ、それでこそ僕の優秀な補佐だ」

ぶすつとしたまま物騒なことを話し始めるルアに、少年は可笑しそうに笑い始めた。

しかし不意にその瞳に物騒な光が宿り、ルアは無意識に体を硬くする。

「やっぱりあの帽子屋、ちょっと邪魔だね。今まで無害だと思って放置しておいたけど。あんまりおイタが過ぎるときはいつそのこと、“友人”の手にかかってもらうことにするかな？」

「……………っ！ ……それよりも先に消す者がいると僕は思いますが」「うん、そうだね。今回はずいぶんチェシャ猫に翻弄されたよ、ア

リスも僕らも。僕、自分の計画を狂わせられるのが一番嫌いなんだよなあ。ということ、ルア。暗殺勅令表ブラックリストに彼の名前も書き込んでおいてよ。最優先抹殺対象者として……ね」

実に楽しそうに、少年は笑う。ルアはひとまず友の危機リテを回避したことに安堵しながら、自分の卑劣さに自己嫌悪を起こした。

このクソ餓鬼が。心の中ではそう毒づくのに、決して言葉にも表情にも出せない。自分はただ、この少年に従うしかなくて。もちろん、いまさら逆らおうなんてつもりはない。ただ。

ルアは紫の髪をした青年と、優しげな笑顔を浮かべながらティーカップを傾ける青年の顔を思いうかべた。自由に笑い、誰に縛られることもなく大空に飛び立つ鳥のように生きる彼らが、ずっとうらやましかった。

ずっと、ずっと自分一人が置いて行かれたように思っていた……

「……はい、“女王”様」

「ルアー？」

「うわっ、で、出た変態猫っ！」

「ひどーい。何さ、むつつりスケベのくせして」

「むつつり？」

ルアは聞きなれない言葉に「はて？」と首を傾げた。その様子に背後からルアに抱きついてきたイオは沈痛そうなため息をついた。いや、本当に沈痛なわけないのだが。

「や、知らないならいいや。まったく、ルアは本当にもの知らずだなあ」

「お前が変なことばかり知っているんだろ。ほら、どけ。重い」

鬱陶しげにルアは手を振った。しかし次の瞬間、重さは軽減するどころか2倍近くに増える。

危うく押しつぶされるようになる体をなんとか支えると、すぐ真上で「おもーい」という間延びしたイオの声が聞こえた。

「レーテどいてよー。今俺ルアとラブラブ中なのー。邪魔しないでよねー？」

「いえ、邪魔するつもりじゃありませんよ。今日はとてもいい天気だなーって思ったので、イオとルアをお茶会に誘おうと思ったんです」

「……俺が出てるってことは日が暮れてんだからいい天気も何もな

いじゃん。やだよ、俺』

『え、何ですか』

『だってレーテ、昼間ロキにたらふくおかしやらお茶やら勧めたでしよ。ロキはなんだかんだ言って押しが弱いからどんどん食べちゃってさあ、なーんか体が重いなーって思ったらおなががいっぱいでしたってわけ。これ以上食べたらおれのスマートな体形があー』

『イオはどれだけ食べても太らないと思いますけどねー』

『えへへー、ありがとー』

『てめえら……誰の上で話してると思ってたんだ

っ！！』

この会話約40秒。その間ずっと二人を支えていたルアはついにぶちぎれた。

このとき3人の年齢は、15歳である。

もともとは、ルアもレーテもロキも同期で、しかも親友（悪友？）と呼ばれた仲であった。10歳の時から付き合い続けている彼らは、三者三様好きなことをしていたが、決してばらばらになるようなことはなかった。

ルアは城の文官かつ“女王”の補佐として、レーテは人気喫茶店のオーナーかつ大手業者の社長として、ロキやイオはぶらぶらと気まぐれに森を探検する猫として、それぞれの人生を満喫してたと言える。

そんな中でもこうやって誰かが遊びに誘ってきたり、それでも類は友を呼ぶというものなのであろう、約束をしなくても自然に集まってしまう日が多々あった。

『うああー、ヒマー。俺の“アリス”、早く来ないかなあー……』

またその言葉か。

ルアはあからさまにため息をついてレーテが入れてくれたお茶を口に含んだ。相変わらず、とても美味しい。

美味しい、美味しいのだが。やはり夜景を見ながら外でお茶会というのはちょっとおかしいと思う。というか、寒い。

結局あの後この場にとどまってお茶を飲むことにしたイオは、寒い様子も見せずに露出度の高い服を平気で着こなしている。

やはり猫だから体温は高いのだろうか。じゃあウサギはどうなんだという話になるが、単にこれはルアが極度の寒がりだからである。

『誰がお前のアリスだ、誰が。アリスが僕たちの世代に来るなんてことまずないだろうな。不景気もないし、今はものすごく平和な世界なんだから。というかそもそも、アリスが来れば暇がなくなるってわけでもないだろ』

『えー、でも先代アリスは超乱暴者で滅茶苦茶な騒ぎ起こしまくってたって言うじゃん？ そういう気の強い子いじめるの俺好きだからさー』

『相変わらずサドですねー、イオは』

ははは、とレーテは楽しそうに笑うが、今は明らかに問題発言だと思う。誰かツッコめよ。

ルアは二人が見えないように溜息をついた。夜の空気が、冷たくて心地よい。

『そういえば、明日“カードもち”が全員招集されるんだっけ？ 何があるんだろ』

思い出したかのように、イオが呟いた。そういえば、そうだ。こ

の二人の会話があまりにもどうでもいいことばかりで、大事なことを忘れるところだった。と、ルアは勝手に責任を二人に転嫁する。ルアは紅茶をすすると、念のためイオにくぎを刺しておいた。

『当然だけど、お前明日の昼は起きておけよ』

『にはは？ なんで？』

『正式に“チエシヤ猫”なのはお前だからに決まってるんだろ。まさかサボる気か』

『はい、その気でーす』

『死ぬ。ひゃっぺん死んで海に沈んでこい』

『えー、だつてめんどくさいじゃん。昼起きてたら俺夜にルアのとこへ夜這いに行けなーい』

『おお来るな。是非来るな』

『ひどおーい。ルアなんか捨てて、レーテと浮気しちゃおーかなー』

そう言つてイオはべつたりとレーテにくつつく。しかしこの手の冗談は全くレーテには通じないのだ、なぜか。

レーテはこともなげに笑いながら、やんわりとイオを押し返した。押し返した……ように見えたが、正式に言えば顎を拳で強打した、というのだろうか。要するに、アッパーだ。

『だめですよ、イオ。愛妻は大事にしなきゃ。それにちよつとウザいです』

『……レーテって実はサディストだよ』

『まさか、あなたほどではありませんよ』

イオはあきらめたように溜息をついて、またルアのほうへすりよつてきた。この猫は人見知りなくせに、一度懐かれるとものすごくしつこい。

『ちょっと、うんざりたため息つかないでよ』
『いや、なんでこんなに平和なのかなーってね。確かに、ちょっとヒマかも』

ルアはほんの少し笑って言った。イオはルアの肩に頭を預けながら「だよなー」と同意する。レーテは「贅沢言わないでください」ともっともらしい意見を言ってカップを傾けた。

果たして、これから起こりうる悲劇を、この時の誰が気付いただろう。もし誰かが気付けたとして、誰が止められただろう。

僕らは、運命を変えるにはあまりにも無力すぎた。

「アリスを、迎える

……？」

ルアは呆然と、無礼になることも承知で顔を上げ、問いかけた。
この国の最高位の女性は神妙に頷く。

その気丈な姿は相も変わらず美しかったが、疲れ切った深紅の瞳からは明らかに死の影が姿を見せていた。

“女王”のカードを持つ彼女が不治の病を患ったのは2年前である。それ以来国の政治は補佐のルアに任せきりであった。“女王”のカードも自分の子供、第二皇子に譲ると公言した彼女が、どうして今ごろ。

「妾が申すことではないと思っておるな、白ウサギ」

女王は妖艶に笑った。その瞳は死んでいながらもなお、人を威圧するのには十分な力を持っている。ルアは深々と頭を下げた。

「ハートの城、チエシヤ猫の迷いの森、帽子屋のお茶会場、一般人の街……そして、そのまわりをぐるりと巡る高く丈夫な壁。あれが何かを考えたことはあるじやろうな」

「……父に聞いた話によると、“浸食”を防ぐためだと」

「ほんにお前は気色悪いほど優秀じゃのう」と、褒められているのかけなされているのかよくわからない言葉に、ルアは「恐れ入ります」とだけ答える。

『しかし、何故です？ わざわざアリスを呼ばずとも我々だけで敵などひねりつぶせます』

『お前は文官じゃろうに……。そうではない、浸食とは、敵襲などではないのだ』

『では……』

『この国は、朽ちていつておる』

にたりと、女王はその唇に笑いをたたえた。その乾いた笑いに、ルアは思わず背筋を凍らせる。

『“アリス”が歪んでいつておるのじゃよ。そのおかげで、この国にも歪みが生じておる。お主らもその身で経験しているだろう？ まあこのまま朽ちてゆくのも、死にゆく妾の最後の一興かもしれんがのう』

こちらとしては全く冗談にならない話である。思わず、ぐっと拳を握りしめた。伸びきっていた爪が手のひらに食い込む。

この国が、朽ちる。確かにルアは壁の向こう側を見たことがなかった。しかしきつと、成人したら見れるだろうと思っていたのに。なのに、自分がこの国の外側を見る前にこの国は朽ちるといふ。

『信じられぬなら、自分自身の目で壁の向こう側の世界を見るがよい。よいか、皆のもの。3年後、“アリス”の歪みを治すために新たな“ゲーム”を始める。そのための心構えはしっかりしておけ。……第二皇子よ、妾が死んだら正式に“女王”のカードはお前のもになる。その時は、この国を任せたぞ』

フレイムと呼ばれている女王の子供が、まだ幼いながらも礼を示そうときこちなく跪いた。瞳は母親譲りなのか、赤く鋭い。

その様子を見た女王はふっと笑う。そしてその場にいた“カード

もち”全員に向かって、厳かに言い放った。

『では
はっ！！』
我らの“カード”に誓い、全力を尽くせ！！』

そして、3年もの時が流れ、今に至る。

城側につくのが役目の“白ウサギ”と城の思惑の邪魔をするのが役目の“チェシャ猫”は、自然と対立することになった。

本当はお互いわかつていたのかもしれない。だから、あの時あんなにべったりとくっついていたのだとしたらいくらでも説明がつく。永遠に続く絆ではない。わかつていたから、せめて繋がっていたられるその時だけは濃厚な夢を見ていたかった。

しかし、“チェシャ猫”と“帽子屋”が対立したのは意外としか言えない事実だった。いや、正確には対立したのはイオとレーテなのだが、そのことを知っているせいも、ロキとレーテの関係もなんだがぎくしゃくしている。

そしていまや完全に、“白ウサギ”と“帽子屋”も対立した。

あれほどの時を共にしたともが、バラバラに砕けて散ってしまっなんて……

ルアはすやすやとよく眠るアリスの頬をなでながら、悲しそうな笑顔をこぼした。

「いつそ、ここで貴女を殺してしまえば、僕らは元に戻るんじゃないかな」

そう言いながら、そっと手を彼女の白い首に移す。しかし、力を入れるなんてことはしなかった。できなかった。

『どうしてあなたはずっと……ずっと“籠”の中にいるんですか！…！』

レーテの怒号が、脳裏に映し出される。あんなに怒り狂った彼は初めてだ。いきなり奇襲をかけられて、守ると約束した少女を奪わ

れてしまったことが余計悔しかったのだろう。

『どうして、どうしてそこまでして城につくんです?!』

僕やロキを殺しても、貴方は……』

『つくよ』

お互い、銃を向けて。笑いながら。

かつての、友に。

『そうすることでしかアリスを守れないなら、きつと僕は友も殺せるよ』

そうすることでしか、“彼女”との約束を守れないなら……。僕は、すべてを捨てられる。

アリスを守ること。約束を守ること。守るべき二つのものを考えた結果、ルアはここにいた。友人達から遠く離れても……。ここだったら、両者とも守れる。そう思ったかった。誰かに認めてほしかった。

「……守る、か……」

ぼつりと、ルアはつぶやいた。ロキもレーテも、城の側にはつかなかった。自分だけだ、いつまでも此処に居座っているのは。この“籠”の中から飛び立っていけない、臆病な鳥は。

「僕に、貴女を守る資格はありますか……?」

もちろん、答えはない。ただそこにあるのは、彼女の無防備な寝顔だけで。ふわりと、アリスの可愛い唇が笑みを浮かべた。

ルアはそれに誘われるかのように、アリスの唇に自分のそれを重

ねる。数秒重ねただけで、すぐに離してしまう。しかし、ルアにはその数秒だけで十分だった。

優しく、彼女の頭をなでて指通りのいい髪を梳く。愛しい、というのはいかような感情を言うのだろうか、心の片隅で思いながら。

「怒る顔も、怖がる顔も好きだけど……やっぱり僕は貴女の笑顔が見たいから……」

だから。その続きが、のどに詰まってしまうと出ない。それでも、ルアは彼女の耳にキスを落としながら、そっと囁いた。

「おやすみ、僕のアリス。どうか、いい夢を……僕らが見る夢の何倍もいい夢を……せめて、今だけは……」

今だけは、悪夢にさいなまれることがありませんように。

「それで？ どうだった、ルア」

赤髪の少年はいつもの定位置に座って、ふうっと疲れたような溜息をついた。それはそうだろう。いつもは国の行政ばかりをやっているこの人が今日は「やんちゃ坊主」に化けてアリス奪還戦に参加していたのだから。そう “女王”ともあるうお方が。

ルアは彼の前に跪いたままだった今見てきたばかりの状況を報告し始めた。

「浸食は抑えられたようです。それどころか、干ばつの激しかった地域では急な雨も降り始めているとの報告もありました。いずれもアリスがここについてからです」

「そう。ふふ……やっぱり、アリスを元の世界に返すわけにはいかないよねえ……」

彼は手近にあった花瓶から一本の赤いバラを取り出すと、もてあそぶかのように花びらを取り始めた。

1枚…。

2枚……。

3枚………。

禍々しいまでの赤が、彼の足もとに散っていく。まるで、かつて彼の手にかかって死んでいった者たちの血のような赤に、ルアはくらりと眩暈を覚えた。いつになっても、この色だけは慣れない。赤を見て思い浮かぶのは、かつて自分の足もとを染めていったもの。

そして、白い部屋で起こった惨劇の跡だけ。

「どうしたの、ルア」

「……いえ、なんでもありません」

それを分かっているのだろうか、この少年はやけに自分にバラを見せつけることが多い。そうして自分が耐えられずに目をそらすと、こうやって意地悪に「どうした」と聞いてくるのだ。

自分が知る限り、彼ほど悪質なサディストはいない。

「もしかして、君までアリスを返してあげたいとか思っちゃった？」

くすくすと、なにがおかしいのか少年は笑い始めた。

そんなはずはない。きつとレーテよりもイオよりも見もしない“アリス”に恋い焦がれていたのは、自分なのだから。

レーテは最初から興味はなかったらしいし、イオも所詮興味だけで終わりそれ以上の関心はなかった。自分だけだったのだ。口では会えるはずないと言いながら、ずっと会いたいと切望していた。

絵本で呼んだ初代の“アリス”。書物で調べた歴代の“アリス”。写真で見た先代の“アリス”。

博識だからだろうか、その興味は余計に増幅され、やがて執着へと変貌を遂げた。

(だから、アリスを迎えると聞いた時、本当はすごくうれしかった
……)

狂っているとわかっていながらも。抑えられずにはいられなかったこの想い。

(だから、アリスが帰りたいたったとき、帰したくないと思った

……)

報われないとわかっていながらも。止めることができなかったこの恋心。

(でもきつと、あなたは気づくことはないでしょうね……)

ならせめて、そばに居させて。そばで守らせて。……置いて、行かないで。

こんなことを思う自分は、ただ弱い。

「僕、ルアにまでは裏切られたくないなあ」

「大丈夫です。アリスは、決して帰しません」

ルアは再び深く頭を下げる。

帰すつもりなんてない。たとえ自分の主人であるこの少年に命令されたとしても、自分は彼女をはなさないだろう。

だけど……せめて、愛しい貴女が傷つかないように。

(僕は、城で貴女を守るためにいる。そう思っても、構わないでしよう?)

せめて、ここに居る間だけでもいいからあなたの騎士でいさせて。きつと、本物の騎士がすぐに救いに来てくれるから、それまでは貴女を守らせて。

夜明けは、まだだろうか？

「……知ってる？ レーテに手間取っていたっていうのは全くのウソですよ」

ルアは闇の中、眠り続けるアリスの髪をすいていた。どれだけ眠るのだろう、この少女は。今はどんな夢を見ているのだろう。

彼女が抵抗しないから、彼はこんなことができる。前にした彼女との鬼ごっこを思い出して、ルアは可笑しそうに笑った。それはもう、必死の形相で自分を拒絶した。

さらりと、指の隙間から長い黒髪がこぼれおちた。柔らかい髪だ。持ち主と同じように、すぐに自分の手をすり抜けてしまう。

「だってそうでしょう？ 僕ら3人の中ではあいつが一番馬鹿で、力もなく……優しいんですよ。ふふ、馬鹿ですよ、ほんと。弾を空発にしておくなんて……」

『……行きなさい』

かちりと、音がした。次いで、レーテは銃を持っていた右手を宙におろした。鈍い音を残して銃が彼の手から落ちる。

ルアは呆然と自分だけが銃を向け続ける相手を凝視した。

『レー、テ……？』

『行けと言っているでしょう。その代わり、ここで僕と』

貴方の縁も終わりです。……アリスを、守ってくださいね。あの子に罪はありません』

「ほんと、どうしてでしょうね。あんなに仲が良かったのに、気づけばバラバラになっていた。本当に……貴女さえいなければ、こんなことにならなかったのに」

ゆっくりと、その首に手を回す。先程はできなかつた。だが、今なら、できるだろうか。

ゆっくり、ゆっくり、真綿で包み込むように、手に力を込めていった。アリスが身じろぎをして、一瞬だけ戸惑う。苦しそうに動いたついでに髪がさらりと落ち、彼女の鎖骨の部分が見えた。

そこにははつきりと、青黒いあざが残っている。おそらく彼女の母親がつけたものであるものに、ルアは啞然としながら触れた。なでるように、人差指であざや傷跡をなぞる。

「……こちらの世界にいても貴女は暴君女王の玩具になり、あちらの世界に戻っても母親からの暴力を受ける。どっちに転んでも、貴女は幸せになれないじゃないですか。 なら、ここで物語を終わらせたほうが、貴女にとっては幸せなのかもしれないね」

友や自分のためじゃなくても、アリスのためだったら出来るかもしれない。そう思い直したルアは、あざをなでるのをやめ、再びゆっくりと手に力を入れ始めた。

柔らかい首を、一本一本の指が締め付ける。アリスは眠っていないながらも苦しそうな喘ぎ声を上げた。それにすら欲情してしまう自分はとうに狂ってしまっているのだろうか。

もうすぐ、終わる。アリスを殺せば、自分は間違いなく“ルール違反”となるだろう。そしてアリスがいなくなったこの国は、次第

に朽ちていく。

みんな、みんな、死ぬ。ロキも、レーテも、自分も、みんな、終わる。この残酷な悪夢も、もうすぐ……。

『アリスを、守ってくださいね』

「……………」

レーテの言葉が脳裏に浮かびあがり、ルアは夢中で手を放した。どうしようもない自己嫌悪が波のように襲ってくる。それはアリスの息の根を止められなかったことに対するものなのか、はたまたアリスを殺そうとしたことに対するものなのか。

殺してしまえばよかった、殺さなくてよかった。そんな矛盾した気持ちでルアを苛める、その時。

「勝手に人の幸せを決めないでよ」

「……………?!」

自分の下で聞こえた虚ろな声に、彼はびくりと体を震わせた。この時ほど神を呪ったことはない。先程やろうとしていた行為のせい、か、ルアは珍しく弱気になって、絞り出すようにして声を上げた。

「起きてたんですか、アリス……………」

「ずつとね。さすがにあなたが私を殺そうとした時は焦ったけど」

けほつ、とアリスは乾いた咳をして、その白い喉に手を当てようとする。ルアは耐えきれずにその手を素早くつかんだ。

アリスの瞳が驚きに染まる。そのきらめきが、殺そうとしてもなお綺麗と感じてしまうとは、自分は相当病んでいるらしい。

「アリス、貴女は…」

「ああ、そういえば。貴方に言っておきたいことがあるんだけど」

ルアが何事かを言う前に、アリスはゆらりと体を起こした。「キリコキリと首や腕を回し、「よし」「とうなづく。」

何が「よし」なんだろう。その答えはルアがその身で体験することになる。

「ルア、ルア、こっち向いて」

「え？」

彼女の指示通りの方向を向くと、一瞬遅れて刺すような痛みが右頬を襲った。息をつく暇も与えず、同じ痛みが左頬に来る。

そう、いわゆる往復ビンタというやつであった。

「あ、アリス?!」

「黙らっしゃいっ!」

最後に、頭の頂点に肘鉄。

痛い。素直に、痛い。どれくらい痛いかっていうと、うっすらと涙が浮かぶほど。

間違いない、このアリスは先代の“暴力アリス”の血を引いている。ということとは、ここで自分が殺されることは決定事項みたいなもので。

(愛しい人のかかるとして幸せなことなのかな……)

正直、微妙である。色気も何もなく、格闘技で殺されるなんて御免こうむりたい。そんなことを思いながらも、ルアは罪悪感からおとなしく目を閉じて次の一発を待った。

しかし、期待していた（？）痛みはいつまでも来ない。恐る恐る眼をあげると、そこには口をへの字に曲げたアリスの顔が超ドアップで映っていた。

ドキン、と。アリスに聞こえるのではないかと思うほど高速で心臓が高鳴る。

（や、やば……可愛い……）

怒った顔が、近い。不機嫌そうに眉がびくびくと動くのが、もろに見えるほど。

ルアは両手を後ろにまわして、思いつきり右手の甲に爪を立てた。痛みが一時的に、舞い上がりそうな自分を現実「じじいかわ」に引き戻していく。

腕を戻すようなことはしなかった。そんなことをしたら、夢中で目の前の少女をかき抱いてしまいそうで怖かった。たとえば、彼女が壊れて骸シカパネになったとしても。

「最初の一発目は私をこの世界に引っ張り込んできたことに対するお返し」

至近距離で、アリスは頬をふくらませながら言う。逃げようにも、彼女に胸倉を掴まれていてできない。

触れたいと思う恋心と壊してはいけないという背徳感。ある意味、拷問だ。

「次の二発目は私を殺そうとしたこと」

その言葉に、ルアは気まずそうに目をそらそうとした。とたん、彼女の白い首が目につく。

その首に、自分は今の今まで触れていたのだ。そう思うと、知らずに顔が熱をもったように赤くなる。

「そして最後の一つは ……私のお母さんを侮辱したこと」
「……ぶ、じょく……」

肘鉄をお見舞いされた箇所がずきずきと痛む。最初の2発は手加減されたのだろうか、平手でしかなかった。……まあ、その気になればグーでもできたのだろうか。

なのに、最後だけすごく……容赦なかった。本気だった、とでもいうのであろうか。

アリスの不機嫌そうな顔が崩れ、ほんの少しだけ笑顔が見えた。ドキリと、おさまりかけていた動悸が突然速くなる。見ていたくないのに、目が惹きつけられてそらせない。

「やっぱり、私母さんのこと好きだからさ。不幸、なんかじゃなかったんじゃないかなあって思うんだ。こっち来るまではつきりとはわかんなかったけど……あっちの世界のこと、嫌いになれなかったかも。なんていうか、懐かしいよ」

「……あんなことを、されても」

「ああ、虐待？ 大丈夫大丈夫、私タフだから。それに……やっぱり、なんだかんだ言って“お母さん”だからさ」

しかし、一瞬彼女の瞳が動揺で揺れ惑ったのをルアが見逃すはずがなかった。

先程までほぼ額同士を合わせていた状態なのに、すすすとアリスは離れていく。そんなあからさまな挙動不審に、ルアはため息を吐いてあきれた。

目を伏せ黙りこんでしまったアリスの手を、そつと包み込む。その手には珍しく、白い手袋がしていなかった。

(……ああ……この女の^{ひと}手は、こんなにも温かい……)

直に触れる人肌に、ルアはほつと溜息をつく。そういえば……次期アリスが来るという宣言以来、誰にも直肌では触れていなかったような気がした。

それまで嫌ってほど触れていたのが、レーテやイオ（主にイオ）。当り前だと言えば当たり前な結果なのだが、そんなところにも壁を見つけてしまったルアは、ふつと悲しげに眼を伏せた。

でもきつと、ここでアリスを殺してしまっていたら、その壁はより頑強に、もう二度と壊せないほどに高くなってしまっていたのだらう。

「2つ目と3つ目は正直に謝ります。確かに、会って1日目の僕に、貴女の幸せなんて決める権利はありませんでした。それに……貴女を殺したって、もうどうにもならないことなのに……」

「……あ、あの……」

「でもやっぱり、貴女をここへ連れてきたことは謝れませんよ。何より僕は貴女にずっとここにいてほしいと思っていますし、それに貴女も、ここがそんなに嫌じゃないんじゃないですか？」

何か言おうとしたアリスの言葉を遮って、ルアは悪戯っぽそうに笑った。

アリスは一瞬戸惑ったようにルアの目を見ると、次いで恥ずかしそうに顔を朱に染めて小さな声で呟く。

「そ、そんなわけないでしょ。さっさと帰りたいわよ、こんな世界」
「でも、いいやつらだったでしょう？レーテも、ロキも、イオも」
「~~~~~っ！！ その最後の名前は消しなさい！！」

突然、アリスの顔がぼつと火でも点ったかのように真っ赤になっ

た。耳まで赤く染めながら、彼女は怒鳴り声をあげる。

わけのわからないまま、ルアはとりあえず「静かに、静かに」と彼女を諫めた。さすがにこの会話を女王フレイムに聞かれたらやばい。そもそも彼はアリスが起きたらすぐに女王に謁見させるよう言いつけられているのだ。

「僕の首が少しでも惜しいなら、頼むから静かにしてください」
「うっ……」

「最後のつて……イオ、ですか？」

「その名前を出さないでつてばっ」

「はいはい。わかりましたからどうかお静かに。じゃあ、紫の人つてことではどうでしょう？」

「むらさき……その名詞聞いただけで鳥肌が立つんですけどっ」

「……じゃあ、猫でいいですか？」

「あいつのせいで私猫アレルギーになりそうなんだけどねっ」

「あー、もう……。じゃあ変態でいいですよね？」

ようやく、アリスは頷く。彼女の頭の中では「チエシヤ猫Ⅱ変態」という式が成り立っているらしい。

まあ確かに否めないが……元親友のよしみとして、ここまでアリスに嫌われているイオを少しだけ可哀想だと思った。

ほんと、あの変態猫はアリスにいったいどんなことをしたのだから。

そう思うと、急に気が気ではなくなった。まさか、処女を奪われたとか……？ いや、さすがにあいつもそこまで非常識ではないよな……。

（や、でも待て……あいつのはじめてつて確か14のときじゃなかったっけ……）

さあっ、と音がしそうなほど急速に、ルアの血の気が引いた。
やりかねない。あの万年発情猫ならやりかねない。ただでさえ、
アリスはこんなに可愛いんだから。

ルアはもう一度アリスの姿をマジマジと見た。

寝ている間に着換えさせた寝巻きは、かなり露出度の高いキャミ
ソールタイプのうち桃色のワンピースである。それが余計、彼女の
白い肌と細い体格を際立たせていた。

先程さんざんに怒っていたせいも、その頬は仄赤い。窓から差し
込んでくる月明かりが、彼女の艶やかな黒髪を照らし出す。

黒い瞳が、妖艶な熱を秘めてこちらを見つめている気がして、ル
アはそこから目を離せなくなってしまった。

アリスは、可愛い。

心のどこかで、警鐘が発せられる。しかしそんなものさえも聞こ
えないほど、すでにルアは彼女の瞳の魔力に惹きつけられていた。
月は、ウサギを狂わせるという。

すうっと、自然な様子でルアの手がアリスのむき出しの肌に触れ
る。意識してやった行動ではないが、その柔らかさに一瞬触れた手
がピクリと震えた。

(ヤバい、ヤバいヤバいヤバいっ!! ちょっ、僕のほうが欲情し
てどうすんだーっ!!)

頭ではそう考えて抑えようとするのに、体が言うことを聞かない。
きつと、今自分の顔はひどいことになっているのだろう。アリスに
酔って、獣のように目が鋭くなって。

でもきつと、これ以上彼女に触れたら、そう

……

嫌われる。

ぴたりと、思考が止まった。そのままいやにゆっくり、手が彼女から離れていく。その様子をほっとした気分で、しかしどこか情けなく感じながら見ていた。

(嫌われても構わないって豪語していたのはどこのどいつでしたっけ……？ 結局、今一番怖いことはアリスに嫌われること、ですか……)

「ルア？ 何ため息ついてんの」

「……いえ、ちょっと自分の不甲斐なさに。それより、アリスこそいったい何をされたんですか？ どうしてそこまで嫌うんです」

訝しげな視線をそらそうと疑問を返すと、アリスは思った以上に激しく反応した。顔がこれでもかって言うほど顰められ、体中で「口にするのも恐ろしい」と叫んでいる。

ルアはその迫力に気圧されながらも、内心ひやりとした。

これはマジで、襲われた可能性大なのではないか？

「あ、アリス、まさかとは思いますが、あの変態に犯されたんじゃありませんよね?!」

「お、おか……あんた私よりちょっと年上なだけなのになんて単語使ってるのよっ! ち・が・う! 断じてそれはない!!」

「そ、そうですね……。でもアリスぐらいの年で処女喪失っていうケースも少なくありませんから……」

「しょ、処女喪失……。常識的に言って犯罪だろうがっ! ええそうよね、この世界には常識なんて存在しないもんねっ! どうせそこらじゅうに蔓延ってるのはあんたみたいなプレイボーイでしょう

よ！ どいつもこいつも私より美形のくせしてっ！」

だんだんととりとめのない口論になっていく。最後のは単なる嫉妬なのではないのか。確かにこの世界には美形なんてウジがわくほど……失礼、山の数ほどいるけど。

しかし最後から2つ目の発言はいただけない。ルアは静かにすることも忘れて、アリスの口論に受けてたった。

「プレイボーイとはなんですプレイボーイとは！ 言っておきますが、僕はレーテヤイオとは違って今まで一度も女性を恋人として扱ったことはないんですよ。確かにレーテはあの優しそうな笑顔で女性を誘いますよ。イオなんて年中発情期です。それに比べて僕は、一度も恋人というものを持つたことがないんですから！」

ふん、どうだ。そんな風に胸を張ってみせると、当然だが、アリスは憐みの視線を送ってきた。

「えと……それはまずいこと言っちゃったわね。き、気にすることないと思うの、私だって付き合ったことのある人なんていないし……、人間、案外恋人なんかいなくてもやっていけると思うのよ」「は？ えっと、あ、はいそうですね。恋愛は気の迷いだとよく言われていますし……」

意味を取り違えたアリスの言葉に戸惑うが、そのまま彼女に合わせることにする。

「でもアリス、ここだったらいくらでも恋愛はできますよ？ 誰だって“アリス”のことを好きだし、恋人になりたがる。それこそ“カードもち”も一般人も関係なく、“アリス”は羨望的なんです」「……にしてはなんだか扱いがひどくない？ 穴に放り込まれるわ

追いかけられる銃を向けられるわ……あれを愛情表現とは言わせ
ないわよ、なにがなんでも」

アリスは嫌なことを思い出したのか、顔を思いつきり引き攣らせた。ルアは不機嫌の色に染まっていく瞳を見つめながら、小さく苦笑する。

確かに、今日は何かとあわただしかった。完璧であった計画がこことくあのバカ猫とアリスに　　まあ自分も一因ではあるのだが　　ぶち壊され、何かとアリスに大変な思いをさせてしまった。だけど、それもここで終わり。

これでようやく、ゲームオーバーの準備が整ったのだ。

あとは、ここにアリスを引きとめておくだけ。

ずっと、甘い言葉で。

「大丈夫ですよ、アリス。確かにこの国はものすごく………なんとかうか、アリスの国に比べて拳銃が普及しているので、流れ弾が激しいです。意図はなくても、それで傷つく可能性は十分あるんですが………大丈夫です。ここにいる限りは、僕がアリスを守りますから」

優しいな微笑みを浮かべながら言うのは卑怯？　ここにいてくださいという願いをただ瞳に込めて見つめるのはずるい？

でもやっぱり、これは本心でもあるから。

貴女を揺らすためなら、どんなに卑怯でずるい手でも使ってみせる。

「僕に、守らせてください」

目の前の、意志の強そうな瞳が揺れ惑う。
それでいい。ルアは心の奥でそっと呟いた。別に、強固に「ここ」にいる」といきなり思わなくなっていたいい。

今に、帰りたくないと思わせてやるから……

だから、今は揺れるぐらいで十分。むしろこんなにあっさりいくとは拍子抜けだった。イオの牢獄であったときは「絶対にこいつになんかついていかない」という目をしていただが……あの後、ほんとに何があつたのだろう。

何か、この世界で縊るものを失ったのかもしれない。

例えば、そう……イオに、「帰したくない」と言われた、とか。

ルアはそんな考えに心の中でくすりと笑うと、再びアリスの瞳に集中した。

人間とはたやすいもので、こちらが真剣に申し出ると、相手も揺れやすくなる。中でもその真剣さは常に瞳に出るといわれているが。

「ダメ、でしょうか」

泣きそうに顔を歪めてみる。次の瞬間。

ふいっとアリスが目をそらした。そんな小さな動向でも、勝負はついたものである。

にやりと、ルアは勝利の笑みを気づかれないように浮かべた。

(落ちたな)

「わ、私は帰るのよ。絶対に帰ってみせるからっ。でも……えっと、その、帰り道が見つかるまではここにいてあげてもいいわよ、別に。そ、そのかわりっ。ちゃんとあんたが守ってよね？ ……ルア」

「はい、喜んで。アリス」
マイ・プリンセス

にこりと無邪気そうな笑顔を浮かべて彼女の手を取り、そつと口づけると、アリスの顔が火事にでもあったかのように真っ赤になった。そんな表情を可愛いと思いつながら、ルアは心のどこかで罪悪感を感じていた。

この女は、^{ひと}気づいているだろうか。結局のところ、自分はアリスを騙しているのだと。

自分が愛しているのは、アリスではなく“アリス”。いつかに、アリスがそう言っていた。確かに、そうかもしれない。

自分が興味を持ったのは、小さなころから憧れていたのは、“アリス”という肩書を背負った少女であつて、アリス本人ではない。ならばきつと、アリスが“アリス”以外の誰かだったら、何の関心も湧かなかつただろう。もしかしたら、その場で撃ち殺していたかもしれない。

アリスが“アリス”だから愛し続ける。そんな歪な愛で、彼女をいつまで引きとめられるだろう？

アリスが再び、この手から逃げ出したときは。

その時は、大人しく引き下がろう。こんな血まみれの騎士のもと
ブラッディ・ナイト
じゃなくて、彼女の本当の騎士のもとに、彼女を返そう。

その時は、きつと。

イオに、すべてを託そう。

もうすぐ、夜が明ける。

『あれ、ルアじゃん。何やってんの、こんなところで』
『……それはこっちのセリフです。よくまあ、のこのこと……』

完全に背後を取られたルアは、虚勢を張るように言った。後ろから、軽々しい何かが舞い降りる音がする。

今から胸の中の黒い銃に手を伸ばしても無駄だろう。思ったとおり、背中に温かい感触を感じ、熱い腕にすべての動きを封じられた。拘束するためにやっているのか、それともただ単に抱きしめるためにやっているのか。おそらく後者であることはお互いわかっている。ルアは抵抗もなしに彼の腕に身をゆだねた。

久しぶりに感じる温かさに、ふと、目頭が熱くなる。もちろん、うっかり泣くなんて失態はしない。

だが、もう少しだけこのままでいたいと願うことなら、神も赦してくれるだろうか。

『ん〜、せつかくの再会なのに物騒なもの持たないですよ。まったく、昔っからルア君はお茶目だなあ』

語尾にハートマークでもつけそうな軽すぎる口調に呆れを通り越

して脱力する。そう、昔からこいつは人の毒気を抜くのが得意だった。

『煩い黙れ放せ変態』

そんなことを言いながらも、思わず抱きしめる腕を掴んでしまう。言葉と裏腹につなぎとめようとするルアに、抱きついていているイオは可笑しそうに笑った。

どうしてこんなに嬉しそうに笑うんだろう、こいつは……。イオの真意がつかめなくて、もどかしい。例えばこれが、まだ何も考えずに友と呼べる時期の自分だったらわかったのだろうか。

狂っているのは、イオ？ 変わってしまったのは、僕？

『何？ ルアったら、しばらく見ない間に寂しがりになった？』

『……そうだとしたら、どうします？』

『……ルア？』

さすがに様子がおかしいと思ったのか、イオは腕を解いた。離れていったぬくもりに落胆しながらも、ルアは平静を保って彼のほうへ向いた。

これで、彼からは死角だった胸の汚れが見えるだろうか？ 僕の胸

一面を濡らす、赤黒い血が。

イオの金色の瞳が、驚きか、恐怖か……はたまた、絶望か、大きく見開かれる。

『ねえ、行ってあげなよ。まだ助かる程度にしか痛めつけてないからさ』

誰か、とは言わない。きつと鼻の良い彼ならだれの血か、意識す

ればわかるはずだから。むしろ今まで気づかなかったというのが不思議なくらいだ。

それほど自分との再会に夢中だったということか、とルアは心の中で呟いた。

だけどきつと、今度こそ、彼は自分を憎むだろう。憎んでくれるはずだ。

友を、^{レーテ}この手にかけてのだから。

『……お前つー！』

思い通りに、彼の瞳が一瞬で憎しみに塗り替えられた。ルアはそれを満足げに見て、口を笑いの形に歪めた。

そう、憎むがいい。生ぬるい友情じゃなくて、体を焦がすほどの敵意。そうすれば僕は 例えば、きみたちを殺すことだって躊躇わずににできるのだろうから。

『行けば。じゃないと、マジで死ぬよ？』

彼の真似をしてシニカルっぽく笑うと、イオの顔から色が褪せた。

『……ル、ア……なんで、おま、え……』

ここまで動揺する彼も珍しい。

ああ、でもきつと自分はそれほどのことをしているのだ。もう、戻れない。

せめて抵抗しないレーテに銃ではなくナイフを使ったのは、何かの情だったのだろうか。本当に死んだりしないように？ ははっ、なんて滑稽なんだろう！

『 貴方も、アリスを守りたいんでしょう？ だったら友情なんて捨てなさい。少なくとも、僕もレーテも、捨てました。……残るは貴方だけだったんです』

半ば自分に言い聞かせるようにして、イオに笑いかける。イオは何かを言おうとしたが、いったん口を閉じて、吐き捨てるように言葉を残していった。

『 笑顔が気味悪いんだよ』

次の瞬間、彼の姿は宙高くへと跳んでいた。ルアはそれを見ることなく、イオの言葉をゆっくりとかみしめる。

笑顔が、気味悪い、か。おかしいな。完璧に笑えたはずなのに。ちゃんと、演技はできたはずなのに。

視界が、揺れる。本当に今の自分はなんて滑稽なんだろう。今更、こんな。こんなふうにして、想いがあふれ出てくるなんて。

頬に熱いものが走った。流れたそれを落とすまいとしてみるが、熱いそれは指の間をくぐりぬけて地面にしみを残してしまう。

レーテの肉をえぐったときの感触が、手に残っている。

一切抵抗しなかった彼を。諦めたようにソファーに腰掛け、目を閉じた彼に。

レーテの見開かれた漆黒の瞳が、脳裏に焼き付いている。

驚いたような瞳が。驚愕の色を映しながらも、瞼に覆われていった瞳が。

『どうして…っ』

最後に漏らした彼の一言が。

どうしてだっ…？そんなの決まっている。

憎しみがほしかつた。いざという時に迷ってしまわぬため、自分は彼らを憎まなければならぬ。そのためには彼らが自分を憎まなければならぬ。

じゃなきゃ、貴方がたはアリスを元の世界に帰そうとするでしょう？

アリスへの執着が、僕をこんなにさせたのだろうか？

(アリス……今はたまたま君のことが憎いよ)

殺したいくらいに。

(さて、これからどうするかな…?)

一通り泣きはらした目をこすりながら、ルアは立ち上がった。体

がきつい姿勢でいたせいか、ボキボキと鳴る。

（とりあえずこの服気持ち悪いから着替えて、と。女王への言い訳は「レーテに手間取っていた」でいいか。それから……アリスを、殺してみようかな）

きっとそうすれば楽になれるんだろうな。そう思う彼の瞳は完全に壊れていた。

（レーテ：死んでいなきゃいいな）

自分が手にかけてくせに、そんなことを思うのは罪だろうか。しかしイオがあれだけの勢いで言ったのだから大丈夫だろう。彼は天才的なほど医療の心得があるのだから。

とりあえず、今考えるのはアリスのことだ。アリスに、会いたい。アリスを守りたい、壊したい。

うつすらと、ルアは笑う。きっと、もうすべてを失ってしまった自分は、狂気に吞まれるしかない。なら、今だけは。その流れに身をゆだねさせてください。

長い耳を揺らしながら、彼はアリスの声のするほうへ走って行った。

まだ、夜明けは遠い。

【ep13～ep15を通してのあとがき】

と、とりあえず謝罪……。ものすごく時間軸がややこしくなってます……。

一応「夜明け」をキーワードとして書いてみたんですが、普通わかりませんよね。

えー時間の流れとしては、ep15 ep13 ep14って感じ
です。

ついでに言うと、ep12の最後のシーンはep15のすぐあと、
城に到着後すぐの話です。

それでは、見分け方の解説いきます。

<タイトルで見分ける>

ep13 星月夜⇨夜中

ep14 黎明⇨明け方

ep15 宵の明星⇨日没後

ということ、15 13 14の順です。豆知識

<最後の一文で見分ける>

ep13 夜明けは、まだだろうか まだ夜

ep14 もうすぐ、夜が明ける 夜明け寸前

ep15 まだ、夜明けは遠い 夜になったばかり

ってことで15 14 13です。

「……なんだ、全然元気そうじゃん」

イオは気づかれないように荒れた息を整えながら、呆れたように呟いた。

体が、熱い。極力肌を露出して暑さを回避しようと思われた黒服が汗でべつとりと湿っていた。

久しぶりに本気を出して駆け付けてきたのにな。そんなことをぶつぶつと呟きながら、心の中ではとりあえず無事な様子のレーテを見てひどく安心していた。

「肩、右足、左手、脇腹。これだけめつた刺しにされている哀れな僕を見てよくそんな言葉が出てきますね」

そう苛立たしげに言うレーテはソファーに横たえられている。上半身はむき出しで、至る所に包帯がぐるぐると巻きつけられていた。本来だったら白であるはずのものも、滲み出てくる血で赤く染まっ
ていて、ひどく痛々しい。

（応急処置つてとこか……にしてもここはほんとマシな医者がいないんだから……）

「よかったじゃん、可愛い顔を切りつけられなくてさ。っていうか俺としてはこのくらい大人しくないと治療も何もできないわけなんだけどねー」

くすりと笑い、ぐったりと横たわるレーテの髪を撫でる。痛みの

せいか髪はじつとりとした汗で湿っていた。

手の甲でそつと汗をぬぐうと、レーテは抵抗するでもなくただ顔を顰める。その心底不本意そうな顔に、イオは思わず苦笑した。

(ま、わかつてはいたけどね。俺も嫌われたもんだなあ…)

このくらい酷い傷でよかったと本気で思う。急所をついていないせいか、死には至らない。しかし「大嫌い」な自分に触られて抵抗できるほどの余力も残していないわけである。

もしかしたら、ルアが謀ったのかもしれない。

そんな考えが脳裏にちらついたので気づいたイオは、小さく頭を振って考えを追っ払った。

馬鹿だな。自嘲するようにそう呟くと、レーテは不審そうにこちらに目を向ける。

「どうしたんです?」

「ん?あの、さ、レーテは俺のこと嫌い?」

「無論、嫌いです」

きつぱりと言われ、イオはいつも通り「あは」と小さな笑いをこぼした。

もう数えるのにも飽きてしまった「嫌い」という単語。俺はレーテのこと大好きなのにな、とふざけた調子で呟くと、もれなく迷惑そうに睨まれた。

わかっている。もうどれだけ想っても同じ思いが返されることはない。自分と彼の友情は、原形すらもとどめぬほどに砕けて永遠に戻ることはない。

ならせめて。イオは空いている手で医療品を漁りながら小さく微笑んだ。

せめて、大好きな人ルアと大好きな人レーテだけは、引き離さないで……。
そう願うことすら、自分はもう許されないのだろうか。

「きっぱり振られちゃった。じゃあさ、ルアのこと嫌い？」

「……嫌いだったら、這つてでも追いかけてあのお綺麗な顔をぶん殴ってます」

「はは、言ってる。レーテって嫌いな奴には徹底して嫌がらせるからね」

笑って冗談を言いながら、イオはほつと安堵のため息をついていた。

大丈夫。きつとルアとレーテの関係が変わることはないだろう。

たとえば、ルアがどんなにレーテを痛めつけても。たとえば、お互い殺し合う運命にあつても。自分みたいに、彼の逆鱗にわざわざ触れるようなことをしない限り。

昔のことをちらりと思いだしたイオは、思わず汗をふく手に力を込めた。とたんにレーテの不思議そうな視線が向けられる。

「大丈夫ですか」

「つはは、こんな重傷の怪我負ってる人に心配されるほどひどい顔はしてないでしょ。大丈夫大丈夫。とにかく貴方はゆつくり寝てなさい。じゃないと包帯巻きなおすとき悲鳴あげちゃうよっ」

あわてて笑って誤魔化す。レーテはそれ以上は追及してこず、「包帯を巻きなおす」という言葉に顔をしかめた。

「いいません。断じて貴方の治療なんて受けません」

「はは、そんなこと言っちゃって。遠慮しない遠慮しない。とっくべつにお安くしておくからさ」

「あなたなんかに治療を頼んだらこちらの家計が賄えなくなります。ぼったくりってほど高いんですよっ」

「何言ってるの、こんなでっかい屋敷に住んどいてさ。10%オフにまけてあげるからさ！」

「とにかく、帰ってください。今家の者が総出で医者を探しに行ってるんですから。あなたの出る幕はありません」

「うわ、全員で？あいつかわらぬの溺愛ぶりだねえ……。じゃあ今回の件でレーテンチの使用人は全員ルアを敵視することになるかな」

「……まあ、たぶん。 ああ……」

レーテが何かを言いかける。迷ったように口をパクパクしながら、悲しそうに目を伏せた。

イオは彼の言わんとすることは大体わかっていた。彼は、優しすぎる。ほんとは、馬鹿じゃないかと毒づきたくなる時だつてあるのだ。こんなになつてもまだ、自分を傷つけた友を切り捨てられないのだから。

だがきつと……今はそれでいい。レーテだけはルアを見放さないで。たぶん自分はもう……無理、だから。

きつと、ルアを殺したいほど憎む日が いつか必ず来てしま
うから。

「アリスと友情は、両立してはならないものなのですか」

「 どちらか一つ、なんてさあ、無理だよねえ」

 どちらとも、捨てきれないほどに大切。でもきつと、いつかは

……

きつとレーテだつて、わかつてはいるのだ。もうどうしようもないことくらい、ずっと昔から……。出会ったときから、いつか終わりが来ることくらい、わかっていた。ただ、素直に受け止めるには自
分達の関係は深く重すぎる。

「……すみません、忘れてください。馬鹿なこと、言いました」
「……うん、忘れる」

「僕、ほんとは嫌なんです。また昔みたいにくる人でお茶会をしたい。ふざけあつて、笑っていたい。アリスに、言いましたよね。ルアも、ロキも、イオも、みんなみんな優しい。でも僕は……僕は、優しいんじゃない、弱いだけなんだ……っ」

自分を卑下しないの。半ばふざけて言うはずだったその言葉は、喉まで出かかつて……結局出なかった。

冗談を言えるならどんなによかっただろう。こんなに悲痛そうな顔を見て、ふざけたことを言えるだけの残酷さを持ち合わせていたら。

レーテは絞り出すような掠れ声で囁いた。包帯でぐるぐる巻きの胸を、苦しそうに押さえている。

痛むのは刻まれた現在の傷でも、きつと苦しいのは血塗られた過去なのだろう。

「わかってるんです。ほんとは、僕が何もかも悪いんだ、僕が……っ。貴方は悪くない……なにも、悪くないのに……なのに、今でも貴方を許すことはできないんだ……っ！」

イオは何一つ言葉を発しないまま静かに目を閉じた。

脳裏に浮かぶのは、艶やかな黒髪を背中に流した綺麗な女性。すぐ隣で今よりも少し子供っぽいレーテが幸せそうに笑っている。女性も、笑う。幸せそうに。お似合いな、二人。

次の瞬間、「幸せ」という題名の美しい絵が別のシーンに変わった。

先程の女性が、今度は淫らな笑みを浮かべて佇んでいる。先程の

清純な絵とは打って変わってものすごく露出度の高い服を着ていた。その隣にいるのは、やはり露出度の高い服を着た男　　イオ
だった。女が、イオの腕に自分の腕を絡みつける。戸惑う彼に女は
あるうことか、誘うような瞳をむけた。

それから、また別のシーンに移り変わる。

あたり一面に広がる血、血、血　　その中心に、俺と
女がいた。

女？いや、違う。それはもうすでに、肉塊と化していた。美しい
体には幾重もの傷が刻みつけられて、肌の白い部分がほとんど見え
ない。左の眼球には細身のナイフが差し込まれたまま、放置されて
いる。口は縦に大きく開いていて、断末魔の形のまま硬直していた。
女は、糸の切れた操人形マリオネットのようにだらんと、腕や足をほうり投げて
いる。

そうだ、あれが。あれが、俺の。俺の、一番残虐な殺人だった。

俺は、レーテの恋人、レイズを殺した。

「……教えて、くれませんか。なんで貴方は……レイズを、殺した
んですか」

『何故!!』

そう、あの時もこうやって聞いた。泣きそうな声で。愛おしい女
の亡骸をきつく抱きしめながら。いや、泣いていたんだっけ？泣い
て泣いて、掠れた声で、彼女の名前を繰り返して。

そして、血にまみれたイオを漆黒の瞳で睨んでいた。他の記憶は
霞んでいて曖昧だったが、あの時の瞳だけはいやに鮮明に覚えてい
る。

純粹たる、憎悪だった。疑問も恐怖も躊躇もない。友人という関

係すらもはや関係ない。

ただ、憎い。それだけがぎらつく瞳から伝わってきた。

『なんで彼女を殺したっ!!!』

「なんでって、言ったじゃん。なんかさあ、あの女気に食わなかったんだって。二人でいちゃいちゃしちゃってさ。ムカついてムカついて」

昔と同じ答えを、また言う。へらへらと笑いながら、悲しみに顔を歪めるレーテに。

だって、言えるはずない。

お前の彼女が俺に浮気をけしかけてきたって？

お前の彼女はろくでなしだったって？

さっさと忘れたほうがお前のためだって？

惚れたお前が何もかも悪いんだって？

レーテを、余計に傷つけるだけなのに。

『……別に。ちょっとウザかったから気晴らしに』

口から出た言葉は、きつとレーテを傷つけただろう。真実を話せば優しいレーテは俺を許してくれる。たとえ何年たったって、彼は

絶対に。　　だけど、その代償は彼には重すぎるんだ。それに比べて今俺がつけた傷は自分を憎むことで満たされる。

憎んでくれたっていい。それでレーテの傷が癒えるなら。嫌われたって、大丈夫。だからさ、俺のこと憎んで、嫌って……いつか、笑って？

「……………」

一言、レーテがつぶやく。泣きそうな瞳がイオを見上げていた。本当に、これだから困ってしまうな。レーテの髪をいじりながらイオはそつと苦笑した。この顔に落ちてすべて白状してしまいそうだ。

しかし言うわけにはいかないのだ。あの惨殺以来、ずっとそうしてきたんだから。

「ほんとのこと、話してください……知ってますか？　貴方、嘘つくときや誤魔化すときに必ず笑うんですよ。ちよつと目をそらして何かをいじりながら、ね」

「あれ、よくそんなの知ってるね〜」

もしかして俺に気があるの？

そう続けた冗談は乾いた笑いで返された。

「知ってますよ。貴方のことも、ルアのこと……何年間友達やってきたと思ってるんですか」

「　　でも、もう終わったんだから。頼むから、これ以上詮索しようとしなさいよ。じゃないと……ますます、深みにはまってしまうよ?」

レーテが何かを言おうとする。イオは一足先にその唇を指でふさ

いだ。

「俺はいいからさ……ルアのこと、頼むね」

そう笑って言うと、レーテは悲しそうな顔をした。悲しませたくなくて吐く嘘なのに、重ねる嘘が貴方をまた傷つけていく。遣り切れなく思ってもこうする以外道はなかった。

これが彼にとっての最善の方法。そう、信じていてもいいよね……。

「あ、でも相変わらずロキとは付き合ってくれてるみたいね、ありがとー。あいつって結構寂しがり屋だからさ、一人にしないであげて。レーテまで離れていっちゃったらあいつ泣いちゃうよー」

「……あなただって寂しがり屋でしょう……っ」

痛みで動かない右腕をなんとか動かし、レーテは唇をふさぐ指をつかんだ。そのまま痛いほど強く握る。

そう、誰もが皆同じように寂しがり屋だった。ルアも、レーテも、ロキも……そして、イオも。だからこそお互いに深く依存してしまっただと思う。

だけど……依存とは、他を縛りつけるただの鎖でしかない。それは真綿のような、心地よい鎖だった。

イオはそつとレーテの手を外し、こちらを睨みつけてくる黒い瞳を片手で隠した。

鎖は、いつかは切れる。

「なに言っちゃってんの。俺は大丈夫だって。何があっても俺にはロキがいるんだからさ」

「ロキと会ったことなんてないじゃないですかっ。それにイオもロ

キも結局は同じなんでしょっ？」

「うん、そうだよ。俺はロキだし、ロキは俺だ。自分で自分を見る
ことができないように、俺もロキを見ることはできない。……でも
いいんだよ。ロキが俺の中にいることがわかってんだからさ。寂し
くなんて、ないから」

だから安心しておやすみ。

夜明けが来たらしきと、何もかも元通りになるから。

新章がようやく開始しました…。あまりにも長い…第1章は主にルアがメインでした。

新章早々いきなりイオが出しゃばって回想しているのですが…あとしばらくこれが続くと思います…。

「レーテ」つまらない常識人、「イオ」ウザったい変態、「ヒロイン以外の女」くそくらえ」という方、どうもすみません…。たぶん次回もこの組み合わせがメインです。

アリス、全く出てきません…。ルアも出てこないし、しかもなんでロキの出番がこんなに少ない…。

にしてもイオのキャラがだんだんと狂ってきているような…。私としては好きなキャラなのですが、使い方を間違えるとんでもないことに…。

念のため言っておきますが、断じてイオはHOMOではありません。違います。違う…はず。

【chapter - 2】Crossing Knight or Knight

イオ過去編、レイズ編に入ります。視点はイオorレーテです

『レーテッ!』

真上から降り注いでくる無邪気な声にレーテは歩く足をとめた。重い買い物袋を持ったまま、安堵のため息をつく。そして満面の笑みを浮かべながら屋根を見上げた。

『いいところにいました、イオ。重くて重くて困っていたところで』

『は? ……何それ。もしかしてレーテ、俺に雑用任せようとしてる?』

『はは、雑用じゃありませんよ。善良な人助けです』

そういうのを雑用っていうの。呆れたようにイオはため息をつく。彼は緑色の屋根から軽々しい身のこなしで降り立つと、レーテの荷物の一部をかつさらうようにとった。

なんだかんだ言っつてこの猫は優しくしてくれるので助かる。レーテは満足そうに頷くと、短くお礼を言った。

『つてうわ重つ……また何買ったのこんなに……』

『お茶の在庫が切れたので……それと、添え物用のお菓子なども。』

あ、そうそう、これから一緒にお茶会

ティーパーティー

でもしませんか?』

『はあっ?! また俺になんか食わす気?! お茶ばっか飲み過ぎ
ていい加減おなかの調子が……』

『まあそう言わず。今日はロキも何も食っていませんでしたし』
『昨日俺にたらふく食わせたからだよ。あのね、いくらルアとの
付き合いが途絶えたからってルアの分を俺にまわすってというのはひ
どいでしょ』

ちょうど2カ月ほど前、女王の「アリスを迎える」という宣言が
あつて以来、ルアの顔を見ていない。

女王……いや、いまでは前女王か。あの後5日もしないうちに彼
女は崩御し、第二皇子フレイムが新たに“女王”のカードを受け継
いだ。何度か顔を合わせたことはあるが、印象に残るようなことは
何もない。

まあまだ若い女王だったからルアもきつとき使われているのだ
ろう。レーテもイオも、その時はそう軽々しく考えていたのだ。

『そうですねえ……新しいお茶会仲間を加えませんか、とても消費
しきれる量じゃありませんねえ……』

『そう分かってんなら買わないでよ。レーテ好きな子いないの?
そのこ誘えばいいじゃん』

『あはは……嫌味ですね。この間別れたばっかですよ』

『ああ、ミイコちゃん? いいじゃん、どうせあんな子好きじゃな
かったんでしょ? 上辺は優しいレーテにしてはぜんっぜん構って
なかったし』

簡単に言ってくれる。レーテは不満げにぶつぶつと呟きながらも、
内心では肯定していた。

確かに別れたばかりの彼女……ミイコは全くタイプではなかった。
カワイイもの好きで、何でもかんでもねだればもらえらると思ってい
る、単純でバカな女の子。おまけにぶりっ子で、親からは相当甘や

かざれているとみた。

レーテはそもそも「女の子」という存在に執着しない。容姿だって性格だって身分だって関係ない……と言えば聞こえはいいが、一言でいえば来るもの拒まず、去る者負わず状態なのである。

だからこそミイコが付き合ってくださいと言えば二言返事で承諾したし、別れようと持ちかけてきたら笑顔で見送ってやった。

その時に彼女が見せた悲しげな影には気づかないふりして。

『どうせ理由は「あたしだけを見てるわけじゃないと思うんだもの！ 貴方って誰にでも優しいじゃない！」とかなんとか言われて、思わず肯定しちゃった〜、とか？ あははー、ほんとくっだらないなあ』

『……………』

『あれ、図星？』

『うるさいです。一言一句真似しないで下さい』

痛いところを突かれて黙りこむと、イオは可笑しそうに笑いながらレーテの顔を覗き込んできた。

そのきれいな顔立ちが、目に入る。自分を卑下するわけではないのだが、やはりイオは自分よりもかっこいいと思う。こう、なんていうか……精神年齢的には断言できるほど自分のほうが大人だと思うのだが、彼は自分にはない大人の色気を持ち合わせている。ななにとときどき見せる子供っぽい無邪気さが乙女心を巧妙にくすぐってやまないのだろう。

カッコいいとカワイイが両立している。しかも妖艶さつきで。これを世の女子が逃すはずがない。イオの周りにはいつも女の子が侍っていた。

『……………貴方こそ、今付き合っている人はいるんですか』

『あははー、レーテ、妬いちゃったー？ かわいいー』

彼を望む女の子など腐るほどいるというのに、彼は頻繁に「この手」の冗談を使う。

レーテよりもルアのほうがからかいたやすいのか、3人で一緒にいるときはルアが「愛妻」、レーテが「愛人」という位置になっているのだが、いないときは誰彼構わずひつつく。

イオにべたべたとくつつかれて、危うい時には唇まで奪われそうな「愛妻」の様子を少しは気の毒に思っている「愛人」であったが、助けようとするれば今度は自分の身が危うくなってくるのだ。さすがに自分の身がかわいい。何より、見ているだけならこちららも面白い。

『……この頃女遊びが減ってきたと思ったら、男に興味を持ち始めたんですか？』

笑顔で問いかければ、蕩けるような甘い声で囁かれる。

『俺は基本どつちでも相手にできる自信あるんだけど？ レーテなんかも、どう？ 俺に落ちてみる気はない？』

その笑顔は本気そのものだったが、長年付き合っているルアやレーテにはわかる。

……まあ、彼のことをよく知りもしない人だったら男女問わずこの笑顔で確実に落ちるのだが。そうしたらひとしきり遊ばれて捨てられてポイだ。そんな少女たちを何人も目の当たりにしてきた。

彼にとって自分たちは、「友達」以外の何物でもない。

それ以上でも、それ以下でも。

いや、そもそも、彼の中で「友達」以上の枠はないのかもしれない

い。
彼はたぶん、本物の恋をしたことがない。故に「恋人」の枠はない。
い。

そして……彼には「家族」の枠もない。今は、もう。

「ありません。僕もその気になればお相手はできると思いますが……
貴方、かなりテクニククうまいでしょう？ 自分よりもテクニク
クうまい人と寝るのはどうも癪で仕方ないんですよね。僕、どっち
かというと快樂に溺れるよりも自分に酔わせるほうが性に合っ
てますから」

「……うっわあ……貴方、爽やかな笑顔でずいぶん生々しいこと言
うよね……」

「はは、色魔にはいい撃退法でしょう？」

少なくともルアには絶対に使えない方法だ。彼は外見や生活態度
を見てわかる通り、この手の話題には滅法弱くてよくイオにからか
われている。いやしかし、まだ恋愛経験がないのだから弱いのも当
然と言えば当然なのだ。

イオは肩をすくめてレーテから顔を離した。

「ほんと、レーテはからかいがないなあ……一回襲ったらルア
みたいに顔を赤くしたりしてくれるかなあ……。あれ可愛いんだけ
どなあ……」

「ははは、やってみたらどうです？間違はなく次の日から排気ガス
として扱いますから」

「きつつ……それだから女が逃げるんだってば」

関係ない。大体こんな手、こいつにしか使えない。

結局自分は口だけでしかないのを知っているからこそ、口だけで
愛を囁くこの男にしか通じないのだ。

『ははは、ですから、そういう貴方はどうなんですか』

『ん、今付き合ってる子？ ま、相手には不足してないけど今はだれとも付き合う気ないんだよねえ。よかったらレーテに全部譲るよ』

……街の男たちの視線が突き刺さったような。これだけの美形がルアとレーテとしか友達付き合いをしないという事実の理由を、今垣間見た気がする。

『あれ、でも変ですね。ロキはともかく、イオだったら見境なく女で遊びそうなんですけど……』

『……何となく貴方の俺に対する認識がわかったよ。なんでロキは否定するのに俺は否定しないわけー？』

『……理由に覚えがないなら、貴方は相当の馬鹿だということまで再認識してもいいですね？』

きっと本人もふざけていたのだろう、「ひどいな」とかなんとか呟きながらもシニカルな笑みを絶やさなかった。

しかしふとした時にその瞳が沈む。彼の口がわずかに開いたのを見計らって、レーテはただ黙って耳を傾けた。

『この間、ちょっとうっかりして女と朝まで付き合っちゃったんだ』

声が、低い。こういうときはたいがい機嫌が悪いんだっけ？

ちらりとイオのほうを盗み見ると、彼は荷物のないほうの手で気だるげに髪をかきあげていた。その妖艶なしぐさに思わず顔が赤くなる。きつと自分が同じことをやってもこううまくは決まらないのだろう。

『あつちがしつこくてさあ……ほんと、参った参った。それでややこしいことになってさ、彼女は事情知らなかったから、気づけば黒髪の仏頂面が隣で寝てたわけ』

『……それで、後でさんざんロキに悪口を叩かれたと?』

『ううん。あいつ、いろいろと俺に文句言う……ま、独り言なんだろうけど、文句言うけどさ、そういうのに関しては全くと言っていいほど言わないんだよ。まずかったのは女の発言。あいつ、ロキに面と向かってなんていったと思う?』

一瞬だけ、その金色の瞳に暗い怒りが宿った。人はこれを、憎しみと呼ぶのだろう。

レーテはひそかにその目が向けられたであろう女性に手を合わせた。彼の怒りに触れ……おそらく今はもうこの世にいないであろう、愚かで哀れな女性に。

『イオほど好みじゃないけど、あんたでも構わないわ……だってさ。光荣すぎて反吐が出る』

イオが吐き捨てるように言う。本当に気分が悪そうだ。

それもそうか。レーテはイオの言葉をかみしめながらぼんやりと思っただ。

もともとロキとイオは人格が正反対と言っているほど違う。それに伴って彼らへ向けられる好意も逆転していた。イオを好きな女だったらロキを嫌う、ロキを好きな女だったらイオを嫌う。それがいつもの彼らなのだ。

それなのに今度は、どっちでも構わないときた。その言葉が意味するのは、どちらにも愛着などないということ。

『ま、たまにあるんだけどね。俺やロキの体だけ狙う女。でも今回のはあからさまでものすごくムカついた』

『……で、殺したんですか』
『あは、久しぶりだったからなかなかいい運動にもなったよ』

こともなげに肯定する彼を見て、レーテは呆れ半分のため息をついた。

イオとロキの共通点は限りなく少ない。そのうちの一つ……どちららも、血を見るのが好きだった。

ルアも自分の敵には躊躇しないが、どうもレーテにはその感覚がつかめない。その……なんというか、肉がはじけるのを見るのとか、もしくは肉に突きささる感触とか、どこが面白いのだ。むしろ気持ち悪い。そう面と向かって言ってやりたい、しかし実際イオとロキの殺人現場を見ていると実に生き生きとナイフを使うので、毎回言うことができなかつた。

『……ほどほどにしてくださいよ』

『ん〜、でも当然の代償だと思うけど。あの後しばらくロキ落ち込んでたし。あいつって表情に出ない分独り言がすごいからさ。』

俺、ロキだけは傷ついてほしくないんだよなあ』

ぼつりと、聞こえないくらい小さくつぶやく。そのつぶやきは半ばため息に埋もれていたが、レーテは何とか聞き取ると、物思いに沈んだイオの顔を見上げた。

イオがロキのことを大切にしていることは知っている。夜の行動が眠気で阻まれるというのに、時折イオはロキの意識の下で起きていた。特にロキが落ち込んでいたり、様子が変わった時は。彼は彼なりに、自分の半身のことが心配なのだと思う。

『だから恋愛事情なんてメチャクチャ複雑。今はいいけどさ、もし俺とロキが同じ女好きになっちゃったらどうしょ。ロキって堅物だから自然と俺に譲る形になるんだろうけど……やっぱりそういうのヤ

「だなあ……」

「ま、それはないでしょう。貴方とロキって女の趣味が全然違うじゃないですか」

この時二人は互いに笑い飛ばしていたが、彼らは知らない。いや、失念していたのだ。

この世界の住民が、無条件で惹かれる唯一の存在がいるということ。

「別れたばかりということ、お互いそろそろ女遊びから手を引きませんか？」

「えー、やだよ、俺。俺は振った、貴方は振られた。全然意味合いが違うじゃん」

おかしそくに笑うイオにムカついて、レーテはささやかな悪戯を仕掛けようとした。素早く彼の足の前に自分の足を引っ掛ける。しかし足払いはひらりとかわされてしまった。人間の限界点を超える跳躍力を持つ彼は、軽々と1メートルの高さを跳んでいる。

あはは、とイオの笑い声が少し上から聞こえる。レーテはさすが空中に跳ぶ彼の腹に回し蹴りを入れた。

「わっ……」

それもまたうまくかわしたイオだったが、当然姿勢は不安定になり、バランスを崩す。

そのチャンスを逃すほど甘いレーテではなかった。

「もらいました」

にやりと笑いながら、拳を構えてそれを鳩尾に食らわせようとする。理不尽なほど力を込めたのは、やはり日頃の怒りという奴であるろう。

しかしあわてたイオの顔は、何か悪だくみを思いついた子供のそれに代わっていた。細い身を空中でそらせ、手に持ったそれを前に持ってくる。

『あは、残念』

ドゴツ

拳は入った。確かに入った……のだが。入った場所が問題であった。握った拳はイオの鳩尾でなく、イオが持っていた買い物袋に的中していた。

かなり力一杯殴ったので、当然のごとくその中身は辺りへばらまかれる。

『……………あ』

『あはは、俺に勝とうなんて無謀無謀』

バラバラと転がったお茶、お菓子を呆然と眺めながら、レーテは虚しくため息をついた。イオを攻め立てようにも明らかに自分にも非がある。

そもそもあんな不意打ちぐらいで彼を負かそうなんて考え自体がダメだったのだ。……………今度はもっとうまくやろう。

『……………75戦0勝……………』

自分で言っていてさらに虚しくなり、レーテは再びため息をつきながら落ちたものを拾おうとした。

その時。

白い手が、自分よりも先にお茶のパックを包み込んだ。

『えっと……あの、これ』

少し遠慮がちな声が聞こえ、レーテはあわてて笑顔の仮面を張り付けた。戦闘シーンを見られてしまったからもうすでに遅いかもしれないが、とりあえず自分は怖い人間でないことをどんな人にもアピールしておきたい。

とびつきり優しそうな笑顔を作り終えたレーテは落とし物を拾ってくれた親切な人のほうに向き直った。

『ありがとうござい』

ます。最後までは言えなかった。頭の中で、何かが落ちる音がする。カタン、と。かたくて小さい何かが。

目の前にいるのは、白が似合いそうな美しい令嬢。ふわりと、花のような笑顔で微笑みかけてくる。

ドクンと、胸の最奥で何かが大きくなった。

ああ、そうか。これが、恋に落ちる音なんだ。

綺麗な人だなと、ただそれだけを思った。

艶やかな黒い髪、手触りの良さそうな白い肌。ふわりと笑って細める瞳は深紅に輝いている。背は少し低い、ほっそりとした肢体は均整がきちんと取れていた。美形であるルアやレーテ、………ついでに言つと鏡の中の自分を見慣れているのにもかかわらず、かなりの美人だと思う。

しかし、本当にそれ以上の特別な感情は持たなかった。

(ま、確実に俺の好みじゃないしなあ)

イオはじろじろと無遠慮にその女を観察しながらこっそりため息をついた。

確かに食指の範囲内ではある。どう考えても彼女は20代前半であるし、育ても良さそうだし、目を見張るほどの美人だし………いいような気もするのだが。

しかし、付き合いたいかと聞かれれば首を振るだろう。彼女は………そう、自分に対してあまりにも大人しすぎる。淑女然とした仕草はあまりにも清らか過ぎて、自分のように汚れきつた男を遠ざけてしまうのだ。

『あの………私、何か変なことしてますか？』

イオの視線に気づいたのか、戸惑ったような笑いを浮かべてその女………レイズは首を傾げた。

その拍子に彼女が手にするカップの紅茶に波紋が生じる。

今、イオはレーテとレイズと一緒にお茶会を開いてい

た。

その後レーテがお礼にということでは、レイズをお茶会に誘ったのだが、結局巻き添えとなって紅茶を飲んでいる自分にいい加減腹が立つ。この頃体脂肪率が急増してきたのを忘れたか。

しかし初対面の女に不機嫌な顔を向けるわけにもいかず、イオは無意識に悪戯っぽい笑みをその顔にたたえていた。

『うっん、ただ、可愛いなって思ってた』

そういう声が明らかにナンパ時のものになってしまつのはいつもの癖だろう。こればかりは直しようがないと思いつながらチラリと親友のほうを向くと、思ったとおりレーテは不愉快そうに眉をひそめていた。

イオが彼女を“好み”から外した決定的な理由。

彼には、親友が惚れた女を横取りする趣味はなかった。

(ま、レーテの好みにはどんぴしゃりなんだろうね、この子おしとやかそうだし)

『えっ……あ、あの……』

言葉を取り違えた彼女は顔を朱に染めながらうつむく。その様子があまりにも可愛らしくて、イオはもっと彼女をいじめてやりたくなつた。

恥ずかしがる顔とか、泣く顔とかを見てみたい。そんな嗜虐心がわきあがってきたものの、やはりそれ以上はいかない。

イオは自分が彼女に恋をしているわけではないと再確認し、口の端で笑う。

彼女の隣に立つのはレーテでいい。自分ではお互いに役不足だ。

『あは、冗談冗談。本気にしないでよ』

念のため彼女が「その気」にならないよう、シニカルな笑顔で笑い飛ばす。

彼女は一瞬落胆交じりのため息をつき、すぐに安心したかのような笑顔を張り付けた。まだ赤い顔を押さえて、怒ったように頬を膨らませる。

『変なこと言わないで下さいよお。イオさんって、意地悪なんです
ね』

そのいささかわざとらしい仕草にイオは内心げっそりした。

どこからどう見ても媚を売っているようにしか見えない。こんな清純そうな乙女でも、やはり男には媚びへつらうのか。

(清純、ではあるんだよな、一応……。レーテがこの子と付き合っ
たとして……。俺、仲良くやれるかな……)

とりあえず嫌われないくらいには振るまっておかねば。もし彼女が自分のことを悪く言ったりしたら、後が怖い。

そんなことを心の中で呟いていると、横から殺気だった声が思考を遮った。

『この男は意地悪という言葉では語り尽くせません。ド変態なんで
す』

『ド変態はないでしょ？ なんていきなり変態からド変態に昇格す
るのね』

『日ごろの所作に上乘せして今のセリフです。本当にこの男は女性

に見境ありませんからね、レイズさんも気を付けてください』

そう言っただけでイオの首根っこをつかみ、さりげなくレイズの席から離す。彼につかまれたイオは呆れながらぼそっと、レーテにぎりぎり聞こえるくらいのポリウーームで彼に耳打ちした。

『どうせなら彼女を引き寄せて守ってやればいいのに。そんなに俺が好きなの？』

『……何なら今ここで勝負の続きをしましょうか。今だったら気合いであばら骨3本はいけるような気がします』

『あは、怖い。レーテの本気見てみたい気がするけど、残念、そろそろタイムリミット』

ギリリとレーテの瞳が妖しく光ったのを見て満足そうに笑うと、イオはするりとその腕をくぐりぬけて東の空に目を向けた。

黄色の絵の具が浸食していくように、空が赤らんできている。ほんと、夏は夜が短いからつまらない。

意識の奥で、もう一人の自分が微睡みから醒めかけている。その代償というかのように、視界が黒くかすんできた。

2つの意識は両立しえない。どちらかが覚醒するのなら、もう一方は眠りにつかなければ。

『あー、俺今日は寝るねー？俺がいなくてもちやんと今日中に射止めとくんだよー？』

『ちよ、こらバカ猫！こんなところで……っ』

レーテの肩にもたれかかって眠りを待っていると、彼のあわてたような抗議の声が聞こえた。そんなことを言われても、もう体は動かない。

瞼を閉じて、彼の声に耳をすませる。レーテの声は、落ち着いていて好きだ。どんな状況でも自分を安心させてくれる。

(本人が平和バカっていうのもあるけど……)

平和であればいいと、今は切に思う。

そんなことをふと思うようになったのは、やはりこの頃ルアに会っていない不安からだろうか。ルアが元気でやっていればいい。このまま、なにもなく平和であればいい。

レーテは好きな人と付き合って、ルアは仕事が一段落終えて、自分はまだなんだかんだいつてお茶会に参加して……。

そんなささやかな幸せが続けばいい。それ以上は望まない。自分は割と強欲な方だが、それと同時に強欲が身を滅ぼすことも熟知していた。

必要以上のことなんて、要らない。金も名声もと見も女も“アリス”も。

ただ、大切に思う人が傍にいてくれるだけでいい。

イオは薄く微笑みながら、襲いくる闇の波に意識を委ねた。

最初の歯車は、ここから狂い始める。

レーテは自分の腕の中で力を抜いていくイオを見て、激しく揺さぶり起こしてやりたい衝動に駆られた。まあそんなことをしても一旦こうなったら彼は決して起きないのだが。

しかし、このどうしようもない苛立ちはどこへ向ければいい？

（あれだけひっかきまわしといて結局これですか……この駄猫はまったく……）

イオの身勝手さには時々本気で嫌気がさす。しかも殴ってやりたいと切望する時こそ、イオは眠りにつくのだから余計腹立たしかった。

太陽が完全に姿を見せ、腕の中のチェシヤ猫も雰囲気を一変させる。

『 まったく……ほら、ロキ、起きてください』

『 う……あー、も……少し……』

レーテの膝の上で寝がえりを打つ彼の髪は、日光を浴びて目に痛いピンクから艶やかな黒へと変化していた。寝息とともにびくびく動く猫耳も、垂れさがるようにして動かない尻尾も、黒い。

イオが、眠りに落ちたのだ。

レーテはなかなか起きようとしないうロキの髪をなでながらため息

をつく。

イオとロキ。“チエシヤ猫”としての本性はイオ、イオがロキのことを“影”と称していることを、レーテも知っていた。正式に“チエシヤ猫”のカードを引き継いだのは何故かイオの方なのだ。

そのせいか、イオが体の主導権を握る機会が多い。

例えば昼、イオはしようと思えば意識を保ったままその光景を見ることができなのだ。その時には精神もロキと共有するらしく、ロキの考えてくることが直接わかるのだとイオがぼやいていたが。

イオはやたらロキのことを「素直になれない奴」と称するのだが、確かに精神を共有するイオが言うのだから信憑性はある。もともとロキは考えていることがすべてイオに流れているなんてことは露ほども知らないのだが。

そしてこの状況。ロキは、寝起きが悪い。ひどい時は昏過ぎになるまでずっとベッドから出てこないのだ。毎朝5時に起きてラジオ体操をしているレーテから見れば奇妙な光景である。

レーテは仕方なく、彼をそのまま眠らせた。

いつも憎まれ口ばかり叩き、可愛げのないロキであったが、寝顔だけは天使のように可愛らしいのだ。眉間に寄っているしわもない人を馬鹿にしたようなシニカルな笑いもない。

寝ている

時だけは、イオもロキも同じ、ごく普通の青年に見える。

『あ、あの……イオさん、大丈夫ですか……？』

『え　あ、あぁっ、す、すみません、説明がまだでした……
驚きましたよね？』

前から心配そうな声上がり、レーテはようやく自分の立場を思い出し、羞恥で顔を赤らめた。

そうだ、自分は半ば無理やり好きな人をこのお茶会に誘っていたんじゃないか。それをロキに気を取られ忘れてしまうなんて……なんたる失態。

驚いたかと質問したが、答えは聞くまでもない。彼女は可哀想に深紅の瞳を限界まで見開いて、心地よさげな寝息をたてて眠るロキを凝視していた。その顔ははた目からわかるほどに青白い。

無理もない。なにしろ何の予兆もなく目の前で人が倒れ、さらにその色が変わっていったのだから。

『えっと……彼はなんというか、二重人格なんです。日が沈むと同時に先程のおちゃらけたバカ猫、イオになり、夜が明けるとイオとは打って変わって、黒猫のロキになるんです……ってわかりませんよね』

一応しどろもどろに説明を試みるが、身振り手振りを入れてもレイズは首をかしげたままだ。レーテはあきらめたように溜息をついた。まったく、今日はため息がやけに多い。

『すみません、僕もなんて説明したらいいのか……』

『い、いえ、大体わかりましたから……あの、イオさんっていうのは、もしかして“カードもち”なんですか？』

突然話が飛び、レーテは驚いて彼女をまじまじと見つめた。

獣耳を持つ獣人は必ずと言っていいほど“カードもち”なのである。それでなくとも“カードもち”はそれなりの権力を持っていて、人並み以上の存在感を持つているはずなのだが……。

瞳は聡明そうな光を宿しているのだが……もしかして、少し鈍感なのだろうか。レーテはぼんやりとそんなことを考えながら、頷いた。

『はい。イオは“チェシャ猫”で、僕は“帽子屋”のカードを持っています』

『そ、そうなんですか……。あ、あの、私も実は“伯爵夫人”なんです。お、お仲間ですね』

興奮状態で顔を紅潮させ、レイズは息堰切っていった。レーテはその様子を微笑ましく見守りながら、頭のどこかで納得していた。

確かに彼女は“一般人”とは少し違う雰囲気をもとっている。家も裕福そうだし……。何より、その美しさが彼女自身の存在を際立たせていた。

“カードもち”は総じて全員目立つという噂はどうやら本当だったららしい。レーテは苦笑しながら肩を震わせた。

『はい、何となくですが、そんな感じがしました。“伯爵夫人”という……。確か、“帽子屋”と仲が良い役職ですよ？ もしかしたら、こうして出逢ったのも偶然じゃないのかもしれないね』

ふざけた調子で言ってみると、彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめうつむいた。その様子があまりにも可愛らしくて、レーテは一瞬息ができなくなる。

……。落ち着け、落ち着け。こんなところで焦っても何も手に入らない。

『そ、そんなことないですよ……。でも、お会いできてとてもうれしいです。私、今まで同じ“カードもち”にあったことがなくて……。』
『そうなんですか？ なら、今度“白ウサギ”のルアにも紹介しましょう』

『まあ、“白ウサギ”さんともお知合いなんですか？ 是非お願いします』

やんわりと提案すると、レイズは嬉しそうになつた。
しばらく世間話をした後、お茶会はお開きとなつた。今度のお茶
会の予定を立てて。

それから4カ月ほど経つて。

レーテの必死の努力も相まってめでたくレーテとレイズは恋人同
士となつた。

誰もが二人の幸せを祝っていた。お茶会中何度もはち合わせる結
果となつたイオも、まだ数回ほどしかあつたことのないロキヤルア
も、レーテの家の数少ない使用人たちにさえも、彼らは祝福された。
そう、めでたしめでたしだ。
なのに。

均衡は、あまりにもあつけなく崩れた。

イオと、ルアと、レーテ。三人の関係を保てていれば、それでよかった。

それでよかったのに。

レーテが、レイズを新たに欲した。

審判の天秤は、無罪から有罪へと振れる。

強欲の果てに待つのは

……

どこかで、遠雷がなる。

『えーっ、今日レーテお出かけすんの？ どこに？』

イオはソファアの上に横たわりながら気だるげにレーテのほうを見た。その髪は雨でしっとり濡れていて、正直寒気がする。

質問をさらりと無視してコートを羽織り始めたレーテにさらに追求しようとする、鼻のあたりがむずむずして小さくしゃみが出た。

レーテは呆れたように溜息をつく、手近にあったタオルを取り上げてイオの頭にかぶせ、その上から優しく髪をなでた。

『まったく……大丈夫ですか？ 顔赤いですよ』

『あれ、俺誰に恋しちゃったんだ？』

『バカ猫』

風邪でも引いたんじゃないですか。そう聞く彼はなんとなく心配そうだ。

確かに、言われてみれば先程から顔が熱い。激しい頭痛も定期的に襲う。もともと体温は高いほうだし、風邪を引いたってどうってことないが、今回はマジでやばいかもしれない。

『うー……風邪え？ だって俺医者だよー、ないない、大丈夫だっ

て」

「本当にバカですね。医者だろうが変態だろうが風邪はひきます」
「えー、でもバカは風邪をひかないってルアがこの前言ってたよー

……」

「僕はそうは思いませんね。むしろバカだからこそ風邪をひくと思います。バカじゃなかったらわざわざ雨の日に友達のお茶会を妨害しになんかきません」

「……暗に俺のことバカって言うてるよね」

まばゆいばかりの笑顔でレーテは「まさか」と否定するが、ものすごく嘘っぽい。

ほんとは常識人なんかじゃなくてただのドSなんじゃないか？

イオはレーテに見えないように溜息をついた。その際にレイズと目が合い、思わずへらつと愛想笑いをする。レイズもそれに気がつく
とちよつとだけ頬を染めて笑い返した。

思ったより悪い娘ではなかったみたいだ。少なくとも初対面の印象よりもずつといい。

「ちよつと、なにレイズに色目使ってますか」

「あははー、嫉妬したー。ねえレイズ、こんなちっちゃい男捨てて俺に乗りかえない？俺今フリーなんだ」

むつと眉を寄せるレーテの反応があまりに可笑しくて、イオは冗談を続ける。誘われているレイズも本気でないと薄々気づいているのか、笑って首を振った。

レーテは一瞬ほつと安心したような顔を見せると、すぐに不機嫌そうな顔に戻る。

「勝手にレイズを誘惑するなど言っているでしょう。まったく、これだからバカ猫は」

そういう声はわずかに自慢げだ。恋人が間髪いれずにイオのような美形を振ったことが誇らしいのだろう。

(ほんと、アツアツだよなあ…)

そんな彼がほんの少しだけうらやましく感じる。

どんなに身体を重ねようとも、所詮は表面だけで終わってしまう数多の女関係。心髄のその先までのめり込めるような恋がしてみたい。

いや、違うな。イオは少し考えて自嘲した。自分が欲しているのは誰かに溺れる恋心じゃない。逆だ。自分は、誰かに深く溺れてほしい。自分がいないほどまでに狂って依存して 愛してほしい。そうしたら、甘美とすら思えるほどの絶望に突き落としてやるから。

ひどく残酷なことを考えながらくつくつと笑う彼の横顔を、レーテは呆れたように一瞥した。新調した厚手のコートに袖を通す。

『とにかく、今日はここに泊っていつてください。いいですか、間違っても僕のことを追跡しようなんて気は起こさないでくださいね。病人は病人らしく、大人しく寝てなさい』

病人、か。口の中で小さくつぶやき、言いなれない滑稽おかしな響きにイオは忍ぶような笑いを零した。

確かに体がだるいかもしれない。ソファーに沈む体は今夜はとも言うつことを聞いてくれなさそうだ。レーテの言う通り、下手に動かないほうが賢明だろう。

『ねえ、じゃあせめて何しに行くかくらい教えてよ。大丈夫だって、

追跡なんかしないから』

『 ルアに、呼び出されてるんです』

静かな声で告げられた一言に、イオは勢いよく顔を上げる。とたんに頭痛が襲い、やむなくクッションに顔をうずめなおした。

うらみがましくレーテをにらみつけるが、レーテはいけしゃあしやあと帽子をかぶって身支度を整えている。イオの反応は想定済みだったようだ。

『 ……なんでレーテだけ』

『 さあ？』

『 俺誘われてないし』

『 ま、夕食ディナーというほどでもありませんから。でも今夜はこの間の取引の件で家を空けると思っています。レイズ、イオの看病を任せても大丈夫ですか？』

『 はい、これでも、そういうことに関しては結構知識を持ってるんですよ』

レイズが嬉しそうに、笑う。レーテも優しげな笑顔で「ありがとう」と返した。

(うーん、絵になる。……じゃなくて)

『 ちょっと、二人して俺の言うことは無視？』

『 だから知らないって言うてるでしょうが。ルアの考えてることなんか僕にわかるわけないでしょうが』

『 でも何で俺だけー？ すっごい除け者気分』

『 あーもう煩いなあ……。とにかく、僕は行きますからね、大人しく寝てください』

この薄情者。バカ。生え際後退してんよ。イオは思いつく限りの毒を懸命にはいたが、レーテはひらりと片手を振っただけで振り向いてはくれなかった。

外の闇に、その背中が呑み込まれていく。いつもだったらスキップしながらその後をついていくのに 体が、動かない。

イオは、言いようのない不安に襲われながら彼が消えていった方を数分睨みつけていた。

雨だからか、今日はやけに闇が深い。

どうしてだろう。

何故、こんなに不安なのだろう

……

『うー…体 अच्छی…』

イオは案内された寢室のベッドで寝がえりをうつ。レーテが去ってから1時間ほど経つが、一向に熱はひいてくれなかった。

頭の中でガンガンと鐘がうるさく響き続ける。こんな時ルアがいてくれたら治療してもらえるのに……。彼は城に使える者として医療の心得も多少あるのだ。自分自身が医者資格を持っていたとしても、身体が動かないのなら全く意味がない。

『あの……水、いりませんか？ 一応薬もあるんですけど』

レイズがイオの顔を心配そうに覗き込んでくる……。ような気がした。実際には視界が歪んで、彼女の表情はおろか誰なのかさえも定かにならない。

『あー、ありがとう……』

小さく笑う。基本的にどんな時でも女性には優しくだ。あくまで女性限定だが。

イオは渡された水を飲もうと体を起こそうとした。そんなイオを意外に強い力で制して、レイズは笑う。

その瞳に妖しい光が宿っていたのをこの時気づいていたら、何かが変わっていただろうか。

『起きないで大丈夫です。私が飲ませますから』

『え……？』

どういう意味かを問いたただす前にレイズが勢いよく水と薬を啣あおる。そして間髪いれずにイオの唇に自分のそれを重ねた。

驚きで瞳を見開くイオの唇をこじ開けて、口の中のものを注ぎ込む。口の端から飲みきれなかった水滴と唾液が垂れてしまう。のどがなつて、イオはすべてのものを飲み干した。

まだ名残を惜しむように小さなキスを続けるレイズの肩を押し返して、かすかに薬の苦い味が残る唇をイオは素早く離す。

目の前の淫らに濡れた瞳に思わず身の毛がよだつた。イオは困惑の色を知られないように、お得意のシニカルな笑みを浮かべる。

『淫乱だね。俺に欲情してるの？』

こういえば、彼女はきつと顔を染めて謝るだろう。そういう子だ。大丈夫、これはただの事故だ……。この子は淫乱な子じゃない。レーテに釣り合うと自分が認めたほどの、清純な子。

そう信じていたのに、レイズの口から出てきた一言は全く別のものであった。

『欲情してるのは、貴方のほうじゃなくって？』

え　　？

疑問を口にする暇もなかった。言葉の意味を理解すると同時に、再び唇がふさがれる。

必死で押し返そうとするが、体に力が入らなかった。それどころか、侵入してくる舌が口内をかき乱すたびに体がいつそう熱くなっていく。

イオはわけのわからないままレイズの舌に弄ばれていた。くちゅりと淫乱な水音がわずかに残っている理性を吹き飛ばしにかかる。イオは何とか理性を保とうと、熱で浮かされる意識をつなぎとめるのに躍起になった。

『んっ…いやあ…あ…』

キスの合間から聞こえる自分の声に恥ずかしくて死にたくなる。いや、それ以上にこの淫乱な女を殺したくなる。

ふざけんな、なんだよこの声。自分が落とした女たちと同じ言葉、同じ声。それを今の自分が発している、その事実にとらえられない羞恥心がこみ上げてきた。

(くっそ……まさか、これ……)

アツい、熱い、気持ちイイ、アツい、気持ちイイ、気持ちイイ……。
頭の中でわけのわからないスパイラルが生じる。おかしい、異常だった。

綺麗だと思っけていても、自分が彼女を抱きたいなんて思ったこと一度としてなかったのに。なのに今はこんなにも彼女に翻弄されている。

『あら、意外と可愛い声を上げるのね』

長く濃厚なキスが終わって、レイズがイオの腕を押しつけながら妖艶に笑った。わざわざ押さえつけなくても、抵抗できる余力は残

っていない。

イオはようやくはつきりしてきた意識にほっと息をついた。酸欠になるところだった。

見上げてくる姿勢にあるレイズを憎々しげに睨みつける。相変わらず火照った身体の熱はひかないし、頭痛もやまないし、視界は歪んだままだ。

普段だったら絶対にしない油断に付け込まれた。風邪さえ引いてなければ、こんな女一匹……。

『何を飲ませたの？』

『私にした欲情をすべて薬のせいにするつもりかしら』

『悪いけど、レーテの所有物もちものに手を出すつもりはないから。媚薬を入れたとしても、俺は貴女を抱かないよ』

『あら、あんなに感じといてその言葉はないんじゃない？』

犬のように媚びるその目に、イオは吐き気に似た嫌悪感を感じる。

迂闊だった。初対面でこの女は同じような笑みを向けてきたではないか。純情可憐？清楚？
すべては、レーテのために用意された仮面だっただけ。

中身は、淫らな売女でしかなかった。

『ふふ、そう、驚いた？ ごめんなさいね、でもお互い気持ち良くなるならいいじゃない』

そう言っつて、イオのシャツをめくり上げようとする。イオは最後の力を振り絞ってその腕から逃れ出た。今まで抵抗していなかったせいか、油断していたレイズの拘束は思ったより緩かった。

体がベッドから音をたてて落ちる。受け身を取り、イオは何とか臨戦態勢を持ち直した。おぼつかない足取りで、立ち上がる。

『ねえ、じゃあなんでレーテに近づいたの？ 好きだったんじゃないの？』

(クソ……目が見えねえ……ヤバいね)

不敵に笑いながらも、内心はひどく焦っていた。手を後ろにやり、こっそりと暗器を探す。頭がぼーっとしてちゃんと場所を思い出せなかったが、確かいつも常備しているはずだ。レイズの手が伸びるまでに何とか取り出さなければ。

今度触られたら 媚薬を入れられたこの体は間違いなく 理性を失ってしまう。

『好き？ やめてよね、馬鹿馬鹿しい。あんな地味な男、私の好みじゃないわ。ただね、見てよこの家！ 私の伯爵家だってこんなに大きくないわ！ あの男と結婚すればこの家も、この財産も、お金も、全部私のものってことでしょ？ あら、もしかして少し分けてほしいの？ いいわよ、貴方と結婚はしないけど、愛人にならしてあげる。少しくらい分けてあげるわよ』

『なるほど』

興奮してぺらぺらと話すレイズとは裏腹に、イオは体が冷めていくのを感じていた。理性よりも、媚薬よりも、凌駕する何かが自分の中で燃え上がる。

指の先が硬い何かに当たる。ナイフを探り当てたのだ。イオはその冷たい刀身に指を這わせ、うっとり眼を細めた。

この女の血は、鮮やかな赤なんだろうな……

彼女の瞳と同じ色。見てみたい。床にばらまきたい。浴びたい。この下衆な女の血を。殺すのは下衆であればあるほどいい。馬糞が

草木の大切な食料になるように、不味く汚い血が自分の餌になる。彼の中では理性よりも媚薬よりも、血を見たいという衝動がすべてを凌いだ。

(レーテが悲しむんだらうな……でも……レーテをこんな女の餌食にさせたくないよな)

『……ねえ、最後に質問。これに答えてくれたらいくらでも乱してくれていいからさ。俺とロキ、どっちが好き?』

レーテが悲しむ。その事実にならずかに意思が揺れた。だから、最後に小さなチャンスを与えてやった。小さな、小さな、チャンス。

正しい答えは、たった一つ……

いくらでも乱していいという言葉にレイズの顔が輝いた。身を乗り出して勢いよく答える。

一番の“誤答”を。

『どっちでも構わないわ。イオのほうが好きだけどね』

キラリと。何かきれいなものが嗤うレイズの首に刺さった。

【Chapter 2】Crossing Knight or Knight

一部残酷な描写があります。

強い雨が窓を叩きつけていた。光が瞬間的に暗い喫茶店を照らし出し、次いで轟音が耳を打った。

街並みには誰もいない。いや、いなくなったとでも言うべきか。突然の夕立に通行人は逃げるようにしてあたりの店に身を潜めたのだった。

轟音のあとに、静寂が店内を襲う。客は黒髪の男一人きり。ガラんとした店の従業員がひそひそと彼の噂をし始めた。

『ちよつと彼かつこよくない？』

『うつそすつごい美形』

『バッカあの人“カードもち”じゃん。みてよあの白い耳。きつと

“白ウサギ”様だつて』

『えーつまジ！？ うつわショック、あたしたちなんか相手になんないじゃん』

『まあ所詮“一般人”だしねえ。下流階級の出じゃお目にかかれるだけでありがたいっていうわけよ』

自分勝手に話す彼女たちをさっぱり無視して、黒髪の男　　ル
アは物思いにふける。

チリン

小さく音が鳴り、従業員の「いらっしやいませ」という声が店内を満たした。

次いで小さな歓声が上がる。

(来たな……)

ルアは顔を上げて胸に下げている懐中時計を見た。約束した時間よりもわずかに早い。

『お待たせしました。……お久しぶりです、ルア』

入ってきた客、レーテは黒い帽子を脱ぐと、コートについたわずかな雨粒を払い落とした。

早速注文を訊きにきた店員に笑顔で「紅茶を1つ」と答える。その女店員は熱に浮かされたような足取りのまま厨房へ入っていた。

『まったく……今日は厄日です』

物憂げに前髪をかきあげると、出てきた紅茶を一口含む。あまり美味しくなかったのか、眉をひそめたきりそれ以上口にしようとはしなかった。昔から紅茶にだけはうるさい男だ。

『レイズを誘ってお茶会をしたのにいきなりイオが乱入してくるし、結局この雨で中止だし、その上イオに何で俺だけルアに誘われなかったんだって問いつめられたんですよ？ まったく……なだめるのが大変でした』

そう話すレーテの顔が目に見えて不機嫌なので、思わずルアは小さく笑う。

『そつえばレーテの彼女……レイズさんだったけ？ どう、順調？』

『ええ、これ以上ないほどに』

レイズの話題を出した途端にレーテの顔がほころんだ。まったく、わかりやすいやつめ。

しかしその幸せそうな笑顔に、ルアは自分の顔も緩くなっていくのを感じる。同時に、これから自分がやろうとしていることへの罪悪感が胸をさす。

『結婚の約束はしたの？』

『もちろん、今は日取りを決めてるところなんです』

『もう？ 早いなあ……幸せにね、レーテ』

レーテは嬉しそうに頷いた。

そう、幸せであればいい。カードにもルールにも……アリスにも囚われることなく、愛しい人とただ自由に。自分の分まで、レーテには幸せであってほしい。それが例え、ただ一時であっても。

『そうそう、近々またみんなでお茶会にしませんか？ 今度はレイズも入れて。イオがものすごく貴方にあいたいらしくて、駄々をこねるんですよ。職務に忙しいでしょうけど、開いてる日を教えてくれませんか？』

『いや、僕はもう“チェシヤ猫”には会えない。それだけじゃない、“帽子屋”に会うのもこれで最後だ』

シン……

静寂が耳に痛い。なんでこんな時に限って従業員たちはおしゃべりをやめて仕事に励んでしまうんだ。ルアは的外れな苛立ちを胸に

抱え、小さく舌打ちをした。

レーテは何も言わなかった。それどころか、ピクリとも動こうとしない。ただただ呆然とした漆黒の瞳でルアのほうを凝視するだけだ。

ルアはいたたまれなくなって自分のグラスに視線を落とす。グラスの底には氷が残っていて、小さな水たまりをいくつも作っていた。

僕らのわだかまりも、いつかは解けるのだろうか……

コロンと氷をころがして、中の水滴を口に含んだ。少量の冷たい液体が喉の奥を刺す。それがまた自分を攻め立てているようで、ルアは泣きたい衝動に駆られた。

『……僕は城側の“白ウサギ”だよ。わかってるんでしょ？ “帽子屋”は城の対抗勢力、そして“チェシャ猫”は城の反逆者』
『言わないでください』

レーテが耳をふさごうとのろのろ両手を上げる。ルアはその手首を素早くつかんだ。白い手袋越しに触れる体温が、懐かしい。脅えた黒い瞳と、目があった。いつも笑顔なくせに腹黒なレーテがこんな目をするなんて。

『逃げないで、ちゃんと聞くんだ』
『貴方は友よりも自分の“仕事”を取るんですか』
『そんなことは何度だって考えた』
『考えて考えて、この結果？』

泣きそうな顔で、レーテは笑う。その痛い笑顔に、ルアはまた眼をそらしたくなった。

逃げてるのは、自分のほうだ。

逃げて逃げて、無駄だとわかっているのに、もがいている。

『そうだ。レーテ、これは僕らの宿命さだめなんだよ。逃げられない……僕だって逃げられないんだ』

『そんな戯言いいわげ聞きたくない!!』

カチャツ…

震える叫びが店内を打つ。それと同時に、レーテの腕をつかむ手を振りほどかれた。

素早くレーテは腰から拳銃を取り出す。その黒い銃身を、ルアはどこか落ち着いた眼差しで見ていた。

突然の乱闘騒ぎに、店全体が緊張感をもつ。従業員が固唾をのんで見守る中、ルアは長々とため息をついた。

『貴方に、撃てるの？ 僕を』

正直、レーテは射撃が苦手だ。それは昔彼に射撃を教えたことのあるルアだからこそ、よくわかる。人並み以上に撃てるのではあるのだが、ルアやイオには遠く及ばない腕であった。むしろイオが教える暗器のほうに馬に合っていたというのだから、立派なものだとは思っただが。

それでも、それ以前に 拳銃を握る彼の手は震えていて、とても撃てる状態には見えなかった。

『馬鹿にしてるんですか？ この至近距離でしたら外しませんよ』

口角をあげて笑ってみせるが、手の震えは本人も抑えきれないのか、全く説得力がなかった。

『違うよ。貴方に引き金を引く勇氣があるかって訊いてるの。引き金を引くと同時に背負わなければいけないものが、あるはずだよ』

それは、責任。一人、また一人の命を奪うたびに、自分に纏わりついてきたそれは、まだ人を殺したことの無いレーテには重いはずだ。

そのことを逆手に取っているのはわかる。しかしほかにどうすればよかっただろう。友情を…彼の甘さを逆手に取る以外に、方法が？

拳銃を握りしめる手に怒りか悲しみか、力がこもったように見えた。しかし、彼は決して引き金を引かないだろう。

最初からわかっている……きっと、ルアだけでなくレーテだって、悲しみをたたえた視線を振り切るようにしてルアは踵を返す。

コートが翻り、ルアは来た時と同じように闇を纏った。

『それじゃ、さよなら。レー……“帽子屋”、“チエシヤ猫”に伝えてよ。次会った時は敵同士。容赦なく殺す、ってね』

レーテが何かを言う前にルアは足早に店を去った。

チリン…

入る時と同じように、ドアについた鈴が悲しげに鳴った。

ぐちゅり

粘っこい。イオは頬についた赤黒い液体をごしごしと手の甲で拭きとった。しかしその染みはなかなかとれない。それもそのはず、手の甲にも、足にも、腕にも、胸にも…全身に、赤黒い液体はこびりついていたのだから。

(派手にやりすぎた……かな？　うわ、これ絶対洗っても落ちないって)

女の血は思ったよりもずっと汚かった。まあ理想が高すぎたのだろ
うが。白い肌を染めていく赤い血は、なかなか見ものだったのに
レイズが鼻水を垂らしながら命乞いをしたせいで台無しだ。
イオは忌々しげに足元に転がる肉塊を蹴飛ばした。

べちゃり

奇妙な音を立ててそれが床をうつ。

美しかった裸体など跡形もないな……いいぞまだ。こっちの方が
よっぽどに会ってるよ、レイズ。

『さて……どうするかな』

レーテに正直に話すか。いや、それとも死体を処分して引越した
とでもいうか。……処分のほうにしよう。

イオは身をかがめて気持ちの悪い肉塊を抱きかかえようとした。
手がそれに触れる、寸前。

『ただいま帰りました』

『　　　　　つ？！』

予想外の声にイオは跳ねるように立ち上がる。ウソだろ……？口の
中でそう呟いてみても、きつと事実は事実のままだ。

今日は遅いって言ったのに。

一歩、二歩。足音が足早にこっちにやってくる。

『イオ？　レイズ？　どこにいるんですか』

どうやらまだ探しているらしい。このうちに逃げてしまえばいい
ものを、イオの足は全く動かなかった。恐怖か、動揺か、それとも

両方が、膝が珍しく震える。

近くで、足音が聞こえる。

足音が、近づいてくる。

何かがあったのだろう、妙に沈んだ声で自分の名前を呼ぶ。

こんな時も優しい声で、肉塊の名前を呼ぶ。

イオ、

レイズ、と。

ドアノブが、動く

……

「んっ……」

イオはまだはつきりしない意識を頭を振って覚醒させた。いつの間にかレーテと一緒に居眠りしてしまっただらしい。椅子の上に座ったまま寝ていたので、関節のあちこちが痛い。

（あーあー……ヤな夢見たなあ……）

どうせ見るならアリスのこと見たかったのに。そんなことをぼやきながら、目の前ですやすやと穏やかな寝息をたてて眠るレーテの髪をそつとなでた。起こさないように、慎重に。

「　　大好きだよ」

だから、どうかもうこれ以上傷つかないで。

名残惜しむようにもう一度「大好き」と呟くと、指を離した。

瞳を閉じれば、一人の少女の照れくさそうな笑顔が脳裏に浮かぶ。そうだな、今はそつちだ……。

「さて、アリスを取り戻しに行くとしますか」

夜は、もうじき明ける。

判決。有罪。
新たな愛情を得んとした罪として、
すべての友情を失うだろう。

過去編ようやく終わりました…。レイズの影がやけに薄いのは目をつぶっていただけだと嬉しいです。

今回悲劇のヒーロー（ヒロイン？）はレーテです。ルアにひどいことを言われてしょぼしょぼと帰ってくるとありゃま…って感じですかね？

そんでもって悪役は一応レイズです。

付け足すならイオもちよい悪なのでは…？と作者的には思うのですが。なにもあそこまでやんなくても…。

ま、とにかくこれでひと段落イオ×レーテは終わりです。次はまたアリスに視点が戻ると思います。

ここまで長い文章につきあっていただき、ありがとうございました。

騙されたというのは薄々とわかっていったのだ。

私は片頬をあげて艶然と微笑む少年を凝視した。ぼさぼさでみすぼらしかったはずの赤髪は丹念に櫛を入れられて、後ろで一つにまとめられている。薄汚れていた服は今やしわ一つない真っ赤なスーツに代わっていた。髪形と服装が変わるだけでこうも人は変わるものなのか……。

貴公子と呼ぶにふさわしいでたちの少年。その顔は、かつて私が森の中で常識人と崇めた少年のそれと全く同じものだった。

騙されたと、見覚えのない寝室のベッドで目を覚ました時に思っていたのだ。ただそのあとすぐにルアが来て、考えている暇などなかったのだが。

しかし一般市民であることは微塵も疑わなかったと誓おう。きつとお金で雇われているのかな、などと酷いことを考えていながらも、彼は悪くないと心の中で弁明していた。

決して、そう決して、こんな立場の人間とは思わなかったのに。

「女王、さま……？」

私は無意識に先程ルアが言った少年の“カード”名を呟いた。ルアが洗い顔でうなづくのを視界の端にとらえながら、何度も口の中で「女王様」を反芻する。

血の色に近い赤髪は確かに長い、といっても肩に届くぐらいではないのだが。少しはね気味の髪を後ろで留めると、なかなか愛らしい髪形になるものだ。

顔立ちもごついという印象はかけらも感じず、むしろ繊細に近い

美少年だ。白馬の王子様と言えば誰もが頷きそう。まあ、全体的に赤いのが難点だけ。

口元は先刻からずっと優しい笑みをたたえていて、柔らかな雰囲気纏わせている。自分の体より二回りも大きい椅子にもたれかかっている様子は警戒しないでいいよと体中で言っているみたい。それでも私は、どこか異様な冷徹さを赤い瞳から感じていた。恐る恐る口を開く。これはもしかしたら……

「えっと、お、おん……？」

「女の子なんて言ったらどうなるだろうね」

次の瞬間、何か黒いものが私の視界を包み込んだ。悲鳴を上げようにも驚きすぎて声が出ない。代わりとでも言うように唾が喉に詰まり、激しくむせる。

まるで少年からかばうように私の前に立っていたのは、黒い背広を着たルアだった。その大きな背中に、こんな状況下でも胸が高鳴る。

しかし赤くなつた私の顔は、少年が持っている物を見つけた瞬間に青へと一変した。

細く小さい体よりも間違ひなく大きく、さらに重そうな……まさかり銀色の刃がきらめき、その輝きからずいぶんと手入れされていることがわかる。でも……あんな大きい鉞で何を切るといふの？

女王様には気をつけるんだよ、彼女は気性が荒いから、気に食わないものはみんな首を刈り取ってしまうんだ……

おばあちゃん……そんな人を怒らせてしまった時の対処法は何だったんですか……？

遠い記憶の祖母に語りかけてみても当然返事が来るはずもなく、私は呆然とルアの厳しい横顔を見ていた。その手にいつもの拳銃が

握られていなかったことにほっとしたが、血管が見えるほど強く私の手を握りしめている。

「フレイム様」

「……あー、もうわかってるよ。たかだか女の子に間違えられただけで僕だって大切な右腕を殺したくなんかないさ。君は本当にアリスにご執心だね」

「アリスのことは僕が守るって決めましたから」

にこりと笑う顔は斜め横から見てもひどく爽やかなものだ。ただ……目だけは冷たく、少年のほうをにらみつけていたが。

少年は呆れたように溜息をつくとき、鉞を手から落とした。

ガチャンと派手な音が大きすぎる王室間に響く。それを聞いて、ようやくルアは私の手を離れた。素早く姿勢を正し、非礼を詫びるように小さく礼をする。

王室間にまた、先程の静寂が戻った。

「さて、おあそび冗談はこのくらいにして、と」

（おあそび?! メチャクチャ本気だったじゃない!）

私は心の中でさんざん毒づきながら、底知れない怒りを抑えつけようと目を俯けた。頭上から少年……名はフレイムといったか、フレイムの声が響いてくる。

相変わらず優しく甘い声だったが、先程の光景も相まってうすら寒いものを感じてしまう。

「アリス、改めてはじめまして、“女王”のフレイムだよ。ちなみに、ちゃんとした男だから」

“男”と念をおす声にわずかな殺気が見え隠れしたのは気のせいじゃないはずだ。私はごくりと生唾を飲み込み、「ごめんなさい」と謝罪した。

「まあ、誤解するのも無理ないけどね。僕はあらかじめ女王だと名乗っているわけだし。僕の“歪み”は性。僕は男性であるにもかかわらず、“女王”となった」
「ゆが、み……」

私は呆然とその単語を反芻する。

何故この国の人は変わっていることをそんな蔑ずんだ言葉で表すのだろう。イオの時だって、そうだった。まるで心の底から嫌悪するものと呼ぶように……自分のことを“歪み”の産物だと称していた。

どうして……。変わっている、というだけでこっも厭うのか。こっも否定したがるのか。

「ま、女王が男であってはいけないという“ルール”もなかったからね、幸い“歪み”ですまされたよ。前代未聞の異例とはなったけど」

「じゃあ、一人っ子なんですか？ それとも姉妹がいなかったとか……」

「……どうしてそう思うんだい？」
「だって、女王は女性が継ぐのが常識じゃないですか？ それになぞらえるなら息子じゃなくて娘に王位を譲ると思うんですけど……」

私としては至極当然のことを言ったまでだ。しかしそれに対してフレイムは面白そうに笑う。

人を探るような視線に私は底知れない悪寒を感じた。ねめつけるようなこの瞳……なんか嫌だ。

「常識常識常識。君はそればかりなんだね。けど覚えておくといい、君の“常識”はこの世界の“非常識”、君の“日常”はこの“非日常”、君の“現実”はこの“非現実”。この世界ではね、君こそが狂っているんだ」
「なっ……」

あまりの言われように私は絶句した。何か反論の言葉を探すが、その突き刺さるような視線が邪魔をする。冷たい、冷たい……どこか憎んでいるような視線。

全身が泡立ったような気がした。先程から感じていた妙な違和感がようやく理解できる。

私はいつの間にかこの世界の“常識”になじんでいたのだ。ルアも、ロキも、レーテも、来る途中にすれ違った使用人たちも、……イオも、みんながみんな私に好意の視線を向けていた。そして私もそれを自然と受け止めていた。

疑問すらも浮かばない。当然と思っている。私はその事実にとっとした。

私は 恋愛友情問わず、“アリス”となった少女は好かれるのだという、私の“非常識”をいつの間にか“常識”だと思いついていたのだ。

だからこそ、好意の視線を向けない、むしろ嘲るような敵意の視線を向けるフレームに違和感を感じた。

この世界に馴染む。それが吉兆であるはずがなかった。“常識”と“非常識”がいつの間にかすりかわる。そうしたら今度はきつと……殺人すらも大したことではないと思うようになってたりして。

もう、現実には戻れなくなる。

「……フレ임様、どうかアリスを困らせないでください。言い回しが難しすぎて混乱しているじゃないですか」

私が口を引き結んだまま黙りこくつたのを気にとめたのか、ルアは戸惑いがちに私の背中をさすりながらフレ임을睨みつけた。

「大丈夫ですか？」と心配そうに覗き込んでくる水色の瞳と目があう。安心させるように優しく微笑むその目に、不意に泣きたくなつた。

この人にも、馴染んではいけない……私は、いつか帰る人間なのよ？

「……大丈夫よ、心配しないで。女王様、非礼をお詫びします。確かに……貴方の言う通りかもしれません。私と貴方達の“常識”は違う。決して交えてはいけない。……念頭に置いときます」

「ははっ、本当にわかってるのかなあ。まあいいや、そういうことにしてあげるよ。本題に入ろうか」

フレ임はきつい目で見上げる私をおかしそうに笑いとばし、椅子の上で姿勢をただした。彼の赤い瞳が鋭く細まり、途端にその場の空気が緊張する。

「この世界の“常識”はね、強い者が生き残り、弱い者は死す。つまりこの国は、単純な弱肉強食で成り立っているんだ。僕にもね、3人の姉と1人の妹がいた。それに1人の兄も。ふふ……前回はなかなか大量生産だったみたいだね」

ルアも、護衛も、私も、何も言わない。ただフレイムだけがぼつぼつと、気味の悪い静寂に包まれながら言葉を発していた。

「ま、妹と僕は二卵性双子だったからほとんど同時に生まれたわけだけど。ほかの兄弟たちともあまり歳は離れてなくて、確か一番上の兄とは15歳違いだったかな？ 母子との縁よりもむしろ、兄弟たちとの縁のほうが強かった。こう見えて結構仲はよかったんだ。……平穩だったよ、僕らの10歳の誕生日まではね」

その時のことを思い出したのか、フレイムは小さく笑み崩れる。先程まで浮かべていた嘲笑とは全く別の、どこか温かい笑み。

(もしかしたら、そこまで悪い人じゃないかも……)

これはあれだ、ルアが私以外には平気で拳銃を向けるのに似ている。彼も……本当に大切な人しか守らないのだろう。

でもそれさえもが　この世界の“常識”だとしたら？
私は考えを追い払うかのように小さく頭を振った。やめよう、そういうことを考えるのは。とにかく今は、私には帰るべき世界がある、そのことだけを忘れないようにすればいいんだ。

ふいに、フレイムの瞳が沈んだ。笑みは変わらぬまま、表情は完全に悲しみの色で彩られる。

「僕はね、“チェシャ猫”とは違う。“ルール”を守るのが“ルール”だ。そうだな……例えば、女王の子は一人にする、とかね」「一人……しか産まないってことですか？　つまり、前女王のひとは“ルール違反”していた……」

「ふふ……確かにそうかもしれない。長男か長女を残して、他の子なんて生まれた時に首を絞めてやればよかったのにね」

「そんなこと……」

そういつつもりで言ったんじゃない。

私は自嘲気味に呟く彼に戸惑い、思わず慰めの言葉を探した。だがそれすらも言わせないとでも言うように、フレイムは冷たく遮る。彼が足を組み直した時に靴底が床を叩き、小さな音をその間に響かせた。

「いや、それがこの国の“常識”なんだ。面倒事は極力避ける。酷いと思うかもしれないけど、でもね、その非道さだつて強さのうちなんだ。ただ君みたいに愚直なだけじゃ生きていけない」

……今さらりと私のことバカにしなかった？

むつとするが反論する間も与えず素早くフレイムは話をつなぐ。そのわずかな合間にくすりと笑ったのは聞き間違いではなかったろう。

「でも僕の母……前女王は愚直なんかじゃなかったよ。それどころか、馬鹿みたいに賢かった。ただね

彼女は退屈なのを極端に嫌った。それはもう、異常とすらも思えるほどに。だから、反対する者はすべて処刑にしてまで僕らを生んだ。僕と双子の妹が10歳になったとき……彼女の一生分の退屈を晴らすため……たったそれだけに、僕らは生まれた。
女王決定戦のため^{コロシウム}にね」

「コロシウム……？」

聞きなれない単語に私は小首をかしげた。しかし悲しそうに目を伏せるルアの反応を見て、それが決していい意味をもつわけではないということがわかる。

フレイムは片目をきつく押さえ、肺に溜まっていた息をすべて吐ききった。しばらく唇を噛み締めた後、緊張する雰囲気の中静かに

話し始める。

何かとてつもなく嫌な記憶を探り出しているような仕草に、私は不安げに周りを見渡した。

気味の悪い、静寂。

「10歳の時、僕らは全員一つの広い部屋に閉じ込められた。今でもはつきり思い出せるよ。白い……白い部屋だった。そこでね、武器を握らせて……みんな同じ武器をね、柄が青い、長身の剣だった。姉さんが、1番目の姉さんが狂ったように笑いながら、3番目の姉さんを切りつけたんだ。3番目の姉さんは、僕と8つ違いの、僕に優しくかった姉さんが、驚いたように1番目の姉さんを見て、やめてって叫んでるのに1番目の姉さんは全然やめてくれなくて、だんだん3番目の姉さんの声がかすれてきて、暴れてた腕が落ちて、1番目の姉さんは今度は2番目の姉さんに襲いかかったんだ」

話しているうちに興奮状態になったのか、フレイムの瞳は次第に狂気に吞まれていった。それに比例して話し方も平常とは違うものへ変化していく。

私は話の内容に驚くよりも先にフレイムの錯乱を心配したが、声をかけようとした矢先、ルアに無言の制止をかけられた。

そのままにしておけども言うように、ルアは私の手を握る。手袋ごしのその体温は、私をわずかながらも安心させた。

「2番目の姉さんは動かなくなつた3番目の姉さんを冷たい目で見、それから1番目の姉さんの攻撃をよけて、反撃したんだ。怖い、怖いよ、だってあの二人はあんなに仲がよさそうだったのに、なんで。2番目の姉さんは1番目の姉さんの左目に剣を刺して、横に思いつきり引いたんだ。1番目の姉さんの顔がすぐに二つに割れて、きれいな顔だったのに、二つに割れたんだ。でも最期までなんか見ていられなかつたんだ、いっつも剣の稽古をしてくれたはずの兄さ

んが、厳しかったけど優しくかったあの兄さんが、妹を、怖い怖いってむせび泣く妹を切りつけたんだ。僕……僕っ、妹を守りたくて、守りたく、て、兄さんを、兄さんをこの手で刺して、わかんない、わかんないけどたぶん兄さんは手加減してくれてたのに、僕思いつきり切りつけちゃって、血がいつぱい出て、白い部屋に兄さんの血がついて、取れなくて、兄さん血が止まらなくて、目、目が怖くて、全然僕のほう向いてなくて、なんか暗い目をしてて、怖くなって、う、動かなくて、そしたら妹の悲鳴が聞こえて、妹の目も兄さんと同じ目をしてて、怖い、すごく怖いんだ、白目をむいてて、口なんて縦に伸びてて、その隣に2番目の姉さんが立ってて、血がたくさんついた剣を妹の胸に何度も何度も、その次は口の中に何度も何度も、突き刺すんだ。もうなんだか誰だかわかんなくなっちゃって、だから僕、それが悲しくて、妹を助けに行きたかったんだ。でもその前に2番目の姉が僕のほうを向いて、魚みたいに濁った眼をして僕に笑いかけるんだ、こ、これで私が女王よって、怖くて、そういう話は前から聞いてたけど、まさか本当とは思わなくて、そんなそんなっ、女王になるためにはほかの兄弟姉妹たちを殺さなきゃいけないなんて！」

一瞬、その場が水をうつたように静まり返った。静寂よりも深い沈黙が、重くのしかかり私を潰そうとする。

ゼエツ…ゼエツ…

フレイムの荒い息だけが、この沈黙がどれほど異様なものかを物語っていた。カタカタと、フレイムのか、ルアのか、それとも私のか、体がかすかに震える音が響く。

沈黙を破ったのは意外にもルアであった。静かに話の続きを紡ぐ。

「フレイム様の剣術は相当のものです。さらに彼は妹君を手にか

られてかなりの興奮状態にあつたらしく、2番目の姉君を殺め、赤く染まつた部屋から出てきた後も何人も使用人を切つたといわれています。狙いは前女王の……母君の首だつたそうですが」

「……そうだ。そしたらあの人なんて言つたと思う？」なかなかの余興じゃつたぞ」だつて。はは、笑つちやうよね。僕らはただあんな女を悦ばすために生かされていた。観賞用のペットだつたんだよ、僕たちはっ！」

フレイムの悲痛な叫びが、静かな王室間に響く。私は何も言うことができず、ただ固唾をのんで彼を見つめるばかりだつた。彼は荒い息をようやく整え、幾分か落ち着いた声で「失礼、客人の前で取り乱してしまつた」と小さくつぶやく。

ギョツと結構離れてる私からもよく見えるほど強く目をつぶり、再び目を開いた時にはもう仮面は出来上がつていた。穏やかとも冷たいとも見える笑みをたたえ、私を見下ろす。

「だから僕は新しい余興を思いついた。一息に殺してしまつてはつまらない、どうせならもつと楽しまなくては。彼女には、日に日に蝕まれていく体を用意してあげたよ。毎日毎日、少量の毒を混ぜたんだ。彼女の食事でも、薬でも、なんでもいい。僕は彼女の“一人息子”だからね、彼女に近づくのは容易だつたよ」

「……つてそんなこと今この場で言つていいんですか？　だ、誰かに聞かれたらヤバいじゃないですか！」

「ご心配なく。現女王はこの僕だ。女王にはだれにも逆らえない、それがルールだからね。そうだろう、ルア」

「……ええ。貴方があのお方を暗殺した件は以前耳にしております。ひとつ教えていただきたいのですが……前女王の崩御の際、貴方は僕に泣きついてきましたが、あれは母上君を殺したことを悔いていたからではないのですか？」

「ああ、アレ？　演技」

さらりと暴露するフレイルムにルアは一瞬本気で泣きそうな顔を
した。うーん、ご愁傷様……。

「ふふ……でもね、僕も予想できなかったよ。あの女、死ぬ直前可
笑しそうに笑ってたんだ。『この世界はやがて滅びる、妾と同じよ
うに』……まさかあの女が、“アリス”を迎えるなんて、ね」

「え……私？」

突然名前が出て、私は戸惑ったように自分を指差した。今の話で
どこに私が出る余地があるんだ。

フレイルムは神妙な顔でうなづくと、突然玉座を立ち上がった。呆
然と成り行きを見守る人々の視線をかいぐり、私の前に立つと、
優しい動作で私の右手を取った。

うっわぁ……なんか、なんていうの？ 雰囲気ぶち壊すようだけ
ど、気障ったらしい……。

ルアもそうだけど、お城の中ではこういうふうに行動しなければ
いけないっていうルールでもあるのかしら……。

「アリス、よく聞いて。この世界はだんだん歪みに侵されてきてい
る。“カード”の損害、“カードもち”の異常、出生率の減少、異
常気象、そして……この国をぐるりと囲む壁、そのすぐ先には砂漠
がある。砂漠が大地を浸食してるんだ」

砂漠化……。ずいぶん前の社会の授業でそんな単語が出てきた気
がする。まさかそんな現実的な問題がこの世界で出てくるとは思わ
なかったけど。

現実的といっても、決して身近なものではない。砂漠化が今この
場で進行していると説明されても、なかなか実感できなかった。実

際見たのは綺麗な花畑と透き通る青空である。

「夜が明けたら門のところまで連れて行くことと思う。自分の目で見たほうが自分の罪を痛感できると思うしね。それからは……君の自由だ。君がいる限り浸食は完全に止まり、回復の兆しを見せる。ただね、覚えといて。君がどうしてもこの世界から帰りたと思うなら、この世界においてきた、“失クシモノ”を見つければいいんだ」

「……帰り道はそれしかないの？」

「ない」

間髪いれずに否定され、私はあきらめたように溜息をつく。

めんどくさいのは嫌だ。できることなら、この世界のヒロインなんて喜んで返上したい。こんな美形ばかりに好かれる世界なんて、どんな女性だって一度は夢見るでしょうに。

(ほんと、どうして私なんだろっ……)

いろんな意味で泣けてくる。なんにもこんな冷めた女の子を使わなかつた方がいいのに。この奇妙な物語にも、この世界にも、この人たちにも、私は不適だ。

ふさわしくない、そう思うたびに胸がつきんと痛むのは何故だろう

……

「アリスうー、終わりましたかー？」

ドア越しにルアの間延びした声が聞こえる。私は着なれない服に腕を通しながら同じく間延びした声で「まだー」と答えた。

カーテンの隙間からやわらかい月明かりが漏れてくる……と言ってももうじき夜明けなのだが。窓が少しあいているせいか、外気にさらした肌が痛みに近い冷たさを感じとった。

「さむっ……っっていうか、あれ？ 私ここ開けたっけ……？」

意識を取り戻してからも何かとあわただしたかったので、記憶が定かでない。私は頭を捻ったが、気にせず服の乱れを直した。

今まで来ていた服……まあ休日でもそれなりに可愛い服を着ていたのだが、たった数時間で見るも無残に汚れてしまっている。よくもこんな姿で女王に謁見できたものだ。不敬罪で死刑になってもおかしくない。

「……ねえルア、女王様は私に自由にしていって言ったけど……それって、城こしろに留とどまらなくてもいいって意味じゃないの？」

私は先程のフレイムの話の思い出しながらドアのそばに控えているであろうルアに尋ねてみた。作業の手がわずかに遅れる。

「……まあ、そういう意味もあります」

「ちょっと、はつきりしてよ。私はここに留まる必要がないならさっさと出て行くわよ。レーテに会って状況を説明しなきゃいけないし」

「……彼は今それどころじゃないと思いますけどね」

「え？ 何？」

「いえ。とにかく、急いでくださいよ。どちらにしろ一回“門”のところには行ってみたいでしょう？」

不機嫌そうなため息が聞こえてきた。

しかしこればかりは仕方ないじゃない。どういう作りになっただののかもよくわかんないんだから。

ルアにこの服はなんなのと聞くと、簡潔に「代々アリスが着用するエプロンドレスです」と答えられた。たとえ“アリス”の使い古しでも、純白のフリルは今も健全に形を保っている。

しかし、いかんせん趣味に合わない。こういう服は金髪のかわいい子ちゃんが着るものだ。間違っても仏頂面したこげ茶色の髪の女性が着るものではない。もしかしたらルアのウサ耳も笑えないほど滑稽に見えるかも……。

私は深いため息をついてフリルを弄んだ。

「ねえ、そういえば“門”ってなんなの？ どういうところ？」

「ここからずっと東にあるところですよ。フレイル様も言ってますが、この国は周りを壁に囲まれているんです。郊外には砂漠が広がるばかり……そんな中で、入り口はその門だけなんです。トウーアイドルディーアンドダムと呼ばれる双子が門番をしてるんですよ」

「トウーイド……なんていった？ 新手の呪文？」

「トウーイドルディーアンドダム。ディーとダムっていう双子の兄弟ですよ」

常々思っていたのだが、兎角この国の名称はわかりにくい。もと

もとカタカナ名は覚えにくいというのに……もしかしてルアの本名はもつと長かったりするのかな？

「ねえ、ちよつと疑問に思っただけど……」

「なんですか？」

「ルアって、ルアが本名？ 名字……家族名とかないの？」

「本名ですよ。その前に“白ウサギ”とつけることもありますよ、これはカードの名前です。一般人の人はちゃんと“一般人”の何々ですって名乗るんですよ」

へえ……みんなこんなに短いのね……。確かにどこぞの貴族みたいに長かったらめんどくさくなつて「アンタ」で済ましちゃうかも。いつの間にか着替えをする手は止まっている。私はドアの近くの壁に寄り掛かつてルアとおしゃべりを楽しんだ。自然と声が弾む。そう言えばこちらに来てからこういう普通の会話をしていなかった気がする。

「じゃあ、同じ名前が頻発するんじゃない？ ルアとかロキとかレエとかよくありそうだし」

ここであえて変態猫の名前は出さない。簡単に許せると思うなよ。しかし予想を反して帰ってきた声はどこか冷たいものだった。

「いえ、それはないと思いますよ。子供にこんな忌々しい名前、普通はつけませんからね」

「い、忌々しいって……いい名前だと私は思うけど？」

「僕の名前のスペルはL・u・r・r・e…Lure、つまり誘惑という意味を持ちます」

私の声をピシヤリと遮っていらだたしげにルアは舌打ちする。私

はかすかに感じる殺気に怯えながらも、その場から動くことができなかった。

「同じようにレーテはL - e - t - h - e... Lethe、意味は忘却を表すし、ロキなんて最低な名前ですよ。L - o - k - i、邪神の名前なんです。世界を終わらせるもの、だって」

「……なんかすごいわね。なんでそんな名前付けたのかしら」

誘惑やら忘却やら世界を終わらせる者やら…決していい意味でないことは確かだ。普通親はいい名前を子供につけたがるんじゃないか？ いや、この普通なんてわかんないけど。

「わかりませんか？ みんな僕らの“カード”に因んでつけられているんですよ。“白ウサギ”は“アリス”をこの世界へ誘う、誘惑するんです。“帽子屋”は時間を忘れてお茶会をする役割だし、“チエシヤ猫”はこの世界で唯一ルールに縛られないもの……つまり唯一、この世界を変えることができる、終わらせることも、止めることもできる存在なんです。まったく、“カード”に縛られるというのも楽ではありませんね」

皮肉げに笑う声が聞こえてきた。

言葉は限りなく冷たいが、その声はわずかに掠れている。私はしばらく間をおいて、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「あの……よく、わかんないけど、私はルアって名前嫌いじゃないよ？ よ、呼びやすいし、覚えやすいし……」

しどろもどろに慰めの言葉を探すが、なかなかぱっとする理由が思い浮かばない。そのうエルアが黙り込んでしまい、途端に気分はしょんぼりとしてしまった。

のろのろと作業を再開しながら、小さくつぶやく。

「ごめんなさい……く、くだらない理由ばかりね……」
「……いえ。あの、気障っぽく聞こえるかもしれませんが、すごく嬉しいです。貴女が好きって言うてくれるなら、僕もこんな名前を好きになれそうです」

「~~~~~っ！こ、こんな名前って言わないのっ。ま、まったくだわ、女王といえ、貴方といえ、なんでここはこんなに気障ったらしい奴が多いの?!」

「ははっ、すみません。早く着替えてくださいね、アリス」

誰も見てなくてよかった、ほんとよかった。こんな顔を真っ赤にしたところなんて見られたら、絶対写真でもとられてしまいそうだ。この世界にあるのかどうか知らないけど。

そう思った、その瞬間。

パシヤッ

………はい？

いや、今の幻聴だよね？　ね？　だってここ誰もいないはずだし。

うん、幻聴幻聴。

私は気を取り直して袖のボタンを留め始める。後ろのチャックがうまくできない……。

「うわ、大変そーだねー。手伝おうか？」

「あ、うん。ありがとう」

ジジーという軽快な音をたててチャックがしまった。

やっぱりこういうのは一人じゃできないものね。

「いえいえ、かわりにいい写真貰ったしね。この服ちよつとウエスト太くない？ アリスはもうちよつと腰細いでしょ、抱き心地でわかるけど」

「うん、ちよつとね。……」

……つてどっから入ってきやがったこんの変態猫っ！！」

私は背後の男……きつと相変わらず目に痛いピンクの髪と猫をしているだろう変態に、渾身の力で右ストレートをお見舞いしようとした。しかし固く握った拳は見事に空を切る。

素早く後ろを振り返ると、軽い身のこなしで私の攻撃をよけたイオがニヤニヤと笑っていた。その左手には小型のカメラが握られている。

「あは、同じ手は二回も食らわないよ」

「……おいでおいで猫ちゃん。ナデナデしてあげるからもう1発お姉ちゃんに殴られなさいね」

「俺SMプレイならSのほうがいいんだって」

「そういう意味じゃねえよボケ」

「あははー、アリスに撫でられるんだったら拳の一つでも受けていのような気がするんだけどね、さすがにさっきの右ストレート痛かったしなあ。それに棒読みはダメだよ。可愛い声で“お願い”しな
きや」

喜べ、本気でぶつ殺してやりたいと思ったのはお前が最初だ。

私はプルプルと怒りで震える体を必死に抑えながら、とびつきりの笑顔を浮かべた。頬がひきつつつているのはご愛敬。

「そう、じゃあ仕方ないわ。本当は自分で決着^{ケリ}つけたかったけど」

すうっと勢いよく息を吸い込む私を見て何かを悟ったのか、彼の

瞳が凍りつき、次いで素早く私の口をふさごうと大きな手が伸びてきた。

ふふっ、しかし時すでに遅し。私はありったけの声を振り絞って叫んだ。

「んぎゃあああつ！！ たあすうけえてええつ！！ 痴漢つ、痴漢よおおつ！！！」

「大丈夫ですか、アリスっ」 「ちよつとっ、痴漢はひどくないっ？！」

叩きつけられるようにドアが開く音がし、二つの美声が重なる。

後ろに黒髪の美青年、その手にはもうすでに拳銃が握られているようだ。前にピンク髪の美青年、こちらも警戒したのか、戦闘態勢をとっている。全世界の女の子が憧れる状況だが、残念ながら私は冷や汗しか流さない。

あら、もしかしてこの二人をぶつけるのはちよつとまずかったかしら…？

死ぬほどまずかった。一瞬の沈黙の後、背後でカチリという不気味な音が鳴る。イオは忌々しげに顔を歪めた。

「あーもうアリスってば何やってんのさ。よりによって一番めんどくさい奴呼んじやってさ」

「アリス、大丈夫ですか？ この変態に何かされませんでしたか？ すみません、少しばかり持ち場を離れていたせいでこんなことに

……」

二人同時に早口でまくし立てる。案外息合ってるんじゃないか？

この二人。

私が口を開く前に二人の毒舌が再開する。お互い普通の子が見たら卒倒するんじゃないかと思う素敵な笑顔を浮かべているから余計不気味だ。

「お勤めご苦労さん、白ウサギ。もう女王様への謁見はすんだでしょ？　じゃあ俺がアリスお持ち帰りしてもいいよね」

「いいんでも思ってるんですかね、この変態が。アリスは僕のものです」

「ははっ、年中発情期の貴方には言われたくないね。ま、いいか。どうせ貴方に俺を止める力はないし、勝手にさらってくよ」

状況が呑みこめず戸惑う私をよそに、ルアがあわてたように私のほうへ手を伸ばしてきた。しかし白い手袋をはめた彼の手が私の腕をつかむ寸前、別の熱い腕に抱きすくめられる。バランスを完全に失った私はイオのなすがままに抱きしめられていた。

イオはふわりと軽々しく後退し、後ろ手に半開きの窓を開け放す。そっか、こいつここから入ってきたのか。

「アリス、しっかりつかまってね」

「へ？　う、うん……」

と言つてもつかまえられるんですけど……。私はぼんやりと思いながらも彼の黒いシャツをきつく握った。

「アリスをはなせチエシャ猫……っ！」

「あは、嫌だね。アリスは俺のだもん、白ウサギになんかあげないよ」

ちよっと待て、私は幼稚園児に取り合われている玩具おもちゃか。私がそう

反論する前に、イオがどこからか何かを取り出した。

ヒュンッ

何か小さなものが空を切る音がする。

何かと思つて私が後ろを向こうとすると、やんわりと頭を押さえつけられた。自然とイオの胸に顔をうずめてしまう格好になり、途端に身体が熱くなる。それを感じたのか、頭上でイオの忍び笑いが聞こえた。その色っぽい響きにさらに顔が熱くなる。

ぼうつと浮かれかける意識を呼び覚ましたのは、ルアの押し殺したうめき声だった。私は何とか顔を上げようと踏ん張ってみたが、熱い手はそれを許さない。

「ちよつと、なに、何なの?!」

「アリスは見ちゃだめ。白ウサギ

それは俺の愛人の礼。

死んでたらもつと痛い目にあつてたかもね」

「だからなにっ……………えっ」

追及する余裕はなかった。イオの手が窓枠にかかり、背中が外へと押し出される。冷たい風が頬を撫でた。イオはあんなに薄着で寒くないのだろうか。

今回は叫ぶ暇も、嘘と思う暇もなかった。熱い腕に抱かれて、頭から落ちる。

頭から、落ちる。

さすがに3回目だったせいか、地面が見えてきても私は意識を失わなかった。むしろ失つてくれたほうがよかつただろう。

こらえようのない恐怖に、私の喉から潰れた声が漏れた。まるで泣き声みたい。いやだな、こんな情けない声、この変態に聞かれた

くない……。

地面から10メートル、というところでイオは私を抱えたままぐるりと半回転した。気持ちの悪い浮遊感に、胃が押しつぶされる。

「アリスっ！ 力抜いて…っ！」

どうやって。そんな疑問が頭に浮かんだが、聞くまでもなかった。先程の宙返りですっかりと保たれていた意識が浮ついていく。

意識が完全に闇へと呑みこまれる寸前、何かが私を揺さぶった。閉じかけた瞼を恐る恐るあけると、イオの焦り気味な顔が見えた。あれ、いつの間に着地したんだこいつ。いつも通り羽みたいに軽い奴だな……ほんと、うらやましい。

「走ってアリス。ほんと俺が抱きあげてもいいんだけど、残念、もうそろそろタイムリミットみたいだから……」

「た、タイムリミットってまさか」

イオが私の言葉を待たずに走りだす。私は右手を彼に引っ張られながら必死で走った。寝不足で足がふらつく上に、このエプロンドレス走りにくい……っ！

タイムリミット。その言葉が頭の中でぐるぐると回転をかけながら廻った。

ロキは、太陽が完全に沈みきった瞬間にイオへと変わった。そしてイオは、自分が出るのは夜だけだと。

夜の始まりが日没だとしたら、夜の終わりは

……

空は次第に明るみ始める。

【Chapter 2】Crossing Knight or Knight

残酷な表現が一部あります。

流血シーンが苦手な方はお気を付けください。

「待てっ」

厄介なことに、後ろから追手がうじゃうじゃ湧いて出てきた。6、7、8……いや、たぶん10人以上。とても二人で応戦できる数じゃない。それも私などは武器もなく、戦力外どころかただの荷物だ。イオは小さく舌打ちをすると、私を背後に押しやり真っ向から敵と向き合った。私も思わず足を止めてしまいが、イオに短く叱咤される。

「行って」

「でも……」

「早くっ！」

キラリと、彼の中で銀色の何かがきらめいた。その歪な輝きに背筋が凍りつく。

気づけば私は、イオの腕にしがみついていた。夢中でその腕を引けば、驚いた様子の金色の瞳と目が合う。

「アリ……」

「殺さないでっ！」

思ったとおり、彼の両手に握られていたのは細身のナイフだった。イオは何かを言おうとしたが、それを遮るかのように透き通った声でその場をつつ。

「殺せ」

追手の群れをかくぐつて現れたのは、目立つ赤髪の少年。そのずつと後ろから、ルアが走ってくるのが見えた。なんでか左手を苦しそうにおさえている。

「しかし、このまま撃ちますとアリス様に当たってしまいます」

追手の一人が冷静さを努めてフレイルムに告げた。フレイルムはそちらに目だけを向けると、嘲るように鼻で笑う。一瞬、二人の間に緊張の糸が張り詰められた。

「ふうん、それでみんな撃てないでいるんだ」

「はっ、アリス様にお怪我させるわけにはいきませんので」

「君、ずいぶん偉そうだけど、ここの隊長さん？」

「そうですか……」

どうやら勇ましく発言をした彼も、フレイルムの不気味な笑みに気づいたようだ。言葉にわずかな戸惑いと恐怖が混じる。

「馬鹿だなあ」

くすりとフレイルムが嗤い、左手を一閃させた、その瞬間。

おびただしい量の“赤”が視界を染めた。

飛び散ったそれが、首を失った同僚を無表情に見つめるほかの追手たちに、左手にいつの間にかあの鉞を持ったまま声をあげて笑うフレイルムの顔に、遠く離れているはずのイオと私にまでかぶさり、

同じ色に染める。

「ごとんと、鈍い音を立てて彼の首がフレイムの足もとに転がった。私は声を上げることもできずに崩れ落ちる彼の体を凝視していた。

何が起こった。

何が。

なんで。

なんで彼が殺されるの。

だって。

だって味方なんじゃ。

味方をなんで殺すの。

わからない。

わからない。

狂ってる。

狂ってる…!!

「ほんと、馬鹿。わかってないなあ、アリスはね、この世界にいればいいんだ。別に傷が何個あつたつて構いやしない。なんなら手足を切り取って動けなくしてから牢屋に放り込んでもいいんだよ?」

赤い瞳がこちらを向く。その禍々しいまでの異様な輝きに、全身の肌が泡立った。

怖いのに、体が動かない。イオはそんな私をかばうかのように背後にまわした。夜明けはもうすぐだというのに、それでも私を守ろうとしてくれる。

「別に君がどこへ行こうといいさ、この国にいるなら。でも僕は言ったよね。門に行ったら、自由にするって。まだ条件も満たしてないのに解放するわけにはいかないなあ」

「うわあ、うわさ以上に、貴方ってえげつないんだ」

フレイムの声に答えたのは、意に反してイオのほうだった。

静かに手に取った暗器をフレイムの心臓あたりに狙い定める。こればかりは私にとめる術もなかった。

「ねえ、貴方今すぐここから消えてくんない？ アリスがすっごい怯えちゃってるからさ。ま、そんなアリスも可愛いんだけど」

「……ふう、ルアといい君といい、またアリスに溺愛？ 知ってるかい？ 人ってね、大切なものを持つと途端に弱くなるんだって。ほんと、情けないツラ拌ませないでよ」

「あは、恋したことないガキなんかにはわからないよ。俺だったらこの心臓を渡してでもアリスと一緒にになりたいけどね」

「い、いらない……」

私は思いつきり顔をしかめて答えてしまう。イオの心臓……ピンクだったらどうしよう。

「あ、ひどーい、アリスうー。それくらい愛してるってことだよ」

「ははっ、返却されたね。じゃあかわりに僕にちょうだいよ、君の心臓。いや、首かな」

「あはは、断つとく」

突然、体が浮き上がった。私をお姫様だっこしたイオは、何が何だか分からない私をよそに全速力で走り始める。ここまで必死な彼ははじめてみる気がする。

「撃て」

「で、ですがしかし……」

「逆らう奴は殺す。撃て」

後ろから無情な声が聞こえ、一瞬ひやりとした。そんな私をあやすかのように、イオの腕に力がこもる。

しかしいつまでたっても銃弾は追ってこない。私は恐る恐るイオの肩越しから後ろをのぞき見た。

「ル、ルア……?!」

「あー、止めてくれてるんだー。ありがたいありがたい」

確かに、ルアが何ごとかフレイムに叫んでいる。ここからじゃ聞こえないが……かなりの憤りっぷりだ。それだけじゃない、右手に持っていた拳銃をなんとフレイムのこめかみにつきつけていたのだ。フレイム自身も不満顔で鉞をルアの首にあてていたが、しばらく睨みあつたのちあきらめたように腕を下した。

「な、なんで?! ルアってフレイム様の味方なんじゃないの?!」

「あのねえ……、ルアが貴女をみすみす死なせると思う? ルアは間違いなく貴女の味方だよ」

イオは後ろを振り返ることもせずに軽々しく走り続けた。お、重くないかしら……? 体重は極秘だけど、人一人抱えて走っているのだ。それなのに全く疲れた様子もなく走り続ける。不思議……ほとんど振動してる感じがしない。

ようやく追手たちが見えなくなるまで走ってきた。最初から抵抗するでもなくこうすればよかったのでは? と今更ながら思う。

「でも、殺しかけたわよ」

「はあっ?! あ、あのルアが?! うっそ……うわあ、色々たまつてんだなあ……」

「まあ、未遂で終わったから許してあげただけだね」

「でも、あんな上司じゃ無理もないよね。見た？ あの目。本気でアリスのこと、撃とうとしたよ」

「……ええ」

思い出すだけで、背筋に冷たいものが這いあがる。イオに対する嫌悪感もひどかったものだが、そんなものあっさりとは吹き飛ばしてしまうほどの、恐怖。

イオが忌々しさを隠さない口どりで言った。

「ほんと、最低だよアイツ。俺を殺すのはわかるわけ。いろんなところで怨み買ってるからさ、俺。別に俺は死んだっていいよ、でもアリスまで傷つけようとするなんてね……ああ、もう、ぶっ殺してやりたいっ」

「ちよ、ちよつと、イオ！ 何であんたは死んでもいいのよ」

「俺はいいよ。でもアリスは死んじゃダメ」

「だからなんであんたたちはそんな死ぬとか殺すとか……ばっかじゃない?! もっと命は大切にしろるものじゃないがっ」

ムカついてムカついて彼の腕の中で必死に噛みついてみるが、彼は意地悪そうに笑って「わかったわかった」とあまりにもあっさり流した。そんな流すほど軽い話ではないだろう。大体こいつだってさつき、身を守るためとはいえ確かに兵達を殺そうとした。

狂ってるわ。私はもう一度口の中で小さくつぶやく。あの人たち……自分の仲間が殺されたっていうのに、眉一つ動かさなかった。イオだってそうだ。ただ皮肉げに笑って「えげつない」と評しただけで……。

「アリス」

「な、なに？」

「ごめん、やっぱ自分で走って？ さすがに疲れてきた」

「そんなふうには見えないけど……」

「それでも疲れてるの。少なくとも、この体は限界」

私は小さくうなづく素早く地面に降り立ち、彼の右手を握った。実は彼の腕の中は結構心地よかったのだが、そんなこと言えるはずもない。

彼は握られた右手を驚いたように凝視した。まるで私の手そのものが酷く珍しい生き物になったようだ。

「な、なによ」

「いや、アリスが素直で可愛いなあって思ってた」

「はあっ?! なななななに言ってるのよこんな緊急事態につき!」

「でもこんな緊急事態じゃないとアリスは素直になつてくれないでしょ?」

「いいからさっさと走りなさいっ!」

「あ、ちよつと待って」

羞恥か怒りか、真っ赤になった私をニヤニヤと笑いながら、イオは地面に膝をつく。

何をするのかと思えば、胸ポケットから小型のナイフを取り出し、それを左手の甲に突き刺した。

「っ……」

貫通はしなかったがかなり深く刺したせいで、流れだした血は止まらない。

私は呆然と成り行きを見守っていたが、その赤い色を見た途端、我に返った。

「な、何やってんの?! ちょっとイオっ」

「あは、心配しないでよこれくらい。大丈夫大丈夫、俺たち獣人は普通の人間よりよっぽど治癒能力が高いんだよ? こんな2週間もすれば元に戻るって」

「元に戻る戻らないっていう問題じゃないの! 何でそんなこと…」

「いまにわかるよ」

全然わかんない。そう反論しようとした、その時。ピンク色の髪が根元から変貌していった…艶やかな、漆黒へと。私のほうを甘い目で見つめ続ける金色の瞳もだんだんと濃い色になっていって…ついに黒に染まった。

突然、イオの体がふらつき始めた。私はあわててしゃがみこんでその体を支える。

「い、イオ…じゃない、ロキ?! ロキなの?!」

わざわざ聞かなくてもわかる。私は彼の体を揺さぶって何とか起こそうとした。とりあえず追手はまいたといえ、ここはまだ城内。いつ捕まるかすらわからない状況なのだ。

「うっ…なんだよ、これ…いってえ…」

ロキはまだ眠そうな目をこするうとして、自分の左手に気づいた。遅れて痛みが襲ってきたのか、忌々しげに顔をしかめる。

「まさかさっきのってこれのため…?」

「ん…お前…ああ、アリスか。なんかあったのか? イオがこっぴどく怒る時ってたいてい変なことになってんだが」

……もしかして、ロキへの伝言^{メッセージ}？ さすが……。いや、でも前にもこんなことしてたって……そのたびに痛かったらうなあ……。しかしそんなイオの心遣いにもせず、ロキは再び眠そうに欠伸をし始める。なるほど、こいつは低血圧か。

そう、その通り。緊急事態だ。緊急事態だから……

「 さっさと立て！ 逃げるわよっ！」

今度は私が彼の左手を握って走り始めた。

彼の悲鳴を背後に聞きながら、必死に駆け抜ける。なんだか途中から流れにまかされてたような気がするけど……。

これで、よかったのよね、イオ？

顔を出した朝日が、檻から逃走する二人の影を長くのばしていた……

「うー……さみい」

夜明けの日差しが降り注ぐ森の中、二つの影が互いを支えあっていた。支えあっていた、というのはおかしいかもしれない。実際には一人がもう一人に寄り掛かっているだけだ。

寄り掛かっている方の少年は眠そうな目をこすりながら、甘ったるい声でもう一人の耳に囁く。

「ねえ、いつになったら諦めんのぉ？ 俺もう飽きてきちゃったぁ」

可愛い、という表現がよく似合いそうな少年だった。

茶色の髪は色素が薄く、肩にかからないくらいまでに切りそろえられている。瞳も髪と同じ色をしており、全体的に薄く儂げな感じだ。背丈も160を超すか越さないくらいで、女性と見間違えられても違和感がない。

その頭についている丸い耳は時々気だるげに動く。そう、それは一般的にいう人間の耳ではなく……どちらかというと獣、それもネズミに似た耳であった。

対してもう一人の少年のほうは同じ少年といえども、儂さの欠片もないといった感じである。

同じような色の髪と瞳だったが、こちらはもっと黄色みが強く、

一見すると金髪のような色どりだ。しかしよく見ると赤髪が少量入っていて、光に反射するとオレンジ色に見える。こちらの少年は身長が175は優に超えていて、すらりとした肢体を持つ。

こちらの少年にも獣の耳がついていて、ルアのものとはほとんど形は同じだったが、色は焦げたような茶色だった。

茶色のウサギ耳を持つ少年は呆れたように相棒を見る。

「お前なあ、その手は俺には使えないってことくらいわかってる。それでもなお“お願い”するか」

「んともあー、なんでマルスはそうなのさあ……。男でも女でも俺がこう言えばすぐ聞き入れてくれんのにいー」

「はは、お前の本性知ってるからな。伊達にレストの相棒やってるわけじゃねえぞ、このぶりっ子」

マルスと呼ばれた少年はもう一人の少年、レストの頭を軽く小突いた。さすがに肩に人の頭が乗っていたら重くて動けない。

「なにさこの分からず屋。あーあ、マスターの紅茶が飲みたいな！。あ、でもどっかの誰かさんは飲めないんだっけえ？ “三月ウサギ”のくせに猫舌だなんて、笑っちゃうよねー」

「うるせーよ、不眠症の“眠りネズミ”が何を言う」

「不眠症じゃないよ、昼夜逆転！ 昼はちゃんと眠くなるんだからっ」

「どう違うってんだよー！」

「ぜんぜん違うよっ！ まったく、これだからバカは」

あーだこーだと二人は言い合う。

猫舌の三月ウサギ。

昼夜逆転の眠りネズミ。

突っ込みどころ満載な二人の毒舌は、お互いのことをよく知っているせいか、絶えることを知らなかった。

「大体また迷子になったわけ?! そんなに方向音痴なら外出すんなよ馬鹿っ。あーもう、明日も明後日もその次も野宿だなんて最悪! 俺の肌が荒れちゃったらどうしてくれるのさっ」

「はあっ?! 方向音痴ってなんだよっ、こっちでいいに決まってるんだろっ」

「あのねえ、じゃあ今お前はどこに向かってるって言うのさ!」
「街に決まってるんだろ、食糧買いに行くんだよ」

「こっちは城の方向だよっ! また殺されたいのかお前っ」

太陽が完全に昇り詰める。マルスはレストとの言い合いをやめ、大きなオレンジ色の瞳を太陽のほうへ向けた。

この時間帯は、いつも頭がしびれるほどの快感に襲われる。レストの不眠症につきあって自分も昼夜逆転してしまったのだが、それはそれでよかったと思うのはこの美しい光景のおかげだ。

薄い光が直接目に入り、まぶしくて目を細める。ふと、その光に一对の穢れが見えた気がして、マルスは眉をひそめた。

「なんだ、あれ……」

「んー? なあに?」

「いや、変な黒いしみが……ってこっちに近づいてきてるぞ」

黒いしみ……ではない、何か、人のようなものだ。一人がもう一人を背負って走っている……?

背負っている一人の黒い癖っ毛に見覚えがあるレストは、大きな目を見開いてマルスの肩を揺さぶった。

「ね、あれロキ兄ちゃんじゃない？」

「ロキ?! うげえ、マジかよ!」

ロキ、という名前を聞いた途端金色の瞳が嫌そうに細められた。しかし心底の嫌悪という色はなく、ただその明るい瞳の中で熱いものが燃えているだけだ。

レストはいつも通りの反応にやれやれとでも言うように溜息をついた。

「ロキの背中に乗ってるの……女じゃん。誰、あれ」

「お、女?! あのツンデレにして純情なロキがあっ?! か、彼女かそれ、おいよく見るレスト、ロキの女なのかあ?! お、俺にすら女がいねえの?!」

「俺にわかるわけないでしょうが」

「ふざけんつ、よく見る! あ、あいつだけは味方だと思ってたのに!」

「あーもう煩いなあ。そんなに会いたいなら…呼んであげようか？」

言うが早くレストはマルスの肩からあごをはずし、ゆっくりとした動作で腰に手を伸ばした。マルスはそのあとの展開をなんとなく把握しているのか、何も言わずに一步足をひく。

しかし自分も負けてられないとでもいうように、口元を笑みに歪めながら懐を探った。手際よく両手に鉄製のナックルがはめられる。硬いというのもそうだが、拳の先端についている太く鋭い鉤爪が、これが何のために作られたのかを物語っていた。

護身の武器ではない。むしろ、殺人用の凶器。

「さて……と、そろそろ眠くなってきたところだし、眠気覚ましでもするかな」

レストは口角をあげてひっそりと笑い
拳銃を、発砲した。

手に持っていた

「ね、ねえちよつと、ロキ大丈夫？」

「あ？ 何がだよ」

「私結構重いよ？ もう自分で走れるんだけど……」

先程までロキは完全に覚醒しておらず、私が彼を支えながら走る立場だったのだが、今はその大きな背中におぶさる格好になっている。確かに1時間以上も走り続けて相当疲れていたのだが、おぶさるほどでもない。

イオのときと同じようにおぶさっていても何の振動もしなかったが、その瞳の色から疲労は見て取れた。

これ以上つらい思いをさせるわけにはいかないよね……。その想いから紡ぎだされた一言だったが。

「馬鹿。お前のろいんだよ。俺が走ったほうが速い」

ピキッ

頭のどこかで何かにひびが入るような音がした。私は怒りに震えそうになる拳を何とか抑えて、彼の髪の毛をむしるようにして撫でる。いや、なでるように見せかけて実はむしる。

「そう、ありがとうね、ロキくん。のろくて重い私をわざわざ運んでくださって、「くろろさま」

「いででででえええっ!! やめろって、おい! 悪かった、悪かったから!!」

「ごめんなさいは?」

「な、なんでだよ! 俺何も悪い!」……いでえっ!」

「ごめんなさいは?」

「!?!?!?ゴメンナサイ! 許してください!」

私はふうつと一息ついてなでる、もといむしろのをやめた。私のよりきれいな黒髪が何本か舞い落ちる。この艶やかさ……羨ましくきるぞこん畜生。

ロキはむつと口をへ字にまげて私の方を見た。うん、なんていうか、こういう顔をされると嗜虐心がうずくような……。

「別にお前のこと重いだなんて言ってねえだろうが。十分痩せてるよ」

(お、意外とこいつっていい奴……? ムカつくやつだとばかり思ってたんだけど……)

「ま、俺に言わせてみれば痩せすぎだけどな。胸とか全然足りねえぞ」

(……やっぱりムカつくやつだった)

私はあきらめたように溜息をつく、再び彼の頭にその顎を乗せた。頬を撫でる髪の毛はつんつんしてばかりで正直くすぐったいだけだが、その肌はあたたかくて少しほっとする。

（ほんと、イオもロキも体は同じなのに性格はここまで正反対なんてね……）

イオが色気むんむんで女遊びばかりしてそうなのに対して、ロキは純情で一途。上辺だけの笑顔を操るイオに対して、不器用で感情を素直に出せないロキ。囁く言葉はまるで炎と氷。

（でも……やっぱりあったかいんだよねえ……）

「ねえ、私たち一体どこに向かってんの？」

「お前……今更すぎるだろ。帽子屋邸だよ。ちよつと預けたものがあつて、な」

「預けたもの？」

ロキがチラリとこちらのほうを見て、苦々しげな顔をした。

大切なものなのか？ しかし、それほど大切なものを普通他人の家に預けるのだろうか？

「拳銃だ」

「……はあつ？！ あんた何やってんのよ！ そんな物騒なもん他人の家に置いてくるなんてバカじゃないの？！」

「仕方ねえだろうが！ あんの阿保イオが重いだダサいだ性に合わないだとか言つて毎回どっかに捨ててきちまうんだからつ。俺の武器は銃、あいつの武器は暗器つてどっからどこまでもウマが合わないんだつて」

「いいからそういうことはやめなさい！ あんたね、レーテが嫌がるでしょうが！」

「はっ！ あいつにはそれくらいの嫌がらせしといたほうがいいんだよ！ あいつもそろそろ人殺しくらいしといたほうがいいんだつて」

人殺しくらいしたほうがいい。

ドクンと、胸が大きくなった。恐怖か、怒りか、体が無意識のうちに震えだす。それを感じたのか、ロキは怪訝にこちらを向くといつたん足をとめた。

固く握りしめた拳を虚ろに見続ける私をそつとおろす。

彼なりにまずいことを言ったと自覚したのだろう、ためらうように私の頭に手を伸ばした。

「えっと、悪い、言いすぎた……かも」

かもじゃないでしょうが……。私は乾いた笑い声をあげながら弱々しく言った。

『この世界ではね、君こそが狂っているんだ』

フレイムの言葉が、凍てつくような冷たい瞳が、脳裏に焼き付いてはなれない。まさかこんな時にこんなことを思い出してしまっている。

私の“常識”では、決して殺人は犯してはいけない。でもそれは私だけのこと。

では彼らの“常識”は？ そんなこと、一度として考えたことなかった。

彼らの“常識”で、殺人はただの遊戯に過ぎないのだとしたら。生きるための手段でしかなかったら。なら、果たして私なんかがそれを“非常識”と言えるのだろうか？

全く生きる世界が違う、私なんか？

私は彼らを責めることができるのだろうか。私の“常識”で彼らを言及できることが、できるだろうか。

私の“常識”を、彼らに押し付けることが

……

「おい、何を考えてる」

黙り込んだ私をさすがに心配に思ったのか、ロキが私の顔を覗き込んできた。いつもは見下されているのに、今だけは見上げられる。

あ、ちよつといい気分かも。

目の前に黒曜石の瞳が光る。その意外なほどの大きさに、私は今まで考えていたことを一瞬すべて忘れかけた。猫じゃなくてまるで犬のようだ。こみ上げてくる笑いを必死で噛み殺す。

笑いの気配を感じたのか、ロキはとたんに顔をしかめると、荒々しい調子で顔をそらせた。ほんのちよつとだけもつたいない気がする。貴重な一瞬だったのに。

「やっぱバカの考えてることなんかわかんねえな。つたく

このバカが」

「ちよつと、バカつて何よバカつて。

なんでも、ない。

大したことじゃないよ、ほんと」

とっさについた嘘を、ロキは見破っていたのだろうか。ただこちらにちらりと向けてすぐにそらした瞳が……悲しそうで、寂しそうで、壊れそうだった。

「そう、か。別になんでもいい

けど、もし俺の言葉で、

その、傷ついたなら……あの………いつ?!!」

真っ赤に頬を染めて紡ぎだす歯切れの悪い言葉。この先に続く言葉は大体わかっていた。胸の中で渦巻いていた黒い感情がだんだんとほだされて、解けていく。

私は微笑んで、言葉の続きを辛抱強く待った。

あの……………ご、めん……

しかしその言葉が出る寸前、私の視界が真っ黒になった。

目をつぶったわけでも意識を失ったわけでもない。なら、何が起こった？

答えはごく単純、黒いもので視界を覆われているのだ。例えばそう、目の前にいる男のシャツとか。

私は手足をバタバタして何とか彼の黒いシャツから顔面をはなした。しかしロキは毛頭私を抱きしめる腕を解く気はないらしく、私の後頭部を片手で押さえたまま視界を森の先へと向けている。

状況がわからない。そんな私の思考回路は、とてもおめでたいことに、熱烈に抱きしめられてるといふ結論に至った。

とたんに顔が真っ赤になり、私はさらに抵抗を試みた。

「は、はなせこんのあほっ！ お前TPOってもんをしらねえのかっ！ー！」

しかし、その次の言葉が続くことはなかった。顔をあげると、彼の黒い瞳が見える。その異様なきらめきに、私はぞくりと背筋に寒気を感じた。

彼の口元に視線を落とすと、不自然な笑いの形に歪んでいた。もしかして……………楽しんで、いる？

パン…

近くで乾いた銃声がし、びくりと体が震える。少し体の向きを変えたロキの頬を掠めて、銀色の銃弾が空を切る音がした。その無機質な音に、私はようやく我を取り戻す。

もしかして、さっきも銃弾をよけるために……？

「おい、当たってねえよな？」

「え……あ、う、うん、あんたこそ……」

「俺はいい。けどお前は死なれちゃ困る。どいてろ」

俺はいい。けどお前は死なれちゃ困る。

『俺はいいよ。でもアリスは死んじゃダメ』

イオとロキの言葉が一瞬、重なった。つくづく、なんでこんな時にと思う。

ロキは素早く私にまわしていた腕を解くと、突き放すように腕を突っぱねた。その衝撃に足がもつれ、私は地面に尻餅をつく。

そんな私のほうをちらりと見もせず、ロキは、この男は、森のほうを向いた。

ブチッ

頭の片隅、あるいはこめかみのあたりか、そこらへんで何か太い血管が切れた音がする。我慢できず激昂した私は夢中でロキの背中に飛びかかった。

ロキは驚いたようにこちらを見るが、後ろから襲われるという事態は完全に盲点だったのかそのまま倒れた。

彼の上のしかかる私の頭の10センチくらい上を何かがかすめ

る音がして、一瞬ひやりとしたが、それすらもこの怒りの炎を静めるには弱小すぎる。

(なんで？ ふざけんじゃないわよ……、こんなふうになんなら女の子を扱っていいとも思っているの？！)

『俺はいい。けどお前は死なねちゃ困る』

『俺はいいよ。でもアリスは死んじゃダメ』

『俺はいい』

『俺はいいよ』

ぐるぐると、同じ言葉が頭の中で繰り返され、私は目頭に熱いものがこみ上げてくるのがわかった。いけない、と思っっているのに、私は私の意思に関係なく頬を流れおちる。

驚いたように私を見続けるロキの額に、頬に、それは弱々しい雨のように降り注いだ。

「何がっ……何が『俺はいい』よっ！ ふざけんな！ それでかっこつけたつもり？！ ばっ、ばっかみたい！ 私……っ、私許さないからっ！ 命を軽く考えるなんて……絶対許さないからっ！」

自分の常識を押しつけてる？ ふっ、上等じゃない。それがどうだというの？

たとえそうだとしても……行動もしないで後悔なんてしたくない。

こんな、すぐに死ぬ殺すなんて軽々しく口にする馬鹿どもなんかのせいで、後悔なんてしたくない……！！

二発連続で銃声がした。しかしどうやら威嚇の意味でしかないら

しく、銃弾は大幅に狙いを外れて地面にめり込む。

下のほうで「おいバカっ！ 死にてえのか！」と焦った声が聞こえるが、私はロキの襟首を硬く握りしめたまま動こうとしなかった。いや、正確には動けなかった。

こんな時に、足がすくむ。

（はは、サイテー……しめしもつかないじゃない、これじゃあ……っ）

ただ、迷惑になっただけ。

ふわりと、熱い腕が私の頭を守るように包み込んだ。銃声が鳴った瞬間私を抱え込んだままロキは高く跳ぶ。私は眼下2メートルくらいの地面を恐る恐る見下ろしながら、必死で彼の腕にしがみついていた。

あの気持ち悪い浮遊感を感じる前に、ふわりとロキは少し後方に着地する。

怒られると、思った。

邪魔なんだよって、怒鳴られると思った。

それとも、こっちを睨みつけたまま何も言わないのか、と……それが一番きついかも。

もしかしたら、殴られるかも……。私のせいで生命の危機に陥ったわけだし。死んでほしくないと思ったのに、死なせようとしたわけだし……。っ。

私はきつく目を閉じて責めの言葉を待った。しかしいつになっても、何も起こらない。何も言われない。

あ、もしかして無視……？ キツイなそれ、さすがに……。

ふいに、頭の頂上に熱い感触を感じた。

驚いて顔をあげると、戸惑ったような手つきで私の頭をなでる口

キと視線がぶつかる。

ロキの瞳が、惑いの色を隠すかのように細められた。

「えっと、とにかく……だな。極力誰も殺さないし、俺も死なないようにするから……な、泣くな？」

私はきよとんと、困ったように視線をそらすロキを見た。

「おこ、らない……？」

「お、怒らない、怒らないから……もう泣くなって」

ロキはあやすように私の頭をなでる。慎重に慎重に……まるで、壊れ物を扱うように。

私はこみ上げてくる涙をこらえながら、彼の背中に手をまわした。突然の展開に、ロキは私の腕の中であからさまに固くなる。

私は構わず顔をあげて彼と視線を合わせた。たまった涙で視界が揺れる。

「し、死なないでね！ も、もう誰も殺さないで……っ、誰も死なせないで……！」

「わわわわかつたからっ……！ お、俺にくつつくな！」

ロキは顔を真っ赤に紅潮させて私の体を引き離した。べりって音が思わず聞こえてきそう。

私はもう一度消え入りそうな声で「死なないでね」と呟くと、ロキから4、5歩離れた。きつと……いや、確実に、私は邪魔なだけだ。せめてロキの足を引つ張らないようにしないと。

死んでほしくない。そう思うことに、理由なんて必要だろうか。
手を伸ばせば熱を感じられて、指をそっと閉じれば握り返される。
そんな些細なやり取りを終わらせたくないと思うのは……私だけ
なの？

“カード”を持っているとか、いないとか。

“アリス”であるとか、ないとか。

温もりが消えていく、それが嫌なだけなのに。

「終わったあー？」

目前に見えた森の中から間延びした声が聞こえた。いや……森が言っているんじゃない。森の中に、人影が二つ。

私は目を細めて、隠れる気のない敵を凝視した。視力の低下か、ここからじゃぼんやりとしか見えない。

二つの影にはかなり身長差がある。小さいほうは……女？ 大きいほうは明らかに男だとわかるけど、もう一人の性別がわからない。シルエットからして、拳銃をさっきからぶっ放してるのは小さいほうみたいだ。

彼ら二人が、森の外へと出てくる。木の影に包まれていた二人の全貌が明らかになった。

私は驚愕に目を見開いた。

小さいほうは服装から察すると少年、のようらしい。私よりも年下だと思う。蜂蜜色のサラサラとした髪は肩よりも短く切りそろえられている。瞳も同じ、金色だ。どこか甘ったるい雰囲気を持つ。イオのそれと似てはいるが、大人というよりも子供を武器にしているのかな……いや、そんなのはどうでもよくって。

おかしいのは、その頭についている丸い耳。……でた、獣耳。コスプレイヤー！

大きいほうも若く見える。すらりとした肢体はもしかしたら口キよりもでかいんじゃないかってほど。ちなみに口キ自身、私が今までであった中では一番でかい。

髪の毛は……オレンジ？ これまた、ピンクに続いてとんでもない色が出たみたいだ。オレンジ色の髪は小さいほうの少年よりもさらに短く、適当に切り刻まれている。無邪気な光を宿す金色の瞳は切れ長で、恐ろしいほどその体軀に似合っている。現実世界のイケメンモデルのような出で立ちだ。

頭から生えるこげ茶のウサギ耳さえなければの話だが。……ダブル獣耳。いい加減突っ込みのネタがなくなってきたぞこの野郎。

いや、ほんとあのオブジェだけは勘弁してほしいんだけどね……。かつこいい！ と思ってもあれが目に入った途端に変態ちっくになるんだもの。

私は内心呆れながら恐る恐る戦闘態勢を構える口キに聞いた。

「ろ、口キ、あれってもしかして……」

「ああ、見ての通り、あつちのちっちゃいのが“眠りネズミ”のレスト、でっかいのは“三月ウサギ”のマルスだ」

やっぱり、“カードもち”だった。ってことはたぶん、いやたぶんなんだけど、普通の人たちよりよりは強いわけで……それも二人いるわけで……明らかに不利なんじゃないかしら？

「ま、不利だな。奴らは国一番の殺し屋だし、俺銃持ってないし。死ぬかも」

「ちょ、ちよつと待てテメエっ！ 今さっき死なないって言ったじやねえかよ！ 何が「死ぬかも」だ！ 全然可愛くねえよ、むしろキモいよ！」

「はあっ?! 俺そんなバカっぽく言っただろ！ 普通に言っ

ただろ普通に！」

「どつちでもいいよそんなの！ それよりこの人たち知り合いじゃないの？！ 知り合いなんだよね？！ 知り合いだったらなんでもいいなり殺しあいのよ！」

「殺す理由？ そんなの、楽しいからに決まってるじゃん」

私の詰問に答えたのは意外にも間延びした声だった。小さいほう……レスト、だっけ？ レストはへらつと笑って首をかしげる。とても可愛らしい仕草なのに、いつていることはとんでもない。

「殺し合いなんて、遊び以外に何の意味があんの？ それに知り合いっていうのは逆に燃えるよ。相手がどれくらい強いかわってるから、今日こそは屈服させてやるって気になる」

いやいやいや、なんないから。

喉まで出かかった言葉をなんとか飲み込み、私は「そうなの？」というふうには口キを見た。否定してほしい、これだけは何としてでも。

口キは私の視線に気づいたのか、呆れたように首を振った。

「いや、前半は同意できなくもないが、後半は明らかにおかしい。アリス、何があってもレストとだけは中途半端な友達になるなよ。マルスやレーテみたいな親友には手を出さないが、基本的に、『好きになった人はこの手で屈服させてやりたくなるよね』って言うてるような狂人だから。気に入られたら十中八九、殺られるぞ」
「狂人って……この世界でそんな奴ウジがわくほどいるじゃん。それより口キこそどうしたのさ、女の子連れなんて君らしくない」
「うっ……」

言葉に詰まったロキは一步後ずさった。いや、別に詰まるところではないだろうここは。知り合いだとか何とでも言っとけ。なんにも言おうとしないロキのかわりに私は口を開く。

「ロキは私を助けてくれたのよ。イオもだけど」

「はああっ?! ロキが人助けえ?!」

大きく反応したのは意に反してでかいほう……マルスだった。あんぐりと口をあける様は目をそらしたくなるほど美形をぶち壊している。

10メートルは優に離れてると思うのに、マルスの驚きっぷりがここまで伝わってきてしまい、私は思わずドン引きした。

いや、だって一見するとロキと同じタイプだと思うのよ。ツンツンしてるって言うかクールっていうか……。とにかく、こんなに表情がくるくる変わるタイプだとはよもや想像もつかなかったのだ。

私たちを完全に置き捨ててマルスはそのクールな顔を目いっぱい歪める。うっ……ウサギ耳よりも目に痛い……。

「お前マジで大丈夫かよ! イオはわかるぜ、あいつだったら気まぐれでなんだってやりそうだ! けどお前がひ、人助け?! やめろ、似合わないからやめろ! よし、その女よこせ! 俺が証拠隠滅してやる。『ロキは女なんて助けなかった。女は森に出たところで物騒な男に一人ぶち殺されました』!」

「ちよつと待ちなさいよ! なんなのその無茶苦茶な台本?^{シナリオ}! 黙って聞いてればあんた……!」

「そうだよ、バカはちよつと黙ってて」

「おいレスト! バカって何だバカって! だってよ、信じられつか? あのロキが人助けだぜ?!」

「まあ確かに、俄かには信じられないよね」

「だろ?! いや、むしろ許せん。俺の潰すべきライバルがそんな

「甘ちゃんだなんて……やっぱあんた、こっち来い。ぶっ殺す」

殺すといわれてひよこひよこついていくバカがいるだろうか。いや、確かに相手は美形だけど。しかし顔に合わない感情の起伏をもっているらしい。

私は長々しくため息をついてロキのほうへ視線を向けた。ロキもちょっと呆れていたらしく、疲れたように姿勢を崩してる。

「あー……もしかしてお前ら、最初ハナっから本気で殺り合っつもりなかつたのか？」

「まあ、死んでもいいかな程度。発砲はごめんね、銃を打ちたい気分だったんだ」

レストの可愛らしい返答にロキだけでなく私もがつくりと肩を落とした。

何、この脱力感……。まさかこいつらいつつもこんなノリで刃をつきつけ合ってるのかしら……。バカの国だわ、ここは。

レスト自身も呆れた視線をマルスに向けながら拳銃をおさめた。武器を持っているのはマルスだけだ。

「ねえ、早くしまつてよ」

「でもよお……」

「しまえっつて言ってるの。俺の命令が聞けないわけ？ それにあのお嬢さん、俺らは殺せないよ。たぶん“アリス”だし」

さらりとレストが暴露すると、殺人用ナックルを取り外しにかかっていたマルスの顔がはたまた大変なことになった。

今度は本気で直視できなくなったので、私は迷わず目をそらす。

あーいうきりつとした顔であんなに驚かないでほしい……。

「あ、ああ、アリスうつ？！ あ、あれが？！ ウソだろ、だって
“アリス” ってもっと美人なんじゃ……」

グサツ

“アリス” ってもっと美人。その言葉が胸に突き刺さり、私は思
わずふらついた。

し、信じられない……何なのこいつ……！

マルスも同じく信じられないという顔で私を指差している。

心配そうにロキは私のほうを見やるけど、こればかりは彼もどう
しようもないらしい。

そう、乙女心をつき刺すマルスの無神経さだけは。

「どう考えても標準じゃん！」

グサツ

「うつわマジかよ……すつげえ期待外れ。これだったらレストのほ
うが可愛いんじゃないかねえか？」

グサツ　グサツ

「ってかなんかきつそうな女だなあ……なあレストー、やだよ俺こ
んな“アリス”」

グサツ　グサツ　グサツ　……クタツ

ついに倒れこむ私をあわててロキが支える。しかしちらりと見え
たロキの口元が罰が悪そうに結ばれているのに気づいて、私はさら
なる衝撃を受けた。彼の腕にもたれかかりながら、ぺたぺたと自分

の顔を触ってみる。

今まで気づかなかったけど、私ってもしかしてものすごくひどい顔してる？ そりゃ、自分が美人だとかそんなことは一瞬だっと思っただことない。でもまあ真ん中のご真ん中くらいなんだろうなって思ってた。良くも悪くもない、平々凡々な顔。

でもこんなに言われるなんて……すっごい、ブス？ もちろんレストになう自信は全くない。あんな美少年には絶対敵わない。というか今まであったこの国の人になう自信も……正直ない。でも、仮にも男子になわれない顔って……女としてどうよ？

悶々と考えていたとき、つかんでいた腕の存在に気づいた。逃げ出す暇も与えず、私は思いつきりそれを引く。

小さな悲鳴と同時に、ロキと私の視線が交わった。形からして私が彼に抱きついていているのだが、そんなことにも気付かずに黒曜石のような瞳を睨みつける。

ロキは顔を真っ赤にして抜け出そうとしたが、傷ついた乙女をなめるんじゃない。私は死んでもはなすかという思いで彼に抱きついた。

「ロキ、正直に教えて。私ってもしかして……すっごい、ブス？」

「あああああれはマルスの口が悪いだけで……！」

「いま聞いてんのはそっちじゃない。あいつはどっちにしる後でシメるからいいのよ」

「し、シメるって……お前怖えよ！」

「正直に言えっつてんのよ。ねえ、私、ブス？」

これじゃあまるで口裂け女だ。もっとも彼女は「私、美人？」だが。

ロキは視線を泳がせようとするが、そんなことを許すほど私は甘くない。彼の首根っこをつかむと、強制的に私のほうを向かせた。

「じゃあ質問を変えるわ。私は“アリス”に相応しい？」

「いや、んなこと言われたって俺お前以外の“アリス”なんて見たことないし……」

「期待はずれだった？」

「そ、想像とは全然違ったけど……」

「もう、いい」

ゆるりと、彼の首をはなす。彼に触れていた部分が不思議と熱い。彼の高すぎる体温が触れているうちに移ってしまっていたのか。

私は右手を硬く握りしめてうつむいた顔にあてた。閉じた瞳の奥から熱いものがこみ上げてくるが、今は堪えないと。

「ほら、レーテのとこ行くんでしょ。とりあえずレストと……マルス？　ここ、とおしてもらっていいわよね？」

今まで黙って事の成り行きを見守っていたレストがにっこりと可愛らしく笑って頷いた。その笑顔がまた、私の傷をえぐる。私よりもずっと可愛くて……きつと“アリス”に相応しい。

私よりもずっと“アリス”に相応しい女の子なんてそこらじゅうにいたのにね。

私はまだ顔を紅潮させているロキの腕をつかむと、すたすたとレスト達のほうへ歩み寄った。ロキは戸惑ったように私を見るが、大人しく付いてくる。

彼らの間をすれ違う時、マルスが口を開きかけたのが見えた。

また、いろいろ言われるのかしら。相応しくないって？　シヨックだった？　お前なんて、“アリス”やめちゃえって？

私だって　好きでなったわけじゃないのに。

私は耳をふさぎなくなる衝動をこらえて、彼の言葉を待った。

「えっと……悪かったよ。いいすぎた」

突然の謝罪に、私は驚きで目を見張る。しかし隣にたたずむレストの存在で納得がいった。

私がロキを詰問している間に、きつと彼が何かを言ったのだろう。ならそれは……マルスの本心じゃない。

私は一度俯き、完璧な笑顔を作ってからマルスを見た。

「大丈夫、気にしてないし」

理性のすべてをかき集めて作った仮面だ。そう簡単に破られてたまるか。

予想どおり、マルスの顔がはつきりと緩んだ。隣にいるレストの顔もどこか安心した感じがする。

大丈夫、大丈夫……。傷ついてなんか、ないんだからね。泣きたくもない。泣かない。泣かない……っ！

「君たち、マスター……帽子屋のとこ行くんだよね？ なら俺らも同行して構わないかな。情けないことに迷っちゃったみたいで……」

レストの提案に私は愕然とした。正直嫌だと叫びたい。こんな脆い理性、いつまで続くのか分からないのに……誰にも、涙なんて見られたくないのに。

しかしそんなこともできるはずなく、私は下唇をかみしめて頷いた。

「えー、俺まだ冒険したいんだけど……」

「煩い黙れこの無神経。もうロキに紹介されてると思うけど、俺がレスト、こっちのバカがマルス。よろしくね、アリス」

そういいながらレストは自分の“カード”を懐から出して私に見せた。しかし絶対私に渡そうとはしない。 信頼されてないんだ。

それにならってマルスも“カード”を見せる。この世界では名刺のようなものなのだろうか？

The Dormouse…眠りネズミ、と書いてあるが、ほとんどかすれていて見えない。“チェシャ猫”ほどではないが、ひどく傷ついている。その下には小さな文字でadviser…相談役と書いてあった。

驚いてマルスのも見てみると、The March Hare…たぶん三月ウサギと書いている下に全く同じ単語が書かれている。戸惑ったようにレストを見ると、あの輝かしい笑顔でうなづいた。

「そ、俺ら“お茶会メンバー”とかは主に君の“相談役”。というかほとんどの“カード”がそうじゃないかな。ま、“白ウサギ”や“チェシャ猫”…それと“女王”は違うけど。“女王”は確か…“処刑人”、だっけ？ ま、あの人らしい役目だった気がするけど」
「そ、そう…その“処刑人”さんから逃げてる最中なんだけど…
…急ぎましょう」

私は“女王”の名前に刹那に怯えた。そうだ、いつ追ってくるかわからない状況なのだ。たとえルアが止めるとしても、あのフレイムなら私を殺すことだって冗談なくやりそう…。

今はまだ問題が残ってる。だから、私が“アリス”に相応しいかどうかなんて、たいしたことじゃないじゃん。

私は必死でそう言い聞かせて、先をゆくレスト達の背中を追いか

けた。

ふいに、腕を後ろから引つ張られてバランスを崩す。驚いて後ろを振り向くと、ロキの焦った瞳が見えた。

言いにくそうに口を動かすが、私の左耳にそつと唇を寄せて囁く。かかる息が熱くて、顔が赤くなってしまった。気づかれませんかよ。うに……。

「べ、別に……俺は、お前のこと……か、可愛いと思う」

「はい？」

突然何を言い出すのだと彼の瞳を見ようとするが、直後さつと視線をそらされる。口を押さえながらあからさまに目を合わせようとしないロキの顔は、私なんか比にならないほど真っ赤に染まっていた。

「だ、から……えっと……“アリス”に相応しくないとか……そんなこと、ねえから」

「ありがとう」

私はこみ上げてくる涙を必死でこらえながら、笑顔の仮面をかぶる。

……危ない。もう少しで、理性が崩壊するところだった。こんなくだらないことで泣きたくない。理性がそう叫んでいるのに、感情がほとんど言うことを聞かない。

ならせめて、一人になるまで泣きたくない。

ロキの言葉は無論、慰めだという認識だ。本気で言っているわけない。だから絶対に、「本当？」だなんて聞かない。そこで「ウソ」って言われたら……つらすぎる。

『アリス』に相応しくないとか……そんなこと、ねえから』

私はロキの言葉を思い返して、誰にも見えないように悲しそうに笑った。

慰めでも、いい。今はその言葉で理性をつなげる自信がある。一人きりになるまで泣かないでいられる自信がある。

私は顔をあげてもう一度「ありがとう」と呟くと、ロキに向かって笑ってみせた。ロキの顔が瞬間真っ赤になる。この子、おもしろいなあ……。

「べ、別に特別な意味があったわけじゃねえよっ！ ほらさっさと行くぞ！」

ロキはぶつきらぼうに叫ぶと、荒々しく私の腕をとりずんずんと森の芝生を踏み分けて進んだ。うーん……ほんとおもしろいなあ……。

私はひかれるままに彼の後を追いつつ、陰でくすりと笑った。

太陽は地よりはるか高くに昇る。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。以下から作者のグダグダ後書きが始まります。

はい、新キャラ2人登場です。

一人はシヨタ系のレストくんです。眠りネズミはやっぱりちっちゃめだよねえーなんてことを前々から思っていたのでこんなことに…ごめん、レスト、悪気はないのさ。身長は161、アリスはちなみに162です。

で、もう一人は女の敵、マルスです。初対面のアリスにあれはひどい、ひどすぎます。本当のことでも言っていることと悪いことがあるんです。身長は179、イオ&ロキは惜しくも178と本作の中では一番でかいです。

さて、そのことはとりあえずおいといて…。

今回は宣言通りロキアリでいきました。ツンデレコンビで大丈夫かとはらはらしていました、思いのほかアリスさんは大丈夫だったそうです。問題はロキのデレっぷりですね…。本作分のデレをここで出しちゃったんじゃないかと思うほど。

あ、でも考えてみればアリスがツンツンするのは主にイオなんですよね。ルアにも少し。普段は冷めた少女って感じですよ。

さて、今回は影の薄いレーテくんが出てきます。ほんと影薄いです。いくら出てても影薄いです。ep1, ep2なんて主人公だったはずなのに、いつのまにかイオの存在に押しつぶされてたという影の薄さ…。ま、がんばれ。

出てくるキャラは多いですが、あと少しなのでがんばって覚えてみてください！せめて好きなキャラだけでも！

覚えやすくなるかどうかはともかく… も付けときます！

キャラの綴り、と由来

アリス… Alice や、そのまんま

イオ… Ino これだけ考えなしに付けたんだよ

ロキ… Loki 世界を終わらせる者

ルア… Lure 誘惑

レーテ… Lethe 忘却

フレイム… Flame 炎

レイズ… Lazy 怠惰

マルス… Mars 三月

レスト… Rest 眠り

アリスとイオの扱いがひでえ…。

【chapter・0】春だよ！出逢いだよ！発情だよ！

（前書き）

これは本編とは全く関わりのない番外編です。

いつもよりも数段に恋愛要素（後半）&ギャグ要素（前半）がこいです。

本編のイメージを壊したくない方はお気を付け下さい。

【chapter・0】ep1春だよ！出逢いだよ！発情だよ！

どうもこんにちは、今回司会役を務めさせていただきます、レーテです。

突然なんだ、と。はい、いい質問です。

僕もいきなりマイクを押しつけられて戸惑っているんですよ。しかも押し付けた作者本人は押し付け逃げです。はい、殺してやりたいと思いましたがよ、もちろん。

えー、今から作者が残していったメモを読み上げますね。うっわ、きつたない字…。

『はじめまして、もしくはこんにちは、作者です。』

突然ですが、ほんと突然ですが、シリアスな話の間にすみません、番外編を作ってみました。

ほぼギャグなどで埋め尽くされているので、本作のイメージを壊したくない方は回れ右してください。

本作とは全く関係ありません。

なお、イオとロキは幽体離脱(?)してそれぞれに顕現しているようです。

え、これを作った理由？

..... あっ、決してシリアスな雰囲気
押しつぶされそうになったとかそんなんじゃないやありませんからね？

違いますよ、違いますから、違うはず..... たぶん』

とのことですよ。まったく、どうしようもないバカですね、あの作者は。

それにしてもなぜ僕が司会者なんでしょう...。めんどくさいなあ。

それでは、皆さん盛大な拍手を！

わが小説のヒロイン、ツンデレと名高い、このごろは「イオ専門ツンデレ」と囁かれている、アリスさんです！

「ちよつと待てやコラ！誰もあのタイトルには突っ込まないわけ？！」

えーっとお次は…

「無視シカトすんなつ！2つ目まではいいんだよ、しかし最後のは何？！は、発情ツつて…」

あ、すみません、気がきかなくて。発情の意味は「大辞林国語辞典」によると「主に哺乳類の性的に」

「説明しないでいい！！！」

あーもううるさいですね。こちらとらちやつちやと始めてちやつちやと終わらせたいんですよ。

わかります僕の心情？！本編での影は薄いわ過去編ではほぼイオが主だわ…仮にもあれ僕の話ですよ？！それなのにいきなりこれの司会者になれって…！んな虫のいい話があるかっ！！せめてこの番外編では花を持たせてやるって？何の慰めにもならん！

「れ、レーテ…？なんかキャラ変わってない？」

変わりたくもありません。とにかく今は黙っててくださいアリス。話が進みません。

「いやでも発情…」

黙っててください。

「あの、発じよ……」

黙りなさい。

「……………」

はい、よろしい。

では先に進ませていただきます。あ、皆さま拍手を忘れないで下さいね？

続いては、……えーっと、本作のヒーロー、ルアイオロキです！

「ちょっと待ってください、ヒーローって普通一人じゃないんですか？」

うっ

「あのさー、せめて一人一人紹介するとかないの？なんか繋がられてるし」

うっ

「おいつ、もしかしてこの小説ってヒーローまだ決まってるのかよ……」

うっ

コホン。えー、なるべくなら読みあげたくなかったのですが…。作者のメモ2を読みますね…。

『だってまだ誰もアリスと決定的なところまでいってないんだもん』

「……………決定的なところ、ですか」
「へええ……………それはつまり、この場を借りて既成事実を作れと？バカ作者にしてはなかなかの心遣いじゃん」

「は……………？あ、あの、二人とも……………？なんか目が据わってない……………？」
作者の言葉を聞いた瞬間、ルアとイオの瞳に妖しい光が宿りました。ルアはアリスの右手を、イオは左手を強引に引っ張っています。あー、非常に痛そうですアリス。

「ちょっとレーテ、間の抜けた敬語で実況しないでよ。甘い雰囲気
がぶっ壊しじゃん」

「そうですよ、貴方の乏しい表現じゃとても足りないくらい僕
の愛は深いんですから」

……………へえ、そういうこと言う。じゃあ覚悟しときなさいよ、あなた
ら。

「んなこと言ってる場合じゃないでしょうがっ！！いい、痛い痛い痛
いいいいっ！！はなせてめえらっ！！」

アリスは悲痛な声で彼らに訴えた。しかし二人は決して彼女の手
はなそうとしない。

俺のハニーをはなせよ、下衆、とルア。

「はあっ?! 言っていないし! ってか誰だよ」

そっちこそ、俺の仔猫ちゃんをどこに攫う気? とイオ。

「ちょっと何言ってるの。てか猫って俺のほうじゃん」

お願い、はなして…! どっちかを選ぶかなんて、そんなこと私には無理なのよあつ! だ、だって二人とも大好きだから…!!
アリスは泣き喚きながら崩れ落ちた。

「こら待て。泣いてないし崩れてないしそもそもこいつらなんて大っ嫌いだよ!!」

ふわりと、アリスを背後から抱きしめる黒い影ができる。アリスを救うべく現れた彼はひらりと軽々しく跳び、イオとルアから遠ざかった。

白い指先が彼女の細い顎をとらえ、上向かせる。驚きで目を見張るアリスの目前には、悪戯っぽい光を宿した黒い瞳があった。

アリスは俺の…だろ?

「だだだだ誰がんなこと言ってたって?! レーテてめえいい加減にしねえとぶっ放すぞっ!!」

ありゃ、ロキが真っ赤になって怒ってしまいました。あー、もうわかりましたよ。わかったからさっさとその銃おろしてくださいってあーあー、ヤダヤダ、ちよっとからかっただけでカッかしちゃってさ。これだからこの頃の若いもんは。

「レーテ、貴方爺臭くなつたね」

うるさい。世界中の高齢者に土下座しなさい。

「それだから人気がないんでしょう」

余計なお世話です。人気がないのは出番が少ないからです。

「ねえ、ちよつと…どうでもいいんだけど…ロキ、そろそろはなして？」

「~~~~~っ!!わ、悪いっ!!」

ああ、あんたたちまだくつついてたんですか。ロキは顔を真っ赤に染めながら慌ててはなれたようですけど。あ、意外とアリスは余裕の困った表情。なるほど、ロキアリだとロキが一方的にツンデレになるんですね。

しかしそんな二人をじとーっと睨みつける二つの視線。

イオが今度はアリスの背後に回り彼女の首に腕を絡ませました。わざと熱い息が耳元にかかるように囁きます。小癩です。

「ねえ…俺以外の男にくつつかないでよ。俺以外見ないで。じゃないと…お仕置き、しちゃうよ?」

「なななな何言ってるんだお前はあぁっ!!はなせ黙れそのイカレた口をふさげっ!!」

「へえ?アリスの唇で?」

「なっ…………!!」

「あは、アリス真っ赤ー、かわいい」

「ここら、イオそこまでにしときなさい。もう一人のウサギのほうがいいことになってますよ。怖いですよ、あの眼力。てか絶対殺す気ですよ。」

「アリスからはなれる、変態猫」

「ヤだね。アリスは俺のだ。発情ウサギにも誰にもあげない」

「誰が発情ウサギだつ。しょっちゅう発情してんのはお前のほうだろっ!」

「うん、そつだよ。今もアリスに欲情してる。ねえアリス、食べちゃっていい?」

「~~~~~っ?!いつ、いやだっ!」

「そこまでにしときなさいって。」

「ここらここら、この小説にRつける気はないの。全年齢対象なんだから。」

「クソ猫：殺す」

ほらルアも。

残酷描写の注意をつける気もないんだってば。

「あ、ルア妬いちゃった?大丈夫、ルアも後でたっぷり可愛がってあげるから」

問題発言をさらりとかますな。

趣味嗜好をソツチ系にする気もないんです。

「まったくあんたらは…ほらほら、問題起こす前にアリスから離れなさいイオ。」

「え、アリスの肌柔らかくて気持ちいいのに」

「はなれて下サイ、ええ、ぜひとも早急にはなれて下サイ」

「ってまたアリス棒読み？いい加減甘い声で“お願い”……」

「はなれるってんだよこの変態猫がっ！！」

おー、見事にアリスの肘鉄が鳩尾に決まりました。痛そうです、あれは痛そうです。

さて、問題児が悶絶している間にさっさと話を進めることにしましょう。

この場を借りてちょっと皆さんのラブラブシーンを書いちゃいましょってことでこの番外編は作られたそうです。

「……聞くの嫌だけど、だ、誰の？」

そりゃ勿論、アリスとその他全員です。

男同士がいちゃいちゃしたら気持ち悪いでしょう。

「ってことはやっぱりこの場を借りて既成事実を作るわけですか？」

人畜無害な顔でそういうこと言わないで下さい、ルア。

大丈夫です、濡れ場は一切入れるつもりはありませんから。って口キ、どうしました？あ、もしかして今やらしいこと……。

「かかかか考えてねえよんなことっ！！」

の割には顔が真っ赤ですが。

んもっ、お茶目さんなんだから

「……」
「……」
「……レーテ」

……言わないで下さい、イオ。すみません、目立ちたかっただけです。ええ、どうせキャラじゃないですよ。

だって出番が少ないんだもん……。こくら辺ではっちゃけておきたかっただんです。

しかも、しかもですよ？今回の番外編のお題は『2人でプリクラ？！トウーショット』とのことなのですが、僕は出ないんです。こんなところにも出させてもらえないんです、僕は……。

「……あー…お、落ち込まないで、レーテ。だ、大丈夫だって。私はレーテのこと好きだし」

アリス……。

「あっ、アリス俺を差し置いて浮気？！許さないからね、そんなの」「うるさいバカ猫。ね、だから早く始めましょう？」

ううっ……はい。

では気を取り直して、一番手はルア、前に出てきてください。

「僕…？と、アリスだよね？」

「え、いや私は遠慮……」

勿論ですよ。さ、アリスも前へ出てきてください？

「いや、だから私は遠慮しとき……」

前に出てきてください？

「え、遠慮……」

早く始めるんですよね？

「あ、あの……」

ですよね？

「……はい」

よし、いい子です。

では皆様、心の準備は出来ましたか？それではどうぞ、お気の済むまでお楽しみください。

第一幕 2人でプリクラ？！ラブラブトゥーショット ルアア
リ編

「ルア……？ちよっといいい？」

私は恐る恐るドアを開け部屋の中を覗き見た。

先程からノックをしても何の返事もなかったので勝手に入ったのだが……留守だろうか？私はがっくりと肩を落しながら、部屋に足を

一步踏み入れた。

ルアの部屋は思ったとおり、きれいに整頓されていた。家具は少ないといえども、塵一つないその部屋は清潔という印象を受ける。かすかな石鹸の香りがし、私は思わず小さく笑った。ルアらしい部屋にどことなくほっとする。

「あれ、アリス？どうかしましたか？」

突然横から声をかけられて驚いた私はあわててそちらに目を向けた。しかしそれ以上に速いスピードで目をそらす。その間約0.2秒。あまりにも早い動作にルアは髪の毛から滴り落ちる雫をふき取りながら私のほうへ近づいた。

「大丈夫ですか？」

心配そうに声をかけるが、それはかえって私には逆効果だった。

（ただ大丈夫じゃないわよ！はなれなさい！とりあえずはなれなさい！）

「だ、大丈夫よ。心配しないで？」

口ではそう言うが私は内心焦っていた。

目の前にいるのは超美形のウサギ男、ルアだ。そこまではいい、そこまではいいのだが…。
なんだろう、この格好は。

ルアはいつもの黒いスーツを着ていなかった。それどころか、白いシャツもきちんとしていない。いつもの服の下に来ているのと同じであるう白いシャツは第三ボタンまで解放されていて、さらに裾も

ズボンの外へと飛び出していった。袖のボタンも止められていないことに気づいた私は、思わず真っ赤になって目をそらす。ここまでラフなルアは初めて見る。白いシャツも汗でべったりとくっついていてなのか、半ば透けてその下の筋肉を思わせた。風呂上がりなのだろうか、濡れた黒髪はさらに色気を醸し出している。

正直、目のやり場がなかった。

「いったいどうしたんです？ 貴女が僕のとこに来るなんて珍しい」

（うぎゃーっ！！物憂げに髪をかきあげるなっ！眠そうに目を細めるなっ！）

「い、いや、大した用事じゃないんだけどね…」

私は羞恥で狂いそうになるのを必死で抑えつけてなるべく平気そうに笑う。

何のためにここまで来たかわかってんのか、自分！

「あ、あのさ、ルア、よかったら二人でプリクラでも撮らない？ お、思い出作りに…」

思い出作り。そう、思い出作りだった。どうせこの世界に長くいることはできない。なら安定している今のうちに…。そう思って私は城に仕えるメイドたちをお願いして簡素なドレスまで用意してもらったのだ。

ルアは思わぬ提案にパチパチと目をしばたかせると、次の瞬間まばゆいばかりの笑顔を見せた。

その笑顔に不覚にも私は胸を高鳴らせてしまう。

「はい、喜んで」

本当に嬉しそうに笑うものだから、私も思わず同じ笑顔で笑い返してしまった。

その瞬間、ルアの動きがぴたりと止まる。様子のおかしいルアに私は不安げに彼の目を見上げた。

「ルア？」

刹那。

とんでもない勢いでとんでもないことが起こった。痛いほどきつく腕を引つ張られ、すごい体制のまま私はバランスを崩す。小さい悲鳴を上げ、私の軽い体は手近にあったベッドへとダイブした。かすかに痛む背中に思わずうめき声をあげ、文句を言おうとルアを睨みつけると、その水色の瞳と目があった。

どこか危なげな光を最奥にちらつかせるその瞳に、私は無意識に戦慄する。怖いほどまでに、深い瞳。深い深い…手を伸ばしたら、吸い込まれて二度と帰ってこれない。

ポタリと、わずかな雫が彼の前髪をつたい私の額へと落ちた。そのわずかな感触に、私はようやく我に返る。

「る、ルア？何この格好…」

気が付いてみればとんでもなく恥ずかしい状況だ。この部屋には男と女二人きり、しかも私は現在進行形でベッドに抑えつけられている。逃げ出そうにもルアの手は私の腕をはなそうとしない。しかも、しかもだ。ルアは風呂上がりで前もほとんど肌蹴ている。私のほうもいつもの服に比べれば恥ずかしくなるほど露出度の高いドレスを

着ているのだ。

えーっと、これはもしや、俗に言っ…

危ない状況？

「ちょ、ちよつとルアあつ?!」

慌てて腕を突っぱねてみるが力の差がありすぎた。どんどんその美麗な顔が近付いてきて唇と唇が触れあう、寸前。にやりと、その唇が意地悪い形に歪んだ。

「何かされると思いました?」

唇に触れる彼の熱い吐息に、その言葉を理解するよりもまず先に頭が沸騰してしまう。私は顔を真っ赤にしながら彼を恐る恐る見やる。その瞳が熱く濡れていて、それがまたルアを誘っているのだとも知らずに。

「は…?」

クスツとルアは小さく笑う。その笑いがあまりにも近すぎて、私は高まる動悸を抑えることができなかった。

何せ彼はこれらのタレントなんて比にならないほどの美形なのだ。

こんなことされて気が狂いそうになるのは、私だけではないだろう。いや、むしろ気が狂わずにいられる私はすごい。

「節操のない男の前であんな風に笑ったら、まず間違いなく何かされるでしょうね。アリスはいつも無防備すぎるんです。いいですか、アリス。今後一切僕以外の男の前であんな顔しないで下さい」

「は、はあぁっ?! 私がどんなひどい顔したってというのよっ」

大体あんな顔って言ったらルアのほうがよほど顔はいいに決まっているではないか。私がいくら素敵な笑みを浮かべても所詮ルアにはかなわない。

しかしルアはちつともそうは思っていないらしく、水色の瞳を細めて笑った。

「食べたくなるような顔」

「~~~~~っ?! そそそういうセリフはイオの得意分野でしょうがっ!」

「僕だって欲情くらいしますよ」

「よっ、よくじよ……」

欲情って、アレよね? ほら、そういうベッドシーンで…。

いや、よそう、考えれば考えるほど生々しい。えっと、つまりは…

相当危ないですか?

はい、危ないです。

「る、ルアっ!」

「はは、半分冗談ですよ」

じゃあ残りの半分は? そんなことは口が裂けてもきけなかった。

私は極限まで顔を真っ赤にして、必死に抵抗した。ほんの少しだけ、ルアの顔がはなれる。

「そういうことしたら絶対口きかないからねっ! く、空気扱い、空気扱いにしてやるんだからっ!」

「あはは、アリスが“そういうこと”した相手を気にせず日々を暮

らすなんて器用なこと、できるとは思えませんが」

まさに正論デス…。

しかし自分から少し身を引いたところを見ると、それほど攻め立てる気はないらしい。私はほっと安堵のため息をついた。

「それよりアリス？さっきのこと約束して下さい」

「さ、さっきのこと？」

と言われても覚えがない。私が不思議そうな顔を見ると、ルアはまた顔を近づけてきた。慌てる暇もなくあっという間に先程と同じ間合いになる。

「僕以外の男の前であんな顔、絶対にしちゃいけません」

「か、顔近い顔近いっ…！」

「ね、約束して下さい。はいつて言わないと…」

「い、言わないと…？」

いけないと本能が叫んでいるが、聞かずにはいられなかった。ルアはそれはそれは楽しそうに、笑う。

「この場で襲います」

「はいっっ！！神に誓いますっ！！」

「あれ、残念」

(残念じゃねえっ！！)

私は心の中で絶叫しながら右手に拳を握っていた。とんでもない発

言をされ、処女且つ純情な私は怒りが簡単に羞恥を凌駕していくのを感じていた。

ルアがあっさりと私を解放した途端、拳が彼の顔面めがけていくだろう。というかそうでなければ気が済まない。

痛いほどに強く押さえつけられていた手首から、熱い体温を残してルアの手がはなれる。ルア自身もにこにこ満足げに笑いながらベッドから身を起していた。

私は待つてましたとばかりにベッドの上で戦闘態勢をとると、大きく拳を振り上げる。

「こんのド変態があっ!!！」

その心からの叫びとともに拳が彼の顔面にめり込む、はずだった。

しかし拳はひらりとかわされ、空を切る。それどころかルアは素早くその腕をとるとグイッと強く引っ張った。

いとも簡単にバランスは崩れて、私はルアの胸に飛び込む。ルアは今度は何もせずに私を優しい仕草で抱きよせた。

(あ、あれ、何もしない…?)

心から安心したその瞬間、私はこの時の自分をひどく呪うことになる。

一瞬の出来事だった。見とれるほど形のいい指先が私の顎をとらえ、優しく上向かせる。

驚きで目を見張る私の額に、温かいものが触れた。

「怪我はありませんか？」

にこやかにルアは笑うが、私はそれどころじゃない。

呆然と、笑みをかたどっている唇を凝視する。というよりも、それ以外目に入らなかった。

い、今もしかして…

「あ、唇はまたの機会に取っておきますね？一気に食べたら面白くないでしょう？」

顎を支えていた指先がずりりと移動して、私の唇に触れる。その瞬間。

私は完全に発狂した。

「まったくひどいですよ、アリスったら…たかがデコチューでこんなにぶつんだから」

ぶつくさ言うルアを私はギンツと睨みつけて、「当然の報いよ」と冷たく言い放った。

額に突然キスされた私はあれから怒りに怒り狂って、ルアに背負い投げをかけた。こればかりはルアも油断していたらしく、受け身を取れずに背中を思いつきり打ちつけていたみたいだ。ほんと、柔道だけはまじめにやっというてよかった。

勿論それで私が逃がすはずもなく、私は倒れたルアの腹部に何度も蹴りを入れた。いわゆる一人リンチってやつだ。きつと数か所あざが残るだろう。

写真の前ということで顔だけは許してあげたが…もし奪われていたのが額ではなく唇だったら、顔が変形するほど殴ってた、と思う。

「機嫌直して下さいってば、ほら、プリクラ取るんでしょ？笑って笑って」

「……ったく」

私は呆れたように溜息をついた。ほんと、調子がいいんだから。許す気にはなれなかったが、ルアが何とか私の機嫌を直そうとしている姿が面白くて、思わずクスツと笑ってしまう。その笑いを見たルアの顔が、これ以上ないほどの喜びに輝いた。

「アリス、じゃあ肩に手を置いていいですか？」

「はあ？肩に手を置くって…」

「変なことは絶対しませんから！お願いです！」

「……もう、仕方ないなあ…」

うるうると涙を浮かべて必死に懇願するルアに、私は笑いながら承諾する。さすがに今度ばかりは懲りただろう。

温かい手が、私の肩に置かれた。その心地よいぬくもりに、私は安堵の息をついて極上の笑みを見せる。

カシャリと、小さな音が続いた。

ルアのそばにいと、すごく自然に笑えてて心地いい。

そんな瞬間をカメラに収めたプリクラは、私の宝物の一つになった。はた目から見るとただのラブラブカップルにしか見えないことに私は苦笑しながら、その夜眠りについた……

第二幕 2人でプリクラ?!ドキドキトウーショット イオアリ編

「あ、いたいた、アリスー」

嫌な声が聞こえる。というか嫌な色が視界に入った。

……幻聴だわ。うん、そうそう、幻聴幻聴。紫色なんて見えないサ。私は自分にそう言い聞かせると回れ右して歩きだす。夜中森を歩くもんじゃないな。変な幻聴を聞くことになる……。しかし背後に舞い降りた長身の影に抱きすくめられて、逃げようとした足は宙に浮いた。やはりとは思ったが、きつと全速力で逃げても同じ結果だったろう。

「久しぶりー。アリスのドレス姿、見るのはじめてかも。一段と可愛いね」

「あー、今日のアんたは一段とウザいわ……」

くるりとイオは私の体を腕の中で回して目を合わせさせた。闇の中でもその金色の瞳だけが異様な輝きを宿して私を射すくめる。

私はスキンシップが激しすぎる紫の猫男に捕らえられ、げっそりのため息をついた。

久しぶりって…昨日会ったわよね？

しかしイオにはそんなことは大して意味がない。一瞬であろうと一生であろうと、アリスと離れている時間は退屈な時間なのだ。

そんなことに気がつくはずもなく、私は彼の腕から逃れようと必死で抵抗し始めた。彼にあつて初めてしなくちゃいけないことが抵抗することばかりなのだから、泣けてくる。

「いい加減はなしなさいっ！つてかなんでそんなに軽々しく持ち上げられんのよっ？！私重いわよ？！」

足をバタバタさせるものの、空を切るばかりで一向に地面につかない。私だって小さいわけじゃない。それどころか162あるんだから絶対大きいほうだ。体重もそれに見合っている。

なのにこの男はいつもこともなげに私を持ち上げ、自分の目の高さに合わせてようとするのだ。この細い体のどこにそんな筋肉があるんだか…。

「え、アリスは全然重くないけど？すごく細くって、抱きしめたら折れちゃうんじゃないかって思う」

言葉ではそういいながら、イオは私の体をきつく抱きしめた。ようやく足が地面についたけれど、今度は息が苦しくなる。

「い、イオっ！折れるっっていうか、ち、窒息する…！」

「あは、ごめん」

急に抱きしめていた腕を解かれた私はその場に崩れ落ちた。息を悠長に吸うなんて愚かな真似はしない。私は素早く息を吸うと低姿勢のまま逃走をはかった。

しかしドレスのすそをあらかじめイオに踏まれていて、あっさりとその逃走劇は幕を閉じることになる。

ともすれば無様に転んでいただろう状況に私は青くなりながら、イオと目を合わすまいとした。

合わせちゃだめだ。ていうか合わせたらなんか危ない気がする。

「逃げないでよ、アリス」

「逃げたくもなりマス」

「なんで？」

「追いかけてくるからデス」

「逃げるから追いかけるんじゃない。止まれば追いかけないよ」

「止まったら食われマス」

「あは、じゃあ食われてよ」

サラっという…。私は棒読みで受け答えをしながら何とか逃げ出すツールを考えていた。冷や汗がたらたらと流れる。

うーん、これはもしかしなくても危ないかもしれない。

この変態猫と長くいいことが起こったためしはない。何とか一秒でもこいつから離れなければ…そう思えば思うほどに感情は先走りするばかりだ。

「ねえアリス、俺を見てよ」

イオは私の体を引き寄せて無理やりこっちを向かせた。ほんの一瞬だけ、足が浮く。

私は不覚にもその金色の瞳を見てしまった。その瞳の奥に感じた悪戯な光に足がすくみあがる。

「アリス、俺とプリクラ撮ろう？」

イオはこれほどないほどに無邪気な笑顔を浮かべていた。誰をも魅了するようなその笑顔に私は顔が熱くなるのを感じたが、はたと思い返す。

(こいつの辞書に無邪気なんて言葉はあったか?)

いくらなんでもそれはないだろうという問いかけ。しかし心の中の声はあっさりと答えた。

あるわけねえだろバーカ。

「……い」

「い？」

「嫌っ!!」

そう、こいつが無邪気というときは大抵とんでもないことを考えている時に限るのだ。警戒した私は一歩間をとろうとするが、腰にまわされた腕がそれを阻む。

思いつき拒絶されたというのにイオの「無邪気な」仮面はびくともしていなかった。それどころか、想定済みだったかのように私の腕と腰をとらえている。

逃げ場のない私はただただイオを睨みつけるしかない。しかしそれもいつまでできるものか…。

「だってアリス、この間ルアと撮ってたじゃん。なんであいつはよくて俺はダメなの？」

グイッと腰が引き寄せられ、イオは囁くように耳に唇を近づけた。耳元にふきかかる熱い息に私の体は無意識にビクンと震える。その反応を感じ取ったのか、イオの忍び声がすぐ横で聞こえた。

ヤバい…。り、理性が吹き飛びかけてる…。
落ちつけ私！ていうかこういう反応したらイオがますます変な行動に出る！耐えろ、耐えるんだ私！

私は心の中で必死に自分を励ましながら、荒くなりかけている息を

整えた。

「み、見てたの？」

「ううん、聞いただけ。でもさ、アリス。俺が妬けないとも思っ
た？」

くすくすと、楽しそうな笑い声が耳朶をうつ。カアツと吐息が触れ
る耳から次第に熱が広がっていくような幻覚に襲われ、私は耐えき
れずに目をぎゅっとつぶった。しかしそれは逆効果だったようで、
視覚が失われる分ほかの五感が鋭敏になってしまう。

「はあっ?! な、なんであんたが妬くのよ! わけわかんないっ」

「それ、本気でいってんの？」

突然彼の声が低くなり、私は戸惑ったように目を開ける。とたんに
真剣さははらんだ金色の瞳と視線が価値あって、私は体がみるみる
熱くなっていくのを感じた。トパーズをはめ込んだような2つの瞳
は、私の視線を釘付けするかのごとくぴたりと止まって動かない。
ぞくりと、背筋が凍った。

それは快感に似た、恐怖。彼が不機嫌になるのに対して、何かされ
るのではないかと恐怖し、またそれを望んでいる。

こんなの、知らない。こんな感情^{わたし}、知らない。

ふわりと、突然体が大きく浮いた。おなかのあたりに固く熱いもの
を感じ、視界は黒で埋め尽くされている。そこで私はようやく、俵
かつぎされているのだと気づいた。

(お、お姫様だっこじゃないんだ…)

以前そうされたことがあるので、そのことにひどく安心し、そして

はっと気付く。

(えっと…これ、もしかして強制連行?)

「ちよ、ちよっとイオっ!!」

両足を腕で抑え込まれ、これじゃあ抵抗も何もあつたものじゃない。必死で腕を振り上げてイオの黒い背中を叩いてみるが、大して効果はないように思われた。

いや、そもそも不意打ちだからこそ今までの攻撃は効いていたのであつて…そもそも自分が相手にするこの変態は「誰にも負けたことないんだよー」と豪語するほど強いのだ。

勝てるわけない　プリクラへ　個室で二人つきり　処女喪失

まずい。非常にまずい。

そう思ったのは本能だったか。

「どこに行くのよっ!」

「どっつて、プリクラ」

答える声はいつも通り、笑いを含んだものだ。私はほっと安堵のため息をつくが、やはり危険な状況であることを思い出し、彼の耳元で叫んだ。

「おーろーせーっ!!」

哀れな子羊の声、狼の耳には届かず。

「あー…っと…ちょっと、近すぎない？」

私は頬がひきつりそうになるのを必死でこらえて、ぎこちなく笑った。

小さな部屋の床に優しく下ろされ、しばらくこのにらめっこは続いている。私はへたり込んだまま左手で逃げ道を探すが、あいにく背中には壁、両脇にはイオの引き締まった腕、といったありさまだ。逃げられるはずがない。

いや、しかしこの場は逃げなければまずいのだ。

目の前には、嫉妬してしまうほど綺麗な顔があった。ピンクの髪の毛はいつも通りツンツンはねてる。それでも触ると意外に柔らかい。だから、本気でむしってやりたくなるのだ。

いや、そんなことはどうでもいいとして。問題は、視界いっぱいその美麗な顔が占領していることだ。

「そう？」

（そつだよっ！！）

今だったら頭突きで相手を気絶させることができるかもしれない。

私の額とイオの額は30センチ離れてるか怪しいところだった。

はなれようとしても後頭部はすでに壁の冷たい感触をとらえている。悪戯っぽい瞳に顔をじいっと見つめられて、私は狂い死にそうになった。なんていうか…自分のすべてを無様に晒してる感覚。

「え、えつとイオ…くん？ぶ、プリクラさつさと取りましよう？」
そしてさつさとこの個室から出よう。

しかし思わぬ爆弾発言があったらしい。イオの顔が嬉しそうに輝いた。

どきっ

不覚にもその子供のような笑顔に私の胸が高鳴ってしまふ。自分で聞こえるくらいバカでかい鼓動に戸惑いながら、私はイオに聞こえてませんようにと願うしかなかった。
もし聞こえてたら…それこそ本気で貞操の危機だ。

「イオ『くん』？うっわ、にあわね、でもいいな、すっげー新鮮！」

「へ？あ、ああ…」

そんなところ？と、私は拍子抜けしてしまふ。果てしなくくだらない…。

しかしここで教訓。

自分にとってはくだらないことでも、必ずしも相手もそう受け取ってくれるわけではありません。

グイッと、イオの顔が急接近した。30センチの距離が10センチにいきなり縮まり、私は驚いて喉をひくくと鳴らす。

しかし本人にはまったく悪気はないようで、そのままキスするように唇を近づける。

まずい…、これはマジで、食われるかも。

私は半ばあきらめてぎゅっときつく目をつぶった。

しかしいつまでたつても覚悟していた感触はこない。

恐る恐る眼を開けると、先程より少し離れた場所で口を右手で抑えているイオが視界に入った。左手は相変わらず私の横にあったが、右手がどいたところで逃げ場ができる。

嬉々として私はそっちへ走りこむ…ことはできなかった。

逃げようとした私を引き止めたのは、他でもない私だった。

イオの露出した肩が小刻みに震えている。顔は俯いているから見えないが…もしかして、気持ち悪い？じゃあこの震えは、痙攣？

嫌な予感がした。

慌てて私は彼の背中に手を伸ばす。心配で震える指が黒いシャツに触れる寸前、痙攣の理由があらわになった。

「ぶっあはははははっ」

(はい?)

突然馬鹿笑いしたイオに私の頭の上に疑問符が飛び交う。そんな私をそっちのけでイオは苦しそうに腹を抑えながら笑い続けた。沸々と、私の中で理不尽な怒りがわきあがってくる。

なにこれ、心配損?てかなんで笑ってんだこのバカは。もしかして私を笑ってる?ざけんじゃねえぞ、変態のくせに。

「ぶっくくくっ…あー、笑った笑った」

「……何がそんなにおかしいのよ」

勝手に満足してるイオに私はむっとして彼に詰め寄った。

ああ、私の大バカ者が。そう思うのはこの数秒後である。

私の手が彼の腕に触れた途端、逆に腕を掴まれて思いつき横に引かれる。派手にバランスを崩した私の体はあっさりと彼の腕に捕ら

えられ…息をつく間もなく唇に熱い感触を感じた。

(……………は?)

目を見開くと、どアップの顔。素早い動作で重ねられた唇は同じく素早い動作で離れていった。呆然と自分の唇に手をやる私を、ぺろりと舌を出して自身の唇を舐めるイオが見つめる。まるで今の感触を味わうような舌に、私は顔が真っ赤になるのを感じた。それを見て笑う彼の笑みも、ひどく妖艶だ。

「期待してた？」

何を、と問う必要もなかった。イオの白い指がまだ熱の残る私の唇に触れ、優しくなぞる。

期待、なんて…。
してない、と言えなかった。今口を開けば自然と彼の指を感じてしまう。私はそれが嫌で必死に首を振った。しかし思ったよりもゆっくりにした動作になってしまう。

「なら、目はつぶらないほうがいいよ。俺みたいに“イケナイ”男は、期待してるって思っちゃうからさ」

気が付いたら腰を捕らえられていて、私は身動きも抵抗もできないように拘束されていた。素肌に触れてる彼の指は、熱い。

(ああーもう私の大バカ者っ！何逃げる契機逃してこんなことになってんのよっ)

しかし自責の念に苛まれることはそれ以上なかった。イオの顔が近づき、またキスされるのかと思わず思わず身構える。そんな私を見て

一瞬苦笑したイオだったが、その美しい顔は私の横を通り過ぎて首筋に埋める形になる。

唇は回避できたからよかったといえども、首筋にその熱い息がかかる状況はあまりいいとはいえなかった。しかも彼はどさくさに紛れたその唇を私の首に押し当てている。その…たぶん派手な音を立てる頸動脈付近に。

「あは、すごい…ドキドキしてる」

耳元でそんなことを囁かれて、鼓動がまた一段と速くなる。そんな反応にイオは忍び笑いを漏らした。

「アリス…可愛い」

「~~~~~っ?…っ、うるさいっ…!」

…!
まずい。まずいまずいまずいっ…!お、おかしくなっちゃいそう

私はクラクラとする頭を落ちつけるかのようにいつものきつい口調でいった。そうしないと、どんどん私の中の何が昇^{たか}まっていきそうで…怖かった。

自分の中の“それ”を見るのが怖い。硬い殻の先には一体何があるのか…。

もしかしてそれは、今まで感じたことのないもう一人の“私”で。

「ぶっ、プリクラはどうしたのよ!! さっさと撮りなさいよ!!」

そしてさっさと開放して!

必死でそう願う私に、悪魔は告げる。

「んー、じゃあこの格好で撮る？」
「はああつ?!」

反論する間もなく、イオが片手で貨幣を4枚入れ、素早い動きで操作した。その間もう片方の腕は私の腰に巻きついたままだ。私は呆然とその慣れた動作を見ていた。

『それでは、30秒前です』

無情な機械音が継げる、地獄宣言。

どうしようもない、この格好で?!

私は熱かった体がみるみる冷えていくのがわかった。今更必死で抵抗してみるも、腰と腕をすでに拘束されていて、なすすべもない。さらに不吉なことに、目の前でイオが意地悪く笑った。

このままで終わらずはずがないでしょ?

その瞳が語る宣戦布告に、全身がぞくりと泡立つ。

「ほんとだね、ここで襲うつもりだった」

いきなりの問題発言。

突っ込もうとする私の唇を、イオは人差し指を立てて抑える。

その笑顔が一瞬悲しそうに見えたのは、なぜだったろう。

「アリスが俺に『なんで妬くんだ』なんて聞くから」

わけがわからない。なんでそんなことに悲しむんだ。

こいつはほんとに、わけがわからない。わけがわからないことで喜んだり…悲しんだりする。

チクリと胸が痛み、私はほんの少し胸を押さえた。イオは笑ってる。

なのに…それなのに、泣いているような気がした。

「そんなの、きまつてるじゃん。俺が貴方を だからだよ」

一部分だけ、イオの声がかすれて聞こえない部分があった。かすれて…？いや、ちがう、その部分だけイオは言葉にしなかった。

まるで、禁じられた言葉のように、声にならない気持ちは宙をさまよう。

唇が近付いてくる。どうしてか、私はそれを受け入れた。

今でもこの時の心境なんかはわからない。

ただ、イオの悲しみが触れた唇からあふれてきて、もっと彼を知りたくて…。悲しみも喜びも…彼のすべてを、受け止めたくて。

「ふっ…んっ…」

彼の熱い舌が唇を割って口内へ侵入してくる。下唇をそつとなでるような仕草にぞくりとした快感が背筋を走りぬけた。

舌は奥まではなかなか入ろうとせず、味わうように入り口あたりを徘徊する。

ぼっつとしてきた頭が、何かとても淫乱なことを考えた。それこそ、口にするのなんて恥ずかしくて言語道断な…

もっとなんて。

ようやく唇を堪能したのか入り口で蠢くそれは違った動きを見せ始めた。深く、深く、互いの舌が強く絡み合う 寸前。

カシヤッ

無情な音が、耳朶をうった。イオの唇が唐突にはなれていく。そのあとを一筋の細い糸が追った。

私は呆然と音がしたほうを見る。そこには当然のように、小型の黒いカメラ。そしてその上には中くらいのスクリーン。

そこには堂々と、今のキスシーンが映し出されていた。

しかもイオのほうはぞくつとするほど淫乱な顔、対する私もどこか…恍惚とした表情だ。

「あー…忘れてた…」

呆然とする私を置いて、彼は再度手を動かして、写真を現像した。撮りだし口にぴらりと、2つの同じ写真が落ちてくる。イオは手を伸ばしてそれを撮ると、まだ啞然とする私の掌にそれをのせた。

ああ…引き裂いてやりたい。

「俺をくん付けで呼んでくれたから今日はこれで許してやるけど…どうする？もう一回やる？」

次の瞬間、につこりとほほ笑むその顔を、思いっきり平手打ちしたのはいうまでもない。

しかし結局、その写真は捨てるに捨てられず、ルアのと一緒に永久保存している。

第三幕 2人でプリクラ?! デレデレトウーショット ロキア
リ編

「アーリースちゃん! プリクラまた撮ろう!」

上機嫌な高めの声に、私は思わずくらりと眩暈を覚えた。目の前に突然出現したどぎついピンクから目をそらしたくなる。

プリクラ。その単語に身の危険を感じるようになったのはすべてこのバカ猫のせいだ。先日の過激なスキンシップが生々しく肌によみがえる。

もう二度とこいつと個室に入るもんか。そう誓った日はまだ遠くない。

反省とはすなわち、間違った所を省みることである。前回の悪いところはズバリ、ここでの所作。

私はにっこり笑って、同じく無邪気な笑みを浮かべるイオを見上げた。

瞬間。左足を軸として振り上げられた右足が彼の鳩尾のど真ん中にクリーンヒットする。

「いいつ……?!」

私はイオの苦悶の声を聞かずに、猛然と走り出した。ここに来てからというものだ。いぶ足が速くなった気がする。そこらの陸上部にだ

つて引けをとらない。
行き先はもちろん女王の城。ルアに救済を乞うのだ。

(相手に同情するなっ！倒すのもまた正義！逃げるのもまた正義っ！というか貞操を守ること自体が正義だあっ！！)

心の中でわけがわからないことを叫びながら全力疾走する。そのあとを早くも回復したイオが追いかけてくるが、決して振り返らない。

「ねえー、いいじゃんアリスー。この間のアレ、またしようよー」

「誰がするかっ！」

「だってアリスも気持ちよさそうだったじゃん」

「ええ、気のせいです！眼科いつてきてくださいっ！！」

「あれだけと思われちゃ俺の名がすたるんだってばー、俺もっとうまいよ？」

「変態って名前はすたっってもいいと思います！」

「そっぢゃないよ、テクニシャンのほうだって」

「ええどうぞ廃れて誰にも見向かれない廃墟と化してくださいっ！！」

「だって、この間のアレ、ディープ寸前だったじゃん。俺的にはもうちょっと先まではいきたかったのになあー」

「寸前バンザイ！神様ありがとう！てか、追ってくんじゃねえーっ！！」

あーだこーだと意味のない口論は続く。しだいに私の息が切れてきた。それに伴って、速度も遅くなる。

しまった。そう思った時には既に木の根につまづいて体が前に傾いていた。

転ぶ。自然と手が前に出るが、それでもきつと痛いのだろう。

「アリスっ」

しかし衝撃は手ではなく腹のまわりにきた。後ろから慌てた様子で私を支えるイオの瞳とかち合う。その心配そうな光に、私は思わずへらっと笑ってしまった。

心配しないで。そう言いたいけれど、言うにはちよっぴり恥ずかしくて。

「あ、ありがとう……」

「……」

その瞬間、イオの動きが固まる。どうしたのかと思えば彼の顔を覗き込んでみるが、突然固くなったその顔からはどんな感情も読み取れない。

でもちよっつと……赤い？

「イオ……？うわっ」

刹那。私は体が宙に浮くのを感じた。過去に一度されたのと全く同じ恰好の、俵かつぎをされる。

(そ、そう言えば私こいつから逃げてたんだっけー?!)

「ちよっつとはなしなさいっ！おろせーっ！……」

「やだね。ったく……可愛すぎるんだよ、アリスは」

「い、イオお?!」

「あーもう、いらつく！この俺にここまで言わせるんだから、ちゃんと責任とってもらっからねっ」

(わけがわかりませんーっ！！)

心の叫びは届くはずもなく、子羊は再び狼にとらわれる。

「いつ…！！」

少々荒々しく下ろされた私は背中に走る衝撃に小さな悲鳴を上げた。とたんに、目の前にしゃがむイオの瞳に心配そうな色が見える。だからそういう顔しないでっば…。思わず慰めたくなっちゃう。

「ごめん、大丈夫？」

まさかこの男の口から気遣う言葉が出てくるなんて…。
夢オチ、ってことはないでしょうね？いや、この後のことを考えるならそっちのほうがいいのか。

「い、イオ？なんか今日のイオおかしくない？」

「え…？あー、うん、これたぶんもうすぐ朝日だからじゃん？時々あるんだよ、“切れ目”の時間帯に二つの人格が混同しちゃうこと」

そう言うイオの顔はどこか優しげだ。

二つの人格って…つまり、イオとロキ？確かに普段のイオはこんなふうに優しく笑うなんてことしないが、ロキだって絶対…

(『あ、悪い。でもま、バカに頑丈なお前だったら大丈夫か』)

……絶対、余計な一言が付いてくる。

眉を寄せ始める私に、イオが困ったような笑いを見せた。

「ロキってあれ、ツンデレだから。性根は優しい奴だよ」

「はあ……。最初はものすごく嫌な奴だったけど」

「んー、でも俺、ロキはすごくいい奴だと思う」

この頃気づいたことがある。

イオは誰よりもロキに優しい。たとえロキがイオを嫌っていたとしても、イオはロキが大好きだという。どうしても“影”として受け取られがちなロキは、自然と周りの愛情を受けることが少なくなっていた。その中で一番ロキに傾倒してたのがイオだと言っても過言ではない。

しかしロキにとっては複雑なことに変わりはないのだろう。もし自分がイオの“影”じゃなかったら、イオがいなかったら、自分ももっと人に見られ、愛されてきたはずなのだから。ちようど、イオのように。

だからこそ、愛情を注いでもらっていると感づいていても、素直に受け取れない。ロキはイオのことを心底嫌っているのだ。

でもきつと、ロキも傷ついている。

そしてイオもまた、傷ついている。

結局この二人は、傷つけ合うしかないのだろうか？

「ほんと、ロキのことが好きなのね……」

「ん、好き。大好き」

嬉しそうな顔でうなづかれ、私は思わず顔が綻んでいくのを感じた。

イオのこういうところは嫌いじゃない、と思う。

「だからさ、アリス。ちょっと協力して？」

「え　　ぎゃっ」

にこにこ無邪気な笑みを向けられ、私も素直に聞き返した。瞬間、地獄を見ることになる。

突然抱きつかれた私はカアツと顔が赤くなるのを感じながら、必死で抵抗した。しかし強い力で押さえつけられ、抵抗も何の意味もなさなくなる。

「ちょっとイオっ!!」

「だいじょーぶだいじょーぶ。さっきの笑顔で本気で襲おうかと思っただけ…今日はロキに譲る気にいるから」

そう言うイオの顔はひどく優しくして…同時に、悲しかった。彼は私をぎゅっつと抱きしめながら耳元で囁く。

なんでだろう…なんでこの人は時々こうやって、涙をこらえているような声をするのだろう。

「アリス…ロキはどうしようもなく不器用だからさ、俺がなんかやらないと全然ダメなんだ。だからさ…少しだけ、協力して？」

「……つまり、この格好で写真を撮ろうっていうの？」

イオと私ではない。ロキと私だ。きつとロキだったら恥ずかしがって決してプリクラなんてしたからないだろう。

だから、“譲る”。

不器用？そんなの、あんたが言うもんじゃないでしょ、イオ。

あんただって、こんな方法でしか優しさを伝えられない、不器用な

奴じゃん。

「……………今日だけよ」

「うん、これで、俺とロキ、おあいこだ」

イオが頃合いを見計らったように、コインを入れ始めた。

『それでは、30秒前です』

耳障りな機械音。

ほんとにこの機械はわかっているんだろうか。

どんな気持ちでイオがコインを入れたか。どんな気持ちでイオが私を抱きしめているか。

「俺は、ロキからいろんなものを奪ってきた。だからせめて…俺が与えられるものは、与えておきたいんだ」

ごめんね。耳元でそっと、イオが囁く。

瞬間、腕の中で何かが変わる気配がした。

気がつくのと、私を抱きしめる彼の髪はピンクから黒に変わっている。きつとその悲しげな金色の瞳も、戸惑いの黒へと。

私はちよっと顔をあげて彼の瞳を見ようとした。予想通り、黒曜石の瞳は戸惑いを孕んでいる。

「ア、リス…？」

そこで今の自分の状況に気づいたのか、あわてて離れようとした。

しかしそれを引き止めたのは私だ。
彼の腕をとり、思いつき引き寄せる。強い力にロキの体が大きく傾いたが、何とか踏みとどまって二人で倒れるということとはなかった。

「あ、アリス?!」

「いいの。もうちょっとこのままにしよう」

ロキの顔が真っ赤に染まっていくのを見て、私はちよつと笑ってしまふ。

うーん、いつもこうだったら可愛いのかなあ…。

触れるロキの胸は熱くて、そこに耳を当てると心臓の音が聞こえてきた。私の鼓動よりもちよつぴり早く、ずっと強い鼓動。

カシャリと、終わりを告げる音が聞こえてきた。

私は残念そうなため息を立てて、まだ真っ赤になって呆然自失としているロキをよそに写真を取り始めた。

なんだか、自分からデレデレと抱きついている光景を見るなんて不思議な感じ。しかし悪い気はしなかった。

「ロキ、これ」

私はくるりと振り返って笑顔で写真を渡す。ロキはそれを大人しく受け取るが、そこに写ったものを見て、再び真っ赤になった。

突然腕を引っ張られて、私は派手に傾く。その先にはロキの腕があつて　　気がつけばその腕に強く抱きしめられていた。

なんで、と思う暇もなく、頭上から怒ったような声が響く。

「お前なあ…このバカがつ！危機感とか感じねえのかよ！女と男、

しかも個室に二人きり、この状況だったら何されてもおかしくねえんだぞっ?!」

……なんだ。こんな時にまで心配か。

私は呆れたような溜息をつきながら、その胸に顔を埋めていた。熱いその体温が、どうしようもなく心地いい。

「……わかってるよ、どうせイオの野郎が謀ったんだろ？お前を無理やり抱きしめて、さ。なんていうか……ごめん。色々と迷惑かけちまって……」

ごめん、だなんて。

言われて、嬉しいはずがなかった。危うく出てきそうになってしまふ涙を必死でこらえて、私はきつとロキの瞳を睨みつける。その強い瞳に、ロキが一瞬たじろいだように見えた。

「ええ、そうよ。これは全部イオの計画。いきなり攫われて抱きしめられて写真まで撮られて、その上理不尽に謝られちゃあ、迷惑千万もいいところね」

言葉の途中で、私は彼の背中に腕をまわす。怯えたように彼の瞳が揺れるが、私の腕を振り払うなことはしなかった。

「でもこうやって今あんたを抱きしめてんのは私の意思よ。イオの計画でもなんでもない、私の意志。そんなことにまで謝らないでよ」
わかってる。きっと二人はバカみたいに、優しすぎるんだ。

だから譲り合って、気持ちを潰し合って、二人なのに一人遊びを延々とやることになる。

「……ごめん」

「だから謝んな」

「……………」
「ありがとう」

「……そんなのは、イオに言いなさい」

「……………」
「言えない」

咳く声はほんとにあのロキかと思うほど気弱だった。私は深いため息をついて、もう一度彼を強く抱きしめる。彼もまた抱きしめ返してきた。

どうしてだろう…こいつらを見ると、どうしようもなく胸が痛くなる。

深い悲しみを払拭するには、これだけじゃまだ足りない。だけど、今私にできるのはこうやって抱きしめてあげるだけ。

「あー、じゃあ私が伝えといてあげるわ。ほかに言いたいこととかある？」

「……………」
「怒るなよ？」

「ん？」

「お前にだけは負けねえって…伝えてくれ」

何が？問う間もなく、ロキの体がはなれる。その顔はまだ上気していた。

「今回はかりは、負けたくねえ」

そう言っつて、ポンポンと私の頭を叩くようにして撫でる。子供扱いされてるような態度に私はむっとしたが、彼のどこか清々しい顔を見てなんだかどうでもよくなった。私はとびきりの笑顔を彼に向けて、頷く。

「伝えとく」

イオ、俺、アリスだけは渡したくねえよ……

f i n . . .

「……………」

あれ、どうしましたアリス？浮かない顔ですね。

「……………3連続でやるなんて聞いてねえぞコソ」

えー、だって休憩入れれば貴女絶対逃げるでしょう？いちいち口論すんのめんどくさいし。

「なんか僕のやつだけ妙に短くありませんか？」

いや、十分長いですから。てか皆ほとんど変わらないです。

「あーもうなんで最後までいつちやわないんだよ！あそこまで来たら最後までやるのが普通だろうがっ」

あ、それは作者が濡れ場はやだつて泣き喚いてるから。でもあんたが一番過激でしたよ、イオ。

「てか俺の扱いいくらなんでも酷いだろ?! 半分がイオだぞ!」

ロキ…、泣かないで泣かないで…。作者がほかのを思いつかなかつたんだつて。よかったじゃん、シリアス。

「もう私帰る…」

あー、アリスが帰っちゃいました…。ま、あれだけラブラブドキドキデレデレやつたんだから当然ですか…。

「で、どうすんの、レーテ? もうそろそろ終わり?」

まあとりあえずつてとこですかね。近々ランキング投票をしてみらうかと思いますが…。本格的なキャラ紹介も全キャラそろってからにしたいですし。

「ではこのような番外編ももうしばらくないわけですか? 残念です…」

「俺はもうしばらくなくていい…」

いえ、リクエストなどがあつたら喜んで書きます。

ま、リクエストは以下の通りの方法でやってくれと嬉しいのですが。

・誰と誰か(例: イオアリ ルアアリ)

・ジャンルはどれか(例: 恋愛 イオがアリスに一方的に攻

め攻め 友情 イオがルアにベッタベタ)

・どんな状況か（例：夜の森にて　お茶会にて）

なるべく細かく書いて下さればたぶんできます…たぶん。

「ってなんで俺ばっかなの」

一番扱いやすいですから。ものすごく書きにくかったのはロキアリだそうですね。その次に僕、と聞いておりますが…。

「イオはいい意味でも悪い意味でも癖が強いですからねえ…。好み
が分かれんじゃないですか？」

「でも結構俺への応援あるよ？」

「へえ…優しい方もいらっしやるんですねえ…」

「あ、なんかむかつく…」

ほらほら、そこまでにしなさい。

ロキもそこで空気になってないで、そろそろお別れの時間なんです
からみんな集まりなさい。

あー、ヒロインは帰ったようですが、せめてヒーローたちの最後の
あいさつを、どうぞ。

「それでは、ここまで読んで下さりありがとうございます。お見
苦しいところもありましたが…」

「ルア、長ったらしいんだよ。それじゃあ、またね」

「あー……またな」

これにて、番外編を終わります。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

ここから先は作者のくだらない後書きです。特に意味のないものなので読まなくてもいいです。

あー、春ですね。春に乗じてどうやら作者の頭がいかれた模様。

先週高校に入学しました。ほんとに入學式にupする予定がorz
だって長いです。なんか長いです（泣）

ほんとこんなになくするつもりじゃなかったんですけどね…。ルアの話が異常に長くなってしまい、「ほかのやつらも長くしなれば！」と張り切って…この結果です。

ええ、わかってます、ロキアリファンの方、ごめんなさい（土下座）
いや、でもルアがあんなになつてんのにあのイオがおとなしくプリクラ取るだけじゃダメでしょう！ついでにロキも少しはスキンシップしなさい！

ってことで、イオが過激になり、ロキもそれに便乗しました。すべての原因はルア、お前だ（え…）
きつとまたこの番外編があります。あ、でもなかったらごめんなさい…。

リクエスト、などいただけるとすごく嬉しいです！　　が好き！な

んで意見もじゃんじゃん募集中です！

というところで、今回はこのぐらいで…。

次回の番外編についての詳細は【chapter・2】Cross

sing Knight or Knight ep6身体で払っ

てもらいます の後書きに書かれています。

現在 p.v.: 1041 ユニーク.: 776

『あまり調子に乗ってもらうと困ります』

こめかみに冷たいものを感じた。「追え」という命令をしようとした口を閉じて、フレイムはいったんちらりとそちらに視線をやる。背筋に感じた冷気は突きつけられた漆黒の銃口のせいか、それともそこからあふれ出す殺気のせいか。

フレイムは逃げるアリスとイオの背中に再び視線を向けると、おもしろくなさそうに鼻を鳴らした。

自分の思い通りにいかないというのは、たまらなく不快だ。

『君こそ調子に乗ってるんじゃない？ 僕は女王だ』

自分に銃口を合わせているルアに目を向けることもなく、その首筋に鉞の冷たい刃をつきつける。ほんのちよつと力を入れて引つ張ると、存外にあっさり切れ、流れ出た液体がルアの白い首を染めていった。

フレイムの好きな赤だ。そしてルアの嫌いな赤。

ここでルアがいつものように揺れ惑えば、その首を一瞬ではねてやろうと思った。

どつしつ？

理由なんか、必要ない。いちいちそんなのを考えるのもめんどくさい。

それなのにあの女ときたら。フレイムは小さくなったイオの背中を目を細めて見送り、その腕にすっぽり包まれている女を思い出して忌々しげに舌打ちした。

常識、理由、善悪。くだらないことに執着してばかりの、今回の“アリス”。正直、頭にきた。“アリス”でなかったら今ごろその首をはねているころだろうに。

まったくどこがいいんだか……。彼らの背中が完全に見えなくなったのを見計らって、フレイムは不機嫌そうな顔で腹心の部下へと向き直った。

ルアはこちらを睨みつけ、迷うことなく引き金に指をかけている。それもすべて、あのアリスを守るため。

こういうところも気に入らないんだ。

自分の所有物^{もの}まで、いつの間にかあの女は奪っていつてしまう。

『僕にそんなもの突きつけていいの？ 僕の短気な性格は君が一番

知ってると思うんだけど』

『監禁でも体罰でも処刑でも、どうぞ。今ここで貴方を殺りますか

』

『はは、それはちょっといやだなあ』

確かに、銃と鉞だったら圧倒的に銃のほうが早いだろう。ま、運が良ければ相打ちになれるだろうけど。しかしそこまでやるのもめんどくさい。

フレイムは肩をすくめて、あっさり彼の首から鉞をはなした。

『でもほんとに僕に構ってよかったのかい？ ほら、その間に愛しの姫君が攫われちゃったよ。それも、この国屈指のプレイボーイにふふっ』

『少なくとも、彼は貴方と違ってアリスを殺そうなんて思いませんから』

『殺しはしないよ』

殺しは、ね』

そう、殺しはしない。

フレイルムは口角をあげてにたりと笑った。

正直、アリスがどこへ行こうと興味がなかった。だが逃げ惑う彼女があまりにもおもしろくて、悪戯をしてみた、ただそれだけなのだ。

もっとも、自分がアリスに好意を持っているなどということはいれっぽっちもないのだが。どちらかというと嫌悪の対象でもある。

「調子はどうか？ アヤメ」

フレイルムは極力優しい声音で檻の中の少女に話しかけた。

檻 そう、そこは檻だった。女王が統べる「黒の塔」、巷では囚人の処刑待ち処と言われている建物の最上階に、その部屋はある。

しかし実質、囚人などは皆無に等しかった。先代女王から始まった首切り処刑は、女王のそばに処刑人が常に付き添い、女王の気に入らない者の首を切るというものだった。残虐で、淡々としている制度。おかげで罪人は檻に入る必要もなくその場で首を切られる。なんという時間短縮方法だろう。

そしてそれは王権がフレイルムにわたった時も同じだった。ただ違うのは、フレイルムが自ら首を切る、ということ。つまりはこの塔はもう数十年も使われずに、古臭い廃墟と化していたのだ。

最上階を除いて

だが。

カビの生えていた部屋は、見間違えるほどきれいに掃除されていた。もちろん自分がやったわけではないのだが、フレイルムはその出来に満足げに息をつく。

いつ見てもこの部屋は、いい。自室よりもずっと落ち着くかもしれない。

しかしその部屋にはまったくと言っていいほど、家具がなかった。ただあるのは、部屋の後ろ半分を隔てる鉄格子、そして後ろの壁に少女がつながれている鎖だけ。

白い。白いだけの、部屋。

昔あった、そんな部屋に兄妹とともに詰められたことが。

皮肉なことに、そのあとは赤い部屋と化してしまったのだが。

「アリスが、来たよ」

フレイムは檻に手をかけ、愛しくてたまらないといった仕草でその冷たい鉄格子をなでた。本当に撫でたいのは、あの怯える少女の類。

アヤメと呼ばれた少女はピクリと動くこともなくだらりと鎖にながれていた。一見したら死体か人形かのように思えたかもしれない。魚のように生気のない瞳、病人のように白い肌、おれてしまいうるような細い^{カラダ}。それでもフレイムは、彼女に魅せられていた。反応はいつものことながら、ない。

「アリスが、来たんだ、この国に」

それでも繰り返し返す。

意味？

そんなものさえ、考えるのがめんどくさい。

いつの間にか自分はこの間にも、変わってしまった。

「怖がらないでもいい。すべてがあるべきところへ還るだけ」

殺す必要なんてない

「アリスは君の中へ」

殺さずとも、半年としないうちに終わる

「偽物は本物の中へ」

殺さずとも、じき、消滅する

「そうして君は完全な“アリス”になる」

アリスは、じき消滅する……

少女は彼の言葉を上の空で聞きながら、じつと白い床を見つめていた。

「えっと……とりあえず、その怪我の原因を聞いてもいいかしら、レーテ」

「あ、できれば聞かないでくれると嬉しいです」

「そ、そう……」

おずおずと手をあげて尋ねてみるけれど、笑顔で一蹴されてしまい、私はがっくりと肩を落とした。

気づけばいつぞやの平和なお茶会リターンズ。違うのは先程出会った二人もメンバーに参加していること。隣に座る黒髪の青年の機嫌がさらに悪化していること。そして　私の右隣でお茶をそそいでいるレーテの体が妙にズタボロであること。

そこらじゅうに包帯を巻いているレーテはティーカップを持つのも大変そうだ。これで「気にしないで下さい」はないだろう。

私が心配そうな視線を向けると、彼はカップを置き困ったような笑顔を見せた。

「ほんと、大丈夫ですよ。ム力つく話ですが、医者腕がよかったです。ようこの通り、ピンピンしてます」

チッ

「ちょ、ちょっといま舌打ち……」

「はは、まさか。幻聴じゃないですか？」

「医者」という単語を心底不快そうに言ったように見えた……気がするだけかな？

しかしそれを聞くほど私は根性を持っているわけではない。

「ふふふふ……あ、ロキ、今日はぜひとも泊まっていってくださいね？ 貴方自身に興味はありませんが、ピンクのほうに野暮用があります。まったく、最低ですよねえー、人が嫌だって言ってるのにちよつと眠ったすきに治療してくれるんですから。自己決定権も何もありませんいものですね」

（いやあ……人の命なんて水素よりも軽いんですよ」的な世界にそんな権利あるとは思えないけど）

そういうレーテの顔は正直般若のごとく。笑みはひきつって、こめかみらへんで何かぴくぴく動いている。……理由は死んでも聞きたくないが。

突然話を振られたロキは触らぬ神にたたりなしとでも言うように静かにうなづいていた。心なしかレーテから席を遠くしている。

（そつえばこの人たちってどうい関係なんだろう……）

私はふと気になってぐるりとテーブルを囲む面々を見渡した。

私の左隣にはロキがいつもの不機嫌そうな顔もちで座っている。手で弄んでいるのは、先程レーテから返してもらった銀色の銃。返して以来ずっと弾を見たりくるくる回してみたりとせわしなくいじっているのだ。

いや、お茶会で見せるものではないだろうそれは。

さらにその隣にはレストがテーブルに突っ伏してうたた寝をしていた。さすが眠りネズミ、とでもいうべきか、その隣に座るマルスが頬をつついたり引っ張ったりしても死体のように動かない。

しだいに興味を失くしたマルスは、今度は手近のお菓子に食らいつく。しかし絶対に湯気を立てている紅茶には手をつけない。聞いたところによると極度の“猫舌”なのだそうだ。

そして私の右隣にはレーテが座っている。相変わらず黒い服ばかり着ているが、袖口から見える物は明らかに包帯だとわかった。

大丈夫だろうか……などと思うのは時間の無駄なので、あえて無視することにしよう。

「マスターあー、俺ぬっついミルクティーがいいー」

「そんなこと言ってるといつまでも猫舌がなおりませんよ、マルス」
「いや、なおるもんじゃないし」

マルスやレストはレーテのことを「マスター」と呼ぶ。確かにレーテは酒場のマスターといった感じだ。なんだかんだ言ってるがまを聞いてやる優しさなんかもそっくり。

友達……とはちょっと違うのかもしれない。マルスとレストは始終くっついていて、親友といった調子だけど、彼らやレーテはもっ

と……一線引いている感じ。

「……どうかしましたか？」

不思議そうに3人を観察する私の視線に気づいたのが、レーテは穏やかな笑みをたたえて私に問いかけてきた。

いけない……不躰だったかもしれない。反省するように目線を落とすが、それでも好奇心には勝てずに恐る恐る尋ねる。

「ねえ、レーテ達ってどういう関係なの？」

「どういう関係って……何がです？」

「だから、どうやって出会ったの？ えーっと、友達？」

「心配しなくても、こんな奴誰も友達になったりしねえよ」

そう言つて「へっ」と鼻を鳴らしたロキの足をレーテが思いつきりふんづける。テーブルの下で見えなかった私にはなぜ次の瞬間ロキの悲鳴が上がったのか分からなかった。

心なしか涙目になった彼は勢いよく立ちあがり、喚いた。

「テメエ今靴底でやっただろっ？！ 俺裸足だぜ？！」

「ああ、それはお気の毒に。足を組んでいたのを解いたら“偶然”当たってしまったようですね。どうもすみませんでした」

「おい聞いたかアリスっ！ こいつのことを一瞬でもいい奴だなんて思っちゃだめだぞ！ たぶん俺らの中で一番あくどいんだから！」

「んー、ロキとレーテだったらお笑いコンビで通じるんだけどなあ

……
「無視するなよっ」

意外と大きな漆黒の瞳に涙をためて震える姿は、女の私が見ても可愛い。特に時折ぴくぴくと動く猫耳が異常に愛らしくて今度は私

が席を立った。

驚くロキ達を無視して私はその黒い猫耳に手をかける。
瞬間。

もふっ

「
.....」

「え」

「.....ぶっ」

「.....何しやがる」

もふっ

もふもふっ

私、レーテ、マルス、ロキはそれぞれ違う反応を見せた。

無言で猫耳をポンポンとなる私。もちろん背伸びをしなければ届かない。

奇怪なものを見たように膠着するレーテ。ちょっと、カップからこぼれてるんですけどっ。

最初の音をきっかけに大爆笑するマルス。あ、レストが煩そうに身をよじった。

そして、ピクリとも動かないでただ殺気だった視線だけを私のほうに向けているロキ。普通だったら怖いと思うところも、彼の顔が明らかに赤くなっているせいで全然迫力がない。

今度は強く引っ張ってみる。

「いつ...!」

小さな悲鳴をあげてロキの体がわずかにこちらに傾いた。

悲痛そうな声を上げる彼があまりにもおもしろくて、私は楽しげ

に笑いながら猫耳を軽く叩いたり引つ張ったり撫でたりと色々なことを試してみる。

あ、意外と私ってSかも。

「いててててえっ…いてえっつてんだろっが！！ テメエ何がしてえいんだっ！！」

「すごいすごいっ！ なんかもふもふ鳴るよこれっ、やっぱり偽物じゃなかったんだ」

興奮気味に私はガシガシとそのツン毛を引つ掻きまわした。その黒髪は思っていたよりも柔らかく、かすかな香水の匂いが染みついてる。

バラの香水、だろうか？ とても甘い香り。

しかしそれは、どう考えても女ものの香水だった。

ズキン、と胸のどこかが痛んだ。私はそうっとな彼の耳から手をはなし、二、三步離れる。

不思議そうにこつちを見やるロキの純粋な瞳に、私は鼓動が速くなるのを感じた。ドキドキというものではない……もっと、心臓を針で刺されている感覚。

「アリス？ どうした」

心配そうな声が、耳朶をうつ。何をそんなに心配しているんだろう？ あ、今まで滅茶苦茶に触ってたのに突然やめたから？ バカみたい……そんなの気にしなきゃいいのに。

そっだ。私は何を勘違いしてた？

また……また同じことを思っていた。どうして私以外の女の人の

匂いがするの？ ……だなんて。フレイムの時と同じ、「当然私は好かれる。なのにどうして」だなんて。

最低。

「な、なんでもない。えっと、わ、私そろそろ寝るね？ この世界に来てからまともに睡眠取ってないし……ちょっと仮眠を取らないと、体もたないから。レーテ、どこかあいてる部屋ある？」

「え、あ、はい。2階はすべて客室なのでどうぞご自由に……」

「ありがとう、じゃあお先に」

「おいアリスっ」

後ろから引きとめる声が聞こえたが、私は無理やり笑顔を浮かべて「お休みー」と手を振った。

思わず手を伸ばしかけたロキは一瞬逡巡したが、やがて手を引っ込めてぶすつとした顔で「お休み」と返す。

その言葉に後押しされるように、私はその場から逃げ去った。

「なんだ、あれ」

ふいに上機嫌そうな声が横から聞こえ、ロキはアリスの背中を追っていた視線をそちらのほうへ戻した。わけもなくため息をつく。

斜め横あたりに座っている図体のでかい男は、好奇心いっぱい目をキラキラさせてアリスが走って行ったほうを見ていた。こっちの気も知らないで……。

うらみがましく睨んでみるけれど、無神経なこいつには通じるはずもなく、子供のような瞳をこちらへ向けられた。

興味津々といった様子で質問攻撃を始める。

「なあ、あの嬢ちゃんつてもしかして結構変わってる？ ロキの耳触る命知らずなんて見たことねえよ！」

「……ああ、確かに命知らずだな」

「はははっ！ あれはウケたぜ！ 俺ら獣人は耳が一番敏感だからな、触られるとメチャクチャくすぐってえんだよな」

「……俺はウケない」

「まあそう言うなって、それよりお前なんであの女殺さねえんだ？ あーゆーことお前大っ嫌いだろ？」

確かに、大っ嫌いだ。

今まで自分をむやみに触ろうとしてきたやつら、女も男も関係なく全員殺してきた。

嫌なんだ、普通の人と違つところを触られるのつて。違和感が感
触によつて存在感を増すような気がして。

自分は異端なんだと、思い知らされるような気がして。

「……………ああ」

「なー、なんで殺さねえんだ？ お前らしくねえな、ほんと」

マルスがしつこく聞いてくる。どうやらこいつはとことん「いつ
もの俺」と「今の俺」が違つことに不満を感じているらしい。

ロキは苛立たしげに息を吐き、不思議そうに首を傾げるマルスを
睨んだ。いっそのこと煩いこいつを殺してしまえば、気分も晴れる
だろうか。

耳を触られるのは、大つ嫌いだ。尻尾を触られるのも、目を覗き
こまれるのも、全部。

全部、“本物”と違つ。

だからアリスがいきなり自分の耳に触れた時も……………一瞬、殺気を
放ってしまったのだ。幸いにもアリスは気づいていなかったようだ
が。

殺さない理由？

その的外れな質問に、少しばかりの違和感を感じる。

「殺す理由」じゃなくて、「殺さない理由」？ なら殺すのが当
たり前で、殺さないのが非常識つてことか。

なんだか、どこかおかしい。何かが歪んで……………。

（おかしいな……………俺も前は「殺すのが当たり前」だつて思つてたん
だけ……………）

それなのに今では、その理屈にどこか歪みを感じる。
ロキはマルスの質問をそっちのけで、真剣に悩み始めた。

「なあ、お前、なんで殺すんだ？」

「は？ 例えば何を？」

いきなり話を転換させられて、マルスは一瞬呆然とした。

ロキは予想していた答えに、ほんの少しだけ呆れるような溜息をつく。

マルスは、よく人を殺す。イオやロキ、ルアも相当殺しているが、おそらくマルスとレストのタッグにはかなわないだろう。

特にマルスは、ひどい。ほとんど狂人と言つていいほどの殺人鬼だった。本職が殺し屋なだけあつて、その手管は実に見事だ。

イオもロキもルアも、どんなに些細なことであれ、殺すのには何か理由がある。

例えば「肩がぶつかつた」であろうと「大切な人を殺した」であろうと、すべてが死刑にされるといった感じだ。

罰則がすべて処刑になつた……しかしどれにも何らかの理由つみは必ずある。

だが、マルスやレストは違う。彼らは気まぐれに殺し、気まぐれに生かすのだ。

ライバル同士がぶつかれば殺し合い、ふらふら一人歩きをしている一般人がいたら射殺、といった感じに、いとも簡単に人の命を奪う。

あの女王フレイムのように残酷な殺し方は決してしないが……ある意味、一番残酷なタッグだ。

「お前色々殺してんだろ。お茶会に迷い込んできた浮浪人とか真っ先に手にかけるのはどこのどいつだよ」

「あーあれね。時々いるんだよなあ、そういうバカなの」

ケラケラと、楽しそうに笑う彼の笑顔が、なぜかひどく不気味に思えた。ロキは眉間のしわをさらに深くして、彼に詰め寄る。

「質問に答えろよ。なんでお前は殺すんだ？」

「なんか、ロキ変なこと聞くよな。殺すことになんか意味ってあったっけ？」

本当にわからないようだ。マルスは訝しげにロキを見るが、ロキは彼のほうを見ていなかった。固く握りしめた自分の拳を穴があくほど凝視する。

笑ってしまう。昨日の自分は全く同じことを考えて、いや、むしろ何も考えないで手を血で染めていたというのに。

今はこんなに、反発を感じる。

(アリスのせい……か)

いつの間に毒されたのだろう。いつの間に侵されたのだろう。

彼女は何か何でも殺しはダメという主張で自分を説き伏せようとしていた。

最初は鬱陶しく思っていたが……あの涙を見た時、背筋がぞくりと震えたんだ。

そそられた、というのだろうか。なんだか無性に抱きしめてやりたくて、涙をぬぐってやりたくて、抑えるのに必死だった。

あれからだ。自分の中で何かが変わった。

「……意味なんか、ねえだろ」

ロキは極力声が震えないように返した。

マルスはパツと顔を輝かせると、すごい勢いで首を縦に振る。

レーテは我関せずといった様子でカップを傾けているし、レストは爆睡中なので、自分に同調してくれる者がいなかったのだろう。明らかに喜んでいる顔を見て、胸を苛立ちが占めていった。

「殺しなんて、無意味だ。なのに、どうしてやるんだよ」
「……はあ？」

「無意味なことわざわざやるほど、俺らってバカだったけ？」

ロキは吐き捨てるように言い捨てると、乱暴に席を立った。ぽかんと呆れたように口を開け固まっているマルスには目もくれず、さつさと踵を返す。

背後で自分を呼びとめるマルスの声が聞こえたが、ロキは決して振り返ろうとしなかった。

胸がむかむかする。こんなの、初めてだ。

何故だかアリスのあの気の強い瞳が見たい気がした。

無償に、彼女の髪に触って、すいて、頭をなでてやりたかった

……

「あーあ、ロキ怒らせちゃったねー」

右耳にいきなり囁かれ、マルスはびくりと体を震わせた。生温かい息に少しばかり顔をしかめながらにこにこ無邪気に笑っているレストをねめつける。

「お前……狸寝入りかよ」

「だって君らがあんまりおもしろい会話してるから。俺これでも眠いんだよ？」

「あーそうかよ。さっさと永眠でもなんでもしやがれってんだクソガキが」

「クソガキって……同い年じゃんよ」

口汚く罵る相棒にレストはわざとらしいため息を一息つくと、その肩に顎をのせた。

いつもの「お願い」のポーズ。しかしマルスには何度やっても通じないのでこの頃はあきらめかけてる。

「同い年なんかに見えるかよ。あの嬢ちゃん、ぜってーお前のこと

年下で、ロキよりも俺のほうが年いってると思ってたぞ」

「あー、マルスってなんかじむさいからね。精神年齢低い割に」

「お前なあ……俺をなじってまで自分がチビであることを認めたくないか」

「バカだねえ、マルスは。俺のこの背丈はキャラだからいいの。可愛いでしょ？」

ちょっと首をかしげ上からマルスを見上げてくるレストは、確かに可愛い。まつ毛も長いし、何より稀にみる女顔だ。少し癖がある茶髪は白い肌を一層際立たせている。

じーっと見つめるマルスの視線に居心地が悪くなったのか、レストは笑顔をひきつらせた。

「えーっと、か、可愛いでしょ？」

「……………」

「ちょ、ちょっとマルス……？」

「お前ってつくづく、男にしておくのもつたいないよな」

「はあ……………」

「いつそのこと女装してみたらどうだ？ そっちの方が絶対似合うぞ」

「君ね、素直に可愛いって言ったほうがいいんじゃない？ 女装が

似合うと可愛いとのニュアンスは微妙に違うんじゃない……………」

「違うのか？」

「違うよ。てか君ほんとに無神経なんだね」

「余計な御世話だ」

ぶすつと、拗ねたようにマルスが黙り込む。その表情があまりにも可愛くて、くすりとレストは笑ってしまった。それを視界でしっかりにとらえたマルスの眉がさらに寄ったのはいうまでもない。

しかし不意にその瞳に陰りがさす。

「……俺、やっぱ嫌なこと言っただかなあ……」

ぼつりと漏らす声が意外なほど沈んでいたの、レストだけでなくレーテも顔をあげてマルスに不思議そうな視線を向けた。

いつも能天気でいるマルスがこのように落ち込むことなど、めつたにないのだ。

レストは物珍しげに彼の顔を見上げる。

「いきなりどうしたの？ 君らしくない」

「いや、俺って無神経なんだろ？ なんかあの嬢ちゃんもロキも俺のせいで怒っちまったみたいだし……。なんか、気に障ることもあったかなー……。なんて」

「……マルスが人のことを気にするなんて珍しいですね。そんなに気になるんなら、謝りに行ったらいいじゃないですか」

今までずっと黙りこんでいたレーテが優しく微笑んで言った。レストはいまだに眠そうにマルスの言葉を聞いていたが、レーテの提案に興味を持ったのか、目をこすって小さくうなづいた。

「それがいいかもよ。あのお嬢ちゃん、結構落ち込んでたみたいだし？」

「謝る……。つて、どうやって」

マルスは面白そうだと思ってはやしたてるレストに困惑の視線を向ける。

どうやってつて……。レストは困ったようにお茶を濁すが、対するマルスも困り顔だ。

そんな二人にレーテは呆れたように溜息をついた。

「あなたたちは本当に……謝り方の一つも知らないんですか」

「マスター、だってさー……」

「俺たち、人に謝ったことなんてないんだもん。ねえ、なんていえばいいの？ ごめんなさいってひたすら言うの？ それとも土下座すんの？」

本気か、と疑うようなセリフにめまいを覚えながらもレーテは人差し指を立て、順に説明していく。

だが実は、この世界には謝り方を知らない人などそれこそウジがわくほどいるのだろう。

気に食わないものは殺す、謝って和解するよりも相手を殺したほうがずっと楽。

ここはそんな世界だ。わかっていながらもレーテは、ため息をつかずにはいらなかった。

「いいですか、レストもついでに聞いて下さい。まず謝罪というのは『ごめんなさい』で始めることです。いいですか、はじめが大事ですよ。自己流の言葉でよろしい、ただ済まないという心をこめて謝るんです」

「心をこめて……」

「そうです。自分が心を開けば相手もそれとなく開いてくれますよ」

なんだか幼稚園児に教えているような感覚だ……。180近い大男を目の前にしてレーテは頭を抱える。

しかしふつう幼稚園児はここで「はい、わかりましたセンサー」と可愛らしく返事をするのだが、マルスは唇をひき結んだままむっつとした顔で黙り込んでいる。

理解できなかったか。レーテはそう判断するともう一度ため息を吐いて手をひらひらと振った。

さっさと行けの合図にマルスは戸惑ったようにレーテを見る。

「言葉でいっても無駄でしょう。とりあえず、今あなたは少なくとも罪悪感を抱いているようですからね、そのまま謝ってくれば何とかなります。大丈夫ですよ、アリスは、貴方達が思っているほど柔じゃありません」

「ザイアクカン？」

「……少し君は道徳の授業を受けたほうがいいようですね。罪つていう字に、善悪の悪、感じるっていう字を書いて罪悪感、『ごめんなさい』の気持ちです」

「ごめんなさいの……」

「ごめんなさいの、罪悪感。」

マルスは舌の上でその言葉を転がすようにして呟くと、素早い動作で席を立った。ずっと彼にもたれかかっていたレストが突然バランスを崩し、抗議の視線をマルスに向ける。

しかし彼はそんなことすら気にせず、堰を切るようにして言った。

「お、俺、ちゃんと謝ってくる」

言うが早いか、踵を返す。

取り残されたレーテとレストは、呆然とその背中を見守っていた。やがてそれすらも見えなくなると、まるで呪縛が解けたようにレストが口を開いた。

「あいつ……アリスの部屋知ってたっけ？」

「いえ、というか僕も知りません」

「マスターの家って滅茶苦茶広いよね」

「はい、まだ僕と使用人しか攻略していません」

「マルスってさあ……方向音痴だよな」

「ええ、あれはもう……迷子の天才児です」

「……今ごろ遭難してるね」

「そう思うんなら後を追ったほうがいいんじゃないですか？」

「いや、めんどいし、眠いし、面白いし、ほっておく」

本当に友達かよ……。レーテは呆れたように隣の彼を見る。

そんな視線を感じたのか、レストは苦笑してうなづいた。

「いいんじゃない？ あいつのああいうところ、ほんと久しぶり。

泳がせとけばいいよ」

「……むきになって屋敷を壊されちゃたまったもんじゃありませんけど」

「あー……それはまあ、ドンマイ？」

「ドンマイじゃありません、相棒なら止めて下さい」

過去に一度似たような例があったことを思い出し、レーテは身震いした。

マルスはお世辞にも気が長いほうだとはいえない。彼がよくやる「冒険」も、外だからこそ夢中になるのであり、屋内でやる（要するに屋敷内で迷子になる）のは窮屈で仕方ないそうだ。

幸いあのときはたいした被害もなく終わったが……次はどうなるか分からない。

慌ててレストに言うてみるが、当の本人はもうすでに興味を失ったのか、眠る態勢に戻っていた。

テーブルに突っ伏すようにして重くなるまぶたを素直に下す。

しかしレストはまだ言わなければいけないことがあった。寝息が洩れそうになる唇をゆっくり動かす。

「相棒なんかじゃ……ないよ」

「レスト？」

「嬢ちゃん、さっき俺達ってどんな関係って……聞いたでしょ？」

相棒でも、友達でも……ない」

「なに言ってるんですか。確かに僕と貴方達は“カード”に縛られた主従関係かもしれませんが……貴方たちはその前からの友達ですよっ？」

そう、それはちょうどレーテヤルア、イオヤロキと同じように。

それを否定されるのは、自分たちの関係さえも否定されているような気がして、ひどく不安だった。

レーテはともすれば悲しみに歪みそうになる顔を必死で元に戻し、何事もないようにレストの髪をなでる。

触られているのが気持ちいいのか、レストの顔が一瞬安堵に満ちた。さらさらとした心地いい感触が指の間からすり抜けていく。

「違うよ、俺はマスターたちとは違う」

「まったく……マルスが聞いたら泣きますよ？」

「でも、俺たちは友達なんかじゃないんだもん……」

「一見すると仲良さそうなんですけど……じゃあどういう関係です？」

まどろみかけける意識の中で、優しく髪をなでる指があった。レストはその指に安堵しながらも、いつもと違う感触に違和感を覚える。マルスのものとは違う、もっと細くて小さい手。こっちのほうが絶対感触はいいはずなのに、今はなぜかあのごつごつした乱暴な指が懐かしかった。

友達なんかじゃない。

そんなきれいなものじゃない。

レストは眠りという深い闇に溺れかける直前、小さく聞こえないくらいの大きさを咳いた。

「俺が、マルスに依存しているだけだよ」

そんなきれいなものじゃ、ない

……

以下から作者のグダグダな後書きとなります。前回の番外編についての記載もプラス。

なんだか今回は初っ端から怪しい雰囲気…。あ、てかフレイルくん悪者オーラむんむんですね、わがキャラながら。

早くもなんだかヒロインの存在が危うくなっている…？てかアヤメって誰やねん。なーんて思っているかもしれませんが、まあそれは後ほど。

さて、今回はいきなり本編に戻ったわけなのですが。

前回の番外編、意外に好評でした。伸び率も順調。何より初日のPVアクセスが記録更新しました！ちよいと舞い上がってしまいそうです、いえ、まじで。

ということ、次回の番外編、意外と早くなるかもしれませんが。案件は以下の通りです。

- ・ 作者がシリアス鬱になる（ すぐになる ）
- ・ 何か特別なイベントがある（ ほぼこじつけでOK ）
- ・ 人気がある（ 滑らないように必死です ）

あ、この作者ギャグは苦手です。前回のも滑ってないといいんですが…。

てことで、主となるのは恋愛です。本編ではいかねえだろと思われるところまで…。あ、でも濡れ場は書きません。絶対書きません。リクエストがあったら寸前止めます。

それでは、番外編のリクエスト常時お待ちしております。ちなみに
マルスやレストのリクエストももちろんOKです。……忘れそうに
なっただけどレーテもね。

何か熱くて柔らかいものが唇に触れ、私はまどろみから覚めかけた。

ぼんやりとする視界の中で、紫っぽいものが視界に入る。

誰だろう……。不思議に思うが、私の意識はそれが限界だったのか、考えを巡らす余裕も与えず再び深い闇へと吸い込まれていった。

『見て、あの子、すっごい傷』

『ああ、あれ？　なんかね、母親にやられたらしいよ？』

『うっそマジ？　かわいそー』

『てかなんか惨めじゃない？ 父親もないみたいだしー？』
『同情しようにもこんな状況が違えばねー』

ウソつき。同情なんて、する気もないくせに。

陰ではそうやって嘲笑^{わら}って、表面上だけ仲良くしようとするんだ。誰もがおんなじ仮面をかぶって、同じように笑って、同じように軽蔑する。

「ちゃん大丈夫う？」

「ほんと可哀そうだよね、

ちゃん

「モーマジサイテーな母親」

「なんかあつたら言つてねー？」

お前らの噂の糧になるとわかつてるのに、誰が言うか。

『なんかさー、あいつちょっとウザくね？』

『ほんとほんと、センサーが仲良くしてやれって言つから仕方なく声かけてやったのにさー』

『ブスのくせに無視しやがって、マジうぜー』

『感謝ぐらいしろってんだよねー』

『もうなんかウザいからさー、いじめねえ？』

『さんせー！』

当然のごとく、私は孤立した。陰湿というには軽いいじめだったが、私を追い詰めるには十分なほどの嫌がらせ。

クラスのほとんど全員に無視されたり、汚れもの扱いされたり、ひどい時には物に悪戯をされたこともある。

でもいつからだろう、そんなことすら気にならなくなった。

辛いとも苦しいとも思わない。ただ目の前にあるのは果てしない

虚無感だけ。

何故だろうと考えると、実に簡単な話だった。

光を知らなければ、闇を闇として認識することはない
でしょう？

だから私は知らないうちにその現実を受け入れた。
そのままのほうが良かったのかもしれない。母には虐待され、ク
ラスメイトにはいじめられる、闇一色の現実。一色だったからこそ、
温かさがあつた。

なのに。

『僕に、守らせてください』

『帰るんだろ？』

『ねえ、アリス。俺のものでいて？』

『こいつはここにつないであるし、もし出た
としても僕が君を守るから』

『それにあのお嬢さん、俺らは殺せないよ。たぶん“ア
リス”だし』

『やだよ俺こんなアリス』

『この世界ではね、君こそが狂っているんだ』

いつからか、何かが狂いだした。白い、光が見えた気がしたんだ
ウサギ

……。

光を知れば、それを失った時私は何を見えるというの？

残るのは、しっかりと存在を示した闇だけ。

「アリスうー？ どーしたの、ボーっとしちゃって」

耳元で不思議そうな声が聞こえ、私はようやく我に返った。声のほうを向いてみると子供のように無邪気に笑う紫の髪の男がみえる。
一瞬誰かと思い仰天したが、3秒としないうちに思い至った。

そっか……。ルアに誘拐されて、この世界に来たんだ

っけ？ この人の名前は……イオ。
私、今まで何を考えてたんだろう。せつかくのお茶会なのに……。
何かとても大事なことだと思うのに、思い出せない。

「な、なんでもないわ」

「アリスがぼーっとするなんて珍しいですよ。夜とはいえ、もう少し我慢して下さい、みんな集まりますから」

隣で困ったように笑うのは帽子を被った男……レーテだ。人の良
さそうな笑顔に一種の安堵感を覚えながら、私はくつろいだ。

気持ち悪いほどにびったりと体がやわらかめの椅子に沈みこんで
いく。心地いい……。

「みんなって……誰？」

「誰って……アリスだったらボケちゃった？ みんなはみんなだよ」

からからと悪気なく笑うイオに私はむっとする。

「だからみんなって……」

「ああ、きたね」

さらに問い詰めようとする私の言葉を、レーテが小さな声で遮つ
た。彼が向くほうに視線を向けた私は、その赤い髪を見た瞬間凍り
つく。

どうして彼が、こんなところに……！

「ふ、フレイム様?!」

「やあ、ごきげんよう、“アリス”」

気さくに手を振ってくるフレイムはまるで私の記憶のものとは違っていた。あれほど私に向けてやまなかつた殺気が一片も感じられない。

それどころか走ってきたのか、少し上気している頬は愛らしいといつてもいいほどの子供っぽさを見せている。

「アリス、お久しぶりです」

フレイムの後ろから、明るい声が聞こえた。その声にまさかと思いながらも私は恐る恐るそちらのほうを見る。

ビンゴ……。

「ルア……あんたまでどうしたの？」

「どうしたって……旧友に会いに来ただけですが」

「ああ、ルア、こちらに座ってください」

呆然とする私をそっちのけでレーテは立ち上がり、ルアを手招く。友達……？ 誰と誰が？

しかしそんなことを口にする余裕さえも残されていないかった。

「マスター！ ワイン持ってきたよー！」

「あ、俺白がいい！ 白！」

どんどん続いてレスト、マルスがお茶会に参加する。彼らの無邪気な笑顔でその場の雰囲気は二倍に明るくなった気がした。

お酒……？ おいおい、お前ら未成年じゃねえのかよ。

呆れてなにも言うことのできない私の横を、満面の笑顔でまるでいないかのごとくすり抜けていく。

まるで、いないかのごとく。

全身に鳥肌が立った。

バシン、と何かを強く叩く音がする。

慌てて周りを見渡してみるが、気づけば周りにはだれ一人としていない。さっきまでそばにいたはずのイオも、レーテも、こっちへ向かって走ってきたはずのフレームも、ルアも。それどころか、周りは何も無い闇だった。

みんながいなくなっただんじじゃない。私が一人、闇に放りだされたのだ。

5メートルくらい先に、光が見えた。丸いテーブルを囲んで、みんなが楽しそうに談笑している。

駆けつけようとしても、足が全く動かない。

何よっ、これ…！

下を見ると、足元の闇がまるで生き物のようにずりりと伸びて両足首に強く絡みついている。タコのようにもナメクジのようにも見える、気持ちの悪い触手。

私はそのおぞましい光景に悲鳴を上げた。

闇の触手はこうしている間にも足首をつたってふくらはぎへと伸びている。不思議なことに、闇に絡みとられた部分は一切の神経を断ち切られたかのように何の感覚も感じなかった。

「イオ……っ！」

思わず一番近くにいる、大っ嫌いなはずの男に助けを乞う。イオは最初不思議そうに周りを眺めていたのだが、必死に叫ぶ私の声が

届いたのか、こつちを見た。

ほっとしたのもつかの間、彼の仮面に描かれた笑顔の冷たさに、思わず身をすくめる。

「ああ、ごめん“アリス”。俺もう君に飽きちゃった」

飽きちゃった。

言葉の意味よりも私に深く突き刺さったのは、その瞳。

なんて冷たい色をしているんだろう。情も、愛も、優しさも、そんなものすべてが欠落したような、人形の瞳。

それはイオだけじゃなかった。レーテも、マルスも、レストも、フレイムも……あのルアでさえも、同じ瞳で私をじいっと見つめる。いくつもの人形の視線が、私に突き刺さった。

「てかさー、そもそも“アリス”として不出来じゃねえ？」

「ふふっ、そんなに身も蓋もなくなっちゃ駄目だよマルスー。仕方ないじゃん、“失敗作”なんだからさあ」

「というかイオもよく今までもちましたね、感心するばかりです」

「でしょー？ ま、興味はあったからねー、“アリス”には」

「ふふっ……いいの、ルア？ 愛しの姫君が助けを待ってるよ？」

「冗談やめて下さい、フレイム様。確かに僕も“アリス”に憧れていました、あれじゃあ……ね」

嘲笑、落胆。いろんな負の感情をごちゃ混ぜにしたものが彼らの口から飛び出し、それがまた闇を深くしていく。

闇はすでに私の腰辺りまで浸食していた。逃げ出したくても、腰から下がすっぱり切られてしまったか、最初からないかのようにな、感覚が全くない。

彼らは闇にうずもれて悲鳴を上げる私を見て、楽しそうに談笑し

ている。交わす言葉の一言のたびに闇は深くなり、また加速していった。

「……っあ、やめて……っ」

「アリス、もしかして本気で自分が愛されてると思ってた？
あははははっ」

「いや……っ」

「僕らが愛してるのはアリスでなく“アリス”なんです」

「嫌あ…っ!!」

「だけど君がこんなにふさわしくないから、この有様。残念、
みんなに捨てられちゃったね」

「嫌、嫌嫌嫌っ……」

「ほんと、マジ期待外れ」

「嫌あ　　ッ!!」

闇が私の口に達し、喉へと滑り落ちようとする。柔らかなスライムを飲み込んでいるような冷たい感触に私はむせかえろうとしたが、あいにくむせかえるための喉の感覚がない。それでも何も感じない闇の中で、私は何度も嘔吐しているのだろう。

惨めな私を見て、イオが、みんなが嗤う。ほとんど最後に残った左目からこぼれた大粒の涙は頬を伝わることなくそのまま闇に呑みこまれてしまった。

最後の視界も、じわじわと闇に覆われていく。その中で私を啜つ
光だけが、妙に眩しくて……うらやましかった。

「さよなら、アリス」

そう言ったのは、イオだったのだろうか。

とぶんと、水滴が落ちるような音を残して私は闇に吞まれた。

「じよ　ちゃん　おい嬢　嬢ちゃん!!」

体を力の限りゆすぶられて私は飛び起きるように目を覚ました。途端に目に入ってきた強すぎる光に思わず顔を歪めてしまう。そう言えば、電気消してなかったけ？　考える私はひどく冷静だったが、なぜか全身から大量の汗が噴き出していた。

背筋をぞくりとした気持ちの悪いものが駆け巡る。さっきまでの夢が引き継いでいるのか、その感触に私は夢中で悲鳴を上げた。両腕を振りかぶって背中をさすっていたものを振り落とす。

「おい、嬢ちゃん！　大丈夫か?!」

背中のがあわてたように離れ、支えを唐突に失った私は崩れ落ちた。背中がやわらかいシーツに触れ、ようやく落ち着いたように溜息をつく。

まだ荒い息を静かに整えながら、私はちらりと横を見た。意外にもそこにあっただのは、ピンと警戒したように立っている茶色のウサギ耳、金色の短髪と瞳　マルスだった。

トパーズのように大きな瞳はわずかに心配そうな色を帯びている。どうして彼がこんなところにいるんだろう……。私はぼうつと考えながら息をついた。

「だ、大丈夫……今、何時？」

「何時って……朝の9時だけど」

朝の9時？！

私は耳を疑って、戸惑ったように言うマルスを驚いたように見た。確かお茶会を抜けたのが……日の入りちょっと前時ぐらいだから、6時もいつてなかったと思う。

それからベッドに倒れこんで考える余裕もなく眠りに落ちたというのだから、少なくとも15時間はずっと寝ていたことになる。

歯も磨かないで。風呂にも入らないで。おなかいっぱい甘いものを食べた直後に。

……爆睡した。

「……3キロは太ったわ……」

私はともすればどん底まで落ちそうになる気分を抱えながら苦々しくため息をついた。

いや、もしかしたらあの悪夢のせいで汗をいっぱいかいたから、少し痩せれるかも。そんな淡い期待を抱くのは私が仮にも一回の“普通の”女子高生だからだ。

こんな世界では生きていけない、普通の女子高生。

「……忘れてた。こんなこと、してる場合じゃないよね。さっさと元の世界に戻らないと……」

「ああ？ こんなことってなんだよ。寝るのは大事だぞ。寝る子はでかくなるんだ！」

私の何気ないぼやきにマルスはまじめに突っかかってきた。

口をとがらせてベッドの上に胡坐をかくその姿は、相変わらずアイドル系の容姿と全然マッチしていない。しかしその子供のような態度に私は一瞬目を見張り、それからぷつと吹き出した。

そのまま極力口元を掌で覆い隠すようにして笑う。マルスは早くもそれに気がついたのか、恨めしそうに私を睨みつけ、ぷうつと頬を膨らませた。

ぶぶつ

淑女あるまじく、思いつき吹き出してしまっ。

うつわかつこワル。なんてことを思いながらも私は震える腹筋を押さえるのに必死で構ってられなかった。手をはなしたらまず間違はなく爆笑してしまうだろう。

「ちょ、おまつ……何大爆笑してんだよっ！俺なんか変なことしたかつ？！どこが変なんだよどこがっ」

うつ……そうやって眉尻を下げながら泣きだしそうな顔しないでほしい。

思わず笑って……いや、同情してしまいそうだ。

「か、……か、か……」

「か？」

「可愛いつー!!」

むぎゅっ

突然、私は彼の頭に抱きついた。

漫画ではよくやる、胸のバカでかいお姉さんが弟や年下の男性をぎゅっつってやるシーン、あれあれ。

あ、でも胸があるなんていつてないんだからね？ あんな重いものいらないうからね？ 断じてほしいわけじゃないんだからね？
……ひがみなんかじゃないんだから。

「うにゅっ」

顎の下で若干高めめの奇声が上がった。

うおおっ、新鮮！

これがロキだと顔を真っ赤にして必死で離れようとするだろう。それはそれで可愛いのだが。

レーテだったら……あの怖い笑顔で「なにするんですか？」って返されそうだな。

イオは……や、そもそもあの変態にこんなことやったらそのまま押し倒される自信がある。「そっちが誘ってきたんでしょ？」とかなんとか……。

「ぎゃあああつ！ 絶対ヤダ！ それだけはヤダツ！！」

私はあらぬ妄想（いや、実際あり得そうな妄想）をしてしまい、腕に抱えたものにさらに力を込めて悶絶した。

（は、恥ずかしいっ……いやいやいや、私は決してあやつにこんなことしないぞ！ ただこの人がすごい可愛かったからつい、つい出来心なんだ、あんなピンク可愛くもないし、無邪気な顔されたら絶対なんかたくらんでるし、へ、変態だし、耳に触りたいだなんて思うわけないんだから！）

しかし前科がロキ+マルスになってしまったのは事実だ。

ううっ……私ってなんかこっちに来てから何かに目覚め始めてる

……？

はぁぁっ…

重々しくため息をついて私は力の限り抱えたものを抱きしめた。

そこで、はたと気づく。

抱えたもの？

ってなんだ。

そう思い、そろそろと下を見ると、目に私の顔と同じぐらいの大きさの金髪があった。いや、それだけじゃない。その脇に、苦しそうにバタバタと振りまわしている腕。

あれ、そう言えば息が聞こえない？

さらに腕の動きが激しくなる。目の前でバタフライを見てる気分だ。しかし突如それは力尽きたようにクタクと落ちた。

私はあわてて腕をはなし、マルスの頭を解放する。

瞬間、彼は素早く身をそらせ、私の目と鼻の先でゼーハーゼーハー深呼吸をし始めた。

「こっ…この、はっ…あ、ま…はぁっ、はぁっ…こ、殺す気かっ!!」

顔を真っ赤に上気させて息を整える彼を、私は驚いたように見た。まさか、殺意なんて一瞬たりとも向けていない。それどころか可愛すぎて胸がキュンってしたくらいだ。

だがしかし。そこで思い至る。

(あー……もしかして、首絞めてた?)

だから彼はこんなに窒息寸前なのか。

「なんていうか……すみません?」

「なんで疑問形なんだよ! やっぱ確信犯なんだろう?! 確信犯なんだな?! ひ、ひでえよ嬢ちゃん! お、俺、俺あんたに謝りに来たのにつ……あんまりだあつ!」

いや、疑問形になったのは自分の行動に確信がなかったから。

しかしそんなことよりもキョドっている彼の最後らへんの言葉に引っ掛かった。

「謝りに……?」

何か、謝れることでもされたらどうか。少し考えて、そしてすぐに思い当たる。

意識が闇にとられる直前まで悶々と考えていた、あのことだ。

私は、アリスに相応しくない……

罰が悪そうに目をそらすマルスは、本気で罪悪感を感じているようだ。そんな彼に、私はチクリと胸が痛むのを感じた。

本当のことなんだから、謝る必要なんてないのに。

刹那的にそう思ったが、それを言うことはできなかった。

ここで「謝らなくていい」と言ったら、私はどんなに楽だろう。

しかし謝る本人はそうではない。きつと「謝る」という道さえもつ

ぶされて、行き場もなくうろつろつとさまよってしまっただから私は大人しく体を起こして聞く態勢に入った。マルスの口が、わずかに開かれる。

「俺……あんたのこと、全然知らないのな」

「え……？ そりゃあ、まだ出会って一日もたってないもの、当然よ」

「そう言っちゃあそれまでなんだけど……ロキや俺の頭をなでたり、そんなことする女には見えなかった」

「いや、これは……」

言葉に出されると、途端に羞恥心がこみ上げてきた。

常識的に考えて、女が男に抱きつくというのは非常に危ない行為だ。

しかもベッドの上で。

誘ったと思われても全く否定できない。

真っ赤になった私を見てはじめて状況を意識したのか、つられたようにマルスも耳まで赤くなった。

「い、いや、そういうことじゃなくてだっ、お、おいつ、赤くなんなよっ」

「そ、そっちこそっ！」

「あ、あのだな、実は第一印象はきつそーな女としか思わなかったから……」

実によくいわれる。

容姿はそれなりの、普通の女の子なのだが（というかそうであってほしい）いかんせん目つきが悪いそうだ。一重の瞳は、普通に見ているというのに、相手は怯えたように「睨まれた」という。

その上私はちょっとばかり背が高い。確か160ちょっと……と
いうところだが。まだまだ私より背が低い人は（男子は少数だが）
いるのだ。知らず知らずのうちに見下ろす形になってしまう。
まあ滅多に笑わないというのも一つの原因だろう。

しかし落ち込む私に対してマルスは実に上機嫌そうにニパツと笑
った。

「でもあんた、笑うと結構可愛いんだな」

あまりに直球に言われる。

ああ、これがほかの人だったらメチャクチャ恥ずかしくなるんだ
ろうな。

しかしなぜか羞恥心を大きく凌駕したのは抱きしめたいという欲
求だった。

ううっ……メチャクチャ可愛いよこの子……っ！

いや、むしろ笑うと可愛いのはあんたのほうです……っ！！

うあああっ！ もふもふしてええっ！！

私は握りしめた拳を後ろ手へとまわしながら、ひきつった笑顔で
答えた。

なるべくその輝く笑顔からは目をそらす。

ヤバイ……理性が……っ。

「そ、そう……？ 我ながら平凡な顔だと思っただけ……」

「えーっ、でもマジで可愛かったぜ？ ロキの耳をもふもふした時
の生き生きした顔、俺ああいうのスゲー好き！」

「……もふもふしてえっ」

「へ？ 何？」

「な、なんでもないよ！ そ、それより、私のことを知らなかった、で、なに？」

（あ、あぶねー……危うく殺気のコもった一言を聞かれるところだった……）

たらりと、こめかみ付近で冷や汗が一筋流れた。

不思議そうにピロピロ揺れるこげ茶の耳に両手が激しくうずく。

ううう……なでたい、もふもふしたい……！

ああ、なんで抱きしめた時にもふもふしなかったんだろう……。激しく後悔しながら、私は必死で話題の展開を求めた。

途端に、マルスの顔が渋くなる。どうしてこうも感情が表情そとに出るのか、この男は。

「いや、あのな……ほんと、悪かったよ。俺あんたのことろくにわかってなかったのに、散々なこと言っちゃった」

（うん、まあ確かに初対面であれはないわよね……）

いや、でも事実なわけだし……。

一介の女子としての感情と卑屈な少女としての感情が私の中でせめぎ合う。

葛藤して黙り込んだ私をなんと受け取ったのか、マルスは途端に泣きだしそうな顔になった。

瞬間。

「じよ、嬢ちゃん……」

ピコン！

そのあまりにもあまりな顔に私の中の何かが反応した。どちらか、じゃなくて全く別のものがほかの2つをあまりにも簡単に殺してみせる。

私はいきなり右手をのばすとむんずと、ピコンピコン揺れるそれをつかんだ。

いきなり耳を掴まれたマルスは突然のことに対応しきれなかったのか、驚いたように口を開いたままパクパクと開閉を繰り返す。

「じよ、じよじよ嬢ちゃんっ?!」

「黙りなさい。ええ、ムカついたわよ、滅茶苦茶ムカついたわ。あんたのせいでどれだけ悶々としたと思ってるの。ああ、でも言葉よりも……身体で払って?」

にやり、と意地悪く笑う。ああ、今少しだけイオの気持ちかわかった。

マルスは怯えたように私を上目遣いで見る。私よりずっと背が高いのに下のアングルにいるのは、いまだに私が彼の耳をつかんで放さないからだ。

そのたまらなく可愛らしい（しかし無自覚な）仕草に私はベッドの上で悶えたくなるのをこらえた。

「か、身体って……お、俺の?」

「そう、マルスの身体で」

「嬢ちゃんんんっ！ 冗談もいい加減にしるよっ？！ い、いいか、普通はこの年で貞操を落とすもんでもないし、いや俺自体もそう言うのは初めてだし……と、とにかくだな、血迷うなっ！ お、お前とそんなことしたらぜってーおおお俺ロキに殺されるっ！！」「なにごちゃごちゃ騒いでんのよ……とにかく、さっさと触らせなさい 耳につー！！」

私の理性が完全に崩壊する音がどこかで聞こえる。
次の瞬間、マルスの悲鳴が屋敷中に響き渡った。

柔らかい感触を思い出しながら、私は自分の両手を見つめる。自然とつつとりとしたため息が唇から洩れた。

気持ち良かったあ……。

ロキのに匹敵するくらい心地よいぬくもり。ここになってようやく自分が、もとは可愛い物好きの普通の少女だったと思い返す。

そう言えば昔、白いウサギの人形を持っていた気がする。自分の腕と同じくらいの、大きな人形。昔は毎日その人形と一緒に寝たものだった。

しかしそれも、母があんなことになってから捨てた。

強くなければ生きていけなかったから。もう、子供のままでいるわけではいけないから。

(でもほんと……気持ちよかったなあ)

私はためしに指を動かしてみる。少しぎこちなく動くそれは、今まで散々マルスの耳を触っていたせいで疲れている。

しかし反対に心の靄は完全に晴れていた。

たまにはこうやって、自分から他人に触れてみるのもいいかもしれない。

後日談だが。

マルスはそのあとレーテの部屋に突入して「マスタああっ！！
俺もお嫁にいけないいいっ！！」と泣き叫んだそう。

以下からは作者のあとがきとお知らせがあります。あとがきは無視
&素通り大変結構ですので、最後のお知らせだけは読んでいただけ
ると嬉しいですよ。

【あとがき】

の文章、自分で書いて結構悲しくなります（泣）でもきつと誰
か読んでくれてるよね。だから私はこんなくだらない文でも書き続
けるゾ！

さて、前置きはこのぐらいで。

今回のメインテーマは前回に引き続き「アリス、変態発動！」です。
ほかの登場人物が全員にイカれててヒロインだけ普通っていうのは
ないです。まずないです。

しっかしなあ…マルス書いてて面白いです。完璧ヘタレキャラです
ね。

マルスはロキに、レストはイオにどことなく似せて作ったキャラな
のですが、全然似てねえ…。

マルスはヘタレ、ロキはツンデレですか？どっちに対してもアリス
が中年オヤジ化する…（笑）

でもこれでようやく鬱状態のアリスから解放されました…。次から
元通りツンデレアリスに戻ります。

しかしもちろんシリアス風味から抜け出せるはずもなく、さらに次
回はアリスの出番、作らない予定です。

その代わりみんなのアイドル、「紫の君」が登場します！あ、でも
たぶんまたすぐにロキターンに戻るんでしょうけど、朝ですから。

あ、ちなみに一番最初のところ、あれ気づきましたか？紫と言ったらほかにいませんからねえ。

今回久しぶりにアリスの回想&夢シーンがあつたのですが、回想のあたりのセリフ、誰が誰だかわかりますか？
わかるかと思いますが、一応下に順番書いときます。

ルア ロキ イオ レーテ レスト マルス フレーム

【お知らせ】

次回の番外編の発動条件が細かく決まりました！前回の番外編はずいぶんと人気があり…本編より人気があつたりして作者はちよつぴり切なくなつてます（泣）

ああ、でもそれはいいんです。いいですよ、気にしてませんから……いいですつて。

次回の番外編を発動するには

・残り二人の新キャラ登場（あと3、4回で出てきます。一気に出ますよ）

・前回の番外編のPVが1000突破（現在1041 突破！）

or

前回の番外編のユニークが800突破（現在776）

と、この2つです。道は長いですが…頑張ります。

（お知らせ：5/2 ネタがある程度完成したので発動レベルを少し下げました）

そこで、読者さま方にも少し協力していただきたいアンケートがあります。

アンケート

司会者のリクエストはありますか？

(ただしルア、イオ、ロキ、アリスの4人は物語に出場させますのでご遠慮ください)

(リクエストがない場合は自動的にレーテとなります)

(デュエットも場合により可能です)

キャラに対しての質問はありますか？

(どんなにささやかなものでも構いません、番外編でキャラたちに答えてもらいます)

(好みの女性など、作者が考えた質問も含めて答えてもらいます)
短編のリクエスト、随時受付中です。

(濡れ場とのリクエストの場合、寸止めに使わせていただきます)
次回予告は入れたいと思う方がいいですか？

以上です。それから別件でお知らせがあります。

【お知らせ2】

ただいま評価、感想、リクを書いて下さった読者さま方にキャラたち(読者様が好きだと言ってくれたキャラ+イオ+アリス+時々ルアロキ)が挨拶をしています。

気軽にお話しかけ下さい。

ちなみに、作者は妙にハイテンションですよ(笑)

『私ね、ようやく帰れるの』

突然彼女の唇から紡がれた言葉に、ロキは持っていたコップを取り落とした。

ガチャンッ

鋭い音が狭いキッチンに響く。きっと音以上に鋭いガラスの破片が下に飛び散っているのだろうが、どうしてもそちらを向く気にはなれない。

ただただ、明るい笑顔を自分に見せつけるように向けるアリスを凝視していた。

(かえ、る…?)

頭の中で彼女の言葉を反芻する。

必死で繰り返しているのに、どうもその言葉は胸に定着しなかった。それどころか反発し、呟くたびに心が軋みを上げる。

「……………あ……………」

いけない。このままではひどいことを言ってしまうそうだ。

ロキは彼女のまっすぐな瞳から目をそらしながら、ゆっくりと息

を吸い込んだ。激情を押さえこむように、胸をきつく抑える。

「そ……か。それは、よかった、な」

漏れ出る言葉はかすかに震えていた。ロキは呆然と自分の右手を見る。言葉だけでない、全身がまるで何かに怯えるかのごとく小刻みに震えていたのだ。

怖い？

さびしい？

悲しい？

怖い？

恋しい？

ぐるぐると脳内で回り続ける言葉をすべて否定しきることができなくて。耐えきれないように自分を抱きしめた腕も、震えている。そんなロキにもお構いなしに、アリスはうっとりとして続けた。

「あつちの世界にね、私の大切な人がいるの」

大切な人。

その言葉がずしんと心に沈んだ。

恋人なのか？ そう唇が紡ごととするが、うまく声が出ない。

聞きたい？ 聞きたくない。

知りたい？ 知りたくない。

帰りたい？ 帰したく……ない。

でもそんな想いは、ただ彼女を傷つけるだけ。

「……へ、え。いつ帰るんだよ。もうしばらくはいてくれるんだろ？」

やっとの思いで声を出す。ほんとは早くに切り上げて頭を冷やしたい。だけどその前にほんの少しだけでも安心しておきたかった。

いてくれるんだよな、ここに。

この世界に。

俺のそばに。

嫌わないで、くれるよな。

しかし次の瞬間アリスが笑顔で発したのは、そんな口キを絶望のどん底へと突き落とす言葉だった。

「今だよ」

「……い、ま……？」

さっきとは比にならないほど声はかすれていた。

どころか、もうほとんど聞こえないのではないだろうか？ そうだったらいい。最後まで笑い笑顔で見送ってやりたいと、今でも未練がましく思っているから。

こんなところで、動揺してるなんて気づかれたくない。

「な、なんでっ、そんな急な……」

「別に急でもなんでもないでしょ。どうせこうなるのはわか
ってたし」

「だけど……っ」

「うるさいなあ……ロキだって私が帰るのに賛成してたじゃ
ない」

「アリスっ!」

「今まで楽しかったわ。じゃあ、そろそろいくね、バイバイ」

「まっ……」

待って。そう呼びとめる声は踵を返すアリスには届かなかった。
追いかけてたくても、その背中にはつきりと拒絶をされていて。きっ
とその腕をつかんだ途端憎々しげに睨まれるに決まっっていて。

離れてくのは嫌。でも、嫌われるのはもっとなんか嫌。

躊躇っている間に、アリスの影は小さく遠くなっていった。

「待って!」

今から呼びとめたって届かない。

「行かないで……っ」

今から手を伸ばしたって触れられない。

「俺を捨てないで

……」

後悔なんて、すでに遅くなったときにしかしない。

消える背中が、“あの女”に重なったような気がして、ロキは悲鳴をあげて飛び起きた。

「……………う…あ…あ…っ」

覚醒した途端すさまじい嘔吐感を覚え、ロキは口を押さえた。

幸か不幸か、胃は空っぽだったならしく嘔吐感は相変わらずこみ上げてくるけれど吐瀉物はあるけれどこなかった。

荒い息を繰り返しながら、目だけを動かして必死で時計を探す。今は何時だろう。体の調子がいつもと違っているということは…もう一人の覚醒が近いということなのだろうが。

いつの間に眠ってしまったのだろう。
どれくらい眠っていたのだろう。

嫌な、夢を見た。

「……………」

違う、夢じゃない。夢なんかで終わるはずがない。

この先起こる予定の、未来だ。

ロキは苦しさを紛らわすかのように自分の左腕を強く引っ掻いた。うっすらと赤い線が残り、鈍い痛みがじわじわと襲ってくる。そんな痛みでさえ、今は自分への鎮静剤でしかなかった。

ふと、部屋の入り口近くにあるものを見つめる。ロキは興味本位でそれに近づこうとベッドから足を出した。

その瞬間。

「……………うあっ！」

がくつと、膝が崩れ落ちる。どのくらい長い時間寝ていたというのであるう、まとも歩くことすらできない自分の両足を上げ上げと眺め、泣きそうな顔で笑った。

(ほんと……なっさけねー……)

マルスに八つ当たりして、ふて寝して、嫌な夢を見て、夢の中でアリスと“あの女”を重ねて……それでこの始末か。

頬を流れおちたのは汗だったのか、それとも。

ロキは纏わりついてくる闇を振り切るように頭を左右に振ると、半ば這いずるようにその前に立った。

手をのばして、それに触れる。同じ行動を、その中の“俺”もした。

「なあ」

唇が動く。薄いガラスを隔てて、“俺”も。

自嘲するように口端をあげながら、光のない悲しい瞳で。

「イオ、聞いてんだろ？」

当然ながら答えはない。そのことに少しほつとする。

しかし決して触れることのできない“俺”の瞳が泣きそうにうるんだのは気のせいだったのか。

「どうせお前のことだからアリスをどうこうしようとか考えてんだろーな。お前はいつもそうだ。俺が好きっていったやつからは一歩引いて嫌いつて言って……、いつもいっつも……っ！」

ダンッ

壊れそうなほど、“俺”が映るそれを強く殴った。しかし意外に丈夫だったのか、“俺”に亀裂が入ったりするようなことはなく、

ただただ悲痛そうな目でロキを見つめていた。

「お前なんか大っ嫌いだよっ！！」

知ってる。イオが自分に優しいことくらい、嫌でもわかる。

好きなものは、全部譲って。

欲しいものからは、一歩足をひいて。

でもほんとにあの馬鹿は、わかっていたのだろうか。

レーテは一見、イオから離れ自分に優しくしてくれているように見えた。以前よりも、ずっと。

イオへ向けていた愛情が自分に向けられたのだと信じた。嬉しかった。イオへ対しての優越感だつて持った時期がある。

だけど、違う。

彼が向けていたのは、愛情でもなくて、友情でもなくて、ただの同情。

結局手に入れたのは、そんな虚ろでちっぽけなものだけ。

「お前なんか……お前なんかにわかるかよっ！ ふざけんなつ、てめえも同情してんのか？！ 可哀そうな奴だつて、哀れな奴だつて？！ 余計な……余計な御世話だっ！！」

両手に余るほどの、同情。欲しかったのは、そんなものじゃない。

喉が潰れるほど大きな声で絶叫しながら、何度も何度も“俺”を拳で叩く。

幾度目だろう、ついにパキッと醜い亀裂が走った。細かい破片が指に刺さる。鋭い痛みが顔が歪みかけたが、ロキは構わずに渾身の

力で“俺”^{かがみ}をたたき割った。

(痛い……な)

右手はすでに血まみれだった。

どうしてこんなことをしていたんだろう。たたき割ってしまうと、先程の激情がウソみたいに鎮まっていた。

ロキは啞然とバラバラに割れた破片を凝視した。いくつもの“俺”が同じように視線を向けてきて、正直気色悪い。

これを壊せば、イオすらも壊せるとても、思ったのだろうか？

「……なあ」

さっきとは打って変わって、ただ静かな声で呼びかける。

怒りも、優しさも、悲しさもない。ただただ、虚ろなだけ。

「まだわかんねえのかよ。俺はあんたから与えてほしいんじゃない。あんたから奪い取りたいんだ」

与えられた同情なんていらぬ。

ただ、手に入れた愛情がほしい。

でも、わかっている。本当に欲しいものはきっと、絶対に手に入ることはないもの。

アリスはいつか元の世界に帰ってしまう。ロキに留める術なんて、ない。

だから、その術を持っているというのに使おうとしないイオがたまらなく憎々しかった。

「大っ嫌いだ……お前なんか……っ！」

ポロリと、こらえていた涙が叫んだ拍子にこぼれおちる、その時。突然、誰かに抱きすくめられた。

驚いて胸元を見ると、体にきつく巻きついていたのは長い自分自身の腕だった。

無論、自分はそんなことやっていない。だとしたら？

その答えに一拍遅れて気づいたロキは今まで以上に悲痛そうな泣き声をあげた。何とかして腕をはなそうとするが、意に反して自分の腕はきつく抱きすくめる。

子供をあやすようなその強くて優しい仕草に、自分の中の何かに火がついた。

「ふざけんじゃねえっ！ 同情なんて御免だっ！ はなせっ、はなせよイオおっ！！！」

身体を壁に打ち付けて、滅茶苦茶に暴れる。全身に先程の鏡の破片が刺さって痛かったが、そんなことどうでもいい。

こんな優しさ、嫌だ。

身体が、心が引きちぎられるように痛む。なのに腕はきつく体を抱きしめるだけだ。

痛いのに、拒みたいのに、……憎みたいのに。
なににできないのは、何故？

「……な、せっ……はなせよおっ……！！！」

叫ぶ声がかすれて、喉が潰れて、なんだか縋りつくような声になっ
てしまう。

縋る？ 何に？

自分に残されたものなんて、最初から何一つないというのに。

「……………はなし、て……………嫌なんだ……………お前のこと、嫌いなんだ……………っ」

違う。そうじゃなくて。ほんとに言いたいのはそんなことじゃな
くて。

涙が瞳からこぼれおちては、ぽたっぽたっとな小さな音楽を奏でる。
まだしっかりと意識があるというのに、感覚は次第になくなって
いくのがわかった。

（ああ……………また俺は強制的に闇の中、か）

一人が外に出ている時、もう一人は常に何も無い闇に囚われる。
少なくともロキの場合はそうだった。

暗くて寂しくて、自分の存在すらわからなくなる深い深い闇。

イオも今同じように深い闇にとらわれ、そして解放されようとし
ているのだろうか？

そしてかわりに自分が闇に閉じ込められる。

もう慣れた、はずなのに。

どうしてこんなに怖い？

「……………ごめん……………」

自分の意志とは違う言葉が震える唇から洩れた。

ロキはそのことに戸惑いながらも、その言葉に無性に悲しくなる。
自分よりも若干高めの、いつもは甘い声は今ただ震えて、同じ

言葉を繰り返す。

「……ごめん、ごめん、ロキ……ごめん……っ」

謝ってほしいわけじゃねえよっ。

俺はお前から奪いたいって言ってたんだぞ?! 大っ嫌いって
言ってたんだぞ?!

なのになんで……なんでお前が謝んなきゃいけねんだ!!

心の叫びは決して声になることはない。

急激に視界が闇に吞まれ、片割れの謝罪を意識のどこかで聞きながら、ロキは奈落へと落ちて行った。

嫌われているのなんて知っていた。憎まれてるのだってちゃんと伝わってきた。

ちゃんと自分は受け止められたと…思ってきたのにな。

イオはいまだにきつく体を抱きしめながら軽く自嘲した。

この腕も、この瞳も、この口も、すべて今はイオのものだ。何一つロキの名残なんてない。

なのに、それなのに。意思を反して涙は止まることなく頬を流れ続けた。

「あれー……？ おつかしいなー、もう日は沈んだはずなのに」

とぼけたふうに呟いてみる。指で涙を掬う気にもなれずに、イオはそのままふらふらと立ちあがった。

なるほど、確かに先程ロキ自身が体験したように足元がおぼつかない。

「っはは……馬鹿ロキ。寝すぎだよ」

膝を軽くたたいて小さく笑ってみるけれど、足に力は入らなくて。それでも何とかドアまで歩こうとすると足元の鏡の破片が足の裏に刺さり、イオは痛そうに顔を歪めた。

先程鏡をたたき割った右の拳から、破片を踏みつけてしまった足の裏から、静かに血が流れる。目が覚めるような鮮やかな赤に、一瞬だけ安堵をおぼえた。

痛みは、自分がそこに顕現しているということを再認識させる。そんな痛みがイオは嫌いではなかった。

だからと言ってマゾ気質ではないのだが。いや、むしろサドであるとは自覚している。

赤い血は、自分が化けモノではないということを再認識させる。

「……ねえ、いい加減泣きやみなよロキ」

ぼろぼろと両目からこぼれ続ける涙にイオは文句を言うように呟いた。罪悪感がチクリと彼の胸を刺す。

本当に泣いているのはどっち？

そんなの、答えは最初から決まっていた。今は完全に眠りについているロキに、そんなことができるはずがないのだから。

やっとのことでドアに辿り着いた、途端。手を伸ばしたドアノブが小さな音を立てて回され、ドアが外から開かれた。

電気をあらかた消した暗い部屋に外からの光が漏れ、イオは思わず眩しくて目を細める。

「あれ、ロキ……ですか？」

戸惑ったような声にびくりと体が小さく震えた。

(サイアク……なんでこんな時にくるかなあ……)

よりによって一番会いたくなかった相手……の次の二番手である。しかし不幸中の幸いか、光あふれるほうからは暗闇に紛れるイオの姿が定かでないみたいだ。

『ピンクのほうに野暮用がありました』

そう言ってふふふふふ、と不気味に笑う彼の顔が脳裏にちらついていた。その男が目の前にいる。

(んー……寝てる間ならいいと思ったんだけどなあー)

イオは悶々と考える。

実は彼が激怒した本当の理由とは、質問に答えず颯爽と去っていったことなのだが、イオにそんなこと知る術もない。

「ロキ……？ いえ、もしかしてイオなんですか？ でしたら……」

チャキ……

「ろ、ロキのほうだ。な？ だ、だから物騒なもんはしまえよ」

理由は知らない、されど命の危険はちゃんと感じていた。

懐から銀シルバーの銃を笑顔で取り出した彼。レーテを見てイオは蒼白になる。

いくら3人の中で最も弱いといえ、怒るといつもの平和主義をかたくり捨てて銃を乱発するこの男のことだ。半殺しは確実だろう。

顔をひきつらせながらロキの口真似をする。

何とかこの場はやり過ぎさなければ。

「あ、そうなんですか？ それは結構なことだ」

薄情なことに相手がイオじゃないと聞くと、レーテは出した時と同じ笑顔でそそくさと拳銃をしまった。

イオは複雑な心境を抱えながらもとりあえず安堵する。

「れ、レーテ？ 何の用だ？」

できれば早くここから逃げ出したい。何とか穏便に事は運んでくれないだろうか。

（俺のほうに用があるんだよね……今はいいってことであきらめてくれないかなあ……）

「いえ、用があるのはイオのほうなんです……」

淡い期待を抱え、

「仕方ない、ここでしばらく待たせてもらいますか」

玉砕した。

何となくわかっていながらもあまりにベタな展開に、一瞬この男が全部知っているのではないかという疑念を感じる。

本当は自分がイオだとわかっていて、あえてロキの振りをしろという。

……だとしたらとんでもない性悪だ。

「あー……お、俺ちよつと用ができたから席外す……」

どう考えても自分にロキの振りはできない。あんなツンデレ、誰が演じるかよ……。

しかし目の前の男は鬼そのものだった。逃げようとしたイオの腕をがしつと掴んで部屋の奥へと引っ張っていく。その時電気をつけなかったのは幸か不幸か……。

二人は仲良くベッドに腰かけた。まるでこれから夜の仕事をやるような位置に、思わずため息がこぼれ出る。

ああ、これが女だったらいいのに……。

「あなたがいなくて誰を待つというのです。さあ、ここで僕の雑談につきあってもらいますよ」

「えー、レーテの話って長いじゃ……だろ」

長いじゃん、と言いかけてイオはあわてて言葉を飲み込む。語尾に「じゃん」がついたり何かと間延びしてしまうのは完璧“イオの”口癖だ。

なるべく甘い声も出さないほうがいいかもしれないと思ったイオは、こほんと小さく咳をすると声を下げて言った。

「話すことなんかねえし。あんま話す気もねえし」

とにかく、これ以上話すなんて言語道断だ。いつか絶対にぼろが出る。

ロキをまねて不機嫌そうな声でそう言うと、暗闇の中レーテの瞳が苛立ちの光を煌めかせた。

まるでしめ上げるようにイオの胸倉をつかみ、ほんの少し持ち上げる。もともとレーテのほうがイオよりも小さいのだが、さらに身長差ができた。

「じゃあなんで泣いてたんですか」

身体が、震える。

なんで？ そんなことロキに聞けばいい。俺が知るか。
のどまで出かけた言葉はすんでのところであつたり、はたと思いだす。

そう言えば今は俺がロキなんだっけ？ ならこの質問には俺がロキとして答えなくちゃいけないのか……？

適当に何か言い繕えばいい。なのに、喉は焼け付いたようにぴくりとも反応を示さない。

黙り込んだ彼に痺れを切らしたのか、レーテは呆れたように苦笑した。

「そんな困った顔しないで下さい。貴方をいじめたいわけじゃないんです」

「……困った顔、してた……？」

つい素のままに聞き返してしまう。

ロキにはあるまじきどこか甘ったるい声色にレーテの眉が一瞬ぴくりと動くが、そんな小さな反応、うろたえたイオにはわからなかった。

「ええ、そうですね……何でかなんて俺にわかるわけないでしょうって顔でした」

まるでロキではなくて自分に語りかけているようだ。もしかして本当に彼はもう感じているのかもしれない。

自分がロキの振りをしてレーテを騙しているのか。それとも、レーテが気づいていない振りをして自分を騙しているのか。

どちらにしろ何の変わりもない。ただお互いの意地を張りとおすだけだ。

そしてその先も何の変わりもない。ただあるのは……。

「……………嫌いなんだよ」

「え？」

「何で泣いてたかって？ 決まってるだろ。たまらなく憎いんだよ……っ！」

レーテは驚いたように目を見開く。その顔にイオは一種の吐き気を感じる。

何故彼は驚くのだろう。そんなにも痛々しそうに顔を歪めるのだろう。

ロキが自分を嫌うのなんて、当然のことなのに。

(くそっ……………胸くそ悪い……………っ)

「大嫌いだよ、あんなヤツ……………っ」

「やめなさい、ロキ」

非難するような声でレーテはイオを諫めようとする。

しかしそんなことで、胸の奥から沸々と湧き上がるどす黒い感情を鎮められるはずがなかった。

イオを大嫌いといったのはロキとしての自分だったのか……………。それとも、イオとしての自分だったのか……………。

「あんたに何がわかるって？ わかりやしないさ。あいつは俺から何もかも奪いやがったんだ。友達も、身体も、……………家族も！」

「やめなさい！」

「貴方だつて奪われたことがあるはずだろ?! あんたから恋人を奪ったのはあのイオなんだよ!」

その時、彼は最大の禁句を言ったことにきがつかなかつた。

いつもの冷静なイオだつたら、レーテを刺激する危険性のある言葉はなるべく避けることを念頭に置いて話すのだらう。レーテの瞳が凍りついたのにも確実に気づいたはずだ。

完全に混乱しているのに、ぎりぎりのところで“ロキ”を演じているのはさすがというべきか、身体の奥にまでしみついた意地のおかげだつた。

そうだ、ただの意地だつた。何もかもすべて、自分勝手な意地。そんなちつぽけなもののために、自分は目の前の友人にさえ嘘をつきとおしてきた。

「憎いんだろ?! 憎めよ、殺したいくらいに憎めばいいんだつ! イオなんて消えちまえばいいつ……そうすれば、そうすればロキはこんなに苦しまずに済んだんだよつ!」

自分の口からあふれ出た感情は、言葉として紡げば紡ぐほど胸に突き刺さる。それでも長い間無理やり押さえつけてきた激情はとどまることを知らない。

さらにたたみかけようとしたり、その時。つんざくような音とともに、頬に激しい痛みが襲つた。その衝撃に耐えられず、存外に軽いイオの体は腰掛けていたベッドから落ちる。

思い切り殴られたのだと気づくにはそうかからなかつた。

しかし気付く前に、殴つた相手は次の行動に移る。

叩きつけた拳を強く握りしめながら胸倉をつかむレーテを、イオは呆然と見上げた。

おやじにだって殴られたことないんだぞ、なんてこと言つつもりはないけれど。

でも、人に殴られたなんて何年振りだろう。

じん……と、不思議な熱を持ち始める頬をイオは無意識にそつと触れる。

向けられてきたのは拳じゃない、銃だ。

何故彼は今この場で銃を取りださないのだろう。怒ったのなら殺せばいい。それがここでのルールなんだから。

(そつか……貴方はどこまでも、平和主義なんだね……)

だから、彼はその手を血に染めたことがない。ただの一度として……まあ銃は乱発するけれど。わざとか偶然か、向けられるのはイオだけだった。

彼はこの汚れた世界で、唯一綺麗な存在。

その彼がこんなにも怒っているなんて、なんだか不思議な感覚だった。

「……僕に貴方のことがわかるかですって……？」

「レー……」

「わかるわけないでしょうっ！ 貴方は何一つ言おうとしなかったじゃないですかっ！！」

「っ……?! ……ふぐっ……」

胸倉を持ち上げられて力一杯床にたたきつけられる。油断していたイオは後頭部に衝撃をもらに食らい、小さな悲鳴を唇から漏らした。

意識が遠くなるほどであればよかった。しかしたかが10センチそこらの高さからたたきつけただけで、意識が飛ぶわけがない。

結果的にこうやって無様に痛みをしつかりと受け止めるしかないんだ。

パタッ……

頬に何か冷たい液体が落ちてきて、イオは目を見開いた。

雨……？ そんなわけない、ここは室内だ。

だとしたら、この透明なものはなんだろう。

「……っあ、貴方は、いつもいつもそうやって一人で抱え込んできて……っ」

腕の距離ほどの高さから彼は言葉を絞り出すようにして吐き出す。そう、ちょうど彼の瞳から落ちていくもののように、ポツリポツリとあふれ出していた。

とっさにいつもの癖でそれをぬぐおうと手を出すと、一瞬の間も与えずその手をたたき落とされた。

これは、拒絶の意なのだろうか。それとも……。

「言われなくても最初から貴方なんて大っ嫌いですっ……」

嫌い、か……。それはどちらに向けて言われてるのだろう。ロキ？ それとも俺？

ロキだったら困るけど　俺だったら願ったり叶ったりだ。

俺さえ愛されなければロキは愛される。

目を向けられる。

そうしていつか、ロキが本体になって俺が影になればいい……

「……それで、いいよ」

たとえ今度は俺が忘れられる存在になっても、誰からも嫌われる存在になっても。ロキが幸せになるなら、それでいい。誰に愛されなくても……

刹那、彼の脳裏に一人の少女の顔が浮かんだ。自分にはめったに笑顔を見せてくれない少女。いつもむすっとして、はたから見れば全然可愛げのない少女。なのに、すごく惹かれた。最初はほんとに興味半分だったのだ。どうせそのうち飽きるだろうと思っていた。本気なんかじゃ……なかつたのに。

それなのに、どうしてこんな時に思い出してしまう？

「愛さなくなつたっていい」

それは、レーテとその少女、二人に向けた言葉。しかしその少女　アリスにはもう一つ続きが。イオは口の中で声にならない言葉はそつと呟く。

消え入るように。
祈るように。

どうせ届かないとわかっているから、人は願うのだろう。

だけど、嫌わないで……

「……っ、……ええ、嫌いですよ、あんななんか……っ」
「うん……」

「人の気もしないで勝手に勘違いしやがって！」
「……………え……………」

思いもよらぬ発言にイオは我に返った。どこか恐る恐るレーテの瞳を見上げる。彼の瞳に、憎悪の色は欠片もなかった。

ただあるのは……………ひたすら訴えかけるような、意志の色。

どうして……………？ 自分は憎まれるのに相当することをしてきたのに。

「僕がいまだに貴方を怨んでいるから嫌っているのだとも思っただんでしょう？ 見くびらないで下さい。僕が嫌いなのは、貴方が吐き続けているその嘘です……………っ！ 気づかないとも思っただんですか……………？ イオっ」

「……………あ、やっぱり気づいてたんだ」

突然呼ばれた自分の名前になんだか拍子抜けする。

といつても……………隠し通せてる自信もなかったしな。やっぱり、という感情しか浮かばない。

まあいい、これを利用しない手はない。

イオは胸倉を掴まれているこの状況をなんとか打開すべく、艶然とした笑みの仮面をかぶった。

「ったく、だったら今までの俺をからかってたわけ？ うっわ、性悪。でもまあ普通気づくよなー、ロキの役なんて俺には無理無理。ほらほら、俺の負けだからさっさとどいてよ。これじゃ何のプレイかわかんないって……………」

「僕が言ってるのはそういう意味じゃないっ！」

あわよくばこのまますべてが冗談に変わればいいと思って叩いた

軽口を、レーテはあまりにも乱暴に遮った。

いつにない剣幕にイオは思わず口をつぐんでしまう。しまったと思った時には既に相手のペースに流されていた。再び舞い降りた重苦しい空気に口を開くことさえ憚られる。

「……貴方がイオだなんて、そんなのあたりまえでしょう？ 何年間友達やってきたと思ってんですか」

友達……。気づかれないようにそっと、イオはその言葉を舌の上で転がした。

そうだ、何もかも失う前はその言葉の意味なんて価値がわかるどころか存在すら気付かなかった。なのに、今はこんなにも重く感じる。

重いと感じるのに……どこかで嬉しいと思っている自分がいた。

「……やっぱあんた、性悪だよ」

絞り出す声は情けなく掠れてる。

泣くなんて失態は決してしない。だけれども、この胸をかきむしりたいという衝動は今までに幾度となくあった。そういう場合は大抵他人の肉をひきさいて血を鎮めるのだが。

どうしてだろう、今はすごく、こんな掠れた声で何かを叫びたい気分だ。

「本当にあなたは、僕が気付かないとでも思ったんですか？」

「だから何を」

「とぼけないで下さい。レイズのことは貴方なんかよりも僕のほうがよっぽどわかってます」

「……そう、なんだ……」

つまり、彼はレイズの浮気を知っている

……

不思議と、驚きはしなかった。今まで何度か「こいつ気づいてるんじゃないか？」と思ってきたからだろうか。

しかしイオは常にそんな自分の声をねじ込んで抑えてきた。

どうして？ そんなの決まってる。もしそう思ってしまったら「話しても構わないかも」という甘えを持ってしまっ

それは、決して許されることのないことだった。

そう、これはまさに意地の張り合い。

嘘つき二人に待つは、永遠に消えることのない亀裂だけ。

「……いつから、知ってたの？」

「そうですね……彼女と付き合い始めて2週間、つてところでしょうか。色々と彼女には悪い噂ばかりが付きまあって、ね」

「へえ、やっぱり。あの子娼婦だったの？」

「いえ、彼女の家自体は裕福でした。生活にも困っていなかったよ
うで……彼女自体がそういうのを好んだんでしょっかね」

返ってくる声は極めて冷静だ。しかしイオが胸倉を掴まれたまま
の手から伝わってくる細かな振動に気づかないわけなかった。

どれだけ、つらかったことだろう。どれだけ、怖かったことだろ
う。

どれだけ、憎みたかったことだろう。

それでも、彼は

……

「それでも僕は……彼女を愛してたんです……っ」

ただひたむきな愛。たとえ自分が傷つくとしても。利用されてるとしても。……愛されてないとしても。

それでも構わないと、彼は言う。それはきつと、自分がロキに抱く感情とは似て否なるもの。

「最初は信じたくなかった……けど、貴方が彼女を殺した晩、認めざるをえなかった。それからはずつと……貴方のその痛い嘘を信じ込んでいたフリをしていましたよ」

「……っ、ははっ、じゃあお互い嘘吐きまくってたんだ。ダメだね、こんな友達……っ」

イオは何とか仮面をかぶりなおし、無理に笑ってみせた。

本当に彼の今までの行動はフリだろうか？ だとしたら……あの憎悪はなんだったのだろう。あれさえも演技だとしたら、相当の役者だけだ。

たとえば、今ここでの告白自体が嘘で、真実を知ったのはごく最近のことなのだとしたら？

たとえば、彼女への愛ゆえに本当に自分のことを憎んでいるのだとしたら？

「僕は、貴方のことをずつと待ってたんです……っ」

「待って、た……っ？」

「でも結局貴方は何も話してくれなかった！ 何一つとして……っ！」

あるいは、彼はずつと自分が真実を言ってくれるのを心待ちにして、何とか言わせようとしたただけだとしたら……

ポタッ、と最後の涙がこぼれおちてイオの瞳近くに落ちた。

その小さな水滴が横に流れおち、細い水の途を作る。たった一滴だけだったというのに、その水の途が絶えなかったのはなぜか。泣かないと、決めたのに。

だけど無性に、そのすれ違いが悲しくて仕方なかった。

「だから……教えてくれたっていいでしょう？　お願いです、教えて下さい……彼女は、最期に何を言ったんですか……？」

レーテはイオの胸倉から手をはなすと、彼の顔のすぐ横へと頭を埋めた。

耳元で彼の嗚咽が聞こえる。それほど知りたいのか。それとも知りたくないけれど知らなければならぬのか。

イオはあきらめたとように溜息をつきながら上半身を起こし彼の黒い髪へと指を通した。ほんの少し硬質な髪をすくようにして撫でる。

こんな俺でも、貴方はまだ友と呼んでくれるだろうか。

「……俺はね、彼女に誘われたんだ」

「……でしょうね」

「だから彼女を殺した。だけどその前に彼女に一つだけなぞなぞを出したんだ」

「ははっ、チエシヤ猫は好きですからね、なぞなぞ」

「うん、正解はたったひとつ。俺はね、俺とロキどっちが好きって訊いたんだ」

「……それで、彼女はなんて？」

『どっちでも構わないわ。イオのほうが好みだけどね』

「
……って」
どっちも選べないわ。私の一番はレーテだもの

この時、嘘を吐いたのは賢明な判断だったのか、愚かな判断だったのか。

意識的だったのか、無意識だったのか。
意地だったのか……それとも。

「……すか、そう、ですか……っ」

それでも、一瞬だけ垣間見た彼の幸せそうな笑顔に安堵せずには
いられないのだった。

『アリスですか？そんなの自分で探してください。僕は知りません』

泣きやんだ後のレーテは実に可愛くなかった。冷たい目でイオを見上げ、自分はさっさとお茶会のことを考え始めるのだ。まるで昔の彼に戻ったよう。

本当に……帽子屋邸は部屋の数が異常に多くて困る。

主人であるはずのレーテでさえまだすべてを把握してはいないのだから、相当なものだ。……もつとも、ものぐさな彼に覚える気などさらさらないのだが。

イオはため息をついて何度目かのドアをそつと開ける。

「ここも違う……か」「つたくどこにいったよアイツ」

思わぬところでため息が重なり、イオは驚いて左横を見た。もう一人のほうもこつちを凝視している。

なんで彼がこんなところに？……いや、もともとここは彼の家なんだからいるのは当たり前か。むしろ自分のほうが変だ。

「三月ウサギ……ああ、帰ってきたんだ、流浪の旅から」

「い、イオおあつ？！ てめつ、ここであつたが百年目つ、死にさせえつ！」

んなこと急に言われても困る。何かと帽子屋一行は（当の本人を覗いて）血の気の多いのがたくさんいるが……彼、マルスもその中の筆頭だった。

突然くりだしてきた拳をイオは難なくかわし、かわりに彼の背後を取っておさえ込む。

もう一方の相棒、レストと組めば彼らの右に出る者はいないのだが、やはり一人ではまだイオの足元にも及ばない。

手首を後ろに撮られたマルスは怒り心頭でもがき暴れた。

「はーなーせーっ」

「あーもううるさいなあ……貴方さあ、他の人の迷惑考えなつて。でかい図体で暴れられちゃあ屋敷中の人間が起きるよ？」

「そ、それは……ご、ごめん」

大人しくなつたのを見計らつてイオは手をはなす。

自分よりもでかくてしかしどこか餓鬼っぽいこの男は、見ててイライラするほうなのだが、この素直さは嫌いじゃない。何よりも扱いやすくてよかった。

「じゃ、俺貴方にかまつてる暇ないんだよねー。じゃーねー」

「おおっ、じゃあな！……ってなんか馬鹿にされた気がするの、気のせいかな？ 気のせいかな？」

ほんと、餓鬼。イオは一つため息をついて足早にその場を立ち去った。

それにしても、あいつも誰かを探してたようだったが……大方レストあたりか。

先を急いでいたイオはまさかマルスが自分と同じアリスを探しているのだとは思ひもせず、よって一緒に探すという発想もわかなかつたのである。

この後マルスが迷いに迷って結局明け方近くまでアリスの部屋へとたどり着けなかったことを知る者は少ない。

「……………やっと見つけた」

イオはげっそりため息をついて壁の近くにもたれかかった。小一時間ほど彷徨ったせいだろうか、家の中を徘徊しただけだということに妙に疲れを感じる。

アリスの部屋は、ロキが寝ていたあの部屋から正反対のところにあった。それほど広くない部屋だけれどそれでもおそらく10畳以上はあり、どこもかしこも乙女チックな小物でいっぱいだった。

（へえ。……………なんか意外な趣味）

興味深く部屋を眺めるイオには、アリスが部屋を見もしないでベッドにダイブしたことなど知る由もない。

「まったく、電気つけっぱなしだよー、環境には優しくね、アリス」

イオは足音を極限までひそめて彼女が眠るベッドに近づいた。彼女の寝息が聞こえる位置まで顔を近づけてみる。

カチリ、と音を立てて電気を消してみると、幻想的な暗闇の中に彼女の白い顔が生えた。

本人は気付いてないけれど、やっぱりアリスは可愛いと思う。

まつ毛も長いし、顔のつくりも悪くない。意志の強い瞳もイオは好きなほうだし……まあ常に寄せられる眉はあのまま固定されちゃいやだなと思うけれど。

しげしげと彼女の顔を見ているうちに、イオはあることに気づいて長い指を伸ばした。

柔らかい頬にそっと指を這わせてみる。その湿っぽい感触にイオはある種の確信を抱き、ゆっくりと屈んだ。

「どうして泣いてたの、アリス？」

彼女にとってこの世界にいるのはつらいことなのだろうか。泣きたくなるほど帰りたいのだろうか。

自分にその痛みがわかることはない。

だからと言ってロキのように、帰ってやりたいと思つこともできない。

ただ彼女には、自分のそばに束縛しておきたいと思っただけ……。

「ごめんね、アリス」

それでもきつと、俺はやめられないから。貴女が泣いても喚いても、俺を憎んでも　そばにいてほしいから。

自然と、唇がその小さな唇に引き寄せられる。イ才は彼女が起きないようにそつと、触れるだけのキスをした。

ほんの少しだけ離れるのが名残惜しくて、舌で彼女の下唇を舐めてしまったが、それくらいだったら気付かれないだろう。

イ才は触れた時と同じように音もたてず唇をはなすと、今度は目じりに残ったわずかな水滴を同じ唇で吸い取った。

しょっぱい味が口の中に広がる。

ああ、これが悲しみの味なのかな。

「…………おやすみ」

最後にイ才は、くしゃりとアリスの前髪をなでた。

以下からは作者の雑談交じりの解説になっております。比としては作者の雑談のほうが高いです（え…）解説は主に のところにあります。

第2章終わったよ！中間考査終わったよ！数学オワタよ！（

） ケケケ …

もうこれは開き直ったほうがいいと思うんだよ、赤点だよ、どうせ。

まあ私の馬鹿さ加減はどうでもいいとして。

私のプライドにかけて更新期間1カ月は免れたかったです。ですから目を真つ赤に充血させながらもこの話を半分以上仕上げました。寝たのは1時、テストの前日談です。

で、テスト終わったらすぐにあとがきを書こう！と思って3日目…いや、これにはちゃんとした理由がありました…。

まず1回目はケータイであとがきを書こうとしました。仕上がったのにバグって全部パアツ

翌日2回目、今度はパソコンで増量して張り切って書きました。

ほとんど完成したところでリリースしてパアツ

…ぐれました。で、今日はその翌日です。1日で立ち直った自分に喝采。

ってことで、今回のあとがきはやけに凝ります。いつもの3倍は凝ります。誰かがこれを読んでくれると信じて…！！

章の解説いつきまーす！（ 自重しろ ）

アリ幕のサブキャラには何らかの因果関係があります。アリスの物語と同時に、絡みつけた系が一つずつほどけていく、という仕組みです。

さて、今回の第2章は一つの系がほどけました。第1章はどちらか

というプロローグ的な話でしたが、第2章のメインテーマは「レ
ーテ×イオ」です。

レーテの恋人、レイズが原因で友情が壊れたかに思えた二人だった
が…って感じのが前半のep1,2あたりの話です。で、その結末
が主にep7に詰まってるんですね。ですから最初と最後をくつつ
けるとわかりやすいです。真ん中の「マルス×レスト」だったり「
イオ×ロキ」だったりするのは今後やる予定の物語です。特に「イ
オ×ロキ」の話は長い…。

第2章は最初宣告した通りこれで終わりますが、第1章よりも長い
と思います。次回から第3章に入ります。

話の解説いつくぜ〜？（自重しろ）

今回の話は感動系です！泣けましたか？泣けましたよね？泣いて下
さいね？

え、泣けないって？ならその目薬をどうぞ。必ず泣けます。

…バカやってすみません。だってバカだもの。

しかし今回は相当がんばりました。どうすればロキの痛みが、イオ
の苦しみが伝わるか四苦八苦して…後半もものすごく重かったです。
レーテは番外編であんなキャラになってるしイオはもともとああい
うキャラですから、シリアス雰囲気がうまく作れなかったかもしれ
ません。

でも個人的にはシリアスイオくんは好きです。アリ幕で一番シリア
スなキャラをあげるとすれば私はロキとイオをあげます。それくら
いこの二人にはこれからもシリアスな空気が纏わりつきます…。

お知らせ一丁はいりましたよー！（自重しろ）

さてさて、シリアスな空気を追い払うために存在するアリ幕番外編
ですが、今回は第3章ep1の後に作る予定になりました。

ああ、でも、でもですね…。今回はほんとヤバいっす。まさかりク
が5件も来るなんて思わなかったんっすよ！ただでさえオリジナル

が5つあるのに…。マジ泣けてきます。いや、嬉し泣きだか悲し泣きだかもわかりません…。

しかしやらないわけにはいかず。がんばりますよ、ええ、頑張りますとも！（泣）

ってことで次回はたぶんとんでもない量になると思います。もしかしたらこのサイト内で最大かも…。で、読みやすいように3つほどに分けるかもしれません。

あ、わけたとしても同時に投稿するので安心して下さい。

女は花だと、母は昔幸せそうな笑顔で言った。
男から愛でられて初めて可憐に咲き誇ることができ
る、花だと。

だけど、たとえば。
花は季節ときが来れば枯れる。女も時間ときが来れば朽ちる。
そうして、男を惹きつける花弁はなびらまで落ちてしまった

ら、

その時は ……

「ねえ……だから、ごめんってば」
「……ヤダ」

ぶすつと返される言葉に私は何度目かも覚えていないため息をついた。

怒らせるのは子供よりも大人のほうが怖いといわれているが、面倒さ加減でいったら圧倒的に子供のほうが上なんじゃないだろうか。……いや、隣で膨れてる彼がガキだって言ってるわけじゃないけど。

気づけばもうすでに日は高かった。きつと12時は優に回っているだろう。

そこには昨日と全く同じ光景があった。状況も時間も気にせずお茶会をするのが特技なのだとレーテは言う。

んな特技あってどうするんだ……。

「さつきからどうして喧嘩してるんですか？　というよりも……何
一方的に不貞腐れてんですか、マルス」
「レーテ……」

きよとんとして声をかけた彼にさっそく助けを求めようとしたが、
一瞬だけ遅かった。

マルスはうるつと音が立ちそうなほど涙でいっぱい瞳をレーテ
に向ける。

うあつ！　か、可愛い……っ！！

思わず私の指があのかい耳に触りたそうに疼いた。

どこか挙動不審になった私に気づいたのか、マルスは怯えたよう
な目で私を見るとレーテの後ろへとそのでかい図体を隠そうとする。
「ま、マスター、た、助け……」
「おやおや、アリスにいじめられてるんですね。ダメですよ、男の
子だったら自分で解決しないと」

しかし残念ながらレーテは我関せずと相手にしようとしなかった。
それどころか紅茶を口に含みながら「ああ、いいお天気ですねえ」
などと和んでる。

なんだか今日の彼は馬鹿みたいに機嫌がいい。昨日は背中に黒い
オーラを背負っていたというのに、どうしたというのだろう。

……ま、どうでもいいけど。とりあえず今の態度は非道な上には
ば臭いぞ。

「だ、だって嬢ちゃん耳ひっぱんだぞ？！　俺痛くてやだって言っ

てんのに強く引つ張ったりすんだぞ?!　なあ、マスターも何か言
つてやつてくれよお……っ」

「そんなことを言われましても……ねえ?　レスト」

「くー……むにゃ……マルスは俺のおもちゃだもんねえ……」

「ちげえよっ!　てめえ何寝言でもとんでもないこと言ってるんだ!」

ガコンッ

ウトウトと夢の世界に堕ちていたレストの頭を、マルスは思いき
りグーで殴る。その反動でテーブルの角に頭を打ち付けたが、それ
でもピクリとも顔を上げようとしなのはすごいと思う。

てかマジで死んでいないかしら……。私はマルスから目を引き剥
がして、レストの様子を窺い見た。

不安になつてしまふほど派手な音だった。熱い鉄板に金槌を投げ
つけたらこんな音がするんじゃないだろうか。……相当まずい気が
してきたぞ。

「ちょ、ちよつと大丈夫、レスト?」

「あー、大丈夫だつて。こいつ石頭だし」

「ふう……今日のお茶もまた一層に美味しいのお」

……あんたら微塵たりとも心配はしてやんないのね。

「ねえ、大丈夫……?」

私は呆れたように溜息をつくど、ピクリとも動かないレストに向
かって心配そつに手を伸ばした。

「あつ、まつ、ば、バカっ」

私の指が彼の茶色い毛に触れる、直前。マルスがあわてて抑止の声を発しかけた。

しかし時すでに遅く。指先に絹のような感触が纏わりついた。刹那。

「触んな、ブス」

「へ？」

下から凍てつくような金色の瞳に睨まれ、私は思わず間抜けな声を上げる。

いつもはトロンと蕩けるような眼をしている彼が？ 甘えるような声ですりよってきそうな彼が？ 今、何て……？

一瞬フリーズして絞り出した答えはごく普通のもの。反面、非常事態に備えて常に装備してある思考。

幻聴だよね。

……どうもこの頃そういうパターンが多いような気がする。マジで精神科か耳鼻科に行くことを考えなきゃ。……ってこの世界にあるわけないか。精神異常者の塊だもの。

私は困ったようにマルスのほうに視線を向けると「あっちゃ〜……」などと呟きながら額を押さえていた。

ちなみにレーテははまだ夢を見るような瞳で「うまいのお、ばあさんや」などとほざいてやがる。ああいうジジイはいっぺん三途の川を見てくればいいと思う。

突然目を覚まして私をねめつけたレストは、うっとおしそうに私の手を払い鋭い瞳を空へと移した。

かけていた細いメガネ（度は入ってないらしい）を力チャリと動かすと、忌々しげに舌打ちをする。……舌打ち、っすか。

「おい、てめえか。俺を起こしやがったのは」
「て、てめえ……」

私はいまだかつて言われたことのない言葉に新鮮さを感じながら、
少なからず傷ついていた。

自分がぞんざいに扱われたことに対してではなくむしろ、この愛
らしい少年がそのような言葉を使うことに対して。

そういう言葉は使っちゃいけません！

ついそんな言葉が口をつく、直前に大きな手が私の口を覆った。
驚いて見上げると頭一つ分の高さにマルスのぎこちない笑みがあっ
た。

「悪い、嬢ちゃん。レストって滅茶苦茶寝起きが悪いんだよ……今
下手なこと言つと殺されっから、な？」

うおいつ！ 結局それか？！ この国は何かあるごとに殺すとか
なんとか……しかも冗談にならないから怖い。

私が顔を引き攣らせながら頷くと、マルスはすぐに手をはずして
くれた。あのままやられていたらきつと酸欠になっていただろう。

「けほつ……何。これって寝起きが悪いって次元なの？ 二重人格
の間違いじゃない」

小声でマルスの耳元に囁きかけようとそのウサギ耳をむんずとつ
かむ。マルスは一瞬顔を歪めたが、事態が事態だったのかおとなし
くその頭を傾けた。

やった！ 触った！ こんな状況とはいえその変わらぬ心地よさ
に私はほうつと息をつく。

「……嬢ちゃん、なんか謀ったか？」

「あら、何のことかしら」

「とぼけんじゃねえっ！ 嬢ちゃんぜってー耳に触りたかっただけだろっ」

「なにを言ってるの！ これはあんたが無駄にでかいからいけないんでしょうが！ よこしなさいよその身長」

160を超しているとはいえ、まだまだ伸びたい盛りの私である。どうしても自分と15センチ以上の差があり、見上げなきゃいけない相手に対しては胃がむかむかするのだ。

……しかし今は身長論争をしている暇はない。私は一変してまじめな顔でマルスに持ちかける。

「ねえ、にしても柄悪すぎない？ もはやあれ誰だよ。ロキよりも口悪いじゃん」

「いや、あれが素なんだって。いつもは猫かぶってるだけ」

「え、ネズミじゃん」

「いや、だからそうじゃなくてだな……」

「あれネズミじゃないの?! あんな丸い耳した猫っていたっけ……」

「…?」

「あの、そういう意味じゃなくて……」

「まさか熊耳?! あ、猫と関係ないか……」

「お前いい加減にしろよ！ あの可愛いレストが熊に見えんのかあんたはっ」

「誰が可愛いって?」

ピシッ

……今の効果音はきつと空気が凍りつく音つてやつです。え？
誰がブリザードをしたかつて？ そんなの言わずも知れがな。

私たちはぎこちなく首を巡らせ、さわやかな笑顔でお茶をすす
る彼に目を向けた。いつの間にかレーテは消えている。あの裏切り者
め。

レストは相変わらずゆつくりとカップを傾けていた。その中身の
紅茶が凍りついているんじゃないかと思うほど周りの気温は低いと
いうのに、どこかその姿は風情がかっている。

「
で」

実に優雅に彼は小さなカップを置いた。私たちの目の前でそのま
まのなめらかな動作で懐からアレを取り出した。

天使も顔負けの笑顔のまま、黒い拳銃を。

それからの私たちの動きは迅速だった。金縛りが解けたかのよう
に勢いよく椅子を蹴飛ばすと、勢いよく後退してなるべくレストか
ら距離を取る。

レストもレストでそれを黙ってみているわけがない。貼り付けて
いた笑顔を瞬間で剥ぎ取り、凍てつくような瞳で私たち……主にマ
ルスの方角を睨んだ。

「じゅ、銃?! あれ何に使っわけ?! 運動会よね、運動会、運
動会と言えよゴルァ!」

「なに訳わかんねえこと言っただよ! 嬢ちゃんがいる時に……
まずいって、とりあえず逃げる嬢ちゃんっ!」

「い、言われなくてもそうさせてもらっわよっ」

どうやらレストの標的はマルスになっているらしい。最初に機嫌

を損ねたのは私だったのだが、何故だろう。

いや、そんなことはこの際どうでもいい。とにかくこれ以上マルスのそばにいればじきに狙われることは確定だった。

私は身を翻してマルスから30メートル以上離れた。レストはちらりとこちらを見たが、それ以降はマルスに視点を合わせている。

「おい、レストくん。俺なんかまずいこと言った？ 言った？ 言ったよね？ ど、土下座するから許してくれないかなー……なんて」

珍しく下手に出るマルスを、レストは嘲るように鼻で笑った。そのあまりにも冷たい瞳にぞくりと背筋に嫌な鳥肌が立った。

この目 どこかで同じような輝きを宿したようなものを見たことがある。もつとも、あの時は燃え盛る真紅の色だったが。

結論。美人が怒ると怖い。

マルスとレストはその密接な関係からいって、親友だと思ってきた。だからたとえ銃を取り出しても撃つたりはしないと、思っていた。

なのに。“親友”の心臓に銃口を定めたレストは、何の躊躇いもなく引き金を引いた。

「いやあっ……！」

「うおっ」

私の悲鳴と同時にマルスは身体を左に大きく傾け最初の一発を危ういところでよけた。

しかし立て続けに4、5発銃声が聞こえ、マルスは地面に這いつくばるようになってしまう。弾をよける。

イオのように銃弾がまるで彼自身をよけているといったような滑

らかさはなかったが、マルスも十分俊敏な動きであった。

最後の一発を打ち終わつたレストは素早く左手をポケットに入れ、新しい銃弾を3、4セット取り出す。

その様子を見てさすがに生命の危機を悟つたのか、マルスは起き上がりながらレストに怒鳴つた。

「てめえいい加減にしるよレストっ！」

「うるさい黙れカスがつ。誰が可愛いつて？ もっいっぺん言ってみろ、その頭吹っ飛ばしてやる」

すかさず2、3発狙いうちをする。しかし頭に血が上つたマルスは頬を掠める銃弾をもともせず腰を低くして臨戦態勢に入った。

きつと弾を装填する間に装着していたのだから、鉤爪の鉄部分が狂気を帯びてギラリと光る。私はようやく我に返ると、鉤爪で弾をいなしながら突っ込んでいくマルスに狼狽えた声を上げた。

「ま、マルスやめてよっ！」

「お前自分でもそう言つてたじゃねえか！ やっぱ気にしてんのかよ、ちっちゃいこ、とっ！」

「くっ……」

ガキンッ

身体が離れているからなのか いや、離れているのは心か。

私の叫びは、彼ら二人には聞こえなかった。

至近距離で銃弾をよけた後にマルスは、レストの後ろに回り込むと、彼の左手を狙つて禍々しい凶器を振りおろした。レストはすんでのところで体をひねり、銃身でそれを受ける。

態勢を崩した彼はあわてて立て直そうとするけれど、マルスの長い鉤爪がその喉笛に狙いを定めるほうが早かった。

レストは完全に動けなくなり、私はひとまず安心する。ほっと息をつくのと、どっと疲労が襲ってきた。

「ふははははっ！ これだから銃はダメだな！ 機転がきかなくて役に立たない」

「……マルス、その笑い方やめなさいよ。まるつきり悪役に聞こえるわよ」

「な、何言ってるんだよアリスっ。俺はバリバリ正義の味方キャラだぞっ」

「どっちかというとな脇役キャラじゃない？」

「ひ、ひどっ。んなはつきり言わなくったて」

「おいこら。どっち向いてんだ、よっ」

「うげっ」

私たちのとりとめのない会話に腹が立ったのか、さっきよりも数倍苛立った声でマルスの下っ腹をけり上げた。マルスは苦しみに顔を歪めながら潰れた声を上げる。

わずかに浮いた彼の躯体から素早く離れ、片膝をつきながらもマルスの額に銃口を突き付けた。

あまりにも突然の態勢逆転に私は息を呑む。にやりとレストが満足そうに口角を吊り上げたのが遠目にもよく見えた。

「ほら見る。俺だって十分強い。背が低いからって、見くびってもらっちゃ困る」

「いや、お前の恐ろしさなんて俺が一番知ってるからっ！ 別に小さくたっていいじゃん！ でかいといういろいろ不便だぜ？ 頭ぶつけるぜ？」

さすがに分が悪くなったのか、マルスはすぐに下手に出た。賢明だとは思っけど、正直格好悪い。

余裕の笑みを浮かべていたレストが、なぜかそこで眉を顰めた。引き金にゆっくりと指をかけながら、いやに静かな声でポツリポツリとつぶやく。

ここで私たちは、彼の瞳がドロンと奇妙に濁っていることに気づけなければならなかったのに。

「小さいからって、可愛いとか言うな。気づけよ、俺だって気にしてんだよ。弱くなんかありたくない、っ……」

「お、おいレスト……?」

「可愛いつていうなっ、弱いつていうなっ、ち、違う! 俺は弱くなんかないっ、俺は、僕は……あっ!」

「もういい」

「わっ……」

彼の瞳に潜む狂気に今更気づいたマルスは、撃たれる心配をもととせずその銃身をつかみ、無理やりもぎ取るとなるべく遠くへそれを投げた。

驚いたようにマルスを見るレストの口元が何かを言いかけたが、その前に突如鳩尾を襲った痛みに歪んだ。

「がっ……あ」

駆け寄る私の耳に、苦しそうな吐息がわずかに聞こえる。マルスは気絶させようと間合いを詰めて鳩尾に拳を入れたらしいが、ほんの少しの迷いが力加減を狂わせたらしい。

意識を失うこともできず、かといって喋ることもできず、レストは苦しく喘いでいた。大きな目が焦点もなく彷徨い、体が小さく痙攣している。

「れ、レスト、大丈夫か……？」

自分でやったというのにマルスは情けなくうろたえている。私は呆れたように溜息をつくとき、ぐったりと力ないレストの体をきつく掻き抱く彼の肩に右手を置いた。

すぐさま反応した彼は泣きだしそんな目で私に助けを求め。
うう……か、可愛い、可愛いけど、今はそれどころじゃない。

「ど、どうしようアリスっ、レストがメチャクチャ苦しそうなんだ
！」

「どきなさい」

「あ、アリス……？」

「いいから、どけ」

「えっと、なにする気……」

「どけ」

「は、はい……」

しびしびと頷くマルスの腕の中からレストを救出すると、私は彼を仰向かせてなるべく楽な態勢を取らせた。

思ったとおり、マルスの屈強な腕に抱きしめられすぎて窒息死寸前だったようだ。このバカ……ほんとに後先考えずに行動するんだから。

私は彼の体を直角に起こすとなるべく優しく背中をさすった。

「レスト、大丈夫？ 深呼吸できる？」

「っはあ……っ、ふっ……がっ、げほっ……の、のどが、痛……っ」

「のど……？ 気管支でもおかしくなっちゃったのかしら……」

もちろん私は専門知識などこれっぽちもない。だから次に何をす

ればいいか検討などつくはずもなかった。

お抱えの医者もない、専門知識もない、診療所もない。こんな一般庶民に役に立つのは、まさに“おばあちゃんの知恵袋”というものだった。

（えっと……おばあちゃんは魚の骨が気管に詰まった時はどうしろって言ったっけ。米を一膳丸呑み？ ……米がない上に一膳は不可能だと思っ）

「な、なあアリス、どうなんだ…？」

（息を30秒止めるとか……？ いや、確かそれはしゃっくりの時だよ。水を一気飲みする……？ それもしゃっくりだったっの。柿の種を煎じて飲む？ どうしてしゃっくりの対応法ばっか教えられたんだろ……）

「アリス……」

（背中をバンバン叩く？ あ、それいいかも……喉にものが詰まった時によくやるよね）

「おいアリス、聞いてんの……」

「あーっうるさいっ！ こんなのごうやって一発入れればいいのよっ……」

ああ、中途半端な知識持ちは悲しきかな。“普通”のおばあちゃんを持ってなかった孫は哀れかな。あまりにも頻繁に声をかけてくるマルスにぶちぎれた私は思いっきりレストの背中にチョップを入れた。

いや、正確には入れた“つもり”だった。私が右手を大きく振りかぶった、その時。

「やめるアリスっ」

背後から制止の言葉がかかり、私は思わずそちらを向こうとした。

教訓。人は作業の途中で気をそらされると後が悲惨です。

おかげでチョップの軌道はわずかにそれ、レストの背と首の中間層……若干首寄りにクリティカルヒットしたのだった。

あ。まずいと思っても時すでに遅し。

潰れたような悲鳴と、ロキの怒号が響いたのは同時のことだった。

「あの状況で首筋にチョップをかますとか、あんたはどついう教育を受けたんだっ！ 下手したら脳震盪だけで済まなかったかもしれないんだぞっ」

「……言い訳の言葉もありません……」

「それとマルスっ、そもそもなんでお前らはちよつと目を離れた隙に喧嘩を始めるんだよっ！ 最強のコンビがきいて呆れる、しかもアリスを巻き込むとはどついうことだっ！ アリスに危害が及ぶことを考えなかつたか?!」

「い、いや、一応一定距離は離れたから大丈夫かなあ……と」

「そんな曖昧な判断で君はアリスを危険にさらしたわけなんですねえ……」

「マ、マスタあ……」

「泣かないで下さい、見苦しい。男の言い訳ほど鬱陶しいものはありません」

「ううっ……」

「アリスもアリスだっ、なんですぐ俺たちを呼ばなかつた！」

「だって、レーテも逃げたのかなあって思ったし……」

「へえ、僕は何だか喧嘩が始まりそうな雰囲気を感じたから、この中で一番強いと思われるロキに助けを求めに行っただけなんです。果たしてその“逃亡”と、貴女の行った“応急措置”、どつちが正しかったのでしょうねえ……」

「だ、だつてえ……」

「レーテが逃げたから逃げないってそれはおかしいだろ！ いいか、アリス、あんたは女でしかもなんの訓練も受けてないんだ。レーテのほうがるかに強いに決まってる。自分よりも強い奴が逃げたなら大人しくあんたも逃げるべきだっ」

「……仰る通りです」

「マルス、お前もだ！ 毎回同じような理由で喧嘩を起こすな！

刺激しなければレストは寝てるだろうが！ もし刺激したとしてもほっとけばまた寝るんだから時間を稼げ、時間を！」

「……以後気をつけます」

「二人ともわかったか！ わかったなら謝罪！」

「う、ごめんなさい……」

「すみませんでしたあ……」

最後に、「よし」という怒り疲れたらしいロキの声でお説教タイムは幕を閉じた。

まあそりゃあ疲れもするだろう。なにしろ小1時間もレーテのねちっこい相の手を支えに、ガミガミと怒鳴り散らしていたのだから、いつの間にか頂点にあったはずのお日さまはほんの少し西に傾いてしまっていた。

私は正座にしていた足を解く。途端、感覚すら忘れられていた痺れが両足を襲った。

それはマルスも同じらしく、その目尻に涙を溜めている。ロキもロキで声がガラガラになってげっそりしてるみたいだし、レストは言わずも知れがな、ぐったりと横たわってるし……。

ただただレーテだけがのんびりとお茶を飲んでた。そういえばこいつ大して動いてねえ……ロキを探しに行った時も歩いてたしね……。

あー、クソ、腹立ってきた……。

「だから早くここを……って聞いてんのかアリス？」
「は、ハイなんでしょう?!」

私は自分の名前を呼ばれてびっくりと体を震わせた。先程からずっと話しかけてきたらしいロキの瞳がさらに不機嫌の色に染まる。

「まったく、喉痛えんだから何度も言わせんなよ」

そつぶつくさと言いながらもまた一から丁寧に話してくれる彼はやっぱり優しいと思う。

しかしそれを言ったらきつと照れ屋な彼はまた顔を赤くして突っぱねるんだろうなあ……。ふふふ……。

「な、何にやけてんだよっ」

「あ、えっ、な、なんでもないわ。むふふふ。それより話して話して」

「わっけわかんねえ奴だなあ……。とりあえずアリス、早々にここを出たほうがいいぞ」

急に真顔になったロキを見て、彼曰くにやけていた私の顔も思わずつられて真剣さを帯びた。

ここを出たほうがいい。それはつまり、城からの追手がもうここまで来ているということ。

マルスの顔も緊張に強張る。さすがにこの時ばかりはレーテも力ツプを置いてロキの話に耳を傾けているようだ。

「まあ、昨日あれだけゆっくりしたんです。もうネズミ一匹逃がさないほど森を囲まれているでしょうねえ……」

悠長そうにレーテはつぶやくが、その視線は鋭く森の外を睨んで

いた。

「だろうな。ま、あの状況じゃ仕方なかったらうけどな。俺は武器がほしかったし、何よりアリスは歩きづめだったんだ」

確かに、あの時は相当疲れてた気がする。考えてみれば丸1日近くレーテのお菓子だけで繋いできたのだ。よく死ななかったなと、我ながら感心する。

「もうあんな無理はさせられない。レーテ、街のどこかに安全な場所はなかったか？」

「安全な場所……ねえ。ロキ、耳を」

呆れたように言葉をこぼしていたレーテは小さくて招くと、彼の耳元に何事か囁いた。一言二言聞いた時点で、ロキの眉が不愉快そうに寄る。

どうしたのだろう、そう思っている私たちを差し置いて彼は低く呻いた。二人はこちらに聞こえないように小声で言い争い合うが、レーテの溜息で短い口論は終わる。

再び定位置の椅子に座ったロキの顔は不機嫌というより……どちらかという泣き出しそうな子供のようだった。

「ねえ、何を話していたの？」

無駄だと思っていながらも念のため聞いてみる。しかし案の定彼はむすっとした顔を斜め下に移して「なんでもねえ」とだけこぼした。

そう言われるのは薄々わかってた。わかっていたとしても

そつやって目の前で隠しごとをされるのはほんの少しさびしく思える。

頼ってほしい。私ばかり助けられているのだから、少しだけでもいいから彼の悩みを取り除きたい。その思いは、彼にとってはひどく疎ましいものでしかないのだろうけど。

私は指を伸ばすと彼のツンツンした黒髪に触れた。一瞬ロキが驚いたようにこつちを見るが、ほんの一瞬のことだ。

すぐに目をそらされ、今度は極力視線を合わせないようにとする。ほんの少し顔が赤らんでいるのを、はたして彼は気づいているだろうか。

私はそんな彼の様子に苦笑しながら、なるべく優しく彼の頭をなでた。と言っても私と彼とではかなり身長差があるため、ほとんど背伸びをしながらなのだが。

「言いたくなかったら言わなくてもいいけど……あんま一人でためこまないようにね」

「……わかってる」

「ならいいけど。ロキも……それからイオも、なんかあると全部自分だけで解決しちやいそうな人だから」

「……ちっ。なんでそこにあいつの名前が出てくんだよ」

不機嫌そうに舌打ちした彼はとたんに可愛くなくなって、なるべく痛くならないように私の手首を取ると、自分の頭から外した。あ……結構ツン毛気持ちよかったのに、残念。

「それより、さっさと決めろぞ。このままだと日が暮れちまう」

「ふふ、イオのほうがいいんじゃないですか？ 彼のほうが圧倒的に強いですし」

悪戯っぽくレーテが言うが、どことなくその言葉には棘がある。

(そういえば、今日はやけにロキに突つかかるわね……)

初めはとても上機嫌そうに見えたのに、どうしたというのだろう。不思議そうに小首を傾げる私を余所に、ロキはわずかに憤った声で噛みつく。いや、違う。これは少ししか憤っていないんじゃないかと……あふれてしまいそうな憤怒を、彼なりに抑えているのだ。

「俺だって守れる」

「僕は確率の問題を言ってるんです。イオのほうに確実にアリスを守れるでしょう?」

「アリスをあんな奴になんか任せておけるかつ」

ガチャンツ

派手な音がしてレーテのもっていたカップが床に落ち、粉々に砕けた。私が条件反射で机にもぐり破片を拾おうとすると……。

「ああ、落ちてしまいましたね。大丈夫ですよ、アリス。僕とロキが拾います」

すぐさま制止の声がかかった。確かにここは手袋をしているレーテがやったほうがいいのかもしれない。ロキは何もしてないけど……まあ大丈夫だと信じよう。それよりも。

落ちてしまった? 私には“落とした”ように見えただけ……。

「おい、大丈夫かよ」

先程の憤りもどこかにか、ロキは呆れたように溜息をつきながら

屈んだ。それからやけにゆっくり、ガラスの破片を拾う音がする。なぜか机の下から顔を上げたロキの顔からは一切の表情が抜け落ちていた。レーテもレーテでどことなく不機嫌そうに顔をあげると自分のテーブルの前にパラパラと破片を置く。二人とも多少怪我をしていたが、そのせいだったのだろうか、空気がやけに重苦しい。沈黙を破るようにして破ったのはロキの低い声だった。

「俺の家に行く」

「“チェシヤ猫の住処”ですか？ あそこは森のなかでしょう？ 森は包囲されています、どうせだったらもつと別の場所を……」

「いい、どうせどこも同じようなものだ。それにあそこだったら誰にも見つからない」

「ルアには知られてますよ？」

「あいつが最後に来てから一度引越した。たぶんまだ見つかったなはずだ」

「……お好きに」

「そうさせてもらおうよ」

吐き捨てるように言うと、ロキはぞんざいな音を立てて立ちあがった。彼の椅子が倒れそうになるのを私は支えながら慌ててその背中についていく。

ついていかなきゃいけないとか、そういうのじゃなくて た
だ、その背中がとても悲しそうに映ったから。

「あ、あの、今日はどうもありがとう。またお茶飲ませてね！」

「もちろん、帽子屋パーティーは全員君を歓迎します」

「気をつけるよなー、アリス！」

「むにゃ……」

私は笑顔で送ってくれる彼ら3人（若干1名は就寝中）にあわた

だしく頭を下げると、先をゆく黒い背中に向かって走った。

だいぶ歩いただろうか、もうあの大きな屋敷も見えない。太陽も
ちようど3時ぐらいの高さになっていた。完全に沈むまでのタイム
リミットは、あと2時間ちょっと。

「ねえ、ロキ。何かレーテとあったの？」

「……別に」

「じゃあなんでそんなに不機嫌なのよ」

さつきから彼の足のペースについていけない。それもこの森の道だ。どどん遅れていくのが怖くて、思わず手を伸ばして彼の黒いシャツを取る。しかしその手をロキは荒々しく振り払った。

「わっ」

手先の支えが亡くなった私は大きな木の根につまずき、地面に転倒する。直前、私と地面の間に力強い腕が入り込んだ。

勢い余ってそのまま転ぶが、間に入り込んだロキのおかげで衝撃はほとんどない。その代わりロキが痛そうに顔を歪めた。

「っ……」

「だ、大丈夫、ロキっ、ごめ、私……」

「……っう、いや、悪いのは俺のほうだ。大丈夫だから」
「で、でも今なんか嫌な音……っ」

聞き間違いじゃなかったら、彼の背中が地面に当たった時に骨が折れるような音がした。それで果たして大丈夫だと言えるだろうか。泣き出しそうになる私に対して、ロキは安心させるように微笑むとその長い指を私の黒髪に通してきた。

その仕草に鼓動が速くなる。な、なんだろう……。

彼の指は相変わらず熱い。イオが触れてくる指はとても慣れていて、動きも優しいのに、ロキはいつも不器用だ。不器用で……なのに大事にしようという思いがありありと伝わってくる。

正直彼は髪を梳いているつもりでも、実際は何本も髪の毛を抜き取られていて痛い。禿げさせるつもりだろうか。

なのに、どうしてか……その指を嫌いになれない。

「あの、アリス……」

「ご、ごめんっ、このままじゃ重いよねっ、私すぐどこから……」

戸惑ったようにロキに言われて、初めて自分の態勢に気づく。これじゃあまるで私が……そのう……ロキを押し倒してるみたいだ。カアアツと一気に自分の顔が真っ赤になるのがわかった。あたふたしながら彼の上からどここうとする。

そのとき。

「いや」

「え……うわっ」

グイッと腕を引っ張られ、私は再び彼の胸にダイブした。まさかそんなことされるとも思っていなかったので腕を突っぱねる暇もなく彼に抱きしめられる。

慌てて逃れようとするが、その腕はそれを許そうとしない。それどころかさらにきつくなった腕に私は動悸が加速していくのがわかった。

「ろ、ロキ……?」

「このままで、いい……」

絞り出された声だけでは何を考えているのか分からない。何とか身をよじらせて彼の表情を窺おうとするが、彼の大きな手は私の後頭部にあって、胸に押し付けているようにしている。

彼の熱い体温のせいで、私の心臓はもう爆発寸前だった。今はまだ涼しい気候だというのに、湯気が出そうなほど体が火照る。

ど、どうしちゃったのよ、ロキも 私も。

「ほ、ほんとに大丈夫なの、ロキ」

「ん……大丈夫……」

「じゃあなんでこんな、イ、イオみたいなこと……っ」

「……っ！」

ピクリと、ロキの体がほんの少し反応した。何か気に触ることでも言っただろうか……。

一瞬不安になった後、すぐにそれは後悔になる。

「ロキ……？」

え……」

腕が緩くなつたのを感じ顔をあげて彼の顔をうかがった、その瞬間。

視界が唐突に逆転した。

何が起きたか分からず、私は自分の真上にあるロキの顔と、真横にある彼の腕を呆然と見比べた。いつの間にか両手首は彼の手の中に捕らえられていて、跡がつくのではないかと思うほどきつく握られている。

そして見上げた漆黒の瞳には……悲しみが、憎しみが、怒りが、……そして自分にはわからない何かが渦巻いていた。

「俺が……っ」

「……え……？」

「俺がこうするのは、おかしいか……？」

確かに、おかしいような気はしていた。少なくとも、予想はして

いなかっただろう。

だが、泣き声を殺したような彼の問いにはつきりそういうのは躊躇われた。私が口を出せないでいるのをいいことに、ロキは畳み掛けるように次の問いを発する。

「イオじゃなくて、俺がアリスに触れるのは、そんなにおかしいことか……っ」

怒鳴り声のような口調だった。なのに、そういった彼の瞳からは大粒の滴が落ちて。私の頬にぽたりと跡を残した。

左手の拘束がゆっくりと解ける。ロキは先程と同じように開いた手で私の髪を撫で始めた。

ただ、先ほどよりもはるかに優しく。はるかに 怯えて。

「こっやって、髪を梳いたり」

「ろ、ロキ……?」

「抱き締めたり」

「や、やめて……」

「守っていたくなったり」

「ロキ……っ」

「ずっとそばにいてほしいと願うのは、俺じゃダメなのか……?」

違う、ダメなわけじゃない。でも、貴方からは聞きたくなかった。

貴方だけは ……

『帰るんだろ?』

貴方だけは、どうかそのまま置いてほしかった。

もう、戻れない……。

ああ、今だったら私を押し倒した時の彼の感情がわかる。彼は、自分の分身であるイオに嫉妬していたのだ。

それは決して正の感情ではない。されども、負の感情と片付けてしまふにはあまりにも悲しい感情^{もの}。

彼の顔が次第に近づいてくる。この後の彼の行動は本能で察していた。拒むことはできるだろうけど、同時に自分にはできないだろうことも。

私は大人しく瞼を閉じた。表向きは、そうだった。

これ以上彼の悲しみを直視していたくない。結局私はロキから逃げてしまったのだ。そして、私はイオからも……。

唇に熱い吐息がかかり、感じたのは後悔だったのか、悲しみだったのか。ポロリと頬の横を流れおちる涙に、彼は気づいただろうか。

「こっつして、好きになるのも ……」

触れた唇は熱くて

なのにとてもさびしい温度^{ぬくもり}だった。

あっはははははははっ!!

もうほんとマジごめんなさいっ!!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ…。(残り996回)

いやあ、これはもうほんと、完璧寝ぼけレストくとエロロキくんのせいだと思っすよ。長いつすよね!もうマジ長いつすよね!おっかげで全然進まなくてついにあの二人出てこなくなっちゃったよ!結果的に番外編が先延ばしになっちゃいましたよ!あっははははははははっ!!

……………約束破った挙句に自分のキャラに責任を押し付ける作者は1000回ほど地獄に堕ちれっと思っすよ、自分。もうマジでごめんなさい…。でもたぶんこれロキ側からの視点も入れてようやく完成ですし、結果的に絶対おさまんねえっと思っすよね…。そこでほんのちょびつとアンケート。選択肢は二つです。

このまま大人しく本編を続ける

わからないキャラが若干2名いるが、無視して番外編に突入するちなみにこの出てないキャラってのは…もう大体分かる方もいらっしやるかと思いますが、「トウイドルディーアンドダム」のお二方です。作者はいつもこちらさんの名前を噛みます)。(ま、あんま重要じゃないのでどうでもいいっちゃあどうでもいいです。ぶっっちゃけ重要度はマルス&レスト以下です。なーんて、言ったら可哀そうだよね…。

つてことで読者様、どちらか要望がありましたら感想欄などにてお

書き下さい。6月30日の時点で多数決により決定します。同数、または要望ゼロの場合、まあ作者ですので、ので進めます。

って、私がもつと頑張ればこんなことにはなんなかったんだよね、そもそも。

もうどうぞ作者をなじってやってください、私が許可します。ああ、でも何度も言うようですが私はMじゃありません（・・・）

気を取り直して、解説入りまーす！

「あら、奥様聞きましたこと？ついにあの人がフライングしたらしいですよ」

「まあほんとですの奥様！遅い遅いと思っていましたけど漢でしたのねえ……」

「それでも他の2名に比べれば随分と遅いファーストキスではなくって？」

「まあ、奥様、ファーストキスだなんて…キャッ」

私の脳内の中ではロキはおばさま方に人気そうです（；）
もうマジでこの人にはファンクラブができそう…できたら絶対に入ってやろうと画策する作者でした。

今までじれじれじれじれ（中略）じれじれしていた彼ですが、ようやく踏み切りましたよ！！〇（）〇（）
何でしょう、この、クソ生意気だった子供がついに離れていくような解放感（失礼です）…。作者としては喜ばしい限りです。

し・か・し！！

ああ、あはれなれ。もちろんこのままで二人は終わるはずがなく…。そもそもこの状態でお互いHappyになれつても無理でしょう

…二人とも泣いてるんですよ…？

つてことで今回はロキ視点から始まるのですが、相当暗いです。いや、しかし明るいとはそれはそれでただのツンデレコンビになるので私としてはこの二人、悲しみを絡ませたほうが美しく映えるのではと思っております。

おらおら！イオもロキも読者さま方の涙腺崩壊にかかれ！多く泣かせたものがヒーローだ！

…つてことはルアは最初から除外？つてことになるのでこれは冗談です。（ なら言うな）

ああ、でもイオとロキが涙腺崩壊キャラなのは本当です。その他にもフレйм様、そして意外にもレイズさんがそうです。その他？その他はまあ…受けでも狙つといてよ…。

さて、話は前半に移りますが、今回は、その…マルスファン激減パラダイスでしたね、マジで…。

自分で書いてても「何だこの雑魚キャラは！」などと思ってしまいました…。ごめんよ、雑魚でもちゃんと好きだからね…。

レストファンももしかしたら減るんじゃないかなあ、とっています。私としてはこんなのまだまだ許容範囲ですけど。寝起きの悪さは罪じゃないさ！

今回は後半が重くなるのを予想して前半はほぼギャグでそろえました。

ああ、でもやつぱり本編でギャグって難しいね…。もうなんかシリアスのほうがはるかに書きやすいってどういうことだよ…。

でもこういう時に番外編がありますから！

おおっと、思い出した！（ いや、演技じゃなくてマジで）皆様にアンケート！

次の番外編わかることに決定したんですが、出す時期について。

全部同時に出す

一つが出来上がるたびに出す

の利点はリクエストの順に差異がないことですよね。読者様は基本的にみな平等です（皆神様です）。

しかしこれだと更新は絶対に1カ月以上かかると思っています。しかも期末が近い…2カ月に突入するかも…。

の利点はやっぱり早いことです。作者の精神安定を考えるならこれになります。また次の待つ間に別のを読める、という…。

てこんな感じで今回は終わっていいすかねえ…。

期末3週間前を突破してしまったので、カメ更新からナメクジ更新となります。

もうほんとやる気あんのかよと思うかもしれませんが、ごめんなさい、やる気だけは有り余ってるんです…。

ただ今回はほんとに前半のギャグがむずかった…。

しかも後半はロキが…、ああ、ロキが告白…しかもキス…キス…キス…
…あ、美味しいよね鱻って…。

この頃作者は病んできているようです（…ハア…

朝はいつも、不気味なほどに静かだ。

それは常日頃ロキ自身が人を近づかせないためかもしれない。友人であるレーテの家にさえ、滅多に泊まらないのだ。たとえ泊まったとしてもいつもそこはひっそりと静かで、とても落ち着く。

だからロキはよく二度寝兼昼寝をする。意識さえ閉じてしまえば余計なことを考えずに済むので楽だ。

静寂という闇の中にしだいに堕ちていく彼の意識は、ひたすらに同じことを考える。

このまま、目が覚めなければいい……

それはすなわち、ロキという存在の消失。

消えることを望んでいるのかと聞かれれば、違つと答えられる。

まだ生きていたい。消えたいわけじゃない。

けれど……。

(もう、疲れちゃったのかな……)

纏いつく倦怠感を振り払うことができないのだ。

ロキはそんな自分をそつと自嘲しながら寝がえりをうつた。今日もまた、同じように闇が意識を引きずり込んでくるのを待つ。

また、同じことを願う。

……そのはずだった。

「いってーから嫌だつて言ったじゃねえかよっ！！」

窓の外から響いてくる野太い悲鳴にロキの意識は急速に醒めていた。

どこのどいつだ、こんな情けない悲鳴を上げるのは。いや、こんな珍獣は帽子屋邸には一匹しかいないわけだが。思わず眉を寄せて階下の会話に耳を澄ませる。

「ごめん！　ほんとごめん、反省するから……もう一回触らせて？」

ついで聞こえた申し訳なさそうな少女の声にロキは勢いよく飛び起きた。

その声を聞いただけで顔が真っ赤に染められるというのだから、重病である。

朝だというのに口を押さえて赤い顔を隠そうとする彼の脳内は目まぐるしく回転されていた。

（さ、触らせるって何をだよっ！　お、おまっ……）

（大体なんであの馬鹿は、あ、あんなに危機感がねえんだよ！　無闇にジジイ以外の男に近づくな！　さ、触るとかゆーなっ！）

（あ、相手はマルスだな？！　あれはジジイか？！　……精神的には5歳児だがともかく！　立派な同い年だぞ？！　変な気持たれたらどうするー！）

（もうほんとにあのバカはあっ……！　触るんだつたら俺にしとけ……じゃない、ち、違う、今のナシ！　い、いやそうじゃなくて、触るんだつたらジジイにしとけ！）

（あ、いや、俺がジジイってわけじゃなくて、えっと、あれ、俺今

何を言おうとしたんだっけ……？)

この間わずか2秒。思春期とは大変なものだ、たった2秒の間に世界中の高齢者(男性限定)が存在的に否定された気がする。

「ってそれじゃあ全然反省してねえじゃねえかよ！ み、耳はヤダッ！ 耳はっ！」

「……なんだ、耳の話か」

ロキは拍子抜けしたように呟くとぼすつと音を立ててふかふかの枕に頭を埋めた。若干の埃が舞って、のどを刺激する。

下ではまだ何ごとかを言い争っているようだ。

耳を澄ませなければ聞き取れないほどだが……かといってこのまま眠れるほど小さい喧騒ではない。

「まったたく……あなたはどこまで俺を引っ張るつもりだよ」

ロキは苛々と、しかしどこか嬉しそうに呟いた。

聞こえてくる少女の声に自然と優しい笑みがこぼれる。いったい今はどんな顔をして喋っているのだろう。怒っているのだろうか、困り果てているのだろうか、茶化しているのだろうか。

どれだけ想像しても飽きない。その終わらない遊戯ゲームはロキの中のみならず好奇心を刺激する。

……起きているのがこんなに楽しいことだったなんて。存在するのがこんなに意味のある行為だったなんて。

アリスに出会わなければきつと、気づくことなんてなかった。

きつと自分は、もう手遅れなほどに彼女のことを愛してしまったのだろう。

だから、俺は彼女の幸せを願いたい

……

束縛するのではなくて、縛りつけるのではなくて、彼女の笑顔を守ってやりたい。

『帰るんだろ？』

あのときは何の感情もなく……もしあるとすればただの同情だけで、言った。今ではちよつと……いささか軽率な言葉だったと思わざるを得ないのだが。

それでも、今は別の意味でそう願う。……いや、願いたい。

自分だけは、あの時のまま変わらず

……

そう願ったのに、いとも簡単にその気持ちが壊れるのはこの数時間後。

「さて、どうしようかな」

ロキは手早く服を着替え息をついた。さすがに一日中絶えず走りまわっていたので汗がしみ込んで気持ち悪かったのだ。皆と合流する前にいくつか考えとかなきゃいけないことがある。

「やっぱそろそろ来てるか」

彼は窓の外に素早く目を走らせ、苛立たしげに舌打ちをした。ひらけた所がここだとすると、その周辺よりも30メートルほど離れたところに、白と赤の制服がちらほらと見える。

城の制服がやけに目立つのはこんなところで役に立っていた。主にこちら側の役に、だが。

追手は、困むというのには全然少なすぎる。しかも数か所にかたまっているのだ。

逃がさないようにしている……というより襲撃する前の態勢のようだ。

(ということとは……俺たちじゃなくてレーテ目当てか)

もともと“女王”と“帽子屋”、そして“チェシャ猫”はお互いに反発する組織だった。

この世界の最有権力者は言わずも知れがな“女王”だが、それに次ぐ資産家として“帽子屋”は存在する。

これまでも表面上は友好付き合いを続けてきたが、裏ではお互いに暗殺を謀っていたらしい。

ちなみになぜ“チェシャ猫”が“女王”に嫌われてるのかというと「ちよろちよろ動いてウザい」からだそうだ。そんな理由で首を切られてはたまらない。

敵は一向に動こうとしない。ロキは漆黒の瞳を細めて威嚇するかのように呻いた。

(こっちの様子を見てるのか……？ “アリス”を傷つけちゃあたまらないってわけか。それともあわよくば“アリス”を奪おうってか)

どちらにしろここに長居すれば一戦交えることは間違いない。

アリスを戦禍に置いておきたくなかった。彼女は自分たちよりもずっと繊細で壊れやすい。もしも流れ弾が命中したら。想像するのにも恐ろしかった。

「行く、か」

ロキは小さくつぶやくと無造作にカーテンを閉め、踵を返した。

「ああ、起きてたんですか、ロキ」

銃のメンテナンスが終わろうとしているころ、後ろから声をかけられてロキは仰向けのままそちらを見た。逆さまのレーテの姿が目に映る。

「ってどんな格好してんですか。間抜けっぱく見えるからやめなさい」

「間抜けっぱいってなんだよ」

呆れ顔のレーテに言われしびしび姿勢をただすと、ベッドの上で胡坐をかいて彼に向き直った。

今まで寝ていたせいかな、ほんの少し動くだけでかすかな痛みが伴う。

「みんなもう起きてんのか？」

「とつくのとうに。貴方は相変わらず遅くまで寝てるんですね……まったく、人生の半分を無駄にしてるようなもんですよ」

「俺はあんたみたいに朝5時に起きる健康ジイさんじゃねえからな」
「……………早寝早起きがいいことなのになんで貶されなきゃならんのです」

それに。

ロキは自嘲するような笑みを右頬に浮かべながらレーテの瞳を見上げた。

「それに、俺の人生の半分なんて最初から無駄になってるようなもんじゃねえか。これ以上失ったって大して買わんねえだろ」

時々自分は自虐的なことをいう。自覚はしているのだが、どうしてもやめることができなかった。

冷たい言葉を吐いてくれればいい。いっそ存在ごと否定してくれればいい。

自分は心のどこかで、突き放されるのを待っているのかもしれない。

レーテはその漆黒の瞳に一瞬怒りの炎を宿したが、まぶたを閉じて必死に鎮めようとした。

でもそれじゃあ面白くない。

ロキはにやりと笑うとさらにレーテを刺激しようと身を乗り出した。

「わかってんだろ？ 俺の半分はアイツだ。どう足掻いたって立派な人間の人生なんて味わえない。俺かアイツが消えない限り、な」

レーテは何も言おうとしない。ただその漆黒の瞳を俯かせているだけだ。これでは感情が見えない。

……面白くないな。

レーテはこの話題が嫌いはずなのに、なんで何の反応もしない？ 昨日と今日と……何が違う？

ロキは自然と自分の声が苛立っていくのを感じていた。

レーテの態度と、それから自分自身の言葉が知らないうちに刃となって細かくロキの心に傷を増やしていく。

「おい、何とか言えよレーテ」

「……………」

「おいっ」

「あなたは、僕に何を言ってほしいんですか？」

逆に聞き返されてロキは答えに詰まった。レーテはわざと見せつけるようにゆっくりと顔を上げる。

闇と闇の瞳が、あった。

「……………」

びくりと、その瞳の冷たさにロキは体を震わせた。

凍てつく、なんてものじゃない。完全に威圧される。

瞬間彼は今までの一連の会話を後悔することになった。嘘みたい

にさつきまでの熱が身体の奥から引いていく。残ったのは目の前の瞳に対する純粋な恐れだけだった。

「勘違いしないで下さい。僕は貴方じゃないし、イオでもない。なのに僕の言う事にどれだけの意味があると思いますか？」

「……………れ、レー……………」

「いつまでも甘えられると思うなよ、クソ餓鬼が、です」

最後の言葉に込められていたのは、怒りだったのか、……………憎しみだったのか。それを判断できるほど冷静なわけではなかった。

ロキは金縛りにあったかのように同じ姿勢のまま呆然と彼の瞳を見上げる。実際、動けなかった。

こんなふうに恐怖を感じたのは、いつ以来だろう。

「すみません」

突然、レーテが困ったように破顔した。彼の優しい笑顔と同時に、憑きものでも落ちたかのようにその場の空気が軽くなる。

自由になった途端、ロキは夢中で浅い呼吸を繰り返した。無意識のうちに息まで止めていたらしい。すさまじい圧迫感だった。

そんな彼にレーテはほんの少し躊躇しながら手を伸ばした。彼の硬質な髪をなだめるように優しく撫でる。

いつもは振り払うであろうその手を放置しておいたのは、単にそれをするだけの余裕がロキにはなかったからだ。

「僕はあまり戦闘には向いていないので、眼力ばかりが強くなってしまったんです。イオにさえ『そつとする』と言われましてね。なるべく使わないようにしてたんですが、すみません、怖がらせてしまったみたいですね」

「……い、や……俺も悪かった、ごめん、なんか変なこと言って…」

「大丈夫です。きっと今のは貴方じゃなかったんですよ」
「……え？」

よくわからないことを言われて思わずロキは素のまま聞き返してしまっただ。幼い子供のような口調になってしまう。

レーテは優しい笑顔のまま彼の頭をなで続ける。
……優しい？ いや、違う、これは。

ロキは彼の笑顔の仮面の下に隠されている感情を正確に読み取り、そこで固まった。

自分が一番持っている物、そして自分が一番欲しくないもの。彼の瞳は、憐みの色で塗りつぶされていた。

「まったく……どうりでおかしいと思いました。ロキがこんなに自虐的になるなんてね。ああ、でも今だったら納得できます。“混じってた”んでしょう？ イオが」

「……な、なんで……っ」
「イオもかなり自虐的な奴ですからねえ。あ、そういえば夜明けや日の入りの時って二つの意識が混濁するんですよ？」

やめる。

俺の前でそいつの名前を出すな。
俺とそいつを混同するな……っ。

ロキは目で必死に訴えかけるが、レーテは気づいたそぶりも見せず同情の視線を送り続けた。

「今がちょうどそのときですから、仕方ないんですかねえ……。し

かしほんとイオみたいですよ、今の貴方」

「やめろ……っ」

「髪があので毒々しい紫じゃないほうが不思議なくらいです」

「違う……っ」

「あ、さっきそれっぽい笑い方してましたよね？ あのシニカルな笑い方、まるでイオです」

「俺は違う……っ」

「もう一回やってみて下さいよ、ほら」

「お、俺は……」

「ほら」

「嫌だ！ 俺はイオじゃないっ！」

先程のものとは違う恐怖に駆り立てられる。焦り、混乱、恐怖。さまざまなものがロキを攻め立て、彼の心が悲鳴を上げた。

ただ、ずっと言いたかった言葉。言えなかった言葉。……気づくこともできなかった言葉。

「俺の存在を消さないでくれっ！！」

叫んでから、気づく。

口について出たのは、先程自分が望んでいた言葉とは真逆のものだった。

ロキは呆然と自分の口元を手で押さえた。身体が小刻みに震える。何で。その疑問が解消される前に、頭上から優しい声が聞こえた。ふわりと、レーテはロキの頭を抱え込むようにして抱きしめる。

おかげで彼のほうを見ることはかなわなかったが、その声音から彼が優しく微笑んでいることがわかった。

「それが、答えでしょう？」

答え……？

ロキは無意識に同じ言葉を反芻した。

何に対しての。どれが答え。わからない、わからないのに、なんで、何故こんなに……

こんなに、胸が苦しくなるのだろう。

「意地悪してすみません。でもあなたがいつまでもグレているので、ほんの少し強硬手段を取るしかありませんでした」

「……グレてねえ」

胸の痛みを紛らわすようにしてむすつと言い返すと、案の定頭上からは楽しそうな笑い声が帰ってきた。

宥めるように髪の毛をくしゃくしゃとかき回される。人に触られるのは正直大嫌いだ。なのに、なぜか今はその手がとても温かく感じた。

「僕は今まで散々貴方を甘やかしてきたつもりです。だけど、これからは一切するつもりはありませんからね。たくさん意地悪をしちゃいます」

「……この性悪」

「……まったく同じセリフをイオからも聞きましたよ。案外似てんじゃないんですか、貴方達」

「なっ、やなこと言うんじゃないやねえ！ お前は全国共通の性悪だ！」

「貴方、僕が何を言われても傷つかないとも思ってます？ 今のはグサツとききましたよ、グサツと。おっと」

だんだん話が脇道へそれ始めた時、レーテが何かを思い出したように窓を見た。カーテンを素早く開け、外を覗く。

そして突然仰々しいため息をついた。

「あーもー。やっぱりあいつらやってました……」

「は？ 何をだよ」

「何で目をはなすところになりますかねえ……いや、この場合僕がいても同じことですが」

「だから何が」

「いつそどつちかが重傷負ってくれば静かになりますかねえ……」

「だから誰が何をしてんだよっ！」

「あーもう、んなにうだうだ言うんなら自分で見て下さいよ」

呆れたようにレーテは不満をたれると横にずれて席を譲る。ロキはそそくさと窓のそばによって外を見た
瞬間、ピシリと凍りついた。

「はあああっ?! あんのバカども何やってんだ?!」

そこでは端的に言う喧嘩が繰り広げていた。いや、ただの喧嘩だったらいい。ただの喧嘩は。

(銃に鉤爪ってどう考えても殺し合いじゃねえかよ!)

しかもそばにアリスがいる、という状況である。もういっそのこと両方の頭に銃弾を撃ち込んでやりたかった。

「ああ、言い忘れましたがあのお二人今にも殺し合いを始めちゃいそうだったのでロキに止めてもらおうかなあ、と思ってここに来ました」

「遅いわ! もう明らかに始まっている感じだろうがっ! 本題を忘れててめえは何やってたんだ!」

「えー……ロキいびり?」

「死ね! もういっそ死ね!」

「だからすみませんでした。過去に囚われる男はモテませんよ」
「お前絶対反省しない性質タチだろ?! あーっ、くそっ、アリスに何かあったらどうすんだよ!」

ロキは埒があかないと察したのか、颯爽と踵を返そうとした。しかしそれよりも早く彼の服の裾をレーテが掴む。結果ロキは危うく頭から転びそうになった。

「うわっ……おまつ、いい加減にしねえとてめえからボコるぞ!」
「ロキ、もう一つだけ言わせて下さい」

急に真剣さを帯びたレーテの声にロキは少なからず驚いて強行突破しようとした足を止めた。

レーテの黒い瞳がこちらを窺うように覗き込んでくる。

「あなたの闘うべきはイオじゃありません。もう、わかってるでしょう? 貴方は、貴方自身と……ロキと闘わなければいけないんです」

「た、闘うつてなんだよ? よくわかんねえけど……」

「わかりませんか? ならそれも含めてよく考えなさい。貴方の本当の敵は何か。 健闘を祈ります」

「よ、よくわかんねえけど、ありがとな。じゃあ俺行くわ」

ロキは半ば強引にレーテの手を振り払うと、今度こそ部屋を飛び出した。

急いで駆け付けた彼の努力もむなしく、この後アリスがレストにチヨップをかましてしまうという悲劇が起こるわけだが。

「まったく…わかりません、か。ロキもまだまだ修行が足りませんねえ」

レーテは一人残された部屋で今までの会話を振り返り思い出し笑いを繰り返していた。

我ながら上出来の演技だったと思う。おかげでロキの素直な言葉を引き出すことができた。

ロキは知っているだろうか。驚くほど彼とイオは似通っているということを。

自虐的なところも、素直な言葉を忘れてしまうところも、どちらもイオでありロキであった。もとは一つだったのだから当然と言えば当然なのだが。

「これでいいんですね、イオ？ 約束は果たしましたよ」

『ロキを、頼むね』

昨日の夜イオが笑顔で言った言葉が頭の中で反芻される。

まったく、彼はよくロキのことを気にかけて思う。それはもう、過保護といってもいいくらいに。

だからここは逆に突き放してみるのもいいんじゃないかと思ってやってみたのだが……予想以上に効果的だったようだ。

「二人とも幸せになってくれるのが本望なんですけどね……」

レーテは腰を上げながらため息をついた。

しかし、それは簡単そうに見えて実は難しい。さすがのレーテもどうすればいいか見当がつかなかった。

(とりあえず、二人を同じスタートラインに立たせるか……)

と思い計画したのが今日の言動だ。背中を押してやることはできるが、後はロキ次第。彼自身が掴みとらなければいけないのだ。

さあ、次はどうしようか。

たとえそれが、彼を傷つけることになっても。

「二人ともわかったか！ わかったなら謝罪！」

「ご、ごめんなさい……」

「すみませんでしたぁ……」

ロキはいきりたつた肩を深呼吸で落ち着かせながら「よしっ」と一言言つて乱暴に椅子に座つた。

つ、疲れた……。

思わず深々と息をつきぐったりと背を丸める。まさか人に説教するのがこんなに疲れるなんて思いもしなかった。

喉はガラガラ、頭はガンガンだ。ロキはすっかり冷めてしまった紅茶を勢いよく呷る。

（つてかなんであの場面でチョップなんだ？！ しかも首？！ 首だったよな？！ もうわけわかんねえよ！）

呆れたため息は底をつきない。

たつぷり1時間正座の態勢で説教されたアリスやマルスも辛そうに足をさすっていたが、この時ばかりはざまあみろと思った。

ただ一人ゆつたりお茶をすすっているレーテには殺意がわいたが。

（……つていつても、んなことうだうだ言つてられねえか……）

正直周りから降り注がれる殺気はもうそろそろ臨界点を突破しそうになっている。いつこの場で戦闘が始まってもおかしくないほどの緊迫状態だ。

ロキはレーテから新たなお茶をもらいながら不機嫌そうな声で言つた。実際、不機嫌である。

こんなに疲れた日はこのまま昼寝をするのが日課なのに、なんで俺は逃げる準備をしてんだ？ ……やっぱムカつく……。

「もうわかってると思うが、俺らは追われてんだ。ただでさえ昨日今日と時間食ってんのに……何やってんだよ。間違いなく追手は森を囲んでるぞ。同じ場所にいるのは危険だ。だから早くここを……って聞いてんのかアリス？」

何の反応もないことに違和感を感じロキは訝しげに彼女のほうを睨んだ。

「は、ハイなんでしょう?!」

案の定アリスは全く聞いておらず、あわてたように聞き返してくる。ロキは苛立たしげにため息をついた。

ちゃんと人の話は聞けよ……。まああれだけ説教されたあとなんだから意識が飛んで当然、か。

(やっぱ言いすぎた……かな……)

しかしたったそれだけで同情するのは癪だ。彼は怒ったような声で小さく文句を言った。

「ったく……喉痛えんだから何度も言わせんなよ」

ちゃんと俺の言葉を聞けよ。

ただそれだけを伝えたいだけなのに遠回りでしか言葉にできない自分に、無性に苛立つ。

でもこんな言葉、何の羞恥心もなく言えるのはイオくらいなのだろう。彼女も、笑うだろうか。まるでイオみたいだって。

ずくりと、胸の最奥の傷が疼いた。レーテに言われたことが走馬灯のように頭の中をぐるぐると回る。

しかしそれにはつきりと気づく前にアリスの隠し殺した笑い声で
我に返った。

「な、何にやけてんだよっ」

「あ、えっ、な、なんでもないわ。それより話して話して」

思わず笑ってしまったとでもいうふうにあリスは笑顔のまま手を
振る。

彼女は何を考えていたのだろう。ものすごく気になる気がするが、
そこにこだわっていられるほど時間に余裕はなかった。

「わっけわかんねえ奴だなあ……」

しかしちやつかり嫌味は忘れない。

ロキは今度は一変してまじめな顔に戻ると、彼女の目を正面から
見ていった。

「とりあえずアリス、早々にここを出たほうがいいぞ」

アリスもつられてまじめな顔になる。今ので大体のことは察して
くれたのだろう、その瞳に翳りがさした。

「まあ、昨日あれだけゆっくりしたんです。もうネズミ
一匹逃がさないほど森を囲まれているでしょうねえ……」

横からレーテがゆったりとした声で横槍を入れてくるが、彼に話
し合いを中断させる気はないのだろう。その証拠に視線はしっかりと
と森の木々に隠れる敵の姿をとらえていた。

やっぱり、レーテはこの周りからかすかに漏れる殺気に気づいて
いる。なら不意打ちにはならないだろうから、大丈夫だろう。

ロキは一つため息をつくとうなづきながら深く椅子に腰かけた。

「だろうな。ま、あの状況じゃ仕方なかったろうけどな。俺は武器がほしかったし、何よりアリスは歩きづめだったんだ。もうあんな無理はさせられない。レーテ、街のどこかに安全な場所はなかったか？」

「安全な場所……ねえ。ロキ……」

彼は視線を森からそらすと、呆れたように呟いた。何やら「耳を貸せ」とでも言うように手招きをしてくる。

ロキは渋々身を乗り出すと彼の話に耳を貸した。敏感である黒耳に息がかかってこそばゆい。

「この国で一番安全な場所と言ったら、あそこしかないじゃないですか」

「あそこ？ どこだよ」

「ルアのところですよ。彼だったら確実にアリスを守ってくれます」

ルア、という名前を聞いた途端ロキは胸の奥でどす黒いどろどろとした感情が湧きあがるのを感じた。

昔はそこそこ仲が良かった。主にじゃれつきあっていたのはイオだったが、仲はまあ悪くなかったとは思う。

「だけど、あいつは裏切った。」

「それがたまらなく憎くて、悲しくて……寂しかった。」

「却下だ」

反論する間もなく即答する。ロキの怒りに気づいても気づかないふりをして、レーテは飄々と笑った。

「そうですね？ 僕としては一番安全な場所だと思いますけど」
「どこが。あんな奴のそばに置いておくなんてお前の気が知れない」
「少なくとも女王の手からは逃れます。実際問題から言って、女王ほど危険な人物はいないわけでしょう？ ならば確実に彼の手から逃れる場所がいます。彼の唯一の“弱点”であるルアのもとに」
「……っあいつがアリスを売り渡すかもしれない」

レーテの言っていることは正論だ。それでも、彼のもとにアリスを置いていくのは無性に腹が立った。

あの見目麗しい青年の隣に、幸せそうに笑うアリスがいる。そんな情景が目の裏にちらついた瞬間、はらわたが煮えくりかえるような思いを覚えた。

苦しい言い訳だとは自覚している。実際そんなことが起こるわけがない。

それでも、この時ロキを動かしたのはどんな感情だったのか。

「本気で言ってるのなら僕はここで貴方を殴り飛ばしますね」

優しい声音で囁かれる物騒な言葉に、ロキは驚いたようにレーテの瞳を見た。

瞬間、その深い色に吸い込まれる幻覚を覚える。彼はまるで怒ってないとも言つように笑っていた。

なのに、その瞳は限りなく冷たい光を宿していて。

「貴方だつてわかっていてでしょう？ ルアはそんな奴じゃありません。貴方は、ただ……」

「う、うるさいっ」

「いいえ、ちゃんと聞いて下さい。貴方はただ、アリスを自分のそばに縛りつけておきたいだけなんです」

びくりと、身体が恐怖に震えた。

違う。否定したいのに、唇は動かない。それどころか、身体の奥から抑えつけてきた感情が我先にと心を浸食しようとする。

水の中ではじけた泡沫うたかたが水面に浮きあがっていくかのように、急速にできる心の染みにロキは我慢できずその瞳から目をそらした。

「……っ」

足りない

欲しい

そばに

渡したくない

寂しい

侘しい

恋しい

欲しい

置いて行かないで……

「ち、違う……っ」

それでも、そんな汚い自分の感情なんて見たくなかった。ロキは何とかして声を絞り出すように言う。

言の葉に託してしまえば、溢れかえりそうだった自分の感情が少しおさまった気がした。

レーテは呆れたように溜息をつく。

「まったく、貴方はどうしようもないですねえ……。貴方はもっと、欲しいものは欲しいといったほうがいいんです。そう思うことのとど

「こが悪いことなんですか」

「だから違うって言ってるんだろっ」

「はいはい。でも、あんまりもたもたしてると、他の人に取られちゃいますよ?」

言い返す言葉を考える前にレーテは颯爽と顔を離し、結局ロキは何か言いたそうに口をもごもごしながらも何も言えなかった。そんな彼に、アリスは心配するように顔を覗き込んでくる。

「ねえ、何を話していたの?」

(言えるわけねえだろっ!!)

ロキは内心顔を真っ赤にして言い返した。まさかアンタのことを考えてたなんて、口が360度裂けたって言えない。赤く染まっていく顔を隠すようにプイツとそっぽを向くと「なんでもねえ」とぶっきらぼうに言った。

その時、頭にほんの少しだけ違う重力がかかり、ロキは驚いてアリスのほうを見た。背伸びをしながら髪を撫でようとする彼女は、不器用ながらも自分を慰めようと必死のようだ。

その温かい感触に彼の頬は思わずゆるみそうになり、ロキはあわてて目をそらした。

カアアツとさっきの3倍速で頬を紅潮させていく。本人としては気付かれないことを祈るしかできない。

(さ、触んな触んな触んなーっ! 恥ずかしいんだよっ! てかなんだよこれ! あーもう、なんで俺がこんな……っ)

心臓はバクバク、心の中は暴走状態だ。

それなのに、遠慮がちに自分の髪に触れてくる彼女の指をどうしてもはねのけることができなかった。

「言いたくなかったら言わなくてもいいけど……あんま一人でためこまないようにね」

ためらいがちにかけられた言葉にロキは返答に詰まる。

一瞬考えた後、口をついて出たのは何のひねりもない言葉だった。

「……わかつてる」

「ならいいけど。ロキも……それからイオも、なんかあると全部自分だけで解決しちやいそうな人だから」

ピクリ、と。無意識のうちに自分の中の何かがアリスのつけたされた言葉に反応した。

ロキと、イオ。イオと、ロキ。並べて言われたことに少なからず驚く。

自分も彼も、性格は正反対のはずだったはずだった。自分が彼と違うように演技していたのか、それとも彼が自分と違うように演技していたのか、ロキとイオの共通点は皆無だ。

なのに、なぜ。何故こんな、似ているとでも言いたげな言葉をかけられる。

ロキはこみ上げてきそうになる疑問をねじ伏せて小さく舌打ちした。たったそれだけで苛立ちが軽減するのだから、不思議なものがある。

「……ちっ……なんでそこにあいつの名前が出てくんだよ」

イライラする。一瞬乱暴にその手を振り払ってやるうかとも思っ

た。しかし彼女の手首をつかんだ瞬間、その動脈の動きを掌で感じ、嘘みたいに今までの感情が潮を引いて行った。

(……細い、な……)

そのあまりにもか細い手首に、ちゃんと食べているのかと疑問に思う。

ロキはほんの少し沈黙した後結局その手首をつかんだままそくさと彼女の膝に戻した。たったそれだけのことなのに、彼女の鼓動を思い出して思わず顔が熱くなる。

それを紛らわすかのように左右に首を振ると、なるべく真剣そうに言った。

「それより、さっさと決めるぞ。このままだと日が暮れちまう」

「ふふ、イオのほうがいいんじゃないですか？ 彼のほうが圧倒的に強いですし」

すかさず茶々を入れてきたレーテを、ロキはむっとしたように睨むと負けじと言い返した。

「俺だって守れる」

「僕は確率の問題を言ってるんです。イオのほうが確実にアリスを守れるでしょう？」

「アリスをあんな奴になんか任せておけるかっ」

ガチャンッ

いきなり足もとで聞こえた派手な音にロキはびくりと震えた。驚いて下を見ると、無数の透明な破片がテーブルと椅子の下に散らばっている。その虹色の輝きを綺麗だと思うのも束の間、レーテはの

んびりとした声で言った。

「ああ、落ちちゃいましたね。大丈夫ですよ、アリス。僕とロキが拾います」

(……最初から俺は拾うことになってんのかよ)

ロキは呆れたように溜息をつく、その長身をかがめた。

「おい、大丈夫かよ……」

しかし。テーブルの下にもぐる瞬間、

ゴンッ

「うがっ」

その角に頭をぶつけて派手な音を発する。

「ぶっ」

「あー……」

偶然それに気づいたレーテは小さく噴き出し、同じように無駄にでかいマルスは同情するような視線を向けてきた。

レーテの態度が非常にムカつくが、アリスに見られなかったのは不幸中の幸いだと思おう。

ロキは赤くなった額をさすりながら破片を拾おうとした。
刹那、パシリとその手首をレーテに取られる。

「レー……？」

「さっきの言葉、訂正してください」

神妙に言われた言葉に、ロキは何を言われているのか分からず戸惑った。

レーテはそんな彼に一瞬苛立ったように顔を歪めると、握る手を強くした。もう一方の手はあくまでも破片を取り続けている。

「イオはあんな奴なんかじゃありません。ルアだってそうです。二人とも　　僕の大切な友達です」

「……そうかよ」

ロキは苦虫を噛み潰したような顔で言った。

友達とか、大切だとか、家族だとか、恋人だとか、愛だとか

ただロキにとっては空虚なだけの言葉。

友達、か……虫唾が走る。

「わかんねえな、俺は友達の一人もないし、大切だなんて言葉も実感がわかねえからな」

皮肉げに顔を歪めて突き放す。レーテは一瞬驚いたように目を見張ると、その瞳に寂しげな色を宿してうつむいた。

ロキは素早くその手を振り払い、もくもくと破片を拾い始めた。

「　　僕も、ルアも、貴方にとって友達ではなかったのです

か……？」

「……悪いな」

この時ばかりはさすがに罪悪感が心を苛めた。ロキは言いにくそ

うに、しかししっかりと言う。

レーテもルアも、自分には十分良くしてくれた。一緒にいて楽しくもあつた。

だけど　　こちらではつきりさせなければならなかつた。

ロキ達をつないでいたのは、友情なんてもものじゃない。ただの、同情でしかなかつた。

「……………ならせめて、イオのことだけは認めてやってください。あいつは確かに貴方からいろんなものを奪ってきていたかもしれませんが。でも、それでも彼は貴方を……………」
「わかつてる……………」

ロキはレーテの言葉を荒々しく遮り、彼の瞳を睨みつけた。

わかつてる。誰からも言われた。ずっと、この身体に二つの魂が宿つた時から、ずっと。

認める？　奪ってきたかもしれないけど？　イオだって可哀そうだ？　許せ？　愛せ？

それを、彼までもそんな同情の瞳でいうのか。

そんな御託おごたに、いつたいどれだけ意味があるって？

「言つたる？　俺とアイツは半分ずつ。俺かアイツかが消えない限り何の解決も見えない。どれだけあいつが俺に同情していようが、そんなことどうでもいいんだよ」

レーテは言葉に詰まつたように口を噤くむ。

当り前だ。こんなこと、他人にわかつてたまるか。

ロキは瞳に憎悪の炎を宿したまま、呪詛の言葉のように呟いた。

「俺はあんな奴のために消えるなんてまっぴらだからな」

「あんな奴はやめろと言ったでしょう」

突然目の前から響いてきた低い声に今度はロキが目を見開く番だった。

レーテは奥歯をかみしめながら動かない彼を鋭く睨みつける。その瞳にこもる静かな怒りに、ぞくりと背筋に氷を滑らせたような感覚を覚えた。

ここまで直情的になったレーテは初めて見る。恐怖は感じない。だが、その瞳に射すくめられたロキは指の一つもまともに動かせられなかった。

何かを我慢するように、レーテは言葉を選びながらポツリポツリと言いはじめた。

「僕は、イオもロキも大切な友達とっています。二人とも幸せになってほしい。そんなふうにしてほしくありません。二人とも幸せになるなんて、無理かもしれませんが……」

「無理だな」

レーテが躊躇いがちに言った言葉を引き継いで、ロキはきっぱりと断定する。彼は何かを言いたそうに口を開いたが、その前にロキは吐き捨てるように言った。

「俺らは、一人だ。だから幸せになれるのも一人だけだ」

そしてもう一人は消える。そんなことは自分もイオも、百も承知だったはずだ。

なのになぜか、今はこんなに胸が痛い。

「……ガラス、拾い終えたな」

なおも言葉を探しているレーテに向かって終わりの宣言をすると、ロキはすっかり重くなった腰を上げた。レーテも渋々ながらそれに続く。

テーブルの下から出てくると心配そうなアリスの瞳とかち合うが、何も言わずに椅子に座った。

蒸した下の空気から涼しいところに出た途端、それに合わせるように心が急速に冷えていく。冷静になってみれば、自分の言葉もレーテの行動もさも滑稽に思えてきた。

自分がレーテの言う“お友達”じゃないことは前々から承知していたのだ。人の気持ちはこちらがどうこうして変わるものではないので、それでいいと、思っていた。

冷たい言葉なんて、かけるつもりなかったのに。

しかし今更そんなことを謝罪するわけにもいかず、ロキはしばらく重苦しい空気の中紅茶を楽しんだ後、話を切り出す。

「俺の家に行く」

淡々とした言葉に反応したのはレーテだった。無表情な仮面をほんの少しだけ崩して、驚いたようにロキを見る。

「“チェシヤ猫の住処”ですか？ あそこは森のなかでしょう？

森は包围されています、どうせだったらもつと別の場所を……」

「いい、どうせどこも同じようなものだ。それにあそこだったら誰にも見つからない」

「ルアには知られてますよ？」

「あいつが最後に来てから一度引越した。たぶんまだ見つかってないはずだ」

彼はまだ納得のいかないような顔をしていたが、ロキのきっぱりとした言葉について折れて、呆れたように言った。

「……お好きに」

「そうさせてもらおうよ」

対するロキもそっけなく呟くと、ガタンツと音を立てて椅子を引く。いつの間にか険悪なモードになっている彼らにアリスはこまったような顔をしていたが、ロキはそちらを振り返る余裕もなかった。レーテ達に別れを告げているアリスを半ば無視しながら一人でさっさと森の道を進む。

気づかないうちに、彼らや……アリスから逃げるような足取りになっってしまったのは、なぜか。

一人にしてほしい。でも、そばにいてほしい。そんな矛盾した思いがロキの胸を苛める。

彼は小さく舌打ちをして必死についてこようとすする彼女を振り切るうと歩く足を加速させた。

「なあ、マスター、ロキに何か言ったのかよお……」

「……まあ、ね。今回ばかりは嫌われちゃったかもしれない」

隣でマルスが情けない声で尋ねてくる。レーテは心配そうな彼の声にはほんの少し苦笑しながら空になったティーカップを置いた。

カチャ……

その音はティーカップの底と小皿のこすれ合う音だったか、それともむくりと起き上がったレストが取り出した拳銃の音だったか。

レーテは、今まで幸せそうな顔で居眠りをしていた表情と一変して目を爛々と輝かせるレストを見て、ほんのちよつとだけ意外そうな顔をする。

「あれ、起きてたんですか、レスト」

「んーん。たつた今起きたばつかだよー。だってさあ、寝れるわけないじゃん　　こんな嬉しいほどの殺気をもらってる中で、さ」

「なにいつ?!　敵が近くにいんのか?!」

一拍遅れてマルスが驚いたように叫んだ。次いで、とてつもなく嬉しそうに顔を輝かせる。

レーテはどうしてもこの状況に納得がいかなかった。

(敵に囲まれてるのに……憂鬱そうな顔をしているのは僕だけってどういうことなんでしょうね……)

何はともあれ、先程のマルスの叫び声で敵さんがたも、隠れても無駄だと感じたらしい。一人、また一人と派手な制服を着こなした刺客が木陰から身を乗り出してくる。

10, 11, 12, 13……いや、15人以上いるな。

対してこちらはたったの3人。正直人数的には無謀なものだ。しかしそれにもかかわらずレーテを除く彼らの瞳は輝きを増していた。

レーテは呆れたように溜息をつく、上げようとした腰を再び椅子に据えて悠長に紅茶を飲み始める。

「あれ、マスターはやんないの?」

マルスが弾んだ声のまま尋ねてきた。参加しないほうがいいと言

わんばかりの口調だ。

「どうぞご勝手にしてください。ああ、でも2、3人は残しておいて下さいね。死体の処理をやってもらいますから」

「ん、まあ努力はするよー」

などとレストは言うが、結局興奮して皆殺しにしてしまうのだろ
う。

レーテは気狂いの部下たちにはれないように溜息をついた。

「
」
「こゝ愁傷さま」

ロキ達は黙々と歩きづらい森の道をかき分けて進んでいた。

彼の脳内では今までの会話がぐるぐると頭の中で円を描いている。レーテの言葉が、自分の思いが、たまらなく不快だった。

ずっと抑え込んでいたものが見えそうになる。見えそうで見えないそれに、興味がわく一方で恐怖を感じていた。

パンドラの箱もこんな感じだったんじゃないだろうか。果たしてそれが良きものか悪しきものか。そんなものはない限りはわからないというのに、少年はいつまでも開けることを躊躇ってしまう。それでも、結局彼はその箱を開けてしまうのだ。

その箱の中に入っていたのは、希望だったのか絶望だったのか……
…思いだせない。

「ねえ」

アリスの躊躇いがちの呼びかけに、ロキは我に返った。視線を向けることはせず、ただ意識だけを彼女に向ける。

彼女はほんの少し息を切らしていた。……もしかしたら、知らないうちに急かしてしまったのだろうか。

ロキにとってこの森は自分の庭のようなものだ。しかし別世界から来たというアリスは森の中を歩いたことなどもないだろう。

辛いことを強いてしまったかもしれない。そんな罪悪感がじわりとロキの胸を染めていった。

「ロキ……なんかレーテとあつたの？」

「……別に」

「じゃあなんでそんなに不機嫌なのよ！」

そういうアリスのほうがはるかに機嫌が悪そうだ。それもそうだろう、今までずっと会話もなく、自分の後を付いていくのに必死だったのだから。

振り返って何か謝ろうとした瞬間、自分の黒いシャツを掴もうとしたアリスの白い手が視界に入った。

刹那。

「
っ」

その手と、もう一回り大きい手の残像が重なる。

手は乱暴に自分の髪を掴みあげると、悲鳴を上げる彼にかまわずもう片方の手で頬をぶった。

綺麗だと思っていた母の顔は憎しみで歪み、過去の面影など見えないほど狂気の色で塗りつぶされていた。

断末魔に近い、子供の甲高い悲鳴。それはきつと、“自分”があの瞬間まで発し続けた泣声。

狂ったような、女の笑い声。それはきつと、母がああ瞬間まで発し続けた鳴声。

アリスの手と母の手が同じなはずがないのに。気づけばロキは恐怖に駆られてその手を振り払っていた。

しまったと思ったのは、彼女の小さな悲鳴が耳に入ってからだった。バランスを失ったアリスの体が前方に倒れそうになる。

ロキはとっさに彼女と地面の間に自分の腕を滑り込ませ一緒に転

んだ。

「じきやっ

「っ……」

アリスのクッションになることには成功したが、かわりに打ち所が悪かったのか背中でおぞましい音がした。

何度か聞いたことのある音に、どうなったのかは容易に想像できなかった。ロキは次期に襲ってくるであろう痛みに耐えようと唇をかみしめた。

「だ、大丈夫、ロキっ、ご、ごめ、私……っ」

「……っう、いや、悪いのは俺のほうだ。大丈夫だから……」

「で、でも今なんか嫌な音……っ」

心配そうに声をかけてくるアリスの目が次第に潤んでくる。ロキは泣きだしそうになる彼女をなんとか宥めようとその髪に指を通した。

正直、女の涙には極端に弱いほうだった。だからただ単に泣いてほしくなくて差し伸べた手だったが、その髪の意外な柔らかさに口キは驚く。

ほんの少し指を動かすだけで、彼女の髪からかすかに甘い匂いがした。

（へえ……おもしろー）

何となくいつも誰かの頭を撫でようとするアリスの気持ちがわかった気がする。彼女の髪は柔らかくて、いい匂いがして気持ち良かった。

このまま、撫でててもいいだろうか。

一瞬思うが、そんなことは恥ずかしくて言えたもんじゃない。ロキはほんの少し顔を赤らめながらせめて「泣くな」とだけ言いたくて口を開いた。

「じゃあ、アリス……」

「う、ごめんっ、このままじゃ重いよねっ、私すぐどこから……」

どことなく顔が赤い気がするアリスに言われて初めて、自分たちがどんな体制を取っているかに気づく。

(あー……俺が“押し倒されてる”のか)

どうせなら押し倒したいものだ……いや、今のナシ。

色々と頭の中で考え始めるロキの返事を待たずにアリスは急いで彼から離れようとした。

今まで梳いていた髪の毛が指からこぼれおちて離れていってしまった。それはなぜか、もとの世界に帰ってしまうアリスのようである。

「いや」

「え……うわっ」

無意識のうちに彼女の腕を引っ張り、再びその頭を自分の腕の中に引き寄せていた。

確かに腕に感じるその存在感に、束の間の安堵を覚える。まだアリスはここにいて、そんな些細なことがひどく嬉しかった。

それと同時に、わずかな虚無感を感じる。

彼女はもがいて逃げようとするが、ロキはそれをさせようとしな

かった。

アリスはきつと元の世界に帰ってしまうだろう。それを邪魔するつもりはない。彼女が幸せになりさえすればいいと、自分に言い聞かせ続けた。

けれど、いざそうなる時は ……

その時は、今みたいに閉じ込めておきたいと願ってしまうのだろうか。

でもそれは、自分には許されない。

「このままで、いい……」

わかっている。だからこそ、今だけでもこうして自分に縛りつけておきたかった。

束の間だっていい。永遠なんか望まない。

だから、今だけはどうか ……

「ほ、ほんとに大丈夫なの、ロキ……」

「ん……大丈夫……」

くどいくらいに心配してくるアリスに、ロキは思わず困ったように笑った。

腕に力を入れてさらに引き寄せると、服越しに彼女の鼓動を感じる。いつもよりも断然に早いその音が、たまらなく可愛く思えた。アリスの音に合わせるように、自分のそれも次第に加速していく。

しかし次の瞬間、彼の心臓は凍りついた。

「じゃあなんでこんな、イ、イオみたいなこと……っ」

「っ」

イオみたいなの。そんな何気ない言葉が、どれほど彼をゆすぶったことだろう。

今までの温かい思いはどこへ行ったのか、急速に心も体も氷に触れたかのごとく冷えていった。

愛しいとか、大事にしたいとか、そんな思いのかわりに黒くどろどろとしたものが心の中で蜷局とくるを巻く。

悲しみ、憎しみ、怒り

嫉妬。

心が、ぎしりと軋みをあげて何かが壊れた。

「ロキ……？」

え

ダンッ

気づけばロキは何の表情も浮かべないまま体を反転させていた。

地面にアリスの背中をつけて、逃げないようと彼女の白い手首をきつくつかむ。

逃がさない。

逃がすくらいなら、この腕の中で朽ちてしまえばいい。そう思っ
てしまう自分は、どこか狂っているのだろうか。

彼はひたすら冷たい光を宿した瞳で彼女の驚いた顔を見つめ続けた。

憎い。誰が？ アリスが。違う、好きだ。なのに、憎い。なんで？
なんで？

ロキはあふれかえりそうになる激情を押さえこむようにして、なるべく静かな声で問う。

「俺が……っ、俺がこうするのは、おかしいか……？」

アリスは一瞬目を見開いて躊躇ったように口ごもった。その表情にロキはひどい苛立ちを覚えた。

どうして、驚くんだよ。

そんな怯えた顔しないでくれ。

俺が、俺がこうするのは、そんなに

……

そんなに、怖いのか？

ポタリ、と。泣くつもりなんてなかったのに、瞳から零れた一滴の涙は彼女の頬に堕ちて跡を創った。

「イオじゃなくて、俺がアリスに触れるのは、そんなにおかしいことか……っ」

彼はアリスの手首を握っていた左手の指をそつと解くと、右に移動させて彼女の細い髪に触れる。

相変わらず柔らかい触り心地に、ロキは泣いているのも忘れてほんの少し微笑んだ。

優しく、優しく、彼女の髪をすく。

次第に濃くなっていく彼女の瞳の怯えの色に気づかないふりをして、ロキは言葉を発し続けた。

「こっやって、髪を梳いたり」

「ろ、ロキ……？」

助けを求めているかのように、震えた彼女の声。でも、それに応えられるロキはもういない。先程、壊れてしまった。それにアリスが気付くのは、あと何秒？

「抱き締めたり」

「や、やめて……」

次いで出たのは拒絶の言葉だった。ロキの口元からつつすらとあった笑みが消えていく。

ただ残ったのは、悲しみだけ。

わかっている。それでも、唇をこじ開けて出てくる言葉を止める術などロキにはわからなかった。

「守っていたくなったり……」

「ロキ……っ」

宥めるように彼女の髪をなでるけれど、彼女の瞳は完全に怯えの一色で彩られていた。

望まれていない。

……わかっている。

だけど、それでも

彼女が欲しかった。

「ずっとそばにいてほしいと願うのは、俺じゃダメなのか……？」

カチリ、と。
音を立てて、今まで築き上げてきた思いが壊れていく。
もう、戻れない。

もう 手放せない。

ロキはそつと身を屈めて彼女の唇に自分のそれを落とそうとした。
ただ、言いたくて。
それでも、言うことなんてできなくて。

「いめん……」

そつと囁く代わりに、唇が触れあう寸前に別の言葉を紡ぎだした。

「こつして、好きになるのも ……」

触れた唇は冷たく 同時にとても悲しい温度ぬくもつだった。

以下からは作者の雑談しかありません。ギャグを読みたい人はどうぞ…。

ついに解説までも抜け落ちました…。しかし残念ながらギャグなんてここでしか書けないんです…どうかお許しを…。

さて、おそらく大半の方が気付くかとは思いますが、今回は前回のロキ視点verのお話です。

いやー、前回は全くもってすごかったですよー…ロキファンが若干暴走気味…。(私含む)

まさかあんなに人気があるとは思ってもなかった作者です(^| ^ ;

(これは本気でイオとロキ、どっちが人気あるのか分からなくなってきました…。

皆さんはどっちが好きでしょう？え、ちなみに作者はレーテ派です

(選択肢にねえよ)

あの微妙に爺臭いところが好きです、はい。

にしても…今回はいろいろ突っ込みどころがあったと思うんすよね。つてことで、ロキくんに突っ込んでみよー大会！

1・ロキくんは思春期？ 19歳で思春期とか遅すぎだよ君！

2・無造作にカーテンを閉めた？ そういうのは着替える前にやることだよ！

3・冷たい言葉を吐いてほしい？ ドSホイホイ(そして作者も行く)

4・ちゃんと俺の言葉を聞けよ？ お前誰だよ！！

5・口が360度裂ける？ そりゃあ、死んじゃいますから言えませんよねえ。

6・見えそうで見えないそれ？ え、それはあれすか？あそこの彼女のスカートの下…（死ねばいい）
7・アリスの鼓動は可愛い？ お前誰だよ！！パート2

このネタ全部わかったらあなたはほんとに記憶力の優れた人間です。とりあえず2と6は難。6は自分で書いてて吹いた。高校生のみなさん、スカートの長さはほどほどにね…。

その他で何か面白いものがあつたら言つて下さい。マジでこんなのでしかギャグがありませんから…。

あ、雑談ですがロキつてこの頃キャラが変わってますよね。4なんて完璧俺様キャラだし、7は…むつつりスケベ？

そんなところも可愛いと思いますよ、うん。

あーでも今回は書いてて重かつたなあ…。話が重い重い…。

つてことで間らへんでロキくんをぶつけてもらいました。作者はあそこの場面が一番好きです。

でかいと大変ですよ、何かと…。

次回の本編はロキアリからいったん離れます。あー…やっとあの二人が出てくるかな…。

で、次の次らへんから政権交代つてことでイオに変わります。

え？ルアは？ルア君はこの章では限りなく影が薄いです。

それはそうと、期末2週間前になってしまいました。なんとかその前にこれを仕上げておきたくて、頑張りました。あんまり間を開けると前回とのつながりがありませんからね…。

ということと作者はいったん逃亡します。マジですみません。

実は番外編のep1はもう出来上がってるんですけどね…アンケータが集まってない状態でそれをやるのはどうかと思ひまして。

ということ、今回はロキくんにつっ込むだけで終わります。すみません…。

感想この頃返信できなくてすみません！！メチャクチャ励みになっていきます！！

ネタ探しの旅に帰郷したのち、ちゃんと書きます…！

これは本編とは全く別の番外編です。何やらキャラが変わっています。

今回の番外編は4部構成の予定です。

この部分はギャグがやたらと多いです。

本編のシリウス名勢困気を壊したくない人は回れー右っ。

……………帰りました？

それでは、どうぞお楽しみください…。

「待つて！私も一緒に行くっ！！」

私は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら彼のシャツの袖をひっぱった。

彼は一瞬逡巡したように足を止める。

しかし一体何を決心したか、唇をきつくかみしめると勢いよく彼女の手を振りほどいた。

「お前も…わかってんだろ？そもそもお前はこんなとこに足を踏み込むべきじゃなかったんだ」

「でも…っ」

「でもない。これ以上俺を追ってくんない。……お前は、綺麗なままできてくれ」

彼は私を置いて走り出す。私も必死で後を追うが、当然殺し屋である彼の足に追いつくはずもなく。

自分がただの無力な人間であることを呪った。

もっと強かったら、私は彼と一緒にいられたらどうか。

彼は私の手をはなさずに済んだらどうか。

わかってる、彼はただ優しいのだ。どこまでも心配症で、笑っちゃうほど過保護で…。

だから、私がこれ以上危険に巻き込まれないように。

「ふっ…ふえっ…」

誰もいない路地で小さく、愛しい男の名前ひとを呼び続ける。
その不器用な優しさが温かくて、苦しかった
……

「うーん、やっぱりいいわぁ…これ……」

「アーリースルー？なぁーに読んでんのー？」

「うぎゃっ」

「……毎度のことながら君ももう少しいい声で啼きなよ」

「こ、こんの変態猫…っ！！いきなり後ろから抱きつくなっ！！」

「んー、なにになにい…？『サルじゃできない！恋のやり方』…？」

「へえ…なんだかずいぶんと変わった題名ですね」

「る、ルア？！あんなんでこんなとこにいるのよっ」

「なにつて…忘れたんですか？今日は…」

「なあんだ、アリスつたらみずくさいなあ…。恋のやり方がわかん

ないなら俺が手取り足取り教えてあげるのに…ね？」

「い、いいいい息を吹きかけんなっ！！はなれる！」

「イオ…0.5秒以内にアリスから離れなさい」

「ちょ、ちよつとルア？！何その拳銃…！！私とひつついてる状態で撃たないでよ?!」

「……それ、俺が一人のときは構わず撃てってこと？ヤダなー、余計離れらんないじゃん」

ぎゅーっ

「づぐっ」

あっ、こらイオっ！何ヒロイン窒息死させようとしてんですか！

ルアもしよっぱなから物騒なもの取り出さないで下さい！今回はギヤグを多めにする予定なんですからっ！
まったく…早く来て何をしているかと思えば…何やってんですかぁんたらは。

「あ、あれ、レーテ…？なんでマイクなんて…」

ついにポケが来ましたか、アリス。

今日は番外編収録の日でしょう。だからこんな朝っぱらからみんな起きてやってるんでしょうが。

じゃなきゃ誰がこんな…ぶつぶつ。(低血圧)

「ちょ、ちょっと待ってよ！あの番外編またやんの？！私そんなの聞いてないわよっ？！きよ、今日はここでお茶会をするからっ…」

それでも言わないと貴女絶対逃げるでしょうが。ヒロインがいないと務まらないですよ、このコーナー。

あ、イオ、やっぱりそのままアリスを拘束してください。

カメラさん、こっちですよー。

「はぁーい」

「はぁーい、じゃねえっ！こらいオっ！！はなせはなれる！！可愛らしく言えば許されると思うんじゃねえっ」

「あーもう、大人しくしてよアリスー。今回はギャグが多いってんだからいいじゃん」

「よくないいいいっ！！」

あ、アリスそれ以上暴れるとまるで駄々をこねる餓鬼のようですよ？カメラ回してるんですから、そういうのは嫌でしょう？それとも撮ってほしいですか？

「じ、こんの……鬼畜っ！」

やかましい。このすさまじい世界で生きていくためには強かでない
ればならないのです。

……は？何です、カメラさん、その目は。開き直るなって？余計な
御世話だと言ってるでしょうに。

忘れてましたが、イオ、もう放して大丈夫ですよ。アリスは逃げ出
したくても逃げ出せませんでしょう。

「えーっ、俺このままがいい」

「はなれて下サイ、ええ、もう即行離れて下さるとしても助かり
マス」

「……前回も同じようなやり取りをしたよね。なんかワンパターン
だなあ……たまにはアリスから抱きついてきてもいいんだよ？」

「いいわけないでしょう！！」

「……遠慮しときマス……」

そこまでアリスも命知らずじゃないでしょうね。ほら、イオ、さっ
さと放してあげなさい。

こら、ルア、イオがアリスと離れた途端物騒なもの構えるんじゃない
いの。

まったく……アリスまで、なに一人で読書を再開しようとしてるん
ですかっ。

「だ……だって、なんか始まりそうな雰囲気じゃないし……」

ああ……そう言えばロキがまだ来ていませんね……。

困りましたねえ……彼が来るまで待つしかありません、か。

どいつもこいつも…頭が腐ってやがる。

「ちよ、ちよっと…なんか今レーテのキャラが…」

「ああ、あれはキャラが変わったんじゃないよー、一皮むけばレーテって一番腹黒キャラだから」

「まあ確かにあの人を食ってそんな笑顔は悪人そのものだけど…」

誰が食うか、んなまずいもの。貴方たちはいったい僕をどういうふうに認識してるんです？

「悪の帝王」(アリス)

「狐の変化」(ルア)

「いや、むしろ狸でしょ」(イオ)

殺しますよ。

ってカメラさん、貴方なに震えてんですか。は？震えてんじやなくて笑いを堪えてる？バカですかあんたはっ！堪えて隠すくらいならそれをあっさりバラすなっ！

……カメラともども、あの世に送られたくないなら適当に雑談でもしてこの場を稼げ、バカどもが。

「(どうするー、アリスー)」

「(どうするも何も、言われたとおりにしなきゃマジで殺られるわよ、絶対…)」

「(殺られる前に殺りかえそっか?)」

「(ばっか！今カメラ回ってんのよ?!証拠が残るわ)」

「(簡単だよ、カメラさんともども殺って証拠を隠滅すればいいんだ)」

「（そっか、それなら…）」

「（待つて下さいアリス！いつの間になんな不穏な話になってんですかつ！流血表現なしでここは一発ギャグ系のものを…）」

「（今まで流血表現禁止つて言われてた貴方がよく言うよ…。何かいい案ある？）」

「（うーん…ちょっと待つて……やってみる）」

「あー、ヒロインアリス、ならびにヒーローのルアと紫っぽいもの、これから劇を始めます」

「はあ？なんか相変わらず俺の扱いひどいし、劇つてなんだし」

劇つて…アリスはどっからどう見ても大根っぽそうですしね。

「俺もそう思う。アリスが俺に“お願い”する時も棒読みだしね」

いえ、それは関係ないと思います。あれは誰がやられてもそうなるでしょう。

ああ、アリス、こういうときは顔を赤くするんじゃないさつぱり無視するんです。反応を示すからかわれるんですからね。イオなんて空気です。紫色の排気ガスです。

「ちよっ…排気ガスはひどくない?!」

無視です無視。

「ん…ありがと、レーテ。つてことで、張り切つていくわよ！あのね、あのね、ちよつとこの展開やつてみてほしいの！」

ああ、なんて眩しい笑顔なんでしょう…。しかし輝かしい笑顔のままに取り出したのは先程まで読んでいた本、タイトルは…『サルじ

やできない！恋のやり方』？
何故にサル？

「ああ、ちよつと解説しておくこれは第一章 e p 1 で私が愛読していた『サルでもできる！金儲け全集』シリーズのものでね…いや、これもまた面白いのよ。お金のためなら何でもするっていう人間の狡賢さが目いっぱい表現されていてね…」

いや、そんなのどうでもいいですから。てかあんたそれでも普通の高校生ですか。

何故サルなのかは非常に気になるところなんです…読者さま方に悪いので話を進めましょう。で、どんな展開なんですか？

「あ、それなんだけどね…ここ見てよ、ここ！この男の人はね、主人公がこれ以上惨劇に巻き込まれないようにね、あえて日常に帰れつつ突き放すの！」

はあ…。

「もうメチャクチャかっこいいんだからっ！結局その男の人は死んじゃって主人公はその人の後を追おうとするんだけど、彼が残してくれた言葉を思い出してこの世に生き伸びていこうっていうラストなんだけどね！」

へえ…ってバッドエンドじゃないですか。

「何を言うのよ！すごい感動的な話じゃないっ！！」

まあ確かにタイトルに似合わないシリアスな話ですが…。

つまりあなたは何がしたいんです。20文字以内で簡単に答えて下

さい。

「私ももとの世界に帰れといわれたい」

はい、20文字ぴったりで結構。

そんでもって却下。

「なんで?!」

そんなことを言えるような人物約一名が今遅刻していませんからです。
ああ、でも僕でしたら喜んで言っておげますよ。

カメラに尻尾を巻いて逃げる無様な姿を撮られたかったらどうぞお
好みに帰ってください。

「ううっ…脅しじゃねえかよ…」

「あー、その類だったら僕も言えると思いますよ？アリス、もとの
世界に帰ってください」

「その類だったらって…なんか嫌な予感はあるけど、お言葉に甘え
て…」

「もっとも、今帰ったら城で使った服代、ベッド代、部屋代、シャ
ンプー代、食事代、女王への謁見代など、いろいろと借金が付
いて回りますけどね」

「ぜひ城へ居させて下さい。タダ働きでもなんでもしますとも」

「ああ、それは嬉しいです。でもいいんですよ、アリスは僕のそば
にいてくれるだけで借金なんて全部帳消しです」

一見優しそうな言葉に思えますが、何ですかね、女王への謁見代っ
て。こじつけがましい匂いがするのは気のせいでしょうか？

お、何やらイオも自信がありそうな顔をしていますね。

できそうですか？

「もちろん。アリスー、もとの世界に帰ってもいいよー？」

「ああっ…！なんて嬉しい言葉！そう、お前から一番聞きたかったのよ私は！では遠慮なく…！」

「俺もアリスが城から離れたほうが都合だし？ま、アリスは可愛いんだから帰り道で襲われないように気をつけ…」

「ルアあっ…！ど、どうか私を匿って下さい…！」

「あれ、残念」

イオ、強姦は犯罪です。和姦は構いませんけど。

「構えやこらあっ…！あんた何ちゃっかりR指定用語使ってたよっ…！」

ははは、だってイオ自体がそもそもR指定要素なんだもの。

「はい、人のせいにしちゃいけないと思いますーす」

うるさい黙れ。そもそもなんでこんなバカらしい漫才を繰り広げているのかというと、そもそもすべては遅刻した貴方の分身のせいです…。

「あー、悪い、ちょっと遅れたみたいだな…っておい、みんなして正座して何やってんだ？」

ああ、ロキですね、いらっしやい。今はこのバカどもに僕のありがたい言葉を提供してるんですよ。

いいですか、イオ。仮にも貴方は彼の分身なんです、むしろ親のよくな存在なんです。ですから至らぬ彼をサポートするのは貴方の役

正座しなさい。

「あの…」

しろ。

「ハイ………」

||||| スーパーお説教タイム |||||

「うう…頭がガンガンする…。なにもマイクであんなにガミガミ言わなくても…」

「同情したいけど、当然じゃない？何せ1時間も遅刻してくるんだもの」

「アリスまで…でもあいつ絶対3時間は説教したぜ…」

ま、時間の都合上カットさせていただきましたが。

さて、お待たせいたしました！ようやく全メンバーそろったということ、番外編2開幕します！

今回ふざけた作者が僕以外の司会者を募集したようですけど…リクエストのないままに終わりました！

これ以上出番を奪われてたまるかってーの。

「レーテって時々キャラ変わるよね…」

「だからね、アリス、あれはキャラが変わってんじゃないかってもとああいふキャラなの。普段は猫かぶ…」

何勝手に人の印象悪くしてんですか、このクソ猫が。
とにかく、今日はもう雑談なんてしてる余裕ないんですからねっ。
さっさと話進めませんと…。 ああ、まったくロキのバカが…！ っそ
頭をぶち抜きますか…！

「ま、まだ言ってるのかよ?! 悪かったって…!」

心がこもってない。

「う…う…ごめんなさい…!」

その仏頂面どうにかしなさい。ほら、至少くらい笑わないとヒーロ
ー失格ですよ?

「……ふっ、ふふ……!」

怖い! 怖いです! 口元が若干ひきつってます! 眉が寄ってます! 目
がマジです!

どっかの脱獄囚にいなかったですかねえ、この顔…。

わあ、アリスが引いてますよ…。 ちょっとかわいそうになってきま
したねえ、あの極悪面…。

「そう思うんなら最初っからやらせんな!! 大体俺がまともに笑っ
た場面なんて本編全部読んだって一つもねえんだよっ!」

はは、そんなロキくんには今回はいい話がありますよ…、ま、せいぜ
いがんばってくださいねえ?

「な、なんだよその黒い笑顔は」

別に、なんでもありませんよ？ただ今回は楽しいメニューがどっさりできて…これがそうです。

『簡単 彼女へのブラウニー作り』

まずはじめに湯煎でチョコレートを溶かします。チョコレートをそのまま鍋に入れるなんてバカなことはいしないでね 水の中にどぼって言うのもナシね

次に…』

ああ、間違えました。

「レーテ…貴方ってチョコとか作るの？」

「レーテがお菓子料理？ははっ、無理無理。この人ぜんぜん料理できないから」

う、うるさいですね。これはかなり順調に言ったんですよ！……途中までは。

「はあ？これでどうやって間違えたんです？なんかむかつくほど馬鹿丁寧に書かれてるんですけど…」

さ、最後に焼くとき……

「焼く時？」

……クッキングシートとクッキングペーパーを間違えた。

「」

「」

「……………間違えるもんなの？それって」

うっ、うるさいって言うてるでしょう！ったく人の恥ずかしい話を…ッ！
と、とにかくさっさと始めますよっ！えーっ…今日のメニューは…っ。

ヒョイッ

「あぁっ…！あ、あれ、マイクが…」

残念でした。これが今日のメニューだね？どうもありがとう。

「ふ、フレ임様？！ど、どうして貴方がここに…っ」

あれ、ルアじゃないか。なんだ、君もこんなところに呼ばれてたんだね。

おい、カメラ。どっちに向かってまわしてんの。司会者は僕、フレームだよ。

「なに言ってるんですかっ！！司会者は僕ですっ！！！」

まだいたの、帽子屋。君こそ何を言ってるんだい？ちゃんと評価・感想のところ見た？

「見ましたよっ、ええ何度も！毎日毎日司会者役を下されるんじゃないかって不安になりながらっ！！それで今日までリクエストないからって…」

そう、じゃあ最新のは見てないんだ。実はリクエストが来たんだよ、

これを書いている最中に「SAK I」さまから。
ついさつき某バカ作者が涙目で僕に縋りついてきたんだけどね。本
編と並列して番外編を書いていたから、途中までレーテで書いて、
案の定こういう結果ってわけ。

「う、嘘ですっ！そんな、じゃあ僕はいつたい今まで何を…っ」

さあね。僕は嘘をつくけど、あんたを司会者役にした作者なら嘘は
つかないんじゃない？

これ、作者から。

『ほんとごめんっ！！マジでごめんレーテっ！！』

じ、実はつい先ほど、ちょうどレーテの恥ずかしい話を書いてい
るあたりから新しいリクエストが入って…。

思わずパソコンの前で「マジかよっ」と叫んでしまいました…。
う、嬉しいのと悲しいのと混同して…。

書き直すのもあんまりなんでこのまま…。

あ、悪意はないんだよ？！ホントだよ？！お、怒らないでね、私
もレーテの説教は嫌だから！

本編での出番を増やすから許してーっ！！

だ、だって一番大事なのは読者様なんだもん…っ！可愛くない？
余計な御世話じゃゴラァッ！

うっ…罪悪感が…っ。ごめんなさいい…っ…っ』

ああ、これ書きながら本気で作者泣いてたからさ。相当きつい選択
だったと思うけど、結局は僕を取ったわけだね。

僕もあんまり気のりじゃないけど…さっさと出て行ってよ、帽子屋。
君がいると話が進まない。

「し、しかし…っ」

“元”司会者役が話の進行を妨げるのかい？

「……………っ！……………もう、いいです」

「れ、レーテ…。本当に行っちゃうの？ゲストとしてここにも構わないんじゃない…？」

アリス、同情は感心しないな。それにゲストの席だって用意されていない。

役を取られた役者は、ただの人間だ。舞台の上においても邪魔にしかならない。

「じよ、女王様っ！いくらなんでもそんな…っ」

「いえ、いいんです。確かに彼の言う通りですから…皆さんで、ちゃんと盛り上げて下さいね」

「ちよ、ちよっと待ってよっ！女王様っ！レーテが出ないんだったら私も出ないからねっ！！」

ははっ！自己犠牲かな？いいね、傑作だ。滑稽すぎて笑えてくるよ。

虫唾が走る。

「……………なあ、やっぱこいつに司会者ってどう考えてもおかしくないか？メチャクチャ悪役キャラじゃねえか」

その口切り取ってあげようか、黒猫。僕だって好きでこんな役をやってるんじゃない。許されることならばそこで無理して笑ってるバカな男に譲ってやりたいね。

「む、無理なんかしてません…っ」

ふふっ、いいね、その気の強い顔。ぐちゃぐちゃに壊してやりたくなる。

僕は基本的に気の強いこや我慢している子が好きでね　と
ことん苛めて絶望の底へ落としたくなるんだ。

「あー…基本的に趣味嗜好は一緒だけど、俺そこまで悪質じゃない
…」

ピンク猫なんかと一緒にされたくないね。

しかし、今日はそう言っただけなんだ。帽子屋、ここに
残れ。

「……え？いや、だって僕下ろされましたし、この場には不要なん
じゃ…」

今はね。確かに君は司会者の役を下されたさ。だけどまだ役がある
んだよ。

君は、番外編のプログラムに埋め込まれてるんだ。

「え？」

ま、最後のほうだけだね。相変わらず脇役だし、大した役じゃない
けど。

「ほ、ほんとですか?!じゃ、じゃあ僕、出番あるんですか?!」
さっきからそう言ってるだろう。最後のほうだから、今はいらな
いよ。とりあえず引込んで。　また呼ぶから舞台裏で待
ってな。

「は、はいっ！出るんですね！あ、ありがとございますっ！」

「レレーテ退場」

「フレ임様：僕、貴方のこと見直しました。ちゃんと優しいところもあるんですね：ただの冷血漢敬語鬼畜キャラかと…」

君いくら僕の大事な右腕だからってあんまりそういうことばっか言ってるよと首を刈り取るよ。

それに今のは慈悲じゃない。ただの事実だつてば。

「ううっ…ヤバイ、感動して…女王様、今の貴方を言ってもただのツンデレにしか聞こえないわ…ってわあっ?!」

「ひーめーさーまっ!!」

「嬢ちゃん！」

「アリス！」

えーっと、こういうのって解説しなきゃならないんだっけ？めんどくさいものだな、この役も。

ただいま乱入してきた餓鬼どもがアリスに抱きついてるようデス。しかし何せこの餓鬼ども、ガタイがでかいでかい。アリスは思いつきり潰れてマス。

は？何だいカメラ。棒読みは控えるだつて？ふん、しゃべれもしない雑魚になど言われたくないね。

「でい、ディー、ダム、マルス、レスト…っ?!あんたらどうして…いや、ていうかこの際どうでもいいからさっさと降りろ！潰れる

！窒息する！うぐうああっ…！」

双子、開始早々ヒロインの死亡フラグ立てるつもり？さっさと退け。君らもだよ、ウサギとネズミ。

「うあっ、なんかやな奴が司会者やってんだけど！マスターはどこいったマスターはっ！」

「やな奴なんて表現じゃ生ぬるいよ、マルス。最低最悪のやつとでも言っちゃないと」

「「違うよっ！フレイム様は最低最悪とか言う部類じゃないよっ！地獄から這い上がってきた鬼畜魔王様だっ！」」

「そ、それはその通りだと私も思うけど…ど、どけお前ら…！」

……もういつそのこと5人もろとも消しちゃおうか。

こら、どいつもこいつも脇役の分際でしゃしゃり出てくるんじゃない。帰れ帰れ。

「……………脇役ども退場……………」

「ま…マジで綺麗なお花畑が見えたわ…。どうしてあいつらがいるわけ？！」

どうしてって…あいつらにも出番があるからだよ。

「あいつらも?!私どれだけこき使われんのよ！デュエットするのは3人で充分だって…！」

いや、今回はデュエットじゃなくて全員参加だからね。僕も一応出るようになったよ。

「……ちよつと待って、女王様。もしかしてレーテの出番って、私とのデュエットじゃなくて……」

は？ヒロインとデュエット？そんな大役、そこらへんの脇役に任せられるわけないでしょ。帽子屋の出番は全員参加の部分だけだよ。

「……私今ちよつとだけレーテを可哀そうだと思ったわ……」

僕最初に脇役だって言ったよね。勘違いしたほうが悪い。ほら、時間がなくなるからさっさと始めるよ。

改めてこんにちは、今回司会役を務めさせていただきます、フレイルムです。

……なんてこんな敬語口調で話すと思ったか、バカが。さっそくだけど、これから番外編の本編に入るから、心しておくよ。うに。

は？さつきから何、カメラ。今までのやつは本編じゃなかったかかって？

当たり前だろう？あんなのは餓鬼の戯れだよ。

「うっわ、きつつー…俺やっぱあんただけは好きになれないなあー。餓鬼だなんて餓鬼に呼ばれたくないよねー、俺あんたより年上なんだけど？」

ああ、奇遇だな。僕も君のこと大嫌いだよ。できることならマイクじゃなくて鉞を握って君の首を刈り取りたくらいだね。

「あは、やってみなよ。その前にそのきれいなおめくりぬいてやるから。俺、情熱的な赤って好きなんだ。燃えるような血を見てるとぞくぞくする」

ふふ、確かに血は綺麗だね。君の顔を赤く染めるつてのも素敵そうだ……もちろん、君自身の血でね。

バチバチっ

「ちよ、ちよつと二人ともっ?!なんか今変な閃光が……てかそれ以前に笑顔怖いから!セリフ怖いから!子供泣くからっ!」

「あ、ごめん、アリス。泣かせちゃった?よしよし、あのちっちゃなお兄ちゃんが怖かったねー、俺が守るから大丈夫だよー」

「あんた…人をバカにしてんの?」

ちっちゃな…?おい、ピンクのお前、そこに直れ。問答無用でぶっ殺してやる…。

「はい、そこまで!。話をややこしくしないで下さい、フレーム様イオもいい加減にしろ」

「あれ、ルアがツッコミ役に回るの?なんか新鮮ってどうか気色悪いってどうか…ルアってどう考えても俺とアリスを取り合ってる役でしょ?」

「僕だってそうしたいですよ、ええぜひとも。ただ…レーテがいなくなってしまうたでしょう?だからどうにもツッコミ役がいなくて」

はあ?ツッコミ役ならいるだろう、ちゃんとした奴が。

影がつすすぎて今までほとんどしゃべってない奴だけど。

「…………ロキ？」

「お、俺…？む、無理無理無理っ！こいつらのハイテンション止めるなんて俺には無理っ！」

「何言ってるの！ここはあんたしか止める役がないんだってば！じやないとマジで流血シーンが出ちゃうわよ？！ここ一応ギャグの間よ？！」

「んなこと言ったって…！」

「お願いロキ…！貴方しか頼れないのよ…っ！」

「……………っ！！……………さ、最善を…尽くす…」

あれ、なに真っ赤になってんだろう、あの黒猫。…………あぁ、なるほど。あれが巷で有名の「ツンデレ オブロキ」か。

「ゆ、有名なのかよっ…！」

いや、嘘だけど……。ところで黒猫、いいのかい？なんか後ろでルアとピンク猫がものすごい眼光で睨んでるよ。

あ、アリスに抱きついた。って二人ともいっぺんに抱きついたら重いだろっ。

なるほど、これが巷で有名の「アリス、両手に嬉しくない花」の図か…………いや、嘘だけどね。

「レーテの敬語もかなり気が抜けるけど…あんたも相当だね。自分のことばっかじゃなくて他人のことも描写してみたら？まるで自己顕示欲の強い子供に見える」

「お、おいイオっ、火に油注ぐようなことは…」

いいだろう。確かあの帽子屋も同じようなことを前回や

つたんだよね？受けてたとうじゃないか。

さぁさ、どっぞいちゃいちゃしていいよ。

「おいちよつと待てゴルアツ！！私の立場はどうなる私の立場はっ
！！」

最初^{ハナ}っから無視。

「そつ？じゃあ遠慮なく……はむっ」

「ひっ……?!」

イオはアリスの耳たぶを噛みつくようにして軽く口にくわえた。軽く付きたてられた鋭い歯の感触にアリスは無意識に官能的な声を上げる。

「ねえ…カンノウテキって何？」

「あー……アリスは知らないほうがいいかも。完璧R指定用語」

「てか僕の存在が完璧に忘れられてる件について。僕もうそろそろあの人の部下やめようかな…」

ぴちゃり、と耳元で艶めかしい水音が聞こえると、いつの間にか体がもつと欲しがるように疼いていた。

欲望にまみれた自分の体を何とかしようとアリスが抵抗を始めると抱きしめていた腕がさらに強く彼女をとらえる。どうしようもなくなつた彼女は大人しく彼に囚われているしかなかった。

アリスの啼き声よりもさらに妖しい声が、彼女の耳朶をうつ。

ねえ…俺、アリスが欲しいんだけど。心も、身体も…。

ぞくり、と背筋を這いあがる快感にもうウソをつくことはできない。アリスは彼の金色の瞳を熱っぱい眼差しで見て、ため息とともに咳いた。

いいよ…あげる。貴方にだったら私、食べられてもいい…。

「なあんかすっごい魅力的な展開だけど…なんだろ、この虚無感。アリスのセリフが明らかに嘘っぽいし…なんか一人で妄想繰り広げてるよこの人」

イオはそれはそれは嬉しそうに微笑んで彼女の首元に顔を埋める。チクリと、小さな痛みを伴うキスが落とされ、アリスは思わず顔を赤くした。

「これ本物だったら俺肘鉄食らってると思うよ。っていけね、ルア、ロキの耳ふさいで！アリスもこれ以上聞いちゃダメ！」

「は？な、何ですか？」

「キスマークの次はピ　な　ことするに決まってるでしょうが！んなもん全国の良い子に見せられるか！おいそこのカメラの人もさつさと一時中断して！」

|||||スーパ―妄想タイム|||||

ふうっ…とまあこんなもんだね。どうだい、ピンク猫。この僕にできないことはなかったらどう？

…って何ルアも君もげっそりしてんない？

「いや、僕これでも純情なんで…きつかったです…」

「俺もちよつとあまりにあまりな展開に…R18の本を音読される気分だった…」

はあ？何言ってるの、アリスも黒猫もピンピンしてるのに情けない…。

さてと、何かとうるさい二人がダウンしている間に本編に入るとするか。これが今日のメニューだそうだよ。

□

N01・二人でショッピング?!「出演：アリス・ルア・イオ・ロキ*ジャンル：恋愛」

N02・チェシャさまリク「出演：アリス・ルア*ジャンル：恋愛」

N03・ナナさまリク「出演：アリス・イオ*ジャンル：恋愛」

N04・アリス大好き　さまリク「出演：アリス・ルア*ジャンル：恋愛」

N05・もさまリク「出演：アリス・ロキ*ジャンル：恋愛」

N06・ナナさまリク「出演：アリス・ルア・イオ・レーテ・マルス・レスト・ゲストキャラ*ジャンル：ギャグ」

N07・質問コーナー「出演：全員参加*ジャンル：ギャグ」

N08・殺めたいほど…「出演：アリス・イオ*ジャンル：ヤンデレ」

N09・アリ幕で学園物語「出演：全員参加*ジャンル：ギャグ」

「ちょ…何この量?!これ全部ぶっ通しでやんの?!しかも誰だよギヤグ要素多いって言った奴!ほとんど恋愛じゃねえか!」

リクエストが思った以上に多かったからね。ぶっ通しではやらないけど…まあ頑張ってるよ。ったく…だからもつとサクサク進行を進めるって…」。

「が、頑張ってるって何を?!やっぱ私今回もなんかされんの?!てかプログラム7のヤンデレって何?!何この怪しいタイトル!」

「ヤンデレって…俺とアリス?アリスはどっちかっていうとツンデレだから…やっぱ俺がヤンデレってことだね…。何考えてんだバカ作者」

「いやだからヤンデレってそもそも何なのよ」

それくらいウィキペディアで調べれば?自分で努力できない人間って全員首を飛ばすべきだと思うんだよね。

「アンタ言ってることがいちいち怖いから!読者様に全員ウィキペディアで調べろっていうの?!んな不親切な小説があるか!」

はあ…、まったく、どいつもこいつも面倒な奴ばかりだね。悪いけど、僕もよくわかんないんだ。というかわかんなくてもいいような単語だと個人的には思う。

かわりにバカ作者から手紙が来ているから読み上げるよ。

『どうもこんにちは、作者です。まずはじめに一言。』

君ら毎回バカ作者って…それ私のあだ名?いびり?いじめ?いじ

めだよな？

この頃私の扱いがどんどんひどくなっています…反抗期でしょうか。

ってことで、ここで一丁仕返してもしないと私の立つ瀬がないので、今回は「ヤンデレ企画」を立ててみました。

だって私作者ですよ？創造主ですよ？彼らの母であり父であり神ですよ？

ってこれ以上言ったら本気で自分がキモくなるのでやめときます。最初の犠牲者はイオ、お前だ。逝ってらっしゃい。

ちなみに因みですがヤンデレとは、病んじやいそうなほど愛します。って人です。

まあ人によって好みは分かれますが…まあただの仕返し小説なので、短いです。

ってことで…ご愁傷さま」

……うちのバカ作者は要約って言葉を知らないらしいね。

つまり何だよ、最後から3行目のところしか意味を持たないじゃないか。

「病んじやいそうなほど愛してるって……ごめん、よくわかんないんだけど…」

「あは、始めればわかるよ。おもしろそうじゃん。じゃあアリス、俺に死ぬほど愛されてね？」

「いや、プログラムの話だからっ！今じゃないから！先走って抱きつかないで下さいいっ！…！」

君らね…イチャイチャしてないで真面目にやれば？前回の前書きよりも倍に長いつてどういうことだよ。このままだと前篇後篇にわかれることになるよ？

「んー…俺は上下のほうがいいな」

「はあ？バカか、普通物語だったら1、2だろ」

「前篇後篇も上下も1、2も普通でなんだかつまらないですねえ…
いつそ右左でいいんじゃないですか？」

「いや、詰まるつまらないじゃないから。てかどっちが先かわかんないじゃん」

……君ら話進める気ないね。 アリス、君何で本読んでんの？

「あーこれは『サルじゃわから……』」

題名なんて興味ないんだよ。僕はなんで君が今この場で番組始まるうって時に本読んでんのかを聞いているの。

「いや、はじめに戻ってもう一回やり直せばそのうち前書きで今回は終わるかなあ…と」

飽きるに決まってるんだろ。

なるほどね…ふうん、そういう魂胆か。じゃあもう君たちと話す必要なんてないよね？だってくだらない話ばかり繰り返して時間を稼ごうとするクズなんだもんねえ？

その首はねてやろうか。

「ハイ、スミマセン」

おいこら。ほかの連中もさっさと用意しろ。首落とすぞ。
え？何だいカメラ。脅し？はは、そうかもね。

それでは読者さま方。随分と待たせてしまったね。

プログラムナンバー1、「二人でシヨツピング?!」、「どうぞお楽しみください…。」

………と思った矢先、休憩時間だつて?
なんだい、このオチ。

「えっ!マジですかフレイム様!休憩時間、休憩時間なんですわね?」

そうだけど…君はなんでそんなに嬉しそうなんだい?

「そりゃあもちろん、休憩の間に颯爽と…!」

トンスラこきやがるなんて、そんなことしたらどうなるかわかるよねえ?

「ふ、フレイム様…?なんか顔が怖いんですが、目がマジなんですわっ」

凶星かよ。

おい、ピンク猫。紐、縄、鎖でも持ってないかい?

「ん〜?別に持つてるけど?」

………なんでもってんだよと突っ込みたいところだが、助かった。
逃げないようにアリスを其処に縛りつけといて。

「えっ、ちょ、フレイム様？おいこら待てこのマセ餓鬼！私の人権は無視か！」

「ちよつと貴方さあ…誤解してもらつちや悪いんだけど、俺別にソツチ系の趣味ないよ？束縛すんのは俺の腕だけで充分」

それも問題あると思う発言だけどね。

へえ、じゃあなんでそんなグッズを持つてるんだよ。

「え、もちろん今回ヤンデレプレイがあるから…」

「んなの使わせてたまるかっ！は、放しなさいっ」

ふう…：ようやく静かになった。それじゃあ皆、いったん休憩していいよ。これから長久戦になるしね。

「休ませる気があんならこれほどけーっ」

期末考査終わったよ！もうマジ、その半端ない量に目から汗が…。
いやー、小学生から中学に変わった時の変化にはさらに驚きました
が、中学から高校への変化もすごいものですね…。毎日勉強勉強
勉強で青春なんて楽しむ余裕ありません。

ん、いいんですよ、私はこれで…。今のままがきつとたぶんおそろ
く幸せなんですから…。
ハア……。

さて、んなことはどうでもいいんですよ！まずはじめに…

レーテごめんなさいいいいっ！

もうマジで政権交代のところ書いてる時哀れみで涙が…。うっっ、
ごめん、ごめんね…許してね…。

ん ああ、この目薬は何かって？

ははっ、気にして良いことと気にしちゃ悪いことがあるんですよ？

何かと前書きが長いこの番外編ですが、番外編が先がいいというメ
ッセージをいただきまして、随分前から少しずつ書いていたものを
あげました。

え、じゃあもうちょっと進んでんのかって？はは、そんなに期待し
ちゃいけません。

ここの部分しか進んでません、ハイ、すみません。

長いっすね…もう長すぎです。前書きがこんなに長い小説、ものす
ごく稀有な存在だと思います。

しかし今回はギャグ多めですから！恋愛にくらんで見えないだけで
すから！絶対ギャグ比率多いですから！

ってことで、ほんと冷やかしくらいに読んであげて下さい。

で、今回はいろいろと解説しなきゃいけないことが…。

まずこのタイトル…：あは、なんでしようね、まったくもう

すんません、ハイ、キモイのは重々承知です。

どーしてもどーしてもどーしても考えが浮かばなかったからぶつちやけた話適当につけました。

この後トンナンシャーペー（東南西北）と続きます。麻雀をやる人には常識ですが、これはこうやって読みます。

どうやって番号つけようかなあーと考えてた時に思い浮かんだのがこれしかなかったのです。

もうほんと、死んだほうがいいですね、ハイ。

二つ目。何やら新キャラが登場しているようです。ほんと脇役だから本編では出さないままこちらで出してしまいました…軽く紹介文を書いておきます。

はい、「ひーめーさーまーっ」といってアリスを潰したお二人は前から予告してた通りあれです。出てくるのは鏡の国のアリスですが、私の参考にした映画では彼らは太ったおっちゃん双子として出てきました。

ああ、不思議の国のアリスって美形イメージがある人は原作見ないほうがいいですよ、きっと。

もうマジシヨック大きいですから。特に帽子屋と双子は…orz
それでも私はあの話好きですけどね…。

┌

名前：トゥーアイドル・ダム (Tweedledum) ・トゥーアイドル・デュー (Tweedledee)

性別：男

年齢：15歳

身長：185センチ

容姿：色素の薄い赤髪。見ようによってはオレンジの髪。目の色は黄緑。すらりとした長身で制服をだらしなく着こなしているが、それがまた似合っている。

概要：アリスのことを「姫さま」と呼び慕う。唯一崇拜するのはフレイムのみ。そのフレイムでさえ時々おちよくり、怒らせる。でかいくせに中身はまるつきり子供。自由奔放で、すぐに戦いを仕掛けるちょっと危ない双子。一卵性のため容姿は全く同じといっているほど似てる。ダムが兄で、ディーが弟。兄弟中は怖いほどいい。

」

……と、こんな感じです。

わぁ、ごめんなさい。今回はあとがきにギャグ一つ入れずに終わりました。もうほんと、疲れが：orz

つてことで、次回の「地図では東西南北！麻雀では…ナン」をお楽しみに…。

【chapter 0】地図では東西南北！麻雀では…

ナン

（前

もしかしたら後半にあるイオアリ編はR15かもしれません。
お気を付け下さい。

第一幕一篇 2人で買い物?!ラブラブショッピング ルアアリ編

「あー……どつかいききたい」

「は？読解期待どつかいきたい？何に期待してんですか」

「頼むからルア…盛大に変換ミスしないで。どこかに行きたいって言ったの」

私はソファアの上で寝がえりをうちながらため息をついた。

たとえば。どんな人間でも手元にやることかなければ自然と墮落してしまうものである。元の世界にいる限りはそんなこと、滅多にないことなのだろう。家のお手伝い、学校からの課題、依頼されている仕事……日本人は何かと忙しい。

だ・が！今の私の状況を一言で言うなら散歩に連れてってもらえなくてコロコロに太ってしまった犬だ。

いや、一応私の名誉のために言うけど太ってはいないからね！……体重計に乗るのが怖いだけで！

というのもやることがない！というか何もかも取り上げられる！

私がルアに「何か手伝うことない？」と聞くと彼はそれはそれは優しい笑顔でいうのだ。

「アリスはのんびりしてていいんですよ」

私も最初はそれに甘んじてじっとしていたのだが、どうやら腐っても働き者の日本人だったようで。一週間もすれば働きたくてうずうずした。

そこで今度は恐る恐るこの国の最高権位であるフレイム様に聞くと、何とも怖い笑顔で返された。

「手伝いたいと思うんだったら僕に話しかけないでくれるかな？」

どうやら彼は万年多忙らしい。それ以上かかわるのはさすがに命の危険を感じたので、私は当然身を引いた。

拳句の果てに、そこら辺を行き来してるメイドさんたちに乞ってみたが、無邪気な笑顔で言われた。

「アリス様は何もしなくていいんですよ」

……何かしたいんです。

そんなこんなでルアの書齋にお邪魔して本を読ませてもらっている。文官ということだけあってその読書量は半端なかった。

もともと本好きの私は一週間はそこで満足できたが、やはり外の空気が吸いたいものである。

「ねえルア……」

「なんです？」

「ちよっとお茶会に行ってもいい？」

「ダメです」

こっちを見ることもせずには却下され、私はわかってはいながらも肩を落とさずにはいられなかった。

もちろん、帽子屋と女王の関係はいまだに回復しているとは言い難い。

それどころから日くらい前に一戦交えてどうやらフレイムの虫の居所は悪いようだ。

ルアに聞く前にフレイムに許可を取ろうとしたのだが、案の定…

「で？君は帽子屋のお茶会に行かないんだよね？」

「い、いえ、あの…行きたいって言ったんですが…」

「選択肢は“イエス”か“はい”だ。さあ、どちら？」

などと実に黒い笑顔で返されてしまった。

あの…そういうのは選択肢って言わないと思います！てか私に選択権はないんですか！

などとは口が裂けても言えなかった。きっと彼はいつもの笑みを浮かべたまま「あると思った？」とでもいうのだろう…。

私はため息をおし殺しながら潤んだ目でルアを見上げた。

この頃わかってきたことだが、この国の住人はフレイムを除いて“アリス”を溺愛している。だから大抵のことは頼めば聞き入れてくれた。

もちろんルアも例に漏れない……ていうかこいつが一番異常だと思う。

そうやって特別扱いされるのが嫌いで仕方ない私だが、時と状況に応じてそれを武器にする必要があった。

「どうしても…ダメ？」

なるべく可愛く見えるように小首を傾げながら甘えた声を出してみる。

うわ…気持ち悪…。

自分としてはそう思うのだが、なんとこれが大抵はうまくいくのだ。まだルアなどの“カードもち”には試していないが…うまくいくことを願って。

しかし答えは実に淡泊なものだった。

ルアは顔に張り付けた笑顔を崩すことなく即答する。

「ダメです」

……もうちょっと躊躇するそぶりとか、見せてくれてもいいと思うんだけど。

私は思わず呆れたような溜息を吐きだしながら、急に重くなった頭を重力に任せたまま横に寝かせた。

ガコツ

そこにあつた硬い机に額をぶつけて、頭の中に鈍い音が響く。

ゴーン、ゴーンと鳴り続けるエコーに、私は声をあげるのも忘れて息を詰めていた。

痛い？んなもんじゃない。うん、なんというか…目の前が白く…。

「えっ、ちょ、ちょっとアリス！大丈夫ですか?!」

「いつてえ……」

忘れていたようにじわじわとぶつけた場所から熱が広がっていく。がたつと派手に椅子が倒れる音に驚いてそっちを向くと、あわてたようにこっちへ駆け寄ってくるルアの姿が見えた。

心配そうな色を浮かべた水色の瞳が私を覗き込んでくる。そつと、温かい指が私の額にふれた。なぞるようにそろそろと動く。

「赤く、なってます…」

耳元にふきかかる吐息に、呆然と彼の一拳一動を見守っていた私は現実に引き戻された。

瞬間、ぼつと私の顔は火が点いたかのように赤くなった。

(ち、近い…っ)

自慢じゃないが私は一度も男性と付き合ったことのない、しかもろくに話したことすらないほどの純情少女…もとい、男慣れしていない少女である。

普通の男性が近付いてもきつと緊張してしまうだろう。

しかしこの目の前の男が、“普通”であるはずがなかった。

(む、むむむ無駄に美形なんですけどっ)

さらりとした黒髪。どこまでもすんだ水色の瞳。透き通るような白い肌。どちらかというところ可愛い系の整った顔立ち。

頭の上の白いウサギ耳すらなければ、完璧なのだ。

そんな彼の顔が、数十センチしか離れていないところにある。

……鼓動が早まるどころじゃない。逆に止まってしまいそうだ。

「アリス…?」

突然挙動不審に視線をそらした私を不審に思ったのか、ルアはさらに顔を近づけてきた。それにつれて私も後ろへ下がろうとするが、背中にソファアが当たってうまく逃げられない。

横に逃げるため体をずらそうとした時、優しい仕草でルアの手が私のそれに覆いかぶさり、道をふさいだ。

「ちょ、ちょっとルア…?」

私はどんどん高まっていく体温を感じながら戸惑ったような声を出した。ルアはそれに答えず私の瞳を捕らえるように下から見上げてくる。

その瞳には既に心配の色なんて感じられなかった。ただあるのは、どこか籠もった熱だけ。
まずい、と直感的に思い、私は必死で押さえつけられている手を持ち上げようとした。しかし一回り大きい彼の手は存外に強い力がこめられており、全く歯が立たない。

「顔、全面うつたんですか？」

んなことしたらお鼻がぺしゃんこです。

フルフルとせわしなく首を振る私の様子にくすりと彼は小さく笑った。おでこを彷徨っていた指が頬へと降り、優しく手を添える。

「でも、真っ赤です」

ほら、赤いですよ。そう耳元で囁かれながら右頬をなでられ、私の精神力は一気に限界まで達した。

湯気を出しそうな勢いで熱くなる頭を後ろへと傾ける。ボスっとソファアの柔らかいところに後頭部がのった。

「ルア…頼むからもうやめて…頭ショート寸前…」

「ふふ…すみません。あまりにも可愛かったのでつい」

可笑しそうにルアが口を押さえて笑いをこぼす。

その息が鎖骨の辺りにふれた瞬間、ぞくりと背中の中の中心線に得体のしれないものが走り、私は必死で腕を突っぱねた。

意外にもあっさりと彼は身を引いてくれる。

早鐘を打つ心臓を静めようと浅い息を繰り返す私を見て、ルアはそっとソファアから離れながら苦笑した。

「そんなにあからさまに拒絶されると傷つきますよ」

「きよ、拒絶っていうか…あんなに近づかれたら誰でも引くわよっ」
「そうですか？念のため他の女にもやってみたんですが、好評でしたよ。駄目でしたか？」

不思議そうに投げかけられた問いかけに私はうつと答えに詰まる。
そりゃあ、彼は美形だし、滅茶苦茶私に甘いし、こんなに近づかれ
たら…普通の女の子は胸をときめかせるだろう。

いや、断じて私が普通じゃないと言っているわけではない。ないの
だが…

「だ、駄目というか…わ、私こういうの慣れてないからっ」

「こづいうの？」

「あ、あの、だからねっ、お、男の人に慣れてないっていうか…ス
キンシップが嫌いなものよっ」

ルアといい、イオといい、この国の住民は何かとスキンシップが激
しい。見かければすぐに抱きついてくるしこのようによく手を取ら
れたりする。

こんな……恋人同士の触れ合いのようなもの、慣れているはずがな
いのに。

なのに彼は、何でもないことのように憎たらしいほど眩しい笑顔で
切り返してくる。

「なら、僕で慣れればいいじゃないですか。アリスのためなら僕は
いくらでも付き合いますよ」

あの…最初からこんな美形で男になれるって？軽く美形恐怖症にな
る予感がするわよ、うん。

困ったように口ごもる私を見て何を思ったか、ルアはさらに笑みを
深くして突然立ち上がった。彼に腕を取られていた私はつられるよ

うにしてソファから腰をあげる。

あまりに唐突な動作だったため私の足はもつれて、そのまま彼の胸へと体重をかけてしまう。

謝ろうと彼の顔を見上げた瞬間。その瞳に映る悪戯っぽい輝きに、一種の戦慄を覚えた。

(あ、嫌な予感…)

しかし何よりも嫌なのが、この世界に来てからその予感が外れたことがないこと。

そして、今回も例に洩れなかった。

ニッコリと、ルアはそれはそれは綺麗な笑顔でとんでもないことを言う。

「ということ、手始めに二人でデートにでも行きませんか？」

デート。恋愛関係にある、もしくは恋愛関係に進みつつある二人が、連れだって外出し、一定の時間行動を共にすること。括弧ウィキペディアより括弧閉じ。

失敗した…。

私はここにきてから何回目か知れないため息を吐いた。

そう、デートとは本来恋愛関係にある二人がやるべきものなのだ。

恋愛関係とはすなわち、お互いが両思いではないと成り立たない関係なのである。

これは恋愛関係でもないのにデートなんかしてしまっている自分への罰なのだ、もうほんとすんません神様、と私は額を押さえながらそつと神へ謝罪した。

そんな私に周りの人たちが心配そうな視線を投げかけてくる。

しかし、一番気づくべき人は全くと言っていいほどそんな私に気づくそぶりも見せなかった。

いや、実際気づいていないのはわかる。

しかし…。

(こんのヤロオ…さっさと気づけーっ!!)

普段だったら絶対に口に出さないことを私は心の中で絶叫していた。

そもそものことの始まりは3時間前から始まる。

一方的に押し付けたデートによりらんらんるーといった感じで上機嫌なルアは、ほんの10分もしないうちに業務を終わらせ、半強制的に私の腕を引っ張って城を出た。

その前にルアの腕を振りほどきフレームに許可を取りに行った私なのだが…

『ああ、デートかい？ほどほどにね』

あれだけ私の外出を渋っていたフレームのあっさりとした返事に私は呆然と言葉を失った。

どうせ許可されない、と思って付き合っていたのに…なんでこんな時に限って許可するのよっ。

恨みがましく睨みつける私の視線に気づいたのか、フレームはにやりと意地悪く笑う。

『いいんじゃないかい。二人とも、久しぶりの外なんだろう？ 精一杯楽しんできなよ』

『そりゃそうですね…なんでいきなり許可するんですか』

てつきり「ルアだったら君を逃がさないだろ？」とでも言われるかと思っていた。

だが、次の彼の言葉に私の予想は裏切られる。

『だって僕だって彼の“デート”には付き合いたくないもの』

……どういう意味なんです、それは。

あまりにも意味深な言葉に釈然としないながらも、私は渋々と彼のデートを承諾した。

デートと言えば映画館や遊園地、といったところを予想していた私は正直拍子抜けした。

そんな私のほうを振り返って彼は嬉しそうに笑う。ピコピコと動くウサギ耳がたまらなく可愛かった。

『どうです、アリス。綺麗でしょう？』

『綺麗って…いつも通りの街じゃない』

そう、連れてこられたのは外出許可が下された時にいつも私が言っ

ている街だった。
それも商店街のようで、今は3時頃のせいかどこもかしこも大繁盛でにぎわっている。

(へえ…なんか意外…)

てつきり彼はもつと静かなところが好きなのかと思っていた。

薔薇の庭園で一人静かにお茶会を開いているルア…うわ、きつとレーテよりも抜群に似合ってるわ。レーテはどちらかというとき置の部屋で抹茶を飲んでそうだ。

その様子を頭の隅に思い浮かべた私は一人でクスクスと笑う。そんな私を不思議に思ったのか、ルアは商店街へと走らせていた視線を私のほうへ戻した。

『どうかしましたか?』

『いや…でも何でここなの?他にもいっぱい綺麗なところっていっぱいありそうなのに。森とか』

かなり人口加工の進んだこの世界で、唯一自然を感じるところ…通称“チエシヤ猫の森”と呼ばれている。

あそこの柔らかい日の光を思い出しながら私は思わず微笑した。もともと野生児っぽいところがあったせいかな、ああいうところは大好きだ。

『ああ、森はダメです』

しかしすげなくルアに却下され、私は怒りを通り越して呆然とした。

『ど、どうして?』

『森は紫の異物が出ます。あんな奴に邪魔されたくありませんから』

ね』

『ああ…なるほど…』

紫、という単語だけで大体の話を分かってしまう私も相当病んできているのかも…。

私ははあっと深いため息をつく、仕方ないかとあきらめ、改めて街を見渡した。

ドギツイ赤を基調としてデザインされている城とは違って、街はふんわりとした色を基調としている。それは水色だったり黄色だったり緑色だったりと実に様々な色がごっちゃになっているのだが、不思議と違和感はない。

日本人古来の…というよりもむしろ、RPGでよく出そうな石でできた店が連なっている。足元にはやはり硬いタイルが敷き詰められていた。

『それに』

『え？』

『僕はこの街、割と好きですから』

唐突にこぼれおちた言葉に、私は驚いてまじまじと彼を見つめた。

彼自身、無意識の言葉だったのか、しまったとでもいうように口元に手を当て、気恥かしそうに頬を赤く染めた。

あ…なんか可愛いぞ、この生き物…。

『その…アリスはいつも通りっていいですけど……僕はここが結構好きなので…あ、でも、つまんなかったら言ってお下さい。森はいけませんけど、他のところには行けますから』

所々どもるようにして必死に言うルアに私はほんわかとした愛情を感じ、始め嫌がっていたこともすっかり忘れてふわりと微笑んでい

た。

『ちゃんとリードしなさいよね』

それでもつつけんどんに返した言葉を撤回したくなるのに、その時間がかからなかった。

「ふうん…これは毒が解毒剤になるタイプか。どのように調合するんだ？」

いくらか興奮したようなルアの声には脱力して近くの壁に寄り掛かった。きっと本人は気づいていないのだろうが、いつもよりわずかに声が高くなっている。

先程から回っているのは、ガンショップ、暗器取引所、武器屋…そして怪しい薬剤師のところなど、何やら胡散臭いところばかりだった。

少なくとも、仮にも“デート”で行くところではない。

しかしあまりにも顔を輝かせて店の中を覗き込むルアに直接言えるはずもなく…。結局ズルズルと彼の買い物に2時間以上付き合わされているのである。

『だって僕だって彼の“デート”には付き合いたくないもの』

出るときに投げかけられたフレイムの言葉が脳裏にちらついた。その意味が、今は痛いほどわかる。
うん…確かにこれは嫌かも…。

「じゃあ…そうだな、これとこれを城まで配送してくれ。……ん？
ああ、新しいものが入ったら連絡を頼む。また見に来る」

そう言えば、ルアの荒々しい口調って久しぶりに聞くなあ…。
私はほんの少し汚れた壁をなんとなく指でなぞりながらぼうつと考えた。

普段私やフレイム様には敬語を使う彼だったが、使用人やレーテ、イオなどといった人たちにはだいぶ砕けた口調になることが多い。距離を置かれてる…という印象はないが、どうしてなんだろう。ただ純粹に不思議に思う。

コツコツという小さな足音に顔をあげると、ちょうどルアが早足でこちらに向かってくるところだった。

まるで新しい玩具を買ってもらった子供のようにほくほくと嬉しそうな彼の笑顔にわずかに顔が綻ぶ。

ああ…和むわ。

「すみません、遅くなってしまいました。これで僕の買い物は終わりです。アリスも何か必要なもの、ありませんか？」

「いや、ないけど…何買ったの？」

「解毒剤と…治療薬ですね。あ、それから鎮静剤に腹痛薬も一応買っておきました」

「へえ…ルアでも怪我とかするんだ…なんか意外」

「……僕は化け物なんかですか。違いますよ、これはフレイム様用です」

「ふ、フレイム様あつ?!」

思わず声が裏返ってしまふ。どうやっても、あのフレームが怪我をしている場面が想像できない。

血に濡れている姿なら想像できる…というか回想できる。ただし、それは相手の返り血なのだが。

私の素直な反応にルアは苦笑気味に頭を掻いた。

「まあ確かに、あの人は相当強いです。滅多なことじゃ負けませんが…彼は一方的に攻防の“攻”が強いだけで、突っ走るだけですから怪我はたくさんするんですよ。僕が手当てしませんとね…あの人はいつも放置しますから…まったく」

「へえ…意外とルアって世話好きなの？」

「そんなんじやありませんよ。ただ、僕はあの人の臣下ですから」

臣下。そう呟いた彼の笑顔はどこか誇らしげであった。

そんなに嬉しい意味の言葉だったけ…？私は訝しげに眉を寄せていささか乏しい知識を総動員させて「臣下」という言葉を探す。

（臣下って…立場的には下の人よね？給料は確かに良いだろうけど…）

「おかしいですか？」

「ううん…ただ、ルアってフレーム様とあんま仲良くないじゃない？好きじゃない人の下にいるのってどうなのかなあって」

ルアとフレームはそれはもう、犬猿の仲と聞いていいほどお互いを嫌っていた。

ルアが案を出そうとするとフレームは却下するし、それに腹を立てて強引に押し切るが、これまたフレームは半ば脅すような笑顔でやはり却下する。

何故だかわからないがバラを嫌っているらしいルアの部屋に時々嫌がらせのように大量の薔薇の花束を贈ってくるようだし……。それでなくともフレイムは顔を突き合わせるたびに私のことを言っ
てルアを怒らせるのだ。
よく二人とも乱闘にならなかつたものだ。と今更ながら思う。短気な彼らだからいつ拳銃と鉞を突き合わせてもおかしくないんだろ。うけ
ど。

今までのことを思い出して呆れたように溜息をつく私を見て、ルアは可笑しそうに笑った。

若干乾いた笑いが耳朵を打つ。ルアが声を立てて笑うなんて…珍しい。いつも優しいげに微笑するだけなのに。

「ふふっ…そんなに仲悪そうに見えましたか？」

「そ、そうね…だいぶ」

「素直ですねえ。僕はある人のこと、嫌いじゃありませんよ。むしろ好きなくらいです。仲はいいんですよ」

「あ、あれで?!」

「はい。うん、まあ確かにあの人は昔から素直じゃありませんから…あれは彼なりの愛情表現なんですよ。嫌味をたらたらいつたり罵倒したり執務を押し付けたり外出禁止令を出したり…」

「鉞持ってきたり首をちょん切ろうとしたり刃物でちらちら脅したり……」

「そんな感じです。いやー…彼の愛情表現はわかりにくいというか一歩間違えるとヤンデレというか性格が滲んできてるというか………って、ちょっと待ったアリス！さすがにそれは愛情表現とは言いませんって」

呆れたようにルアが私を諭す。

ちっ…私のやつも一瞬愛情表現かと思っただけど、やっぱりただ単に

嫌われてるだけか。

「昔は可愛かったんですよ、一応。前女王陛下を失くされた時にはもう一時も離れてくれなくて……ちょっとウザかったけど弟みたいですごく可愛かったです。それがまあいつの間にもやらあんなにマセてしまわれまして……はあ……」

「ルア……あなたそれ兄じゃなくて母親としての心情でしょうか……」
「ふふ……そうですね。僕にとっては家族みたいなものです」

そう言うことを直接彼に言ってやればいいのに。一瞬そんなことが口をつきかけたが、思いとどまった。

どうせ素直でない彼だ。しかめっ面をした後にどうせ「冗談ですよ」とでも言うのだろう。

それだったら、今ここで嬉しそうに話す彼を見ていたほうがいい。

「……何にやけてるんですか、アリス」

「べっつにー」

「変なこと考えてませんか」

「だから何も無いよ」

「面と向かってあの餓鬼に言えばいいのになーとか」

「か、考えてないってばっ。くどいー!」

こいつ……読心術なんか使えるんじゃないか。

そんな私の心情すら察したのか、ルアは悪戯っぽく水色の瞳を煌めかせた。

「わかりますよ、貴方の考えていることくらい。わかりやすすぎです。嘘とかつけないでしょう?」

「……よくババ抜きが弱いって言われるけどさ」

「ははっ、そうでしょうねえ」

なんだかものすごく腹の立つ奴だ。少しくらい慰めてくれたっていいのに…。
むっとしたように唇を尖らせた私を見て彼はさらに笑いを深める。
相も変わらず性格の悪い奴め…。

「いいじゃないですか。そう言うところも可愛いですよ」

こ、この…何でこの住民はこうさうとこっぴばずかしいセリフをつけるわけ?!

私は急速に熱を帯びてくる顔をそらしながらどうすればいいかを必死で考えた。何とかして切り返さないとこのあと矢継ぎ早に攻められることは体験談からわかる。

(何とかして…何とかして…あ、そうだ…)

「ツーン」

私はわざとらしく腕を組んで右斜め45度に顔をそむける。いわゆる「ツーン」ポーズ。

何を言われてもこれで返せば何とか彼も私が怒っていることくらい察してくれるだろう。

予想通り、ルアは驚いたように瞳を見開いた。

「なんですかアリス、それ。新種の言葉遊びですか？」

「ツーン」

「…もしかして、怒ってます？」

「ツーン」

「あ、じゃなくてツンデレ奥義ですか？理想比は8対2だと聞いています」

「ツーン」

「じゃあ次はきつとデレが来ますよね？」

「デーレ……じゃないってばっ！何でそうなの？！怒ってるんだってば！」

変なことを耳元で囁かれて、思わずその口車に乗ってしまう。

しまった、と思うが口をつけて出た言葉は元に戻せない。…いや、向けてしまった顔を元に戻すことはできなかった。

驚くような速さで顎を捕らえられ、ほんの少し上を向かされる。

（ちよちよちよちよちよつと待てーっ！！ここは公衆の面前ですよ？！見られていますっ！視線が棘のように突き刺さっていますっ！）

その視線とやらを翻訳するなれば、「近ごろの若い者は…」とか「わしもあのような若気の至りがあったのお…」とか「いやだわあ…あの子。人の目も気にしないで…」とか「ねえねえ、あのお姉ちゃんたち何やってるのー？」とか「しっ、近づいちゃいけないわよ」とか……。

うっわ、なんか恥ずかしいを通り越して絶望したくなってきたぞこのヤロー…。

「やっとこつち向いてくれましたね」

か、顔…近くありませんか…？世間一般ではこの態勢のことをなんと呼ぶのだろう。顎を上向かされ、片手で軽く抱きしめられ、顔と顔との距離がたった30センチほどの態勢……。

しかも、相手は超美形ときた。……さらに付け加えるなら、悩殺スマイルつき。

……もうなんか、泣きたい…。

「ルア…目、目」

「他の人の視線なんて関係ありません。僕が欲しいのはアリスの目だけです」

「物理的に考えたら怖いからそれ！ええいつ、放せこの変態！」

私は思いつきり腕を突っぱねて何とかルアの体を引き離した。彼はまだ不満そうな顔をしていたが、さすがに人の視線を気にした…と
いつか忌々しく感じたのか、舌打ちをすると渋々引き下がった。

ドキドキ？そんな生ぬるいもんじゃない。最初の「ド」の後は小さな「ツ」が入ってすぐに「ド」だ。

擬音化すれば「どっどっどっどっどっ」といったふうに鼓動は若干不規則に早鐘を打ち続ける。私は肩で息しながらじりじりと下がって1メートル以上離れた。

確か人間が生涯の中で打つことのできる鼓動は決まっているらしい。一定量を超えると機能を停止する、それが俗に言う「寿命」だ。

ああ、もう……思いつきり寿命の無駄遣いした気分。

「ハア…はあ…ああーっ、もうっ！いい？！いきなり私に触らないことっ、顔を近づけないことっ、人前では自重すること！」

「なにもそこまで怒んなくても…悪かったです。次はちゃんと部屋で続きをします」

「そ、そういう問題じゃないっ…！」

至って真面目な表情でとんでもないことを言われ、私は再び顔に熱が上って行くのを感じた。

しかもなお悪いことにこいつのこれはすべて策略の上で成り立っていることだ。ここで私の顔が熱くなるのも彼の想定内に違いない。

「アリス……やっぱり、僕と買い物しても面白くなかったですか？」
次はどんな卑猥な言葉を投げかけられるかと思っただけで構えていた私だったが、思いの外しゅんとした声に目を見張った。

視線の先には、珍しく……というかはじめてかもしれない、ルアの落ち込んだ顔。

あ、白い耳がへたれてきてる。か、可愛い……。

私よりも長いまつげに覆われているその水色の瞳にあふれんばかりの悲しみを宿して、ルアが私を見る。

そのいかにも心細いといった光に、母性本能というか庇護欲というか、可愛い物好き精神の塊である私は一発Kされた。

(あ、頭撫でたい……！耳触りたい……！)

しかし相手はマルスではなくあのルアだ。そんなことしたら命の……いや、貞淑の保障がない。

そう考えなおした私はなんとかその場に踏みとどまって、しどろもどろになりながらも必死に言葉を探した。

「だ、誰もそんなこと言っていないじゃない」

「でも、なんか今日のアリス、いつも以上に余所余所しいです」

「いや、あんたが馴れ馴れしすぎるのよ……。それに、人の目もあるって言うてんじゃない」

「じゃあやっぱり、個室でやればいいですか？」

「マジやめて、ほんとやめて」

「……………つまらなかつた、ですか？」

「だ、だから違つて！」

思わず強い口調で怒鳴りつけると、ルアが怯んだかのように目じり

を下げる。途端、私の胸をチクリと罪悪感がさした。なにもこんな言い方しなくてもいいのに……私のバカ。シン……とその場に一瞬の沈黙が舞い降り、一気に民衆の視線は私へと向く。ルアはその様子に何かを察したのか、私の左手を取るとやや強引な足取りで私をその場から連れ出した。

「実は、こうやって女の子の手を握るの」

さばさばと速足で歩く彼は唐突に言葉を漏らす。

私は半ば小走りなりながら彼の言葉を聞きもらすまいと必死で耳をすませた。

彼の表情は、後ろからじゃ見えない。落ち込んでいるの？傷ついているの？……不安なの？

「アリスが初めてなんです」

「わ、私が……？」

「はい。キスをするのも、告白するのも、デートに誘うのも、アリスが初めてです」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ！私が初めてってどういうこと？！ないないないっ、慣れすぎでしょ……！」

だって、いつも彼は強引で……私を手玉に取って。悔しいと思うのに、いつも彼は私より優位にいる。

いつも余裕があつて……そりゃあイオみたいに遊び人って印象は受けないけど、逆にロキみたいにまっさらともいい難かった。

絶対付き合っている人の二人や三人……いや、この顔だったら10人以上は確実だと思ったのに。

なのに、唐突に足を止めて振りかえった彼の瞳は真剣そのもので、いつの間にか私たちは人通りの少ない路地に二人きりで立ち止まっていた。

誰もいない暗闇にいつもより低いルアの声が反響する。

「ウソなんかつきません。僕はアリス以外に好きになつた人なんていない」

「~~~~~つ…つ…つ、そういうこと、面と向かって言われると…かなり恥ずかしいんだけど…」

「でも、大事なことは言葉で伝えなきゃだめですよね？」

う……仰るとおりです。

正論で返されて私は言葉に詰まる。

突然、彼の顔が泣き顔みたいにくしゃりと歪んだ。

「何もかも初めてで…だから、余計不安になる…」

「る、ルア…？」

ふわりと、何のやましい感情も感じさせずにルアが私を抱きしめてくる。強くも苦しくもない、ただ温かくて…首の後ろで何かをこらえたような彼の苦しげな息が聞こえてくるだけ。

嫌じゃないかも…。私はほんの少しの羞恥を残しながらも彼の大きな背中に手を回した。

「すみません、僕、何一つうまくできなくて…本当に、貴方を喜ばすこともできなくて…」

「でも…初めては私も同じだから」

「当たり前です」

……は？何それ？どうせ私はモテないわよっ！

自覚はしていながらも改めて言われ、むっとした私は身体をはなしてその脛を蹴ってやろうとした。しかし、抑え込むようにきつくルアに抱きしめられ、身動きを禁じられる。

「ちよつとル…ひゃあっ?!」

文句の一つでも言っただろうとしたその瞬間、耳元に熱い吐息が吹きかけられた。

思わぬ攻撃に身体力がずくと一気に抜ける。支えを失った私はその場に崩れ落ち、ルアはそれを支えるかのように片膝を立てた。ま、まずい…。本能的に危険を察知した私の体は必死に立ち上がるうとするが、足腰がもう役に立たない状態になっている。

カアアツと、音を立てそうなほど熱が顔に集中した。鼓動が故障しそうなほど唐突に跳ね上がる。

「なーんてね。初めては失敗しましたけど、次もあるでしょう? キスも、告白も、デートも…その先も」

そ、その先って…。彼の言葉の言わんとすることが漠然とわかり、私は耳元まで真っ赤になった。

そんな私に気づいてか否か、くすりと耳のすぐ後ろで小さく笑う気配がする。

「もちろん、アリスは初めてでいいんです。アリスがもし他の誰かとこんなことしてたら…僕はそいつを殺しに行きますよ」

物騒な言葉。なのに、囁いた声はとても優しい響きを孕んでいた。思わずその力にすべてをゆだねそうになる。

しかし私は足を踏ん張って何とかこらえると、ぐいぐいと彼の胸を

おして彼とほんの少し距離を開けた。

「で、でもルアはそんな美形なわけだし…私ばかりこだわるのはどうかと思うわ。その顔だったら世界中の女子が好意をもってくれるはずだし…」

それはもう、時折激しい劣等感を覚えるほど。

彼の顔はアイドルに出すのも惜しいくらい整っているのに、隣にいるのは平凡な成り立ち、しかも元はいじめの対象にあったこの私だ。……釣り合はずが、ないのに。

「アリス…？」

突然うつむいた私を不思議に思ったのか、ルアはいったん抱きしめていた腕を解いて私の顔を覗き込もうとした。

私は瞳からこぼれおちそうな涙を見られたくなくて、髪をかきあげたようとした手を振り払う。が、逆にその手首をきつく掴まれてしまった。

「はなして…っ」

「ちゃんとこっち向いて下さい」

再び顎を掴まれ強制的に上を向かせられる。その拍子にポロリと大粒の涙が目からあふれ出て、彼の手の甲に落ちた。

顎を押さえる手とは裏腹に、妙に優しい手つきでその涙をぬぐう。

釣り合わない。そんなこと、初めからわかっていた。

何を期待していたのだろう。こんな私が彼に見合うほどの相手なわけがないのに。

今日のデートで、ありありと実感してしまった。

待ちゆく人々の視線、視線、視線……。何でこんな子が。特に女の子の視線が痛かったのを今更ながら思い出す。何で、今になってこんなに胸が苦しくなるの…？

「……僕はアリス以外いません」

「だからっ、そう言うのはもったいないって」

「そう思うんなら少しは僕のことも見てくださいっ」

せつかく逃れたはずの腕がまた強く引き寄せ、私は彼の胸の中に飛び込んだ。今度は迷いなく彼の身に身体をゆだねる。

まるで子供のように声をあげてなく私の頭を、温かい掌があやすかのように撫でた。

「アリス以外いませんから……いりませんよ、他のものなんて。」

そんなふうに、自分を卑下して…傷つけるのはやめて下さい…」

どこまでも優しい彼の声と、私の嗚咽だけが日の落ちた暗い路地に響く。

「そっだ、アリス。これをどうぞ」

ようやく泣きやんだ私は彼が胸から何かを取り出そうとするのをぼうつと見ていた。

それは、水色を基調として可愛らしくラッピングされた、手のひらサイズの小さな小箱。

私は素直にそれを受け取ると、ピンク色のリボンをするりとほごい

て中をあらためた。

「ルア：これ」

「結構前から用意していたんです。渡す機会がなかったもので」

「すごい：綺麗」

中に丁寧に納められていたのは、シルバーの懐中時計。とくに装飾らしきものもないが、どう考えても高級品であることは確かだった。それにこれ：以前見たルアのもの、似てる：？

視線をあげてルアに尋ねると、照れたような笑いを浮かべながらルアはうなずいた。

「はい、お揃いにしたんです。嫌、でしたか？」

「そ、そんなことない！すごく：すごく：嬉しい」

私はそつと懐中時計を持ち上げて目を凝らしてよく見る。やっぱり：すごく細工が細かい。

それを裏に返した時、何かの文字が丁寧に彫られてあることに気づいた。

(Ti . . . ck . . . w . . . ? なんだろ、暗くて読めない)

「今日はありがとうございました。また、次もお誘いしていいですか？」

ルアの声に私の注意はそちらへ行き、あわてて私はその懐中時計を大事そうにポケットの中に入らう。

そして彼のほうへ向きなると、満面の笑顔でうなずいた。

「もちろん。こちらこそ、よろしく」

T i c k w i t h y o u . . .

貴方とともに時を刻みますように
.....

f i n . . .

「ちょっと待ちましょうか。うん、とりあえず誰か国語辞典買って来なさい。“自重”の意味を調べるのよ」

なんだい、アリス。君はいきなり……。随分大人しい作品じゃないか。作者にしては久々に自重したようだね。

「こ・れ・が?!」

「本当ですよね!なんですかこの内容の薄っぺらさは。キスシーンもないし、押し倒すシーンもないし、途中にフレーム様が乱入しますし……」

ちょっと待ってルア。僕が乱入って……いいじゃないか、あれくらい。あれくらいのを気にするなんて……君も器の小さな男だね。

大体僕のセリフなんてたったの5行しかないじゃないか！出すならもっと出してほしいんだがな…。

「うわあ、数えたんですか？なんて執念深い…。でもやっぱりフレイム様は出てきてほしくなかったですね。キャラが無駄に濃すぎて他がかすんでしまいますから。イオとデュエットしてみたらどうです？」

死んでも…じゃなくて相手を殺してでも嫌だね。どっかの毒薬にありそうな色した猫と組む気はさらさらない。

「うわあ…ひでえ…、じゃなくて二人とも！何で自重してるって前提で話進んでんの？！あんたらの自重の基準って何？！」

あー…うるさいなあこの女。少し黙ってよ。

自重の基準？そんなの決まってるだろう？もちろん…

「服を脱がせてピーだったりのR18だったら、まあ自重してませんよねー」

ですよねー。

「ですよねー…じゃねえっ！基準高っ、それまでオールオツケーなわけ?!」

「まあとりあえず15歳未満の読者も多いわけだし、Rがつかない程度だったらいいんじゃないですか？」

「……これは？」

「もちろんRなんてつきません。どこの小学生の読み物ですか、これは」

「いやさすがにそれはないかと思うわよ…？あんたらの精神年齢が

高すぎるだけでしょ。もうすでにおっさんだったりして」

「そんなのはレーテだけです。精神年齢については『サルじゃできない！恋のやり方』なんて明らかに胡散臭いものを読んでいたアリスには言われたくないですね」

「なっ…サルを馬鹿にするつもり?!」

こら。人が黙ってればどんどん話をそらして…大体馬鹿にしてるのはサルじゃなくてアリスだよ。

さて、休憩時間はもういいかい？覚悟はついたかい？というか…諦めはついたかい？

「え、ちょ、待って下さい、あきらめって…」

「アーリースッ！」

「なっ…い、イオ?!まさか次って…」

「そ、俺。大丈夫だって！俺ちゃんと自重するから、ね？」

「う、うーん？なんか信用できるようなできないような…」

まあどつちにしろ始まるわけだし。

それじゃあとりあえずピンク猫、基本何をしてもいいが…

「いいの?」

くれぐれもRはつかないようにね。

「だから基準高すぎだって！自重自重自重！」

「ちっ」

「ちょ、いま舌打ちした?!ま、まさかやる気だったの?!」

さて、お先真つ暗なアリス。

それでは自重している(はず)、きつと、おそろく…たぶん(イオア

リ編、開幕！

「その言葉のあいまいさどうにかなんないんですかああっ」

第一幕二篇 2人で買い物?!ドキドキショッピング イオアリ編

そう、ことは突然かつ俊敏に起こった。
今の状況を一言で説明すると。

誘拐されてます。誰かマジでヘルプミー。

『あれー、アリスじゃん。どうしたの、こんなところで』

それはルアから懐中時計をもらって、ほんの少し彼と別れていた時のことだった。

どうやらフレイムのための買い物をもう一つ思い出してしまったようだ。ついていくのも何なのでここで待ってると言ったのだが…。

ヤバイ…なんか幻聴が聞こえた…。

『いつも通り反応がないなあ…。おーい、アリス』

すたっと軽々しく声が上から下へと舞い降りる。いきなり目の前に

着地されて、無視を決め込んでいた私は思わず反応してしまった。

『あんだ少しは普通に登場できないの?! 屋根からって何よ屋根からって!』

『だって俺ってここらへんじゃお尋ね者だし? 上のほうが空気いいし?』

『落ちたらどうすんのよっ』

『大丈夫だって。それより危ないのはアリスのほうだよ。こんなとこに女の子が一人って、食べてくれって言ってるようなもんでしょ』
『た、食べ…』

どうしてこいつもルアもこう、恥ずかしげもなくそう言うことをさらうというんだろう。

私は悪戯に光る黄金の瞳に射すくめられて、身体を固くした。ほんの少しだけ彼は身体を近づけてくる。しかしそれは猫が飼い主にするのと同じで…危険なおいはない…今のところ。

『そ。フライで』

『御免被ります…』

『じゃあ日干し。煮込み? 塩焼き? あ、丸焼き!』

『私はどんな材料だ!』

『んー、やっぱり俺はそのままのアリスが食べたいな』

もうヤダ…。イオには基本的に何を言っても無駄だ。言葉巧みに私を惑わして全部自分のしたい方向へもっていく。

これ以上話していても埒が明かれないと思った私はむっとした顔を崩さないまま再び黙り込んだ。

反応のない私に気づいたのか、イオはほんの少し不満そうに目を細めると、何を思いついたか満面の笑顔になり私の手首を取った。

『アリス、今暇？俺と買い物に行かない？』

『は？いや、確かに暇だけど…』

『じゃあ行くって。早くしないとレーテに怒られちゃう』

『で、でもルアが…』

『あーっ！』

はるか遠くのほうで若干高い男性が聞こえ、私はびくりとそっちを見る。

『なんだ、白ウサギ。いたんだ』

『なななんでお前が…っ！しかもイオモードか?!』

はあああ……めんどくさいことになった。私は長いため息をつきながら状況を説明しようと、口をパクパクさせるルアに向き直った。……いや、正確には向き直ろうとした。

その瞬間、イオに取られていた手首をくるりとひねられ、私の体は倒れるかのように彼の胸へと飛び込んだ。

『いつ……たあ……』

『アリス?!この…イオっ?!』

反射的に漏れた小さな悲鳴をその白いウサ耳は聞きとったのか、ルアの顔から瞬時に血が引いた。

(い、いや、痛いわけじゃ…)

しかし時すでに遅し。ゆらりと、ルアの纏う空気が私といた時とは一変して、そのきれいな水色の瞳が濁ってゆく。

彼に見せつけるようにして私をきつく抱きこんだイオは、そんなル

アの様子を面白そうに見てくすくすと笑った。

カチャ…

この世界に来てから幾度となく聞いた、同時に私の一番嫌いな音がまだちらほらと人が通る通りに妙に響き渡る。

何事かと不審にこちらを見た家族連れが顔を真っ青にさせて慌てて路地裏に逃げ込む姿が視界に写った。

『ちよつとルア?!こんなところで騒ぎは…』

だがそんな言葉が彼に届いているはずもなく。

次の瞬間、シルバーの銃の引き金が引かれる、私の体が宙に浮く、すぐ耳元で「あは」という興奮した笑い声が聞こえる、街の人々の悲鳴が上がる…など、一気にことは起こった。

『じゃあバイバイ、白ウサギ。アリスはもらってくね』

突然かつ、俊敏に。

すさまじい跳躍力で5メートルほど上空に跳んだイオは、私を抱えながらも軽々しく屋根に着地し、まるで仲のいい友達がするように手を振った。

その後をすぐに銃口が追いかけるが、イオのほうが行動は早かった。まるで宙返りするかのよう後ろへ跳ぶと、今度はもう一つ向こうの路地に着地する。

さて、当の私だが。突然の浮遊感に鼓膜を突き破るほどの銃声。重くなって宙返り…酔わないはずがなかった。

向こうから聞こえてくるルアの怒号を最後に、私はあっさりと意識を手放した。

そして、時は今に至る。

あれから直に目を覚ました私は強制的に彼の買い物に付き合わされていた。

私が彼を“付き合わせている”わけじゃない。私が彼に“付きあわされている”のだ。

……世間一般としてどうよこれ。しかも私に拒否権すらなかったしね。

「おじちゃん、これっていくら？……へえ！安いじゃん。うん、じゃあこれ100袋ちょうだい！え、そんなに在庫がない？じゃああるだけ！」

妙に明るい声で店長と話をするイオは、女である私から見ても可愛い。

ケラケラとよく笑うし、スキップするように歩くし、尻尾は絶えず左右に揺れてるし、耳はピコピコしてるし……あれ、途中からマニアックになった？こほん、とにかく、彼は可愛いと思う。

両手にぶら下げた大量のお茶パックさえなければ。

「ねえ、それ……」

私はようやく帰ってきたイオにおずおずと尋ねる。彼は一瞬不思議そうに首を傾げたが、私の聞かんとしたところを察したのか、あまりにもケロリと答えた。

「うん、レーテに頼まれた」

「た、頼まれたって……そういうのバシリって言うんじゃないの？」

「いや……実は彼、ぎっくり腰になってね。可哀そうだからちよつと手伝つてやるつと……」

「はああつ?!ぎ、ぎっくり腰いつ?!あの若さで?!」

「まあね…彼、ああ見えて結構老けてるんだよ?実年齢は確か43歳…かな?」

「よ、四十路?!」

「すつごい若づくりだよねえ。やっぱ美形つて他の人と老け方が違うのかなあ」

だんだんと調子づいて面白そうに笑いを浮かべながらイオはありもしない嘘をポンポンと口から出してた。大体ぎっくり腰のあたりから続いている嘘なのだが、もちろん私は気づかない。

こちらの世界にまだ慣れていない私は勝手に、「こつちの住人つてやっぱ根本的に違うのかしら…」などと結論付けている。

一向に嘘だと言いつ返さない私を見てイオはしだいに不安になってきたのか、口からでまかせを言いながらも少しずつ笑顔を消していった。

「しかも彼、肺がんもちだから先も短くてね」

「う、嘘つ、レーテつてタバコ吸つてたの?!」

「そりゃもう、普段はいい子ぶつてるから誰もいないところでスパ……」

「いい子ぶつて…腹はもとより、肺も真つ黒だなんて…」

「うわあ…レーテの死亡フラグが立てられそうだよ…」

「え?なんか言つた、イオ?」

「いや、何でも…。さらにね、彼つたら青春時代につるんでいた暴走族に追われてて大変らしくてね」

「青春時代?!レーテに青春時代つてあつたの?!」

「突つ込むとこそこのなの?!それはレーテが可哀そうだから…彼だつていきなり爺臭くなつたわけじゃないからつ」

「そうなの…暴走族に…レーテ、結構苦労してんのね…」
「ねえもうなんか、俺が悪かったからさ。頼むから何もかも「レーテ」だったらあり得るよね！」なんて思わないであげて…俺がパシられてるってことでいいから…」

私は彼の言わんとするところが良く分からず、半ば涙目になりながらため息をつくイオを見上げていた。

悪かっただなんて…色々とレーテのことがわかって感謝してるぐらいなのに。

わけがわからんというふうに眉をひそめてみせると、彼はますます落ち込んだかのように瞳の色を暗くする。

「もうなんか…アリスって騙されやすい？ババ抜きとか弱いでしょ」

「ちょ、ちよつとそれルアにも言われたわよ？！何なのよ…別にそこまで弱くないってば」

「今度一緒にやってみたいものだね。これはババじゃないですよなんて言われたら間違いなく取る人だ、貴方は」

な、何でそこまで言われなきゃいけないわけ…?!しかも具体例まであげられて明確に！

むすつと不機嫌そうに唇を尖らせると、イオはほんの少しばつが悪そうに私を覗き込んだ。

「彼、風邪なだけだから。それで俺が買いに来てるってわけ。嘘ついて悪かったから…さ」

「べ、別にそこまで謝られなくたって…、レーテが風邪？」

最後に彼に会ったのはおそらく1週間ほど前だと思つ。それからすぐにルアが傷だらけになって戻ってきたから…まさかレーテとも戦って、その時の傷が化膿した…？

徐々に血の気を引いていく私を不審に思ったのか、イオは慣れた様子で私の手を取り近くのベンチに座らせる。

普段ならその手を振り払う私だったが、いかんせんレーテのことが心配だ。宥めるようにそつと巻きついてくる彼の腕を拒めないまま、私はこみ上げてくる不安に耐えた。

「アリス？レーテは全然大丈夫だよ。ただの風邪だつて」

「うん…でも、この間ルアが帽子屋に戦いを仕掛けたの。もしかしてその時に傷を負ったのかも…」

「……おいおい、ちよつと待ってよ。だからこの前あんなボロボロだったの、俺。つたく、ロキもつくづく嫌なところにはち合わせるなあ…。とにかくアリス。心配しないで、レーテは全然ま…つたくさつぱり…もうなんかむかつくくらい元気だから」

呆れたような彼のため息に私は顔をあげ、予想以上の顔の近さに一瞬固まる。

え…あれ、なんで私いつの間。てかなんでこいつに頭撫でられてんの？！

私の動揺が伝わったのか、イオは口端を吊り上げてシニカルな笑いを浮かべるときゅうつとさらに抱きしめる腕の力を強めた。

「い、イオっ」

「抵抗しないで。だってアリス、寒そうな格好してんだもん。俺が温めるから…ね？」

耳元で熱い息とともに囁かれ、カアアツと体温が急上昇していく。加えて、直に触れる彼の肌から伝わってくる熱。

確かに暖かくなってきたとはいえ、日が落ちてから肌寒いと思っていた。なのに…今は、うつすらと汗ばむほど体が熱い。

抵抗しようとしても、顔をあげると金色の瞳と視線が交わる、身体を動かすと彼にさらに密着してしまうと、どうにも動けない状態になっていた。

そうしている間にも鼓動が加速していく。自分で感じるということ

は当然、五感の鋭い彼にも聞こえているということ…。
くすりと、耳の後ろで妖艶な笑い声が聞こえ、私はびくりと震えあがった。

「アリス、すごくドキドキしてる。もしかして、感じてるの？」

「……っ」

そんなこと言われても、知らない。したくてこんなドキドキしてるわけじゃないんだから…。っ。

震える唇を私はきつくかみしめる。このままだどこみ上げてくる羞恥心で死んでしまいそうだ。

なのにイオは追い打ちをかけてくるように私をさらに自分のほうへと引き寄せる。半ば彼の膝に座る形になってしまい、ますます恥ずかしさがこみ上げてきた。

「ねえ」

「う、うるさいっ！あんたが慣れすぎなだけでしょ…。っ」

私は今度こそ彼の腕から逃れようと身じろぎするが、身体に力が入らない。

弱々しい私の抵抗にイオは可笑しそうに笑った。

耳元で笑われるのは、ほんとにきつい。彼の熱い息をすべて敏感なところで感じてしまう。

「そんなことないって。俺だってドキドキしてるし」

「ど、どこがよっ」

「聞こえない？じゃあ…ほら、ちゃんと感じて」

イオは低く囁くと私を抱きしめる腕に力を込めた。ゆるりと私のウエストあたりに回っていた腕が私を私の腕ごと拘束しようとする。しまったと思った時にはもう遅い。私は完全に抵抗できない態勢のまま彼の胸に背中を密着させていた。

「アリス……」

「な、なに……ひゃっ?!」

突然首筋にぬめりとした熱いものが触れ、驚いた私は変な奇声を発してしまう。

ざらりとしたその感触に、まさかと嫌な予感を覚え思わずちらりと振りむいた。芯の強い髪が思っていたよりもずつと近くにあり、そのことにしばし驚く。

しかし状況を把握した瞬間、激しい羞恥心が私を襲った。心臓が、一瞬だけ本当に止まる。

イオは、私の首筋に顔を埋めていた。

そして、私のむき出しの首をなでるようにして這っているのは…彼の、艶やかなまでに赤い舌。

「い、イオ…っ」

「まだ、聞こえない？」

一瞬何のことか分からず、思考がフリーズする。私は抱きしめる彼の腕にきつく爪を立てて背筋を這いあがってくる熱を押さえようと躍起になった。

聞こえるって何が？何でこいつはこんなことを…っ？いや、それよりも、なんでこんなに体が熱いの…？か、身体に力が入らない…っ。

「ひっ……」

「俺だって、不安だよ」

どンドン混乱していく私をどん底に落とすかのように彼の舌が上へと上がる。

さっきまで舌のあつた場所は外気に当たって冷たく、今透明な道をつくる場所は外側からも内側からも熱くなっていった。

時折舌のかわりに嘔きながら唇が首筋を這っていく。耳元で聞こえる低音ボイスと首筋を徘徊する濡れた感触に、私は発狂しそうになった。

「余裕なんて、ない。俺だって……」

「や、やめ……あ……」

うっすらと彼の唇が透明な糸を伸ばして離れたかと思うと、今度は耳を食むようにしてそつと噛みついた。ただでさえ熱が集中して感じやすくなっている耳たぶが、濡れた感触で包まれる。

ぴちゃりと耳元で小さな水音がして、私は途端に真っ赤になった。今だったら冗談なく恥ずかしさで死ぬると思う。

「い、いい加減に……っ」

「俺だって、アリスのこと」

「なのに……」

「な、何なの……」

耳元で嘔かれているのにもかかわらず、聞こえなかった言葉があった。

私の中で何かが疼く。知りたい……何を、言ったの？何が言いたいの？何を……我慢してるの？

貴方はいつも、何故そんな悲しい目で私を見るの……？

「イオ…私は…っ」

「……なんでも、ない」

「でも…」

「なんでもないから……黙って」

腕が緩んだかと思うと、大きな右手で口をふさがれた。彼の頸動脈らへんが頬に当たる。

そこから感じる彼の鼓動に私は息を呑んだ。私と同じくらい……いや、もしかしたら私よりも、速い。

『俺だつてドキドキしてるし』

ふざけたような言葉が、脳裏によみがえった。でも、彼はいつも余裕しゃくしゃくで笑っていて…。

私だけ、彼に翻弄されてる……そう思ってたのに。

「…いつ…」

ふいに首筋にピリツとした痛みを感じ、私は思わず背中をのけぞらせた。

なに……？なめてるんじゃないかと、口づけてるでもなく、もっと別の……言うなれば噛みつかれてる、ような…。

やめたと制止したいが、声は手にはばまれてうまく出ない。痛みは最初だけで、あとは軽く牙をつきたてるようにして唇を這わせてる。それでもやはり恥ずかしいのは変わらないけど…。

「この痕が」

ウエストを引き寄せていたもう片方の手が外れ、私の首筋にもつていかれた。さわりと、指の腹で噛みつかれたところをなでられる。今だったら、なんとか彼の腕から逃げられるのに。私の体は芯からとろとろに蕩けてしまつて、少しも自分の意志に動いてくれなかつた。

いや…意志すらあるのかも怪しい。私はぼんやりと首筋を這つて私の胸元へといつた。

パチンと、小さくボタンの外される音がする。それなのに、私は彼の手へと荒い息を吐き続けるだけで抵抗しようとしなない。

そんな自分がひどく滑稽で…わからなかつた。

ぼんやりと彼の熱に侵された頭は考えることをあきらめ、身体はぐつたりと彼の胸へと倒れこむ。

イオの、妙に悲しそうな声だけが私の鼓膜を打つた。

「この痕が、消えるまで…その間だけでいいから　俺のものでいて」

何で、今更そんなことを言ってくるのだろう。いつもいつも、しつこいほど私を物扱いするのに…。

何でこんな時だけ、そんな切実そうに言ってくるのよ…っ。

しゅるっ…と、胸の前で結んでいたリボンがとかれる音がした。私はびくりと怯えたように震える。イオはそんな私をなだめるように耳元にキスを落としながら、片手だけで器用にボタンをはずしていた。

アウトラインぎりぎり…ちょいすぎぐらいまで彼の指が伸びた、その瞬間。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんを食べちゃうの？」

「……は…?」

突然の無邪気な声に私は思考停止する。

目の前には、私の腰ぐらいまでしかない小さな…外見年齢4歳ぐらいの女の子。抱きしめているクマのぬいぐるみとよく似合って、なんとまあ可愛らしい。

可愛らしい、可愛らしいのだが……なんでここにいるの？

私は呆然とあたりへ目を走らせた。ここは、公園。でもって私たちが座ってるのはそのベンチ。

そう、つまり　　公衆の面前。

ばつちり、通行人と目があった。30代後半ぐらいの貴婦人は一瞬すぐく気まずそうに顔を歪めると、さりげなく目をそらした。

いやあねえ、こんなところで…。

そんな心の声がスピーカーで聞こえてくるようです…。

茫然自失する私に反して、イオは困ったような笑顔をつくって小さな女の子に言い聞かせた。

意外と子供には甘いよね…。

「うん、食べちゃうんだよ。だからちよっと二人きりにしてくれるかな?」

「お姉ちゃん、痛くないの?バリバリ、ボキボキって食べるんですよ?」

「うーん、最初は痛いけど…大丈夫だよ。お兄ちゃんは優しく食べるからね。気持ちよくしてあげるから」

「食べられるって気持ちイイの?」

「うん、君も大人になればちゃんと食べられるから、ね?そろそろ

お姉ちゃんをいただきますさせて？」

「はい！」

女の子は嬉しそうに笑うと私たちのもとから去っていった。

おい……なんか今の会話おかしくなかったか？教育上問題大有りじゃないのか？！

熱かった体が急激に冷めていく。それと同時に、腹の底から別の熱が身体を支配していった。

そんな私の変化に気づくことなく、イオは呑気に呟く。

「やっぱりこういうところだと邪魔が入るか……どうする、アリス。移動しよっか？」

移動して……ふーん、その先は？

なるほど、虫唾が入るぞこの野郎。

しかも、公衆の面前　　公衆の面前で！

「それとも、ここで食べられたい？」

彼の艶やかな熱い息が耳元にふきかかる。

次の瞬間、私は驚くほどの速さで彼の鳩尾に肘鉄を食らわしていた。

「いったあ……貴女絶対なんかの格闘技に出れるよ。すごいすごい、効果てきめん。一瞬視界が真っ白になったからね」

「それだけ元気があるならもう一発食らうときましようか？」

「い、いや、もう十分です…」

私は笑顔のままボキボキと指を鳴らした。腹を抱えるように押さえ
ていたイオはさあっと青くなるとじりじりと後ろへ逃げる。どうや
ら本当に痛かったらしい。

そりゃあそうだ。あれだけ公衆の面前で辱められて…怒らないほう
がおかしいと思う。

肘鉄一発で彼の体をひきはがし、地面に倒れこんだ彼の鳩尾を彼の
呻きが聞こえなくなるくらいまで蹴りつけた。

それでもまだ足りなかったが、今度は別の意味で視線が集まってき
たため、ひとまずそれだけで許してやったのだ。

ああ、なんて優しいんだろう、私…。

しかしそう思っているのは私だけのようで、イオなんかはいまだに
ぶつくさと文句を言ってる。

「絶対アリスもその気だったのに…やっぱり場所が悪かったか…。あ
ーもうほんと失敗したなあ！この俺があんなとこまで来てお預けだ
なんて！」

う…まあ確かにあの時あの女の子が口をはさんでなかったらヤバい
ことになってたかも…。

黙り込む私を見てイオは何を勘違いしたか、途端にしゅん…と落ち
込んだ顔をする。

「悪かったよ…そりゃあ無理矢理感も否認ないしさ…」

「べ、別に…もう二度とやらないって言うなら許してやらないこと
もないけどさっ」

彼の反省したようなそぶりを私は珍しげに見ながら、言葉を選んだ。
とりあえずもうあんな事態にならなければいい。そう考えだした案

だったが、彼は悪びれもなく首を振った。

「ああ、それは無理」

「な、何でよ?!」

「だって俺、きつとそんな約束守んないよ? アリスには欲情もすればキヌもしたくなる」

「よ、よくじよ……少しは我慢しなさいよっ!!」

こいつはなんでこうも恥ずかしげもなく!

真つ赤になりながら言い返すと、イオは心外そうに片方の眉をつり上げた。仕方ないともいうように肩をすくめる。

「我慢できたらとつくにしてるって。こういう系統の感情って簡単に理性をぶち壊すからね、厄介なんだよ」

「わかった…もういいわ…」

げっそりと私はため息を落とすと、隣を歩く彼から視線を外した。そう言えばルア…おいてきちゃったんだっけ? 絶対心配してんだろうなあ……いや、もしかしたら怒り狂ってるかも。

「ねえ、私そろそろ帰らないと」

「えーっ、なんでー? もうちよっと俺と一緒に遊ぼうよ」

遊ぶって…こんな夜中に、大学生じゃないんだから。

あ、でもこいつって年齢的には大学生で大人なのか…。

って私未成年なだけど?! 高校生を連れ歩くなんて余計まずいじゃん!

しかしそんな理屈がこっちで伝わるはずがない。私は頭を掻きながらため息をついた。

「ルアが心配してるわ。それに私、一応軟禁されてる身だし」

「いつそのまま攫っちゃおうか？」

「ば、バカじゃない？冗談もいい加減に…」

「冗談なんかじゃないよ」

突然耳元で囁かれ、私はびくりと震えて彼から距離を取ろうとした。しかしパシリと両腕を取られ、身動きを封じられる。

彼から目をはなしたのが裏目に出た…。いつの間に彼は私の背後に回ったんだろう。

頭の後ろで彼がくすくす笑う声が聞こえた。

ちよつと…ここ通りの真つただ中なんですけど！

心なしか人々が私たちを避けるように通っているように思える。

「イオつ！あんたいい加減にしなさいっ」

「アリス…俺、言ったよね？ここについた所有印キスマークが消えるまでは俺

のものでいてっ」

「き、キスマーク…？」

「そ。俺がつけたやつ。…これ」

「ちよ、ちよつとキスマークってなに…ふぁっ?!」

いきなりペロりと首筋を舐められて、私は思わず奇妙な声を出してしまった。

しかしさすがに彼はそれ以上の愛撫はしてこず、私がほんの少し身じろぎすると大人しく腕をはなしてくれる。

「やっぱアリスって相当感じやすいよね。今どきあんな反応してくれるこつていないよ」

「う、うっさい！とにかく何が何でもダメなものはダメ！私は帰ら

ないと……」

「帰したく……ない」

イオはそつと私の右手を両手で包み込み、口づけるかのように唇にもっていった。そのまま自分の頬へともっていく。彼の頬の熱がじかに伝わってきて、私はドキリとした。なんかいつもよりも……熱い？それにどこことなく赤いような……。

「俺のものでいてよ……アリス……」

切ない瞳で見つめられると、ぐらりと心が揺れそつになる。

帰る場所、というのはきつとフレイムの城で 同時に、もとの世界。

きつと彼はどちらのことも言っているのだと思う。自分のそばに置きたい、縛りつけて、がんじがらめにして……決して逃げないように。

だけど私は、彼の罫にかかるわけにはいかない。

「ごめん……でも私、帰らなきゃ……」

顔をうつむけているのに、彼の顔が悲しげに歪んでいくのがわかる。また、だ。また私は、彼を傷つけてしまった。

「そつ……か…… あは、なーんてね。冗談に決まってるじゃん」

突然の明るい声に、私は驚いて顔をあげた。

視界に入ってきたのは、いつものシニカルな笑顔。

として、用意された……彼の笑顔。

仮面

強く握っていた私の手をはなしてかわりに頭の後ろで組んでみせる。

まるで普通の高校生のような仕草だ。

「やだなあ、さすがに攫うなんてめんどくさいことはしないって。絶対ルアが地の果てまで追ってくるしねー」

「そ、そうね…」

「そんなに、困った顔しないで。ごめん、悪い冗談ばっか言ってる」

違う…。そんなこと、言わないで…。

罰が悪そうに笑いながら嘘をつく彼があまりにも痛々しくて、私は思わず彼の瞳から目をそむけた。

そんな私を見てイオはほんの少し悲しげに笑う。

「んー、じゃあせめてこれだけは受け取って」

「え…何？」

軽々しい口調のまま渡されたのは、リングの形をした銀色のピアス。一見すると太めの指輪みたいだ。ルビーやエメラルドといった目立ちそうな宝石はないが…中心に埋まってるのはもしかして、ダイヤモンド…？…はは、まさかね！

かなりシンプルな作りだが、紋様などは明らかに手のこめられているものだった。表面に彫られている文字は相当小さくて…よ、読めない。

「これ…」

「ん、ああ、作ったの」

「つ、作ったあ？！これを？！」

「うん。なかなかうまくできたと思うんだけど」

「うまいも何も…あんた何もんよ？！こんなの普通作れないって…」

「うーん…まあ俺、基本万能キャラだから？」

うわっ、なんかそれウザいって！んな都合のいいキャラがあったたまるか！

しかし考えてみれば彼が今までできなかったことなんてなかったように思える。何でもかんでも完ぺきにこなして…なんか僻んじやいそう。

私ははあっと息をつくくと、再びピアスへと目を走らせた。

「ねえ、これ…なんて書いてあんの？」

「んー？ないしょ。でもたいしたこと書いてないからあんま気にしなくていいよ」

と言われつつもすぐく気になるんですけど…。

しかし私の頬は月明かりを反射して光るそれを見ているうちに弛緩していった。それを見たイオも悲しそうな影を引っ込めてうれしそうに顔をほころばせる。

久しぶりに見た彼の無邪気な笑顔に私は驚きつつも、ほんの少しの幸せを確かに感じていた

……

I l o v e y o u , M Y A l i c e .

好きだよ、俺のアリス ……

f i n . . .

「ぴゃあああああつー！」

あー、こらアリス発狂するな！ピ、ピンクもピンクで追い打ちをかけるようにアリスに抱きつくな！

「フレイル様、大丈夫ですか？」

ああ、よかったルア…！始めて君の手が欲しいと思ったよ！

「なんかそれすつごく微妙なんですけど」

とにかく！なんだかアリスが変なことになってしまっただけ…。

まあ基本的にピンク猫のせいだと思うけど。ルアはこれをどう思った？

「どうって…まあ、癪ですね。何ですか、この差異。明らかにあのバカ作者はイオ彘肩してますよね」

というか君と違って扱いやすいんじゃない？ほら、君って中途半端にエロくて恥ずかしがりじゃん。

言うなればツンデレのツンとデレが5対5っていう非常に微妙な感じ。もっと言うなら至って普通の人？さらに加えるなら、なくても別に困らない存在？

「時々ほんと、泣きたくなるんです」

……しまった。ちょこつとした解説のつもりがいつの間にかルアを弄っていた…。

でもほんと、アリスが今使えない状態だしなあ…。あ、ルア、なんかアリスとイオが仲睦まじく…。

「あーっ！！こんの…イオっ！アリスからはなれるっ！」

……ついに一人になってしまった。ナレーターを残していちゃつく役者ってなんだよ。

ところで、さつきからはば空気となってる黒猫。

「……もうなんか、みんな俺のこと忘れてんよな…ぐすっ」

君は押しが弱すぎるからだよ。ほら、次出番なんだから体育座りで拗ねてないで…。

それでは、次はロキアリ編始まり

ません。

「はああっ?!なんで俺だけはじまんねえんだよ?!」

アリスがただい今ルア達に連れ去られて失踪してるからだね。まあ、頑張っつて探して。

ということ、ロキアリ編は次回。ちよつとさすがに僕も疲れた…かな。

それでは次回…お楽しみに!

「さわやかに挨拶して俺は結局後回しかよっ！」

ただいま徹夜続きで目が荒んでいる作者です。

あとがき…？そんなものは後でじっくり書きます。

とりあえず一言だけ。

自重忘れてたあああっ！　おい。

これからしばし旅行に行くてくるため、更新はありません。何とかしてその前に終わらせたくて…ごめんロキ君、君カット。

次回にはちゃんと出しますので…今はとにかく寝たい、です…ZZ

Z

長くなるため、前編と後編に分かれます。同時掲載されますので、ご了承ください。

第一幕三篇 2人で買い物?!ハラハラデレデレシヨッピング
フレアリ ロキアリ編

何かがおかしい。

私は冷房が完備されていて涼しい部屋にいるのにも関わらず、ダラダラと汗を流しながらひたすらそう思った。人はこれを、冷や汗と呼ぶ。

私が冷や汗を流すのも無理はない……と思う。何故なら目の前にここにこと笑う天下の女王様を据えているのだから。それも、もれなく巨大な鉞を添えて。

「い、今なんて……？」

なにかとてつもなく恐ろしい言葉を聞いた気がする。お前死刑だとか、首よこせだとか、フレイムなら冗談に聞こえないこと……。うわ、鳥肌が立ってきた…。

「だから、今日1日外出を許可しようと思うんだ」

外出許可。がいしゆつきよか……。ガイシュツキョカ……。えーっと、変換ボタンはどれだっけ？

誰か辞書持ってこい辞書。ガイシュツキョカってなんだっけ？
衛兵！衛兵を呼んでまいれ！春先に女王様にご乱心なさられた！

……乱心したいのはこっちだ…。

私はすでにいっばいっばいの頭を抱えながら硬直していた。フレ

イムはいつまでも黙ったままの私に苛立ったのか、ほんの少し黒い笑顔を歪めると血のように赤い瞳で私をねめつける。

「嬉しくないのかい？この僕がせっかく許可を出してやってるのに？」

他の人がこのセリフを言ったら高慢すぎて呆れることだろう。しかしフレームだからこそ、この言葉は許される。なんて言っただって彼は、世界でいちばん黒くて残酷で生意気で我儘で恐れ多いガキ…失敬、畏れ多い“女王”なんだから。

私は我に返ると、あわてて姿勢を正した。彼の機嫌を損ねると、どうなるかわかったもんじゃやない。許可を取り下げられるか、もしかしたらまた鉞をもって追いかけられるか…。

…やめよう。笑えない。

「い、いいえっ、そういうわけじゃないです！ただ、どういう心算かと…」

「どういう心算？君も過ぎた口をきくようになったね。僕の意向に何か文句でも？」

彼の口元に浮かぶ冷笑を目の当たりにした私は背筋に何か冷たいものが這うのを感じた。それはきつと彼が一番似合う笑みで…同時に人を魅せておきながら、いとも簡単に壊すとても残酷な笑み。

何度となく見せつけられたその笑顔が、彼の機嫌の悪さを語っていた。

よく見れば目の下にはくつきりとした隈が残っている。寝ていないのかしら…。

だとしたら、もっと不可解だ。

寝ていなくて機嫌が悪いのなら、なぜ彼はわざわざ私を呼びつけて

こんなことを話しているのだろう…。

「わから、ないんです」

「なに？」

私は纏わりつく彼の冷たい視線に耐えながら、緊張で震えそうになる声を絞り出した。

それでも彼の瞳を直視することはできず、うつむいたまま続ける。

「あなたは、私をここに閉じ込めているでしょう？ “アリス” が必要だから…。なら、なんでこんな、私が逃げるかもしれないのに…」
「……何を自惚れてるか知らないが」

突然頭上から呆れたような溜息が聞こえてきて、私は思わず顔を上げた。赤い宝玉のように大きな瞳と、刹那的に目が合う。そこには先程までの物騒な光はちらついていなかった。

気だるそうに重心を後ろへやり、肘掛に右の肘をつく。憂鬱そうに息をつく様子が妙に様になっていた。

「僕は君を必要としているわけじゃない」

「へ？」

「“アリス”なんて別にここにいなくてもいいし、他の連中と言って僕は君に執着する気にもなれないし……第一、僕は娶るならもうちょっと大人しくて美人な女を、と思っているしね」

……おいちょっと待て。最後のやつは聞き捨てならんぞ。

私はむつと唇を尖らせ頬を膨らませる。無論、可愛い子ならともかくこうした仕草が私に似合うとは到底思っていないが。

「どうせフレイム様はもてますからね。清純可憐な女の子なんて星

の数ほど寄ってくるでしょうけど。大人しいっていうなら年下ですか？美人なら年上ですか？」

嫌味のつもりだった。しかし予想に反してフレイムは身を乗り出し、真剣に考え込むように手を組む。

「いや、この際僕は王妃を正式に決める必要はないかと考えている」「へ？何ですか？」

「よく考えてみなよ。この国が崇拜しているのは“女”王なんだ。今は僕しか前女王の血を継ぐ者がいないから誰も反対しないが、もし僕が妃を召したらそれを女王に仕立てようとする輩が現れるかもしれない。そんなことになったら国内が混乱する。くそっ…せっかく“アリス”を手に入れて安定したと思ったのに…っ」「ちよ、ちよ、ちよっと待った！」

いきなりパラレルというか小難しいというか…ずいぶんと飛んだ話をつらつらと聞かされて、私は慌てたように彼の話を遮った。遠い目になっていたフレイムは宇宙の果てから引き戻されたような顔をする。

「なんだい、アリス」

「ふ、フレイム様…お言葉ですが。結婚話に何でそんな小難しい事情を持ち出してくるんですか？好きな人と一緒にいる…それじゃあだめなんですか？」

「はあ？」

彼の顎が外れそうになるほどがくんとずり下がった。うおいつ、可愛いお顔が…。

私は彼の瞳に浮かぶ驚愕の光にそっと溜息をつく。

悲しいかな、これが世界の違いという奴か…。私はごく当たり前の

ことを言っているつもりなのに、なぜかオヤジの顔した人面犬がムキムキの人魚でも見たかのような奇怪な視線を向けられている。

心の中で盛大に嘆く私をよそに、フレイムはフレイムで重々しいため息をついた。

そんなご臨終寸前の患者を見ているお医者さんのような溜息つかなくつつたつていいじゃないですか。

「いきなり何を言い出すかと思えば…そんなこと、僕ができるわけないだろう？僕はこの国の主だ。それなりの責任を背負ってる。君と一緒にするな。君みたいに…：勝手気ままに行動できるわけない」

「…：の割にはかなり自由に振舞っているような気がしますけど」「ちよつと、今何て言っただい？ぼそつと毒吐いてない？」

「いえいえ。でもフレイム様は確かまだ…：じゅう…：に？」

「15だ！小さいとか言うな！」

「言つてませんけど…：」

大体普段からどでかいマルスの隣にいるレストを見慣れているから小さくて豆粒みたいだなんて思わない。

まあ確かに…：平均身長よりはちよつと下回るかな、と思うけど。だけど可愛いからそれでいい。むしろそのまま小さいままで…：なんて言ったら首が飛びそうだけど。

私は心なしかむきになっっているフレイムを見ながら、苦笑する。いつも冷笑を浮かべて悠然と振舞っている彼だけけど、よく考えてみれば私よりも年下なのだ。子供らしくないはずがなかった。

「15ならなおさら、そういうこと気にしちゃいけません。将来もしかしたらそういう生臭いことを考えるかもしれないですけど…：まだまだ甘えていい頃だと思えますよ？」

「甘える？」

思いもがけないほど冷たい声が返ってきて私は戸惑ったように彼を見上げた。

フレイムの玉座は高いところにある。そのためいつも見上げる私の首はずきずきと痛くなるのだが……。

それは、私たちを見下ろす彼も一緒だったら？

彼の顔には、先程までの面白がるような色は残っていなかった。

今の発言を不快に思ったのだろうか…？いや、それにしても表情が抜け落ちている。

どうしてだろう…今の彼の瞳は、怒っているというより…悲しみの光が浮かんでいた。

「フレイム、さま…？」

「ほざくのもほどほどにしる。もう用件はすんだ。早く出てけよ。お茶会でもなんでも行くがいいさ」

「ちょ、ちょっと待って！」

「出てけっ！！」

ひゅつと空を切る音がして、私はようやく目の前の怒り狂う少年が鉞をもっていることに気がついた。

その銀色の光と彼の燃えるような瞳の赤色にぞわりと鳥肌が立つ。

それが怖いからなのか　それともただたんに綺麗と思っただけなのか、この時の私にはわからなかった。

ほんの少しふらついた足取りで私のほうへ寄ってくる。その鉞で私の首を切り裂こうというのか、高々と重いはずの刃を振り上げた、その時。

「何を騒いでいるんです

アリス?!」

騒ぎを聞きつけたらしいルアが私の顔を見るなり血相を変えて私のほうへ駆け寄ってくる。いきなり私の体をかばうように抱きあげたルアに戸惑うが、目を向けられない。

私の視線はただただ、悲しみに揺れる赤い瞳に引きつけられていた。

ガキンッ

鉄と鉄が激しくぶつかり合う音に私はようやく我に返る。

みると、ルアが胸から取り出した黒い銃で鉞の大きな刃を受け止めていた。腕にかかってくる重みのせいか、彼の横顔には苦悶の表情が浮かんでいる。

「くっ……アリス、無事ですか」

「ぶ、無事って……あんたこそこんな……」

銃なんて、近距離戦で使うものではない。しかもついこの頃わかったことなのだが、この世界の銃は相当改良されていて早撃ちが可能なのだが、その分殺傷力が低下している。素早い相手……例をあげるなら紫のアレとか……そういう奴なら結構あっさりと回避できるみたいだ。

至近距離の銃。しかもそれは今相手を撃ち抜くのではなく防御のために盾として用いられている。

明らかに不利な状況に私はさっと青くなった。

ギッ……

それは鋼のこすれ合う音だったか、それともルアが強く奥歯を噛みしめる音だったか。

判断するより先に、ルアが怒りを必死で抑え込んでいるような声を絞り出す。

燃え盛る紅蓮の瞳と清涼な水を思わせる碧の瞳とがかちあった。

「滑稽なものです。一国の王ともあるうものが暴走するなど。僕はいつ貴方にそんな教育を施しました？」

「……そこをどけ、ルア。今僕は腹の虫が最悪なんだ。邪魔するなら、斬る」

漫画ではよく言われるセリフ。しかしそれを自分の耳で聞けるとは思わなかったよ……。……聞きたくないけど。

明らかに狂気を帯びている彼のセリフを聞いて、ルアの纏う怒りが増幅した。白い耳をピンとたたせながら足を踏ん張りなおす。

「なら斬ればいいでしょう!!」

「なっ……」

何を思ったか、ルアは両手で持っていた拳銃から右手をはなすと、抑えつけるように鉞の刃を掴んだ。

いつもつけている白い手袋に刃が食いこみ、ぷつりとビニールに穴が開くような小さな音がする。

じわりとゆっくり滲んでいった赤い染みに、私以上にフレイムが動揺した。我に返ったようにびくりと震え、恐怖の入り混じった瞳をルアの青の瞳に合わせる。

「斬って……貴方はまた自分のものを失うつもりですか？」

「……あ……」

「いったはずです。貴方は感情的になってはいけません。フレイム様、貴方はこの国の“女王”なんです。もうそれくらいの自覚をもつてもいいでしょう、餓鬼が」

「餓鬼、か……。そうかも、しれないな……」

しん、と水を打ったように静かになった謁見の間に、どこか自嘲の響きを含んだフレイムの哄笑が響いた。

怖い、怖いのに…何故か悲しい笑いに私はルアの腕にすがりついているのも忘れて呆然とフレイムを覗き見る。私と目があつた瞬間、彼は何か苦いものでも飲みほしたような顔になった。

私がおうとする前に、彼のほうから背中を向けられてしまう。

「出て行って、くれないか」

「フレ…」

「ルア、連れて行け」

有無を言わせない冷徹な声に私は息を呑んだ。ルアは何も言わずに頷くと、私の肩に手をまわして「こちらへ」とその場を退出しようとする。

「甘えることのできる人なんて　とうに消えた……」

彼に引かれてドアを開ける寸前、背中はずっと後ろで小さく小さく、呟くように言葉がこぼれた。

「フレイム様は」

ルアは私の部屋まで案内すると、着替えをするためドア越しでポツリポツリと話し始めた。

私は赤を基調とした軽やかな服にそでを通しながら、必死で彼の言葉に耳を傾ける。

私の言葉でフレイムが傷ついたかと思うと…なんだか複雑な心境だった。

「フレイム様は、10歳の時にご兄弟を全員斬り捨てました。…正確にいえば彼が手を下したのは第一皇子と第二王女だけですが。とにかく、一日で彼はご自分の親族を前女王以外亡くされたのです。その話は以前聞かされましたよね？」

「う…ん」

確か、フレイム様との初対面…いや、第二回目の対面の時のことだ。あのときは話す彼自身動転していて私にはよくわからなかったけど…改めて聞くと、随分と悲しい話に思えてくる。彼はどんな気持ちで兄弟に手をかけたのだろうか…。

「そして彼は自分の母親をも殺めた…いえ、それ自体を責める気はないです。この世界はそんなもんですから…。ですが、あの人は…多くのものを失いすぎました」

「じゃあ、彼の家族はもう…」

「ええ、一人もいません。それが“女王”の掟ですから。親族はすべて葬らなければならぬんです」

なら、もしかして ……

私は確信にも近い思いに気づいてずきりと痛む胸を押さえた。フレイムの、空気にとけて消えていってしまいそうな小さなつぶやきが脳裏に浮かぶ。

甘える人なんて、…信頼できる家族なんて、もう一人もない。だって、彼がすべてその手で壊してしまったのだから。

そんな彼に、私の一言はどのように響いたのだろう。亡きものに、「甘える」だなんて…。

「フレ임様は今までずっと、女王として生きてきました。それは役目だからであり……また“フレ임”という自分から逃げるためでもあったんでしょうね。だから、彼に自分らしく生きるというのは、何よりも過酷な言葉なんじゃないのでしょうか…」

意識しているのでもないのに、ルアの淡々とした言葉は私の胸のずつと奥に突き刺さっていった。

パチンと、音を立てて最後のボタンが留まる。私はだいぶ長くなった黒髪を後ろでくくって、ドアノブに手をかけた。

ドアを開けると、ちょうど正面にルアの気遣うような優しい笑顔があった。ほんのわずか嬉しそうにも見える。

「そういえば外出許可が出たんですよね？どうです、今日は散歩にでも…」

「ごめん、行かない」

彼の笑顔が固まったのを横目に見ながら私は早足で廊下をかけていった。放置したルアのことをほんの少し可哀そうに思うが、足は止めない。

向かう先は、決まっていた。

自分のすべきことも。

「デートしましょうフレ임様！私とお買い物しましょう！ね！」

「ハア？」

ついでに「頭おかしいんじゃないかあんた」なんてつきそうな表情

に、私は思わず嘔き出した。

我ながらおかしな発言だったと思う。恥ずかしい気もするが、フレイムの意表を突かれたような顔を見れたことで満足だ。

口を極限まであんぐり開けた状態のまま、フレイムは何度となくパクパク口を開閉する。相当驚いたようだ。

「……ちよつと待った。頭おかしくなったのかい？この暑さにやられたのか…。ルアに診てもらえよ」

「実際言われると結構傷つくんですけど、それ」

なんて淡々としたやり取りなんだろう…。まあ、見るからに忙しそうで外にも出たことないって顔してるけど。

うん、でも忙しい日にこそ、気分転換は必要だと思う。たまには外の空気を吸わなければ…彼が外出している姿なんて出会った時以来見ていない。

「健康にいいですよ！さあ、行きましょう、すぐ行きましょう！」

「ちよ、ちよつと、いきなり言われても…あのだな、これから僕は業務が…」

「ルアに任せときましようってば！あいつ散歩行くなって言ってたし、それほど暇なんでしょうよ！」

「いや、まあ確かにそれまでできるが…」

「大丈夫です！彼ならきつとお勤めを立派に果たしてくれるでしょう！」

「何なんだその子供を見守る親鳥みたいな目は！」

戸惑いながらも反論する彼は、いつもの狂気を帯びることもなく、先ほどよりもよほど人間じみていた。

怒号を返しながらも彼が時折見せる子供らしさに、私は顔を綻ばせてくすくすと笑う。それが余計癢に障るのか、フレイムの声がだん

だんと熱を帯びていった。

「だから、僕はどこにも行くつもりはない！」

「でも休日くらいはしっかり休んだほうがいいです」

「ちゃんとさつき仮眠を取った！」

「うーん、そうじゃなくて…確かに身体も大事ですけど、それよりも精神的な休みが必要ですよ」

「……どうということだよ、それ……」

ピクリと、彼の右頬がつりあがる。それが笑おうとしているのではないことはすぐに分かった。私はあわてて玉座に繋がる階段を数歩駆け上がって、手を伸ばし嫌がる彼の額に手を置く。

彼の額はぞつとするほど冷たかった。死体を触ると、こんな感じなのだろうか。

「大丈夫、ですか？」

「……熱は、ない。ただ時々、眩暈がする」

一瞬びくりと震えた彼だったが、すぐに無然とした表情をつくと振り払うように私の手をどける。

「疲れてるんですね……」

「僕もそう思った。だからこの頃はちゃんと6時間以上睡眠を取るようになっている。だけど、一向になおる気配はないんだ」

風邪、ではないようだった。だったらやはり、精神的なものだろうか。ルアから聞いた話だと、私がこの世界に来てからさらに塞ぎ込みがちだと聞いたし……。

うしっ。私は決心したように握りこぶしをつくる。そんな私を不審げにみていたフレームは、次の瞬間その瞳を凍らせた。

「とてついで、やっぱりデートしましょう！」
「……どこからどうつながってそうなるんだ！」

結局30分にわたる論争の末、勝利したのは私のほうだった。

「わー、すごいです。もうなんかもはや誰って感じで」
「……それはどうも」

一応返答が返ってくるが、さっぱり嬉しそうじゃない。やはりまだ先程のことを根に持っているのか、口はへの字に曲がったままだ。フレイムは、完璧すぎる扮装をしていた。いつも綺麗に梳いてある赤い御櫛が今やぞんざいに後ろでまとめられている。清潔そうな白い服も、ホームレスが来ているような茶色っぽいぼろに変わっているし、何よりその顔だ。すべすべとした肌にはすすやほこりがついていて、瞳にはカラーコンタクトがしてあるのか、色素の薄い緑色に光っていた。

初めてであったときのフレイム様にそっくりだ、とも言えない。その時でさえもつと綺麗だったのに、どうして……。私の瞳に映った疑問に気づいたのか、フレイムははあっとため息をつくと、渋々ながらも口を開いた。

「ここまで不潔な格好をしていると、誰も僕を女王とだなんて思ったりしない。どこかの下僕…小奇麗にしたアリスと並んでいると、アリスの犬に見えるんだらうね」

皮肉そうな笑みが彼の頬を持ち上げていく。心中、プライドの高い彼はそう見られることをひどく嫌っているのだろう。

「い、犬だとか奴隷だとか…そういうのには、見させないように努力します」

声を絞り出すように言った一言は乾いた笑い声によって跳ね返されてしまった。

「いいよ、別に気にしなくて。そう見られること自体はそこまで嫌いじゃないから。下に見ていたものに踏みつぶされる…ふふ、それはそれで楽しいよね」

「いや、もう全然まったくさっぱりわかりません、ハイ」

本当にいい性格をしていると思う。常々思うが、この世界のDS率はどこか狂ってる。私もSだと過信していたが…まだまだ甘かったようだ。

「ただ…」

再び彼の瞳が不穏な光を帯び始めて、私は思わずたじろいだ。いつもの赤い瞳ではないせいか、違和感を伴った恐怖を感じる。

「女装した時なんて、最悪だった」

「じよ、女装…したんですか…」

変だ。あれほど自分の可愛らしい容姿を嫌っていたこの人が、わざわざ自分から女装…なんて。

いや、でも実際清潔好きの彼が今現在こんな姿でいるんだから、お忍びする者の宿命さだめ、ともいえるのかもしれない。

それにしても…みてみたいなあ。絶対可愛いよね。うん、たぶん私なんかよりよほど可愛い。

この世界では珍しい話、フレイムはとても愛らしい顔立ちをしていると思う。何故か美形男性率が多いこの世界だが、実は女性の人口のほうがわずかに男性を上回るらしい。

ならなぜ男性としか遭遇しないか。それは単にこの世界の多くの女性が引きこもり症だからだそうだ。

それでも数回、目を見張るほどの美人を見かけたことがある。しかしそれでさえ女装したフレイム様には敵わないと思う。

女装、かあ…。

「……やっぱしてほしいなあ…」

「は？何を？」

「いえ、こちらの話です。続きをどうぞ」

「……どうせくだらないこと考えていたんだろうけど。女装だったらもう絶対にしないからね！」

「ええーっ、そんな勿体ない……」

「絶対にしない！ルアにそそのかされてした時なんて…うっっ、思い出しただけで鳥肌が立つてくる。ルアには可愛いを連呼されるし、帽子屋たちには白い目を向けられるし紫猫には爆笑されるし…果てには一般人にまで女に間違えられたんだ！……しない、もうしない」

念仏のように「女装しない」を繰り返しているフレイムを見ていると、さすがの私ももう何も言えなくなった。

うーん、やっぱ男性側にしてみたたら嫌なことなのかな、可愛いって。

「いいですか、アリス。とにかく襲われたらまず大きな声をあげる
ことー」

「はいはい」

「決して一人で立ち向かおうなんて馬鹿で愚直であほで無謀でパッパラピーなことしないで下さいね！」

「なにもそこまで言わなくても……」

「とにかく、大声をあげるんですよ、大声！」

「わかったわかった、近くの人を呼ぶのよね」

「いえ、僕を。地の果てまで追いかけていきますから……！」

「むしろストーカーが誕生するので遠慮してください」

こいつが相手だと冗談にならなところが余計怖い。

「ああ、もう……僕の目の届かないところにいると思うと、胸が張り裂けそうです……」

本当に苦しそうに顔を歪めるルアを見て同情しそうになるが、チラリとでもそのようなことを言ったらそれに付け込んで一緒に来たがるのだろうか。

私が唇をとがらせながら「仕方ないじゃない」と言っていると、今までずっと黙っていたフレイルムが呆れたような溜息をこぼした。

「まったく昼間っからイチャイチャして……僕には何も言わないのか、ルア」

……放置したから拗ねたのだろうか、彼はどこか不機嫌そうな顔でルアに噛みつく。対するルアも、腹黒さ炸裂の笑顔で答えた。

「これは失礼しました。フレイルム様、襲わないように気をつけて下さいね？」

「……襲われない、じゃないのか」

「はい。不届者に会ったからといってそう簡単に手を下してはいけ

ませんよ。死体の処理は僕がやるんですから」

「……もういい」

ルアは、心中ではフレイムのことを心配に思っているのに面と向かって話すときは至って冷たく接している。それはフレイムも同じだ。どうしてお互いを大事に思い合っているというのに、こんなにもぎこちないのだろう。もっと素直になればいいのに。ルアも…フレイムも。

だからといって私に何ができるわけでもなく、ただただすれ違う彼らの会話を齒がゆそうに聞いていただけだった。

ルアと別れを告げて、街までてくてくと歩いていた時、沈黙に飽きたのか思い出したようにフレイムが聞いてきた。

「そんなことより一体「デート」ってなんだい？美味しいのか？この前ルアも言ってたんだが、正直あいつの説明じゃよくわからなかった」

「……何の冗談ですか？」

きよとんとした顔でエメラルドの瞳を丸めるその姿に、一瞬固まり、すぐに思考をつなげる。

うん、間違いない。これはからかっているんだ。だってこんなにも頭が良くて将来のことも考えてる（さっきのは行きすぎだけど！）彼が、恋愛の初歩の初歩である単語を知らないわけがない。

しかし青ざめていく私とは相反してフレイムはますます不思議そうな顔をする。なんで私がそのような顔をしているのか、さっぱりわからない様子だ。

頭の中をふつと一つの可能性が廻った。たとえば、彼はひたすら結婚という二文字しか考えていなくて、その過程である恋愛やらお付き合いのことになど一切気を配っていないのだとしたら……。うん、すごくありうる。というかそれ以外考えられない。

「ほ、本気で知らないんですか?!」

「何だ、何かの行事か?」

「いや、まあ確かに行事といえば行事だけど…プライベートな行事?」

「なんだと?近頃の一般人は行事にまで私情をもちこんできたのか…少し取り締まる必要があるな」

「い、いえそういう意味ではなく!なんでしょう…好きな人と二人で行くお買い物、みたいな…」

「買いだしか…そんなものは衛兵にでも任せておけばいいだろう」

「だからそうじゃなくて!二人でいることに意味があるんですってば!」

「ふむ…だったら犬を連れた散歩みたいなものか」

か、会話が全くかみ合っていない…!

本気なのか冗談なのかも定かにならないまま必死に説明した結果、彼のデートに対しての認識は「異性と二人きりでお買い物やテーマパークなどに行き、交流を深める行為」というものになった。間違っただけではないのだが、まるっきり色気がない。

「交流を深める…か」

「まあ、デートによって仲良くなるカップルはいますよね」

その後すぐに別れ話を切り出すカップルもいるけど、とはさすがに言わなかった。間違った認識をこれ以上持ってほしくない。

ふと、母子の家族連れがフレームの横を通り過ぎる。小学校低学年

くらいの少年が笑いながら母親の腰にくつつき、母のほつもそれを嬉しそうに受け止める、なんとも和やかな雰囲気だった。

「……僕も」

小さなつぶやきを耳にし、私は家族から目をはなしフレ임을みる。フレイムは、羨望とも嫉妬ともつかぬ苦い眼差しで二人をじっと見据えていた。

「僕も、母上とデートをしていれば、少しは母上に近付けたのかな」

「」

何も、言えない。

私はぐつと唇をかみしめながらキリリと痛む胸を押さえつける。何も言えるはずがなかった。ここでルアがいたのなら何か適切な言葉をかけてやれるのだろうか、私は事情の一部しか知らないただの部外者だ。何一つ、彼にかける言葉さえ見つからない。

ただ、私にできることは…。

私ははじかれたように身体を乗り出すと、すぐ横にあったフレイムの手をぱつと掴んだ。驚いたようにフレイムはこちらに視線を向ける。

「アリス？」

「フレイム様、アイス食べましょう、アイス！」

「あ、アイスう？」

一瞬、アイスというものすら知らないのではないかと不安になるが、どうやらいきなり言われて戸惑っていただけのようだ。数拍遅れて彼の瞳に光が戻ってくる。

だけど素直じゃない彼のことだ、時間がたてばまた私の提案を拒むだろう。そう考えた私は素早く彼の手を引っ張って近くのアイスクリーム売場へと急ぎだした。
後ろの母子は不思議そうにこちらを見て、また何事もなかったように仲良く歩きだす。

「えっと、何がいいですか、フレイム様」

「だから僕はいららないってば」

「そう言わずに。ほら、お金なら心配せずに、ね？」

「いつの間にそんな大金……」

「ルアのですから」

「ルアのかよ！」

案の定、アイスクリーム売場についた時にはすでに彼はいつも通りの冷たい返答を私によこしていた。売り場のおじさんが苛々と私をせかす。

「お譲ちゃん、困るよ。早くしてくれないとこっちも商売なんだからね！」

「あつ、すみません……。じゃあストロベリー2つで！」

「アリス！」

非難するようなフレイムの声を無視して私はストロベリーを2つ受け取り片方をフレイムに押し付けた。

「これだけでいいですから、食べて下さい。そしたらすぐに帰りますから」

「……仕方ないな」

はあつと何ともやりきれないような溜息をもらしながらフレ임はピンクに彩られたそれを受け取る。まだ涼しい季節、席はがら空きだった。

私は相変わらず不機嫌そうな顔でスプーンをアイスに突き刺す彼をちらちらと伺う。それに気づいたのか、フレ임はわずかに視線をあげてこちらを見てきた、

「どうかしたの？」

「いえ…ただ、ストロベリーでよかったでしょうか？バニラとか、オレンジとか、チョコとか…」

「僕は赤色が好きだ」

だったらなおさら、ラズベリーとかのほうが良かっただろうか…。俯く私を見て、言葉が悪かったと判断したのか、若干恥ずかしげに視線をそらしながら呟くような小さな声で言った。

「だから、ストロベリーも嫌いじゃない」

私は一瞬何を言われたか理解できずにきょとんと不思議そうに彼を見つめ、急に恥ずかしくなって顔を赤らめる。

やっぱりフレ임様は可愛いなあ…なんて思ったりして。普段は見れない彼の顔が見れて、嬉しい。でもそれ以上に、今までの自分の言動が妙に恥ずかしかった。

いきなりデートに誘っちゃったりして…なんて節操のない。

「アリス」

「な、何でしょう」

「ここ、アイスついでる」

トントンと、自分の唇の横をフレイルムが指さす。確かに何か冷たい感触が。私はティッシュを取り出して吹こうとポケットを探った…
のが、間違이었다。そのまま素手で取ってしまったえばよかったのだ。
声を出す暇もなく、フレイルムは身体を乗り出して唇の横についたア
イスクリームをぺろりと舐め取った。
ドアップに移される端正な顔。
まるでキスされているような体勢。
ほんの少し唇に触れる…熱い、舌。

……舐め取った？

「あああああ つー!!」

「ぎゃああつ!!」「ハア？」

突然横で絶叫が聞こえて私は色気のない悲鳴をあげてしまった。もちろん、私の絶叫ではない。……絶叫する前に絶叫された感じだけど!

私は突然の絶叫にバクバクと早鐘を打つ心臓を抑えつけながら睨みつけるようにしてそちらに目を向けた。あまりにも心臓に悪い。しかし、すぐ隣で死にかけの金魚のように口を開閉させるその顔を見た瞬間、文句を言う気が失せた。というより、驚きのあまり顎が外れた。

「あ、あ、あ、アリス…っ」

「黒猫？なんで君がこんなところにいるんだ？」

黒猫…ロキの顔を認識した瞬間、殺意とまでは言わないが、不穏な影がフレイルムの瞳をよぎる。それはロキのほうも同様で、フレイルムが眉をひそめた瞬間戦闘態勢に入って威嚇するように喉を鳴らした。

「お前：誰だ？」

ロキにはどうやらフレイムの変装が見破れなかったらしい。それも無理はない、私だってパツと見ではわかりそうもなかったのだから。それでもその不潔さに顔を歪めたりはしなかった。ただただ敵意に満ちた目で自分の知らない少年を睨みつける。

「アリスに、何しやがった」

「……男の嫉妬は見苦しいよ」

そんなロキとは対照的にフレイムはひどく落ち着いた様子で唇の端に冷笑を浮かべた。そのことが逆にその場の空気を悪化させていることを知っていたの行動だろうか。

しかし凍りつくような冷たい視線を投げかけられた瞬間、ピクリとロキの体が既視感を感じたように震えた。

じろじろと無遠慮にフレイムを観察して、さらに警戒心を高める。

「まさか：お前、女王か？」

「ふふ、気づかれちゃったか」

どこか楽しげに、それでも瞳には静かな炎をたたえたままフレイムはくすくすと笑う。そのあまりにも場違いすぎる笑い声にロキは気味が悪いとでもいうように顔をしかめた。

「こんなところにそんな恰好でなんて：気でも触れたか」

「失礼だなあ。僕だって君らと同じ、ただの“カードもち”だよ？
常に城にこもってなきゃいけないと決まってるんじゃないし」

随分と砕けた口調で話しながらアイスを舐めるフレイムに戦意はないと判断したのか、ロキは拳を握りしめたままわずかに警戒を解い

た。フレイムは華奢な体格に相反して、その実かなりの実力の持ち主だ。イオと同等…か、それ以上だとだいぶ前にルアが話していたのを思い出す。

この世界の住民のことはいまだによく知らないが…ルアやフレイムによると、イオに比べればロキは“雑魚”だそうだ。到底ロキに勝ち目はなかっただろう。

「でもま…今日はもういいかな。十分楽しめたし。いいよ、そいつ持ってたも」

「は？へ？はああ？」

そいつ、という言葉と同時にピンと張られた親指の先にいるのは…私。今まで傍観者の位置にいた私は突然事態に巻き込まれて変な声を出してしまう。

物扱いされたことに憤慨する前に、彼は席を立ってしまった。自分のアイスと、ついでに私の手からアイスをもぎ取って。

溶けだしたアイスが私の手に付着しているのを見て、フレイムは一瞬瞠目してからそれから悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべる。

その笑みに本能的に身を強張らせる私をいいことに、グイツとアイスのついた右手を自分のほうへ引き寄せると、ぴちゃりとわずかな音を立ててそれを舐め取った。

赤い舌の、思わぬほどの熱にびくりと私の体が反応する。次いで、カアアツと私の中で熱い何かがこみ上げてくるのを感じた。

「それに、美味しかったし」

「なっ…」

何するんですか！

そう文句を言おうとした、次の瞬間。

ぶちっ

隣で、ぶっとい何かがぶちぎれる音を、確かに私は聞いた。うん、冗談と擬声音とか空耳とかじゃなくて…マジで。

ぶわりと、音でもしそうな勢いですぐ隣から殺気を感じて私は文句の言葉も忘れて喉をつまらせる。

「んの野郎…っ」

背筋も凍るような殺意の塊と同時に、銃声が店内に響いた。しかしフレイムの体はすでに私のそばから離れていて、嘲るような笑みを浮かべながら華麗に銃弾をよけていた。離れたとはいえ、こんな至近距離の銃弾をよけるなど、とても人間業じゃない。改めて感服させられるとともにこちらも銃を乱射したい気分には陥った。

「それじゃ、僕は先に帰ってるから。日が暮れるまでに戻ってきてなよ。ピンク猫の相手するのは面倒だ」

「は、ハイ…つてえええっ?!ふ、フレイム様…っ」

「じゃあ、またね、アリス」

あまりにもあっさり切り出された別れに焦燥などを感じる間もなくただただ彼の背中を眺める。その背中にもう3発銃弾が打ち込めるが、何の秘術か、狙いは正確なのにちっとも当たらない。

ついに、弾丸が切れた、と同時に私は我に返りフレイムの背中を追おうとした、瞬間。

思わぬ力で腕を引っ張られて私の体はほとんど抵抗なく後ろに転倒した。甘いコロンの匂いが染みついた胸が私の頭を間一髪で受け止める。

それでも急に強い力を入れられたせいで腕がちぎれるほど痛かった。

「いつ…たあつ…！さつきから何すんのよ口キっ！！」

「っ…わ、悪い…」

「黙ってれば発砲するわ腕引つ張るわ…いい加減にしてよっ！！」

「それは、お前がっ…！！…もう、いい…っ」

ぐっと、ほんの少し腕に力を入れられて私は思わず小さな悲鳴をあげてその腕を勢い良く振り払った。あまりにも至近距離だったため、彼を突き飛ばす形になる。

腕を思いつきり振り上げてから、ようやく私は彼の顔を認識した。

「あ………」

おもわず唇の間から後悔するような声が漏れる。

どうして…。痛みで泣きたいのは私のほうなのに…。私のはずなのに。

なのに、なんで私なんかよりもよっぽど泣きそうな顔をしているの…？

「わ、私、もう行かなきゃ…」

私は、意気地無しだ。すぐ近くでこんなにも傷ついた人がいるのにそれを見捨てて目をそらすようにしている。

自分が傷つかないように、相手を傷つけてる。意気地無しで、卑怯で、最低だ。

しかし、逃げることは彼が許さなかった。

今度は先ほどよりもよっぽど弱々しい力で、彼は私の腕を掴む。

「い、くな…いく、な、あり、す…っ」

それは、そう…まるで子供が泣きながら縋りつくよう。弱い力なのに、力づくで押さえつけられるよりも束縛される気分になるのはなぜだろう。

私は自分よりもずっと背が高い彼の背中に戸惑いながら触れた。宥めるようにゆっくり背中をさする。

ロキもそれを拒まず、私の体を抱きしめ返してきた。耳元で「行くな」と唸るように呟きながら何度も弱いのに強く感じる力で私を掻き抱く。

フレイムの気配がどんどん遠ざかっていくのがわかったが、私はもうそれ以上追おうとしなかった。もともと外出禁止令がとかれていたのだから、大丈夫だろうと軽く考える。

私には結局、涙を流さないまま縋りつくロキが落ち着くまで背中をさすることしかできなかった。

時間がたって解け始めるアイスを二つ、両手に持ちながらフレイムは彼には珍しく辟易していた。さすがにこの涼しい季節、アイス二つはお腹にきつい。

捨ててしまおうか。そんな考えがふとよぎるが、フレイムは首を横に振って即座に否定した。

せっかく貰ったものだ。捨てるのはあまりに失礼だ。

(それに…)

ぺろりと、自分のアイスを舐めながらフレイムはふと可笑しくなつてふっと笑う。

感傷に浸る自分なんて、何年振りだろう。あまりにも久しぶりで滑

稽にさえ思えてくる。

アイスなんて、子供の時以来だ、なんて。

一度母に手をひかれ近くのアイスクリーム屋までお忍びに来た。その時に買ってもらったのが、ストロベリーアイス。

もうその味すら忘れてしまったのにな……。たった一度の思い出なんて、あの時の自分は幸せすぎてすぐに忘れてしまった。

「おにいちゃん、そのあいすなにあげー？」

くいつと、袖をひかれてフレイムは不本意ながら足を止める。見ると、そこには5歳くらいの少年の無邪気な笑みがあつた。

先程はその笑顔に殺意がわいたが、今はなぜかつられて笑いそうになる。

「んーっとね、ストロベリーだよ」

「すと、べ…?」

「イチゴだよ、イチゴ」

「いちごー!」

ようやく言語が理解でき、パアツと子供の顔に明るい笑顔が咲いた。そのあまりに素直な表情にフレイムは苦笑する。まるで昔の自分をそのまま鏡に見ているような感覚だ。

少年は何がすごいのか分からないが、「すごいね」と繰り返す。フレイムはほんの少し首をひねり、その子供の瞳に映るもの欲しげな色を読み取った。

自分も食べてみたいのだろう。だがそれを言うには母からしつけられているのか、遠慮せざるを得ない。

そんなほんの少し大人びた子どもにフレイムは笑みを深くして自分のほうのアイスを差し出した。

「いるかい？」

「えっ、う、うん！えっと…いい、いいよ…。おにいちゃん、いら
ないのお…？」

反射的に頷いてしまったのに子供はまだ遠慮がちに首を振っている。
それでもその視線はしっかりとさしだしたアイスに注がれていた。

「要らないってわけじゃないけどね。お兄ちゃんはもう、満腹だから」

「でもそれ、おつきいほうだよ…？ぼくにくれるのお…？」

確かに、自分のほうのアイスはまだ3分の2以上あるのに対して、
アリスのほうは半分ほどしかない。ほとんど変わらなく見えるが…
そこは子供ならではの観察眼だ。

たんに近くのほうのやつをあげただけだったが…。フレイムはほん
の少し考えてやわらかい笑みを見せた。

「こっちのほうが、甘い気がするから」

「おなじあじなのにい？」

「うん、同じ味なのに」

「へんなのお」

興味を失ったように子供は呟いて、それから聞きとしてフレイムか
らアイスを受け取る。おいしそうにアイスにかぶりつき、「ありが
とう」とまばゆいばかりの笑顔でいわれ、ほんの少しくすぐったい
ような気分になった。

「美味しい？」

「うん、おいしい！」

「……その味を、忘れないでね」

僕みたいになっちゃだめだよ。そうつけたされた言葉は難しすぎてよくわからなかったようだ。子供はきょとんと瞳を丸くして、曖昧にうなずく。

「わかった！じゃあおにいちゃん、ありがとう！」

母の呼び声に子供ははじかれたように踵を返し、一度だけこちらにあの笑顔を向けてから去っていった。

その背中を見送りながらフレームは苦笑いをこぼす。なんだか今日とはことん、自分らしくない行動ばかりしている。

もう一度、溶けかけた手元のアイス舌で掬うと痺れるように冷たくて、ほんのちよっぴり自分のアイスより甘い気がした。

後編へ続きます。後編は幾分か短いです。

【Chapter 0】地図では東西南北！麻雀では… シャー・後編

後編です。前編とそのままつながっておりますので、必ず前編から順にお読みください。

「……落ち着いた？」

私はまだ呼吸を整えている最中のロキに脇から水を差しだす。彼は大人しくそれを受け取って勢いよくあおった。

こぼれた水滴が彼の頬を伝い、黒い服にさらに深い闇をしみ込ませる。その光景がやけにきれいで、私は思わず彼に見惚れてしまった。

「……悪かったな、邪魔して」

そついうけれど、あくまでそれは体面上のもの。顔にははつきり「何であんな奴と一緒になんだよ」とありありと書かれていた。

子供が拗ねるような不満げな表情に、私はぶつと吹き出す。いつも仏頂面の彼だが、意外と感情はそのまま表情に出るタイプなのだ。

「なつ、何笑ってんだよアリス！人が真剣に謝ってなのに…」

「う、ごめんごめん、つい…」

「ついても何もないだろ！大体なんであんな奴と一緒にだったんだよ！」

怒りにまかせて漏れた本音にロキは一瞬ばつの悪そうな顔になって、すぐに目をそらした。

「べ、別にお前が誰といょうが俺には関係ねえけどなっ」

……うーん、なんだかどつかで聞いたことのあるようなセリフ…。

あっ、私も前同じようなことイオに言ってたんだっけ…。
まったく…。はぁっと私は呆れたような溜息をつく。

私とロキはよく似ていると思う。何か隠そうとすると挙動不審にな

るところとか、いきなり真っ赤になったりするとところとか、照れ隠しの仕方など、そっくりだ。
だからこそ、彼の気持ちは何となくわかる。
気になるなら気になるってそう言えばいいのに…。私は目の前の鏡ロキにそっと心の中で呟く。

私はそっと、彼のツンツンした黒髪に触れようと手を伸ばした。艶やかな黒をした猫耳は心なしか落ち込んだようにへたっている。彼の髪に触れる、寸前。パシリとロキの大きな手が私の手首を掴んだ。

先程までの不貞腐れた顔と違い、どこか険しい目に私は戸惑う。

「あ、ごめん。嫌だった…?」

「そっじゃねえ」

いきなりどうしたの。そう尋ねる前に、すらりと長い指が私の手首よりちょっと上の部分を確かめるようになぞった。

ピリリと痛みが走って、私は思わず「いっ…」と小さな悲鳴を上げる。指は即座に離れてその代わりロキの視線がその箇所を這う。

そこは、先程ロキが力を込めて掴んだせいでうっすらと赤く腫れていた。

「これ…俺がやったのか?」

「えっと、まあ…うん」

そんなにじろじろと見られるとなんだか恥ずかしい。私はわずかに頬を紅潮させながら手を引こうとする、その瞬間。

ふいにロキの顔が手に近づいていき…赤い肌の上に赤い舌が這った。

「ふえっ?!」

ロキは目を閉じたまま、まるでアイスを舐めるように丁寧に赤い部分を舐めていく。その姿はものすごく妖艶で…。

私は顔を真つ赤にさせて硬直していた。鼓動があり得ないくらい早い。もしかしたら耳の良い彼には聞こえてしまっているのではないだろうか。

ロキが私の様子を窺うようにしてオニキスのような瞳を薄く開く。

「ごめん、な。しみた？」

(息がかかるんですっ!!)

私は耳まで真つ赤になった顔を見られるのが恥ずかしくて、見られないようにと彼の頭に抱きついた。そのまま以前のようにぐしゃぐしゃと髪をかきませる。

腕の下でロキが悲鳴を上げるがこれくらい当然だと思つ。ふにふにと柔らかい耳も触りまくってやる…!

「ちよつ、アリスやめろつて！恥ずかしいだろ！」

「私のほうがよっぽど恥ずかしいわよ！ええいつ、じつとしてなさいっ…！」

ふわりと、イオが愛用しているらしい香水の香りが鼻をくすぐる。

私は本来の目的も忘れて彼の耳を満喫していた。

「く、くすぐりたいから！ったく、そつちがその気ならこつちだつ

て…！」

「えっ…！」

ふいに頭の上と腰のあたりに圧力を感じて私は戸惑つたような声を

あげる。次いで、鎖骨の辺りに与えられた刺激にびくりと体を震わせた。

「ろ、ロキ…っ」

くすぐつたいようなちよっぴり痛いような感覚に、私は愕然とする。ロキはすいっと顔を移動させ、今度はあらわになっている首に鋭くとがった犬歯を立てた。

甘噛みするように噛み痕をつけてから、ほんの少し赤くなった痕を癒すように舌を這わせる。彼の熱い息が首筋にかかり、背筋をぞくりと何かが通り過ぎた。

「ちよ、ちよっとっ！やりすぎ…！」

必死で彼から逃れようとするが、頭と腰を押さえつけられているため動けない。

ふと、前方から視線を感じてそちらのほうに目を向ける。

あつと。

また、このパターンですか…！！

「ロキくん」

急激に冷めていった私の声に違和感を感じたのか、ロキは訝しげに顔をあげた。そうして私が「周りを見てね」という前に自分たちの状況を知る。

さあつと青くなって、すぐに真っ赤になって、ついには紫色になった。

肌に突き刺さるのは、視線視線視線…。

ここはまだ、アイスクリーム店の中だったのだ。
先程よりもいつの間にか増えていた店内の痛い視線に耐えきれず、
私は思わずロキの鳩尾に右ストレートを決めていた。

「右ストレート、アッパー、回し蹴り、背負い投げ、かかと落とし
……これだけでできればお前ゼツてーなんかの格闘技で優勝できるぜ
……」

「そりゃどうも。全然嬉しくないわ」

不貞腐れたようにプイツと顔をそらすとロキは眉を下げてすまなそ
うに謝ってくる。

「だから悪かったって……」

その言葉に誠意は十分込められているが、どうしても私は許す気になれなかった。あれから私は気のすむまでロキをぶちのめしてから、
逃げるように店を出ていったのだが……。

小一時間たっているというのに、身体の火照りはまだとれない。それ
れくらい恥ずかしかった。

「イオといいフレイム様といいあんたといい……まあルアは除外して、
なんでこの世界の住民は人の目を気にしないのよっ?! 恥ずかしく
ないわけ?!」

「いや、うん、まあメチャクチャ恥ずかしかったけど……あれはもと
もとお前がやったんだろ?!」

「はああ?! 私がいつ何したっていつのよっ! 大体あんたがあんな
ことしなきゃ……」

「お前だつてあんなことしただろ?!」

「あんなことって何よ!」

「お前こそあんなことって何だよ!」

お互い恥ずかしすぎて言葉に表せないらしい。「あんなこと」「や」「こんなこと」で続いていく会話にじれったくなつたのが、最初に折れたのはロキのほうだった。

「こんなことを言いに来たわけじゃねえんだよ… ったく、なんで俺はこつも馬鹿なんだ…」

悔しそうに喉を鳴らしながら彼はため息をつく。私も疲れたように汗を拭きながら、ようやくおさまった動悸にほっと安堵の息をついた。

「私こそ、調子に乗ってごめん…。お互い恥ずかしかったってことでここは終わりにしましょうよ」

「アリスは何も悪くねえよ。謝るとしたら俺のほうだ。悪かった、な…。もう人前であんなことはしない」

…人前でって…それ以外だったらやるんですか？

ほんの少し気になつたが、私は「まさか」と心の中で呟いて頷いた。しばらく、沈黙が続く。今まで派手に喧嘩していたから、その沈黙がやけに重く感じられた。

「……なんだか今日、人が多いわねえ…」

私は沈黙を破るためか、それともただ単に気づいただけだからか、ふととりこぼすように呟いた。

ただの独り言のつもりだったのだが、ロキは意外にも驚いたような視線をこちらに向けてくる。

「当たり前だろ。今日はギフトウィークの最終日なんだからな」
「……何それ？ギフトウィーク？」

聞いたことのない言葉に私は首を傾かせて眉をひそめた。ゴールド
ンウィークやシルバーウィークのようなものだろうか？
ロキのほうは逆に知らないということに戸惑ったようだ。「あー」
とか「うー」とか声をあげながら頭をかく。

「とりあえず場所変えるか？長くなりそうだし」
「どうしてよ。簡単に説明してくれるだけでいいのに」

そういうわけにもいかないんだよ。
何やら歯切れ悪く言い訳をする彼を不審げに思いながらも私は渋々
頷いた。

「つてちよつと待ったー！！」
「ん？何だよアリス」
「移動するって言ったよ、言ったけど……なんでわざわざこんな高
いところを選ぶわけ？！」

そこは、街の中心にたたずむ時計塔。東京タワーが三百なんぼだか
ら……たぶん100メートルは優に越えているだろうところだ。
私を知る中ではこの塔が一番高い。確かに荘厳で綺麗だとは思っけ
ど……何もこんな、登るのが大変そうな所にこなくても。

「てっぺんにはいかねえよ。せいぜい10メートルぐらい」
「それでも十分高いっつーの！いい？！私この世界に来てから高所

恐怖症になりかけて…ってうわっ」
「つべこべ言うな。ほら、行くぞ」

抗議の言葉もまともに聞いてもらえないままロキは私を横抱きにして軽々しく跳んだ。上からの圧迫感を数秒感じてからようやく、3階のバルコニーに着地する。

そのあまりの手際の良さに私は改めてロキ達の人間離れした跳躍力を思い知らされた。

「俺ら猫は高いところが好きなんだよ」

機嫌よさそうにゴロゴロとのを鳴らすしぐさは、確かに猫そのものだ。

私は恨めしげにロキを睨みつけながら、バルコニーの手すりに身体をもたれかけた。

いくらやってもこの感覚だけ離れない。息がつまるような圧力と、肌を斬るような風。まあそれでも、落ちるときのあの、内臓が置いていかれるような浮遊感よりかはマシだけど。

「馬鹿ね。猫は高い所に登りたがってそのまま降りれなくなるのよ」
「うっ…。でも今の俺はちゃんと降りれるぞ！」

ということは昔は降りれなかったということか。木の上で震える涙目のチビロキ…。あ、なんかだめだもっ。可愛すぎ…。

「……アリス、何ニヤニヤしてんだよ。気色悪い」
「はっ、ついもうそ…」コホン、想像してしまった…。うん、気にしないでロキ」

ほんのわずかにロキが不機嫌になるが、私が機嫌よさげに鼻歌を歌

つっていると何かをあきらめたように溜息をついて、本題を切り出した。

「ギフトウィークってのは10日間の連休のことだ。まあ俺ら“カードもち”には縁のない話だけだな。“一般人”には全員休みが与えられるから、商店街が混むんだ」

「へえ…でもそれだけなら別にここまで来る必要ないじゃない」

「これだけじゃないから言ってるんだろ」

呆れたように言われると、少しムツとする。

仕方ないではないか。この世界にきてからまだほんの少ししかたっていないのだから。

「ギフトウィークにはその名前の通り、大切な人に贈り物をあげる習慣があるんだ。家族とか師匠とか親友とか…その…恋人、とか」

「へえ…バレンタインみたいなものかしら」

最後の言葉がやたらと歯切れが悪かったことに不信感を感じながらも、私はぼうっと他のことを考える。

そう言えば前にルアとイオがくれた懐中時計とピアス…あれもそう言う意味だったのだろうか？相当お金と手間がかかっていたものだったから、それだけと思って受け取っても嬉しかったけど…大切な人と思われているのなら。

ズキン、と心臓のどこかがひどく傷んだ。どうしてだろう…いけないと思っていながらも、それを嬉しいと感じ始めている自分がいる。大切な人、だなんて。想えば想うほど、執着すればするほど、私はこの世界から帰れなくなってしまうのに。

「アリス？」

ロキが急に黙り込んだ私を不審に思ったのか、下から覗き込むようにして窺ってくる。私はあわてて笑顔の仮面を張り付けて平気そうにふるまった。

「なんでもないなんでもない。でもそれは惜しいことしたなあ…私だってギフトウィークのこと知ってたら渡したかったのに」

「……知ってたら」

ごくりと、すぐそばで喉を鳴らす音が聞こえる。驚いて見れば、ロキの顔が手を伸ばせば簡単に届きそうと思うほど近くにあった。ただ、彼はこちらのほうを見ることはせずに顔をうつむけたまま続ける。

「アリスは誰に、渡すんだ？」

「え……」

誰に、渡す…？そんなこと、考えもしなかった。ただ自分だけが貰ってばかりでお返しできないのは口惜しいなと思っていただけで…。義理チョコのノリで「くれた人全員にお返しするつもりよ」と言いさえすれば良かった。

なのに…彼の瞳に潜む期待と羨望と悲しみに気づいてしまっ…。

自分が、わからなくなった。

誰に渡したいの？誰に渡されたいの？

私の中に隠れるもう一人の私が嘲るように繰り返す。

ルア？イオ？フレイム様？ロキ？それとも、貴方は何も要らないの？

私は奥歯を噛みしめて、聞こえないほどの小声で呟いた。

「わから、ない」

「……………」

「私には、わからない…っ」

「……………だったら、今はそれでいい。だけど…これだけは貰って
くれるか？」

そう言つて、そつと手渡されたのは小ぶりの指輪。飾りは控えめで、
中心に埋まる丸い水色の宝石もそこまで大きくない。しかしキラキ
ラと光るそれはとても綺麗で、彼のセンスの良さを際立たせていた。
ロキの手が伸びてきて注意深くそれを私の指にはめてくれる。なん
だかその光景が新婚の男女のように思えてきて、私は赤い顔をうつ
むけていた。

「やっぱりアリスには碧あおが似合つてんな」

「どうせ女らしい赤は似合わないわよ」

前にピンクのドレスとかを着てみたのだが、フレイムに憐みの視線
を送られたことを鮮明に覚えている。どうせ私はフレイムやイオと
は違い派手な色は似合っていない。

「でも、俺は好きだけどな。アリスの色」

ふわりと何の邪気もなく微笑まれて私はさらに赤くなる。アリスの
色、だなんて。ただの水色なのに…なんだろう、すごく恥ずかしい。
私はもう一度薬指にはまっている指輪を見る。シルバーのリングに
ポツリと浮いている水色の宝石が何故か、ロキの涙の色と重なって
見えた。

「今はこれだけでいい……だけどいつか、答えを返してくれ」

とても綺麗な色なのに、どこかもの悲しげな色に私は魅せられたよ

うにっなずいた。

N o t i c e m e n o w . . .

早く気付いて…早く

……

「ただいま帰りました」

「やあ、お帰り。遅かったじゃないか」

「おいつてったくせに…」

玉座に堂々と座って飄々と笑っているフレイムはいつもの彼だ。先程の子供っばさなどかけらも見えない尊大な態度に、私はわかっていながらもため息をついた。

一通り身支度を整えてからふと違和感に気づく。なんかいつもより静かなような…というか暑苦しいのがないような…。

「フレイム様、ルアは…」

「ああ、サボっていた分の激務に追われているよ」

そう可笑しそうに笑う彼はざまあみろとでも言っているようだ。いつもよりも明るく嘲る彼に私は顔をひきつらせながら聞く。

「それはもしや、私がフレイム様を連れ出したから…?」

「まさか。あいつがこの1週間全く仕事をしないでアリスに付きまわっていたからだろ」

「ま、全く仕事もしないで?!」

この城に滞在しているからよくわかる。ルアやフレイムの仕事の量は半端なく多い。毎日紙に埋もれているルアの嘆きを聞くのは私の役目だったし、激務のおかげでフレイムの機嫌も日々悪くなっているのだ。

あれらの仕事全部をこなしているルアもすごいと思うが、それ以上に1週間もそれを丸投げした彼の肝が恐ろしい。

フレイムはわずかに不機嫌そうな顔を見ると、呆れたように溜息をついた。

「冗談じゃないよね。僕ら“カードもち”にギフトウィークなんてないというのに……アリスと休日を楽しむんだといって聞かないんだから」

「……もしかして、私のせいですか？」

「もしかしなくてもそうだよ。だからせめて今日ぐらいはアリスにどっかに行ってほしかったんだ。君がいなければルアも仕事をせざるをえなくなるからね」

ああ、なるほど……。だから今日わざわざ外出許可を出したんだ……。私は朝のあの騒動を思い出して顔をひきつらせた。そう、そもそもあれが始まりだったのだ。まさかその元凶がルアにあるなんて思いもしなかったけれど……。

「それがまさか、こんなことになるとはねえ……。君はいつも僕の予想を裏切ってくれる」

随分と楽しそうに笑うフレイムを見て、私もつられて笑う。その笑顔に朝あつた影はなくて……少し、ほっとした。

「なかなか楽しかったよ、それは認める。ほら、これはほんのお礼

だ

「えっ、ちよつと、うわっ」

まるで犬に向かつて投げつけるようにそれをほური出されて、私はあわてて投げ込まれてきたそれをキャッチした。

空中できらりと光ったそれを恐る恐る見ると、なんと豪華なブレスレットだった。きらきらと光っていたのは、大粒のルビーを連ねたもの。

赤なんて私には似合わないのでは、という視線をフレームに投げかけると、彼はほんの少し目を細めて曖昧な笑みを返してきた。

「母上が気に入ってたものだ」

「い、遺品ですか…?! ならなおさら私なんか…」

「要らなかつたら捨てる。僕からの命令はそれだけだ」

そんな無茶苦茶な…! そう訴えようとも思ったが、彼の瞳はあまりにも悲しすぎて…。

きつと、適当な気持ちではないのだと思う。考えて考えて、自分なりの処分の仕方だったんだらう。

私はどこか深い闇を思わせるそれをきつく抱きこんで、そのまま去っていくこうとする彼の背中に語りかけた。

「貰いますよ! 貰いますから!」

彼の悲しみは、憎しみは、闇は…きつと誰も癒すことのできないもの。私なんかじゃ到底届かない、それほど深いところまで彼は墮ちてしまっている。

なら、せめて…。

「また、二人でデートしましょうねっ」

せめて、その寂しさだけでも埋めさせて下さい。

「…………ストロベリーアイスなら一緒に食ってあげてもいい」

ぶっきらぼうに返されたその言葉に私は一瞬目を見張って、それから幸せそうに笑った。

I o w e y o u o n e . . .

借りができたね

……

f i n . . .

「うーん…なんと言いますか…」

「端的に言うとなあ…」

「まあなんとというか、ねえ？」

「ま、まあ…仕方ねえよなあ…」

ああ、なんかすっごく暗いね。

「フレイム様！もうちょっとオブラートに包んで下さいよ！ほら、ロキがものすごい落ち込んだじゃないですか！」

「どうせ俺の出るやつは全部が全部悲劇だよ…。しかも絶対半分以上が女王のターンだし…」

「いや、あれは設定上仕方なかったんですよ。僕なんて始終ひつどい扱いでしたし、ね？」

「そうだよー。俺なんて名前が出てきた程度で終わったんだから、まだましだつてー」

「お前らはここの主演じゃねえだろうが！ひっこめKY！」

こら、黒猫。いくらここがパラレルワールドだからって読者がわからないような言葉を使うなよ。

あ、ちなみにKYっていうのは…「空^ケ気^クを^ク読^クむ^クこ^クが^ク不^ク可^ク能^クな^クた^クめこの世から消えさつてもらったほづがありがたい奴」だからね。お友達に教えてあげるといい。

「こらこらこらこら。なんか後ろに色々とくつついてんの余計だし」

「ごんだけ僕らに私怨をもってるんですか、フレイム様」

そりゃあ、いろいろだよ。あれとかこれとかそれとか。

まあそれは置いといて…。ふう…まさか自分が出演するとは思わなかったからね、少し疲れたよ。

「じゃあこの機会に司会者譲つたらどうですか？そつちのほづが私たちの心臓も安泰ですし」

一生止まっていられるようにその心臓抉りだしてやるうか。

心配ないよ、アリス。これくらいでへこたれる僕じゃないから。

それにしても…なんだかまったくキャラが違っていたように思うのは僕だけか？

「なんだかフレイム様がツンデレでしたよね。アイスを食べる姿は可愛かったなあ……」

「いつもはツンってことですね…僕にももう少しデレて下さっているのに…」

「うん、まあ確かに可愛かったかも。でもツンデレ度でいえばアリスのほうが上じゃない？」

「ついに俺の話題は全く出なかったのか…お前らなんて、お前らなんて大っ嫌いだあつ…！」

「ああつ、ちよつとロキ！待ちなさいよ！相手にしなくて悪かったつてば！」

「戻ってきなさいロキ！えーつと、あつ、なんだかちよつとぐつときましたよ、あの暗いシーンで！」

「ルア、ロキに暗いって言葉はご法度！ロキ、ちよつとエロくて面白かったよ！」

「あんたバカじゃない、イオ？！それ褒め言葉になってないわよ！ロキー！確かに影は薄かったけど…」

「「アリス…！」」

「……あー、なんだか忙しそうだけど。次の出演までには戻ってきなよ。」

「つと次はあ……おいこらルア！さっさと戻って来い！」

どうも、携帯とパソコンが同時期にぶっ壊れて2カ月更新できなかつたクソ作者です。もうなんか、自分で自分を罵倒したい気分です…。

あ、何度も言いますが、私はMでは決してありませんからね？

しかし今回は…なんというか、フレйм様がしゃしゃり出てきたのは計算外でした。しかし物語をつなげる都合上、どうしても彼に出演してもらうしかなかったんです(´・`・´)

果たしてフレйм様はどれくらいの人気なのか…私はかなり好きですけどね…。もしかしたら生理的に無理という方にはづらい作品だったかもしれませんが。申し訳ありませんでした。

しかし楽しかった！フレйм様の子供っぷりを書くのはすごく楽しかった！思わず一気に3分の2を書いてしまいましたよ…。フレйм様はツンデレというだけでなく、ほんの少し天然も入っています。まあまだ15ですから。しかも城に閉じこもってばかりの引きこもりですから！

いつかフレйм様の過去編と女装編も書いてみたいと思っています。絶対可愛い！

さて、この頃本編では出しゃばっているけれど番外編では全く影の薄いロキくんですが。まさかこんなに存在が薄くなるとはね…。

少し微工口を入れてみたんですが、どうでしたでしょう。ちなみにあれ、本人は全くの無自覚です。手を握ったりするのは恥ずかしがるロキくんですが、ああいうのは兄弟の戯れとも思っているよう…さすが猫。あ、でも言っておきますがイオのアレは明らかに故意です。わざとです。策略です。

前回はイオに乗っ取られ今回はフレймに乗っ取られ…相変わらず

一人きりの出演とやらをさせてもらえないロキくんでしたー…。

【chapter 0】地図では東西南北！麻雀では… ペー

（前

これで今回の番外編は終了です。

第二幕 チエシャさまリク：薬のお味はいかが？

「アリス、一緒にプリクラ取りにいきませんか？」

「ヤダ」

間髪をいれずに即答するが、そんなこともルアには想定済みなのか、べたべたとくつつつについてはねだるように絡みついてくる。今日はなんだか暑い日だったのに…うう、むさくるしい！

それでも完全に突き飛ばすことができないのは彼が美形だからだろう。まあ頭についているウサ耳は異形としか思えないが。

「この間はアリスから誘ってきたのに…つれないです」

「なに誤解を招くようなことを言ってるのよ。あれは思い出作り。

あー、これで清々したなあ、いつでも帰れるわ」

「大丈夫です、何があっても帰したりはしませんから」

お互い笑顔で楽しそうに話しているが、話の内容はなかなか物騒だ。言葉が剣呑になる前に私のほうが折れて、「はいはい」と受け流すと呼んでいた本に視線を移した。

ルアはつまらなそうに鼻を鳴らすと、私の腰に両腕をまわしてくる。こんな子供っぽい仕草、日常茶飯事だ。「フレイム様にやったらどうなんだ」と一回怒鳴ってみたが、見事にこう返されてしまった。

『じゃあアリスが先にやってみて下さい。首が飛びますから』

……うん、あれは今考えてみても立派な正論だよ。

口論ではどうせ私は敵いはしない。だったら彼があきらめるまで無視を決め込むまでだ。

「アリス、少しくらい付き合って下さいよー」

「……………」

「もう変なことしませんってば」

「……………」

「……いや、少しくらい下心はありましたけど」

(あつたんかい！)

「プリクラ、行かなくてもいいですから…………無視、しないで下さい
…寂しいです」

きゆうつと腰にまわされた腕が何かを確かめるように緩くしまつていく。耳元で切なげに囁かれ、私は頬を紅潮させながらため息をついた。

いつも彼には比較的冷たくしている私だったが、こういう仕草にはやはり弱いのだ。

「わかったわよ、無視はしない。だからさっさと放しなさい」

「ようやく口をきいてくれましたね。嬉しいです、アリス！」

きゆうつうつ

「ぶぐつ」

いきなり力がありつたけこもり、私は窒息するような勢いで声を漏らした。死にかけの動物のような声に「まずい」と悟ったのか、すぐに力は緩められる。

こ、この野郎…全部策略なんじゃねえか？

切なげな声をあげたかと思えば、無邪気に話しかけてくる。大丈夫と見せかけといて不意を突いてくる。そんな彼に幾度振りまわされてきたか…。

そして今回も例にもれず、振りまわされることになる。

「あれ、アリス…手、どうしたんですか？」

「え…？」

「なんか、ざっくり切れてます」

驚いて私はルアの視線が向いているほうの右手の掌を見た。ルアは時々、言葉が過剰になる。この時もそのパターンで、傷といってもほんの目立たない程度…しかもただの擦り傷だった。

どつりで何も感じないはずだ。ざっくりなんて言葉…それこそ、時々ルアがこしらえてくる傷のほうがふさわしい。

「さあ？どこかで転んだんじゃない？」

「そんないい加減な…。ちゃんと消毒はしましたか？」

「そんなのするわけないじゃない。大丈夫よ、これくらい」

「いいえ、駄目です。黴菌が入ったらどうするんですか！」

「そんな大げさな…」

黴菌すら入り込めないほど小さい傷だし、そもそもほとんど完治しているというのに…。

いつものことだが、ルアは私に関しては馬鹿がつくほどの心配性だ。しかもこういうことには行動が素早いから余計面倒だ。

私が彼の腕から逃れる前に、ルアは懐から携帯用の治療セットを取りだした。

「…………ハイテクね」

「科学は発達してますから」

にこりとさわやかに微笑まれても、私の顔はひきつるばかり。そうしている間にも素早くルアは塗り薬らしいものを右手にとって私の手の甲に垂らした。

「ひゃあっ?! な、なにこれっ、つめた…っ」

「じっとしていて下さい」

ぬるりとして気持ちの悪い液状のそれをルアは左手の指で薄く伸ばしていく。ぬめぬめしたり、べたべたしたり、冷たかったり…とにかく気持ち悪かった。

左手にはいつもの白い手袋はかけられておらず、思わずそのすらりとした長い指に見入る。女でもここまで指の形がいい人はいないだろう。爪だつて丹念に磨かれているし、色だつて私なんかより白い。何よりも気持ちの悪い液体越しに感じる彼の指はすべすべして、なんだかとても気持ち良かった。

「……手袋」

「アリス？」

「手袋、しなきゃいいのに。綺麗な手なのに、どうして…」

ぴたりと、一瞬私の手の甲を這う指の動きが止まった。

はあっと物憂げなため息が首筋にかかり、私は思わず頬を赤くさせる。腰を掴まれてるとはいえ、こんなに近くなっていたなんて予想外だった。

「あなたがそう言うってくれるなら、僕は余計に手袋が手放せなくなりますね」

「なっ、何でよ」

「あなたが綺麗といってくれるものを、僕は他人の血なんかで汚したくない」

今度は私の動きが止まる番だった。

何度か、彼は血まみれになって帰ってくるがあった。慌てて大丈夫かと聞くと、彼はこともなげに笑って「僕のじゃありませんから」と言うのだ。

その時決まっつけてつけていつている白い手袋が、ぐっしよりと赤に染まっていたのを思い出す。

それは、こういうことだったのか。

「さあ、終わりましたよ」

「……ねえ、ルア」

「うん？どうしましたか、アリス」

身体を少しずらして、ルアは私の顔が真正面に来るように調整する。先程の会話などなかったかのように微笑むルアに私は苛立ちと悲しみを覚えながら、絞り出すように言った。

そんなふうには、笑わないでよ。ほんの少しだけでも……ほんの少しでいいから、人殺しに罪悪感を覚えているんだったら、どうかお願い。そんな悲しい瞳で、笑わないで。

「もし私が貴方のすべてを好きと言ったら、貴方は人殺しをやめてくれるの？」

「……すごく魅力的な誘いですね」

一瞬、彼の瞳が凍りついたのは見間違いないはずだ。

「そうですね、アリスが貴方のすべてを僕にくれて、僕のすべてを受け止めてくれるのなら、考えます」

「……いくらなんでもリスクが高すぎるわ」

「はい。でも僕にも、リスクが高い話なんですよ？全身を血に染めないなんて、人を殺すときにできるわけない」

「じゃあやらなきゃいいじゃない！」

「ダメですよ。僕には“白ウサギ”としての義務もあるんですから
「でも……！」

私が何かを言う前に、彼は左手の指で私の唇をふさいできた。そのまま、揺らぐ瞳を隠すように悲しい笑みを浮かべる。

「いいんです。貴方がとても優しいのは知っています。僕のことだつて、少しは心配でいってくれるのも、僕の心が壊れないように言ってくれているのも。ありがとうございます。……大好きです」

「ル……あぁっ?!」

名前を発音しようとして私は口を開いた、その瞬間。ペろりと彼の指を舐めてしまって、彼の指に付着した薬を味わってしまった。

苦い……にが……。

「あ、甘っ……!!なにこれ、すっごい甘いんですけど……っ！」

「あれ、アリス……先に食べちゃいました？僕が頂くつもりだったのに……」

苦いかと思いきや、むせかえるような甘みを感じて、私は「ほ……ほ」と咳をする。

この感触、この甘み……まさかこれって……。

「は、蜂蜜……？」

「はい、当然了。この世界では稀少なんですよ」

にこにこと笑って話す彼の顔には、もうすでに悲しみの色はなく、ただただしてやったりというような餓鬼大将の笑みがあった。いや、そんなことどうでもよくて！

「な、なんで?!これ薬じゃないの?!」

「誰がそんなこと言いました?これはこうするために塗ったんです」

ペロリ

……え?

い、今の感触って……なんかすごく熱かったんですけど……ま、まさか……。

「やっぱり……甘いですね」

私の手の甲に舌を這わせたルアはほんの少しだけ苦い顔をして、再び口づけるように顔を近づけた。

……な、舐めて……?」

それも、至近距離で。私は自分に施されている行為を理解した途端、煙を吐きそうな勢いで真っ赤になった。

心臓の音がねじを外してしまったかのように壊れた調子で鳴る。

「なっ、なななっ、何すんのよっ!!」

「アリス、今ここで暴れたら貴方の唇にも塗りますからね、これ」

相変わらずの爽やかな笑顔でルアは見せびらかすように薬……否、蜂蜜を取りだした。モデル顔負けの笑顔が、今はとても不気味なものに見える。

「そうしたら、唇のほうも舐めとってあげます」

「ふっ、ふざけないで！」
「ふざけてなんかいませんよ。もとは全身に塗りたくってやるつもりでした」

ピクリと、私の頬が恐怖にひきつった。いくらなんでも、それはやりすぎだ。

ルアもそれを見たのか、一瞬眉をひそめると訝しげに聞いてきた。

「もしかして、何の心当たりもないんですか？」

「あ、あるわけないでしょ！なんの罰ゲームよ、これ！」

「罰ゲーム…ええ、罰ゲームですね。だってアリス、僕との約束を守ってくれなかったんですもん」

「や、約束…？」

本当に何も覚えていない私に彼は絶望したように溜息をつき、拗ねた子どものように頭を私の肩に埋めてきた。その瞳に先程までの危険な色はないとみて、私はひとまず安心する。

「プリクラの時、言ったじゃないですか。僕以外の男の前で、笑ったりしないで下さいって」

むすつと、不貞腐れたようにルアは言った。このような口調、普段は使うことはないからやはり彼なりに怒っているのだろう。

確かに…言われてみればそのようなことを約束させられたような気がする。その後のことが大変すぎて記憶から薄れてしまったが…。

『僕以外の男の前であんな顔、絶対にしちゃいけません』

うん、まあ…言った。それは覚えている。覚えているのだが…私は破つただろうか？

「あの後、イオともプリクラに行っただんでしょ？」

「えっと…ええ、まあ…」

「どんな顔をして誘っただんです？あの男のことですから、エロい顔？懇願する顔？それとも僕に向けたのと同じような…」

「ちよつ、ちよつと待つてよ！」

私はどんどん飛躍していくルアの話で慌てて遮った。

イオとはプリクラに言ったが…そんな誘ったりなんかは絶対してないはずだ。そもそも私が自主的にプリクラに行こうと言い出したのはルアに対してだけだ。他は…主に誘拐された。

「私はイオなんか誘ってないわよ！あれはあの男が勝手に…！って
いうか、本当に攫われたのよ?!」

「そうなんですか？」

ぱつといきなりルアが顔をあげて、心底驚いたように訊いてくる。

やはり誤解が生じていたようだ。

もしかしたらこのまま何もなく解放されるかもしれない、と思った私は力説するように意気込んで言った。

「そうよ。だから私が誘ったのはルア一人だけよ。イオやロキの時はほんと誘拐される形だったし…」

「……ロキとも行っただんですか。へえー、初耳です」

「うっ…」

うっぎゃあー！！ぼ、墓穴を掘った…。

慌てて彼の腕から逃げようとするが、その動きを見越していたのか、ルアは腰にまわしていた腕に力を加える。そうして私の左手を取ると、ニツコリと悪魔の笑顔が炸裂させた。

「先程はありがとうございます。手だけでも褒めていただいて、嬉しかったですよ、アリス」

「そ、そう…それはどういたしまして…」

「ですから今日はこれくらいで許してあげようと思ってんですが…」

口づけるように私の手を顔までもっていく。そのまま、わざと音を立てるようにして手にキスをし、悪戯っぽい笑みを私に向けた。

「やっぱり、嫉妬する相手が増えたので、ダメです」

結局私はその後、蜂蜜の味がなくなるまでくまなく左手を舐められたのだった

……

f i n . . .

うっわ、甘っ。なんか無駄に甘…。見てることがちが砂糖を食べているような奴だったね。

って、おーい…大丈夫かい、ルアもアリスも…。

「ううううっ…や、やつぱだめです…いくらアリスでも甘すぎて気持ち悪…っ。あ、物語じゃなくて蜂蜜ですからね！僕は甘党設定じゃないのに…」

「そーだよねえ、ルア。どうせならさあ、俺とアリスでやったらよ

かったのに。俺甘党だし」

「世界中の蜂蜜を食ってでも貴方とアリスでなんかやらせませんっ
！！」

こら、ピンク猫とルア。アリスが今瀕死状態なのに何悠長なこと言
ってるんだ。

「あ、アリス…大丈夫ですか…？」

「し、心配しないで、ルア…。もうなんだか、いろいろと疲れただ
けだから…。大丈夫大丈夫d@IGtobう…」

既にいろいろと大丈夫じゃなさそうな気がするんだが。

駄目だよ！死なないでよ！アリス…。

君がいなくなったら、君が死んじやったら…！

「フレ임様…！私のことを心配して…」

次の作品に移れないじゃないか。

「オニー…！！」

はい、では引き続いてイオアリ、ルアアリ連続2作で行くぞ。全員
配置につけー。

「ええっ?! ちょ、私瀕死ですよ?!」

ふふっ、人間は死に際が一番美しいというからね。きっと何とかな
るわ。

「ほんとに殺さないで下さいって…！」

「うだうだ言っていないで、ほら行くよアリス。今度は俺となの」

「ちよつ、い、イオっ?!マジで死ぬ!死ぬからやめて!」

「大丈夫、死ぬほど悦ばせてあげるから…ね?」

「全力で遠慮させていただきマス!!!」

イチャイチャするのは舞台の上でやりなよ。

今回は一興として…ゲーム方式でやってみようか。

第三・四幕 選択モード

「さあ、始めようか

宴を」

フレイムのその一声に、今までの空気が音を立てて破裂した。張り詰めたように緊迫していた雰囲気、いきなり馴れ馴れしいものへと変わる。

こんなにも女王の力とは強いのか、と私は改めて感心した。

あたりを見渡すと、お金持ちやら貧乏人、獣人や子供、老人に至るまでの様々な人種がいる。このような夜は幾度となく経験してきたが、やはりまだ慣れない。

月に何回か開かれるパーティーには敵も味方も主従も関係なくいられる、だなんて…。

「まったく、何年も女王をやってるけど、これだけはいまだにめんどくさいよ」

玉座で行われる開会式を終えたフレイムはため息をつきながら私の隣に並んだ。今まで10分のスピーチをやっていたせい、ひどく

疲労困憊している。

カキコキと肩を回す様子はなんだかオヤジ臭かったが、変に似合っていた。

「国民代表を集めて情勢説明をしなきゃいけないなんてね…。この頻度でやられちゃあこっちの身がもたないって」

「ずいぶんお疲れの様子ですね…。でも、ついこの間やったばかりじゃないですか。こんなにやる必要があるんですか？」

月に何回か、という説明だったのだが、前のパーティーは3日前に開催されたばかりだ。私が来てからというものの、どうも頻度が高すぎる気がする。

不思議に思っただけで私が聞くと、フレームは不機嫌そうに唇を曲げて首を振った。

「いや、本来だったらこんなにはやらないんだ。ただ、“アリス”が来るとこの世界の情勢なんてコロコロ変わるからね。そのたびに報告する必要があるのさ」

そこでいったん切り、彼は意味ありげな視線をこちらに向けてくる。

「今回の“アリス”はずいぶん問題児だし」

その炎のような瞳にからかわれて私はむっとしたが、こんなところで喧嘩を買うのもなんだ、プイツと顔をそむけただけで留まらせたフレームは面白くないとでもいうように鼻を鳴らせ、私の横から去っていく。彼は彼なりに、やることがあるらしい。

やはり女王と言っただけの忙しいものだ。パーティーで食べてばかりの私とは全然違う。

さて、私は…、と。

1・とりあえず白いストーカーに見つかりと面倒だからパーティーを抜け出そうか 第三幕へ

2・とりあえず紫の変態に遭遇すると危ないから気をつけてパーティーに参加しよう 第四幕へ

第三幕 ナナさまリク：送り狼、ならず

ルアに見つかりとまたべたべたひつつかれて面倒な気がする…。その様をありありと思い浮かべた私は、諦めたように溜息をついた。まだまだパーティーの料理を食べたい気もするが、そろそろ人の多さに気持ち悪くなっていったところだ。少し外に出る必要があるかもしれない。そう考えた私は暑さで火照る頭をまわしてバルコニーのほうを向いた。

「……………食べたりないなあ……………」

だが、仕方がない。あの厄介なストーカーに見つからないように外に出なければ。

私は再度ため息をつき、やたらと豪華なドレスのスカートの裾を持ち上げた。

満天の星空^{プラネタリウム}、というのも珍しいものかもしれない。私はほうっと感嘆の息をつきながら上目遣いで空を見上げる。

こちらの星々は面白いことに、青白い光だけではなく赤や緑、ついには紫に至るまで様々な色で光っていた。星、というよりも金平糖のようだと私は思う。

作り物めいたその様も、また美しいものだ。私はなぜか似つかわしくない風流を感じて、そつと目を閉じる。

熱い頬に当たる風が冷たくて妙に気持ちいい。私は再びパーティーに戻ろうと目を開けた。

目に入ってきたのは、一面のお花畑…ちゃうちやう、一面の紫色。

「アリス、久しぶり〜」

やけに嬉しそうなこの声。何を考えているのかいまわからない金色の瞳。目が痛くなるほどの明るい紫の髪。そして、ピコピコと動く大きな猫耳。

……それらが全部、逆転していた。

すうううっ

「あぎやああああああっっっ!」

「あつ、アリス?! うわっ」

あまりに大きな悲鳴に突然出現したイオは心底驚いたのか、ぶら下がっていた6階のバルコニーから滑って落ちた。

それでも華麗に着地する彼を私は怪物でも見るかのような怯えた瞳で見やる。もはや私の目は、イオとしてではなく突然逆さまにぶら下がってきた紫の異物とした認識していなかった。

「さ、逆さまにっ、なんか目を開けたらと、とっぜんっ、いい

「いやっあああつー!!」

「お、落ち着いてよアリス！俺だって、イオだって！」

「い、イオ?! なお悪いわよ! な、なんで逆さなの?! いちいち吃驚させなくたっていいじゃない!!」

「わ、悪かった、悪かったから…。ごめん、少し驚かせようとしただけなんだって」

宥めるようにイオは私の肩をさすってくる。既に半泣き状態の私は抵抗する術もなく、ただただ驚きでバクバクなる心臓を鎮めようとした。

しばらくイオに付き添われてようやく落ち着いた私は彼に渡された飲み物を素直に呑みほした。途端、カアアツと身体が熱くなり、思わずむせかえる。

「な、何これ?! お酒じゃない!」

「え? あー、アリスってまだ未成年だったっけ? …… って俺もそうか。大丈夫だよ、ただのワインだし」

「あんたねえ…っ」

こともなげにからからと笑われて、私の中で怒りが彷彿とわきあがる。そう、もとはと言えば私があんなに怯えたのも、お酒を飲んでしまったのも、こいつのせいだったんだ。

私は今まで従順に従っていたことも忘れて、声を荒げた。

「一体何のつもり?! 突然出てくるわ変なもん飲ませるわ、いい加減にしなさいよ!! あんたといるとこっちの心臓がもたないわっ!」

「あー…アリス?」

「何よっ?! 言い訳なら聞かないからね!」

「なんだか、ものすごく視線を集めてるんだけどね…」

「はあっ？それがどうし……た……」

私は勢いよく振り返ってその光景を垣間見る。突然、一気に突き刺さってきたのは視線、視線、視線……そして、沈黙。

老若男女問わず、誰もが視線で語る。

こいつ頭大丈夫か。

「……あー、うん、そうね……なんだかすごい人気者ね、あんた」

「いや、主にアリスだと思うよー」

冷静に切り返されて、私はうっと言葉につまった。この変態だったらともかく、私は奇怪な視線に刺されるということに慣れていない。せめて視線の行き先がイオだったらいいのにと言うはかない願いは彼の残酷な一言で粉々に打ち砕かれてしまった。彼は呆れたようなからかうような口調でいう。

「ったく、アリスったら何やってんのさー」

(もとはと言えば全部お前のせいだろーっ!!！)

私の心の叫びを知ってか知らずか、イオはバルコニーの手すりの上に足をかけると、今にも飛び降りる体制になった。

一人で跳び下りてくれればいいものも、もちろんそんなことはない。彼は逃げようと構える私の手首を素早く取る。強い力を入れられているわけでもないのに、イオの拘束は全然外れないのだ。

「なっ、何すんのよ!」

「ここじゃいたたまれないんでしょ?だったら場所変えようよ」

「一人で行けばいいじゃない!」

「そんな寂しいこと、したくないね。ほら、抵抗しないで」

本格的に暴れる前にと、イオは私の腰を瞬速で引き寄せて、横抱きにした。先程勢いで吞んでしまったお酒のせいか、それとも至近距離にあるイオの悪戯っぽい瞳のせいか、私の頬はみるみる赤くなる。しかしその熱も冷めるようなことを、彼は実行した。

「いつ、イオっ！ここ5階！！」

「うん、知ってる」

「せ、せめて階段を使って降りてよっ！」

「えーっ、だってアリスずっとこの体制って恥ずかしくない？」

「うっ…」

「それに、いちいち階段使うのってめんどくさいし」

「絶対そっちが主な理由だろうが…あああああっ」

私の抗議を半分も聞かずにイオはふわりとバルコニーから身体を乗り出す。あまりにも軽々しいその動作に一瞬飛んでいるような幻覚を覚えるが、違う。

まぎれもなく、私は落ちているのだ。

私は幾度目かの浮遊感に吐き気を覚えながら、ありったけの悲鳴をあげた。

「そんなに拗ねないでよ、アリスー」

背後の呆れたような声に、私のこめかみに浮かびあがった青筋がひととき大きくなった。

5階から落ちたというのに、無傷で着地するというのはすごいと思う。あの場合はまあ、気持ち悪かったけど、許してやらないこともない。さすがに私もあの場所に居座り続けるというのは気まずくない。

た。
だが、その後が問題だ。あろうことかイオは私を抱きかかえたまま近くにある森へと入ったのだ。

「拗ねてないわよ。私はさっさと帰りたいただけ！」

「えー、そんなのつまんないよ。折角拉致したのに」

「つまらなくて結構！それよりここどこよ？」

むっとしたまま振り向くと、思わぬほど近くにイオの顔があり、私は反射的に身を引いた。久々に見たその端正な顔立ちに、思わず顔が赤くなる。アルコールのせいか、なんだか今日はすぐに体が熱くなってしまう。

イオはあたふたする私を見て一瞬訝しげな顔をするが、すぐに何かを思いついたような悪ガキの顔になった。

突然、右手首を握られてびくりと震える。彼の瞳を見上げるのが、怖い。自分の目で見るよりも先に、高鳴る心臓が危険信号を伝えていた。

私のよわよわしい抵抗に気づいたのか、イオはさらにシニカルな笑みを深める。

「いいよ、帰り道を教えてあげる。その代わりに、アリスも俺に何かを頂戴」

聞き覚えのある、このセリフ。そうだ…私が初めてイオにあった時、同じようなことを言われたんだ。

『貴方は、俺に何をくれるの？』

同じ笑みで、同じことを言う。あの時も、こんな瞳をしていたんだろうか。イオの瞳は紛れもなく、獣のものだった。

「……何が、欲しいのよ」

それでも自分は、どうしてもこの瞳に逆らえない。私は熱くなる頬を感じながら、一言一言くぎって尋ねる。その答えにイオは満足そうに喉を鳴らし、軽く包み込むように私の背中に腕をまわした。

冷たい肌に触れる温かい体温に、規則的だった鼓動が乱れていく。私はあわてて腕を突っぱねようとしたが、彼の腕はしっかりと私の腰を押さえていて、うまく動けない。

「ちよつ、放しなさい、イオっ」

必死で抗議するが、イオは楽しそうな笑い声をあげるだけで一向に私を解放しようとしなない。それどころか、グイツと私の体を持ち上げると、自分よりも高いところに位置付けた。

まるでタカイタカイされているようだ、と子供のころの記憶が垣間蘇る。しかし私のことを上目遣いで見てくるのは父ではなく、金色の瞳を細めた美声年で…。

「交換条件。俺にキスしてくれたら返してあげる」

耳元でそんなことを囁かれて、私はたまらなく掴んでいた彼の肩に爪を突き立てた。

いつもの彼だったなら、きつとこの場で「ふざけんじゃねえ」と蹴りを見舞って逃走できたのだろう。

なのに、今日の彼はいつもとは違う…。露出度の高いいつもの黒い服ではなく、ちゃんとしたスーツを着ている。こんなもの、持つてたんだと上から見て改めて思う。

緩められたネクタイから見える彼の白い肌が、不思議な色気を醸し出していた。ワインを自分でも呑んできたのだろう、抱きあげる手

がとても熱い。私はその熱に浮かされるように、彼の瞳に見惚れていた。

綺麗な、黄金の瞳。口元はからかうように笑っているのに、瞳は切なげに揺れている。

「じゃなきゃ、ずっとこうして捕まえてるよ。夜が明けるまで」

もう一度耳に唇を近づけて、イオは妖艶に囁く。私は唇をかみしめながら、どんどん加速していく心臓を押さえつけるように目をぎゅっと閉じた。

「そっ、そんなの困るわっ。私、帰らないと…っ」

「じゃあ、キスして？」

「ふざけないで！で、できるはず、ない…っ」

「じゃあ、俺からやる」

「そっ、それもヤダッ！」

「わがままだなあ…じゃあどうしたいわけ？」

「わ、わかつたわよっ、す、するから目え閉じてなさいっ！」

一瞬、イオが「ほんとにするととは思わなかった」とでもいうような変な顔をし、次の瞬間まるで…男に使うのは変かもしれないが、花が咲いたように笑った。

そのたまらなく幸せそうな笑顔に、心臓が大きく跳ね上がる。

妖艶な笑みよえりよりも、シニカルな笑みよりも、優しい笑みよりも…この顔が、一番好き。私はドキドキする胸を手で押さえながら、大人しく目を閉じるイオの顔に唇を近づけた。

まずい、顔が赤い。今こんな顔を見られたら、問題だ。

私は勢いに任せて、まるで頭突きをするように唇を彼の額にあてた。そしてコンマ一秒もたたずに素早く顔をはなす。

イオは額に感じた感触に不思議そうな顔をし、私を見上げる。金色の瞳に見つめられていたたまれなくなつた私は、耳まで真っ赤になりながら息こんで宣言した。

「は、はいっ！終わりっ！！」

「キスつて…今のが？」

「わ、悪い?!」

(は、はずかしいはずかしいはずかしいっ!!)

たかが額とはいえ、自分からキスするなんて言うのは初めての経験だつたのだ。無理やり奪われたファーストキスよりもはるかに恥ずかしいというのはどうということだろう。

私は涙目になりながら、呆然とするイオを睨みつけた。

イオは夢から覚めたような顔になると、困つたような嬉しそうな笑顔を見せる。しかしその瞳に落胆は見えなかつた。

「そうじゃないけどさ、ちよつと斬新で」

「うっ、うるさいっ！これが精一杯なのよっ！！」

「あははっ、じゃあ将来性に希望するよ。次は、ここに、ね」

長い指がイオ自身の唇を指差す。私はカアアツと赤くなりながらも、ぐつと押し黙つた。

イオが満足したのか、私の体を地面に下ろす。指先が地面を感じた時、私は思わずほおつと安堵のため息をついてしまった。

それで、終わればよかった。

しかし、イオはまた悪戯を企んだような光を瞳に映し出し…グイッと私の腰を自分のほうへと引き寄せた。

「ごめんね、でも俺にはまだ足りない」

「なっ、なに…ふっ…」

突然唇に落ちてきた柔らかい感触。抵抗する暇もなく、性急に熱いものが歯列を割って口内に入ってくる。逃げる舌を、追いかけては絡め取る。戻りようがないほどまで深くなつていくキスに、私は息も忘れて震えていた。

うまい、とかそんなもんじゃない。さすが百戦錬磨の男…。キスが、こんなにも熱いものだなんて思ったことなかった。

侵入してきた舌がざらりと上顎を舐めた時、私はようやく我に返った。その舌を思いつきり噛もうとする前に、イオは何かを察したのか即座に唇をはなす。

突然の終わりを告げたキスは、透明な糸を残して何事もなかったように幕を閉じた。

だが、それは彼だけ。私はそんな悠長なこと、言ってもらえない。

うん、そうよね。どうせこいつは慣れてるものね。

私なんかの幼いキスじゃ全然足りないでしょうよ。こいつは慣れる、ものね…っ！！

「なにすんだクソボケええっつ！！」

「うわあっ！！…っつと、あぶなあ…」

右ストレート、一発！！

しかしそんな渾身の一撃を、あろうことがイオはひらりと横によけてしまった。ルアもロキもこれで仕留められたのに、なんでだろう。私は呆然と握りしめた拳を見やりながら、その場にへたり込む。

せめて右ストレートが決まっていたなら、気分も晴れていたのだろう。でも、外れてしまった今…私はこの黒い感情をどこへ向ければいい…？

「あ、アリス？」

突然大人しくなった私にイオは警戒を解いたのか、どこか心配そうにこちらを見上げてくる。その頬に張り手を食らわせてやるうかとも思ったが、そんな気力すら湧かなかった。

ただ、ズキズキと痛む胸を押さえながら、涙を伴わない嗚咽をあげ続ける。

彼とのキスは、いつも心が苦しい。下手だからとか、まさかそんなのじゃなくて…うますぎて、怖くなる。

私以外にもいっぱい相手はいるんだろう、とか。私だって遊びの一部だ、とか。

でも一番怖いのは、そんなことを考えてしまう自分。こんな汚い感情を抱いてしまう自分が、気持ち悪くて仕方ない。

「ほ、本気じゃないなら…っ、キスなんて、しないでよ…っ！！」

イオの顔は、見えなかった。しかし一瞬息を飲んだのだけはわかる。長いような短いような沈黙があつて、私の頭に大きな手が置かれた。そのまま、なだめるようにそつと撫でられる。

そういうところ、とてもずるいと思う。こんな…壊れものを扱うように大事にされては、特別なんじゃないかと錯覚してしまいそうだ。

「……ごめん」

それは、私の言葉を裏切るから「ごめん」なのか、それとも私に不用意にキスしたから「ごめん」なのか…。

しかし、それを問う前にポロリと涙がこぼれてきて、私はたまらず泣き声をあげた。

ようやく落ち着いた私の背中を、まだ心配そうにイオはさすりながら立ち上がらせた。

いつの間にか頂上にあつた満月も傾いてきている。私ははあっとため息をつくとき、元気のなくなつたイオの髪をそつと撫でた。

今思えば、我ながらかなり恥ずかしいことで泣いてしまつたものだ。その恥ずかしさを隠すためでも、意気消沈してしまつたイオを慰めるためでもある。

しかし、驚いたようにイオに見つめられると、髪をなでていた手も止まる。

「アリスは…こんなふうにロキの頭をなでるの？」

「うっ…か、関係ないでしょ！あんたにはもうやってやらないわよっ！これはあんたが元気なさそうだから、特別よ特別！」

ロキで癖になつていたから忘れていたが、こういうことをやるのってどうなんだろう。いくらなんでも慰め方にしては幼く思えてきて、私は照れ隠しのためにガシガシと力を入れてかき混ぜる。

イオは痛そうに目を細めるが、なぜか嬉しそうな笑い声をあげた。

「特別：いいね、特別」

「め、滅多にやんないんだからね！」

「うん、いい。それでいいよ」

俺はたまにでいい。

そう呟いた彼は、何を思っていたんだろう。

私はまた赤くなる頬を隠しながら、手を下した。イオの髪はところどころはねていて、掻き混ぜすぎたせいか少しくちゃぐちゃだ。

それでも彼は一向に気にすることなく、お返しとでもいうように手を差し出してくる。

「……手、繋いでもいい？」
「な、何よっ、そんなことまで許可取らなくても……っ」

ここで頷くというのもそれはそれで恥ずかしいじゃないか。そういう意味合いも込めて睨みつけてやると、イオは可笑しそうに笑って「そうだね」と答えた。

いつもの強引な彼にはあるまじき、殊勝な態度。そう言えばこうやって手を繋いで歩くのなんて、滅多にないかもしれない。

通常なら抱きあげたりおんぶしたりと、私の意志なんて関係ないのだが……。

私は握った熱い手に、ぎゅっと小さく力を込めて握り返す。
滅多にやらないこと……それが、特別だというのなら、こっぴつことを言っのだからうか。

ただ手をつないで歩く、それだけの行為に、こんなにも胸が高鳴るのはなぜだろう
……

f i n . . .

第四幕 アリス大好き 様リク：散歩、迷子、アッパー

……とりあえず、あの紫の異物にだけは会わないように気をつけな
いと。何をされるかわからないし、遭遇しないことに越したことは
ない。

私はテーブルの上にあったオレンジジュースを手に取りながら煌び

やかに進行されていくパーティーをぼうつと見やった。

本来女王と敵対しているはずの帽子屋やチェシヤ猫も参加しているのだから、かなり大規模なパーティーだと思う。

まあ、こんなに人がいるんだもの。滅多に会わないとは思っけどね。私は苦笑しながらオレンジの液体を口に含む。渴いた喉にひんやりとして心地よい……。

「あれー、アリスじゃん。ひっさしぶりー」

「ぶふー……」

「な、何すんのさいきなり。汚い！」

私はひよっこりと現れたイオの抗議など聞かずにごぼっげぼっげっ……と盛大に咳きこんでいた。思わず吹き出してしまったオレンジジュースはイオの顔面にぶち当たり、白いシャツを見るも無残に汚してしまっている。

しかしまったく罪悪感がわかないのはきつとすべてがこいつのせいだからだ。

「あーあー…俺あんまこういう服持ってないのに…どう責任取ってくれんのさ、アリス」

「スミマセンデシタ。ではさいなら」

啞然とするイオをよそに、私は乱暴に口元をぬぐうと、人込みをかき分けて彼から遠ざかった。食い逃げしたような気分だったが、これ以上奴といると「責任の取り方」と言うのが変な方向に行きそうな予感がする。

案の定彼は一瞬つまらなさそうに鼻を鳴らすと、私よりも巧みに人と人の間を通り抜けて追ってきた。わ、私のほうが細いのに……たぶん。

「だーっ、待てアリスーっ！シャツ弁償しろーっ！」

「そんな金は持っていませんっ！」

「なら体で払えーっ！」

「無理っス！」

これでは埒が明かない、というかいつか絶対捕まる。涙目になった私は足を動かしながら周りを見渡した。

右にはオヤジたちの社交界、左には乙女達の井戸端会議。……うおい、わかりやすくわかれてんな。

私の頭の中に一つの考えが思い浮かんできた。むせかえるような香水の匂いに一瞬躊躇したが、それどころではない。私は左の乙女たちの集団に飛び込んでいった。

「し、失礼します……」

きゃいきゃいと騒ぐお姫様やら貴婦人やらに辟易しながら、私は何とか地獄を通り抜ける。

イオがここまで追ってくるのが見えたが、私よりもさらに難航しているらしい。

いや、難航…というか…。

「きゃあっ、いい男！」「可愛いわあっ」「見て見てこの耳！」「えーっ、触りたい触りたい！」「ああん、おどきなさいよ貴女達」「私、私も触るわ！」「こっちの尻尾もすぐくもふもふしてるわよ！」「あら本当！かわいいわあ…」「どきなさいってば、私にも触らせなさいっ」「うるさいわねえ、あんたこそどきなさいよ、このあばずれ」「何ですってえ…！」「ちよつと、お名前なんて言うのかしら？」「あたくしの愛人になりませんか？」「きゃあっ、彼氏にしたい！」「ああーっ、抜け駆けは許しませんことよ！」

「にやあああつー!」

襲われて、いた。

いくら女に関しては何戦錬磨、殺人に関しては最強にして最凶の暗殺者と呼ばれているイオでも、数十人のけだものたちには敵わないらしい。

「う、うーん…作戦成功?なんかちよつと腑に落ちないような…」

耳や尻尾、果てはあんな所やこんな所まで触られて涙目になっているイオに、ほんのちよつと罪悪感がわいてきた。が、私はその隙にとバルコニーに逃げ出した。

「アリス?!どうしました?」

「ルア!」

荒々しく足音を立ててやってきた私に驚いたのだろう、ルアはほんの少し声を高くしながらこちらに駆け寄ってきた。まさかここにいるとは思わなかったのだ、私もびっくりだ。

……と、こんなことをしてはいられない。後ろの乙女たちの声はもうすでに「ええ〜つまらな〜い」だとか何とかになっっている。きつとイオがうまくあしらっているのだろう。いつあの罠から逃れるかもわからないのだ。

私はルアとの距離を詰めると、堰を切ったように一気に話し始めた。

「い、今イオに追われてるの!あいつつてどっかに追い出せないの?!と、とりあえず貞操の危機を覚えてるんだけど…!」

「はあ?アリスつたら…また何をやらかしたんです。無理ですよ。」

一般人を追い出すならともかく、“カードもち”をこちらから追出すことなんかできません。ルール違反になります」

「ううっ…ど、どうしよう…」

私の怯えた瞳にルアが心配そうに背中をなでてくる。そう、ここは落ち着かなきゃ。体力面ではイオに勝てるわけないんだから、ここは頭を使って…！……頭脳面でも勝てる気はしないけど！

悶々と考えはじめた私をはらはらと見守っていたルアだったが、何を思ったか私の手首を掴んで強引に顔をあげさせた。

「とりあえず、外に行きましょうアリス。ここでは闘っちゃいけないというルールなので」

「で、でもルアは“カードもち”なんじゃあ…」

「追いだしてはいけません、自主的にパーティーを抜け出すのは許されてます。外に出してしまえば殺し合いも違反になりませんので」

ニツコリとさわやかに笑いながら物騒なことを言うルアに、私は一瞬この人と一緒に大丈夫だろうかと言う一抹の不安に駆られた。イオは間違いないが危ないが、ルアもルアで問題は数え切れないほどある。

私はまだ納得しきれていなかったが、仕方なく頷いた。

そうして、今に至る。

「あれー、変ですねえ…ここにさっきつけた印があります」

能天気な響くルアの声に、私はげっそりとため息をつきながら「そう…」と呟いた。

パーティーから抜け出してきてどれくらいの時間がたっただろう。少なくとも歩き疲れて足がしびれるくらいの時はたつたはずだ。パーティーを抜け出して外に出た…そこまではよかった。なのに、この馬鹿男が…

『森でも散歩しませんか』

なんていうから…！こんな真夜中に森で散歩など、自分から彷徨いたいといっているようなものだ。

印をつけて進んできたのに、なぜかこの状況に至っている。歩いてもあるいても、同じ印を見つけてしまったり行き止まりだったり。つまり端的に言うと、そろって迷子になってしまったのだ。

「ねえ…貴方、この国の住民よね？だったら森の探索くらいしときなさいよ…」

ぶつくさと私は文句を言いながら木に目印をつけていくが、ルアはそれをさらりとかわした。

「無理ですよ。ここは“チェシャ猫の迷いの森”、チェシャ猫しか全体像を把握していません」

「……そんな危ない所に何でわざわざ散歩しに行くのよ」

「いやあ、なんとかなると思っただけですけどね。やっぱり何ともありませんでした」

この野郎、ぶん殴ってやろうか。

いきり立つ私を諷めるようにルアはへらっと笑う。その無邪気ながらもどこか情けない笑みに、私は脱力しそうになる。そう、平気で人を殺す癖に、こいつはいつもこのような笑顔を見せてくるのだ。だから、憎めない。どうにでもなるか、と私までつられて思ってし

まう。

しばらく、沈黙が続いた。ルアは時折その場にしゃがみこんでは小型ナイフを取り出して小さな傷を木につけていく。私は疲れで震えそうになる膝を必死に抑えながら、その様子を見守っていた。

「ここも、同じ場所ですか」

同じところをぐるぐると回っていることに気付いたのだろう、ルアはついに疲れたような溜息をついた。木に彫られている傷は、4つ。今を含めて5回はここを通ったということだ。あたりを見渡しても、明かり一つ見当たらない。ルアが持ってきた光源もそろそろ電池が危なくなっているはずだ。

「仕方ない…今日は野宿と言うことになりましたが、構いませんか？」
さすがにこの状況では、嫌とはいえなかった。こうなったのは私の責任でもあるし、第一、私なんかよりもルアのほうがよっぽど辛そうな顔をしている。

「すみません、アリス。貴女をこんな目に遭わせてしまって…」
「し、仕方ないじゃない。わざとじゃないんだからもういいでしょ」

謝られるたびに、私の中の罪悪感は何積を増していく。この事態に巻き込んだのは、どちらかと言うと私だ。ルアはただ、私を匿おうとしていただけ。
しかしルアは悲しそうな顔でかぶりを振ると、私の髪をひと房指で救った。

「そうじゃありません。こんな状況でもやっぱり、僕は貴女の隣に

いて嬉しいんです」

そっと、包み込むように抱き寄せられる。そこにいつもの強引さがないのはやはり迷子になったことに罪悪感を感じているからだろうか。

私は身体をわずかに身体をこわばらせながらもその腕に身をゆだねる。冷たい空気の中、彼に触れている部分がじんわりと熱くなっていた。

「酷い、ですよ。貴女が困っているというのに、僕自身は喜んでるなんて……」

「うん……」

「でも、僕は一分でも多く貴女の隣にいたいんです。できれば、二人きりで……」

「うん……」

「だから、迷ったフリをしてました」

「うん………つてええっ?!」

私は驚きでばつと勢いをつけて顔をあげた。視界が開けた、瞬間にルアの爽やかな笑顔が目に入ってくる。爽やかで……どこか黒い笑みが。

迷った、“フリ”をしていた？

「ど、どういうこと?! あんたまさか……」

「当たり前でしょう? この僕が城の周辺の探索をしていないはずがない。ここは僕の庭のようなものです」

「じゃ、じゃあ、い、今まで迷ってたのは……」

「とりあえずイオが諦めるまでの時間稼ぎも含めて、アリスと一緒にいたかったから演技をしてました」

なら、私が今まで感じていたザイアクカンとやらは…？
心のどこかで何かの感情が抜け落ち、かわりに沸々と怒りがすごい
勢いでわきあがってきた。
私はドレスの袖をまくりあげて腕をあらわに見せる。

「ルアっ！そこになおれっ、一発殴らせなさいっ！！！」

「嫌ですよ。アリスのプロレス技って意外に痛いし、一発じゃ済まないし。それに僕がここで気絶したらアリス、帰れませんよ？」

「ほんとに一発！ビンタでもいいからっ！このままじゃ私の気が済まないっっのー！」

「嫌ですったら。それに僕、一度も迷ったなんて言ってますんよ？
最初から“散歩”って言ったのに勝手に迷子と思っただのはアリスじゃないですかあ」

「じゃあ面白いわあっ！！！」

ドゴッ

結局、ルアには頭突き一発で済ませてやった。当然それだけで怒りが収まるわけなかったが、ここで伸してしまったら確かに私は帰れない。

ルアはそれでも納得いかない様子でぶつくさ文句を言っていたが、私が睨みをきかせた途端に黙り込んだ。

「……ほんとは」

むうっと拗ねた調子で語り始めるルアの額は、真っ赤になっている。それは恥ずかしかつている、というわけでもなくただ単に私が噛ました頭突きの影響だった。ちなみに私の額もひりひり痛んでいる。

「ほんとは、アリスが僕に頼ってくれるのを待ってたんです」

「どういうことよ、それ」

「だってアリス、足随分と痛めてるでしょう？」

私は驚いて真剣に見つめてくる水色の瞳を凝視した。私だって必死に隠そうとした足の痛みを、こんなに確信をもって言いあてられるとは思わなかった。

「え、ええ、まあ……」

「どうして僕に言ってくれないんですか。言ってくれたら、おぶつてもするのに」

「だってそんな…ルアに悪いじゃない」

ただでさえ、日に日にルアへの甘えが過剰になってきている私だ。ルアはいつもそうしてくれたほうが嬉しいと笑顔でいうが、やはり負担は感じているのだと思う。これ以上甘えるわけにはいかない、そう常々自分に言い聞かせているのだ。

しかし歯切れ悪く私が言くと、ますます不機嫌そうにルアは目を伏せた。

「そんなに僕は、頼りがいがありませんか」

悲しげに呟かれると、違うと反射的に叫んでしまいそうになる。しかしそれを押さえて、私はそつと諭すように言った。

「そうじゃない。ただ…私だって、ルアが大事だから…あんまり甘えたくないの。でも、私が一番頼っているのも甘えているのも、間違いないルアよ」

「……じゃあ、今もちゃんと甘えて下さい。足が痛かったら、足が痛いつて言っして下さい」

「……わかったわ」
「そうですね！では早速！」

………はい？

突然明るく輝いた彼を私は啞然と見やる。今までの暗い雰囲気はどこへか、台風が去ったような晴れ晴れとした笑顔を顔一面に浮かべていた。

ひくり、と私の頬がひきつる。
「フイ、まさか……今のも、演技？」

ブチッ

私の中で、我慢の限界とやらが音を立ててぶちぎれた。そんなことも知らずに、ルアは無邪気に手をたたく。

「ってことで、帰りはおんぶしていきますからね！ちゃんと甘えるときは甘えて下さいよ、アリスったら」

「黙れこのクズウサギいつ！！」

今度こそ、私のアッパーが彼の顎に命中した。

結局女に二言はないってことで、おんぶされながら長い長い散歩を終えることになったんだけどね ……

f i n . . .

「はあっ、はあっ、は…」

バタツ

えっ、ちょ、アリス?!なんで君倒れてんのさ。そっか、さすがに2作いっぺんはきつかったか…。しかも2作目なんてほとんどルアの鬼畜につきあわされただけだったものね。

……え、何、遺言状?

□

親愛なるフレイム様へ

もう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っす
もう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っす
もう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っす
もう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っすもう無理っす
もう無理っす……

休暇下さい

バイ死にかけのアリス

『

……ってホントに要点をえない遺言だな。
ねえルア、どう思う?

「どう思うって…既にアリスは植物人間状態だし、さすがに無理なんじゃないですか?ロキなんて自分探しの旅へ出たつきり戻ってきてませんし。あ、今イオがつれ戻しにかかっています」

はあ…って次はよりによってロキアリだよ…。主役二人がいなきや
どうにもなんないじゃないか。
ったく…どうしようかな。

バリッ

「何のホラーだバカ野郎」

と、言うわけだ。これと呼んで下さっている方々、誠に申し訳ないがこれで番外編は終了とさせてもらおうよ。

次回の司会者は…今のところあの眠りネズミ…なんていったけな？ そいつがなることになっているらしい。まあ、あくまで予定だけだね。

それでは、ルア、挨拶頼む。

「何で自分から言わないんですか、貴方はまったく…。それでは皆様、また会える日をお待ちしております」

ます。

おい、衛兵！その植物人間、通行の邪魔だから片付け

とけ！！

どうも、いっぺん死んだほうがいいような気がするバカ作者です。本当にこの度は申し訳ありませんでした。最初書いているあたりからヤバいとは思っていたんですが…予想的中です。

もう本当にすみません！絶対に次まとめて仕上げます！

……と、なんだか謝罪の言葉を延々と連ねているとルアが殴りこみに来そうなので、解説に入ります。

【チエシヤ様リク】

前回のルアアリ（プリクラ編）の続きとのことでした。アリスが約束を破ったんじゃないかと思ったルアが悪戯を仕掛ける、という話です。

本当は言葉攻めだけにするつもりだったんですけどね…なんだからこの間にか蜂蜜をもちだしてしまった…。

番外編を書いていて思ったんですが、ルアって下手すればイオより鬼畜ですよね（・・・）

【ナナ様リク】

イオアリで夜道 ディープキス 「手、繋いでいい？」とのことでした。これは最初っから甘々でしたね。

アリスの挙動不審が何ともいえず書いてて楽しかったです。もうあれはツンデレ以外の何物でもありませんね（・・・）

イオくんは扱いやすくてすごく好きです。でも今回の「手、繋いでいい？」はちょっと悩みました。繋ぎが乱暴だったのは反省しております…。

変態と名高い彼ですが、私の視点から見るとすごく可愛いです。時々出る「無邪気」の表現とか、書いていてニヤけてきます（こちらが変態です）

【アリス大好き 様リク】

ルアアリで夜道 迷子とのことでした。うーん、まさかのギャグ…。本当はラブラブにしたかったのですが、今回ずうっとそいう系ばつかでしたので、趣向を変えて書いてみました。

うん、ルアくん鬼畜全開モード（。＊）！！

書いていてかなり楽しかったです。後半のどんでん返しもそうですが、特に面白かったのはイオが乙女たちに襲われるシーンですかねえ…。まさかのハーレム誕生のイオくん…w

あ、ちなみになんでこんなに更新が早かったのかと言うと、前回の更新が遅すぎたからです。

基本的に1ヶ月1回更新は守ろうと努力してきた私ですが、アクシデントのおかげでそれを破ってしまいました。

ですから2カ月に2回やればいいかな、と10月6日までには投稿したかったです。はい、単純明快な頭です。

次回からは本編に戻ります。

アリスに涙交じりの告白をしたが、アリスは…?!

本編です。

森の中にて、ロキの告白を受けるアリスだったが、彼女の出した答えは…？

以前より本文が長すぎる気がしていたので、今回からこま切れに出すことにしました。

目指せ、一週間一回更新！

心のどこかで、わかっていたのかもしれない。

だから不思議と、驚きはなかった。ロキの行動よりもむしろ、「ああ、そうなんだな」と素直に受け入れた私自身に瞠目する。

口づけは、まるで涙を流し続ける私を宥めるかのように何度も行われた。無理やりしてくるでもなく、だからと言って軽いわけでもなく、ただ、相手を思いやるような、そんな口づけ。あまりにも優しいキスに、胸が熱くなる。

ああ、そうだ。私は最初から、わかっていた。

ひたむきな瞳。触れる体温の熱さ。差し出される手。ぶっきらぼうでも優しい言葉。悲しげな、瞳。

それらがすべて私への好意からきているであろうことを、自意識過剰でもなく、自覚していたのだろう。

だけど、私はそんな自分から目をそむけてきた。

悲しい。どうしてだろう。好きと言われて悲しいなんて、馬鹿みたい。

私は、長い口付けに終止符を打ち身体を起こしたロキの瞳を見上げる。

漆黒の瞳は、今まで見たことないくらいに濡れていて綺麗だった。しかし、綺麗なものほど脆く、壊れやすい。

「私は」

ぐつと詰まりながらも、私は必死で言葉を紡ぐ。

おさまったはずの涙が再びあふれかえってきそうで、怖い。でも、一番傷ついているのは私じゃない、ロキだ。そのロキがもう涙を止めているというのに、自分が泣くわけにはいかない。

ロキだって泣いていたのに、私が泣き出してしまったせいで泣けなくなった。私の涙を止めるために、自分の涙を押さえつけてしまった。

泣きたいのに、泣けない。それではあまりに、ロキが可哀そうだ。

「私は……貴方にだけは、好きと言ってほしくなかった」

なんて残酷な、言葉だろう。振るよりも拒むよりも残酷な否定の言葉。

私は彼の瞳を直視することができずに、俯いた。どんな瞳をしているだろう。絶望。悲しみ。怒り。……全部、私のせいだ。

もういつそ、突き放してくれたらいい。こんな残酷な私を、嫌いになってくれればいい。それができたら、どんなに良いだろう。どんなに　　ロキは救われるだろう。

でもきつと、優しい彼はその言葉を言わないことを、心の片隅でわかっていて、期待している。嫌いにならないで、どこかでそう思

っている。なんて残酷で、卑怯で……弱い、私。

私は決して彼の瞳を見ないようにしながら、ロキの言葉を待った。

ロキはしばらく黙っていたが、私の体に手を添えて起こすと、そのままあやすように背中を撫で始めた。

「そう、か」

声がかすれてうまくしゃべれないのだろうか、彼は一度大きく唾を呑みほしてから言いなおした。

「アリスに、前から言いたかったことがあるんだ。……顔、あげるよ」

真上で優しく言われて、私は躊躇しながらもゆつくりと顔をあげていく。彼の瞳が視界に入って、思わず動きが止まる。

ロキは思ったとおり、私を怯えさせないようにときこちない笑顔を浮かべていた。だけどその瞳に浮かぶ悲しげな色はごまかせない。

「ごちん、と額と額を少し強く打ちつけられて、私は我に返った。

あの漆黒の瞳が、数センチ先にある。

「よく聞いとけよ」

ロキはこの状況に似つかわしくないほど明るい声で言った。瞳も笑みに合わせて細められる。

私は驚いて、目を見開いた。先程まであんなに悲しげな声をしてきた彼が、いきなりこんなに明るくなるなんて。

「俺、意外と執念深いタイプなんだ。だから今みたいに曖昧な振り

方じゃ全然堪えないし、諦めようとも思わない」

子供が悪戯をするような口調で紡がれた言葉に、私は耳を疑う。
一瞬何を言われたか分からなくなり、彼の額から少し顔をはなして首を傾げる。

それは、つまり 私の聞き間違いじゃ、なければ。

「じゃあ」

声が震えて、変なトーンになる。

嘘でしょ……。否定したがる私のほかに、真実であることを願う私がいるのにも気づいた。

そう……。そうだよ。きつと、好きと言われて悲しいだけじゃなかった。ちゃんと、嬉しかった。胸が熱くなった。応えることはできなくても 寄り添っていききたいと、思った。

私は真剣な眼差しで次の言葉を待つロキにふわりと笑いかける。その際に、目の端にたまっていた涙が一筋伝って落ちた。

でもそれは、さっきまでの悲しいものとは違う。

「私のこと、まだ好きでいてくれるの？」

私は、ずるい。自分で振っておきながらこうやって相手の優しさに付け込もうとする。

それでもロキは、笑ってこんな私を受け止めてくれるんだ。

「諦めてほしかったら1000回嫌いって言ってみやがれ」

軽口のように彼は言うが、その言葉がどれほど嬉しかったか。私はくすぐったそうな笑い声をあげながら、軽口を返す。

「いくらなんでもそれは疲れるわよ」

「じゃあ言わなきゃいいだろ」

「うん……言わない。言わないよ、ロキ」

ああ、駄目だ。これ以上彼の瞳を見てると泣き出してしまいそう
だ。

私はふらつく足を奮い立たせて立ち上がった。ついでにロキの腕
も引っ張って立たせようとする。

「いでででえええつつつ!!」

途端、すさまじい悲鳴を発したロキに驚いて私は腕を取り落とし
てしまった。

ロキは自分の体をかばうように両腕を絡ませると、涙目で私をキ
ッと睨んだ。あ、可愛い……。

「お前絶対俺が骨折ってんの忘れてんだろっ!」

「へ? って、ええっ?! ほ、骨折ってたの?!」

「たぶんただのヒビだけだな。今は痛かったぞ!」

「う、ごめん……」

まさか骨折ってたなんて思わなくて、と私が弁解するように言っ
と、ロキは拗ねたように私に背を向けてしまう。

怒ってしまったんだろうかと不安になった私は彼の肩に手を置い
てうとして……その肩が、震えていることに気づいた。

「ほ、ほんとに、痛かったんだから……っ」

震える声の間に聞こえてくる、小さな嗚咽。私は手を彷徨させた
まま、私自身も背中を向いた。彼の背中に自分の背中をくつつける

と、嗚咽と震えがじかに伝わってくるようだった。

(平気なわけ、ないよね……)

あんな振られ方して、次の瞬間には明るくふるまっていて。私を元気づけるためだけに軽口まで言って。全然平気と嘘をついて……

でも、そんなの心がついていかない。

「ごめん、ね。痛かったよね」

そう、これは彼の体の話。腕を引っ張ってしまったから折っていた腕が痛い。

……そういうことにしとかなないと、意地っ張りの涙は流せないんでしょよね。

痛いのは、腕。彼が泣いているのは、腕の痛みのため。

だけどほんとに痛いのは、彼の心だ。

「ターゲット・ロックオン 標的確認。どうする、ディー？」

「どうするも何も、ダムをしたいようにすればいいよ」

「そうだな、俺がやりたいことはディーのやりたいこと」

「僕がやりたいことはダムがやりたいこと」

「だって俺らは」

「だって僕らは」

「トウエイドルディーアンドダム “門番”だから」

茂みに隠れた二つの影は、くすりと笑い合う。それがお互いの合言葉だった。

確かめ合った二人は、再び鷹のように鋭い瞳をアリス標的へと向ける。

「つかまえた
捕獲！」

突然の銃声に、木々に止まっていた鳥たちが一斉に飛び立った。

いつもの作者です(〃。。(ノ)

さて、番外編が終わったかと思っただらすぐにこれっすよ…暗いなあ…。

でもようやくこれでロキくんとこの決着がつきました。結局アリスは彼を振ってしまったんですが、脈がナイこともナイ気がするけどやっぱナイのかどうかなんて私にはわからナイ…つまり将来に期待して下さい オイ

にしても、やっぱりロキが暗いのって似合ってるなあ…としみじみ思います。と言うかエロもできないしギャグもできないし、結局シリラスしかできない、可哀そうな子…。

今回は、さあ、やってまいりました奴ら！最後のほうにちょこつとありますが、あんな奴らです。

このアリ幕では可愛い系のキャラが多すぎる気がするので、今度こそ男らしい男を目指しています。

すべてが、狂っていった。

701

母さんは瞳に涙を浮かべて。父さんは瞳に氷を宿して。

『もうやめてよあなたっ！ お義母さんが亡くなってからの貴方、ちよっとおかしいわよ！』

母は、昔はよく笑う人だったのをおぼろげながら覚えてい
る。

清廉に咲く純白の薔薇のような笑顔で、幸せだと。

なのにあのときはとても怖い顔をしていた。

髪を振り乱して、手当たり次第にグラスや花瓶を割って泣き叫ぶ
母を見た私は、祖母から貰った大切なウサギの人形をきつく抱きし

め恐怖にむせび泣いた。

それがはじめての、殴られた記憶

『うるさいっ！』

温厚だった父は鬼神のような形相で私の横面を思いきり張り飛ばした。その衝撃で抜けた歯は幸い乳歯だったが、すさまじい痛みを残していく。

父はますます大きな声をあげて泣き喚く私の腕からウサギの人形を取り上げ、それを左右に引っ張りバラバラに引き裂いた。

中の綿が飛び散り、私の目の前に墮ちる。

その白い綿が、枯れて散った白薔薇の破片のようで。

綺麗に舞ったその花びらは、悲しいほどに美しく儚かった。

母の嗚咽と父の哄笑。私はウサギの残骸をきつく抱きしめながら懺悔を繰り返した。

取れた首から出てくる綿を、何度も手で入れなおす。そのたびに揺れる赤色のつぶらな瞳が私を恨めしげに見ている気がして、びくりとウサギを取り落とした。

『じっ、ごめんなさい、ごめんなさい、ウサギさん』

父の罵声が再び聞こえる。何かを強く叩く音、何か割れる音。もう、嫌だ。嫌だ、嫌だ、こんな世界、嫌い。

誰か、誰か、助けて。私をこの世界から連れ出して。どこか、違う世界に　　っ。

『ウサギさん……たすけて……っ』

突然、あたりが白い光に包まれた。私はあまりの眩しさにぎゅゅと目をつぶる。

何が起こったのだろう。わからない、なんでこんなことになってしまったのだろう。

助けて、助けて、怖いよ、怖い。痛い、もう嫌だ、助けて。怖い、痛い、消える、助けて、怖い、イヤダ、タすけて、誰力、ウサギさ、おバあちゃん、オ父さん、オカアサ、タスケ ……

『もう、大丈夫だから』

……エ？

ココ、どこ……？ なんでワタし、こんなところ、ニ？
あなた、だレ？ わタ、シと、スゴクそツク、リ、ネ。

『もう、傷つかないでいいのよ。私が、の痛みを全部受け持っであげる』

イタ、み……？

わタシヲ、たスケてくれる、の？

『うん。私が のかわりになる。だから……貴女は、別の世界に行っって』

ベツノ、セカイ？ 嫌ダ、ヤだヨ。ヒトリはやダ。ヒトリニしないで、イヤだ、怖いよ、行きタクない、ヒトリハイヤダ。

『お願い、いい子にして。必ず迎えに行くから。いい子にして

たら、必ず迎えに行くから』

ホント、ニ？

『うん、絶対行くから。だから、今は……死んでちょうだい』

約束、ネ。ちゃんと迎え、ニキて、ね。待つテル、ヨ、ワタし、
マッテる、から。イイコに、シてまッテ、ルか、ラ。

約束ね

……

「ん……」

突然頬に冷たいものを感じて、私は重く落ちていたまぶたをうつすらと開いた。

柔らかい人工的な光が視界に入ってきて、一瞬自分がどこにいるかを忘れてしまう。そうだ、私ロキと森にいて……それから、どうしたのだろう。

すべてが夢のようにおぼろげだ。私は考えるのを諦めて二度寝を決め込むと寝がえりを打つ。

しかし、まぶたを無理やり引つ張られ、私は悲鳴をあげながら覚醒するしかなかった。一気に意識がこちら側へもっていかれる。強制的に私の視界を開かせた張本人は、それはそれは嬉しそうに私の視界の中心で笑った。

「ああ、よかった。ちゃんと生きてたぜ、デー」

(……………だ、誰……………?)

座っているからよくわからないが、座高からしてかなりの大男。無駄な脂肪のないほっそりとした肢体はバスケの選手を思わせる。フレイムほど色素は濃くはないが、サラサラの赤髪。切れ長の瞳は春先の新緑のような黄緑色。20歳を過ぎたくらいかと思われる大人びた風貌。だらしなく着崩した黒い制服がよく似合っていた。そしてやっぱりお決まりの美形。

どこのどいつだこの野郎は。

まったくさっぱり見覚えがない顔に、私は瞠目する。しかしその

後ろにいたもう一人の人物に視線が移った時の驚きと言ったらない。

「そりゃそうでしょ。姫さまが死んじゃったら僕らの首が飛ぶもんねー」

「なー。やっぱまだ生きてはいたいよな」

同じ人物が、二人いた。

似ている、なんて生易しいものではない。同じ、なのだ。髪の毛の先から爪先に至るまで、全部。髪のはねかたも、悪戯っぽい笑い方も、顔の造形も、手の大きさも……。

私はあんぐりと口を開けながら二人を見比べる。二人は私なんか視界に入っていないかのごとくべたべたとひつつきながら会話をしていた。

「わーい、これで白ウサギの野郎に借り一つ、だね」

「それを言うなら貸し一つ、でしょ。僕らが借りちゃってどうすんのさ」

「あれ、そうだっけ？ まあいいや、次何買ってもらおう？」

「なんでもいいよ。僕が欲しいものはダムの欲しいもの、でしょ？」

「えへへ、そうだったな。俺の欲しいものはディーの欲しいもの。新しいトラップを買おうぜ。姫さま捕まえるので使い切っちゃったし」

「うん、名案だ。でも今回は幸運だったね。チェシヤ猫はいなかったし、楽に捕まえられた」

「ま、いたとしても殺すだけだったけどな」

「えへへ、殺すだけだ。だからチェシヤ猫にとっても幸運だったね」

チェシヤ猫って……もしかして、ロキのこと？

さあつと顔じゅうの血が引いていく音がした。ロキは今、腕を折っていて体が不自由なはずだ。そんなときに二人がかりで攻められ

たら……。

「ねえ……っ、あんたらまさか、ロキに手え出してないでしょうね？！」

言葉遣いが「僕」のほうの男の腕を掴んで、下から睨みあげる。どうしようもなく、不安だった。どくり、どくりと自分の心臓の音が生々しく聞こえる。

もしロキが、こいつらに攻められて、闘って……殺され、てたら。ロキが、殺されてたら……。

うつすらと、失っていた記憶が脳内で再生される。

ああ、そうだ、私は……こいつらにつかまって、ここまで連れてこられたんだ。

『こちら辺に泉がわいてるんだ。そこでちょっと顔洗ってくるな』

ロキは泣き腫らした目を隠すように俯きながらそう笑った。私は同じ笑顔で「いつてらっしゃい」と返す。

一人になるのは慣れていたし、何よりも今はロキを一人にしてあげたかった。私ははあっとため息をつきながらペチペチと自分の頬をたたく。

『うしっ、元気出していくぞーっ』

いつまでも暗い顔してられない。私には私のやるべきことがあるんだから。

そうガッツポーズを決めていた、その時だった。

パァン……

突然の銃声に、体中の血が凍りつく。そちらを向こうとしたが、私が動き出す前に何かが私の体に巻きついた。

『え……な、何よこれっ』

両端に重りを取りつけた頑丈なロープは、くわえられた力と重力により私にぐるぐると巻きついて、痛いほどの力で締め付けた。たった2重3重に巻きついていただけだというのに、ちっとも解けない。ついに重りに耐えきれなくなった体は、無様に地面に伏してしまふ。

私がロープと格闘していると、遠くの茂みから明るい声がした。

『うつしやー、捕獲成功！』

『何だ、簡単じゃん。白ウサギの馬鹿は何を手間取ってたんだろっね』

そちらを向きたいが、重りによって体が地面に縫い付けられているため動けない。何とか首だけ動かしてそちらを睨みつける、途端、何かのスプレーが顔にふきつけられた。

むせてごぼごぼとせき込む私をよそに、二つの影は興味深げに咳く。

『これがアリス？へえー、期待してたのよりも全然平凡』

『フレ임様が女装したほうが可愛いよね』

『うん、絶対そう思う。フレ임様女装してくれないかなー』

『無理だよ。フレ임様、白ウサギにからかわれるから嫌だっついていんだもん』

『じゃあ白ウサギを殺せばフレ임様女装してくれるかな？』

『そんなことしたら僕らがフレ임様に殺されちゃうよ』

『それは嫌だな。俺、殺されるとしたらディーに殺されたい』

『僕だって同じだよ。僕は、ダムに殺されたい』

『でもディーを殺した奴を、俺は殺すよ』

『僕も。ダムを殺した奴は、僕が殺してあげる』

『えへへ、照れるな』

『えへへ、照れるね』

だんだんと狂気を孕んでくる会話を、最後まで聞くことはできなかった。ふきかけられたのは催眠スプレーだったのか、まぶたが急速に重くなっていく。

力の抜けた私の身体を、二人のうちの一人が俵を担ぐように抱えあげたのを最後に、私は瞼を下した。

薄れゆく意識の中、私の名前を呼ぶロキの声を聞いた気がする。

身体を縛るロープは解かれていますし、なんの拘束もしていません。私はそれをいいことに、一人に突っかかるようにして胸倉をつかみあげた。

しかし何分、相手のほうがでかいのだ。うまく掴みあげられなくて、半分縋るような形になってしまふ。

「ここは、どこ。貴方たちは、誰なの？　ロキ、そうよ、ロキはどうしたの?!」

文節文節をわざと区切ってしゃべるが、二人はさっぱりわかっていないようだった。お互いを見合わせるようにして首を傾げる。

その様すらも綺麗な左右対称型だ。図ったかのような行為に苛立ちが増し、服を掴む手に力を込めた。

「ロキ……？　えーっと、誰だっけ、ディー」

「チエシヤ猫のことだよ。確か昼のほうだったと思うよ、ダム」

「ああ、よわっちいほうか。なら殺しとくべきだったな」

「駄目だよ、ダム。血なんてつけてきたら姫さまが怯えちゃうもん」

「そっか。俺ら、“アリス”には嫌われたくないもん」

「そうだよ、姫さまにはなるべく嫌われないようにしなきゃ」

二人が顔を見合わせてしまうと、あっという間にお互いだけの空間ができてしまう。焦れたように私が口を開きかけると、一人称が「俺」のほう気付いたようにこちらに顔を向けた。

そのまま、大人びた顔立ちに似つかわしくない、子供っぽい笑顔を浮かべる。

「死んじやいねえよ、俺らは姫さま連れてきたただけだもん」

「うん、鬪うのめんどくさいからトラップ使って足止めしてきた」

ロキに手出しはしていない。それをきいて、足の力が抜けそうなほど安心した。

先程の会話から、この二人はフレイムの手先だということは容易に推測できる。だとしたら女王の敵であるチエシヤ猫はいつ殺されてもおかしくない状況にあったのだ。なんで見逃したのだろう……？
しかしその答えは、私が聞き出すよりも先に本人たちの能天気な会話から引き出された。

712

「それにチエシヤ猫の始末なんていつつけられてないもんない」

「うん。あの意地汚い白ウサギなら『別に殺^やれなんて言ってるんでしょ』とかなんとか言ってる報酬くれないよね」

「ほんとほんと。タダで使われるほど俺らは安くないっつーの」

「それにめんどくさいしねー。服も汚れちゃうし、武器の手入れもしなきゃなんないし」

……ずいぶんとルアを嫌っているということにはわかった。

私は何度目かのため息をつきながら、グチグチとルアの悪口を続ける二人を見上げる。

マルスほどではないが、この二人も精神年齢と見た目年齢がかけ離れているようだ。一見すれば20は軽く超えているようなのに、

話は小学生そのもの。

……まあ、あの目に痛い獣耳がないのだけが唯一の救いだが。

(悪い人たちには見えないんだけどな……)

それでも、軽々しく「殺す」という言葉が出るのはこの世界の住人ならではのなのか。

笑顔でそんなことを言うから一瞬冗談かと思ってしまっが、本人たちにとっては他愛のないことなのだろう。

「……ちょっと、質問に答えてもらっていい？」

「うん」

見事に二つの声が重なる。私は「おおっ」と感嘆の声をあげながらじっと見つめてくる4つの瞳に応えた。

「まず、貴方達の名前は」

「トゥーアイドル・ディー」「トゥーアイドル・ダム」

……どっちがどっちだ。

声のトーンも全く同じで、いっぺんに言われてもわからない。

フリーズした私に気づいたのか、一人称が「僕」のほうで困ったように笑いながら、自分を指差す。

「僕が双子の弟のほうのディー。で、こっちが兄のダム。一卵性の双子だから見分けつかないでしょ？」

うん、まあ確かにそうだ。

どうやらディーのほうがダムよりも知的らしい。二人いっぺんに聞くよりも頭がいいほうの答えを聞いたほうがいいかもな、と思っ

た私は今度はディーのほうへ質問を投げかけた。

「どうして私を攫ったの」

「白ウサギの命令だから。僕ら“トゥーアイドルディーアンドダム門番”は城側の人間なんだよ、姫さま」

「……なんで私のこと姫さまって呼ぶの」

「だって姫さまは姫さまでしょ？」

答えになってない。

この質問には横でだらーっとしていたダムが応えた。

「俺ら、フレイム様に“アリス”のことは姫さまって呼べって言われたんだ」

あんのクソ餓鬼。ふざけんな。

羞恥プレイだよとか何とか言いながら意地悪く笑う女王の姿が目に見えかぶようだ。

「えーっと、できれば恥ずかしいのでやめてほしいんですが」

「いいじゃん、可愛いし」

「呼ぶのをやめたら僕らの首が飛ぶよ」

あの傍若無人の女王はなんてつまらないことで処刑を執行してんだ。

私はすぐにこれ以上取り合っても時間の無駄と判断し、次の質問に移った。

「じゃあ……ここは女王の城なの？ そうは見えないけど」

「まさか。今日はここで一休み。ここは僕らの育った場所……“施設”だよ。もっとも、一度全焼して今はこの通り廃墟も同然だけだ」

「施設」……？」

「そう、孤児や僕たちみたいなの……」

「デューったら姫さまばっかにかまって俺のこと無視してるーっ！」

突然横から飛び出してきたダムの子体、私は思わず後ろにとんだ。

拗ねるように私とデューの間でゴロゴロとするが、何せ立派な大人の体躯だ。子供がやるんなら和むものも、私の頬はひきつるばかり。

(ど、どうしてこの住民はこつも精神年齢がおかしいのかしら……)

レーテはもはや60過ぎのおじいちゃんだし、ダムときたらこれでは小学生以下だ。

しかもそれだけで飽き足らず、今度はあの冷静沈着といったタイプのデューまでもが嬉々としてダムの上に折り重なった。

大の男二人が床で転がりながらいちゃついてる……。え、なにこれ、網膜破壊動画？

そのあまりに痛々しい光景を見ていられなくて、私はさっと視線をそらした。

頭がずきずきしてくる……。美形二人を見てまさかこんな経験するとは思わなかった。

「拗ねないでよ、ダム。僕にはダムだけだっつて」

「だつてさー、だつてさー、だつてさー」

「フレイム様も“アリス”もいらさないよ。僕にはダムがいればいい」

「……………わかってるよ、んなこと。俺だつてデューがいればそれでいい」

「僕にはダムだけ。他人なんて、いらない」

「俺にはディーだけ。他人なんて、殺しちゃえ」

なんて麗しき兄弟愛……って待てこら。

なんだかものすごく物騒なことを言っていた気がするが……。私は冷や汗を垂らしながら、子猫のように（ネコ科ならばライオンだろうが）ごろごろ転がってじゃれあう二人を白い目で見ていた。

「あー、仲睦まじいところ失礼なんです、答えの続きをお願いします」

「あ、そっか」

「えー！ でも俺、ディーにかまわれないのヤダッ！」

ヤダって……んな餓鬼みたいなこと。

私は呆れたように頬をふくらますダムを見るが、残念ながら餓鬼は一人じゃなかった。

「うん、僕も姫さまよりもディーに構いたい」

……もう勝手にやってる。

ついにディーにまで愛想を尽かされた（？）私は、眉間を指でもみながら沈痛そうなため息をついた。

再び兄弟愛を見せつけ始める双子を尻目に、ふらふらと立ちあがる。まだふきつけられた催眠スプレーの効果で尾を引いているのか、動く意識がぼんやりとした。

「外の空気に当たってもいいかしら。ちょっと気持ち悪くなって……」

「あれ、姫さま大丈夫？」

「どうしたんだー？」

主にお前らのせいだバカ野郎。

なんてことはもちろん口には出さず、私は困ったように笑う。とりあえず一刻もはやくこの甘い雰囲気から逃げ出したかった。

「いいよ。捕獲しているとはいえ、僕らの心は広いから」

自分で言うことでは決してない。

しかも捕獲って……私は熊か何かか。

「うん、俺らの心は広いから、白ウサギより」

「そう、白ウサギより」

「白ウサギって心狭いよなー」。“アリス”なんてどこにいてもいいのに自分のところに閉じ込めるところとするんだから」

「うん、ほんとに狭量だね。束縛的な大人ってやだよなー」

「俺らはああならないようにしないとね」

「僕らもああならないようにしないとね」

またその話題か。ルア、嫌われてるわね……。

私は先程から本人のいないところで悪く言われまくっている白ウサギを哀れに思いながら、彼らに背を向けた。

改めて黒い部屋を見渡すと、普通っていた保育園みたいな造りをしていることに気づく。

押し入れに小さな遊び場、ボールがそこらに転がっていたり、紙が散乱していたり……。廃墟、と彼は言ったが最近まで生活していた痕跡がある。きつとこの二人は何度となくここに寝泊まりしているのだらう。

物珍しげにあたりを見回していると、ディーが背後から声をかけた。

「姫さま　　いや、アリス」

改めて名前を呼ばれ、私は訝しげにそちらを見る。デューは満面の笑みを浮かべたまま落ちていたのであるう、汚れたフランス人形を両手で拾い上げた。

そのあまりにもミスマッチングな組み合わせに私は吹き出しそうになるが、彼の瞳に映る冷たい光に言いようのない何かを感じて押し黙る。

いつしか、デューに絡みつくようにしてじやれていたダムもこちらを睨みつけていた。

4つのまったく同じ色の目が、こちらを見ている。

「どこに行ってもいいけど、この施設からは出ないようにしてね。僕らだって君は傷つけたくないし、ましてやこんなことしたくないんだ。でももし、僕らから逃げようとするなら」

ベキヤッ

木の割れるけたたましい音に、私は思わず両手で自分の耳をふさいだ。つむってしまった目を恐る恐るあけると、視界に入ってきたのは、デューとダムの同じ笑顔と……両足をもぎ取られた哀れな人形。

パラパラとデューは両足だったものの残骸を足元に落としていく。

「じゃあ、俺はこっちを」

笑いながらそう言ったダムはデューと同じように人形の両腕を握って……木っ端微塵に砕いた。

頭と胴体だけの姿になった無残な人形が、私の足もとに転がってくる。水色の瞳を虚ろに輝かせたそれは、当然のことながら動かない。

そう……これはきつと、未来の私の姿。この美しくも残酷な兄弟は、私が逃げたらこれと同じ目に合わせるぞと脅しているのだ。

「わかってる、わよ。逃げない、逃げない、から」

かすれた声を絞り出すように言うと、二人はニッコリと同じ笑顔を浮かべた。

二人の声が、重なる。

「いい子だね、アリス」

私は震える膝を必死に動かして、彼らの哄笑から逃げるように部屋を飛び出した。

どうも、いつもの作者です）・・・）

この頃更新多いです。もうなんか、今まで書けなかったりバウンドですかねえ…そろそろパソコンのやりすぎで頭が痛くなってきました。

さて、前回「短くしよう！」と前書きで宣言したのにもかかわらず、なんか長いです。しかしおそらく文字数はそこまで多くないんじゃないでしょうか。主に双子の会話ですから。

ようやく出ました、トゥーアイドルディーアンドダム！ほとんど設定も決めないで書いて見たら…

ありや、なんだコレ（。。。）（アリ幕一のカオスなキャラが誕生しました…。

もうじゃれついているところなんて、書いてて泣きそうになりましたね。大人がこれって…痛い、痛すぎる…。

と、いうことで。じゃれ合っているところはどうぞ可愛らしい子供を想像して下さい。私はそれを想像しながら書きました。

やっぱ年齢によってやって良いことといけないことがあると思うんですよね…。

前回のあとがき最後の行で言っていたことは無視して下さい。ただの絵空事です（泣）

前半部分に嘔吐のシーンがあります。お気を付け下さい。

アリスを置いてきた方向で銃声が聞こえ、ロキの心臓は跳ね上がった。そのまま、濡れた髪を拭きもしないで全速力で走りだす。

まさかという思いがロキを駆り立てていた。お茶会にいた敵たちはきつとマルスとレストが残さず片付けているはずだ。

（まだ潜伏してたのがいるのか?!ウソだろ…っ）

常に気を張っていたのに、気付かなかった自分が情けない。いや、それよりも…ほんの一時でもアリスを一人にしてしまった自分が恨めしかった。

一人にして、そばから離れて…守れない。

ようやく、アリスを置いてきたその場所にとたどり着く。全身の血が引く思いを、ロキはこの時初めて知った。

「アリス…っ」

アリスの瞼はぐったりと閉じられていて、死んだように動かない。青ざめた顔と体に巻きついたロープからは、何があつたかのを容易に推理できた。

アリスの体を俵かつぎにしている男には見覚えがある。双子の門番の、どちらかだ。

「あれ、チエシヤ猫だ。どうするよ、ディー」

「うーん。大人しく引き下がってくれればいいよね、ダム」

そんなわけないだろっ。

そう怒鳴りつけるところをぐっと我慢して、ロキはそっくりな顔二

つをギツと睨みつけた。

既に手には黒光りする銃が握られている。が、こっちは運の悪い事に負傷していた。利き腕じゃなかったのが救いだが、あまりにこれでは分が悪すぎる。

「アリスを返せ」

低い声で唸ると、双子はきよとんとしたように目を丸くし、それから弾けたように笑い転げた。

ひとしきり笑った後、双子の片割れ…おそらくダムの方だろう、ダムが嘲るように鼻を鳴らす。

「返せって、これはお前のもんじゃないだろ」

「お前らのものでもないっ」

「当たり前でしょ。これはフレイル様のものだよ」

そう言いながら、デーはかつぎあげていたアリスを乱暴にゆすった。ロキは血が出てくるほど下唇をきつく噛んで、彼を睨みつける。やはり黒幕は女王……いや、その影に隠れる、ルアか。

「まあ落ち着きなよ。大丈夫、この子が逃げだそうとしない限り僕らは絶対に傷つけないからさ」

「そうそう、俺らは白ウサギと違って平和主義なんだからな」

けらけらと悪魔のように笑う彼らに耐えきれずに、ロキはリーチを踏み込んだ。そのまま、デーの脳天へぶちこもつと銃を構える。

「「やめとけって」」

二つの声が低く物騒に響くのと同時に、ダムがポケットから何かの

液体が入った試験管を取り出し、ロキに投げつけた。
ロキの左肩に当たった試験管はパリンと言う音とともに砕け、中の黄色い液体をぶちまける。
その瞬間。

「ぐ…っあ?!」

液体から放たれたすさまじい香水臭に、ロキは思わずその場に膝をついた。むせかえる、なんて生易しいものじゃない…吐き気を催すような、強烈な刺激臭。

ロキは鼻と口を左手でしっかりと押さえながら、夢中で左肩を掻きはじめた。服と皮膚が長く鋭い爪に耐えきれずに破かれていく。

肌の皮が一枚剥けて真っ赤になっても付着したにおいは取れず、彼はただただ我を忘れたかのように肩に爪を突き立てる。

肉に爪が食いこむ、血が滲みだしてくる、それでもまだ臭いは取れない。

くさい、くさい、気持ち悪い、くさい、気持ち悪い…!!

ついにロキは臭いに耐えきれずに、胃の中のものを嘔吐した。双子が気味悪そうに「うへっ」と声をあげるが、今のロキには聞こえていなかった。

胃の中にあるものを洗いざらい全部吐き出す。吐き出すものがなくなったら、次は胃液を。最後には吐いているとい感覚しか残らず、ロキは口を半開きにしたまま吐瀉物の中へと倒れ伏した。

「が…っ、げほっ、が、うがっ…がはっ」

吐けるものは全部吐いた、それでも吐き足りないというように、胃と喉は痙攣し続ける。口から勢いよく、赤黒い血が飛び出してきた。

胃から出る血は、黒いという。
ロキはぼんやりと虚ろな瞳を吐き出した血に向け、上から見下ろす
双子の足先を見た。

「すごいな、効果絶大」

「ダムつたら、それ試薬品でしょうが。ったく、まだ試してないの
に」

「でもこれで試したことになるじゃん。効果はばっちりだよ、デイ
ー」

「まったくもう。死んじゃうかもね、これ」

「たかがちよつと臭いのきつい香水で死ぬとか…獣人つてのも不利
なもんだな」

笑い声が、遠くなっていく。それとも遠ざかっているのはロキの意
識だろうか。

ロキははあ、はあ、と浅く短い息を繰り返しながら、双子が去った
ほうへ手を伸ばす。震える手は当然、彼女に届くはずもなく…。

「……………り、す…あ、りす…」

もし、これが自分^{ロキ}じゃなかったら。もしこれが、イオだったら…。

『イオのほう^{ロキ}が確実にアリスを守れるでしょう？』

レーテの言葉が脳裏にちらついたので最後に、ロキは意識を手放し
た。

「まったく…全部は殺すなって言ったのに、結局こうですか」

レーテは足元に転がる死体の両足を持ち上げてズルズルと引きずりながら、疲れ切ったため息をつく。

時は夕刻前。レーテとマルスは、たった今全部“処分”し終えた者たちの片づけをしていた。そのままにしておくで腐敗してひどい臭いをまき散らしてしまうし、神聖なるお茶会に死体が転がっているというのも嫌な話だ。

だから死体処分のために2、3人は残しておけと言いつけたのだが、血に酔ったマルスとレストに聞こえるはずがなくて。

そして今、“お掃除”の状況に至っているのだ。ちなみに戦い終えたレストはそのまま幸せそうに寝ている。夜になったら起きるはずだから、その時はこれを手伝ってもらうつもりだが。

「マスターも参加すればよかったのに。すっきりするよ」

「なんだか薬物の誘い文句みたいですね。遠慮しときます。殺しは好きではないので」

「んなこと言わないで、やってみようぜ。マスターさえ揃えば、帽子屋レンジャーって感じのができそうじゃん、な？」

「テレビの見過ぎです。つか何ですか、そのネーミングセンス」

「あ、俺オレンジね、帽子屋オレンジでよろしく」

「何でそんな微妙な色なんですか。レッドとかブルーとか王道なものがあるでしょうが」

「えーっ、やっぱ帽子屋レッドはマスターだよ！ほら、マスターって薔薇が似合うじゃん、だから薔薇をこう口にくわえてさ」

ん？

わざわざジェスチャーを加えながら熱く語っていたマルスは突然、何かに気づいたかのように横を向いた。彼の様子を呆れ果てて見て

いたレーテもそれにつられてそちらを向く。

「どうしましたか、マルス。敵襲ですか？」

「わかんねえ、でもなんか…変な臭いがするんだ」

臭い？レーテはためしにクン、と鼻を鳴らしてみたが当然何も感じない。それもそのはず、“帽子屋”は獣人ではなく普通の人間なのだから。

“三月ウサギ”や“眠りネズミ”、“白ウサギ”……そして“チエシャ猫”など、獣耳としっぽをもつ者たちのことをこの世界では獣人と呼んでいる。

獣人は普通の人間よりも格段に五感が優れていて 特に、嗅覚が鋭かった。レーテには拾えない臭いを、マルスは確かに拾っているのだ。

「 血の匂いだ」

いつの間にか起きたのか、レストがくりつとした大きな目を細めて森を睨みつけていた。まるで、そこに潜む誰かを射殺するような視線に、レーテはごくりと唾を飲む。

そっちの方角はちょうど…ロキとアリスが行った方角ではないか。

「行きましょう。二人に何かあったのかもしれない」

そういうが早いか、レーテは走り出していた。レストとマルスも血糊で汚れた武器を取り、それに続く。

胃がざわめくような、嫌な予感がする。それが当たらないことを祈りながら、レーテは自分の額に浮かぶ脂汗を感じていた。

「ロキ…っ、ロキ、しっかりして下さい、ロキっ！！」

どこか遠くで自分の名前が呼ばれている気がし、ロキは「うっ…」と息をもらしながらまぶたを薄く開いた。ひどく体が、だるい。重しのように身体が重くて、うまく動けなかった。目の前には、レーテの心底ほっとしたような顔。

(あれ…？俺……)

どうしてこんなところにいるんだっけ、と自分が寝かされているベッドを見る。確か、自分は森の中にいて…それで、泉に行って、それから…。唐突に記憶がフラッシュバックし、ロキはぱっと勢いよく起き上がった。

「がっ」

しかしその瞬間、喉と胃に激痛が走り、傾いた体はそのままベッドから転倒しそうになる。レーテがそれを慌てて支えてくれなければ、間違いなく無様に床に伏していただろう。

レーテは苦しそうに浅い息を繰り返すロキの背中をさすりながら、厳しい声で言った。

「無理しないで下さい。貴方は一度死にかけたんですから。マルスとレストが運良く貴方を見つけてくれなければ、今ごろ三途の川行きですよ」

「……し、かけ、た…？」

死にかけた、と聞いたかったのだが喉がひりひりと痛んでうまく声が出ない。

まさか自分が致命傷を負っていたとは考えにくかった。痛むのは胃と喉ぐらいだ。しかしレーテは真剣な目をして滔々と語り始めた。

「ええ、何か強烈なものを嗅がされた貴方は嘔吐したでしょう？その吐瀉物が口と鼻に入って息をできなくしてたんですよ。本当に…息をしていないとわかった途端、血の気がうせましたよ。レストの処置がなければ貴方は窒息死していました。それから僕が貴方をここまで運んできて、マルスが風呂に入れたんです。左肩と…それから左腕は折ったんですか？一応二か所とも包帯を巻いておきました」

言われた通り見てみれば、自分の体は包帯でぐるぐる巻きにされていた。とてもうまいとは言えないが。

ロキは感謝の言葉を言おうとしたが、とてもこの喉は使えそうにない。レーテはそれも予測済みだったのか、一杯の水をどこから取り出す。

素直にその水を受け取って一気にあおったが、とつぜん流れ込んできた冷たいものに、痛めつけられた喉は耐えきれなかった。

ごほっ、ごほっ、とむせかえってコップの中身を全部シーツの上に吐き出してしまふ。

しかしそれすらもレーテには予測済みだったのか、もう一杯水を取り出してきた。

この野郎、いったいどれくらいのパターンを考えてんだ…。

ちらりとそんな考えが頭えをよぎるが、ロキは何も言わずそれを受け取り、今度はちびちびと慎重に水を口に含んだ。

全部飲み終えると、先程までの喉の引き攣りが嘘みたいに消える。

ロキはしばらく「あー」だの「うー」だの発声練習をしてから、「
ありがとう」と言った。

「マルスト、レストは…？あいつらにも礼を言わなきゃな…」

「彼らだったら、貴方の臭いにあてられて今ごろ気持ち悪くなつて
いるはずですよ。お礼だったら僕の口から伝えておきますよ」

やはり獣人には、かなりキツイ臭いだつたらしい。ロキはその臭い
を思い出して、顔をしかめる。まさか匂い一つが自分にここまでの
重傷を与えるだなんて思わなかった。

「レーテ、今何時だ？」

「そうですね…4時半、と言ったところです。もうすぐ日が沈みま
すよ」

「そ、か。……お前の言ったとおりだった。イオだったら、あんな
奴らに負けることなんてなかったんだろうな」

(アリスを連れていかれることも……っ)

忌々しげに舌打ちをするが、時はすでに遅い。現に、アリスは彼が
手の届かないところに連れてかれたのだ。

今すぐ追いかけて奪い返したいと思うが、もう肉体的にも精神的に
も限界に達していた。

わかってはいる……自分じゃ、何もかも力量不足なのだ。

だから自分は、もう一人の自分イオにすべてを託すしかない。

「レーテ、今から言うことをイオに伝えてくれ」

そう言っている間にも、意識が朦朧としてくる。思った以上にタイ

ムリミットは迫っているようだ。
レーテが何かを言いたそうにしたが、それを無視してロキは早口で
言伝を頼む。

「アリスは双子の門番に攫われた。たぶん女王の城へ行くんだろう
が、今日はもう遅いからどこかに泊まると思う。アリスには逃げ出
さない限り危害は加えないと言っていた。どうするかはお前の判断
に任せる。相手の武器は不明。ただ、かなり厄介だ。薬物を使って
くるかもしれない、そうしたら俺ら獣人は終わりだ。気をつける。
それと　　俺、アリスに好きって言ったから」

そこで、ぐつと喉が詰まる。レーテの瞳が驚いたように見開かれた
が、ロキはまるで録音機に向かって話しかけるように喋り続けた。
胸が、熱くなる。どうしてこんなことまで、イオに言っているのだ
ろう。こんなことを言わなければ…あのバカは、この先ずっと自分
に遠慮をしてくれるだろう。自分の思いも伝えないで、へらへらと
笑って、自分が憎まれ役になって。

とても喜ばしいこと……そんなもの、くそくらえ。

「だからお前も、ちゃんとええよ、イオっ…俺だって言ったんだ、
お前にだって言えるだろ？ちゃんと自分の気持ちも、伝えてみせる
っ。もう……我慢なんて、するな。同じスタート地点に、立つんだ、
イオ。頼むから、俺のために……俺なんかのために、自分を殺すな
…っ」

急速に意識が闇へと吸い込まれていく。倒れこむロキの体を支える
レーテを最後に、ロキは眠りへとついた。

「ロキ」

深い深い、闇の中で自分を呼ぶ声が聞こえる。自分よりもほんのわずかに高いトーン。

俺はこの声を、知っている……

知っていて当たり前だ。だってそれは紛れもなく、自分自身のものなのだから。

「ロキ」

もう一度、呼ばれる。暗闇の中にポツン、と、一つの淡い光が浮かび上がった。それはだんだん大きくなり、人型へと形を変えていく。数分後、目の前にいたのは自分自身だった。ただし、紫色の髪と金色の瞳をもつ。

（お前が、イオカ）

ずっと憎んでいた男の名前を呼ぶと、目の前の自分は悲しげな笑顔を見せてこくと頷いた。そうして、ゆるりとその白い腕をロキの首にまわしていく。

まるで唯一無二の親友がするようなスキンシップに、ロキは顔を真っ赤にさせながら答えていた。

「ずっと、会いたかった」

残念だが、俺は会いたくなかった。ぶっきらぼうにそう返すと、イオカは「ははっ」と耳元で小さく笑った。そのまま、ロキの漆黒の髪

に顔を埋めてくる。

「ごめん、ごめんね…ごめん、ロキ」

あやすように頭を撫でられているのに、その声はまるでイオ自身が泣いているようで…。ロキは唇を強くかみしめながら、イオの体を突き飛ばす。

突然突き飛ばされたイオは、一瞬呆然とした表情を自分と同じ顔に浮かべると、すぐさま傷ついたような顔になった。

（お前はいつも、そればかりだ）

浴びせる罵声は、怒りを伴っていない。ただ、相手を拒絶したくて相手を受け入れたくなくて。

そんな思いがイオにも伝わったのだろうか、彼の顔が泣きそうに歪む。

（俺がどんな思いかも知らないで、一人で決めて、自分ばかり、傷ついて…）

でも、彼は気付かないだろう。本当に傷ついているのは、泣きたいのは、ロキだ。

イオが傷ついて傷ついているのは、ロキだ。

（母さんの時だってそうだった。俺を庇うために自分だけ傷ついて犠牲になって、それでも平気そうに振る舞っていたお前を見て…俺が何を思ったのか、お前にはわかんねえのかよ…っ）

「ロキ、泣かないで、ロキ」

泣いてなんか、ない。

（お前なんて、大っ嫌いだ…っ）

ただ、心が壊れそうに痛むだけ。

本当に、わかんねえのかよ、イオ。

頼むから、俺の嘘を早く暴いて……

どうも、一日に2話投稿してるバカ作者です)。)。)。あ、頭がグワングワンしてます…。つか宿題はどうした、高校生

ロキが可愛いあまり…ハイスピードで仕上げました。今回は少しうっとするシーンが多かったですね。作者としては書いてとても楽しかったです(どs)

お食事中の方、嘔吐シーンが苦手な方、申し訳ありませんでした。しかしこれで…あの双子悪役決定ですね(・|・;))

前回の最後らへんもちらつと残酷な面を見せてましたが…今回はかなり露骨です。あれは一種の狂気ですね。

二人はフレイム様みたいに可愛くないし、かといって優しいキャラでもないし…人気が落ち込みそうで怖いです。

うん、でもやっぱり今回は久しぶりに残酷シーンがかけてスッキリしました。(どこまでもどs)

次回の主役は、ついに村崎君!…って誤字った、誤字った。紫くんです。

ものすごく久しぶりな気がする…。イオって何話目から消えてましたっけ…。

今章のイオくんは残念ながら変態ではありません、ただのシリアス少年です。でも、まあ…番外編などでは変態度マックスなので、いいですよね、本編くらいシリアスで。

それでは、感想&評価などくださるととても嬉しいです

降りかかる罵声と焼けつくような頬の痛み
それがイオと
いう存在の、最初の記憶だった。

「おはようございます、イオ」
「ん…俺まだ眠いんだけど」

レーテが体調を気遣っているのをいいことに、イオはぐるりと体をまわして寝がえりを打った。そのままふかふかのベッドに、気持ちよさそうに身体を埋める。
しかしベリツと容赦なくひきはがされた毛布に、安眠の夢はガラガラと崩れていった。レーテは先程ロキに向けていたのとは全く違う、怒りをおし隠したような笑顔を顔面に張り付けていた。

「イオ、いい加減にして下さいね」
「……わかったわかった、起きるから睨まないでよ、怖いなあー」
「睨んでません。僕はいつも貴方達のことを温かい目で見守っていますよ」
「氷点下零度の間違いでしょ」

イオはため息をつきながらゆっくりと体を起こした。ギシギシと、体中の骨が痛ましい音をあげる。きつと今ここで肩を回せば脱臼することだろう。

「ずいぶんと身体が痛んでますね。ラジオ体操でもやりますか」
「……レーテってほんとに健康爺さんみたいだね。今度青汁をプレゼントするよ」

「要りません、あんなまずいもの」
「って飲んだことあるんだ」

呆れたような口調で切り返せば、レーテはむっとしたような顔をした。やはり飲んだことはあるらしい。

なるべく負担をかけないようにと、慎重に肩を回す。最初こそバキッ、ポキッ、ベキヤッ、などとおぞましい音を立てていた肩だったが、次第にその音もなくなっていき、最後には普段通りに動くようになっていった。

その様子をじつと見ていたレーテだったが、イオの準備体操が終わったのを見計らって笑顔で問いかけてきた。

「僕の健康管理なんてどうでもいいので、今は自分の体を気にして下さい。どこか痛むところはありませんか」

「全身」

「はい、異常ないようですね。どうぞさっさと退院して下さい」

「患者の話の聞けよ、この藪医者」

「それだけ減らず口が利ければ十分です。ほら、早く服を着て下さい」

バサツといきなり頭に黒いものが投げつけられ、イオは「うわっぷ」と変な声をあげてしまう。

「あなたが着ていた服はロキが破いてしまったので処分しました。似ている服をと思ったんですが……それで平気ですか」

確かに、持ち上げてみた服はいつもとは少し違う。イオとロキの好みに合わせて黒の服だったのだが、渡された服はどちらかというところ紺に近かった。

肩を丸出しにしているデザインはほぼ同じなのだが、首のあたりが全然違う。前は胸元を大きく開いてたのに、今は極めて露出度の低く、首まで黒い布が覆っていた。

「もっと色気のある服がいいー。なんかこれ露出度低くない？」

「うるさい黙れ変態。大体それだってマルスのお下がりですからね、僕だったらそんな破廉恥な服着ません」

肩が出てるだけで破廉恥ってどうよ。

「マルスのお下がりって…いいの？俺、あの子からはメチャクチャ嫌われてるよ？」

なんでか知らないけれど、レストからも嫌われている。

不思議そうに首を傾けると、レーテは少し考えるように腕を組んだ。

「うーん。じゃあ僕のスーツをきみますか？」

「いや、それは勘弁。俺あんなのきつちり着こなすとか、絶対無理」

「そうですね？似合うと思うんですけど。だったらマルスに見つからないようにそつと出てって下さい」

「いいの？返さなくて」

「ああ、いいですよ。マルスの頭って見ての通りかなり単純ですから、服が一着なくなっただって絶対気づきません」

「レーテってさらつと酷いこと言うよね」

ニツコリと何の邪気もなしに笑うレーテを、イオは怪物でも見るような目で見つめてから、少し遠慮がちに服を上から被る。

マルスが179、イオが178とほとんど身長差がないせいか、服はびったりとイオの体にフィットしていた。

……………縦は。

「レーテ、やっぱり貴方もう少しお茶会のお菓子を減らしたほうがいいよ。このままじゃマルス、隠れメタボになっちゃうよ」

少し伸びすぎている腹回りの布をびによーんと伸ばしながらレーテに不平を言う。

以前は自分が参加していたからよくわかる。レーテの開くお茶会はとても美味しいのだが、その分カロリーが高いのだ。

前に一度、3カ月で5キロも増えてしまっただけで必死で減量したのを覚えてる。すぐに落ちたからよかつたものも…。

レーテは一瞬何を言われているのか分からなかったが、言葉の意味を理解すると途端に渋そうな顔になる。

「貴方が細すぎるんですよ。見掛けだけだったらひ弱そうなんですけどねえ」

ひ弱はひどいだろ。

「うん、まあ見かけ騙しの意味も含めて便利なんだけどね。にしても…あの服、気に入ってたのになあ」

左半分が引き裂かれてもはやぼろきれ同然になってしまったお気に入りの服を回想する。

そうして、彼には珍しい酷薄な笑みを浮かべた。

「さあて、どんな仕返しをしてやるうか、あの双子」

服の仕返しを。……ロキの仕返しを。

勘の鋭いレーテは今の一言で察したらしい。呆れたような笑みを浮かべると、くしゃりとピンクの髪をなでてきた。

「やっぱり貴方、起きてましたね。いいんですか、2日も連続で起きてちゃって」

「んー、だから眠いんだってばー。もうちょっと寝させてよ」

甘えたような口調でレーテにすり寄ってみるが、案の定彼は笑顔を浮かべたままイオの頭をはたく。

ぱしっ、なんて可愛いもんじゃない。ゴンッだ、ゴンッ。

レストの甘えが鈍感なマルスには効かないのと同様に、イオの甘えも鬼畜なレーテに効いたためしがなかった。

「いてて……貴方ね、俺一応病人」

「頭はすつきりしましたか？」

どうしてレーテの笑みはこんなに爽やかに黒いのだろう。イオは頬をひきつらせながら、真剣に考えてしまう。

それでも、ふざけている暇がないのはレーテの言う通りだ。はぁあっとやけに長いため息をつきながら、イオはごそごそと身支度を整える。

だばだばに緩んでいる腹回りは、白い布を巻いて何とか目立たないようににした。リストバンドや足あてなどを慣れた様子でつけ、そこに数種類の暗器を忍ばせる。一つ難点を言うなら、この服は簡素すぎて武器を隠せる場所が少なかった。

レーテはその様子を物珍しげに眺めながら、何気ない口調で訊いてくる。

「起きてたんなら、僕がわざわざ伝えなくても聞いてたでしょう？」
……こんなことをこんなにあっさり聞いてくるあたり、彼はずるい。
イオは一瞬動かしていた手を止め、それからすぐに再開した。
何事もなかったように軽々しい口調で肯定する。

「もちろん。朝から晩まで起きてたからね、純情ロキくんの告白シーンも全部聞いてちゃった」

自分で言葉に出した途端、ズキンと鋭い痛みを心臓部分に覚えた。
起きている時、感情はロキと共有する。だから、想いを告げた時の
痛みもそのまま覚えているのだ。

これは、ロキとしての痛みか…それとも、自分のものか。もうそれ
すら、わからない。

イオはその痛みをレーテには気付かせまいと、いつものシニカルな
笑みを仮面に張り付ける。これ以上彼に余計な心配をかけたくなか
った。

「それで　　貴方はどうするんです？」

「んー、とりあえずアリスの様子を見てみようかな。それから決め
る。あの双子がどう出てくるかわからないしね……アリスを人質に
するかもしれない」

自分でも、すつとぼけたことを答えているとは思う。レーテがこん
な答えを望んでいるとは、もちろん思っていない。

ぱちり、と音を立てて首の最後のボタンがしまった。イオはそれを
いいことに、何かを言いたがっているレーテの脇に素早くたつ。
そのまま彼が振り向く間もなく、出口へと早足でかけていった。

まるで、逃げているようだ。

イオはふとそんなことを思い、自嘲の笑みを浮かべる。何から？アリス？ロキ？ 自分？

そのわずかな躊躇の間に、追いかけてきたレーテがイオの手首を取った。そのまま後ろにひねり上げるが、全然痛くない。彼なりにイオの体を心配してくれているのだろう。

「まだ、貴方の答えをきいていません」

驚くほど穏やかな口調だった。きっと、振りほどこうと思えばできる締め付けに、かわそうと思えばできる言葉。

それが、こんなに突き刺さるなんて、思ったこともなかった。

『同じスタート地点に、立つんだ、イオ』

ここが、俺の、俺たちの、スタート地点。

自分よりも先にロキがいて、手を伸ばしてくれる。

イオはただ、ロキの手を取ればいい。あの仏頂面でこっちに手を差し出してくれるロキに、泣くのをこらえたような笑顔で、ほんの少し手を伸ばして……。

その手を取れば、自分は救われる。

「レーテ、俺…もう決めたんだ」

声は、震えていないだろうか。涙は、浮かべていないだろうか。笑顔の仮面は、壊れていないだろうか。

あらゆる不安がイオを苛める。それでもしっかりと、意思のこもった声で、イオは宣言した。

「俺、アリスのことあきらめる」

それでも自分はきつと、その手を振り払うの
だろう

『……………そうですか』

レーテの答えは意外とあっさりとしたものだった。あれほど自分たちのことにあれこれ言って背中を押してくれた彼にしては珍しい答えに、イオは訝しげな視線を向ける。
そんな視線の意味をくみ取ったのか、レーテは「仕方ないでしょう」といいながら肩をすくめた。

『それが貴方の出した答えなんですから。僕があれこれ言っても絶対耳を貸さないでしょうし』

確かに意思を曲げるつもりなど最初ハナからないのだが、少し腑に落ちない。もう少し食いついてくるかと思ったのに、拍子抜けした感じだ。

「……………ま、たぶん一番期待を裏切ったのは俺なんだけどねー」

悪びれもなく、広い廊下でぶつくさと一人呟く。乱暴に頭をかき分けると、廊下にかけられた等身大の鏡に映った自分の姿が目に入っ

た。

ピンクの髪に紫の耳とっば、そして印象的な金色の瞳。自分とロキは、何もかもが違う。なのに同じ人間。

誰もがロキはイオの影だと思っている。それは実際間違っていないし、自分もそう言っていて通ってきた。

強いのは自分。チェシャ猫として認められているのも自分。この国での“チェシャ猫”はイオの方、それは暗黙の了解だった。間違っていない。だけど、本当は……。

「俺が、貴方の身代わりだったんだよね」

ガチャ

憂いを含んだ溜息と、金属が落とされる音とが重なった。

「あ」

「げ」

ああ、なんて感動的な再会。ここで茶色いウサ耳をもつ青年と紫の猫耳をもつ青年はお互いをがっちり抱きしめて、涙を浮かべながら笑い合う。

なんてことがあるはずもなく。

ドアを開けて顔を突き合わせてしまったマルスとイオはそれぞれ何を考えたか一様に顔を歪め、次の瞬間。

「てんめえ何勝手に人の服盗ってんだっ！！」

「にゃー！お許しを〜！あ、それとさ貴方、減量したほうがいいよ。ひそかにヤバいでしょ、お腹」

「なっ……人が気にしてることをグサツと……！！待ちやがれえええ

えつつつ！！」

「待たにやーい」

トトトトトトトト…ッ

あつという間に追う追われるの関係が出来上がった。

怒りに顔を真っ赤にさせて全速力で追っかけてくれるマルスを、イオは余裕綽々で軽くあしらいながら笑う。時折投げつけてくる食器やら武器やらにやたらと殺気がこもっていたが、そこはご愛敬。

かくして、強張った身体の準備体操が済んだ。

好きだ、好きなんだ。

伝えたいよ、教えたいよ。好きって何度も囁いて、抱きしめて、キスをして。

でも、できない。そんなことしたら、大切な子の心が壊れちゃう。守りたいんだ。もう、傷つけたくなんかないよ。

会わなければよかった、触らなければよかった。貴女の名前を、呼ばなければよかった。

「アリス」

気付いて。でも気付かないで。気付いていないふりをして。

俺を、突き放して。拒んで、滅茶苦茶になじって。

好きって言って。嘘でもいいから、俺には嘘の言葉でいいから、好

きって言うて。

「そうしたら、俺はちゃんと」

ちやんと、諦めるから。

最後に甘い夢だけを見せて。今だけは、貴女に酔わせて。嘘でいい、夢でいい。真実ほんとうなんて、いらぬから。諦めるよ、諦める。だから、早く

「好きって、言うて」

俺を、好きにならないで。
でも、嫌わないで。

「嫌よ」

凜とした彼女の言葉に、何故だか笑みと涙がこぼれそうになる
……

どうも、しょせん作者です）、ー、）って顔文字使いたさにこの頃あとがきがとんでもないことになってますね、そろそろけじめのつけどきですか…。

はじめまして、もしくはおはようございます、作者です。この頃更新がほんと早くなってます。ナメクジから八チへと羽化…はしませんが、ただ今八チ更新中です。しかし休日が終わるので、そのうちナメクジに戻ると思います（オイ）

さて、今回は初めから終わりまでずっとイオのターンでした。ロキとは一変違ったシリアスみを帯びているイオくんですが、今回はほんとどギヤグでしたね…。

どうもイオとレーテがタッグを組むとコメディになるようです）、（前回がかなり暗かったのでここで一息つけたかな、と思います。

それにしても、レーテくん…君はどこまで爺臭いんだ…。書いてて面白いキャラではあります。青汁を飲んでみたいとも思います。

今回は忘れられていたアリス登場！主人公なのにこの頃ロキやらイオやらに横取りされることが多いです。

下にあるのは今回廃棄したイオとレーテの会話文です。場所としてはマルスのメタボ疑惑、といったところでしょうか。

この後のシリアスな展開にあまりにもそぐわないので廃棄しました。

イオ「レーテ、やっぱり貴方もう少しお茶会のお菓子を減らしたほうがいいよ。このままじゃマルス、隠れメタボになっちゃうよ」「レーテ」そうですか？僕はあんまり体重変わってないんですが「

イオ「そう言えば貴方って、全然太らないよね。何か秘訣でもあるの？」

レーテ「そりゃあもちろん、毎日の運動でしょう」

イオ「へえ、意外とまともな答え。何やってんのさ」

レーテ「ラジオ体操です」

イオ「……………」

レーテ「……………」

イオ「……………」

レーテ「……………」なんです、その哀れみの視線は」

イオ「……………」いや、何でもない……………」

レーテくんへのツッコミ、その他感想・評価など、いつでも歓迎しております

ひんやりとした空気が肌を撫で、私は思わずブルリと震えた。

いつの間に時間がたっていたのだろう、夜は闇を深めて、その頂上に細い月が浮かんでいる。私はそれをぼんやりと見やり、視線をあたりへと移していった。

施設と聞くとどうしても閉鎖的な空間を思い浮かべてしまうのだが、そんなことはないらしい。校庭と思われるそこは、私が通っている高校の優に5倍はある。遠くにある塀と門がともちっばけなものに見えた。

鉄棒、ブランコ、滑り台　　思い浮かぶものすべての遊戯が無造作に校庭の端に設置されている。そのさらに奥には、塀を取り囲むように高い木々がうえつけられていた。

その中でも極めつけに高い木が、一番はじっこに植わっている。

「
」

かすかに聞こえたその音に、びくりと体が震えた。誰かが、いる。

私は身体を強張らせて、声が出たほうを凝視した。恐る恐る足を踏み出しては、躊躇する。

それは、声というよりも　　唄。

誰かが、こんな夜更けに唄っているのだ。それも、かなり近くで。私が近付くと、足音に反応したかのようにぴたりと唄は止んだ。それでも私は足を止めない。

誰かが、いる。この高い木の近くに、誰かが…っ。

期待と不安で鼓動がどんどん早くなっていくのがわかった。見方がもしれない、敵かもしれない。それとも、私の知らない人も。

だが、歌が聞こえてきた場所には何の人影もなかった。後ろに回っ

てみても、誰もいない。
去った、というのは考えにくい。私が至近距離になるまで確かにこ
こで唄が聞こえていたのだから。
ある考えが頭をかすめ、私は青ざめた。ぞつと背筋が恐怖で凍りつ
く。

「まさか、幽れ」

「勝手に殺さないでよ」

「きゃあつ あ…」

突然上から振ってきた言葉に、私は驚いてしりもちをついた。呆然
と上を見上げると、そこにはいつの間にか見慣れてしまったあの笑
顔があつた。

悪戯をする子供のような、ほんの少し歪んでいて皮肉な笑み。シニカル

紫の髪は群青の夜空から浮き出っていて、とても目立つ。まるで彼だ
けこの世界から取り残されているようだ。

「アリス、久しぶり。2日ぶりかじゃ？」

ふざけたような彼の言葉に張っていた緊張がいきなり緩み、思わず
同じようにへらつと笑って「久しぶり」と返してしまった。

2日ぶりで久しぶりも何もないだろうと、頭の片隅で思うがこの猫
にはそんなもの関係ないらしい。
座っていた枝から軽々と降りて私の横に着地すると、イオは私に手
を貸して起こそうとしてくれる。

だが、一度力の抜けた身体は、思うように動かなかつた。

「あー…なんか、ごめん。腰抜けちゃったみたい…」

「そんなに俺って、幽霊に見えた？」

可笑しそうに笑われると、自分がか弱い存在に思えてきて途端に恥ずかしくなる。意地でも立ち上がってやろうと腕に力を入れたが、やはり疲労で重くなつた体は動かない。

そんな私を見かねたのか、イオは眉尻を下げながら私の隣に腰かけた。

何も敷いていない地面に二人、身を寄せ合うように座っている状況に戸惑う。何も私に合わせなくてもいいのに…。

「イオ…身体は、大丈夫？」

「アリス、俺のこと心配してくれんの？いじらしい〜」

「ロキの心配だよこのボケ」

ああ、駄目だ…私この世界にきてから間違いなく口悪くなってる…
ついでに格闘技も上達している…。

私ははあっと呆れたような溜息をつきながら左手を伸ばして彼の頬をつまんだ。

びによ〜ん

想像を絶するほどの柔らかさに一瞬固まり、それから恐る恐るもう一回伸ばしてみる。

びによ〜ん

「ふあふいふ、ふいたいふいたいふいたい！！」（訳：アリス、痛い痛い痛い！！）

「え…あ、う、うめん…」

知らず知らずのうちに思いつき引つ張っていたらしい。イオが涙目になりながらバンバンと叩いてきた。

私はあわてて指をはなす。思いつき引つ張られて真っ赤になった頬をさすりながら、イオはむうっと口をとがらせる。

その子供っぽい仕草に何故か、どきんと心臓が高鳴った。無意識のうちにもう一度手を彷徨わせ、今度はつまむことなく「ごめんない」と呟きながらそつとなでる。彼の頬は力いっぱい引つ張っていたせいか、それとも別の理由からか、いつもよりもわずかに熱い。彼は一瞬驚いたようにその金色の瞳を丸くしたが、次の瞬間ふわりと嬉しそうな笑みを見せた。

ドクン…

心臓が、痛いほど大きく鳴る。どんどん早くなっていく鼓動。熱くなっていく頬。

恥ずかしいことなんて、何もしていないのに。顔だってそこまで近くないし、変態じみたことだってやられてないのに。ただ、彼の笑顔を見ているだけで胸がうるさくなる。

この気持ちは、なに…？

「アリス？」

突然拳動不審に目をそらせた私を訝しげに見たイオは、私の頬にはつそりとした長い指を伸ばしてきた。

そつと、顎の線をなぞるようにして撫でられれば、触れた部分に電流が走るような感覚を覚える。

パシッ

私は我に返って、自分の手を見た。今、私何を…。私の手は、イオ

の存在を拒絶するようにその手をはたいていた。
イオは私以上に呆然とした顔をして、一瞬悲しそうな光をその瞳に
浮かべる。

「アリス…」

「さっ、触らないでっ」

私は顔を真っ赤に染めあげながら、再び確かめるように伸ばされて
きた指を振り払った。

ドクンドクンと寸分のすきも与えず心臓が音をあげる。もう、何が
何だか分からなかった。

顔が熱い、身体が熱い。胸が痛い。頭がくらくらする。わからない、
怖い、違う。

私は彼の手を振り払った腕を庇うようにしながら、彼を怯えた目で
見つめる。

違う、本当に怖いのは彼ではなく……彼が触れただけでドキドキし
ている、自分自身だ。

二度も拒絶されたイオは、傷ついた目を見開いて、くしゃりと泣き
そうな顔で笑った。

なんて下手な、笑顔。なんて悲しそうな、なきがお笑顔。
ズキン、と心臓が先ほどとは別の痛みでひきつる。

「アリスは、俺のこと　嫌い？」

嫌い。キライ。

私は口の中でその言葉を呆然と呟く。なんて、虚ろな言葉だろう。
虚ろなのに　心に深く突き刺さって…人を傷つける、凶器。

そう、私はこの言葉を何度も彼に投げかけてしまった。彼の目の前

でも、彼がいないときでも。

『あんななんか、嫌い』

彼はそのたびに、何を思っただろう。私の一言が……どれくらい、彼の心を深く抉っただろう。

嫌い、といった時の彼の表情が今更ながら脳裏にちらつく。すべての表情がごっそりと落とされてしまったかのような、完璧な無表情の
の 仮面。

彼は仮面の下で、いったいどんな顔をしていた？

気付けば、私は彼の腕に縋りつくようにして爪を立てていた。

自分で「触るな」と言っておきながら、自分から触れる、矛盾。戸惑ったように私の体を受け止めるイオをみて、私は涙をこらえるように顔を歪める。

身体が震えて、声が震えて仕方ない。

ただ、このままだと彼がどこかに消えてしまう気がして
怖か
った。

「ち、違っの…嫌なんじゃなくて、そうじゃなくて…っ。嫌いとか、そんなのじゃないのっ」

「あ、ありす？」

「ただ、あんたが触ると、なんか胸がバクバク鳴って、なんにもわかんなくなっ…お、おかしくなるのっ、だ、だから…」

言葉が思いつかない。なんて言ったらいいのか、しゃべっているうちにますますわからなくなっていく。

稚拙な言葉。そんなものじゃ、想いは言い尽くせない。

ああ、もしかしたら、私は彼のことを……

「 わかった。わかったから、アリス……泣かないで」

今までじつと黙って私の言葉を受け止めていたイオが、子供をあやすように私の背中をさする。

泣いて、る……？イオに言われて初めて、自分の瞳が濡れていることに気がついた。

拭っても拭ってもやまない涙にいらついで、私は乱暴に目をこすろうとする。その手を、イオが掴んで止めた。

「こすったら、赤くなっちゃうよ」

「で、でも……っ」

「じつとして……」

至近距離で囁かれると、暗示をかけられたように身体が動かなくなってしまう。

ドクン、ドクン、と先程からずっとけたたましい音を立てている心臓が、彼の顔が近くなるたびに加速していく。

彼の腕は、一方は手首、もう一方は腰を掴んでいて、私の身動きを封じていた。しかし、全力で抵抗すれば逃れることのできる、緩い拘束。

「 逃げないの？」

そんな私を見透かしたかのように、イオが目を細めて尋ねてくる。息がかかるほど、近いのに……彼は何もしてこない。

彼は、酷い。私は、狡い。

逃げられるのに、抵抗できるのに、しない。抵抗できないほどに無

理やりされれば、狡い私は「私の意思じゃない」と逃げる事ができるのに。酷い彼は、そんな逃げ道さえもふさいでしまう。

これじゃあ、認めるしかないじゃない

……

彼の熱い息が、閉じられたまぶたにかかる。大人しく瞳を閉じた私は力を抜いて、彼に身をゆだねた。イオは目じりに残る涙を掬いあげるように、唇で吸っていく。優しく、傷つけないように。唇はまつ毛から頬、顎まで移動し、涙の痕を消していった。

「アリス」

涙が消えてもなぞっていた頬から唇を少しはなし、イオがかすれた声で私の名前を呼ぶ。

いつも以上に艶やかなその声に、背筋がぞくりとした。恐る恐るまぶたをあげると、熱を帯びて赤みのさした金色の瞳がすぐ近くにあった。

身体が、震える。怖いのだろうか？自分でも、自分がわからない。私の震えに気づいたのだろうか、イオは心配そうな光をその瞳に映すと、耳に直接囁くようにしていった。

「俺を、拒んで。じゃなきゃ、取り返しのつかないことになる」

取り返しのつかないこと……？それだったら、もうなってる。

私は何も言わない限りに、ギュツと掴んだ彼の腕に力を込めた。一瞬、イオがとても嬉しそうなのに泣きそうな笑顔を見せる。

しかし、それをじっくり見る前に、私の視界はふさがれた。

唇に、しっとりとした熱い感触を感じる。ほんの少ししよっぱい味がするの、今まで私の涙を掬っていたからだろうか。

あまりにも長いキスに私は息苦しさを感じて思わず唇を薄く開いてしまった。それを待っていたように、唇よりもさらに熱い舌が口内に侵入してくる。

「…ふ…っあ…」

舌と舌が、唾液と唾液が、息と息が、熱く絡み合う。それは以前仕掛けられたキスのように一方的なものではなく　　私は、確かに彼に応えていた。

私の中にあつた卵が、殻を破って頭を覗かせる。

ああ、そうか、これは、この想いは　　……

始まりと同じように、唐突に深いキスは幕を下ろす。唇をはなしたイオは、跡を引く透明の糸を気にする様子もなく、私の髪に顔を埋めてきた。

そのまま、まだ荒い息の私を痛いほどの力で抱きしめる。

「アリス、アリス…アリ、ス…っ」

何度も何度も、何かに怯えるように私の名前を呼んだ。がむしゃらに私をかき抱く腕は、振動がはつきりとわかるくらいに震えていた。

イオ　　貴方は一体、何に怯えているの……？

躊躇いがちに彼の背中に手を回し、今度は私が彼を慰めるように背中をなでる。

イオの心が、わからない。どうすれば、彼の心の傷に触れられるだろう。どうすれば彼との間にあるガラスを砕けるだろう。

触りたいのに、触れられない。触れているのに、触れていない。

こんなに近くにいるのに、心はこんなにも遠い。

「俺を、好きって言って」

呟くようにして落とされた言葉に、私は一瞬何を言われたか分からなかった。

イオは体を硬直させた私に構わずに、うわごとのように言葉を紡ぐ。

「嘘で、俺には嘘でいいから…好きって言って…これで、最後にするから。アリスが俺を好きって言うてくれたら…俺、ちゃんとから…」

びくりと、私の体が震えたのに彼は気づいただろうか。ドクン、ドクンと心臓が壊れそうになり響く。
ポロリ、と大粒の涙が一筋頬を伝って地面に落ちた。それを掬ってくれる唇は、もうなかった。

俺、ちゃんと諦めるから……

消え入りそうな声で呟いた、イオの言葉。

ああ、そうか。と私は心の中でこぼす。ようやく、道が見えた。私
が何をすればいいか、見えた。

私が彼を好きになったら、彼は私のもとを離れてしまう。

……なら。唇が、震える。声が、掠れる。

ようやく、気付くことができたのに。ようやく、認めることができたのに。

私は自分の中で卵から孵ったばかりの想いに、手をかけた。

「嫌よ」

なら私は、この想いを殺そう

……

「何で私があんたにそんなこと言わなきゃいけないのよ。ふざけな
いで」

自分でもびつくりするほど、冷たい声が出た。そのまま、腕を突っ
ぱねて彼を突き放す。

間近に見た彼の顔はいろんな感情がごちゃまぜになっていて、何
と表現したらいいかわからなかった。嬉しそうな、悲しそうな…矛盾
した表情。

私は無表情を変えることなく、そんな彼と距離を取った。身体にこ
もっていた熱が、彼から離れることで徐々に冷めていく。

「貴方の言うことなんて、聞かない。絶対に好きなんて、言わない」
言ってしまったらきつと、すべてが終わる。私も、彼も…何もかも。
私は唇をかみしめながら、ともすればまた頭をもたげてきそうにな
る想いを押さえつけた。

「……うん、わかった。じゃあ俺が何言っても、聞かないんだろ
うね。だったら少し耳をふさいでてよ。俺のこと　俺らのこと、
全部教えてあげる。でも、聞かなくていいから」

……聞く、というのはそういうことではない。私が言ったのは、命令に従わないという意味だったのに……。

しかし、何もかもわかっているとでも言いたげな彼の瞳に、私は気圧されるように黙り込んだ。

なんで突然、こんなことを話し始めるんだろう。そう思いながらも、淡々としたイオの声に耳を傾ける。こんなに抑揚のない声、初めてだ。まるですべての感情が抜け落ちてしまったよう。

たった今、自分の感情を殺した私の声も、こんなふうに聞こえてくるのだろうか……。

「今日はロキから告白されたんだよね、アリス。おめでとう」

「……ありがとう」

全然めでたそうには聞こえなかったが、一応お礼を口にしてみる。途端、ものすごく厳しい目で睨まれた。

「聞かないんじゃないの、アリス」

「……………」

「あいつは俺に、我慢はするなって言ってきた。変な話だよね。俺はあいつにとって邪魔ものでしかないのに」

「……………」

何のことだ？話が見えなかったが、私は今話を「聞いていない」。

ゆえに、質問もできなかった。

「俺に、スタート地点に立てって。でも、俺にはできなかった。だつて」

そこでイオはいったん息をつき、くしゃりと泣きそうな笑顔をつく

る。

「できるはずないよ。俺は、ロキの痛みを体感しちゃったんだもん」

ロキの、痛み……。それは、私がつけた傷のことだろうか。

それを問いただしたくても、今の私には何もできない。もどかしいような我慢できないような感覚に、私は唇をさらに強くかみしめる。

「俺はもう、これ以上　　ロキから何かを奪いたくないんだ」

降りかかる罵声と焼けつくような頬の痛み　　それがイオと
いう存在の、最初の記憶だった。

どうも、やっぱり作者です）、・・、（挨拶のパターンが思いつかなくなっている今日この頃です。

ああああ…本日2回目の投稿だ…。いくらなんでもハイペースすぎだぞ、自分！

いつかこのつけが必ず回ってきます。そのうち1ヶ月1回更新になります、絶対。

さて、今回はアリス視点で話が進んでいきました。いつも通り、暗いぜ…。

とうかラブラブであるはずのシーンである暗さってどういうことなんでしょうかね（- -；）畜生、イオめ…。

とはいえ、ようやくアリスちゃん的心情に変化が現れました。思ったら、ほんと数行で蓋をしちゃいました。

主にイオが悪いです。イオが自己規制をして、さらにアリスの言葉まで封印しちゃうから悪いんです。

イオくん！私はそろそろコメディイオが書きたいぞ！、（#、・・）
ノ（書けないくせに）

次回からはお楽しみのはず（？）イオくん誕生のいきさつです。たぶん長くて3話、短くて2話分は占領すると思います。

レイズ編同様、過去編は基本的に暗いです。とりわけイオ編の暗さは異常です。

うあああ…和み要員（中。。）中カモーン
え？和み要員は誰だっ？

うーん…レーテとか、マルスとか？あ、意外とフレーム様？

どうでもいい話ですが、昨日アクセスPV数が半端ない状況になり

ました。まさかの1位で1'12.8...。今日のやつももうすぐ記録を越しそうです...!

さらにどうでもいいですが。今日の16時21分ごろ、アクセスP
V数が777...!)。。。(アヒヤ!!)

ってことでこのe pを超高速で仕上げました。宿題どうした高校生

前半部分に残酷な描写があります。

虐待シーンが苦手な方はお気を付け下さい。

薔薇は可憐に咲く。朽ちるときも、また然り。

どこまでも母は、残酷なまでに美しく純粋な人だった。

何が起ころでもなく、唐突に視界が赤く染まった。

少年は呆然と、張り飛ばされた方の頬に手をあてる。もしかしたら赤くなっているかもしれない、触れた頬はとても熱かった。

じわじわとおってくる痛みに、まだ10歳の誕生日を迎えたばかりの少年は瞳に大粒の涙を浮かべる。

「う、うあああ　　がつ」

焼き切れるような痛みに大声をあげて泣こうとした、途端、見えな
いところから足が飛んできた。黒いヒールをはいている足は容赦な
く少年の顎をしたから蹴りあげる。硬いつま先に顎を強制的に押さ
えつけられ、少年の泣き声は半ばでかき消えてしまった。

後ろへと派手な音を立てて倒れる少年の左手を、今度はありったけ
の体重を込めながらゆっくりゆっくりと踏みつけていく。

みしり、みしりと骨が軋む音に、少年の丸い瞳が大きく見開かれた。
ヒールの踵は、面積が小さい。その分圧力が莫大な値になることは
周知の事実だ。

「い、いひゃい、痛い！！うわあああつ！！」

少年の悲鳴に足が反応したのか、ヒールが宙に浮いた。少年は涙で顔をぐちゃぐちゃにしながらも、安堵の息をつく。

良かった…ああ、良かった。

そのまま、ゆっくりと踏みつけられていた左手を引こうとした、その時。

べきゃっ

突然振り落とされた足の下で、少年の手首が歪な音を立てて曲がった。

彼は呆然と、てかてかと光るヒールを見つめる。痛い、なんてこと微塵も思わなくて。

ただ、ナンダコレハという疑問だけが彼の頭を占領する。

なんだ、この黒いものは。

なんだ、この変な方向に曲がった左手は。

なんだ、この赤い液体は。

ナンダ、コノオンナハ。

「……………うあ…か…」

声がかすれて、もう悲鳴さえ出ない。あまりの恐怖で、もう涙すら出ない。

後ろから手が伸びてきて、グイツと少年の髪を掴んだ。あまりにも荒々しい動作に、髪がブチブチと嫌な音を立てて抜け落ちる。

そのまま体全部をもちあげられる。もちろん、掴んでいるのは髪だ

け。頭皮に襲いかかる痛みにも、少年はかすれた声をあげながら顔をぐしゃぐしゃに歪めた。

「ねえ」

暗い闇の中、ぽつんと赤みのさした顔が浮かんでいた。整ってはいるけれど、中年を過ぎたあたりだからか、しわがくつきりと見える顔。それを必死で隠そうとしている厚い化粧が余計に老いを際立たせていた。

傲慢で純粹な、美しい女の末路。その醜い姿に、少年は恐怖すら覚えていた。

こんなものになるくらいだったら、今この女の手にかかって死んだ方がましだ。しかしいざ死ぬとなると、途端に生への執着が芽生えてくる。

女は狂気すらはらんだような瞳で、ぎよろりと少年を睨みつけた。やはり闇の中には、彼女の顔と手と足しか見えない。この人には胴体がないんだろうかと一瞬思うが、全身を黒いドレスで包んでいただけのようだった。

そう、全身黒のドレス

まるで、喪服のような。

「今日、あんたのお父さんが死んだわ」

お父さん　見たことも声を聞いたこともない人の名前を少年は虚ろ気に呟いた。

死んだ、だなんて。実感がわくはずがない。死に顔を思い浮かべようとしても、その人の写真は“自分”が持っているもの1枚しかないのだから。それ以外はこの女が全部、灰にしてしまった。

ぶちぶちぶちぶちっ

すさまじい音を立てて、髪の毛が数十本一気に抜ける。ハラリハラリと床に落ちる髪の毛は、明るいピンク色だった。

あまりの激痛に目を見開いて絶叫をあげる少年の体を、女は重そうに持ち上げて床にたたきつける。受け身を取れない幼い少年はそのまま頭から床に落ちた。嫌な音が背中でしたが、もうそれに反応する気力も残っていなかった。

女自身も少年と同じくらい息を荒げながら、金切声に近い罵声をあげる。

「あっ、あんた、やっぱり私のこと馬鹿にしてるの?! そうでしょう! ! その髪、その目、あの人に気持ち悪いほどそっくりよ! 何で? 昼間は全然似てないっていうのに! ! ! あんたなんかっ! ! !」

結局その夜は、彼女が疲れ果てるまで殴られたりけられたりした。

ソファでだらしないびきをあげる彼女に毛布をかけながら、少年は耐えきれずに涙をこぼす。

この女が、憎い。憎くてたまらない。毎日毎日、酔っ払ってきては自分を殴って。夫に捨てられた腹いせに、夫と似ている髪を切ったりして。前に一度金色の目をえぐられかけたりもした。

この女が、どうしようもなく憎い。だけど、憎んではいけない。

この女は、もう一人の“自分”の母親なんだから。

『もう一人の俺へ』

そっちはどうですか？昨日の傷、朝はすごく痛かったけど今は全然平気です。さすが俺、しぶといな。

今日は久しぶりに母さんの機嫌が良かったよ。午前中からどっかに出かけたしな。

おかげで俺は今日一日安心して寝れた。もう一人の俺が出ている時間も寝てるけど、あれじゃあ寝た気がしないんだ。

やっぱり2、3発は殴られたけど、もう一人の俺に比べれば軽いもんだと思う。だから俺、我慢するよ。

あ、そうだ。もう一人の俺は太陽を見たことないんだったよな。今度ビデオに映して見せてやるよ。

なんかすっごい明るいぜ。月と比べ物になんねえよ。

でも俺もそろそろ月が見たくなってきたなあ。写真でいいからくれないかな。

ビデオ、待ってるよ。必ず撮ってやるから。ついでに俺の姿も映してやるよ。

もう一人の俺はピンクの髪なんだよな？いいなあ…俺なんてありふれた黒だぜ。もっと目立つ色が良かった。染めようかなあ。

なんて言ったらもう一人の俺は止めるんだろうけどな。わかってる、やんねえよ。

そう言えば、もう一人の俺の名前そろそろ考えないとな。俺が決めちゃっていいの？

もう一人の俺、いつもありがと。もう一人の俺がいるおかげで俺、息をしてる気がする。すごい支えになってる。また返事くれよな。

俺より
』

拙い文字で綴られている手紙に少年は目を走らせながら、自分の頬が緩んでくるのを感じた。漢字は辞書を引きながらそれを写して精一杯書いたのか、あちこち歪んでいる。

それがまた初々しさにあふれていて、可愛いのだが。少年はまるですぐ下の弟をもったような気持ちでいた。

つい2年前までは、この世界に生まれ落ちたばかりで右も左もわからなかったのだが。

そんなことを思いながら、パラパラと日記のページを最初からめくって見てみる。

最初は本当にただの日記だった。辛い、苦しい、寒い、痛い、怖い……。震えながら書いたのか、さまざまな負の感情は細かく揺れている。

だがある日を境にして、日記ではなくなった。最初の日は「夜の記憶がない、何故だろう」という自分への問いかけだったが、日を重ねていくにつれ「夜の俺、これを読んでるんなら返事をくれ」という“もう一人の自分”への問いかけに変わっていった。

それから、こちらが返事を搔かなくてもめげずにいろいろなことを教えてくれる。この世界のこと、自分のこと、そして母親のこと……。それに折れて返事を書きはじめてのが、つい先週。2年間も放置していたというのに、日記の持ち主　ロキは嬉しそうに返事を搔いてきたのだ。

それ以来ずっと、少年は“もう一人の俺”と呼ばれていた。

少年は珍しく楽しみに笑いながら、新しいページに筆を走らせる。

『俺へ

自分で言うことじゃないでしょ。まったく…ロキはしぶといというよりも図太いだけだよ。

今日はちよっと大変でした。父さんが死んだらしいんだ。母さんは

それにショックを受けて、お酒を呑んできちゃったみたい。で、それからはいつも通り。今回はすごくきつかったかな。左手と背骨、もしかしたら折れてるかも。

太陽ってあの、オレンジ色に光るやつ？俺見慣れてないからなあ……ちよっときついかも。でも楽しみにしてるよ。

月は相変わらず、とても綺麗です。時々見ていると悲しくなってくるけど、ロマンティックだよな。

もうすぐ満月なので、綺麗に写真撮って渡します。

ビデオの件だけ。えー、ロキの立ち絵なんていらなーい。どうせなら可愛い女の子撮ってよ。ま、照れ屋のロキくんにはできない芸当だろうけどな。

冗談だよ。俺も、ロキの黒髪見てみたい。きつと綺麗なんだろうね。染めるのはやめとけば？絶対似合わないから。

俺の名前はロキが付けて。……ござえもんとかキューピーとかダサい名前はやめてよ。女の子の名前も却下。

できれば、ロキが大事に思っている人の名前がいい。それ、すっごく嬉しいと思う。

そんな、いくらなんでも大げさだよ。でも俺も、すごく救われてる。どうして俺が生まれたのかわかんないけど……ロキがいてくれなきゃ、きつと我慢できなかった。

ありがとう、ありがとう、ロキ。

もう一人の俺より』

ありがとう。そう書きながら、柔らかい頬に一筋の涙が伝って手紙の上に染みをつくる。

そのまま、母が起きないように小さく、嗚咽をあげ続けた。

つらい、つらい……苦しくてたまらない。左手だつて痛いし、目の奥だつて熱い。気持ち悪くて何度も嘔吐したことがある。

今すぐ死にたかった。死んで、この悪夢から逃れたかった。

でも、この手紙があるから自分はまだ生きていられる。ロキがいるから、耐えられる。

ロキ……闇の中で一人、貴方だけが光です。

そんなこと、恥ずかしくて書けないけど。伝えられたら、どんなに良いだろう。

いつか伝えよう……この地獄が終わったら、二人で取りとめのない話なんて、しながら。冗談話でもいいから、いつか伝えよう。

それは本当に突然の出来事だった。

ロキが7歳の頃、父が母とロキを捨てて他の女の家へ行方をくらました。母は最初悲しみに泣きただけだったが、父に顔があまりにも似ているロキに我慢できなくなったのか、ある日殴りつけた。それからずっと毎日毎日、同じ……いや、それ以上の暴行を受けている。

そして、変化が起こったのはその翌年のこと。

何の前触れもなく、もう一人の人格が誕生した。

まだ名前さえつけられていない少年に、何があったのかわかるはずもない。それは本当に突然の出来事だったのだ。

最初の記憶は、降りかかる罵声と焼けつくような頬の痛みだった。

それ以来ずっと、ロキは昼のほうの“チエシヤ猫”を、少年は夜のほうの“チエシヤ猫”を担っている。

『もう一人の俺へ

ごめん、3日も返事放置して。さすがに父さんのことがショックだった。

母さんを捨てたり、浮気したり、最低な父親だったけど…俺、父さんに憧れてたんだ。

“チエシヤ猫”として、あれ以上の人はいないと思う。俺も父さんみたいになりたいなって、ひそかに思ってたんだ。……こんなことばれたらまた母さんに殴られるのがオチだな、ごめん。

でも俺って母さんにだから…髪も黒いし、目も黒い…全然父さんに似てないんだよな。顔立ちは似てるって言われんのに。ほんと、もう一人の俺が羨ましいよ。

この頃曇りばつかだったから太陽、取れなかった。明日こそって思ってたけどな。

それと、名前…決めといたぞ。俺の憧れの人の名前。お前がその人みたいな“チエシヤ猫”になってほしいなって思って、さ。

カッコいい名前なんだからな、大事にしろよ！

俺より』

いつもよりも断然短い手紙を、少年は心配そうに指でなぞる。文字は相変わらずぐちゃぐちゃで、気品の欠片もない。それに、なんだか…涙の跡が手紙を滲ませていた。

今日は大して痛みもない。母の方も酔いつぶれてそのまま眠っていたし、ロキのほうも何の暴行も受けていないのか、新しい痣は一つもなかった。

父の死は、そんなにも痛いものなのだろうか。

ココロの痛み、というものを知らない少年は戸惑ったように首を傾げる。最初から今まで教え込まれてきたのは、身体の痛みだけだ。

(……あの女が死ぬ時も、ロキは泣くのかな)

むしろ自分は手をたたいて喜ぶだろう。自分の脅威がなくなるのだから、幸せになれるのだから、当然のことだろうと思う。

だけど、ロキが泣くのは嫌だった。特に“ココロの痛み”とやらで泣かれるのだけは、は。

ロキを、幸せにしてやりたい。あの心優しい少年を。自分を救ってくれた、唯一の恩人を。

ロキがこれで幸せなら

自分は、どうでもいい。

彼の幸せを、祈ろう。いつまでだって、耐えよう。彼の痛みは、自分が全部引き受けよう。

それが、彼にできるたった一つのことなのだから。

パサリ、と小さな音を立てて少年は日記に添えられていた小さな紙を開いた。

そこには、精一杯綺麗な字で書いた単語が一つ、だけ。

『 I n o 』

「い……お？い、お……イオ……イオ、か」

何度も何度も、紙に書かれた名前を呟く。きっと、呼んでくれる人はこの先誰もいないけど。誰にも呼ばれない、悲しい名前だけ。ポロリ、ポロリと大粒の涙が金色の瞳からこぼれおちては床にぶつかってはじける。

こんなに、こんなにも名前を貰うことが嬉しいだなんて、思わなかった。

「イオ…い、お

俺の名前は、イオ……」

地獄に一筋の光が差し込む。

だけど、この時の少年

イオには、まだ知る術もなかった。

本当の地獄はまだまだ始まってすらいないということ

……

どうも、ただの作者です）、・・・（ノとりあえずこの第3章が
終わるまではこの挨拶の仕方頑張ろうかと思ってます。

さて、本日は重要なお知らせがあるので雑談をカットしてさっさと
あとがきをあとがきに移りましょう！

……しよっぱなからこのテンションではじめてますが、本編はあり
得ないほど暗いです。

うーん……グロいのは大好きなんですが、やっぱり書きなれてないせ
いか、なんとも下手ですねえ……。

作者「悲鳴の出し方がイマイチだ。もっと痛々しい悲鳴を……うへへ」
失せる

というのは冗談で（本気も入ってましたけど）。

それにしてもイオ少年……きみ原形とどめてないじゃん……。なんだ、
この妙にいじらしい純粹っ子ちゃんは。これがあんなのになっちゃ
うんですねえ……世界って切ないです（・・・）

ロキはどっかのガキ大将を意識して書いてみました。今より可愛げ
がある……。二人はこの時点ではかなり仲が良かったです。これから
歯車が狂ってきます。

今回の虐待シーン、気を悪くされた方は申し訳ありませんでした。
今回は別の意味でグロくなります。その次は大丈夫です、予定では
イオロキ過去編のプロットが完成しました。やはり3つにわかれそ
うです。もう少々グロいのもお付き合いくださいませ……。

【重要なお知らせ】

端的に申します。今回より「不思議の国のアリス*幕」はストック制になり、3日に一度の定期更新をしたいと思えます。そのため1日に何度も更新する、ということはおそらくありません。次回の更新は10月9日です。遅れることもあると思いますが、ご容赦くださいませ。

経緯は以下をお読みください。

今日数学の時間に(勉強勉強勉強)全体のプロットを大まかに計算してみました。すると…なんと恐ろしいことに、切り詰めて執筆をしても最低「序章+8章+終章」になるとわかったのです。

序章、終章は各1話ずつのため問題ありません。しかし見ての通り、この小説は1章1章がとも長いのです。

第一章は9話、第二章は7話、そして今回の第三章は予定では12話までいくつもりです。平均して、1章を10話として計算すると…なんと、80話も作らなきゃいけない羽目になってしまったんですね…。伏線張りすぎだ、自分

そして問題となるのは、私の職業です。来年にはいるとおそらく受験勉強がスタートし、まったくパソコンに手が伸ばせなくなります。自分のけじめも含めて、何とか4月までに仕上げたい!ということに計算してみたところ……。

(。。。)ンマツ!

なんと、3日に1回更新…。

ということ、更新を安定させるためにストック制にします。

今週から中間考査2週間前となるのでもしかしたら間に合わなくなるかもしれませんが、全力を尽くします。

これからお付き合いくださいませ…。

誰か一人が呼んでくれていただけでも、励みになっております!

残酷な描写および見ようによっては一部近親相姦もどきなシーンがあります、ご注意ください。

女^{はは}の様子が、変わった。

イオはびくびくと笑顔の女に怯えながら、後ろ手に扉があることを確認した。

リビングさえ出れば、こんな気味の悪いこの人を見ずに済む。この家に鍵なんて一つもないため、扉をこじ開けられたら終わりだが、今よりかはずいぶんましになるはずだ。

しかし冷たい金属のドアノブに白い指が触れた、その時。

「あなた」

「……っ?!」

甘えるような猫撫で声に呼ばれて、全身が泡立った。以前刻みつけられた恐怖で、身体ががくがくと震える。激しい暴行を受けた身体はどうしても、この女の声には逆らうことはできなかった。

母はぞっとするほど気味の悪い笑顔のまま手を伸ばしてきて、小さなイオの頬を愛おしげになでる。

冷たい、死人のような乾いた指。爪に塗りとくられている毒々しい赤のマニキュアが、視界の端でチカチカした。

突き飛ばしたいくらい気持ち悪いのに、身体は動けない。この笑顔から目をそらせない。まるで金縛りにあったかのようにだ。

「愛してるわ。イオ、愛してる」

突然吐き出された愛の言葉に、当然イオは意味がわからないというふう^{ふう}に首を振った。

アイシテル？嘘だ。嘘だ、あり得ない。この女が、自分のことを

ロキのことを、愛しているはずがない。

愛していたなら、何故あんなことをやった。何故ロキを泣かせた。なぜここまで自分を追い詰めた。

こんなの、愛じゃない。こんな愛、認めない。

しかし、首を振るイオの頭を頬を撫でていた手とは違う方の手でがっつと掴まれ、イオの体は情けなくも硬直してしまった。

また、髪を引つ張られるのか。2年間の暴行に対して慣れてしまった身体は、反射的に目をつぶって、身構えてしまう。

だが母は、髪を引つ張ってはこなかった。殴っても、蹴ってもこなかった。

ただ、昔は「大嫌い」と叫んでいた紫の髪を指で梳いては、熱のこもった眼でじろじろと見る。

「だから、ねえ…あなたも私のこと愛してるでしょう？」

ぎり、ぎり、り…

「あ、が、ひいああっ、い、いたい、いたいいいつつ…！」

頭を掴んでいた手に潰してしまおうのではないのかと思うほどの力を加えられ、イオは無我夢中で振りほどこうとした。

しかし中年の女とまだ10歳の子供。体格差がありすぎる。

女は足をバタバタさせて苦しむイオを見て楽しげな声を立てながら、耳元にそつと囁いた。

「ねえ、イオ…愛してるって言って？」

誰が、誰が言うものか。こんなひどいことする女を愛す男の気がし

れない。嘘でも、こんな奴なんか……！！
しかし、身体は心よりも格段に従順だった。まだ苦しめたりないと思っただのか、首に伸びてきた女の手を見て、掠れた声で口をついて出る。

「あ、あいしてる、あいしてるからっ」

ぼろぼろと、涙を流しながら何度も「愛してる」と叫ぶ。嘘だとわかっていても、こんな女に愛を囁いている自分がひどく穢く思えた。これは、ロキの身体なのに。それなのに、自分が穢してしまった。穢い愛を口に出してしまった。
咽び泣くイオの身体を、女は包み込むように抱きしめる。その顔には今までに見たことのないほど幸福に満ちていた。

「私もよ。あなたを愛してる。イオ、愛してる。愛してるわ……この紫の髪も、金色の瞳も、全部全部、私のもの……他の女になんかやるものですか」

数え切れないほどの愛を注ぎ込まれる。しかしそれには決して優しくなんてこもっていなくて、イオに恐怖だけを与えた。
ただ押し付けるだけの、愛。愛を強制する、愛。縛りつける、愛。吐き気がする。それでも頭の片隅では殴られるよりかはましだと考えていたのだ
……

父が死んだと母から聞いた、その1カ月後から母の態度はだんだんと変わっていった。

最初は、暴行がなくなった。そのことにイオは狂喜乱舞したが、1週間もたつとじわじわと違和感を覚えてきた。

母の様子が、おかしい。

まるで恋をしている乙女のような目でイオを見つめ、淫乱な売女のような手つきでイオに触れてくるのだ。

そして、先程のように何度も愛を囁いてくる。

一度も、聞いたことのない言葉なのにだ。父が死んでから、壊れたオルゴールのように母はイオに向かって愛を押しつけてきた。

てつきり、ロキが愛されているからその延長線なのだと思っていた。

身体に残る、おびただしい数の切り傷を見つけるまでは。

「な、なんだよ…これ」

イオは日が暮れると同時に感じた激痛に、床の上で呻くような声をあげる。

首を絞められたのか、ひりひりと焼けつくように痛い。手足も拘束されていた跡があり、全身にひきつるような痛みを覚えた。

何とか重い身体を引きずって、母の所有物である鏡台の前に立つ。

上半身のシャツを脱いで傷を確かめようとした瞬間、イオの瞳が驚愕の色に染まった。

「ひっ…」

半分まで脱ぎかけて見える、白い腹部に刻みつけられた、傷、傷傷傷…。

無数の傷が、びっしりと肌を埋めていたのだ。

震える指で触ってみると、ぬるりとわずかに血がついてきてそれがついさつきでできた生傷だとわかった。

こんな暴行、受けたことない。いつも自分が受ける暴行は、殴られたり蹴られたりするだけだった。こんな…まるでナイフで切りつけた、みたいな傷…。

自分が受けてないとすれば　　これを受けているのは、誰だ？

体中の血が引いていくような気がした。イオは身体に残る痛みにも気がつかずに、自分の部屋へとあわただしく入っていった。

机の中身を全部ぶちまけて、今まで貰った日記を探す。最新のものからはやる気持ちを落ち着けながら、目で追っていった。

『イオへ

母さんはこの頃大人しいな、全然暴行もなくなったし。

大丈夫、お前に囁いてる愛だとか何とかも全部おさまるよ。心配すんな』

最初だけ読んで、床に放り投げる。次のやつ…今度は自分が書いたやつだ。それも最初だけ読んだ。次々と、新しいやつからめくっていく。

『ロキへ

ロキ、俺もう嫌だよ。あの人気持ち悪いんだよ。俺のことを愛してるなんて…もうヤダよ。

助けて、たすけて…ロキ』

「イオへ
母さん、虐待やめたみたいだよ。俺、殴られてないし。
お前の方も何とかなればいいんだけどな…待ってる」

「ロキへ
またあの女に好きって言わされた。何で俺がこんなこと言わなくち
やなんないんだよ。わけわかんねえよ…」

ロキ、なんとかできないの？あの女、絶対気がふれてる…」

手紙は、どれもこれも同じような内容ばかりだった。母に対する嫌
悪感からロキに助けを求めるだけの自分と、執拗に虐待されていな
いと言い続けるロキ。

イオは、次の手紙を読もうとして、自分の手がプルプルと震えてい
るのに気づいた。先程からずっと感じている違和感。その正体に、
気づいてしまったのだ。

ロキは　　しつこすぎるほど、虐待されていないと訴えてた。

それが、何を意味するか。そんなもの、体中の傷を見れば一目瞭然
だった。

ロキは、嘘をついている。

虐待は終わってなんかいない。むしろ、ほとんど殺す意思しか見ら
れないほどにエスカレートしている。刃物まで持ち出して、ロキを
苛さいめている。

彼はそんな見え見えの嘘までついて、何を隠したかったか。
ポトリと、足元に持っていた手紙が落ちた。それと同時に、階下で
甘えるような声がする。あの女が帰ってきたのだ。

「イオ？イオ？どこにいるの？」

そうだ。少し考えればわかるはずだったんだ。わからないほうがどうかしていたんだ。

どうしてこの女は“イオ”という名前を知っていたんだ？

もちろん、教えても意味がないから一度も彼女の前では口にしていない。手紙を読まれていたとも考えられない。

彼女は、そう　　最初から知っていたのではないか？その名前を……いや　　その名前をもつ男を。

『俺、父さんに憧れてたんだ』

ああ、そうだ。ロキは自分の父親に心酔していた。最低な父親であるにも対して、憧れていた。

父親によく似ている自分に対して、羨ましいとこぼすほどに。

『名前…決めといたぞ。俺の憧れの人の名前』

名前は、自分から大事な人の名前にしてほしいと言った。そしてロキはそれに応えてくれたのだ。

憧れの人の名前をつけたと言った。憧れの人の、名前を。

『お前がその人みたいな“チェシャ猫”になってほしいなって思って、さ』

チェシャ猫で、ロキが憧れていて　　そして、あの女に愛おしげな声で呼ばれる、その名前。

すべてのピースが、かちりと音を立ててはまった。それと同時に、ガチャリとしまっていたドアが開いた。

ドアの向こうに見えたその姿に、もう恐怖なんて抱けなかった。ただただ、哀れな下等生物を見るような目を向ける。

「ああ、ここにいたのね、イオ」

イオ それは、ロキの父親、この女の夫の名前だ。

この女は、イオ越しに自分の夫を重ねてみていたのだ。

「一つ、聞いてもいいかな」

イオは女の腕に抱きしめられながら、何の感情もこめないで尋ねた。頭の中でいろいろなことが回る。

ロキに刻まれていた傷。ロキの見え透いた嘘。ロキがくれた名前。なんで、ロキがあんな仕打ちを受けなくちゃいけない。なんで、あんな苦しい嘘まで吐かなければいけない。なんで、俺なんかのために……

「ええ、いいわ。何をききたいの？」

感情がすっばりと抜け落ちたイオにも気付かずに、母は舐めるような視線をイオに向けていた。

今だったらわかる。この女はずっと、自分の瞳と髪を見ていたのだ。常々父親とよく似ていると罵られてきた、金色の瞳と紫の髪を。

ロキが持っていないもの。ロキでは、彼女にはどうしても不足だったのだらう。だから自分に愛情を集中的に注入して、かわりにロキ

には……。

「ロキを、どうして切りつけたの？」

「ロキ？誰のこと？」

この人は、もう

自分の息子さえ、認識していないのか。

心が、震える。いけないとはわかっていた。だけど、抑えられないこの想い。

こんな……こんなにごす黒い怒りは、初めてだ。人はこれを、憎悪と呼ぶのだろう。

いけない。駄目だ。これでは、ロキを悲しませるだけ。ロキを傷つけるだけ。

自分がどう傷つこうが、どうでもよかった。ロキがいたから耐えられた。どんなに傷つけられたって、ロキのためだったら抑えられる自信があった。

だけど、この女が傷つけたのは、自分ではない。

「昼間の時間、黒髪の男の子がいるでしょう？その子は、どうしたの？」

「ああ、あの子ね。それがね、すっごく生意気なのよ。私とあなたの仲を妬ましく思っているのかしら？イオに愛してるなんて言わないでくれ、とか言い出すのよ。生意気でしょう？」

『いい加減にしろよ、母さん！』

脳裏で創作される、黒髪の自分。鬼神のような仮面からはみ出して、母に忘れられた悲しみと侘しさが見え隠れしていた。

狂ってしまったこの女を誰よりも一番理解して、愛していたのはロキなのに……それなのに、あまりにもひどい仕打ちだ。

『もう、あんたの夫は死んだんだ！似てるからって……』

切りつけられても、首を絞められても……殺されかけたって、脳内のロキは訴えるのをやめない。何度も何度も、「やめてくれ」と繰り返す。

『“もう一人の俺”が似ているからって、歪んだ愛を押しつけてないでくれ……っ』

身体の傷なんて、大したことない。本当に痛いのは、ココロなんだから。

自分を愛してくれない、見てさえもくれない母親への痛み。ただ助けを求めるだけのイオへの痛み。

すべての痛みを、ロキが受け止めていた。……あの日、自分が引き受けると決めたのに。

ああ……助けなんて、求めちゃいけなかったんだ。

助けなんて、求めるべきではなかった。自分がロキに縋りさえしなければ、ロキが自分を庇おうとなんてしなかっただろう。

傷つけられることなんて、なかっただろう。

イオはくらりとした眩暈を覚え、母の胸の中に顔を埋める。母はそれをとても嬉しそうな顔で受け止めていた。ロキは……すべてを察したロキは、この女を説得しにかかったのだろう。文面からもなんとなく読み取れた。だけど、この女に通じるはずがない。

この女に、通じるはずがないんだ。

「だから少し、苛めてやったの。でも次変なことを言ったら、殺してやるつもりなのよ」

この女は

狂ってる。

もう、この瞳は誰も映していないんだ。誰一人として。他人も、自分も、夫も、
自分を唯一愛してくれた、息子でさえ。

憎しみなんて、すでに胸の中から消えていた。不思議な気持ちだ。
あんなに憎かったのに…数秒前までだって、感じたことのない怒りに囚われていたのに、今は何も感じない。

いや

唯一感じているとすれば、哀れみだ。

この人は、こんなに綺麗で純粹で、哀しい。美しいゆえ、壊れやすい。

もうこれ以上、苦しめたくない。もうこれ以上、穢したくない。彼が女に抱く憐みはどこか、愛しみにも似ていた。

「もう、いいんだ」

そっと、背筋を伸ばして彼女の首元に口づけた。そのまま熱い舌を、しみだらけの
それでも綺麗と思える首筋に這わせる。

やがて、ドクンという鼓動を見つけ、そこに焦点を絞った。何度も何度も、生きているという感触を確かめるようにその場所に口づけてを落とす。

解放しよう。全部、全部…解放しよう。この女も、ロキも。

とらわれるのは、自分だけで十分だ。すべての業を、この身に。すべての罪を、この心に。

誰も苦しまなくていい。悲しまなくていい。憎しみなら、全部俺が受けるから。もう、貴女が受ける必要なんてないから。

狂ってしまうまでに、憎んで愛されて。愛して憎まれて。もう、いいんだ。苦しかったろうね。悲しかったろうね。愛して、ほしかったろうね。もう、いい。もういいから。

「もう　　楽になって、母さん」

チエシヤ猫らしく鋭く伸びた犬歯で、彼女の頸動脈を噛みちぎった。初めて呼んだ、「母さん」。それをきくことなく、あっさり彼女はこと切れた。

命とは、こんなにも容易いものなのか。

少し血を流しただけで。少し強く噛んだだけで。こんなにもあっさり、壊れてしまう。

イオは動かなくなつた亡骸はたをきつく抱きしめながら、ぼんやりと暗闇を見つめていた。

口に広がる、さびた鉄の味。それが気持ち悪くて、何度も嘔吐した。もう、胃の中は空っぽだ。空腹感を感じるが、今何かを口にしたら胃に行く前に吐き出してしまつたらう。

これで、良かったのだろうか。今更ながらそう思う。

口キはきつと、自分を責めるだろう。責めて、憎むだろう。それでよかった。憎むことで少しでも口キの悲しみが薄れるなら……俺は全力で憎まれよう。

イオは母親の顔をそっと閉じて、寝顔のような安らかな顔をじっと見つめていた。

胸の中が、熱くなる。どうして……どうして、涙が止まらないのだろっ…？

母に牙を突き立てた時、あの瞬間から完璧な人形になれたと思ったのに。何も感じない人形になったと思ったのに。

ぼろり、ぼろりと次々と涙が落ちては母の頬にあたって消える。イオは耐えきれなくなったように思い切り泣き声をあげた。

「ふ、あ、あ、ああああああああああああっ！」

まるで断末魔のような、泣き声。どんなに殴られたって、蹴られたって、こんなに痛くなかった。苦しい、痛い、苦しい、悲しい、痛い、苦しい。

胸が、張り裂けそうに痛い。これが、“ココロの痛み”？

「あ、ああっ、かあさ、うっ、ひっく、うあああっ」

止まらない、嗚咽。尽きない、涙。バラバラになっていく、ココロ。今だったら、確かに言える。

自分はちゃんと、この女を愛していた。

母として。ロキの母親ではなく、自分の母として……確かに、愛していた。

今頃気づいたって、もう何もかも遅い。何一つ、自分の気持ちを伝えられぬままこの女は逝ってしまった。

少し血を流しただけで。少し強く噛んだだけで。こんなにもあっさり、壊れてしまう。

命とは、こんなにも容易いものなのか。

更けていく闇の中、懺悔のように泣き声だけが響く

……

こんにちは、眠気全開の作者です（> < > <）
 あ、気持ち悪い顔文字ですね、自作でやるとこんなのできませ
 ん。

さて、イオアリ過去編、通称「バラ編」も中盤まで終わりました。
 というか母親が死んだのもうほとんど終わりといっているんです。
 今回はしめくりっぽいものだけなので、そこまで暗くありません。
 今回は母様完璧狂ってましたね、すみません。特に前半部分のここ
 ろ、近親相姦っぽいですが、断じて違います。ええ、違います。こ
 れはただ単にこの母親の狂気の現れですね！……近親相姦を書きた
 いんじゃないんです、すみません（・・・）
 イオくん、かなり哀れなことになっております。あれは確かに気持
 ち悪いと思うよ、うん。書いてて何度目をそらしたか…。
 ロキ少年、いつも通り出番が少ないぜ……いいよね、前あんなに使
 ってたんだから…。
 そしていつも忘れられるルア君。ごめんよ、君のターンって思った
 以上に少ないんだわ……。主に説明役にしか使っていないしね（あ）
 それはそうとして、今回は本当にすみません。生理的に嫌！って方
 もいたかと存じます。次回はだいぶ明るくなります。

あ、それは置いて……。なんと前回の投稿の翌日と翌々日、PV
 数が1800越え……。な、何があった……。あまり伸びすぎるとそれ
 はそれで怖いぞ！
 しかもこの頃投稿が多いせいか、1000越えでアクセス多い日ラ
 ンキング10にランクインする日が4日もありました…。
 いや、1000越えて多いのかどうかわかりませんがどね？今ま
 でのPV数は多くて400あたりでしたから驚いて…。

この幸せは、いつまで続くのでしょうか……（ ー ー ー ）
ネガティブ思考

お気に入り登録、評価、感想くださった皆様、拝見して下さる読者様、どうもありがとうございます！
毎日それを励みに執筆させてもらっています。

今回の更新は10月12日です。たぶんこれは間に合います。

その次の更新は、なるべく10月15日にやりたいと思っていますが、中間考査直前なので休むかもしれません。ご了承ください。

ざくっ……ざくっ……

穴を、掘る。爪で土を掻きあげて、指で土をまとめて、手で土を押しつける。

ざく……ざくっ……

どれくらいそうしていたのか、わからない。少なくとも、腕から下の感覚が全くなくなってしまっただけではある。

初めは土に落ちてはしみ込んでいった涙も、今は枯れ果てたのか一粒もこぼれなくなった。

月があんなにも、高い。ロキが見たいと言って……結局写真に収められなかった、月が。

「何をしているんです?」

頭上で澄んだボーイソプラノが聞こえ、イオは虚ろな視線をそちらに向けた。

穴の脇に立っている、黒い影。こちらを不思議そうに見つめてくる瞳も、少年にしては長い髪も、ついには着ている服までもが夜のような綺麗な漆黒の色だ。幼さが残る顔はきつと、自分と同じ年ごろの少年のものだろう。

彼は、奇妙な帽子をかぶっていた。縦に長い…手品師が被るような帽子。そもそも帽子というものをあまり見たことのないイオはその少年に唯一、そこだけに興味がひかれる。

「あんだ、誰」

無感情に尋ねると、黒の少年はピクリと不機嫌そうに眉を寄せた。まだそれほど深くない穴へと足を踏み入れる。イオは抗議する気も失せて、穴を掘る手を再開させた。そんなイオをじっと見ていた少年だったが、沈黙に耐えかねたのか、呆れたような溜息をひとつく。

「相手の名前を尋ねるときは普通、自分から名乗るものでしょう」

……随分と変なことを言う奴だ。

本当は無視を決め込むつもりだったが、イオは知らず知らずのうちに口を歪めて答えていた。

「じゃあ、いい。あんだの名前なんかどうでもいい」

「……まったく。仕方ないですねえ……」

何が、仕方ないのか。そう問いかける前に少年が自分の隣にしゃがみこんできて、ドキリとする。近くなった顔は、存外に整っていて落ち着いた風貌を思わせるものだった。

口キもこんな感じだろうか。それとも、もっとやんちゃなのだろうか。

ぼんやりと考えたまま作業が止まっているイオの手を、少年がぎろりと睨みつけた。

「ほら、掘るんでしょう？何を休んでんですか」

吐き捨てるように言われて、イオはあわてて手を動かした。その隣で少年が何を思ったか、がりがり土を引っ掻きはじめる。

「何、やってんだ」

「何って、もちろん掘ってるんですよ。それ以外何か考えつきます？」

……なんでこの少年はこう自分につっかかってくるような口調なのだろう。

それははつきり言ってイオの最初の一言のせいなのだが、そんなことは露知らず、イオは呆然と少年を見ていた。

自分とは違う整った爪に汚い土が入ってくるのを見かねて、イオは口をはさんだ。

「何でそんなことやってんだよ」

「……わけのわからない人ですねえ、貴方は。むしろこっちが聞きたいくらいですよ。貴方はこんなに深く穴を掘って……何をしましたかっただんです？」

また、最初と同じ質問。イオはぐっと言葉に詰まってしばらく黙りこんだ。

彼が穴の外から来たというのなら……きっと彼は、見てしまっているのだろう。

布に包みもしないで引きずってきた、母親の死体。その肌の色はこんな暗い夜でも、生きている人のものだとは思わない。

何も話さなくなったイオを片目で見ながら、少年は淡々とした口調で尋ねてくる。

「あの人を埋めるんですか？」

単刀直入な質問にも、答えない。唇を引き結んで決してはなそうとしないイオをちらりと見てから少年は「呆れた」と呟くと、今度は誰に言うでもなく、穴に吸い込まれるようにして語り始めた。

その間も、イオと少年は手を動かしていた。穴はもう、だいぶ深い。二人の頭がすっぽりと隠れてしまいうくらいだ。

「ここは僕たち孤児の施設です。この大きな穴は校庭の端っこ。早く掘って埋めなければ、僕が怒られてしまいます。だから手伝っているだけなんですからね」

言い訳めいた言葉と同時に、少年は一人立ちあがった。腕を伸ばして穴の深さを測る。

大体大丈夫だと判断したのか、少年は一瞬満足げな笑みを浮かべると、厳しい顔をイオのほうにむけてきた。

「何をボヤーっとしているんですか。ほら、早く埋めますよ」

……………なんでそんなことを赤の他人に言われなきゃならないんだ。もっともな疑問が頭を占領したが、有無を言わせない声音にイオはぎこちなくうなづいていた。

白い顔に、土がかかる。何度も自分を殴ったしわだらけの手に、土がかかる。いつも着ていた喪服のような黒いドレスに、土がかかる。埋もれていく、全部。思い出したくない記憶も、悲しみも、苦しきも。大切だった、何かでさえ、土に隠れて埋もれていく。土の中は、寒いだろうか。寒いの嫌いな母は、こんな所に埋められてほしくなかっただろうか。

土の中は、暗いだろうか。暗闇に独りは、寂しくて苦しくて胸が張り裂けそうではないか。

「この女を

」

イオは、誰にともなく言葉をこぼす。隣で自分と同じように土をか
け続ける少年に向けてかもしれない。それとも、寒く暗い穴の中一
人軀を横たえる母に向けてかもしれない。

「母さんを、眠らせてやりたかったんだ

……」

誰に受け止められるでもなく、その声は澄み渡った夜空へと吸い込
まれていった。

「ここは、貴方のような両親を失った子供が集められている施設で
す。僕たちはここで勉学を学び、体術を学びます」

「……」

何も話そうとしないイオに何も聞こうとしない少年。イオはふらつ
いた足取りのまま少年に手をひかれて歩いていく。

少年はやはり自分より一回り背が高く、綺麗な顔立ちをしていた。
頭に乗る奇妙な帽子がそれを半減させているのだが。

「この世界で孤児なんてありふれたものですからね、ほとんどの子
供がここにいますよ。孤児じゃない人もきてますし」

「……」

「大体勉学だけなら8、9歳で卒業していきます。体術を学びたい
という子供は15歳ぐらいまで普通に残りますけどね」

「……」

「貴方、行き先はあるんですか？」

「……」

「……首を振るだけでもいいから答えて下さい」

少年が不満げにこちらを振り向く。イオは応えようかどうか躊躇した末、やがて小さく頭を横に振った。

行くところなんて、どこにもない。家に帰る必要だってないし、自分は完璧な自由だ。

あれほど望んだ、身体の自由。なのになぜ、心は自由になっくれないのだろう。

心はまだ、寒くて暗い土の中に閉じこもったままできてくれない。それとも、先程自分が埋めてしまったのだろうか　母と一緒に。

「なら、ここに来ますか？」

躊躇ったように尋ねられた一言に、イオはきよんとする。少年は気恥かしげに頬を染めながら、目の前の建物を指差した。

いつの間にかたどり着いていたのだろう、目の前にはだいぶ古い校舎がそびえたっていた。俯いたまま歩いていた自分にはわからなかったのか。

こんな時間だからか、校舎は死んだようには寝静まっている。暗い闇の中凜とたたずむ白い建物は、あちこち壊れているというのにとっても綺麗に思えた。

自分の居場所は、どこだろう。

ふと、イオは思う。

居場所を失くしてしまった自分は、行き先を失くしてしまった自分は、どこに居ていいのだろう。

こんな所に、こんなに綺麗なところに……いて、いいのだろうか。居場所ができるのは、嬉しい。でもそれと同時に、胸が締まる。行きたいという想いと行けないという想いがたがいにイオの中で大きくなっていった。

「……聞き方が悪かったようですね。あなたは、ここに居たいですか？」

その質問には、迷わず頷く。少年の顔が嬉しそうに輝いたが、イオは彼が何かを言う前に「だけど、行けない」と呟いた。

少年は今度は訝しげに、眉を寄せる。行きたいのに、行けない。その感覚が彼には理解できないのだろう。

「何ですか？ 僕らはいつでも歓迎

」

「こんのくそぼけあほんだらあああああつつつ！！」

ドゴッ　ズザザザッ

突然、視界の中から少年の立ち絵が消えた。印象的だった帽子が、あまりの速さについていけなかったように空中に取り残され、パタリと落ちた。

地面に、ではなく……突然少年にとび蹴りをかました少年… Bの掌に。

喝采を送ってしまいそうになるほど綺麗なとび蹴りを脇腹に食らった少年は、5メートルくらいすつ飛んでからパタリと声もなく地面に倒れた。

イオは一連の出来事を呆然と見て、少年を鬼の形相で睨みつける少年Bを観察した。

少し垂れさがった目は綺麗な水色。髪は少年と同じ黒髪だった。自分よりも小柄な体つきは一瞬女の子かと見間違えてしまうほどだ。

そして、何より印象的なのが……ピコピコと動く、白く長い耳。自分にも同じものがついてるので同じようなものかと思ったが、それにしても長いし色も形も全然違う。そう、動物に例えるならウサギみたいな耳で……よし、少年Bはこれからウサ耳少年と名付けよう。

ウサ耳少年はこちらをギロリと一瞥したが、特になにを言うこともなくすぐにまだ地面に伏したままの少年に視線を戻す。

イオが見守る中倒れた少年のそばに近づいていくと、げしりとその頭をふんづけた。そのままの体勢で、先程と同じ若干高めの声でどなり散らす。

その光景は、なんとというか……女王様と下僕といったものによく似ていた。

S Mプレイ。この瞬間にイオの中で将来にかかわる新たな性癖が生まれたのかもしれない。

……まあ、主にその被害に遭うのは将来アリスと呼ばれる少女オンリーなのだが。

「こんな時間にお茶会？真夜中12時過ぎに？それでこの僕が貴方を探しに行かなきゃならない？

ふざけんのも大概にしやがれ」

げしげしと何度も踏みつけるウサ耳少年のほうは満面の笑みを浮かべていたが……黒い。黒いのに爽やかといった笑顔が余計に怖さを引き立たせていた。

踏みつけられた少年のほうは軽く顔をひきつらせながら、お腹を庇うようにして体を丸める。

「ううっ……い、一段と蹴りに鋭さが増したようですね、ルア……。なんでこうもみんな僕を追い抜いて行くんでしょう……」

「貴方が軟弱野郎だからですよ、レーテ」

お互い敬語で、しかも笑顔のまま交わされるやり取り。レーテと呼ばれた少年は何かウサ耳少年の追撃から逃れると、足を踏ん張ってたちあがった。

やはり先程のとび蹴りがかなり効いたのか、足取りはおぼついている。イオは恐る恐る彼に近づいて、心配そうな視線を向けた。

彼もそれに気づいたのか、自分よりもだいぶ大人びた笑顔で「大丈夫ですよ」と答える。

「まったく……話の腰を折るついでに僕の腰も折るつもりですか。この頃可愛げがないですよ」

「可愛げなくて結構。貴方はまた変な猫でも拾ってきたんですか。捨て猫、捨て犬、捨て豚、捨てライオン……捨ててあるものなら何でも持つてくるのはやめて下さい」

(ぶ、豚にライオン……? そんなもの拾ってきたのか、この人……)

隣にいる少年に胡乱気な視線を向ける。かなりの常識人だと思ったのだが……どうやら見解が間違っていたようだ。

しかし少年はそれに気づくことなく、イオの頭に手をのせた。そのままぐしゃぐしゃと髪をかきまぜる。

「ええ、綺麗な猫でしょう? 可愛いウサギも僕が拾ってきましたしね。どう育て方を間違えたか、今は全然可愛くありませんが」

「悪かったね、可愛くなくて。確かに、随分と綺麗な顔立ちの猫だ」

……何のことだろう。イオは言っている意味がわからなくて首をかしげる。

少年の視線は、イオとウサ耳少年の両方に注がれていた。まるで愛

しむような視線が一瞬、母のものと重なる。しかし、まったく気持ち悪いとは思わなかった。それどころか、その優しい視線に心地よささえ覚えてしまう。

自分も、母にこんな視線を向けてほしかったのかもしれない。愛しいと、思っただけでよかったのかもしれない。夫じゃなくて、自分をみてほしかったのかもしれない。

母親としてのぬくもりが、ほしかったのかもしれない。

今は決してかなうことのない願いだけれど。どうしてだろう。こんなに、こんなに胸が熱い。

「やっと、笑いましたね」

頭に触れる手のぬくもりが、抱きしめてくれる腕の感触が、こんなにも嬉しい。

笑ってなんか、ない。自分はただ顔をうつむけて、涙をこぼしているだけだ。もう枯れ果てたと思っていた涙を。

なのに、この人は笑ってるという。抱きしめながら、涙を指ですくいながら。

すぐそばで、呆れたような溜息が聞こえた。そちらに視線を向けると、諦めたようにウサ耳少年が笑っている。その清々しい笑みに、どきんと胸が高鳴った。

「事情は知りませんが、諦めなさい。レーテのおせつかいは筋金入りなんです」

「れい…て？」

それがこの少年の名前だろうか、と自分を抱きしめたまま頭をなで

てくる少年に視線をやる。
少年はほんの少し悪戯っぽく笑うと、下から覗き込むようにして腰をかがめた。

「それを教えてあげるのは、貴方が先ほどの質問にイエスと答えてからです」

「質も…?」

「貴方は、この施設に来ますよね?」

振り出しに戻り、イオはうつとつまつた。しかし少年の質問は先程のような優しいものではない。もう遠慮なんてしないぞ、とでも言いたげな…強引な、誘い。

来ても、いいのだろうか。自分はこの場所に、居てもいいのだろうか。

こんなに、穢れた自分が。

「来てもいいのだろうか、こんな場所に居てもいいのだろうか…
そう思ってますね?」

「へ…?」

今まさに思っていたことを正確に言い当てられて、イオは戸惑ったような声をあげる。

言い当てたのは意外にも、ウサ耳少年のほうだった。ほんの少し怒ったような顔に、びくりと体が震える。

「ここに来る子供は大体が同じことを思います。罪深い自分が、穢れた自分が。そうして自分を卑下して、何か生まれましたか?」

「ちよつと、ルア…それはいいすぎなんじゃ…」

厳しい言葉に反応したように、少年が何かを言いかけるがウサ耳少

年に一瞥を貰い黙り込んだ。

イオも唇を引き結んで、その言葉をじつくりと頭の中で反芻する。

「貴方は結局、何もしようとしていない。誰かのために何かをした
いなら、もっと強くなりなさい。施設はそのための場所です。誰の
居場所でも、ない。僕の……貴方の居場所でも、ね」

「ルア！それはいいすぎです！」

隣の少年が起こったように何かを言うが、イオには聞こえていなか
った。

強く……強く、なれば。大切な人を、守れるだろうか。大切な人を、
傷つけずに済むだろうか。強く、なって……どんな苦痛にも耐えら
れるように、なって。

すべてを受け止められる強さをもったら、ロキは泣かずに済むのだ
ろうか……？

気付けば、自分はその場に膝をついて頭を垂れていた。二人が驚い
たような声をあげるが、イオは土下座をやめない。
額を冷たい土に押し付けるようにして、懇願する。

強く、なりたい……

「俺を、この施設に入れて下さい」

今度こそちゃんと、あの子を受け入れられるほどの強さを。そう続
けるイオを、ウサ耳少年が感心したような顔で見てくる。
反対に帽子の少年は呆れたような声をあげた。

「まったく……お国のため”主義のルアは強引なんですから……。い

いんですね、こんなやり方で」

「誰がお国のためですか！僕が忠誠を尽くすのは“アリス”だけです！」

「はいはい。貴方のアリス病は今に始まったことではありませんし。それより、世話役はどっちがします？もちろん、綺麗な猫ちゃんを拾ってきたのは僕なんですから、僕ですよねえ？」

「いやだなあ、レーテ“おじいちゃん”ったら。勧誘した僕が責任をもって世話しますよ」

「細かいことが一切できない貴方なんかにはできませんよ」

「朝顔に水をやりすぎて腐らせてしまふ貴方には任せられません」

先程のまじめな雰囲気はどこへ行ったか、何やら笑顔で小競り合いを繰り返す二人にイオは呆然とした。

もしかして……自分なんかを、取り合ってくれるのだろうか。

呆れる半分、なんだかものすごくすぐたくて、イオは思わず「あはっ」と小さく笑った。そのままくすくす笑うイオを、二人は呆気にとられたように見ている。

やがてその目を細めて優しい笑みを浮かべると、肩をすくめて帽子の少年が言った。

「仕方ないですねえ……まあ、こんなに楽しげに笑ってくれることですし、二人で世話役って言うのもいいんじゃないですか？」

「まあ……ね。悪くない提案です」

ぶすつとした二人の顔が面白くて、イオはさらに大きな笑い声をあげる。

こんなに楽しいのは初めて。嬉しいのも初めて。なのになぜか……涙がこぼれそうになる。

初めて感じた幸せで胸がいっぱいになって、溢れだしてきそうになる。

この罪は、消えない。母さんの喉を噛みちぎった時のあの感触を忘れられるわけがない。

どんなに幸せな時だって、すべての元凶となった父さんの名前……この名前がある限り、この罪を思い出すだろう。

許されるとは思っていない。許されたいとも思っていない。

罪は、確かにある。それを忘れたくない。忘れて、同じことを繰り返すのだけはイヤだ。

だから、俺は

……

「僕は“帽子屋”のレーテです。いつでも頼ってくれて構いませんからね」

「僕は“白ウサギ”のルア。ようこそ…歓迎するよ」

二人が握手をするように手を差し伸べている。その手は土下座したままの彼を起こすためのものだったが、イオはそんなこと微塵も思わず、二人の手を強く握った。

精一杯の笑顔で、彼らに向ける。

「イオだよ」

だから俺は、この罪深い名前を背負って生きていく……

母さんの面影は、俺の罪は、俺の中で永遠とわに

咲き続けるだろう

……

どうも、鬱状態の作者です(――――) やっぱり3作連続真つ暗な話ってきついですね。コメディイが書きたくて仕方ありませんでした。

そこで、今回はルア君が和み要員になってくれました。かなり珍しい現象ではあります。いつもは彼、ただの腹黒ですから。

レーテ……君、今と全く変わってないんだね。後10年もたてば周ちびルアを書くのはかなり楽しかったです。敬語が抜けきらないやんちゃキャラってことで。

そしてイオくん！君どこをどう間違えたらあんな変態になるんだ！ルアとレーテのSMを見たからか？そうなのか？！

……ちっちゃい頃は誰しも皆素直なんです……(・・・)

さて、今回はようやくアリスに戻ります！やっぱ手慣れたツンデレのほづがいいですね！

次回の更新は10月15日です。しかしまだ次回の作品を完成させていないので、予定がずれる可能性があります。ご了承ください。

今回はとことんコメディイですよ！って言うてもコメディイもシリアスに繋げるための渡り橋でしかないのですが…。

以下にのせる物は廃棄したセンテンスです。一番最後に「それから2年後」をのせる予定だったのですが、あまりにも長くなるうえくどくなる可能性があったので廃棄しました。コメディイ部分だけ載せます。興味のあるお方は呼んでみて下さい。短縮のため行数は詰めます。

「おっはよ〜、ルア君！」
ガバツ

「だーっ！！僕はお休みなさいだこんちきしょーっ！！」

「え〜…そんなつまんない。甘い夜はこれから始まるんだからね？」

「誤解を招くような発言を控える！！」

目を覚ましてそうそう、イオはそばで読書をしていたルアに飛びついた。そのまま顔を真っ赤にするルアに甘えるように尻尾を振る。初めて見た時ルアはSのほうかと思ったのだが、実はMのほうだったらしい。わりと恥ずかしがり屋でレーテやイオに始終からかわれていた。

ルアの隣で編み物をやっていたレーテが、イオに加勢するかのよう
に“誤解を招く発言”をかけてくる。

つか編み物つて…いや、いいんだよ、趣味はそれぞれだつて。

「そうですね。3人で甘い夜を過ごしましょう」

「レーテ！！」

そんなに真っ赤になるからみんなに「可愛い」と言われるのがわからないのだろうか。近づきたい雰囲気をもつルアだったが、なぜかイオやレーテと一緒にいると気が急上昇していた。

しかしレーテは決して加勢していたわけではなかった。どこのスーパリーの袋からか、甘そうなお茶菓子をとり出す。

……お茶菓子？

「お、俺ちよつと森へ散歩……」

嫌な予感が出て逃げ出そうとしたイオの尻尾を、レーテがいち早くムギユツと掴む。

そのまま、実にさわやかな笑顔で死刑宣言を切り出した。

「お茶会をしましょうか」

」

二人の「甘い」の意味が違う…。このお茶会の後なんとイオの体重

は3か月前よりも5キロ増えてました（笑）
この後すぐにシリアスが来る予定、でした。当時は。

過去編が終了しました。
再び視点がアリスに戻ります。

「母さんは、ここに埋まっているんだ」

そう締めくくって、イオはポンポンと木の根元を叩いた。一瞬土の中から白い手が伸びてきてイオの首を絞めるという幻覚が見えたが、すぐに涙で滲んでしまう。

虐待、愛着、憎悪、憐憫、殺人、眠り、罪 様々な単語が頭の中で飛び交う。そのたびにぼたりぼたりと眼から直接涙が落ちては地面にしみ込んでいった。

イオの母が眠る、この土に。

泣いてはいけない。こんな涙、流しちゃいけない。

彼はもうとっくに乗り越えて、ここで笑っているのに よ
うやく話せるようになったのに。

同情は、今の彼にとっては一番残酷な感情なのに……っ。

私はごしごしと涙をぬぐいながら、彼の目を見た。イオは今まで自分がつらい記憶について語っていたというのに、こちらを心配そうに見ている。

彼の手に、そつと触れる。外気にあたりすぎて冷たくなった手と手が、お互いの熱で温まっていくさまが妙に心地よかった。

「ごめ、ん…っ、私、何言っでいいか、わかんない…っ」

ちゃんと言えたと思うのに、声に出したらガラガラにかすれていてみっともなかった。

鼻をすすりながら再び謝罪を繰り返そうとする私を見てからイオは

ちょっと笑って、包み込むようにして抱きしめる。

つらいのは、悲しいのは彼なのに……なんで私が慰められてるんだろ。イオはいつも、私に甘すぎる。

「アリスは、俺の話をなにも“聞いていない”。だから、何も言わなくていいんでしょ？」

「……そっか、このため、だったのね……」

半ばこじつけるようにして、私を黙らせようとしたわけ。それは、こんな話を聞いて私が何を言えばいいか迷わないように。

「アリスまで、苦しみを背負いこむ必要なんて、ないから」

ポロリ、と最後の涙が眦から落ちていく。

もう、これで最後だ。これで最後にしよう。泣かない。今は、決して泣かない。

彼は優しい。でも、やっぱり残酷だ。優しい言葉なのに背負いこまなくていい、なんて……拒絶されているように感じるのは、何故だろう。

わかってる。彼は私を苦しませたくないだけなんだって、こちらに向けてくる視線だけでわかる。わかってる、わかってるのに……胸が、痛い。

彼に、触れたい。遠い彼に……近づきたい。

「何も言わない、泣かない、から……続きを、聞かせて……っ」

どうしたら彼に触れられるだろう。どうしたら近づけるだろう。わからない、わからないけれど……もっと、彼のことを知りたい。彼

の傷に触れて、彼の苦しみに触れて……いやしてやりたい、なんて
おおそれたことを思っているわけじゃない。ただ、彼に触れたい。
近づきたい。彼を、知りたい。

イオが私の髪を梳きながら、頷く。ロキが触れた髪を、イオがまた
触れている。同じ手のはずなのに、触れかたが全然違う。

ロキの触り方は悲しくなってしまうけど、イオの触り方は
体が、熱くなる。

「だから俺はもう、ロキから何も奪えない。どんなものだって、ロ
キに与えたいんだ」

これは、俺の償いだよ……許されるなんて思っていないけどね。そう
続けるイオは、きつく握った手を月にかざした。当然握られている
私の手も同じようにかざされ、指の隙間から月光が漏れる。

これで、良いんだろうか。私はキラキラと光る月を見ながら、頭の
隅で漠然と考える。

イオはいろいろなことを我慢して、ロキに全部与えて　　ロキは、
それを拒絶して。同じことが何度も何度も、繰り返し行われる。

それで、一体だれが幸せになった？

「アリス……俺からの、最初で最後のお願ひ」

いくら手を伸ばしたって、月イオは手に入らない。

月イオがこぼす光なみだでさえ、この指をすり抜けてしまう。

月イオも、太陽ロキも……どっちもとても綺麗なのに、誰にも触れられない
しお互い触れあうこともできない。

ただ、すれ違うだけ。

お互いの想いも知らないまま、すれ違ったまま廻り続ける。

誰にも止められないし、触れられない。教えてやることだってでき

ない。

そんなの、あまりに寂しすぎる。

「アリス、幸せになって

ロキの隣で」

囁くようにして発せられた言葉に、私は目を閉じる。

こう言われるだろうってことは、何となくわかっていた。ロキの幸せを願うイオなら、こういうだろうと半ば確信をもっていたのだ。

だから、ちゃんと心の準備をしていたのに
心が、壊れてしまいそう。 準備していた

ここで、私が領けばイオは永年の罪悪から救われるだろうか。ロキを好きになれば、ロキは幸せそうに笑うだろうか。

領けばいい。領けば、全部解決できる。元の世界に帰るといふ野望はついでることになるが 彼の願いに比べたら、とてもちっぽけなものに思えた。

イオを、救おう。ロキを好きになろう。

ロキが、好きって。

もう、誰かが苦しむ姿なんて、見たくないよ

……

「
聞いてないッ」

なのに。なのに私は、ロキの幸せよりも、イオの願いよりも

自分の感情を、優先させた。

握られていた手をぱつと振り払い、呆然とするイオの前でぎゅつと耳をふさいでみせる。

胸が、熱い。激しい後悔が胸を満たす前に……私が彼の願いをきいてしまう前に、伝えなければ。

たとえ、拒絶されるとしても。悲しませることになっても。

「私はっ、な、なんにも聞いてないもんっ！あんたの願いも何も聞いてない！だから叶えてなんかやらないっ！」

「アリス」

イオが何か言いたげに顔を歪める。しかし、私も何かを言わせる気はなかった。

無茶苦茶に「あー、あー、あー」と叫びながら、彼の声を遮る。

「アリス、俺は……」

「あー、あー、あーっ！聞いてないっ！私は何も聞いてないっ！」

「……本当に、聞いてないんだよね。じゃあ、言うから。」

俺は、アリスが好きだよ」

呟くようにして言われた小さな声。そんなものはもちろん、耳を力いっぱいふさいで自分の声を反響させている私には聞こえてなかった。

ただ、そつと肩を包み込むようにして押さえられた掌の熱さを感じる。

耳を押さえている手を取り外そうとするが、私は絶対に負けるもんかと彼の瞳を睨みつけた。金色の瞳はどこか熱を孕んでいる。

負けたく、ない。この勝負に負けたら、私は彼のいいなりになってしまう。

気持ちも、伝えられないまま……彼は離れていってしまう。

もうこれ以上、彼から遠くなりたくない。

「アリス、聞いてっ！俺は、アリスのことが」

「あー、あー、あーっ！！聞こえないもんっ、なんも聞こえないもんっ！！」

「もう、いいからっ。もう……いいからっ！！」

「あーっ、あーっ、ああああっ！！」

「アリスっ！！」

「私」

私は叫ぶのも耳を押さえるのもやめて、濡れた瞳で彼を睨みつける。涙は、こぼさない。だけど、泣くのを我慢するのがこんなにつらいなんて、思ったことなかった。

なによ、人の気持ちも知らないで。

なによ、自分の主張ばかり押し付けて。

なによ、好きになれとか嫌いになれとかごちゃごちゃ言っ

人の気持ちなんて、変えようと思って変えられるわけないじゃない……っ

「私はっ！自分の気持ちに嘘をついてまで人を好きになんかなりたくないっ！！」

自分の気持ちを殺すことはできたとしても。

騙すことなんて、できない。

彼の願いなんて

叶えられるはずがなかった。

私のがままを黙って聞いていた彼の顔は、ここからは見る事ができなかった。彼からも、こっちの顔は見えていないだろう。そっちの方が、いい。だって私、今とてもひどい顔してる。泣かないって決めたばかりなのに、頬が濡れていた。

「俺も」

ぼつりと小さな言葉をこぼされて、私の肩はかすかに震える。

耳を、ふさいでない。私の 負けだ。もう一回“お願い”

されたら……きっと私は、頷いてしまう。

結局、何も伝えられなかった。何ひとつ……自分の、気持ちも。

だが、彼の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「俺も、もう嘘をつくのには疲れた……かも」

「……え？」

それは、どういう意味だろう。問いたただす前に、イオの腕が私の腰を引つ張って自分の胸へと引き寄せた。

そのまま、自分の顔なんて見なくていいとでも言いたげに腕を背中にまわしてきつく抱きしめる。触れた胸から感じる彼の鼓動は……なんだか、とても早く感じた。

「い、お……？」

「アリスは、ずるいよ。俺がどんな思いで振り切ろうとしたか、全然わかってない。大っ嫌いって言われた時、どんなに悲しかったか……まったくわかってない」

「ちよ、ちよっと待ってよ。なんで今、そんな話……」

「ほんと、決死の思いで諦めたのに 　　　それさえ、揺るがそ

うだなんて」

「だからっ、いったい何の話…?」

「アリス、俺は、貴方のことが

」

「「姫さまーっ!」」

そしてきました。お決まりのお邪魔虫。

拍手喝采を送ってしまいそうなほどナイスタイミングでイオの言葉を遮ったディーとダムは、イオの腕からかつさらうようにして私に抱きついた。

イオは呆然と空になった自分の腕と双子に押し倒されてる　訂
正、押しつぶされてる私を交互に見てくる。

一方双子は、拾ってきた猫にやるように私の頭に頬ずりをしてきた。
……大の大人が。

「ごめんなー、俺たち!そう言えば白ウサギに姫さまを怖がらせる
なって言われてたんだよー!」

「別に白兔の命令に従うわけじゃないけど、ちょっと脅しすぎちゃ
ったかなと思って!優しい姫様なら、僕たちのこと許してくれるよ
ね?ね?」

あ、暑苦しい…っ!つか、いつ、息ができなっ…!!

私は今までの一連の出来事をすっかり忘れてしまったかのように、
双子の下で奇声をあげていた。

そんな私をすっぱかして、一世一代の大告白をしようとしたイオは
苦虫をかみつぶしたような顔をしながら、双子を睨みつける。

もちろん双子は私に抱きつきながらもその視線に答えていた。して

やったり、という意地の悪い笑顔を二つ浮かべる。

「…………お前ら、わざとか」

珍しく本気で怒っているのか、イオが地獄の底をはうような低い声で尋ねる。こうして聞いてみるとまるでつきりロキの声だ。

…………いや、ロキの声が年中怒ってるみたいだって言ってるわけじゃないんだけど！

「えー？何のことー？って言うかチェシャ猫、どうしてこんな所にいるのー？」

「ま、あながち俺らの服についた臭いでも嗅いできたってところだろ。犬みてえな奴」

「でも野暮なことするよねえ？こんなに面白い状況をぶっこわそうだななんて」

「そうそう、お前だろ、ロキ…だっけ？そいつだろ？あと白ウサギもラブコール出してたっけ。四角関係！」

「帽子屋とも仲がいいしね。どうする？僕らも入ってみる？」

「えー…だつてディー、俺だけだつて言ったじゃん」

「もちろん！僕にはダムしかないよ…」

「ディー…」

「ダム…」

「てめえら甘いのはいいからさっさとときやがれっ！！窒息させる気か！！」

既に顔が酸欠で青くなっている私を見てさすがにまずいと思ったのか、双子は顔を見合わせると肩をすくめて私の上からどいた。

しかし心配そうに近寄ってこようとするとイオから守るように、その腕は私の胴体からめられたままだ。抜け出そうとしてもできない。

だんだんと力加減がわからなくなってきたのか、徐々に腕は緩んでいく。私はその隙をついて何とか二人を振りほどいた。

二人はお気に入りのおもちゃを取られた子供のような表情を浮かべたが、それ以上は触れてこない。どうやら彼らの目的は私とイオの話を遮ることだけだったらしい。

それにしても。

初めてこの双子に、感謝の念を抱きながら、ほっとと安堵のため息をつく。

あのままイオを話させたら、いずれは切り出されたであろう別れ……

……私が一度拒絶した、別れ。

とりあえず今は難を逃れたらしい。

イオの表情をそつと窺ってみると、彼は渋いようなほっとしたような微妙な顔をしていた。

こっちの視線に気づくと、ほんの少し目を閉じて、次の瞬間にはいつもの笑顔を張り付ける。

「ごめん、アリス。今の話、全部ナシ。全部忘れちゃって、いいから」

……そうくると思った。大体この双子がいるこの場所で長々と話なんてしてられない。絶対に邪魔してくる。うん、そりゃもう1000円賭けたっていい。

ただ。イオの言葉に頷きながら、私は口の中で小さく呟く。なんだろう……少し、悲しい。

「そ……う、ね。うん、わかった……全部、忘れる」

せっかく一歩だけ、彼に近付けたと思ったのに……ふとしたことで

みるみる離れていってしまふ。

これでまた、ふりだしに逆戻りだ。私は独りゲーム盤に残されたような感覚を覚え、無意識に下唇を強くかみしめていた。

もう一步を踏み出せずにつむく私の腕に、心配そうに双子が腕を絡めてきた。先程よりかは幾分か小さい圧力に心地よささえ覚える。

「姫さま、こんな奴のこと忘れた方がいいって、絶対。まだ白ウサギのほうが優しいと思うもん！」

「そうそう！こいつはセクハラはするしスキンシップは激しいし、とにかく最低野郎なんだぞ！」

「ま、顔は相当いいけどね…それを利用して男でも女でも見境なく釣るし！」

「自分から誘つといて用がなくなったらあっさりばっさり捨てるし！」

「しかも女は年上、男は年下が好きだし！」

「白ウサギにも始終べたべたしてたし！」

「とにかく不潔だよね！」

「不純すぎて嫌になるよな！」

「「ってことで、姫さまには似合わないと思うんだ！」」

その間、わずか8秒足らず。たったそれだけの間に私の中のイオ像がガラガラと音を立てていつて壊れていた。

なんというか……もともと修正不可能なまでに壊れていたけれど、今ので木っ端微塵になったみたい……。

私は笑みを浮かべるように頬を吊り上げながらボキボキと指を鳴らした。ああ、なんて清々しい空気なのかしら。こんな日には一丁、誰かをぼこりたくなるわねえ……！

ぴくぴくと震える私の頬を見てイオは何かまずい雰囲気を感じたのか、後退するようにして私から距離を取る。

しかし瞬く間に私はイオの尻尾を掴んで逃げ惑う彼を捕まえた。尻尾を掴まれた時イオが「むぎゃっ！」なんて奇声を発したけど、気にしない気にしない。

(長いものは時として弱点になるのだ、ふははは…！)

なんてことを思っている私は相当パニックって思う。

「へええええ〜？あんたまさかデイーとダムにまで手え出したんじゃないでしょうねえ？やけによく知られてるようだけど」

「ちょ、冗談は勘弁！さすがに俺、こいつらに手を出すほど飢えてはないから！」

「飢え……っ？！じゃああなたは飢えてさえいれば構わないわけね？！それとも年上だから好みの範疇外かしら！」

「な、何言ってるんのさアリス！いくら年下といえどもこいつらガタイ良すぎて色々と無理があるって！」

「ふう〜ん、そうねっ、確かにこいつらはでかすぎよね！じゃあお好みはル…ア……………年下あ？」

思わず力が抜けてしまった私の手からイオが素早く尻尾を抜き取る。涙目でこっちを睨んで……あ、なんかちよつと可愛いぞ、この野郎私って意外と獣耳フェチだったり……ってそうじゃない！！

い、今こいつなんて言った？と、と、と……

「と・し・し・た？」

うん？何の幻聴ですかね。

いや、というかこの紫の異物の頭が逝っちゃってんだよね！変態だし！

私はくるりと振り向いて楽しそうに私の応援をする双子を見た。

「フアイトー、姫さまー！チエシヤ猫なんてぶっ潰しちまえー！」
「その方がだいぶ環境にいいような気がするしね！やっちゃえ姫さま！」

「なー、ディー…姫さまがチエシヤ猫殺してくれたら俺らにも報酬来るかな？」

「あー…どうだろ。たぶんケチな白ウサギはくれないと思うけど」

「んー、あつ、じゃあ姫さま、寸止めで頼む！俺らがとどめ刺すからさー！」

「それだつたら僕らが始末したつてことになるかな！姫さまー、僕らが最後は殺^やるから、ほどほどにねー！」

なるわけねえだろバカ野郎。

つか何とかなんねえのか、その物騒な会話。

「あ の さ、ディー、ダム」

「ん？あれ？姫さまやめちゃったの？」

「えー…せつかくの僕らの報酬…」

お前らの報酬じゃねえよ。

私は怒りで震えそうになる拳を固く握りしめながら、精一杯の笑顔を見せる。しかし想像以上にうまくいかなかったのか、双子は盛大に引いてくれた。

そんなタコ星人を見るような目で見られると結構傷つくんですけど。

「とりあえず、君らの年齢を教えてくださいかな？」

「ダダダダムっ！！な、なんかこの人怖いっ！！姫さまこわいっ

！！」

「お、落ちつけよディー！頭に角生えてるけどあれちゃんと姫さまだから！鬼っばいけど姫さまだから！」

……君らはどこまで私をへこませれば気が済むんだ。なんだかちょっと目から汗が出てきそうだぞ……。
麗しい兄弟愛でお互いを支え合う双子を見ながら、私ははあっとため息をついた。

色々なことがあったせいでストレスがたまっているのかもしれない。もともと悪い目つきがひどいことになってるんだろうな……。

ようやく落ち着いたらしい二人に、今度は眉尻をなるべく下げても愛らしく笑おう……努力した。

次の瞬間、大爆笑されたが。

「二人は何さい……」

「ぶあつはははっ！！姫さま、何その顔！」

「すっごい間抜け顔！は、腹いてーっ！」

……そのまま悶え苦しんで死んでしまえ！

さすがの私にも我慢の限界というものがある。

二人が声をそろえて「オラウータンそっくり！」と言ったところで両腕を振り上げて両者の顎にアッパーをかけた。

結局彼らとの身長差のせいで大したダメージは与えられなかったけど。とりあえず彼らの腹痛は止められたらしい。

痛い目を見て大人しくなった双子に、今度こそ無表情で問いかける。

「あんたらの精神年齢も聞いてみたいんだけど……とりあえず、あんたらの実年齢を教えてくださいませんか？」

年下、年下ねえ……。いや、もしかしたらイオがかなりの童顔でもう20代後半でしたっていうんだったらわかるかもしれない。実際綺麗な顔……って何あの変態のことばっか考えてんのよ！

私はちらちらと隣にたたずむ紫の物体を見ながら自分を叱咤した。
なんだか妙に気恥かしくてたまらない。

「15だよ」

ふうん、15、じゅうご、ね。なんだ、じゃあ私よりも年下じゃん。
じゅうごつつつたら中学生かな。受験大変だったなあ……………
……………つて。

「詐欺じゃねえかあああつ!!」

思い出に浸ってる場合じゃない。

じゅ、じゅうご?25の間違いじゃないのか?私は背中をさすつて
くれるイオの手にも気付かずに頭を抱えたまま、怯える双子を睨み
つけた。

立ってみると、改めて彼らの身長を思い知らされる。絶対にマルス
よりも高いだろう。すらりとした肢体はモデルというよりもバスケ
の選手だ。筋肉だって隣のイオなんかよりも確実にしているし、何
よりも顔には大人らしい落ち着きがあった。

なにがあっても私よりも年下なんてことはあり得ない。ないないな
い、それだけはない。

老け顔にも限度というものがあるだろ。

「わ、わかったわ!あんたら靴を底上げしてんでしょ!だから実際
よりも10センチ高くなってんのね!」

思いつきで言ってみるが、まだまだ顔の問題が残っている。ルアと
いい、イオといい、レストといい…私の周りには中性的な人間しか
いなかったから感覚が鈍っているのだろうか。

現代の中学3年生は発育がいいなあ…。うん、そういうことにして

おっつ。

しかし私の豊かな妄想は、けろつとした顔の双子に打ち砕かれた。

「10センチも高くしたら殺し合いの時動きにくいじゃん、何言っ
てんだ姫さま」

「せいぜい1センチくらいしか高くないよ、この戦闘用ブーツ」

ほら、といって同時に指差した靴を私はまじまじと見る。こげ茶色のそれは外見からしても堅そうで、質素につくられているせいかそこまで重いという印象はなかった。これで顔面に蹴りを入れられたらきつと痛いだろう。……いくらで売ってるのかしら。

しかし、戦闘用ブーツ？そんなもの先程は履いていなかったはずだ。だらしなく着こなしている制服に合わせた、黒い革靴だったのに。不思議そうに傾けられた私の頭に気づいたのか、ダムはにっこ笑うとそれは無邪気な笑顔でとんでもないことを言った。

「ほら、これからチェシャ猫と一発殺り合うからさ」

やりあつ…？な、何をだ。

どことなく物騒な言葉に私は既視感を覚え、双子から一歩離れた。それを珍しくひきとめずに、二人は笑顔でお互いの顔を見る。

「だって俺ら、黒い猫にひどいことしちゃったもんなんー」

「あそこまで効くとは思わなかったけどね。ま、絶対復讐には来ると思ってたけど」

「どうする、殺す？」

「殺すしかないよね」

「ちよっ、ちよっお待ちなさいよ！いきなり何の冗談?!」

何の前兆もなくかわされた物騒な会話に私は顔を真っ青にしてとめにかかろうとした。しかし双子の間に挟むはずだった腕を後ろから誰かに掴まれる。

そのまま強い力で引っ張られ、私はバランスを崩し腕の持ち主の胸に頭をぶつけた。

嗅ぎ慣れた甘い香りが、鼻をつく。いきなり何だと思い上を見ると、背筋も凍らせるような氷の瞳が見えた。殺気を宿したその瞳の色は、金色。

冗談、でしょ。私は呆然と舌のうえでその言葉を転がした。

今の今まであんなにふざけ合って、笑いあって、じゃれ合っていたというのに……一瞬で殺し合いになる、なんて。何の躊躇いもなくこんな瞳を相手に向けるだなんて。

冗談であってほしい……だがその冷たい瞳にからかいの色は見えなかった。

ぶるりと震えたのがわかったのか、イオは鋭く細めた瞳をちらりとこちらにやる。いつもだったら安心させるように眉尻を下げるのに……今はそんな余裕すらないらしい。

「アリス……悪いけど、ちょっとどいて。ほんとにアリスの様子を見に来ただけだったけど、こいつらに野暮用があるんだった」

大丈夫だから。そう言って軽く力を込めて抱きしめ、すぐに私の体を押し返した。一瞬で離れていく体温に、恐怖に似た戸惑いを覚える。

野暮用って、なに？貴方は、何をしようとしているの？

勝ち目なんて、あるはずがない。ただでさえあつちが体格のいいのが二人、しかも彼は今腕を負傷しているはずなんだ。

彼を止めようと伸ばされた手が、震える。

殺さないで？そう、私はいつもその言葉を呟いていた。いつも自分

の常識に縋って。殺しは犯罪なんだと、言い聞かせて。犯罪だから、止めたの？いけないことだから、やってほしくなかったの？

違う。私は、ただ……

「死な、ないで」

ただ、失うことを恐れていた。

彼に、この声は届いただろうか。イオはほんの少し目を細めて微笑みを返し、小さく頷いた。

結局手を伸ばすことはできなかった。私の指の先で、イオが離れていく。

もう少し、もう少し指を伸ばせば彼に届くというのに。彼を止められるというのに。

彼の背中が、彼の声が、遠い。もう決して、触れられないほどに。

「アリスを返せとは言わない。アリスを返してくれるとも思っていない。……貴方達と闘うつもりも、ない」

存外に落ち着いたイオの声に驚いたのは、ディーとダムのほうだったらしい。ほんの少し目を見開いた後、不快そうに顔を歪める。

忌々しげな舌打ちが、二つ。

「何だよ、もつと遊ぼうぜ、先輩」

「そうだよ、こんなのつまんないよ。僕らは自分たちから刃を向けられない」

「“門番”が殺せるのは自分たちに刃向かってきた者のみ。牙を剥かない者を殺すのはルール違反になる」

「だから僕らは挑発するだけ。相手が引き金を引くのを待つしかない

いのこ……」

この世界にいくつも存在する、“ルール”。彼らもまた、それらに縛られる存在だったのか……。

第一印象が“自由奔放”だったので、私は軽く瞠目した。イオはずでにそれを知っていたのか、失笑するような声を漏らすと胸の前で腕を組んだ。

「うん。でもいいよ、少しぐらい遊んであげても。ただし、条件があるけどね」

「条件？」

よく似た……いや、もはや全く同質の声が、訝しげに反応する。その声の中に、わずかな期待が含まれていることに私は気づいてしまった。

ああ、嫌だな。私はただ、彼らの笑顔を見ながら漠然と思う。

人が死ぬのなんて、見たくない。大切な誰かが傷つくのなんて、見たくない。もう誰も、失いたくないのに。

それでも、自分には彼らを止めることなんてできなかった。わかっている。私は、どこまでも無力で、弱い。

死なないで。そんな言葉に縋ってばかりの私の手が、彼に届くはずがない。彼を守るはずがない。こんなふうに諦めている私が……
一番、嫌い。

「チエシヤ猫”を客人として城に招く。それが条件だ」

パタンと、伸ばしかけていた腕が落ちる。
それが、殺し合いの始まりの合図だった。

「この手は、もう届きませんか？」

どうも、相変わらずコメディイが書けない作者です（；　）
とうかシリアス雰囲気をぶちぎってコメディイに入るって…ど
うなんでしょう…。その逆もありましたしね…。デイー、ダム…
恐ろしい子…。

基本彼らはコメディイ要因です。イオもいつもはコメディイ要因で
すが、話の都合上シリアスな面も多いです。
にしても…

「だーっ！！何やりやがってんだこのクソ餓鬼どもがっ」

「せつかく…せつかくイオくんが言う気になったのに！！」

「どうしてこのタイミング?! どうして?!」

なーんて声が聞こえてきそうです…。

すみません、イオには可哀そうです。彼だけはメチャクチャ焦らさ
せてもらいます。ロキやルアはアプローチをかけますけどね…。

あ、でも決してイオが置いてけぼりにされるわけではありません。
それどころかタブー番変態ちつくなことをするのはこの男だと…。

【次回の日程等】

今回はコメディイ要素を入れるつもりはありません。しかしシリア
スにするつもりもありません。

あまり得意ではありませんが、戦闘シーンでいっぱいになると思い
ます。少年漫画っぽくなればいいのか…と。

とりあえずいつもは変態のイオくんがかっこよく見えればそれでい
いというところで。

次回の更新は、10月18日の予定でしたが、10月20日より作者の中間考査が始まってしまつので遅れる可能性が高いです。さらに今週末も用事が入っているのので、更新ができるかどうかわかりません。

できるだけ予定通りに進めたいですが、目安としては今週の日曜日が更新日になると思います。ご了承ください。

【廃棄済みセンテンスコーナー】

えー、新たに設けてしまったコーナー……。ここでは前回のようにな編に入らなかった文を短めに紹介するところです。主にギャグが多かったりします。

廃棄理由：イオが変態以外の何物にも見えなかったため。

シーン：イオの言葉半ばで双子が乱入し、アリスの上でバタバタしてる。

「デイー……」

「ダム……」

「てめえら甘いのはいいからさっさとときやがれっ！！窒息させる気か！！」

「そうだよ！ただでさえ小さいアリスの胸がますます小さくなるじやん！」

こりゃだめだな、と書いてから思いました……。この後の予定としてはもちろん、アリスの右ストレートがイオの顔面に命中します。

余談ですが、前回の更新日に最高日別PV数が更新しました！その

数なんと…2100越え…() () ; 。 。 () () ガクガクブル
ブル
もうほんと、何が起こってるんでしょ…。

それでは、感想・評価・メッセージ随時歓迎しております！

視界が、鮮やかな赤に染まった。

「だって、そんなことしたら俺らがフレイム様に怒られちゃうじゃん」

しばらくの沈黙の後、不貞腐れたようにダムが頭の後ろで腕を組んだ。しかし素晴らしいながらも口の端は微妙につりあがっている。

まるで、絶対に負けるわけがないと思っっているように…。

デューは少し考えるような仕草をした後、ニッコリと人の良さそうな笑みを浮かべてダムのほうを見た。

「あれ”をやったらどうかな？ほら、白ウサギとフレイム様も負かした奴」

「ああ、“あれ”か！オーケーオーケー！あれだったら誰にも負けたことないもんな！」

「あの時の白ウサギの顔…：傑作だったよね！」

「ほんと、死にそうな顔しちゃってな！自分の心配しろってーの」

「たかがゲームなのにマジになってフレイム様のこと守るしさ」

「他人なんてわざわざ身を張ってまで守るか、ふっー」

「さあね。僕にはそんな他人いないから」

「俺も。俺にはデューだけだし」

「ダム…」

「デュー…」

「何でもいいからさっさと説明してよ」

“あれ”で交わされる会話はこちらにはさっぱり分からない。延々と続く兄弟愛に呆れたのか焦れたのか、イオがため息をつきながら言った。

しかし会話を聞く限り、とても安全とは言えないような“ゲーム”だった。いや、もともからこの双子が安全な“ゲーム”を提示してくるとは思っていないのだが。

『なにをして勝負するかは貴方達が決めていい。だけど、アリスに危害を与えるようなゲームにはしないこと。俺を殺すのはありだから』

先程のイオの言葉を思い出し、背筋にぞくりと悪寒を感じた。“アリス”を傷つけることはダメで、“チェシヤ猫”を殺すのはいいだなんて……なんでこんなことをあっさりといえるのだろう。

死なないと、私が行ったことを早くも忘れてしまったのだろうか。ぶるりと震えた私の体が視界の端に移ったのか、イオは一步後ろに引いて私の体を抱きしめると、優しく肩をさすってきた。

「ごめん、寒い？」

心配そうに聞いてくる貴方は、本当に気づいているのだろうか。本当に寒いのは、身体じゃなくて、心なのだ。

「……………寒いわ」

それでも私は、このぬくもりを体に刻みつけたくて、嘘をついてしまおう。

これが最後だなんて不吉なこと、思いたくないけれど。死ぬかもし

れない……そんな可能性だけで、こんなにも怖くなる。
きっと彼が私の感じている恐怖を理解することはないだろう。自分の死にすら恐怖を感じない人なのだから。

「なんだよ、あんたらだつてイチャイチャしてんじゃん」

「だつたら僕らだつてイチャついてても構わないよねー？」

双子がからかうような視線を送ってきたながら、ディーがダムの肩に手を置き、私たちと全く同じポーズをしてくる。

それを見たイオは、あるうことがこのバカは、調子に乗ってぎゅうと私の体を抱きしめてきやがった。

「イチャイチャしてるだつて。もうちょっとイチャついてみる？」

「誰がやるかつ！」

ドゴッ

私の肘が彼の鳩尾に見事なほどフィットする。護身術の授業がこんな所で役に立つなんて思わなかった。

さすがに肘鉄は痛かったのか、イオは一瞬奇声を発した後、腹を抱えるようにしてうずくまる。

ぬくもりは離れてしまったけど、全く残念だとは思わない。うん、さっきの全部ウソ！いっさい心配なんかしてないんだから！

（まったく……なんでこいつはいつもいつもこんなことばかり！私が真剣に落ち込んでたりする時に限ってふざけてくるんだから！……………あれ？）

ふと、違和感を感じる。

彼が本物の猫のようにじゃれついてくるときは決まって、私が落ち

込んでたり暗くなったりしている時だった。
今だって、彼の身が心配で心配で……泣きそうになっていた、時だったのに。

(私……なんでこんなに怒っているのかしら……)

それはもちろん、いきなりイオがふざけてきたから。突然何の前触れもなく抱きつかれたら、とりあえず殴り飛ばすだろう。

じゃあ、今までの気持ちは……?

負の感情が、イオによって引き出された怒りによって隠されていく。覆われて、何も見えなくなる。感じなくなる。

「いったあ……ほんと、容赦ないよね。でもやっぱ、アリスは怒っている時の顔が一番可愛いよ」

へらへらとしたその笑顔からは何も読み取れないけれど……もしかしたら、彼なりに元気づけていたのかもしれない。

イオにのせられた。ちよつと悔しくて、ムカついて……嬉しい。

私は漏れそうになる笑顔を抑えながら、口をへの字に曲げてそつぽを向いた。可愛いと言われて、ほんの少し顔が赤くなってしまったのが難点なのだが。

「うつ、うるさい……っ。そういう言葉は本当に好きな人にしか使わないものよっ」

「……だから使っただけどなあ……」

「え?なんか言った?」

「にゃ、なんでもない」

ぼそりと呟いたイオの言葉が微妙に気になったが、私は首をひねっただけですぐに忘れた。そんな私たちのやり取りをおかしそうに笑

う双子を睨みつける。

この野郎ども…何がおかしいんだ。

イオは自分を構ってくれそうもない私をみてほんの少し残念そうに肩をすくめると、まだ痛む鳩尾をさすりながら立ちあがった。

ぐるぐると折っていないほうの腕を回しながら、身体に異常がないか確かめる。ぼきべきやばきつとあちこちからほのね悲鳴が聞こえたが、本人はいたって平気そうだ。

「……折ってる方の腕もいたって健全そうだし。あんたの身体って一体どうなってるの…」

「だからいったじゃん。俺らは普通の人間なんかよりもよっぽど丈夫に創られてんだって。そう簡単には死なないよ。少なくとも、アリスよりかは脆くない」

脆い、と言外にいわれて私はむっとする。確かに彼みたいに超人的な能力はないけれど……そこまで柔な少女ではないはずだ。

しかし私が不機嫌顔になったのがわかったのか、イオはほんの少し困ったように眉尻を下げると、ポンポンと頭をなでてきた。

「脆くて壊れやすいから、アリスは大事なんだ。もしアリスがむつきむきのマツチヨなら俺だって大事にしようとなんか思わないよ」

「……それ、むつきむきのマツチヨさんに失礼よ」

「だってほつといても大丈夫そうじゃん。……心配しないで。アリスは俺が守るし、俺も死んだりしないから」

平気平気といいながらけらけらと笑う彼は、まだ命の重みを理解しているわけではないようだ。

わかってる……。それがこちらの世界の常識で、いちいち他人の命まで心配する私の思考回路がおかしいのだ。そんなこと、わかってる…わかってるけど。

悲しくなってしまうのは、仕方ないでしょうか？

「 別れの挨拶はすんだ？」

デイーの笑い声と同時に、キラリと夜空に何かが光る。私がそれを何なのか認識する前に、伸ばされたイオの手がそれを取った。

突然投げられてきた物は……金色の水時計。中に入っている水は毒々しい赤だ。

イオがそれを持ちあげて月の光に照らしてみると、埋め込まれた紅玉ビドがキラキラと光った。先程光っていたのは、この宝石だったのか。

「へえ、随分としゃれたもの持ってんじゃん。俺が勝ったらちようだいよ、これ」

どうやらイオはその水時計が気に入ったらしい。嬉しそうな顔をしては、いろいろと角度を変えて見てみる。

確かに綺麗だけど……いやだな、その水の色。まるでこれから起こることを予兆してるみたいで…。

イオの提案にデイーとダムは顔を見合わせて、嘲るように言った。

「いいぜ、別に。どうせ勝つのは俺らだし」

「“チエシヤ猫”ごときが僕らに勝てるわけないよ」

「……ま、後悔しないようにね。それよりほら、早く説明しなよ。何やんの？」

自信満々な二人にイオは一瞬呆れたような顔を見せたが、すぐにあのシニカルな笑みを浮かべる。

イオも双子もお互い、絶対に負けるわけないと思っているようだ。心配しているのは私だけか……。

勝負なんてどうでもいいから……お願い、誰も死なないで。

双子の口端が、同時につりあがる。
それは、これから起こることと不釣り合いなほどに明るく、嬉しそ
うな笑みだった。

「鬼ごっこ」

はあっ…はあっ…

荒い息遣いが、耳に障る。大して動いていなくせに、緊張のせいで私の背中汗でぐっしょり濡れていた。

目の前に居るイオもせわしなく視線を動かしながら、頬に垂れてくる冷や汗を拭う。その右手には先程からずっと、小型ナイフが数本握られていた。折っている方の左手には、金色に光る紅玉色の砂時計。

まだ水は、半分も減っていない。

それなのにイオの身体はもう限界を訴えているようだ。時折くらりと揺れては、私に支えられる。

それも至極当然のことだ。先程から茂みに姿を隠した双子に集中攻撃を送られているのだから。

「ルールは簡単、制限時間以内に俺らが姫さまを捕まえれば俺らの勝ち、逃げ切れたら姫さまの勝ち。姫さまはどこへだつて逃げていいよ。それでもって“チェシヤ猫”は、姫さまを守る“騎士”^{ナイト}役。姫さまが捕まらないように、俺らから守ってやりなよ。攻撃、罠、

殺人……姫さま以外にはオーケー。いい？」

ダムが提示してきたゲームに、イオは「アリスさえ傷つかなければ」と承諾した。それから1分余りが経っている。

ゲームは、思った以上に過酷だった。ひっきりなしに双子はイオへと攻撃をかけてくる。それをイオは最初かわそうとしたが、そうすると今度は私が狙われる。私を庇いながら攻撃を受けるのは容易なことではないようだ。

「ここだったら俺の領地だと思ったけど……失敗だったかな」

イオが荒くなつた息を整えながら、武器を構えた。

私たちが今いるここは……ちょうど施設と隣り合わせていた森の中。帽子屋の住処ほど生い茂つてはいないが、何分夜の森だ。人が隠れるにはもってこいなだろう。

そう思つてイオはここへ私を連れてきたのだが……逆にそれを逆手に取られた。黒い制服を着ていた双子の姿は、夜に紛れて全く分からない。

「そんなことない……よっ」

キーンッ……

突然飛んできた黒い刃を、イオは何か持っていた小型ナイフではじいた。一瞬白い火花が散って、対面しているイオとディーの顔が露わになる。

死神のように黒い鎌をイオへと振り上げたディーは反撃される前に後ろにとんだ。その後を銀色の刃が追いかける。

「どっから出てきたんだよ……」

悔しそうに呻くイオは、やはり鎌を受け止めた姿勢がきつかったらしい。ほんの少し顔を歪めてナイフをひとつ取り落とした。カランと、そのナイフが地面に落ちる寸前にデイーは間髪をいれずまた攻撃を仕掛けてくる。

ガキッ

耳障りな不協和音を奏でて、イオの手からまた一つナイフがはじかれた。素早く後ろに飛んで斬撃をかわすが、ほんの少し遅かった。鎌の先端がイオの頬を撫でた。つうつと、赤い血が一筋…涙のように彼の頬を伝う。イオはそれを拭おうともせず、腰が抜けて立てない私の前に立つと、臨戦態勢を取った。

「僕らはあんたのように夜目は効かない。だからあんたが有利なのは明らかだよ」

「……まったくそうとは見えないけどね」

「そりゃあ、僕だって馬鹿じゃないからね。嗅覚で嗅ぎとられないように仕掛けもしたし」

「ああ、さつきから臭ってるこのくっさい御香、貴方達のなんだ。胃がむかむかする」

「ふふ……気に入ってくれた？」

「あは、最悪」

どちらも余裕そうに顔に笑みを張りつけて話すけれど……目の中は、ギラリとした殺気が光り続けていた。緊張で、心臓の音が早くなる。嫌な汗が額にびっしりと浮かんでいた。

デイーが懐から見せつけるように何かを取り出した……今度は何か

の毒薬らしい。瓶に入ったそのコルクを抜くと、中の液体をイオに向かつて振りかけてきた。

黄色に光るその液体が、夜空に美しく映える。

なんとかイオは後ろに引いてそれをよけるが、多少浴びてしまったのか、苦しげに顔を歪めた。

「っ……う……。こ、れ……っ」

口元を抑えながら手に持っていたナイフをすべて落としてしまったイオを見て、ディーは楽しげな声を立てる。

「そ、当たり。臭い？それ、ロキにも効いたやつなんだよね」

私は蹲ってしまったイオの背中をさすりながら、液体から放たれるひどい悪臭に顔をしかめた。

何とかイオは胸元から別の飛び道具を取り出しては投げるが、軽いフットワークでよけられてしまう。彼が弱っているのはこちらから見ても明らかだった。

ここに居ても叶わないと察したイオは、私の腰を抱いて木の上へと高く跳ぶ。彼ほどの跳躍力がないディーは一瞬悔しそうな顔をしたが、すぐに嬉しそうな笑い声をあげた。

「また逃げるの？ははっ、いいよ。どうせ僕らからは逃げられない！」

背中を追ってくる不気味な哄笑に、全身が泡立つ。イオはそんな私をあやすかのように、頭をなでながら、小さく「大丈夫」と囁き続けた。

そう呟くイオのほうに、大丈夫なのか聞きたくなるほどに汗ばんでいる。先程の毒薬が想像を絶するほどに効いたらしい。玉のような

汗が浮かんでは宙に消えていた。

ようやく森が開けた場所……元の施設につくと、イオは私の身体を落とすようにして放した。手ひどくしりもちをつくが、その後すぐに倒れてきたイオの身体を見て、私は文句も何も言えなくなってしまう。

「ちょ、ちょっとイオ?! あんた、すごい熱…っ」

触れる地肌から伝わる熱は、どう考えても正常な人間のものではなかった。私は震える手を彼の額にやり、息を呑む。

熱い……なんてものじゃない。なんでこの熱で、今まで立っていられたのか不思議なほどだ。

ゲームのことも何もかも忘れて、彼の命の危険を悟る。夜の冷気に触れて熱さが際立ち始めているイオの身体をきつく抱きしめて、私は怯えた子どものように「助けて」と何度もつぶやいた。

助けて、たすけて……イオを、たすけて。

「なあーんだ、つまんないの。もうダウン?」

ふいに背中から聞こえた声に、私はびくりと振り返った。壁に寄り掛かるようにしてそこに立っているのは……ディーと同じ鎌をもった、ダム。いや、それともディーそのものだろうか。よく似た二人を見分けられるほど、私には余裕がなかった。

思わず、イオを抱きしめる腕に力がこもる。腕の中のイオは荒い息を繰り返しながら薄目で双子の片割れを睨みつけた。

私はそれに気づくことなく、震える声で尋ねる。

「な、なんでイオはこ、こんなことになってんの…? あ、あんたら、

まさか変な毒でも混ぜたんじゃ……っ
「はあ？ばっかじゃねーの、あんた」

荒々しい口調で、それがダムのほうだとわかった。ダムは心底呆れたというでも言うように手を「お手上げ」状態にする。私はその仕草にムカつきながらも何も言わず、彼の言葉を待った。武器に、毒が仕込まれていた……？それとも、先程の黄色い液体が毒だった？どれも有り得る、こいつらがやりそうなことだ。毒だとしたら……。全身の血が、さぁっと下へと下っていくような感覚を覚える。

毒だとしたら、彼は助かるのだろうか？

「俺らは毒なんてつまんねーことしねーよ。すぐ死んじやったら楽しくないじゃん」

嘲るように発せられたその言葉に、私は場違いだが安心してしまふ。毒じゃないのなら……まだ、いい。とりあえず、ここで大人しく降伏して……それから必死で看病すれば、良くなるかもしれない。ただの楽観論かもしれないが、ここまです熱が高いと楽観論でしか自分を慰められないのだ。

「ま、当然と言っちゃあ当然だよな。昼間の間にあれだけ闘って、そんでもって今デイーの攻撃を受けまくってたんだろ？体がついてこれねえよ、そんなの」

「昼間……？あ、あんた、ロキには何もしてないって……っ」
「何言ってるんだよ。死んじやいないって、俺はそう言ったんだぜ？何もしてないなんて一言も言っていないじゃん」

どくり、と。

触れる彼の身体がら妙に生々しく鼓動が聞こえてきて、私は恐怖で震えた。

昼間も、ロキとしてこの人は闘ったの……？それなのに、平気で私に会いにきて、何の躊躇もしないで、戦いを受けたの……？

『アリス、俺のこと心配してくれんの？いじらしい』

……イオ。何だよ。

なんであんたはそうやって、自分で全部抱え込もうとするのよ。

どうして、何も言ってくれないのよ。どうして、私に言ってくれないのよ。

何も言わずに、自分一人だけで抱え込んで、こんなぶっ倒れるほどになるまで我慢して、それでも平気そうに笑って……こっちの気も、知らないくせに……っ！

「心配……っ、するわよっ！」

喉が、震える。身体が、熱くなる。

何の前触れもなく動かないイオに話しかける私は、ダムの目にはどんなに滑稽に映っていることだろう。

そんなこと、どうでもいいと思えるほどに悔しくて、胸が……苦しかった。

彼の鮮やかな髪に頭を埋めながら、熱い身体を掻き抱く。

こんなに近いのに、どうして遠く感じてしまうのか。ずっと考えていた、疑問の答え。

当たり前だ。

お互い、何も言わないで自分を隠したままなのだから。

そびえたつ高く熱い壁を、見上げることしかしていないのだから。

「あつ、あんたが何も言わないから……っ、こんな体なのに平気だなんて笑うから、心配すんでしょうがっ！なんで、無理すんのよ……っ、言ってくれたって、いいじゃない！苦しいって、痛いって……悲しいって、言っただっていいじゃないっ！！」

いつも、我慢して。大丈夫と笑って。仮面を、かぶって。

でも、それじゃあ　イオの感情は、どこに行くの？隠されて、潰されて、目をそむけられて……決して口に出されることのない、感情は…？

人に、果たして人に、乗り越えられる苦しみなんてあるのだろうか。悲しくて悲しくて、苦しくて……そうして、本当に笑い飛ばせるようになるのだろうか。

『アリスまで、苦しみを背負いこむ必要なんて、ないか

ら』

ねえ、イオ。でも、それはね。きっと、それはね……貴方自身すら騙している、嘘だよ。

本当に苦しくないんだったら、貴方はきっと何も言わない。何を言っても私はどうせ悶々と考えるんだから、優しくも残酷な貴方は、自分のことなんか話したりしない。

そうして、自分だけで背負い込んでいくんだと思う。

でも、貴方は私に話した。それはきっと、たぶんね……自分でも気付かないほど、苦しかったんだよ。

なら、苦しいって言ってよ。

一言でいいから、苦しいって……悲しいって。

嘘なんて、吐かないで。大丈夫だなんて、言わないで。

「

もう、自分を騙すのはやめてよ……っ」

「あーあ。見てらんねえな」

突然頭上から聞こえた低音に、私はびくりと顔をあげた。その瞬間、首筋をちりつと細い痛みが這う。

ほんの少しだけ声を漏らした私を侮蔑するような光を宿す黄緑色の瞳と、目があった。首筋にあてがわれているのは、あの大きな鎌。ほんの少し動いただけでも、簡単に切れた。

これで、イオは攻撃されたのかと思うと　ぞつとする。

「あんたら、お互い好きあってんだろ？なにになんでそんなうまくいかねえんだよ。わけわかんねえ。ムカつく、ムカつくよ、あんた」

ダムが歪んだ笑みを浮かべながら、少しずつ手に持った鎌を引いていった。

ピリリつと、痛みが長く大きくなっていく。つうつと、熱い滴が首筋をつたって、服の中へと忍びこんだ。

このまま、彼は私を殺すだろうか。じわじわとこみ上げてくる恐怖に、私は腕の中のイオをきつく抱きしめていた。

死ぬのなんて怖くない。そう思えるほど私は自分の人生に飽きていくわけじゃないし、自己犠牲精神が高いわけでもない。

人並みに、死は怖い。

だけど、それ以上に

「私を、殺すの？」

「んー、どうかな。殺したら俺もディーも処刑されるだろうし、殺さないほうがいいんだろうな。でも、今は殺したいほどムカついてる」

「何でそんなにムカついてるのよ」

「さあね。似てるからだろ、俺らと」

似てる…？俺ら、というのはディーとダムのことだろうか。

なぜ、そんなことを言うのだろう。全然似てなんか無い。彼らはあんなにも気持ちを通じ合っているのに、私は……。

しかしダムの瞳は、いたって真剣だった。ほんの少し狂気を孕んだような口調で、続ける。

「どれだけ想っても、本当に通じ合うことはねえんだよ。嘘がある限り……な」

嘘……。私は口の中で無意識に呟く。

イオの、嘘。私の、嘘。

果たして壁をつくっているのは、どちらの嘘だろう。溝をつくっているのは、どちらの心だろう。

腕の中のイオが、ぶるりと小さく震えた気がした。私はそちらに向けることなく、悲しげな笑みを浮かべてダムを見つめる。

死ぬのは、怖いよ。

でもね、本当に怖いのは

失うこと。

「いいよ、殺して。でもね

イオだけは、絶対に助けて」

イオの言葉と、まったく反対の言葉を紡ぐ。

俺は殺していいけど、アリスは助けて。アリスが助かるならそれでいいや。

何度聞いただろう、そんな言葉。聞かされたたびに、イオのことが嫌いになった。簡単に命を投げ出そうとする彼が、無性にムカついた。

なんでもっと自分を大事にしないと、何度もどなった。だけど、今だったらほんの少し、彼の心がわかる。

自分より大事なものを、守りたい。

決して自分をおろそかにしてるわけでもなくて。死を恐れていないわけでもなくて。

ただ、失いたくないのだ。

初めて、彼の心に触れた気がした。

こんな形で、なんて。

なにを言うこともせずにダムはこくりと頷き、高々と鎌を振り上げた。

キラリと、月光にすらりとした長い刃が光る。私はそれをどこか虚ろな瞳で見上げながら、ほんの少しだけ笑った。

記憶が走馬灯のように蘇る、なんてことはないけれど。

こんなに穏やかな気持ちは　　はじめてかもしれない。

私はまるで眠りにつくようにまぶたを閉じ、腕の中のイオのぬくもりをそつと感じた。

一つ後悔があるとしたら、ちゃんと思いを伝えられなかったこと。

来世……なんて、別に信じてるわけじゃない。だけど、もし別の世界でもう一度あなたに会えたら、ちゃんと言おう。

私は、貴方のことを　　……

「ふざけんなよ」

突然耳元で囁かれた低い声に、私は閉じていた目を開けた。来ると覚悟していた痛みは、いつまでたってもこない。

視界が鮮やかな赤に染まる　　その代わりに、目がくらむほ

どのショックキングピンクで染まっていた。

「はへ？」

明らかに場違いな声が漏れたが、目の前のピンクはピクリとも反応しなかった。

今まで見た中で一番怖い視線を、ダムに向ける。それはもう、極道並の……いわゆる「向けられるだけで人を殺せちゃう」視線。

視線だけで凄まれたダムは顔をひきつらせながら必死で後退しようとしたが、何分鎌の刃の部分をイオに掴まれている。一步も足を動かせないまま冷や汗を垂らしていた。

ぎりぎりど、大きな手が刃を握ったまま、自分の方へと引き寄せる。こうなったら完全に、イオとダムの力比べだった。

持っているのは刃の部分、しかも片手でなのにもかかわらず、明らかにイオの方が優勢に見える。その様子に、私の額にも冷や汗が浮かんできそうだった。

「人が黙って聞いてれば、なにをこちゃこちゃと……覚悟はできているんだよねえ？」

「い、いや、あのな、あれはほんのちょっと冗談交じりの本気であつて……」

「へえ？結局どつちなわけ？」

「ううっ……ほ、本気でした……」

「そう。正直者は好きだよ」

ニツコリと、無邪気とも見える笑みを浮かべる

次の瞬間。

バキッ

すさまじい音とともに、刃が砕けた。

刃が、砕けた……？

私は見間違いないかと自分の目をごしごしとこする。だが、何
度見てもパラパラと彼の手から落ちる破片はあの大きな鎌のものだ。
驚愕したのは、もちろん私だけではない。それどころか一番シヨツ
クだったのはお気に入りの武器を突如壊されたダムの方だと思つ。

「ぎゃあああああつ！！な、なにすんだ先輩っ！お、俺の鎌！」

「必要ないでしょ、もう」

「ひつ、必要ないわけねえだろうが！武器なしで先輩と闘えつての
か？！鬨り殺し決定だろ！」

「だから、闘う必要なんてもうなくなつたんだよ

ゲームセット。貴方達の負けだ」

そう言つて取り出された、金色の水時計。
赤いその水は、もう一滴も残つてなかつた。

「うううう~~~~~っ！ぜってーあいつ殺す殺す殺す殺す……
っ……」

「ダム……ちよつと落ち着きなつて。仕方ないじゃん、ダムがアリ
スに“タッチ”すんの忘れたんだから」

「ご、ごめんなディー！！ディーが追い詰めて俺が仕留める作戦だ
つたのに……」

「そんな、僕に謝る必要なんてないよ！失敗するダムだつて最高に
可愛いんだから！」

「ううっ……ディーいいい！！」

「ダム……っ！」

「ど、どうしょ、俺……ディーとお揃いの鎌折られちゃつた……っ！」

「鎌ぐらいいいよ！ダムのが壊れたんなら、僕も壊す！また別の買おう！」

「デイー……やっぱ俺にはデイーだけだ！」

「ダム……っ！何をいまさら、僕にもデイーだけだよ！」

はるか遠くで、それでも聞こえるような大声で華やかな兄弟愛が語られる。

いつの日か彼らが禁断の道を進んでしまうような気がするのは、私だけだろうか……。

私のため息が壁に反射して響いた。今の今まで殺し合いをしていたというのに、どうしてあんなにも和気あいあいと会話をしているのだろうか。

いつもだったら異常だと断定するその精神が、今はとてもうらやましく思えた。

だって、こっちは……。

「あ、あの双子……いつも元気ねえ……」

「昔からあんな感じだったの？」

「あ、あのさあ、なんで双子はイオのことだけ先輩って呼んでんのかなあ？」

「わ、わかんない？そ、そうだよね！普通そんなのわかんないよね、ハハハ……」

「は、はは……」

「……」

「……」

「……………」

「あつまずい、なんて生ぬるいもんじゃない。たとえば、寡黙な人がじつと黙りこんでいても「こんなもんか」と諦めてしまえるのだ。だが、いつもはうるさいとすら思える人が黙り込むと…………絶大な効果がある。」

私は胡坐を組んだまま隣に座りこみ、一切口を利かないイオをちらちらと横目で見た。

「なんとかゲームには勝てたけど…………全然、嬉しそうじゃない。やっぱり、怒っているのだろうか……？」

「殺されてもいい、なんて。」

身を挺して守った人にそんなことを言われたら…………怒るだろうな。」

「……………少しだけ」

ぼつりとこぼされた言葉に、私は勢いよく反応した。全身に力を入れて、震えそうになる体を押さえつける。

明らかに緊張している私を見て、無表情だったイオがふわりと笑ったような気がした。」

「……………少しだけ、アリスの気持ちが変わった……………かも」

「……………私の、気持ち……………」

「……………うん……………アリスが、殺されてもいいって言った時……………胸が、潰れそうになった」

そつと、隣に座る彼が私の方に腕を伸ばしてきて…………私を守ったその腕で、緩く抱きしめる。

私は反抗することなく、押し付けられた彼の胸から響いてくる穏やかな鼓動に耳をすませた。」

とくん……とくん……

彼の呼吸に合わせて、波は打っては去っていく。

「悲しくて、苦しくて……ほんと、冗談なしに俺の方が殺したくなるくらい、ムカついた」

とくん……とくん……

今はこの音が、たまらなく愛しい。彼が生きているのだと、実感させてくれる。

「でも…俺も、同じことしてたんだなって、思うと…ね…」

とくん……とくん……

どうしてだろう。何も無いのに、涙があふれてくる。私は縋りつくように彼のシャツを掴んだ。

私を抱きしめる力が、緩んでいく。呼吸が、浅くなっていく。

「アリスも、こんなに、苦しかった、の、かなって、思って……少し、近づいて……嬉しかった……」

とくん……とくん……

そう、私も、私もね、同じこと思ったのよ。

貴方の心に触れて、貴方に少し近づけて……嬉しかったんだよ。

こんな形でしか近づけなくて、少し悲しかったんだけど……でもやっぱり、嬉しかったんだよ。

だから、ねえ……

「……あり……」

もう一度、名前を呼んで。

……

鼓動は、もう聞こえない。

パタンと、抱きしめていた腕が落ちる。

それが、殺し合^{ゲーム}いの終わりの合図だった。

どうか、もう一度笑って下さい。

どうも、勉強に追われる作者です。(TへTO)

実は中間考査、明日に迫ってます。

投稿時間からわかるとおり、何とか18日中に終わらせようとして12時を切ってしまった大バカ者です。

つか勉強しろって話ですよ！いいんです、もう物理古典捨てましたから

【ep12の解説】

さて、今回の話ですが…。

ああ、暗い…暗いよ、いつも通り…。少年漫画系にしよう！と思って失敗した典型例ですね。

なんていうんでしょう…アリ幕には、こう…爽やかさって言うんですか？そう言うのがさっぱりないような気がするんです。

あえて形容詞で言うなら、「ねっちょり」だったり…（形容詞じゃない）

唯一明るいのが双子だけですもんね。しかも今回めっちゃ悪役でしたし。

しかし…最後で「何だ、この展開は?!」と思った方は多いのではないのでしょうか。

すみません、今回はこの章で終わりです。しかも中間考査中は何かあっても絶対に更新できないので、ほんの少し間が空きます。

イオくんの生死、気になる方、多いと思います。

「イオ君を殺しちゃめえええつつつ」と思う方、多いと思います。

「イオ君を殺す作者なんて死ねばいい!」と思う方、多いと思います。

「いやむしろ死ね」と思う方……はあんまいてほしくないです。

ま、あえて言うなら私は甘いのも残酷なものも好きですから。結局答えにはなってますけど……読者の皆様の期待を裏切らないような作品にしたいとは思っております。

あ、気付いた方はおそらくいると思いますが、今回の最後から3行目〜2行目、あれは前のepの最後から3行目〜2行目にリンクしてます。

始まりと終わりって感じで。始まりも終わりの酷く残酷な運命ですけどね。

果てしなくどうでもいい話なのですが。

19時59分時点で携帯版PVアクセス数1,111でした。

これはもう、頑張つて次話投稿するしかないよね！

……なんて適当な理由をつけて作者は投稿してるんです、マジで。

今回は今度こそ更新できません。今回はただの気合いです。

ですから次回更新は、24日土曜日あたりになると思います。23

日から猛烈に書きはじめて、12時を過ぎる……というパターンで。

それからはまた定期更新に戻るの、これからもよろしく願います！

【第三章Shadeの解説】

Shadeとは、日本語で「陰」を意味します。

この章のメインストーリーは、まあ一発でわかるとおりイオ×ロキです。しかしこの二人の問題が解決するのは、ずっと後です。今回はイオの過去編だけで済ませました。

陽と陰、昼と夜、ロキとイオ。決して交わることのない、太陽と月。そんな感じのテーマで書きました。題名は主にここからきてます。

そのほかには、双子の登場ですね。あと……ロキの告白もあります。今回まったくさっぱりルア君が登場しませんでしたね……。大丈夫、

自称の舞台は城だから！きつと登場回数は多いさ！

……フレイム様の存在感にかき消されなければ。

【謝罪と感謝】

メッセージを下さっている 白邪アリス様、申し訳ありません！
せつかく面白いところまで話が展開してるのに、返信ができなくて……
本当は一昨日のうちにやろうと思ったのですが、9時過ぎには
つたりと死んでしまい……。テスト終わったらすぐに返事書きます！
本当にごめんなさい！

感想を下さっている 真水雪季様、感想ありがとうございます！
本当にものすつごく嬉しかったです！リニユールしてから滅多に
読者様の声が聞くことができず……。少し不安に思っていたところな
んです！ありがとうございます！読者さまが一人でもいる限り、私
は書き続けます！

お気に入り登録を下さっている方々、い、いつの間になんて
12人も……。もうほんと、こんな駄文を気に入って下さってなんて
根気のいい方々なんだ……。もうほんと、感無量です！

そして最後に、ここまで読んで下さった 読者様方。毎回毎回、
私は貴方達に支えられていると思います！10分おきにアクセス解
析を見ている私はもはやストーク……。……っていうのは冗談でして、
毎回こんな所まで読んでくださって、ありがとうございます！

これは本編とは全く関係のないぶっ壊れたキャラたちが送る番外編です。

本編のシリアス雰囲気等を壊滅的に破壊されたくない方は、お手数ですが飛ばしてお読みください。

ページの都合のため、2部作に分かれました。

……………逃げました？

それでは番外編第3幕、開幕開幕〜。

「悲しくて、苦しくて……ほんと、冗談なしに俺の方が殺したくなるくらい、ムカついた」

「う、うん……」

「でも……俺も、同じことしてたんだなって、思うと……ね」

「い、イオ？どうしたの、ねえ……」

「アリスも、こんなに、苦しかった、の、かなって、思って……少し、近づいて……嬉しかった……」

「イオ……ねえ、やめて、やめてよ……死なないで……っ」

「……あり……」

ばたっ

「いつ、イオっ……」

はいはい、イオさん終了のお知らせー。

「「へ？」」

ってことで、始めましたー。番外編まさかの3作目です。どうしてこんなとこまで続いたんだろ。

正直だる……てかねむ。どうも、読者の皆さまお久しぶり。なんだかやたらめったら影の薄い眠りネズミのレストだよー。

ま、俺はマスターと違ってそんなことで拗ねたりしないけどね。つかぶっっちゃけ楽しじゃん、登場回数少ないって。人生楽あり楽ありが一番でしょー。

マスターもお馬鹿さんだよなあ……影が薄いからって僻んだりさ。ま、そんなとこがマスターらしいって言っちゃあマスターらしいん

だけどさ。

「なんだか……レーテ、本人がいないところで散々に言われていますね。ロキ、君友達でしょう？少しは庇ったらどうです？」

「いや、お前もそうだろうがよ、ルア……」

「だって……ねえ？」

「正直言い返せないっていうか……あいつの影が薄いのは周知の事実だし」

「……………」

「……………」

「僕ら、レーテの友達やっていいんでしょうか……」

あ、いけね。ついマスターの話ばっかしちゃった。

じゃ、さっそく雑談なしで始めますか。眠いし。

……ん？あれ、なんでそんなところで抱き合ってるの、アリスもイオさんも。

「な、な、な、なんで & \k # \text{S}」

日本語で話せバカ。

何やら言いたそうだね、イオさん。……というかいい加減離れなよ。見るだけで口から砂糖が出そうだし、何よりロキ兄ちゃんと白ウサギの目が怖いから。

「ちっ……せっかくシリアス雰囲気に乗っかってアリスが抱きついてきたっていうのにさあ……人の恋路を邪魔するやつは猫に蹴られて死ね」

猫に蹴られたぐらいじゃ死ねません。というかそもそも猫は蹴りません。

仕方ないじゃん。あんのバカ作者が『シリアスもうヤダよーっ！』普通の恋愛が書きたいよーっ！』とかなんとか言って抱きついてきたんだから。

ちようどいい区切りだし、ほんのちよこつとだけなら司会役やってモイイよって答えたら……この有様なんだ。

はい、ってことで皆準備してー。ほら、そのわざとらしい血糊とか全部拭いて。

「ちよ、ちよつと待ってつてば！なんでいきなりこの展開？！こ、こんなイオが死にかけの状態で……番外編どころじゃないでしょうがっ！しかも番外編の題名これまたカオスだし！」

「アリス、もしかして俺のこと心配してくれてるー？可愛いー」
「抱きつくなくっ！つかお前は死にかけてろっ！！」

ドゴッ

ありやりや、鳩尾は痛そう……。うん、でもこれでうるさい奴が一人消えたね。ようやく始められそうだ。

さてと、今回は短めにいくよー。えーつと、まず最初は……。

「いったあ……アリスったらつれないー。今の今まであんなに可愛く“啼いてた”のに……」

「“泣いてた”だ！勝手に変換ミスすんな！」

……あー、最初はですねー。

「まーでも俺もシリアス恋愛って好きじゃないしねー。じゃ、アリス。“普通の恋愛”として……イイコト、しよっか」

「いいいい、いい加減にしなさいっ！ーはーなーせーっ」

えっと、最初はねー…。

「っ…おい！お前この頃登場回数多いからって調子に乗りすぎだぞ！」

「あははー、ロキ妬いちゃった？顔真つ赤だよー。どうする？じゃあロキも一緒に……する？」

「~~~~~っ?!」

ぼぼぼっ……バタッ

ちよ、ロキ兄ちゃん大丈夫?!うわあ……なんかほんと、ゆでだこそっくり…。

ってそういう場合じゃないんだった。あーっと、ごめんね。最初にやるのは……。

「馬鹿ですか貴方は！貴方ごときがこの変態の最骨頂に居る男を倒せるわけないでしょう！ええいつ、今度は僕が相手です、変態紫！僕には卑猥な言葉は聞きませんからねっ！」

「ふーん、そつ。じゃあ、卑猥な行動は？」

ペロッ

「あぎゃあ あ あ ああああっつっ!」

ドサッ

……………えー、イオさんが白ウサギのどこをどう舐めたかは読者様のご想像にお任せします。その後白ウサギがどうなったかはご想像の通りです。

て言うかアリスを抱きしめたままよくそんなことができるよね…。不

謹慎というか無神経というか……とりあえず、変態？
ま、何でもいいや。よしっ、じゃあ最初はねー……。

「よし、これで邪魔者は消えたね。ってことで、アリス……続き、
しよ？」

「ぎゃああつ！はなせ！抱きつくな！ど、ドコ触ってんだっ！」

……………。
ねえ……アリス……。
んのクソ猫。

「れ、レスト……？」

僕、アリスにかまってももらいたいな……。 (上目遣い&うるうるビーム)

ズツキュン

あ、なんか手ごたえあり。え、というかアリス……なんだか目の色変わってない？

「もちろんですともおおっ！」

「え、ちょ、アリス？！俺との甘々雰囲気は?!」

「うるさい黙れ離せ変態！時代はシヨタだ！身長170以上の男は
全員この世から消えればいい！」

「んな無茶な……ぐふっ」

「レストくん……いや、むしろレストきゅん！この変態は伸ばしました
からね！思う存分二人で甘々しましょうね！」

は、はあ……いや、ちよつと効果絶大すぎて予想外……。ま、シヨタ
で俺にかなう奴なんていないんだけどね。ちよつと複雑……。

えー、ようやく営業妨害をしてくるクソ猫が消えましたので、司会を務めさせていただきます。

まずはじめは作者からのお手紙です。のぼせて倒れたロキ兄ちゃんと白ウサギが意識を取り戻すまでお読みください。

……おい、ロキ兄ちゃん…生きてるー？

「はっつ…ロキを心配するレストきゅんも可愛い…っ」

もうほんと、アリスも死ねばいいのに。

手紙読み終わるまでには正気に戻ってよねー、まったく…誰のせいでこうなったんだか。

………あ、俺か。

『ボンジュール。スケジュール。作者です。』

ついにやっちまいました、番外編3作目…。何やってんだ、私。

正直時間的には番外編を開いている余裕なんてないんですけどね、精神的にシリアスが辛かったんです…。

えー、イオ君が何やら大変なことになっていますが、たった3日(で頑張る)予定なのでしお付き合ってください。

今回はも様、ナナ様のリクを消化、また全員そろったので登場人物紹介を済ませたいと思います。

一応今回の名目は「総合PV数8万突破」です！今までお世話になった方々、ありがとうございます！これからもどうか見捨てずに…！

……！
おおっ、なんだか久しぶりにまともなお手紙を書いている気がする…

っ！

つてことでレストきゅん、あとは任せませ。

アディオース。読者様』

……何、この妙に殴りたくなるような手紙は。

「うう……なんか悪い夢を見てたような……」

「ん……っ、あれ、ボクはダレ、ココはドコ……？」

「れ、レストきゅーん………。……っ、あれ？私何をしてたのかしら……」

よしよし、皆正気に戻ったようだね。どこがだという突っ込みは受け付けません。

と、言うことで。さっそく始めましょうか。第一幕も様リク、ちゃらっちゃらっちゃっちゃっ。

えへっ………効果音を出してみちゃった。

「……貴方、音痴だね」

うるさい黙れクソ猫。

第一幕 も様リク：怪しいものを口にはいけません

「ん？」

コツン、と伸びをした手の先に何か固いものが触れる。ロキは覚醒の直後に覚える眠気を覚ましながら、トロンととろけている目をそちらに向けた。

しかしどうしてもこの位置からじゃ手の先のものが見えない。ロキ

は小さな欠伸をすると、仕方なく身体をひねってもそもそも布団から這い出た。

ギシリ、とベッドのスプリングが動きに合わせてうるさく鳴る。

まったく……なんでこんなにギシギシいうベッドを買ったんだか、あの馬鹿^{イオ}は。

ロキはわずかに眉をひそめて、そこにあつたものに意識を向けた。

「……なんだこれ」

手にとってまじまじとそれを見つめる。

全長5センチくらいの、おしゃれなガラス製の小瓶。コルクの部分や底の部分には随分と細かな細工が見える。まるで女子が持っている香水みたいだ。

間違いない、これはイオ作だろう。こんなちみっこい芸当できるやつ、あいつしかいない。

……いや、問題はそんなところではなく。

「……なんじゃこれ」

紫。

一言で言ってしまうはその色だった。ちゃぽんとかすかな音をたてる瓶の中のもの、ブドウとワインとナスをあれこれ入れたような深い深い紫色の液体。

……間違いない、これはイオ作だろう。こんな毒々しい色、あいつにしか出せない。

っていうか、マジなんだこれ……。

「あいつまたなんか変なもん作ったな……何の毒だし」

イオは医師の資格だけでなく、薬剤師の資格も持っている。本当に彼は自分とは違って器用だから、何でも出来てしまうのだ。……だからってこんなもん作る必要ないと思うけど。つかこれ薬か？むしる毒だよな。

ロキはためしにコルクを開けて手で煽ぎ臭いをかいでみる。薬品を不用意に鼻で嗅がないのは理学の鉄則だ……と教わった気がする。

「ん……あれ、いい匂い……」

もつとツーンとした刺激臭を想定していた彼は、薔薇の香りにも似た香りに目を見張った。

毒じゃないとすると……香水だろうか。さらなる興味を覚えて、ペろりと口の部分を舐めて見る。

俺がいるのに、あのイオが近くに毒を置いとくはずがないよな……。そんな、ほんのちょっと甘えた考えを抱きながら。

「あま……」

甘くて、紫で、薔薇の香りのする液体……。

ますますわからなくなってきた。あの野郎、一体何を作っていたんだ……？

ふと、視線を下げて瓶のあった場所を見してみる。先程は瓶にしか興味がいなくてわからなかったが、そこには小さく折りたたまれた、オレンジ色の紙切れ一枚。

でかかど、妙に綺麗な字体でこう書かれてあった。

『勝手に飲んじゃ“めっ”だからね(はあと)』

……… イラッ

ちやうど反抗期まっ盛りのロキは激情に任せてその薬を一気にあおった。

それが、この後の悲劇につながるとも知らずに……。

「うんっ、天気は快晴！」

そして私の気分も雲ひとつないほどの快晴。

ふふふ……。自然と口をついてくる怪しげな笑い。きっとここが街中だったら盛大に引かれていただろう。

しかしいいのだ、今は散歩中だから。誰もいない静かな森で優雅な散歩中だから。

今ここで何をしたって、誰にも咎められない。誰にも白い目を向けられない。

うん、なんだかお役目を終えた囚人みたいだ。すごく気分がいい。

久しぶりにだされた外出許可令に私はご機嫌になりながら、ふんふんと鼻歌を歌った。

特にこの頃は監禁かと思うほど城の中から出してもらえないし、許可が下りたとしても例のストーカー同伴などと……一人で行動することがなかったのだ。

ちなみにそのストーカーとやらは本日の業務に追われている。泣き事恨み事……ついにはフレイムに向けての呪詛までいつていたが、正直さまあみろという話である。

普段からやけにくつついてきてサボるあいつが悪い。うん、間違いなくあいつが悪い。

そしてついに、今日フレイム様がキレた。

『ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ……待ちなよルアあっ!!』

『いやっ、イヤですうっ!!ちよ、マジでその鉞どっかにしまつて下さいってばあっ!!』

鉞片手に不気味すぎる笑い声をあげるフレイムと、珍しく本気で怯えながら銃を乱射するルア。命がけの追いかけてここが始まったのだ。そして邪魔だと言つて追い出された私…。

あの場に居たら確かに邪魔にしかならなかったけどさ……むしろ殺されたかも。

流れ弾：ならずフレイム様のとばっちりで、アリス死す。

笑えない、ほんと笑えない。……マジでありそうで笑えないよ、フレイム様…。

いや、まあ経緯はどうでもいいんだ。大事なのは結果!

今こうして自由に歩いてるといふ、壮大なる事実!

ああ、神様!私生きててよかった!

「……なーんて、そこまででもないけどね」

実は単に言つてみたかっただけでもある。

やはりこういう静かな所になると独り言が多くなってしまうのは仕方のないことなのだろう。

誰かそばに居てほしいなんてこと、死んでも思わないが。

しかし、こんな時こそ誰か来るのがお決まりの展開とやらである。

私は素早くあたりに目を走らせた。前、右、左、上……ついには足元までも、紫色が見えないか確認する。

「……いないようです、隊長！」

などと架空の隊長に向かって敬礼を試みた。うん、いいのよ別に周りに人がいなければなんでも！

この深緑の中で紫はかなり目立つのだ。これだけ見ていないということは、安心していいということだろう。

私はふーっと細い息をつく、太陽にキラキラと輝く汗を片手で拭いた。

「ま、そりゃそうよね！今お昼だし、あの変態もいるわけがな

」

「アリス？」

「いぎやあああつつつ?!」

突然背後から一番恐れていた声と全く同質のものが聞こえ、私はコンマ一秒で跳び退った。

ああ、でもたぶんもう遅い。

あの変態猫はいつものように私に抱きついてきてどっかに誘拐してしまうだろう。確信できるほどの経歴がある。

グッバイ、私の自由。グッバイ、私の平穩。

短い間だったけど、私は確かに幸せだったよ……。

しかし、予想していた惨劇はいつまでたっても起こらなかった。おかしいと思った私は恐る恐るぎゅっと閉じていた目を開ける。あ、あの変態はいない……？いや、でもだって、明らかにあの声はあいつのものだったのに……。つて、あれ？

「ろ、ロキ？」

「あー…びっくりした。いきなり悲鳴を上げることなんかないじゃないか」

私の肩を叩こうとして手を伸ばしたのだろう、ロキは心底驚いたというようにその体勢のままはあぁと長いため息をつく。

いや、驚いたのはこっちだから……。しかしそう言おうにも私自身淑女あるまじき悲鳴をあげてしまったのは事実だ。

(うーん……ここは一応謝ったほうがいいのか……?)

しかし、それにしても。

なんだか今日はロキ、ちょっと声高くないか…?

いつもは不機嫌そうな低音で「あ？なんだよ」とか照れ隠しのように「ふ、ふざけんじゃねえ！」とか言ってるのに……。

いや、まあそれも可愛いんだけどね。ぶっちゃけ萌えるんだけどね。なんだか今日は一味違っつていうかなんというか……。

「えっと、ご、ごめんね、脅かしちゃって……」

「別にいい。というか、叫び声も可愛いんだな、アリス」

クスッ

小さく、ロキが笑った。

あんぐり。

ん？

あれ、今なんかものすごく変な幻聴をきいたような……。

つかもしかして私、幻覚も見てる？

わ、笑ってる……？あのロキが、笑ってる？

あの仏頂面でツンデレで朴念仁で恥ずかしがりでツンデレでお堅く
てすぐに真っ赤になってツンデレでツンデレでツンデレなロキが……
…？

大事なことなので5回言いました。

ザ ツンデレのロキくんが……？

「ツンデレだなんて、酷いこと言うよな、アリスも」

「な、なななななでわかんのか？！こ、心読んだ？！新種の技術？

！あれですか、読心術とかいうやつですか！そんな能力もあつたんですね！」

「あははっ……馬鹿だな。好きな子の考えてることくらいわかるって」

「わかつてたまるか！なんだそのプライバシーの欠片もない能力！」

大体そんな能力があつたら告白や失恋は実現しないだろうが！！

い、いや、そうじゃなくて……問題はそこじゃなくて！

……はいいいい？！

い、今なんつった。

「ふっ……（白い歯キラーン……）馬鹿だね」の後！

なんだか、聞いてはいけないものを聞いてしまいましたような……。

私はひきつる頬を必死で整えながら、ポンと彼の肩に両手を置いた。ロキはふわりと笑って「何だ？」と聞いてくる。

うん？なんだか周りに花が見えるんですけど。つかやけに歯が光を反射させてるんですけど。

まずいな……本格的に眼科と耳鼻科に検診受けに行かないと。

「とりあえず、ワンモアプリーズ。君は一体何と言ったのかな？」

「ん？だから……好きなヘアッ」

「言っちなああああっっっ！！」

結論。

おかしいのは、私の耳や目ではない。

ロキの頭だ。

「だからさあ！もうちょっとぬるくしてくれって！」

「だあめ。勝負に負けたでしょ。ほら早く僕の分飲んで」

「こっ、こんな苦くて熱いの、飲めるか！」

「駄目ったら。飲んで」

「ううううっ……マスターの馬鹿！何で今日に限って緑茶なんだよ！！」

ついに自分にもとばっちりが来た。

レーテは小さくため息をつきながら、自分が淹れてやった緑茶を押し付け合っているマルスとレストを見た。

仮にも自分が愛をこめて淹れた緑茶である。

そんなに嫌そうな顔をしてお互いに自分のも飲ませようとし……この僕が傷つかないとも思っているのだろうか。

「気分が緑茶だったからです。何か文句でもありますか？」

「文句ありありだよ！大体緑茶の気分って何だし。ジジイっぽく振舞いたいときか？！」

「はあ……まったく。いい加減にして下さい、マルス。緑茶を愛する全国のためこの皆様に失礼です」

大体、何がいけないというのだ。

この鼻をつく深い香り、舌に残る仄かな苦み、喉を滑るトロリとした感触……。

……最高じゃないか。

ティーパーティー

「……ま、“お茶会”に白いテールブルクロスと洋菓子と……それから緑茶って言うのはちょっとおかしいですけどね。斬新だからいいんじゃないんですか」

「いいわけあるか！なんだよその奇想天外な組み合わせ！それこそ緑茶を愛する全国のためこの皆様に失礼だろうが！なあ？レスト」

「俺に振らないですよ。俺はマルスの嫌がる顔が見たかったただだからどうでもいい……」

そう言うてにつこりと笑うレストは男のレーテから見てもとても可愛らしい。首を傾げて見せるところがさすがシヨタのプロだ。

しかし言っていることが如何せん鬼畜だ。眠そうにむにやむにやと欠伸をするが、やはり言っていることが鬼畜だ。

レーテはずっと緑茶をすすりながら、キャンキャンとわめくマルスを眺めた。

緑茶はどうやら相当不評らしい。健康にいいからと思って淹れたのだが、思わぬ失敗だ。

かしり、と紅茶クツキーを齧ると、苦みが残る口の中に香り高い甘みが広がっていき、なんともよく調合して ……

「ってうわ、まず……」

「当たり前だろうが！あんだどんな舌してんだよ！」

隣でマルスがわめくのを無視して、レーテはまじまじと自分の手に残るクツキーを見た。

自分が大好きなクツキー。自分が大好きな緑茶。

好きなのに……。

「好きな者同士なのに、どうして合わないんでしょうねえ……」

「シリアスにまとめんな！和風と洋風がマッチしたら恐ろしいだろっ」

ふうう……という憂いを帯びたため息をしかし、マルスがさかさず遮る。

まったく……この頃彼はアリスに似てツッコミが多くなってしまった。

「たまには僕にも意味深な台詞を吐かせて下さいよ。いつも爺キヤラなんて嫌ですからね。まったく、この頃の若者は気遣いというものを知らない……」

「もうその時点でジジイじゃねえか！つか台詞って……あんだキヤラ作りしてたのか？！」

「今日も平和ですねえ」

「いきなり話題変えんな！てか目をそらすな、目を！」

「だって、そんなに見つめられると恥ずかしい……」

ポツ

「見つめてねええつ!!」

さて、キャラ作りをしているかどうかは置いて。

この頃やけにイオの影響が強く、あの手この手でマルスを苛めることに快感を覚えるレーテであった。

今日も、平和。雲ひとつないほどの晴天は、見ているだけで心が澄み渡っていくようだ。

その下で緑茶でティーパーティー……こんなに平和なことがあるだろうか。

ああ……神様。どうかいつまでもこの平和が続きますように……。

レーテはずっと最後の緑茶をすすりながら、何となくそう願ったのだった。

だ
が
。

おそらく自分の上にふんぞり返っている神畜生はこつ笑ったのだらう。

『誰がためえの願いなんざ叶えるかよ、クソジジイ』

その証拠に、惨劇は神に願った直後に訪れた。

「なあ、なんか聞こえないか？」

ふいにマルスがピン、とウサ耳を立たせる。

レストに不安が入り混じった声で尋ねるが、睡眠中のレストは机に突っ伏したまま寝たように死んでいた。あ、間違った、死んだように

「ロキがおかしい？そんなのいつものことでしょう」

私は息を切らしながらレーテに事情を説明し、両手足首をがっちり縛ったロキをどさりと彼の前に差し出す。

あの後問答無用で彼を気絶させ、素早く縛りあげて引きずってきたのだが……目を覚ましてからが大変だった。

「好きだよ」「可愛いね」だとか何とか恥ずかしい言葉をにべもなく囁いてくる。

……そのたびに彼の鳩尾に拳を入れて黙らせたのだが。

レーテは手足を拘束され身動き一つできない状態のロキを同情するようなまなざしで見つめ、確かめるようにペチペチ頬を叩いてみた。ああ……！そんなに近いと……！

「ほら、身体に異常もないようですし、別に平気なんじゃ」

「今日のレーテは一段と美しく輝いてるな。白い手もすごく綺麗だ」

「ああ、おかしいですね。異常です、明らかに」

爽やかに笑ったレーテはぎりつと指に思いきり力を込めて、ロキの頬をつまみあげる。鬼畜だ、鬼畜である。

あまりに痛そうな光景にも、ロキは眉一つ寄せることなくふわふわとした笑顔を浮かべていた。

「痛いなあ、レーテ。愛は優しく注ぎ込むものだぜ？」

「ちよつとアリス。貴女どっかべつのもんでも拾ってきたんじゃないですか？もはやこれ誰って感じですよ。今すぐ捨ててきなさい」

そんな馬鹿な。ホイホイ落ちてるもんか、こんなの。

「まあまあマスター。とりあえずこれがロキであることには間違いないねえんだろ？」

優しい笑みを浮かべたまま青筋を浮かべるレーテを諫めたのは、珍しくマルスだった。その隣でレストが興味深げにまだ眠そうな目をこすりながらロキを観察している。

レーテにマルスにレストに私。4人も人間がロキを囲んで様々な表情を浮かべているにもかかわらずロキは、まだ甘いマスクを外そうとしなかった。

「だったら捨てることねえじゃん。そのうち治るって」

「優しいな、マルス。お前に優しくされるんなら、俺はいつまでも恋の病に罹っていたいよ」

「マスター！こいつ殺していい?!」

「駄目です。だから捨ててきて下さいって、アリス」

「あのねー……あんたら、私は元に戻してって頼んでのに、なんでそっちの方向に行くのよ」

私は呆れたように溜息をつきながらも、どんどん混乱していく頭を抱える。

あのロキが、「好き」「可愛い」?どこでそんな言葉覚えたんだこの子は。

しかもなんだ、この甘い甘い、砂糖菓子のような笑顔は。こんなのイオの時にだって滅多に見ない。なんだか新種のホストさんを見ているような気分だ。

多少冷静さを戻したらしいレーテは肩をすくめて「わかりました」と一言漏らす。

マルスはまだ顔を真っ赤にさせて激昂していたが、とりあえずは手に持っていた武器を地面に落とした。

「無差別だから余計始末悪いわよねえ……せめて男には自重しなさいよ」

「そうですね。ロキに余計な噂が付きまとう前に解決しませんと。とりあえず、状況からまとめましょう。こうなったのはいつからですか?」

「わかんないけど……3日前は至って普通のツンデレだったわよ」「ツンデレは普通じゃありません。どんなことを言ってきたんですか?」

「好きとか……可愛いとか……」

「もう完璧ロキじゃねえな。つかほんと、誰だよそれ」

「し、知らないわよ! あー…あと、『叫び声も可愛いんだな』的なことを言われたわ」

「……」

「……」

「な、なによ」

「……ロキ、随分とお世辞がうまくなったようですな。少し嬉しい変化です」

「あの“雄叫び”を可愛いだなんて思わねえよな、普通。むしろ耳鼻科連れてった方がいいんじゃないかねえか?」

「お前らぶつ殺すぞ!」

「あ、の、さ、あ……」

ツンツン、と隣に居るレストに袖を引かれ、私はそちらに注意を向けた。

瞬間、眠そうに目をトロンとろけさせるシヨタに一発でノックアウトされる。

可愛い、なんて言葉じゃ表現しきれないものをあちらの世界の人は「萌え」というのだと思う。

この世界につれてこられてから、自分もかなりヤバいところまでじりじりと近づいてきている気がする。

そのうちイオと同列の変態として扱われそうだ。

ああ、もうなんか。この犯罪級に可愛い生き物を何とかして下さい。しかし、恍惚と彼を見つめていた瞳も、次の瞬間には凍りついていた。

「ロキお兄ちゃん、逃げてるよ」

「何で目をはなしたりするんですかバカアリス！」

「はあ？！私のせいだっていうの？！もとはといえばマルスが不用意に鉤爪なんて落とすからあれで縄を切って……」

「俺のせいじゃねえだろうが！嬢ちゃんがあいつの保護者なんだから、嬢ちゃんが管理しろよ！」

「いつから私がロキの保護者になったのよ！」

罪のなすり付け合いなど醜いという人もいるかもしれない。

だが、今はそうでもしないと正常な精神を保ってられない状態だった。

眠そうなレストを置いてきて、私たち3人はそこら中を走り回る。

幸い昨日は雨が降って土がぬかるんでいるため、足跡が残っていた。しかし足跡の行き先が……最低だ。

「街?!何でよりによって街になんて行くのよ!」

「さあ……?女の子がいつぱいいるからじゃないですか?」

「あいつ今老若男女関係ないじゃん!あんな人がいつぱいのところに居たらヤバいだろ!」

「ちよつと待ちなさい。若者男女はわかりますが、老人なんていつ手を出したんです?!」

「え……だって、マスターを誑たらしてたじゃん」

「僕は老人扱いですか!」

レーテの怒号が聞こえた、その時。かなり近くから、女の悲鳴が上がった。

いや……悲鳴、というかこれはむしろ、黄色い声?ぞわりと嫌な予感が体中を張って鳥肌を立てる。

うん?まさか、いや、でも……。

「隊長!目標発見しました!」

「何馬鹿言ってますかアリス。どっから出てきましたその双眼鏡」

冷静なレーテの声になじられながらも、私は双眼鏡を放さない。レンズの先に見えるロキの笑顔。その周りには……。

「隊長!ハーレムができています!」

「だからその隊長って誰ですか」

冷静に頭をはたかれてようやく、私は双眼鏡を目から外した。よく見れば双眼鏡などいらなくらい、近くに見える。せいぜい5メートルくらいしか離れてない……って至近距離じゃねえか。

ただ、彼と私たちの間には厚い厚い壁がそびえたっていた。

彼があんなにも、遠く見える。

近くににいるのに……遠い。彼に触れられないもどかしさに、私はくらりと眩暈を覚えた。

鼻をつく、強烈な甘い香り。いや、しかしそれはあまりに多くの香水が混ざっていて、もはや悪臭へと変わっている。

うう……くらくらする。

彼の周りには、女女女……大量の女の壁が層をなしていた。

「アリス、今はどんなシリアスな思考も通用しませんよ」

「わかってるけどさ……さすがにこれはシリアスな方に逃げたくならない？」

「とりあえずこれ……どうするよ。なんかおつそろしいことになってんぞ」

確かに。男は狼というが、女は時としてハイエナになる。そのぎらつく目に全身を晒されたロキは今どんな心境なのだろう。

怯えているのか。怯えているだろう、さすがにこれは。だってこの人たち、引剥ぎをしそうな勢いで迫ってるんだもの……。

「貴方、どこからいらしてんですの？」「ものすごく可愛い顔していますねえ」「私の愛人になりませんか？」「可愛いだなんて……言った責任、取って下さるんでしょうねえ？」「ああ……もうなんか、このお色気がたまらないわ」「君、何万？」「うあああ！もうなんか、かつこよすぎよ！」「ダメ、私ドキドキしちゃって来た！」「あ、あんだなんてす、す、好きだなんて思っただからね！」「ウホッ、いい男！」「とりあえず二人きりになりましょうか？ね、なりましょうか？」

「ははは……そんなに一気に言われてもわからないぜ？やるなら一人ずつ、な？」

……笑っていた。このハイエナたちを前に、爽やかな笑みを見せていた。いや、むしろ呆れを通り越して尊敬するわ。

それは隣のレーテとマルスも同様だったらしく、一瞬の間が空いた後レーテがぼつりとこぼした。

「なんかもうこれ、このままにしたい方が彼にとって幸せなんじゃないですか？男にとってハーレムは夢のまた夢なんですよ」

「いやいやいや、やめた方がいいと思うぜ。だって明らかに女じゃない奴いるじゃん、危ないよあれ」

「マルスに同意ね。とりあえず何とかしてあいつを捕獲しないと……」

「誰を捕獲するんだ？」

突然上から降ってきた声に、私はびくりと震える。ギラギラと照りつける太陽を背後に、黒い影が頭上を高く跳んでいた。

ああ、そう言えばチェシャ猫つてもものすごい跳躍力の持ち主だった……？

なんてこと、思う暇もなくロキはしゅたつと私の前に降り立つ。あまりにも華麗なその動作に、私は息をするのも忘れて呆然と彼を凝視していた。

こうであるのが自然、というかのように彼は私の腰に腕を伸ばして抱きしめる。

いや、自然なもんか。自然であっていいはずがない……。

だけどなぜか私は、抵抗することなく彼の腕の中に収まっていた。皆に見られているというのに……恥ずかしさよりもまず先に、安心

する。

頬に触れる熱い体温が、妙に心地いい…。

「やっぱ、この抱き心地が一番いい……」

耳元でもものすごいことを言われるが、その言葉には性的なものは一切含まれていなかった。いや、含まれていたら問答無用でぶん殴るけど。

ただ、母親に縋るような子供のように触れる。彼の過去を知っているだけあって、その想いを直視するのは胸がずきりと痛んだ。

だが次の瞬間、トラジエディ コメディ悲劇は喜劇に変わる。

「胸は小さいけどな」

「おい誰かバズーカもってこい!!」

目を覚ますと、何だか暗かった。

いや……自分が起きるということは夜だから暗いのは当たり前だが、そうではなく、なんとというかこう……霧囲気が。

端的に言ってしまうと、空気がずどんと重かった。

「あれ？アリスじゃん、どうしたの貴女こんな所で」

見渡してみると、アリスだけではなくレーテや……ついには自分を嫌っているマルスとレストがテーブルに突っ伏していた。いつもだ

つたらあの二人は問答無用で襲いかかってくるのだが…今日はずいぶん元気がない。

なんだか全員、疲れ切った……いや、使い果たしたという感じだった。

イオは心配に重い彼女の肩に手を置こうとして、そこで気付く。

「……何で俺縛られてんの」

縛られてる、というかこれは……巻きつけられている？

縄やら紐やら鎖や包帯やら…明らかに用途の間違ってるものも混じってるんですけど。あまりにも嚴重にまかれたそれは、怨念に近い執念がこめられていた。

こちらに気づいたららしいアリスが生氣のない目を向けてきた。

ちよ、口から何か魂^{モリ}が出てるよアリス！

「あー、あー……おはよ、イオ……」

「ん…おはよ。どうしたの？なんかみんな目が死んでんだけど」

おまえのせいだ。

その場の4人の心の声など露知らず、イオはもぞもぞと動く。いろんなものが身体に食い込んで痛かった。

しかしさすがにそう簡単には解けそうもないらしい。アリスが手助けをしようとイオの方へ駆け寄ってきた。

「よかった……イオの方はいつも通りなのね…これ以上変態になられたらどうしようかと思っただわ」

「にゃ？なんか言った？」

「いや、何でも」

「…ものすごく殺気がこもってたけど……」
「何でもないってば。それより聞いてよ……今日、なんかロキがすごく変だったの」

ため息というのはこうも長いものか……。イオは最後にほどけた紐を手に巻きつけながら、ぐったりと力の抜けた彼女を緩く抱きしめた。相当疲れているのか、彼女は何も反応しない。可愛らしく真っ赤になる彼女もいいが、抵抗しないで自分に身をゆだねるアリスも新鮮でいいかも……。

彼女が心配で抱きしめているのにドキドキと、やけに自分の鼓動だけを感じた。

どんなアリスも全部可愛く思える。これが惚れた弱みってやつだろうか……。

「変だなんて生ぬるい言葉じゃありませんよ……あれはロキじゃありません……僕は信じません……」

「マスター……あんた意外とロキに心酔してたんだな。いい加減認めるよ……きつとあれが素なんだって」

「あんなのが素だったら今この瞬間にでも友達やめます」

「ちよつとレーテ、あんた酷いわよ。……でもわたし、もう1カ月はロキの顔見たくないかも……人のコンプレックスを刺激しやがって……あんのクソ野郎……！」

（一体何があつたんだ……？）

疲れ切っていないながらも、彼らの声には熱気、もとい殺気がビシビシと込められている。

イオはひきつる頬を必死で隠そうと自分の口を掌で覆った。その時。

「ん？」

クン、と。自分の口から微かに香る薔薇の香りに気づく。自分が一番よく知ってる、特徴的な香り……これは、もしかして……まさか、とは思った。だがそうだとしたら……アリスたちの疲れっぷりも反応も説明がつく。

「ロキ……まさか、俺が作った“惚れ薬”を飲んだの？」

「惚れ薬い？」

イオを省くその場の全員の声が見事に合唱した。ただの独りごちに息を揃えて訊き返され、軽く感動する。

「そ。どんな堅物くんも飲めば一発でお色気ムンムンホストくんになっちゃうよ〜ってやつ。もともとレーテに飲ませて新しい恋に目覚めさせてやりたかったんだけど……そっか、男女関係なく引き寄せちゃう試薬品をロキが飲んじゃったのかあ……。あはは、大変だったねえ」

ピシリ、と。その場の空気が氷点下零度まで急降下したことにイオは気付かない。

ああ、しかしこの哀れな子羊……いや、馬鹿な猫が異変に気付いた時には何もかも手遅れだった。

がしっ

イオの腕の中に収まっていたアリスが、彼の胸に手を置き……不意にそれを掴みあげる。

ようやく生命の危機に気づくが、時すでに遅し。怯えたような瞳を向けるイオにアリスは、それはそれは爽やかな笑顔を浮かべた。

「おまえか」

その後のイオの行方は、誰も知らない

……

f i n . . .

「ちよつ、俺死亡フラグたつてんだけど！何この可哀そうな扱い！」
「何で僕とフレイム様が全力疾走しなきゃなんないですか！いらないだろあのシーン！」

「シリアスは嫌って言ったさ、確かに言ったけどさあ……だからってネタに走らなくなったっていいじゃねえかあつ！この、作者の、作者の……馬鹿あああああつっつ」

え、ちよ、ロキお兄ちゃん！そんな、泣かなくつたつて……あー……行っちゃった。

だからやめた方がいいって言ったのに、バカ作者。完璧物語が斜め上に逝っちゃってんじゃないか。

……つて、あれ？アリスは？
ん？何この置手紙。

『愛しのレストきゅんへ

作者を仕留めるためのバズーカを買い求めに旅へ向かいます。
探さないで下さい。

心身ともに疲れ果てたアリスより』

………とりあえず逃げたほうがいいんじゃない、作者。
ロキ兄ちゃんもいないうえアリスもいないなんて……ほんと、やる
気あんの？

「あるわけないじゃん、俺の扱い見てみればすぐわかるよ」
「これはロキ永遠の黒歴史になる作品ですよ。ま、これ以上暴走
する前にとりあえず今回はこれで終わりにしたらどうです？」

と言っけどね、白ウサギ……。今回は登場人物紹介まではやらないと
いけないんだって。
ほんと、なんであんなシリアスな後にこんなネタをはさむのか。

「ま、どちらにせよ俺の死亡フラグは立ってたけどさ……俺もロキ
みたいにぐれてみようかな」

「やめて下さい。気持ち悪いです」

「ルア、相変わらずつれない……もっとデレてくれてもいいのに」

君ら……もうすっかり休憩モードだね。

「仕方ないじゃないですか。フレ임様とずっと追いかけてっこして
たんですもん、疲れもしますよ」

「そうそう。俺なんかアリスにピ　　やピ　　や人に言えない
ことまでされちゃってさあ……ポッ」

「残酷描写のため放送できないだけだろ！！頬を染めるな頬を！」

……愉快だねえ。

ま、いつか。それじゃあ読者さまには申し訳ありませんが、今回の
番外編はもう一つ続くということ。

次回の【chapter・0】ep3自重？知ってるけど使います。左は「ナナ様リク」と「登場人物紹介」が収録されてます。お楽しみにー……。

ま、どうせまたネタだけだね。

「ちよ、貴方それは身も蓋もない……」

やっちまった……やっちまいました。こんにちは、作者です）。・
（ノ）

ああ、もうほんとすみません…何故かこの時期に鬱病になりました
…
斜めを通り越して45度カクンとおれている作品です。あのシリア
スな雰囲気から繋ぎがこれって…自分でもどうよと思います。千年
の涙も乾く…。

おそらく次章に入ったら番外編を入れる区切りが見つからなくなる
んじゃないかなあと思い、速攻で書いて見たんですが…。

これはひどいww

というか全員キャラが壊れてますね。アリス自身、シヨタ萌えーな
んて叫んでるあたり別人です。

すみません、これはたぶん中間考査を挟み私が病み気味になったの
が原因だと思います。キャラの変態濃度が全員上昇しとる…orz
ああ、でもメッセージや感想で挨拶するアリス達は常にこんなテン
ションです。

ということ、いいとして…（いくない）
それではリクの解説、いつきまーす！

【も様リク】

イオに負けず劣らずエロいロキが見たい、とのことでした。
も、も、も、申し訳ありませんん！
なんだか色々と履き違えてしまいました！

えー…なんというか、「エロ」と「変態」ってこつも違うんですね、
と改めて実感しました…（、・、・、）

ある意味変態度で言えばイオを超越していました…。
ネタに突っ走ってしまい申し訳ありませんでした…。本編でなるべく糖度を増すことにします。

さて、と…。それでは次回更新は10月27日火曜日になります。
模試を挟みますが、なるべく遅れないようにします。
次回ももちろんネタに一直線で

「さああくううしゃあああつつつ!!」

つて、ええ?! あ、アリスちゃん?! どうしたのこんな所まで…!
え、というかその黒い鉄の塊何?! ば、バズーカ?! ちょ…冗談は
番外編だけにして下さいって!

「うるさい黙れ外道! 毎度毎度毎度、斜め上の番外編をシリアスな
本編の間に挟みやがって…!! ええいつ、読者様にかわってお仕
置きよ」

えっ、ちょ、それ古い! しかも「月にかわって」じゃないの?!
バズーカ構えながら言うセリフじゃ…

「問答無用! 死に曝せええつつつ!!」

いつ、いやああああつつつ!!

なーんて。番外編はどこまでもネタです)、。、(

それでは、テンションの高すぎるあとがき失礼しました。

またまた前回に引き続きネタばっかの番外編です。

本編のシリアスな雰囲気壊したくない方は、踏み入れないほうがいいカオスワールドです。

かなり、キャラ崩壊してます。

本編は明日から始まります。

第二幕 ナナ様リク：うるさいのは二匹で十分

たとえば。

自分の身で想像してみよう。ふかふかの高級ベッドに、白いシーツ。薄いタオルに、着ている物は薄水色の質素なワンピース。

しかも朝一番ということもあつて肩から下着がちらちらと覗いている。もちろんこれはすべて、私自身の説明だ。

そんな私の横には

……

全裸の男が寝ていました。

「……………」

少年、というならまだましだ。シヨタコンというのは断じて認めないが、とりあえずはいい。

だが……隣で気持ちよさそうに寝息を立てる男は、少なくとも大学生には見える。背も、骨格からしてかなり高いほうだろう。

この頃なんて美形に見飽きたぐらいだったが…この男も例にもれなかった。可愛いがかっこいいかと聞かれたらどちらかというと後者よりだ。

髪は茶色を少し焦がしたような色。ロキみたいにツンツンでもなくて、ルアみためにサラサラでもない……どちらかという巻きいたよくなふわふわの短髪。

そしてその上には……でた、獣耳。つんと尖がっていて…猫耳、なんだろうか？イオのものとは少し違う形だが…。

……よし、取り合えずまず状況を整理しようか。
私はどうしてこんな素っ裸の見知らぬ男に抱きしめられているのだろ。視線を下に向けることができなくてもものすごく困る。
ええっと、昨日の晩……私は何をしていたんだっけ。
久しぶりに外出令が下りて。で、外を散歩しにいつて

雨が、降ったんだ。

『だあああっ！なにこれ、にわか雨?!』

私は突然ザアアアと猛烈な勢いで降り始めた雨から身を守るように、頭の上で腕を交差させた。

しかしそんなことをして効果があるわけもなく。10秒としない内にバケツをぶちまけたような雨に全身を濡らしてしまった。

せっかく外出令が出たというのに……最悪だ。早く帰らないと……ルアがいつものごとく心配するだろう。

私はがっくりと肩を落として、城へと帰ろうと踵を返した。

その時。

『きゃんっ』

むにゅりと。

むにゅりと、確かに足は何かを踏んだ。

『わっ……』

私はあわてて後ろに飛び退ってそこにあった……いや、いたものを凝

視した。

キラキラと、恐怖か警戒か、光る銀色の両眼。猫のように逆立った、茶色の濡れた毛並み。子犬というのには大きい、ちょうどチワワぐらいの小型犬だった。

いきなり尻尾を踏まれて驚いたのだろう、喉をグルルとやらせて威嚇している。

もともと動物好きの私は困ったように首を傾げた。びっくりしたのはこつちも同じだが……悪いことをしたな……。

それにしても、こんな所に捨て犬だろうか？見たところその犬の首には赤い首輪がはめられていたが、噛みちぎった跡がある。

『う、ごめんなさい……わざとじゃなかったんだけど……』

言葉がわかるはずがないと思いつつも私はつい癖で犬の頭に手をのせてあやすように撫でる。

最初こそ犬は嫌がるように身体を強張らせていたが、この雨の中相当弱っていたらしい。私を“安全”と認めると、甘えるようにすり寄ってきた。

……可愛い。

さっきも言ったが、私はれっきとした動物好きだ。

そりゃあこつちに来てからいろんな変態どもに遭遇してるから、不用意に「猫が好き！」なんて言えないけれど。

……言ったら貞操の保障ができないし。

とにかく、私は動物好きなのである。こんなふうにすり寄りられてきて、雨の中放っておけるわけがなかった。

そうだ。それで……ルアに見つかると絶対「捨ててきて下さい」と

笑顔で言われると思ったから、早々に城に帰って部屋に引きこもったんだっけ？

すごく体が冷えてたから寝間着に着換えて、犬を抱えてベッドに入ってた……

で、何故にこの状況？

「……………」

思考が振り出しに戻る。

（ええっと、待てよ。これはあれか、いわゆる人間化ってやつか。そう言えばルアも何回かうサギに戻ってるし、犬耳とすれば説明もつくし……てか）

子犬ちゃん、こんなに逞しい男性だったんですね。ルアが可愛く思えてきますよ、ええ。

……とりあえず、この状況を何とかしようか。こんな所誰かに見られたら、最悪だ。あの状況としか説明がつかないだろう、どう頑張っても。

私はぎゅっと固く抱きしめている男の腕からなんとか脱出しようと身体をひねらせた。

だが悪い事はとことん重なるものである。

「アリス、就寝中失礼します。少しお話でも

」

ガチャリ

死刑宣告のような金属音と、逆光でいささか暗くなったルアの笑顔。

ピキリ、と。空気が奇妙な音を立ててひび割れた音を、私は聞いた。確かに聞いた。

一瞬の沈黙が、こんなにも重いものなんて。どんどん青くなっているルアの固まった笑顔が、こんなにも怖いだなんて。

ああ、もういろんな意味で終わった。

次の瞬間、寝静まった城中に白ウサギの悲鳴が響いた。

「あ、あ、あ、あ、ああああああありすうううつつつ？！」

「ちょ、落ち着いて！とりあえずこれには深いいわけが……！！と、とにかく！誤解なのよ、これは！」

「この状況でよくもそんなことが言えますね……っ！し、しかも僕の知らない男なんかと……っ！」

「ええっ？！ちょ、あんたそれって、あんたの知ってる野郎だったらいいわけ？！」

「アリスのはじめては僕じゃなきゃ嫌だったのに……っ、ひ、酷いですアリス！あんまりな仕打ちじゃないですか！」

「ご、ごめん……っ。ってそうじゃないわよ！何あんたさりげなく問題発言しちゃうてるの！これはご・か・いななの！」

「馬鹿ですか！ここは8階です！」

「大ボケはお前だろうがあっ！とにかく話を聞けっ！」

「あっ、アリスがそんなに淫乱な子だなんて………思いもありませんでした！もっ、もう大っ嫌いですっ！！アリスの馬鹿ああっ！！！」

「っ。てええええっ？！は、話を………い、行っちゃった……」

弁解する間もなく、ばたんっと大きな音を立ててドアが閉められる。まさか大っ嫌いと言われるとは思っていなかった私は軽く呆然とする。ああ見えてルアって………デリケートだったのね。

どうしようだなんて、今更考える暇もない。とにかく早く追って誤解を解かないと……!

私はあれだけ叫んでもまだ寝息を立てている男の顔を困ったように見やった。

可愛い系のルアとはまた違う、美形。それが全裸で自分の隣にいるのだ。自分がルアの立場だったら……間違いなくそっち路線を疑うだろう。むしろ発砲しなかっただけルアは偉い。

「……ん。ま、すたあ……」

男の長いまつげがピクリと震えて、その先の黒い瞳が覗いた。私は息を詰めたまま彼の覚醒を見守る。

マスター?レーテのことだろうか……?もしかしたら何か知っているかもしれない。ルアの誤解を解いた後でつれてくか……。

「えーっと……貴方、名前は?」

「……………」

彼は私が自分の“マスター”ではないとまどろみの中悟ったのか、一瞬警戒するような光を瞳に宿す。

しかし巻き付けていた腕を元に戻して体を離すだけで、それ以上の攻撃はしてこなかった。私は何とかベッドからはい出て、クローゼットの中から適当な服を選び、彼に投げつける。

男は一瞬驚いたような顔をしたが、大人しくそのTシャツに袖を通した。

「とりあえず服はそれでいいとして……名前は?ないの?」

「……………」

かくつと、彼は首を傾げてみせる。まるで何を言っているか理解し

ていないようだ。

もしかしたら……彼は本当に言語を理解していないのかもしれない。犬が主人の顔を覚えるのと同じように、彼も主人の名前だけ覚えていたとしたら…？

「ます、たあ…？」

不安げに呟いては泣きそうに顔を歪める。きよろきよろと周りを見渡しては、主の姿を見つけようと何もない空間に目を凝らしていた。帰りたい。声なき声でそう言っているような気がして、私は胸が締め付けられるような痛みを覚える。

きつと彼の想いは、誰よりも自分が理解できる。自分の知っている物が何もない世界に取り残される不安。もう大切な人に会えないのではないかという恐怖。

すべて、以前の頃の自分が抱えていたものと全く同質のものだ。

私は怯えたように身体を震わせる彼の頭を腕に抱くと、くしゃりとその頭を宥めるように撫でた。

「大丈夫、心配しないで……。ちゃんと、もとの場所セカイに返してあげるから……」

絶対に。そう言ったのは、単に同情からだったのか。それとも彼に、自分を写していたからなのか。

「あれ、姫さまじゃん！どうしたの、こんな時間に。………誰だ、それ」

廊下へ彼の手を引いて出ると、さっそく声をかけられた。夜中だといつのにまだ制服を着たままのダムに訝しげな視線を向けられる。夜警…なのだろうか。その手にはちゃっかりと武器が添えられている。

だが基本的に暇人をやっている双子が、夜警？なんだか少し違和感があるような…。

「ええつとね、これはちょっと一言じゃ言えない理由があつて……。そ、それよりルアを見なかった？今探してるんだけど……」

「白ウサギ？ああ、見た見た。なんか滅茶苦茶姫さまを貶しまくりながら走ってたぜ。アホンダラ、ツンデレのできそこないだとか何とか」

……………そこまで言ってたのか。てかできそこないって何だよ。ツンデレなんて確立しなくて十分じゃボケ。

「それでねー、面白そうだったから今ディーが白ウサギの後をつけてんの」

「え……ダムは？」

言われてみれば、先程からディーの姿が見えない。

あれほどべつたりりのディーとダムが離れるなんて……槍でも降るんじゃないか。

「うん、それがさ、聞いてよ姫さま！」

ずいっと身を乗り出して顔を近づけてくるダムに、隣にいる男はびくりと怯えたように震えた。

それを一瞥した彼だったが、大して興味なさそうに目をそらす。それよりも不満をぶちまけてくたくたに仕方がないと言った感じた。

「白ウサギの奴の叫びでフレイム様が起きちゃってさ！もんのすごい今機嫌悪いんだ。それで白ウサギをひっつかまえてこいって言われてさあ！冗談じゃないっての！……ディー……」

やはり片割れがないと言いようのない不安が纏わりつくのか、ダムは自分の身体を掻き抱くようにして腕に爪を立てた。切なげに、黄緑色の瞳が揺れる。

「俺も白ウサギが泣き叫ぶ姿見たかったのに……」

ってそつちか。

自分の弟を思う心じゃなくて、単なる野次馬根性なのね…。

私は呆れたように溜息をつくど、男の手を取って踵を返した。

「じゃあね。私、ルアに用があるから」

「ああ、もう……何で俺だけ仕事しなきゃなんねーんだよ……めんどくさ。だる。サボっちゃおうかなあ……。あ、でも後が怖いから」

付き合い切れない。

うーん……ルアを探さなきゃならなかったんだけど……全然居場所がわかんないし。

とりあえず、もう一つの方をあたってみるか。

私はダムの切なげなため息を背中に、帽子屋邸まで急いだ。

「あー……ダメだ、全然眠れない。マルス、もう1ラウンド」

「え、ちょ、俺もう限界なんだけど……」

「つべこべ言わない。俺がやるって言ったらやるの。これ宇宙の鉄則」

「どんな鉄則だ！お、おい……っ、お前まさかまたやるつもりか？！」

「ふふ……ま、せいぜいいい声でなくてよ」

「れ、レストおっつ！」

ちなみにこれはすべてゲームについての話である。色々とあつち方面に勘違いしてしまうかもしれないが、これは断じてゲームの話である。

夜になると眠気が覚めてしまうレストは、逆に眠そうなマルスにカードゲームを持ちかけて有り金全部搾り取る。

最初はまじめに受けて立っていたマルスだったが、もうすでに1時を回っている深夜だ。頭がうまく働いていないのだろう。レーテから見ても馬鹿らしいミスで何度も負けていた。

思考のおぼつかない相手に勝負を持ちかけて金を吸い取る。考えてみれば富んだ悪徳商業だ。

「ま、また負けた……。マスター、代わりにやってくれよ……」

「そう言われましても。僕はそのゲームやったことありませんし」

無論、嘘だ。

マルスが今やっているトランプゲームなら、負けたことがないほど強い。

だが面白いから黙っておこう。

「い・い・の。マルスは俺の相手だけしてれば。俺以外いらないでしょ？他の誰にも渡したくないよ……」

レストは時々こういうシーンをわざと作る。

マルスはそのたびにころっとだまされて“熱い友情”の方を連想するのだが、まあどう考えても傍から見れば“禁断の道”方面だろう。“女子”の前に病だれがつく人たちが喜びそうなシチュエーション……なのだが。

「マルスは俺の大事な収入源なんだから」

実際はただの鬼畜である。

そう言いながら巻き上げた金をぱらぱらとめくっていくところが実に鬼畜である。

ぎらりと、マルスの瞳が殺気を帯びてぎらついた。

「俺をただのヘタレだと思ってる痛い目に遭うぜ、レスト」

「まさか。ただのヘタレだなんてこれっぽちも思っていないよ。マルスは究極のヘタレでしょ？」

「………………。今の一言、後悔させてやるよ」

「ふふ…やってみれば。ま、できるわけないんだけどね」

「次の勝負、俺が勝ったらレスト一週間掃除当番な！」

「じゃあ僕が勝ったら、メイド服でも着てもらおうかな。覚悟してよ」

へえ……これは面白いことになった。

レーテは入れたばかりの熱いお茶を傾けながら、興味津々で始まったゲームの行く末を見守る。

だが、勝敗はあっさりとした。

「な、なんでマスターはこんな服持ってたよー!!」

そんな、とんだ言いがかりだ。レーテはむっと口をとがらせて顔を真っ赤にさせるマルスを睨みつける。

自分の都合が悪いからって関係のない人に責任を押しつけるものではないだろう。そう説教しようと思っただけで鋭くした目なのだが……。

「ぶっ……」

あまりにもあまりな格好に、あっさり吹き出してしまふ。

笑いを必死で堪えるレーテの隣ではレストがおなかを抱えながら爆笑していた。

「あははっ！さ、さ、サイコー！もうなんか可愛すぎ！大好きマルス！」

「こんな状況で大好きって言われても全っ然嬉しくねえよっ！」

怒りと羞恥で体を小刻みに震えさせながら、マルスはぴらりとスカートの前端をもちあげた。

ピンクを基調としたミニスカートに、フリルのついた白いエプロン。肌の露出が多い、胸元の大きく開いた……それはまさしく、メイド服だった。

レストはこの頃、日本語が下手になってきているらしい。

可愛い、は違う。いや……ある意味ではものすごく合っているが、本来の意味的には違う。

人は時として、滑稽なものにも「可愛い」という。例えば……ものすごくミスマッチなものにも。

「ま、マスタあ……これちょっと破けそうなんだけど……。つか、息

苦しい……」

熱い胸板に、細い作りの胸の部分が食いこんでいるらしい。マルスが窮屈そうに布を引っ張った。

マルスは無駄にガタイがいいから……メイド服から覗く手足がとんでもないことになっている。たとえるなら、オラウータンが間違つて亀の甲羅に入った様。

びによーんと伸びているそれは、滑稽かわい以外のなんと表現しえよう。

「はい、勝負に負けたので今日はずっとその服でいようね、マルス」
声は優しいが、言っている内容はやはり鬼畜でしかない。
あまりにも重い罰ゲームに、マルスの顔が泣きそうに歪んだ。
その時。

「れいてえっ！」

「ふあっ……！」

突然何かに後ろから首を絞められて、レーテは珍しく奇妙な叫びをあげる。いや……正確に言えば抱きつかれたのだろうが、あまりにも唐突すぎたため、頭はそうとは認識しなかった。

反射的に相手を投げ飛ばそうと、手が後ろへと回る。

しかし、相手の頭上あたりに伸ばした手が掴んだものは意外なものだった。

もふっ

「へ？」

妙に懐かしいような、この感触。

昔よく触りつくしていたこれは……。

「る、ルア？」

「れ、れ、れいてええつつっ！あ、ありますが…ありますが……」

かつて相手から絆を断ち切り、それ以来慣れ合うことを禁じていた、友の名前を恐る恐る呼ぶ。

久しぶりに口に出す発音に、レーテは戸惑いを覚えた。

あれほど自己を律し、自分やイオに拳銃を向けていたルアが……今ここで、自分の首に抱きつき名前を呼んでいる。

笑ってもらえるとは思わなかった。

どこかで幸せになってくれれば……自分のそばじゃなくてもいいから、幸せそうに笑ってくれれば、それでいいと願っていたのだ。

だけどまさか……こうやって泣きつかれるなんて、想像もしなかった。

「お、落ち着いて下さいルア！泣かないで下さいってば！」

ぼろぼろと涙をこぼし続けるルアの背中をさすりながら、なんとか宥めようとする。感情を表に出しがちなルアだが、ここまで泣かれるというのも久しぶりだった。

初めてルアが泣くシーンを見たマルスとレストにはさらに衝撃的だったらしく、カチンと、目に見えてかたまっていく。

本来敵である帽子屋が、泣いている白ウサギを慰めている……これはどういいう状況だろう。

レストよりも早く、マルスの方が我に返った。

自分が“帽子屋”側の人間だったことを思い出し、レーテが止めるのを聞かずに臨戦態勢を取る。

「おい！マスターから離れる白ウサギ！」

「マルス！ルアを攻撃することは僕が許しませんよ！」

「でもマスター、そいつは敵だぜ？……っつてうおい白ウサギ！はなれろっつてんだろっが！」

マルスが威嚇するように唸ったのを聞いて、ルアはようやくレーテのシャツから顔を放してそちらを向いた。

ようやく戦闘が始まるのかと思うとぞくぞくする……。マルスの口元に歪んだ笑いが、そう告げている。

冗談じゃない。せつかく絆を取り戻せそうな状況にある友達を殺させてなるものか。

レーテは鋭く目を細めて、マルスを一喝しようと口を開いた。だが、状況は想像もしない道を選ぶ。

「いつ、いやあああっ！き、気持ち悪い！あいつ気持ち悪い！いつ！」

そう泣きつきながら指差したのはメイド服……を着た、マルス。まあ確かにそうなのだ。端的に言っしまえば、野郎がメイド服なんてキモイ以外の言葉はないのだが…！

誰もが一瞬は思うこと、だが、少なからずマルスは傷ついたらしい。一瞬呆然と口を開いた後、うるうるとその瞳に涙をためていく。

「も、もうお前らなんて大っ嫌いだあぁっ！！！」

「え、ちよ、ま、マルス！待ってよ！」

言わずと知れた捨て言葉を残して泣きながら走っていくマルスと、

それを慌てて追いかけるレスト。

残されたのは、いきなりひどいものを見せられて怯えたように泣き続けるルアと、いまだに状況を測りきれていないレーテだけだった。今日のお茶、ハーブティーはすっかり冷めてしまっている。

ああ、神様……僕に平穩をください。

「にゃほーい！ご機嫌いかが、レーテくん！……………ってルアあつ？！」

「どうしたの、レーテ！……………る、ルア！」

しかしドケチの神畜生がそんなものを無償でくれるはずもなく。

紫の変態と、見知らぬ男同伴のアリスの出現でレーテの苦難はまだまだ続いた。

「ねえ、貴方一体なんていう名前なの？呼びにくいんだけど……………」

「………」
「飼い主さんはなんて呼んでたの？」

「………」
「もしかして、覚えてない？」

「………」
「やっぱり、しゃべれないかあ……………」

私はワンちゃん（仮名）の手を引きながら、暗い夜の森を歩く。下手をすれば本気で迷ってしまいそうだが、帽子屋は昼夜構わずティーパーティーをやっているのです。その灯りですぐわかるのだ。

思わず口からため息が漏れた。先程から、ずっとこの調子だ。彼が喋れるのは「マスター」の一言だけらしく、それ以外は主人の名前はおろか自分の名前すら口に出さなかった。だからといって犬のように吠えたりもしないので、非常に感情が読み取りにくい。

唯一彼の思考がわかるところは、その顔だけだった。

(…やっぱり不安、なのかなあ……)

先程から、彼の犬耳はペタンと垂れて目も俯きがちだ。目に見えて暗い表情をしている彼に、こちらもおんなじかしゃべりがたい雰囲気になってしまう。

重苦しい沈黙に耐えかねて、私が何か明るい話題で口火を切ろうとした、瞬間。

「いつ、いやあああつ！き、気持ち悪い！あいつ気持ち悪いいつ
！」

ちょうど向かっていた方向から高い叫び声が聞こえてきた。

私はびくりと震え、思わず握った手に力を込めてしまう。驚いたのはワンちゃんの方も同じだったらしく、走り出した私に足を纏れさせながらも必死でついてこようとす。

気持ちだけが急いでいく。あの声……なんだかすごく聞きなれたものだった気がするけど、誰だろう。

「どうしたの、レーテ！………る、ルア！」

レーテに相談しに来たつもりが、もう一つの目的の中心人物に思われぬところで遭遇し、私はあんぐりと口を開いた。

“帽子屋”と“チェシヤ猫”をあれだけ敵視していたルアが、レー

テに泣きついている……これはどういう状況だ。
だが、そう思ったのは私だけではないらしい。すぐ斜め上から、呆然としたつぶやきが聞こえる。

「なにこれ、どういう状況？ “愛妻”^{ルア}が“愛人”^{レーテ}にまさかの不倫疑惑……？ “夫”^{おれ}の立場はどうなるんだよ」

「む、紫の異物！ あ、じゃなくてイオ！ あんたどっから出てきたこの排気ガス！」

「あれ、アリスもいるし。っていつか何それ。俺初っ端からなんでこんなひどい扱いなの。……誰？」

3メートルくらい離れた木の枝にしゃがんでいたイオは、見下すように私の隣で息を切らしているワンちゃんを睨みつける。

対して、こちらに気づいたららしいルアの反応はイオとは全く逆だった。

怯えたような色を瞳に浮かべ、レーテの後ろにそそくさと隠れる。

なんていうか……こうしてみると、このストーカーも可愛いもんね。「ど、どうして追ってきたりしたんですか……！」

「いや……追ってきたんじゃないけどね。まあいいわ、ついでに言っとくけど！ これは全くの誤解だから！ わ、私はほんと……なんともなっていないから！」

なんでこの私がこんな恥ずかしい話をしなきゃなんないんだ……！ 私は顔を真っ赤にさせながら、ルアを説得しようと試みた。

その剣幕にルアの瞳はぐらりと揺らいたが、やはりまだ信じきれないらしい。レーテの背後から出たものも私からは距離をとろうとしている。

「だって、アリスあの状況はどう説明するんですか？ あ、あんなは

したない恰好で…っ」

はしたないって…あの寝巻きはてめえが選んだんだろうが。

「だから、あのね…実は昨夜、犬を拾っちゃって…冷えてたからそれを抱いて寝たのよ。それが今朝になって人間化して…」

「へえ、人間化！ま、よくあることだよー」

ねえよ、普通は。

私は能天気な声で口をはさんでくるイオをぎろりと睨みつけながら、まだ疑いがとれないルアに一步近づいた。

ルアは一瞬びくりと体を震わせたが、今度は逃げようとはしない。

「ほんとに…何も無いんですね？」

「何も無いってば」

「男と寝たりなんてことは…」

「し、してないわよっ、馬鹿！」

「じゃあ、キスとかも…」

「してないってば！な、何度言わせる気?! 私は何も変なことは…
…っ」

「よ、よかったあ…」

してない。そう締めくくる前にルアが地面にへたり込んだ。そのまま、安堵の息を深く深く吐く。

彼の身体が細かく震えているのに気づいた私は、ワンちゃんの手を放して彼のもとへと駆け寄った。小さく揺れる肩を宥めるようにさする。

「ぼ、僕、アリスの横に裸体の男がいたのを見て…ど、どうしたら

いいか分からなくなつて……」

「うん、とりあえず生々しい表現はやめようか、君」

「僕の知らないアリスの喘ぐ姿とかも見てるのかと思うと、すっごく悔しくて、取りみだしちゃつて……」

「だから生々しい表現はやめようかボク！」

「アリスの「ぎゃあああああつっつ」とかも触つてるのかと思うと……」

「てめえいい加減人の話聞けよ！！」

何とか叫び声で危ないところはかき消したが……この野郎、聞いちやいねえ。

私はルアの頭をガコツとしばきながら、憤然と立ち上がった。

付き合いきれない。なんなんだこのウサギは。さっきまでの殊勝な態度はどうした！

しかし残念ながら、ルアから離れることは叶わなかった。後ろから突然、ルアよりも少し熱い腕に抱きしめられる。

いきなり抱きつかれた私は相手の策略のまま、バランスを崩して抵抗する余裕をなくした。耳元にかすかな息がかかる。

「な……っ！！」

「何を見たのか知らないけどさあ、貴方も馬鹿だよ、ルア。こんな純情な反応する子が誰かに抱かれたなんて思わないでしょ」

「ひゃっ……」

ルアというよりもどちらかというと私に嘔き、後ろから抱きしめたままイオは私の耳たぶを甘噛みした。

敏感な所に与えられた刺激に、ぞくりと熱い何か背筋を這いあがる。私はどんどん熱くなつていく頭をぶんぶん振りながら、必死

でイオを拒絶した。

いくらルアを説得させるためとはいえ、これはやり過ぎだろう。というか…こんな所でこんなことをされている私の立場はどうなる！

「い、イオ！それ以上なんかしたら許さないからね！」

「あは、何もしないよ、何もしない。だから、教えて　あ
の男にどこまで触らせたの？」

後ろで見えないはずなのに、イオの瞳がきらりと妖しく光ったのを感じる。

何もしないとやっているのに……まだ、私の身体を解放してくれない。ふいに、抱きしめていた腕に力がこもった気がして、私は小さく震えた。

身体が熱くなる。顔が赤く　　つて、あれ？

「あ、あんたも信じてないじゃん！だから、私は何も…っ！」

「アリス、俺はね、正直貴方のはじめてだとか……そういうの、ルアみたいに気にする奴^{タチ}じゃないんだ。ただ、覚えといて」

耳元でそつと、私だけに聞こえるように囁く。

こういう時にだけ低い声出すの　　すごく、ズルイ。

「俺は、嫉妬はするよ。それでその嫉妬を受けてもらうのはアリスの身体なんだから……大事にしてね？」

「~~~~~っ?!」

つまり、それは……ぎゃああああつ！や、やめよう！なんだかも
のすごく恥ずかしい方向へ想像が行ってしまった！

うん、これはもういつそ、ただの罰ゲームとして捉えようじゃない
か！風呂掃除1ヶ月とか、雑用1週間だとか、そう言うの！

しかしなんとか健全を保とうとしていた私の想像を、イオは何の躊躇いもなしにぶち壊した。くすくすとおかしそうな笑い声をたてて

「あ、もちろんR指定の方向で」

「やめろおおおおおっ！残酷描写ですね、わかります！」

「え、じゃあもつと細かく説明しよっか？ベッドインの方向で」

「あぎゃあああああっっっ」

「お二人とも、随分と楽しげなご様子で」

カチャリ…

どれだけ叫んでいてもわかるその音に、私はようやく我に返る。

イオもさすがにまずいと思ったのか、私の身体から腕を解くと、私を防壁にするように影に隠れた。……ってこらこらこら。

「る、ルア……もう立ち直ったのね……」

「はい、おかげさまで。僕の勘違いだったんですね、すっごく納得です」

爽やかな笑顔を浮かべながら平気で銃口を向けるルアは…正直怖い。銃口よりもむしろ笑顔が怖い。黒い、黒いよこの子…。

私は頬をひきつらせながら、さりげなく後ろのイオにSOS視線を送る。イオは何となく気付いたらしい顔をした。だが

「やだよ。なんか可愛いじゃん、怒ったルアって」

「どこが可愛いんだ！お前一回眼科行け！」

「ええー……いいじゃん、このままで。ま、いざというときは俺が拉致るから安心してよ」

「どこらへんが安心できんですか!?!」

「こんの 変態がつ!?!」

ああ、イオに助けを求めた私が間違ってたよ、神様。

ルアが笑顔の仮面をかなぐり捨て、イオをギンツと殺気のコもった目で睨みつけた。

引き金を引く……直前。

「 それで? 」

ガチャン

先程の拳銃の音とは比べ物もならないほど重い金属音に、その場の空気が固まった。

ルアは銃口をイオの頭あたりに定めたまま、動こうにも動けなくなっている。

えーっと、レーテさん? そ、それはいわゆる大砲と呼ばれる品物では…?

「僕のお茶会をぶっ壊してくれたツケ、払ってくれるんでしょうねえ? 」

常識人っぽく見えて一番非常識な人が最恐なのだと、私はこの時初めて知ったのだった。

「アリスー、こっちの紫芋ケーキ美味しそうだよ」

「いいえっ、アリス。こちらのショートケーキのほうがいいです。あんな得体のしれないもの食べちゃいけません！」

「……………得体のしれないものって何よ」

「ほらほら、ナス味クッキー！これたぶんおいしいよ」

「たぶんなんて曖昧な！アリス、こちらのヨーグルトは絶品ですよ」

「……………明治ヨーグルトって書いてあるけど」

「あ、じゃあこれは？特製ブドウジュース。喉ごしさっぱり果汁100%だって」

「何で毒見もしてないものを渡すんですか！アリス、この雪見大福は毒見済みですよ」

「……………食べかけなんていけない」

「アリス、またたび！」

「ニンジンです、アリス！生でどうぞ！」

「食えるかボケっ！！」

どんどん両脇に積み上げられていく紫と白の品々……………これを全部食えと？お前らは何だ、私に太ってほしいのか。ポツチャリ系が好みなのか、この野郎。

紫色の方はレパートリーもなくなってくると、今度は食べないものまで突きつけてきた。というかイオさん、それお前しか好きじゃねえよ、絶対。

ルアモルアで、イオのがとても美味しそうなのに対して選品がいまいちだ。なんでこんなに庶民的な食べ物ばっか選んでくるんだ、こいつは。かってに毒見してるし……………。

突然レーテに押し付けられた、お茶会。
皆が一樣一様に楽しんでいるようだが……私は全く楽しくない。
頼むから静かにお茶を飲ませてくれ……。

「まず、たあ……」

ほんの少し弱々しい力で袖をひっぱられて、私は顔をあげた。
犬耳を少したらしめて、ワンちゃんがおずおずと私に紅茶を渡そうと
している。

じーん……。ああ、もうなんか、この子いいなあ……。レストとは
違う方面で滅茶苦茶つばだわ。

「あ、ありがと……。うん、美味しい」

素直に受け取り、一口それをすすった。先程からイオとルアにさん
ざん甘いものを食わされていたから、紅茶は本当に天の恵みに思え
る。

私はお礼を言うと、ワンちゃんにニッコリと微笑みかけた。それを
見た彼もおどおどした顔を破顔させる。

くうー……。っ、可愛い……！やべ、もふもふしたいかも……！

しかしそんな私の邪な考えを、よしとしない人はもちろんいた。

私たちの静かなやり取りをむすつとした顔で見ていたイオが、私の
頭に顎をのせて首に腕を絡ませる。

ちよ、重いんですけど。

「アリスつたらさつきから犬ばつか。猫は嫌い？」

イオの行動に触発され、不機嫌顔のルアが私の右手に手をのせて、

ぎゅっと握ってきた。

てめえ…私に食わせない気が。

「そうですよ、犬なんて何がいいんですか。アリスはウサギですよね？」

正直、犬も猫もウサギも順番が付けられないほど好きだ。だが、その語句の後に“耳”をつけると大きく変わる。

「猫だよね？」

「ウサギですよ」

「……………普通の人間が一番です」

「ああ、じゃあ僕ですか」

今までずっと黙っていたレーテが、柔和な微笑みを向けてくる。けれど、もう騙されないぞ……………どこが常識人だ、どこが。

「喧嘩両成敗に大砲を持ちだす人が普通といえるならね……………」

あれからちゃんと倉庫に戻したらしいが。まだショックが抜けきらない。

レーテははぐらかすように笑うと、不意にワンちゃんの方へ視線を戻した。今まで何も聞こうとしなかったが、やはり気になっていたらしい。

そうだ……………もとはといえば、ワンちゃんのことを聞くためにここに来たんだっけ。

すっかり忘れてた…。

「この犬、名前はなんていうんです？」

「それが……しゃべれないのよ。だから一応ワンちゃんって呼んでんだけど」

「……いくらなんでもその名前は可哀そうでしょう。もう一回決め直しましょう、どうせだから」

レーテはパンパンと手を叩き、お茶会をいったん中断する。

暇を持って余していたらしいルアとイオは大人しくそれに従い、私に突きつけようとしていた食べ物を書いた。

「じゃあ何か、この子の名前はありますか？」

「こんな犬、マユゲでいいんじゃない？」

「太っちまえと言うことで、メタボでいいでしょう」

……………「うら」

若干……どころかもろ僻みが入った意見は、レーテにもちろん笑顔で却下される。しかしこの二人の根性はすごかった。矢継ぎ早に言うってくる。

「じゃ、王道にポチで」

「普通すぎます。コロで」

「それはハムスターだよ。チビで」

「でかいですよ。デカで」

「刑事じゃん。カメで」

「動物違っじゃないですか。メリットで」

「シャンプーじゃん。トコロテンで」

「食べ物じゃないですか。……あ」

「……………あ」

「“ん”、ついちゃいましたね」

うおい。いつからしりとりになりやがったこのヤロー。

私は呆れたように溜息をつく、助けを求めるようにレーテの方を見た。
眉間のしわを悩ましげにもんでいたレーテは、私の視線に気づいたらしく優しげな笑みを浮かべる。

「大丈夫です、もうすぐ何もかも終わりますから」

「え……」

それ、どういうこと？

そう私が聞く前に、事は起こった。イオとルアの会話を心配そうな顔で見っていたワンちゃんが、突然耳をピンとたたせて顔をあげる。同時に、イオとルアの耳もピンとたった。

……面白いわね。

「ああ、来たようですね」

レーテの満足そうな声の、一拍後にワンちゃんが弾かれたように立ち上がった。

パアアツと今までの不安そうな表情が一転して花が咲いたような笑顔を浮かべる。私は一瞬それに見惚れて、走り出す彼を止めることができなかった。

ああ……手元に居た和み要員が消えていく……。

そのことに一抹の寂しさを確かに覚えながらも、森の木々をかき分けて走ってきた女性に抱きつくワンちゃんを圧倒された気分で見ている。

私よりも背丈は小さいだろう、可愛らしい女性……あれが、ワンちゃんの飼い主なのか。うん、お似合いだ。

「マスター！」

「五郎！」

.....「う、うん.....」
いや、何も言うまい。ネーミングセンスが最低だとか、明らかに本人と合っていないだとか、何も考えずにパツと思ひ浮かんだのをつけたらどうか、言つてはいけない。
うん、だってこれは感動の再会シーンなんだから。ひしつと抱きしめ合っている涙の場面なんだから。
それをぶち壊すKYはここにはいないはず.....がなかった。

「すごいですね、どうやったらあんな嫌がらせみたいなお名前をつけられるのか」

「うん、ちよつと俺尊敬した。あれはないよね」

「ちよつと！身も蓋もないこと言わないの！」

明らかに飼い主に聞こえるような声で呟いたルアとイオの顔面に拳を食らわせる。

うん、いい感触。ようやくうるさいの二匹が黙ったところで、“マスター”とワンちゃんの再会シーンが終わった。

ぴったりと、まるで恋人にするように寄り添っている。ワンちゃんには幸せそうな顔で笑いながら、私の方を向き、ありがとうというように小さく頭を下げた。

飼い主もこちらに気づき、涙でぬれた頬を赤く染めながら恭しくお辞儀をする。

「本当にありがとうございます.....。帽子屋さんから連絡がなければ、私心配で死んでしまふところでした.....」

「いえいえ、首輪に番号が書いてあったから僕はそれを通告しただけですよ」

っていつの間に……。

私たちがくだらない口げんかをしている間に迷子の犬がいると連絡したらしい。そこで飼い犬を探していた飼い主が一名いたので、来てもらった。

レーテは彼らが手を繋いで帰った後に事細かに話す。

「まったく、ようやくこれで平和にお茶を飲めますよ」

改めて……というかほとんど初めて、レーテに感心した。

まあ、犬のいる生活も楽しいと言っちゃあ楽しかったけれど……。
というか、ワンちゃんの雰囲気に滅茶苦茶和んだけど。是非一家に一匹ほしいけど。

「アリス、ほらやっぱこっちのブルーベリーパフェが美味しいって」
「絶対こちらの綿飴の方が美味しいです！」

……とりあえずは猫とウサギがいるから十分か。

f i n . . .

「はい、すっかり俺がいじられキャラになってる件についてー」

「はい、やたらと僕が叫んで声帯ぶっ壊してる件について」

「はい、私の体重が5キロ増えた件について」

「はい、俺の名前が一文も出なかつた件について」

はい、いろいろと理由付けて作者をぶん殴りたい衝動は理解するけど、とりあえず我慢しよう。

バカ作者の作るネタに突っ込みをしてたら日が暮れるからね……
…こらそこっ！バズーカ持ち出し禁止！

「ちっ……」

舌打ちしないの、アリス。

いや、わかるけどね。ぶっ放したいのはわかるけどね。とりあえず落ち着いてつたら。

つたく……話が進みにくいなあ。ほら、バズーカもちゃんとして。物騒なのは口だけでいいよ。

「ねずみちゃんさあ……貴方なんでそんなにピリピリとしてんの
ピリピリなんてしてないよ、イオさん。

ただね、もんのすぐムカつくんだ。せっかく……せっかくマルスがメイド服を着てくれたのに、あれしかからかえないなんて！何であんなところで切るんだよ……！

「そりゃあ、あれ以上やったらマルスに黒歴史が残るからだろ」

「でも私も見てみたかったわ、マルスのメイド服………ぶっ……」

ぎゃあああああっ！き、汚い！アリス、鼻血鼻血！

ちよ、カメラにかかっているし！

「その瞬間、視界が鮮やかな紅あかに染まった………的あかな？」

鼻血で、でしょ！イオさん、ふざけてないでティッシュティッシュ！
え、ていうかアリス本当に大丈夫？！血だまりができてんだけど……

…。
…って、何かメラまだ回してんの！今それどころじゃないでしょ、
ヒロインの死亡フラグがたってるよ！
ほら、早く3人とも挨拶して！

「い、いいんですかねえ……こんな終わり方で」
「グダグダなのは一部始終同じでしょ。じゃあ、こっからは引き続き登場人物紹介を楽しんでねー」
「ちなみにギャグは一切ないからな。それじゃ、えーっと……また
な」

おまけ 登場人物紹介

【アリス (Alice*)】
?カード：アリス (Alice) ?年齢：16歳 ?身長：162cm ?容姿：髪は茶混じりの黒で、セミロング。瞳は日本人特有の赤っぽい黒 ?武器：右ストレート等、格闘技?一人称：私?
属性：ツンデレ&弱シヨタコン?強さ：2 ?職業：高校生
?備考：4歳のころに祖母を亡くし、翌年親が離婚する。母親には虐待され、クラスメイトからは虐められることに。そのせいで、性格が少々歪んでいる。白ウサギにWonderlandへつれてこられる。口がかなり悪い。この世界に来てからさらに悪化した模様よく叫ぶ。“歪み”は……?】

【アヤメ (Iris*)】

処刑待ち処「黒の塔」の最上階、忘れられた部屋に囚われている少女。白い部屋に鎖で繋がれたまま、ピクリとも動かない】

【イオ(Ino*)】

?カード：チエシヤ猫 (The Cheshire Cat)

?年齢：19歳 ?身長：178cm ?容姿：髪は目に痛いシヨ

ツキングピンクで、ツンツンとした短髪。紫の猫耳と長い尻尾を持

ち、瞳は金色 ?武器：ナイフ等、暗器?一人称：俺?属性：変態

&DS?強さ：9 ?職業：医者

?備考：夜になると表面化する、チエシヤ猫の「陽」の人格。昼も意識を起こして、様子を見守ることが可能。8歳のころに誕生。10歳まで母親に虐待されていた。母親が完全に狂ったことがきっかけで母を殺す。そのことで、ロキに対して罪悪感を抱き続ける。自他共に認める変態。存在がR指定。言っていることはかなりSっぽい、いじられることも多々ある。本人曰く、「男でも一応平気」らしい、性的な意味で。“歪み”は、二重人格。施設出身】

【ロキ(Loki*)】

?イオと同じ ?容姿：髪は艶やかな黒で、ツンツンとした短

髪。黒の猫耳と長い尻尾を持ち、瞳は黒 ?武器：拳銃?一人称：

俺?属性：ツンデレ&苦勞性&いじられキャラ?強さ：7 ?職業：

ガラス細工作り

?備考：朝になると表面化する、チエシヤ猫の「陰」の性格。イオが出た瞬間に意識は闇へと墮ちる。もともとはロキ一人だったが、イオが後から誕生。母を殺したイオを、怨んでいる……?父は8歳のころ亡き者に。常識はかなりあるが、人殺しはする。よく昼寝をしているが、そこまで好きわけではない。すぐに赤くなるのが特徴。よく叫ぶ。“歪み”は二重人格。施設出身】

【ルア(Lure*)】

?カード：白ウサギ(The White Rabbit) ?年
齢：19歳 ?身長：173cm ?容姿：髪はサラサラの漆黒で、
肩につく。その上に白いウサ耳がある。瞳は薄い空色 ?武器：拳
銃?一人称：僕、私?属性：腹黒&アリス専属ストーカー&心配性
?強さ：7 ?職業：女王補佐官

?備考：レーテ、イオとは10歳からの付き合い。7歳のころ、事
故で両親を亡くす。12歳から文官としてフレイムに仕える。基本
的には従順だが、アリスのこととなると盲目的になる。ストーカー
にも時たまなるので注意。フレイムには冷たく接するが、本当は誰
よりも気にかけている。いつも敬語口調だが、相手によって口調が
かなり変わる。よく叫ぶ。“歪み”は黒い髪と空色の瞳。施設出身】

【フレイム(Flame*)

?カード：女王(The Queen) ?年齢：15歳 ?
身長：165cm ?容姿：髪は赤色で短い。瞳も同じ赤 ?武器：
鉞?一人称：僕、私?属性：俺様&冷酷無慈悲&仕事馬鹿?強さ：
9 ?職業：女王

?備考：10歳のころ兄妹が全員死亡。一人だけ殺し合いで生き
残る。その後、前女王である母親も自ら毒殺する。アリスとルア以
外は基本的にカード名で呼ぶ。帽子屋、チェシャ猫とは敵同士。双
子にはかなり優しく接するが、その実ただの駒にしか見てない。補
佐のルアにはただならぬ執着を見せる。アヤマと面識があるようだ
が……?“アリス”を疎ましく思う唯一の人間。“歪み”は男性】

【レーテ(Lethe*)

?カード：帽子屋(The Hatter) ?年齢：20歳
?身長：175cm ?容姿：髪、瞳ともに黒。常に長いシルクハ
ットをかぶっている ?武器：銃&暗器?一人称：僕?属性：隠れ
DS?強さ：5 ?職業：商人

?備考：お茶会仲間(帽子屋・三月ウサギ・眠りネズミ)の筆頭。

17歳の頃、レイズと恋人関係に。浮気をされていると知りながらも、彼女を愛す。レイズをイオに殺され、一時期彼をものすごく嫌う“フリ”をして遠ざけた。今は友好関係に。基本的に誰にでも優しく敬語口調だが、行動はかなり過激。人は殺さない主義。時所構わずお茶会を開く習慣がある。細かい事は得意だが料理は苦手、掃除は得意だが整理整頓は苦手といちいちつかめない男。“歪み”は常識人。施設出身】

【レイズ(Lazy*)

?カード：伯爵夫人 (The Duchess) ?年齢：23
歳享年 ?身長：160cm ?容姿：黒髪は流れるような長いストリート。瞳は深紅 ?武器：なし?一人称：私?属性：清純に見せて実は淫乱?強さ：1 ?職業：娼婦
?備考：財産目当てでレーテと結婚しようとする。それを知ったイオに殺される。意識が途切れる最期、彼女が思ったことは……?
“歪み”は淫乱売女】

【マルス(Mars*)

?カード：三月ウサギ (The March Hare) ?年齢：16歳 ?身長：179cm ?容姿：金に近い茶色の髪と瞳こげ茶色のウサ耳を持つ ?武器：鉤爪。直接攻撃?一人称：俺?
属性：鈍感&天然&おバカ?強さ：(レストとセットで)10 ?
職業：外出好きのニート
?備考：帽子屋を「マスター」、アリスを「嬢ちゃん」と呼ぶ。レストとは12歳の時からの親友。11歳の時に両親を事故で亡くす。始終レストと一緒にいて、時々二人で探検に出かける。が、大抵こいつの方向音痴のせいで迷子になる。かなりの老け顔だが、精神年齢は8歳児以下。レーテにちょっかいをかけるイオが大嫌い。“歪み”は猫舌】

【レスト (Rest*)】

?カード：眠りネズミ (The Dormouse) ?年齢：16歳 ?身長：161cm ?容姿：色素の薄い茶色の髪に瞳。クリーム色のネズミ耳を持つ。細身の伊達メガネをかけている ?武器：拳銃。援護攻撃?一人称：俺、僕?属性：シヨタ&鬼畜?強さ：(マルスとセツトで)10 ?職業：メイク師

?備考：帽子屋を「マスター」と呼ぶ。可愛らしい容姿から、女性に間違えられることも多い。寝起きが悪く、無理に起こされると性格が変わる。自分の容姿を十分把握しているが、実は「可愛い」といわれるのが何よりも嫌い。しかしそれを利用して人に甘えることも多々ある。マルスに対しては相当鬼畜な発言をするが、その実彼に依存している。「歪み」は昼夜逆転】

【トウアイドル・ダム (Tweedledum*)】

?カード：門番 (Tweedledum) ?年齢：15歳 ?身長：185cm ?容姿：色素の薄い赤髪に、新緑色の瞳。デイーと全く同じ顔 ?武器：毒薬、トラップ等様々。仕留めに回ることが多い?一人称：俺?属性：似非ツンデレ?強さ：(ディーとセツトで)8 ?職業：薬剤師

?備考：双子の兄。一人称が「俺」で、口調が荒々しい。どちらかというと理解力重視の理系が得意。アリスを「姫さま」、イオを「先輩」と呼ぶ。その他はカード名で呼んだり適当なあだ名で呼んだりする。よく人に懐くが、極度の飽き性。フレイムが大好きで、フレイムに気に入られているルアを毛嫌いする。ディーに依存している。「歪み」は……?施設出身】

【トウアイドル・ディー (Tweedledee*)】

?カード：門番 (Tweedledee) ?年齢：15歳 ?身長：185cm ?容姿：色素の薄い赤髪に、新緑色の瞳。ダムと全く同じ顔 ?武器：毒薬、トラップ等様々。援護に回ることが多

い？一人称：僕？属性：病みすぎたヤンデレ？強さ：（ダムとセツトで）8？職業：薬剤師

？備考：双子の弟。一人称が「僕」で、口調が恭しい。どちらかというと暗記力重視の文系が得意。アリスを「姫さま」、イオを「先輩」と呼ぶ。その他はカード名で呼んだり適当なあだ名で呼んだりする。よく人に懐くが、極度の飽き性。フレイムが大好きで、フレイムに気に入られているルアを毛嫌いする。ダムに依存している。

“歪み”は……？施設出身】

ぎゃあああああつ！し、×切遅れてすみません！なんということ
を……！作者として恥ずかしいです……！

昨夜は2時まで頑張り、本日は今までずっとやっていたのですが…
…さすがに後半になるにつれてグダグダ感が目立つようになりまし
たね……申し訳ありません……。

しかしこれでようやく登場人物がしつかりと出揃った…。

この後、過去編になるにつれフレーム様のご兄弟の名前が出てくる
かもしれないが（兄妹母親、全員決めてますが…なるべく出し
たくありません）……覚える必要は全くありません。ただの称号と
して認識してくれば十分だと思います。

と、言うことで。覚えるのはこの12名だけでOKです！そのうち
レイズちゃんはすでに享年がついてますが……あと一度だけ使いま
す。

それにしても……なんでこの順番で登場人物紹介したのでしょうか。
これには一応わけがあります。企業秘密なのでばらせませんが……
まあ、あっさりわかっちゃうかもしれませんが。

さて、それではリクの説明行きます！

【ナナ様リク】

猫、ウサギ、犬、対決という事で、迷える子犬、をお茶会場に連れ
て来たアリスを嫉妬心に燃えるイオとルアが取り合う、このこと
で。

私を書いたのはまんまですね。これはもう、ナナ様のアイデアが
素晴らしかったのだと切実に思います。ナナ様、ありがとうございました！

なんだかルアのキャラが崩壊気味でしたが……基本的にはいじられキャラなので、あんな感じで。勘違いしたルアを書いてみました。イオは今回R指定するしかない……いや、まあいつもこんな感じだけど、この変態は。どちらかというと言葉攻めでしたね……。嫉妬するイオを書いて見た……つもりでした。実際はただのセクハラです。犬というと、ロキが一番キャラ的に合っている気がするのは私だけでしょうか……。

五郎ちゃん（笑うしかない……）は一応おどおどしたふうに書きました。ちなみに飼い主のネーミングセンスの悪さは私譲りですよ（、
、）

さらに言う途中で出てきた「チビ」「コロ」「デカ」は今亡き私の金魚たちの名前です。ネイムド・バイ・ミー！……もう色々と終わってますね。

あ、さらにさらに余談ですが、「チビ」の後に「チビ2」という金魚も飼いました。もはや名前じゃありませんね、はい。

それでは、いつも読んで下さる読者様方に心からの感謝を！

限界まで満ちた月が昇る夜間に、女の慟哭なげきが響き渡った。

「う出産…おめでとうございます…！」

周りでわきあがる歓声。乳母の何人が口々に賛辞や祝福の言葉を投げかける。

ベッドに身を横たえる女はそれを意識の隅で聞きながら苦しげに呻き声をあげた。先程の痛みが余韻を伴って下半身を襲ってくる。

ああ…

唇から洩れた嘆息は、達成感からか、罪悪感からか。喜びからか、背徳からか。

ポロリと、一筋の涙が頬を伝って血を吸いこみ赤くなったシーツにしみ込んだ。

わかっている。

自分が重ねているのは、罪だけなのだ。

自分が産んでいるのは、この子たちの不幸だけなのだ。

それでも…それでも私は、幸せになりたい。

ただ願うのは、自分自身の幸せだけだった。

「おめでとうございます、女王陛下っ」

ひととき大きな祝辞が耳元で聞こえ、女はちらりとそちらを向く。途端、胸の上になんだか妙に柔らかい重石を乗せられ、彼女は危うく出そうになった悲鳴を喉の奥で押し殺した。落とさないようにと、あずけられた2つの白い重石　　否、白いシートにくるまれた二人の赤子をそっと抱きあげる。腕に感じるその重力が、なんだか自分の罪をそのまま具現化しているようで泣きたくなった。

一組の紅蓮のように赤い瞳と、もう一組、どちらかというと薄い赤の瞳がこちらを不思議そうに見上げてくる。何で自分の産む子供はこうも……ことごとく赤い瞳をしているのだろう。

ああ、でも答えなんて求めてはいない。

わかってる、わかってるんだ。

これは、罪の色。

「双子ですよつ、ええつと、こちらが男の子でこちらは女の子です」

先程赤子を手渡してきた乳母が興奮しがちに話しかけてくる。

どうやら濃い目の色をしたほうが男らしい。

女は小さくうなずくとかすれた声で告げた。

最後の罪の結晶となりうるだろう、二つの命の名を。

「ブレイズ……そして、フレーム　　彼らを正式に“女王候補者”に認定する……っ！」

罪の実を口にした小鳥が、悲しげな断末魔を発した

……

「まったく……痛いつたらありやしません……」

どさりと自らの身を白いベッドに横たえながら、ルアは包帯でぐるぐるにまかれた右手を見た。

何回も取りかえているのだが、30分としないうちに赤の色が白を染めていく。いくら獣人といえど、完治までは3日以上かかるだろう……。

それまでこの壮絶な痛みと闘わなければならぬかと思うと、気が重かった。

しかも怪我を負った直後で銃を握ったので、傷が多少開いてしまっている。

ま、その件に関しては反省する気は全くないのだが。

『それは俺の愛人の礼。死んでたらもつと痛い目にあつてたかもね』

アリスを連れ去る前に残された言葉が、脳裏に浮かびあがっては消

える。

あの時同時に、イオはルアに向かって小型ナイフを投げつけてきた。刃渡りが10センチにも満たない、それこそ本当に飛び道具用のナイフが、銃を握りしめていた方の甲に突き刺さった時のことを思い出し、痛そうに顔をしかめる。

自分はアリスのことで激昂していた。

隙だったらいくらでも見つかったというのに……。

「どうして、僕の心臓を狙わなかったんですか……？」

認めるのは癪だが、自分なんかとは桁違いに強い彼にはいとも容易いことだったろう。

なのに彼はナイフの軌道をそらして、手を封じただけに終わった。

ルアは眺めていた手を自分の口までもっていき、薬臭いその布を少しだけ噛みしめる。

ほんのちよつと、苦かった。

（愛人の　　レーテの、復讐ですか……貴方らしくもない……）

復讐、なんて。

そんな口実を付け加えなくとも、自分を殺す理由なんていくらでもあるのに。

貴方は　　僕を殺してくれても構わなかったのに……。

「……いいんです、貴方なら。僕は、貴方の“世話役”でありながら、貴方の手を振りほどいてしまいました……。友達でありながら、たくさん傷つけてしまいました……」

幼いころの、約束。果たして彼は、覚えているだろうか。

レーテと二人で世話役を申し出て……あの頃はひたすらイオが可愛らしくて、よく彼とイオを取り合った。じゃれあって流血沙汰まで起こしたことがある。

……まあ遅かれ早かれ子供というものはすぐにひねくれてしまうのだが。自分も、イオも。唯一変わらなかつたのがレーテくらいだ。彼が今の性格になる前に、交わした幼い約束。

三人で笑いあって、何気なく漏らした誓いの言葉。

……決して叶うことのない、儚き願い。

『ずっと一緒にいいですね』

覚えて、いるだろうか……。

自ら取りつけて、自ら破った身勝手な約束。あの時は二人とも「大げさな」と笑っていたが……もしかしたら、自分はこうなることが分かっていたのかもしれない。

いつかこうやって、殺し合い憎み合い傷つけ合い……はなれていく。わかつていた、わかつていたからこそ、僕は……。

「約束が、欲しかったんです」

ああ、傷が疼く。

刺されたわけでもないのに、心臓ココロがズキンと痛んだ

……

「はあ……この業務の山、なんとかなんないのかい、ルア」

隣でうんざりとしたようにフレイルムが背もたれに体重をかけた。ぎしつとわずかな音を立てて豪華な椅子が軋む。

本当は彼自身机に突っ伏したいのだろうが、その机が紙に埋もれていてできないのだろう。

そして自分とフレイルムの間にも、大きなそびえたつ白い壁

否、大量の紙の山。

正直こちらにももう飽き飽きしてきた……。

だがそんなことはおくびにも出さずに、ルアはカチャリとかけていたメガネを整えた。

「つべこべ言わずにさっさと終わらせて下さい」

なるべく冷徹に見えるよう仕事中にだけかけるメガネだったが、予想以上に効果があるらしい。

フレイルムはつまらなそうに鼻を鳴らしただけで、再び書類へと目を走らせる。

本当は……もっと、どろどろに甘やかして、優しい言葉をかけてやってもいい。

頭をなでて、好きな時に構ってやって、めんどくさい仕事は全部自分が受けて、身体を張って守ってやったっていい。

そうしたくないわけじゃない。それどころか、むしろそうしてやりたいのは山々なのだ。

だが。

この仕事の量を全部引き受けられるほどの能力は、正直ない。

神の落し子といわれさんざん天才と崇められてきた彼だったが……どんな人間にも限度は存在する。

「部屋中紙紙紙紙……っ！あー、もうやだ！」

そう、書類の山、山、山……それが隣の部屋にまで続くという大惨事が起こっていた。

山といっても、10センチ20センチのものではない。大体フレイルムが腕を手一杯伸ばしてさらに背伸びした時の全長……ぐらいの高さはあるだろうか。

こんなの一人でやったらぼっきりと心が折れると思う。

「うー……気分転換したい……首斬りたい……」

「何で気分転換イコール首きりになるんですか。おかしいでしょ貴方それ」

コツコツコツ……規則正しく響く、ペン先の音。時々苛立ったように強く打ったり、ぐるぐると円を書いたりした。

その音だけで、隣にいる彼がどんな顔をしてどんなことを考えているかわかる。 それぐらいの年月を、共に過ごした。

たとえ、心は伴ってはいなくても……いつからか、離れてしまっ
ていても。

ルアは書類にサインをしながら、まぶたをそつと閉じる。

音が、聞こえる。不規則に、時折止まって、やがてせわしく動き出す。

ああ……今、漢字を度忘れしていたな。本当に、頭はいいくせに詰まらないところで躓くところは、今も昔も同じらしい。

「……何笑ってるんだい。気持ち悪い」

「いえ……今度はどんな字を忘れていたんです？僕がわかる範囲ならお教えできますよ」

純粋な気持ちで言ったのに、フレイムは不機嫌そうな色をさらに深めて自分から目をそらす。厭味ったらしく聞こえたのかもしれない。だがこれが素なのだから仕方ないだろう。

「要らない。もう思い出した」

すげなくそう返され、ルアが次に用意していた優しい言葉は行き先を失い彷徨う。

まったく……昔はもっと素直でいてくれたのに。いつの間にか彼の性格は目に見えて歪み、側近のルアにすら本心を出さなくなった。いつの間にか？ 違う。始まりははっきりしていたはずだ。

誰よりも気高く優しい彼が、何かにとり憑かれたように甲高い哄笑をあげた日。あまりにも多くのものを失いすぎた彼が、最後の涙を落した日。

「本当に、変わってしまいましたね」

ルアは目を通し終えた書類をフレイムへと流しながらどこか憂いを帯びたため息をついた。

フレイムの方もどさりと束で渡された書類にため息をつく。こちらはあげっそりとした感じだ。

眉のあたりで切りそろえられた赤の髪を乱暴に掻き上げながら、椅子に沈みこむ。そろそろ休憩を与えたほうがいいだろうか。だいぶ集中力が落ちてきているようだ。

すっかり疲れた目を片手で隠しながら、フレイムは深く息をつく。こちらが言わずとも自分の限界をわかっているらしい。優しく「少し休みましようか」というと、素直にうなずいた。

「変わった……ねえ……」

「フレイル様？」

「大抵の人は、賢明な“女王”になったと口を揃えて言うんだ。ふふ……まあ、昔の僕が異常なくらい甘ちゃんだったのが原因だろうけどね」

持っていた万年筆を宙に投げては二本の指で受け止める。そんな器用なことをしながら、フレイルは自嘲するような笑みを浮かべた。言葉だけ聞けば、この笑みが“過去の”^{まえ}自分に向けられたものだと思っただろう。だけど、瞳を見ればわかる。

彼が自ら蔑んでいるのは、“現在の”^{いま}自分だ。

少し強く投げられた万年筆が、緩やかな弧を描いて自分の机に落ちた。ほんの少し、赤いインクが白い紙に血のような跡を残す。

赤く染められた白の部屋。
唐突に脳裏に浮かびあがってきた記憶に、ルアは吐き気を伴う眩暈を覚えた。

口元を掌で覆うルアをちらりと盗み見ながら、フレイルはほんの少し顔を俯ける。

「ルアは、どう思う？」

「どういう、意味ですか」

気持ち悪い……。自分が赤を異常に嫌いになったのは、おそらくあの記憶が原因だろう。そして、自分が赤に狂ったように酔いしれることになったのも。

忌々しい、最初の赤の記憶。白を塗りつぶす、赤の色。
ルアは吐き気を口を引き結んでこらえながら、フレイルの髪を見た。目を惹きつける、赤色。消えない、罪の色。

「僕は……どう変わったかな」

炎の瞳と氷の瞳が互いを映しだす。

赤は、温かい色だと誰かに教わった気がする。施設の先生だったか……人の心を温める、優しい色だと。

だけど自分は、これほど悲しみに彩られた瞳を見たことがない。

温かい色だというのなら、何故。彼の心の氷すら融かせないのでしようか。

「少し、愚かになりました」

気付けば口をついていた言葉に、ルアは自分でも驚く。

こんなにきつい言い方をするつもりなどなかったのに……彼に対して冷たくあたってしまったのは、もはや癖になるうとしているのだろうか……。

ルアはすみませんと一言謝って、訂正しようと口を開いた。だが、謝罪よりも一瞬早く、くすりとフレームが小さく笑う。

「まったく　だから君は、手放せない」

愚かだと貶されたのにもかかわらず、楽しそうに……嬉しそうに。

「……おかしいですね。貴方ってMだったんですか？」

「それ以上言つとその首刎ねるよ」

今さつき手放せないと言っていたのに……同じ口でこういうことを言うのだ。まったく、可愛くないっいたらありやしない。

ルアはまだ納得いかないといったふうに首をひねっていたが、フレームの方はさつさと仕事をやり始めた。さすがにそろそろやらないと……やがて仕事が捌けなくなるだろう。

そろそろ同じ作業にも飽きてきたと思いながらも、ルアは書類にしぶしぶ手を伸ばす。
その時。

バタンツ

普段はノックされるはずの扉が何の前兆もなく大きな音を立てて開かれた。あまりに突然のことに、取ろうとしていた書類をすべて床に散乱させてしまう。

「あああつ！しょ、書類が…！何ですか、ノックぐらいするのが礼儀で……………トウアイドル？」

せつかくの努力を水の泡にされて苛立ったルアは、懐に手を入れて拳銃を握る……………しかし、扉の前に立つその姿を見た瞬間、引き金を引く指から力が抜けた。

そこに立っていたのは、身長180以上ある双子の片割れ。急いで駆け付けてきたのか、肩で息をしている。

トウアイドルの門番は、やたらと自分を嫌っていた。何度も背後を狙われたことがある……………そのたびにフレームが笑顔のまま青筋を浮かべ叱っていたが。

どうせ邪魔くさいと思っていた存在だ。消すなら今なのだが……………引き金は、引けなかった。

ポロリ、ポロリとその頬を幾筋もの涙がつつたっている。

自分を嫌っているはずのトウアイドルが……………自分に泣きつくように、駆け寄ってきた。

呆気にとられるルアとフレームの前で、彼はルアの胸のシャツを掴んだ。そのまま、涙で濡れた顔をシャツに押しつけるようにして背を丸める。

自分よりも10センチ以上背の高い男に胸で泣かれるなんて経験、もう二度とないだろう。

「しっ、白ウサギいいっ！」

「お、落ち着いて下さい！一体何が……」

こんなに取り乱すなんて、どうかしてる。いくら精神年齢の低いこの双子にしたって……おかしい。

ふと、嫌な予感が脳裏をかすめた。

こいつら双子は……アリスの捕獲に向かわせたのだ。まさか、アリスの身に何かあったのでは……。

しかし、トウアイドル……ダムの中から発せられた言葉は、予想もしていないようなものだった。

「ひっ、姫さまが

アリスが泣きやまないんだ！」

世界にピシりと、罅^{ひび}が一つ。

どうも、そろそろTrick or Treatの季節ですね！と言つことで、前回のあとがきでお知らせしたのですが、飛ばした方もいらつしやると思いますのでここでも一応……。

ハロウィーン企画として、本日29日からハロウィーンを挟み5日間……11月2日まで、毎日更新をしたいと思います！

まあ、今回はとことん暗いですが……お楽しみいただけたらと思います。

さて、なんだか今回のあとがき……目に見えてテンションが低いですが、申し訳ありません……作者は番外編で元気を使い果たしてしまつたようですorz

おおおお……一生分のネタを注いだ気がする(´・`・´)ゲツツリ……

やはり本編のシリアス雰囲気を壊滅的に破壊するものなので、そういうのが嫌な人は見ない方がいいと思います。

あ、半端なくヤヴァイですから。特にヒロインが一番ぶっ壊れてる……。

でもなんだか需要がすごいんですよね……。なんと、PV数が一日で2700越えと、群を抜いて日別1位になりました(;´・`・´)ありやりや……。

やはり時代はギャグなのでしょうか……。ものすごくギャグセンスナッシングですから、ギャグに移行する気はさらさらありませんけど……(；・`・´)

つて、今回の解説ですよね、すみません。

さて、前章最終話でイオ君が大変なことになってましたが……ここ

でワンクッション置いて次回からその続きとなります。もどかしいかと思いますが、明日頑張つて投稿しますので、ご容赦を！
全勝がチェシヤ猫オンリーだとしたら、今回は白ウサギオンリーだ
と思います。

今まで影の薄かったルア君ですが、今回しゃしゃり出ますよ！

一番最初に書いていた女の話なのですが……随分と昔（7月ぐらい？）に書いて放置したもので、少し今とは文章が違うかもしれませんが。

あれはかなり過去の話です。これからぼちぼちでてくると思う、

の最初の記憶です。

えーっと、それから……次に出てきたやつはちょうど第2章 e p 3
「夜明けの逃走劇」直後のルアの話ですね。

あの話でイオがシュバッとナイフを投げたのを覚えているでしょうか？あれです。

イオの話を先に持ってきたのでかなり前のものに思えますが……実際はそこまで時間はたっておりません。

さて、テンションが低いあまり、真面目なあとがきを書いてしまっ
た……orz

感想を下さつたスミレさま、紫苑さま、本当にありがとうございます！
す！

読者様の声を聞けるというのは、作者にとって至高の喜びです！

はい！これからも頑張っていきたいと思えます！

それでは……。

今回よりページ数がある程度統一したいと思います。

大体5ページ弱〜8ページ強ぐらいです。

詳しくは活動報告をお読みください。

大切なものが、いとも簡単に指からこぼれおちていく。
こんな感覚は、生まれて二度目だった。

一度目は、祖母の時。

昨日まで夜伽話を聞かせてくれて、自分の方が先に寝ていたのに。
なのに、ずるい……今日は、私よりも先に寝てしまった。夜伽話を
聞かせてくれない。せつかく楽しみにしてたのに。
ねえ、早く続きを聞かせてよ……。
私はすでに冷たくなつたしわだらけの祖母の手を、笑顔で包み込む。
優しい祖母だつたらすぐに目を開けて話の続きをしてくれると、残
酷にも無邪気に信じ込んで……待ち続けた。

二度目は、今。

私はぐつたりと重いイオの身体を、必死で抱きしめる。どこかに行
つてしまいそうで怖かった。

祖母の時はあんなに冷たかったのに、イオの身体は異常なほどに熱
い。そのことがかえって心臓を圧迫している。

何も、聞こえない。

隣でディーが何かを私に言っているような気がするが、わからない。
どうやら、城近くにいららしい。見たことのある景色がちらほらと
視界に映っていた。

どうやってここまで来たのだろう。ディーとダムが運んできたのだ
ろうか。それすらも、思い出せない。

まるで、自分だけが違う世界にいるようだ。

白い、白い、何も無い世界。

お願い。私をこんな世界ところに置いていかないで。

「死な、ないで」

ただただ狂ったように同じことを呟きながら、動かない彼の身体を抱きよせて、胸に耳をあてる。

何も聞こえない。何も感じない。

いや……もう自分は既に、狂っているのかもしれないな。

何一つ、自分の意思通りには止まってくれない。涙も、言葉も……押さえつけていた、感情さえも。

「」

何度も、小さく呟いた。

もう遅いと心の奥底ではわかっていながら、何度も、何度も。

狂ってる。離れてから気付き、失ってから告げるなんて、狂ってる。

「だから、お願い……死なないで」

床に落ちた水を掬うことなんて、できないというのに。

「アリスが、泣いてる？」

入ってくるなり縋ってきたダムに、ルアは戸惑ったように聞き返した。

どうしてそれだけで、こんなに取り乱しているのだろう。普段は子供っぽい双子のトウアイドルではあったが、泣くことなど滅多になかった。そもそも彼らは泣かされるほど弱くはない。

彼はダムの背中を優しい手つきで撫でながら、隣のフレイムに視線を投げる。一瞬呆然としていたフレイムだったが、すぐに顔を引き締めると、いつもの冷酷な笑みを顔に張り付けた。

「とりあえず、落ち着きなよ。ダム……の方かな？状況をきちんと報告しないと、僕は動かないよ」

そう言っただけでちらりと見せつけるようにして取り出したのは、携帯用の小型ナイフだ。小さくはあるが、毒が塗りこめられているため殺傷能力は十分ある。

ダムもそれを知っているせいか、自分を脅すフレイムに対しての恐怖がその瞳を塗りつぶした。

乱暴にルアのシャツから手を離すと、ごしごしと目元に残る涙を袖で拭う。

「ご、ごめんなさい……。アリスが一日たっても全然泣きやまなくて……ここまで来るのにもずっと泣いてたんだ！だから俺、すごく不安になって……！」

「ちょっと待って下さい。一日って……朝からこんな夜遅くまでですか？！一体何が……！」

「イオが死んじゃったんだ！」

一瞬、何を言われたか分からなかった。
世界がカチリと音を立てて、止まる。なんて言ったのか聞き返そうにも、身体が動かなかった。

イオが、死んだ？イオが？

死んだ？

気付けば、ルアはフレイムの制止も聞かずに部屋を飛び出していた。どんつとその際にダムにぶつかるが、痛みなんて感じない。ただ、焦燥と不安だけが頭の中を支配する。ダムにアリスの居場所も聞いていないのにどうやって行くんだとか、そんな冷静な判断さえできなかった。

しかしダムにぶつかったことで、走り出した速度がわずかに落ちる。その隙に、フレイムは持っていたナイフをルアに対して投げつけてきた。

ナイフはルアの頬すれすれを通過して、扉に突き刺さる。

ピンッ

弓を張るような奇妙な音に、ルアはようやく我に返った。自分が何者であるかを思い出した途端、がくと膝の力が抜ける。

イオが “チエシヤ猫” が、死んだ？それが本当だとしたら、自分は…… “白ウサギ” は、どうしなきゃいけない？

答えなんてもう、わかりきっている。

嗤うのだ。

「まさか、自分が誰なのかを忘れたわけじゃないよね」

振り返らなくても、その声だけで彼がどんな顔をしているかわかる。

自分は、それほど長く彼のそばにいた。

ああ、怒っているんだろ。氷のような冷たい笑みに顔を歪めながら、あの赤い瞳だけは狂気にぎらついていて。

わかっている。悪いのは、自分だ。間違っているのは、自分だ。狂っているのは彼だとしても。

ルアはドアノブに伸ばしかけていた手をパタンと静かに下し、床をじっと睨みつけるようにして凝視する。後ろで、フレイムの気配が動いた。近づいてきているのか…？

「何も怖がることはないだろう？ “白ウサギ” は “チェシヤ猫” の敵だ。いずれ自分が殺す相手じゃないか」

耳元にかかる生温かい息が、気持ち悪い。

囁く声は、悪魔のものか。天使のものか。それとも “白ウサギ” のものか。

フレイムがすぐ背後から細長い指を伸ばし、ルアの胸ポケットにしまわれている “カード” を取り出した。

所々に細かい傷がついたそれを、見せつけるようにしてほんの少し揺らす。

「君が “白ウサギ” である限り、君は “チェシヤ猫” の死を喜ばなきゃならない。ほら、笑えよ。笑って、よかったですねとも言ってみる。ほら」

もう片方の手が自分の顎にかけられて、存外に強い力で上を向かされた。ルアはほぼ垂直になっている首に痛みを覚えながらも、視界に入ってきた赤の瞳と目を合わせる。

フレイムはやはり、歪な笑みを浮かべていた。何も知らない人がみたら、見惚れてしまうような綺麗な笑顔。だけどこの状況下では、明らかに狂気にまみれた笑顔。

ルアは命令されたとおり、ふわりと悲しみを秘めこんだ笑みをフレ
イムに見せつける。

「フレイム様……」

そつと彼の名前を呼ぶと、真上でルアの顎を上向かせているフレイ
ムが満足げに笑みを深めた。

彼が欲しいのは、自分を裏切らない部下。従順な下僕。
自分のものである、操人形。マリオネット

彼の望むものなら、何でも与えてやりたかった。

殺人も、略奪も、侵略も……彼のためにやっていたと言ってもいい。
彼が泣かないように。彼が笑っていられるように。彼が　　独り
にならないように。

『フレイムを、頼んだぞ』

それは彼女との、最期の約束。
だけど。

「ごめんなさい」

守れそうも、ありません。

ピシリと凍りつくフレイムの目の前で、ルアは素早く体を反転させ
て彼の手から逃れた。胸から拳銃を取り出し、2、3発脅しの意味
を含めてフレイムの足もとを狙い撃ちする。

予想だにしない不意打ちに、さすがのフレイムも怯んで後ろへ下が
った。その隙にルアは踵を返し、扉を蹴り倒すようにして開ける。

「ルアっ！」

部屋を飛び出す寸前、背中を追ってきた声は……今まで聞いたことのないくらい悲しみに満ちたものだった。

「いで」

庭園から小さな掠れ声が聞こえ、ルアの長いウサ耳がピクリと反応した。この声は、まさか……。ルアははやる気持ちを抑え、おい茂る草々を手で掻き分けながら進んだ。足にへばりつく土や雑草が、鬱陶しい。

「死なないで」

また聞こえたその声に、確信に似た何かを覚えながら最後の草を乱暴に横へと押しやった。

「アリス、頼むからもう泣き止んでよ……い、今ダムが白ウサギを呼びに言ってるから、ね？」

先程泣きついてきた声と全く同じ声がすぐ近くで聞こえ、ルアは不審げに眉をひそめるが、すぐにこいつらは双子なのだと思います。あまりにも似すぎているから時々わからなくなってしまうのだ。

草の開けた場所に蹲るようにして“それ”を抱きながら嗚咽をあげ続けるのは、アリス。その姿を見ながらこちらも泣きそうになっているのは、ディーだ。

ルアはからからに乾いた喉で、頬を涙で濡らした少女の名前を呼ん

だ。

ディーの方は弾かれるようにこちらを向いたが、アリスは応えるどころか、こちらに気づいた様子も見えない。

「死な、ないで」

ただただ狂ったように同じことを呟きながら、動かない“それ”の身体を抱きよせて、胸に耳をあてる。

ルアは再度声をかけようとその背中に向けて口を開きかけた、その時。

「
「
……っ?!」

小さい、呟き。だけでも確かに聞こえたそれに、ルアは目を見開いた。

ドクン

心臓が、異常なほど強く鳴る。壊れそうなほど、強く。強く、強く、鳴って。

世界にピシリと、罅ひびが一つ入った。

「白ウサギ！よ、よかった…！アリスが泣きやまないんだ…ほ、僕
どうすれば…！」

安心したように顔を綻ばせるディーに向かって、黙れと言うかわりに銃を一発撃ち込む。

アリスの方を向いたまま狙わずに打っていたので残念ながらかすりもしなかったが、効果は絶大だった。ディーは顔面蒼白になって、

じりじりと後ろへ下がる。本当に、二人でいないと何ひとつできない奴らめ。

「どいて下さい。アリス」

なるべく冷たい声で言い放ち、ルアはアリスの身体をやや乱暴に“それ”から引き剥がした。

もっと抵抗されるかと思ったが、放心状態のアリスはいとも簡単に彼から離れた。いや、そもそも彼から離れたことすら気付いていないのかもしれない。

まるで、何も聞こえていない。何も感じていないよう。

ルアはアリスのかわりに“それ”の横にしゃがみこんだ。

不自然なほど白い頬に、震える指を伸ばす。

冷たかったら　　いつもは熱い彼の頬が、冷たかったらどうしよう。

不吉な考えが脳裏をめぐるが、幸い触れた部分はとても熱かった。ほっと息をつくルアの隣で、アリスはまだ嗚咽をあげ続けていた。

「死なないで」。何度も、何度も……うわごとのように虚ろな声で繰り返す。

馬鹿ですね。こいつが、死ぬはずないでしょう。前見たときはこちらが殺してやりたくなるほど、明るく笑っていたじゃないですか。この僕に、ナイフまで投げつけてきたじゃないですか。

そうです、死ぬはずがない。

約束だって、したんですよ。貴女は知らないでしょうけど。

ずっと一緒……って。

だから、死ぬなんてことないでしょう？

約束、守ってくださいませよね。文句ばかり言いながらも、貴方はちゃんと守ってくださいませもんね。

破ってしまったのは、僕の方ですよね。僕から離れたんですよ。ごめんなさい、何度だって謝ります、謝りますから……。

「目を、開けて下さい」

指先から感じる本当に微かな鼓動。

それだけでは、不安なんです

……

闇の中に、一人。自分すらも、闇に埋もれている。

手を目の前にかざしてみるが、何も見えない。腕を持ち上げているという感覚はあるのに。

このまま、消えてしまうのだろうか。

ぼんやりと、考える。

ここはどこだろう、とか。なぜ自分はこうなったのだろう、とか。そんなことは考えずに。

もしかしたら……これは罰だとかどこかで思っているせいかもしれない

い。
今まで積み重ねてきた罪の、罰だと。だからこんなにも素直に受け入れられるのかも。
助けが欲しくないと言えば、嘘になる。

助けてほしい。タスケテホシイ。

だけど、そのせいでまた誰かが傷つくのを見るくらいだったらいつそののまま、消えていく方がましだ。

自分が消えれば……自分の半身は、どうなるのだろうか。

もともとそうであるように、一つに戻るのか。それとも、一緒に消えてしまうのか。

一緒に消えてほしい、なんて。

思う方が間違っているのはわかっているけれど。

それでもやはりほんの少し思ってしまうのは、闇の中一人という耐えきれない孤独を感じるからかもしれない。それとも単に、自分の弱さ故なのかもしれない。

ああ、やっぱり駄目だな。独りじゃ消えられそうもない……。

自嘲する。

これほど罪深い魂でありながらまだ、生を望んでいる。独りは嫌だと叫んでいる。

光を、待っている。

「ロキ」

俺は、ここにいますよ。

ここには、俺と貴方しかないんだから。

頼むから、俺を早く見つけて……

どうも、もうすぐ午前2時になろうとしています……orz
昨日のうちに投稿できなくてごめんなさい！せめて朝までには終わらせようと努力しました！

夜更かしも11時を過ぎたあたりからだんだんと感覚がなくなってくるんですよ（危険信号）

いつの間にやらハロウィーンですね！皆様あけましておめでとございます！

……ん？あれ？何か違う気がする……ま、いつか。

今回解説は短めに行きます。さすがに目がしょぼしょぼしてきたので……。

何でしょう……ものすごくルア視点というのが書きづらかったです……。イオやロキはそれなりにすらすら書けたんですけどね……やはり特徴のないキャラってことなんでしょうか、ルア君。

それはそうと、今回は時間軸にバラつきはありません。ほぼ同時ですが、まああえてつけるなら 真ん中 ^{ルア} 最初 ^{アリス} 最後（ ） です。フレイム様悪役（ やはりフレイム様はこうでなきゃ物足りない気がします（ ） ） = b

双子は今回ギャグなしですね……っていかぶつちゃけへたれます。男の子はそんなに頻繁に泣くんじゃありません！

……と言いながらも男性陣を泣かせるのが好きな作者でした。

【お知らせ】

詳しくは活動報告の欄にすべて書きましたが、今回からページ数の下限を決めることにしました。

ワードで8ページ……携帯版で言うところ5ページ弱ぐらいになります。とりあえずそこまでは何とか書きます！上限は決まっていますませんが、

大体ページ数は同じくらいに統一されると思っして下さい。

それでは、また明日〜……じゃない、今日でしたね。今日再び投稿
しますorz

自分でハードルを高めてしまったなあ…と、早くも後悔しかけてま
す。眠い……。

で、でも！応援して下さいの方がいる限り私は何でもできる気がする
ので！

ほら、あの屋上から「空も〜と〜べるはず」 「注：死にます
と、とにかく。あと3日頑張りますね！

「数種類の毒を、使いましたね」

ルアは凍りつきそうになる指を必死で動かしながら、ぐったりとしたままのイオの唇を割り顔を近づけ臭いをかぎ取る。

いつも双子が身に纏っている香水の香り……もう一つ、濃厚な花の香り。どちらも直接口の中に入っているわけではなく、肌から染み込んだり匂いとして効果を持つものだった。

おそらく一つだけでは体の痺れや麻痺、かすかな痛みを引き起こすだけだが

数種類のものが混じると話は違ってくる。
毒と毒が反発しあって、どんな反応を起こすのか分からないのだ。

だから安全のためやるなど言っていたのに
馬鹿な双子が
自分の言いつけを守るわけがなかった。

もしアリスまで被害が及んでいたら
その時は、迷いなく彼らの喉笛を噛みちぎっていただろう。

しかしイオが倒れた原因はそれだけじゃない。おそらく、武器に塗りこめられていた毒薬が思いのほか体に会わなかったのだろう。

獣人の弱点は、その敏感な身体だ。これは凶悪な武器にもなりうるが
同時に、もろい城壁ともなる。

ルアは何とかそこまで冷静な判断をすると、まだ腰を抜かしているデイーを睨みつけ、顎をアリスの方へとしゃくった。

本当はアリスの方も自分が運んでやりたいが……さすがに一人で二人の人間を抱えることなど無理だ。

「アリスも毒を吸い込んでいるかもしれませんが、僕の部屋へ運びなさい」

ルアは無言を言わせぬ口調でそういうと、イオの身体を横抱きにして立ちあがった。さすがに自分よりも背の高い男を持ち上げるのは、骨が折れる。

腕にかかる圧力に、思わず横によるけた。

なんとかその場に踏みとどまるが、その様子を呆然と見ていたデイーは、突然我に返ったように瞳に光を取り戻す。

ルアの袖を掴むと、睨むような鋭い眼光を浮かべイオを見た。

「ちよつと待つてよ。そいつもう死んでるんじゃ」

「はい。貴方がた普通の人間にはそうとしか思えないほど脈は弱いですね。仮死状態と大して変わりはありません、非常に危険な状態です。だから、僕が治療をします」

毅然と言い放ちながらも自分の言葉に不安を覚え、イオを抱えあげる腕がわずかに震える。

フレイムの補佐、ということと料理から医療まで幼いころからきつちりしこまれてきたが……フレイム以外に使うことなど、初めてだった。しかも解毒剤の調合だなんて……ハードルが高すぎる。

そう言えば、この双子は腕の良い調合師だったな。

ルアはちらりとデイーの方を見ながら考える。本当は素人の自分がやるよりもこいつらプロに任せる方がいいに決まっている。

だが、フレイムの従順な操人形である双子が自分の言うことを聞いてくれるはずもない。

その考えを確信づけるように、デイーは自分の前に立ちはだかつてきた。

「待てつて！何でそいつを助けるの。このまま死んでくれた方が都合じゃん」

人を助けるのに理由が必要だなんて。

きつとアリスが正気の状態だったら眉をひそめてそう言っただろう。この世界は狂ってる、と。

だが、こればかりはディーの方が正論だ。

チエシヤ猫は、あまりにも手強すぎた。

イオはもちろん、ロキの時にすらまともに張り合って勝てる確率は低い。しかも相手は逃げに徹しているのだから、敵としては嫌な奴だ。

その敵が今、倒れている。普通の“白ウサギ”なら、このまま首を刈り取るだろう。

だけど、そこに自分は私情を挟もうとしているのだ。

ディーが怒るのも無理はない。だが　このまま見殺しにするつもりも、ない。

「どいてください」

「いつ、いやだ!“白ウサギ”なんかに従わない!”

「貴方の相手をしている暇なんかありません。お願いですから、どいて下さい」

「な……なんで……っ、こ、こんなのフレイム様への裏切りだよ……っ

「！」

「」

裏切り。口の中で、そつと呟く。

この男は、一体何を言っているのだろう。馬鹿みたい。

裏切るも何も、ない。

だって、あの人は　。

「貴方があの餓鬼の肩を持つのは勝手です。僕は、あの人のもの
いるつもりはありません」

がさり、と。

すぐ近くで物音がした。そちらの方にわかっていながらも視線を向
けると、案の定フレームとダムが武器をこちらに向けて立っていた。
鉞の刃が、手を伸ばせば触れそうなほど近くに突きつけられている。
その先にあるフレームの顔は、赤い髪に遮られて見えなかった。
自分は今、両手がふさがれている状態だ。それに対して3対1……
勝つか負けるかよりも、あと何秒生きていられるかを気にしたほう
が賢明だろう。

フレームは、たった今の発言を聞いていたのか……。
鉞の柄を持つ手がわずかに震えている。

「その言葉が、どういう意味かわかって言ってるんだね」

髪の間からちらりとのぞいた赤の瞳は涙でぬれていたのに 声
は、嘲るような冷たさを孕んでいる。

いつも、彼はそうだ。感情をさらけ出すこともできずに一人で悩ん
で、一人で決めて 一人で後悔する。
そんなに、自分は信じられなかったのだろうか。

裏切るも何も 貴方は、一度も僕を信じたことなん
てないじゃないですか。

「ルール違反、ですよね」

ルアは鼻先に鉞をつきたてながらも、ふわりと優しく笑った。

昔、フレイムが好きだと言ってくれた笑顔。手を叩きながら「大好き」と笑った日のことを、彼は覚えているだろうか。ぼろり、と。彼の瞳から一粒、涙が耐えきれなくなったようにこぼれた。

ああ　彼の涙なんて、何年振りだろう。あの日を最後に、どんな酷い傷を負ったって笑っていた彼が。

それほどまでに傷つけているのは、自分だ。

「白ウサギ」は決して“女王”の命に逆らってはいけない。だから僕は、“白ウサギ”を辞めることにします。でもそうしたら、職務放棄ということでゲームオーバー。どちらにしろ、僕は死刑ですね」

あっけからんとした声に、ルアは思わず笑ってしまう。自分でもこんな声が出るなんて意外だ。自分の死についてなのに、他人事のような軽快さが付き纏う。

改めて確認するように言われて、フレイムの顔が泣きそうに歪んだ。どうして　どうして、彼が苦しむのだろう。殺されるのは自分のほうなのに。自分と彼のつながりなど、“カード”というちっぽけなものでしかないのに。

顔を全く変えようとしないディーやダムのように、気に病まなければいい。勝手に死ねば、とでも言えばいい。

まあ、そこまで残酷になれなど、優しい彼には無理な話なのだが。

「ルアは、死にたいの？」

刃の切っ先が、喉元に触れる。ほんの少し下におろされ、冷たい感触が数センチ喉に残った。

白い喉に、赤い血が一筋跡をつける。ピリツとした痛みに、ルアは

思わず顔をしかめた。

死にたい？

そんなわけない。できれば生きていたいし、自分が死ねば自動的にイオも殺されるだろう。こんな変態と心中なんて真つ平だ。

「違うって言ったたら、見逃してくれますか？」

冗談っぽく笑って言うと、フレイムの横にいたダムが顔を赤くして突っかかってきた。

今にも掴みかかってきそうな勢いで、ルアの方を憎々しげに睨みつける。

「お前…っ、ふざけんよ！そんなの許されるわけが」

ひゅっ……

風邪を切るような音がして、鉞がダムの前に叩きつけられた。数センチ先を銀色の刃が通り、言葉半ばにダムは身を固める。

フレイムは地面に深く突き刺さった鉞を片手で抜き、土がついたそれを見せつけるようにダムの前に突き出した。

「黙ってる」

低い脅しに、ダムは腰を抜かしたのかその場にへたり込んだ。それを一瞥したフレイムは、再び鉞をルアの喉につきつけた。

いつもは双子と仲良さそうに笑っているフレイムが……あまりにも意外な光景に、ルアの目は軽く見開かれる。

「いますぐ、そいつをこっちに寄りこしてよ。見なかったことにして

あげる、から」

声が、震えていますよ。

ルアは心の中で苦笑し、わざと守るようにイオの身体を抱きしめた。ルールは、破ろうとするだけで違反となる。それを見なかつたことにする、だなんて……ルールに対しての見解が人より甘いのは、昔から変わっていないらしい。

どちらにしろ、自分は死ぬのだ。ここでイオをみすみす渡して殺されるか、一緒に心中するか……。

まあ、変態といえども一応親友もどきだつたのだ。一緒に殺されてやるのも悪くないかもしれぬ。

……死後の世界まで変態同伴なのは絶対嫌だが。

「お墓は離して作って下さいね。死んでもちよっかい出されそうですから」

「……っ……ルア……あ」

どうして、そんな悲しそうな声をあげるんですか。貴方らしくもない。

ルアは柔らかく笑いながら、鉞をよけてフレイムに近づいた。フレイムは一瞬びくりと震えて一歩後ろへ下がったが、それ以上動かずにルアの接近を許す。

（馬鹿ですね……懐に入れて、撃たれるとは思わないんですか）

イオを抱え込んで両手がふさがれてるからとはいえ、随分と警戒心にかける行動だ。本当に　貴方らしくもない。

本当は、昔みたいに頭を撫でてやりたかった。しかしさすがにこんな状態のイオを地面に下ろすわけにもいかない。

仕方なく、ルアは腰をかがめて彼よりも少し背の低いフレイムに視線を合わせる。濡れた赤の瞳が、目の前で悲しみに光って見えた。小さな子供に言い聞かせるように、至近距離で優しく微笑む。なのに、ポロリポロリとこぼれだした涙は止まってくれそうにもなかった。

「ちゃんと仕事、やって下さいね。監視役がいほくないからってサボっちゃだめですよ」

「……………やめろ」

「それと、ちゃんと食事はバランスよく採るんですよ。貴方はほっておくと豆類を口にしませんからね。たんぱく質はちゃんととらないと」

「やめろって言ってる」

「城に閉じこもってはかりではなくちゃんと出かけましょうね。時折買い出しも行かないといけませんし」

「黙れ…っ」

「外ではできるだけ暴動を起こさないで下さいよ。後片付けをする僕もいなくなるんです。ちゃんと、自分で考えて」

「黙れっ！！」

バシッ

すさまじい音と同時に、頬に襲いかかる痛み。

ルアは叩かれた頬がじんわりと熱くなっていくのを感じながら、静かな瞳でフレイムを見つめた。

動揺したのは、頬を思い切りひっぱたいたフレイムの方だ。信じられないとでもいうように自らの左手とルアの右頬を交互に眺め、泣きそうに顔を歪める。

いや、実際彼は泣いていた。いつもの彼からは想像できない、泣き

じゃくるような泣き方で。

背中をさすってあげたい。涙を拭いてあげたい。抱き締めて、あげたい。

だけど、それすら自分にはできなかった。腕がふさがっているから？違う。

もう、自分には彼に触れる権利すらないと思ったからだ。

「泣かないで下さい。僕が貴方の涙に弱いのは、知っているでしょう？」

「う…うるさ、いつ…！な、なんでだよ、どうして、どいつもこいつも僕を裏切るんだよ…っ！い、一緒にいてくれるって…！ずっと一緒にいるって言ったのに…っ」

「あのときも、貴方は泣いてましたね……。本当に、僕の中では貴方はまだまだ泣き虫の餓鬼ですよ」

本当は、誰よりも弱い子供……。他人を傷つけることでしか愛せない、哀れな少年。

だからこそ自分は彼に同情し、彼のそばにすることを誓ったのだろう。母親を殺し、「一人になった」といって笑い泣きをする彼のそばに。

ごめんなさい。そつと彼の耳元に囁くと、フレイムは怒りの炎を瞳に浮かべてルアの胸倉をつかんだ。

「餓鬼だつて言うんなら…！そばにいてくれるんだろう？！餓鬼を投げ出すほど、ルアは無責任な大人じゃないだろう…！」

「ごめんなさい」

それは、謝罪という名の拒絶。彼の瞳が、絶望という名の深い悲しみに染まった。

フレイルムが鉞を持ち直して、その冷たい刃を首筋に添える。

そんな物騒なことをしながらも、彼はまだ泣きやんではいなかった。このまま、彼が泣きやまなかったらどうしよう。ルアは一抹の不安を覚え、彼の赤い瞳を見る。

泣いて、泣いて……彼の涙が枯れてしまったら　　今度こそ彼は、泣かなくなってしまうだろうか。感情を自分の中だけに溜めて、誰にも言わずに傷ついて、笑って　　……

「謝るなよ！こんな謝り方、すんな……っ！これが最後、みたいなことと言つな……！！」

「……はい。謝りません、謝りませんから　　せめて、泣きやんで下さい」

このまま、涙で終わらないで。せめて笑顔で殺して。

わかっている。叶わないわがままだということとは承知だ。だけど　　どうしても、彼には自分なんかのために泣いてほしくなかった。フレイルムの顔が、くしゃりと歪む。結局、泣きやんではくれなかった。

鉞が高く、高く振りあげられる。ルアはよく磨がれているその刃をぼんやりと眺めながら、ふっと小さく笑った。

まあ、フレイルムの手で殺されることがせめてもの救いか……。

ああ……本当に。最後に気にかけるのがこんな餓鬼のことばかりだなんて。自分にはアリスしかいないと思っていたのに、とんだ誤算だ。

「　　さようなら」

最期に見たのは、瞳の色に反射して赤く染まった、フレイルムの涙だった。

「ルアは、狡い

」

嗚咽交じりの一言に、ルアは遠慮がちに笑った。

そのすぐ足もとには、深く地面に突き刺さった鉞。軌道が“逸れた”というにはあまりに大きなズレだ。

こうなることを、自分はわかっていたのだろうか。震えながら泣き続けるフレイムの体を温めるように抱きしめ、自問する。

フレイムが刃の軌道を“逸らした”ことに対して言えば、答えはイエスだろう。

優しい彼に、自分を殺すことなどできるはずがないと心のどこかで思っていた。

ずっとそばにいたのだ。それくらいの自信、持ってもいいと思う。だけど。

自分が殺されなかったのは全くの予想外だ。

『チエシャ猫”を助ける』

地面に鉞を突き刺しながら、フレイムは低く呟いた。

その言葉に、ディーとダムは目を見開く。しかし二人が何かを言う前に、彼は二人を怒鳴りつけたのだ。

『聞こえなかったのか。“チエシャ猫”を生かせ……さもなければお前ら双子の首を斬ってやる!!』

あまりにも暴君じみた言葉、だが、双子を動かすのには十分な迫力だった。

呆然とするルアの腕から奪うようにしてダムがイオを抱え、ディーは意識の戻らないアリスをおぶる。

二人が一目散に去っていくのを眺めながら、ルアはその場にどさりと倒れ込んだ。

夜空に浮かぶ月のもとで、いつの間にか緊張で荒くなっていた息を整える。

『これで……僕が命じた。“白ウサギ”は、“女王”の命に従おうとしただけだ』

フレイムは、自分自身に言い聞かせるように呟き、その場に崩れ落ちた。ルアは間一髪起き上がったてその身体を支える。

彼は、泣いた。声をあげて、何度もルアの名前を呼びながら泣き続けた。

「ルアは、狡いよ」
「はい」

幾度となく繰り返す言葉に、ルアは微笑みを浮かべて頷く。

まさか命が助かるとは思わなかった……。予想外の展開にまだ心臓がうるさく鳴っていたが、フレームにとってはそれすらも心地いいらしい。

本当に、小さな子供のように頭を預けてくる。文句を言いながらも、どこか安心したような笑みを浮かべて。

いや 安心してているのは、自分の方だ。

てっきり、彼はまるっきり変わったと思っていた。あの日から、別人になったと。

もう、昔の彼には会えないのだと。

本当は、すぐ近くにいたのに ……

「僕が、君を手放せるはずがないのに……」

つうつと、彼の頬を透明な涙が伝った。

僕を知るのは、君だけ。

君だけは、手放したくない。

【Chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

Happy Halloween! あーんど Trick or
Treat!

あれ、もう終わったって?? (〃。〃;))
ナ ン デ ス ト 。

ごめんなさい、ふざけすぎました。素直に謝罪します、ごめんなさい
ごめんなさいごめんなさい...orz

よりによってハロウィーン当日に他のゲームに夢中になって小説の
ことをさっぱり忘れていたくそ作者です.....???

あ、ちなみにそのゲームその日中にクリアしちゃいました 名前が
思いつかなかったのでアリ幕キャラの名前をバンバン使ったんです
よねえ...アリス、イオ、ルア、ロキ、レイズあたりを。 <大工>
ロキがくそ弱いキャラだったのを覚えてます。最強は<魔法使い>
ルアくんでした。

って もう何だか、いろいろと終わってますね...。

今から速攻で宿題終わらせて執筆頑張ります! 5話連続は意地でも
やります!

さて、今回のお話ですが...

私は一体何人に死亡フラグを立てれば気が済むんでしょうね(、
)

でも実際死んでる数は少ないですよ! レイズちゃんに、前女王様、
おばあちゃんに、イオの両親.....うおい、いっぱいいるじゃなか。
ま、それはいいとして。

イオ君、死んでません! ルア君ももちろん死んでません!

前回の話で 指先から感じる本当に微かな鼓動。 なーんてフレー
ズがあっただんですが、それだけじゃわからないかもしれせんから
一応。

作者「イオの野郎は生きていやがるよー!!」
イオ「ずいぶんと嫌そうない方だね」

と、言うわけです。

ついにフレ임様まで泣かせてしまった……。残るはルア君、マルス、レストだけでしょうか…。

泣かせすぎですね、ごめんなさい。けどつらい経験をしたキャラほど、涙のシーンが多くなるんです。

だとしたらマルスは絶対泣かないっすね(^^;)

副タイトルにはあーんなことを書いてちゃってますが、まだまだ続きます！本当に計算上は80話突破するつもりなんです！

それでは、まだまだ続く長ったらしい物語をお楽しみください……。

あ、そういえば。

祝 40話突破！

【廃棄済みセンテンスコーナー】

廃棄理由：ギャグを書きたいわけではないため。

シーン：最期を悟ったルアがフレ임に今後のことを言う。

「城に閉じこもってばかりではなくちゃんと出かけましょうね。時折買い出しも行かないといけませんし」

「黙れ…っ」

「外ではできるだけ暴動を起こさないで下さいよ。後片付けをする僕もいなくなるんです。ちゃんと、自分で考えて」

「うるさい…、この小姑がっ!!」

フレイム様、心からの叫び)*、(ノ
なんでこんな思いついてたんでしょうね、自分……。

「す、りす　　アリスつたら」

くしゃりと前髪をかき分けるようにして頭を撫でられ、私はまどろみから覚めかけた。しかし額に触れた手のひらの温かさに、つい瞼が重くなってしまう。

駄目だこりゃ、と呟き苦笑いをする。その息が時折頬に触れ、心地よかった。ゆつくりと肩をゆすられるが、私は何となく起きたくなくて寝た振りをする。

私を起こそうとする声有谁だかを気付きながら、知らぬふりをして起きようとはしなかった。少し困ったような笑いが、妙に懐かしい。

寝ていれば、このまま頭を撫でていてくれるだろうか……。
ずっとそばに、居てくれるだろうか　　……

とても温かいのに、心が締め付けられる。

どうしてだろう。そう思うと同時に、閉じた瞼の眦から熱いものが頬を伝って落ちた。

何かを、忘れていている気がする　　それを思い出さなければならぬのだけれど、思いだしたら何もかもすべて無に還るような気がして　　私はうつすらとまぶたを開いて彼の顔を見上げる。

不安げに瞳を揺らす私に、イオは優しい笑顔を見せた。

「大丈夫？随分と悪い夢にうなされてたみたいだけど」

宥めるように頬を撫でられると、触れられた部分がじんわりと熱を帯びていく。

存在を示すように高鳴っていく心臓の音を気付かれたくなくて、私は思わず体をのけぞって彼の腕から逃れていた。しかし彼の熱から離れたのも束の間。すぐに右腕が伸びてきて、私の腰を捕らえる。

頭を押さえつけるようにして胸に抱え込まれ、私は戸惑ったように彼の腕に爪を立てた。

「い、イオ……?」

「ほら、顔上げない。泣くのは俺の胸の中でだけにしてよねー、まったく」

なんじゃそりゃ。私は呆れたように笑いながらも、ポロリポロリと涙を流し続けていた。

どうして。彼に触れるときはいつも、身体が熱くなったりドキドキしたりするのに……今は、こんなにも胸が痛い。

涙が、止まらない。私はきつくイオのシャツを掴み、震える声で咳いた。

「悪い、夢だったの」

「んー?」

「悪い……でも、ただの夢よね」

なら、何故こんなに苦しいのだろう。不安でたまらない。

夢だったはずだ。何が、なんて思いだせなかったけれど……夢だったんだ。

彼がそばにいてくれる。悪い夢にうなされていたのなら、優しく起こしてくれる。なのに、なんで私は安心できていないの？

ああ、駄目だ。じっとしていると余計なことまで考えちゃいそう。

ここから、早く離れないと……。言いようのない焦燥に駆られた私

は、足に力を入れて立ちあがった。
起きたばかりだからか、少しふらつく。イオは心配そうにじっとわたしを見ていた。

「アリス、もう行っちゃうの？」

寂しげな声で、そう言われる。私は眉をひそめて、座ったまま動こうとしないイオを見た。

なんだろう　　少し、違和感がある。

なんで彼は立ちあがろうとしないのだろう。いつもだったららべたべたとしつこいくらいにひつついてくるのに……。

まるで、自分はそこから動けないのだというように腰をあげようとし
ない。

「何言ってるの。そろそろ城へ出発するんでしょ」

「ん　　ああ、そういえばゲームには勝ったんだっけ」

ゲーム“には”？妙な言い回しに不信感を覚えるが、私は小さく首を振って彼の目の前に手を差し出した。

いつまでも立ちあがろうとしない彼に、手を貸してやろうとする。

「ほら、行こうよイオ」

イオは、差し出された私の手と顔を交互に見比べ、不意に悲しげに笑った。

「無理だよ。俺は行けない」

ドクン

心臓が、嫌な音を発する。
なんだろう　　この感覚、前に経験したことがある。そうだ、あの時。

鼓動。

熱。

呼吸。

名前。

鼓動

……

すべての記憶が、脳裏にフラッシュバックした。
夢　　？そんなはずがない。あんな生々しい夢、あつてたまるものか。

ほんの少し触れあつたイオの指は、凍りついているのかと思うほど冷たかった。

「だって、俺もう死んじゃつたもん」

意識が、深い闇へと呑みこまれていく

……

突然隣の部屋で女の悲鳴が聞こえ、ルアははっと顔をあげた。

この声……アリスだ！

そう分かっているのに、イオが眠るベッドに寄り掛かってうたた寝をしていたせいか、俊敏に体が動かない。

疲れ切った身体を引きずるようにして、隣の部屋のドアの前までつく。

ドアを開けると、その部屋は数秒でひどい有様になっていた。

ふかふかの枕が力一杯投げつけられ、その中から綿があふれ出している。枕があたったのか、床には花瓶が中身をぶちまけて転がっていた。

ガシャンッ

けたたましい音がしてベッドのそばに備え付けられていたスタンドが床へと投げ出される。

突然消えた電気に、部屋が暗闇に包まれた。その中に浮かぶ、蒼白の顔。

「アリス……」

ルアは錯乱状態の彼女を怯えさせないように、慎重に近づく。アリスは相当夢見が悪かったのか、目を見開いたままがくがくと震えていた。優しく肩をさすってもこちらに気づく様子もなく宙を見据えている。

「あ、あああああっつ……！い、イオ……は、はっ、ふっ、は……かはっ……は……」

だんだんと荒くなっていく彼女の呼吸。酸素が足りないのか……？しかし何度も何度も息を吸っては吐きださないとところを見ると、そうではないらしい。ルアは顔を険しくしてあたりを素早く見渡した。まずい……過呼吸を起こしてるんだ。

「どこかに袋は……」

しかし、よく整頓された部屋にそんなものあるはずがない。ルアは困ったように眉をひそめるが、アリスが苦しそうに喘ぎだしたのを見て悠長に探していられなくなった。

彼女が座るベッドに両手をつけ、顔を近づける。その時、一瞬だけ彼女の瞳が自分を捕らえたような気がした。

自分がそばにいた時でさえ、虚空にイオの姿を見ていた彼女が。

「失礼します、アリス」

「る、あ……？……ふっ……?!」

自分の名前を呆然と呟く彼女の唇を、自分のそれで塞ぐ。反射的に唇をきつく結んだ彼女の身体を押さえつけ、無理やりこじ開けた。そのまま、軽く開いた唇の間を割って息を吸いだす。

最初こそ抵抗していた彼女だが、息が楽になっていくのに気づくと大人しく体を委ねてきた。

彼女の呼吸が安定してきたところで唇を離すと、アリスは赤くなつた顔を隠すようにしてベッドに突っ伏した。

白いシートに恥ずかしそうに顔を埋める彼女が可愛くて、こんな状況だというのについ笑ってしまう。

「そんなに恥ずかしがることでもないでしょう。人工呼吸と同じよ
うなものですよ」

「う、うるさいわねっ……べ、別に恥ずかしがってなんか……っ」

必死で否定するところとか。

顔を真っ赤にさせてこっちを睨んでくるところとか。

もう本当に、可愛すぎて仕方ない。ルアは赤くなりそうになる頬を

見られないように彼女から顔を離して、隣の椅子に腰をかけた。

落ち着いたところでアリスは、イオのことを思い出したのか赤かった顔を見る見るうちに青くさせた。

残念。もつと僕にも構ってほしかったのに。

「そ、そうだ…っ、る、ルア、あの、イオが…っ」

「はい、生きてますよ」

「い、息してなくて、それで、私

.....は？」

予想外に遅い反応とアリスの間抜け面に、ルアは思わず嘔き出す。まあ、信じられないのも無理はないが。

『息を吹き返したぜ。後は安静にしていれば大丈夫だろ』

ぶすつと明らかに不満げなダムから報告があったのは、つい3時間前のことだ。

白衣を纏って少し色のついたメガネをかけてる姿は、いつものサボり常連犯と同一人物とは思えない。

やる時はやる……というよりも純粹に、フレイムが怖かったのだから。普段笑顔の彼を見ているため、キレたフレイムは相当のトラウマになっているはずだ。

『本当ですか?! 面会は……』

『やめといたほうがいいだろ。調べたらディーが使った薬の中に幻覚作用があつてさ、もしかしたら意識を取り戻した瞬間に暴走するかもしれない。一応鎮静剤は打ったけどな』

なんでそんな薬を使っただ。

ついダムをなじりたくなつたが、双子も手を尽くしてイオを助けてくれたのだ。

ルアは素直に頭を下げると、小さく笑った。

『ありがとうございます』

『な…、何だよ！べ、別にお前のためにやったわけじゃ……』

……何故にそこでツンデレもどき発言をする。

大の大人が発するにはあまりに気色悪い言葉だったため、ルアはとりあえずダムを伸しといた。

そうして、今に至る。

ダムの制止を無視して一度イオが眠る部屋に入ってみたのだが……ちゃんと、正常な息をしていた。

彼の唇の隙間から細い息が漏れてたのを感じて、ひどく安心したのを覚えている。

そのことを一つ一つ、丁寧にアリスに説明すると、彼女はほっと息をすると同時にぼろぼろと涙を流し始めた。

何度も「よかった」と呟きながら嗚咽をあげ続ける彼女の背中を、ルアは無言で撫でる。

「落ち着きましたか？」

ようやく泣きやんだアリスを、下から見上げるようにして覗き込んだ。

充血した眼が、あまりにも痛々しい。どれだけ長い時間、彼女は泣いていたのだろう。

』

』

ふいに、アリスがイオの身体を抱きしめながら呟いた言葉が脳裏に浮かんだ。

ドクン……。心臓が嫌な音を立てて加速し始める。

忘れよう、思い出さないようにしようと思っても、イオが助かったとわかったせいか心に隙間が生まれ余計なことを考えてしまう。

あの時、彼女が言った言葉。あれがどういう意味だったのか……。知りたいのに、聞きたくない。

知ってしまったら

自分の中の、何かが崩れる。

ルアは高まる動悸に耐えきれなくなって、アリスの肩に手を伸ばしきつく抱きよせた。

いつもと違う彼の様子にアリスは不信感を覚えながらも、抵抗せずに彼の方に額をのせる。

「ルア……？」

「すみません。もう少し、このままでいいですか……？」

少しでも、彼女に触れていたい。近くにいたい。

例えば　自分が死んだら、彼女は泣いてくれるだろうか？

アリスのことは大好きだから、ずっと笑顔でいてほしいと思う。だけど時々無性に傷つけたくなる。

彼女が泣いてくれるなら　死ぬのも悪くないかもしれない。

「……今、ものすごくバカなこと考えたでしょ」

「アリス……？」

「死んじゃってもいいや、なんて……絶対に嫌だからね。イオも、あんたも……誰にも死んでほしくないよ……っ」

ああ、でも。

こうやって、優しい涙も悪くはないかもしれない。
ルアは肩に湿った感触を感じながら、“バカなこと”を考えた自分を嘲るように口角をあげた。

「よくわかりましたね。以心伝心ってやつですか？」

「ば、馬鹿言わないでよ！あんたがわかりやすすぎなんですよ！ほら、早く離れなさいって……っ！」

バンバンと胸を叩かれて思わずむせる。本当に……アリスは容赦がない。

まあ、そんなところも可愛いのだけれど。

なんとなく離れるのがもつたいなくて、ルアは彼女を抱きしめる腕に力を込めた。腕の中の体温がどんどん熱くなっていく。

「ちよ、ルアったら！」

鼓動が、こんなにも近い。触れあった肌から感じるその速さに、ルアは目を閉じて彼女の髪に顔を埋めた。

もう少しだけ……貴方のそばに居させて下さい……

その時。

「姫さまっ！！」

思わずすり落ちそうになった。頭にのしかかる二人分の体重に、ルアは奇妙な声をあげる。

しかしそれに気づくことなく、ルアを踏みつけてディーとダムは両脇からアリスをひしっと抱きしめていた。

「よかった、もう泣き止んだんだな！ほんと、どうしようかと思っ
たんだよ！」

「やっぱ姫さまには怒った顔しか似合わないよね！もう泣かないで
ね！」

「え……あ、うん……って怒った顔“しか”って何だよ！」

アリスまで自分の存在を忘れて双子に突っ込んでいる……。なんだ
か、いろんな意味で涙がこぼれそうになった。

「そうだ、白ウサギはこっちにきてないのか？」

「絶対姫さまに手え出してると思ってるんだけどなあ……」

「そういえば姫さま、聞いてくれよ！あの野郎ディーを脅しやがっ
たんだぜ！」

「そうそう、もうほんとムカつく！何さ、少しくらいフレイム様に
気に入られてるからってさ！」

「ただのアリス馬鹿なのになー」

「アリスのことしか頭にない馬鹿なのになー」

「俺ら双子には勝ったことがないほど弱っちいになー」

「一人でいるところを狙うなんて卑劣極まりないよねー」

「つかお腹真っ黒だよなー」

「“白”ウサギのくせしてねー」

「ほお……貴方達が僕に対してどんな見解を持っている
のか、よおくわかりました」

ぶちり

確かに、自分のこめかみあたりで何かがキレる音がした。

よくもこんなに、本人がすぐ足もとにいろつもの色々といえる
ものだ。

その榮譽ある勇気を冥土の土産にでもするがいいさ……。ゆらりと立ち上がって、顔面蒼白になる双子に銃口をつきつける。しかしレボルバーを回す前に足の速い双子は逃走した。

「えへへ……ごめんなさい」

「うわーい、白ウサギが怒ったー」

「大人げねーぞ、白ウサギー」

「ついでに背えちっちゃいよ、白ウサギー」

「さつさと出てけっ！！つか何しに来た！！」

きやははと笑いながら部屋の中を逃げ回る彼らに向かって銃を乱射する。さすがにこの場では不利だと考えたのか、案外二人はあっさり引いた。

騒がしい二人がいなくなった部屋は、嵐の後の晴天のように静かだ。突然訪れた沈黙に気まず気ながらも、ルアは罰が悪そうにアリスを見る。何か言わないと……しかし、意外にも口火を切ったのはアリスの方だった。

ぽつりと、双子が出ていったドアの方をぼんやりと見ながら独りごとのように呟く。

「あの子たち……イオのこと、一言も言ってなかったわね」

「アリス……？」

「私が泣いてる時も……全然イオのことなんか心配してなかったのに。どうして治療なんかしたのかしら」

それは、そうだろう。双子は基本的に“城側”^{みかた}じゃない奴には関与しない。ましてや“敵”^{イオ}の心配など、するはずもないのだ。

治療したのは、ひとえに自分たちの首が大事だったから……。決して、彼らの望むところではなかったはずだ。

「イオを助けたのは、フレйм様ですよ」

「え　　？」

心底驚いていると言ったアリスの表情に、ルアは少し苦笑する。

それもそうか……。きっと彼女は、“女王”と“チエシヤ猫”は敵対関係にあると聞いているのだろう。それは全く間違っではない。それでも、ここまで驚くのは　　彼女が、フレймを恐れているだろうか。

ルアは彼女の横に垂れている髪を一房掬って、耳にかける。

「フレйм様は、優しいお方ですよ　　……」

すべての歯車が、狂ってしまっただけで。

『ルアっ！』

僕しかいないんじゃない。

僕しかのこっていないんですよ。

【Chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

さて、更新予定から一日ずつずれてきてますね！
もうほんと…どうしよう（泣）

今回はちょっと時間がないので手短に。

サブタイトル……むしろ私は「おやすみなさい」したいです。ただいま12時手前なんです。

一応「悪夢からの目覚め」「おはようございます」「って感じなんですけど……わかりませんよね！ええ、思いつかなかったんです！もうほんと、久しぶりにコメディイを書いた気がします。

ずーっとシリアスでしたもんね……。明日あたりちょっと小ネタでも挟みますか。文化の日ってことで 関係ない

さて、次回からはいよいよフレーム様の過去編です！

ルアからの視点オンリーでいくつもりですが……いけるだろうか。

r z

もんのすごく書きにくいキャラです、ルアは。

ちなみに次回のテーマは……。

「小さい頃はやっぱり素直な良い子だった」パート2です。

パート1は無論イオ君です。

誰だこいつってことになるでしょうが……なるべく可愛らしく書きます。

【Chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

フレーム過去編です。ズドーンと話が重くなります。

なお、今回の過去編は4部構成の予定で、ルアかフレーム視点で送られます。

今回の新キャラの名前を覚える必要はありません。

ただの称号として認識して下さい。

望んだのは、小さな幸せ。

神様、どうかお願いします。

この子に、生を。

私を、また一人にさせないで下さい。

「なんじゃと」

偶然通りかかった部屋の前で怒鳴り声が聞こえ、ルアは思わず足をとめた。

この城に勤めて早2年になるが、広大な城の中は油断していればすぐに迷子になる。今日もそうだったのだが……どうしたのだろう。ルアはドアを押しあけようとして、一瞬躊躇した。

真っ赤なペンキで塗られた、豪華なドア……この部屋は、女王の部屋ではなかったか。

あまり顔を合わせる機会はなかったが、女王の噂は常々耳にしていた。

平気で人を殺す。自分の敵は家族ともども始末する。女子供にも容赦はしない……。

表では慕われるフリをされていながらも、裏で悪い噂の飛び交って

いる女王に対しての印象は、はつきり言って悪かった。

(会いたくないな……)

しかし、もし中で何かあったら女王の部下である自分はすぐにかき込まなければならぬ。

ルアがドアの前で躊躇していると、中で再び声がした。

「ふざけるのも大概にせよ！2年……あと2年じゃと……?!妾が生きた半分の時間もあの子めらは生きていらねぬと申すのか!なら、なら何のために彼らは生まれてきた!」

「女王様、どうかお気を鎮めて……」

「やかましい!何故……何故じゃ、“女王”など、妾が居るではないか!?!妾では不満だと、お前はそう考えてるのか!」

縫りつくような言葉に、ルアは吐き気に似た嫌悪感を覚える。

自分の“カード”に執着しているのだろうか、この女は。自分の子にすら渡したくないと、しつこく言い寄っているのだろうか。

だとしたら、気持ち悪すぎる……。ここは自分がいるべきところではないようだ。

しかし、感情に任せて去ろうとしたルアは、次いで聞こえた冷たい男の声に足をとめた。

「女王様、失礼ながら貴女は十分に生きてはまずです。これ以上今の座に執着しようというのなら、こちらも貴女を処分せねばならぬになりますよ」

ちょうど自分が思ったことを口に出されて、軽く瞠目する。

しかしそれよりも驚いたのは、威圧するような女王の怒声だった。

「たわけっ！！妾の命などどうでもよいわ！！」

あまりにもきつぱりと言ひ捨てた言葉に、その場にいた男がたじろいだように動く音がする。

ドア越しでも感じる、緊迫した雰囲気。ごくりと、ルアは耳を澄ませながら唾を飲んだ。

やがて聞こえる、男の断末魔。おそらく気を荒げた女王が首を斬ったのだろう、もうそこからは女王の気配しか読み取れなかった。今行つては危険だと、頭の中で警報が鳴る。しかし、好奇心が使命感からか、動いた足を止めることはできなかつた。

「失礼します、女王さ……ま……？」

ドアを開けた途端、むせかえるような鉄の臭いが鼻に入ってきて、ルアは反射的に口をふさいだ。

どうやら殺したのは先程の男一人だけではなかつたらしい。ぐつしよりと紅で濡れたカーペットの上に転がる死体は、パツと見ただけでも5体はある。

その中央で、女王は自分の身体を抱きしめるようにして縮まっていた。た。

まるで子供がやるような仕草に、ルアは目を見張る。

これが、今さつき人間を斬り殺した女のするようなことだろうか……。

「どこか体調がよろしくないのですか……？」

慎重に近づくと、案の定鬱陶しいとも言いたそうに睨まれた。

しかしそれを拒むことはせずに、だるそうな体を立ち上がらせるとそばにあった椅子に腰かける。相当まいつていたのか、許可なく勝手に入ってきたルアを言及する気も失せているようだ。

「白ウサギ」のルア、であったな。確か、ブラッドの補佐の「

それどころか、座ってお茶をしようと笑顔で席を指示してきた。まさか女王の誘いを断れるはずもなく、ルアは心の中ではため息をつきながらも笑顔でお礼を言う。

“女王”は本来、“帽子屋”ほど頻繁ではないにしろ、3日に1度はお茶会を催すほどのお茶好きである。

この人も例にもれないが、唯一歴代の“女王”と違うことは、長男である歳の青年　ブラッドしかお茶会に誘わないことだ。まさか誘われるなんて思ってもみなかったルアは軽く瞠目する。

「なんじゃ、驚いた顔をしておるのう。それほど意外じゃったか」

席に座ると、女王が悪戯っぽく笑った。

もう40後半に入ろうとしているとはいえ、艶やかさが残るその笑みに知らず知らずのうちにルアの頬は赤く染まる。

イオやレーテ……その他施設の少年どもに囲まれて育ったため、女性には不慣れなのだ。いきなりこんな笑顔、見せられても困る。

(なんか……印象違うし……)

もつと怖い人だと思っていた。

思ったことがそのまんま顔に出たのか、女王は声をたてて笑った。

こんな死体がごろごろと転がっている部屋で、楽しそうな笑い声をあげる彼女の凶太さもすごい……。

「どつじゃ、ブラッドは。よくできた子じゃろつ?」

花卉を一つ浮かべたお茶を傾けながら聞いてくる。

ブラッド……第一王子は彼女の言う通り、よくできた人だった。“女王”候補には必須である剣術はこの国の誰よりも長けていたし、妹弟にも優しい。

人をむやみに殺すこともなく、一般人にも慕われている。上の奴らからの評価も高いようだ。

ただ一つ、難点があるとすればそのブラコンであろうか。25歳のブラッドは、自分よりも10歳以上下の第二王子　　フレイムを溺愛していた。

フレイムの双子の妹であるブレイズとは比べようもない愛情をフレイムに注いでいる。

母親の、うまいち代わりと言うように。

「……ええ、そうですね。本当に、あの弟溺愛癖さえなければ完璧だったと思います」

「しかたあるまいよ、あやつはそういう男じゃ。へんに義理がたくて優しいのじゃからな」

どうやら、女王の方も自覚はしているらしい。苦笑するように言うと、カツンと音を立ててカップを置いた。

女王は、ブラッドや他の王女、ブレイズには愛情を注いでいても、フレイムだけは見向きもしなかった。

まるでそこに居ないかのごとく、彼が声をかけても無視をする。袖を引っ張ろうとすれば、胡乱な視線を向けて振り払う。

何度も何度も、壁の裏で泣くフレイムを見た。まだ8歳だというのに……ひどい仕打ちだ。

母親が、自分の弟に対してだけ目を向けない。
だから優しいブラッドはフレイムに同情して、埋め合わせのように
愛を注ぐのかもしれない。

……それも、考えてみればひどく残酷なことなのだが。

「もう少し、フレイム様にも愛情を向けてやってはどうです？あの
子もブラッド様同様に聡明で優しいお方です」

「……………いや、ブラッド以上……………かもしれない」

彼女の目が、どこか遠くなる。

なんだろう　　ものすごく、悲愴に満ちている瞳。

今にも泣きそうな顔に、ルアは戸惑ったように首を傾げた。

「あの子は、強くなったんじゃない」

女王は、決してフレイムの名前を呼ぼうとしない。どんな時だって
「あの子」「あやつ」「彼」……………まるで、自分から一線を引いてい
る……………ような。

もしかしたら。ルアは、ふと思う。

もしかしたら、彼女はフレイムのことを嫌っていないのではなくて、
愛しているのではなくて。

愛そうとしていないだけだったとしたら……………？

「……………ええ。ブラッド様が付きつきりで稽古をしたおかげで、かな
り剣の腕は上達しているようです。僕では太刀打ちできないかもし
れません……………」

「なにゆえそこで残念そうな顔をする。お前は文官じゃろうが……………」

呆れたように目を回した後、女王は子供のようにコロコロと笑った。

「そうか。強くなったか。それはよかったのう」

例えば。愛してもいない息子の報告を聞いて、こんなに嬉しそうな顔をするだろうか。

その時ルアは、はっきりと女王の愛を感じた。

フレイムの前では決して見ることができなかった……必死で隠されていた、母の愛情。

どうして……どうして、彼女はフレイムに対してだけ感情を隠そうとするのだろうか。こんな母親らしい笑顔を、見せてやらないのだろうか。

少しでも抱きしめてあげたら、それだけで気持ちは通じると思うのに……。

「ルア、お前……第二王子は好きか？」

突然の問いかけに、ほんの少し反応が遅れる。彼女はいつの間にか笑顔を引っ込めてしまっていた。

かわりに、憎々しげに床に転がる死体を睨みつける。

その瞳に映る計り知れない憎悪に、ルアは背筋にぞくりと冷たいものを感じた。

「……はい。素直でいい子だと思います」

「そうか。では明日からお前はルアの補佐兼教育係に移れ」

「はい……つてええ?!」

唐突すぎる異動に、相手が女王であることも忘れてルアはバンッとテーブルを叩いて立ちあがった。

がたりと揺れたティーカップに、女王は一瞬不快気な顔を見せる。

「ルア、やかましい。少し落ち着くのじゃ」

「お、落ち着いてられますか！どうしてそんなにいきなり……」

「落ち着け」

「もしかして、この男たちが話していたことに関係するのですか？

！一体どんな話を……っ」

「落ち着けと言っておる！！」

部屋中に響き渡るような威厳を持ち合わせた怒声に、びっくりとルアの身体は震えあがった。そのまま、彼女の「座れ」という声とともに膝が折れて席に落ちるようについた。

まるで、彼女の言葉は催眠術のようだ。この人だけにだけは逆らってはいけないと、本能が告げてくる。

女王は鋭い視線をルアに向けると、頭を抱えて苦しそうなうめき声をあげた。

彼女の方がずっと強いのに……か弱い少女のような、小さな嗚咽が部屋にかすかに響く。

まさかあの女王が泣いてるだなんて、にわかには信じられず、ルアはただ呆然と肩を震わせて嗚咽を殺す彼女を見ていた。

落ち着くのは、彼女の方だ。自分なんかよりもずっと動揺して、苦しんで　絶望している。

「信じ、られるか……？ “女王”はいつだって、一人なのじゃ。それ以外の親兄弟、すべてに至るまで殺さなければならぬ。それが、“女王”の“ルール”なのじゃ」

「聞いた、ことがあります。代々“女王”は、第一子しか手元に残しておかずに、それ以外の子が生まれたらその場で首を絞めて殺す

……と」

それを教わった時に言われたことが、もう一つ。

今の“女王”は、最大の禁忌を犯している。

それは、自分の子供を一人残らず生かしたこと。本来だったら生まれた瞬間、目を開ける間もなく殺さなければならぬというのに……。

馬鹿なことをしたものだ、と。それを教えてくれた教師は忌々しげに言った。

いずれ殺される身……生き残れるのは、たった一人だ。それなら、世界を見せる前にすべて終わらせていたほうがその子のためにもなるのに、と。

間違っではない。苦しい思いをさせない、という意味ではかなり真つ当な方法だろう。

……？
だけど、それでは彼らは何のためにこの地に生を受けた

「そうじゃ。なのに妾はブラッド以外も生かした……。上の爺どもに土下座をしてでも、彼らを死なせたくなかった……。っ！いずれっ、いずれ一人に絞り後の者どもは処刑にせねばならん！だがっ！だが、それでも妾は……私は……」

次から次へと、涙があふれ出してくる。ここまで号泣する人を見たのも初めてかもしれない。

ルアが気の毒そうに手を伸ばそうとすると、バシッとものすごい勢いで拒絶された。

あまりにも孤独に蝕まれすぎた女王は顔をあげると、顔をぐしゃり

と歪めた。笑顔……にも見える、泣き顔。

「私は、幸せになりたい。家族がそばにいる、それだけのちっぽけな幸せだ。ルア、お前には見当もつかないだろうな」

一瞬、彼女の姿が若々しい赤髪の美女に見えた。重なった、ではない。ぶれて見えたのだ。

まるで　　そう、ブラッドを生んだ頃の彼女に、若返って。彼を生んだ時も、ずっとこんな瞳をしていたのだろうか。

背徳感に狂わされながらも、ひたすら夢見た幸せを追って、求めて

そして、手に入らなかった。

手がないものを、狂おしく求める瞳。

「私には……っ、私にはそんな幸せですら手に入れる権利がないのかっ……!」

ガシャンッ

女王が手元にあつた鎌を持って、テーブルを横薙ぎに払った。その上にあつたポットやカップ、お菓子類がすべて碎けて床に散乱する。ルアは間一髪で彼女の暴走から逃れ、一歩引いた。女王は肩を荒くさせながら、床に転がっている動かぬ死体に鎌を突き刺した。

ぐちゅっ

君の悪い音がして、死体の腹からおびただしい血が流れると、そこでようやく彼女は我に返る。

一瞬呆然としたいと鎌を見比べ、歪な笑みを浮かべるとその場になへなと座り込んだ。

自分の手にべったりとついた血を信じられないとでもいうように見ながら、そのまま狂ったような甲高い哄笑をあげる。

「あは、あははははっ！でもそれももうすぐ終わり！全部全部、私
が望んだものは全部消えちゃうんだあっ！あはははははははっ」

狂った、少女。泣きながらあげている、笑い声。

ルアはこみ上げてくる吐き気に耐えきれなくなって、無我夢中で部屋を飛び出した。

哀れな女王ヘイリの悲愴ヘイリに満ちた慟哭ヘイリを背中に感じながら

……

2年後、フレイムとブレイズの誕生日に女王決定戦コロシアムが開かれるという報告があったのは、この5日後の話。

女王さまは、いつもひとりでいました。

ままはいません。ぱはもいません。おにいちゃんも、いもつとも、

だれもいません。

女王さまがころしてしまっただからです。

女王さまは、いつもひとりでいなきゃいけません。

ままもいりません。ぱぱもいりません。おねえちゃんも、おとうさんも、だれもいりません。

女王さまはだからころしてしまうのです。

女王さまは、いつもひとりでわらいます。

女王さまは、いつもひとりでなきます。

女王さまは、いつもひとりでくるしみます。

女王さまは、いずれひとりでくるいます。

女王さまは、おとなになったらごもをつみます。

つぎの女王さまいがいのごもがうまれたら、あかごのうちにころしてしまいます。

女王さまはいつもひとりでいなきゃいけないからです。

女王さまは、つぎの女王さまにころされます。

くるしいなんて、だれにもいいません。

かなしいなんて、だれにもいえません。

女王さまはいつもひとりでしたからです。

女王さまは、いつもひとりですんでいきます。

女王さまは、だれかがそばにいるシアワセをのぞきました

……

ボンソワール、作者です（*・・・）ノ
ちなみに意味をわかって言っているわけではありません。え、これ
何、ドイツ語？

番外編から何日か経ち、ようやく昔のテンションが戻ってきました
！正直ウザい？あ、自分でもそう思います。

本当は今回番外編をやるうという話になっていた（活動報告参照）
のですが……作者の事情により本編をそのまま進めることになりま
した。

楽しみにしていた方（いるのだろうか……？）、本当に申し訳ありま
せん。またの機会に書きます。

さあて、ついに始まつちやいました、フレ임様の過去編！

初っ端からこの暗さってどうよ……。もうほんと、フレ임様過去
は基本的に暗いです。ギャグ役がさっぱりいませんからね！

イオもないし、デーダムはちっちゃすぎて使い物にならんし……
。

あ、でも今回出てきた新キャラ、ブラッドは個人的にはボケキャラ
です。

にしても……暗い。しばらくこのシリアス雰囲気からは抜け出せそう
にありません……。この過去編が終わったらまた派手に番外編をやる
んだろうなあ……。

あ、そうそう……解説ですよ、すみません。

これは大体フレ임様8歳、ルア12歳、今より7年前のお話です。
リンクしているのがあとすれば……【chapter - 1】W

onderland Lair or Dither epp8

ご乱心遊ばせ！乙女心 が3年前のルア（後半）、【chapter

er - 2】Crossing Knight or Knight

e p 3 夜明けの逃走劇 のフレイム様のお話（前半）あたりですかねえ……。後もう二つある気がするのですが、さすがにこれ以上はネタばれなので言えません。特に「夜明けの逃走劇」を読めばこの後の展開なんて予告されたも同然なんじゃないでしょうか……。ただ、真実は隠れて見えないだけで………そういうタイプのもの、結構いっぱいあります。探してみれば伏線だらけなんです、この小説。それを解いていくのだ大変なんですけどね……。

以下から、一応簡単な説明です。

正直、ここに出てくるやつらは一人も覚えなくて支障はないと思います。

ブラッドとブレイズは……物語上、仕方なく名前を出してしまいましたが、過去編にしか出す予定はありません。特にブラッドの方は兄貴と妹、とだけ覚えてもらえれば十分です。

それでは、一切名前を出しませんが一応名前を決めました、女王ファミリーです。

【

ルージュRouge…母。現赤の女王。残酷といわれるが、その実家族や民にひどく優しい。ブラッドと交流が深い。フレイムをやたら心配する。当時43歳。

アルハンブラ^{アル}Alhambra…長女。皆のまとめ役。しっかり者。明るい。家族には優しいが下賤な民を見下す癖が。当時23歳。

ティント^{ティン}Tinto…次女。冷静沈着。メガネの似合うキャリアウーマン。長女を陰ながら支える。長女以外の家族をひどく嫌う。暗い。当時21歳。

ローズRose…三女。おっとり系。もっぱら長女と長男に甘える。

見た目よりも幼い。砂糖菓子のように甘やかされている。甘え上手。当時16歳。

ブラッドBlood：長男。優男だが、剣術は誰よりも長けている。フレイムにもすごく甘い。アルには対抗意識を抱く。マザコンとブラコン。当時25歳。

ブレイズBlaze：四女。フレイムの双子の妹。気が弱く、いつもフレイムの背後に隠れている。人を頼りすぎる面も。長女・次女からは冷遇。当時8歳 10歳。

フレイムFlame：次男。長男、長女を慕い、妹を可愛がる気高く優しい少年。ルージュ、次女、三女には苦手意識をもつ。当時8歳 10歳。

┌

ちなみにこれらすべて、赤や血、炎に関連した名前です。調べるの大変だった……。

ここいらで気付く方もいらっしゃるかもしれませんが、今回の話は女王 ルージュが主役ってことで、紅あかです。

Rougeは日本語で紅という意味ですしね！

それでは、今回の過去編はなんと4話続く予定です。長いですが、どうかお付き合いくださいませ！

Chapter 4 Flame Guilty or Innocent

今回、ものすごく長いです。

ご承知ください。

『ルアっ』

突然後ろから腰に抱きつかれて、ルアは思わず持っていた本を床に落としそうになった。

片足を一步前に出して何とかバランスを持ち直す。その際、視界に鮮やかな赤色が入ってきた。

いきなり抱きついてきた少年は、無邪気な笑顔を浮かべてルアの腰から離れようとしない。

こうしてみるとコアラそっくりだ……。自分よりも20センチ以上低い彼の頭を、ルアは苦笑しながら撫でた。

『どうしました、フレ임様』

彼の髪の色は、鮮やかな赤。こんな綺麗な色、どんなに優秀な絵師だって出せないだろう。

フレ임は機嫌よさそうに身体を揺らしながら背伸びをしてルアの手から本を奪い取った。それを取るうとすると、彼は本を後ろ手に隠してしまった。

『ルア、兄さんが言ってたよ。歩きながら読むのは目に悪いって』

『はあ……すみません』

『それに間抜けなルアだったら絶対転ぶって』

『ん？えつと、はあ……すみませ……』

『転んで死んだら俺の仕事が増えるから止めてこいって』

『ちよおっと待って下さい！ブラッド様、そこにいらっしやいますね？！』

『ちつ……バレたか』

微かに気配の残る柱を睨みつけると、案の定悪戯に失敗したような表情を浮かべた自分の“元”主人が出てくる。

バレるもなにもない。至近距離で二対の視線を感じ、しかもやたらと酷いことを優しいフレイムの口から言われているのだから……近くに元凶がいて、フレイムを使いに行っているとしか思わないだろう。皆の者には「名君」と呼ばれ「優しいお兄さん」と慕われている実、従者をからかって遊ぶ悪戯っ子であるブラッドの爽やかな笑顔を見て、ルアはため息をついた。

こういうところは昔とさっぱり変わってない。

まったく……28にもなつてこんな13の少年を弄って遊ぶとは、どういう了見だ。

しかし自分をいじっていたのは28の大人ばかりではなかった様子。ルアに抱きついたままのフレイムがつまらなそうに口をとがらせ、ルアを見上げてくる。

『あーあ、ルアの反応つまんないの。もうちょっと遊んでくれたっていいじゃん』

『つまらなくて結構。ほら、さつさとはなれなさい。ちゃんと本日の稽古はなされたんですか？お勉強は？机の整理整頓は済ませたんでしょうね？舞踊の先生を怒らせていませんか？もうすぐ10歳にもなるのですから、しっかりして下さい』

『……………この小姑が』

『ちよつと、聞こえないとも思いましたか。どこで覚えたんです、そんな言葉』

『兄さんが「嫌味」たらしくネチネチと身の回りのことを言うやつ

に言え」って言ってたから」

『……………』

ぎろりとブラッドの方を一瞥すると、わざとらしく目をそらして口笛なんかを吹いていた。

どうして自分に対してはこうも子供っぽくなるのか……………。

“業務用”の彼を知っているため、そのギャップに驚きを通り越してあきれれる。

あの精悍な横顔はどこへ行った……………。

『ブラッド様。もう貴方も30に入ろうとしているんですよ、立派なオヤジじゃないですか。いい加減大人になって下さいよ……………』

『ルア、お前30歳でオヤジとか……………ちょっと傷ついたぞ。いいんだよ、俺は30には絶対ならないから』

ブラッドが腰に手を当てて長いため息をつきながら言った。

皇族らしからぬ行動に、ルアは眉をひそめる。この頃フレイムの言動にはしたないものが見られるのだが……………この人の影響か。

この時のブラッドの言葉は、あまりに遠まわしすぎてルアは気づきもしなかった。

もし、この時ルアが彼の覚悟に気づいていたら、彼を止めることができたのだろうか。

こんな、いつもの笑顔で。変わらぬ笑顔で。

彼は、覚悟していたのだ。

自分の時が、28で止まるだろうということ。

『……………』

『……………』

『……ま、いつか。何言っただよ、ルア。俺は永遠の20代だぜ！』

『ふざけたこと言わないで下さい。現実を見た方がいいですよ』

『えー……ある意味現実を見て言っただけ』

どこがだ。人に、永遠なんて訪れるはずもない。

死、以外は。

何かに引っ掛かりを覚え、ルアは首を傾げる。

なんだろう、この会話。ブラッドは果たしてこのようなことを言う輩だったか……。

しかし心に残るしこりが消える前に、相変わらずべったりとルアにくっついているフレイムが口を挟んできた。

『じゃあ僕も永遠の9歳？』

『俺は、それがいいな』

『えー……僕も早く兄さんみたいなおつきい身体になりたいです』

『なーに言っただフレイム。お前は絶対ちっこいほうが可愛いぞー』

冗談っぽく言いながらくしゃくしゃとフレイムの髪を撫でる。

最初くすぐったそうに逃げていたフレイムだったが、嬉しそうに笑うと今度はブラッドの方にひつついた。

突然去っていったためもりに一種の虚しさを覚えながら、ルアは肩をすくめる。

麗しき兄弟愛はいいのだが……どうにも暑苦しい。

フレイムはふいに思い出したのか、唇を尖らせて話題を変えた。

ブラッドの裾を掴もうとするが、あいにく腰のあたりまでしか届いていない。

仕方なく彼はブラッドが纏っていたローブを掴んだ。

『聞いて下さいよ、兄さん。また姉さんたちがブレイズのことを苛めたんです……』

ブレイズ……末っ子である彼女は、フレイムの双子の妹である。唯一の妹、しかも双子ということもあってフレイムは彼女を溺愛している。

二卵性双子のせいか、フレイムとブレイズは全く似ていない。フレイムは誰が見ても端正な顔立ちをしていたが、ブレイズは美人というわけではなかった。

まったくの、平凡。それが祟って上の姉達から蔑まれているのだ。

ルアは呆れたように溜息をつく。

どうして王族というものはどいつもこいつもこうなのだ……。

少し自分と違うと言うだけで軽蔑の視線を向ける。そんなフレイムの姉たちが、正直なところあまり好きではなかった。

ブラッドやフレイムはそういうところがない分、王族としては“マシ”な分野にはいるかもしれない。

『なんだと？またか……。いい加減あいつらも大人にならないと……』

……。きつとブレイズが可愛いから嫉妬してるんだろ』

『ううん、だってブレイズよりも姉さんたちの方が綺麗だよ？ブレイズってわりと顔普通だし……』

『……お前ほんとに顔のこととなると容赦ないな。大丈夫、姉さんたちもそこまで悪意があつてやつてることじゃないから。許してやれ、な？』

『でも……ブレイズ、泣いてたんです。ブレイズを泣かせる姉さん

「たちなんて、嫌いだ……」

嫌い。

家族思いのフレイルムがその言葉を家族に対して使うのは珍しい。

自分のことを愛してくれない母親にさえ、嫌いなどと言ったことがないのに……。

彼の中で、どれだけブレイズが大きな存在なのかわかる。

ブラッドも意外な言葉に一瞬目を開いたが、ついに苛立たしげに息を吐いた。

ベリツと、ひつついてはなれなかったフレイルムを引き剥がす。

「まったく…わかった。俺からあいつらによく言うておく。でも、嫌いなんでいうなよ。せつかくの家族だろ？」

そして、フレイルム以上に家族想いなブラッド。

彼は異常なほど、家族の悪口を嫌った。妹たちに対しても、部下に対しても……溺愛している弟に対しても、家族の悪口は厳しく律している。

急に怖くなった兄の目つきに少し怯えたような色を見せながら、フレイルムは「ごめんなさい」と言った。

「ま、わかればいいんだけど…。ほら、もうそろそろ時間じゃないのか、フレイルム。次数学の授業だろ？」

「え……うわっ、ほんとだ！すみません、じゃあまた後で稽古して下さいね、兄さん！」

フレイルムが胸から懐中時計を取り出して、時刻を見る。途端さつと顔を青くし、挨拶もそぞろに踵を返した。

ルアも用事があったため早足でそれに続こうとしたが、足を踏み出

す前に腕を掴まれる。

『ルア、お前は残れ。話がある』

今まで自分のことを蚊帳の外にしていたくせに……。突然誘われてもこちらの事情というものがある。

ルアはむっとして掴んできたブラッドの手を振りほどこうとした。しかしこの国最強と言われている彼の力は強い。そう簡単には解けそうもなかった。

『放して下さい。僕はこれから会合が……』

『お前まだ13だろ。ジジイどもの会合なんて出なくていい。俺と来い』

『成人の儀は済ませました。それに僕は先代の方から学ぶことが……』

『お前は真面目すぎなんだよ、バーク。いいか、これは女王命令だ』

女王命令。

ルアはぐっと言葉に詰まる。

そう言われてしまえば、どんな抵抗だって無に還る。“白ウサギ”にとつて“女王”の命令は絶対なのだ。

逆らえばその時点で自分の存在が消されて、新しい“白ウサギ”が就任するだろう。そんなものだ、この世界など。

一瞬押し黙った後、ルアは諦めたように肩の力を抜いて、そこにあった棚に本を置いた。

女王に謁見するのに本を持っていたとなればまたからかわれるのがオチだ。

『わかりました、行きます。行きますから。さっさとこの手を放し

て下さい』

『うん、わかればいい』

いけしゃあしゃあと笑って腕を掴んだまま歩きだすブラッドをきつく睨みながら、ルアはつまづかないように歩いたのだった。

そして、お茶会インお城リターンズ。

ルアはいい加減飲み飽きたダージリンの紅茶を口に含み、それを嚥下した。

紅茶なんてものは常々レーテに強要され飲んでいるため、ちっともおいしいと思わない。

どうしてこんなものを好んで飲むのか、王族なんてものは……。

「どうかしたかの、ルア。随分と荒んだ顔をしているようじゃが」

目の前で女王が艶やかに笑う。しかしその目元は連日の疲労のせいか垂れてしまっている。

やはり“女王”の業務というものは相当過酷なものらしい。“女王”の平均年齢が短いのもこのせいだろう。

彼女の隣ではしゃんと背筋を伸ばしてブラッドが紅茶を飲んでいた。フレイムの時とは見違えるほどに印象が違う。

常にこうならいいのに……。ルアはため息を押し殺すようにして歯を噛みしめた。

「いえ……何でもありません」

紅茶が美味しくない、などと。まさか女王陛下に言えるわけがない。即刻首を斬られるだろう。

いや、正確に言えばかなり上質であることには変わりはないのだろうが……やはりレーテの淹れる紅茶の方が香り高いし癖がない。

「なんじゃ、遠慮しておるのか。心配せんでよい、お前はブラッドのお気に入りじゃ。処刑はせんよ」

「そうだよ、ルア。素直に言ってごらん」

女王の隣でブラッドが優雅に微笑んだ。

この野郎……いくらなんでもキャラ変わりすぎだろ。

ちなみにこの爽やかスマイルはフレームとルア以外のものすべてに振りまくから、ブラッドのキャラ付けは「優しいお兄さん」ということになっているのだ。

どうして自分らにだけこんなにもキャラが違うのか……その答えが出ることは永遠になかった。

仮面に隠れたブラッドの意地悪い笑みに、ルアはむっと口をとがらせて不機嫌そうに言った。

「この紅茶、まずいです」

自分の言葉の無礼さに気づいた時には既に何もかも遅かった。

はっと息を飲むルアの前で、女王とブラッドが目を見開いてこちらを凝視する。

ああ……さすがにこれは、終わった。いくらブラッドが弁解したところで自分の首は床に転がるだろう。

ルアは顔を真っ青にして13という懐かしい人生を思い出し始めた。その時。

ぷっ

ブラッドと女王が、同時に吹き出した。

呆然と口を開けるルアの前で、顔立ちのよく似た二人がテーブルをバンバンと叩きながら爆笑する。

ブラッドが爆笑するのは、かろうじて理解できる。決して笑い上戸というわけではないが……もともとこういう性格だ。

だが、女王が……爆笑……？

あ、駄目だ。なんだか頭が痛くなってきた……。

「女王さま…… お願いですからそんなはしたない笑い方しないで下さい…… 民に見せられませんよ」

「ぷつくくく…… ほんにお前は面白い奴じゃのう……。よく気付いたものじゃ。今日のお茶は庶民の店から買い寄せた、安物じゃよ」

ひとしきり笑うと、女王は自分のカップを傾けてネタばらしをしてきた。その肩はまだ笑いに震えている。

どつりで…… 以前飲んだ紅茶よりも格段に味が落ちていると思った。ルアはそつと溜息をつきながらまずい紅茶に口をつける。

女王のカップには並々と紅茶が注がれていて、一口も飲んだ後がない。きつと自分と同じ心持で、まずいと思っっているのだろう。

でも、ならなぜわざわざそんなことを……？ 純粋な疑問には、口に出さずともブラッドが答えてくれた。

「私はいつも街に行っているせいか庶民口ですのでね、お優しい母上はそれに合わせてくれるんですよ」

「ブラッド、世辞を言っても何も出んぞ」

「まさか、私は母上とフレイルムという存在があるだけで幸せですよ」

「そこまで欲浅な人間ではなからう」

笑顔で交わされる会話に軽くいらっとする。

（なんでこんなにもキャラが違うんです、ブラッド様……）

何も一人称まで変える必要はないと思う。

完璧すぎて若干滑り気味な演技にルアはげっそりと肩を落としながら、女王の次の言葉を待った。

自分をお茶会に呼び出すなんて、よほどの理由があるはず。きっと明日行われる女王決定戦コロナムについてのことだろうとは想像していた。

“女王”の“カード”が欲しければ、生き残ること……

それが、唯一出されたルール。フレイムやブレイズなどはこれを読んでもいまいちピンとこなかったのか、首を傾げるばかりだった。もちろん自分にもよくわからない。

危険があることは間違いないのだ。なら、フレイムの補佐としてしっかりと知っておきたい。

ルアの居住まいが正されたのに気づいたのか、女王とブラッドは笑うのをやめ、真剣な顔に戻った。

「どうじゃ、ルア。第二王子は良い子であろう？」

前にも同じようなことを聞かれた。もつとも、2年前のあの日はブラッドのことを聞かれたのだが。

女王が狂ったように笑いだした、あの日。ルアはブラッドの補佐からフレイムの教育係補佐に異動になった。

別にブラッドに執着していたというわけではないからいいに城……

あまりに急の異動だ。人懐っこいフレイムはすぐになつてくれたが、ブラッドに対して懐かしさは覚える。

「はい。ブラッド様より扱いやすくて助かります」

「ふふ……問題児だと言われておるぞ、ブラッド」

「はい、私の力が及ばぬあまり、補佐のルアには多大な迷惑をかけました」

塵ほどもそんなこと思ってないくせに、よくぬけぬけと……。

少し睨みを利かせてブラッドの方を見ると、彼の方もこちらを睨み返してきた。どうやら先程の評価に不満を持っているらしい。

女王はにらみ合うルアとブラッドを交互に見やり、呆れたような苦笑を洩らす。

「ブラッド、いい加減化けの皮を剥がさぬか。話しにくくて仕方ない」

「別に化けてたわけじゃないんですけどね。それじゃ遠慮なく。母上、今日は俺に何の用ですか？まさかお茶会をしに来たというわけではないでしょう」

にやりと、ブラッドはいつも見る笑顔をみせた。本当に……化けの皮を一枚はがしただけで人とはこんなにも違うものか。

しかしその笑顔もなんだか少しこわばって見えた。何よりもいつもは意地悪気に細められている目が今日はいやに鋭い。

ブラッドは口元に笑みを浮かべながら、女王の方を睨みつけていた。女王は彼の問いにはすぐには答えず、焦らすように紅茶を飲む。今まで一口も飲んでいなかったのに……。

「ほんに、まずいのう」

「母上」

厳しい声でブラッドが女王を制止する。

しかし彼をぎろりと睨んだ女王は、彼の言葉を無視して関係のない話を続けた。

まるで、逃げているようだ。

何から？

「何故お前はこのようなものを好むのじゃ。不思議で仕方ない」

「母上！」

「一度高級な茶を飲んでみることにじゃ。このような安物ばかりでは……」

「母上っ！！まさか

まだ覚悟ができていないのですか？」

覚悟。それはどういう意味だろう、とルアがブラッドに視線を向けるが、彼はこちらを向こうとしない。それどころか、自分の存在を忘れていたようだ。

それは女王の方も同じで、唇をぎりりとかみしめたまま振動で震えるカップを睨みつけていた。

ここは、自分の出る幕ではない。ルアは緊張で高まる鼓動を抑えながらごくりと唾を飲み込む。

部外者である自分が口を出すには、あまりにも重々しい雰囲気。これが先ほど笑っていた男と女だとは思えなかった。

「覚悟、じゃと？」

少し離れた、ここからでも彼女の動揺っぷりが手に取るように分かる。

女王はガチャンと荒々しくカップを置くと、吼えるように言った。

「そんなもの、出来ているはずないじゃろうがっ！」

「なら今この場でして下さい！もう時間がないんです。明日なんで

すよ？本当にわかって言っているんですか」

「っ……お前こそ！自分の言っていることがわかってるのか！！お前の言っていることは、つまり……」

「わかってますよ」

腰を浮かせかけていたブラッドが、急に冷めたような声を発する。ぎりぎりとした怖い形相で歯を噛みしめる女王に対して、どこか軽蔑するような冷たい目を向けた。

「俺はとりあえずブレイズを殺します」

一瞬、何を言ったか判らなかった。カタン、と音を立てて世界が壊れる。

それは女王も同じだったらしく、虚ろな目を向けると彼女もカタカタと細かく震えていた。

あまりにも突然の言葉に硬直する二人をよそに、ブラッドは冷静な声で続ける。

「フレイムはきつとブレイズだけは殺せないでしょうからね。それから他の妹達は必要があれば掃除まったくしときます。全部、終わったら

「……っ……やめよ！」

「……何を怯えてるんです、貴女は。こうするしか彼を生かす方法がないなら、俺は躊躇いなく フレイムに殺されます」

「黙れっ！！！」

バシッ

すさまじい音が部屋に鳴り響き、ルアはようやく我に返った。ブラッドの言葉があまりにも衝撃的すぎて、頭痛がする。

女王に右頬をひっぱたかれたブラッドは唇をかみしめた。悔しいからか、悲しいからか……ルアにはわからない。わからないことが、多すぎる。

どうして、女王もブラッドも泣いているのだ。何で自分だけが取り残されたようにじっとしているのだ。

わからない……わからない。どうして、こんなにも近い二人が、遠く感じる。

いや……遠くへ行ってしまおうと不安に感じる。

女王がガタンと音を立てて立ちあがった。そのまま大きな足音を立ててドアの方へ歩いていく。

ブラッドがあわてて止めようとするが、到底制止できそうな勢いではない。

「何故、じゃ。妾はそんなに多くのものを望んだか!!」

「……母、上……」

「覚悟じゃと?そんなもの、出来るはずがない……っ!何もかも、失うのじゃぞ!娘たちも……お前も!何故、何故じゃ。ずっと一人だったではないか。今までずっと一人ではなかった……っ!」

「母上っ!」

「もう、いいでしょう?!私だって、いい加減幸せを望んだっていいじゃない!!」

「……………っ!」

一瞬、女王の声が若々しい女のような高いものに聞こえた。

また、だ。ルアは呆然と口の中で呟く。また、女王が若く見える。

幻覚だとわかっていても、長年押し殺していた感情があふれ出したせいでどうしても彼女が弱々しい、ただの少女のように思えて仕方なかった。

同じ幻覚がブラッドにも見えていたらしく、呆然と「母上」と呟く

声が妙に痛々しい。

女王はこちらをギンツと睨みつけ、背中を返すと部屋を飛び出した。

「っう……さっすが母上。ものすごく痛いぞ、これ」

女王が出ていき、ブラッドが諦めたように腰を落とした。先程思いつきりぶたれた頬を指先でさする。

今さっき叩かれたばかりだというのに、そこはもう紫っぽく腫れていた。心配そうにルアが触れると、なだめるようにブラッドは笑う。その瞳に、もう涙はない。

「平気平気。一応俺、母上よりも強いんだからな」

「……それほど強いブラッド様が、何故フレイルム様に殺されるんです」

「そりゃあ、フレイルムが次の“女王”になるからだよ」

意味が、わからなかった。

確かにフレイルムは強いが、兄であり武芸の師匠であるブラッドには遠く及ばない。

それなのに、なぜ負けるのだろうか……。ブラッドなんて、ルアやイオ、レーテが3人がかりで襲いかかってもさっぱり勝てない相手なのに訝しげな表情を見抜かれたか、ブラッドは少し眉尻を下げるとフレイルムにするように「いい子いい子」をしてきた。

不器用だが、優しい。フレイルムはいつも、こんな兄を見上げて何を思っていたのだろうか。

「ごめんな、お前だってまだ13なのに……血生臭い話なんて、本当は聞かせるべきじゃないんだ」

「な、何を言い出すんですか！僕だって闘えます！」

「いや、そういう意味じゃなくてな……。ま、子供だからって甘いところが俺の駄目なところなんだけどな。ルア、一つだけお願い聞いてくれるか？」

「……第一王子の命令とならば逆らうわけにもいかないでしょう」

「いや、命令じゃない。フレイムの家族としての　　お願い、だ」

ルアはぐつと息を詰めて押し黙った。

まさかこんな切り返しをしてくるとは思わなかったため、少なからず動揺する。

自分と彼らの関係なんて、“カード”上の脆く儂いものだと思っていた。信用しているともでもなく、血の繋がる家族でもなく、ましてや互いに依存する恋人でもなく　　。

それが、こんな……まるで自分が、身内のような話し方をしてくる。彼らにとって、一体自分はどっという存在なのだろう？

「　　わかりました。何かあるうともその約束を破らないと、ここに誓います」

本当は、ここで剣を出して相手に向けると言うのがお決まりの展開とやらなのだろう。

しかし生憎自分が持っているのは何冊かの文庫本と、懐中時計と……一丁の拳銃ぐらいしかない。

仕方なくルアは、懐から銃を取り出してブラッドの方へ差し出すように向けた。

ブラッドもその意味をくみ取ったのか、少し苦笑気味ながらも腰から愛用の剣を抜く。

シヤラ…

綺麗な音がして、剣が抜けた。

そのままブラッドは剣の刀身をぴたりと銃身に添わせる。

「……ああ、約束だ。これから何があっても、何が起こっても
母上を、許してやってくれ」

ルアは目を閉じてこくと素直にうなずいた。

涙を流したまま部屋を飛び出した女王を思い出す。まるで、子供の
ような弱さと残酷さを秘める女王。それでも、悪い人には見えな
かった。

我ながら、随分と子供っぽい理由で決めるものだ。ルアはブラッド
に気づかれないほど小さく、苦笑いをした。

「あの人は、弱いだろ？ずっと、一人だったんだ。子供の時から、
ずっと……。だから初めての家族である俺に執着するし、“家族
”という存在を放したくないと思っている。でもな、母上が一番救
いたいと思っているのは　　フレイムだよ」
「え……？」

「母上は、昔の自分の姿をフレイムに重ねている。ずっと一人で笑
って、泣いて…傷ついてきた、自分に。だからきつと、フレイムを
自分と同じ闇へは落としたいんだらうな。だからあの人は2年
前俺のところに来て、こう言ったんだ。フレイムを助けてくれ、っ
て」

「それは……」

「ああ、考えてみれば滅茶苦茶残酷な言葉だよな。女王決定戦で生
き残れるのはただ一人だけ…。それはつまり、俺に死ねって言う
ていうようなもんなんだから」

ごくりと、無意識のうちにつばを飲み込んでいた。ブラッドの瞳がその時のことを思い出したのか、少し悲しそうに揺れる。それと同時に、カッソと剣と銃が触れあって金属音を生み出した。

「だけど……あの人の涙を見たとき、文句を言う気も失せたな。あの人が、フレイムを助けると言うくせに俺に死ぬなって泣きつくんだぜ？ほんと、矛盾してる。人の心は、矛盾してるよ」

「それはきつと、女王さまが母親だからです」

ブラッドの言葉を遮るようにして、ルアは口を挟む。彼は目を開いて、ルアを見た。

だれか一人を生かしたかったなら、他の者すべてを犠牲にしなればいけない。

彼にフレイムを助けると懇願しに行ったとき、女王　母親は、どんな心境だったのだろう。

フレイム
息子を助けて。
ブラッド
息子を殺して。

「きつと、フレイム様のこともブラッド様のことも、天秤にかかられないくらい大好きなんだと思います。フレイム様にもブラッド様にも、長生きしてほしいんです。だから、えつと、ブラッド様も、女王さまを許してやって……」

最後まで言い切る前に、身体を抱きすくめられた。突然背中に触れる腕の熱さに、とっさに「何するんですか」という言葉が喉まで出ようとする。

しかし、押し殺したような泣き声と首筋に落ちてきた滴が、それを

阻んだ。

ブラッドはルアの小さな体を縫りつくように抱きしめながら、震えている。

自分よりも、ずっと大きな彼が……強い、彼が。

強さというのは、こんなにも脆いものか。

「わかって、る……っ……わかってるんだ、全部……っ！っふ、あああああっっ！」

翳る空に、死を覚悟した獣の慟哭が響く

……

どうも、ついに風邪をひいてしまいました……。

更新日時、2日も遅れてしまった件、本当に申し訳ありません！この時期は本当に持病が発作を起こしてしまうので、体調管理には気をつけてるんですよ……。

あ、でも病弱とはちやいまっせ！(〃〃ゞ

その証拠に一日10時間寝ただけで全快しましたから！RPG並の回復力……。

ところで……私の言葉ってちょっとなまっているのでしょうか……。クラスメイトに「どこの方言？」と言われたので……。

え、普通に「ちやいまっせ！」とか「なんでやねん！」とか「てめえしばくぞー！」とか言いますよね？あ、いや最後のは脅しの時だけです。

本文に皆さまの知らない方言が入ってたらすみません……。

つてまた無駄話を長々とorz いい加減学ぼうよ、私……。

それでは大人しく解説に入りましょう……。

今回、ものすごく書きづらかったです。女王さまの口調……あれどうにかならないのか……。一言のセリフでも弱2分考えて検討しますともすれば爺キャラver.2になりそうでした……(´・`・´・`・´)

あ、もちろん一人目はレーテくんで。

えー、今回はルアの感情が主ではないので心理描写は極端に少なくしました。その代わり女王様とブラッド様の複雑な心境が伝わればいいと思います。

ブラッド(Blood)というのは日本語で「血」を意味します。ですから題名は「血の慟哭」……つまり「ブラッドの慟哭」です。

なんて単純明快……他に案なかったのか…。

設定としては、前話から2年後のフレ임様9歳、ルア君13歳です。フレ임様誕生日の前日ですよー。

（えー……実はルアの年齢の部分、その日のうちに12から13へと訂正しました。年齢ミス、申し訳ありませんでした！）
ということは、次話は……ということになります。

うわーい、ひっさびさの残酷表現キター！ヽ(´▽｀)ノ
なーんて喜んでる私は重度の変質者です

えー……とにかくですね、次話は十中八九残酷表現が入りますので、苦手な方はお気を付け下さい。

大体程度は……レイズ殺人（第2章ep2）よりちょっと上、ぐらいだと思えます。

前々から思っていたのですが……この小説、R15タブとか残酷描写タグとかけなくていいんでしょうか……。

やたら前書きで注意書き書いてたり番外編がいけない方向へと走ってっちゃってますが　許される領域、ですよ？

もう少しエロのターンを少なくすればなんとかなると思うんだ、うん……きっと。

総合数PV100,000突破しました！

あれ、この間80,000突破祝　ってことで番外編を書いてたんだよね、私……。

何やら本当に番外編の需要が高かったようです（笑）

それでは、読者の皆様に改めて感謝の言葉を！

ありがとうございました！

【Chapter - 4【Flame Guilty or Innocent

かなり残酷な描写があります。

血、狂気など、苦手な方はお気を付け下さい。

飛ばす場合は、【chapter - 2【Crossing Knight
ep3夜明けの逃走劇のフレイム
の話を読んでいただきますと、大体の話の筋はわかると思います。

今回、視点がコロコロと変わります。

読みにくいかもしれませんが……一応「冒頭^{ルア} 中盤^{フレイム} 挿入^{ブラッド} 終盤^{フレイム}」
となっております。

今回、かなり長いです。

赤は何の色、と。

昔、誰かに聞かれた気がする。

誰だっただろう……自分はその時、答えることができなかったのだ。
女王さまの服の色、ブラッド様の髪の色　　フレイム様の瞳の色。
綺麗なものが、ありすぎて。

だけど今だったら、答えられる。

赤は　　……

死ほのおの、色。

「フレイム様、剣をお取り下さい」

感情のない声にフレイムは不安を覚えながらも、ズシリと重い真剣を受け取った。

こんなに長い真剣など、剣舞の時以外触れることすらない。ブラッドとの稽古はいつも安全のため、木刀だった。

隣にいるブレイズなどは真剣を見ること自体が初めてだったのか、その禍々しい輝きにほんやりと魅せられてる。

「フレーム、これ、綺麗だね」

自分よりも精神年齢が低いブレイズは、素直な感想をこぼした。彼女の手握られているのは自分と全く同じ、柄の青い真剣。

運動神経の優れないブレイズにこんなものを持たせて……危なくないのだろうか。

フレームは過保護とわかっていながらも、唯一の可愛い妹を心配そうに見やる。

「これ、どうやって使うのかしら……」

つうつ……と、ブレイズが細い指を銀色の刀身に這わせた。彼女の手をそっと掴んでそれを止める。

「駄目だよ、ブレイズ。兄さんが言った。剣っていうのはブレイズみたいな女の子は使っちゃだめって」

「えええー……なんでフレームは良くてあたしは駄目なの？よくわかんない」

「どうしても。とにかく、駄目だからね」

「むうー……わかった」

まだ不満げながらも、ブレイズは渋々頷く。彼女にもこれが何の用途に使われるかぐらいはわかっていた。

どうして、こんな　　ブレイズと自分の、誕生日に。

剣を渡し終えた衛兵が相変わらずの無表情で去っていくと、重い沈

黙がその場を満たした。

朝、目をさましてからほどなくして案内されたのは白い部屋
何も無い、白い部屋だった。

二人きり、武器とともに残される。フレイムは無意識のうちに固く
剣を握りしめ、ブレイズの肩に寄り掛かった。

ここは少し、寒い。ブレイズの身体がカタカタと細かく震えている。
互いを慰めるようにして、身体を添わせた。肌に触れるぬくもりが
心地よく、どこかもの悲しい。

「ねえ、フレイム……」

「ん……？」

「あたし、なんだかちょっと怖いの」

「どうして？」

「今日の“女王決定戦”って一体何なのかなって考えてね、もしか
したらフレイムが遠くに行っちゃうんじゃないかって、不安なの……」

「ははっ……なんだ、そんなこと。大丈夫だって、きっと何も起き
ない。僕はブレイズのそばにずっといるよ」

「……ずっと？」

「うん、ずっと」

「ねえ、フレイム」

「今度は何？」

「あたしのこと、ちゃんと護ってね」

「……うん」

いつもの、言葉。ブレイズはいつもいつも、何かあればこの言葉を
口に出してくる。

寂しがり屋であるということとはわかっているのだが……自分に頼る
ばかりのブレイズに、フレイムは呆れを覚えながらも頷いた。

ブレイズは何でもかんでも悪い方向に考えがちだ。何を気兼ねしているのか知らないが、きつと今回も杞憂に終わるのだろう。双子の兄が適当に答えたのに気づいたのだろう、ブレイズはぶうつと頬を膨らませて怒った。年に不相応な仕草だが、何故か似合っている。

「ちゃんと聞いてよ、フレイムったら。あのね、あたし……不安なのよ」

「何でさ？みんな昨日までは普通だったじゃないか」

「そうだけど……でも不安なの！だって、今日って“女王決定戦”^{「コロシウム」}の日でしょ？それで、もし誰かが死んじゃったりしたら……」

ブレイズの薄い赤色の瞳に涙が浮かぶのを見て、フレイムはあわてて彼女の肩を撫でた。

確かに、自分も以前発表された”女王決定戦”^{「コロシウム」}については気になるところだ。もしかしたら、とも思う。

それでも、今それを言っただけでブレイズの不安を駆り立てたくない。

「心配しすぎだよ、ブレイズ。僕たちはやれるだけやって、危なくなったら棄権すればいいんだって。家族内だったらどうせ兄さんが優勝するんだから」

「でも……怖い、怖いよ、フレイム……っ」

ポロリ、と。彼女の大きな目から熱い滴が落ち、フレイムの手にあたってはじけた。

まずい……白い部屋に二人きりという状況が余計に彼女の不安を増大させているのだ。責めて誰か兄姉がいてくれれば……。

フレイム自身泣きたい状況に追い込まれながらも、近づいてくる足音を耳にして扉の方を見た。

誰か、来る……？ほっと安堵の息をつくフレイムに対して、ブレイ

ズはびくりと恐怖で身体を震わせた。

「おお、フレイムにブレイズだな。誕生日おめでとう」

「兄さん！」

ガチャリと鈍い金属音をたてながら入ってきたのは、ブラッドだけではなかった。いつも通り華やかな衣装に身を包んだ一番目の姉に、不機嫌そうに眉をひそめる陰気な二番目の姉、年の割に子供っぽい仕草の多い甘え上手な三番目の姉……母以外のすべての家族が集合している。

フレイムは妹のもとを離れてブラッドに抱きつこうとしたが、その手に握られていたものを見て硬直した。

恐る恐る姉達の手を見ると、一樣に同じものが握られている。

「兄さん、それは……」

「ん、ああ、これな。一応全員ハンデなしってことで武器は統一されるらしいぞ。リーチの長い俺ら男子には有利だと思わないか？」

「有利って、何が……」

不満げなフレイムの言葉が続くはなかった。

すさまじい音がして、扉の上の天井から何か黒いものが落ちて……いや、降りてくる。

突然出現したモニターに、その場の全員の注意は向いた。ほどなくして、そのモニターから小さな電気音が発せられ、画面がつく。

「母上……?!」

『全員集合したようじゃな。どうじゃ、今の気分は』

画面に映し出されたのは、椅子の上で優雅に足を組む母そのものだった。その隣には自分の側近であるはずのルアが何とも言えない表情で待っている。

母の笑顔には、歪みきった笑み。そこで初めてフレイムは、背筋が凍るような恐怖を覚えた。

どうしてだろう。自分の母なのに、よく知った人なのに……まるで別人に見える。

母は艶やかな唇を吊り上げながら、手に持っていた扇で口元を隠すようにした。

『さあ、今日は楽しみにしていた“女王決定戦”……ふふっ、楽しみじゃのう。興奮するのう。一体だれが生き残るか』

言っている意味が、わからない。フレイムはいまいちピンと来なくて首を捻るが、ブレイズには伝わったらしい。顔を真っ青にさせると、より一層大きく震えだした。

母はそんな彼女に視線を向け、目を不愉快そうに細めた。しかしすぐにそらすと、今度は高圧的に全員を見下ろす。

『それでは、妾の方から簡単な説明をしてやろうではないか。ルーは簡単じゃ、誰か一人になるまでその白い部屋で殺し合いをする……それだけじゃ。棄権は一切認めぬ。ちなみに、逃げようとしても無駄じゃぞ。その部屋は決して破れん。それではみなもの、健闘を』

「余計な説明はいらないわっ！ さあ、もう始まってらんでしょ？」

母の言葉を遮って、一番目の姉が高らかに言った。その目は爛々と輝いている。

一体、何が始まるというのだ。殺し合い？ 誰か一人になるまで？

嘘だろ。

しかし、フレイムが状況を理解する前に一番目の姉は動いていた。その身を屈ませて、自らの剣を腹につきたてるように剣を引く。

『ほんにお前はせっかちじゃのう。まあよい、どうせいつ始めようが結果は同じなのじゃからな。さあ　この日のために生まれてきた我が子らよ！せいぜい妾を楽しませるがよい！』
“女^コ王^{ロシアム}決定戦”の幕開けじゃ！！』

視界に、赤い花が咲いた。

フレイムは呆然と、赤のシャワーを浴びて哄笑をあげている一番目の姉と、喉笛を一突きにされた三番目の姉を交互に見やる。

それは、突然の出来事。何があったのか、すぐには理解できなかった。

「あ……あ……あ」

こちらまで飛んできた、小さな赤い雫。指先についたそれに舌を這わせると、さびた鉄のような味がした。

あまりの痛みに倒れ伏していた三番目の姉も、必死で手足をバタバタさせて体を後退させる。可愛い系の顔は、血と涙でぐしゃぐしゃになってみるも無残なものだった。

その喉には、わずかに急所をそれてはいるが、あまりにも痛々しい風穴。空気を満たすは、ツンとした癖のある血の匂い。

ようやく母の言葉を理解した時には、何もかもが遅かった。

「い、いひいいああっつ！ひゃ、ひゃめへ！ひゃめへ！」

喉からおびただしい量の赤を流しながら姉は、滅茶苦茶に剣を振りまわす。何かを言っているが、驚きに舌を嚙んでしまったのか言葉になっていない。

一番目の姉はいつもと同じ明るい笑顔を見せると、その剣を自身の剣で絡め取った。剣を押さえられて動けなくなったすきに、彼女の脇腹に鋭い蹴りを入れる。

「ひがあっ！ひゃ、ひゃめへえっ！怖い、怖いよおおっ！！」

「あら、どうして？大丈夫よ、これ以上可愛い妹に酷いことなんてするものですか」

そういいながら、笑顔で、何度も蹴っていた。それでも彼女の醜い笑顔が、女神のそれに見えたらしい。

蹲りながら三番目の姉は彼女の足に縋りつく。そのまま、足の先をなめそうな勢いで上目遣いを使い、媚を売った。

いつものこと、いつものことなのだが　そのあまりにもグロテスクな光景に、フレ임は遅れて吐き気を覚えた。

剥がれた爪、ぐしゃぐしゃに乱れた髪、絵の具のように引き延ばされた血糊、ギラギラと光る恐怖の瞳……これは、どんな悪夢だ。

そう、どんな悪夢だ。

「ほ、ほんと？お姉さま、綺麗で優しいお姉さま……だ、大好きよ？大好きだから、お願いもう痛いのはいや……」

掠れ声で、何度も「助けて」と言う。しかし言葉半ばにして、彼女の口は永遠に閉ざされた。

一番目の姉は口角をグイッと上げると、手に持った血まみれの剣を、足元で命乞いをする彼女の眼球に突き刺した。

ぷっつ

奇妙な音を立てて、剣先が白の部分に沈み込む。白が、赤に。恐怖が、絶望に。

ぐりつと剣先が回され、すでに血にまみれた眼球が掻き回される。そのままさらに剣先はひかれるでもなく奥へ、奥へと進んだ。

人間のものとは思えない叫び声をあげる三番目の姉は無茶苦茶に手足を振りまわすが、動けば動くほどに剣を奥へ送ってしまう。

剣を突き立てた姉は、それを実に愉快そうに見ていた。

やがて、もがく腕が力を失ったように弱々しくなり……ついに、落ちた。それなのに姉は、まだ殺したりないともいうように深く剣を突き刺す。

ごぼっ

剣を抜いた直後、湯が沸騰するような音を立てて眼球のあった場所から白濁交じりの血がこぼれた。

フレイムは呆然と、何も言えないまま動かなくなったそれを見つめる。

これが、自分の姉なのか。綺麗で、甘え上手だったあの、姉なのか。こんなに、気味の悪い屍もの体が。

「ふっつ、ついにやったわ！やったわあっ！ウザい、あんたウザいのよ！ちよつと可愛いからってあたしの婚約者にまで手を出すなんてさあ！ふふ、でもどう？あんたが、美しい？こんなにブスなあんたが！ひやははははははははっ」

もう、動いてないのに。完全に狂っている姉さんは、屍それ体に剣を突き立てた。ぐちゅり、と……そのたびに不気味な水音が部屋を満た

す。

ほどなくしてそれにも飽きたのか、今度はそのぎらつく瞳を二番目の姉に向けた。

「今度は貴女よ、この陰気女ああっ！」

鈍い動きで、血糊にベタつく剣を振りまわす。その攻撃をあっさりとよけて、二番目の姉は目を細めて笑った。初めて、見た笑みが……こんなに、歪んだものだなんて。

「滑稽ねえ、姉さん。優しくて明るい姉が、一枚剥がせばこんなに醜い女だっただなんて」

「醜い？あたしのどこが醜いっていうの？醜いのはそう、あの子よお！」

次々と攻撃を繰り出しながら、ぐるりと首を回してフレームの方を見た。見開かれた眼球に凝視されて、言いようのない恐怖で震える。しかし、見ていたのは自分の方ではなかった。自分を素通りして、今はもう動くことのない屍体に視線を突き刺す。

「でも光栄に思いなさいよ？あんたは女王であるあたしのために死んだ初めての女なんだからあ。ねえ、それに楽にしてあげたでしょおおお？」

狂ってる。この人はもう、狂ってる。

嫉妬と欲にまみれた女の姿を見て、フレームは戦慄を覚えた。とっさに彼女の視線から逃れようと、身体が後ろへと傾く。しかし、逃げることはできなかった。

「や、やめでええっ……！」

後ろから聞こえた聞き覚えのある叫びに、視界が真っ黒になる。まさか、嫌でも……一番目の姉さんも二番目の姉さんも三番目の屍ねえ体も、そこにいる。

だとしたら　　後ろにいるのは………………。
フレイムは、身体が反応するままに振り返った。

そこには、斬りつけられた足を抱え込むようにして血の海に蹲るブレイズと、それを優しい笑顔で見つめるブラッドがいた。

本能、とでもいうのだろうか。

それはとても、不思議な感覚だった。
“カード”は、人を引き付ける。特に最高権力を持つという“女王”の“カード”は、どんな女でも喉から手が出るほど欲しいそうだ。“女王”の座に対する、執念に近い、欲望。本能に近いものを自分たち女王の子供はみな持っていた。

ただし、女だけ。

自分やフレイムといった男性は、もともと“女王”になるにはふさわしくないとして星が定まっているのかもしれない。だから、何の欲望もわかないのか……。

その証拠に、間違いなく権力は自分の目の前にあるというのに全く

興味が向かなかった。

それは、執着という名の呪い。

ブラッドは冷めきった視線を、フレイムの背後へとそっと忍びよるブレイズに向ける。

(お前も、か)

彼女の薄い赤の瞳は、明らかに狂気の色を帯びていた。ギラギラと、上の姉たちと全く同じ眼球でフレイムの背中を凝視する。ブレイズでさえも。いや……弱い、ブレイズだからこそ。

この呪いに、耐えることができなかった。

あんなに震えていた彼女も、今では“女王”の座欲しさに双子の兄の背中を貫こうとしている。姉たちと同じ瞳で、笑顔で。

ブレイズの剣が躊躇なく振りあげられた。直後、ブラッドは身を屈ませて彼女の足を薙ぎ払うようにして切りつけた。

狂った獣のような叫び声と同時に、ブレイズがその場に倒れ伏す。一拍遅れて、フレイムがこちらを振り向いた。

彼は果たして、知っているのだろうか。最愛の妹が、今さっき自分を殺そうとしていたことを……

「剣を構えろ、フレイム」

母が、何故ブレイズでもなく、上の姉達でもなく、フレイムを“女王”の座に据えたいと思ったのか。今だったら、はつきりとわかる。

呪いだ。

彼女は、呪いに囚われず、民を思いやれる“女王”が欲しかったのだ。権力の欲にまみれず、狂気の色を帯びず　　綺麗な、“女王”が欲しかった。

既に呪いに呑みこまれているブレイズでは、役不足だ。

「こ、いさ、ん……」

こうやって、信じられないという“当たり前”の反応をしてくれる“女王”がいい。

狂気のままに平気で剣を振り下ろす妹達も　　そして、それを顔色一つ変えないで傍観する自分では、駄目なのだ。

“女王”になるべきは、彼だ。

ブラッドはニコリといつもの優しい笑顔をフレイムに向けた。彼の顔色はこちらが心配になるほど、蒼い。

妹の汚らわしい血がついた剣を軽く薙ぐと、足元にいたブレイズが悲鳴をあげた。故意ではなかったのだが　　斬りつけてしまったらしい。彼女の脇腹に深い傷ができていた。

しかしその痛々しい悲鳴に、呆然自失としていたフレイムが我に返った。まだ疑心の色を濃くしながらも、手にもっていた剣をチャキリと構える。

自分が教えた、そのままの構えに思わず吹き出してしまふ。これではどうやったって自分に勝つことなんてできないだろう。

「ど、どうして…どうしてこんな酷いことするんですかっ!!」

酷い事をしようとしたのはお前の妹の方だけだな。ブラッドは小さく聞こえないように呟くと、にやりと笑みに顔を歪めた。

「どっつしてって、俺も“女王”になりたいからなあ……。一生楽し

て暮らせるんだぜ？お前だつて欲しいだろ」

「そ、そんなものっ、いりません！！」

（お前だつたらそう答えてくれると思つてたよ……）

フレイルらしい言葉に、思わず顔を綻ばせてしまう。この状況で笑うという行為に、フレイルの瞳に映る混乱の色がより一層深くなつた。

「俺は欲しいんだよ。だからこいつを、殺すんだっ！」

彼を挑発するために、ブレイズの喉を一突きにしようと剣を振り上げる。

しかしそれが、彼女の喉に埋まることはなかった。

ずんっ

胸に感じる、重圧感。

内臓を抉られるような、吐き気。

肋骨の間と間を巧みにすり抜け背中まで貫かれた、銀色の刃。

肺が、圧迫される。油断してたとはいえ、まさかあの距離でここまで来られるとは思わなかった。

自分の大好きなああの赤い髪が、瞳が、すぐそばにある。何度も撫でてやった、あの髪が。何度も涙を掬った、あの瞳が。

どうして、泣いているんだ。何が悲しいんだ。何が寂しいんだ。

ほら、兄さんはこんなに近くににいるよ。ずっとそばにいるよ。ちゃんと、守ってやるから。泣くなよ。

この剣は、お前を守るためにあるんだ。俺は、お前を守るために生まれてきたんだ。お前を生かすために。お前が幸せになるように。

だから、なんで泣くんだ。ほら、お前を守る剣ならここに……。

カラン……

乾いた音を立てて、力を失った自分の指から剣が滑り落ちた。せつかく安心させようと思ったのに……これじゃあ、お前を守れない。

ごぼっ

異様な音とともに、喉の奥からこみ上げてきた血が口からあふれ出た。

ねっとりとしたそれはフレームに頭から降り注ぎ、綺麗な髪も瞳も穢してしまつ。

ああ……拭いて、あげないと。

ごめん、ごめんな。穢いよな、こんな色。お前の髪や瞳と違って、こんな赤黒い色、俺は嫌いだよ。

ごめん、ごめん……。今、拭いてやるから。撫でてやるから。涙も、血も……全部、消してやるから、な……。

ごめん、ごめん……母上。先に、逝くよ

……

頭を撫でようと思って上げられた腕は、その半ばで最期の炎を失い、パタリと落ちた。

最後に残ったのは、誰だっただろう……

最初に、三番目の娘が死にましたとき。眼球を潰されて、喉を突かれて。

ざんっ

次に、四番目の娘が死にましたとき。足と脇腹を斬られて、何度も串刺しにされて。

ざんっ

次に、一番目の息子が死にましたとき。心臓を一突きにされて、臓器を掻き回されて。

ざんっ

次に、一番目の娘が死にましたとき。左の眼球に剣を突きたてられて、横に顔が割れて。

ざんっ

次に、二番目の娘が死にましたとき。両腕両足を斬り落とされて、軀を横断されて。

ざんっ

そうして、残ったのは 二番目の息子。

「終わったあ……」

フレームは充足感に似た安堵を覚え、ふんわりと優しく笑った。

どれぐらいの時間をかけてしまっただろう。こんなにも手まどうな
んで、思いもしなかった。

彼は作業し終えたそれを一つずつ大事そうに抱え込むと、一つ一つ
を結んで、纏まりにした。

これがなかなか難しくて、苦戦する。やはり、もう少し水分が必要
なのだろうか。

この、こんがらがった髪の毛を結びつけるには。

「んー……これで、いいかなあ……」

フレームはゆるりと振り向き、そこにあつた血だまりにそれを浸し
た。思ったとおり、もう一度やってみるとかなりあっさり結べた。

一つに纏めたそれを持ってみると、かなり重い。持ち上げられるの
は、到底無理のようだ。

そう言えばこれは、人間の身体の部分で一番重い部分なんだっけな
……。

そんなことをぼんやりと考えながら、フレームはゆるりと笑う。

彼にひきずられているそれを見なければ、それが彼の狂気だとはと
ても気付かないだろう。

「さあ……復讐に行こうか。みんなだ」

た

五つもの首を携えた狂気の復讐者は、赤い部屋を後にし
……

うわあああああつ……………もう嫌だ……………これほど自分に嫌気がさしたepは初めてです。

鬱です、マジで。顔文字を使う気力さえありません。

これはあまりにもひどすぎますね……………いや、たぶん中盤まではまだ（私的には）許容範囲だったんですが、最後が……………。狂いすぎです、フレ임様。

冗談なく、吐き気がしました。頭がグワングワン言ってます。

こんなepの後は一丁ギャグでも言いたいのですが……………すみません、無理です。もうほんと、この状況を打開する術がありません。

正直、我ながら気持ち悪いepでした……………ごめんなさいごめんなさいごめんなさいorz

うーん、グロは大丈夫なはずなんですけどね……………私の場合キャラ達に感情移入してしまうので、その分反動が強いのかもかもしれません。イオの過去編でもそうでしたが、誰かが死ぬ場面では私は必ず泣きながら打ってます。な・ぜ・かいつの間にもやら泣いてます。

えー、ではちょっとテンションあげていきましょう！無理だけど！

オイ

とりあえず感嘆符疑問符を使えば何とかなるような気がしないでもないけど実際にはそんなことありえない。

あれ、このネタ前にも使った気がするぞ……………（。・。・（うーん……………どこだっけ？ま、いつか。

さあて、グロ本領を發揮してしまったepでしたね！苦手な方ほんとすみません！

ぶつちやつけこのepは読む必要はありません。すべて【chapter - 2】Crossing Knight or Knight ep3夜明けの逃走劇のフレ임様の話で補えます。

なぜここまで詳しく書いたし、私…… 〓（・・・*）

それでも最後の方なんてかなり省いたので、夜明けの逃走劇を参考にしていたけるとわかりやすいと思います。

あれ以上書いても気持ち悪さ倍増なうえ本編に関係ないので、颯爽と省かせていただきました、（*・・・*）ノ

今回の題名はフレイム（Flame）が主演ということで、「炎の狂気」「フレイムの狂気」という意味です。

今回、ほのおという字を「炎」にするか「焰」とするかすごく悩みました。

まあ形からしてこっちの方がかつこいいかな、ということで「炎」で……。

はあ……自分で書いて嫌になりました。でもまあこれで、ようやく話の山が終わりました！ブラッド様も死んだし！

……ってブラッド様ああああっ！！もうほんと、好きなキャラでした！君を失いたくなかったよ……っ！！

でも正直、居ても困るキャラだったんですよねー（・・・）ノ
考えてみればこの年で28……ということは、現在で言つと32です。

たとえばこれで16のアリスとくっつけようとする……

あらまあ！（・・・）

援助交際の出来上がりです。

えー、なんかこんなepを書いた後にギャグを言える私の神経を疑います、我ながら。

そんなこんなで、ブラッド様が出る幕はこれにて終了です。短い付き合いでしたけど、なかなか好きでしたよ〜（・・・）

今回はいよいよ過去編最終話です！今回ほどグロくするつもりはありませんが、相変わらずフレイム様が狂ってます。もうこのあたりから現在のフレイム様に近いんですねー。ああ、でも、なるべく綺麗にまとめたいと思います！

えー、全く違う話をしますが。
なんと！神様はちゃんといました！

11月11日総合PV数111,111アクセス！

やっべー……。3分ぐらい同じ画面をずっと開いてました(笑)
もうこれは、頑張って投稿しなきゃ天国にいる神様(注：死んでません)に失礼でしょう！
ということので5時から書きはじめてひっきりなしに打ってました…
…疲れたあ…。

先日、総合PV数10万突破祝の感想を貰ってしまいました！ありがとうございます！

皆さまの応援がある限り、頑張って執筆していきたいと思います！

赤い部屋に残されたのは、五つの首のない屍体

……

「僕には、わかりません」

心音が、水を打ったように静まり返った部屋の中でいやに大きく聞こえた。

ルアは幾度となく嘔吐した後を荒々しく掃除しながら、拳を固く握る。胃は完全に空っぽになったというのに、吐き気だけが消えてくれそうもない。

モニターに映った、赤い赤い血に染まった部屋。

もう、すべてが終わった後だった。赤い部屋に残されたのは、五つの首のない屍体。ルアは顔をあげてその中の一つを凝視した。

鼻の奥が、ツンと痛くなる。もはや涙は枯れ果てて流れそうもなかった。

どうして、ブラッドが死ななければならなかった。

「貴女は、こんなものを望んだのですか」

『目をそらすな！！』

ブラッドの身体から力が抜けたとわかった時、ルアは思わず下を向

いてその光景から逃避しようとした。

しかし隣で同じようにモニターを見ていた女王が、彼の頭を掴んでモニターの前に押し付ける。

それでも両目をきつく閉じた彼に、女王は自分自身モニターから目をはなさないように一喝する。

『よく目に焼き付けとけ！これが我が息子の死に様じゃ

！！』

あまりにも、ひどすぎる。

ブラッドの背中からちらつく、銀色の切っ先。それがどれほど深く彼の内臓をえぐっているか示していた。

彼の瞳に驚愕が浮かび、安堵が浮かび、ほんの少し恐怖が混ざり

最後まで愛おしげにフレイムの髪を見つめ、濁っていった。

あまりにもひどい死に様。あまりにも無念な死に方。

これが、彼の望んだことだと言うのか。

「ブラッド様を殺すのが、貴女の望みなのですか」

違うと、わかっている。的外れな言い分だ。そんなの、普段の彼らを見ていればよくわかる。

それでも、黙り込んだままピクリとも動かない女王を責める以外に、このいいようのない苦しみから逃れることなどできなかつた。

違う。わかってる。

このひとは、ブラッドを愛している。きっと、どんなものよりも。なら、何故。

ブラッドよりもフレイムを優先させた……っ！！

「何故っ！愛してもいないフレ임様を生かしたんです！！」

違う、それも違う。

だって、ちゃんとこのひとはフレ임に優しい目を向けてたじゃないか。

母親らしい目を向けていたじゃないか。

なんで、なんでだ。

なんでさっきから自分は空回りな問いを投げかけている。

答えのわかりきっている、問いを……。

自分は、このひとなんたと答えてほしいのだ。

正しい答えは何だ。

正しい問いは何だ。

「愛して、おった」

数秒間をおいて、ポツリと女王はしゃがれた声で言った。

濁った目をモニターに向けるでもなく、ルアに向けるでなく、虚空に向ける。

ふっと唇の隙間から洩れたかすかな笑いにルアは堪えようのない憤慨を覚え、彼女に掴みかからん勢いで詰め寄った。

ルアが目の前に立ったというのに、彼女は気づいてもいないかのようには振る舞う。いや　本当に気づいていないのかもしれない。

なぜなら彼女は、ルアを見ているわけでも今を見ているわけでもないのだから。

彼女の瞳はひたすら、過去に住まうフレ임に向けられていた。

「ならどうしてあんなに冷たくしたのです？！もっと……もっと別の愛し方があったはずでしょう？！」

わかりにくい、愛情。いや　あえてわからせようとしなかった、愛情。

彼の悲しみを、わかっていたのだろうか。彼の苦しみが、見えていたのだろうか。

どれだけ彼が悲しんで苦しんで、向けられない愛情に憧れたか……
彼女は、知っていたのだろうか。

女王の眉が一瞬ピクリと動いて、空っぽの瞳がルアの姿を写した。だんだんと焦点が合うにつれて、女王の身体から力が抜けていく。背もたれに頭をつけ、天井を仰ぎながらポツリと言葉を落とした。

「人にはな、ルア」

頭を押さえつけながら無理やりブラッドの死に際を見せた時の剣幕と打って変わって、ひどく穏やかな声に胸が苦しくなる。

本当は……自分は、全部わかっているのではないか？何故彼女がフレイルに愛を向けなかったかのも。

何故フレイルが女王を憎むようにけしかけたのかも。

「愛と、憎がある。表裏一体の感情……だが決して、混合してはならぬ感情じゃ」

滔々と、何の感情もこめないまま女王は語った。

ゆっくりとまぶたを閉じて赤の瞳に蓋をすると、細く息を吐き出す。

「いつかこうなることは、容易に予想できた。だから妾は、あの子を愛することが出来ぬ。何故だかわかるかのう、ルア」

「わ、わかりません！どうしてです……生きる時間が短いならせめて一時の幸せだけでも与えてやればよかったですじゃないですか！そう

すれば彼だつて貴女を愛して

「ならば、あの子は何を憎めばよいのだ」

冷徹な声で言葉を遮られて、思わずびくりと体が震えた。

ルアはふらりと後ろに一歩下がる。後ろ手を突こうと思って伸ばされた腕が、赤い画面のモニターにあたった。

首から上を取られ、すでに屍もの体と化した自分の元主人をちらりと見る。

頭を撫でてくれた腕は、血の海に沈み二度と浮き上がってこないだろう。

自分と弟にだけ向けていた子供のよ様な笑顔は、手の届かない深い奈落へと墮ちたのだろう。

ふいに、枯れたと思っていた涙がじんわりと瞳に膜を張っていった。彼の、最初で最後の涙が脳裏に焼き付いて離れない。

貴女を殺したのは、この女なのに。

『これから何があっても、何が起こっても 母上を、許してやってくれ』

僕は、貴方との約束のためにこの女を憎めません。

憎みたいのに、憎めない。

そんなことが、こんなにも苦しいだなんて思いもしなかった。

(ああ、だから……だ)

「運命つぎや、神てんなど……そんなもの、憎もうとも遠き存在。遠き存在ほしを憎々しげに睨むには、目が疲れるであろうな」

少しでも、彼が苦しくならないように。

「深い悲しみには、それと同等の憎しみが必要なのじゃ。憎しみは、神や運命などでは受けられぬ。誰かが、あの子の憎^{かな}しみを受けなければならぬのじゃ。そして、それが妾だった　それだけのこと」

彼が、狂わないように。

「妾は、愛されてはならぬ。あの子は、妾を愛してはならぬ」

優しい彼が、自分にむける刃を躊躇わないように。

愛と憎は、表裏一体のもの。交わってはならぬ、もの。フレイムが彼女のことを愛していたなら、果たして彼は彼女を憎めるだろうか。

憎めるとしても、母を殺めた自分を……彼は、許せるだろうか。愛した、母を。

「人はな、ルア」

ボロボロと留まらぬ涙を隠すようにして顔を俯けるルアを慰めるように、或いは自分に言い聞かせるように、彼女は同じ言葉を呟く。

「憎むことで、悲しみから救われることもあるのじゃよ」

彼が悲しまないように。

彼が狂わないように。

彼が躊躇わないように。

彼を愛さない。それがせめてもの、愛。

「っ……そんなの！言わないとわかりません……！そんなわけのわからない矛盾した正論、言ってくれないとわかりません！」

一瞬でも自分は、彼女を疑った。ブラッドとの誓約を破り、彼女を憎んだ。

後悔、と酷似した感情なのかもしれない。あまりにも哀しい彼女を許してやれなかったことに対しての自責がルアの胸を苛める。

「……知らぬでよい。お前もこれ以上、苦しめぬでよいのだ」

突き放されたのではない。傷つかぬように護ってくれたのだ。

言ってくれないと、わからない。ルアはもう一度だけ呟くように言ってから、俯けていた顔を上げた。

半ば睨みつけるようにして女王と目を合わせる。その水色の瞳には、まぎれもない意志が宿っていた。

「ブラッド様は命を、貴女は愛情を捧げました。自らの人生を犠牲にしてまでフレイム様を……護りました。だから、僕も……」

「ルア、よいのじゃ。お前は十分ようやってくれた。あの子に笑顔を与えたのはお前じゃ」

「っ……！いいえ！僕も……僕も彼を護りたいんです！お願いです、彼に……我が主人に忠誠を捧げさせて下さい！」

ビリリ、と。空気が震え、沈黙がその場を包み込んだ。

女王はルアの剣幕に気圧されたように押し黙っている。ルア自身、緊張に息を殺してじっとしていた。

相手はこの国の最高権力者。しかも残酷無慈悲と詠われる女王だ。

彼女に願い出るなど、余程の命知らずか自殺志願者のどちらかだろう。

鼓動が、早くなる。それが拒否されることへのおびえなのか、とんでもないことを口走ってしまったことへの後悔なのか、ルアにはわからなかった。

ただ、彼女の出す答えを待つ。

やがて、沈痛な溜め息が空気を揺らした。

「お前をブラッドの下にやったのは間違いじゃな。あやつに似て頑固になりおって……」

「女王さま!では……」

「ただし、条件がある」

呆れたような声音に期待で胸が膨らんだが、女王の厳しい視線にしゅんと萎む。

しかし、彼女の口から出た言葉は、意外なものだった。

「決して、死ぬではない」

「女王……さ、ま?」

「一度忠誠を捧げたのだ。何をしてでも生きて、あの子を守り抜け。あの子を一人にして寂しい思いでもさせてみよ、妾はお前を祟り殺すぞ」

「は、はい……!はい!」

戸惑ったように、次いでしっかりと、ルアは返事をする。床に額を押しつけんばかりに頭を下げると、女王の乾いた笑いが上から降ってきた。

ついつと視線をモニターの方へ向けると、過去に浸るような遠い目をする。そこには変わらず、首のない死体がある。

一瞬、彼女の瞳がきらりと光った気がした。しかし驚いて凝視した時には、涙はもうない。

「お前は、ブラッドによく似ておる。頑固なところなど、そっくりじゃ。だからこそ、不安になるのじゃよ」

「不安に……？」

「いいか、ルア。お前は決してブラッドのように死んではならぬ。死んではならぬぞ」

子供に言い聞かせるように何度も、「死ぬな」と繰り返す。

ルアは言葉を噛みしめるように頭の中で反芻し、深くうなづいた。ふいに彼女の眉がつりあがり、ぐるりと首が回される。ルアもつられて彼女と同じ方向。漆を塗られて黒光りする扉を凝視した。耳を澄ますと、何やら扉の向こうが騒がしい。老若男女、さまざまな声が上がっている。

悲鳴、断末魔、怒号。そして 哄笑。

「何があっても、死んではならぬ。決して 妾を庇って死のうなどと思つな」

「え……？」

どういう意味ですかと青ざめたルアが言葉を探し始める。その瞬間、バンッと壊れそうな勢いで扉が開かれた。

にこりと、彼が嗤う

……

扉が開かれた瞬間、むわりと敏感な鼻をつく濃厚な血の臭いに、ルアは思わず口元を押さえた。瞬間的な吐き気に襲われるが、生憎つい先ほど吐き出したもので最後だ。空虚な嘔吐感に、苦しそうに喘ぐ。

扉を開けてゆつくりと足を踏み出した彼はそんなルアに視線を向けもせずに、女王に向かって微笑んでいた。

右手には、血糊をたつぷりと含んで半ば使い物にならなくなった、

“女王決定戦”用の長剣。

そして、左手には

……

「うっ……あがあっ……おえっ……え」

もはやすべてなくなっただと思ったのに。それを直視した瞬間、胃の中にわずかに残っていた胃液まで外へと吐き出してしまっ。

手についた嘔吐物を呆然と見、そしてもう一度彼の左手に握られている物を見た。

赤い、髪の毛。

そして、それに繋がるのは

「ぶら、っど……」

ルアが叫ぶ前に、隣で椅子に背中を預けていた女王が呟いた。視界に映るその顔は、異様なほどに青ざめている。

ブラッド　　というのは正しくないのかもしれない。なぜなら、身体はモニターの中にあるのだから。

彼　　フレームは、五人もの首の髪の毛を無造作に掴んで、嗤っていた。

ひきずってきたせいか、あんなに美麗だったブラッドの顔が埃や煤血で汚れていて見るも無残な状態になっている。

他の首もみな同様だったが、一番ひどいのはブレイズの首だった。死後も第二王女に顔を突き刺されたせいか、原形をとどめることなく顔の皮が剥がれている。

あまりにも猟奇的な光景に、ルアは相手が自分の主人であることも忘れてふらりと一步下がった。

「どうです、母上。なかなか綺麗に刈り取れてるでしょう？」

ブレイズの首とブラッドの首を両腕で重そうに持ち上げて、誇らしげに笑う。

あまりにも無邪気な笑みに、一瞬彼が母親に成績を自慢する幼子のように見えた。しかしくわっと見開かれたブレイズと目があって、一変しその笑顔は狂気へと変わる。

ぬるり

右腕に抱かれていたブラッドの首が、彼の肌についた大量の血で滑り、地面へと落ちた。そのまま血の跡を描いて女王の足もとへと転がる。

女王は一寸も躊躇わずにそれを拾い上げると、額と額をぴたりとくつつけた。ブラッドのわずかに開かれた瞼をそつと、閉じさせる。

「……哀れな」

それが、母親としての最後の言葉だった。決してフレームに聞こえないように囁かれた言葉は、唯一耳のよいルアにだけ聞こえる。

女王は唇をきつくかみしめた後、顔をあげてフレームを見た。その

口元にはしつかりと、嘲笑が浮かんでいる。
本当はブラッドの首を抱きしめて泣き叫びたいだろうに
愛してはいけないというのは、こういうことか。

「おめでとう、とても言うべきじゃな。よくぞ生き残った、次代女王”よ」

ポンポンと手を叩きながら、朗らかに笑う。ぎらりと、フレイムの瞳が狂おしいほどの憎しみに染まり上げられた。

ブラッドとよく似た剣の構え方をして、自らの母親へと切っ先を向ける。それを見た女王の眉が、不快気にひそめられた。

自らも隣に据えてあつた鎌を手に取りながら、冷徹な笑みを見せる。母と子。二人とも武器を持って対峙しているというのに、ルアは指一つすらまともに動かせなかった。

「なんのつもりじゃ、我が息子よ」

「お聞きしたいことが、あります」

冷静さを努めているけれど、声が震えている。

怒りや憎しみを感じる……それはつまり、彼がまだ完全なる狂気に落ちているわけではないということを示していた。

ルアは注意深く扉の向こうへと視線を走らせる。赤く染められたろうか……一体ここに着くまで、どれほどの衛兵を斬り捨ててきたのだろう。

しかしだんだんと足音が聞こえているということは、新たな衛兵がフレイムを抑えに来ているのだろうか。彼が縄にかけられるまで……それまでに、決着がつく。

「この“女王決定戦”^{「ロイヤム}を企画したのは、だれですか」

「妾じゃ」

こともなげに、女王は嘘をついた。フレイムの瞳が黒々とした絶望に塗りつぶされる。

ルアが何か言おうとしたが、女王はそれを一瞥で制した。何も言うな、と目で語る。

「なかなかの余興じゃったぞ。ブラッドどもは十分妾を楽しませてくれた。彼らを殺した、お前もな」

「っ……僕が殺したわけじゃない!!」

嘲笑うように言われた言葉にフレイムは目を見開いて、自分の罪から逃れるように叫んだ。

ここからでも、彼の向ける切っ先が震えているのが確認できる。

彼は　自分を、恐れているのだ。兄の心臓を一突きにし、姉を惨殺した自分自身を。

まだひそかに残る罪の意識が、彼を狂気へと落とすのを引き止めている。あるいは、母親への憎しみが狂いそうになる悲しみを薄めているのかもしれない。

「何を言う、お前はあんなにも楽しそうに姉を殺していたではないか。覚えておるぞ、お前はまずはじめに右腕を斬り落とした。そしてやめてと叫ぶ姉の左足を切断した。次は右足、その次は　」
「ちがうっ！　だってあれは、ブレイズを殺したから……っ！」

ごとりと、と。フレイムの足元に置かれていたブレイズの首が彼の足にあたってころりと転がった。

眼球がこぼれそうなほどに見開かれた目が、フレイムを睨みつける。血に染まった白目。どろりと濁った黒目。

ひっと、フレイムは小さな悲鳴をあげて後退した。恐ろしい妹の顔に、カタカタと歯が震える。

ひゅー……

短く彼が息を吸い、次の瞬間泣き声に近い悲鳴がその場を満たした。狂気から、醒めたのだ。

「畜生！畜生畜生畜生！！ころ、す……殺す殺す、殺してやるうっ！！」

何度も何度も叫ばれる、「殺す」という言葉。女王は無表情でそれを聞きながら、すぐに入ってきた衛兵に捕縛されるフレ임을冷めた目で見つめていた。

女王に刃を向けたものは、それが何者であろうとも彼女の許可が出るまで牢獄へと入れられる。

正気に戻った彼は、悲惨なものだった。

ブレイズやブラッド、姉達の写真を見るたびに泣き声をあげ、子供のように嫌だ嫌だと暴れる。

女王の名を出すと、途端に殺してやると叫びだす。

赤い色の混じった食事を運ぶと、今まで食べた物すべて吐いてしま

う。
夜になって静かになったかと思うと、赤い部屋で起こったことを悪夢で見て断末魔に近い絶叫をあげる。

女王からフレ임을の世話を言い渡されたルアは、あまりにも痛々しい光景に自分自身何度も嘔吐した。

女王に対する憎しみが彼を覚醒させたというのなら　なぜ、こんなにも苦しまなければならぬのだろう。

ルアは牢獄へと入れられているフレイムの背中を見て、ぎりっと奥歯を噛みしめる。

彼女がやってきたことが間違いだとは思わない。だけど正答というには、あまりにもフレイムは傷つきすぎていた。

あまりにも多い犠牲。

あまりにも多い傷。

その先に見えた物は、なんだろう。

「フレイム様」

ルアは静かな寝息を立てるフレイムの傍らに座り、彼の小さな手を握っていた。

ほとんどの確率で悪夢を見る彼だったが、不思議なことにごうやうてルアが寄り添ってやると大人しくなるのだ。

最初は女王の味方だと思っていたルアを寄せつけようとはしなかったが、害はないとわかった瞬間からこうやってそばにいることは許してくれた。

もちろん、昔のようにはいかない。それほどブラッドやブレイズ
の存在は重かった。

「僕が、僕が貴方を守ります。ずっと傍にいます　……」

誰が聞いてくれぬ誓約でもいい。

女王さまとブラッド様は貴方が狂うのを止めようと思いました。

なら、僕は。

もし貴方が、狂うときは

……

その時は。

僕も、貴方とともに堕ちましよう

正答は、どこにもない。

【Chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

二人の人間がいるなら、二つの物語がある。^{ラスト}

ってことで。実はフレイム様過去編、あと少しあります。

きっと今回はまだまだ納得のいかなかった方も多いかなと思います。かなり宙ぶらりんですしね！

女王さまは結局どうなったのか、とか。たぶん後一話もあれば書ける末路ですけど……

えー、でもとりあえず今回はこれで終わりです。基本的にルア視点なので、あまりフレイム様視点とかを出してはいけないと思うんですね……。

と、言うことなので次回から再び現在に戻り、視点はアリスに移ります。

フレイム様過去編（フレイム視点ver）はきっと第五章あたりにはいるので、そう遠くありません。

それでは皆様、アデイオース。

……なんで今回こんなにもテンションが低いのかというと。

中間審査で落ち込んだからです。50位下がったよ、50位……。o

r z

【chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

アリス視点に戻ります。

アリスの部屋にて、ルアとアリス二人でフレイム様のことを語ります、

僕を、信じて下さい。

「フレイルム様は“女王決定戦”^{コロシウム}から2年後　女王を毒殺し、城に仕えていたものを皆殺しにしました」

はなしながら、ルアの顔から次第に血の気が引いていった。今では大丈夫かと思うほど蒼白くなっている。

きつと聞いている私もそれなりに青ざめているだろう、ルアは心配そうにこちらを見下ろしてきた。

以前過去の話をした時、異様な雰囲気纏っていたフレイルムが脳裏に浮かぶ。

心底、母親を憎んでいるような赤い瞳。あの時はその瞳さえ、禍々しいと感じたのだが

今はただ、母親の愛を欲した子供のように思える。

「皆殺し……」

「はい、可笑しい話でしょうか？あのガキは城中の人間の血を浴びて、これで昔の僕はいなくなっただって笑ったんですよ。おかげで、子供時代の彼を知るのは僕一人となりました。同僚を全員殺されたんで

す、一生口を聞いてあげないつもりだったんですけどね……」

夜の冷たい風が窓から入り込んできて、私はぶるりと震えた。ルアはいったん言葉を斬って、タオルの上から温めるように抱きしめてくる。

イオほどではないにしろ、一枚の布ごしに伝わる肌は温かい。

「あの子には、僕しかいませんから。本当の優しい彼を知るのは僕しかいませんから、許してあげたんです」

「…………… なんだかずいぶんと尊大な態度ね」

きつと自分の話が雰囲気を暗くするのが嫌だったのだろう。わざとルアは冗談めかして言った。

彼が少し微笑む。たったそれだけで纏っていた闇さえ晴れてしまうのだから不思議なものだ。

「いいんですよ。いつも僕をこき使うようなとんでもない上司なんですから。弱みの一つや二つや三つや四つ握つとかないと」

ツンとした口調に私は思わず笑ってしまう。

本当に、素直じゃない。無自覚なルアは、くすくすと笑う私を不思議そうに覗き込んできた。そこにはもう暗い表情はない。

「アリス？」

「ルア、実はフレ임様のこと大好きですよ」

「はああ?! 何言ってるんですか貴女は! あ、あんなクソ生意気な餓鬼……!」

慌てふためくルアがあまりにもおもしろくて、いっそう楽しそうな笑い声を立てる。

ルアはむっとしたように眉を寄せ、抱きしめていた腕をするりとほどいた。

「ふざけるのも大概にして下さい、アリス。あのガキは平気で僕の頭をぶんづけてくる超D級のDSですよ？」

「何も“D”を2度言わなくても……」

「親友に別れを言っただけと命令したのもあいつですし、僕が好きといったものは徹底的に壊していきますしね」

「えっと、その親友ってもしかして……」

「はい、レーテとイオです。まったく……あいつらとの付き合いはお前なんかよりも長いんだよと、思わず言いかけたね。さすがに可哀想でしたから言いませんでしたけど」

「……………」

「掃除も洗濯も料理も業務も全部僕僕僕！召使いやメイドは腐るほど居るでしょうが！一時期は過労でぶっ倒れるかと思いましたがよ！」

「……………」

「おかげで僕は城中の使用人から尊敬されることになりましたよ、ええ！ルアさまは何でもそつなくできますね……だなんて誰のせいだと思ってるんだーっ！」

「……………」

「外に出る時間もなくなるし、半ば軟禁された気分でした！……って、あれ？さつきから黙り込んでどうしたんですか、アリス」

呆れてものも言えない、というのはこういうことを言うのだろうか。天然なのか、それとも近すぎるから分からなくなるのか……いずれにしても、ルアが気付いていないということだけは確かだった。冷たい炎をその瞳に宿すフレームは、数々の嫌がらせをルアにしてきたのだから。そんなこと、ルアの憤慨っぷりを見れば一発でわかる。

ただ、問題となるのはその深層心理。

私は突然右手を持ち上げると、怪訝な顔で覗き込むルアの額にデコピンを決めた。

びしっといかにも痛そうな音がして、ルアの頭が反射的に後ろへと退く。先程まで近かった顔は、今では一定距離を保っていた。

「あたっ」

「あなた、馬鹿。よく考えてみなさいよ。それ全部、自分を見てほしい、自分のそばにいてほしいっていう子供が母親に抱く感情でしょう?」

どうしても声に呆れが混じってしまう。子供のようにぶつくさとルアは文句を並べていたが、どれもこれもフレイムのとった行動は裏を返してしまえばルアを束縛するためのものだ。

好きなものを壊せば、ルアは自分しか見なくなる。忙しくなれば、ルアは自分の傍にいてくれる。

歪んだ愛。子供じみた独占欲。きっとフレイム自身、無自覚なのだと思います。

気付かぬうちに、ルアを家族に重ねていた。今はもう亡い家族を、一番近くにいたルアに……。

彼は一瞬痛みに顔を歪めると、すぐにむっとしたように口をへの字に曲げた。

少し考えるように俯いては、その白い耳を左右に揺らす。

「知ってますよ、それくらい。まったく、母親に似てわかりにくいっいたらありゃしない」

不満げに呟きながら、ルアは私の髪に手を伸ばした。短くも長くもないセミロングの髪を一房掴んで、三つ編みをするようにわかる。

ただの暇つぶしでやられているのだとわかっていながらも、ふとした時に触れるルアの白い手袋が妙にくすぐったい。器用な彼は三つ編みをし終わると、今度はもつと少なく髪を掬ってまた同じように編み出した。

この野郎……私の髪をチリチリにするつもりか。

なんとなく落ち着きのない彼に苛立ちながら、私は小さくため息をつく。

わずか10秒としないうちにそれはそれは綺麗な三つ編みが2つ完成していた。絶対に私が三つ編み似合わないことをわかってやっているな……。

「アリスはフレ임様のこと、好きですか？」

唐突の質問の後、ルアは三つ編みを解きはじめた。思っていたよりもするすると簡単にほどけて、元通りになる。

そつえばいつの間にお風呂に入れられたんだろう。この世界に来てから一度も身体を洗ってないと思っていたが……どうやら気を失っている間に入れられたらしい。いじられた髪からかおる匂いは、自分の知らないものだった。

「……正直、怖いわ」

「ああ、いいんですよ。それは万国共通の感情ですから」

いくらなんでもそれは言いすぎだろう。

しれっと毒を吐くルアを横目で睨みながら、私は肩にかかっていたタオルを胸の方へと引き寄せた。

好きか、嫌いか。

苦手なタイプではあると思う。だがそれは嫌いという意味ではない。可哀想な人ではあると思う。だがそれは好きという意味ではない。

私は真剣に聞いてくるルアに観念したように肩をすくめ、口元に笑みを浮かべた。

「嫌いじゃないわ。でもきつと、好きでもない」

「　　そうですね。僕も、あの人のことは好きにはなれませんが。少なくとも、今のフレイム様は」

昔の彼はそりやあもう可愛かったんですけどねー。ルアは優しくそう笑うが、その瞳は相変わらず悲しみを宿していた。

彼は、好きではないという。でも……やはり私は、好きなんだと思う。

好きじゃなかったら、こんなに悲しそうな瞳はしない。どうでもよかったら、こんなに苦しそうな顔はしない。

「好きじゃないんです。でも、彼が僕にする嫌がらせの数々の理由を知っているから、時々思ってしまうんです。　　そんなことしなくたって、ずっと傍にいるのに、って」

フレイムが必死にルアを引きとめようとする理由……それはきつと、その絆が確かなものではないから。

いや、そもそも彼は確かな絆なんて信じていないのかもしれない。過去に血の縁すら断たれた彼には、どんな絆も信じられない。

だから、自分で繋ぎとめようとする。唯一の理解者を……家族を。

誓いなんて、脆いもの。約束なんて、儂いもの。

だけど、フレイムは　　こんなに切実な瞳を、どうして信じてやれなかったのだろう。

私が何か言葉を発する前に、ルアはいつもの笑顔に戻って腰かけていたベッドから立ち上がった。ぎしりとスプリングが痛ましげな音

をあげる。

「それではアリス、僕はもう行きます。今頃フレイム様が拗ねていると思うので、僕が慰めてあげなくちゃいけませんから。おそらく双子が気紛れに来るかと思えますが……適当に殺しておいて下さい」「は、はあ……って怖いことをさらりと言わないで」

どうやら、双子がルアを嫌っているだけでなく、ルアの方も双子を毛嫌いしているらしい。双子の話題になった瞬間、白い耳の毛が威嚇するかのよう逆立った。

一体昔3人の間に何があったのだろう……。ものすごく聞きたい気はするが、ルアの機嫌をどん底まで落とすたくはない。

ルアは黒い笑みを浮かべながらドアをそつと開け、双子がいないかどうかを確認してから外に出た。ドアの隙間からはいつてきた冷たい空気が頬を刺す。

パタン、とドアが閉まると同時に、忘れていた睡魔が私を襲った。考えてみれば、この世界に来てからまとまと眠ったことが少ない気がする。色々とありすぎてつい忘れてしまいがちだが、瞼は確かに重かった。

お腹もすいているにはすいているが……それよりも、眠い。

身体が疲れているのかもしれない。そう思った私は、数秒迷った後に温かい布団の中に身体全体を沈めた。

心地よい眠気にいざなわれて夢へと飛びだとうとした、その瞬間。

獣の慟哭が、意識を現実へと

引き戻した。

すべてが静寂に包まれる

……

もう一度その名前を呼んでみると、自らの身体が白い光に包まれた。深い闇の中に光るそれはとても綺麗なのに……浮き上がっている。まるで、この世界自身から切り離された　いや、拒絶されているように。

そうか……ここは俺がいるべき世界はまじゃないからだ

淡い光は徐々に体全体を照らし出し、ようやく自分の青白い手が見えた。視界も闇に覆われていたのか、光が自らを包んでいくにつれ鮮明になっていく。

「ロキ」

開かれた金色の瞳は確かに、目の前の自分を捕らえていた。

黒い髪、黒い瞳、黒い耳　　本当の、自分を。
彼はこちらを不快そうに睨みつける。そんな顔、鏡の中で何度も見たというのに……なんだか、すごく懐かしい。

（お前が、イオカ）

自分よりも少しトーンの低い声。これだから低血圧といわれるのだろう。

やっと会えた……それは歓喜ともつかない不思議な感情。ふわりと優しい笑みを見せて頷くと、目の前の彼が気持ち悪いとでも言うように顔を歪めた。

そんな彼の顔を見たくなくて、イオは自らの腕を彼の首に絡ませ、そっと抱きしめる。

鼻を、自分の付けている甘い香水の匂いがついた。ロキだったら、俺の香りなんて嫌がってつけないと思ったのにな……。

「ずっと、会いたかった」

（残念だが、俺は会いたくなかった）

息を吐き出すようにうっとりというとき、間髪をいれずに拒絶が帰ってくる。

仕方がないことだ。自分は、彼の大切なものすべてを闇へ葬りさつてしまったのだから……。

もう、彼からの手紙が届くことはない。

彼から、太陽えがおを送ってもらうことはない。

「ごめん、ごめんね……ごめん、ロキ」

黒い髪に顔を埋めるようにして、彼の頭に手を添える。

一体自分は、だれに謝っているのだろう。ロキに謝ったって償ったって、どうにもならないとわかっているのに……。

ああ、駄目だ……胸が、苦しい。これ以上彼に拒絶されたら、潰れてしまいそうだ。

恐怖する。

イオは思わず彼を抱きしめる腕に力を込めた。その瞬間。

ドンッ

(お前はいつも、そればかりだ)

声が、遠くなる。

突き飛ばされたのだと理解するには、少しばかり時間がかかった。

ああ　　また、ロキが泣いている。

宥めなきや。

掬わなきや。

ロキがこちらを憎々しげに睨みつけながら、何かを言っている。だが、何一つとして聞こえなかった。声が、遠い。彼が、遠い。

泣かないで。

泣かないで、ロキ。

俺、何でもするから。

貴方を苦しめるものなんて、全部壊すから。

貴方を悲しめるものなんて、全部殺すから。

だからお願い、どうか泣かないで。

そこでふと、気付く。
ロキを苦しめるもの？
ロキを悲しめるもの？

それは、イオ自身じゃないか。

心の中で、もう一つの自分が悲鳴を上げる。
嫌だ、嫌だ。まだ生きていたい。死にたくなかない。
醜い、生への執着。

次の瞬間、か細い蜘蛛の糸はロキの一言によってあっさりと断たれた。

（お前なんて、大っ嫌いだ…っ）

意識が急速に引き戻される。

やっと、答えを見つけたよ。

俺が消えれば、貴方は笑ってくれますか

……

こんばんは、寒いですね！寒がりな作者も毛布同伴で執筆中ですw
さて、ようやく過去編が終わりましたー！ひっさびさのコメディー
です。ルア君がちゃっかりいじられキャラになってますね（
ノ
個人的にはフレイム×ルア、イオ×ルアでルアがいじられるのがす
ごく好きです。ルア君はあれですね、できそこないのSですからこ
の世界ではいじられるしかありません

えー……さて、ほんと寒くなってきたのでさっさと解説入ります。
女王決定戦のことは前の4話（紅の悲愴／蒼の誓約）までで語りつ
くしましたが、ご察しの通り女王死亡についてのことがまだ書かれ
ていません。

そこにつきましては、後々書く予定です。それを含めるとフレイム
様の過去編って長いです……。

さて、長つたらしい過去編といたらもう一つ、イオロキです。最
後のがそうですね。今回リンクしてるのは、【chapter -
3】Shade Ino or Loki ep5これが俺らのス
タート地点の最後と【chapter - 4】Flame Gu
ilty or Innocent ep2裏切りマリオネット
の最後です。

第三章……なんだかすごく懐かしいですねえー。1ヶ月ほど前に投
稿したやつですね。そう言えばここを最後にロキくん登場してねえ
…（汗）

時間軸としてはこれまたややこしいことに 裏切りマリオネット（
イオver） 血よりも確かな絆を（イオver） 〃 これ
が俺らのスタート地点（ロキver）です。

次回はいいよあの変態がメインになります。またまた変態の様子

がおかしいようですが……あえてヒントを言うのなら、【chapter 4】Flame Guilty or Innocent ep4おはようございますの双子のどちらかのセリフですね（ネタばれではありません。断じて）。

あ、ヤヴァい……眠気で視界がぐらついてきました。

それでは最後に。なんと、総合PV数が早くも12万突破いたしました！怖いなあ……。

さらにさらに！最大日別PV数が3,100突破しました！こ、怖いなあ……。

大人しくこれは夢として受け取ります（*^-^*）いくらなんでも多すぎですね！現実にこんなことがあるわけないですよね！

ね、眠……。すみません、何のひねりもないあとがきですが、眠気ピークに達しました。

それでは、また次回！

黒い雨の中に差し出された手が、光だったのか。それともさらなる闇だったのか。

今となってはもうわからない

……

『こんな所で何をしているんだい、“門番”』
トゥーイドルディーアンドダム

冷たい雨がきつく抱きしめ合った自分と弟の身体から熱を奪っていく。

弟の意識はすでになく、自分自身深い眠りに誘われかけていた。こんな冬の日に外で眠るということがどんなに危険なことか、幼いながらもわかる。もう少しで永遠の眠りにつくところだった。

ダムは虚ろな目を上にあげて彼を見た。赤い髪、赤い瞳、赤い傘をさしている。自分よりも小さな身体……それに、どこかで見たことがあるような綺麗な顔。

ああ、そうだ……2年前、前女王が死んだんだっけ……。それで、新しい“女王”になったのがこいつだ……。

雨で視界がぼやける目を汚らしい裾でこすって、もう一度その瞳を見つめる。なんて綺麗な、赤。どこまでも深く、光の当たらない深海のような……いや、この場合だったら血の海だろうか。

口元は興味深いというように笑っているのに、瞳は限りなく冷たい。

『あなた、どうしてこんなところにいるんだ……？』

新しい“女王”に就任した、ということはこの世界で最も豪華な暮らしを送っていることになる。こんな裏街　スラムにいるような人間ではないはずなのに。

ダムがぼんやりとした口調で訊くと、ピクリと彼の眉がわずかにひそめられた。どうやら彼の機嫌を損ねてしまったらしい、次の声は絶対零度の響きを含んでいた。

『聞いているのは僕の方だ。答える』

高圧的な態度、だけどそれが恐ろしいほどに似合っている。ダムは戦慄に似た悪寒を背筋に感じ、大人しく口を開いた。

『施設が、燃えた』

餓死なのか凍死なのか、わからない。隣には同じ施設で育ったはずの仲間が倒れている。その眼の球はすっぽりと抜けるように黒く、そこからムカデともつかぬ気味の悪い虫が這い出してきた。蠅が体を覆い尽くしている。一体腐りだしてからどれくらいの日がたっただろう。

自分ももうすぐこの状態になるのかと思うと、吐き気がした。だが最後にものを口にしたのは5日前だ。当然、胃の中に残っている物など一つもない。

ただ、弟が少しでも長く生きられるように身体で温める。窃盗、強奪、殺人……生き残るためならば何でもしたが、ここが自分の限界点らしい。もう食べ物調達できるほどの力は残っていないかった。なら、せめてデューだけでも生き残ってほしい……。自分の屍肉を食ってでも、生き長らえてほしい。

弟の身体を握りしめながら震える自分がよほど滑稽に見えたのか、ふっと少年は笑った。

『親戚は？助けてくれる人はいなかったの？』

『いる。けどみんな、俺らのこと気味悪がってあずかろうとしない。デーイーにいつも酷いこと言うんだ。だから俺、あいつら嫌い……』

施設に来る前、何度も親せきの家を盥回しにされた。けどどこもかしこも同じ。全員自分たちを恐れるような目で見て、時には首を絞めて殺そうとした。

そして最後に見つけたのが施設　家だったというのに。それすらも灰になってしまった。

『ふうん、気味悪がって、ねえ。別に普通の餓鬼に見えるけど』

がしり、と薄い赤色の前髪を荒々しく掴まれ、上へと持ち上げられる。抵抗する力は残っていなかったが、まだ痛みの感覚はあったらしいから厄介だ。

ダムはかすれた声を口から漏らした。

『俺ら、両親を殺したんだ。だから親殺しって呼ばれて、忌まれている。こんな俺らなんて、だれも拾ってくれはるはずない、よ……』

『へえ、親殺し！これは傑作だね。まさか僕と同じ境遇とは！』

ガツンッ

『っ……』

思いきり地面に頭を叩きつけられ、水たまりがバシャリとはねた。

スラム独特の吐き気を催すような臭気に、思わずむせる。首筋に、冷たい刃物があてられているのをうつすらと感じ取った。これが自分の死に様だなんて、考えたくない。こんな……よく知りもしない子どもなんか、殺されたくない。

まだ、死にたくなんてない。

『選べよ。ここで弟共々野垂れ死ぬか、それとも僕に一生服従するか』

自分はここで死ぬのだと、今まで漠然と考えていた。自分が死んで、^{デー}デーも遅かれ早かれ後を追うのだと……。

最愛の弟となら、寂しくなんてないと思っていた。ダムはそつと、抱きしめているデーの寝顔を見た。なんて穏やかな寝顔。自分と同じように血色は悪いが、なんて幸せそうな寝顔。

ダムと一緒になら、死なんて怖くないよ……

デーは眠る直前、そう呟いていた。

ダムには聞き取れないくらい小さな声で。

小さな声で言ったのは、それでダムに怒られるのが怖かったのだらう。

言葉に出していったのは……ほんとはずごく怖かったからだろう。

怖くないはずがない。死んでもいい、だなんて……。そんなの、ただの虚勢でしかない。

……
生きたい……俺はまだ、生きていたいよ、デー

ダムはわずかに身体を動かし、少年 フレイムの靴の先をぺろ

りと舐めた。

「あ、やべ。雨降ってきた」

「ほんとだ。窓閉めるね」

お互いの肩に寄り掛かってうたた寝をしていたところ、耳にざああ
っという雨音が聞こえ意識が現実へと引きずり戻された。

せつかくいい気持ちで寝てたのに……興醒めだ。ダムはディーが閉
める窓の外を睨みつけるようにして見る。

夜ということもあって外には深い闇が広がっていた。きっと空気は
刺すように冷たいのだろう。

「どうしたの、ダム。元気ないよ?」

ディーがこちらを振り向きざまに悪戯っぽく笑いかけてきた。ダム
も唇の端をあげて笑い返すが、その笑みもどこかぎこちない。

確かに長時間薬の調合をしていたため体が疲れているのは否めなか
った。だけど、きつと本当の理由は……。

窓を叩いては流れおちる雨が、ひどくわずらわしい。

そうだ、ちょうどこんな雨の晩だった……。

死にかけていたダムとディーを拾い、しっかりとした稼ぎ元を与えたのはほかでもないフレイムだった。きっと彼には彼の思惑があったのだろうが……そんなことは関係ない。

大事なのは、現実だけ。

今ここに温かいディーの身体があるのは、彼のおかげだ。

恩、とは少し違う。もちろん、白ウサギのような馬鹿げた“忠誠”なんかでもない。

そう　　敢えて言うならそれは、“契約”。

「なあ、ディー」

ダムはすっかり冷えてしまった手先に息を吹きかけながらベッドの方に目を向けた。

目を引くピンク色の髪が、白いシーツの中から覗く。眠ったチエシヤ猫の顔は、想像していたものよりもずっと綺麗だった。

こうしてみると、本当に彼が整った顔立ちをしていることがわかる。少しはねた髪に長いまつげ、薄い唇は無防備に少し開かれていた。どちらかという和中性的な顔のつくりなのかもしれない。

どうして彼が、こんな場所にいるのだろう。

考え出すと、どうにも滑稽に思えて仕方がなかった。

城側の“暗殺予定表”ブラックリストに名前をのせられている青年が、今この場で寝ている。

殺すことなんてきつと赤子の首をひねるよりも簡単なのに　　自分たちは、イオの命を助けてしまった。

フレイムの心が、わからない。

「どうしてフレ임様は先輩を助けたんだろうな……」
「ダム……どうしたの、どこか気持ち悪い？顔、蒼いよ」

デイーは心配そうにこちらにすり寄ってきて、両手を重ね合わせる。思わずその熱に身を委ねてしまいそうになるが、再び眠りに落ちていくわけにはいかない。

なんて言っただって、今命じられているのはチェシャ猫の看病なのだから。

ダムはふるふると首を振ると、デイーの手をやんわりと押し返してイオが眠るベッドに腰掛けた。その振動で彼の身体がわずかに傾く。柔らかながらも拒絶されたデイーは寂しいような心配なような顔でダムの横顔を見つめていたが、やがて諦めたように自らもベッドに腰掛けた。

イオは、二つの同じ顔に挟まれたまま目を覚まさない。

「僕にもわかんないよ、そんなの。別に先輩のことは嫌いじゃないけどさ、放っておくべきだったと思う」

「……後々面倒だしな。ほんと、なんでフレ임様は俺らを脅してまでこいつを助けたんだ……？」

いや……脅しというのにもまだ生ぬるい。

例えばここでこうやって、眠る彼が息をしていなければ 不要の道具として、自分たちを“処分”するつもりだったのだろう。冷たい瞳で、笑みすらも浮かべながら。

彼はそういう人間だ。そうはわかっていても、少しばかり心が軋む息が詰まるような、不思議な感覚。誰にも必要とされない自分が憎くて、惨めで……。

「ダムは、こいつのせいでそんなに苦しそうなのか？」

自分の弟のものとは思えない冷たい温度の声を聞いた時、ダムはしまったと息を飲んだ。

ダムが止める間もなく、ひっそりとデューはイオの眠るベッドへと忍び寄り、その鮮やかな髪に触れた。弄ぶように、くるくると指を回す。

動作はひどく優しいのに、その瞳は何の感情も浮かべていなかった。

「ダムを苦しめるもの、ダムを悲しめるもの。全部全部、僕は嫌いだよ」

「おい、デュー。やめろ、何する気だ」

「ねえ、ダム。僕が嫌いなものは、ダムも嫌いだよね？」

ふわりと、本当に幸せそうな笑みを浮かべる。まるでそれが同一であるということが、たまらなく嬉しいとでも言うように。

いつもだったらごく当然に頷いていたのだろう。何のためらいもなく、本当にそうだと信じていた。

ただ今は、その笑顔に恐怖する。

「みんな、消えちまえばいい。僕ら以外、みんな消えちやえば……ダムは苦しまずに済むよ」

「やめろ……デュー。俺はそんなの、望んでない」

「どうして？だって僕はこんなに先輩のこと憎んでるのに。だってら、ダムだって憎んでるでしょ？僕の好きなものはダムの好きなもの」

朗々と、デューは笑顔のままいつもと同じセリフを読み上げる。

一字一句間違えることなく、正確に。昨日まではその台詞を自分もともに重ねては、可笑しそうに笑い合っていたのだ。

きつと今回もディーは、それを期待している。
同じことを思い、同じ言葉を言うのだと思っている。

だけど、どうしてもできなかつた。

「僕の嫌いなものは、ダムの嫌いな」

「やめろよっ！」

ダムは椅子を蹴りあげるようにして立ち上がり、ディーに詰め寄つた。

心臓の鼓動が、異常なほどに早い。握りしめた拳にはつつすらと汗が浮かんでいる。

ディーはあらん限りの大声に心底驚いたというようにこちらをむき、その濁つた瞳でダムを凝視した。

わかつている。ディーが悪いのではない、ディーが歪んでいるのではない。

これが、トウイドルディーをためダム“門番”の宿命なのだ。

同じでありたい。

一つでありたい。

区別されたくない。

「俺は……ディーと同じなんかじゃない！俺は俺だっ……！」

……そう、ディーが歪んでいるのではない。

二人で一つの存在を、どうしても受け入れられないダムこそが“歪み”なのだ……

双子、じゃなくてダムと呼んでほしい。自分とディーを間違えないでほしい。ディーとの微妙な違いを理解してほしい。二人で一つなのではない。ここに、ダムという一人の人間がいるのだと言っしてほしい。

「……やっぱり、嫌いだよ」

静寂の中、雨の音だけがうるさいほどにその空間を満たす。その騒音ちんの中をかいくぐって、ディーの声が聞こえてきた。時が、スローモーションで進んでいく。いくら頑張っても、彼を止めることはできそうになかった。ただ声だけがはつきりと頭に届いてくる。

ディーはその仮面に何の表情も浮かべず、イオの細い首に指を巻きつけた。声を出すことのできないダムの目の前で、その瞳が黒々とした憎悪へと塗りつぶされていく。

ディーが何をするつもりか判らないほど、ダムは馬鹿うつけではなかった。彼は、邪魔者を排除するつもりだ。ディーとダムだけの箱庭を壊そうとする侵入者を。

「母さんも、父さんも嫌いだ。こいつも、僕から大切なダムを奪おうとする……」

巻き付いた指に、力がこもる。

その瞬間、黄金の瞳が開かれた。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

目の前で自分自身が後方へと飛びずさる。いや……あれは自分ではない、デイーだ。今の今までイオの首を絞めようとしていた指を震わせていた。

怯えたような顔。驚いたような顔。そして、自分と同じ混乱したような顔。

様々な表情が浮かぶデイーの右頬には、うつすらと4筋の血の跡が刻まれていた。まるで、獣に引つ搔かれたような傷……。

ダムは、恐る恐るデイーから目を離し、ベッドの方向へ目をうつす。ベッドは、誰かが寝ていたという形跡をくつきりと残して　もぬけの殻になっていた。

「危ない、ダムっ!!」

突然、腰に何かを抱きついてきてダムはその重量に耐えきれずに床に伏した。頭上を、何か紫のものが通り過ぎていく。

着地した“それ”は、威嚇するような声を発しながらぺろりと指をなめた。

デイーの血がわずかについた、強靱な爪を。

咄嗟にデイーが自分を押し倒してくれなければ、今ごろはあの鋭い爪が自分の喉を引き裂いていただろう。

そう思うと、ぞっとする。獣人とはいえども所詮人間だ。

人間が、爪で同じ人間を殺すだなんて……。

しかし、じっくり考える暇も相手は与えてくれなかった。目に見えないほどの速さで床を蹴り、今度はディーの懐に潜ろうと身を屈める。

ディーは何とか身をよじらせてその攻撃をよけたが、一瞬遅かった。

「ディー！」

攻撃を外した“それ”はすぐさま体勢を変えて床に手を突くと、右足を軽々と持ち上げてディーの顎を蹴りあげる。

身長差があるため大したダメージはなかったが、油断を作るのには十分な攻撃だった。

ふらついたディーの横腹を身体を回転させて蹴り飛ばす。

どがつ

痛々しい音を立てて、ディーの身体が壁に叩きつけられた。言葉にならない悲鳴を上げながらディーは、あまりの痛さにその場に座り込んでしまう。

ディーが動けなくなると、“それ”は今度はダムの方へ注意を向けてきた。

ピンク色の髪に、黄金の瞳。そこまでは同じのはずなのに　　何が、違う。

そう……あえて言うなら、瞳に浮かぶ光だろうか。

どこまでも、昏い。まるで　　まるで、手負いの獣のような、瞳。これが、あのイオか。

「ぐ、が、あ……あああああああつ」

獣の咆哮。

同時に、キラリと彼の口から覗いた牙が目の前に迫った。恐怖で動けないダムは、目を閉じることさえできずにそれをただ傍観する。

白い牙が、血のついた赤い爪が、自分の喉を斬り裂くだろう。こんな所で死ぬのだろうか、自分は。こんな所で、デュー一人を残して　死ぬのだろうか。

唐突に、雨の日の記憶が脳裏にフラッシュバックした。死と間際の冷たい身体。腕の中で眠る弟。

そっ、あのときは、あのときは確かに、思ったんだ。

生きたいって。

「っ……!!」

ダムは体重を無理やり右に寄せ転げ落ちるようにして間一髪、イオの攻撃から逃れた。

またもや獲物をしとめ損ねたイオは瞳を昏い狂気に一層深く浸しながら体勢を立て直す。

しかし、次の攻撃はやってこなかった。

「ダムに触るなっ!!」

先程の一撃でダムがやられかけたのが原因だったのだろう、無理やり身体を持ち上げたデューがイオを背後からおさえる。

そのまま、彼の頭を掴んで床にガンツと叩きつけた。

体格ではデューの方が上だが、獣人の力は普通の人間の倍はあると言う。持ちこたえられたとしても後数秒だろう。

「ダム、鎮静剤だ！鎮静剤を早く!!」

おそらく毒に含まれていた幻覚作用による暴走だと判断したのだろう。デューはイオの両腕をきっちりひねり上げながら叫ぶ。

ダムは俊敏な動きで懐を探ると、鎮静剤を取り出すとデューの下で暴れるイオの腕を掴んだ。

瞬間、ものすごい勢いで抵抗され、思わず薬を落としかける。

何とか薬は落とさずに済んだが、問題は解決したわけではない。いくらデューが押さえているとはいえ、こうも抵抗されては薬など打てるはずがなかった。

「くっ……駄目だ、デュー！こいつがもっと大人しくなってくんないと……！！」

ダムが泣きそうな声で言うのと同時に、イオが悲痛な慟哭をあげる。どんな夢を見たのだろう、聞いているこちらの胸が張り裂けてしまふいそうなほどの悲しい哭声。

ダムはもう一度、暴れる彼の腕に薬を打ちこもうとした。

刹那、暗い部屋に白が舞い込んだ

……

どうも、こんにちは。先日髪を梳かそうと思って取ったものが櫛ではなく剃刀だったという大馬鹿ものですゞ(´。°。(´)ノ
あ、でも誤解しないで下さいね！私の髪は健全ですよ！さすがにそのときはびっくりしましたけど……(´。°。(´)ノ

さて、なんだか久々の更新な気がします……所詮気のせいなんですけどね。

うああああ……せつかくシリアスから脱出できたと思ったのに、また仄暗い物語に……。

双子よ！君たちはコメディ要員のはずだろう！(＃´)ノ
しかもギャグ担当のイオくとセツトなのにこんなシリアスになるなんて……明日あたり地球が崩壊しますね

でもディー×ダムはこっちが本質です。きっと彼らの物語はまた後になるでしょうが……たぶん先は掴めやすいと思います。

少なくともフレイム様ほど暗くもややこしくもありませんのでご安心を(´)ノ

で、何故かディーがヤンデレっぽくなっちゃいましたね……。危ない子です、はつきり言って。

ダムへの執着が欠片でもわかっていただけると幸いです。

ダムの態度は一見引いているようにしか見えませんが、あの子はあの子でディーくんのが大好きなんですよ。まあそれも後々わかります。

ほんとはこのepで終了にするつもりだったんですけどね……思った以上にディー×ダムが長引きました。双子への愛が溢れてます
キモい

【お知らせ】

いよいよ期末考査が3週間前を切ってしまいました。

? 中間考査でかなり成績を落とした

? あともう1ポイントで来年度のクラスが昇格

などの理由で、今回は全力投球にならなければなりません。

と、言うことで。誠に勝手なことながら、期末考査が終わるまでの間、しばらく更新を休止させていただきます。

もしかしたら不定期更新ということになって期末考査中にも何話かupするかもしれませんが、ペースは間違いなく落ちます。

こんな調子で今年度までに終わるのでしょいか……。

これの挽回は冬休みなどを使ってやります！

【企画のご紹介】

以前からやってはいるのですが、知らない方もいるかもしれませんので一応。

ただいまアリ幕のキャラ達で感想を送ってくれた読者様に対してコメント(?)っぽいものをする企画、「挨拶巡り」を展開中です！

感想・メッセージなどの返信にはもれなく「挨拶巡り」が付いてきます。

嫌といつてもついてきます。

(すみません、冗談です)

見ての通り、ギャグセンスに恵まれない作者ですが……生温かい目で見守ってやって下さい。

よく使うキャラは「アリス」「イオ」「ルア」「ディー」「ダム」

「レーテ」など……基本的に読者さまが好きとって下さったキャラを中心に展開しております。

身体が熱い。

鼓動が早い。

息ができない。

なんだろう、なんだかとても胸が熱い。

誰かがやめろって叫んでる。

誰？だれ？

□キ？

ああ、駄目だ。考えようとするとも頭が痛くなる。

何も考えたくない。何も考えられない。

全部、本能に委ねて。

白い喉に牙をたてる。

掠れた声で、呟きながら。

俺は、誰を殺そうとしているの？

気付けば、身体が動き出していた。足を縛れさせながらもベッドを飛び出して、扉へと駆け寄る。

あわただしくドアを開けると、夜だというのに城中の光が付いていて眩しかった。

光の中をかいくぐって私は廊下を走る。身体の奥からわきあがる歓喜に、足が震えてしまいそうだった。

声だけでわかる。

言いようのない気持ちが、胸を満たしていった。

ようやく目を覚ましたのだ……ようやく。

たった一日……ほんの24時間足らず、それだけの時間なのに、胸が押しつぶされてしまいそうに苦しい。

不安、だった。そう、不安だったのだ。

ルアからもう大丈夫だと話は聞いても、彼を見ないことには、彼の声を聞かないことには完全には安心できない。

ようやく彼に会えるとわかった時、何を言えばいいか分からなくなつた。

生きててよかった？うん、それも言いたい。

あんまり心配させないでよ？うん、それも言いたい。

もうこんなことしないで？うん、それも言いたい。

ああ、もう駄目だ……。言いたいことが多すぎて、まとまらない。とにかく、会わないと。あつて、触れて、鼓動こどうを確かめて。

おはよう、って。

私は急く気持ちを抑えて、ドアノブを回した

……

「アリスっ！逃げて！！」

双子の絶叫に近い叫びが部屋にこだまする。

突然、身体の左半身に重い圧力がかかった。まるで横から殴られたような衝撃に、私の身体は呆気なく壁へと叩きつけられる。

「か……はっ……いった……」

打ちつけた背中と、斬り裂かれた左腕にじんわりと熱い激痛が駆け巡った。

鋭い爪でひっかかれた傷は深くはなかったが、とても立ち上がれそうにない。

苦しげな吐息を洩らす私に、彼は容赦なく追撃をしようと肩手を首のあたりに添える。

ゆっくりゆっくりと締め付けられる指はいつもよりも汗ばんでいて、それが逆に妖艶に思えた。

何が、起こったのだろう。

そくだ、確か部屋に入った途端イオがディーに押さえられているのを見て。

何をやってるのと問い詰める私にみんな呆然として。

真っ先にダムが我に返って。

私を凝視するイオの腕に注射を打ちこんで。

そしたら、イオが暴れだして。

デイーが突き飛ばされて。

ダムも顔を殴られて。

それで、イオに駆け寄りうとした私は。

こうやって、首を絞められている。

「ぐっ……や……あ……」

息ができない、というよりも長い爪が喉に食い込んで痛かった。

私は彼の腕を掴んで必死に抵抗しようとするが、もがくたびに締め付けは強くなる。

あまりの痛さにきつく閉じた瞼を必死で開けて、彼の瞳を見た。

正気じゃない。

人間……ですらなかった。

まるでそれは、傷だらけの獣の瞳^{もの}。人間が持ち合わせている理性という感情が、すっぱり抜け落ちてしまったようだ。

そして、近づく者には警戒心剥きだして牙を突き立てる。それが誰かなど、考えもしない。

「おいっ！やめろ、やめろって！！」

起き上ったデイーが泣きそうな顔でイオの腕に掴みかかる。

うっとおしげな眼を向けたイオは、腕を強く振ってしがみつく彼を振り切るうとするがデイーも負けじと腕に力を込める。

彼らの攻防戦の間に、私は何とか息を吸って遠ざかりかけた意識を取り戻した。

「くっ……いい加減にしなさいよ、イオっ！」

身体を捻ってまたがっていた彼の下から抜ける。

イオの眼がこちらを追って苛立ったような哭声をあげたが、ディ
ーに押さえられていて思うように動けないらしい。

その隙に顔を殴られたダムも立ちあがって私とイオとの間に身体を
滑り込ませた。

赤く腫れている頬があまりにも痛々しい。

「姫さま、早く逃げて！こいつ、毒の副作用で正常な状態じゃない

“チエシヤ猫”の本能のままに暴走してるんだっ！！」

「けほっ……けほ……は、はあ？！毒の副作用って……何それ、じ
ゃあ結局はまたあんた達のせいってこと？！」

「いや、うん、まあ、そうといえばそうだし、違うと言えば違うけ
ど……とにかく、鎮静剤は打ったから直に薬が効いてくるはずだ！」

「時間がたつまでって……ふざけんじゃないわよ！あんたら一回殴
らせなさ　きゃっ」

ひゅんっ

風邪を切る音がして、イオは掴まれていないほうの左手をダムめが
けて振り下ろした。

ダムはいったん口論する口をつぐんで身体をそらせると、私を庇う
ように抱え込む。

これが本当について昨日私を殺そうとしていたダムだろうか……。

「とにかく！ここにいちや危険だ、早く姫さまは部屋から出て！」

「で、でも……っ」

「あんたに死なれちゃこの世界が朽ちるんだよ！いいから早く！」

ダムが必死の形相でこちらを見たと同時に、ディーが苦しそうな悲鳴をあげた。

思わず二人同時にそちらを見ると、冷たいイオの瞳と目があった。一度その金色の瞳を見てしまうと、金縛りにあってしまったかのようにな動けなくなる。

まるで深海のような、昏い狂気が潜む瞳。どうしよう、身体が動かない。声が出ない……。

暗い世界に、私と貴方二人だけ。

「ディー……」

ダムの呆然としたつぶやきが鼓膜を震わせ、私ははっと目を醒ました。

瞬間、イオのほか見えなかった視界が急に広くなる。

明るくなった視界に飛び込んできたのは、目が冴えるほどの赤だった。

「あ……あ……」

その腹を鋭い爪で貫かれたディーが苦しげな吐息を口から漏らす。

背中まで貫通していないというのが唯一の救いだろうか。

いや、実際は傷はそこまで深くない。ただ、出血がひどくて大怪我に見えてしまうだけで……。

しかし兄を狂わせるのには十分すぎるほどの傷だった。

「あ……あああああああああ……」

ダムはその瞳に怒りとも憎しみともつかない感情を宿すと、獣のよ
うな叫び声をあげてイオに飛びかかった。

イオは余裕綽々の動きでその一撃を交わし、爪をディーの腹から抜
く。
赤い鮮血が暗闇を飾ると同時に、支えを失った彼の身体が前に倒れ
た。

「ディー！ディー！」

床に伏す寸前、ダムがその瞳から涙を落しながら彼の身体を抱きと
めた。

傷に障らないように抱きしめて、彼の息を確認する。

やがて致命傷ではないと判断したのか、ほっと息をつくと警戒した
ようにこちらを睨みつけたまま動かないイオに怒りの矛先を向けた。

「お前……ディーが何をしたっていうんだよ……何でこんなことさ
れなきゃなんねえんだよっ！！」

「チエシヤを、殺そうとしたから。死にたくないと思うのは当然の
こと」

何の感情も込めずに、イオは良く透き通った声で言った。

そのトーンと言いかすれ具合と言い、いつものイオそのものだった
が……何かが違う。

イオはこんな、無感情な声は出さない。

私が信じられないというように首を振ると同時に、イオはくるりと
こちらを振り向いた。

にたりと、嗤う。

「チエシヤの自我も、死にたがってて邪魔だった。だから今は封印
してる」

「自我……？それ、もしかしてイオのこと?!」

その名前がわからない、とでも言うようにイオは首を傾げるだけだった。

イオだとしたら………どういうことだろう。死にたい、だなんて………そんな自虐的なこと、一度だって口にしたことないのに。

いつだって彼はこちらが呆れてしまっほほど明るくて、意地悪で、飄々としてて　どこか、自分を隠していた。ふと、思う。

私は一体、イオの何を知っていた？

「おい、どっち向いてんだっ!」

イオの背後にいたダムが何の武器も持たずに殴りかかってきた。速さでも力でも長けているイオは何の造作もなくそれを避ける。

しかしダムの方も同じ手を二度使って勝てるとは思ってもいなかったようだ。

床に手を突くと、身体を捻るようにして足を振り上げブーツでイオの胸部を蹴りあげる。

どかっつと、硬い靴底が胸にあたると同時に獣の咆哮が耳をつんざいた。ぐっつ………と、押し殺したような声が食いしばった歯の隙間から洩れる。

「お前が誰かなんて今はどうでもいい。チェシャ猫だろうが先輩だろうが、関係ねえよ。どっちにしろ、お前は俺の弟を傷つけたんだからな!」

「お前、うるさい。チェシャ、お前嫌い」

お互い武器を持っているというわけでもないのに、殺気だけがピン

ピンと肌にあたって痛い。

制止の声も、掠れてうまく出なかった。とても、止められるものではない。

イオはもちろん私の声なんて聞いてくれないだろうし、ダムもこの錯乱状態だ。

いや……もしダムが戦うのをやめてくれたとしても、その時は容赦なくイオの爪がダムと私の喉を引き裂くだろう。

それほどまでに、イオは強い。

イオの身体が上に飛んで、中で半回転した。天井を強く蹴ってダムの方へ突っ込む。

まさか上から攻撃が来るとは思っていなかったダムは、かなりぎりぎりのところでよけた。

しかしあまり勢いをつけてなかったイオはそのまま何の苦もなく着地し、目の前の私に向かって爪を振り下す。

「姫さまっ!」

咄嗟に体勢を取り繕ったダムが私の身体を抱きかかえるようにして庇うが、爪は彼の右腕を切り裂いた。

「だ、ダムっ!」

「大丈夫、これくらい。姫さま、怪我は?」

「怪我って……あんたの方が重傷でしょ?!」

「こんなの、ディーに比べたら……ああ、もう!せめて武器があるならこんな奴……っ!」

「ダム……ねえ、お願い。イオを殺さないで……」

「……わかってるよ。こいつを殺したら俺もディーも処刑されるからな」

「チエシヤには理解できない」

ぺろりと小さく舌を出して爪についた血をなめるイオは、取りこぼすように呟いた。

小声で話していた私とダムは同時にそちらを向く。相変わらずその金色の瞳には、何の感情も浮かんでいなかった。

「どうしてお前はそいつを庇う。チエシヤには理解できない」

「お前……自分が誰を傷つけているかわかんねえのか?! こいつは“アリス”だぞ?!」

「“アリス”?」

突如、蔑むような嘲笑いが彼の顔を歪めた。

あまりにも歪な笑みに、背筋に冷たいものが走り抜ける。彼の吐く息が、言葉が、すべてが異常だった。

嫌だ、聞きたくない。

何でそう思うのかなんてわからない。

ただ、耳をふさぎたい衝動に駆られる。

知りたくない いや、思い出したくない。

何か、とても大切なことを忘れてる気がするのに。

ワタシはだれ?

どうしてここにいるの?

約束は、どうなったの?

「そいつは、“アリス”なんかじゃない」

頭が、痛い。

「そいつの臓器は肉じゃなくて綿でできている」

うるさい。

「そいつの目は眼球じゃなくてボタンでできている」

やめて。

「そいつの口は唇じゃなくて糸でできている」

思い出させないで。

「そいつの皮は皮膚じゃなくて布でできている」

聞きたくない。

「そいつは“アリス”じゃない　　いや、そもそも人間ヒトですらない」

「やめてえええっつっ!!」

気付けば、私は彼の言葉を遮るように叫んでいた。驚いたようにダムがこちらを向き、イオはさらに笑みを深める。なんとかかその場を取り繕ってくれたのはダムだった。わけもわからずガタガタと震える私を守るようにしてきつく抱きしめながら、鋭い目つきでイオを睨む。

「お前……何ふざけたこと言っただけだ？！姫さまはれっきとした“アリス”だ！お前の方がよっぽど人間的じゃねえよ！」

「お前、さつきからうるさい。邪魔」

どがっ

突然何の前触れもなくイオの足がダムの鳩尾へと入った。

痛そうに顔を歪めたのも束の間、そのまま彼の瞼はゆっくりと落ちていく。

気絶したわけではないにしろ、この空間で意識を保っているのが自分とイオの二人きりという状況に私は恐怖する。

ダムの動かなくなつた体をどかすようにして蹴り飛ばすイオを見ている、指一本動かさない。

どうしてだろう、こんなにも彼が怖い。

きつと彼は　　私の正体を知っている。

私の、あの無残な残骸を　　。
なきから

「可哀想な子」

そつと、右頬に手を添えられる。本来だったら熱いはずのその手は、デイーの血がべつたりとこびりつき熱が奪われていた。

彼の顔が近付いてくる。デイーの血か、ダムの血か判らない……赤にまみれたその笑顔でさえ、綺麗だと思えるのだ。

ついつと彼の指が頬のから顎へと滑り、首筋をまるで誘うようになぞる。その間もずっと、彼は優しい笑顔で私を見つめていた。

「物に命が宿ってしまった、“アリス”の身代わり。大丈夫、チェシヤが全部喰べてあげる」

「い……お、やめて……」

「チェシヤに喰われたほうが、きっと君も幸せだよ」

少し口を開きそこから白い牙を覗かせながら、彼はまるで口づけるように私に顔を近づけた。

抵抗さえできない。懇願の言葉さえ届かない。

「イオ

」

ただ、貴方におはようって一言笑ってもらいたかった。

誰かが、自分と呼ぶ声がする。

「アリス？」

イオはきよとんとした顔で目の前のアリスを見つめた。アリスは何もかもすべて諦めたような顔で目を閉じている。

その頬には4筋のひっかき傷が。それが視界に入った瞬間、くらりとイオの身体が横に倒れた。

「え……い、イオ？」

呆然と呟くアリスの声が可愛くて思わず嘖き出しそうになるが、今はそんな余裕さえもない。ただ、部屋に立ち込める血の臭気にむせかえる。気持ち悪かった。どうしてこんな状況になっているのだろう。

あたりをちらりと見渡してみると、端々でディーとダムが倒れている。呻いているあたり死体ではなさそうだが　　なんだ、あの爪痕は。

「なに、これ……」

血と服にこびりついた鮮やかな赤を見てまさかとは思いが、何の記憶もない。

そうだ、確か自分は双子とのゲームに勝って、それでアリスと休んでいたらだんだん眠くなってきた　　それから、何か夢を見た。どんな夢だったかは思い出せない。ロキが出てきたのだけは覚えているのだが……特に最後の方になっていくにつれて記憶に霧がかかる。

そして起きたらこの惨状だ。

これは、俺がやったの？

イオはそっと、まだ放心状態でうまくしゃべれないらしいアリスの頬に手を当てた。浅い傷跡をなぞる。これが直るのに、一体どのくらいの時間がかかるだろう。

俺は、一体誰を傷つけた？

一番、大事な女ひとを。誰よりも守りたかった人間ひとを。この手で、傷つけてしまった。

ゆっくりと、傷跡に唇を寄せる。恐る恐る舐め取った傷からは、錆びた鉄のような気持ち悪い味がした。

「アリス……ごめん、ごめん……っ」

「イオ……よ、かった……いつものイオだあ……」

きつく抱きしめるイオの肩越しに、アリスの押し殺した嗚咽が響いた。まるで子供のような泣き声に、こちらも安堵してしまう。

もう少し、鎮静剤くすじが効きだすのが遅かったら。

もう少し、自我イオを取り戻すのが遅かったら。

もう少し、アリスが名前イオを呼ぶのが遅かったら。

また自分は、母の時のように大切なものをこの手で壊していたのか
もしれない ……

カチリ

持っている懐中時計の針が時を刻み始めた。

あの時以来、一度も動くことのなかった壊れた時計が、
檻の中、少女はそれを驚いたように見つめる。

この世界に来て一度も笑ったことのない彼女が、最大限の幸せを象
徴するような笑顔を顔に浮かべた。

「ウサギさん、わたしはココだよ……………」

だからはやく、ねえ。

わたしをむかえにきて。

だって、ヤクソク約束でしょう？

【chapter - 4】Flame Guilty or Innocent

さあ、気づいてみればコメディ要素がすっからかんになってきた今日この頃です。

恋愛要素も何ですかね、この章は！まったくないじゃないですか！やはりルア君が主な章と言うのは内容が重すぎた……orz
ええー、なんと期末考査2週間前だというのに呑気にパソコンの前に座る作者です(´・・・;))
だってこの章だけでも終わらせたかったんだもん！ キモい
ということ。今回は顔文字もギャグもなしに解説行きまーす！

【e p pの解説】

たぶん今まで書いた中で一番ちんぷんかんぷんなe p pだったと思います。

もやもやしてる方、すみません。

ピコーンってきた方、たぶんそのとおりです。

伏線……というよりは以前作った伏線を解いているといったところでしょうか。

これ以上は完全なネタバレになるので言えません。

うーん、とりあえず戦闘の白熱っぷりが少しでも伝わると幸いです。デイーは最初にリタイア、ダムは結構最後の方まで粘ってましたねー。ダムを書くのは意外と楽しくて好きです。

改行が異常に多いのはサーセン、それで字数を稼ごうっていう下心が丸見えです

にしてもタイトル…… 47話目で「動き出す」ってどうなんだ！
基本この小説は進行がまったりしてます。ようやく物語が始まりました。

【章の解説】

えー、ではまずタイトルの解説から……。

Flameは「炎」、もしくは「フレーム様自身」のことを指します。これはどちらの解釈でも構わないと作者本人は思っております。Guiltyは「有罪の」、対してInnocentは「無罪の」という形容詞です。

うわーい、これでまた皆さんの知識が増えましたね！ゞ（*・
*）ノ

……………とつくに知ってますよね。馬鹿ですみません。

ふざけるのはここまでにして、と。

今回のメインテーマはフレーム様の過去編です。一応ペアで表すとルア×フレームですね。

フレーム様……あの頃はまだ可愛かった……。ルア君は今も昔も影が薄いです

イオ君よりもだいたい重い過去編でしたが……書くのはイオ君より楽しかったです。ほら、だってイオ君のって近親相○もどきがあったから……。

e p 5 ～ e p 8 までの過去編ですが、順に「女王」「ブラッド」

「フレーム」「ルア」がメインの話になっております。

他には「デー×ダム」、「アリス」、「イオ×ロキ」が収録されています。

今回ぶつ通しでロキくんできてませんでしたねえ……イオ君も始終寝てましたし。

次章から、少し形式が変わります。

今まではずっと時間ごとになっていましたが、今度は2週間後とかそういうことになります。

えー、感覚的には番外編の甘々ストーリーをシリアスストーリーに変えて繋げているような本編になると思うのです。

シリアスと言いましたが、今までよりも糖度は多くなっていく……
と思います。

っていうことで、たぶん次回から【第二部】的なものになりますね。
ようやく一区切り話が終わりました……。心の余裕があれば番外
編を書きたいと思つてます。

……今度こそテスト勉強をしなければ！感想を下さっている柚子さ
ま、明日あたりには必ず返信します！遅れてすみません……。

【廃棄中センテンス】

廃棄理由：コメディイは失せろって感じだったから

シーン：ディーを攻撃されてダムが怒り狂う。

「お前が誰かなんて今はどうでもいい。チエシヤ猫だろうが先輩だ
ろうが、関係ねえよ。どっちにしろ、お前は俺の弟を傷つけたんだ
からな！」

「お前、うるさい。チエシヤ、お前嫌い」

「俺だつてお前なんか大っ嫌いだよっ！べ、別に好きってわけじゃ
ないんだからな！」

だからお前は何でそう雰囲気をぶち壊すようなことを……。

「お前、キモい」

全くもって反論できない……。

えー、なんとというか、すみません……。

ダムっていうキャラはなんでこんなにいじりたくなるんでしょう……

……。

でもこれで曖昧だった双子のキャラが決定しましたね！
ディーは「ヤンデレ」、ダムは「似非ツンデレ」です

【chapter・0】ep4君の瞳に完敗 右向いて (前書き)

はたまた本編崩壊の番外編です。

本編のシリアス雰囲気損ないたくない方はこのまま回れー右っ！

………帰っちゃいました？

それでは第4回番外編、只今開幕！

「まあ……なんて綺麗な夜景なの」

「そうだね、でも……どんな美しい景色も君の前では霞んでしま
うよ」

「ふふ、うまいことばかり言っつて。お世辞を言っつたって何も出て
こないわよ」

「お世辞なんかじゃないさ。本当に君は綺麗だ。さあ、二人出会
えた奇跡を祝おうじゃないか」

「本当に、どうしようもない男ね、貴方は。私の心を余すことな
く捕らえていくんだから」

「もう、放すつもりはないよ。 君の瞳に、完敗」

えー、盛大に負けたところで始まってしまいました、第4回番外編
ちよつとそこ！「戻る」ボタンを押そうとしない！

司会は僭越ながら帽子屋レーテがやらせて頂きます。おいこら！プ
ラウザを閉じようとしなさい！ジジイで何が悪い！

……まあいわゆる「出オチ」というのをしてしまいましたね。だか
らと言っつて読むのをやめないで下さいっつてば！

「ペツ、ペツ……おえ……どうしよう、自分がキモいキモいキモい
キモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモい
キモい……」

ああ、アリスですか。小ネタ出演ありがとうございます。

先程の出演、女性役は紅一点のアリスでしたー。パチパチ。

え、ちなみにあの気持ちの悪い男性役は誰ですかっつて？

そりゃもちろん……。

「ハアツ?! な、何で俺の方見るんだよ! 一番あり得ないだろうがっ!」

……いえ、ついにロキも登場回数少なさに不満が爆発したのかなあ、と思いで。

ほら、誰だって一度は赤っ恥になることわざするでしょう?

ああ、でもそこまで真っ赤になっているのを見る限りまずあり得ないでしょうね。

ええーっと、じゃあほかに気障な台詞を吐きそうな人は……っと。

「そう言っ僕を見るんですか。この僕が誤字なんてするはずないでしょう」

「で、次に俺を見るのね。俺、言葉で言うよりも身体に直接調教するほうが好きだからー」

ま、それもそうですね。この二人を疑った僕が馬鹿でした。

「ってうおい! イオの発言はスルーですか!」

いつも通り騒がしいですね、アリス。

変態野郎の変態発言なんていつも通り変態に見えるだけじゃないですか。一々気にしてられませんよ。

で、問題の気障野郎はだとしたら誰なんでしょう……。アリス、そいつの特徴は覚えてますか?

「え、えーっと……ちょっと、背が小さかったかな」

「シヨタ? あ、じゃあネズミちゃんかもー」

「それから、髪は赤かったわ」

「赤髪……という双子がいるけど、やつらはでかいしな」

「んー……あ！そうそう！鉞を持っていたわね！」

「ああ、わかりました！前女王さまが男装して地獄から這い上がってきたんですね！」

ざくつ

「きゃあああつ！る、ルアが、ルアがああつ」

「お、落ち着いてアリス！まずい、直撃だ……ロキ、何か血を止めるものを！」

「お、おうつ！」

えー、突然ドタバタし始めましたね。状況を説明しましょう。

天から降ってきた鎌が見事ルアの脳天に突き刺さりました。まったく、罰当たりなことを言うからですよ！。

間違っても前女王さまを侮辱してはいけませんよ、ルア。

「う、う……失礼しました！事実を認めたくないあまりについ現実逃避してしまいました。やっぱり、チビで、髪が赤くて、鉞を持った物騒なクソ餓鬼と言つと一人しかいませんよね……」

「クソ餓鬼で悪かったね」

「ちゃらららつちやら〜（効果音：爆音）」

「じょーおーさまのー、おなーりー（一同、礼）」

「はい、ディーもダムもわざわざありがと。少し黙れ」

「「はい」」

朝っぱらから何ですか、騒々しい。……につくき女王、また僕の司

会者の座を奪いに来たんですか、この無駄に登場回数が多い餓鬼が！
いくら強いからって簡単に僕を倒せるだなんて思わないで下さいね！
ちよっと人気だからって、生意気です！

「レーテ、それ貶してない貶してない」

「て言うか少なからず自分の影の薄さだけは自覚してんのね」

ちよ、あんたらは一体だれの味方なんですか！

え、なんですか、女王。作者からの手紙？どれどれ……。

『アンニヨンハセヨ！作者です。』

うふふふふ………模試でいい成績取っちゃいましたよー！絶対落ちてると思っただのに実際は上がってm』

えー、手紙の1・67割が気持ち悪い笑いと下らない自慢話で構成されてるので省きます。

『

さらにさらに！うふふふふ………リクエスト』

えー、手紙の1・67割が気持ち悪い笑以下略。

「ちよおつと待ちなさいよ！今リクエストって言いかけなかった？
そこ破り捨てちゃいかんでしょうが！」

ん？あれ、ほんとだ。えー、じゃあ読み上げます。

『

リクエスト貰っちゃいました！今回は時期に合わせて「クリスマス
パーティー編」です！

今回は第三回のように色々と暴走しないように、且つ第二回のようにR指定が入らないよう、普通の恋愛小説で行きます！
え？題名はありやなんじゃとな？

……ただの変換ミスです。気にすんナ
キモくてごめんなさい、いつものことです。

今回の主題はイオアリで送る「クリスマスパーティー編」です。
その他にもルアアリ、ロキアリ、ルア×フレイム&ディー×ダムが収録されています。

エロあり（主にイオ）、ギャグあり（主に双子）、愛あり（主にロキ）、ストーリーあり（主にルア……というかあってはいけない気がする）、流血表現（主にフレイム様）……はさすがにないか。
クリスマスパーティー編、これより開催します！

あ、ちなみにですね。

フレイム様と双子の人气が意外にも高かったので今回は特別出演として具現化してもらいました。

アイラブ ヤンデレ！

ではでは、アンニョンヒケセヨ！』

……はあ、なるほど。つまり読者様方から受けがよかつたらこんなふうに出演できるようになるんですね。

僕より年下なのに……僕の方が最初に登場したのに……僕の方がキヤラ作り頑張ってるのに……。
っーかなんで双子まで！

「だよなー、俺も別にこんな番組に出たいわけでもみんなに好かれたいわけでもなかったのになー」

「いつの間にかダム、人気出てたよね……。ダムは僕だけのものなのこー」

「何言つてんだよ、俺とディー、セツトで人気出てたじゃん！ずっと二人なのは変わらないだろ？」

「うん、ずっと二人、二人だけ。ダムさえいれば僕は何も要らない！」

「要らない奴らなんて、殺しちゃえ」

「邪魔する奴らなんて、燃やしちゃえ」

「ずっと二人、俺らだけの箱庭」

「他には誰もいない、僕らだけの楽園」

えー、綺麗にまとまっているようですがとんでもないヤンデレです。今はこんな奴らが普及してるんですねー、おっそろしいです。

「わー、いいなー。俺もロキとあれくらいイチャイチャできたらいいのこー」

「気持ち悪いこと言うなっ！誰がやるか、だれがっ！」

自分と自分でイチャイチャ……わーなんて倒錯的で素敵なんですよ。虫唾が走ります。

「フレイム様……あんたほんとにあのセリフ言ったんですか……」

「クリスマスパーティー編だつて！ダムはもちろん、僕と踊ってくれるよね？」

「何だい、ルア。何か不満でも？僕はそこに書かれていた文を読んだだけだ」

「ロキったら相変わらずのツンデレだなあ……もうちょっとデレてくれたっていいじゃん」

「うん、踊りたい！でも確か俺らつて城の警備言いつけられてなかったっけ？」

「俺はツンデレじゃねえ！っーかお前、あの双子が普通だと思つてねえか？！異常だぞ、異常！」

「ああ、もう……あんな恥ずかしい台詞をさらりと……。こんな子に産んだ覚えはありませんよ！」

「がやがやがやがや」

「えー、めんどくさっ！そんなのサボっちゃおうよ！」

「大丈夫だって、俺は貴方、貴方は俺。きつと何もかもうまくいく。だから、ね……大人しく身を委ねて？」

「産まれた覚えもないね」

「ざわざわざわ」

「てめえ何フェロモンまき散らしてんだっ！だーっ、はなれる変態！！」

「そういえばフレーム様、なんであのシーンに鉞なんて持ってたんです？」

「誰かかまっつてよう……」

アリス、会話に入り込めないからってがやがやざわざわ煩いです。

えー、なんだか会話が收拾つかなくなってきましたね。これ以上八チャメチャな会話が続く前にさっさと始めちゃいましょう。

ここで問題です。誰がどのセリフでしょう？解答はあとがきにて。イオなんかは浮き出てますね。

では、アリ幕番外編、クリスマスパーティー編開幕です！

第一幕 そう、これこそ乙女心（pure heart）！

冬と言えば、と聞かれたら世間一般の高校生はなんと答えるだろう。「寒くてきらい」という声もあがれば、「バレンタイン……うふ」なんて声も上がるだろう。

しかしそれらはすべて、神髄とは少しずれている。

「冬と言ったらクリスマスでしょう？」

「そう、ホワイトクリスマス……ってそうじゃない！」

呆れたようなルアの呟きに、私は顔をどアップにして反論した。さすがのルアでも少しいやそうに身体を引く。失礼な。

冬イコールクリスマス？そんな簡単なもので語られてたまるものですか！私は息ごんで机を叩いて立ちあがった。

「冬と言えば何?!寒い、そうでしょう!寒い時に必要なものってなによ!」

あまりにもくだらないことになっていう熱意だ。

ルアの目はそう語る。うん、私もちよっとそう思う。

しかし!しかしだな。さすがの私もそろそろ我慢できなくなってきたんですよ!

ベッドの中は寒いし、廊下は冷たいし、間違つてでも「寒い」なんて呟くと変態紫が聞きつけて「じゃあ俺と熱くなるようなことしよ?」なんて言いやがるし……。

ルアは今まで読んでいた資料から目を離すと、眼鏡を中指であげた。お、なんだか「僕にわからないものなんてありませんよ」的な仕草。はっ倒してやるつかこのヤロー。

「寒い時……そうですね、暖房をつければいいんじゃないですか?」

「このお坊ちやまがつー！」

がっ

平然と某エリザベス嬢の「パンがないならお菓子を食えばいいじゃない」発言をかましたルアの後頭部を蹴りあげる。

不意打ちの攻撃にルアは当然よけられるはずもなく、無様に転げて持っていた書類をばらまいた。

「な、何するんですかアリス！」

「あんたねえ……もうちよつと乙女心をわかんないよ！レーテなんてどう答えたと思う？ 囲炉裏よイ・ロ・リ！満点回答だわ！」

「はあ？ロリ？！あの男、ついにそんな趣味にまで……っ！」

「耳鼻科行ってこいクソウサギ！」

再び足を振り上げ追撃を狙うが、どうやら彼も馬鹿ではないらしい。ほんの少し身体を後ろに傾けただけでよけてしまった。

「囲炉裏ですね、囲炉裏。で？そのどこが乙女心なんですか」

「いや、別にそこまでの満点回答求めないけどね、現代人に」

私は体勢を整え直すと、再び身を寄せてきたルアと対峙した。

囲炉裏……発展の時代から取り残されてしまった日本の伝統の一つ……なんでそんなものをレーテが知ってんだというもつともな質問はこの際置いておこう。

大事なのは、そのしみじみとした感慨深さ。そう、“あれ”を囲んで座るときの幸福感！きつと“あれ”も囲炉裏も同じようなものだと思う。形状も同じだし。

見放したような私の口調に、ルアは不満げに唇をとがらせながら眉

をひそめた。

この時、私は彼の瞳の中の不穏な光に気づけばよかったのだ。

「僕は、アリスのことだったら誰よりも知ってると思ってました。

どんな時も陰から見守ってきましたからね。それが帽子屋なんかに抜かれるなんて……屈辱的です」

「ちよいと待て。お前それってストー……」

「よし、帽子屋を抹殺しにいこう」

「待て待て待て待てっ！」

「買い物に行こう」的な軽さで人を殺されたらいくらなんでも困る。倫理的に困る。

私が彼の袖をひっぱりながら必死で止めると、ルアはむっとしながらも諦めたように肩をすくめた。

不機嫌そうな顔のまま私と対面し、腕を組む。いつも偉そうなことを言っているせいか、やけにその姿がしっくりきていた。

「じゃあ教えて下さいよ、アリス。アリスの言う乙女心って一体何ですか？」

ふいにあの端正な顔が近付いてきて、覗き込むように間近で目を合わせられる。

ど、どうしてこいつはこう、何の臆面もなく……！カアアツと音を立てて紅潮した私の頬に、白い手袋をつけた手が触れる。

慌ててのけぞろうとした背中はもう一つの腕に阻まれていた。素早く目を走らせる。彼の腕はするりと私の腰にまわされていた。

この野郎、いつの間……っ！

「僕は、アリスのことなら何でも知りたいです」

至近距離で、優しく微笑まれる。策略だとは頭の中でわかっていても、加速していく鼓動はどうしようもなかった。彼の綺麗な瞳に囚われる前に、顔を俯かせて目をそらす。それでもきつと、耳まで真つ赤だったのは丸わかりだろう。

「だ、だから！寒いと言ったら必要なもの一つしかないでしょうがっ」

「わからないから聞いてるんですよ」

「も、もう何でもいいから！とにかくさっさと離れなさい！あ、暑苦しいってば！」

あまりにも彼との距離が近すぎて、よく考えもせずにとんでもないことを言っていた。

自分の言葉の不用意さに気付いた時はもうすでに遅く、硬直する私の目の前で腹黒さ全開の笑みが広がる。

くっ、自分で言うのも悲しくなる平たい胸に小さな重圧感を感じた。

背中に腕をまわして私の身体を抱きしめたルアは、そのまま何の苦もなく宙へ持ち上げた。

足が床につかない感覚に、私は自分がどこにいるのかもわからなくなる。すべての感覚を、彼に奪い取られた感じだ。

「こうしてればあったかいんですね？」

「……………う、うるさいっ……………！」

（い、いや、確かに人肌に触れてればあったかいけど！む、むしろこれは……………）

あ、熱い……。

彼の熱い息が耳元にかかつて来るたび、頭が沸騰しそうになる。必死で抵抗しようとする頭の片隅では思うのだが、まるで指先から一切の力が抜けたように動かない。

「アリス、貴女がどんなものを欲しいのかは知りません。でも、少なくとも僕がいるんですから防寒グッズはいららないですよね？」

んな無茶苦茶な……！

抗議しようとした唇の上にそっと細い指が置かれ、「静かに」と制された。

グイッと腰をひかれ、私の唇と彼のそれが触れあいそうに近くなる。彼の息が口内に入ってくるような気がして、私は反射的に唇をきつく引き結んだ。

今更ながらなのだが……これは意外と、ヤバい状況なのでは？

「いつでも温めてあげます。それでもまだ足りないならもっと、燃えるようなことをしまししょうか？」

言葉とともに、息とともに、彼の赤い舌が唇の間を割って入ってくる……。

寸前。

「人が貴重な仮眠をとっている時によくもまあイチヤイチャと」

千度の熱でも一気にマイナスに達してしまいそうなほどの冷気が、背後から襲いかかってきた。

私はピシリと固まったルアに顔をひきつらせながら、機械のようなぎこちない動きで後ろを振り向く。

そう、この鋭い刃のような独特の声音は……。

「ふ、フレイム様……」

もれなく濃い隈もついている、女王さまこと天下のフレイムであった。きつとルアがサボった分の激務のせいでここ何日も寝ていないのだらう。

目の下に黒い跡があるというのに、それでもなお彼は妖艶な笑みを見せる。

楽しそうにひらりと手を振った。その手には　　ダイナマイト。

「そんなに寒いなら燃やしてやるよ」

少女の遺言状には、ただ一言こう書かれている。

『私はただ、コタツが欲しかっただけなんです』

f i n . . .

「っていうか何ですかこれ?!もしかして僕の出番、これで終わり

ですか?!」

えーっと、そうですね。アリスとのデュエットはこれだけです。何か不満でも？

「不満たらたらずですよ！何ですか、この短さ！も、もっと主要な恋愛シーンを濃厚に書いたっていいじゃないですか！」

君結構恥ずかしいこと言ってるの、自覚してますか？いいじゃないですか、いつものルアよりかはずいぶんとスムーズに行ってましたよ。

それに今回の主題は女王の最後の一言ですからねえ。それ以外はいわば女王の機嫌を悪くするための踏み台です。

「ふ、踏み台……」

えー、作者曰くですねー……

『今回のルア編は次回のイオ編のためのワンクッションです』
とのことですよ。

「ちよ、ちよ、ちよっと待ちなさいよっ！ワンクッション?!ってことはまさか……」

えーと、はい、そうですね。イオだったらR15すれすれのところで止めることも可能なんじゃないですか？ほら、奴って何かと器用ですし。

イオもR指定入ったところで放送停止になるんですからね。少しは気遣って下さいよ。

「んー、そうだね。今回は多少気をつけてみるけどね」

「む、むしろギャグ一直線でいかない？ほら、ホワイトクリスマス
つつたらなんか純白そうないメージあるじゃん、ね？だからあんま
りその、え、エロいことをやって読者様方をどん引きさせるわけに
は……」

「何言ってるのさ、アリス。純白を自分の色に染めるのが楽しいん
じゃん」

「お前の変態ちっくな趣味なんか知るかつ！」

か、活動報告のところでおおほらを吹いてしまいました……。

えっと、今日完成できたので今日中にupしちやいます。当時の予定は13日でしたが、今日12日に更新し、次回更新はその3日後、15日です！

誤った情報、申し訳ありませんでした！

皆さま、お久しぶりです、作者です！（名前を言わないでどうする）

期末テストで2週間ちよい、更新に間を開けてしまいました……楽しみに待っていた読者さまには申し訳ありませんでした！

え？結果……ですか？

物理 オワタ！

もういいんです、過ぎ去ったことはすべて忘却の彼方へ置いていくことにしているんです（いつまでも成長しないタイプ）

さあ……番外編自体が久しぶりだったんですが……ぎゃ、ギャグセンスがめつきり落ちましたね……。非常に残念なことになってます……。

さ、寒いよ、ギャグが……せ、せめてルアのエロターンであったまってくれるといいんですけど……。

ここまでギャグセンスがナッシングだとほんともう、どうしようもありませんよね（一一）

うーん……次回はせいぜいイオ君のエロターンで全部埋まるよう最善を尽くします（それもどうかと思う）

今回、タイトルがカオスですね。あれしか思い浮かんでなかったんです……。

さあ……ここで問題です。

副タイトル 右向いて ですが、これは一体何を表わしているでしょうか？

ヒント1 今回の番外編は3部構成です。

ヒント2 私たちは小学生のころある場面でこれを必ずやれと言われます。また、厳しいところでは手を挙げるとも言われます。

我ながらくだらないことをやってるなあ…と思いつつも。

さあて、気付けばもう午前2時！さすがに寝ないとヤバいのでさっさと解説を終わらせます！

【第一幕ルア×アリス（オリジナル）】

テーマはコタツです。誰が何と言ってもコタツです。

「暖房？金がかかるわあつ！」 コタツもだ

「暖炉？御曹司かあつ！」 ただの妄想

「ゆたんぼ？家族に独占されとるわあつ！」 家庭の事情

「ヒーター？エコに悪いわあつ！」 適当

「ホツかいろ？全身に張る気あつ！」 部分じゃ足りない

つてことで、コタツはなんとも優れた道具だと思えます。はい、寒がりな私はwithみかんで始終コタツの中に蹲ってます。

えーってことで、コタツ推奨の短編のつもり だったのですが。

どうしてこうなった。

コタツ一つでこんなに卑猥になるなんて、作者自身思いもよりませんでした……。

というかルアくんのエロターンって……何気に多いですね。ですがいまだに慣れません……。

たぶん「ルア」(イオ+イオ+イオ+ロキ)÷4「って感じだと思
うんですよ。あ、これは作者が勝手に思っただけですからね。

にしても　　今回、一番かわいそうだったのはフレイル様でした
ねえ……。

ルアが仕事をさぼったせいで眠れずにいたのに、仮眠の時でさえア
リスとルアがうるさくて眠れないなんて……ごめんよ、フレイル様
……。

さあ、では最後に。どっかの会話での回答…です。

ルア　ディー　フレイル　イオ　ダム　ロキ　ルア　アリス(邪
魔)　ディー　イオ　フレイル　アリス(やはり邪魔)　ロキ　ル
ア

ああ、そうだ……遅れました、が。

祝　総合PV数15万突破！

前回に引き続き、ネタ・エロ満載の番外編です。
本編のシリアス雰囲気損ないたくない方は今のうちにお逃げ下さい。

大丈夫かと思いますが……一応簡単な用語解説をしておきます。
最初に宣言しておきますが、これらの用語はすべてネタとして使われているものです。決してそういう小説ではありません。
知っている人は決して「用語解説」を呼んではいけません、目が腐ります。

色々と末期な用語たち

- 腐の方々…いわゆる腐女子・腐男子。「ボーイズラブ(又の名をBL・薔薇・やおいなど)」が好物の人々。同人誌を書く人もいる。
- 攻め…BL用語。覚えなくても支障はない。男性×男性と書かれていた場合、左側の人。「男役」の男性。(例：イオ)
- 受け…BL用語。むしろ覚えてはいけない。男性×男性と書かれていた場合、右側の人。「女役」の男性。(例：レスト)
- 同人誌…ここでは「BL本」の意味。色々とまずい。
- 萌え…どうにも説明しがたい感情。

なんでお前こんなに知ってるんだという質問は頼むからしないで下さい。

周りがこうなんです、周りが。

えー、もう一度言います。これはネタだ！

第二幕 蜜よりも甘い夢を

「イオ、貴方はいつもいつもそう寝てばかりいて……よく太らないですね」

「……んにゃ？」

心地よいレム睡眠の途中、額にぬくもりを感じてイオは薄目を開いた。

昔もこうやって、頭を撫でられた気がする。幼いルアとレーテに、髪の色が面白いとかなんとか言われて。

もつとも、あのように戯れることはもう二度とないのだろうけど。ソファーに仰向けになった状態では、レーテの顔は見えない。笑っていればいい、と思うのに声には明らかに呆れが混ざっていた。

レーテはふうつと嘆息しながら優しい仕草でイオのはねっ毛を梳いていく。

「ほら、そんな無防備に寝てると襲いますよ」

「えー、何それ。性的な意味で？」

「アホですか。襲撃的な意味です」

「なんだ、つまんない」

ルアだったら真っ赤になって面白い反応してくれるのになあ……。イオがぼやきながら寝返りを打って再び眠りにつこうとすると、ペしりと軽く頭をはたかれた。

「ふざけたことぬかす前に……いいんですか？そろそろ始まっちゃいますよ」

「にゃ？何が？」

「何が、じゃありませんよ。だって今日は

」

「あああつ！！！」

キ　ン……

獣人は普通の人間よりも五感が優れているということは、今どき5歳児でも知っている。しかし、優れていると言っても個人差によって感覚は人間とほとんど変わらない、もしくは劣っていることもある。実際、某三月ウサギなどは極度の味音痴だ。

そんな獣人が、決まって人間よりも鋭い感覚　それが、聴覚と嗅覚だった。

こんな街中に響き渡るような大声をあげられたらたまったものではない。

イオはまだガンガンと反響する頭を抱え込みながら、紫色の耳をへたらせた。空気がびりびり震えるような野太い絶叫を発したそいつの方へと不機嫌そうに目を向ける。

安眠妨害の上、鼓膜破壊寸前、か。まったく、どうしてくれよう。

「いつの間に来やがった…！マスターからはなれるこの変態猫！」
「うつるさいよ、うさちゃんさあー……いい加減黙らないとその眼^め球^{だま}くりぬくよ？」

「じよ、冗談じゃねえ！やれるもんならやってみろってんだ！バカバーカ！」

シヨタコンではないと断言できるが、可愛い子は男女見境なく好きである。

こうやって頭がすつからかんそうで、今ごろ小学生でも言わないよ
うなことを言う馬鹿でも、可愛ければまあ……食べる。

人は外見が8割と言うが、決して外見で決めているのではない。

要するにその人の外見と言動が調和してるかどうかを見て好きかど
うかを決めるのだ。

「……………」

「な、なんだよ!」

イオはなんだかも悲しくなってきた思わず威嚇の姿勢でこちらを
睨むマルスから目をそらした。

(うん……なんだか、いるんだよねえ、こういう生まれてくる身体
を間違えた人って)

アリスがやったら絶対可愛くて襲いたくなるのに。イオは邪な空想
を頭の中で繰り広げながら短くため息をついた。

自分よりでかい大男が瞳に涙を浮かべて「バーカバーカ!」なんて
言っても可愛くもなんともない。率直に言っただけ死ねばいい。

ギヤーギヤー騒ぎ出すマルスとそれを困ったような笑顔で諷めるレ
ーテ。二人を横目で見やりながら、再び襲いかかってきた睡魔に身
を委ねようと身体を丸める。

しかし、また一人乱入してきた者が。

「ああっ、もう……着替えの途中に逃げないでよ!マルス、またネ
クタイ逆になってる!その背広もアイロンかけろ!ほらそこ!シャ
ツだらしない!」

がたっという今にも壊れそうなドアの開く音と同時に耳に飛び込ん
できたのは、女子かと思うほど高い少年の声。

キンキンする……野太い声は生理的に嫌だが、高い声というのもかなり頭に響くものだな。

イオはもはや見る気も失せて顔をクッションに埋めた。

「れ、レスト……だってこれ裏も表も同じじゃん！ネクタイなんかどっちでも……」

「全然違うよ！早く直せつてば！背広もシャツもいったん全部脱げ！
ぎゃあああっ！ま、マルス、このオレンジ色の染みは……」

「え？あ、ああ、さつきマスターと囲炉裏の傍でオレンジ食つてたら……」

「脱げ！洗え！ついでに死ね！」
「れ、レストおっ?!」

……少しも眠れない。眠れるはずがない。

イオは救いを求めるような目をレーテに向ける。レーテは対処できそうもないというような顔をしていたが、彼の視線に気づくと心配そうに手を額にのせてきた。

少し乾いた大きな手が、前髪をかき分ける。そのまま、彼は胡乱気に顔を少し近づけてきた。

「さつきからやけに大人しいと思ったら。ちょっと熱っぽくありません？」

「えー、またあー？俺って意外と病弱……」

ついこの間も風邪にかかったばかりだというのに。でもまあ、確かに言われてみれば先程からぬぐえない倦怠感、異色のものだ。ためしにぴたりと手の甲を頬にあててみると、信じられないほど熱い。

くちゅんつと、小さなくしゃみが出た。

「ほら、駄目ですねこりゃ」

「うー……なんかほんと、だるくなってきた……」

「仕方ない……今日は留守番をしないとして下さい。すぐ帰ってきますから」

「留守番、つて？レエテ達、どっか行くの？」

そつえばなんだか、屋敷全体がそわそわしている気がする。いつもは火車のごとく奔走して働いている使用人たちも、今日は恥ずかしそうな笑顔で作業服から正装へと着替えていた。

マルスもちぐはぐな背広を着てるし、レストなんかどこかのお坊ちやま風の礼服を見に纏っている。

レエテは……服装はいつもと変わらないものも、明らかに「おしゃれ」をしているのがわかった。

「貴方、帽子にまで薔薇の花飾るのやめなよ。趣味悪すぎ」

ただし、その方向性が人とはズレているが。

レエテは華麗にイオの発言を無視すると、ソファアから立ちあがり身だしなみを整えた。

「やっぱり忘れてますね。今日は女王が主催するクリスマスパーティーでしょ？ “カードもち” はいつも通り強制参加なのですが…

…ま、“違反者”の貴方は休んでも構わないでしょう」

「女王主催のパーティー……？なにそれ、くっだらなない」

「そう思うでしょう？だから今日は休んでいて下さい。ほら、マルス、レスト。行きますよ」

女王というのもめんどくさい“カード”だ。イオはソファアに仰向けになりながら苦しげな息を吐く。

何かイベントがあるたびに“カードもち”参加の大掛かりなパーティーを開かなければならないのだから。

そこまで考えてふと、気付いた。マフラーを首に巻き付けている最中のレーテの裾をくいつと引っ張る。

「ねえ……“カードもち”参加ってことは、アリスも来るの？」

「え？それはもちろん、来るでしょうね。嫌がってもルアが駄々をこねて連れてくるでしょうし」

「行く」

「……は？」

「俺もパーティーに行く！」

高らかに宣言すると、呆然とするレーテ達の目の前で気だるさが残る体を無理やり起こした。

+

+

「アリス、いいですか。今日は国中の男共が来てるんですからね、くれぐれも注意して下さいよ」

先程から耳にタコができるほど聞かされている言葉に、私はげっそりと頷いた。

ルアの過保護はいつものことだが……この頃被害妄想じみてる気がする。

「世界中の男たちに視姦されてる」だとか「アリスはすごく可愛いんですから」とか、果ては「なんだか誰かが見ている気がする」だ

とか……お前は何の麻薬をやってるんだ。

「まあトウアイドル達が警備をしてますから大丈夫だとは思いますが……心配です」

「ルア、もういい加減にしなさいよ。パーティー始まっちゃうつてば」

そう、今日は全国の“カードもち”と金持ちの一般人が参加するクリスマスパーティーだった。

定期的に催されるパーティーよりも断然金がかかっている。壁も天井も床も、金と赤をベースにした装飾が施されていた。

豪奢……なんてそんな言葉では言い表せない。なんて言ったらルアとフレイルムが1カ月近くろくに睡眠もとらずに企画したパーティーだ。

「はあ……毎年恒例とはいえ、やっぱり疲れましたねえ……。この次は年越しパーティーっていうのがあるんですよ、まったく……」

「お疲れ様。今回はサボらずにちゃんとやったしね」

「まあ、当日にあの餓鬼を倒れさせるわけにもいきませんしね。仕方なく手伝ってやりましたよ」

ツンケンとしたルアの言葉に思わず、くすりと笑いをこぼしてしま

う。そんなことを言いながらも、先程から心配そうな視線を壇上で挨拶の言葉を述べているフレイルムに向けているのだ。

本当に、もう少し素直になれば何か変わりそうなものなのに……。

「トウアイドルティアーアンドダム以上で報告は終わりだ。今年も毎年恒例の“門番”の戯れ事を行う。それでは、代表ディーとダムに引き継ぐ」

ため息交じりの一言とともに、マイクのついたスタンドが傍で控えていたディーとダムの前に置かれた。
瞬間。

きやあああああつ！

大絶叫。

黄色い声、なんてもんじゃない。ドでかいホールが一瞬びりりと震えるほどの、歓声。

あまりにも唐突な沈黙の破り方に、私は思わず手に持っていたオンラインジューズを取り落としそうになった。

呆然と、顔いっぱい笑顔を浮かべて小さく手を振っているディーとダムを見上げる。

「ああ！もうなんて精悍な顔なのかしら！」「見て、こっち見たわ、こっち！」「きやあああつ！ダムくううん！」「ディーくん愛してる！」「はああはあ……ディーくんダムくんもつくっつけ！」「いやん、禁忌の兄弟愛最高だわ！」「ダムくん、結婚してええっ！」「ディーくんがもちろん攻めよね！ダムくんは絶対受け顔だわ！」「はあ？何言ってるのよあんた！ディーくんは絶対誘い受けよ！ダムくんは尽くし攻め！」「ディーくん、こっち向いてー！」「ヤンデレ大好きよー！」

………若干4名ほど腐っている輩がいるぞ。

まあこんな場にまでびったりと仲良く寄り添っているのだから、妄想してしまうのは仕方ないが……それを大声で言うのはどうかと。

「す、すごい人気ね……フレーム様の時は静まり返ってたのに」

「ええ、奴らは適当なくせに人付き合いいいですからね。特に女性からは人気が高いんですよ……あっちの方面の女性からも」

わざわざその言葉をつけ加えなくたっていいのに。

私は顔をひきつらせながら壇上から足早に降りてきたフレイムの方へ視線を向けた。

フレイムは相当憔悴しているようで、私が見ても睨みを返すことなく黙々と一人で食事に取りついている。

「あぁっ、あの餓鬼……またグリッピースを残してる！ちゃんと人參も食べないと駄目だと言ったでしょうが……。こらっ、レバーを取り除くな！だから鉄分が足りなくなっただけで貧血を起こすんでしょっが！あっ、醤油をそんなにかけて……そんな味の濃いもの、食べちゃいけません！」

……本当に、素直じゃない。どんなにぐちぐちと文句を言っても、結局はこういうことなのだ。

私は呆れた眼差しを隣でひとり長々と小言を言っているルアに向ける。

ルアも自分のやっていたことによく気付いたらしく、私と目が合うといつの間にかきつく握りしめていた拳を見て顔を真っ赤に染めた。

「そんなに心配だったらフレイム様のところ行けば？」

「じよ、冗談じゃありません！僕はアリスの傍にいたいんです！」

「でもほら……なんか今にも倒れそうだよ、フレイム様」

「なんですって?!……いや、そんなの僕にはか、関係ありませんから！」

……今明らかに足が動きかけただろうが。

私ははぁっと重いため息をつくとき、彼の背中を手で押しながら顎をしゃくって「行け」と指図する。

「私だつたら大丈夫だから。少し休むように言つてきなさいよ」
「……わ、わかりましたよ。すぐ戻ってきますね！」

まだ恥ずかしそうに顔を紅潮させながらも、その視線は私の方へ向いていない。

どんなにぐちぐちと文句を言いながらも、結局はこういうことなのだ。

私は人の波をかき分けてフレイムのもとへかけていく白い背中を見ながら、苦笑混じりにため息をついた。

フレイムの手から皿を取り、何か厭味つたらしく言っている。ここからじゃさすがに聞きとることはできないが、フレイムの顔つきを見る限りあまり良いことではなさそうだ。

本当に、彼らがお互いをわかりあえる日はいつになることやら……。

「はいはい、ちゅうもーく。これからゲームの説明するからよく聞いとけよ」

「ああんツ！ダムくんの声なら永遠に聞いていたいわ！ダムくーん！愛してるわー！」

「……なにあの女。ダムは僕のものだって言つてんじゃん！何が愛してるだ。ぶち殺されたいの？」

「きゃあああっ！ディーくんの過激な愛情……も、萌え尽きたわ……」

……誤字だよね、うん。ファイヤー！のほうだよね。

「ええつと、これからホールを暗くするから、暗闇の中でペアを作つてくれ」

「そのペアで、音楽に合わせて踊る。それだけ。ごく単純」

「ちなみに、異性同性については責任を持たないから気をつけるよ

な

「ああ、あとテークアウトについても責任はもてないからね。自分の貞操くらい自分で守ってよ」

「む、むしろデューくんはテークアウトされたい……！」

「そ、それは駄目だ！デューは俺と踊るの！」

「ダム……そんなに僕のことを想って……！」

「デューにはためえら指一本触れさせねえからな！」

「じゃあ私はダムくんをお持ち帰りしたい！」

「……お前、何言ってるの。ダムを持ちかえる？ふざけんな。お前から雌豚なんかには冥土の土産にもさせないよ」

「腐腐腐……いいわよ、もつとイチヤイチャしなさい！禁忌の兄弟愛、書ける……同人誌が書けるわあっ！」

目をハートにする二人のファンと、その傍らで吼える腐の方々。

もう、色々と終わってる……。この世界の終焉も近いのかもしれない。倫理的な意味で。

あまりにも目に痛い光景からの現実逃避ついでに、私はバルコニーへと向かった。

ダンスならこの前ルアから習ったが……いまだに、ステップを踏む回数よりも足を踏まれて相手が悲鳴を上げる回数の方が多いのだ。なるべくならこの華やかなパーティーで失態は見せたくない。とうか相手を泣かせたくない。

だから気づかれない内にパーティーから抜け出そうとしたのだが……時すでに遅し。

ガタンッ

重々しい音とともに、すべての視界が奪われた。突然の暗闇にいく

つもの悲鳴が上がる。

いや、悲鳴じゃない。これは……

「きゃあああつ、フレイム様、どこ、どこにいますのー!」「ダムくん、今迎えに行きますわね!」「おどきなさい、このアバズレ! マルスさまと踊るのはこのあたしよおおつ!」「ディーくん! デイくん! デイ! くううん!」「レスト、レストきゅん、お菓子あげるからおいで!」「る、ルアさまああ! わたくしの愛で探して見せますわああ!」「れ、レーテさん……わ、私諦めませんから! あなたのハートをゲットしに行くわ!」

雄叫び、だ。

我先にと、闇の中でいくつもの影が壇上の方へ上がるうとする。あつという間に塊となった乙女たちに囲まれて、私は逃げるところか一歩も先へ進めなくなってしまった。

何度か手首を握られるが、その細さゆえ女とわかるのかすぐに離れていく。

そうこうしているうちに私は乙女の波に押しつぶされ、呼吸することも困難になっていった。

「ぐ、ぐるじい……」

何とか塊の中から抜け出そうとするが、そこは恋する乙女たちの戦場。簡単には抜けさせてもらえなかった。

ある一人の乙女……顔は見えないが小柄な彼女が、私の腰に抱きつく。

「ルアさま!」

(あ、あんなストーカーと一緒にするんじゃないわよ!)

そう叫びたかったが、何せ酸素が足りない。哀れ勘違いしたままの少女は信じられないほどの力を腕に込めた。

彼女のふわふわとした髪が顎をくすぐり、胸に感触を感じるが

悲しいかな、私の胸は女か男か判るほど発達はしていなかったのだ。

この時ほど自分の体形を憎んだ時はない。腰を砕こうとしているかのごとく、力はどんどんこめられていく。

ぐふっ……い、息が……これが愛の力……？って。

(なんで私がそんなもん受けなきゃなんないのよーっ！)

「ルアさま、ルアさまああ！どれほどの大金を積み上げても振り向いてくれなかった貴方が、今ここで私の傍にいますね！花子、幸せですうう！」

とりあえずその名前を何とかしろ、トイレさん。

さらに彼女は、とんでもなく積極的な行動をしてきた。がしりと頭を掴むと、自分の方へ引き寄せるようにじりじりと力を入れ始める。こ、この体勢……まさかこの子、キスしようとしてんじゃ……っ！

「や、やめ……っ」

しかし恐るべし、乙女パワー。私の必死の抵抗も虚しく、彼女のふつくらとした唇は暗闇の中でどんどん近付いていく……。

唇が触れあう寸前、後ろから伸ばされた腕が私の腰を引き寄せた。あまりにも強引な動きに、私はバランスを失って後ろに倒れ込む。

「きゃっ……ぶく」

……魚ではありません。
突如として現れた大きな手に、口元を覆われてしまう。そのおかげで乙女のキス攻撃からは逃れられたものも、息はさらに苦しくなりました。
乙女も何か違和感に気づいたのか、キスするのを諦めて私から離れないようにと腕にきつく絡んでくる。

「いやんっ！誰ですの?!」

「ごめんね。でもこの子は俺が欲しかったから。譲って?」

聞き覚えのある……というか、嫌でも毎日聞かされている声。どこか笑いを含んだ艶のある声が耳のすぐ傍で囁かれ、自分に向けられたわけでもないのに身体が熱くなった。

もとより態勢がないとどんな女の子でも落ちてしまうような美声である。その声を直撃に受けた彼女の反応はすさまじかった。先程まできつく握りしめていた私の裾から手が離れ、前方でどさりと何かが倒れ込む音がする。
ま、まさかこいつ、殺したんじゃ……!

「んーっ、んんーっ!」

「静かにしてよ、アリス。ムード読めないなあ」

くすくすと、上から忍び笑いが落ちてくる。私はまだ自由な腕をバタバタさせて彼の腕から逃れた。
暗闇の中でもわずかに光っている金色の瞳は、面白がるように私の行動を見守っている。

「ちよつと、大丈夫?!」

慌てて足元に蹲っている彼女の前に屈みこんで息を確かめた。

息は、ある

　　といつかむしろ、鼻息が荒い。

「こ、腰が抜け……も、萌えっ！エロ声萌え！」

「……………」

いや、生きてたのはよかった。何の外傷もないのもよかった。相変わらず妄想癖が激しく元気そうなのもよかった。
なのになぜこんなにも微妙な心持なのだろう。

「ほら、大丈夫でしょ？人間的に問題あるだけで。だからさ、もう行く？」

私が返事する前に腰のリボンをくいっと引つ張られて軽々しく持ち上げられる。紐が食いこんで腹部が圧迫されたが、それも一瞬のこと。

彼は私を気遣うように腕を回すと、そのままそっと地面におろしてくれた。……どうせならこのまま逃がしてくれればいいのに。

……まあ腰に腕を回されている時点で無謀だとはわかってるんだけどね。

ガタンッ

束の間の平穏が終わる音と、甘すぎる地獄が始まる音。

始まりを告げたのと同じ音と同時に、ぽつぽつと証明が付き始めた途端、そこらじゅうで悲鳴がわき上がった。

悲鳴。いや、むしろこれは……

「ぎゃあああっ！誰よこの禿げオヤジ！フレーム様ああ！」「だ、ダムくんじゃない……ダムくんはこんなデブじゃない……！」「マルスさまあ？！ああああ、こ、こんなにメタボになってしまいました

……って誰じゃこれーっ！」「でい、ディーくんはこんなんじゃないもん！こんなに寄り目じゃないもん！」「ね、レストきゅん……いつの間にチビオヤジになっちゃったの……？」「る、ルアさま……貴方はこんな白髪だらけの爺さんじゃないはず！」「ひっ、何この脂ぎった顔！ジジイだったらもつとカサカサして……じゃない、レーテさん！どこにいるんですか？！」

いや、確かに悲鳴だった。

哀れ「はずれ」を引いてしまった乙女たちは次々と泡を吹いて失神してしまいましたとさ。

……いや、一番可哀想なのは間違えられた紳士たちの方だ。皆一様に涙目になっている。

せつかく乙女が自分に抱きついてきてくれたのに、彼女たちの口から出てきた物は暴言ばかりなのだから当然だろう。

「やったー！ダムと踊れるー！」

「あつたりまえだろ！ディーは誰にもやらねえよ」

やはり、というか当然というか。ディーとダムはお互いの手をきつく握りしめてペアを組んでいた。

その額にはうっすらと汗が浮かんでいる。きつと猛る乙女たちから必死に逃げていたのだろう。

追いかけていた乙女たちは獲物を逃がした肉食獣のような目で仲睦まじい二人を睨んでいた。

「あ、汗ばむ美形がくっついて……ぶぶっ」

……頼むから腐の方々、鼻から怪しい汁出すのはやめて下さい。綺麗な床が赤く染められています。

一拍置いて、10メートルほど離れた所から聞き覚えのある悲鳴が

聞こえてきた。首を伸ばしてそちらを見ると、そこにも意外でも何でもないペアが誕生していた。

「な、なんで最後までついてくるんですか！こいつらを撒いたら逃げらるって約束でしょう?!」

「撒けなかったルアが悪いんだろ?!ど、どうするのさ、この状況!」

「知るかそんなの!ついてこないで下さい、僕はアリスと踊るんです!」

「最初に僕の手首を掴んで走ったのはルアじゃないか!」

「い、いや、それは……貴方のトロイ足じゃあの猛獣たちから逃れられないと思っただんです!」

「じゃあほっとけばよかったじゃないか!いつもいつも……お節介なんだよ!」

「助けてもらった相手に向かって何を言うんですか!」

「はっ!何その恩着せがましい言い方!誰がいつ助けてって言ったよ?ルアが勝手にやったことだろ?」

「……ちよつと、あの二人って」

お互い顔を真っ赤にさせながら返し合うルアとフレームを見て、誰かがこそりと呟いた。

私は顔をひきつらせながら隣の可愛らしい女の子を見る。その子はちなみに背の高い女の子とペアを組んでいた。まあ、一番安全な牌だろう。

それが単に、同志と手を組んでただけだと知るのとはそう遅い話ではないのだが。

「もしかして禁断の主従関係?!キヤーツ!」

「す、すごいわ……禁断の兄弟愛に主従関係……腐腐腐」

「おねえさま、これはすぐ書きましょう！ネタ、同人誌のネタに最適すぎますわ！」

「お、落ち着くのよ。もつと二人をよく観察して……ぶっ」

「おねえさま、鼻血が出ておりますわ」

「そういう貴方も涎が垂れてるわよ」

「うへへへ」

「げひひひ」

もうヤダ、この人たち……。

私の本気でこの国の未来を憂えていると、隣で可笑しそうに笑う声が聞こえた。

……こいつに捕まったのは良かったのか、悪かったのか。幸運なのか、不運なのか。

「何笑ってんのよ」

「いや、別に？あまりにもアリスが嫌そうな顔をしてたから」

ぎろりと、一人で爆笑する彼を睨みつける。こみ上げてくる笑いで顔を赤くさせながら、彼は金色の瞳を細めてこちらに微笑んだ。

その手は、きつく繋がれている。

+

+

「なんで髪染めてるの」

ようやく捕まえたと思うのに、アリスはいつもそんな色気のないことばかり聞いてくる。

顔が真っ赤になっっていることに本人は気付いているだろうか。まあ、機嫌を損ねたいわけじゃないからあえて言わないけど。

イオは自分の髪を一房つまんで目配せをした。その髪はいつものピンクとか紫とか言われるものじゃなく、綺麗な黒色に染められている。

「これ？だつてこんなところで目立つとアリスを捕まえられなくなるじゃん。だからレーテに借りた」

「……なんか、見慣れてないから不自然」

まじまじと髪を見た後、すぐにアリスは横を向いてしまう。本当は瞳を見てほしい。そんなこと、自分には言う権利すらないけど。それでも、少しでいいから彼女を感じたくて緩やかに抱きしめる。

「いつもの俺の方が良かった？」

「そ、そんなこと言つてないでしょうが！ただ……こうして見ると、ほんとにロキとそっくりだな、って」

ロキと、そっくり。

ずきりと、心臓が悲鳴を上げる。まるでそこに一本の針を突き立てられたかのように傷ついた心臓は跳びはね、次第に大人しくなっていくた。

大したこと、ない。自分とロキはもともと一つのもので……容姿など、ほとんど変わらないはずなのだから。

自分にアリスがロキの影を重ねるのは、当然のことだ。それどころか、ロキと見間違えられているというのなら……今日ばかりは

アリスに触れる背徳感も、感じないで済むかもしれない。そう、これはいいこと。俺にとっても、アリスにとっても……ロキにとっても。

なのに、なんでこんなに苦しい。

「っ……カラーコンタクトで目の色も変えればよかった？ そうしたらロキと見分けつかなくなるかな」

つい皮肉げな笑みを浮かべてそう呟いてしまう。

こんなことしたら、アリスが返事に困るってことも知ってるのに

どうして、止まらない。

こみ上げてくる痛みを紛らわすかのように、アリスの腰を引き寄せ
る。寸前。

びしっ

「あ た っ」

突然、額に軽い衝撃を食らった。じんわりとした甘い痛みが額から
広がっていく。

呆然とアリスの目を見つめると、彼女はデコピンのポーズのまま不
機嫌そうに鼻を鳴らしていた。

「ふざけないで。あんたはあんたでしょ。騙そうとしたってそうあ
んたとロキを見分けられないほど馬鹿じゃないわ」

「……あは」

なんたる、すごく泣きたい。こうやっていつも貴女は、俺の作った
壁をぶち壊して入ってこようとする……。

ふざけるな。そのたった一言で、こんなにも喜んでる自分がある。

まずい……本当に今日は、制御しないと所構わず彼女をカミングアウトしてしまいそうだ。

自分で言ってから、言葉の意味をよく考えて顔を真っ赤にする彼女が可愛くて仕方ない。恥ずかしがるくせに、意外とずけずけ言うてくるのだ。

「うんうん、アリスも見分けをつけられるほど俺のことを知ってくれたんだよね。もっと深くわかり合っちゃおう？」

「ち、違う！そんな意味でいったんじゃ……」

慌てて否定する彼女がたまらなく愛おしくて、ついからかってしまう。あとでちよこちよこ反省することもあるのだが、大抵そんなものは意味をなさずに終わる。

自分とロキは、違う存在^{もの}。アリスは、決して自分の手には堕ちてこないだろう。それでいい。それこそ、自分が望んだことだ。だけど……せめて今夜だけは、甘い夢を見させて？

夢は所詮、夢^{うたかた}で終わるのだから。

ちょうどその時、ホールにしっとりとしたクラシックが流れ始めた。まるで水の流れのような音楽に、ざわめき立っていたその場が静まり返る。

誰もが、黙り込んだ。イチヤイチャとしていたディーとダムも、喧嘩をしていたルアとフレイムも音楽に気づいた途端に酸素を失った炎のように静かになる。

穏やかな時間に耳を傾けていたのかもしれない。澄み渡った沈黙の中、誰かがぺこりとお辞儀をして腰を揺らし始めた。

ピクリとも動かなかった空間が、それを合図に少しずつ波立っていく。

「……踊ろっか」
「うん、踊ろっ」

あのうるさい双子でさえも、今夜は静かな笑みをたたえてお互いの手を取り合った。

「……つたく、仕方ないですねえ。へましたら明日の朝ご飯はグリ
ンピースの盛り合わせです」

「それ最悪。そっちこそ、一度でもステップを間違えてみる。明日
は僕の分の仕事もやってもらっからね」

ルアとフレイムは、まだ不本意そうに顔をしかめながらも身体を引
き合わせて優雅な踊りを周りに見せつける。

本当に今夜は、何かの魔法がかかってしまったようだ。12時まで
の短い魔法。解けてしまえば、それで終わり。何もかもがすべてい
つも通りに進むのだろう。

ディーとダムはいつもどおり騒ぎ始めるだろうし、ルアとフレイム
はお互い素直になれずに暴言が飛び交う。そんな、日常。

だけど、せめて……。

「……踊ろっ。アリス、俺の足一回踏むごとにキスね」

「……何それ。得すんのあんただけじゃない」

冗談っぽく笑うと、アリスはやはり眉をしかめて反抗してきた。

それでも、彼女自身甘い魔法にかかってしまったのか、恥ずかしそ
うに顔を俯けただけで嫌だとは言っていない。

イオは指を絡ませ、もう片方の手を彼女の腰にあてた。ぎこちなく
動く彼女に負担がかからないよう、ひそかに気を遣いながらステッ

ブを踏む。

最初は戸惑っていたアリスだったか、やがて諦めたように溜息をつく
と 今日初めてイオの瞳を見た。

ただ、せめて。魔法にかかっている間だけは甘い夜を
恋人たちに ……

十

十

「で？何回俺は踏まれた？」

イオの笑顔は必ず腹に一物持っている。無邪気にしか見えない笑顔
でも、油断していたらとんでもないことになることは経験から確か
だ。

いや……そんなことを言ったらルアやレーテだって腹は黒いが、こ
いつは色々と（主に性的に）危ない奴だからかなり警戒してなくて
はいけない。

だが、いくら警戒していても逃げられなければそれはそれで意味が
ないのだ。

「あー……つと、ご、5回？」

「ここは二階だし」

そのネタは以前使いました。

「じゃなくてさ。たつたさ回踏んだだけで革靴履いてるのにこんなに痛くなるなんてこと、ないよね？」

艶やかな笑みが、こんなにも恐ろしいものだなんて考えたこともなかった。

身体をよじって逃げ出そうとするが、背中がバルコニーの手すりに押し付けられている上に、手首を一纏めにされて縛られているせいか少しも動けない。

冷たい夜風が、首筋を撫でては赤く染めていく。きつと頬の紅潮は、それだけではないのだろうが。

「ねえ、何回？」

手首を拘束してないほうの手が頬に置かれた。そのまま熱い指は顎のラインをなぞるようにして首筋を撫でていく。

そんな小さな刺激にさえ頭が沸騰し、何も考えられなくなってしまいそうに怖かった。

先程の落ち着いた時間はどこへ行ったのか……。早鐘を打つ鼓動を必死に抑えながら私は考える。

何とかこの状況を打開しなければ……！

「ね、ねえ……それよりももう一回踊らない？ほら、ここ寒いし……」

「無駄だと思うけど？キスする回数が増えるだけだし」

「そ、そんなことない！今度こそちゃんと……んっ」

「もう黙って」

抵抗の言葉は最後まで続かなかった。唇に感じた柔らかい感触とともに、唇の合間をこじ開けて熱いものが侵入してくる。

思わずそれ以上の侵入を許さないとも言つように歯を食いしばっ

てしまった。しかしそれでも唇をこじ開けた舌は、明らかな意図を持って口の中を蹂躪してくる。

身体が、どうしようもなく熱かった。頭の中まで、芯から侵されていく。

「ん、……も、もうやめ……っふ……」

制止の言葉をかけようとしたのが間違이었다。わずかにあいた歯の隙間をかくぐって、熱い舌が奥へと進んだ。

彼は、あまりにも好き勝手で気まぐれすぎる。逃げる舌を追いまわしては絡め、痛いほど口内を貪って　唐突に、終わる。

こちらは今それどころではないというのに……彼ばかりが、平気な顔で突き放してくる。

激しいキスが終わるたびに私がどんなに安心して　そして、どんなに虚しくなるのか、全然わかってない。

私はわずかに唇から垂れる透明な糸を感じながら、こみ上げてくる涙をこらえた。

いつも、そうだ。こつやって私だけがイオに溺れていく。

「さあ、残りは何回？」

悪戯っぽく、彼は笑う。そう……これでいいのだ。何も間違っちゃいない。

いつも彼は飄々としていて、私だけ振りまわされて。これが普通なのだ。

それ以上は望まない。気持ちをわかってくれなんて　望まない。でも、どうか今夜だけは。こんなに冷たく静かで……虚しい夜だけは。

甘い夢を見させないで。溺れもしないのに、期待なんかさせないで。

私だけを快樂の海に沈めないで

……

超・余談だが。

「38度9分……！アリス、貴女一体どこで風邪を貰ってきたんです？！」

「うー……くちゅんっ」

あの夜以降、私は高熱とくしゃみと気だるさに襲われて3日間寝込むことになった。

濃厚接触をした相手といえば一人しか思いつかないのだが……まさか、ね。

さらに余談だが。

ルアが薬を買いに街に行ったとき、なんと2冊の雑誌を見つけてしまったらしい。

その題名は「お城でラブラブ？！〜兄さん、こんなところで……！〜」と「ツンデレ従者と俺様女王〜こんな、何のつもりだ……！〜」だったそうなの。

言うまでもなく、売っていた店ごとすべて燃やしたらしいが。

「そろそろ腐女子撲滅計画というのも考えないといけませんね」

そんなこんなでルアとフレイムの仕事はますます増えていくのだった。

f i n . . .

「その前にこの小説自体灰にしちゃわない？もう私、さすがに我慢できなくなっちゃった」

落ち着いて下さい、アリス。この小説は無機物です。

「いやー、作者ついにネタが尽きて腐の（方々を使う）方向に走っちゃったかー。俺とロキがくつつくのも時間の問題だね」

「な、ななななんで俺がお前なんざとくつつかなきゃならねえんだよー！」

ほら、イオもロキも落ち着いて下さい。

……なんか静かだと思ったら、ルア達はどうしました？

「んー？ルアと女王は早速腐女子撲滅計画を実行してるよー。双子ちゃんもお手伝いしてるみたい」

はあ。成功するといいですね。

それはそうと、作者から手紙が届いていますよ。読み上げますね。

『この物語はフィクションです』

ピリッ

当り前だボケ。

□

えー、冗談はほどほどにして。

すみません、作風上世界中の紳士、および腐の方々の存在を全否定してしまいました。

気分を害してしまった方、申し訳ありません。決して腐の方々を嫌っているわけではないのです！

また、最後の雑誌はもちろんどこにもありません。世界中血眼になってもありません。

もし方が一存在してたら作者までお知らせください。焼き払いますので。

□

だ、そうです。まあ……題材にされる方が悪いですよ。いつもくつついている報いです。

僕なんかさびしく独り身で……。

「レーテえ、マルスとくつついてる雑誌あつたよ？あ、俺とレーテのもあつた」

この世から消し去りなさい。

どうも、一度パソコンがバグって執筆していたものの全部が白に還った作者です(*´、´)その数ワードにして約12ページ……。開き直りました。もういいです。何度神が邪魔しようとも私は完結させてみせる……！(大袈裟)

えー、それはそうと。今回は世界中の皆様にと下座をして回らなければいけないようですね。

なんとというネタ。めくるめくH O M Oワールドどころか華やかなF U J O S H Iワールドになりそうですね、はい。

というか何すかこの世界は……。腐の方々の人口比率が多すぎるでしょ。

腐の方々、ならびに男性の方々。本当に申し訳ありません。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。

それでは気を取り直して解説行きましょう！(立ち直り早ッ)

【第二幕イオ×アリスならびにルア×フレイムならびにディー×ダムならびにマルス×レストならびに独り身レーテくん(柚子さまリク)】

クリスマスパーティー的なものを作ってほしい、とのことでした。

まず の題名で笑って下さい。

まさかの全員集合になりました……。さすがパーティーというだけあってとんでもない規模ですね。

クリスマスパーティー……のつもりがただのダンスパーティーに。

柚子さま、申し訳ありません！修業し直してきます！(><)

イオアリ、というよりも前半がほぼギャグでしたね。作者の愚かさをカラカラ嘲笑ってもらえると嬉しいです

にしても……これを書いて一番楽しかったのが「乙女の会（今命名）」の皆様と「お腐れの会（今命名）」の皆様です（；・・・）
みんな元気いいなあ、なーんて思いながらキヤーキヤー騒がせてました。男性陣が全員ハーレムになるというのも悪くないかも……。そんな前半の騒がしさに相反して、後半はともしつとりしてました。
しつとりしてた……。つもりです。なんだか途中しつとりどころか濡れ始めてきましたけど、気にしな〜い。
最後のネタ話で穢れた空気（ ）を浄化できてたらいいです。

さあ、これでイオアリとルアフレ、双子が一気に終わったと……。このころはロキくんですね！哀れなロキ坊、誰にも相手にされずここまで番外編を進めてきちゃいました……。
で・す・か・ら！次回はロキアリオナリーの短編にしようかと思つてます。

当然、話は暗いです

えー、今回は柚子さまがリクを下さったのですが、リクをくれるのはすつごく嬉しいです！なにしろ何をやるうか自分が考えずにすみ……。すみません、決して考えるのがめんどくさいんじゃないんです。ほんとに、ほんとーに嬉しいんです！何かリクエストがあつたら遠慮なく言つて下さい！
それでは柚子さま、ありがとうございました！

さて、題名ですが……。

右向いて 左向いて だったら次は何かわかるでしょう？

ヒントは小学生の時のご指導ですよ！皆さま予想して待つて下さいねー！

余談ですが、前回「祝 総合PV数15万突破！」をやったはずが
あっという間に16万突破、です。
一体何が起こったのでしょうか……。

そ、それからですね！別に謀ったわけではありませんがようやく5
0話突破しました！

この「不思議の国のアリス*幕」は予定では80話で完結します。
あとわずか30話ですよ〜（*´、´）ノ

って、そんなわけないんです。

あと30話?!はっ、無理です無謀です無茶です。あと何人の物語
を書きやなきやいけないか判ってるんですか?!（自分に逆ギレ）
たぶん後50話くらいはかかるかなあ……と私は考えています。果
たしていつこの物語は幕を閉じるのか……（泣）

長くなりますが、最後までお付き合い下さると嬉しくて天へ昇りま
す！

さあ、例のごとく本編とは何の関連性もない番外編です。

本編のシリアス雰囲気を壊したくない方はどうかこのまま「戻る」
ボタンを……。

第三幕 黒ちゃんの少しだけ賑やかな、朝^{せごころ}

肌を突き刺すほどの静寂。それが“朝”の唯一の印象だった。

“門番”との契約で城には泊まらせてもらうものも、当然歓迎されるはずもなく、イオは大抵夜を野外で過ごすことが多かった。

そしてそのとばかりを受け取る俺。目覚めはいつも一人か、それとも帽子屋メンバーのすぐ傍だった。

闇^{よる}の中でも、独り。光^{あさ}の中でも 独り。

だから、俺のまわりはいつも静かだ。不気味なほど 狂おしいほどの、静寂。

もう、慣れたはずだった。なのに今日はやけに身体が熱い。息が苦しい。

どうした？

俺はうつすらと瞼を開けて自分の状況を確認し、ほうつと熱い息を吐きだした。

「……………どこ、どこだ？」

ドギつい赤とピンクのコラボレーションの壁紙。カーテンは赤と黒と緑の水玉模様というあまりにもあまりな色合いだった。雑貨は普通のものが多いが……………自分が横たわっているベッドは清純そのものの城……………ではなく、紫とピンクの縞々だ。

これは、固まるしかないだろう。なんだ、この一面お花畑な部屋は。というかどういいう趣味してやがる。

こんな部屋知らない。いくらレーテでもここまで趣味は悪くない……！
俺は逃げるようにがばつと勢いよく起き上がった。どこを見ても赤ピンク、紫……もう一人の自分を連想させる色ばかりで、虫唾が走る。

「ひっ……」

両腕に温かいものが触れてロキは思い切りドン引きした。明らかに熱を孕んだ手が両脇のものを掠めてわずかな刺激を持ちかえる。なんなんだよ、もう……っ！俺は泣きそうになりながらすやすやと俺を挟んだまま眠る双子を見た。
どうして、ベッドに、こいつらが……？！

「てめえら何してやがるっ！」

ゴンッ

俺は両手に拳を作って二人の頭に振り下ろす。同時に殴ったため一つの音にしか聞こえなかった。

清々しいほどの音とともに、四つの瞼が持ち上げられる。とろんとしたまったく同じ若緑色の瞳が不思議そうにこつちを見、お互いを見た。

「あれえ？俺ら、なんでこんなところに寝てるんだっけえ……」

「俺が聞きてえよっ！つか出てけ、狭い！」

「んー？ダム以外の奴と褥をともにするとか……うわ、やだー……」

「気持ち悪いこと言うなっ！うわ、鳥肌！」

「……さっきからうるさいっ！の、黒ちゃん」

「僕とダムの間に何口挟んでんの、黒ちゃん」

「適当なあだ名をつけるなああっ!!」

もう誰か、俺を独りにして下サイ。静寂カムバック。

暑苦しい二人から逸早く逃れようとロキはベッドを蹴りあげるようにして宙に舞った。

しかし。

ガシッ

「ぶがつ」

勢いよく飛んだ瞬間に両足首をグイッと掴まれて床へと頭からフォールリング。

結末は……言うのも悲し、思い切り額をベッドの格子へぶつけた。床に突っ伏すよりかは惨めじゃなくていいって？ならお前がやってみろ、頭の中がヒヨコでいっぱいになるぞ。

言葉通り足を引っ張った当の本人たちはげらげらと腹を抱えて笑っている。

一瞬、怒りを超越して純粋な殺意を覚えた。ちよっとしばいてやるうかこいつら。

「お前ら　なんのつもりだ」

「黒ちゃん、かっこよく言ってもおでこ真っ赤だぜ？」

「ちよっと引っ張っただけなのにこっもうまくいくなんてね。黒ちゃんおもしろーい」

……ちよっとどころじゃない、その生意気な口が叩けないようにボ

コボコにしてやるつか。

俺が何も言わずに（というか怒りで何も言えない）悪役不全のことを頭の中で展開していると、隣から遠慮がちに声がかかった。

「ちよつと……何口キ虐めてんの」

今さつき起きたばかりのような掠れた声に、熱に潤んだ瞳、うつすらと紅潮した頬、唇から洩れでる緩やかな吐息、ほんの少し香る甘い匂い……。

なんだ、この可愛い生き物は。つかマジでどうしてこんなところにいる。

じっと凝視していると、不意に彼女と目があつた。彼女は「おはよう」とやんわり微笑みながら小さく首を傾げた。

ぼぼぼぼぼ

見なきゃよかった。

束の間のうちに後悔しながら、ロキは真っ赤に染まった顔を柔らかな毛布に埋めた。ぼふつと埃が舞う。

「お、おはよ、アリ」

「「あつ、目えさめた？姫さま！」」

照れを隠しながらも律儀に挨拶を返そうとしたその瞬間にあまりにもぼつさり遮られ、俺はコンマ一秒硬直した。

足首を掴んでいた手のぬくもりがいつの間にか消えていたことにも気付かず、自分の間の悪さをぐるぐると考えはじめ。しかし、それも長くは続かなかつた。

「「もあ……心配したんだよー！」」

「ぐげえっ」

まるでカエルが潰れるような悲鳴に、俺は我に返ってそちらを見た。そう、それはまさしく潰れていた。カエルではなく、アリスが自分よりもさらに体格のいい二人に抱きつかれて見る影もなく押しつぶされている。

再びコンマ一秒の金縛りが俺を襲った。

「ぐうおえええええええっ！……………パタッ」

最初は天井へ助けを求めるようにバタバタとせわしなく動いていた腕も、やがて力尽きたようにパタリと倒れる。

アリスの息が途切れた瞬間、俺は再び現実に引き戻された。双子もさすがにまぶさかったのかといわんばかりに、腕の中のアリスとお互いを見比べている。

「あれー、また姫さま寝ちゃったよ？もしかして死んじゃった？」

「はは、まっさかー。んなことになったら俺ら処刑だよ」

「……………」

「……………」

訪れる沈黙。というか、空気が凍りついた。

「え、ちょ、マジ？！姫さま、姫さまー！死んでんだったらそう言っつてーっ！」

「いや、ディーそれ怖いから！姫さまーっ！さっさと起きないと白ウサギとのあれやこれを暴露しちゃうぞ！」

おい、何だそれは。むしろ聞きたい。

でも、アリスまじで大丈夫なのか……………？もしかして本当に圧迫死し

たんじや……。

「よしつ、ディー……こうなったら人工呼吸だ！」

「へ？でも誰がやんの？ダムが他の誰かとやるぐらいなら死んだ方がましだよ」

「んー、じゃあ交互でやるとか！それだったら不満もないだろ？」

「まあ、それだったらまだ……。じゃあ、やつちゃう？」

人工呼吸？人工呼吸って、あれか？確か人が息してないときに他の人が息を吹き込むってやつ。

えーっと、そのためにはまず体を軽く持ち上げて、唇を ……

っ、つまりだな。要するに……き、キス？

「じゃあ俺からやるな。せーの……」

「だあああっ！！まってっ！ストップ！その者止まれい！」

俺はあり得ないほどの俊敏さで起き上がると、今にも顔を近づけて“人工呼吸”もとい“キス”をしようとしているダムに飛び蹴りを食らわした。

哀れ背中にクリティカルヒットしたダムは床に叩きつけられるようにしてベッドから転げ落ちる。

先程の急な攻撃で体勢を崩した俺もダムの身体に重なるようにして床に膝をついた。ダムは一瞬目を白黒させていたが、瞬時に回復すると怒りの炎を瞳に浮かべて俺の脇腹を蹴り上げようとしてきた。何とかそれを床を転がってかわすが、俺はもう一つのことをすっかり忘れていた。

こいつらは、双子なのだ。

「デイー、今だ！」

ダムの勝ち誇ったような声が脳天に響くのと、背後から黒い影がふわりと落ちてくるのはほぼ同時のことだった。

ぐぎゃっ

部屋に響き渡ったその音は、単に俺の悲鳴だったのか……それとも背骨の一部が変形する音だったのか、俺には判別できない。後者でないことを切実に願うが。

ただ、突然背中の上に飛び降り素早い動きで手首を拘束したデイーを恨めしそうに睨む。

デイーもさすがにここまでやってしまうとは予想してなかったのか、ほんの少しバツの悪そうな顔をしたが、それはこの世界の住民だ。次の瞬間には負けたお前が悪いんだと言わんばかりの笑顔を浮かべた。

「黒ちゃん捕獲せいこーう。ダム、背中平気？」

「ん、ああ……。何とか受け身を取ったからな。お前の下にいる黒ちゃんよりかはダメージ少ないと思う」

「それはよかった」

全然よかない。俺はグルグルと威嚇するように喉を鳴らし、へらへら笑うダムを睨みつけた。

背中がずきずきと痛んだが、なんとかデイーの下から抜け出せないか奮闘する。その様子を見ていたデイーは、呆れたように溜息をついた。

「無駄無駄。僕に捕まって逃げ出せた奴なんか過去一回もないんだからね。ていうか、たぶん背骨とあばら骨、軽くイツちゃってる

からあんま動かない方が賢明だと思っけど」

「……るせえよ。ここまで容赦なくやっついて今ごろ同情するつもりか？胸糞悪い……」

「んなわけないじゃん。これ以上あんたを傷つけたら一文も貰えなくなるから嫌なんだよ」

「はい？」

一瞬、耳を疑った。もう年なのかとも思った。近くの耳鼻科とその休診日を思い出したりもした。

一文も、貰えない……？つまりはこれはなんだ。報酬とかそういう話か。そんでもってこれは、報酬を確実にいただくための精密な双子の計か……？

そこまで考えてようやく至った“答え”。

そうだ、あの明らかにわざとらしいアリスの息絶え方、大げさな双子の反応、急な人工呼吸キスの展開、瞬時に対応したダムの動き、まるで謀ったように俺に追撃をしかけたデー……

一体、何人が“グル”なんだ？

「……おい、アリス」

びっくりと、ベッドの上で何かが震えた。そのわずかな動きで、疑心は確信へと変化する。

いや、うんもうなんか……怒る前にさ、ムカつく前にさ、悲しくなってくるよな。なんでここまで凝った真似をしてるんだ、こいつらは。

「お前、後で覚えとけよ」

「はい……ごめんなさい、です……」

ベッドの上から返ってきた小さな答えと、腰のあたりにのしかかる重みとで俺は虚しさに泣きたくなかった。

「アリスとダンスを踊ったイオがはっ倒したくらい嫌いなんです。はい、嫌いです。でもそれとこれとはロキとは関係ありませんよね？ですから今回は背骨1本、あばら骨1本で容赦してあげます。え？ロキに責任はないんじゃないかって？ふふ、アリス、甘いですねえ。連帯責任というのをご存知でしょうか？」

ということでトウアイドル、見事背骨1本あばら骨1本、ロキが苦しむように打ちとれたら1週間ほど休暇をあげます。

手段は……そうですねえ。アリスにキスしようとしたら、あのバカは余裕をなくすでしょう。ああ、一応言っておきますけど、キスする“フリ”ですからね？本当にキスしたら僕がぶっ殺します。

……何ですか、アリス。ロキが可哀そうだから、やりたくないとかへえ……貴女に拒絶する権利があると思うんですか。言ってますんですけど、ダンスを誘ったほうはもちろん、受けた貴女も同罪ですからね？当然でしょう？

はい、いい子ですね。物分かりがよくて助かります。本当は僕が直々にやってやりたいのですが、生憎ロキの風邪がフレ임様にもうつったようなので。あんのクソ餓鬼、それでもなお仕事をやるって言ってきたいんですよ。少し説教をする必要があるので、ね？

ということでトウアイドル。抜かりなくよろしくお願いしますよ。アリスも風邪気味なので無茶をさせないようにね。……え？ロキの風邪がうつったらどうするんだって？大丈夫です、大丈夫ですよ。

馬鹿は風邪をひきませんから』

バイ某白ウサギ。

いや、最後の一言なんて実にあいつらしい。言葉の端々が黒く染まってる気がするの俺だけか？

自分以外のことでここまでやられるなんて思ってもみなかった。よほどムカついたのか　ルアの“満面の笑み”が脳裏に映し出され、俺はぶるりと震える。

この頃、レーテもイオもどんな性格タチが悪くなっている気がする。少なくとも幼き日の純情は欠片ほども残っていないだろう。

唯一、ルアだけがいじられキャラだったのに……ここまで性格が歪んでるとは思ってもみなかった。

どうしよう。形勢逆転して自分やイオがいじられキャラになるかもしれない　……

今までのルアに施されてきた様々な“嫌がらせ”を知っているだけに、なんとしてもそれだけは避けたかった。

「ってなわけよ。俺らにはなあんの罪もないわけー」

「僕らを恨むのはお門違いね？恨むんだったら白ウサギか、自分の半身か、それとも　ここにいる姫さまにしてねー？」

そう言うてくいと後ろ指をさしたのは、俺同様両手両足縛られているアリス。

いや、こっちはもつと酷かった。縛られた手をさらにベッドにくくりつけられ、口には猿轡をかけられている。一体何のプレイだ。

にしても……なんだか拘束緩くないか？こんなの、イオや俺でなくとも簡単に外してしまえそうだ。

疑心暗鬼の視線をドア付近に立っている双子に向けると、彼らには

やりと子供のような笑みを見せた。

「はいはい、こちら双子サービス。ご利用は計画的に」

「今日は白ウサギもフレイム様も多忙なので、姫さまをばくつと食つちやう絶好の機会だと思いまーす」

「く、食つ……?」

それがどういう意味なのか判らないほど俺もニブチンではない。

カアアツと赤くなつていく俺の姿を見て、おかしそうに双子は笑つた。

「うん、やっぱりこういう純情な反応の方がからかい甲斐があるよな。白ウサギは当然ヤダし、先輩もちよつと色つぽすぎだ」

「うんうん、ということ僕ら、黒ちゃんを応援することにしပါတー。あ、でもあくまで一時的なものね?僕ら極度の飽き性だから」

……何の意味があるんだ、それ。

しかし俺のツツコミが炸裂する前に、二人は清々しいほどの笑顔で手を振ると、部屋を何のためらいもなく出ていった。

おい お前らの本当の仕事つて、アリスの看病なんじゃないのかよ。すっかり忘れてんだろ。

何はともあれ……これで一件落着きといったところか。

俺もアリスも話によると、風邪をひいているらしい。だとしたら目が覚めた時の熱と気だるさにも説明がつく。

さあ、早くアリスも楽な体勢にして寝かせてやんねえと……。

俺はあっさりと手足の縄をほどくと、ぐぎぐぎと骨を鳴らしてからゆっくり立ち上がった。

畜生……あいつら、応援するとか言ってたくせに容赦なく折つてくれたらしい。
至って外傷のなさそうな部位までズキズキと痛み、思わず顔をしかめる。

「んー、んんーっ！」

「ああ？んなに騒がなくなつてすぐ助けるって……」

呆れたように彼女の言葉なき声にこたえたと、アリスは違う違うとでも言いたげに首を振ってきた。

俺は首をわずかに傾げる。一体何をつたえようとしているのだろう。彼女が横たえられているベッドに腰をかけた。ぎしりとスプリングが淫らな音を立てる。

（あー、なんかこうやって大人しいアリスっていうのも悪くない……か、も……）

いつも自分の知る彼女は瞳に強い意志を宿してこちらを向けてくる。それが、今はどこか怯えたような潤んだ瞳で。

手触りが良くて白めの頬は、熱に浮かされたせいか桃色に変わって
いて。

何かあれば振ってくる拳は力なく上にくくりつけられていて。

おまけにこいつ、冬にしては薄すぎる寝巻きだし。

な、なんていうんだ？

新鮮というか……その、ぶっちゃけ……そそる、というか……。

「ぎゃあああっ！お、俺は何考えてんだ！年中発情期のイオとは違うんだぞ？！去れっ、俺の煩惱よ今すぐ消え去れえっ！！」

イオだったらここで何の躊躇もなしに襲っているという推測は置いて。

と、とにかくだな！アリスを助け、ない、と……。

俺は一気に熱くなった頬を両掌で叩き、“煩惱”を頭の中から追い出した。

ようやく鼓動も落ち着いたところで、彼女の腕の手錠に手をかけるその瞬間。

白い手首に、指が触れた。

「っ……！！！」

触れた指から電流のようなものが走り、俺は反射的に手を引っ込める。その拍子に、彼女の黒の瞳と目があった。

怖いわけでもなんでもないので、不思議そうに見上げてくるその瞳に身動き一つできなくなる。その瞳から確かに“理性”が吸い出されているのだとは本能的にわかるのだが、目をそらすことができない。

わかってる。先程指から身体全体へ走った電流の正体……。あれは決して、静電気なんかじゃなかった。

「あ、り……す……」

頭の中がかさされていく。早く助けなきゃ、という“理性”が作り上げる思考は脆くも儂く崩れ去ろうとしていた。

すり替わるように、別の思考が頭の中を満たしていく。

『姫さまをぱくっと食っちゃう絶好の機会だと思いまー』

『す』

あ、あいつらがあんなことを言うから……！！
俺はぎりぎりとお歯を噛みしめながらこのままなし崩しにアリスを襲いたい衝動を必死に抑えた。

変なことを言われたせいで、いつも以上に意識してしまっ。

しつかりしろ、俺。今までずっと築き上げてた理性の壁だぞ、あんな餓鬼どもの言葉であっさり壊されてたまるか……っ！

俺は胸に手を置いて深呼吸をすると、まず最初に猿轡を外しにかかった。

指が柔らかな黒髪に触れるたびに、身体が熱くなる。

指先が震えているのを隠すのが精いっぱい、俺は真っ赤になっていることなど気づく由もなかった。

「大人しく、してる。大丈夫、大丈夫だから」

まるで自分に言い聞かせているようだ。

大丈夫、大丈夫だから。俺は絶対に　アリスが嫌がることはない。無理矢理に、想いを遂げたいなんて思わない。

たとえそれが、決して叶うことのない恋心だとしても……。

俺は、お前が望まないことは絶対にしない

……

「ぷっ……はっ！はあ、はあ、はああっ！あんのクソウサギにクソ双子っ！窒息死させる気かつっーの！」

猿轡が外れた途端口をついた威勢のいい言葉に、俺は呆れるよりも先にほっと安堵の息をついた。

よかった……いつものアリスだ。先程のような狂おしいほどの色気

も何もない、いつも通りの元気なアリス。

俺の大好きな、アリス。

(つたく……お前はどれだけ俺を振りまわせば気がすむんだよ)

顔を上気させ怒り狂うアリスがたまらなく可愛くて、愛おしい。

俺は彼女の頬に手を添えてこちらへ向かせた。

思えばこの時、完全に油断しきっていたと断言できる。なんといても猿轡が外れただけで、彼女の持っていた色気はどこか星の彼方へ飛んでいったのだから。

悪戯したいと思う気持ちなんて、色気とともに霧散したものだと思っていた。

彼女の、澄んだ瞳がこちらを見つめてくる。

それだけで、俺の築いた理性の壁は大破した。

『お前、後で覚えとけよ』

……あれ？今、俺……な、に……。

俺は呆然と、まだ感触の残る唇に手を当てた。心なしか、すぐ目の前にあるアリスの頬も赤くなっている気がする。

そうだ、俺。確か、軽くだけど。軽く、だけ、ど……

アリスに、キス……したんだ、よな……。

火が噴きそうなほど赤くなる、というのはまさにこのようなことを言うのだと思う。

俺は顔を熟したリンゴのよりも真っ赤にさせて、なんとか弁明しよう

うと顔の前で手をぶんぶんと振りまくった。

「い、いいいや、これはなっ、な、なんというかあっ！さ、さっき言ったる？！あ、後でお、覚えてるって！だ、だからこれはさっきのし、しかえ、し……」

自分で言っけて空回りしているとわかる。だって明らかに、今はそういうのじゃなかった。ただ、吸い寄せられるように俺は……。いや、やめよう！これ以上考えるとマジで頭ショートする！というかすでもう許容量限界！

「だ、だから、なんというか、その、えっと、ご、ごめ」

「んなことどうでもいいから早く手錠外しなさいよ」

本日二回目のセリフぶんだ斬り攻撃。さすがに俺も涙目だよ、アリス。

し、しかもどうでもいいって何だよどうでもいいって！そんなどうでもいいことのように言っ……るのか。思いつきり。

俺はムクムクと内側で膨らんでいく暗い雲から目をそらすように、こくりと俯いた。

そうだ、これは考えてみればすごく嬉しい言葉だ。俺も恥ずかしい思いをせずに済むし、アリスの手錠も手っ取り早くとれる。

でも、なんだよこれ……ム力つくっつーか、腑に落ちないっつーか
少し、悲しい。

結局、振り回されているのは俺の方だけ……か

ガチリと音がして硬い手錠が外れた。足の方はたいした縛りもないから、自分で何とかなるだろう。

俺は不機嫌な顔を隠すこともなく、作業していた顔をあげた。

「ほら、終わった……ぞ……」

突然、視界からアリスの顔が消える。と同時に、先程漂ってきた甘い匂いがツンと優しく鼻をついた。

あれ、俺なんでアリスに抱きつかれてん、だ……？

そんな純粹な疑問など、頬をくすぐる彼女の髪の毛のせいですぐに頭から消えてしまう。

肌で感じる、彼女のぬくもり。ドキドキする……なのに、すごく落ち着く。

「ごめん、ロキ……ごめんね。痛かった、よね……やっぱりやらないやよかった……っ！」

泣き声のような彼女の声が耳よりもさらに後ろで聞こえてきて、ようやく俺は納得が付いた。

ああ、そうか……こいつ、ずっとこれをやりたくって仕方なかったんだ。

だから最初の時も「早く猿轡を外してくれ」と訴えたし、次の時も「早く手錠を外してくれ」と訴えた。

こつこつやって、抱きしめて、背中をさすって、謝罪の言葉を繰り返したかったから。

きっと彼女自身、罪悪感でいっぱいだったのだろう。もうほとんど半泣き状態だ。

こんなに自分を想ってくれて、自分のことを心配してくれる。

ほんの少し物足りない気もしたけれど、とても穏やかな気持ちでま

ぶたを下した。

そのまま彼女の方にもたれかかるようにして体の力を抜く。

今までの挙動不審が馬鹿だったとは思わない。欲しいと思うのも仕方ないと思う。

だけど、今は、これで十分。

ほんの少し暖かい陽だまりの中で、貴女の隣にいただけ……

f i n . . .

番外編の番外編：第3・5章 飽き性、というか変わり身、というか単になんも考えてないだけ

「うん、良いことしたな、ディー！」

「やっぱり良いことした後の汗っていいよね、ダム！」

一方、女王の仕事場に入ったディーとダムは爽やかな笑顔で互いを褒め合っていた。

もちろん本人たちは、ロキがものすごく迷惑を被っているなど微塵も考えもしない。

どこまでもプラス思考であった。

「どうしたの、二人とも。なんかすごく嬉しそうだね」

せつせと書類を片づけるフレイムは、息抜きがてら双子の方へ視線を向ける。

何故かフレイムに懐いている二人は、久しぶりに構われたのが嬉しいのか輝くような笑顔を彼に向ける。

こんなところはすごく可愛らしいと、フレイムは思う。

ただ、それでもルア以外の人間なんてただの駒にすぎないのだが。

「そうなんだよフレイム様！俺らな、ロキと姫さまにくつついてもらいてーんだよ」

「だから少し協力してあげたんだ。ね？あの二人ってお似合いだよね？」

「なんていわれても……とりあえずルアとアリスがいちゃつくのはやめてほしいけどね。仕事に支障をきたす」

「うん、白ウサギは論外」

「先輩もやだ。生理的に」

「生理的に……。それ以外は思いつかなかったの？」

「えー、だって黒ちゃん以外に面白い奴ー？」

「且つアリスの傍にいる男ー？」

双子がお互いを見合わせて首をひねる。フレイムはそんな二人に苦笑しながら、再び書類に目を移した。

早くこの仕事だけでも終わらせなければ。

早く、早く……あの超・うるさい小姑に見つかる前に。

「あつ、そーだ！フレイム様と姫さまをくつつければいいんだ！」

「

「……はい？」

フレームが何か突っ込みの言葉を考えるよりも、先に。

鬼が、ドアを突き破り部屋に乱入してきた。

「くううおおおるあああつ！！てめー何度言わせればわかるんだっ！勝手に部屋を抜け出すな！勝手に書類を持ち出すなっ！勝手に仕事すんなっ！！」

「る、ルア……？く、口調別人なんだけど……」

「やかましいっ！！さあ、寝ますよ、今すぐ、さっさと、部屋に、戻れえっ！！」

「ひっ……！！」

泣く子も黙る。笑う子も黙る。女王さまも黙る。

そう、それはまさしく 鬼だった。

鬼は突如とはいつてきて、啞然とする双子の前を女王の首根っこをひつつかんで去っていく。

血濡れの門番と呼ばれたディーとダムでさえも、その恐ろしい形相にコンマ8秒ぐらい動けないでいた。

やがて身体金の縛りがとかれたあと、二人はお互い冷や水を垂らしながらこんなことを言う。

「なあ、意外と白ウサギも面白そうじゃね？」

「うん、今の怖かったけど。スリルがあっつていいかも」

「今度は白ウサギの援護に入るか」

「そうだね。先輩は生理的に無理だけど」

なんてことを言いながらも、二人はその3日後お菓子を貰ったことがきっかけでイオの応援をし始めたのだった。

めでたしめでたし

「くおら。どこがめでたい話だ。つか俺オンリーじゃないのかよっ
！」

まあまあ。今回は主要メンバーではなく超脇役なんですから。にしては影が濃いですけど。思いつきりいじられてましたけど。手の中で踊らされてましたけど。でもまあ、ごく一般的でありきたりな、さらにいうなら何の特徴もない恋愛小説っぽくて良いんじゃないですか？

「……………もういい、何も言うな」

あれ、何落ち込んでんですか？

んまあ、ロキのことなんて所詮どうでもいいので脇に置いといて。

「……………泣きたい……………」

えー、作者から再四度お便りが届いております。読み上げますね。

『レーテくん、今回は皆様のMVPを発表しちゃって下さい』

……個人宛の手紙ならそうと行って下さい、まったく。

「ちょっと、MVPって何？」

ふふ、大丈夫ですアリス。やってるうちにわかりますから。

「……レーテがいうと余計に不安を駆り立てられるんですけど」

うるさい黙りなさい。

えー、それではギャーギャーうるさいアリスは置いて、始めますね。

今回一番可哀想だったキャラはっ！

ジャジャンッ

『ロキくんです』

その他にも苦労性のルアやレスト、腐女子と激務に追われている女王などが候補に挙がりました。

ロキは今回骨は折られるは、双子に弄ばれるは、かつこ悪い転び方をしてしまうは、災難の連続でしたね。

「……ほとんど双子のせいじゃねえか」

ていうか全部双子ですね。きつといじりやすいんですよ。

それでは次いきます。今回一番影の濃かった（作者的に）キャラは！……えー、字数を抑えるため効果音は省きます。

『双子ちゃんです』

その他にもエロ満載だったイオ、カップルとしてルアと女王、思春期真っ盛りのロキなどが候補に挙がりました。

双子は第二幕で腐女子騒動を起こすばかりでなく、第三幕をある意味盛り上げてくれましたしね。

余計なお世話でしたけど。

「これだったらさ、主要メンバーの座をかつさらえるんじゃない？」

「少なくとも帽子屋よりかは影が濃いよな！」

うるさい、マジで黙れ。僕はこれでも主要メンバーのうちの一人です。

本当は双子の抹殺計画を模索したいんですが、字数が気になるので次行きます。

今回一番叫んでいた人は！

『ルアくんです』

その他にもルアとコントを組んでいた女王、思春期にありがちなもうそ……げふつ、想像をしていたロキなどが候補に挙がりました。

ルアは第二幕で女王とのやり取りでさんざん騒いだ後、第3・5幕で女王に怒鳴りましたね。

声帯大丈夫なんですか？

「げふつ、ごほつ、くうつ……僕も風邪がうつりましたかね？」

いや、明らかに叫び過ぎが原因ですけどね。

次は……え、何です？次のMVPは……「今回一番影が薄かったキアラ」？

省きます。

「ちょっと、なんでそこだけ省くのよ」

アリスは黙つといて下さい。一番影が薄かったキャラ、ですって？
何の嫌味ですかね、ほんと。

ええ、どーせマルスとレスト以上に影が薄い奴なんて一人しかいませんよ。

ふっ……いいんですよ、僕は。一生独身を貫くんですから。

「レーテ、貴方まだ二十歳なのになんでそんな中年臭いこと言ってるのさ」

とりあえずイオ、貴方は地球外に吹っ飛んで下さい。

うっつ、番外編終了しました！どうも、作者ですゞ(*・・*)ノ
高校生つて期末テストさえ終わってしまえばメチャクチャ楽なんで
すよねえ……いやー、暇って幸せです。

クリスマスパーティー編、今回は何らかの形で繋がるようにしまし
た。

第一幕と第二幕の間では「囲炉裏」というキーワードが、第二幕と
第三幕の間では「風邪」というキーワードがあります。どうストー
リーがつながってるかも考えてみて下さいねー(*・・*)ノ
なんだか思っていたよりもずっとギャグが増量してしまったのです
が……。

大体 ぼの：ラブ：ギャグ：腐〓6：3：5：8 ぐらいです。最
後？ああ、気にしないで下さい。

【第三幕 ロキ×アリス(オリジナル)】

えー、なんとというか……ごめんよ、ロキくん。君って単体だとメチ
ヤクチャ暗くなるから、さ。

ということ双子に出演してもらいました！

まあ、そのせいでさんざん弄られちゃいましたが……。

アリス、主役のくせに、ずっとそこにいたくせに、滅茶苦茶セリフ
が短かったです。ほとんど動いても喋っていません。

他のキャラ視点を一人称で使うというのは初めてだったのですが、
いかがでしたでしょうか？ロキくんの愛情を感じ取れたら幸いです。

でも、これが普通の恋愛小説ですよ。イオくんが異常なだけです
よね！

3・5幕は単におまけです。

ええ、呼んでわかると思います、双子への愛が溢れています。

イオくんと同列ぐらいに使いやすいですよね、あのキャラ……。ヤンデレ大好きです（自重しよう）
ルアくん、フレーム様とペアを組んでいたら書くのが楽なんですけどねえ……。あの子は人によってキャラが変わるので大変です。

副タイトル、わかりましたでしょうか？

右向いて 左向いて また右向く っでことで、横断歩道を渡る前のマナーでした！

小学生の時はバカ真面目に守ってたなあ、と思います。手を挙げて渡る、ですよ？

それでは、次回からはまた暗い本編に戻ります！

第五章の出だしは予告した通り、フレーム様の過去編最終バージョンです。

っでことで番外編との温度差が酷くなると思うのですが……。約2話ぐらいで終了するので、それからそこそこコメディが入ります。次回の更新は12月20日です。もう半分ほど仕上がってるのできつと遅れずに済みます！

さあ、年末はどんな企画にしましょう……。。

真面目な本編に戻ります。しばらくお茶らけた番外編はこないはず
…。

さて、早速フレイム様過去編という暗い話になってきます。前回と
温度差が激しすぎますね！

最後の方、ほんの少しですがグロ注意！。

小鳥が、いたんだ。

昔聞かされた童話に出てくる幸せの青い小鳥が。

傷ついてたから、介抱して。

泣いていたから、涙を掬って。

寂しいといったから、そばにいと約束したのに。

小鳥はいつも、迎えに来てって言ってた。

怖いと言いながらも帰りたいたいと。

悲しいと言いながらも待つてると。

せつかく、手に入れたのに。

僕の宝物。

僕の小鳥。

僕の恋人。

僕の友人。

僕の家族。

僕のアリス。

僕はすべてを失ったというのに、君だけが飛び立つなんて許さない
……

だから、羽を筆って握り潰してやったんだ。

『まあ、フレイム様。何をなされていますの？』

背後から声をかけられ、フレイムはぐるりと首を回してそちらを見た。

小皿にとったスープの味をみながら、満足げにうなづく。

『まあまあまあ、こんな汚らしいところで……』

『君は……』

そばかすだらけの顔。下手くそな三つ編み。スタイルがいいというにはあまりに痩せぎすな身体。くりつと丸い瞳に茶色いメガネ。

とても美人とはいえなかつたが、160センチ小々といった背丈の少女は誰からも愛されそうな顔をしていた。

愛嬌のある顔からは満面の笑みが読み取れた。

まるで母のためと言ってプレゼントを作っている子供を見ているときの眼だ。

そう、母が微笑むのと同じような眼球。

とても綺麗で、幸せそうな彼女の瞳が羨ましくて……

決りたくなる。

『あ、すみません。わたくし白ウサギ様のもとで働かせていただいております、メアリアンです』

メアリアン……そうか、どこかで見た顔かと思ったら、“カードもち”の端くれか。

白ウサギ専属のメイドという、“アリス”と顔を合わせることもないほどの影の薄い存在。実際ただの“一般人”と言っていていい存在だった。

なのに、おかしい。最高権力を持っているはずのフレイムよりもずっと幸せそうに笑うのだ。

『ああ、ルアのところの。どう、彼の調子は』

『昨日の激務に疲れて寝ております。何もあんなに仕事を回さなくとも……』

『はは、ごめん。なるべく負担をかけないようにしたんだけどね』

もちろん、嘘だ。

ルアにはなるべく多くの仕事を回して、さらに休憩がわりにと差し入れをした紅茶には睡眠薬を入れた。

彼にだけは、邪魔されたくない。

もし……もし彼が自分を止めようとしたら、自分は迷いなく彼の首を刈り取るだろう。

彼を失いたくないという思いは確かにあった。だけど、それよりも強かったのが自尊心プライドじみた義務感。

絶対に邪魔されてはいけない。

誰にも。

この、復讐だけは。

『フレイルム様、そのスープはどちらに？』

『ん？ああ、母上の調子が優れないようだから』

『まあ、なんて優しいんですの！フレイルム様、ご病気で伏せております女王さまを気遣っているんですね！』

自分のことのように手を叩いて喜ぶメアリアンが酷くうっとおしい。できることなら今この場で彼女の喉笛を切り裂いて黙らせてやりたかった。

だが、今ここで騒ぎを起こしたら今日の決行が水の泡になってしまっただろう。演出は最後まで完璧にやらなければ。

フレイルムは湧き上がる殺戮衝動を押さえつけながら、ただ静かな笑みを向ける。

『ルアには悪いことしたな……。じゃあメアリアン、仕事に戻っていいよ』

『あ、いえ……。今はちょうど休み時間ですので、ルアさまの顔を拝見したいと……』

言葉半ばで彼女はポット頬を赤く染めた。恥ずかしげに顔を俯ける、そんな小さな仕草だけで彼女がルアを慕っているということがわかる。

フレイルムは彼女の瞳に恋する色を見つけ、ぐっと拳を握りしめた。

嫉妬……とは少し違う。

こんなブスに好かれたって少しも嬉しくない。妬ましくなんかない。ただ、ルアが他人に愛されているという事実が許せなかった。

(ムカつく、な)

幸せになってなんか欲しくない。

自分が奈落にいるのなら、彼にも堕ちてほしい。

一人で幸せにならないで。一人で笑わないで。

どうか、僕だけを残していつてしまわないで。

『……………メアリアンはルアのこと、好きなんだ』

『は、はい……………。あ、でも、見てるだけでいいんです！本当に、ルアさまを遠くから見ているだけで私は　　フレイム様？どうされました、顔色が優れませんよ』

メアリアンが途中で言葉を切って心配そうにフレイムの顔を窺ってきた。

彼女にそれ以上近づかれたくなくて、彼は無意識に一步下がる。スープの表面が大きく揺れ、少し床にこぼれた。

『あらまあ、大変！』

耳障りな声をあげて、メアリアンがこぼれたスープを拭こうと屈みこむ。

フレイムはそんな彼女を見下すかのように睨みつけながら、それでも足は逃げるようにその場を離れていった。

結局自分が閉じ込められた後、屍体はすべて燃やされた。

家族だけでなく、フレイムが殺した衛兵や侍女たちも一緒に炎の中

へと投げ込まれた。

火葬、というのにはあまりにも無造作な処理の仕方だったとルアは語る。

それも仕方ないのだろう。

“女王”と闘ったもの、つまりフレイムの家族たちは“女王”を殺そうとした言わば謀反人だ。つらきじもの死んで尚、その罪が消えることはない。

(勝利は栄光を、敗北は天罰を受ける……か)

牢獄の窓から見た黒い煙が脳裏によみがえり、フレイムは悲しそうに瞳を揺らした。

今ではどうか、彼らの苦しみが空の彼方まで昇華していることを願うばかりだ。

そつと、扉の前で神に祈るようにまぶたを閉じる。しかしもう一度瞼を開けた瞬間には、その赤い瞳は憎悪で塗りつぶされていた。

神を信じるわけではない。

ただ、存在いればいいと思う。

雲の上において、その善人ぶった顔でこちらに嘲笑ほほえんでいるのならば

この僕が、引き摺り下ろしてやる。

『母上、はいってもよろしいですか』

フレイムは母の返事を待たずに、ドアノブを回した。不快な音を立ててドアが開く。

薄暗い部屋に、老婆のように干からびた女が一人清潔そうなベッドに横たわっていた。数日前までの凛々しい姿など今ではもう跡形もない。

毒の量を増やしたからかな……？

なんだかいつもよりも数段弱っているようだ。数日前から増やし始めた毒は思った以上に老いた身体を蝕んでいるらしい。きつと、今日で最期になるだろう。

すっかり光を失った紅の瞳がゆっくりとこちらの方へ向けられた。焦点があつていないところを見ると、もうほとんど見えていないのかもしれない。

乾いた唇が、まるで空気を紡ぎだすかのようにかすかに動く。

『ぶら、ど……？』

小さく呟かれた言葉に、フレイムは思わず笑ってしまった。

自分と兄は、驚くほど似ていない。背の高かったブラッドに対して、自分の方はいつまでたっても伸びないし、憧れていた精悍な顔立ちも面影すらなかった。

なのに、それでもなお見分けられないか！

それでもなお、求めるのか！

自らが殺した息子を！

『はい、ブラッドですよ、母上』

フレイムはくつくつと笑いながら、平然と嘘をついた。とうの昔に死んだ息子をフレイムに重ね、ほっとしたように微笑む彼女があまりにも滑稽で仕方ない。

……彼女はいつだってブラッドには愛情を向けていた。フレイムの目の前で、仲良く会話していたのを今でも思い出せる。自分なんて、

居ないかのように。

何度も何度も……数え切れないほど泣いた。誰にも見られないように暗い部屋で、何度も何度も。

（僕は、ただ　　）

ふっと浮かんだ考えを、小さく頭を振って追い払う。違う、そうじゃない。自分が今やるべきなのは、この女を憎むこと。殺された家族の復讐を遂げること。

演技をしている最中だというのに、頬が笑いでひきつってしまふ。この女は、自分以外の人間をこよなく愛していた。人並み以上の愛情と執着を見せつけていた。

愛情　　そう、この女は兄達を極上の暇つぶしとして、愛していたのだ。

だからこそ、あんなに優しく笑いかけた。死してなお、こんなにも嬉しそうに笑う。

なら、そんな歪な笑顔さえ向けられない自分は玩具おもちゃとしての価値すらないのか。

『母上の体調がすぐれないと聞きましたので、御昼食を持ってきました』

ことん、と。フレイムはベッドのそばにある机にスープを置いた。もうすでに毒はいれてある。それも、致死量の。これさえ飲んでくれれば、それですべてが終わる。長かった復讐劇に幕を下せる。

少しずつ毒に蝕まれ、最後の最後まで死の恐怖を味わえばいい。フ

レイムは母の苦しむ姿を想像して笑いを抑えきれずに肩を震わせた。それを見た彼女はぎよりと大きな瞳でレイムを見ると、息を抜くように優しく微笑んだ。

『お前にはいつも迷惑をかけるな。すまぬ、ブラッド』

『いいえ、迷惑だなんて思っておりません』

『……いつも言っておるじゃろう。お前の敬語は気に食わん、もっと楽にしてよい』

『ふふつ。そんなわけにもいきません』

レイムは彼女の上半身を起こしながら、やんわりと断った。

母に優しくする自分に、吐き気を覚える。「早く殺したい」と急かすこと、「もっと甘美な夢を見せた後に突き落とす方がいい」と押しとどめる理性が胸でせめぎ合って、気持ち悪かった。

焦ることはない。もう少し、もう少しの辛抱だ。

さあ、慎重に慎重に　最後の最後まで“ブラッド”でいて、地にのたうちまわる下衆おんなを嘲笑ってやれ。

『さあ、はやくこれを』

『……うむ。これは、何味じゃ』

母は自分のことをブラッドと認識して安心しきっているせいか、何の警戒心も見せずに毒入りスープを受け取った。

しかしそれに口をつけることはせず、ただ悲しそうな目でこちらを見てくる。彼はめんどくさそうに小さく鼻を鳴らした。

何味、だど？そんなことよく考えもせずに作っていた。今回の毒は証拠が残らないうえに、ほぼ即死の毒だ。きつと味わう間もなく地獄に堕ちるだろうと思っていたのだが……。

ここで黙ってしまったら、明らかに怪しい。数秒考えた末に、メイドからの話を思い返して口を開いた。

『母上の好きなコンソメです。味は身体に障りますので、薄めにしました』

『調理した者は』

『……なんでそんなこと聞くんですか』

『よいではないか。妾は普通の会話をしたいのじゃ。なにか面白い話をしてくれるのじゃろう？』

『……もちろんです』

冗談じゃない。いつルアが仕事を終わらせてこちらに訪れるともしれないのに、のんびりしてられるか。

フレイムは内心激しく毒づきながらも、動揺を悟らせないように笑顔の仮面を張りつける。

面白い話……この女が悦びそうな、楽しい話、か……。

そんなもの、一つしか思いつかない。張り付いていた笑顔が一瞬醜く歪み、残忍さ、あるいは狂おしいほどの悲しみを宿した仮面に変わった。

『それでは、“女王決定戦”^{「コロッセウム」}の話しましょう』

『ぶら、つど……？』

『実に楽しみです、母上。白い部屋に赤い血、のたうちまわる家族たち！ほら、覚えてるでしょう？僕らはそのためだけに生まれてきたのだから』

過去と現在が混在する。自分が“女王決定戦”^{「コロッセウム」}の前のことを言っているのか後のことを言っているのか、わからない。

きっと自分も……目の前で訝しげに眉をひそめるこの女と同じように、狂っているのだと思う。

混乱する頭の片隅で、何かをやめると叫んでいた。もうこれ以上、傷を抉るな……と。

その傷が自分のものとも知らず、彼は早口でしゃべり始める。もう自分が、「フレイム」なのか「ブラッド」なのかすらわからない。

『さあ、誰を殺しましょう？ブレイズなんかどうでしょうかね。貴方はあまり気に入ってなかったでしょう？顔が平凡で気に入らないとか、思ってたんじゃないですか？ははっ、姉さんも同じですよ！ああ、そうだ。まずブレイズを殺して、それから姉さんたちを一人残らず殺しましょう！肉を裁って、血を巻いて、内臓を引きずり出してやりましょう！ブレイズもそんな死に方をしてましたよねえ？顔をぐちゃぐちゃにされて、随分と変わり果てた姿でしたよねえ？あれじゃもう、玩具としての価値もありませんよねえ？そうそう！玩具としての価値もないと言えば……！』

嘲笑うように自分の名前を出すと、母の顔色が面白いほど急激に変わった。掠れた声で「やめろ」と呟きながらいやいやするように頭を振る。

その浅ましい姿に、一気に興奮していた心と頭が冷えていく。まるで神に縋るように裾を掴んでくる母の手を冷たく払いながら、フレイムは冷徹な笑みを見せた。

『フレイム　　そう、あいつはガラクタ同然です』

卑下の言葉、とは少し違う。ただ何となくそう思ったただけだ。

母にとって自分は　　玩具以下の存在だった。だから、ガラクタ。目を向けられることも話しかけられることも……愛されることも、ない。

頬に熱いものが伝い、フレイムははっと我に返った。目じりから流れ落ちた涙が顎まであとを残し、ポタリと服の上に墮ちる。

涙の跡がまるで 仮面に入った罅きれつのようだ。

彼は慌てて頬をこすった。なんていう醜態。なんていう愚行。ここで仮面を外すわけにはいかないのに……！隠すようにして俯き、必死に仮面の欠片を拾い集める。

『 泣いて、おるのか 』

しわしわの手がスプーンの器から離れ、子供をあやすように彼の頬を撫でた。

カサカサとしていて、気持ち悪い感触。だけどどうしても、嫌いなれない。

その指の先から自分を思いやってくれる優しさが溢れるように伝わってきた、憎むことができない。

フレイムは自らの手首をきつく握りしめて、流れる血を押しとどめた。どくりどくりと、握りしめた手から君の悪い音を感じる。

馬鹿なことだ。殺さなければいけない相手に、今更情を移すなんて

……

『 妾が、泣かせてしまったのか？妾は何をすればよい？ 』

まるで子供のようにおろおろした口調で母は聞いてくる。とても悪かしくて、滑稽こひじな女。

ルアやブラッドに慰められながら泣き腫らした夜が頭の中に思い浮かぶ。あの時自分は、何が悲しくて泣いていたのか。

憎かった。自分を無視する母が、自分以外のものしか愛さない母が、自分に冷たい瞳を向ける母が、たまらなく憎かった。

ああ、でもそれ以上に。ずっとずっと 羨ましかった。

ほんの少し風邪をひいただけで、つきつきりで母に看病してもらえ
る姉たちが羨ましい。

親しげに話すことができ、母が催すお茶会にも誘ってもらえる兄
が羨ましい。

優しい笑顔を向けられて、いくら駄々を捏ねても根気よく母に勉強
を教えてもらった妹が羨ましい。

それがたとえ、“玩具”という虚しい愛情だったとしても 母
の愛を欲さない子供など、どこにいるだろう。

ほんの少し、兄達に向けられていた愛情の一片でいいから。たっ
た一瞬の絵空事でいいから。

抱きしめて、ほしかった。

『……っ、は、やく…早く、それを吞んでくだ、さい……っ』

『これか？このスープを飲めば、お前は悲しまずに済むのか？』

フレイムは静かに涙を流しながら、こくりと頷く。そうだ、もうす
ぐ終わる。長い長い復讐劇が、ようやく幕を閉じるのだ。

どうしてこんなに頭は焦るのか。それはもしかしたら、自分がだん
だんと揺らいでいるのを感じたからかもしれない。

どうしてこんなに心は塞き止めるのか。それはもしかしたら、自分
が望んでやっていることではないのを感じたからかもしれない。

母はそれでもなお、スープに口をつけるのを躊躇った。

もしかしたらこのひとは これが毒入りだとわかっているのか
もしれない。

だからあんなに熱心に、誰が作ったのか聞いた。自分が促しても、
一向に呑もうとしなかった。

なら何故、そのスープを毒見しろと言わない。床に投げ捨てて罵らない。

何故、まだ大事そうにそれを持っている。……何故。

『……………ブラッド。お前が泣くのは、実に久しい事じゃな。自分を隠すことに長けているお前は滅多に泣かなかった』

優しく、まるで手負いの獣に触れるように慎重に頭を撫でられる。噛みつかれるとわかっていて、なんでこんなにも躊躇い泣く触れられるのか。

……………いや、これはブラッドに向けられたものだ。決して自分ではない。

驕ってはならないと頭では必死に言い聞かせても、懸命にあやそうとする母の手に心が誘われてしまう。初めて触れた“愛情”に惑わされてしまう。

本当に。

迷いが、一つ。

『 フレイムの代わりとなって死ぬと言いだした時も、本当は泣きたかったのじゃろう……………？』

苦しげに咳かかれた一言に、世界が静止を告げた。

呼吸を忘れてしまうほどの静寂。頭の中で、彼女の言葉がぐるぐると堂々巡りを始める。

今、なんて。僕の、代わり？誰が。

兄さんが、僕のかわりに、自ら

死んだ？

なんだ、それは。ナンダ、ソレハ。

だって、話と違う。兄さんは僕が刺した。兄さんは母上が殺した。

兄さんは、僕にわざと殺された？

そんな、だって、だって、そんな、まさか、うそだ、そんな、いやだ、ばかな、やめろ、それじゃあ、ちがう、何のために、やめろ、何のために、違う。

何のために、僕はこんなことをやっている。

『貴女が、言い寄ったんでしょ？』

『……………』

『貴女が、貴女がっ！兄さんに死ぬように言ったんでしょ？！』

自分の行いを正当化する言葉だとは頭のどこかで認識している。だけど、他にどういえばよかった？

信じられない。信じたくない。

あの日からずっと、彼女への復讐だけが生きる糧だった。そうすることで、兄も救われると思っていた。

兄さんは母上に殺されて。だから僕は復讐をしなくちゃいけない。こいつを殺せば兄さん、貴方は　　もう一度笑ってくれるのでしょ？

『……………そうじゃ』

あまりにもあっけなく肯定されて、フレームは拍子抜けに近い感覚を覚えた。

いつの間にか入っていた肩の力がふっと抜ける。だがそれは、納得から来る安心感では決してなかった。

強いて言えば、ああそうなのだと悟る気持ち。心のどこかでその先の答えを待っていた。あるいは、知っていた。

ずっとずっと　　長い間願っていた言葉。だけど、今は一番聞き

たくない言葉。

『ブラッドを殺してでも、妾はフレイムを助けたかった』

ああ……。

フレイムは胸の奥からこみ上げてくる歓喜と戸惑いと悲しみとやりきれなさに耐えきれず、額に手を当てて目元を隠した。

その合間を縫うようにして、小さな涙の筋が跡を残していく。どうして、どうして今になってなのだ。なんでもっと早く言ってくれなかった。なんで今更、その言葉を。

なんで、今更名前なんて呼ぶんだ……っ。

『な、んで……っ』

嗚咽交じりの声で、小さく呟く。

ずっと、呼ばれることのなかった名前。他の姉妹や兄達のこととは、とても優しげな声で呼ぶのに……自分はいつも「お前」だった。

存在すら拒絶しているのだと思った。名前を口に出すのもおぞましいのだと。

どんなに冷たい視線を向けられるより、どんなひどい言葉で切りつけられるより、ずっと苦しかった。

なんで、今ごろ。そんな、愛おしいとでも言いたげな声で。なんで、名前を呼んだ。

しかし母はフレイムの呟きを問いかけたと認識したらしい。

酷く息苦しそくに胸を上下させながら、その小さな背中を苦痛で震わせた。

『本当は、誰も失いとうない。誰も……ブラッドも、フレイムも』

や！仕方ない、とは言わぬ。仕方ないことなどなかった……じゃが、妾に運命を覆す力はない……。誰か一人、生かすしかなかったのじや……っ！なにが、いけなかった？妾はただ　　家族が傍にいる、あたりまえの幸せを願っただけだというのに……』

運命　　そう、それはあの忌々しい“アリス”のための“ルール”。

女王の世継ぎがただ一人であるのはフレイムも前から知っていた。だからこそ母は異端で、10まで生を受けていた自分は“女王決定戦”のためだけに生かされているのだと、思っていた。

産まれたときに死んだ方がましだと何度考えただろう。こんな世界に生まれ、喜びを知り、悲しみを知り……憎しみを知る前に、死にたかった。なのに、自分たちには残酷にも生が与えられた。

ただの、余興。暇つぶし。　　ガラクタ。ただそれだけのために生かしておいたというのに。

今更、なんで僕の決心を揺るがそうとする……？

『たす、けた？馬鹿じゃない……？僕がどれだけ、苦しんできたと思っっている！一人だけ残されて、貴女を殺そうとするほどに憎んで、いつしかこの世界の何も愛せなくなった僕が、どれだけ……っ』

ああ、もう駄目だ。胸が痛くて仕方ない。息が苦しくて仕方ない。早くこの女を始末しないと、自分の中で閉じこもっていたものが出てきてしまいそうだった。

声をかけられて。頭を撫でられて。……名前を呼ばれて。長い間、外に出ることを恐れていた感情が浮上してくる。心に刻みつけていた“復讐”という傷跡を優しく覆い隠してしまう。

今や“復讐者”の仮面は完全に砕けて、ただの幼子に戻っていた。くしゃりと顔を歪めて涙を流す。

齡十二の少年相応の、まだ親から離れられない顔つき。いや……たとえどんなに時がたって、子供は母親を愛し続けるのだろう。

『どう、して……。どうして、抱きしめてくれなかったんです……？一回、一回でもいいから抱きしめてくれれば、それだけで、ちゃん……っ』

貴女を愛せた。

憎まずに済んだ。

続く言葉は無限。だけどそのうちのどれも、フレイムは言うことが出来なかった。

ふいに頭を抱え込まれるようにして抱きしめられ、彼は目を見開いて言葉に詰まる。

腰を屈めるような態勢になったため、息はさらに苦しくなった。だけど、胸は。 。 しわしわの手が背中に回って、ぎこちない動きで撫でる。まるで心地よくない。むしろ下手すぎて、若干痛みを感じる。

だけど。

その節くれだらけの指からじんわりと確かな愛情が伝わってきた。欲しかったためもり。懂れていた手。諦めていた愛。何故、今になってなのですか。

これで。

迷いが、二つ。

『……妾は、間違っていたのかもしれぬ』

母が耳のすぐ上でため息とともに小さく呟く。何を言っているのかよくわからないながらも、フレイムは母の腕に抱かれながらゆっく

りうなずいた。

例えば、過去に戻ってやり直して。今度はちゃんと、家族全員生きられる選択をして。みんなで幸せそうに笑って過ごして。

そんな日々が続いていたら　　貴女は、僕にだって少しは笑いかけてくれるのでしょうか？

愛されていたのだと、抱きしめられて初めてわかる。これが昔の自分だったら狂喜乱舞して母に飛び付くだろう。

もうそんな子供じゃない。時が、自分を狂わせてしまった。赤が、自分を歪めてしまった。

フレイムは一つの滴が頬を伝って彼女の腰かけるベッドに染みを作ったのを凝視した後、突き放すようにして彼女から離れた。

母はほんの少し悲しそうに顔を歪めて、ぼろぼろと涙を流し続ける彼を見つめる。

『もう、やめて下さい……。頼むから、もう、僕を苦しめないで……。僕の前から消えて下さいっ！』

愛情が、憎しみを薄めていく前に。愛情で、復讐の矛先が鈍る前に。いや……。もうすでに、ことは遅かったのだ。しかしフレイムがそれに気づくことはなく、ただ爆発しそうになる胸をきつく押さえる。母は苦しげに息を吐くフレイムを心配そうに見ていたが、一瞬逡巡した後再び優しい笑顔を見せた。

『　下らぬことを申したな。気にするでない』

最後にくしゃくしゃと子供にするように髪をかきませた後脇に置いていたスープを両手で取り、口を近づけた。

『あ……あ』

だって、そのスープには、毒が。
それを飲んだら、貴女は。
それを飲んだら、僕は　　っ！

また一人に、なってしまふ。

『それは、僕　　いいえ、フレイムが作ったものです。もしかしたら、毒が入っているかもしれない。飲まないで、下さい』

矛盾しているだなんて、言われなくたってわかっている。
殺したいと思つて今まで毒を盛つてきたのに……苦しめてきたのに、
今更躊躇っている。

肉食獣が獲物の喉元に牙をつきたて、最期にもがくウサギを嘲笑っているのではない。ウサギのぬくもりに牙が触れ、わずかな迷いが生まれてしまったのだ。

母は、笑う。見たことがないような、綺麗な笑顔で。

『たわけ。息子の作った物を不味いという母が、どこにいる』

そうして、一気に冷めたスープを飲み干した。

満足かい？

迷いが、三つ。

床の上を、ベッドから転落した“それ”がのた打ち回る。まるで陸に揚げられた魚のように蠢くそれは、口からヒューヒューと蚊の鳴くような息をしていた。

ごぼりと、赤黒い液体が、同じ口から絶え間なくあふれ出る。途切れ途切れの呼吸と、液体が床に広がっていく音だけがこの部屋に響いていた。

『あ』

頭がじんと痺れて、よく働かない。これは、何だ。これは、誰だ。よくわからない“それ”の手元には、まだ中身がわずかに残っているスプーンの器が転がっていた。“それ”は口から胃血をあふれさせながらも、その器を手に取りうつと震える腕を伸ばしている。

もうわずかに残っていた視力すら、ないらしい。闇雲に探しまわっていた手は床を叩いては、血の海へ溺れていった。

『はは、う、え』

ひっ。喉がひきつれて、うまく声が出せない。

どうして。これを望んでいたのではないのか。どうして。苦しむのを見たかったのではないのか。どうして。母を殺したかったのではないか。

高く高く、嘲るように笑ってやるつもりだったのに。なんで、まだ泣いているのだ？

望んでいたのではないのか。

『あ、あ、あああ………』

母の手が、器を探し求め

ようやくそれを掴んだ。

優しく微笑んで器を胸に抱きしめる。

まるで生まれたばかりの赤子をその腕に抱くように。

一瞬の、静寂。

しつかりと抱いていたはずの腕から、器がごとりと音を立てて転がった。

『あ、ああああ、ああああああっっっ！！』

頭の中で、嘲るような声が反復する。

すべての迷いは紡ぎだされ、いずれそれは耐えがたい苦痛へと変わり貴様の身を引き裂くだろう。

本当ニコレデ満足カイ？

うっわ、長……。いつの間にやら超大作となってしまいました。もうなんだか、フレイム様の過去編だけでもう一つの物語ができる気がする……。

さて、それはともあれ、更新遅れて申し訳ありません！見ての通り滅茶苦茶長くなったうえに、こればかりは試行錯誤して頑張っていたので思っていたよりも時間を食ってしまいました……；

実は何度も気に入らなくて50行ぐらい取っ払いながら書いてたんですよね…… 大変でした、はい。

うーん、少しでもフレイム様の心境がわかってくれるといいんですけど……。

殺したい、憎いと思っていても心の奥底では、愛されたいと願っていたんですね。心境変化を書くのが下手ですね、はい！

私がキャラを作る上では、性格などを大まかに決め、そのストーリーを漠然と決定します。

そして次の作業としては「言わせたいセリフ」を作るのです。このセリフが一種のキーとなって、物語に働きかけると、私は思っています。

えー、話を戻しますが。今回フレイム様のキャラを作る上で、フレイム様自身のセリフではないのですがどうしても使いたかったセリフがあります。

それが女王最後の言葉、『たわけ。息子の作った物を不味いという母が、どこにいる』です。

これだけは何が何でも入れたかったです。フレイム様のテーマは家族愛ですので、絶対これを使いたかったです。

うーん、涙を誘えたかどうかは別として、これからは私も家族に優

しくしなきゃいけませんねえ……。

さて、今回フレーム様のセリフで

「これはコロシアムの前のこととして言ってるの?」

「ブラッドとして言ってるの?フレームとして言ってるの?」

等など、疑問な点も様々だったと思いますが……実際、本人も後半あたりから混乱してます。

確か文中にもそのようなことを書いていたので、これはきっと矛盾ではない、はず……。

今回、かなり骨が折れました……。暗い話でここまでつまずいたのは初めてかもしれません。

危うくフレーム様を嫌うところにorz

次回更新は12月24日です!こゝ今度こそ間に合うように頑張ります!

今考えてみれば、女王さまのキャラってすごく書きづらかったなあ……。次はルアくん主演なのでたぶん更新できると思います!

あ、それから。次回はグロ注意!

身体が酷くだるい。ルアは自分の額に手の甲を押しあてて熱がないか調べた。

どうしたのだろう、少し熱い気がする……。

(まずい、なあ……。フレ임様から貰った仕事、まだ片付いてないのに……)

それは昨夜のことだった。突然自分の主人であるフレ임は、街からお忍びで帰ったかと思えばわけのわからない仕事をたくさん持ってきた。

「僕もやるから」と柔らかい笑顔くれたフレ임に励まされるようにやり始めたのだが……。

わずか30分で、急激な眠気に襲われ熟睡してしまった。そして起きたのがたった今。

ルアはまだガンガンとうるさい頭を押さえながら再び机に向かった。起きたばかりのせいか、足元が妙にふらつく。

『……………これは……』

机の上に置いてあった小さなサンドイッチを見つけて、彼は嬉しそうな笑顔を見せた。

誰がこんな気遣いをしてくれたかなど、わかりきっている。ここまです細な所まで世話をしてくれるのは、ルア専属のメイドであるメアリアンだけだ。

対して秀でたところもない少女だったが、気の利く行為にルアの中

での好感度は高かった。

ほんの小さな優しさに、じんわりと胸が温まってく。ルアはパンと頬を軽くたたいて気合いを入れなおした。

フレイルムが励ましてくれていたのだ。メアリアンが応援してくれているのだ。

だったら、自分は精一杯のことをして二人に返さないと。

『よし、やるか！』

まずは昨夜起こった居酒屋での暴動について……。

ルアが書類の山から一つの資料を取り出そうとした、その時。

ボタンと、ものすごい勢いで扉が開き鮮やかな赤がルアの胸に飛び込んできた。

『なっ……?!』

突然のことに身体が対応しきれず、ルアはそのまま後方から書類の山へと倒れ込んだ。黒い文字の羅列が入った白い紙がひらりと舞い上がってはルアの足もとに振ってくる。

ああ、せっかく整理したのに……。呆然自失したのはその一瞬だけ。すぐに視界に赤が戻り、ルアは我に返った。

この赤い髪、抱きつき方、体格、服装　　これは……。

『ふ、フレイルム様？どうしたんですか、こんな夜分に』

様子がおかしいと気付いたのは、彼の肩が細かく震えているのを見た後だった。

ルアは腰のあたりに顔を埋めたまま何一つ言葉を発しようとしないうフレイルムの背中をそっと撫でる。

どうしたのだろう……こんなに取り乱した彼なんて、あの“女王決^{コロシ}定戦”以来初めてだ。

『……お願いです、何か言ってお下さい。何があつたんです……？』

なるべく刺激しないように優しく問いかけるが、彼は顔を拳げることもなくイヤイヤと首を振る。

あまりにもいつもの彼からはかけ離れ過ぎている行動に、ルアは一抔の不安を覚えた。

もしかしたらどこかに傷を負っているのかもしれない……っ！

自分の主人をこんなにも深く傷つけた人間に殺意がわき上がる。ルアはそれをぐっと押し殺して、なんとかして彼の顔を上げさせようとした。

フレイムはなおも反抗して、ますます強くルアの裾を握りしめる。

『フレイム様、顔をあげて下さい。ちゃんとやってくれないと、わからないんです』

困ったようにルアがそういうと、彼はようやく抱きつく力を緩めた。ルアは少しだけ彼から身体を離し、頬に手を添えて優しく顔をあげさせる。

『……して』

驚きで声がつまく出ない。見たところ、彼は何の外傷もなかった。もちろん血も浴びてない。

それなら、どこも痛いところはないはずなのに　　彼は泣いていた。

ポロリポロリと絶え間なく彼の大きな瞳から雫が落ちてはルアのシヤツに染みを作っていく。その前も随分と泣き腫らしていたのか、

目が充血していて痛々しい。

『どうして、泣いてるんですか』

『ふっ、う、うあああ、あああああっ……』

フレイムは言語を知らない赤ん坊のように首を左右に振りながら泣き声をあげた。かつて見たことのない様子にルアは半ば硬直しながら彼の背中を撫でる。

素直な彼。正直な彼。……でも、どこか臆病な彼。

“女王決定戦”^{コロシウム}のあとも明るい笑顔を見せていた。

だけど　　いつからか、彼の泣き顔を見ることはなくなった。

ふいに彼の泣き顔がブラッドの最期のそれに重なって、ぞくりと背筋に悪寒を感じた。

笑い顔と泣き顔が、頭の中でぐちゃりと螺旋を描く。

一体どちらが仮面^{ベルソナ}？

『落ち着いて、落ち着いて下さい。何があつたんです？ちゃんと状況を　　』

『ルア様……っ！』

扉が勢いよく開け放たれ小柄な身体が部屋に転がり込んできた。フレイムの肩をさすってあやそうとしていたルアは驚いてそちらを向く。

この時に、気づいていればよかつたのだ。

フレイムはルアの視線が自分からそれた瞬間、絶望に似た感情をその瞳に宿し彼と侵入者を見ていた。

お気に入りの玩具を取られた子供のように、憎らしげにメアリアンを睨む。

突然部屋に入ってきたメアリアンは死体のように白い顔をして、その場にひれ伏せた。

『女王陛下が

ご崩御なされました』

床に転がっていた女の屍体は、赤い部屋に取り残されたあの首なし屍体たちとよく似ていた。相違点があるとすれば、その首がつながっていることと身体に一切傷がないことが。想像を絶するほどの苦しみだったのだろう、喉は血が出るまで掻き毟られ赤く染まっている。

腕は何かを抱きしめるように交差させられていて、その傍には白い器が転がっていた。

……その白も、やはり赤に染められているが。

ルアは何も言わずに彼女の身体を抱き上げると、ベッドへ仰向けに寝させた。

女の身体は、子供とそう変わらないほどに軽い。この2年でこんなにも痩せ細ったのかと思うと、彼女の身体がひどく痛々しく思える。

3日前 “アリス”をこの世界へ向かえると発表した時も、こんなに軽かったのか。

『

女王さま』

苦しみ抜いた形跡が見えるというのに、彼女の顔はひどく穏やかだった。

ルアはそつと手を置きほんの少し開いていたまぶたを閉じる。口元の血を吹いてやると、本当にただ眠っているようにしか見えなかった。

もう何年も毛先の手入れをしていない髪を掬いあげて、三つに分ける。

いつしか、手先の器用なブラッドが教えてくれた髪の編み方だ。

一回で覚えただけであの人は手を叩いて喜んでくれた。

『母上にやってやれよ。きつと喜ぶぜ』

その時はまさか女王の御櫛に障ることなど考えもつかず、笑って流したのだ。

あの後メアリアンを使って相当練習したことなど、誰も考えつかないだろうが。

『……喜ぶわけ、ないんですよねえ。だって女王さま、さっぱり似合いませんもの』

出来上がった三つ編みと彼女の穏やかな顔を見比べ、ルアはふつと息の抜けるような笑みを見せる。

どちらかというときりつとした感じの彼女には、やはりちぐはぐなおさげ。むすつと不満そうなこのひとの顔が目の裏に浮かぶようだ。喜ぶといった彼ひともない。反応をしてくれる彼女ひともない。

暗い部屋が、ひどく寒々しく思えた。

『女王さま』

三つ編みを解く。長い髪がパサリとシーツの上に落ち、バラバラになった。

赤い髪。息子にも娘にも受け継がれた、綺麗な髪。

ルアは彼女のまだ温もりが残る手を取り、手の甲におでこをくつつける。そこからはもちろん、何も感じることはできない。

『女王さま』

何度も呟きながら、涙が目からこぼれ落ちるのを堪えた。

フレームが泣いているのだ、自分も一緒に泣いてしまうなんて醜態……この女の前では晒したくない。

優しい、なんて一概には言えないけれど。

少なくとも、れっきとした「母親」だった。

ほんの少しわかりにくいだけで。ほんの少し不器用なだけで。

『もう、いいんです』

ちゃんと、貴女の心は伝わったんですよ……？

ずっとさびしかった女。……いや、ずっとさびしかった少女。

だいぶ前に一度だけフレームが「自分達はただの玩具だ」と話していた。あの女を喜ばせるためにだけ作られた、玩具だと。

その時何も答えなかったのはもしかしたらフレームには自分で気づいてほしかったかもしれない。

このひとが求めているのは一方的に遊んで捨てる玩具じゃない。ただ、話を聞いてくれる相手が欲しかったのだ、と。

苦しいと言いたい。悲しいと言いたい。寂しいと、言いたい。

子供が母親を求めるように母親は子供を求める。たったそれだけのことだというのに、どうして叶わなかったのか。
……いや、頭のイカれた神のきまぐれか、一つだけ、叶ったのかも
しれない。

少なくとも貴女は、一人で死んだわけではないでしょう
……？

『もう、眠ってもいいんです

……』

貴女の遺した宝物は、僕が守りますから。
そっと付け足すと、彼女の口元がほんの少し微笑んだ気がした。

『……どうしましょう、どうしましょう、困りましたわあ』

メアリアンは面白いほどに動転していた。いつもだったらあまりにも滑稽で笑うところなのに、まったくそういう気になれない。
なんだろう　嬉しくてたまらないはずなのに。せめて悲しいとか寂しいとか、そういう感情があってもいいはずなのに。
なんでこんなにも、空虚なのだろう。

パチンッ

フレームは爪を切りながら鬱陶しげにペラペラしゃべりだすメアリ

アンを見た。少し黙ってほしい。
しかし視線を向けられたことを本人はどう受け取ったのか、ほんの少し頬を赤く染めるとにっこりと笑った。今まで暗い表情カオをしていたというのにとんだ早変わりだ。

『ああ、でも正直ホツとしました。これでフレ임様が晴れて“女王”様ですね。私密かにフレ임様のこと応援してたんですよ』

誰にでも愛されそうな笑顔。大した美人でもないのにいつもちやほやされているのはこの人懐っこい笑顔のおかげだろう。

料理長にも、メイドたちにも、召使いにも、雑用がかりにも、同期にも、そして　　ルアにも、愛される娘。

ずるいよ。

『……………そうだね。僕は今から女王だ』

女王が崩御した瞬間から、次期女王の“カード”は有効になる。つまり、「女王の言うことは絶対」という“ルール”が。

……………こんなこと、ルアが望んでいるはずがない。ルアのためにやっているわけでもないんだから、当然だ。

全部自分の独りよがり。母さんの時だってそう。いつも僕は、一人で考えて一人で思いこんで一人で汚れていた。

だからもう、一人はいやだよ。

『命令だ。よく聞け』

ルアは、どんな反応を返してくるだろうか。

悲しむだろうか。苦しむだろうか。僕の暴走を止められなかった自分を責めるだろうか。

僕を　憎むだろうか。

（それでも、いい）

メアリアン、君はずるいよ。

みんなに好かれていくくせして、そのうえルアの気まで引こうとするんだから　。

そう、それは言うなれば強欲。

（僕には、ルアしかないのになあ……）

対して、自分が望んでいるのは本当に些細な幸せ。

誰に嫌われてもいい。先生にも、乳母にも、メイドにも、料理長にも、……ルアにも。

だから、お願い。

『この城中の人間を全員ホールへ呼び込め。公開処刑を
開催する』

どうか、僕を一人にしないで

……

血のついた体を綺麗に洗いながした後、ルアは白い布を彼女の顔に

かけて隠した。

眠るように息をしていない彼女の額にそっと手を当てると、二度と振り向かないように部屋を出る。

『……………？』

なんだろう、すごく静かだ。女王が崩御したとなればみんな騒いで回りそうなものなのに、人の気配すら感じない。

ルアはためしに両隣の部屋を覗いたが、どこももぬけの殻だ。いや……ここはもともとあまり人の来るところではないから不自然ではない。

この時間帯だったらみんなどこにいるのだろう。ルアは少しだけ考えを巡らせて、3階の厨房へと足を運んだ。ここからだったらすぐ真下で近い。

(どうした……？何か、胸騒ぎがする)

根拠のない虫の知らせに気持ち悪さを覚えながらも、はやる鼓動を止められなかった。

『ロイ・アンレンソン！エリザベス・ミリシャ！マイク・ホワイト』

順々に知っている物の名前を挙げながら厨房のドアを開ける。入口にはやはり誰もいなかった。

厨房は160畳はある広い所だ。入口にいないからってそこまで不思議なわけではない。

なのになんで、こんなに不安なんだ……？

『ローズ！ティオナ！ルーク！ウィル！パトリック！エレミィ！ギ

ルバート！

誰かいないのかっ！！』

おかしい。おかしいおかしいおかしい……っ！
だって、この時間帯は後片付けにみんな忙しいはずじゃないのか。
こんな、もぬけの殻なんてこと現実的に考えてあり得ない。

そこまで考えてルアは洗いかけのお皿に気がついた。スポンジには
まだ白い泡がべつとりと付いている。

ここの雑用係はこんな中途半端のまま仕事を放棄するような教育は
施されていない。

何かが、おかしかった。

まるで突然無視できない用事が出来たよう、な……。

『 つ？！ 』

ある可能性が頭をよぎり、思わず洗い場の前にへたり込んだ。

カタカタと全身が恐怖で震える。ルアは冷たいシルクに座りながら、
守るように自分自身を抱きしめた。

頭の中で「まさか」と叫ぶ声が聞こえるけれど、それに相反して理
屈が「それじゃあこの状況はなんだ」と嘲笑ってくる。

自分の与えられた“役割”をこつも簡単に無視できる用事 い
や、それをさせた命令、とでも言うつか。

『 メアリ、アン 』

むわりと変な臭いが鼻をつき、ルアはぼんやりとそちらの方を振り
返った。

鍋を焦がしたなんて生易しいものではない。もっと、鼻と喉から入

り込んで胃の中を掻き乱すような、吐き気を催す悪臭。

僕は、この臭いを知っている……！

あの時服に染みついて取れなかった臭い。

ルアは次第に重くなっていく体を引きずってその臭いの根源の方へと近づいた。

臭いが濃厚になっていくにつれ、心臓の音が重くうるさく騒ぐ。

『メアリアン、どこだ』

いつもこの厨房であくせく働いている彼女のことを心配でたまらなかつた。

あの純粹な笑顔が脳裏に浮かんでは消える。

どくり

『メアリアン』

壁を挟んだ向こう側を覗こうと大理石の壁に手をつけた。その瞬間、まるで謀ったかのように呆気なく膝が折れる。

そのすさまじいまでの臭気にあてられた途端、ぶわりと嫌な汗が全身から噴き出してきた。

足がすくんでしまってもうほとんど動けない。

どくり どくり どくり どくり

『メ、アリ』

頼むから、誰か返事をして。

切実にそう願いながら、勢いをつけて身を跳び込ませた。

一瞬。

どく

『うわあああああああつ!!』

世界が血の海に浸食されたように見えた。

いや　　実際それと似たような光景だったのだろう。

白い床には辺り一面血飛沫がへばりつき、あるところでは血だまりを作っている。パンのか欠片なのか、それとももっと別の物

例えば人の肉片だとか、そんなものだったのか、赤い血の周りには小さな固まりがいくつもあった。

尋常じゃない。恐怖のままに絶叫を挙げる身体とは違い、頭は意外にも冷静だった。

悪戯じゃないことくらい、幼児でもわかる。これは明らかに人が人を殺した跡だ。自殺でも事故でもない、残虐な殺人。

ただ　　どんな人間がこんな無残な殺し方をできるといふのだ。

『ひっ、ひっく、くっ……くうあ、あ、あああつ……』

溢れてくる涙を必死に我慢し、ルアは血の海の上を歩いて中へ入った。

ぬちゃり

粘着質な感触が足の裏に残る。ほんの少しだけ、同じ状況だったフレイムの心境がわかった気がした。

なるほど、これは　　狂わずにいられない。それが愛する家族のものなら余計にだ。

血の海の果て、いや根源というべきか、根源はもはや“人間”の原形をとどめていなかった。

そこに身体があつたというよりもむしろ、肉片がそこに集まつたという感じだ。肉片の塊のすぐそばにはこれだけは何の変わりもなく、メイドの服だけが落ちている。

こんな死に方、あり得ない。切り刻んだとしてもすり潰したとしてもここまでぐちゃぐちゃにはできないだろう。

そう、これはまるで体内の爆弾が爆発した、みたいな　　。

『その方は“ルール違反”をした方です』

背後から暗く沈んだ声が聞こえ、ルアは思わず驚きで悲鳴を上げそうになった。

慌てて振り向こうと足を動かすが、その瞬間血のぬめりで滑ってしまふ。無様に尻餅をついたルアは肉塊のすぐそばに倒れ込んだ。

『ろ、ロイ？よかった、ようやく誰かいた……っ！これはどうということだ！どうしてこんなことになっている？こいつは　　この女は誰だっただんだ！』

厨房で働くロイはいつもの赤い制服をぴしっときこなして、ルアの前にたたずんでいた。

ルアよりも10ほどの彼は動転しきつたルアを鎮めるかのように穏やかな笑みをたたえている。

ほんの少し暗い印象を受ける彼だったが、いつも冷静沈着でひそかに皆を支えていた。ルアの雑事を手伝ってくれることもあるのだ。

本当は何事にも一生懸命な青年だと、知っている。なのになんでこんなに　諦めきつたような顔をしているのか。

『私たち城で働く者は“女王”陛下の言葉が絶対です。本当に、“ハートの城のトランプ”なんていう小さな役目ですけどね。それでもしっかり、“ルール”は発動するのです』

『わ、わけがわからないっ！“ルール”って何だ？この女は一体』

『その方が誰かなんてもうわかりません。見ての通り、身元を確認できる状態ではともありません』

『ど、どういう意味だ、ロイ……もっと、わかりやすく説明してくれ！』

『そんな時間あるはずないでしょう。急いで下さい、時間に合わないと私もルア様も“ルール違反”で爆発しちゃいます』

ルアがなおも言い募る前に、ロイは彼の手首を掴みあげ強制的に立たせた。すっかりと足から力が抜けてしまったルアは彼の肩に支えられるようにして歩きだす。

何度小さな声で「いやだ」といつても聞いてはくれなさそうだ。

優しい彼がこんなにも頑固になる理由。“ルール違反”になると、彼は言った。それがどういう意味を持つのか、それを知らないほどルアも子供ではない。

この世界に共通して言える“ルール”。

一。“アリス”はいきたじょうたいでつれてくること。

一。“アリス”はいきたじょうたいでかえすこと。

一。“アリス”は“案内人”がつれてくること。

一。“アリス”のじよげんは“相談相手”いがいはやらないこと。

一。みんな“女王”のめいれいをきくこと。

『女王』

フレイルム様が、お呼びです』

『私も“ルール違反”をした方は初めて見ますから詳しくはわかりませんが、あの女は女王さまから招集をかけられたときに愚かにも「まだ調理が終わっていないから」と拒否しました。私は城中の人間に声をかけていたのでここに再び訪れたのはその30分後だったのですが……その時にはあぁなっていました。無残なものですね』

声には顔以上に本人の感情が現れるという。悲しい時には声は低くなるし、嬉しい時には高くなるように。

だが、淡々と話すロイの声には何の抑揚もなかった。あえて言うならば、無表情の声というものか。

ルアは身体を引きずるようにして歩きながら、彼の横顔を盗み見た。先程まで浮かんでいた笑顔が今ではもう面影もない。

ここまで無表情の人間を、ルアは初めて見た。

『……僕たちの身体は隅々にわたってまで“ルール”を守るように組織されている。だから魂ココロがそれに背くようなことをしたら、身体が拒絶反応を示すようになっていくんでしょね。身体が魂から離れていこうとする　つまり、爆発する』

『へえ、やはりルア様は賢いですね。少し冷静になったただけでそこまで推測できる』

感心したように言われるが、さっぱり嬉しくない。ルアは船にでも酔った気分で彼の肩にもたれかかっていた。

“ルール違反”をした者の結末を目の前に叩きつけられて、恐怖が心を浸食していくのがわかる。死んでしまつたらすべて同じ、なんてことが果たしてあの状況を見て言えるだろうか。

おびただしい量の血、つんと鼻を刺激する鉄錆の臭い、血に浮く油、血のついた肉片　血、血、血、血、血。記憶に鮮明に残っているのは、あの赤だけだった。

『ルア様』

クラクラとする頭を押さえつけていたルアは、ポツリと呟かれた言葉にそちらをだるそうに見上げた。

頭一つ分大きいロイはルアの身体を支えながら、心配そうな視線を投げてくる。

『ルア様は、何があつても女王さまに逆らつてはいけません』

『ん……ああ、そういえばフレ임様が“女王”に就任したんだ、つけ……？ちゃんと、祝つてやらないと、いけませんね』

『どんな命令でもしたがつて下さい。いいですか、何があつても逆らわないで下さい』

『わかつた、わかつたから……。混乱してるんです、またあとで……』

『あとでじゃ困ります！』

適当に流そうと用意していた言葉を勢い良く遮られ、ルアは思わずびくりと震えた。

諦めたのではない。無表情なわけでも、心配しているわけでもない。ただその黒い瞳に映るのは、絶望に縁取られた希望の光。

『あの方を救えるのはルア様だけなのです。どうか生き延びて、ず

つと傍にいてあげて下さい』

自分よりずっと大きな掌が、ポンポンと頭を撫でた。

言葉の意味よりも、子供扱いされたことに苛立ちを覚える。背の低いルアはいつまでたっても「子供」だった。

悲しげに微笑むロイに文句を言おうとするが、間に合わなかった。

ロイは一方の手でホールルへと続く扉を押しあけ、もう一方の手で懐から赤色に塗られた拳銃を取り出す。

本物かどうかも疑ってしまいそうな、赤い銃。それでも銃口だけは変わらず黒々としていた。

すべてを吸い込んでしまいそうな黒い銃口がルアを、次にロイ自身のこめかみを睨む。

『ルア様を導いたのち、自害。それが私への命令です』

パシユツ

空気の抜けるような意外にも小さな音が動けないルアの鼓膜を叩き、視界に赤い華が舞った。

ルアへ向かって微笑んだ、その笑顔のままぐらりとロイの身体が後ろへと傾く。支えることすら、手を伸ばすことすらできなかった。

『あ………』

間抜けな声が自分の口から洩れる。それを合図に、堰を切ったように唇の間から悲鳴が流れてきた。もともと大きい水色の瞳を困惑で見開く。

もうすでに事切れたロイから一步、また一步離れていった。駆け寄

らなきやと思うものも、頭の中はひどく冷静だ。見るだけで既に「手遅れ」と判断してしまっている。そんな馬鹿なこと、あってたまるか。だって今、この場で話していたのだ。

笑っていたのだ。今、ここで！

『もう、やだ、もうやだあっ………！』

どうしていいのか判らない。ルアは幼い子供のように頭を振りながら泣きじゃくる。大人ぶっていると言っても所詮15歳、人が目の前で死んでゆく姿を見て平気な顔を作れるはずがないのだ。濁っていくロイの瞳がこちらをじいっとみている気がして、ルアは思わずその視線に背を向けた。

息を確かめる前に、逃げるようにホールの扉を押しあける。そう、逃げたはず、逃げたはずだった。

扉の向こう。

そこに、この城の人間が招集されている。いや　人間だったものが。

ぴちゃっ

勢いよく踏み出した足が濡れた床を踏み、不気味な水音を上げる。その色が。その感触が。その臭いが。

その色が。

『よっこそ、ルア』

赤の中心、フレイムが歓迎するとても言うように腕を開き微笑んでいた。

ね、眠いので一言！

更新遅れてごめんなさい！

なんと…過去編あと一話続きます。収まりきらなかったorz

題名の通り、残酷描写が多分に含まれます。苦手な方はお気をつけ
ください。

フレ임様過去編最終話です。次回からはコメディのアリス視点に
戻ります。

死というのは。一度だけ、じっくり考えてみたことがある。

死ねば人はどうなってしまうのだろうか。

天国と呼ばれるところに行つて幸せに暮らすのか。
地獄と呼ばれるところに行つて業火に焼かれるのか。

この世に意識だけ残つてあたりを意味もなく徘徊するの

か。

動けぬまま身体の眠る極の黒だけを見つめ続けるのか。

この世のものに乗り移るのか。

この世のものに転生するのか。

死というのはつまり、“零”なのではないか。

今までどんなに経験が足されても、合計がどんなに大き
くても、小さくても、最終的にはすべて同じ。

“零”をかけた途端、すべてが等しく無に還る。

残酷なまでの平等さ。

滑稽なまでの必然さ。

死んだあとは、何も残らない。

魂でさえも。意識でさえも。生きた意味でさえも。

ただ、ぷつりとテレビを消すように消えるだけだ。

『なんでそんなところに突っ立ってるの？おいでよ、ルア』

酷く優しい声が頭を掻き乱す。いつもより掠れているその声は、泣き疲れたとでも言うようだ。

実際、彼は泣いていた。血の海の中、屍体の山の中、血に濡れた鎌を大事そうに抱きかかえて涙を流していた。

ルアはその声に誘われるようにして一步を踏み出す。途端、何か大きなものに躓いて受け身を取れないまま転倒した。

光のない眼まなこが、ルアを見上げる。

眼と眼の間にある眉間には、10センチほどの傷がパカリと口を開いていた。

『ひつ、あ、あ、ぎる、ギルバート……っ！』

ルアは恐怖で強張る身を必死で後退させ、こちらをじいっと睨みつけるギルバートから離れた。

口数の少ない意地悪庭師の額は、まるでもう一つの眼が存在するかのように綺麗に割れている。

脂ぎった顔で気持ち悪いといつもせせら笑っていた。その顔が、今ここにこうしてある。三つの眼で、こちらを恨めしそうに睨みつけている……！

『そいつは昔、母上の薔薇園に白薔薇を植えた。母上はその時許し

てあげたけど、僕は気に食わなかった。だって周りがぜんぶ赤なのに、一つだけ白なんておかしいよ』

くすりと笑う声が、今ではこんなにも遠い。

ルアは今にも掴みかかってきそうな勢いのまま息絶えている庭師と、その周りを見比べる。

或る者は喉元を掻き切られ、或る者は背中を一突きにされ、或る者は首から上がなくなり、或る者はそもそも身体すらなかった。

自分のすぐ横にも、ごろりと綺麗な切り跡を残して切り落とされた首が転がっている。

ルアは恐怖で引き攣る喉をなんとか動かしてその首の名を呟いた。

『ティオ、な、ティオナあ……』

いつもこっそりお菓子をくれたそのメイドの瞳は零れ落ちそうなほどに見開かれ、だらしなく開いた口からは長い舌が覗いていた。

女の人を爬虫類みたいで気持ち悪いと思ったのはこれが初めてだったかもしれない。

声をあげて泣き始めるルアを見て、フレイムは高らかに嘲笑った。

『ティオナは城内での異性間不純行為。そういうのは禁止されてるんだよねえ』

『っ……！そ、そんな掟きまりありません！たったそれだけでこんな……』
『掟きまりならあるよ。僕が作った』

こっつ　こっつ　こっつ

フレイムの硬い靴が床を叩く音がする。ルアは身動き一つできずに、その無邪気に笑う濡れた瞳を凝視していた。

今すぐここから逃げ出したい。悲鳴をあげて、泣きながら、この化

け物から遠くへ遠くへ離れたい。

なのに、何故足は動かない。腕は何故彼の頬へと伸ばされようとしている。一步一步確実に近づいてくる彼を抱きしめようとしている。

そう、フレイムは泣いていた。血に濡れた笑顔を張りつけながら、泣いていた。

彼が泣くのなら、僕はそれを拭ってあげないと。

『ロイは一度僕の食事を10分遅れて持ってきたから。エリザベスは城の薔薇を間違っつて捨てたから。エレミイは照明を3つ落として割ったから。ウィルは兄さんの剣術稽古の時に怪我をさせたから。パトリックは部屋の壁紙を間違えて張り替えたから。ルークは皿洗いの時に僕の皿を割ったから。マイクは姉さんたちと一緒にになってブレイズの悪口を言っつてたから。ローズは三番目の姉さんと同じ名前だから。だから、全員死罪！』

ばつと、何が楽しいのか両腕を目一杯広げて天を仰ぐ。今にも小躍りしそうなほどのはしゃぎっぷりだった。

ルアは可笑しそうに腹を抱えて笑うフレイムを何か知らないものでも見るような目で見つめる。

フレイムもその視線に気づいたらしく、途端に不満そうな顔になると乱暴な手つきでルアの髪を掴みあげた。

小さな身体だというのにどこにそんな力があるのか、ルアの上半身は簡単に浮かび上がる。

ぎちりぎちりと髪の毛の付け根が痛ましげに悲鳴を上げた。

『ねえ、何が可笑しいの？だつて掟にそう定まっているんだよ。僕が決めたんだ。だからこれは正当な行為、そうだよな？』

『い、う、うああっ、くっ、ち、ちが、う……っ』

『なにが違うの。罪を犯したものを殺して、何が悪いの。悪い奴ら

なんて全員消しちゃえばいい』

イライラとした口調で怒鳴りながらフレームは無造作に手を放した。突然支えを失った頭は当然、床へと落下する。バシヤリと血飛沫を上げてルアは血だまりの中に顔を沈めた。

むわりとした特有の臭いが鼻をつくが、濃厚すぎて最早何が何だか分からない。指の先から感覚を失っていくようで怖かった。

『違、う。そんなのおかしい、皆、殺されていい理由なんかないんです……っ！』

『理由？そんなもの、僕が作るよ。どんな些細で馬鹿らしいことも、僕が罪へと変えてあげる！だって僕は “女王” だから！』

そう、これが“女王”のカードの特権。この国の司法権と内政権はすべて“女王”のものなのだ。だから気に食わない奴を独断で処罰できるし、周りからも何の批判もされない。

“女王”のカードを奪えばどんなこともできる、と王女の一人が目を輝かせて語っていたのを思い出す。

だから“女王”のカードが欲しいのだと。あれさえ手に入れば必ず幸せになれると。

なら、なぜ貴方は泣いてるんですか……？

こんなものを奪い合っていたのか。

こんなものの為に失ったのか。

ルアは精一杯の反抗を込めて、フレームを下から睨みつけた。背筋が凍てつきそうな冷たい視線に怯みそうになるが、必死で耐える。

『僕は……っ！絶対に貴方には従わないっ！こんな結末を望んでブラッド様は死んだんじゃない！』

それに、女王さまも。

小さな笑みを残したまま冷たくなった彼女の顔が脳裏に蘇る。

ブラッドも、女王も。二人とも、フレイムに生きて　　幸せになつてもらいたかつたはずなのだ。笑つて、ほしかつたはずなのだ。フレイムは一瞬その瞳を大きくしたが、ルアの横腹を小突くようにして蹴りあげるとくだらないとでも言いたげに鼻を鳴らした。

『従わない？君、自分がどういう立場か判つてる？君は“白ウサギ”、僕は“女王”だ。ねえ、厨房に女がバラバラになつて死んでたんだって？』

ひやりと。首筋に冷たいものが宛がわれる。ルアはなるべく動かないようにそれを目だけで追つた。

赤色に染められていて、始めは何かわからなかったが……それは、鎌の刃だ。何人も血を吸つたそれはざらりと持ち主の狂気をそのまま表して光っている。

かつての女王が持っていたもの。それを、こんなにも無造作にフレイムが使っている。それがどうしようもなく悲しくて悔しかった。

『あれが誰か、ルアはわからないの？』

『……？それ、は、どういう意味です？』

意味ありげな含み笑いに、ルアは眉をひそめてフレイムを見上げる。厨房で爆発していた死体はロイが言っていた通り、とても身元がわかる状態ではなかった。そもそも体の部分が木っ端微塵に砕け散っていたのだ、頭蓋骨はもちろん、小さい心臓さえ原形をとどめていないだろう。

フレイムの顔が、愉悦に歪む。ぞわりと、嫌な悪寒が背筋を張った。

そういえば、メアリアンはどこにいる？

『メ、アリ、アン』

くつくつと人を馬鹿にしたような笑い声を上げるフレ임을無視してルアはきよるきよるとあたりを見渡した。

眼をそらしたくなるほど鮮やかな赤も、酸素に触れて黒へと変わってきていた。血の臭いに酔いながらも、なんとか立ち上がる。

城中の人間がここに召集されているなら、きっと彼女もここにいるはずだ。そもそも女王崩御を報告してきたのはメアリアンじゃないか。その後に厨房に還る可能性は極めて低い。

もっともらしい理由をつけて考えを否定しようとするが、一度生じた不安はそう簡単に拭いきれるものではなかった。

ルアはどくどくと気持ち悪いほどに高くなる胸を抑えながら一歩一歩を踏み出す。

『メアリアン、返事をしろ』

いつも快活に挨拶を返してくれる彼女。気を遣って美味しい紅茶をいれてくれる彼女。少し褒めただけではにかんだような笑顔を見せた彼女。

“アリス”とは違う意味で好きだったのかもしれない。だとしたら、これはルアの初恋だ。

彼女の名前を声が続く限り連呼する。泣き叫びすぎて喉や瞼がひりひりと痛い。

五回目の絶叫の末、ようやく微かな答えを聞いた。ルアはつまらなそうに舌打ちをするフレ임을尻目に夢中でそちらの方に走り出す。

赤く染めあげられた床に蹲っていたのは、メアリアンではなかった。ガタガタと恐怖で震えている彼の肩をそっとさする。

本当は人を宥めるほど自分も平静じゃない。しかし、今はどんな人の温もりでも恋しかった。

『ルーク、ルークなんだな?! よかった、無事だった……怪我は何をされた?!』

『い、いえ、僕は何も……で、でもメアリアンさんがあ……っ』

料理人見習いのルークがべそべそと泣き始める。まだ12歳という若さだ、こんな状況のなか平静さを装うというのも無理な話だろう。ルークの隣には、メイド見習いのエレミイが倒れていた。首筋に手を当てて脈を確かめるまでもない、胴体を真つ二つに引き裂かれ、確実に死んでいる。

こんなところに一人で不安だっただろう。泣きじゃくるルークの頭を優しく撫でながら近づいてくるフレイムをきつく睨みつけた。

『メアリアンはどこです』

フレイムは押し黙ったまま何も答えようとしない。その口元からは先程浮かんでいた笑みは消えていた。

怖いほど綺麗な紅玉ルビの瞳に睨みつけられて、腕の中でルークがびくりと大きく震える。

裾を握りしめる小さな手が、どうしようもないほどの恐怖をつたえていた。ルアが安心させるように彼の身体を抱きしめると、フレイムの顔が醜く歪んだ。

『メアリアンはどこだと聞いているんです!』

『3つ数える間にルアから離れる、ルーク』

返ってきたのは、答えではなく命令。突然の出来事にルークは戸惑ったようにフレイムを見、ルアを見た。

わけがわからない。どうしてメアリアンの話をしてるのにルークへの命令が出てくるのだ。

ルアとルークが困惑している間にもフレイムは静かな声で「1……2……」と数え始める。

さん、と呟く直前、ルアは頭のどこかでいやな警鐘を感じルークを引き剥がそうとした。しかしルークの手がまだ裾を掴んでいる。

3つ数える前に離れなかったら…… “ルール違反”？

『ルーク、離れ……っ』

『さん』

カチリ。

それは、時限爆弾がカウントダウンを終えたような音。あるいは秒針が大きく一針動いたような音。

確かに、乾いた音がルークの胸から聞こえたのだ。

次の瞬間、その胸は爆発した。 いや、反転した。

内部が外部に、外部が内部に。それは例えれば袋をひっくり返すような単純作業で、内部のものが床にばらまかれた。

心臓も、腸も、肺も、胃も、能も、眼球も、皮膚も、ありとあらゆるものが反転してルアの腕の中に墮ちる。

『あ、あ、あっ……あ』

掌に残るぐにやりとした感触。ついさっき見たばかりの赤とピンクの肉片。頭から被ったおびただしい量の赤。悲鳴も出せずに、死んでいったルーク。

視界の端で、くすりと彼が笑った。

『ああああああああああっっっ』

ルークの代わりとでも言うように、ルアの口から断末魔に近い絶叫が溢れてきた。

血でぬめる掌を恐る恐る動かして、あちこちに飛び散った“ルーク”をかき集める。そうしてやれば、ルークが元に戻るとでも言うのだろうか。

しかし周りの“ルーク”を必死で集めても原形はおろか、幼児が作っては壊す山すらできなかつた。パーツすら、バラバラになつてる。こんな状態で誰がこれをあの明るいルークだつてわかるだろう。

ルアは止めどめなく流れる涙を先程ルークが握っていた裾で拭いながら、集めた肉片をもう片方の腕で払い落した。

べちゃりと気味の悪い音に重なつて、フレイムの笑い声が部屋に響く。

『ははっ、あはははは！だつてこの子がいけないんでしょ？せつかくルアの絶望した顔を見れると思つたのにさあ、こんなにあっさりネタばらししちゃうなんて！ねえ、命令に従わなかつたらこうなるんだよ？こんなミンチにされたいの、ねえ！』

最早、何も言えなかつた。ただ呆然と「従わなかつた」者の末路を見つめる。ぼろりと涙があふれたのを最後に、掌に残っていた肉片を握りつぶした。

貴方には従わない、と。自分で言った言葉がどんなにちっぽけで無意味で安っぽいものなのかを突きつけられる。

“女王”の下にいる限り、その従属は宿命的。蜘蛛の糸のように絡みついてすべてを縛りあげる。無理矢理にでも逃れようというのな

らば 翅は引き千切れて蝶は地に墮ちるのだろっ。

疲れ果てた頭の奥底に、フレイムの甘い囁きが入ってくる。
おいでよ。そう言っただけで差し出された手も、もうよくわからない。すべてがぼやけて見える。

血に酔ったか。失うことの悲しみに酔ったか。 そうして
僕は、また逃げるのか。

『行こう、メアリアンの所へ』

たとえその先が光の見えない奈落だとしても、迫りくる破滅の影から逃れるには墮ちるしかないんだ ……

『ルア様！来て下さったのですね！』

『ルア様……ルア様だ……』

『う、うわあああああっ！』

40畳ぐらいの小ぢんまりとした部屋に入った時の反応は様々だった。ざっと数えたところ20人ぐらいの知人がルアの顔を見ては明るくなったり暗くなったり、もしくは最初からフレイムに視線を奪われてルアのことなど眼中に入っていない者もいた。

ルアはそんな人々の視線にさらされながら、フレイムに押されるようにして部屋にはいる。

一番近くにいたのはメイド頭のエリザベスだった。中年太りした身体をゆさゆさと揺らしてルアの足もとにひれ伏す。

『ルア様、よくぞご無事で……っ！』

“女王”の前なのに他の男に頭を下げる。その愚直な行為に思わず背筋が冷えちらりとフレイムの方を覗き見るが、幸い機嫌は損ねてないようだ。

安堵で泣きだす彼女の肩を支えて慌てて顔を上げさせた。この調子だと他の者も頭を下げるかもしれない。そうしたらさすがにフレイムもつまらなく思うだろう。

『エリザベス、他の者はどうした』

目だけで「やめておけ」と伝えるとさすがにメイドたちの長である判断力の高いエリザベスは小さく頷いて了承してみせる。

彼女とその周りにいた者たちの瞳が、悲しそうに揺れた。嫌な予感がするが、まさか……。

『ここにいる者たちが全員です。他の者は皆』

『僕が殺した』

気まずげに口ごもったエリザベスの言葉を、フレイムが引き継いだ。一瞬、憎しみの光がその場の全員の瞳に宿る。

ルア自身今すぐにも隣で笑うこの餓鬼を引き裂いてやりたくて仕方なかったが、ぐっと我慢し一番聞きたかったことを口にした。

『メアリアンはどこにいるんです』

『そんなにあの女に会いたいかねえ……ほら、そこにいるだろ？』

フレイムの視線の先　確かに、いた。ルアは刺激しないようにそっと部屋の片隅に蹲る彼女のもとへ近づく。

引き裂かれたメイド服が見るにはあまりに痛々しい。斬りつけられはしなかったものも、暴行は受けたようだ。頬は真っ赤に腫れていた。

ルアは上着を脱ぐと、膝に顔を埋めたまま反応しない彼女の肩にかけた。本来だったらもっと何かしないといけないのだが、殺されなかっただけでも良しとしなければいけない。

『メアリアン、僕です。わかりますか？』

そつと、優しい敬語口調で話しかける。メアリアンは押し黙ったままピクリとも動かなかった。

ずっと彼女に付き添っていたらしいローズがおずおずと口を挟んでくる。

『あの、その子、ずっとそうしてるんです。その子の前でウィル様が殺されましたから……きつとショックだったのでしょう』

『そうか、ウィルが……仲が良かっただけ余計につらいだろうな。』

……ローズ、付き添っててくれてありがとう』

『いえいえいえ！そ、そんなことよりもこの子、この緊急事態なのに……っ』

ローズが何かを言い終わる前に、すつと白い腕がルアの顔の横を通ってメアリアンの胸倉を掴みあげた。

フレイムは不満げな顔で虚ろな彼女の瞳を睨みつけると、そのまま軽々しく持ち上げる。はらりと、かけたばかりの上着がメアリアンの肩から舞い落ちた。

『何だ、つまらない。こいつの泣き喚く顔期待してたんだけど、なあっ……』

張り裂くような音が部屋の中に鳴り響いた。思わず耳を押さえたルアは、片目でフレームの方を見る。フレームは平手を上にあげたままメアリアンの様子を窺っていた。思い切り平手打ちをしたのだと、遅いながらも気付く。

『……ダメ、か。つかえない奴』

呆然とするルア達の前で、興味をそがれたようにフレームが手を放した。

支えを失って倒れ込もうとするメアリアンの身体を慌ててローズが抱きとめる。可哀想に彼女の頬は服についた血と同じ色に染まっていた。

それでもメアリアンは虚ろな瞳を天井へと向けている。

『ほら、ルア』

何も言うことができないルアを尻目にフレームが何かを探すように部屋を見渡し、目当ての物をルアに投げてよこした。キヤッチした時に腕にのしかかる、妙な重圧。細い、装飾された、これは……。

『け、剣？』

『そ。一応“女王決定戦”^{コロシアム}の時に使ったものだけど、どう？重い？』

『は、はい……かなり』

とても10歳かそこらの子供が扱えそうなものではなかった。ルアはそれを何度か上下に動かし、自分の筋力の無さを改めて実感する。渋い顔をするルアを見てフレームは楽しそうに笑っていたが、不意にその笑みを嘲笑に変えた。

『ルア、命令だ。それでメアリアンを斬れ』

刹那。緊張がその部屋を駆け巡った。

不安げに剣を見ていたルアも、メアリアンを正気に戻そうと奮闘していたローズも、声を殺して泣いていたメイドも、反撃のチャンスを探っていた兵士も、一斉にフレイムへと視線を向ける。

メアリアンを、斬る？……僕が？

言葉の意味がわからなくて言葉を失うルアをフレイムは蔑んだ目で睨みつける。そんな目をしていながらも、口元は優しく微笑んでいた。

『まだわかんないの？こいつらを主食にディッシュ残したのはね、君に殺させるため。ルア、君には僕と同じ人殺しになってもらうよ』

僕は狂っているんだ。だからルア、君も一緒に狂ってよ。

フレイムの甘い囁きが頭の中に直接入ってきて、思考を侵していく。油断していると流れに任せて頷いてしまいそうになるほど、危険で魅力的な誘い。

剣を握る手が離れないのは、あの日自分が「フレイム様と一緒に堕ちる」と決めたからだろうか。

あの時の決心を覆す気はない。だが、本当にこんな物でナルシ彼は、幸せになるのか。

人、殺し。この世界では当たり前前当たり前と囁かれている言葉が、やけに重く胸に響いた。

本当は頭の片隅でわかっている。人を殺して平気な人間など存在しない。何も感じない殺人鬼でも、必ず引き金があるのだ。

それは、フレイムにとっての家族なのかもしれない。イオにとっての母親なのかもしれない。

そして自分は 部下を殺して、殺人鬼になりあがるのか。

『さあ、血祭りだ！』

嬉しそうにフレイムが言う。彼の言葉に、ルアはどうしても逆らえなかった。そんなことをすればルークの二の舞だ。あんなものを見せつけられた後で、果たして逆らおうとする人間がいるのか。震える剣先を慎重にメアリアンの鼻先へと狙い定め、剣を力いっぱい振り上げる。

ああ、重い。

これが、人の命か。

『やめてえっ！！』

突然腹回りに衝撃を感じ、ルアは押し倒されるまま後方へと傾いた。当然軌跡を外れた剣は弧を描いて床へと落ちる。ルアを止めたのはメアリアンでもなく、もちろんフレイムでもなく、彼女の親友であったローズだった。悲しみと憎しみがごちゃまぜになったパープルの瞳でルアのことを睨みつける。

『こんな……あまりに酷い仕打ちですわ！メアリがどんなにルア様のことを好きだったかお分かりになりました？！毎日精を尽くして頑張っていたのに、殺そうとするなんてあま』

ぷつつと、ラジオが途切れるようにローズの言葉は途切れた。一拍遅れて、睨みつけていた兩岸とまくし立てていた口との間にうつすらと赤い線ができる。

『……ローズ？』

不審に思ったルアが少し身じろぎをした、その瞬間。

ぱっくりと開いた顔の上半分がバランスを失って下半分からずり落ちた。ごとりと、脳の入ったほうの床に落ちる。

悲鳴すらも、喉を突かなかつた。ただ呆然と、傾いてゆくローズの“残り全部”を見つめる。

ローズの顔を横半分にはり落としたフレイムは不愉快気に死体を睨みつけながら、血のべつとり付いた鎌を薙いだ。

『邪魔をする者はこういう目に合う。ルアに大人しく殺されたほうが痛くないと思うんだけどね』

ごくりと、全員が固唾をのむ音が聞こえた。なにしろ自分の命がかかっているのだ、全員ルアを排除する気満々だったのだろう。

その部屋の残り16名全員から殺気が消えたことを確認して、次はルアの顔を見ながら鎌を持ち上げた。

となりにいた男の首筋にそつとあてがう。男が小さな悲鳴を上げたが、それすらも耳に入っていないようだ。

『ルアも、注意して。こいつらは“主食”^{メインメニュー}であると同時に人質だ。さつさと殺さないと、一人ずつ首を刈り取って行く。いいね？』

ルアは再び剣を握って頷いた。

一度迷いを生んだ剣は、先程のよりも数段に重い。持ち上げるまでに数十秒はかかった。

やめる、と頭の中で警鐘が鳴り響く。お前は自分の部下を殺す気が、と。

……そうだ。僕は、メアリアンを殺そうとしているんだ。甲斐甲斐しく世話をしてくれた、優しいメアリアンを。

掛け替えのない部下、そして初恋の人を。

『……………つう』

腕が、震える。潔く殺してやった方がメアリアンも痛がらずに済むというのに、決心は揺らいだままだ。

ぼんやりと見上げられた彼女の蒼い瞳は、自分を捕らえることはいだろう。呆然自失としていて意識がどこか虚ろな時に殺せば、痛くないはず。

そう、これが一番いい方法。

『メ、アリ』

なのになんでこんなに、苦しい。

ポタリと、ルアの瞳からこぼれだした雨粒がメアリアンの頬へと落ちた。冷たい感覚に意識が覚醒したのか、一瞬だけその瞳に光が戻る。

メアリアンの青色が、ルアの青色を捕らえ。

いつも通り、なのにこれ以上ないほど幸せそうに笑い。

剣が、振り下ろされる。

『ルア様』

すべてを諦めたのか、それともすべてを知る余裕がなかったのか、メアリアンは幸せそうな笑顔のまま血の海に倒れた。

『うーん、5人も舌を噛み切って自殺、か。大誤算だったな』

フレイルムが血にまみれて使い物にならなくなった鎌を処分しながら、機嫌の良さそうな声で呟く。

対するルアは肩で息をしながら、メアリアンの屍体をきつく抱きしめていた。そのぬくもりは完全に消え去り、もはやそこには魂の欠片すらないのだと思い知らされる。

死とは、なんだろう。漠然とそんなことを考えはじめると自分が滑稽で仕方がない。

今更どんなに後悔したって、メアリアンが再び笑いかけてくれるはずがないのに。

周りには自分が“料理”した死体の数々。メアリアンを葬った後はすんなりと殺せていた自分が怖かった。

最後の人間を殺すときは、何の感情も覚えず、ただ命令に従うだけの操人形^{マリオネット}として剣を振り下ろしていたのだ。

変わっていく自分が怖い。今だったらあれだけ躊躇ったメアリアンでさえも簡単に斬り殺せてしまうような気がして、怖い。

ああ、本当に僕は　貴方と同じ、殺人鬼になってしまった……。

『どっつ？今の気分は』

『……………最悪です』

吐き捨てるように言うと、案の定フレイルムは楽しそうな笑い声を上げた。

『僕は最高の気分だよ。ねえ、一人になったよ、ルア』

くるり　くるり

なにがおかしいのか、くすくすと一人で笑いながらフレイムは小躍りし始める。

ルアはそれを憎々しげに見ながら、メアリアンを床に寝かせた。こんな死体だらけの部屋で踊るなんて、場違いすぎる。

立ち上がり、フレイムの腕を掴んで止めようとした。しかし細い腕を掴む前にフレイムに抱きつかれ、ほんの少しバランスを崩す。

『な、何をするんですか！離れなさい！』

『ねえ』

必死に引き剥がそうとするルアを見上げて、もう一度フレイムが囁く。

その紅玉の瞳が一瞬不気味に光り、ポロリと一粒、滴があふれ出した。

それは一抹の後悔の涙なのか。それとも。

『僕を知る者は一人になったんだ』

だからずっと、傍にいて。

僕を理解して。

頭を撫でて。

ずっとずっと、ずっと。

僕と遊ぼう？

大好きな友達と、面白い玩具が白い部屋にありました。

僕も友達も、その玩具がだあいすき。

二人とも、その玩具にのめり込みました。

でも僕は、或る日気付いたのです。

いつも遊んでくれていた友達は玩具に夢中で僕の方をちつとも見てくれません。

いくら気を引こうとしても、玩具の方へ関心が向いてしまいません。

僕は、もう玩具なんかに興味はありません。

友達と一緒に、遊びたいのです。

だから僕は、部屋中の玩具をぜえんぶ壊しちゃいました。

友達は泣きました。

友達は怒りました。

友達は嫌いました。

でも友達には、僕しかいないのです。

だから僕は、気長に待ちます。

友達が遊ぼうって言うてくれるのを、ずうっと待つのです。

玩具なんかに気を取られないで、僕と遊んでくれるのを、

ずいずいずい。

白い部屋に僕と君。他の玩具ガラクタなんて、要らな

いだらじい？

こんにちは、大晦日ですね！今年は本当に何もやんなかったなあとしみじみ思います。受験の日々が懐かしい……（・・・メ）

更新日が一日遅れたのはこのポンコツパソコンのせいです……せつかく完成したのにインターネットが開けませんでした。

次回の更新日はその代わり一日早く1月2日にしようと思います！さあ、頑張らないとな……。

さてさてさて、フレイム様ヤンデレ発動 の過去編がようやく終わりました。

この頃暗い話しか書いてないなあ……少しコメディも入れませんかね（・・・）

この過去編により、ルアとフレイムの中は非常にぎくしゃくしたものに変わります。お互いを嫌いといい合うのもこの頃からです。

また、メアリアン殺害によりルア君は人を殺すことに抵抗がなくなります。

本文でも出てきたとおり、アリ幕のキャラ達は人を躊躇いなく殺す男が多いですが、それには必ず「はじめ」があるのです。

イオでは母親。

フレイムでは家族（強いて言えば兄と母）。

ルアでは部下。

一番大事な者たちをその手で奪うことによって、他人を殺めることに対しての抵抗が薄れていきます。

てな感じで書いてみましたけど、よい子は決して真似してはいけません（・・・）

フレイム様の心情は最後の段落にまとめましたが、見ての通り子供

です。どんなに偉そうなことを言ったって、所詮は12歳の子供なのです。

母親の関心を手に入れられず、関心を向けてくれた兄達はもういなく、そのうエルアの関心さえ失うと思うと……。って感じですかね。独占欲は人一倍です。

なお、メアリアン、ロイ、ギルバート、ティオナ、ルーク、エリザベス、ローズ等の名前は一切覚えなくていいです。

名前を出していくのが大変でしたけど、今後一切登場しません。

ああ、でも実際「メアリアン」は「白ウサギのメイド」として原作に登場するみたいなのです。

なんだかこの女がフレイムの引き金を引いた感じなのですが……。可愛いから許す

次回からは突然現代に戻ります！番外編にも登場していた、不定期に開催される「パーティー編」です。

城が舞台なのでどうしても最初はルアアリになりますが、途中でロキくんを登場させるつもりです！

ロキアリ……。本編で出るのは久しぶりというかなんと……。放置しすぎでしたね、すみません。

ええつと、それから。

祝 総合PVアクセス19万突破！

祝 総合ユニークアクセス2万突破！

それでは、よいお年を〜(〃。ー。〃)ノ

パタンと扉を閉めた瞬間、体中を疲労が襲った。思わずそこに蹲り息を整えたくなるが、生憎自分にそんな暇はない。

ルアは軋む体の関節を一通り鳴らし終えると、アリスを残した部屋のドアを見つめた。

動乱していたアリスに鎮静剤を打つようダムに指示しておいたから、その副作用ですぐに眠気が襲うだろう。

虐殺のことについては詳しく触れなかったが　もう、十分だろう。アリスには何一つ関係のない話だ。

これは、ルアとフレイムの問題なのだから。

「さて、と。あの餓鬼は今ごろ何をやっているやら……」

イオの方ももう問題ないだろうし、あとはずっと放置していたフレイムの件を始末しなければ。あの唯我独尊我が儘女王は少しでも気に食わないことがあると暴走するから面倒だ。そういいながらどんな業務よりも優先してしまう自分もどうかと思うのだが……。

「甘やかし過ぎ、ですかねえ　あれ？」

ちらりと廊下の先に赤い髪が見え、ルアは思わず目をこすった。この城で赤い髪と言ったらフレイム一人しかいない。慌てて追いかける。

「フレイム様、待って下さい」

城の人間を起こさないように小声で呼びかけるが、フレイムは振り向こうとしなかった。

この位置からだったら十分声は届くはずだ。だとしたら、故意に無視してる……？

「フレイム様！」

わずかに声を高めて呼ぶが、振り返らない。カチンときたルアは足早に彼の背中に近づいた。

左腕を掴んでこちらへと振り向かせる。拗ねているとは思っていたが、無視されるのは心外だ。

「ちゃんと僕の話を聞

ズクン

言葉が不自然に途切れた。じわりと緩やかな熱が右手を中心に広がっていく。

ルアは呆然と自分の右手を見た。イオにナイフを突き立てられた右手に、キラリと銀色に光るものが見える。閉じてもない傷を無理矢理広げるように貫通させられた、小さなナイフ。

麻酔が塗られていたのか、痛みはほとんど感じなかった。かわりに固い異物感だけありありと感じる。

振り向きざまにナイフを突き立てたフレイムは泣きだしそんな顔で笑うと、ナイフの柄を持ったままポケットからハンカチを取り出した。

「ごめん、ね。本当はこんなつもりじゃなかったんだ。どうすればいいか、わかんなくなっちゃって。あまりにも君があのアリスにご

執心だから、さ……」

「……………れ、いむ、さ……………」

フレイムの小さな手が頬にあてられる。彼が何をやるうとしているか、大体察しがついてしまった。

いやいやと駄々をこねる子供ののように首を振る。しかし必死の抵抗も虚しく、フレイムはルアの口にハンカチを押しあてた。

甘い香りが灰の中を満たし、頭を浸食していく。自分も暗殺のため何度も使ったことのある、トゥーイドル特製即効性睡眠薬だ。

逃げようとしても、手に突き刺さったナイフが邪魔で動けない。しだいに強力な薬が意識に霞をかけていった。

「あり、す」

ルアは最後の力を振り絞ってフレイムの身体を突き飛ばし、彼から離れる。

視力が深い闇へと落ちていく中、一人の少女だけが気がかりだった。彼女の名前を何度も呟きながら、一歩下がった　　つもりだったが。

ばたりと、大きな何かが床に落ちる音が耳に残る。それが自分自身の身体が倒れた音だと気付くには数秒を要した。

思考能力は下降していく一方だというのに、視界はやけに鮮明だ。

そんな視界の端で、フレイムの顔がくしゃりと歪む。

それが泣き顔だったのか、それとも満面の笑みだったのか今となってはもうわからない。

「ルアも、こっち側に来てよ」

すべての抵抗をせせら笑うように、もう一度ハンカチが口にあてら

れる。

とてもいい香り。これは確か、そう　　アリスの世界で菖蒲アヤメと呼ばれるもの。

ルアは深く息をつき、身体から力を抜いた。ごめんなさい。結局最後までは守れなかった少女に向けて謝罪の言葉をこぼす。

『僕に、守らせてください』

半分アリスの気を惹きたくて、半分本気で言った言葉だった。守れると、信じて疑わなかった。それゆえ口から出た言葉。意識が闇へと吞まれる寸前、震える手をアリスが眠る部屋へと伸ばす。

その手が掴んだものはもちろんアリスの手などではなく、虚しく広がる虚空だけだった。

さあ、君を守る騎士ナイトが一つ倒された。

突然だが、全国の恋する乙女たちにアンケートを取りたい。

朝目が覚めたら、超美形猫耳青年年齢およそ20歳ぐらいがあどけない寝顔を見せていました。貴女ならどうしますか？

選択肢1。とりあえずはっ倒す。

選択肢2。ブルドーザーにかける。

選択肢3。バリカンを持ってくる。

選択肢4。高値で売り飛ばす。

選択肢5。杏仁豆腐を食べる。

「……………」

私は肌蹴た毛布を直すこともできずに固まっていた。朝の冷気が地肌を撫でてひりひりと痛む。

しかし比べようにもならないほど、頭が痛かった。

美形や美人は目の保養というが、何事にも程度というものがある。あまりにも自分とかけ離れていると劣等感やら嫉妬やらが付きまってくる面倒なのだ。

いや、それは置いといて。そんな理由で私の頭が痛んでいるのではないということは明白だった。

では何か。簡単だ。

(近づ！)

規則正しい寝息が首筋にかかるほど。ツンツンはねた黒髪が頬をくすぐるほど。ピクリと動く猫耳がドアップに見えるほど。お互いの

脈拍数がわかってしまうほど。

端的に言えば、近かった。もつと言えばかなり近かった。比喻を交えれば死ぬほど近かった。

ばたんと壊れそうな音を立ててドアが開かれる。もつとドアを大切に扱おう。

「姫さまー、おっはよー！よく眠れた？朝ご飯もうできてるよー！」

「あっ、そうそう。黒ちゃん運ぶのめんどくさかったからここに放置しといたんだけどさ、襲われてない、よ……ね……」

朝からド派手に静寂を破りながら入ってきたダムとディーは笑顔のままピシリと固まった。

うっかり破いてしまった静寂を慌てて補修していくように扉が閉められる。

「うん、まあいいいたい事はわかるよ？わかるけどさあ！せめて一言くらいフオーしろよ！黒ちゃんってなんだよ！黙るなよ！」

いやしかし。黙ってくれた方がましだとしみじみ思ったのはドア越しの会話を聞いてからだだった。

「なあディー……あいつら二人にして大丈夫だったのかよ」

「えー、だってさ、黒ちゃんにもチャンスあげようよ。可哀想じゃん」

「さっすがディー！優しいな！」

「でも気になるねー。ね、ね。こっそり覗いちゃおっか？」

「だ、駄目だ！俺らには刺激の強すぎるもん見ちゃったらどうすんだよー！」

「……もしかして年齢制限とか気にしちゃってる？今更何言ってるのさ！窃盗強盗殺人人身売買その他諸々ずっと前からやってきたで

「しよ？」

「いや、うんまあそうだけどさ……」

「だったら大丈夫だって！神様も諦めてくれるよ」

「そうかも……しんないけどさあ」

「ね、ね？ちよつとだけだからさ！」

この部屋防音にしゃがれ畜生。

背徳感からかいつまでも渋るダムとダムよりも一步大人の階段を上っているデイーの会話を聞きながら、じりじりと後ろへ下がった。

とりあえずこの状況から抜け出してあの双子を宇宙の彼方へふっ飛ばさなければ。ロキの処分はとりあえず後だ。

しかし神の野郎はどこまでも頭が腐っていやがった。

「ん……あ……？」

さすがの騒音に目が覚めたのか、黒ちゃんことロキはほんの少し眉をしかめながらうつすら目を開ける。

寝ぼけ眼にびくびくと動く猫耳。悩殺と言っているほどの可愛さだ。もうちよつと離れていたら出血多量で倒れていただろう。

うん、可愛い。もうほんと可愛い。ブルドーザーとかバリカンとか杏仁豆腐とか全部どうでもよくなってしまっぐらい可愛いよ。

可愛いですめばいいものを、クズめ。

「おは、よ……」

何を血迷ったか、ロキはへらつとらしくない笑みを見せると私の腰に腕を回して抱きよせてきた。

城中に怒り狂った少女の絶叫と頬の張り飛ばされる音が聞こえたの

は次の瞬間のこと。

「よし、大体事情はわかった」

午前10時。朝食を済ませ終わった私とロキ、ついでにディーとダムは女王謁見室で膝を突き合わせて会話をしていた。朝4時から起きて業務をやっているというフレームに呼び出されて招集されたのだが、肝心のフレームがまだ来ていない。珍しい事にいつもくっついてくるルアも姿を見せなかった。

「アリスがそこにいる双子に連れ去られたことも……………まあこれは俺も当事者だしな」

「うん」

「その件はごめんなー、黒ちゃん」

「今度また手合わせしようよ、黒ちゃん」

「……………いつの間に俺のあだ名が黒ちゃんになったのかは知らんが、話がややこしくなるから置いといて。で、その後イオが双子と勝負し、見事勝利して城滞在権を得た、と」

「うん、そんな感じ」

「いやー、その件もごめんなー。たぶんいろんなところ切りつけてると思うぜ」

「手加減できなかったんだよねー。黒ちゃんならともかく、先輩だったから」

「……………ほんっとムカつく言い方だけど納得できるからいい。で、勝つたは良いけどイオがその後瀕死の状態になったと」

「うん、ほんと心配だったんだから！」

「いやー、その件もごめんなー。毒のつもりで使ったつもりじゃなかったんだけどさ」

「ま、解毒したのも僕らだしそれでお合いこってことでいいんじゃない？」

「……もう謝んなくていい。で、わかんねえのはさ　　何で俺、殴られてんだ？」

不機嫌そうに呟くロキの頬は見るのも痛ましいほどに赤く腫れあがっていた。

ついさつき自分が渾身の力を込めてひっぱたいた頬を見ると、少しだけ罪悪感がわいてくる。

うん、でも悪いのは寝ぼけて抱きついてきたロキだし。

「そうそう、しかも何で俺らまでゲンコツなんだよ姫さま！痣になつてんだからな！」

「もうほんと痛かったんだからね！ああ……たんこぶが……っ、どうしてくれるのさ！」

両脇でぶーぶー双子が文句を言うが、こちらは綺麗に無視した。

朝から廊下でギヤーギヤーうるさかった件、しかもその話題が下品かつ卑猥なものだった件、その他諸々城中の迷惑を含めて殴ってやった。痣もたんこぶもできるというものだ。

ロキと双子、大の男3人に責められようが睨まれようが頑として私は謝らなかつた。

朝食の後親切にもロキが渡してくれたオレンジジュースに口をつけながら苛々と会話をつづける双子を見る。

ああ、このへんちくりんな世界に落とされて早3日目。なんだかん

だ言いながらもこの世界に慣れ始めてきた。
ほら、こうしてみるとこのブラコン兄弟も可愛く思えて……。

「ちっ……大体さあ、黒ちゃんもそのままなし崩しに姫さまと寝ちやえばよかつたんだよ！」

「ブフーツ！」

盛大に吹いた。

口内に含まれていた橙色の液体が爆弾を落としたディーとは逆側のダムへと容赦なく降り注ぐ。その飛沫がロキにも少しかかった。

ロキはロキで今の発言を聞いた途端氷になって動かなくなってしまうっている。うん、この純情な子には荷が重すぎたよ。

「な、何すんのさ姫さま！お、俺の服びしょびしょじゃん……っ。
つか沁みる！オレンジ目に沁みる！」

隣でダムが「目が、目があー！（ムス力的な感じで）」なんて騒いでいたけどとりあえず放置しておいた。後で目薬を探しとこう……。
いやそれよりも！

私は床から立ち上がるとディーの胸倉を掴んだ。でかいのに存外に軽い。

ディーは私とダムの反応がっぱに入ったらしく、一人肩を震わせて笑っている。地獄に落ちてしまえ。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……っ！！他人事だと思っただけ好き勝手言いやがって！よく考えなさいよ、犯罪よ犯罪！」

「えー、大丈夫だつて。この世界では」

「私の世界では駄目なの！っか恥ずかしくないわけ？！だってあんたまだ15でしょ？」

「うん、姫さまより年下。だからいじめちゃーだあ！」

デューはわざとらしく目を潤ませてから私の手を振りほどき、ダムの後ろへと隠れた。

な、な、な、何が「ヤーだあ」だ！つかマジそれに萌えちゃってる私力エレ！

デューはしてやったりと笑いながら、オレンジにまみれて涙目になっているダムの方の世話をした。甲斐甲斐しくタオルを持ち出して顔を吹く様子は、明らかに兄と弟が逆転している。

私は再びいちやつき始めた双子に青筋を立てながらも、もう一人の方へと視線を向けた。

ロキは虚ろな目を天井へ向けて「羊が285匹…羊が286匹…」なんてうわ言を繰り返している。

いや、わかるけどね。現実逃避はしたくなるけどさ！

私はいつまでもこちら側に戻ってこないロキの頬を軽く叩きながら肩を揺さぶった。

「おーい、ロキー……ロキくーん……ロッキー……ポッキー……トッポ」

「……最早原形もなく人の名前を改造してんじゃねえよ」

幸い、ロキのツツコミ精神は潰えたわけではなかったらしい。一拍置いて頭をはたかれる。

ロキは赤くなつていく顔を隠すようにこほんと咳をすると、デューの方を複雑そうに見た。

デューはちろりと舌を出してその視線の盾にダムを使う。

先程から利用されてばかりのダムはだんだんと殺気を帯びてくるロキを宥めていた。

調子に乗ってデューがさらに挑発してくるからダムは大変である。

後ろに大事な弟、前に殺気だった大事な客人。庇おうにも限界があ

るつえに、ディーときたら少し叱ると子供のように泣きだすのだ。

うん　　やっぱダムが兄でディーは弟なのね。

結局その朝、フレイムとルアは謁見室に姿を見せなかった。
ただ、代わりの衛兵が持ってきた紙切れには綺麗な文字がほんの少しだけ。

『5日後に“アリス”を国民の前に出す。ダンスの練習をしておくこと』

どうも、ようやく39・9度の灼熱地獄（実はインフルでした；；）から脱出した作者です（o・・・o）

いきなり消滅してしまってすみませんでした！お気に入り登録やアクセス解析を見るたびにパソコンに飛び付きたくまりましたね、はい。

ところがいざやってみたら、このポンコツパソめ 三度目のバグで半分消えましたゝ（*。*）ノパア！

焼き芋と一緒に焚火の中へ放りこんでやるうかと思いましたが、さすがに。10分目を離れたときに電源落ちて消えてるってなによ。

えー、それはすぎたことなのでいいのですが……どうしましょ。数学の宿題ほとんど終わってない……（アホとしか思えない）

話の解説になります。

最初らへんお二人とも何してんでしようね（・・・）

あのコンビは作者的にとても好きなのですが、本編では最も重い存在です。もっとフレイム様には幸せになってほしいなあ……。

この冒頭は 【chapter - 4】Flame Guilty or Innocent ep9血よりも確かな絆を のその後、ルア視点ですね。過去編を挟んでるから遠い昔のことに感じますが……。

フレイム様この頃ほんと怪しいですよ。アヤメという少女を監禁（2章ep5参照）してる所から「こいつなんか隠してね？」と思っ下さって結構です。

実際このひとが一番謎めいているのではないかな、と……過去編最

長ですし。

うん、とりあえずルアくんの無事をお祈りします（ 所詮他人事）

ま、ルアはどうでもいいのですが（?!）

後半はアリスに戻って思いつきりコメディです。皆さんはどれを選びますかw? ちなみに私は4の売り飛ばすでした（ 金の亡者）

ディーダムを書くのはすごく楽しいです。この頃ロキが可哀想なほどいじられてますが……ごめんよ。

本当は最後らへんで双子をシリアス方向へもっていきかけたのですが、あれだけ暗い話が続いた後でやるのはあまりにも鬼畜なのでコメディで終わらせました……。

さて、次回はいよいよパーティー！

なーんてことはありません（o`´・`´・o）

やっぱり何事も練習は不可欠ですよ。なんも練習しないで本番は駄目ですよ。

つてことで次回はダンスの授業風景の予定です。久しぶりのロキアリですよー！字数に余裕があればおまけでイオアリも入るかも……。では、まったり更新していくのでよろしくお願いします。

いつも忘れそうになるのですが。

総合PV数ついに20万突破！

もうほんと、嬉しすぎます……どうしてこんなに伸びたんでしょう

（。*）

ここまで背中を押して下さいました皆様に、心からの感謝です！

お気に入り登録も63人……これはどんな夢オチですか（。c！。

、；）

おかげで総合点数も念願の250越えました！本当にありがとう

いじろご書か...

つい先ほど耳にしたことだったのだが、こちらの世界では今は秋なのだそうだ。私の世界が春だったからてっきりこちらも同じなのだと思います。

秋だというのに、遠目からでも森には数々の花が咲いている。ロキによると、この世界の花は冬になっても枯れない物が多いらしい。そうしないと森で暮らす者たち　　チエシヤ猫や三月ウサギ、眠りネズミが生活できないのだと。

普段奴らは市街に出ることなく森から食料を調達しているらしい。イオなんかはレーテにべったりくっついて生活していたが。

さて、そんな秋空。冬が近いということもあって外は突き抜けるほどの蒼が占めていた。

白い雲が途切れ途切れになりながら彼方へと泳いでいく。

拝啓。あちらの世界にいるお母様および天国にいるお祖母さま。

ああ、私は何故この晴天を見ながら　　部屋でダンスの練習などしているのでしょうか。

「だーからあ！そこステップ違っつてば。右足は引っ込めるの！」隣から容赦なくダムの叱責が飛んできて、私はがっくりと頂垂れた。カクガクシカジカ昼食もとらずに3時間ほど同じことを繰り返している。

溜息をつく暇もなかった。ディーはくすくす笑いながら耳にタコが

できるだけ聞いた曲を流し始める。

「姫さまほんと型がなってないね。もつと背筋伸ばさないと駄目だよ」

別に猫背なわけでもないのにディーに呆れ混じりな声で言われた。幾度も聞いた言葉に私はむっとして「わかってるわよ」と返事をする。

ガッツだと思っていたディーとダムが、意外にもダンスのコーチをしてくれていた。少し離れたまま的確な指示を飛ばしてくる。

わかりやすい指導のはずなのに　この3時間私は全く上達した気がしなかった。

「……………いつてえ……………」

「う、ごめんロキ！」

先程から何度も連続で相手役のロキの足を踏みつけてしまっている。ロキはほんの少し顔を顰めると型どおりにステップを踏む足をとめた。

「ちょっと休憩取るぞ。もういいだろ」

おそらく私の動きが遅れてきたのが気になったのだろう。

ちらりとこちらを見るとばしばし悲惨な評価を続ける双子に向かって手を振る。

教育熱心なディーとダムはすっかり休憩モードのロキに向かって食い付いた。

「えー！だってまだまだ下手っぴじゃん。駄目だよ、今日はこのAメロだけでも完璧にする予定なんだから！」

「そつだそつだ。姫さま基本がなつてないんだからもつと頑張らないと。俺らがフレイルム様に怒られちゃうよ!」

いや、そりゃあ普通の女子高生やってたんだからちよつとやさつとじゃ社交ダンスなんて場数踏まないけどさ。

そこまではつきりびしつと言われたら傷つくよ!私の繊細な乙女心をどうしてくれる!

双子にグサグサ言われて落ち込んだ私を見て、ロキは不機嫌そうに眉をひそめる。そうすると眉間に縦皺ができた。

「ぶつ続けでダンスなんて踊れるかよ。俺は願ひ下げだ」

「ああ!おいちよつと待てよ!」

「黒ちゃんいないとできないじゃん!」

文句を言いながら引き留めようとする双子を振りほどき、ロキは部屋を出ていった。

うううう……ごめん、ごめんよロキ。貴方にとって私は足を踏む嫌がらせ野郎だったよね……下手でごめんなさい……。

実は彼が私を休ませるために休憩を取つたのだとは露知らず、私は床にお尻をついて一人沈む。

「願ひ下げ」という言葉が予想以上に心をかき乱していた。

あの優しいロキが嫌になるほど自分のダンスが下手なのだと思うと、自己嫌悪で死にたくなる。

どうしてこう、何一つうまくできないんだろ……。

「つたく、何あれ。むつかつく!姫さま一人置いてさあ……可哀想じゃん」

「あんなひどい捨て言葉ないよね。頑張つてんのに……姫さま可哀想」

「同情が逆に痛いんですけど」

というか絶対わざとだろクソ餓鬼。

ぎろりと睨みをきかせる私をからかうように笑って、ディーとダムは私の両隣に腰を下ろした。

チャラチャラ系の美形二人に挟まれる感じになって、途端にいたたまれなくなる。

これはいつでも抱きつけるような姿勢だ。うん、美形に抱きつかれるなんて全国の乙女の夢だよ。

だがな！力の強い二人にサンドイッチされてみる、肺が潰れるぞ。

「こうしてみれば見るほど姫さまって何の取り柄もない普通の人間だよなー。こんな世界にいてへこまない？」

「……あんたらみたい完璧人間と一緒にいればそりゃへこむですよっよ」

何の嫌味だバーカバーカ！

そりゃあ一日中へこみっぱなしの日だってあった。それから余りに色々ありすぎて今は遠い日だけね。

何でこんなところにいるのだろうと、常々自分を見下している。この世界の住人に比べて、あまりに自分はちっぽけに思えた。

暗く沈みかけている私の心に気付くことなく、ディーがダムの言葉を引き継いで続けていく。

「歴代の“アリス”って言ったら全員すごい美人さんだったんだよ。先代の写真あるけど、見る？」

先代って言ったら、確か私のおばあちゃんなのよね　超利己主義で元ヤンの。

私はごくりと息をのんで頷いた。私にだけ甘々だった愛しの祖母の一面を見るのが怖いが……み、見てみたい。すごく見たい。

デイーが「ごそごと懐を探りながら出したのは、白黒の古びた写真。その中心には絶世の美女としか言いようのない女の人が意地悪な笑みを讃えて写っていた。親指と人差し指と中指をつきだした姿は可愛いというよりも、かっこいい。」

女の人の腕に首を絞められるような形でルアをさらに小さくしたような少年が苦し紛れの笑顔を作っている。髪の色素が薄く、その上には白いウサ耳がある……ということはこのシヨタっぽい人が先代の白ウサギなのだろう。

白ウサギの左側にはイオによく似た無邪気な笑顔があった。大人っぽいにも関わらずどこか可愛らしい。大きな猫耳を持つ彼は無理矢理写真にはいるようにして白ウサギと女の人に抱きついていていた。

白ウサギの少年を中心に絡まり合うその写真は、思わず笑みがこぼれてしまうほど微笑ましい。

「もうほんと、綺麗な人でしょ。この人のお孫さんだから正直すごい期待してたかも」

デイーが少し懐かしむように呟く。

双子ばかりにはなくマルスやレストからも言われた「期待外れ」という言葉。

確かにこの器量の後に来るのは……我ながら心苦しい。私は苦笑しながら写真をデイーに返した。

祖母は、とても素敵な人だったのだと思う。この世界にぴったりな、綺麗な女の人。

祖母のいた世界に、私なんかじゃ釣り合わない……

「でもさ、俺姫さまのこと大好きだぞ」

再び沈みそうになった私を下から見上げるようにしてダムが見を屈める。

新緑色の瞳はわずかに心配そうな光を宿していた。

慰めるように頭をポンポンとなでられる。私の方が年上だということに、情けない話だ。

「みんなみたいに美人じゃないし、器用でもないけど……俺は姫さま大好きだぞ」

「うん、姫さまって面白いしからかい甲斐があるし、僕も大好き！あ、でもダムの方が好きだけどね？」

両側から抱きつかれて、息が苦しくなった。私は息を詰めて涙がこぼれそうになるのを我慢する。

触れた体温には何の嫌味もなく親愛の情がこめられていた。

大好き。たったそれだけの言葉なのに、自分の存在を丸ごと受け止められたような気持ちになってしまう。

「姫さま、泣いてるの？」

ダムの呟きに、私ははっと我に返った。

我慢できたと思っていたのに、涙はいつの間にか頬を流れおち服に染みを作っている。

そんな、悲しいわけでもないのにどうして……！

私は熱くなっていく胸を抑えながら呆然とダムとディーを見上げた。自分たちが泣かせたと思ったダムとディーは途端に弱気になり、あの手この手を使って謝ってくる。

「ご、ごめん俺なんかひどいこと言った？美人じゃないとか、ムカついた？ご、ごめん姫さま……！」

「姫さまは十分可愛いと思うよ！えっと、あの、ご、ごめん嘘……」

「じゃなくて！な、泣かないで……」

慌てふためいている彼らに違つと伝えたかったが、声がかすれて出ない。

顔を俯けて首を振る私の頭に、冷たくて固いものが乗つけられた。驚いてそれを見上げようとすると、今度はそれを頬にあてられる。あまりにも冷たくて肩を震わせた私の手のひらに、まだ開けられないジューズの缶が置かれた。

「アリス泣かせてんじゃねーよ、バカども」

ああ、この声は……。聞き覚えのある声にほつと息をつきながら、心配そうな黒の瞳を見上げる。

ロキは小さくため息をつくとぺしりと軽く私の頭をはたいた。かなり力を抑えたのか、痛みはほとんど感じない。

「あんたもさ、いい加減わかってもいいだろ？ “アリス” に相応しいとか相応しくないとか、そんなの関係ないんだよ。俺らが好きなのは “アリス” じゃなくてアリスなんだから、さ」

微妙にイントネーションを変えて、私の名前を呼んでくれる。彼が何を伝えようとしてくれていたのかなんて、その切実な瞳を見れば一目瞭然だ。

ルアは率直な優しさ、イオは冗談の裏に隠れた自己犠牲の優しさだとしたら、ロキの優しさはどんなものだろう。

言い回しが遠すぎてわかりにくい。なのにその言葉は、回り道をすることなく心に届いてくる。

私は再びこみ上げてきそうになる涙を呑みこんでロキの瞳をしつかりと見据えた。ここで泣いてしまったら、余計彼に心配をかけてしまう。

ねえ、悲しいんじゃない。……嬉しいんだよ？

「あり、がと」

声は当然のごとくしゃがれてとても耳当たりのいい声とはいえなかった。

それでもちゃんと自分の気持ちを伝えるべく、ディーとダムの方を向いて「ありがとう」と繰り返す。

悲しくて泣いたわけじゃないの。嬉しいの。

貴方達の言葉に、救われたんだ……

だから、精一杯のありがとう。

「……あー、だからもう泣くな、な？」

言いたいことは言ったとでもいうように突然適当な口調になると、ロキは私の顔に取り出したハンカチを取り出してごしごしと拭いた。先程の優しさはどこへすっ飛んだか、ものすごく乱暴な手つきに青筋がたつ。

うん、イオとロキってよく似てるなって思う世紀の瞬間だよ。人が滅茶苦茶感動してる時に限って何でこう雰囲気ぶち壊すようなことをやるか。

もつとも、イオの場合は完璧策略、ロキの場合は天然なんだろうけど！

「痛い、痛いって言ってんでしょうがバカロキ！」

「あー、何姫さま怒らせてんだバカクロー」

「いつけないんだー、バカクロー」

「う、わ、わりい……って何でお前らにまで馬鹿扱いされなきゃなんねえんだよ！」

私が怒鳴ると、調子を取り戻したように双子が便乗してくる。

どうやら先程から薄暗い空気に気詰まりしていたらしい。私の大声を聞いて明らかにほっとした様子だ。

私を二人がかりで立ち上げらせてそのままぐるりくるりと振りまわす。

突然の回転および激しい運動に気持ち悪くなった私は床に朝食をぶちまける前に二人を殴つといた。

元気づけるだかなんだか知らんが、いきなりワルツを踊るのはヤメレ！

「ひつどおーい、姫さま。俺ら元気づけようとしただけなのにー」

「ほんつと容赦なく殴つたよね！音が鈍かつただけだどー」

「黙らっしやい！うう……と、突然動かさないでよ！」

「あははっ、やっぱ姫さまは怒つた顔が一番だ！」

「うん、怒つた顔が一番可愛い！」

「それさっぱり嬉しくないんですけどー！」

ちよ、一瞬ドキツとしてしまった私の純情返せクソ餓鬼。

「……アリスは笑つた顔が一番可愛いに決まってるんだろ……」

「へ？なんか言つたロキ？」

「な、なんでもねえよー！」

……何でこの子は始終顔が赤いのだろう。

私は湯気が出そうなほど真っ赤になって顔をそむけているロキを不審そうに見ていたが、不意にガチャリとドアが開きそちらに注目を預けた。

「すみません、遅くなりました！　あれ、何してるんです？」

少しボケたような声を上げながら入ってきたのは、午前中姿を見せなかったルアだ。

急いでここまで来たらしく、息を切らしている。その服はいつも来ているような白の制服などではなく、もう少し動きやすそうなシャツだった。

何故かその右手にはグルグルに包帯が巻かれている。傷が新しいのか、厚手に巻いた白からわずかに赤が染み出していた。

私は双子との取っ組み合いを一時中断してルアの方へ駆け寄る。

「今まで何してたの？いつまでたってもこないから心配してたんだけど……」

「ありがとうございます、アリス。うーん……それが、僕もよく覚えてないんですね。今日は12時に起きた後、あまりにも傷が深かったので包帯の取り換えをしていました」

「傷……？」

「これですよ」

ルアは右手を持ち上げて不機嫌そうに眉をしかめる。

心配そうな目で見上げる私に「大丈夫です」と微笑みかけると、一変して凍てつく視線をロキに投げかけた。

ロキも気に食わないとでも言いたげに鼻を鳴らし、ルアをきつく睨む。

この二人は性格が性格だけに……仲が悪そう……。

どちらの性格も尖っているからお互い引くことなく対立してしまいがちなのだろう、ルアは実際イオの時以上に冷たい笑みを宿してロキを睨みつけていた。

「ということ、残念ながら僕はアリスの相手役ができません。気に食わないですが、其処の男に権利を譲ることにしましょう。一歩でも踏み間違えて御覧なさい、チェシヤ猫。僕は迷わず貴方を殺していきますよ」

「はっ。口ではペラペラうるせえがお前それ出来たことあんのかよ？殺す殺す言っついて俺は今ここで息をしてるぜ？」

「ええ、そうですね。ゴキブリがちよろちよろ逃げ回るせいで仕留め損ねてしまいました」

「ゴキブリだと……っ？」

「ですがお忘れなく。ここは“チェシヤ猫の森”ではなく“ハートの城”です。果たして檻の中で蟲はどこまで足掻けるでしょうねえ？」

「……っへへ！じゃあやってみようぜ、今、ここで！」

「……………叩き潰してくれませす」

「はいストオーツプ!!」

だんだんと殺気を帯びてくる空気を無理矢理断ち切ろうと、私はルアとロキの間に割り込んだ。

ルアは正気に返ったのか瞳に光を取り戻し、ロキは不満そうに舌を打って床を蹴る。

「……うん、これでどっちが嫌っているのか判った気がする。

ロキは明らかにルアの存在を忌み嫌っていた。それが何故かまではさすがにわからないが、機会があれば殺したいほどのものらしい。しかしルアの方は半ば殺戮の狂気に囚われていたようで、ほんの少し混乱した頭を振ると心底申し訳なさそうに謝ってきた。

「すみません、アリス。僕としたことが……まずはアリスのダンスを仕上げてからですよ」

「……たく……ルアも悪いんだからね！ロキの挑発に乗らないでよ、

子供じゃあるまいし！」

「う……ごめんなさい。気をつけます」

「それじゃ俺が子供ガキみたいじゃねえか」

不満そうにロキが呟いていたが、私は聞こえないふりをする。

昔どんなことが起こったかなんて、私にはわからない。口を挟めるわけもない。

でも 勝手に死ぬことだけは、許さないんだから。

「ほら、ごめんなさいは？」

二人の手を片手ずつ握って無理矢理握手させようとする。

ロキは心の底から嫌な顔をしていたが、私がギンツと睨みつけると渋々手を握った。

ルアの方は対処をわきまえているらしく、嘘っぽい笑顔を張り付けて手を差し出していた。

うん、さすがフレイム様の隣に立つ男。行動がいちいち大人だね！

しかしただの腹黒い餓鬼だとわかったのは、ルアが仮面をかぶりながらにこやかに言った後。

「申し訳ありませんでした、黒ちゃん」

「く、くろ……?! お、お前か、双子に変なあだ名吹き込んだの！」

「あれ、ではゴキちゃんの方がよかったですか？随分とお似合いな名前ですねえ」

「て、てめえ……殺す！」

「ルア！ロキ！！」

結局は私が二人の頭にゲンコツを食らわせる羽目になった。

しかしロキには命中した者も、ルアは行動を読んでいたらしくひらりとかわして爽やかな笑顔を見せる。

黒い……こいつお腹真っ黒だよ！白ウサギなのに！

「さあ、ダンスのレッスンをするんでしょう？アリスのお手並み拝見と行きましようか」

私はこの時、愚かにもほつと安堵の溜息をついたんだ。

これから待ちつける地獄なんて、予想もしないで。

「足！！もう3ミリ後ろに、そこは腰を近づけて！テンポが遅い、カメですか貴女は！はい、1、2、3、123、123、123……そこっ！遅れてます！そこは踵持ち上げて！優雅に回る！……盆踊りしてるんじゃないんですよ？！もっと高貴さを身にまてえないんですか！ほら、目線落ちてます！」

鬼だ。ここに鬼がいる。

怒濤の如く襲ってくるルアの指示と叫び声とついでに罵詈雑言を背

中に感じながら、私は必死にステップを間違えないように足を動かしていた。

何か口を開こうものなら100の嫌味と毒舌で返ってくる。

相手の足を踏もうものなら健康な人を自殺に追い込みそうな勢いで責められる。

半拍遅れようものならそばにある机が軋むほどに強く叩かれる。

そう、それはまさしく鬼だった。

「うつわ、姫さまかわいそ……3ミリつてほぼ誤差じゃん」

「し、白ウサギい、もう5時間踊りっぱなしだぜ？そろそろ休憩……」

「お黙りなさい！！大体貴方達が不用意にアリスを甘やかすからこんな何一つ上手にこなせないちんちくりんな人間に育ったんでしようが……！」

い、いや、デイーにもダムにも育てられた覚えはないから……。

しかし青い瞳をギラギラ光らせて怒り狂うルア君に口を挟む勇氣なんてないのよん。すまん、初心者だわ。

なけなしの勇氣を振り絞って放しかけたダムも怒りの矛先が自分に変わるのを恐れたらしい、深く頭を下げ謝ると私をあっさり見捨てた。

え、ちょ、さっきの深い親愛の情は？！1日もしない内に友達解消？！

しかしダムを責める暇など、私にあるはずがなかった。再び燃えたぎる氷の瞳が私に向けられる。

頭に角が見えます。ウサギの耳であると信じたい。

口から炎が見えます。恐怖のあまりの幻覚だと信じたい。

身体からオーラが見えます。……あ、これはいつものことか。

こ、怖いよおかあさああんツ!!

いなかっただけ？秋田にこういうのいなかっただけ？

悪い子いねがー。

「よくもそんな動きでダンスだなんて言えますねえ……!!」

ルアは怒りを押し殺そうともしないまま笑顔を浮かべ、べきやりと指を鳴らした。

普段優しい面しか見ていないため、脅すという行為が信じられなくて思わずその場に硬直してしまう。ロキも冷や汗を垂らしながらルアを見守っていた。

先程の威勢のいい彼はどこへ行ったのやら、鬼の前では無力同然だ。ううう……蛇に睨まれた蛙？そんなもんじゃない！今の私は鬼に睨まれたノミだ!!

「この5日、僕が徹底的に叩きこんであげます！」

拝啓。あちらの世界にいるお母様および天国にいるお祖母さま。
先生がスパルタすぎて怖いです。

どうも、昨日と連続で投稿してしまった作者です（*、・、（、シ
うっしや！これで休んでた分の挽回できましたよね？ね？
宿題どうしたは禁句です

予告した通りダンスの授業風景です。アリスちゃん、散々言われて
ますがこの子かなり踊れてるんですよ、実際は（、A、。）
ただ双子は意外とこだわりを持っていてるようなので、プロ並みに厳
しいです。対してロキは社交辞令程度にしか思っていないので相当甘
いです。

ルアは あれは人間ではないのでカウントしません（、・、）
今回かなりコメデイ多めにしたのですが……毎回毎回飽きもせずシ
リアスに足突っ込んでますね。双子がいるにもかかわらず……。
ロキアリ、の予定でしたがごとく双アリになってしまった気が
します（、・、・、）

あの二人はもちろん恋愛としてアリスが好きなのではありません。
仔猫がじゃれる感じで「好き」と言っております。

ああ言う無邪気なキャラは書いてて和みますよー（o、・、・、o）
さて、ディーが見せた写真の中に先代アリスの登場人物3人が出て
きてます。

「最凶アリス」と「シヨタウサギ」、そして「ホモ猫」ですな
キャラ設定が酷過ぎるけど……その他にも「DM女王」などもある
ので大した変態ではありません（キツパリ）

この3人が出てくるお話は「不思議の国のロリーナ*暴^{はく}」でそのう
ち書こうかと思ってるのですが……いつになることやら。

公開はしていませんけどまったく更新中です（、・、・、）ま、と
りあえずアリ幕を終わらせませんとね！

本編には全く関わりのない話（アリスのおばあちゃんロリーナの冒

険談っただけ)なので潰れる話かもしれないませんが　せつかくプ
ロローグを書き終えたので連載したいなあと思ってます。
たぶんアリ幕以上にコメディ要素は大幅に増えて、それに比例して
変態率が倍になるんじゃないかと……orzイオが可愛く思えます、
マジで。

さて、ルアとロキが何やら喧嘩をしたようですが……ロキの方はち
やんと事情があるんです。この子は本当はものすごく優しい子……。
それにしてもルア君鬼畜キャラが定着しちゃいましたねえ(。c
。、;)
フレ임に対してはいつつもこんな感じですよ。アリスにはでろっで
ろに甘かったんですけど　ついに本性見せました。

アリスは可哀そうに、その後靴ズレが出来てしばらく動けなかつた
んだとか。

城の面子はアリス、ロキ、ルア、ディー、ダムの5人で出ることが
多いと思います。フレ임様はほぼ毎日執務室に引きこもりますか
らね。

イオは反対に帽子屋側につきます。建物のような開放感のない所は
嫌いだとか何とかで勝手に出ていきそう……。

帽子屋は敵対しているという設定なので滅多に会えませんが……。
その変わりイオとアリスは二人きりのイベントがてんこ盛りだと思
いますよ〜

ではでは、次回はいよいよダンスパーティー本番!

帽子屋ファミリアをメインにする予定です!次回こそは存在の薄い
マルス×レストを……!

人によって反応は様々だが、特に運動神経の優れない人は運動会の前日、首の折れたてるてる坊主を飾る傾向にある。

「てるてる坊主、てる坊主。明日雨にしておくれ」などと呪詛のように呟きながら。

実際私もやったことがある。運動会などめんどくさい行事の筆頭だ。ああ、しかし。神はなんと残酷なことか。

そういう日に限って翌日は抜けるような晴天になるのだ。

「……星が綺麗ねえ……」

そりゃあもう、憎らしいほどに輝いている星達を睨みつけながら、私は深いため息をついた。

そう、今日のはあの忌々しいお披露目の日。またの名を地獄のダンスパーティー。

てるてる坊主？そりゃあ作ったわよ！双子に手伝ってもらいながら逆さまにしたてるてる坊主に向かって「雨にしてくれないとその首ちよん切るぞ」って脅したわよ！

天気？ええ、もちろん雲ひとつない快晴でした！

もうほんと、神様地獄へ落ちろ。

「だから言ったじゃん、あんな紙くずじゃ絶対無理だってー」

「そうだよ、吊るすならもっと盛大に……人間を吊るすとかさ！」

「いやそれ生贄だから！何もそこまでして雨にしたいわけじゃない

からあ！」

さらりと怖いことを言う双子にドン引きしながら、自分を着飾るドレスを気まぐせに見た。

淡い水色の記事に、宝石がふんだんにあしらわれている。真珠にガーネット、アクアマリンにエメラルド、トパーズ……それにこれは、まさかダイヤモンド……？

いやまさかね！こんなドでかいの何カラットあるんだよ！
いくらルアでもこんな……

「……やりそうな気がしてきた」

……気にしないようにしよう。

無差別に散りばめられた宝石たちはどれも綺麗だったが、お互いの魅力がぶつかって味を殺し合っている気がする。

豪奢なものには間違いないのだが　明らかに中身と合っていないだろう。

困ったような視線を双子に向けると、曖昧な笑いが返ってきた。

ディーもダムも、いつものだらしない制服などではなく黒い礼服をピッチリと着てる。ぼさぼさの髪も櫛を入れたらしく、随分と大人しい雰囲気だ。

そのまま背筋を伸ばしてニコリと微笑むと、完璧なジェントルマンイオに負けず劣らず女の子を悩殺してそう。イオは妖艶っぽい所がたまらないのだそうだ。バイ城のメイド。

「ほんと、あんたら背が高いからそういう服似合うわよねー」

「ありがとー。姫さまも十分似合ってるよ」

「うんうん、すごく綺麗なレディだ」

……棒読みが一番つらいです。

しかし彼らの笑みがひきつるのもわかるかもしれない。ドレスなんて着たことがないから歩き方だってちぐはぐだし、もともと地味な顔だから宝石がかえって浮いて見える。

私は再度鏡を見てその化粧の濃い顔にため息をつきながら、双子の手を取りフレイムの所へ歩いていった。

ああ、ダンスが憂鬱……。

「ふざけるな。そんなブスと壇上に並べるか」

それが女王ことフレイムの第一声だった。

え？乙女心が傷つかないかって？いじめを受けて御覧なさい。一日に10回はブスといわれるからそのうち慣れるわ。

いやしかし、私の乙女心は現在進行形ですたずたに引き裂かれていく。「ブス」と嘲笑を浮かべて言われたのに対してでなく、目の前の光景を見て。

この国には何の風習があるのか、「アリス」を迎えたら近いうちに“女王”自らが“アリス”をお披露目にならなきゃいけないらしい。この世界の“カードもち”や貴族たちの前で壇上に立ち、一言二言挨拶をする、それが“アリス”の仕事だった。

その後にダンスを好きな人同士で踊るからルアにこっそり指導されたのだ。それはそうと置いて。

まずは私の最初の任務、“女王”と一緒に壇上に上がらなければいけない。

一緒に行く相手に、ブスと言われました。

絶世の美女に。

「ふ、ふ、ふ、フレイム様あ？」

声が思わず裏返ってしまう。

え、だって、フレイム様つてれっきとした男の子よね？年は私より一つ下の15歳、身長はかなり低めの165センチ、ものすごい女顔で男女問わずモテモテの、だ、だけど一応男の子よねえ？！ど、どうしてドレスを着てるんですかあ？！

「うーん、眼福眼福。パーティーつてめんどくさいから嫌いだけど、毎回フレイム様の女装見れると思うとそう悪いもんじゃないよなあ」「女装じゃない、正装だ」

しみじみ頷くダムとディーをきつく睨みつけて、フレイムはぶすつとした顔で応える。そんな不機嫌そうな顔でさえ、恐ろしいほどに似合っていた。

赤と黒のコントラストが実に巧妙な、ふわふわの豪華なドレス。胸に詰め物をしている様子はなかったが、腕も腰も細いので普通に女性で通せる。金と赤の羽つき扇を口にあてて流し眼を送る姿は、麗しの美女としか思えなかった。

もともと顔が小さくどこの女よりも綺麗だから、これが似合う似合う……。艶やかな赤い髪は最大限まで伸ばされ、前髪はピンでとめられていた。その頭のとっぺんには大きめの紅玉をはめ込んだ金色のティアラが輝いていた。長いまつげで縁取られた赤の瞳に見つめられると、女の私でさえドキリとってしまう。

うん？何が言いたいかつて。つまりですな。

完全な敗北だった。

「“女王”は何か行事があるたびにこの服を着るのがしきたりなんですよ。最も、この餓鬼の場合挨拶が終われば速攻で男装に戻りますがね」

「男装じゃない！僕は男だ！」

メイク道具を片づけながら説明をするルアに、フレイムがものすごい勢いで喰ってかかる。

相当この格好が気に食わないらしい。まあ、ここまで似合っちゃうと男として心境複雑なんでしょうけど……。

しかし女の私も大いに複雑だ。女である私なんかよりも、間違いなくフレイムの方が美しい。

「アリスもすごく綺麗ですよ」

さすがルア、曇りない笑顔ですらすらと言ってくれるが、この状況では慰めにしか聞こえなかった。

私はどつぷりと沈みこんだ気分です首を振るとその場から踵を返したフレイムに顔を顰められて「一緒に並べない」なんて言われなくても、わかってる。こんなに美しいフレイムの隣に立つのなんて、今の私にできるはずがなかった。

「ちよつと……外の空気にあたってくる」

「え、ちよつと姫さま！」

デイーが止めようとしたが、私はその腕を振り払って会場へ出た。涙は、こぼれない。デイーとダムの笑顔やロキの言ってくれた顔が浮かんで消えていった。

『でもさ、俺姫さまのこと大好きだぞ』

『僕も大好き！あ、でもダムの方が好きだけどね？』

『俺らが好きなのは“アリス”じゃなくてアリスなんだから、さ』

わかってる。わかってるよ。あの言葉は慰めとか同情とかそんなのじゃなくて、嘘偽りない本心だって、信じているよ。

信じてる　　だけどやっぱり、少しつらい。

会場には既にたくさんのお嬢や紳士たちが集まり会話を花を咲かせていた。年齢層は若く、大体30代ぐらいの人たちが多い。その全員が自分に似合う礼服を着ていて、お嬢はきらびやかなドレスを着ていた。

「ちょっと、あの子」

一人のお嬢……おそらく私よりも少し上か二十歳くらいだろう、背が高く少し化粧の濃いお嬢が、こちらに気づいて視線を向けてきた。気付かないふりをするが、じろじろと観察する不躰な視線に気分が悪くなる。

私のちぐはぐなドレスを一通り見てから、小馬鹿にしたように鼻で笑うとわざとこちらに聞こえるような声で言った。

「随分と豪華な装いをしてるけど、中身はたいしたことないのね」

あまりにも失礼な態度に私は思わずそちらの方を向いて絶句する。

その女性はこちらが気付いたにもかかわらず、楽しげな声で続けた。自分よりも下の立場の人を嘲笑うのが愉しくて仕方ないらしい。声がどことなく自分に酔っている感じた。

「高貴な令嬢というわけでもないみたいですし、大方どこかの金持ち男でもひっかけたのかしら。あの器量でよく落とせたこと」

(なっ……そ、そりゃあんたは綺麗な人で私は平々凡々の女子高校生でしょうよ！で、でも……！)

そこまであんたに言われる筋合いなんてない。

私は沸々とわき上がってくる怒りに赤くなる顔を隠すため俯いたが、女性の笑い声は体中に突き刺さってくる。

どんな暴言でも、我慢できる自信はあった。傷つかないというわけではないが、いちいちそれに反応するほど子供なわけじゃない。それに、言われ慣れている。

だけど。どんな言葉よりも私の心に火をつける一言を、この女はいつも簡単に言いなつた。

「何にせよ、この場には相応しくない方ね」

ドクン

ブス？そんなの、私が一番わかっている。

街で一番の美女と呼ばれた母さんの血も、会社の人気を独占していた父さんの血も混ざっているはずの私。それなのに、どちらにも似ない平凡な子に生まれてきた。

わかってるわよ。ずっと小さなころから周りに比べられて、そのため息を聞いてきたんだから……ちゃんとわかってるわよ。

「ただ、どうしてそんなことまで知りもしない他人に言われなきゃなんないの?!」

「あんだねえ……! さっきから黙ってれば……!」

「お姉さま、こんなところにいたんですね!」

冷たい視線を投げかけてくる女のひとに向かって一歩踏み出す、その瞬間、可愛らしい声が背後から私を呼びとめた。

え? お姉さまって……私一人っ子なんだけど。

私が驚いて後ろを振り返ると同時に、私の肩に細い腕が絡みついてきた。

「探したんですよ、お姉さま」

と、言われましても……。

私は完全に硬直しながら目の前の可愛らしい令嬢を見た。

くりつとした大きな栗色の瞳。短い茶髪は緩くカールして首筋を隠している。パアツと花開くような笑顔が恐ろしく似合っている。

ドレスも雰囲気にあった明るい色、ピンクと黄色をベースとした生地で作っていた。レースもふんだんに使われていて、胸元には大きな赤の薔薇が飾られている。対して宝石は存在を抑えていて、胸からお腹にかけて反射する程度にしか使われていない。被った帽子はレースを周りにあしらわせていて、ボリユームを増していた。

フレームが大人びた美女だとしたら、この女の子はくるくと花畑を踊る可憐な美少女だ。あのフレーム以上にこちらも人の目を惹きつける。

だが、間違いなくこんな美少女の知り合いなんていない。ましてや妹なんて、いるはずがない。

だとしたらこの子は、一体誰だ。

少女は無邪気な笑顔のまま今さっきまで私の悪口を言っていた女の方を振り向くと、小首を傾げてみせた。

惱殺スマイルストレートフラッシュをもち浴びた女は顔をひきつらせながらたじろぐ。しかしそんな時でさえもこの人は、少女を値踏みするようにねめつけていた。

「この方は誰ですか、お姉さま。お友達ですか？」

「い、いや、えっと、違うけど……」

それ以前に貴女が誰ですか。

なんてこと、口が裂けても言えなかった。会って数秒でこの美少女のキラキラビームに陥落させられた私は曖昧に笑う。

貴女なんか知らないとか不用意に言っつて、この子を泣かせるのが怖かった。うううう、か、可愛いよう……。

「あ、あら、随分とお可愛らしい妹さんですこと。羨ましいですわ」

女はいきなり視線を向けられたことに相当動揺したのか、声を震わせてわざとらしい笑顔を浮かべる。

対して少女の方は可愛らしい笑顔を見せてお礼を言った。

「ありがとうございます！でも貴女に私のような妹がいたら、大変だったんじゃないですか？」

「何ですって？」

女の声が一変して低いものになった。扇の後ろで醜く歪む彼女の笑顔に向かって、少女は無邪気に笑いかける。

しかし可憐なはずのその笑みは、どこか嘲笑的だ。

「だって見ず知らずの他人にまで嫉妬するような女なんですもの。私が貴女の妹でしたら、始終虐められていることでしょうね」

「なっ……し、嫉妬じゃなんかじゃないですわ!」

「あら、では何ですか?そんなに醜く顔を歪めて……いいえ、醜いのは元からですか」

「み、醜いですってえ……?!」

「言い返せますか?この私に」

くすりと悪戯つぼく笑う美少女は、自分の胸に手を当てて「さあ」と促した。

女は自分よりも格段に美人な彼女の顔を睨みつけ、悔しげにごくりと喉を鳴らす。

言い返せるはずがないのだ。このタイプの人間は、自分よりも低い相手でない、言葉を失う。

少女もそれを知っていたのか、近くにあったテーブルからワインを取るとそれを女の顔に振りかけた。

「大した器量でもないくせにゴタゴタいつてんじゃねえよ、ブス」

顔中を葡萄酒で濡らしてしまった女は羞恥と怒りで顔を真っ赤にしながら、踵を返す。甲高い声で誰かを呼び付けているところを見ると、身内を呼んでいるのかもしれない。

少女は乱暴な口調のまま「あー、すつきりした」というと、私の左腕を掴んでさっさと歩きだした。

「ほら、早く逃げるよ。あの女たぶん衛兵呼び付けてるから、捕まると面倒だ」

「えっ、う、うん……」

本当にこの少女は、一体誰なのだ。可愛らしい声で笑ったかと思え

ば、1オクターブ低いボーイッシュな声で恐ろしい暴言を吐く。

「あ、あの、貴女は……？」

私は新しいワインを飲み始める少女に向かって意を決したように聞いた。

誰かと質問すると、少女は一瞬驚いたような顔を見せる。

「あれ、本当にわかんない？アリス、俺だよ俺」

俺……？珍しい一人称に私が首を傾けると、少女が呆れたような溜息をついた。

親指と人差し指で拳銃の形を作ると、私のふくよかとはいえない胸に撃つ真似をしてくる。

「ほら、これ」

まだわかんないというふうには首を振った途端、今度は「ムカつく」と呟かれた。

美少女の不機嫌顔ほど恐ろしいものはない。

「何それ、俺の存在なんてどうでもいいってこと？ほら、これでわかるでしょ」

少女は苛々と言葉を吐きだし、その帽子を勢いよく取った。帽子が宙を舞い、闇のなか白が一輪咲き誇る。

帽子の下には、色素の薄い茶髪と……可愛らしい毛玉のようなものが二つ、あった。

毛玉？違う、これは……耳だ。この丸っこい形は　　ネズミ？

「れ、レストお?!」

「今更気づいたわけ。鈍いんじゃない?」

だ、だ、だ、だって、まさか男が女装してるなんて誰も思わないわよ!

あんぐりと口を大きく開けて驚きを表現する私を、レストは可笑しがるようにカラカラ笑う。もうすっかり美少女の化けの皮は剥がれていて、楽しいな笑顔は意地悪な少年のものであった。

確かによく見ればレストそのものだ。一度しか会わなかったから印象は薄いけど、出っぱなから銃口を向けられた記憶がある。

「な、なんで?!なんであなたこんなところに……」

「白ウサギに聞かなかった?俺らみたいな“カードもち”はこのパーティに出席しなきゃなんないの。マスターやマルスもいるよ」

「れ、レーテ達も……」

女装をしていいるのだろうか。

「……なんか勘違いしてるようだけど、女装してんのは俺一人だから」

「あ、そうなの?よかったあ……」

「そうなの?じゃないよ!マルスがドレスなんか着たらただのネタでしょうが!」

確かに男子が女装するというのはただでさえ嘔吐感ものだが、マルスは典型的な野球部系だ。

あの逞しい身体にピンクの振り振りドレス……うおい、頭がガンガンしてきたぞ!

いやしかし、ここまで似合うという方が異常なのだ。フレームの場合は一目で彼だとわかったが、レストに関しては全く思いつきもし

なかった。

もとから背が私よりも小さいというのもあって、これっぽちも違和感を感じない。メイクも秀逸で、フレイムがやっていたのよりも控えめだったがずっと上手だった。

私は感心したように溜息をつくとき、周りを見渡してレーテやマルスの姿を探した。あの二人も美形だから、かなり目立っているはずだ。

「でもレストくん、どうして一人だけ女装してるの？」

「ん……ちよっとしたサプライズだったんだけどね。メイク室から帰るときにあの女に絡まれてる君を見つけたの」

サプライズにはずいぶんと手の込んだ出来上がりだったが、人にはここのこだわりがあるのだろう。

私はあえて突っ込まずにレストが渡してきたジュースを受け取った。

「ああいう輩はどこにでもいるけどね……こういう上流階級の場には多いんだよ。ほんと、気分悪い」

不味いものを吐き捨てるようにレストは顔をしかめて言う。

私なんかよりもよっぽど不快な思いをしたらしい、機嫌が急降下していく彼を見て私はうろたえた。

レストは最後の一滴を飲み干すと、ワイングラスを乱暴に床へと叩きつけた。脆い作りのガラスは小さな音を立てて粉々に砕ける。

「リザ＝マリニオネーシャ」

………呪文？

「あの女の本名だよ。成り金野郎で有名な電気製品の社長の姪っ子。4人兄弟の末っ子でずいぶんと甘やかされたみたいだね。年は23

歳、お金さえあれば何でも手に入ると思っている。実際相当お金で男を買ってる。現在は　マルスのおっかけの一人、か」
「な、な、な、なんでそんなことまで知ってるの?!」

どこからかメモ帳を取り出してすらすら情報を並べ始めるレストが、ひどく恐ろしい人物のように思えた。

心なしかじりじりと後ろへ下がりはじめている私を、レストは心外だとでも言いたげに睨む。

「仕方ないでしょ。あの適当なマスターに全部を任せてはおけないんだから、情報管理は俺が担当。そこそこに大きい企業は細部まで調べる必要があるんだよ」

ああ、そうか……レーテは確かああ見えてこの世界で最大の資産家なのよね。それで城との対立も激しいとかなんとか。

うん、なんとなくわかった。敵情視察つてやつね。レーテ、いい友達持つてんなあ……。

いや、それはいいとしてさ。マルスのおっかけなんて情報は果たして必要なのか？

「ちなみにその人の好みを把握するのは、いざというときおびき出して人質にするため」

「黒い！君ちよつとお腹ん中黒いよ！」

「まあそれは冗談として。どうする？君が望むならあの女、公的にも存在的にも抹殺できるんだけど」

「冗談かよ！誰が望むかそんなの！存在的に抹殺して……要は殺すつてことよね？！ダメダメ、絶対だあめえっ!!」

「ああ、もつづるさいなあ、これも冗談だつて。　ねえ、アリス」

私がいつまでたってもこの世界に対して苦手意識を持ってしまふ理由の一つである。

どうしてか判らないが、この人たちはいつも唐突に話の切り替えをするのだ。

今まで冗談を言ってたと思えば、突然こちらを睨みつけ、暗い話をしたかと思えば無邪気な笑顔を浮かべる。当然、一般ピーポーである私が付いていけるはずがなかった。

レストは、真剣そのものの顔で私に聞いてきたのだ。

「可愛くなりたい？」

どうも、なんだかんだいって連休を潰して宿題を頑張っている作者です。私も諦めが悪いですね(´・`・´)。
 人とはなぜか追い詰められたとき(テストとかテストとかテストとか)に無性に趣味に走りたくなります。おかげでバンバン更新できてるんですけどね(´・`・´)……。一向に減らない宿題からは目をそむけてます

さて、今回は宣言した通りレスアリです！たぶんこれが最初じゃないかと(´・`・´)……。レストくん登場少ないですね(´・`・´)。
 しかし(´・`・´)……。ああ、ついにやってしまいました。念願の、フレ임様女装です。

私の中で女装をしてほしい(女装が似合う)男の子ベスト3は常にフレ임様、レストくん、ルアくんなのです(´・`・´)。
 余談ですがこの間イオとルアを書いて見たら二人ともとんでもない童顔に(´・`・´)……。やっぱりエロって難しいですねorz
 イオくん、女装は似合わないことはないんですけど……女装するならこの人は絶対にV系だと思えます。雰囲気的に。

……。……だからだと女装について語ってましたね。話戻します。
 えー、今回ロキくんは全く出てきませんでした。時間帯が夜だからですね、ハイ。

夜……というと出てくるのは紫の異物しかないのですが、こっちもまた出てきませんでした。まあまあいざれ、ですね(´・`・´)。
 デーダム(ep5) ロキ(ep5) レスト(ep6)と主要人物が移り変わっていきますが……今回のパーティー編ではほぼ一巡します。ってことはもちろん、イオくんも出ます。ルアとマルスは……ほんのちょこっと、かな？

レストくんは可愛いくせに鬼畜設定です。

全体的に雰囲気はイオに似てますが……イオから性的なものが全部抜け落ちた感じですかね。何も残らなくなりそうですけど。

最後らへんで冗談を連発してますが　　おそらく本人は本当にやるんじゃないかと。

最後、何やら意味深な言葉を零してますが次回はほぼコメディです！物語上パーティー編はほとんど要らない話の詰まったやつなのでが……今回の話も物語にはほぼ関係ありません。そういうやつは大抵明るい話が多いですね。

ではでは、この間気付いたことなのですがアリ幕一周年ですよ！もう一年も書き続けてることを思うと……何でこんなに進んでないんでしょうねorz

特別なことは何ひとつできませんが、第五章が終わったら番外編をやると思います！季節的にたぶんあの行事かな……。

何かリクエスト等ありましたら、遠慮なく言って下さい

「あ、あのお〜……レスト、レストくん？」

「黙って。瞬きしちゃだめだよ」

と言われてももうかれこれ10分目を開きっぱなしなんですけど……。

私はカピカピに乾いた眼球の痛みをぐっところえながらどうしてこ
うなったのだろうと回想し始めた。

どこで間違えたのかというところ、そもそもレストに遭遇したあたりか
ら私の運命はあらぬ方向へ曲がってしまったのかもしれない。

『可愛くなりたい？』

レストはあの会場の場で私にそう尋ねた後、ぎゅっと握った。

小さい手には似合わず、随分と握力が強いことで……。えっ、とい

うかなにこれ。握り潰そうとしてんの？

私なんか怨み買いましたかあああっ？！

『れ、れれれレストくん?!』

『可愛くなりたいよねうん君も曲がりなりにも乙女だもんね、その
ちぐはぐな衣装何？さつきからずっと思ってたんだけど君のメイク
係センスなさすぎ、ただ飾ればいってもんじゃないでしょ、だか
ら』

ここまでをこのガキ一息で言いやがった。

息切れもしないでにこりと黒い笑みを見せるレストを私は呆然と見
る。

ああ……この握手は親愛でも殺意でもなくて。「逃がさねえぞ」と

いう強迫だったのね……。

『僕が可愛くしてあげる』

そうして状況は今に至る。

私はレストに睫毛の手入れまでされながらそつと溜息をついた。その瞬間レストの文句が飛ぶ。どうやら息がかかってしまったらしい。当然か……こんなに近くで作業してるんだから。

レストは今までにないほど真剣な顔で、私の顔に触っていた。そこにやましい理由は全くないとわかっていても、少しドキリとする。今は女装をしているとはいえ、もともと彼は可愛い系の美形さんなのだ。こんなに近くて恥ずかしくないはずがない。

「アリスの肌、すごく綺麗だね」

そんなこと言われたのは初めてだ。私の疑うような視線が気に障ったのか、レストは唇を尖らせると私の頬をその細い指で撫でた。指先が、うつすらと残る傷跡をなぞる。先日イオにつけられた傷だ。今ではもう痛みはないが、若干残ってしまっているらしい。

「嘘じゃない、素質はなかなかのものだと思うよ。ったく……こんなに白い肌に誰が傷をつけたんだか」

自分よりも格段に可愛い美少女に言われましても……。私は複雑な心境のまま「別に」と呟いた。

レストはまだ不満そうだったが、もう一度「ほんとだって」というと、再びメイクに集中し始める。

「こういう肌は下手にメイクを重ねないほうがいい。でもこれだけ白いと逆に顔色が悪そうに見えるから、多少ほっぺにやっつくね。」

顔立ちも悪くない、眉毛は……少し濃くしとくか。目も大きいよね。アイシャドウは不要、っと。リップはこのままの色を引き出して……」

ぶつぶつと独り言を呟きながら私の顔を彩っていくレストはまさしく職人だった。時がたつにつれ私の知らない単語がポンポン飛び出していく。

緊張を持ってやってくれる彼を止めるのもどうかと思い、私はさらに5分瞬きもせずじっと座っていた。

終わった時には腰が痛んでしょうがなかった。普段から猫背なのだろうか……。

「いてて……お、終わった？」

「うん、顔はね」

「……………顔は？」

「顔は、終わったよ」

「……………」

「さ、その服ちやつちやと脱いじやって」

逃げたい。私のそんな感情をいち早く察知したのか、レストは笑顔を張りつけながら私の腕を掴んだ。

ぎりぎりともものすごい力を込められて、私は逃亡を断念する。マッハで出口まで行ったとしても、この悪魔から逃れるのは不可能そうだ。

「脱ぐっていつても、レストくん男の子よね？さすがに年ごろの淑女としてそれはどうかと……」

「なに今更恥ずかしかってんのさ。ほら、早く脱がないと俺が脱がすよ」

言うが早いかレストは私の胸元を飾るレースを乱暴に引き剥がす。一緒に掴まれた宝石や真珠がバラバラになって床に飛び散った。この時、私はあるうことか宝石の心配をしていたのだ。あ、勿体ないなとか、高そうなのになとか。まさかレストが着々とボタンを外しているとも気付かずに……。

「　　ってちょっとレストおっ?!」

気付いたのは、胸の半ばまでドレスのボタンが外されたところだった。自分の鈍さ加減に死にたくなる。

レストは眉をひそめて不機嫌そうに「何?」とこちらを見た。ボタンを弄りながら見上げられるという状況にドキリと胸が高鳴る。

い、いや、落ち付け。こいつはいくら可愛くても小さくてもれっきとした男なのだ! 女装していても男なのだ!

男にこ、こ、こ、こんなことされてたまるかあっ!

「何? じゃないわよバカ! あ、あんた一体何やって……!」

「何って……アリスの服脱がそうとしてるんだけど? アリスが自分で脱ぐの恥ずかしがるから」

「こっちの方がよっぽど恥ずかしいわボケえっ!」

構わず続けようとするレストの手をふんだくって引き剥がす。胸元をかき集めれば、みっともない事に下着がもう半分ほど顔を見せていた。

私は顔を真っ赤にさせながらため息をつくレストを睨みつける。レストは一瞬驚いたように大きな目を見開くと、意地悪そうな笑みを浮かべた。

私の、大嫌いな笑み。なのにドキリとしてしまう、笑み。何を考えられているのか判らなくて　　怖い。

茶色の前髪を掻きあげてゆっくりと息をつく姿が、女装をしている

というのにひどく男らしかった。

その瞬間、ここにいるのが“男”なのだと改めて確認させられる。

「アリス、ちよつと涙ぐんでる。気をつけた方がいいと思うよ。そういう反抗的な瞳は逆にそそるから」

「なっ……!!」

突然レストの口から出てきた危ない言葉に私は絶句した。

目の前の彼は、私なんかあっさり完敗してしまうほどの美少女だ。

今は目を細めてシニカルな笑みを見せているけど、くりつとした大きな目は見上げられるとそりゃあもう可愛いのだ。

無意識にレストは、私の中で女の子として登録されていたのかもしれない。いきなり男を丸出しにした言葉をぶつけられて、私は声を上げることもできずに固まっていた。

レストはそんな私をじろじろと鑑定すると、満足げにうなずいた。

「それに今は俺がメイクしてやってるしね。可愛いよ、アリス」

「は、はあ……あ、ありがとうございマス」

結論。深く掘り下げないようにしよう。

レストという男は知れば知るほどに混乱してくるタイプだ。こういうのは関わらないのが一番……もうすでに関わっちゃってる気もしないでもないけど！

私は胸元を必死で隠しながら、レストから顔をそらした。

「と、とにかく！さすがに恥ずかしいから出てって……!!」

「はあ？何で俺が出てかなきゃなんないのさ、ムカつく。別にいいよ、女の肌なんか見慣れてるから。だって俺」

肌を見慣れてる？ってことは何か、女兄弟に囲まれて育ってきたの

か。

私は小説などでよくある展開を頭の中で繰り広げる。

豊満な胸を持ったお姉さま方にさんざん甘やかされて育ってきたレストくん。だからこんなにメイクがうまかったりして。

ありそうありそう、などと呟く私の目の前で、レストは世にも恐ろしい台詞を吐いた。

「女と何度も寝てるから」

「……………は？」

「だからあー、女と」

「繰り返さんでいいいいっ!!」

「ぶがっ」

私は勢いよく飛び出すと、レストの細い身体を押し倒してその口を両手で塞いだ。

さすがに驚いたのか、レストは一瞬目を見張るとすぐにバタバタと暴れ始める。

この…………っ、暴れたいのはこっちだっっーの！

「何するのさアリス！」

「何じゃないわよ！あんたさっきから聞いてれば教育上に悪いことポンポン言っ…………！子供はそういうこと言っちゃんいけないの！このマセガキ！」

そりゃあ、この国の精神年齢なんて知ったこっちゃんない。成人の年だって知らないし、どこからが犯罪なのかも知らない。

もしかしたらこれが普通なのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。だが、少なくとも 淑女の前で堂々と言っ言葉ではないだろう？！

子供、という言葉に反応したのか、それともマセガキという侮辱に

腹が立つたのか、レストは怒ったように顔を歪めると私の身体を突き飛ばした。

意外にも強い力に、私はよろめいて横に倒れる。その後を追うようにしてレストが私の襟首を掴んできた。

あつという間に形勢逆転。気が付けば私は、レストに押し倒されるような形で床に背中をつけていた。

まずいと思いつつも、したたかに打った頭は正常には動いてくれない。

「っ……は、離れてよ!」

「あんたさあ さっきから俺のことガキガキって言うけど、勘違いしてんじゃないの?俺、あんたと年代だよ」

「んなのどうでも

ワッツ?」

この世界に来てから、衝撃的な光景など腐るほどあった。ウサ耳から始まり、猫耳、ネズミ耳まで……地球では普通見ない光景だ。

だから言えよう。もう慣れた、と。突然アフロが出てきても虹色の髪が出てきても萌耳シリーズが出てきても、さほど驚かない……そんな自信があった。

目の前にいるのは、くりくりとした瞳をお持ちのカワイ子ちゃん。男だけだ。

私よりも小さくて細くて均質のとれた綺麗な身体。ドレスで飾ってるけど。

声だって、私とさほど変わらないほどに高い。顔なんて、私よりもはるかに小さい。

これが同年代の男子だなんて神様、冗談もほどほどにして下さい。泣けてきます。

「……………同年代?」

「来月には17になるけど。マルスより年上。あいつ2週間ぐらい前に16歳になったばっかだからね、ほとんど1年違いだよ」

「ご親切に耳寄りな情報をどうも。へえ……あのマルスがレストよりも年下。ついでに私も誕生日遅いから年下。」

……マルスは20センチ以上、私も2、3センチほど背が高いんですけどね。

今この場で、レストが「可愛い」と言われることを時々極端に嫌う理由がわかった気がする。なるほど確かに、この年でこの背だったらコンプレックスにでもなるだろう。

うんうんと一人頷く私を見て何を取り間違えたか、レストは不満そうに眉を寄せると顔を近づけてきた。

可愛い顔でなおかつ女装をしているからさっぱり危機感がわからなかったが、さすがに10センチ先まで近付けられると、心臓が飛び跳ねる。

「だからガキだなんてなめられると、すっごくムカつく。俺だってちゃんとした“男”だったこと、身体にわからせないとダメなわけ？」

この口調……イオにそっくりだ。最も、彼の声はもう1オクターブ低くて寝起きのように若干掠れているのだけだ。

私は目を見開いてレストの大きな瞳を覗き見た。

思い返してみると、さっきからイオと同じ仕草ばかりしている。前髪を掻きあげたり、意地悪に笑ってみたり……イオのあの特徴的な口ぶりだって本物には程遠かったが、明らかに真似ているところがあつた。

レストは私の眼が自分じゃない誰かを見ていることに敏感にも気付くと、30センチほど顔を遠ざけて私に訝しげな視線をよこした。それをばっちり受け取ってしまった私はごくりと息をのむ。貞操の

危機は遠ざかったが……レストの機嫌はさらに悪化したらしい。

「あの、さ。レストってもしかしてイオのこと……好きだったりする？」

「はあ？」

シリアスもエロも綺麗さっぱり吹っ飛ぶ、一瞬の間。

「……ぼ、僕、男には興味ないんだけど」

「ちつがああうっ！！恋愛的な意味じゃなくてさっ、普通にさっ！イオとは友達なの？」

「イオさんと、ぼ……俺が？まさか、冗談やめてよね気持ち悪い」

レストは「僕」といいかけて慌てたように「俺」と言いなおした。ふむ……甘える時と動揺した時は「僕」なのか。案外「僕」というのが地なのかもしれない。

だとしたら「俺」というのはイオに似せてるとか？

しかし「気持ち悪い」と再度呟くレストは嘘をついているという様子ではなかった。泡立つ肌をごしごしとこすって不快そうに顔を歪める。

ああ……こりゃ相当嫌われてるわね。アレルギー反応っぽい発疹できてるし。

イオアレルギー……うわ、なんか本当にありそう。ああいうタイプは好き嫌いがはっきり分かれるからなあ……。

「あ、あの、レスト大丈夫……？」

「大丈夫なわけないでしょ！なんでこの僕があんなバカ猫と……うつわ鳥肌！大体猫とネズミが仲良くする方がおかしいよ！あっちは僕のこと非常食だなんて思っちゃってるわけ。わかる？」

「あ、そっか。言われてみれば……」

「あの甘ったれた口調も大っ嫌い！べたべた触ってくんのも、至る所にてめえの汚ねえ指紋残してるんじゃないやねえよって感じ！チャラチヤラピアスとかしてるし、女関係は僕以上にだらしないし、「男でも一応大丈夫」とか背筋凍るんですけど！もうほんと、異次元空間まで吹っ飛んでしまえ……！」

この時、私はレストの全貌を見た……気がする。曖昧な言葉で締めくくったのは、だんだんと私の知識範囲を超えている単語が飛び交ったからだ。次々と叩きつけられる単語にカタカナ語が混じり初めてそれが悪口なのかどうかもわからなくなる。

面白いほどに、そりゃあもう面白いほどに、レストはぺらぺらと一人でイオの汚点を並べ立てた。しかし私にはもはや何が何だか分からない。

喰う食われるという関係は、こんなにも人間に憎しみを与えるのだろうか。うーん……恐るべし、自然界。

レストは一人称が「僕」に戻ってるにも気付かずに、約3分ぶっ続けでしゃべった後、ようやくすべて言い終えたというように息をついた。私はその時を見計らってうつすらと汗ばむレストに呼び掛ける。

「れ、レストくん？」

「とにかく！アリスもアリスだよ。何で僕とあの変態女たらし超腹黒策略家いつか禿げればいいのに野郎と仲がいいと思ったわけ？」

ちよ、名前長いんですけど！どこが切れ目かわからないから変態でまとめてあげて！

「え、えっと、な、なんとなく……」

ギロツ

もんのすごい形相で睨みつけられた。美人の吊り目とはこんなにも恐ろしいものか。

あれだけ不快な思いをさせられたんだ。適当な理由だったらどうなるか判ってんだろうな。

トパーズの瞳が燃えたぎる黒い炎を宿してそう語る。私は襟首を掴まれながらピキンと凍りついた。

理由を言わないとまず間違ひなく殺される。だが、本当の理由を言っても衝動的に殺されるような……。

「えっと、お、落ち着いて聞いてね？レストの口調がイオにちょっと似てるから、ま、真似してるのかなぁ……って」

「」
空気が凍りついた。正確に言えば、空気中のすべての水蒸気が凍りついた。気体から固体へと昇華した水蒸気が落ちる音さえ聞こえそうだ。

そ、そりゃあそうよね……これだけ嫌っているやつ我真似してるだなんて言われたらもんのすごく怒る、わよね……。

私は湿度0パーセントの空間でピクリとも動かなくなったレストの顔を恐る恐る覗き込む。

レストは、能面のような無表情で宙を睨んでいた。まるでそこに親の敵がいるとも言つように、虚空を睨みつけるその瞳には静かな、だが苛烈な憎悪が宿っている。

憎悪……？違う、これは……。

「何だ、アリス意外とイオさんのこと見てるんだね。よく気付いたものだよ、ほんとに」

「へ……？ってことはレスト、貴方……」

レストははつきり肯定する代わりに腰を上げると、近くのダンスを探り始めた。言葉に迷う私を無視して薄い水色のドレスを引っ張り出す。

「ほら」

「は？うわっ……ふう」

ばさりと若干の埃を舞わせてドレスが私の顔にかぶせられた。

意外にも軽いドレスを腕に抱きながら一人驚く私をもう一度睨みつけ、レストは踵を返す。私は慌てて彼の背中を呼びとめたが、レストは全く足を止めようとしなかった。

「ちよ、レスト、レストつたら！」

「……俺、外に出てるから。5分でそれに着替えて」

「ご、5分……じゃなくて！」

つか時間みじかつ！こんなドレス一人じゃ着れません！

なんて愚痴を聞いたらまた脱がせられるのだろう。すんでのところで言葉を飲み込む。

「俺はね、アリス」

子供に言い聞かせるような落ち着いた低い声。こんな声も出せるのかと私はひそかに驚いた。

「……ただ、なんだか……自嘲するような、冷たい響きを持っている。」

「イオさんのことは、もちろん嫌いだよ。でもそれ以上に、強く憧れる。いや、憧憬なんて美しいものじゃないかもね。俺

は……僕は、あの強さに嫉妬してるんだ」

だから、余計に嫌いだよ。レストは吐き捨てるようにそう付け足すと、今度は脇目も触れずに部屋を出ていった。私はしばらく呆然として動けなかったが、やがてのろのろと動きだすと綺麗な生地ドレスを名残惜しむように脱ぎ始めた。

『可愛いつていうなっ、弱いつていうなっ』

この間会った時に寝起きで性格が変わり、突然錯乱し始めたレストの言葉を思い出す。

彼は、過剰なほどに弱さを嫌っていた……いや、違う。あれは嫌っていたのではない　怖れていたのだ。

そんなにも、強さというものは大事なのか。そもそもレストが狂氣的なまでに求める強さとは何なのか。

(強さを求めている……というよりはむしろ弱さから逃げてるって感じなのかしら)

考えをこころ変えて検討してみるが、言葉が抽象的すぎてわからなくなり、余計どつぼにはまる。

悶々と考え考え考え……そうしているうちにいつの間にか、とても重要なことを忘れていた。

ドレスは一通り脱いだ。いちいちレースが爪に絡まって大変だったが、なんとかできたと言っただろう。

そう、脱いだ。

脱いだ、だけでタイムアップ。

「はい、5分ジャスト。アリスー、次は宝石をねー……………」
あ

「……………ん？」

「あ……………失礼しました……………」

「……………？レスト？」

一拍置いて、レストが気まずそうに目をそらしてそそくさとドアを閉めた。

突然挙動不審になった彼を訝しみながら、何がおかしいのかと私は鏡を覗きこむ。

「……………」

絶句。のち、絶叫。

「僕のせいじゃないと思うよ？！僕だって遠慮してたし、そもそもちんたらしてるアリスが悪いんじゃないの！」

「黙らっしやい！！ええいつ、このガキ！人の、は、裸を生でみやがってえええっ！！！」

「裸あ？！ばっかじゃないの？ちゃんと下着着てたじゃん！ま、その上からでも胸がべったんこつてことは一目瞭然だったけど！」

「な、な、な、な、何よっ！貧乳で何が悪い！あんただってまな板じゃない！」

「膨らんでたら逆に困るよ！何度も言うけど、僕は男だ！」

「うっ、うるさい！人の裸を無断で見るような悪い子は……………こっしでやるっ！」

くだらない論争の末、私は耐えかねたようにレストの丸いネズミ耳

を引つ張るときぎゅぎゅと両手で撫でつけた。
レストは心底驚いたように目を見開くと、次いでくすぐったそうに身をよじらせる。

マルスとロキでわかったが、獣人のほとんどは耳や尻尾を触られるのが一番弱いらしい。これを掴んでしまえば体中から力は抜けるしくすぐったくなるので散々なのだそうだ。

うん、いわゆる脇の下や首筋や足の裏のことよね、きっと。それを考えると微妙な気分になるけど。

「ふかふかする……熊耳もこんな感じなのかしらあ……」

「ふ、ふざけないで！熊よりも僕の方が可愛いに……ひゃあっ、き、決まって、ううう……」

恥ずかしそうに生意気な口を手で塞ぐレストが可愛すぎて死ぬる。

これがさつき卑猥な言葉を連発していたマセガキだとはとても思えなかった。

私はレストの耳を撫でながら至福の瞬間ときに酔いしれていた。その心地よい感触は、マルスやロキにも無論引けを取らない。

ドレスを脱いで、新しいドレスを着ようとしたその瞬間を見られてしまったのだ、これくらいの報復どうってことないだろう。

あれから私は完全にパニックになり、部屋中のものをレストへと投げつけた。おかげで今現在、部屋にはメイク一式やら布やらがばらまかれている。

あれは我ながら大人げない反応だったと思う。泣きださないだけマシだったが……相当ショックだったのは確かだ。

「はあ……どうしよう、私お嫁にいけない……」

私は涙目になり始めたレストをようやく解放すると、ぐったりとい

すに腰掛けた。さすがに色々ありすぎて疲れた。レストは警戒するように私を見ていたが、時間を惜しいと感じたらしく不機嫌そうな顔を繕いながら私の後ろに立つ。最後の仕上げであるらしい髪を持ち上げると、丁寧な手つきでそれを梳かし始めた。

「大丈夫だよ。本当に緊急で緊急な時は俺が貰ってやらないこともないかも知れないけどないから」

「……結局貰わないんじゃないの？」

「黙れこの変態。オヤジみたいなこと言いやがって……君こそイオさんの変態がうつってんじゃないの？」

「………それ最悪の貶し言葉だと思っただけど」

「………うん、僕も今そう思った。ごめん」

まったく気持ちのこもってない声で謝罪され、私は思わず嘔き出した。

途端にレストに避難するような目で睨まれる。

「ちょっと、不用意に唾飛ばさないでよね。メイクが崩れる」

彼の意外に生真面目な所に苦笑しながら、私は適当に受け流した。レストもそれほどうるさく言う気はなかったらしく、再び髪に熱中し始める。

ほんの少し、ほんの少しだけだけれど、彼との付き合い方を理解した気がする。

（なんだかんだ言っても、イオのことをちょっぴり好きだったりして……）

そんなことを口にしたら髪の毛を全部引き抜かれるような気がして

ならないが。

本当に憎んでいるわけではなかったと思う。ほんの一片でも、尊敬できることがあるから……嫉妬をする。

たぶんレストとは、イオのことによく話が合うような気がした。

最も、お互い素直にはなれないから貶す言葉しか見つからないのだからうけど。

「ねえ、レストっていつもこんなことやってるの？」

「こんなことって？」

髪形を模索しているせいか、集中しすぎているレストの声はどことなく冷たい。

「女装とか……メイクとか」

「女装は必要な時だけね。メイクは、これが僕の本業だから」

あれ、口調は「僕」に戻ってる……物事に熱中すると元に戻るんだ……。

新しい発見に私は半ば興奮しながら、他愛ない話を続けた。

この頃ルアやら双子やら……ロキはまだまだとしても、変な奴らとばかり会話していたから普通の会話というのが新鮮に思えて仕方がなかった。

レストの方も私が普通の会話に飢えていると承知しているのか、そっけないながらも一言一言真面目に返してくれる。

「本業って……レストは“眠りネズミ”が役職じゃないの？」

「“カード”は“アリス”がいない限り何の意味も持たない。だからそれまでの人生を埋める仕事が必要だったんだよ。僕、メイクが好きなんだ。こう、なんていうか……人が生まれ変わっていく感じが」

「へえ……。じゃあもしかしてレーテ達も？」

「もちろん。マスターはいろんな仕事掛け持ちしてるんだよ。商業が主だけど……趣味で喫茶店開いたり」

「ははっ、やりそー」

「でもあの人根本的なところダメダメだから！整理能力がないからお茶のパックなんてしょっちゅうなくすし。それを買いに行く僕とマルスの気にもなってよー……その上マルスが方向音痴だからすぐ迷うしさあ」

だんだんと話は展開して行って、レーテとマルスの愚痴へと飛ぶ。しかし悪口を連ねていくレストは誰がどう見ても楽しげだった。

本当に二人のこと、好きなのだなと思う。レストが彼らをとて大事に思っていることが、言葉の端々から伝わってきた。

私は嬉しそうに話すレストを見て小さく微笑み、ゆるやかに流れる時間に身を委ねた。

少しだけ、ほっとする。

ルア達と一緒にいるのが疲れるというわけではない。彼らの隣は温かくて楽しくて、大好きだ。

だけどたまにはこうやって……くだらない話を続けていたくなるようなものでしょう？

「……………あ、そっか」

「アリス？」

突然相槌以外の言葉を発した私に、レストが不思議そうな視線を向けてくる。

う……。なんだかまた怒られるような気がしてきた……。

「い、いや、レストといると安心するなあって思ってたらね、これ

って……」

「うん？」

「お、女友達といる時と一緒にだなあ……なーんて」

わざわざ“女”と入れたのは男友達と言ってまず最初に出てきた顔があの子だったからだ。

あいつらと一緒にいて安心できるだなんてとんでもない。むしろ今回は何をやらかすかとハラハラさせられっぱなしだ。

レストは驚いたように手を止めていたが、くすりと小さく笑うと再び作業を再開させた。

あ、あれ、怒ってない……？私がほつと胸をなでおろした直後、レストが耳元でそれはそれはハスキーな声を出した。

「脱毛させてやるうかこのアマ」

お、怒ってました……。

こんな時間なので手短に……。

内容はサブタイトルほどまづいものではない、はず……きつと……。
レストくんは単なるシヨタキャラじゃないのです)、・・・。
えー、ちなみに終盤のやつは第三章ep1の「変わりゆく気持ち」
ですね。

ほんのちよつとレスト編に入ってますが、本格的に書くのはいるの
ずつと後です。

さて、パーティー編思った以上に長いですが、残り3話……の予定で
す！

これが終わったら久々の番外編ですね！ネタを集めとかなきゃ……。

次回更新はおそらく短くなるので、一日早めの1月16日です。

本日遅れちゃってすみませんでした！

果てしなくどうでもいいのですが、一昨日新年初めての授業(体育)
で右手の小指を骨折してしまいました。何か大切な縁でも切れるの
かしら……。

メイクと世間話の幕はレストの歓声によって下ろされた。

初めてのことができた子どものように手を叩いて“完成品”を嬉しそうに見る。

そのあまりに無邪気な反応に、私は和みながら緩く巻かれた髪の毛を指で触ってみた。いつものはねっ毛とはだいぶ違い、なんだかふわふわしている。

「うん、やっぱりアリスって磨けば綺麗になるタイプだよ！宝石の原石だね！」

「あ、ありがと……」

「磨かなきゃそこらの石ころと同じだけど」

褒められているのか貶されているのか判らない。きつとこれは彼なりに「もっとお洒落に気を使え」と言っているのだろう。

私は曖昧な笑顔を返しながら、席を立て鏡の前に立とうとした。

一度でいいから、自分の化粧姿を見てみたい。

しかし期待に胸を膨らませた私を、レストは袖を引っ張って止める。

「アリスはまだ見ちゃだあめ。こういうのは後のお楽しみなの」

こういうのは普通本人が一番最初に見るんじゃないか？

そうツッコミたくても、可愛らしい女声を上げながら甘えたように腕を絡めてくるレストに逆らえるはずがない。

私は情けない事にデレデレした顔を見せながら、緩慢に頷いて見せた。
途端にレスト大先生の叱責が飛ぶ。

「そこっ、鼻の下を伸ばさない！君みたいに目つきの悪い人には最高に似合わないから！もつと凛々しく気高く！背筋は丸めない！」
「……………ルアにも激似なんですけど。もしかしてレストくんは白ウサギと友達だったり……………」

「しないよ。そもそも大した面識ないし。くだらないこと言っただいで、ほら早くいくよ！あいつに見せなきゃ！」

「へ？あ、あいつって……………」

誰のこと？そう続ける前に、レストは私の腕をひつたくるようにして掴み出口へと急いだ。

ここまで急いでいるレストも、張り切っているレストも初めて見るかもしれない……………。私はそのきれいな横顔を見ながら思わず「可愛い」と呟いてしまった。

先程の、リザ……………マリオネットさん？に向けていた笑顔とは全く質が違う。自然と綻んでいるようなその笑顔は、期待で輝いているのだ。

もし私が男だったら、この笑顔をちらりと見るだけで悩殺されたいだろう。

いや、中身は男だってわかってるんだけどね！変な意味じゃないけどね！

「ちょ、ちょっとレスト！もう少しゆっくり歩いてよ……………ヒールが！」

ちょうどパーティー会場へ入ったところだった。レストが急に歩く速度を速め、私は思わず自分の足に躓きそうになる。

何とか態勢を持ち直すが、履きなれないヒールは正直きつかった。これ以上急かされたら無残な靴ズレができそう……。

「でもアリス、あんまりこの場にいるのはまずいと思うよ。………
………」

その時確かに、特大級の舌打ちを耳にしたはずなのだ。なのに足を止めたレストの方を向けば、そこには可憐な花の笑顔。危うく聞こえた舌打ちを幻聴として認識してしまうところだった。

「こんばんは、お嬢さん方」

突然前方から大人びた男性が聞こえ、私は自然と身体を強張らせながらそちらに目を向ける。

いつの間に近づいてきたのか、目の前には背の高い二人組が優しげな笑顔を浮かべて佇んでいた。

一人は柔和な顔立ちで長い金髪を後ろでひとくりにしている男。もう一方は金髪の男とは対照的に、どこか野性的な男臭さを持っていた。こちらは短い黒髪だ。どこか雰囲気かロキに似てなくもない。どちらも整った顔をしていて、いかにももてそうという雰囲気だ。

「えっと、こ、こんばんは……」

しかし普段からロキやイオ、ルアや双子の顔を間近で見ているからイケメンへの態勢は十分と言っていいほどについていた。

私は小さく息を吸うと、臆することなくぺこりとお辞儀をする。それに合わせるようにレストも正式な礼をした。

ドレスの裾を軽く持ち上げ、相手を見たまま腰を落とすように片足を引く。そのあまりにも優雅な礼に、私は状況も忘れて彼に見惚れていた。

「ご機嫌麗しゆう。申し訳ありませんが、急いでいるのでそこを開けていただけませんか」

口調は完璧しとやかな淑女のそれなのに、言葉にはどこか棘が含まれている。

つ、つまりさつさと退けつて言つてんのよね……。貴族つて何でこんな言葉長くしなきゃ通じないのかしら……。

しかし相手の方も負けてはいなかった。金髪の方が小さく肩をすくめるといわゆる王子スマイルを見せた。

あまりにもわざとらしい笑みにぞくりと寒気がして、次いで全身が泡立つ。

「これは失礼しました、あまりにお綺麗なお二方だったので。ですがパーティーはまだしばらく始まらないようです、そこまで焦らずともよいでしょうか、時間つぶしに私たちと」

「遠慮しておきます。待たせている者がいますので。ねえ、お姉さま？」

男の言葉をぶんだぎつてレストがぴしゃりと言いはなった。いい加減長い挨拶にイラついてきたのか、その声音は若干低くなってしまっている。

レストは戸惑つたようにたじろぐ男を無視して私の方を向いて可愛らしく小首を傾げてみせた。

可愛い、可愛いのだがそれは……。

ぞくつ

おそらく今晚最大級となる寒気が背筋を通り抜けた。脳内で吹雪がものすごい勢いでか弱い私に襲いかかる。

可愛い事にはおそらく間違いないだろう。その証拠に、男二人も頬を染めて見つめてるし。

だけど、だけどね？そんなに手をぎゅうぎゅう握り締めなくったつていいじゃないですかあああつつつ！！

「そ、そ、そ、そうですわね、おほ、おほほほ、ほ……」

ぎちぎちと軋む左手の骨が碎ける様子が頭に浮かんだが、ここで悲鳴を上げたら間違いなく殺される。

私は何とか笑顔をとり繕いながら必死に頷いた。しかし私の決死の努力も虚しく、今度は黒髪の方がニヤニヤと笑いながら話しかけてきた。

馴れ馴れしくも私の腕なんかを掴んでしまっている。

「そんなこと言わないでさ、ちょっとだけでいいし」

碎けた言い方で、ようやく理解した。ああ……つまり今までのこれは逆ナンされていたのだ。

私はちらりと隣のレストを見た。まあ、考えてみれば無理のないことだ。私の隣には可憐な美少女が華の笑顔を浮かべて立っているのだから。

つか。

（めんどくせえええっ！なんで一々こんな固っ苦しい敬語で誘うわけ？！普通に「一緒にお茶いかがですか」「結構です」でいいじゃん！）

おかげで気付くのに遅れてしまった。

私は内心逆ギレをしながら、睨みつけるように黒髪の男を見た。

レストが苛つくのもわかる。あれだけワクワクしていいこうとしたの

にこんなところで足止めされたら興ざめだ。

「放して下さい。急いでるんです」

「へえ……意外と二人ともきつかったりするんだ。そんなんじゃ男にモテないぜ？」

男にモテる……。私は黒髪の男の言葉を頭の中で反芻する。

確かに私の周りには男ばかりいるかもしれない。頭についているオブジェはともかく、あれを世の中のイケメンと言うなら……。

そいつらにストーキングされたりトラップをかけられたり、拳句の果てにはセクハラ行為をされることがモテるといふのだろうか？

「うっわ、返上したい……」

「は？」

「い、いえ。何でもありません。それでは、失礼します」

つていけないいけない。つい心の声が……。

いや、世間一般の「モテる」はそんな不純でわけのわからないことじゃないはずだ。

しかしどちらにしても私は元の世界へ帰るのだ。この世界でモテたつて何も残りほしくない。二次元で彼氏を作ると大して差はないだろう。

私は一人頷くと、レストの手を取ってその場を去ろうとした。しかし今度は金髪の男が腕を伸ばして進行方向を防ぐ。

そのあまりのしつこさに、私ですら顔をしかめてしまった。

金髪の男もそれが見えてただろうに、知らぬ顔でしゃべりだす。

「まあまあ、今は“アリス”が行方不明になっている所ですし、のんびりしていきませんか？パーティーなんてどうせすぐには始まりませんよ」

「だから何回言えば……っ！」
「……今何て言いました？」

苛々と彼の腕を払おうとした私を、レストが横から止めた。
今までは冷たい怒りを押し隠しながら笑顔を見せていたのに、打って変わって敵しい表情になっている。

これでは男だとはれてしまうのではないかと懸念したが、相変わらずその横顔は綺麗なままだ。

「アリス」が行方不明？どうしてそんなことがわかったんですか？」

「どうしても何も……“白ウサギ”のやつがついさっきここを通ったんですよ。“アリス”を見ませんでしたか？ほんと、どこまでもスカしたやつでしたね」

どうやら金髪君はルアのことを心底嫌っているらしい。顔をしかめ、いきなり砕けた口調で毒づいた。

そんな……どうしてそんなこと言うの？

ルアはスカしてなんかいない。表情だってコロコロ変わるし、よく叫ぶし、怒ったときには鬼にだってなる。それに何より……彼は、一生懸命フレイム様のことや皆のことを考えている。

(なのになんで、ルアのことを知りもしないあんたなんかがそういうことを言うの……?!)

私は身体の奥がじわじわと熱くなっていくのを感じた。沸々と、このひと達の知ったような言葉に怒りがわき上がる。

私が何か抗議の一つでも言おうとした時、黒髪の男がケラケラと笑いながら金髪の男に話しかけた。

「しっかし今回の“アリス”は歴代の中でも最低ランクのブスなん
だろ？“白ウサギ”も何で城中を駆け回ってまで探すかねえ……。
なあ、そう思わない？」

金髪の方の敬語が不完全なものになったのを機に、黒髪の男は妙に
馴れ馴れしい口調で私に同意を求めた。

ブス。そのたった二文字が、吸血鬼を殺す杭のように私の胸に刺さ
った。

「仕方ないですよ。“カードもち”の哀れな運命さだめ、といったところ
でしょう。僕だったら不細工な女に仕えるくらいなら死んだ方がま
し、と思いますけどね」

「“アリス”は全員目を見張るほどの美女って聞いてたんだけどな
あ……。今回は期待はずれ、か。あーあ、ならいつそくんなって感じ」

ぶちりと、私の中で確実に何かが切れた。

怒りと羞恥で身体が細かく震える。

ふざけるな、何もこっちだって好きで来たわけじゃない。あんたた
ちが勝手に期待して、勝手にがっかりして……。そんなの、私は悪く
ない。

そう思った。そう、思いたかった。すべて彼らのせいにして、
拳の一つでもその頬にめり込ませてやればいいのだ。

なのになぜ……。動けない……。っ。

「　　って」

「……お譲さん？」

「わた、しだつて……。！私だつて！」

みんなに、認められたい。

その一言が出ることはなかった。
今まで黙りこくっていたレストが小さく「なるほど」と呟いた声が出た……気がした。
次の瞬間。

「がっ……?!」

ものすごい速度でレストが地面に手をつき、ドレスを翻して黒髪の男の顎に蹴りを入れた。ヒールの踵と男の顎の骨との間で、どちらかに罅が入るような音がわずかに聞こえる。

レストは華麗な蹴りを食らわせた後、ばさりと翻るドレスを掻きよせて金髪男の隣へ着地した。ガツンと耳に痛い音が鼓膜を打つ。

重力に従ってぐしゃぐしゃになった髪を気だるげに掻き上げるレストを、黒髪男と金髪男は呆然と見ていた。

それもそうだろう、私だってわけがわからない。こぼれかけた涙もあまりに鮮やかな技に引っ込んでしまった。

「なっ、何すんだてめえっ!」

「何って……超必殺レストきゅんボンバーキック ですよ?」

って明らかに今つけた名前だろ!

その場にいた誰もが心の声が、この時初めて通じ合った。……ふふふふふふふと不気味に笑うレストを除いて。

レストはひとしきりおなかを抱えて笑い終わると、今度は金髪男の方へと視線を向けた。金髪男はその瞳に怯えを宿しながら、逃げようと踵を返す。

しかし敵に背中を見せるのはご法度。

レストは素早く追いかけると高く跳び、彼の前に回り込んだ。忘れ

ていたが、彼も獣人。ロキ同様その跳躍力は……人間離れしている。ふわりと、レストの頭にのせられていた帽子が外れて地面に落ちる。剥き出しの獣耳を見た途端、男がひゅうつと奇妙な音を喉から発した。

「ひっ……ね、眠りネズミ……っ!!」

「当たり前。何だ、君みたいなゴミ屑でも帽子屋ファミリーの用心棒ぐらい知ってるんだね」

「な、なんで、確かあの殺し屋は男って……!!」

そこでようやく男は気付いたらしい。ぺったんこの胸と意地悪気な笑みを浮かべているレストの顔を交互に見て、さあっと顔を蒼くした。

自分が口説いていたのが男だったという事実を受け入れられないらしい、男はだらしなく口をパクパクさせながら一步一步ゆっくり後退していく。

レストはひどくゆっくりとした動作で、どこかにひそめていたらしい黒い銃を構えてその銃口をぴたりと男の額に定めた。

「別にそこらにポイ捨てされているゴミ屑になんか興味はなかったんだよ。だけどまさかここまで人畜有害なゴミ屑だとね……ちゃんとかゴミ箱に戻してやった方がいいかな」

「ひっ……す、すみませんでしたっ……!まさか“眠りネズミ”とは知らず、このような狼藉を……」

「どうでもいいよ、そんなの。もうゴミ野郎と話すのも疲れた。バイバイ」

カチリ

レボルバーの回す音が頭の中に響いた瞬間、突然状況が現実となっ

て私に襲いかかってきた。
今までどこかフィクション映画を見ている気分だったというのに、彼の残忍な笑みを見た途端にそれが紛れもない現実なのだと思います。知らされる。
そうだ……。

今、目の前で人が殺されようとしているのだ。

「やめてえっ!!」

レストがちらりとこちらの方を見た。ひどく冷たい視線に、駆け寄ろうとしていた私は思わずそこで硬直してしまう。

てつきり、そのまま撃ち殺すのだと思った。引き金に指をかけて、軽く自分の方へ人差し指を引き寄せる。たったそれだけの動作で、男の脳天に風穴があく……はずだった。

しかしレストは意外にもあっさり引いた。残念そうなため息をひとつと同時に、銃を下す。神に祈る形でうなだれていた男は、その行動に気付いた様子もなくひたすら謝罪を繰り返していた。

しかしさすがに一発も浴びさせないであのレストが引くわけがなかった。レストは腕を振り上げると綺麗な金髪を思い切り殴った。

……銃身で。

あえなく、金髪男は気絶する。黒髪の方はというと、仲間を置いて自分だけ逃げたらしい。

あまりのあっけなさに拍子抜けする私のもとを、レストはすました顔で帰ってきた。あの黒い物騒なものはどこへか、また私の見ぬ間にしまっている。

「……レスト、銃」

「うん？」

「銃を出しなさい。ポイしなさい、ポイ」
「……銃のポイ捨てほど危ないものはないと思うよ」
「じゃあ私が預かるから！子供はそんなもの持ってちゃだめです！」
「ええーっ？！でも同じ16歳じゃん！」

結果、銃はレストが保管するけれど私と一緒にいる時には絶対に使わないことという和解に至った。

レストはまだまだ不満そうだったが、これだけは譲れない。そう何人も私の前で殺されてたまるものか。

「でも……よくレスト我慢したわね。絶対撃つと思ってた……」

「まあ、ああいうゴミ屑は撃っても撃っても一向に減らないからね。弾の無駄だし」

ゴミ……レストの毒舌は半端なく怖い。心の底からあの人たちのことを「ゴミ屑」と思っているのだから、余計だ。

私は顔をひきつらせながら「それに」とつなげるレストを見ていた。

「あのまま撃つたら、アリスが泣くと思ったから」

「レストくん……！」

それって、私が悲しまないように？

うわぁ……なんだかほとんど初めてレストくんの優しさが心にしみる……！

「化粧してる時に泣いたら8割増しブスになるんだよ。ほんと、気をつけてよね」

(かわいくねえええ!!！)

結局ただの職業魂の塊だった。いや、感動した私が短絡すぎだった
んだけどね?!

しかし確かに、言われてみればあの場で血を見たら私はどうなって
しまったのだろう。血の臭いに混乱して……レストを攻め立てただ
ろうか。

涙でせっかくのメイクを落とし、惨めな女の顔で「どうして殺した
のよ」と理不尽に怒鳴り散らして。

本当に……私は醜い。醜くて、弱い。

「化粧はね」

落ち着いたレストの声が、私を現実の世界へと引き戻した。
先程まで唇を尖らせたりして子供っぽい仕草を見せていたのに、う
つてかわって大人の男の雰囲気を纏っている。それはもう、俳優に
なれるのではないかと思うほどのかわりっぷりだ。

「化粧は、女の戦装束って言われてるんだ」

どこか自慢するような声の響き。

しかし、戦装束とはどういうことだろう……? わけがわからず首を
傾げる私に、レストはさらに鼻を高くして説明してくれた。

「泣いたら化粧が崩れるでしょ? だからどんなに泣きたくても化粧
をしている時は絶対に泣いちゃいけない。女の戦装束……俺は、こ
の名前結構好きかも」

女の、戦装束。私はそつと口の中で呟いてみる。

そんなこと、考えたこともなかった。そもそも化粧というものは意
味を見出せなくて、普段から疎遠にしてきたのだ。

レストの口から次々と崩れた化粧の例が語られ、私は思わずくすり

と笑ってしまった。

確かに。崩れた化粧がこんなにも酷いものだというなら、泣くに泣けなくなるかもしれない。

おかしそつに笑う私を見て、レストはふわりと優しい笑みを浮かべ……最後にこつ付け足した。

「だからアリスもさ、強くなりたいときは化粧をすればいいと思うよ」

その言葉が彼にとつてどんな意味を持っていたか、知るのはしばらく後の話。

「禿げる春日ああっ!!!」

変換したらこんなんになりました。どこか探してみてくださいね。
ちなみに作者は若林さん派なのよん（自我崩壊）

「遅かったじゃん、レスト！ってうおおっ?!」

あらかじめ集合する場所を決めておいたのか、マルスは案外あっさり見つかった。レストがその名前を大きな声で呼ぶと、嬉しそうな笑顔に次いで奇妙な声を発して一步下がる。

相も変わらずモデル並みの背丈と大人っぽい雰囲気を纏っているというのに、反応が残念な奴だ。

しかし呆れ果てる私に対してレストはもう慣れたらしく、顔色一つ変えずにニツコリほほ笑んだ。まさに惱殺ものの笑顔に、私はくろりと眩暈を覚える。

「どっ?可愛いでしょ俺」

自信満々に言いはなつが、それに負けないだけの容姿を持っていた。私が男だったら全力で頷いていた所だ。

しかし肝心のマルスはじろじろとドレス姿のレストを見ながら複雑そうな表情を浮かべた。

「お前って女装趣味あったんだな……」

「まあ、良いんじゃない?信じらんねえぐらい似合ってるし」

ごっそり。その表現が一番正しいだろう。マルスが豪快に笑った瞬間、レストの顔から表情という表情がごっそりとすべて抜け落ちた。

怒り狂うよりもはるかに恐ろしいその光景に私は危うく悲鳴を上げて逃げだしそうになる。遠巻きに三人を見守る一般人達も一斉にレストから目をそらした。

レストは虚ろに濁るその眼でじとりとマルスを睨みつけるが、この鈍ちん男は全く気付く様子もなく樂觀した調子でしゃべり続けた。この時ほどこのバカの首を絞めたいと思ったことはないだろう。

「……………じゃあ一応聞くけどさあ、こっちのアリスはどう？俺が仕立て上げた最高級の作品なんだけど」

マルスのおしゃべりを遮って、レストが私の方へ親指を立ててきた。作品扱いかよ！……………そうツッコむにはレストの眼が怖すぎる。

なんで私を引つ張り出すのだと一瞬疑問に思ったが、すぐに思い出す。

（そう言えば確かこれはサプライズのための女装で……………ってもしかして、対象はマルスオンリー？マルスを驚かせるためだけにここまですの込んだことやってたんだ……………。つかもしかして、あれだけ強引に私のメイクをしたのって……………）

マルスに、自慢するため？

そう思うと、なんだかやるせない気持ちで一杯になった。何時間もかけて用意したであろうサプライズが、今この瞬間「似合ってる」の一言で終わらせられようとしている。その間、約30秒。

というかもしかなくても、私ってただ単に利用されてただけ？

「え、それ嬢さんだったのか。へえ、化けてんなあ……………」

「ふっ、ふん！そうでしょう？僕のメイクは天下一品だからね。さあさあ、もっと褒め称えろ。ついでに跪いて足をお舐め」

軽い驚愕を見せたマルスに、レストはころりと機嫌を直して得意げな顔でふんぞり返る。

「とうか君……間違いなくSの気あるよね……。とんでもないことを口走るレストに、私は軽く引く。」

しかしまたしてもマルスは、機嫌よく笑うレストに対して核爆弾を発射した。

「そんなことよりさ、早くにんじんジュース取りにいこうぜ！」

「……そんなこと、より……？」

「俺あのジュース好きなんだよなあ……。にんじんはやっぱ生が一番だけどな！あれは特別だぜ！」

明るい笑顔で、そりやあもつ、拳の一つでも入れたくなるようなキラした笑顔でマルスは言うと、レストに背を向けて一人張り切ってテーブルの方へ移動しようとした。

レストはその大きな背中を絶望の色を宿す瞳で見つめ、小さく声を漏らすとその顔を俯けてしまう。

てつきり、涙をこぼすのだと思っていた。下唇を噛みしめながら、むしゃくしゃする感情を抑えきれずに。

「……何、さ。せっかく、喜ぶと思って、やったのに。僕だってこんなカツコ、好きでやってるわけじゃないのに……っ！」

「レストくん……」

私は慰めの言葉を模索しながら、彼の肩に触れようとした。しかしその指が触れることはなかった。

レストは涙でいっぱい目の目でマルスの背中を睨みつけると、自慢の跳躍力で彼の背後へと瞬間移動し

「禿げるカスがあああつ!!！」

「ぶへおえあつ！」

絶叫に驚いて振り返ったマルスの横っ面に、見事なハイドロップキックを決めた。

教訓。

仲睦まじいのは結構ですが、精々死なない程度に。

「アリス！」

探し始めて1時間後、ようやく目当ての少女の背中を見つけてルアはほっと息をついた。

心配した？そんなものじゃない。パーティーの参加者ほぼ全員に目撃情報を求めても一向に見つからなかったのだ、始終心臓が壊れて

しまいそうだった。

さて、どんな説教をしてやろう。安心してすぐに思い浮かぶのはそんなことばかりだった。

アリスが、こちらを振り向く。

「る、ルア……」

「一体どこに行つてたんですか！まったく、後10分で見つからなかったらパーティーを中止してでも探す予定だったんですからね！

つてあれ、アリス……その服はどこで？」

腕の届くところまで近づいてようやく、ルアはアリスのドレスが先ほど着てたものと違うことに気付いた。よく見れば髪形も顔のメイクも、全く違う。

淡い水色のドレスはこの季節には若干寒いのではないかと思う薄い生地ので、派手な装飾は極めて少ない。強いて言えば胸に刺繍された白の花々とドレスの裾を飾る濃紺のレースだけだ。宝石も首にかかるごく小さなアクアマリンだけで、ブレスレットなどは銀だけで作られている。

髪は緩やかなウェーブがかけてられていて、すべて下ろされていた。化粧は決してきついものではなく、彼女の凛とした美しさを最大限に引き出している。

「あ、あの、ルア？そんなにじろじろ見ないでほしいんだけど……」

「え、あつ、すみませんアリス。その素晴らしいメイクは誰が？」

つい職業柄、彼女の容姿をきつい視線で吟味していたらしい。

ルアは慌てて姿勢を正すと、いつもの優しそうな笑顔を張り付けた。それだけでアリスは安心したように息をつき、顔を綻ばせて答えてくれる。

「……まずいな。こんな可愛い顔、他のやつらに見せたくない……」。

ルアは周りの視線を体中で感じながら、内心激しく舌打ちした。どうせならアリスも、二人きりの時にこんな笑顔を見せてくれればいいのに。

「えつとね、さつきレストにあつたから……その時やつてもらったの。一応宝石とかは全部回収したから」

「ああ、なるほど“眠りネズミ”が。どうりで……」

“眠りネズミ”と言うと、この国数多いメイク師の中で最年少かつ最優秀の少年だ。ティーンズの人気を独占し、今一番売れている。まあ今は“アリス”のこともあつて休業しているが。

しかし、何故眠りネズミなどと接触を……？彼は城側に対抗する勢力、帽子屋ファミリーの用心棒の一人だったはずだ。

とても気になるが、にこにこ笑うアリスの気分を害したくない。

ルアは小さく息をつくと、ふわりと柔らかい笑顔を浮かべた。

周りでそれを見物していた貴婦人の何人かが、それを見て卒倒するが、そんなルアにとってはどうでもいいことだ。

ただ重要なのは、傍にアリスがいること。

「すごく可愛いです、アリス」

「ははっ……ルアは何かと褒め言葉が多いからなあ……」

笑う彼女は、完璧にルアのことを信用していないらしい。

ああ、もう……っ。そんなふうには笑わないでほしい。

ルアは低く呻くと、ぎろりと右斜め横に一瞥を送った。アリスのことをほんのり紅潮した顔で見ていた青年はルアの視線に気づくと、慌てて目をそらす。もちろん、この好奇の視線がその男のものだけでないこともわかっていた。

ルアは、もてる。自慢ではないが、もてる。このように熱い視線を

受けるのは決して珍しい事ではないのだ。

しかしその3……いや、4割が男性の粘っこい視線とは、どういうことか。まさかここまで男受けする顔だとは思いたくない。

なら当然、結論は決まっている。この男どもは、アリスのことを見ているのだ。

「本当ですよ、少しは警戒して下さい。まったく……アリスが可愛くなってしまったせいで花につくアブラムシが大量発生しそうですね」

「はあ？なんでアブラムシが出んのよ。農薬でもまけばいいじゃない」

「……常々まいてますよ」

こんなボケたアリスも可愛いのだが、やっぱり少しは自覚してほしい。

アリスは知らないだろうが、彼女についていたメイク師に「化粧を濃いめにしてくれ」と頼み込んだのはルアだった。

多くの視線が集まる舞台だからこそ、彼女の魅力を少しでも抑えておきたい。

巷を飛び交う噂とは大違いの実物に驚く一般人を見るのも見物だが、これ以上アリスに寄りつく虫を増やしたくなかった。

……最も、虫を駆除する方法は数多考えているが。それでも、思ってしまう。

アリスの魅力を知るのなんて、僕一人で十分だ……

歪んだ独占欲ということは重々承知だ。だが、ルアをこんなふうにするのは無防備なアリス自身だということをいい加減自覚してもいいと思う。

ルアは今度こそしっかりとため息をつく、いまだに信用してくれないアリスの耳元に唇を寄せると少しかすれた声で低く囁いた。

「本当に綺麗ですよ、アリス。閉じ込めたくなくなるくらい、可愛いです」

「~~~~~っうー!!」

一つは、他の男の目に曝したくないから。一つは、僕以外の男を知らないように。

小鳥のように、籠ケージに閉じ込めておけたらどんなに良いだろう。

本気でそう思ったのだが、案の定アリスは顔を真っ赤にしてルアから離れてしまった。

「いつ、いきなり声を低くすんな！吃驚するから！」

「吃驚じゃなくて、ドッキリでしょう？」

「う、うるさいうるさい！」

ルアは少し残念そうに肩をすくめた。

純情な彼女の反応は可愛くて面白くてつい弄りたくなってしまっただが、これ以上ちよっかいを出すと本気でむくれてしまいそうだ。

ルアは慎重に彼女に近づくとその手を取り、笑顔でエスコートした。きつと今ごろこっつりと自分に絞られたフレームがむすつとした顔でアリスの帰りを待っているのだろう。

アリスとの会話が名残惜しい気もしたが、早い所パーティーを始めないといけないことを思い出したルアは歌うような声でアリスに言った。

「さあ、行きましようか　　マドモアゼル」

「うっわ、気障ったらしい……」

アリスの不評が容赦なく飛んできたのは、次の瞬間のことだった。

どうもすみません、さっそく更新に遅れてしまった力ス作者です(・
ん！) 笑い事じゃないですよ。ほんっと申し訳ありません！

えー、前回「次回更新はおそらく短くなるので」なんてことをほ
ざいてた気がしますが、真っ赤な嘘です。超長いです、いつも通り
いや、まさかナンパ事件がここまで長くなるなんて思わなかったん
ですよ……orz
若干シリアスも混じってしまいましたし、レストくんを漢前に書き
たかったし……。
ということ、今回は特例として二つに分けさせていただきました。
後半短くなってしまったが……レストくんの華麗なキックで我慢し
て下さい(土下座)

では、ep8、9合わせてちょこつと解説をしていきたいと思
います。

ちなみに作者はこの15年一切化粧というものをしたことがないの
で、そういうことはさっぱり分からないのです(○・○)いや、
女らしくなった方がいいのはわかるんですけどね……正直めんどく
さくってやってらんね
ええーつと、前半はほとんどレスト×アリスでしたね。レストくん
はいわゆる鬼畜です。なのにシヨタです。

あまり関係ありませんが、【chapter - 0】ep3自重？
知ってるけど使いません 左 の最後に登場人物紹介を置いて
いるのですが、少しずつ詳しく書いています。

確か最近のものでは「一人称」「属性」「強さ」を追加しました。

その他「備考」は常々ひどいことが新たに書かれています。
もう一度目を通すと、新しい事がわかるかもしれません（*）
そのうち「モテ度」「美形度」「鬼畜度（笑）」を追加するかもし
れません。

……脱線しました。話戻します。

えー、ナンパをしていた男どもはいわゆる雑魚キャラです。もはや
名前すらも決まってる……。

金髪の方をカール、黒髪の方をボブとでも呼んであげて下さい（・
、、）

ep8の一番最後、何やら意味深な言葉が書かれてますが……一体
レストくんにとって「強さ」とは何なのでしょうね。

どちらにしろマルス×レスト編はかなり後になります。忘れない程
度に二人を出そうとは思いますが……。

後半はちょっと重めのルアくんです。

なんだかこの頃エロ担当はイオとルアの二人になってきてますね（
、、*）。ルア君は言葉で、イオくんは行動でセクハ……ごふ
つ、「大人の事情により視聴できません」的なことをやってる気が
します。

ロキはそういうことに対してはほぼ空気ですしね……。少し彼にも
チャンスやるか……。

なんと計4話、レスアリが続いてしまいました。そろそろあいつが
出てくるような出てこないような……。

つてことで次回更新は1月20日です。今度こそ遅れないように……
……！

そろそろ受験シーズンですね……。私の学校も昨日中学受験日で

した。

ま、まさかお忙しい受験生の皆さまがこんな小説を、ましてやこんなグダグダなあとがきを呼んでるとは思いませんが！
受験生の皆さま、頑張ってください！フレー！フレー！

待合室にはフレーム一人が不機嫌そうな顔で鎮座していた。デイーとダムは入れ違いで私のことを探しているそうだ。

ルアはドアを押さえながら目で入るよう促す。私はごくりと一つ息をのんで「失礼します」とか細い声を出した。

「……大丈夫です、アリスは絶対に傷つけさせません。フレーム様にも非はありませんから」

ルアが小声で励ましてくれるが、フレームが怒るのも無理はないと思う。一時の感情に任せて部屋を飛び出してしまい、そのまま一時間余り戻ってこなかったのだ。

私はこちらを静かに睨みつけるフレームの前に立つと、緊張した面持ちで彼の瞳を見つめた。

黒い怒りに揺らめく赤の瞳は、夜の湖面のような静寂に満ちている。逆にそれが彼の苛立ちを示していた。

どんな言い訳も通じそうにない。だったら……。私は小さく息を吸い込むと、深く頭を下げた。

「　　勝手な行動をしてごめんなさい」

フレームは何も言わなかった。当然だろう、私はまだ「これからは軽率な行動は慎みます」の一言でさえ言っていないのだから。

彼が待っているのはその言葉だなんてこと、わかっている。だけど……そんなこと、言えるはずもない。

私はきつとまた、逃げだすだろう。それを確信しているうちは、適当な誓約は立てられなかった。

「白ウサギ！ 姫さま見つかったって？」

タイミングがいいのか悪いのか、ディーとダムがなだれ込むようにして部屋に入ってきた。

ルアはずかに眉をしかめて彼らを睨みつけると、黙れとでも言うように人差し指をたてる。

しかしこの兄弟が白ウサギの言いつけを守るはずもなく……ルアを押しのと私の横へと駆けつけてきた。

抱きつかれはしないものも、二人に挟まれた私。重い空気は一瞬にして霧散する。

「おお！ なんか姫さま綺麗になった？ すっげー、可愛い！」

「あ、ありがとう……」

顔を紅潮させて惜しむことなく絶賛するダムに対して、ディーは何やら真剣な面持ちだ。

商品を吟味するような目でつむじのあたりから爪先まで満遍なく見る。

「姫さまさあ……僕らが破産したら昔のよしみとして体売って稼いでよ。これはかなり高くつきそうだし」

……聞かなかったことにしよう。いくらなんでもそんな打算的な褒め方はないと思う。

二人が空気も読まずに騒いでいると、その場を見計らってルアが口を挟んできた。

「 フレイム様もむくれるのはいい加減にして下さい。もう怒ってませんか」

デイーと私の間をすり抜けてフレイムの前に立つとその髪をくしゃりと撫でつける。

フレイムは嫌そうにそれを払いのけるとプイツと顔をそむけてしまった。

(うん？あれ、これってもしかして……)

重い空気なんて、どこにもない。それは双子に破壊されたからではなく、最初から存在しなかった……？

身を屈めて瞳を覗きこむルアとむすーとした顔で睨みつけるフレイムは、怒りすぎた母親と拗ねた子どものそれだった。

私の考えを裏付けるように、双子が私にこしょこしょと囁いてきた。右耳にダムの、左耳にデイーの息がかかってこそばゆい。

「 姫さまが出てってからね、白ウサギ滅茶苦茶怒ったんだよ」

「 そりゃもう、烈火の如く。二人とも大喧嘩！」

「 でさでさ、さつきからフレイム様すっげー機嫌悪いの」

「 火花が飛ぶから俺らも姫さま探しに専念したんだけどねー」

と、いうことらしい。

あれ、私全然関係なくね？

「 あ、あのフレイム様……？」

「 何」

地の底から這い出すようなおどろおどろしい声音に私は怯みそうになる。

しかし、フレイムの鋭い視線はルアにだけひたすら注がれていた。私のことなど初めから視界に入っていないようだ。私は小さく息をのむと覚悟を決めたように話し始めた。

「もしかしてフレイム様が怒ってるのって私じゃなくて……」

「はあ？何で僕が君ごときに心を乱さなきゃなんないのさ。むしろ面倒なパーティーを遅らせてくれて感謝してるくらいだよ」

「」

……私があれだけ恐縮したのはなんだったのだ。

フレイムはルアにもう一度頭を撫でられるといくらか落ち着いた瞳で私を見て、細い息をついた。

こきこきとだいぶ凝っているらしい肩を鳴らしながらゆっくりとした動作で椅子から立ち上がる。

彼の立ち絵は相変わらず素晴らしいものだった。レストの女装は可愛いといった感じだったが、フレイムは美人の一言である。赤髪を耳にかけ直す仕草など、人を引き付ける妖艶さを持っている。

「めんどくさいけど、仕方ないな。早くこの服脱ぎたいし、客どもも騒ぎ始めてるし。行くよ、アリス」

「あ、は、はいっ……」

短い髪をパサリと手で払いのけて私に強気な瞳を向けてきた。一瞬反応が遅れ、私も慌てて居住まいを正す。

しかし2秒としない内にディーが瞳を潤ませてフレイムに突っかかってきた。

「えー！フレイム様脱いじゃうのー？」

「……脱ぐ」

「そんなこと言わないでさ、今度はこの服着てくれよ！」

そう言っでどこにしまっであつたのか、ダムはひょいとそれをつまんでみせた。

黒の生地に、純白のレースがふんだんに使われている。ひらひらのスカート部分は大体も物半分よりちよい上の長さにまで整えられていて、後ろの腰の部分には明るい赤のリボンが大きく自分を主張していた。

全国の乙女たちに聞いたところ、大体が「一度は着てみたい」と答えるその衣装　　いわゆるメイド服と呼ばれるもの　　をみた
フレイムの顔は、なんとも壮絶なものだった。

さあつとすべての血が潮のように引いて蒼くなつたかと思えば、その服に腕を通す自分を想像して真っ赤になる。

それでも、顔が引きつることはなかった。　　いや、単に硬直していただけかもしれない。

「…………嫌だ」

フレイムの小さな呟きなど気づいたそぶりも見せず、双子は妄想の世界へと浸り始めた。

女子高生みたいにきゃいきゃい騒いでは、これまたどっから引つ張り出してきたのか、大きな旅行用バッグから次々と衣装を取り出していく。

その興奮っぷりにはルアも私も3歩くらい引いた。5メートルほど離れた今でも、その熱気が伝わってくる。

「あとそれからねー、チャイナ服や着物！あ、浴衣の着崩しもいいかも！」

「えへへへ、後この猫耳つけてねー、スク水猫耳少女！あ、でも大人っぽく巫女装束もいいかも…………」

「バニーガール！」

「ナース！」
「セーラー服！」
「ゴスロリ！」
「魔女っ子！」
「着ぐるみ！」

言うまでもないが、全部女ものである。

ここまで来たら最後に取り出されたクマの着ぐるみが一番マシに思えてくるというものだ。……つかよく入ったな、そんなでかいの。直接の被害者であるフレイムと言ったらそれはもう、哀れなものであつた。目を点にして漫画で言う「ポカーン」状態になっている。

これが似合うのだあつちの方がいいだの言い合う二人を化け物でも見るような目で一瞥してから、ルアがさかさず助け船を出した。

身を屈めてそつと彼の耳元に囁く。フレイムは固い首をなんとか動かして頷くと、私を急かすように「行くよ」と促した。

しばし呆然としていた私だが、その声に身を震わせると慌てて彼の方へと駆け寄る。ここにいると双子の邪気に染まりそうで怖かつた。

「堂々としているんだ、アリス。もっと胸を張って……そう。手を振られても降り返さないで、少し微笑み返すだけに留めるんだ。いいね？」

少し平静を取り戻したフレイムは壇上までの通路を早足で歩きながら小声で指示を下した。

私はいちいち頷きながら、彼の後に続く。あの短時間で悪かった顔

色はすっかり元に戻っていた。

「あ、あのフレイム様、ルアになんて言われたんですか……?」

「……………演説が終わったら全力で逃げて下さいって。それと、あの衣装はカバンごと火にくべときますって」

「……………よく言った、ルア。私は脳内のルアの頭を撫でまわしながら、ほっと息をついた。

フレイムは確かに女装があり得ないほど似合うが、あの双子の餌食になるにはあまりに可哀想だ。その証拠に、あの熱気を思い出した今でも彼の身体はわずかに震えている。

「パーティーは今日の12時まで。それまでは自由にするがいい。

パーティーでは“アリス”を縛りつけてはいけない。そういう“ルール”だからルアも下手に手出しできないだろうしね」

「あ、ありがとうございます!」

正直自由になれるというのは至上の喜びだった。レーテに会ってこの間のお礼も言いたいし、“ゲーム”についての情報収集も少しずつ進めなければいけない。

嬉しそうにここにこ笑う私を見て、フレイムが小さく笑った……………気がした。

「笑うと4割増しブス」

それは嘲笑だったけど。

辛辣な言葉に胸が熱くなり、思わず涙が零れそうになるが、自分が化粧していることに気づきぐっと堪える。

強気な目を返してくる私に、面白いとでも言いたげにフレイムは歪んだ笑みを返した。艶やかな唇が弧を描き、彼の妖艶さを引き出す。

「今の顔は悪くない。反抗する目の方がいいね」

「……………まあ、人の好みは様々ですから良いですけど」

双子には怒った顔がいいと言われたり、イオには傷ついた顔が好きと言われたり、フレイムには反抗する目がいいと言われたり……………私ってそんな顔しかしてないのか。

むすつと唇を尖らせながら拗ねる私を見て、フレイムは冷笑を浮かべた。

「別に好きだなんて言ってない。僕の隣に並ぶには見劣りしない程度だといったただけだ」

……………やはり、私はフレイムに嫌われている。彼の赤い瞳を見ればそれは一目瞭然だった。

フレイムの切り捨てるような言葉のナイフに、傷ついた私の心が深く抉られる。

彼はそれに気付いているのか気付いていないのか、私の手首を強引に取ると舞台裏から照明の照らす壇上へと上がった。

あまりの眩しさに、思わず私は顔を歪めてしまう。半拍も置かずにフレイムの小さな叱責が飛んできた。

「もっと自信を持って。自分がこの世界で一番美しいんだってからの自信を」

……………ついさっき4割ブスやら何やらひどい言葉を浴びさせた張本人が、どの口で言う。

私は呆れ半分怒り半分でフレイムの背中を睨みつけ、改めてホールを見渡した。今まで賑わっていたその場は、フレイムがマイクの前に立った瞬間から水を打ったように静かになっている。

張り詰めるような緊張感が空間に広がっていく中、ぶんぶん嬉しそうに腕を振る者がいた。

……マルスだ。

そばにてつきりレストもいるかと思っただけ、あの美少女の姿はどこにも見当たらなかった。

模試いたら、空気も読まずにはしゃいでいる彼の脚を恥ずかしそうにげしげし蹴り飛ばしているのだろう。安易に想像できるのだから怖い。

私は苦笑を彼らに返すと、再び目をホールへと走らせた。ほとんどの人が、マイクの前で挨拶を始めている絶世の美女、フレイムに見惚れている。

しかしごくわずかの視線が、興味深げに私を吟味していた。

「既知に知っていると思うが、この国は砂漠化が進んでいる。今回緊急で“アリス”を呼び寄せたのはそれを食い止めるためだ。“アリス”がこちらに来てから、急速に大地が回復し始めている。もうレイセント卿の管理下の第4エリアは半分使えるようだ。手順が逆になったが、このパーティーが終わり次第に“アリス”に壁の向こうの世界を見せようと思っている。少なくともここ砂漠化は異常だ。“アリス”の力を借りねばどうにもならん。だから、“アリス”には自らの“失クシモノ”を探すという名目でしばらくの間この世界に残ってもらう。その間に私がこの国の問題を片付けよう。異存はないな？」

いつもより声を低くして、威圧的な態度で本題に入り始める。その鋭い瞳にじろりとねめつけられ、一見誰もが頷いたように見えた。音も立てずに、ホールの中心で白い手袋をした手が拳がる。ちっと横に立っていた私は確かにフレイムの舌打ちを聞いた。マイクに入

らなかったのが奇跡だ。

「何か？帽子屋」

「おやおや、そんなに威嚇せずともよろしいのでは？私はただ質問があるから手を挙げたのですよ」

レーテの口調は聞いた限りではとても丁寧なものだが、その声には頑強な棘が生えている。

凍てつきそうなほどの空気の中、フレイムの低い嘲笑がマイクを伝ってホールに響いた。思わずレーテを除いたその場の全員が肝を冷やす。

「いいだろう、言ってみる。マイクを持っていかせようか？」

「いいえ、結構です。私の声も通っているようですから。さて、麗しの女王さまにお尋ねしますが　アリスをどこに拘束しておくつもりです？」

壇上に立って初めて、フレイムの顔から笑みが消えた。私は息をのんで、フレイムとレーテを交互に見やる。

レーテは仮面にいつも通りの笑顔を張り付けていたが、その眼は氷点下と言っていいほど冷たい。

一瞬その顔を憎悪に歪めてフレイムは、すぐに取ってつけたような笑みを取り戻した。だが、誰がどう見ても不自然な笑顔だ。

「これはこれは。随分と物騒なことを言うな。帽子屋、貴公も知つての通り“アリス”は結局どこにいても同じだ。この城にしようが、貴公の居座る森にしようが、生きている限り何の問題もない。むしろ生きていないと困るのだ。だからこれは“アリス”を保護しているのであって……」

「私が言っているのはそういう意味ではありません。貴方は、アリ

スが“失クシモノ”を探しだすまではこの世界に縛りつけると仰り
ましたね？アリスがそれを見つけ出さない限り、彼女はゲームオー
バーだ」

「……………言葉はいささか気に食わんが、その通りだ」

「なら、貴方は　　アリスを監禁して強制的にゲームオーバ
ーにするという手を思いつきはしませんか？」

「なっ……………！」

レーテの突拍子もない言葉に誰よりも驚いたのはもちろん私だった。
フレイムの横顔を思わず怯えた目で見つめてしまいが、仮面の上に
彩られた冷たい笑みからはどんな感情も読み取れない。

しかし一瞬こちらに向けられた赤い瞳の奥に潜んだ感情を読み取っ
た瞬間　　肌がぞわりと泡だった。

本気だ。

「ほお、生憎考えたこともないな。そんな狂気じみたこと、“イカ
レ”帽子屋しか発想しないだろう」

「褒め言葉として頂戴します。私は可能性を言ったまでです。貴方
はアリスを嫌っているという噂も耳にしましたからね。手足を削ぎ
落として身動きをとれなくすることなど、貴方には容易い事なので
は？」

レーテの言葉とともに、手足をすべて切断されて蟲のように床をの
た打ち回る自分のイメージが頭に入ってきた。

私は無意識に身体を震わせながら、彼の瞳を凝視する。その瞳はも
はや自分には向けられていなかったが、ぎらつくそれは無邪気なま
での輝きを宿していた。

「それで？貴公の要求はなんだ」

「……察しが良くて助かります。一つはアリスの身柄を帽子屋ファミリーに引き渡すこと、それから……猫がそちらに紛れ込んでいるでしょう。それはそちらにとって毒にかなりえない、私とその猫を引き受けましょう」

まるで領土争いのような、静かで……しかし苛烈な言葉の交わし合い。

観客は本来の目的も忘れてその戦いの行方に夢中になっていた。どちらが言い合いに勝つのか、興味津々に耳を傾けている。

しかし張本人である私にとってはとんでもない話だった。もしレーテが言い負かされれば……私は一体どうなってしまふのだろう。

「猫を返すことはできないな。彼はすでに“トワイドル・ディー・アムドダム門番”を打ち負かし誓約を取りつけてある。本人が望まない限り、“ルール違反”になつてしまふ」

ディーとダムを倒したという一言で、俄かにその場がわき立った。しかしフレイルムがトーンを落として「静かに」と指示をすると、まるで何事もなかったように静まり返る。

「それに、“アリス”を貴公に渡すこともできない」

「……貴方の下にいるのは彼女にとって危険です。私たち帽子屋ファミリーはもちろん、“アリス”を助ける立場の人間ですので一切手出しはできません。貴方と違って、アリスを傷つけたりしない。貴方はアリスを嫌っているのでしょうか？煩わしい存在が消えれば、貴方自身も楽なはず」

「……まるで聞きわけのない餓鬼だな。噂などに振り回されるのか。滑稽だな、帽子屋。どの馬鹿者たわけがそんなことを言ったなど知りもしないが……勘違いするな、私はアリスを愛している」

まるで重みのない愛の告白に、私は吐き気を覚えて一步下がろうとした。

しかし逃げようとする私を繋ぎとめるように、強く左手首を握られる。振り払おうとした瞬間、千切れるのではないかと思うほど強く引っ張られた。

倒れこむ私の頭を、細い指が押し付けるようにして後ろから支え

赤の瞳が、目に入る。

その瞳に見惚れているうちに髪を強く引っ張られて、強引に顔を上げさせられた。

悲鳴が唇から洩れるが、それが完全なものになる前に唇が温かいもので塞がれた。

「んっ……?!」

決して優しいものではない唇が、私のそれに押し付けられている。

唇へのキスは愛情の証。誰かがそんなことを世迷言のように言っていた気がするが、これがそんなものであるはずがない。

ただ、相手を組み伏せるために。ただ、相手を支配するために。ただ、相手を屈服させるために。

深さを求めてこなかったのが幸いといったところだろう。レーテに見せつけられるために行われた接吻は始まりと同様唐突に終わった。要らなくなった玩具を投げ捨てるように、フレイムは私を突き放す。よろめいた私は、屈辱にまみれた瞳で彼を睨みつけた。

フレイムはその瞳を見て歪な笑みを浮かべると、深紅ルージュの口紅リップを乱暴に袖で拭った。

呆然としているレーテに向かって言いはない。

「アリスは私の妃だ。誰にも渡しはしない」

汚らしい嘘にまみれた言葉は、
マイクを通すことなく会場に響き渡
った。

あいつかわらず時間にルーズな作者です……お腹すいた……。
この時間帯はどうも眠いので、雑談をこっそり省いて解説行きま
す……ハバネロ食べてえ……

今回、本編初のフレアリです。

作者としてはフレイム様は大好きなキャラなんですけどねえ……何
せアリスを嫌っているものですので。

こんな彼でも、好きと言ってくれるミラクル 寛大な人募集中です
(・・・)

どうも最後らへんでシリアスゾーンに突入してしまっただようですが、
前半はただの変態どもが騒いでるだけです。この部分いらなくね？
と今更後悔……。

双子とフレイム様の掛け合いは書いてて楽しかったです。えー、ち
なみに私はスク水猫耳フレちゃんを所もu(バズーカ)
ルアのターンはほとんど皆無です。双子とフレイム様の存在感に完
壁押しつぶされちゃってますね。

そしてようやく帽子屋さん再登場！最後に出たのはいつでしょう……
…ごめんよ、レーテ。

今回の彼はジジイverではなく外出用です。出来るだけ冷静沈着
カッコいい人風に書いてみたけど……逆に影が薄くなっただけでし
た(・・・)グスン
敬語色々間違ってたら申し訳ありません！国語の中で実は古典と同
じくらい苦手な分野なのです……。

さてさて、なんだか変な展開になってきましたが……このまま次回

に続きます。

次回はフレイム様暴走中ヾ(・・。)

そして、お待ちかね！変態紫が登場……予定ヾ(・・。)

そしてそして、もちろん言うまでもなく微エロですヾ(・・。)

……この顔文字殴りたくなったらすみません。

次回更新は1月24日です。その日に駿台模試があるので遅れる可能性も……善処を尽くします。

「ちょっと待って下さいフレイム様！あの言葉はどういう意味なんですか？！ちょっと……フレイム様！」

後ろから焦った声を上げながら追ってくるルアを振り払いながら、フレイムは廊下を早足で抜けていった。

私は手首を掴まれたまま引きずられるようにしてそれを追いかける。強く握りしめられた手首は信じられないほど痛い。きっと赤くなっ
てしまっているだろう。

悲鳴が断片的に口から洩れる。それを聞いたルアが赤い顔でフレイムを怒鳴りつけるが、彼は一向に振り向こうとしなかった。

「ふざけるのもいい加減にして下さい！貴方にどんな思惑があるのか知りませんが、アリスを傷つけることは絶対に許しません！！」

「君がそういうことを言うから」

感情のこもっていない声を上げるにつれて足がだんだんと遅くなる。ルアが追い付きそうになったが、私に触れることのできないようにその手を阻む。

すっかり頭に血が上っているルアはその青い瞳に黒い憎しみを込めてフレイムを睨みつけた。

フレイムはそれを満足そうに眺め、獲物を目の前にした肉食獣のように舌舐めずりをする。

これはただの冗談だと思いたかった。ルアをからかうための、悪質な冗談なのだ。

「この女をぐちゃぐちゃに壊したくなるんだろっ？」

「っ？！貴方、まさか……っ！」

赤かったルアの顔から、一気に血の気が引いていった。小刻みに唇を震わせながら必死に制止の言葉をかけてくる。しかしその様子にフレイムの嗜虐心はますますそそられたようだ。歪んだ笑いを見せつけると、私をすぐ傍に会った客室に突き飛ばした。

「きゃっ」

うまく受け身が取れなかった私は頭から床へと転倒する。フレイムは不安げな顔で後ろをついてきた双子にも冷笑を向けると、いつもより声を低くして命令した。

「僕が出てくるまでこの部屋の前を固めてる。いいか、何があっても開けるなよ。 どんな悲鳴が聞こえても」

「ふ、フレイム様……?」

「で、でも姫さま、嫌がつてんの……」

デーとダムが戸惑いがちに意見をしますが、フレイムの威圧に怯えているのは誰が見ても明らかだった。

無理もない。相手は尊敬する上司で、しかもこの国の最高権力者なのだから。

フレイムは笑みを深くすると嘲るように二人に言いはなった。

「人形は人形らしく主人の命令に従っておけ。一歩でもルアをこの部屋に入れてみる、貴様らを拷問室に放り込んでやる」

低い脅しに、まるで狼に睨まれた小動物のように二人の身体がビクンと震える。

双子はお互いの顔を見やると、ごくりと喉を鳴らして頷いた。

「……仰せのままに。我が主人^{マイ・ロード}」

膝をつくと、俯くように深く項垂れる。それが忠誠の証ということぐらいは、私にもわかった。

「い、嫌っ、いやぁ……」

裏切られたなどはとても思わないが……フレ임への恐怖のせいで小さな悲鳴が口から洩れてしまう。

フレ임は鬱陶しそうにこちらを睨みつけると、彼ら三人の目の前でドアを閉じた。我に返ったルアが慌てて止めにかかるが、一足遅い。

双子に食いとめられながら手を伸ばすルアがドアに遮られてすべてが闇に染まった。

落ちつけ、これはただ電気が付いていないからだ。落ち着け、落ち着け。大丈夫……大丈夫。

私は恐怖感に駆られ叫びだしそうになるのを必死で抑えながら、バクバク鳴る心臓を宥めすかした。

昏い闇から私は逃げるように、後ろへ後ろへと下がる。

「アリス！やめて下さいっ、アリスを傷つけないで下さい！！フレ임様！フレ임さま……っ」

無我夢中で扉を叩いていたルアの声が不自然に途切れた。次いで、どさりと何か重いものが床に倒れる音。

小さいけれどはつきり、「ごめんな」という泣き声を聞いた気がする。それがデイーのものか、ダムのものかまでは判別できない。

「ようやく静かになっ たね」

扉を睨みつけるようにして立っていたフレイムは、すべての音が消えたのを満足とでも言うように喉を鳴らす。

その横顔は鋭い刃のように細く、触れたら切れてしまいそうだ。綺麗な花だからと言って手を伸ばせば、魂ごと喰われてしまう。

私は手袋を外し、リボンを解いていくフレイムを見ていやいやするように首を振った。

「ねえ、アリス」

「な、なに……？」

「電気はつけてほしい？」

フレイムは胸元のボタンを丁寧に外しながら、もう一つの手で電気のスイッチを優しく撫でる。

他愛もない会話のはずなのに、何故か私は首を振ることも頷くこともできずに硬直していた。

この後何をされるかなんてわからない。この暗い部屋で、彼は私をどうするというのか。

『手足を削ぎ落として身動きをとれなくすることなど、貴方には容易い事なのでは？』

つい先ほどレーテが出していた例に、背筋が凍りつくような悪寒を覚えた。きっと本人はフレイムを挑発させるために過激な表現を使ったのだろう。

だけど　この人だったら、やりかねない。目の前で部下の首をはねたフレイムの顔が脳裏にちらついた。

冷笑。嘲笑。閔笑。　部下の血がべつとりと付いた顔で、こともなげに彼は笑って見せたのだ。

フレイムの手が、私の手首に絡みつく。そのあまりに冷たい指先に、私はビクンと大きく震えた。それを恐怖による震えだと解釈したのか、フレイムはますます笑みを深める。だが瞳だけは炎のような赤なのに、凍てつくような冷たさを宿していた。

「明るい所で痴態を晒すか、暗い所でわけもわからず凌辱されるか。どちらかを選べって言ってるんだ」

凌辱。リヨウジヨク。

頭の中で虚ろにその言葉が響く。恐怖が煽られないのは、その4文字に実感がわかないからだろうか。つい一週間前まで普通の女子高生をやっていた私に、組み敷かれる姿を思い浮かべるといっ方が無理だ。

フレイムがゆっくり私に近づいてきても私は逃げ出せずにいた。情けない事に足が震える。

わからない。想像なんてできない。でも　　こんなの、駄目だ。

「い、嫌です。こんなの、嫌です……っ」

「わかってないね。最初から君の意志なんて必要としてない」

ドンッ

殴られた、に近い衝撃が胸を襲った。実際は押されただけだったが、そのあまりの強さに私は苦しげな息を吐いて後ろに倒れる。

そこにあるのは、計算していたかのように設置されていたベッド。ふかふかなおかげで背中と頭をしたたか打つことはなかった。

しかし本当の恐怖はここからだ。

フレイムは押し倒された私の上に跨るようにして膝でドレスを押しさ

えつけ、さらに両手首を一纏めにして持っていたスカーフで縛りつけた。
あつという間に両手の自由を奪われた私は呆然と彼の瞳を見る。
なんて昏い血の色。この人は、私を愛してなんかいない。愛していたら、こんなに虚ろな光を浮かべたまま笑ったりしない。

「ど、して……どうして、こんな……っ」

「君を帽子屋に接触をさせるわけにはいかないからね」

しゅるりと私の喉元を隠していたリボンがとかれる。抵抗するため身をよじらせても、体格の割に力が強いフレイムはびくともしなかつた。

淡々と話しながら、ボタンに手をかける。その手つきからはまるで感情というものが見えてこなくて、恐怖感を感じるのだけど……担当医に健康診断をされているような、そんな安心感があつた。

「彼は実に優秀だよ。眠れる獅子、ってところかな。普段は怠けて眠りネズミに仕事を押し付けているようだけど、目を覚ましたとなればどこまでもねちっこく追い詰めてくる。そんな彼は、大層君の助けになるだろうね」

フレイムの口から出てくる激励にこんな時とはいえ私は顔をひきつらせた。

レーテが、眠れる獅子？整理整頓能力がマイナスの方面へ向いていて、仕事丸投げしてレストのストレスの原因となっている、あのレーテが？

「ぶっ」

「……何笑ってんの」

「あ、い、いえ、失礼しました」

首の皮を強くつねられ、私は慌てて笑いを引つ込める。不機嫌顔のフレイムは小さく鼻を鳴らすと、私の胸部を強く押してきた。

外部からの圧迫により、肺が苦しくなる。私は細切れの息を繰り返しながら彼の瞳を睨みつけた。

今はレーテのことなんか後だ。とりあえずこの暴走したお坊ちゃんを止めなければ……。

「レーテの、とこになんかつ……い、行きません！だから放して下さい！」

「馬鹿だね、君は。帽子屋は君を欲しがっている。だからあの場であんな発言をしたんだ。もし僕があの時でまかせを言ってなかったら……この城は“アリス”を傷つける場所として民衆から声が上がりに、3日としない内に“アリス”を城から立ち退かせなきゃいけなかったろうな。そして帽子屋は君を手に入れて万々歳だ」

「……………だからあの人たちを鎮めるために、偽りの愛を騙ったんですね」

もし私が何年か前のヤンキーだったら唾を地面に飛ばしていただろう。

胃がむかむかして、せっかくパーティーの合間にお腹に入れといった豪華なごちそうがこみ上げてきそうになる。

愛なんてもの、説教する気もないけれど。

ただ何故だろう。フレイムの嘲ったような笑顔が、平気で命を捨てようとするイオの顔に重なった。

「偽りなんかにはしないさ。どうせあんな嘘、一晚ではれてしまう。だから今から君を本当の　妃にするんだ」

フレイムの嘲笑の意図が取れず、私は口ごもる。突然、彼の前髪が

大きく開かれた胸元をくすぐった。
いつの間にか前のボタンを全開されていたことに驚くよりも先に、鎖骨の辺りにちりつと鋭い痛みが走った。
恐怖と驚きでびくと身体が反応する。フレイムは面白そうに下から私の顔を眺めていた。

「女王」と契りを交わしたものはそれが何者であろうと“女王”の“所有物”となる。“アリス”だった前例はないけれど、これで連中も手が出しにくくなるだろうね。だから今夜君を僕の所有物ものにしておくんだ」

「ちぎ、り……?」

「まだわかんない? 僕が今夜君を抱くんだよ」

「なっ……」

小さく漏れた悲鳴の後に続く言葉がなかった。フレイムの口から発せられたあまりにも生々しい表現に体中の血の動きが鈍くなる。こうやって縛りつけられているのも、頭のどこかで冗談だと思っていたのかもしれない。あるいは、警告。最悪の場合は、拷問だと。一欠片の愛しみさえ抱いていない相手に抱かれるだなんて、考えてもいなかった。

凌辱。何気なく彼が口にした言葉の意味が、ありありと頭の中に描き出される。

次の瞬間、私はなりふり構わず暴れていた。

フレイムに押さえつけられた足をバタ足のようにベッドに叩きつけ、90度近くまで体を捻る。

縛られたままの腕を大きく振り上げて彼の顔面をぶとうとしたが、かすりもしなかった。

「嫌っ、絶対にヤダッ! どいて、どいてっば!」

私の剣幕に怯んだのか、フレイムの眉尻が下がったような気がしたが、それも刹那のこと。

腕を上下に動かして何とかスカーフの拘束を取ろうとする私の顎をひったくるように掴むと、容赦ない平手打ちを食らわせた。

パンと小気味いい音がして、私の身体が横へと吹っ飛ぶ。キングサイズのベッドから落ちた時にはさらなる激痛が背骨を襲った。

信じられない強さだ。私は口の端から垂れてきた血を見て呆然と思う。

何年も母親から虐待に会い、クラスメイトからはいじめを受けてきたが……この時ほど痛手を受けたことはないだろう。

あつという間に温度が上がっていく頬を縛られた両手で押さえながら、一歩一歩ベッドから離れていく。フレイムはじりじりと後退していつてる私の姿を侮蔑の眼差しで睨みつけていた。

「どうして……どうして、ですか。どうしてそんなに私とレーテを引き離したいんですか……？」

「さつき言っただけだ。帽子屋は君にとって有害すぎる」

「私にとってじゃなくて貴方自身のためでしょう?!」

精一杯の虚勢を張って怒鳴り声を上げたはずだけれど、実際に耳に入ってきたのは悲鳴に近い金切声だった。

私は口をつぐんだフレイムを涙目で睨みつけながら、背中に入ってきた扉を感じた。

この外にはディーとダムが待機しているはずだ。もしかしたら助けてもらえるかも……その可能性はほとんど白に近いのだが。

「貴方は、私とレーテが協力するのを避けたかった。協力して、“失クシモノ”を探すことを。貴方は……貴女は、“アリス”に執着

していない。私のことだつてどうでもいいんだ！なら、本当の目的は“アリス”を手に入れることではなく、“失クシモノ”を私の目から逸らすこと……そうでしょう？」

自分でも何を言っているか判らなくなってきた。こんなことをいくら言つてもフレイムは計画を中断しないだろう。

しかしこのまま大人しく屈服されてたまるものか。私は唇をちろりと舐めると、畳みかけるようにフレイムに言った。

落ち付け。このまま順調に、話を続ける。フレイムの気を少しでも紛らわせる。

「貴方は本当は、“失クシモノ”が何であるかを知っているのでは？そしてそれを手元から失いたくなくて、私を手元に置こうとしている。なら、その場所は決まっていますよね？宝に近づけないように、私をこつちに引きとめる。逆を取れば……私の“失クシモノ”は帽子屋邸にあるんだ！」

興奮気味にぶつけた言葉に私は酔いしれるようにして頭を回す。これほどの自己陶酔にかかったことが今までにあるうか？

いつの間にか私の話はフレイムの気をそらすため、ではなく本来の目的だった帰り道を探すためのものになっていった。

胸の中で得体のしれない感情がぞわりと動きだす。これは　　歓喜？

どす黒い色をした、紛れもない歓喜だ。

「　　外れだ」

しかしその感情の理由を知るよりも先にフレイムの嘲笑が私の興奮を冷ましていった。それと同時に、心の奥底から這い上がってきそ

うだった“それ”も影をひそめる。

私は頭のどこかで既視感を覚えながらもそれに気付かず、ただ眉をしかめてフレイムを見上げた。

「途中まではイイ線いってただけだね、最後が短絡的すぎだ。これじゃあ落第点だよ」

淡々としたフレイムの声には嘘を隠そうとする虚勢なんてもの欠片も見つけられなくて。それがますます私を混乱させた。先程まで心の90パーセント以上を占めていた自信が一気にしぼんでいく。フレイムは調子を取り戻すかのように一、二度頭を振ると、ひどく優しい手つきで頬に指を伸ばしてきた。

いつの間にこんなに近づいたのだろう。そう思う暇もない。

赤いマニキュアに彩られた長い爪が滑らかに私の頬を滑っていく。先程叩かれた所がひりひりと痛んだ。

「さあ、お遊びは終わりだ。早くベッドへ」

私を刺激させないようにと一応注意を払っているのか、彼の声は気だるげながらもわずかな気遣いが感じられた。

しかし言っていることは相当辛辣だ。私が顔を真っ赤にさせながら首を力任せに降ると、フレイムは再びいつもの嘲笑を浮かべた。

あとわずかな距離を一步で詰めると私の口を片方の手で覆い、もう片方の手で腕を強く引く張った。

激痛とともに、私の身体が勢いで倒れる。床にしたたか打った方がじんじん痛んで涙がこぼれそうになった。

「い……やつ！」

首筋に爪を立てられる。優しさなどこれっぽちも感じさせない性急

な行為に、身を隠していた恐怖が顔を出してきた。

暴れたいのに、身がすくんで指一本動かない。赤い瞳が機械的な動きで私の顔をじろじろ見ている。

なんて、虚ろな瞳。

「い、嫌だっ！誰か、誰か助けて……っ！デー、ダムっ、其処にいるんでしょう?!」

私は扉の向こうにある気配に語りかけるが、返ってきたのは沈黙だけだった。

扉から離れて耳を塞ぎ、ガタガタ震えている二人の姿が目には浮かぶ。それほどまでに、この少年は彼らにとつて脅威なのだ。

フレイムもそれを知っているのか、ちらりと扉に一瞥をくれただけで再び私に視線を落とす。

「無駄だよ。あの子たちは僕の配下だ。命令に逆らったら、“ルー違反”になる」

「っ……いや、やだっ！助けてっ……こんなやだあっ！」

「無駄だつて。いくら叫んだつて誰も助けてくれな……っ?!」

ガラスが一齐に割れるけたたましい音に反応して、フレイムの言葉が中途半端に途切れた。

一瞬一瞬が、ひどく遅く感じられる。フレイムが反射的に首を回してその方向へと目を走らせる瞬間も、私の視界に鮮やかな紫が飛び込んでくる瞬間も、その人が粉々になった窓の破片を踏みしめてこちらを向く瞬間も。

ああ。

胸が張り裂けそうなほど嬉しいはずなのに、泣き声に近いため息が

唇の間から洩れた。

「い……おっ、イオおっ……」

「なーに泣きそうな顔してんの、アリス。アリスの泣き顔は好きだけど、俺が泣かせたわけじゃないでしょ？そういうのは腹立つからだーめ！」

こんな状況でも軽い調子で指を振るイオの笑顔に、怒るよりも先に頬が緩んでしまった。

張り付いていた緊張感をこんなにも容易く彼は解いてしまう。しかしほっと息をつく私と対照的にフレームはそれが気に入らなかったのか、ぴくんと眉を動かすと膝について彼に対峙した。ぎりっと、フレームの奥歯が悲鳴を上げる音が聞こえてきそうだ。

「なるほど……帽子屋の差し金か」

「そ。昼間はロキが世話になってるけど、ごめんね？俺レーテの猫だから」

まるで悪びれもなく言って、人より若干長い犬歯を見せて笑う。フレームはその瞳に殺意を宿しながら、そっと腰に手を忍ばせていた。

「別に黒猫のことなんて世話してないからいいさ。それより、いつからそこにいたの？」

「んー、結構前からかな。なに、聞かれちゃいけない情報でもあった？」

イオの瞳に妖しい光が正体を見せる。ぺろりと悪戯気に赤い舌を出して耳の上をトントンと指先で叩いた。

ちゃんと聞いてたよ、おバカさん。

声を出さずに唇だけでフレ임을挑発する。フレイムの顔が怒りに赤く染まった。

「帽子屋にはないつと。つてことはまあ、森か街か……それとも大事なものは自分の近くに置いとくものかな？」

「……」

彼の目に動揺の色を走ったのを目聡い猫が見逃すはずがなかった。瞬時にそれは巧妙に隠されるが、イオには確信が生まれたいらしい。にやりと勝利の笑みを浮かべると、後はどうでもいいとも言つように肩をすくめる。

私はそつとフレイムの手の方へと視線を向けた。イオも気付いているとは思うが……先程からフレイムは、ドレスの下に隠している何かを構えている。

キラリと、それが銀色に光った気がした。

「成程、つてことはやっぱこの城にあるわけね。それだけわかればもういいや。アリスは返してもらつよ」

「……馬鹿だった。帽子屋よりも先に君を潰しておくべきだった、よっ！」

突然、フレイムは腰を屈めると腰に差してあつた護身用の短剣を左手で構えてイオの方へ走つた。身体が小さいということもあるのだろうか、その動きは信じられないくらい素早い。

私が声を上げる間もなく、フレイムの小さな身体がイオの懐に潜り込み、喉笛を銀の刃が切り裂く。

……はずだった。

ガキッ

「なっ……」

「え？」

「へえ」

突然ナイフが手からはじかれたフレーム、危険を告げようとして口を開いたまま固まった私、よけようともしなかったイオ。三種三様の反応を見せる。

初めに我に返ったのはイオの目の前で戦闘態勢を取っていたフレームだった。いや、本当は我に返ってなどいなかったのかもしれない。ほとんど反射的と言っていていいほどの素早さで、フレームはイオから離れた。

先程取り落としたナイフをすぐさま拾い上げるが、そこには生々しい銃痕が残っていてとても使える代物ではない。

「ありや、仕留め損ねた」

早くもフレームの首根っこを掴もうと腕を伸ばしていたイオは素っ頓狂な声を上げる。

一瞬先には血だらけの自分が倒れていたのかもしれないのに、余裕の表情だ。

「……………侵入者は二匹ネズミいたってことか」

「うんにゃ。ネズミは（・・・）一匹だよ。だって俺猫だもん」

フレームは低く呟いて舌打ちをした。まだ女装をしたままなだけに、猛烈に怖い。

しかしさすが変態猫、美人に見慣れているのか怒れる美女を前にしても全く動じなかった。

それどころか悪戯がばれた子どものように「あーあ」とため息をつ

きながら肩をすくめている。

(ん？ちよつと待て。ネズミってまさか……)

「あらまあ！女王さまはいつの間に性転換したんですの？」

頭上から響く甲高い笑い声。

……………頭上から？

「必殺 シヨタシヨタハイドロップキック！」

キック、と言いながら弾丸の雨が降ってきた。私は慌てて身体を横に捻ってイオの方へ逃げる。

ちよつど私とフレームの間を引き離すようにして猛烈に降りだした弾丸は頭上を高く跳んでいた影が地面に着地すると同時に止んだ。

ばさりとピンクのドレスが遅れて足を隠す。あの重そうな服装でよくあそこまで跳べたものだ、さすが獣人とも言うべきか。

茶色の短い髪に、大きな栗色の瞳。柔らかそうな髪の上には丸いネズミ耳がびくびく動いて存在を強調している。

可憐な美少女は弾切れになったあつさり2丁の拳銃を捨てると、体勢を崩したフレームの方へ指の弾丸を向けた。

ばぁん。撃つ仕草をして、可愛い声で銃声を真似する。

「お姉さまに手を出すとは身の程も知らない下衆野郎が！処刑ですの」

「れ、レストくん……」

「ネズミちゃんのりのりだねえ。ていうかいいの？そんな前に出てきちゃって」

くすくすと声を殺して笑うイオの手が、肩を優しく包む。ほつとしたのも束の間、そのまま脇に腕を突っ込まれて抱き上げられた。ぎゃあぎゃあ騒ぎながら暴れる私を無視して、イオは軽々と俵かつぎをする。腹のあたりに固い肩が当たって少し痛い。

私は何とか首を回してレストの方を見た。フレイムは悔しそうに唇をかみしめてまだまだ余裕の表情を浮かべるレストを睨みつけている。

「いいのいいの。つかイオさんばつかにさ、良い恰好させてやるのも癪じゃん？ 忘れないでほしいんだけど……」

「あーはいはい。俺と組むだけでも腸はいつわたが煮えくり返りそうにいらついでる、でしょ？ 命令なんかしないから」

不満そうなレストの言葉を、呆れた口調でイオが流した。

どう考えてもこの二人の口ぶり……チームワークがいいとはいえないさそうだ。むしろ今にも殺し合いを始めるんじゃないかというほどの緊迫感を秘めている。

「……眠りネズミ、か。こんな雑魚をよこして帽子屋は何をやつてる」

「あら、よくご存じで。ではその雑魚の前で無力にも膝をついている貴方はなんですか？」

フレイムは挑発をしてレストの気を乱そうと思ったみたいだが、逆効果だった。

すうっと栗色の瞳から明かりが消えていく。ひたすら冷たい瞳で見下しながら、それでもなお女声を保ってレストは蔑んでいた。

マルスが見たら悲鳴を上げそうなほどの怖さだ。イオも少し引いたのか、気まづげに身体を揺らしている。

「何でもネズミちゃんね、自分より女装が似合ってる女王が気に食わないらしくて。私怨だよ、私怨」

「って、えー……。私を助けにー、ってわけじゃないの……」

「あ、それはついで」

「ついでかよっ！でも、レストくんの方が個人的には似合ってると思うんだけどな……美女、美少女って感じしない？」

「ていうか男として喜ぶべきなのかどうか……。うーん、俺もやってみようかな、女装」

「はあ？無理無理無理無理。見たくないそんなもん」

「大丈夫、アリスは服を提供してくれるだけでいいから！」

「つまり脱げることじゃねえか！却下！変に似合いそうで怖い！」

「えー、つれないなあ、アリスったら」

「……………イチヤイチヤすんのは誰もいないとこでやってくんない？」

フレームかレストか、どちらが言ったのか判別がつかない。おそらく二人が同時に言ったのだろう。

ボーイソプラノの声が綺麗に重なり、お互いむっとしたように睨みあっている。再び冷たい雰囲気は二人の間に舞い降りた。

「くだらないね、眠りネズミ。高々女装の為に僕の妃を奪いに来たのかい？」

「そんなわけないでしょ。アリスを助けたっていう気持ちも多少はあつたよ」

多少かい。

「でもまあ、マスターの言いつけだから仕方ないよね。従わないと“ルール違反”になるから。女王を傷つけずにアリスを救出してこ

い、出来れば情報も盗んでこい、だつてさ」

ひらひらと指で象った拳銃を口の前で振りながらウィンクをしてみせる。

馬鹿にしきつた行為にフレイムの顔が見る見るうちに赤くなつていった。
つた。

自尊心を傷つけられたフレイムはそれでも冷静な判断を下していた。
フレイト
イオとレストを交互に見やり、少しずつ体勢を立て直していく。

レストもこれ以上近くにいるとさすがに危険だと思つたのか、懐から先ほどとは違う……拳銃というよりもライフルのような形をした銃を取り出した。

ただしそれは玩具かと思つてしまうほど小さい。拳銃の方がはるかに大きく、重そうであった。

その銃口をフレイムに合わせるが、臆しめせずに立ちあがる彼の姿に怯んだのか、一步下がる。それに対してイオは、挑戦するかのように前へと踏み出していた。

「僕を傷つけずに（……………）？随分なめられたものだね。

だからあの男は嫌いだよ」

「っへへ……！いいな、この殺気。パートナーがマルスじゃないことがすつこい残念だよ！」

興奮気味のレストはいつもより高い声で吠えながら、後ろへと跳んだ。フレイムはイオの後ろへと隠れるようにして身を潜めるレストを追おうとはせず、今度はイオの方へ燃える赤の瞳を向ける。

イオは軽く肩を回して準備運動をすると、ゆっくりとした動作で腰を低くした。

フレイムはそんなイオの態度にじれつたそうにしていたが、瞳の奥に興奮の光が見えている。

信じられない……こいつら、戦いに血を沸かしてるんだ。

「ちょ、ちょっと！フレイル様はもう何も持っていないのよ？！丸腰の相手を」

「丸腰つて、あれが？」

どこか呆れたようなイオが指さす先は、赤髪の美女。

フレイルは不敵に笑いながら、大胆にもドレスの裾を半分以上一気に入たくしあげた。けたたましいほどの金属音とともに、ナイフやら拳銃やら針谷らが一気に地面に落ちる。

しれっとした顔で先ほどよりも5寸ばかり長いナイフを取り上げると、その切っ先をイオに向けてみせた。

「ああいう場では特に狙われやすいからね、きつとあのドレスも軽そうに見えるけど防弾用に鉛が入れているから10キロ以上あると思うよ」

レストが座り込む私の為にしゃがんで説明してくれる。

武器を好きなだけ忍びこませることができ、兼防弾チョッキの女装ドレス。それを軽々と着こなして辛い顔一つ見せなかった彼の驚くべき体力に私は息をのんだ。

しかしそんなフレイルと対峙しているイオも大物だった。

フレイルがどこを突けば一番得策か模索しているのに対して、イオはいまだに飄々と口笛なんかを吹いていた。

「でもまあ、お得意の鉞を持ってないんだからだいぶ楽だけどねー。どうしようか、殺しちゃう？」

レストの方へと同意を求めては、ニコリいつもの笑みを広げてみせる。

その様子を焦れたように睨みつけていたフレイルだったが、イオが

目を外した瞬間に地面を蹴ってイオの懐に忍び込んできた。

「イオっ！」

叫んだときにはもう遅い、振り返った彼の顎すれすれのところを銀色の刃が軌道を描きだしていた。咄嗟に後ろへと身体を傾けていたのが好転したのだろう、あともう少し近ければ間違いなく切れていた。

しかし不意をついた攻撃にイオが笑顔を保っていられるほどの余裕はなかった。

一発目が外れるとわかるとフレイムは舌打ちをして、手首を捻って今度は目を狙ってくる。何とか倒れこむことで追撃から逃れたが、これでイオの態勢は完全に崩れた。

間髪をいれず振り上げられた足がイオの腹部を抉るようにして蹴りあげる。

「っ……」

イオは小さな声を漏らしたただけだったが、相当な痛みだったらしい。振り切ろうと後退するが、その足取りは目に見えて愚鈍だった。

フレイムは厳しい目つきのままナイフを構え直し、イオに再び対峙する。イオも油断は禁物と悟ったのか、その瞳に不穏な光を宿すと懐から細長い針を抜きだした。

「なるほど……毒針かい？」

「まさか。即効性の痺れ薬が塗られてるだけだよ」

からつと乾いた笑顔を張りつけるが、金色の瞳だけはギラギラと暗く光っている。

喉の奥で小さく笑い、フレイムは再び身を屈めた。

やめてと叫ぶ。

声なんて届くはずもない、頭のどこかでそう分かっていながら。

「援護するよ、イオさん」

隣でレストの上ずった声が聞こえた。近いはずなのに、どこか遠く聞こえるのは、彼らと心理的な意味でかけ離れているからだろうか。頭が、ずきずきする。助けを求めするようにレストの袖をひっぱったが、気付かれもせず振り払われた。

レストは先程の小型ライフルを嬉しそうに構えると、フレイムの足もとを狙って乱射した。連続する爆音に私は耳を押さえつけるようにして塞いだ。

ああ、頭がずきずきする。

「くそっ……」

フレイムは部屋の隅を走り抜けて弾の雨から逃れようとするが、その後を追うようにしてイオがひらりひらりと宙を飛び交う。

体勢を崩させながら隙を大きくしていく。一瞬も立て直す間を与えさせない。見事なファインプレーだった。

ライフルの弾切れの間を狙ってフレイムはイオの足をナイフで切りつけようとするが、体勢を整えないまま仕掛けたため、間合いを間違えた。

イオが軽く一歩足を引いただけでナイフは彼の細い脚をかすり、フレイムは無防備な格好のままその場に崩れる。

ドレスを着ていたことが裏目に出たらしい。最後は実にあっけなく、裾につんのめる形で転倒した。

膝をつき、頬を床に打ち付けたフレイムの背中に容赦なくイオが飛びかかる。

「あ」
「残念」

イオの嘲笑が鼓膜を叩くと同時に、ぷつりと小さな音が静かな部屋に奇妙なほどに響いた。

首筋に細長い針を刺されたままフレイムは目を見開き、信じられないという様子で痙攣する自分の手を見つめる。

「2、3秒で身体が硬直して、神経の末端から徐々に感覚がなくなっていくの。どう？身体が蝕まれていく心地は」

フレイムの背中の上に座り胡坐をかくそのサディストは、勝利後の高揚した気分を隠そうともせずには笑っていた。

隣にいたレストも、イオのことが大嫌いと言っていたにもかかわらず勝利を勝ち取ったイオの姿を憧れの対象として見て、パチパチと無邪気な拍手を送っている。

「ねえ」

吐き出す声が、枯れていた。

楽しそうに話したすイオとレストは無論のこと、こちらに気付くそぶりも見せない。

意外にも気がついたのは、フレイムの方だった。赤い瞳だけをこちらに向けて、訝しげな視線を送ってくる。

その中に心配そうな感情が見えたのは、ただの思い込みじゃないはずだ。

「さあて、どうしようか。このままレーテに突きだすか……でも俺ほんっとこの人嫌いなんだよね。俺を殺そうとするし、アリスの貞

操を奪おうとするし」

「マスターはたとえ女王でも情けをかける人だよ。絶対に殺さないね」

レストはいつの間にかイオの方へ寄っていた。私は一人きり、部屋の隅っこで震える膝を押さえている。

先程まではそこが“安全地帯”だったというのに、今ではただの“切り離された世界”と化していた。

イオがズボンのベルトから取り出した折畳用ナイフで、フレイムの顎を軽く持ち上げた。荒く扱ったせいか、その部分は呆気なく切れて透明感のある血がナイフを伝って落ちる。

「俺は“違反者”だからね。たとえ誰に命令されてたとしてもそれに従う必要なんてない」

痛み在眉を顰めるフレイムの顔を見て満足そうに笑うイオは、私の知る彼と全くの別人だった。

どこか狂気を帯びた、明るい金色の瞳。いつもは意地悪気に細められるだけなのに、どこか今夜は猟奇的だった。知らない。こんな彼、知らない。

頭が、痛い。

「やめて」

今度はもう少し大きな声で非難すると、イオの視線がこちらへと注がれた。

金色の瞳に、わずかに優しい光が舞い戻る。しかしそれも一瞬のことだった。

「どうして？この子は、アリスに酷いことをしようとしたんだよ」

「だからって、殺すことないわ」

「……アリスはさ、俺らが助けなければどうなってたか本当にわか
ってる？」

助けなければ（……）？

笑わせないでよ、貴方達は私を助けるためにここに来たんじゃない。
ただ血を見たいから、フレイムを倒したのよ。

私は声高にそう叫ぼうとした。しかし、イオはそれをピシヤリと遮
る。先程までとは一転し、声には苛立ちが見え隠れしていた。

「間違いなくアリスは抱かれてたよ。それもかなり手荒なやり方で
ね。……いや、それは未遂に終わったから別にいいや。俺がムカつ
いてるのはこっちの方」

トントン

指先で軽く、自分の頬を叩いた。私も戸惑いながら同じ場所を触っ
て初めて、忘れていた痛みに気付く。

「こいつは、アリスを殴ったんだ」

力いっぱい平手打ちを食らわせられた頬は、きつと真っ赤になっ
ているのだろう。

レストが気の毒そうな視線をこちらに投げ、さらに増幅した怒りを
フレイムにぶつけていた。

「僕の傑作なのに……やっぱイオさん、殺していいと思う。ほんと
は俺がやりたいぐらいだけど、“ルール違反”になっちゃってから」

口惜しそうに呟く彼の言葉に、イオは同意するように頷いた。薬が全身に回り、もう指の先すら自由にならないフレイムの身体を仰向きに寝かせ、その喉元にナイフを当てる。ほんのちよっと強く引くだけで、簡単に絶命するだろう。私はふらつく足を必死で奮い立たせ、一步一步彼らのもとへと踏み出していた。

「ねえ……やめてよ。わ、私、全然痛くないし」

見え透いた嘘だった。赤くなつた頬は、今でも熱に近い痛みが継続している。きつと口の中も切れているのだろう、今になって血の味をはつきりと感じた。

しかしそれを悟らせるわけには行けない。こんなことで、イオに人殺しをしてほしくなかった。

頭が、痛い。頬の痛みを忘れてしまうほどの頭痛に、視界が揺らいだ。

「アリス?!」

倒れかけた私の身体を支えたのは、レスト。考えてみれば当然だった。彼の方が私に近かったのだから。

だけど　私の方を見もしないでナイフを大きく振り上げるイオを見て、私は不思議な感覚に襲われた。

或いは、注意を貰えなかったことへの絶望感。

或いは、声が届かなかつたことへの失望感。

或いは　知らない“イオ”がそこにいる、という喪失感。

「やめてえっ!!!」

あらん限りの絶叫で、イオの動きがわずかに止まった。どこか鬱屈
そうにこちらに視線を向け、そこで固まる。

私の肩を支えるようにして立っていたレストも戸惑ったようにこちら
らを見上げ、悲鳴を上げた。

何かヒステリックに喚いてるが、それを言語として捉えられない。

私はただイオの瞳を呆然と見つめ、力無く首を振っていた。

時が、止まる。何も聞こえない。音がない。色もない。

頭痛は頂点に達し、ともすれば気を失ってしまうほどだった。フレ
イムの身体から降りたイオは私の身体を優しく抱き上げると、その
まま耳元で小さく一言二言囁き、髪に顔を埋めた。

すべては聞き取れなかったが、「ごめんね」という言葉が入ってた
気がする。

私は魂の抜けたマリオネットのように彼の胸に身体を預け、抱き上
げられたまま窓から身を乗り出すときも虚ろな目で地面を見つめて
いた。

そこが景色に溶けゆく寸前、こちらを見つめる鮮やかな赤色だけが
妙に印象的だった。

レストが腕を強く掴んで制止していなかったら、間違いなく自分は彼らの前に飛び出ていただろう。

『レストは偶然を装ってアリスと接触してください。その後目に付かない所へ引き込んで、イオにだけわかるような目印　　そうです、香水がいいでしょう　　をつけるんです。僕とマルスは邪魔が入らないように門番どもを外で引き留めておきます。その間にイオ、レスト、アリスを取り戻してきて下さい。なるべく慎重に…情報になるべく引き出して、ですよ』

そう、すべてが仕組まれたことだった。

頭の切れるレーテは最初からアリスを取り戻すつもりでこのパーティーに参加し、レストにアリスを着飾らせた。獣人であるイオに嗅ぎとれる程度の、特定の香水をつけて。

侵入役はイオが適任です、とレーテは言った。レストは自分自身も香水をつけているから、いくら嗅覚が鋭くても紛れてしまうらしい。マルスもやりたいと元気よく言っていたが、十中八九迷子になるから却下された。

パーティーが始まってからは激動といってもいい。

フレイムの妃宣言にはさすがに驚愕したが、すべては順調に進んでいたはずだった。

計画通りにイオが香水のおいを追って窓枠へとよじ登り、フレイムの口から発せられる情報に耳を傾けていた。

すべて、うまく進んでいたはずだったのに。

「　　つくそ……」

珍しく苛々とした声で悪態をつくると、イオはアリスを抱きしめる腕に力を込めた。

感情的になって、アリスの目の前で情けない面を晒してしまった。それがどうしようもなく惨めで、腹立たしい。

アリスは今までずっと張っていた気が緩んだのか、降下している最中に意識を手放した。起きていた時よりもはるかに安らかな顔で瞼を閉じている。

その右頬は見るのも痛々しいほどに赤く腫れていた。

バシンという音が再び脳裏によみがえり、イオは奥歯をきつく噛みしめた。

フレームがアリスに触れた時、ボタンを外した時、抱くと言った時
傷つけた時。

あの、胃が縮小して肺が焼け爛れるような感覚を今でも思い出せる。憎悪とも嫉妬とも呼べるかもしれない。だけど、あの心臓が凍りつくような感覚は　　恐怖。

アリスを、奪^とられてしまうという恐怖。

瞳に狂気を宿したまま窓を蹴破ろうとしたイオを止めたのは、レストだった。

もしかしたらレーテがあまり役に立ちそうもないレストをサポート役につけたのは、イオの援護だけでなく暴走を止める役も兼ねてだったのかもしれない。

「アリス、アリスっ！ねえ、イオさん、アリス大丈夫？」

レストが隣で心配そうに彼女の名前を連呼して無事を問う。
イオは慌てて平静さを装いながら、いつも通りの笑顔で答えた。

「うん、ちょっと寝てるだけ。ほっぺ以外には暴行は受けてないみたいだしねー」

「そう……ならいいけど。でもなあ、はあ……あああーっ!!」

この1時間で何度繰り返したか判らないため息と悲嘆の叫びを上げながら、レストはじたばたと手足を振りまわした。

まるでそこに敵のフレイムがいるかのように、可愛い容姿のまま拳を振り上げる。なんとも勇ましい光景に、イオの方がため息を漏らしたくなった。

苦笑するイオをよそに、レストは架空のフレイムに炸裂パンチを浴びせる。

「にしてもむっかつく!あの女王……僕の傑作を殴ったうえ、泣かせるなんて!せつかくの化粧が崩れちゃったじゃん!!」

泣かせた、という言葉に心臓が一瞬止まった。

そっと視線を落として、腕の中で眠る少女を見つめる。月明かりに照らされて肌の白さが際立っているその頬には、殴った後と、それから二筋の涙の跡がうつすらと残っていた。

レストの手に寄って眠っている間に補修されたが、彼にとっての“傑作”は完全に破壊されてしまったらしい。フレイムに悪態をつけては悲しそうにアリスの顔を見ていた。

アリス。イオは口の中で取り零すように少女の名前を呟く。

レストは大きな勘違いをしていた。アリスを泣かせたのはフレイムではない
イオだ。

「早く、起きてよ」

呟きは、絶望にまみれた嘆願のように、夜空に響くことなく消えた。レストにすら聞こえなかつたらしく、こちらを意に介したふうもなく一人暴れている。

アリスの最後の悲鳴は、自分に向けられたものだった。共に聞いていたレストはあれを、ただの強い制止というけれど、イオにはそうは聞こえなかった。

あれは、悲鳴だ。怒りや正義感だけであんな哭声なきごえを上げられるはずがない。アリスは、純粹に　イオを、恐怖していた。

「早く目を開けて……俺を見て」

彼女の黒の瞳に、自分はどのように映っただろう。

自分を助けに来た勇敢な騎士ナイト？

それとも　　狂気に溺れた殺人快楽者？

目を覚まして、早くその瞳に自分を映してほしい。

だけでも、鏡ひこみに映った醜い自分を見るのがどうしようもなく恐ろしくて、その恐怖を振り払うようにイオは再びアリスを強く抱きしめた。

喉の奥に冷たいものが滑り降り、その刺激で瞼が反射的に揺れた。ぼんやりと波の間を漂っていた意識が陸に引つ張られる。どうやら何かを飲まされているらしい、唇の所に冷たいガラスの感触があった。私はこくりと喉を鳴らしてその液体を飲み込む。

別段味のしないそれは、ただの水のようだ。私はふうと一つ息を吐くと、ゆっくりと瞼を上げた。

月明かりがあるところを見る限り、ここは屋外のバルコニーらしい。闇になれるのには時間を要したが、私の背中に手を当てて抱きかかえている人の正体は声だけでわかった。

安堵したように息を吐き出し、優しく聞いてくる。

「気がついたようですね。大丈夫ですか、アリス」

「ん……れー、て？何で、こんなところに……」

「事情は後で話します。今はこれを飲んで落ち着いて下さい」

そう言って渡されたのは、微かに湯気が立つ赤色の液体。

その禍々しいまでの深い赤に、知らず知らずのうちに顔が引きつった。

「ローズヒップダーズリンです。甘いから飲みやすいですよ」

促されるままに恐る恐る口をつけると、案外さらりとした液体は唇の間から口内へと侵入した。

もしかしたらその色から、私は血を連想していたのかもしれない。もっとどろどろとしていると思っていた。

ダーズリン独特の酸味と、きつくない甘みがちょうどいい具合に溶けあっていて、とても美味しい。

「ありがと。美味しかったわ」

少しぬるめぐらいの紅茶を一気に飲み干すと、私はレーテに空のコップを渡した。

レーテはにこりと笑ってそれを受け取る。だいぶ気分も落ち着いた。

「あの、さ。私どのぐらい、その……寝てた？」

「1時間とちょっと、ですかね。ちょうどレスト達は食べ物を取りに言ったんですよ。もうすぐ戻ってくると思いますけど……」

「えっと、いや、いいのよ。でも、1時間かぁ……ルア、心配してるかなあ」

ディーヤダムにもさんざん騒がれているだろう。それに、フレイムにも怒られる。

フレイムの名前を浮かべると、心がずんと重くなった。忘れてたわけではない。あの人が何をしようとしたか、それが何のためか。

顔を合わせづらいのは事実だ。襲われそうになった相手と、一体どの面で会えばいいのだ。

顎を掴まれた時のあの恐怖が再びよみがえってきそうになって、私は慌てて記憶を押しとどめた。

考えちゃいけない。何も知らないレーテの前で取り乱さないようにしないと……。

「まあ、ルアは心配するでしょうね。あいつは少々過保護な男ですから。でも大丈夫です、さっきマルスと一緒に門番たちに言伝を頼みました」

「言伝……？」

「ええ。アリスの身柄は帽子屋邸で保護させてもらう、と」

レーテの言葉が奇妙な響きを伴って頭の中で繰り返された。

城で出会った人たちの顔が脳裏に浮かんでほろい泡沫のように消えてゆく。優しく声をかけてきたメイド達、リクエストを聞いてきた料理長、監視を兼ねた護衛をしてくれた兵士達、常に二人で行動していたディーとダム、毎日付きまどってきたルア、そして……。

最後に映し出したのは、意外なことにフレイムだった。

網膜の裏の彼は、何か言いたげにこちらに赤い瞳を向けていた。切願するような、心配するような、なんとも悲しそうな瞳。どうしてあの時、彼はあんな瞳をしたのだろう。

このままでいいのか。

頭の中でもう一人の私が訴えてくる。理性的に考えたら、当然レーテ達についていくのが賢いと思えた。なのに、ポツリと浮かび上がった感情がそれを遮る。

このままで、いいのか。あの子を一人にして、いいのか。

馬鹿みただった。私がいたからといって、あのフレイムが救われることなどないのに。あの冷たい瞳の奥に潜む深い悲しみを、拭うことなんてできないのに。

きつく唇を噛み締める。自然と、苦笑が漏れた。

どうも私は、あまり賢い方じゃないらしい。

「あの、私……」

「嬢さん！目え覚ましたんだ！」

言おうとした決意は、はしゃぐような明るい声であっさり遮られた。大口を開けた間抜けな顔のまま、呆然と声のした方を振り向く。

私を嬢さんと呼ぶ人は、記憶の限りでは一人しかいない。思ったとおりそこには、さまざまなデザートが盛られた皿を片手にしているマルスの笑顔があった。

その横には、やはり皿を両手に持ったレストが立っている。いまだに女装姿のままだ。似合ってるからいいけど。

「おはよ、アリス」

レストは挨拶もそこそこに、マルスに皿を二つとも渡して私の方へ駆け寄ってきた。

自分の一つとレストの二つ、計三つの皿を持ったマルスは非常に危なげな持ち方のまま青くなっている。

悲鳴のような抗議を上げるマルスをさらりと無視して、レストはレーテの腕から私の腰を持ち上げて強制的に立たせた。起きたばかりでふらつく私の頬を両手で挟んで、じろじろと不躰に観察する。

「あ、あの、レストくん……?」

「よし、もう泣いてないね!」

ピチリと軽く両方を叩き、口元を綻ばせて笑う。私が男だったらほぼ間違いなくこの笑顔にノックアウトされていたらう。

レストの言葉に引つ掛かったのか、レーテが訝しげな視線をこちらに送ってきた。

「何かされたんですか、アリス」

「え、えーっと……」

「そうだ、聞いてよマスター!」

どもる私に対して代わりとでも言うようにレストがことのあらましを話し始めた。

黙って聞いていたレーテとマルスの顔が、ものの数十秒で苦々しいものになる。レストの話は事実を簡単に説明していただけたが、ほんの少し私情が入ってしまった。

「女王の奴……嬢さんを泣かせるなんて最低だな」

最後まで聞いていたマルスが吐き捨てるように呟く。この中で一番感情的な人間であるが故、その一言にはそれだけ重みがあった。レーテとレストも同調するように頷く。

フレームが、泣かせた？そもそも泣いたことをよく覚えていない私は首をひねる。

確かに、彼は怖かった。細い指も、ボーイソプラノよりも少し低い声も、血のような色をした瞳も、思い出すだけで鳥肌が立つ。

だけど、本当に怖かったのは ……

「アリス」

突然よく知った声に名前を呼ばれてぎくりとした。いつものおどけた雰囲気は感じられず、少し低めのその声には心配の色が色濃く残っている。

緩慢な動作で顔を上げ、躊躇いがちに近寄ってくる彼を見た。一瞬で心拍数が上がった心臓は、今度はずきりと痛みだした。

「イオ……」

何とかして名前を呼ぼうとするが、今まで普通に使っていた声帯は彼の前ではまるでガラクタのように使い物にならなくなってしまふ。イオはほんの少しぎこちない笑みを浮かべていた。いつもの人からかような笑みからは想像のつかない、遠慮がちな笑顔。

ああ、まただ。私は心の中でそつと呟く。
また、こんなに遠い。

「ちょっと貧血起こしてたみたいだけど、平気？なんか飲み物持っ
てこようか」

「う、ううん。もうさつき貰ったから……」

「りょーかい。じゃあ何か食べたいものは？」

「要らない、何も……」

そつかそつか、などとイオは明るく言っているがあまりに不自然な
笑顔だ。

会話が続かなくて困ってるのは私だけではないらしい。

どうしよう……何を言えればいいんだろう。私は今までどうやって、
声を発していた？どうやって、息をしていた？

数瞬の沈黙の後、じれったさそうにしていたレーテはため息を吐く
とマルスとレストを一瞥した。

「マルス、レスト。確か二人はダンスを予約していたお相手がいま
したよね。行かなくて大丈夫ですか？」

「は？何言ってるんだよ、マスター。予約なんて俺は……」

明らかに部屋から追い出そうとしている口調に気付くことなく、マ
ルスは不思議そうに首を傾げる。

レーテの瞳がすうっと冷えるのと同時にレストの振りあげた足がマ
ルスの向こう脛に直撃した。

情けない叫び声をあげてうずくまるマルスの襟首を乱暴に掴み、ゴ
ミを処理するようにズルズルと引っ張っていく。漫画では何度か見
たことあるけど……ほんとにやる人がいるとは思わなかった。

「おいつ、何すんだよレスト！いてえ、いてえから髪引つ張んな！

くげえっ……だ、だからってネクタイ掴む奴がいるかあ！」

「せっかくだからさ、マルス。俺と踊ろうよ。ほら、俺今女装してるから女の子誘えないし」

「はあ?!じゃあほかの男でも誘えばいいだろ?!」

「やだよ、マルス以上に貶して面白い奴なんていないもん」

「け、貶して……」

「あ、ダンスはもちろん俺が男性パートね」

「常識的に考えて逆だろうがあっ!」

レストなりの気遣いだったのかもしれないが、あまりに荒々しい退出の仕方に先ほどとは別の意味で全員黙り込んだ。

彼らの背中が見えなくなったころ、レーテがぐっと詰めていた息を一気に吐き出す。

重い腰を上げると、一、二回伸びをして服装を整えた。その動作に私ばかりでなく、イオも眉をひそめる。

……彼も今からここを去ろうとしているの？

「あの、レーテ、どこ行くの？」

「申し訳ありません、アリス。僕も一つ片付けなきゃいけない商談があるので、ここで失礼します」

「それって……」

つまり、イオと二人きりになるってこと？

緊張で心臓が震えたような気がした。無理に決まっている。こんな気まずい空気の中、会話の一つもなく何時間待てばいいというのだ。

「イオはアリスの看病を頼みます。それでは、僕は1時間ほど出ますので……」

「……レーテ、貴方さあ。そういうの余計なお世話っていうんだよ」

今まで黙っていたイオがわずかに苛立ちを孕んだ声でレーテの言葉を遮った。

レーテも信じられないほど冷たい瞳でイオを睨みつけ、それでも口元にだけは営業用のスマイルを張りつけたまま言った。

「では、こちらも言わせてもらいましょう。こういっのを傍迷惑というんです。何があったのか知りませんが、貴方達の問題を持ちこんでだんまりとはどういう了見ですか。空気が淀んで仕方ない」

「……むう」

「手っ取り早く仲直りしてくださいよ、まったく。では、失礼します」

レーテは意図的に二人を残すということを隠しもせず、そのまま姿を隠す。

あとに残ったのは、何か文句を言いかけて固まったままのイオと何一つ言えずにいた私だけだった。

どちらからともなくこの気まずい空気を打ち破ろうと喉から声を絞りあげるが、それは「あー」「うー」やら、まったく意味を成さない言葉ばかりだ。

私も彼も、こんなに話を続けられない人間だっただろうか。私はともかく、イオは全く逆のイメージが植わっているので違和感がある。

「あー……なんていうか、これ、いる？」

そう言って差し出してきたのはフルーツが持つてあつた皿。

ライチやメロン、グレープフルーツが彩りよく飾られているそれはとても美味しそうだったが、生憎今は食欲がない。

しかしここで無下に断ってしまえば、また膠着状態に逆戻りだ。

私は逡巡した末、肯定の意味をあらわしてその皿を受け取るうとした。

ガラス製の皿の下で、指が触れあう。

「
っ」

悲鳴を上げたのは私だったのか、イオだったのか。瞬間聞こえた驚愕の声は、ガラスが床に落ちて粉々に砕ける音に紛れて消えた。ぐっと思が詰まる。それが背中から強い圧迫を受けているからだと思いついたのは、数拍後のことだった。

イオは私の肩に額を押しあてるようにしてきつく抱きしめてくる。ウエストと肩をがっちり掴まれているため、離れたたくとも抵抗できない。

ツンツンとした髪が首筋をくすぐってむず痒い。それ以上に息ができなくて苦しかった。腕なんか、私と同じくらい細いというのに一体どこにこんな怪力が潜んでいるのだろう。

アリス。取り零すようにしてイオは囁く。咳きは私の耳に届くことなく、空气中で霧散した。

私は今にも壊れそうなほどに切迫しているイオに気付くことなく、腕を力いっぱい突っ張って彼を拒絶しようとした。

「ちよ、ちよっど！苦し……っ」

二つの身体の間になんか隙間ができる。それを機に私は肺に酸素を満たすと、むっどとして勢いよく顔を上げた。

抗議しようと思を開いたものも、金色の瞳に滲みだしてくる感情を読み取った瞬間、言葉を忘れた。

冷え切っているのに、どこか哀切な瞳。悲しみや怒りに覆い隠されているが、その根底に潜むのは、恐怖。

それもどこか、子供じみた恐れだった。迷子の子が母親を求める瞳に似ている。見つからないことへの苛立ちと、もし見つからなかつ

たらと考える不安。それらがごっちゃになって生じる混乱。袋小路のように、迷路は続いていく。

何か声をかけなければいけない。私は直感的にそう思った。

取り返しがつかなくなる前に　　これ以上、彼が間違った道に迷い込む前に、無限回廊の出口へと。

「怖がらないで」

しかし、言おうとした言葉はイオに先取された。頭の中を読まれたのかと思い、私は目を見張る。

違う。イオは、私の言葉を復唱したわけじゃないのだ。

これは、私に向けられた言葉だ。

「俺を、怖がらないで、アリス……」

「な、なんで私があんたを怖がらないといけないのよっ」

むしろ、怖がっているのはイオの方だった。

彼の言葉が全く理解ができずに、私はついきつい口調で怒鳴ってしまった。

しまった。その後悔した時にはもう遅い。すうっと、彼の瞳に残っていたわずかな光と熱が奥へと引っ込んでいく。

言った内容がどうであれ、口調というのはその人の心情を鮮やかに映し出す。驚きで声高になった私の一言は、彼には“拒絶”に聞こえたのだろう。

色褪せた瞳で、イオは睨みつけるようにして私を見下ろした。絶対零度の瞳に、ぞくりとする。

しかしそれも一瞬で、不意に掴んだ私の腰を引きあげるようにして腹部を圧迫すると、熱く火照る鎖骨部分にひんやりとした額を押し

あてた。

あつという間にその部分の温度が融和して、同じ温度になる。

「い、イオ……！い、いい加減に……っ」

「人間なんて」

ぐつと、腰とは別の圧迫を感じ私は息を飲んだ。

露わになっている首に感じる、鋭い圧迫感。まるでそれは　その部分に、爪を突きたてられているような。

どくり

圧迫の下で血管が大きく蠢いた。

「人間なんて、ここをちょっと引っ搔くだけで、死んじゃうんだよ」
「……っ?!」

イオは頸動脈を強く押さえつけながらそつと囁いた。的確にその場所を把握しているのは、さすがの一言だ。

私はごくりと唾を飲み込んで硬直した身を少しずつ動かした。ナイフを首筋にあてられたフレイムと今の自分が、頭の中で見事に一致した。なるほど、確かに声も出ないほど怖い。

「ただ、あの時本当に怖かったのは　こんなものじゃ、ない。」

「アリスだって、簡単に壊れちゃうんだ。ねえ、怖くないの？怖いでしょ」

一見ひどく落ち着いているように聞こえるイオの声は、ふとしたところでもよく揺れた。まるでこみ上げてくる嗚咽を必死に押し殺して

いるようだ、とアリスはぼんやり考える。

ああ、そういうことか。納得してみると、なんだかずいぶんと馬鹿らしいものだった。

私は長々とため息をつき、深く考えてしまった自分に呆れる。

念を押しておきながら、言葉の端々で否定してほしいと言っているイオの言葉に、すべてを察した。

確かに私は、怖がる素振りを見せたかもしれない。実際怖かったのだから仕方ないだろう。

怖かった、そう　　イオが、私の知らない“イオ”になっ
てしまうことが。

「……怖がってなんかいいわよ、バーカ」

嘘は吐いていないはずだ。私はイオに対して恐怖を感じたわけではない。ましてや、イオが私をいつか殺すと思って怯えるなどもってのほかだ。

しかしそれでも情緒不安定なイオは信じられるはずがなく、少し身を離して戸惑ったように聞いてきた。

「でも、俺は本気で女王を殺そうとしたよ。アリスも、壊しちゃうかもしれない……」

「壊す？上等じゃない。壊したら、ちゃんと元通り修理しなさいよ！」

「修理つて、あのねえ……んなのできるわけ　　」
「できないんだったら」

私は緩く絡んでいる腕をそっと解き、右腕を上げて彼の額にデコピンを入れた。

イオは驚いたように目を見開き、額に指をあてる。そこまで強くは

やっていないから、跡にはならないはずだ。それなのに大層気になるとでも言うようにちらちらと視線を上へあげている。

私は仁王立ちしながら再び深いため息をつき、落ち着いたところで改めて言葉をつなげた。

「できないんだったら、壊すな」

時間がやけにゆっくり流れた。

唇をかみしめていたイオは、何かを言いかけ、やめる。だけでもやはり何かを言いたそうに再び口を開く。その唇が笑いの形に歪み。眉が少し寄って、涙を堪えるように瞳が細められて。

その表情を事細かに観察していた私は、ふうっと息を吐き出すと人差し指を天に向けた。

「念のためもう一度言うけど、貴方を怖いと思ったことなんてないわ」

「……女王を殺そうとしたのに？」

「確かにあの時はひやってしたけど。でも、結局貴方は殺さずにくれたじゃない」

「……アリスをいつか、壊しちゃうかもよ。アリスは、脆いから」

「じゃあ、精々腹筋でも鍛えようかな」

「腹筋だけじゃ強くなれないよ　　バカだなあ」

イオは力なく笑いながら、くいつと私の裾を引っ張って引き寄せようとした。

私は渋い顔をしたが、そのまま強引に抱きよせられるのが落ちだとわかっていたから大人しく彼の胸に頭を預けた。

先程の押さえつける行為と裏腹に、触れるのを少し怖がっているよな、迷いがちの指。ひどく優しい腕の檻は、身じろぎでもすれば壊れてしまいそうに儚く思えた。

「
大切に、する。絶対壊さないように、大切に、大切に
……」

まるでプロポーズのような言葉に、カアアツと顔が熱くなった。

決してやましい意味で言ったのではないと信じたいが……これは天然なのか。それともこんな状況下でも発動される変態パワーなのか。突然居た堪れなくなった私は、早々に彼の腕から逃れようと腕を動かした。しかしイオがそれを掴んで止める。

「あ、あのお……」

「もうちよつと。もうちよつとだけ、このままでいさせて。……もしたらちゃんと、いつもの俺に戻るから」

押し殺した声でそう哀願されては逆らえない。

結局私は、イオが落ち着くまでの5分間、彼の心臓の音をすぐ近くで聞くことになったのだ。

たそかれどき 誰そ彼時 …… 夕方うす暗くなって「誰そ、彼は」と人の顔の見分けが難しくなった時分。黄昏時。
かわたれどき 彼は誰時 …… 夕方の黄昏時に対して、明け方をいつた。薄暗くて、彼は誰か、はつきり分らない時の意。

なーんて。日本語って実に面白いですね！こんなのを数学の授業中（ ）で見つけて感動したので、抜粋してきました！

はい、誤魔化そうとしました。申し訳ありません。
バレンタイン？何それ、そんな行事あったっけ（ ー ー ー ）
なーんて考えてたわけじゃありませんとも！もちろん！
えー、バレンタインバレンタイン……すみません、その頃はちょうど胃腸炎にかかってベッドインしてました……（。c。、i）
なんか私って意外と虚弱だったり……いや、そんな話は置いて。

番外編は、予定通りやります。ただし、期間があまりにずれこんでしまったのでもう諦めました。おいこら作者と思うかもしれない番外編が後日出てくるかもしれないませんが、どうかお許しください……。とりあえず例の如く、この章を区切ってから番外編に入ります。何かリクエストがございましたら、なるべく早めですと嬉しいです！たぶん後1、2話で終わるかなと思うんですが……イオだから正直わかりません。今回も仲直りだけにワードで13ページ……orz

それから、いよいよあの忌々しいテスト期間に突入してしまいまし

た。

いや、私みたいな人間にはテストが必要不可欠だとは十分に理解しているんですけどね……今だけは学校が全焼してくれないかなあ、と。

と、言うわけで更新ストップします！お気に入り登録をしてくれる皆さま、感想・レビューで嬉しいコメントを残してくれる方々、大変申し訳ありません！

「いむ さ ふ フレーム様！」

がくんと肩が大きく揺れて、その衝撃でフレームの意識は現世へと引つ張られる。あまりに乱暴な起こし方に眩暈がしたが、今はそれどころではなかった。

明るい部屋。光に慣れていないフレームの目は、彼を抱き上げている男の影だけを把握する。

フレームは条件反射的に相手を突き飛ばすと、身体じゅうに仕込んでいるナイフを取り出して男の首を掻き切ろうとした。

しかし、そこにあるはずの刃物がない。慌ててブーツの中を探してみても、やはりそこにはなかった。

意識を失っている間に抜き取られたか。

フレームは瞬時にそう判断すると、まだ痺れが残る右足を高く振り上げて男の横面を張り飛ばそうとした。

バシッ

だが、あまりに呆気なく右足を掴まれて身動きを封じられる。

「なっ……」

「フレーム様！俺だよ俺！」

かなりのやり手だと警戒心を深めるフレイムに、慌てて男は自分の顔を指差して主張した。

覚醒して攻撃を繰り返すまでは数瞬もかからなかったのに、その顔と声を認識するには数秒を要した。

どつと身体から力が抜ける。思わず尻餅をつきそうになるフレイムの身体を、後ろで控えていたらしい片割れが受け止めた。

「ふーっ、間一髪。ダムの方も大丈夫？」

「大丈夫に見えっかよこれが！うっはー……ちょっと蹴られただけなのに手がじんじんする……」

「にしてもほんとすごいね、フレイム様。ろくに動けないはずなのにここまで反射的にできるなんて」

「あのなあ……他人事みたいに言ってるけど、いつものフレイム様相手だったら俺なんて瞬殺だぞ！」

「他人事だなんてそんな！僕はいつでも自分以上にダムのことを想っているよ！」

「むう……じゃあ俺だって自分以上にデイーのこと考えてる！」

「ダム……！」

「デイー……！」

頭痛がひどくてその場に蹲るフレイムをよそに、双子はバカップルのようにひしっと抱きしめ合っている。

そんな彼らを、フレイムは軽蔑の眼差しで見つめていた。

デイーとダムは、一度も喧嘩をしたことがない。そもそも意見で対立することがないのだから、当然だ。

いつでも仲が良い、二人。責めるつもりはない。気持ち悪いと罵倒するつもりもない。

「トウ門番トウは、仲が良くなくてはいけないのだから。」

こうやって互いを想い合っているのも、所詮は“ルール”に縛られた飯事。おまけ

ただとそれに、箱庭の住人が気付くはずがない。ちつぽけな彼らが自分の世界を見るのには、世界は少しばかり広すぎた。或いは、住人は住人らしく何の疑問も抱かないで自分の世界で行為を繰り返すのが幸せなのかもしれない。

「おい。状況を手短かに説明しろ」

身体にだるさが残るせいか、つい詰問口調になってしまふ。

機嫌の悪いフレイムによく気付いたのか、ディーとダムはビクンと身体を震わせて怯えた目で彼の方を見た。

しまった。フレイムは自分の大人げなさに呆れながら、一縷の後悔を覚えた。

仮にも彼らは自分を助けてくれたのだ。なのにこの仕打ち……恩に仇を返しているようなものじゃないか。

「……すまない。少しきつく言すぎたね。アリスはどこへいったか知ってるかい？」

「う、ううん。白ウサギを部屋に運んでる途中に、その……茶色いウサギに襲われて。そ、そいつ大して強くなかったからディーに任せてこつち来たんだけどさ、あ……ご、ごめん、入っちゃいけないって言われてたのに、その、心配で……」

茶色いウサギ、というのはおそらく“三月ウサギ”のことだろう。ということは、“帽子屋”差し金だ。

まんまと足止めを食らっていたのか、とフレイムは内心舌打ちをする。また彼らが怯えるので、外には出さなかったが。

それにしても、よく“ルール”が発動しなかったものだ。下手をすればこの扉を開いた時点でダムは、この世界の摂理に身体を木っ端

微塵に砕かれていたかもしれないのだ。

……使える駒が少なくなるのは極力避けたい。

「あまり迂闊な事はしないようにね。僕も君を失うのは嫌だから。

続けて」

「う、うん。あ、でもウサギの居場所だったらわかるよ！な、ディ
ー！」

「うん！僕、闘ってる最中にウサギが耳につけてるピアスに紛れ込
ませて発信機を付けといたんだ！」

いつからそんな技術を……。

孤児だったころの彼らが遅しく成長していく姿を、フレイムは嬉し
いとも空恐ろしいともいえぬ心地で見っていた。

「どうする？戦争しちゃう、しちゃう？」

「フレイム様の事は俺らがちゃんと護るよ！」

まだまだ血の気盛んな双子は、フレイムの前で架空の尻尾を振りな
がら尋ねる。こうしてみると本当に犬みたいな奴らだな、とフレイ
ムは感心する。

戦争　この国の最高権力者である“女王”と、味方も多くこの
国最大の資産家である“帽子屋”が兵を上げれば、その言葉も過言
でないほど苛烈な争いになるだろう。

どちらが死んだからといって、何の差し障りもない。すぐに次の
“女王”と“帽子屋”が一般人の中から選出されるだろう。

悦楽をすら感じる戦争。だけどその中身は、悲しくなるほどの虚無
だった。

フレイムは少し考え込んだ末、彼らの頭をそつと撫でる。

「だめだよ。ルアの意識も戻ってないだろうし、僕も万全じゃない。ディーもウサギと闘った時の傷が残ってるだろう?」

「う……」

ディーはなるべく隠すようにしていたが、身動きをするときになんとなく右足を庇っていた。ダムもその傷を知っているらしく、悲しげに眼を伏せる。

此处で無理をするのは愚の骨頂だ。だがこのままずっとアリスを“帽子屋”　そして、あの忌々しい“チエシヤ猫”のもとへ置いておくわけにもいかない。

さて、どうするか。コッソ、と人差し指で床を一度だけ叩く。そうすると波立つ心が鎮まっていく気がするのだ。

面倒なことなんて、一つもない。

もしあるなら、潰してしまえ。

「　　ダム、ディー。確か君たちは、黒猫と仲が良かったよね?」

「う、うん。一応、それなりに話すけど……」

「もしかして、馴れ合っちゃ駄目だった?」

それはそうだろう。“帽子屋”同様、“チエシヤ猫”も女王には目障りな存在なのだ。いくら同じ孤児院出だからと言って、そうすぐ心を開くものではない。

だが、彼らはルアとは違い決して逆らわない。例えば今ここでロキと縁を切れと言ったら、渋りながらも口をきかなくなるのだろう。

一つは、フレイムが彼らを拾い養ったから。親のような愛着がわいてくるのか、お互いの次にフレイムに懐いていた。

そしてもう一つは　　お互いが人質になっているから。片割れを守るために、彼らはどんな汚い仕事でも平気でこなした。フレイム

に殺されないように。

その点において、彼らは非常に使いやすい駒だったのだ。

操人形とは違う 従順な忠犬^{ワンコ}。

ルアにはできなかった。彼らだったら……。

「いや、むしろ接近するんだ。黒猫の心を開かせ、隙を作って

」

殺すか。

人間立ち直りが肝心だつて、誰かが言つてた。

いい言葉だなつて素直に感心した自分が恨めしい。人間、落ち込んでいたほうがいじらしくて可愛いじゃないか。

こんな、こんな　　変態野郎なんかよりも。

「アリスっ」

「ぐげぼへあっ！」

「……なにその色気ゼロの叫び。つか逆に言いにくくない？」

突然背中にタツクルを食らい、私は手にしていた料理を床にぶちまけた。

ガシャンと音がなつて真つ二つに割れるお皿を気にもせず、後ろからすごい勢いで抱きついてきたイオはピコピコと尻尾を振る。

もちろん、相手は私よりも10センチ以上高い。その分の体重が背中にくつとのしかかつてきた。

「重い重い重いいいっ！あ、あんたねえ……なんでそんなにテンション高いのよ！っーか私の夕食……っ！」

イオをなんとか引き剥がして、慌てて取り落とした食事を見るが、そこは惨状の一言。

取ってきたはずのサラダの中のトマトがぐちゃりと潰れて床を赤く汚していた。それを静かに見ているほかの人たちの視線が痛い。

確かに彼は、もう少し落ち着いたら元の自分に戻ると言った。だがこれは……いくらなんでも立ち直り早すぎやしねえか？
深いため息をついてこぼしてしまつたサラダをかき集めようとする私を、イオが後ろから頭を掴んで止めた。
そのままぐるりと顎を持ち上げられ、イオを直視させられる。

「いーのいーの、こういうのは。どうせ女王のこの衛兵が片付けてくれるんだから」

「あんた自分でやっつきながら……ふぐっ」

文句を言おうとした矢先、口の中に何か冷たいものを押しこまれ言葉が封じられた。

にこりと、目の前のイオが何の罪悪感も感じずに笑う。私はその笑顔に推されるようにしてそれを租借し、嚥下した。

するり喉を落ちていくそれは、わずかな熱を残していく。
ちよつと甘苦いような、冷たいくせにひどく熱い、液体をゼリー状にしたような……嫌な予感がする。

「……なに、これ」

「あは。そこで配つてた、酒の素」

味の素じゃなくて？

「はああっ?! あ、あんた、なんて物食わせてくれちゃつてんのよ!」

「だーいじよぶだつて。大した量食べてないし、第一この世界つて12歳からは成人として認められるから」

そついう問題じゃない。

反論しようとした私の頭に、一気に波が襲いかかってきた。くらり

とふらつく私の腰を抱きながら、からかうようにイオが笑う。

「ありゃ、予想以上に弱いんだ。ワインあるけど、いる？」

こいつ……私の健康をそんなに害したいか。

一発ぐらい殴りつけてやりたいのに、腕は鉛のように重くて動かすのも億劫だった。

強すぎるアルコールに体温が急上昇していくのがわかる。

体温と比例して気分も高揚していくようだ。小さいことなどどうでもいいと、ふと思ってしまう。

私は霞がかかる頭でイオを制裁する手立てを必死に考えようとするが、イオに対する怒りは萎えていくばかりだった。

やがて諦めたように長いため息を吐く。

「……いる」

にやりと意味深に笑ってイオがグラスを渡した。

初めてのワインは、予想以上に苦かった。舌にこびりつくようにして残って、あまり後味がいいとは思えない。

赤ワインといっても色は深い紫なのね、と私は頬を紅潮させながらぼやいた。

深くて深くて、それは寧ろ赤というよりも黒。

「あ、次の曲に入ったよ」

イオがわざとらしく、まるで今気付いたとでも言うようにステージの方へ視線を飛ばした。

そこでは先程からずっとバラード系の曲を演奏しているプラスバン

ドがいる。

流れ出した曲は前の曲よりもずっとテンポが遅く、しかも幸運なことに私が練習用として使用した曲だった。

もう何度も聞いたメロディに、自然に足がステップを踏んでしまう。おそらく私自身、相当酔っていたのだろう、普段だったら絶対にしないような行動を迂闊にもしてしまった。酔いというのは大抵自覚ができないから厄介だ。

私はイオの袖をくいつと引っ張ると、へらつと頬を綻ばせて笑う。そのまま甘えるように彼の肩に手を置き、もう片方の手でイオの腕を取って私の腰に添えた。

イオの驚いたような顔が可愛く見えるなんて……………末期だ。というかこれが全部策略だとか、そういうことは考えなかったのか。未来の自分がこの時間までタイムトリップできたらそう詰っていたであろう。

教訓。お酒だけはほどほどに留めておかないと　　大変なことになるりますよ。

「一曲踊っていただけですか（シャルウィーダンス）？」

鬼教師ルアに散々扱かれたダンスはさすがに大きな失敗はなかった。そもそもターンなども一切なく、ゆったりとした動きで腰を揺らすだけの簡単な曲である。

失敗する要素など一見どこにもないように思われるのだが 何
せ今夜の私は意識も朦朧なほど酔っていた。

「いてっ」

「わ、ご、ごめん……」

本日6回目の失敗に私は慌てて足を後ろへ引く。足をピンヒールで踏まれたイオは微妙に眉を寄せながら、真剣に私の腰を引き寄せた。特別な意味はないとわかっていてもその行為にボツと身体が熱くなる。

途端に動きがぎこちなくなる私を知ってか知らずか、イオは小さく頷くと安心させるように無邪気な笑顔を浮かべた。

「うん、やっぱりこっちの姿勢の方が踊りやすいみたい。アリス、ちゃんと顔上げて」

……こいつがこういう顔をするときは大抵良からぬことを考えているものだ。

私はげっそりと肩を落とし、ぐっと力を込めて彼から身を離そうとした。

顔を上げてってなあ……こんな至近距離で目を合わせられるかつ！視線を少しだけ上げて彼を睨みつけると、案の定イオはニヤニヤと期待するような笑顔を見せていた。

「……こら。もうちょっと離れなさい」

「えー。だってあんま離すとアリス間違っただの足踏むんだもん」
「う……」

反論できない。痛いんだと訴えるように眉尻を下げられると余計にだ。

結局私はたいした力も入れられずがまま彼の足に合わせてステップを踏んでいた。

ロキのステップはかなり正確だった。性格を表すように型通り、決して失敗をしないように洗練されている。

練習中に横でふざけて踊っていた双子はそれに対して、かなりでたらめなステップだった。かなり奇抜な動きをしているというのに不思議と二人の息はきちつとあっていて、お互いの足を一切踏むことなくテンポの速い難曲を踊りつくした。

ちなみにルアは言うまでもなく、流石の一言だ。正確なのにそれでいて、ロキのような固さはない。破天荒な行動もなく、ただ川を下っていく水のように、曲に逆らうことなくそのまま身を任せているという感じだ。

それぞれそれぞれが、自分自身を表していたのだと今になって漠然と気付く。

だとしたら、私の踊りがこつも不器用なのが少しは説明できる。

「アリス、もう一曲踊ろっか」

イオが汗で張り付いた前髪を指ではねのけながら私の意向を聞いてきた。

踊っていた曲は2分少々短いもので、あっという間に次の曲が始まってしまふ。

短い曲のはずなのに、動きは少ないはずなのに、心臓がバクバクと

早鐘を打っている。

私は踊りきったという達成感と身体に残る熱の残滓を感慨深げに味わいながら、答えを逡巡した。

始まった曲は先程よりも断然テンポが早い。周りで踊っていた貴婦人達も一瞬戸惑ったような顔を見ると、踊りをやめる人とちよつと緊張したように踊りを続ける人とに二分した。

この曲……かなり難しいんだ。

果たして自分なんかに、これが踊れるだろうか。

自信が萎んでいくのを察知したのか、イオは半ば強引に私の手を取った。

「俺に任せとけば大丈夫だって。ほら、踊ろう」

「えっ、ちよ、ちよつと！」

「いいからいいから」

グイッと引つ張って無理やり広い所へ連れていき、イオは飛び跳ねるように足を動かす。

大胆なステップについてこれるはずもなく、私はおたおたとさすがのままに彼と一緒に揺れていた。

足を踏むどころの話じゃない。リズムが早すぎて合わせて足を上げるということができないのだ。

そうこうしているうちにクスツと小さな笑いが鼓膜を叩いた。

足元に気を取られていて気付かなかったけれど……。私はひやりと冷える背後へと視線を走らせた。

くすくすと、皆が笑っている。心臓の音に合わせて少しずつ血液が下へ下へと落ちていく気がした。

笑っている。貴婦人達は手袋をはめた左手で隠すようにして。紳士

達は顔をそらしながら。

笑って、いる。三日月の口元が、細められた両眼が、じとりとした視線が。

私を、笑って。

「　　ねえ、もうやめようよ」

ぼつりと零した言葉は自分でも驚くほど掠れていた。イオは様子がおかしいのに気がついたのか、ほんの少し眉を動かして周りへと視線を巡らす。

すうっと、わずかに彼の瞳から熱が引いたように見えた。私は必死で足を止めようとするが、イオは巧みにステップを繰り返してそれを阻む。

こんな強制的なダンス、初めてだ。息もつけない早さに、一瞬周りの視線さえも目に入らなくなってしまふ。

「　　なんで」

尋ねているのに、言葉を封じ込めるような口調だった。

一方的に振り回されている私は息を荒くしながら何とかして首を振る。

テンポ通りなのに他のどのカップルよりも激しいダンスに、その場一帯の視線が集まった。

好奇心交じりのもあれば、どこか熱を帯びた視線もある。当然と言えばそれまでだ。イオのような超絶美形、周りがほっとくはずがない。

そして自然と視線はパートナーである私の方へ向き……瞬時に落胆の色を帯びる。なんだ、こんなものかと言わんばかりに。

「だって……うまく踊れないし」

「俺に合わせてれば大丈夫だって。アリスに恥はかせないよ」

自信に満ちた言葉を肉付けするように私の腰を強く引き寄せくるりとターンをした。

足が半分浮いていた私は幸か不幸か、他人から見たら全く“失敗した”ようには見えない。本当は今にも倒れこんでしまいそうなほど難しいのに……。

「ねえ……っ！もうやめてっば！こ、こんなの……」

「アリスは人の目を気にしすぎなんだよ。俺だけ見てるなんてくっだらな言わないからさ、もうちょっとちゃんと“自分”を見てみたら？」

ぐつと強い圧迫を肋骨の下あたりに感じたと思ったら、私はつま先すら地面につかない所まで持ち上げられていた。

小さい子を“たかいたかい”するように腕を伸ばして抱きあげる彼の手中で、必死にもがく。数センチ先には先程まで確かに立っていた地面があるのにそこまでがひどく遠く感じられた。

一瞬視界に入ったイオの瞳が宿していた冷たい怒りに、ざわりと全身の肌が泡立つ。

何か、とてつもなく嫌な予感がした。

「ちよ、ちよつとイオっ！降ろせ、降ろしてよっ！」

暴れる私をもともせずそのまま俵担ぎをすると、歓声だか悲鳴だかわからない黄色い声を上げる貴婦人達に背を向けてその場を後にした。

「姫さまにはこの城で何不自由なく生活してもらったため妃という地位につかせる、と。だけど名目上の事だからフレイル様は絶対手を出さなくて……………えっと、それから、何だっけ？」

「僕達にもそれぞれ制限がかかるんだよ。トゥーアイドル兄弟は抱きついてもいいけど30秒以内とかなんとか……………」

「とんだとばっちりだよな！しかも納得できないのが……………」

「白ウサギには制限がかかってないこと！」

「そうそれ！何で俺らみたいな純粋な子供が制限されてあの変態が放置されてんだよ！」

「うんうん。フレイル様も何考えてんだろ……………」

「あのストーリー」

「腹黒」

「アリス馬鹿」

「将来禿げ」

言伝をお互いで確認し合っていたはずが、いつの間にか白ウサギの悪口に変わっていた。ディーとダムは周囲の目も気にせずにげらげらと笑う。

フレイムに長い伝言を託された双子は、二人固まってアリスを探索していた。

手分けをすれば手間が省かれるのだが、ディーとダムには“二手に分かれる”という概念がない。

とりあえずはマルスにつけて発信機の所へ行ってみたのだが、残念ながら期待したはずのアリスはその場にはいなかった。

ただ、代わりにいたのが

「なんかさ、あの三月ウサギと踊ってた女の子、めっちゃ可愛かったよな」

「うん！すっごいよね、フレイム様以上の美人なんていないって踏んでただけど……」

「でもさ、気に何のがあの二人　パート逆だったよな」

「……うん。なんかすっごいちぐはぐだった」

顔を盛大にひきつらせながらリード“されていた”マルスの姿を思い出し、ダムは顔を曇らせた。

あれでちゃんとパートを逆にしていなかったらそれはもう、素敵な絵になっただろうに。

「だけど、どうしょっか。帽子屋の姿も……それから先輩も見つか

らないし」

「ん……あ、ああ、そうだな。でも三月ウサギがここに残ってるってことは、姫さまもここにいると思っただけど……」

だが、ホールはもうすぐ一巡するところだ。“アリス”は“カードもち”にとって特別な存在と言ってもいい。少しでも視界に映ればすぐに特定できるはずなのだが……。

ホールにはもういないのか？だとしたら、一つ一つ客室を覗いていかなければいけない羽目になる。

ダムはこれからの苦勞を思って溜息をついた。

「あの紫の髪のお方 随分と簡素な服を着ていましたけど、一体どこの家のご子息でしょう」

えっ。ディーとダムの驚愕の声が綺麗に重なる。

ざわざわとそこだけ騒がしい人込みを潜り抜け、一人の貴婦人の手首を掴んだ。貴婦人はビクンと身体を震わせたが、それ以上の驚きは示さなかった。

少しだけ非難を込めた瞳で手首を掴んだダムと、その隣にたたずむディーを睨みつける。40代後半の、落ち着いた雰ム囲気の女性だ。

「どなたかしら？ごめんなさい、もう年なもので顔を覚えていないて」

当然だ、今ここで初めて会ったのだから。

ダムは言葉に含まれたささやかな皮肉に気付くことなく、真剣な瞳でその女性を見つめた。

双子のディーとダムというと、出身地である下町ではかなり有名な“カードもち”である。もしかすると案内役という重役を担う“白ウサギ”よりも有名かもしれない。

だがそれは、身分が賤しいから。特にこのような上流階級には蔑まれるか、無関心でいられるかした。

幸いこの貴婦人は、無関心である方らしくディーとダムだと紹介をしたけれども首を捻るだけだった。

そちらの方が都合がいいと判断し、ダムはあえて説明を省く。

「あの……突然ごめんなさい。さっき、紫の髪の人って、言っただけよ」

拙い敬語にも、気のいい女性は笑いながら頷いてくれる。

今まで上流階級というものに嫌悪に近い偏見を抱いていたダムとディーはほっとしたように息を吐いた。

「ええ、とてもお綺麗な方でしたよ」

「えっと……そ、そいつ、なんかこういう耳付いてませんでしたか？」

ディーがダムに代わって頭の上で三角形を作る。

「そうね……あまりに綺麗だから見惚れていたものですから。確か、あつたと思います」

髪が紫色で、猫耳がついている。

ダムは思わず顔を押しさえて唸りそうになった。そんな目立つ男、記憶にある限り一人しかいない。

「そいつ、水色のドレスを着た女の子と一緒にいましたか？」

「ええ、いました。私は紫のお方よりもそちらのお嬢さんの方が印象的でしたわ。まだダンスにも慣れていないご様子ですが、紫の方に振り回されて 必死に踊る姿があまりに可愛らしくて、私

思わず笑ってしまいましたの。悪いことをしてしまったかしら……」
「あっ、ありがとうございます。それで、そいつらはどっちに……」
にこにここと笑う女性は手袋をはめた手であっちと指差した。口を押
さえて笑うのがこの人の癖らしい。
ディーとダムは聞きたい事だけ聞きだすと、その女性に一言お礼を
言って背を向けた。

なんだか、嫌な予感がする。

えー、明日をテストに控えた作者です。

勉強は終わったのか、ですって？この世界の全学生に言ってやりたい。

僕らの勉強たひに終わりなどない！！

ごめんなさい、久しぶりに出しゃばりました（´・・・・）

ほんとは日本史物理漢文あと半分残ってます。家庭科体育OC古典手え付けてません。

と、いうことで……今回のあとがきはできるだけ短くします。

とりあえず一応そのつもりで書いたのですけど……。

アリスを笑った貴婦人と、最後双子と話していた貴婦人は同一人物です。

ちよつと微妙すぎてわかりませんが、共通ワードとして「手袋」と「口元を手で隠す」があります。

つまりこの貴婦人は「滑稽だから」笑ったのではなく、「可愛らしかったから」笑ったのですね。

知らなくても差し障りのない補足でした！。

今回はちゃんと学年末が終わってから出します！

さてさて……次回はおそらくイオアリ初めての（??）「微エロ」

ですね。

では不肖作者、全力で勉強に励みたいと思います!! (敬礼)

広間を抜け客室に入った途端、イオは後ろ手にドアを閉めて鍵をかけた。カチャリと、無機質な音が不安を煽りたてる。

此処まで来る間に何度か遠慮がちに人が声をかけてきたが、紳士はもちろんのこと美しい貴婦人まで彼は綺麗に無視していた。

しつこく絡みついてくる女性には一瞥をくれて黙らせたこともある。いつもニヤニヤ笑っている彼だからこそ、眉を少し寄せた無表情が怖い。

「あ、あのー……イオさん？そろそろ降ろしてただけじゃないでしょうか……」

「……わかった」

あれ？意外に素直？

地面が足についた瞬間に彼を振り切って部屋を出ようとした私は心の中でガッツポーズを作った。

広いとはいえ、16畳ほどの部屋だ。不意を突けば何とかして逃げられるだろう。

動物的本能というか、第六感あたりが告げていた。ここにいては危ない、と。

……うん、なんというか、部屋電気ついてないしね。

だが、降ろされた場所は意外なところだった。

イオは少しずつ身を屈めて右肩から私を降ろそうとする。私は私で走る気満々でスタンバイをしていた。ついに、左足が地面につく。

「ほら、ちゃんと見て」

「っ……!!」

力いっぱい地面を蹴ったにもかかわらず逃げられることを見越していたイオに腕を取られた。

そのまま手綱を引くように強く引っ張る。この野郎っ……抜けたらどうしてくれるんだ!

「痛いっ、痛いってば!」

「逃げないでちゃんと見て!」

暴力を振るわれたわけでもないのに腕がじんじんと痛い。私はぐつと唇を噛みしめながら、恐る恐る彼の指示する方を見た。

私とイオの前に、もう二つの影。まるで恋人のように仲良く寄り添っている彼らに、私は訝しげな視線を向けた。

この部屋、こんなに広がったっけ……?

違う。部屋に入る時、ここにいたのは　いや、あったのは……。

「鏡……?」

私がどこか虚ろに呟いた瞬間、パチンと小さな音がして電気がついた。突然の白い光に目が眩んで思わず下を向いてしまう。

それを許さないとでも言うように後ろからイオが両耳に手を押しあてて顔を上げさせる。

耳を塞ぐようにして押さえつけられているという、なんとも間抜けな絵図になってしまった。

「ねえ、何が見える？」

「何って……鏡よ」

「そうじゃない。鏡の中には何が見える？」

苛立ったように吐き出されたため息が耳元にかかり、私はビクンと肩を震わせた。それを知ってか知らずか、イオは外気に晒されすっきり冷えてしまった私の肩を抱きしめる。

温かくてほっとする半面、彼の息遣いがさらに近くなってドキリとした。

こいつがスキンシップの激しい奴だということはこの1週間足らずでよく身に沁みている。登場の際には5割の確率で抱きついてくるのだ。

だが、慣れるのと平気なのは違う。

こんなふうを抱きつかれて、平静でいられるほど私は経験豊富なわけではなかった。

「ちよ、ちよっ、ちよっどイオ！」

「ほら、また真っ赤になった」

呆れ半分、苦笑半分で呟く。

いや、呟くのはいいんだけどさあ、いいんだけどさあ………！

(息が耳にかかるのはわざとなわけ?!)

私は文字通り耳まで真っ赤になりながら、なんとか攻撃をかわそうと身をよじらせた。

彼との間にわずかな隙間があくが、逃げるには到底及ばない。……
息がかからなくなっただけマシか。

「ねえ、鏡の中には何が見える？」

もう一度同じ言葉を、同じ唇が象る。

ただし今度は、言い聞かせるように低くゆっくりとした声で。

私は言われるままに正面を向き、鏡の中を覗き込むようにして見た。

水色のドレスを身に纏った女が背後の男に耳を塞がれている。女性というには幼く、少女というには大人びた　ごく一般的な女子高校生。本来なら、鏡の中の私は地味なセーラー服を着ているはずなのに……。

私は胸のリボンをそっと握りしめた。鏡の中の私も全く同じ行動を取り、ほんの少しだけ悲しそうに目を伏せる。

綺麗なドレス。豪華な宝石。完璧な化粧。

でもこれは、本当の私じゃない。

「私と、紫色の変態よ」

「ちよ、俺まだ何も変態らしいことをしてないんですけど！」

「あんたの存在自体が変態だ。寄るな、バカ猫」

しっしと手振りで追い払ってみせると、イオは大仰に傷ついた表情をしながら手を放した。

今だったら逃げられる、と咄嗟に思うが、どうせすぐ捕まると思うと危険な賭けには踏み込めなかった。ドアとの距離は3メートル以上あるのに、彼との距離は数十センチもない。

解放してくれるのを待つばかりか……。私は緊張した面持ちで唾を

飲み込んだ。

「いや、俺のことなんてどうでもいいんだ。そんなことよりさ、アリス。自分のこと見てよ。性格のことなんか誰も文句言えないほどに可愛いでしょ？」

これは……褒められてんのか？ 貶されてんのか？
貶されてるんだな。

数秒でそう判断した私はとりあえず右肘鉄を彼の鳩尾周辺にめり込ませた。今までへらへらと笑っていた彼だったが、その瞬間だけは表情が固まる。それでも顔を歪めないところはさすがだ。

「確かに、いつもよりかはマシに見えるけど……レストのおかげよ」
これでいつも通り「平凡な顔だと思う」なんて言ったら、レストに失礼だろう。あれだけ張り切って化粧をしてくれたのだ、その努力に見合って今日の私は見違えるほど……綺麗だ。

(いや、自分で言うことじゃないんだけどね！)

瞬間的に浮かんできた言葉に、恥ずかしくなって頬を紅潮させる。初めて化粧をする女性というのは、皆こんな気持ちなのだろうか。新しい自分を見ているようで、少しだけ嬉しい。
約一時間の成果が、ウェーブをかけた髪をすべて下ろした私は普段よりもずっと「マシ」に見えた。派手すぎず地味すぎずと言ったところだが、平凡なのとは少し違う。

私は恐る恐る鏡に手を伸ばし、その冷たい表面に指を触れた。
鏡の中の私と、ご対面。

ねえ、貴女には私がどう見えるのかしら？

「ねえ、これでもまだ俺と見合っていないって思うの？」

前からの声と後ろからの声が重なる。最も、鏡の中の私の口は動いてすらいなかったが。

私はさらに鏡に近づいて、額と額を押しあてた。ひんやりとして気持ちいい。

鏡が語る、だなんて。我ながら随分と御伽噺メルヘンみたいなことを考えている。

口は動いていない。声だって、本当は聞こえない。ただ、いつもよりも少し大人びた瞳でこちらを見つめてくるのだ。

もういいかげん、自分を信じてもいいんじゃない？

そう囁いたのは後ろで優しいのかムカつくのか判らない笑みを携えているイオだったのか、それとも鏡の中の私自身だったのか。

「でも」

それでもなお素直になれない私の口を、イオは手を握って制止した。いつの間にかきつく握りしめていた私の手をゆっくり解かせて、指を絡める。

気付かないうちに、本当に気付かないうちに、背中にぬくもりを感じていた。

手を握りしめたまま、マフラーを巻く見たいに軽く腕を首に絡めてくる。ちよつときつい、とでも言うつように手を軽く引くとすぐに緩めてくれた。

束縛ではない。なんというか、もっと暖かくて……少しだけ、懐か

しい。

「子供つてね、褒められればちゃんと自分に自信の持てる子になるんだって」

「あ、あんたまさか早くも子持ち?!」

「ちよつと、何俺がやましい気持ちなしに話そうとしてるのにそっちの方向に話題をそらすの。まだ誰も孕ませてないよ、たぶん」

「い、いや、ごめん。一見人間に興味なさそうなあんたが急に子供の話をし始めたから……」

「何を失礼な。俺大好きだよ?人間。特に女の子。あ、でも男の子でも意外と大じよ」

「吹っ飛べ変態!!」

これから柔道を習う予定の女子中高生の皆様。投げ技だけはしつかりと習得しておきましょう。変質者撃退に繋がります。

私は上体をそらせて彼の腕から抜け出すと、素早く身体を反転させてイオと向き合った。

はじめは驚いた顔をしていた彼だったが、すぐに例のシニカルな笑みを浮かべ次は何をしてくるか探るような顔になる。

挑発的な目に、怒りが沸点に達していた私の血管はぶちぎれた。

(なめやがって……!)

体勢を立て直す彼の胸倉を右手で掴みあげ、右足を踏み込む。そのまま腰を落として彼の下に潜り込み、ふらついて彼が右足を出した時に右前腕をイオの右脇に入れた。

「げ」

この時彼の顔を窺えなかったのがすごく残念だ。

きつとこれ以上ないほど呆気にとられていたと思うのに。

「どりゃあああっっっ!!」

私ははずみをつけて彼の身体を持ち上げ、地面にたたきつけた。

「ははっ、すごいすごい！俺に背負い投げ未遂を仕掛けた人間は初めてだ！」

イオは、私の上で若干興奮気味の歓声を上げた。文字通り、尻に敷かれるというのはこういう気分なのだろうか。

そう、私の背負い投げは完璧だったはずだ。フォームもタイミングも、力量だって。ただし、経験不足だったというだけで。

ただそれだけで私は、こうやって地面に伏す羽目になっている。

「……どけ。重い」

「うんうん、でもアリス、俺が相手じゃなかったら今のは完全にかかってたと思うよ。女の子とは思えないほど上手かったし、俺もちよっと危なかった。そうだアリス、今度開かれる武道会に出てみたら？結構いい線まで行くかも……」

私の背中の上に座つてのうのうと話すこの変態野郎は、妙に饒舌だ。それほど体重をかけていないのか、腰のあたりに質量は感じるがあまり痛みはないことだけが幸いだ。

……いや、そもそも寸前でこいつが手を振りほどいて上方に跳ぶからいけないのだ。おかげで叩きつけるものを失った腕はそのまま前に倒れ込み……そしてこのさまだ。押さえつけるように上に乗られて動けないこの状況も何とか打開したい。

「でもさあ、もともとアリスがいけないんじゃない？俺は比較的まともな発言をしようとしたのに、アリスが水を差して」

「その水に油をどばどば入れて点火したのはどこのどいつよ!」

「まあまあ、その辺は俺が謝るから。ちゃんと話聞いてよ」

ほんの少しふざけが残ったような声でイオが「ごめんだにや」というのが聞こえた。

……いや、少しじゃねえ。こいつ明らかに面白がつてやがる。

イオはエステをやる人のように肺あたりの背骨に手を置くと、わざと声がよく聞こえるよう顔を近づけてきた。

こちらから顔までは窥えないが、きつとにやにやいつもの笑みを浮かべているのだろう。ウザいったらない。

「ね、どこまで話してたっけ？」

「こ、子供の話でしょっ。褒めれば自信のある子に育つって……」
「ああ、そうだった」

大して思い出したふうもなく言うところを見ると、自分の話していたところくらい把握していたのだろう。
そういう余裕綽々の所が少し、ムカつく。

「でもまあ、当たり前のことだよ。一番近くにいた親からずっと罵倒され続けてきたらそりゃあ、自信もなくなるよ。……ううん、自信を持つこと自体、どうやってすればいいのかわからなかったんだ、俺も」

声のトーンが落ちる。何か言おうとした私の口を、イオは右手で覆って塞いだ。

何とか上半身を捻らせて仰向けになると、彼の瞳をまじまじと覗きこんだ。イオも少し意外そうに目を見開くが、すぐに細めてこちらを見返してくる。

金色の瞳。それは甘いようできて、すごく冷たい。

「俺、最初っからこんな俺だったわけじゃないんだ。昔はもっと、いろんなことに臆病で、自分を信じて前向きに生きるなんてこと、したことなかった」

……そっちの方が可愛かったかも。

「アリス、今なんかひどいこと考えなかった？」

「か、考えてないわよ！いいから続けなさい！」

「んー、そう？ならいいけど……。母さんは、俺を褒めることなんか絶対にしなかった。あんたなんか……。その言葉が、耳から離れなかったよ」

懐かしそうに、ただ一抹の哀寂を込めてイオは呟きを言の葉にのせた。

儂い笑顔なんて、こんな奴には似合わない。心からそう思うのに、なぜか目の前にいる彼は、触れてしまえば灰になって溶けてしまいそうなほどの脆さを宿していた。

意志とは関係なく右手が浮き上がって、彼の頬に触れる。彼は右手の上に自分の左手をのせ、頬を温めるように軽く押しつけた。悲しそうな彼の瞳に、ほんの少し光が灯る。

「母さんのかわりに褒めてくれたのはレーテヤルアだったんだ。あいつら、単純でさあ……ちょっとした手品をして見せただけで大はしゃぎ。まさかあんなことで褒められるなんて思ってなかったからね、すっごいびびくりした」

「褒められて……嬉しかった？」

「……うん。うん」

確かめるようにイオは何度も頷く。そのたびに涙がこぼれるのではないかと思うほど、瞳がゆらゆらと揺れた。その一瞬だけ、彼を羨ましく感じた。

褒められた記憶は、正直あまりない。

元々すべてに置いて中の中をキープしているような人間だったため、先生に褒められないのはもちろんのこと、母親は私という存在を見ようとしなかった。

販されて育ったわけではない。疎ましくは思われてはいたかもしれないが、基本的に無関心の一言だった。

子供の頃の私はいつの日か、母の裾を掴んで気を引くこともなくなつた。

料理が出来ても、お使いが出来ても、賞を取ったって。褒められる

ことなんてないと、頭の中で諦めていたから。

私なんか、と。

「アリスだって、褒められればきっと自分を信じるようになるよ。俺が変われたように……貴女も変わる」

だから。

イオはそう言いながら身体をずらして私の上体を起こした。気付かなかったが、彼は膝をついていただけで別段体重をかけていたわけではないらしい。今までずっと押し掛かれていたと錯覚していた私は恥ずかしくなって頬を染めた。頭にぬくもりを感じる。細く白い指が私の髪をすくようにして脇の髪を耳にかけた。

最後に頭を撫でられたのは、いつだっただろう……

「だから、俺がアリスを褒めるよ」

その時のイオの顔を、私が今生で忘れることはないだろう。

耳に触れる指の温もりだって、少し掠れたような弾んだ声だって、忘れない。はにかむように、元気づけるように、くすぐったそうに笑った彼を、私は決して忘れない。

忘れない　この時の、胸の熱さを。

「……………あ」

ありがとう……

その言葉を言ったら、涙が溢れそうな気がした。苦しいほどに胸が

いっぱいになつて、ほんの少しのことで制御できなくなりそうだ。私は言いかけた言葉を喉の半ばで呑みこみ、一度唇を噛み締めてから不器用な笑顔を作った。

イオは満足げに喉を鳴らすと、にやりと口角を上げて悪戯っぽく笑つて見せた。

「じゃあ、もう一回質問。これでもまだ、俺と見合つてないと思うの？」

ほんの数秒の間、考える。

「少なくとも、変態に見劣るするほどじゃないわ」

イオは小さく吹き出して、「素直じゃないなあ、もう」"とだけ漏らした。

「あ、ありがとうございますあ！」

ダムは素早く頭を下げながら、微笑んで手を振る貴婦人に背を向けた。何人かの女性にあたったところ、ようやくイオとアリスのいる部屋がわかったのだ。

デイーが後ろからついてくるのを確認して、部屋の前に立つ。確かに、ここだ。

「……デイー、なんか聞こえる？」

「……ううん、駄目みたい。完璧防音」

「……ってことは先輩の野郎、鍵かけてんだな……」

「壊せないこともないけど……突入する？」

ここ一帯の客室には鍵をかけると完全防音になるという特殊な設計を施されている。もとはと言えばデイーとダムが遊び心半分、親切心半分で「夜の熱に浮かされた男女の年齢指定の部屋」ということで改造したのだが……思わぬ墓穴を掘った。

これでは中で何が怒ってるのか全く把握できない。ダムは悔しそうに拳を床に振り下ろす。

「でもさあ、デイー。もし扉の向こうで姫さまと先輩が……あーんなことやこーんなことまでしてたらどうするよ？」

「目撃情報によるとほとんど拉致の形でこの部屋に入ってるからね、まあ手は出すんじゃない？」

「じゃない？つてお前なあ……………」

「別にいいじゃん、そういうの見るの僕嫌いじゃないよ？それに、未遂だったら止めないとヤバいじゃん」

(……………弟よ、いつの間にお前は大人の道を……………)

ダムは心中おめおめと泣き腫らす、確かにこのままでいるのはまずい。

腕をこきこきと鳴らし始めるディーに合わせて、指の関節を鳴らした。改造版といっても強度は他の扉とさして変わらない、二人で突っ込めばなんとかなるはずだ。

「じゃあ1、2、3で行くからな」

「え。どうせならアン、ドゥー、トゥルアー！にしようよ」

「はあ？いや別に何でもいいけどさあ……………。じゃあ行くぜ。アン！」

両手の拳を後ろへ引き、腰を屈める。あまりこういう方法でドアを開けたことはないが、なんとかなるだろう……………たぶん。

「ドゥー！」

同じ恰好を作るディーは心なしか楽しげだ。

二人同時に床を蹴り、頭を庇うようにして肩を突きだす。完璧なフォームだ。ダムは跳びながら満足げに顔を綻ばせた。

二人は仲好く声をあわせて、合図を叫ぶ。そもそも合図など必要ないほどに、二人の息はぴったりだった。

「トゥルアー！！！」

掛け声とともに、扉に体当たりをする。一瞬の圧迫の後、ダムとデ
イーは暗闇へと放り出された。

「いらっしやい」

開けるといっつよりもほとんど壊すことを目的としたような入り方だ

った。イオは片手でアリスの髪を梳き、聞き手の右手でナイフをくるくると弄びながら、その荒々しさにほとほと呆れる。

フレームもこんなやんちゃ坊主を抱えて……さぞかし大変だろう。最も、あの餓鬼の嫌がる顔などを想像すると愉快でたまらないのだが。

勢い余って踏鞴たたらを踏む彼らは、今だったら数秒で殺せそうなほど隙だらけだった。

しかしイオは、ナイフを日本の指で遊びこそすれ、構えようとはしない。こちらが仕掛けなければ、“門番”は手も足も出ないのだ。あちらの方も戦意はないのか、いつもの斧を持参していない。

「不用心だなあ……武器も持たずに俺のところに来るなんて、殺されてもいいってこと？」

わざとからかうように失笑すると、単純なダムの方が突っかかってきた。

「ふ、ふざけんな！先輩の弱点なんかもう把握済みなんだからなっ。斧なんてなくなっただって負けねえ！」

……なるほど。ということは例の香水はちゃんと持っているのだろう。

イオは見えないように小さく頷き、黙り込んだままこちらを睨みつける。デーの方へ視線をずらした。

正直な感想から言って、基本的にデーの方が頭はいい。ダムの率直なところは見ていて楽しいのだが、時々本当に馬鹿じゃないかと心配になる。よくぞこれで「そっくり」だなんて言えるものだ。

「姫さまは　それ、寝てるの？」

「死んでるように見えるんだ？」

くすくす小さく笑うと、二人が全く同じ形相で瞳に殺気を込めた。冗談だよ、とでも言うように両手を上げひらひらと揺らす。

「酒の素の中に遅効性の睡眠薬を入れておいた。白ウサギがずいぶん扱いてくれたみたいだしね、疲れきって寝てるよ」

「……そんなことして先輩に何のメリットがあるんだ。俺らから逃げるためか？」

「ま、いざというときはそうするけど」

「いざって、何だよ」

怒っているのだろうか。苛々しているのか。それとも、焦っているのかな。イオは金色の瞳を糸のように細めて二人を観察した。

ダムにしてはやけに慎重だ。大方、任務に失敗してフレイルムから極刑が下されることを恐れているのだろう。

仕方ない……ここは少し、手の内を見せておく必要があるようだ。

イオは足を交差させ、軽く伸びをした。何気ない風を装ったまま答える。

「そうだね、たとえば　　あまりにも女王の考えだした妥協案が不当だった時」

「　　っ?! あんたまさか、最初っからそのつもりで……!!」

さすがに察しがいい。ディーが顔色を変えて一步を踏み出した。イオはそれを制するように片手を前に出す。

「ご察しの通り、俺は初めからアリスを交換条件に女王と交渉するつもりだったよ。とは言え、マルスとレストは本当に攫うつもりだ

「つたみたいだけどね」

成功率はわずか12パーセント。83パーセントの確率でフレイムはアリスから手を引き、5パーセントの確率で双子のような暗殺者を送り込むだろうと踏んでいた。

95パーセント……かなりの高確率で、フレイムは“戦争”を避けるだろう。あの少年はそういう人間だ。完全に自分の勝算が見えるまで、絶対に手を出したりはしない。

だが、あの餓鬼がここまで“アリス”に執着したのは意外だった。ルアならともかく、フレイムはアリスを恋愛対象として見ているわけではない。何か別の理由があるとは思うのだが、肝心のそれはイオにもわからなかった。

しかしこれを利用しない手はない。もともとアリスは、帽子屋邸にいるよりもずっと城にいた方が安全だろう。刺客を送られる心配もない。

何より、自分とロキが城に在住する理由が出来たのだ。

今度こそ確実に、“女王”^{フレイム}を内部から殺す……

「……じゃあ、姫さまを攫ったのは」

「最大の理由はアリスの貞操を守るため。もう一つは、監禁状態のアリスを解放するため」

イオはそこまで行って、口を閉ざす。三つ目の理由など、双子に教えてやる義理はない。

“城”を内側から壊していくため、だなんて。

最も、彼らの鋭い瞳を見る限り大体のところは察しているのだろうが。

ダムはぎりぎりとお歯を強く噛みしめながら、吐き出すように悪態

をついた。

「姫さまを、利用したのか……っ」

利用、か。言われてみれば確かに利用しているような気がする。

先程は交換条件にと言ったが、実際は人質にしているようなものだ。適切な妥協案を出さなければアリスは返さない。

これではどちらが悪者かわからない。イオはくつくつと昏く笑った。

悪者？上等じゃないか。もともと自分はお姫様を守る騎士^{タチ}って性分じゃない。

それなら、お姫様を襲う獣でいい。

「やめてよ、人聞きの悪い。そんなことアリスに聞かれたら怒られちゃうじゃん。俺は俺のやりやすいように“改造”しただけ。アリスを傷つけてもいないし、傷つけるつもりもない。もちろん、傷つけさせるつもりだって、ないよ」

「あ、あんた一体何がしたいんだ！フレイム様に手を出したら……ただじゃおかないぞ！」

そこらへんのゴロツキからよく吐き出されるような、陳腐な言葉。それに対してイオは嘲笑で返した。

同じ施設出身の二人。おそらくこんな立場でなかったら仲良くできただろうに……残念だ。

「へえ？俺をどうするつもり？」

「この場でぶっ飛ばす！」

威勢のいい二人が声を合わせて意気込むと、ゲームの勇者一行に見

えて仕方ない。

自分は差し詰め中ボスくらいだろうか。それともここで一旦「逃げ
るのではない、お前らを見逃してやるのだ。わはははは」とかなん
とかいってトングズラする魔王だろうか。

……とりあえずここで相手をするのはまずい。よし　魔王にな
るか。

「　ロキは普通に呼ぶのに、何で俺だけ“先輩”なのか」

声のトーンを落としていってやると、二人の肩が同時にビクンと反
応した。

わかりやすく助かるよ。イオは口端を吊り上げながら心中で嘲笑
う。

「俺、知ってるよその理由。貴方達は強そうな相手を見つけると誰
彼構わず手合いを申し出る。しかも、二人で。卑怯な手を取りなが
らも貴方達は、ロキに勝ってるよね？」

「……相手を殺すのに正攻法も卑怯もあるかよ！」

「ないよ、もちろん。だけど貴方達は同じように卑怯な手を使う俺
に　勝てなかった」

「い、今やればどうなるかなんてわかんないよ！」

「同じだと思っけど？決して勝てない相手だから、俺のことを尊敬

……いや、畏怖を込めて“先輩”って呼んでいるんだ。違う？」

「……………つう」

凶星だったのだろう、彼らから発せられていた覇気がみるみる萎ん
でいった。

それでも悔しげにダムが吐き出す。

「勝てないって諦めてるわけじゃないよ、勝算が見えないだけだ」

同じだ。

あまりにも苦し紛れな虚勢に、イオはぷつと小さく吹き出す。彼が声を出して笑うと、張り詰めていた空気が一気に緩んだ。

「あはは、ごめんごめん。可愛い後輩を苛めすぎちゃったね。じゃあそろそろ本題に入ろうよ。どうせ貴方達は女王の御遣いなんですよ？ねえ、早く妥協案を聞かせて？」

少しからいすぎたかもしれない。いつもはおちゃらけているはずの双子は真剣な表情でこちらを睨みつけている。

負けじとイオは楽しそうに身体を揺らし、子供のようにねえねえと強請ねだった。

今まで比較的大人しくしていたディーの方が先に口を半開きにし、鋭いため息を吐きだす。

「まず、“アリス”は自由に帽子屋邸を訪問していい。ただし、宿泊は一泊のみ。必ず翌朝城に戻ることに。時間までに戻らなければ…帽子屋邸に攻め込む」

「ははっ！随分と門限に厳しいお母さんだね」

だが問題ない。イオは伝言通りに淡々と述べたディーに小さく拍手をあげた。

ディーはそれを馬鹿にされたと受け取ったらしく、途端に赤い顔になってこちらを睨みつける。

そんな彼を見かねた兄が代わりに話し始めた。

「……真面目に聞けつたら、先輩。フレ임様は妃宣言は取り消さないって言った。だけど、絶対に手は出さないって……」

「へえ？女王はどんな意図でそう言ったのかなあ」

「知らねえけど、たぶん姫さまが城で不自由することないようじやないかな。あと、ほんとに好きだったり……」

どんな策略があろうとも、それだけは絶対でない。

イオは渋い顔をしながらも躊躇いがちに頷いた。まあ、不利にはならない取り決めだ。……感情的には今すぐ突っぱねたい要求だけど。

「それから俺らも姫さまにあんま触っちゃいけないって……」

「あ、双子ちゃん達は別にいいや。ぶっちゃけどうでもいい」

「……………なんかムカつく言い方だけど、ありがと。じゃあ思う存分に抱きつけるな、ディー！」

……………やっぱりアリスに5秒以上触るなどでも言っておこうか。

「うん、ダム。……………先輩、これでフレイム様が妥協した案は全部だよ。もう十分でしょ？」

いくらか冷静さを取り戻したディーは冷めた瞳で「これ以上わがままを言うな」と語った。

確かにあのフレイムにしては折れに折れた妥協案だ。随分と下手に出たなと不審に思うが、とりあえず最低ラインを越えた条件にイオは満足げに喉を鳴らす。

「いいよ、とりあえずは。じゃあ俺、そろそろ時間ヤバいからいくな」

夜明けまではあと3時間あまりある。急がないとレーテ達と合流する前に朝日は上ってしまうだろう。

記憶はロキには受け継がれない。イオの策略も、想いも。そちらの方がいいかもしれないが。

イオは呆然とする二人の目の前でベッドから降り、先程からぐっすりと眠っているアリスの額に手を押しあてた。
すやすやと穏やかな寝息が、耳に心地よい。

(……いや、これがうるさい鼾いびきだったらシリアス雰囲気ぶち壊しなだけでさ)

なーんていったら、アリスは怒るだろうか。よし、今度会った時は絶対「アリスの鼾、うるさかったよ」とでも言っておく。

寝顔を見られていた怒りと羞恥で顔を真っ赤にするだろうか。……
楽しみだ。

「先輩何さつきから一人でニヤニヤしてんだよ、気色悪い」
「……人が感慨深く考え事をしてたのに。うるさいよ双子ちゃん」

まあともあれ、次の日にはまた会えるだろう。本当はもう少しそばにいたい、生憎レーテとの約束の時間はとくに過ぎている。

イオは彼女の耳元に唇を寄せて小さく「バイバイ」と囁いた。ほんの少し、アリスが微笑んだ気がする。

名残惜しげに彼女が眠るベッドから身を離すと、慌てたようにダムが裾を掴んできた。

「ちょ、ちよつと待てよ先輩！ 姫さまは……」

「ん？ ああ、明日の朝までは絶対目え覚まさないと思うから部屋に連れてっちゃって」

「そうじゃなくて！ 先輩、まさかとは思っけど姫さまを……」
「にやあ？ なんなの」

不機嫌そうに唇を尖らせると、ダムは途端に顔を真っ赤にさせて黙

り込む。
おいおい……。

「悪いけど俺、自分よりでかい男には恋愛感情抱かないから」

「普通同性って時点で抱かねえよ！という勘違いしてんだこの変態！」

「じゃあなあに」

「い、いや、あの、な……。姫さまに、その、何もしてない、よな？」

姫さまって……。アリスのことだよな。

なるほど、そういうことか。イオはポンと手を打ち、次の瞬間にんまりと意地の悪い笑みを見せた。

ルアもなかなかの純情でからかい甲斐があつた。だけどこいつは……敵ながらにして、つい苛めてやりたくなるような、真症のMだ。ちなみにMには2種類あつて、一つはマゾヒズムを持つ人間、もう一つはサディスト達から苛められやすい人間だとイオは考えている。前者は正直ドン引きだが、後者は嬉々として苛めたいと思う。

……。よし、今度会つたら思う存分苛めてやろう。

「寝ている女性を襲つたりなんかしないよ。俺、紳士だから」

「ウソつけ」

「……………何もそこだけ声合わせなくたっていいじゃん。俺泣くよ？」

一応紳士らしく、色々と欲求を押さえつけていたのだが……。

イオはぶすつと頬を膨らませながら、まだ裾を掴んでいるダムの指を振り払った。

「それから双子ちゃん、これ女王に渡しといて」

慌てて引つ込められるダムの手になじ込むようにして小さな紙片を押しこむ。

いきなり渡されたためさすがに気になるのか、ダムは恐る恐る手を開いてそれを見ようとしたり。

不審がるダムの眉間に人差し指を突きたて、銃の形をかたどる。

「見ちゃダメ」

「……先輩から、フレイム様に？」

「というよりも、レーテと俺から、女王へのラブレター」

「……んな気持ち悪いもん覗かねえよ」

げっそりとダムの瞳から興味の光がなくなると、イオは一息ついて開きっぱなしにしていた窓の方へと急いだ。

窓枠に足をかけ、下を見下ろす。2階なら楽勝だろう。

「あ、そうだ」

「まだ何かあんのかよ」

呆れ切った様子で言うダムと、先程からずっとだんまりを決め込んでいるディーを交互に見やる。

この双子が、フレイムの駒だということは薄々察知していた。これからも彼は腕の立って利用価値のある駒を自分の周りに侍らせるつもりだろう。

なら、こっちも駒を壊しておかなきゃな。

「双子ちゃん達ってさあ、あんま似てないよね」

「　　っ?!」

大きく反応したのはディーの方だった。すうっと夜の冷たさを帯びていた瞳が瞬時に揺らぐ。

さあ、これで水面に小石は投げ込まれた。その波紋がどのように広がるのかは、投げ込んだ人間にもわからない。

イオは薄く笑うと、今度こそ彼らに背を向けて夜の闇へと躍り出た。

「情報収集、アリスの自由確保、双子ちゃんの“歪み”　これだけやれば十分でしょ？レーテ」

「ええ、ありがとうございます、イオ」

イオはバルコニーの手すりに足をかけながら星を見上げた。本当に今日は良く晴れていて、空気が澄んでいる。銀色にきらめく星々も、悲しいほどにその命を燃やして自分達を主張していた。レーテの方は赤ワインを口にしながらゆったりと同じ手すりにもたれかかっていた。普段紅茶しか飲まない彼にしては珍しい光景だ。

「ネズミちゃんやウサギちゃんは？一緒じゃなかったの？」

「……いいえ、途中までは一緒だったんですが、二人ともはしゃぎすぎたせいで疲れて寝てしまってます。先に使用人に頼んで屋敷へ帰してもらってます」

「あは、可愛いねえ」

「ええ、とても。あの二人を見てると若かりし頃を思い出します」

「……さすがにそこまで老けきった考えはないけど」

「まあこれも、年長の貴録というものですよ」

……とはいえ1年も変わらない。確かに精神年齢的には40歳ぐらい差がつきそうなものだが。

イオは苦笑いをしながら、目を閉じて思いを馳せる。アリスのこと、

女王のこと、この世界のこと　そして。

「　　きつともうすぐ、思い出すだけじゃなくなるよ」

夜の冷たい風が頬を切り裂くほどの速さで撫でる。強風とまではいかないが、これでは髪がぼさぼさになってしまう。

イオは髪を直すのを諦めて、再び星空に目を移した。

何度だって、夢に見た。こんな夜空の下で開かれていた、小さなお茶会。

テーブルを囲むのは、三人の少年。

「女王を殺せばきつと、何もかも元通りになる」

「　　本当に、そうでしょうか」

「何、レーテ？もしかして首謀者のくせに、今更怖気づいてる？」

挑発するようなことをいってもレーテは眉一つ動かさない。

やはり先程まで相手していた双子たちとは違い、こちらは冷静沈着だった。

「そういうことではありません。あの人はあくまで自分の意思で女王に付きましました。女王がいなくなっただからと言って、果たしてこちらに戻ってくるでしょうか」

「さあね、そんなの俺にもわかんないよ。俺はただ、やたらと俺の命を狙ってくる生意気な餓鬼を消してやりたいだけだもん」

「……やっぱり、僕は異端者なんでしょうね。貴方たちみたいに殺人をすつぱり諦めきれません」

「あは、そっちの方がアリスに嫌われずに済みそうだけど」

アリスなら、狂っているのはイオの方だと言うだろう。イオにその感覚は理解できないが、彼女は極端に殺人を嫌う。他人を殺すこと

も、自分を殺すことも。

敵を殺すのに、どうして確かな理由なんているのだろう。アリスだったら、少しはレーテの苦しみを分かかってやれるのだろうか。

「じゃあ、止めにする？今だったらまだ間に合うけど」

「いいえ、決行します」

イオが心配そうに尋ねると、レーテは意外にも即答した。しっかりと意志の宿った瞳で前を見据える。

この人のこういうところ、わりと好きだ。くすりと小さく笑うと、イオは穏やかな顔で頷いた。

“チエシャ猫”はどちらにもつかない。

随分前から敵対していた女王派と帽子屋派の中で、囁かれていたことだった。

広大な森と莫大な知識を持つ“チエシャ猫”は、悪戯半分で二つの勢力の間に波風をたてていた。

二人がどんなに懐柔しようとも、最後には必ず裏切る“チエシャ猫”。それも当然だ。

彼は、争い自体に快楽を覚えているのだから。

それが“チエシャ猫”の本能だ。最近のチエシャ猫ではそこまで無慈悲な行動は減ってきたが、ある意味首斬り“女王”以上に厄介な存在だろう。

イオは右手を上に掲げ、月に照らした。

「俺は絶対に、貴方を裏切らない。絶対にだ」

「ええ、ありがとうございます」

孤児院で巡り合った、強い絆。もしあの日あの時あの場所でレーテ

に出会わなければ、自分も面白半分で彼を翻弄していたのだろうか。蒼白い月が太陽の光を反射してイオの手を照らし出す。そうしていると、自分の業も罪もすべてが許されるような気がした。

「そう。ご苦労だったね、下がっていいよ」

フレイムはコツンと机を人差し指で叩いた。物事を考えている時の彼の癖だ。

薄々だが、帽子屋はこちらが出す妥協案を待っているのではないかとは思っていた。こちらが一蹴すればもちろん、そのままアリスを保護するつもりだったのだろうか。

まだ体からたるさが抜けない。ルアも眠っていて、フレイムがこの状態のままではアリスを力で奪うと言うのは不可能に近かった。

だからこそ妥協案を出したのだが　　結局彼らの思い通りだと思つと腸が煮えくりかえるような怒りを覚える。

「でもフレイム様、なんでフレイム様はそこまで姫さまに執着するの？」

デイーが不安そうに聞いてくる。フレイムは慌てて笑顔を繕つた。しまった……また怖い顔をしていただろうか。

「もちろん、僕だつてそれなりにアリスのことが好きだからだよ」

よくもこんな嘘がポンポン出てくるものだ和我ながら感心する。むしろアリスのことは嫌っているというのに。

それでもデイーは少なからず安心したらしく、ほうつとため息を吐くと一歩を引いた。

二人とも退出するのだと思っていたフレイムは、作業用のメガネを指で押しあげて書類に目を移した。

そんな彼を、今度は兄の方が止める。

「そうだ、フレイム様。これ、先輩と帽子屋からラ、ラブレター？
だつて」

……………何だその気色悪い物体は。

「なるほど、そっちがその気ならこっちだって……ふふっ、くっくっ」

手紙の内容は無論、ラブレターなどではなかった。だが何倍にも嬉しい。

おそらくこの筆跡は帽子屋のものだろう。所詮あの猫も、双子と同じ“御遣い”でしかなかったわけだ。

“チェシャ猫”はどちらにもつかない。

昔ブラッドから注意された。あいつだけは絶対に信用するな、と。

“チェシャ猫”が最後までどちらかに加担することなんて、絶対はないと。

だが、どんな運命の悪戯か。“チェシャ猫”は“帽子屋”についての友情という、フレイルからしたらひどく陳腐な絆のために。

今回は例外だ。“チェシャ猫”はどちらにもつかないのではない。

……どちらかにつくわけでもない。

どちらにも、つくのだ。

「トウアイドル・ディー及びトウアイドル・ダム。命令だ」

くつくつと笑いを堪えながらフレイルは窓を開けて夜空を見上げた。星々は命を賭して光を放つ。たとえその先に待つのが破滅だけだとしても、一度燃え上がった命は止める術を知らない。まるで人間のようだ、とフレイルは思う。

「黒猫を懐柔しろ。なんとしてでもあの男をこちら側に引き入れるんだ」

「で、でも……」

「仕留めるのは僕がやる。君たちはただ、あの男と仲良くなればいい」

躊躇っていた二人だが、早いところこの狂気がいっぱいに詰められた部屋から出たかったのか、こくんこくんと何度も頷いた。

逃げるように退出していく双子の背中を、フレイムは冷めきった瞳で見る。

悪戯好きだが、年相応に純粹な子供。ロキがめんどくさがりながらも彼らに構うのもわかる気がする。

「さて」

フレイムはもう一度月を見上げた。そういえば今日は望月だ。

完全な円となった月の光は、それでもなおフレイムの闇を晴らすには弱々しすぎる。

「この僕を挑発した報い　　しっかり受けてもらうよ、チエシヤ猫」

『ルアを奪い返しにいきます』

期末テストようやく終わりました！平均点84点……うん、まあいいや……。

ということと2話同時投稿です。随分と暗い話が続きましたが

ようやく第5章終わりましたね！

1章10話計算なのに……6章はもつと短くしたいです。

つてことで、解説行きます。今回はちよつと長くなるかもしれませ
ん。

【ep14の解説】

前回エロを予告しましたが、まったくのホラでした。あとがきに目
を通していただいていた皆さま、申し訳ありません……。

シリアス60%、コメディ30%、変態10%のイオアリですね。

えー、途中でアリスが背負い投げを決めていましたが、良い子はふ
ざけてお友達にやってはいけません。特にコンクリートの上でなん
かやったら、めっですよ。

……まあ、誰もやらないと思いますが。

なんだかんだ言っただけイオアリってシリアスな話多いですよ。変態
発言がちらほら混じってるだけで……。

【ep15の解説】

ここにきてまさかのアリス就寝中です。もつこれはほんと、黒い二
人が睨みあっているという感じですね。

帽子屋と女王の関係がさらに悪化した話です。しかし表向きはやはり仲良くしています。

さて、こっからアリスは外出許可を貰えましたね。ということですよやく次回から色々と冒険に移ります。

その反面、レーテ+イオとフレイムは対立してしまいました。フレイム様はもとより、イオってこんなに黒かったっけ……。

あ、どうでもいいですが。「ねだる」って「強請る」と書くんですね！ずっと「ゆする」と呼んでました。

【第五章 Cage Rouge or Noire の解説】

Cageはそのまま「籠」という意味です。これはどちらかということ e p 1 の冒頭の小鳥に関係してますね。アリスを閉じ込める牢獄（しよく）という意味もあります。

Rougeは「赤」です。こっちがフレイム様を指しますね。

Noireは「黒」です。こっちはレーテです。存在薄いですが、レーテです。

メインの話は「フレイム様過去編」、「ダンスパーティー編」、「勢力台頭」ですね。

なんだか詰め込みすぎた気がします……。

その他にも e p 5 は「不思議の国のロリーナ*暴（まだ連載してません）」「がちよこつと、 e p 7、 e p 9 は「マルレス（レスマル？ ……どつちも響きが気に食わん）」「がちよびちよび、 e p 14 は「デーダム」がちよべちよべ入っております。

恋愛要素の薄かった今章……じ、次章こそは！

【chapter・0】eps嬉しそうに食いやがって……たかがチョコレート

本編崩壊番外編第5弾です。

シリアスさ皆無ですからね！だからと言ってギャグも微妙ですからね！

キャラ達がうだうだ演じてるだけです。そつというのが嫌いな人は回れー、右っ！

ほんとに帰っちゃいました？

ではでは、番外編第五弾開幕開幕〜！

えー、ついに始まつちやいました、番外編第5弾です。

司会役はお馴染み帽子屋レーテが務めさせていただきます。

作者によると一番特徴がなくて使いやすんだとか。作者爆発しろ。

「おい……誰かタイトルつっこめよ！」

おや、ロキじゃないですか。

この頃アリスの口が悪くなってきたせいで誰が何を言ったか僕が言わないと見分けが難しいんですよえ。

「悪かったわね、口が悪くて。この世界に来てからこうなつたんだよー！」

「んなことよりタイトルどうにかしろよ！見てることこっちが痛々しくなるほど切実な呪詛じゃねえか！」

………ちなみに前者がアリス、後者がロキです。

ロキが語尾に「にゃ」でもつけてくれたらわかりやすいんですけどねえ……。

「だ、だ、だ、だだだ誰が言うかああっ！！！」

「あ、アリスとロキだー！」

あ。変態紫。

「……それが俺の本名みたいに言わないでよ。いくらなんでも傷つくにゃ」

……貴方だと気味悪いくらい違和感がありませんね、イオ。

「あーっ！ちよつと何アリスに抱きついてるんですか！離れなさい
バカ猫！」

また煩いやつらが来た……。えー、今度は何人ですか？ひい、ふう、
みい、よお……。ちよつとお待ちなさい。

ルアはわかります　　こらこら、ソコ。アリスを取り合わない！

　　どんなに人気がなくても一応ヒーローですからね、一応。

女王と双子も……。まあ、ロキのサポート役としてきたと解釈しまし
よう。特に女王の方は人気出てますしね、死ねばいいのに。

ですが　　何ですか、この見知らぬ兵士は！どっから持ってきた
ました！

「姫さまひつさしぶりー！」

「本編大変なことになってるけど仲良くしようねー」

「あ、う、うん……。い、イオ。そろそろはなしてくんない？暑い
んだけど……」

「えー、良いじゃん。今冬なんだしさあ」

「全くよくありません！こういう場合は本編で全く活躍してない僕
が出しゃばるべきでしょう？ということのアリス、いざ僕の胸へ！」

「誰が行くかあっ！！！」

「ルア……お前、俺以上に欲求不満なのな。色々残念な奴に進化し
てんぞ」

「黒ちゃん、何悠長に眺めてんの。こんな時こそ姫さまを奪うべき
だよ。黒ちゃんの方が出番少ないんだからさ！」

「デイーの言う通りだよ、黒ちゃん。いつまでも白ウサギと先輩に
ばっか取り合いさせちゃだめだぜ！」

「う……だ、だけど、これ以上引つ張つたらアリスが可哀想だろ！」
お前ら……人の話を聞く姿勢からまず覚えさせた方がいいですね。
さて、女王。まともに話ができそうなのは貴方だけということなの
で、不本意ながら膝を合わせて話し合いまししょうか。

「まさかルアがあそこまで暴走するとはね……迷惑をかけてしまっ
た。すまない。双子のしつけもしっかりしておく」

まあ、僕もイオに首輪をかけていないので貴方のことを悪くは言え
ませんけどね。

本編では色々と問題が多くて険悪な雰囲気にならないうのですが、
常々貴方とは話が合うと思っただけです。よかつたら交換日記でもし
ませんか？

「……取り方によってはホモワールド真つ逆さまな発言は控えなよ、
帽子屋」

あ、すみません、日ごろの不満を誰でもいいからぶちまけたくて。
えー、雑音は無視して話を戻しましょう。この兵士は誰です？

「赤軍第2隊副隊長のマイクと申します。本日は特別編のために呼
ばれたのですが……あ、あの、私は何の実験に使われるのでし
ょうか？」

はあ、マイク殿……。なんというか、作者ってどうでもいい人間に
はほんと適当な名前つけますよね。五郎君（番外編 e p 3 左：犬の
本名）といいこの人といい……。
えー、ちょっとだけ説明しましょう。目の前のマイクさんはがっち
りむっちりの筋肉の塊で、髪は白髪に見えなくもない薄いブロンド、

赤と黒が基調の制服を着ています。年の頃は、30半ばってところですか。

「要するにパツとしない脇役ってことだよ。ね？」

「はっ、恐縮でございます」

「……………念のため言っておきますが、マイク殿は罵倒されてはあはあするようなドM野郎ではありません。」

それにしてもすごいですね、女王。貴方のところの部下は皆マイク殿のように何を言われても反論しない忠犬なんですか？

「一度城中の人間を皆殺しにしたからね、それ以来面倒で無駄な人材は入れないようにしてるんだ。もしいたら、その場で斬り捨てる」

はあ……………聞かなきゃよかった。つまりみんな女王が怖くて逆らえないんですね。

「ふふ。帽子屋、君にはわからないかもしれないけど、恐怖というのは最強の枷となるんだよ。君のところの使用人は随分生意気じゃないか、見せしめに2、3人殺したらどうだい？足りなくなったら別の人間を持つてくればいい」

はいはい、血生臭い話は結構です。アリスが聞いたら発狂しますよ。

……………この人が一番落ち着いてると思った僕が馬鹿でした。

アリスー、もう収まりましたかー？

「はあ、はあ、はあ……………な、なんとかね。イオの関心がルアに向けてくれてよかったわ……………危うく窒息するところだったもの」

「あ、あいつ俺にも抱きついてきたぞ?! お気に入りであれば見境なしなのかあいつは!」

あの触り癖は今に始まったことじゃないでしょう。でもまあ、うるさいのが二人消えてくれて助かりました。

「ん？あれ、黒猫。ディーとダムはどうしたんだい？」

「ああ、あいつらは『俺らの出番まだまだっばいから昼寝してるー』とかなんとかぼやいて退場してっただぞ」

……結局あの餓鬼どもはロキを茶化すことしかしてないんですか。ちょうどいいです、このメンバーだったらボケも少ないですし、今のうちにちゃっちゃか始めちゃいましょう。それでは、これが本日のメニューです。

『よりによって建国記念日に感染症胃腸炎になってしまった作者です。』

いやー、まさかブラックホールの胃を持つと言われる私が腹痛に悶える羽目になるとは思いもせませんでした。

つてまあそんな話は果てしなくどうでもいいのです。

えー、本当はバレンタイン当日から掲載するはずが、遅れてすみません（遅れすぎだ）

お詫びに番外編の最後に特別編、マイクくんの日常を入れちゃいます（嬉しくもなんともない）

今回はゲストも盛りだくさんで、ルアアリ、イオアリ、ロキアリのほか、人気の高かったフレアリ、作者が個人的に書いてみたい双アリをお送りします。

あ、題名のテーマは 自分はチョコを一つも貰えなかったのに目の前にたんまり貰っているモテ男がいる少年の心情 です』

最後の一言以外意外と真面目な文でしたね。作者もそろそろ字数を気にし始めたからでしょうか。

……ん？あれ、もう一通手紙が……。

『レーテは将来禿げると思っ』

……アリス、この番

外編が終わったらバズーカ取りに出かけましょうか。

第一幕 バレンタインの前の大騒動（ルアアリ編）

私の朝は早い。

別に夜明けとともに目を覚ますとか、悪夢にうなされて飛び起きるとか、眠りが浅いとかそういうわけではない。

挙げてみれば確かに眠りづらいので早くに起きるといのもあるの
だろうが……普通の女子高生ならばその場で寝がえりを打って再び
夢の中へというパターンが多いだろう。
私だって、本来そうしたいほど眠い。

冬が終盤に入ったにもかかわらず、深々と冷え込む朝だった。

私は前半身が妙にスースーするのを肌で感じて、まどろみの中から
醒めてうつすらと目を開けた。

部屋の中はようやく太陽が見えだしたころなのか、薄暗い。きつと
まだ6時前だろう。

私はいつの間にか肌蹴ってしまった毛布を後ろ手にかき集めて再び目
を瞑ろうとした。

しかし、腰のあたりに違和感。

「……………」

腕を動かそうとするが、何かが邪魔してうまくいかない。

そもそもなんでこんなベッドの端に追い詰められて、毛布を半分
以上剥ぎ取られているのだ。私が借りているベッドは、キングサイ
ズのベットのはずなのに……。

ぼんやりとした頭でふと思ったその時、背中から小さな声が漏れた。
その瞬間に心地よい泥につかったままの意識は一気に引き出される。
私は勢いよく体をひねらせると、そこにちょうどあった頭をひっぱ
らした。

「ロキっ！あんた何でこんなところに……………っ！！」

私の腰に両腕を回していたロキはその長い睫毛を大きく震わせて私

の方を見る。まだ光の灯っていない黒の瞳はトロンと融けていて、一体どんな夢を見ていたのだろう、口元は幸せそうに緩んでいた。朝一番の惱殺スマイルにうっかり意識が飛びそうになるが、状況を悟って踏みとどまる。

そう、ここはベッドの上。ロキは私に抱きつく形で腕を絡ませているのだ。

「いつ、いい加減にしなさいっ！ちょっと、放してったら！」

「ん……もう、ちょっと……」

寝起きの最悪なロキは甘えたような声を発して私の腰を引き寄せた。

「いい匂い……」

耳元をくすぐるあまやかな吐息にドキリと心臓が高鳴る。

本当に起きていないのだろうか。素のロキが言っているとは考えられないとわかっていても、妙にはっきりした口調に疑念を抱いてしまっ。

声も高いし、言葉も違っし、よく笑っし、本当に何度見ても寝ぼけロキはまるで別人だ。

可愛い、可愛いよ。ナデナデしたいくらいに可愛い……こんな状況じゃなければなっ！！

私は決意を決めて毛布をはがそうとした。その瞬間。

扉が勢い良く開き、輝かしいばかりの笑顔が逆光に埋もれて暗くなる。

おお、神よ。貴方はたった3秒でさえ時間をずらせないのでですか。

「アリス！起きて下さい、今日は僕と

」

いつもの日常。
今日も防げなかった、ルアの悲鳴。

「だーから！毎晩毎晩イオがベッドに入ってくるんだってば！別

にロキとぞ、そういうことをしてたわけじゃないわよっ！」

「うっ、うっ、ううううっ……だ、だって3時に見回りに言った時には誰もいなかったです！」

「それは多分、イオがレーテのところ行ってたから……ってあんた人の部屋勝手に覗いてたの?! 私のプライバシーはどこにあるのよ！」

「アリスの寝顔が可愛いのが悪いんじゃないですか! ぼ、僕だってアリスと添い寝したいのに……ロキの奴ばっかずるいです!」

ルアはまだぐずったように充血した目をこすりながら鼻をすすった。いや、泣いたふりをしている今はまだましの方だろう。一昨日の朝などはマジ泣きされるかと思ってびっくりした。

条件反射とでも言うべきか、あの場面に直面したルアは甲高い悲鳴を上げると同時に銃を取り出し、当たり構わず乱射したのだ。

心情はわからないでもないが、なんにせよ危ない。私は銃声に反応して跳び起きるロキの背中に隠れながら、怒りの嵐が過ぎるのをただ待ちわびた。

それからが大変だ。数十秒もしない内に我に返ったルアは私とロキの間に割り込むようにして体を入れ、思いつき引き剥がした。

ロキは双子に連行されてどこか別の部屋へ移されたが……残されたのは、ルアと私だけ。

そこで、数十分にわたって説教やら怒声やら泣きごとやらを浴びせられているのである。

最初は鬼の形相で説教をしていたルアだが、途中からぐずり始めるから面倒だ。なんだかこっちがいじめているような図解になっている。

「ということのアリス、僕とも添い寝をしましょう！」
「どうしてこうしてそうなるのよ。絶対嫌だからね」

突然明るい口調になって腕に纏わりついてくるルアの額にデコピンを食らわせながら私は鋭く息を吐いた。

イオが一肌恋しさに寝台に潜り込み、朝起きた時にはロキになって私に抱きつき……それをルアが見咎めるといのは何も今に始まったことじゃない。

もともとロキは寝相が悪いのか、近くにあるものを何でも抱き枕にする癖があった。いや、そのせいで覚醒した時の罪悪感も人一倍なのか、顔を真つ赤に火照らせて謝るロキに堂々と怒鳴りつけるわけにもいかず……結局何度も同じようなことは起きたのだ。

「大体アリスはいつもいつもロキばかり……っ、たまには僕にも構って下さい！」

構ってってねえ……犬じゃないんだから。

ルアは涙でうるんだ水色の瞳で真剣に話しかけてくる。確かに可愛いと思えなくもないが……油断するな、これは策略だ。

「あのねえ……この間仕事をさぼってフレーム様に怒られたのを忘れたの？」

「うっ……あのガキ、容赦なく殴ってきたんですよね……すっごい痛かったです」

ルアが顔を青ざめて右頬をさする。その様子を見る限り、彼の中であれは永遠のトラウマとなっているようだ。

私は小さく息を吐いて慰めるように彼の頭を撫でた。

可哀想だが、多忙な彼を連れ出すわけにはいかない。それ以上に、フレームの機嫌を損ねるわけにはいかない。

この間は危うく私まで首を切られそうになったのだ。

「諦めなさい。フレイム様のためにも諦めなさい。私の身の安全のためにも諦めなさい」

「……そんなに何回も言わなくなつたってちゃんとわかってます。あ……いつからあんな暴力的な子になつてしまつたんでしょう……」

わりともとからなような気がするが。

心の中で突っ込む私に気付かずにルアは長いため息をつき、それから一転して明るい笑顔を浮かべた。

うん？嫌な予感……。まさかこの爽やかスマイルで「じゃあ諦めます！」とか言わないわよね、こいつが。

「でも今日はあの餓鬼、城を留守にするみたいですから！」

……。

留守番中に遊んじゃいけません！

なんて常識、この自由人に通じるわけもなく。結局抵抗も虚しく私は街に連れ出される羽目になったのだった。

ちょうど私たちが城を抜け出した、半刻ほど後の話だが。

「　　ああ、ダム。ルアを見なかった？」

フレイムは眉を寄せながら扉を後ろ手に閉め、ロキとディーとダムとで固まっている集団の傍へ寄った。ロキは嫌そうに顔を歪め、わずかに身体をディーの方へずらす。おかげでロキとダムとの間に一人分のスペースが空いた。

尋ねられたダムはディーと顔を見合わせ、「さあ？」と首を傾げる。

「やっぱり知らないか……。まったく、あの男はどこへ行ったんだ」

「フレイム様、仕事？」

「殺しだつたら白ウサギなんかじゃなくて僕らがやるよ！」

「あ、あ、でもちよつと待ってて！今黒ちゃんとスピードやってるんだ！」

「それがさ、さつきから何度もやってんのにぜんぜん勝てないわけ！黒ちゃん強すぎ！」

「へえ……」

スピードというのはトランプの二人対戦のゲームだ。ということは一十中八九、ディーとダム対ロキということになっているのだろう。瞬発力が勝負か、とフレイムは頷きながらゲームの様子を覗きこむ。スピードとクローバのカードを集めた手札を切っていたロキはちらりとこちらを気にするそぶりを見せたが、それ以上は何も言わなかった。

ディーとダムは言わずもがな、ゲームに興奮して主人の存在さえ忘れていたようだ。少し切なくなる。

「今度こそ覚悟しやがれ、黒ちゃん！」

「こてんぱんにしてやるんだからな、黒ちゃん！」

「はあ……これ終わつたら解放してくれよな……眠い」

黒ちゃんて定着してるな、黒猫……。

ぼそつとした呟きにロキの猫耳がピンとたつたが、やはりそれだけであった。薄々わかつていたことだが、どうやらこの男は自分にはなるべく関わらないようにしているらしい。

フレイムは少ししゃがみこんでゲームの様子を見守っていた。この頃立て続けに仕事をしていたため、気が滅入っていたところだ。

ゲームは、あれほど温度差があったにもかかわらずロキの圧勝で終わった。

悔しさに双子が苦しみもがいている。その正面でロキは欠伸をしていた。

「な、なんでだあ?!」

「もう一回、もう一回だけ!」

「……何度やっても無理だと思っけど」

フレイムの冷めきった声に、双子が同時に顔をあげる。

敗因は何か、聞きたいらしい。戦闘に関しては優秀そのものの彼らだが、頭の方はそれほど良くないのだ。ふうつと、小さくため息をつきながら人差し指を立てて説明する。

「二人でやるのがいけないんだよ。見た限り、指が当たったりしてそこで手間取っているようだった。指が多ければいいってもんじゃないんだからさ、一人ずつやってみたら?」

「一人?」

ダムとデイーが一様に驚いた声をあげ、お互い顔を突き合わせる。ああ、そうだった。この双子には「一人」という概念がないのだ……。

さらにめんどくさいことに、二人はいつもの「兄弟愛」を交わし始めた。冬だというのに暑苦しいつたらない。

ロキはすでに瞼が限界を迎えたのか、うつらうつらとしている。一人残されたフレイムは「あー……」と確かめるように声を出した。

「ほんと、どこ行ったかなあ……。今日は一緒にルイセント卿の屋敷に訪問しなければいけないのに。まさかあいつ、アリスと遊んでるんじゃないだろうな」

フレイムの独りごとは虚しく双子の騒ぎ声にかき消された。

「へっ……くしょんっ」
「どうしたの、ルア。風邪でも引いた？」

「つう……いえ、なんか悪寒が……アリスー、温めて下さい」
「調子にのんじゃねえカスがつ！」

鼻をこすりながら抱きついてきたルアの鳩尾に、容赦ない力で拳を入れた。この頃変態の扱いに随分慣れてきた気がする。嬉しいんだか、悲しいんだか。

私は腹部を押さえて呻くルアを無視して街の様子を見渡した。心なしか今日は一段とカップル率が多い気がする。何のイベントがあるのか、街はピンク色に装飾されていた。

「お嬢ちゃん！あんだ恋人連れかい？」

このように声をかけられることも異常に多かった。どうやらこっちに手を振っているところを見ると呼んでいるのは私の方らしい。

私はルアと目を合わせて「ちょっと行ってくるね」と伝えると返事も待たずに呼ぶ男の方へかけていった。

初老の男性は人の良い笑みを浮かべてピンク色の袋を振りまわしている。甘い匂いが漂ってきて、私は目を輝かせた。

「それ、チヨコレートですか？」

「お、匂いでわかるかい？」

「はい。でもチヨコレートだけ売ってるなんて珍しいですね」

「それでもねえよ、今日は特別だぜ」

今日……？私は首を傾げて再度あたりを見渡した。こんなに浮き足立っているのはそれが原因なのだろうか。

「はあ……やっぱり知らなかったんですか。今日はアリスの世界で言う2月14日です」

「2月14日……？って、あ！」

ルアにため息交じりで諭されても一瞬分からなかった。
バレンタイン。そつと呟いてようやく、実感がわく。その反応の遅さにルアの眉根が寄った。

「アリス、本当に一介の女子ですか？昨日から動向が何も変わんないなーと思ってたら、よもや気付かなかったなんて……」

「し、失礼な！だって、私は……」

バレンタイン自体は知っているのだ、勿論。ただ……去年まで、あまりにも自分とかけ離れたイベントだったからいまいちわからなかったただけだ。

愛することも、愛されることもしなかった私には 無縁のものだった。

ほんの少し影を落とした私の顔を見て焦ったのか、ルアが途端に慌てる。

しかしここで空気も読まず、商売を始めた声があった。

「そうそう、今日はお祭りごとなんだよ！つてことでお嬢ちゃん、買ってかねえかい？味見もあるぜ？」

そうやってずっとチョコレートの乗った皿を渡される。甘ったるい臭いが濃すぎて、眩暈がした。

バレンタインって女の子が好意の男性にあげるものじゃなかったっけ……？

疑問に思うが、差し出された者を突き返すわけにはいかない。私は作り笑いを浮かべながら茶色の物体に指を伸ばした。

「頂きます……」

直径1センチほどの小さなトリュフだ。お酒も入っているのだろう、アルコール臭がする。

少し躊躇いながらも口に運ぼうとした、その時。

「待って下さい、アリス」

横から伸びてきたルアの手が私の口を押さえた。そのまま叩くようにして私の手からチョコレートを奪う。

「ちよ、ちよつと彼氏さん！何するんだよ！」

不自然に焦ったのは商人の方だった。何とかしてチョコレートを取り返そうと身を乗り出して手を伸ばす。手に持っていた皿から大量のチョコレートを落ちて、ルアの足もとにばらまかれた。

ルアはいつになく冷めた瞳でそれを見下し、転がってきた丸い物体を踏みつぶした。ぐちゃりと、柔らかいものが潰れる音がする。

呆然とする私の前で、何のためらいもなく彼はチョコレートを口に近づけた。半分だけを前歯で噛み砕いて咀嚼する。

しかし嚙下する前にペツと吐きだした。まるで不味いものを食べたかのように顔を歪めて商人の方を睨みつける。

「麻薬を混ぜてますね。値段は普通……と。そうですよね、一度力モになってしまえば後からいくらでも巻き上げることができる。なかなか賢いやり方です。女王補佐官の顔を覚えていなかったのが運の尽き、といったところでしょうか」

にこりと善良な笑みを浮かべるが、水色の瞳の色は深く、そこに隠しきれない怒りを宿していた。

麻薬って……ちよつと、何それ。

私は顔を青くして足元の残骸と商人の顔を見比べた。もし言われるまま味見をしていたらと思うと、背筋がぞつと冷える。商人はがたがたと震えながら、足を踏み出すルアを見上げていた。その顔からは見ていて可哀想なほど血が引いている。

「な、何言つて……じよ、女王補佐官……？し、白ウサギ……？あ、あ、あ、あんたあの化け物かつ！」

「化け物とはずいぶんな言いようですね。僕は正義の味方ですよ」
嘘つけ。

ここに来て初めて商人と私の思考が一致した。こんな黒い笑顔を作る正義の味方がどこにいる。

ルアは逃げようとする商人の胸倉を掴み、地面に叩きつける。まるで柔道の試合を見ているかのような鮮やかな手捌きに私は感嘆のため息を漏らした。

よし、今度見習おう。

「さあ、僕が怒っているのはもうお分かりですね？」

あの細腕のどこにそんな力があるのか、おめおめと泣き声をあげる商人の首を掴み、持ち上げる。

ルアよりも背の低い商人は必然的に地面に足がつかなくなり、苦しそうにじたばた暴れた。

このままじゃ死んでしまう。私はようやく我に戻ると、彼を止めようと口を開いた。

が。

「僕より先にアリスにチョコを渡した罪で死刑です！」

.....。

「お前はアホかあつ!!」

「へぼっ」

次の瞬間、私の回し蹴りがルアの後頭部右斜め上に命中した。長いスカートが風に揺れて中身が見えた気がするけど気にしない気にならない。

半ば無意識ともいえる攻撃に驚いたのはルアや商人ばかりではなかった。街ゆくカップルが何事かと覗きこんでは、あからさまに目をそらす。

ルアは奇声を上げながら2メートルほど吹き飛ばされたのと私が地面に着地したのはほぼ同時だった。彼の手から解放された悪徳商人は呆然と尻餅をつきながらもそそくさと逃げる体勢を整えている。

させるか。

「オジさん？」

「ひっ.....」

ひって何だ、ひって。人を化け物のような目で見て。

私は見よう見まねでルアの「黒い笑顔」を顔に張り付けると、手を合わせて指を鳴らした。

ほろほろと泣きだす

……想像以上にいい音が出たわね。

「自首しろ」

「にしてもほんと信じらんない！何で警察がいないわけ？！」

私は痛む両手をぶらぶらさせながら呆れたように溜息をもらした。
結果的には一件落着きというところだろう。悪徳商人その名もボブさ

んは実に善良で素直な人だった。
最初は「ジシュ」という言葉がわからず響きだけで「首を吊れ」と命令されているのかと思っただけ。善良な一般人である私がそんなこと言うはずなのに。
がくがくと痙攣したボブさんはそれはもう必死の形相で謝ってきた。地面に頭を打ち付けて、何度も何度も。うん、ちよっと可哀想だったかも……。
ともあれ、これに懲りてボブさんもしくはは店を畳むだろう。正義は勝つ。

「だから、気に食わない奴がいたら殺しちゃえばいいんですって。アリスは説教が長すぎます……」
「それじゃあ根本的な解決にならないでしょ！大体、何でも殺せばいいってわけじゃないわ！」
「でも……はあ……。アリスに小1時間説教されるなんて、羨ましくすぎます」

……………。

「あ、あんたつてマゾ？」
「断じて違います。小1時間アリスの関心を独占したって意味で羨ましいんです」

ああ、そういうことか。私は大げさに胸を撫で下ろす。
サディストが蔓延る今日この頃だが、マゾヒストは勘弁してほしい。それが自分のストーリーカーなら尚更だ。

「にしてもルア、よくあれが麻薬入りだってわかったわね。普通のチヨコレートに見えたけど」

「ああ、この西部地方は女王の管理下で最も治安が悪い街なので、

もしかと思ったんです。もう少し行くともつと明るい街並みに出ますよ」

「……………？何でそんな危ない街に来たの？」

「え……………だって、ルイセント卿の屋敷は東部地方にあるから、少しでも距離を置きたくて……………って何でもありません！」

「はあ？」

「な、何でもないですったら」

突然慌てだしたルアに胡乱気な視線を送る。なーんか隠してるな、こいつ……………。

ルアはあちらこちらへと視線を飛ばしながら、なんとかして話題をそらそうと奮闘した。

「そ、そうだアリス、チョコレート買いましょうよ！今度はちゃんとしたヤツ」

「別にいいけど……………今日、バレンタインなんでしょ？よかったら私作るわよ」

「げ」

ちよつと待てこら。何でそこで嫌そうな顔をする。

ルアは慌てて顔を取り繕ったが、時すでに遅し。私の乙女心は致命的なダメージを受けていた。

ひくつと頬の筋肉をひきつらせながら彼に掴みかかる。

「げってどうということよ、げって」

「お、落ち着いて下さいアリス。いえ、決して深い意味は……………ただ、手作りだと味の保障がないから、どうせなら市販の方がいいなあ、と……………」

ズゴーン。

アリスのピュアハートは19583のダメージを受けた。

「な、な、なめんじゃないわよっ！ルア、さつさと材料買って帰るわよー！チョコはやっぱり手作り！こ、こうなったら吃驚するほど美味しいやつ作ってやるんだから！」

そう言わせたのは女の意地だったのか、料理の腕に対しての自信だったのか。

今日という日の終わりにはすべてを後悔することになる。

くるりと踵を返した私の背後で、白ウサギがにやりと笑った。

T o b e c o n t i n u e . . .

先程からずっと不機嫌そうな顔で買い物籠に品物を入れている少女の背中を、ルアは黙って見つめていた。真剣に材料を考えてくれるのは嬉しいのだが、構ってくれなくて淋しい。

アリスが挑発に弱いのは経験からわかっていた。

彼女の負けず嫌いな性格が関係しているのだろう、少し意地悪なことを言っただけならば簡単に操れた。

もちろんルアは市販のチョコレートになど興味はなかった。そもそも甘味はあまり好きではない。

アリスのくれた物ならすべて嬉しいが、去年までのチョコレートはすべて“処分”の対象だった。大抵は甘党である双子の腹に消えている。

「アリス、やっぱりいいですよ。色々不安ですし……」

一生懸命材料選びをする少女の背中に、恐る恐ると語りかけてみた。アリスはルアの思惑通り、さらにむっとしたように眉を寄せさせる。そうやって強がるところが好きでたまらないのだ。

「言っておくけど私、料理はちゃんとできるんだからね！」

それもすでに調査済みである。虐待されていたアリスの食事は当然、彼女自身が作っていた。いずれも簡素な食事ではなかったが、少なくとも不味いということはないだろう。

たとえどんなに不味くても、自分はそれを喜んで食べるだろう。

理由は、アリスだから。それだけで十分だ。

アリスは俄然張り切った様子で、ガッツポーズを作ると再び食材に目を移した。

そう、その調子で。ルアは心の中でそつと囁く。

その調子で、頑張つて。僕のために。　僕だけの、ために。

貴女が、僕のために用意した甘味なら。毒が入っていたって僕は悦んで食べるから。

だから、僕だけの為に作って下さい。僕だけの、甘味をください。

「アリス」

自分でも気付かない内に彼女の名前を呼んでいた。アリスはさすがに機嫌を損ねているのか、ルアの声が届くほど近くににいるのに振り向いてくれない。

ずんつと。心が、重くなった。

どうして？全部、思い通りになって喜んでいたはずなのに。アリスのくれるチョコレートを想像して心が弾んでいたはずなのに。

どうして、貴女の視界せかいに入らないだけでこんなに不安になる……っ！

「アリスっ！」

僕を見て。

僕を呼んで。

僕を。

僕を。

「あーもうっ、なによ、うるさい！」

腕を掴んで無理やり振り向かせると、アリスは煩わしげに指を振りほどこうとする。

しかし、そうはさせない。ぐっと力を込めると彼女にも切迫感が伝わったのか、それ以上の抵抗はなかった。

ここが人目の触れる所じゃなかったら、抱きしめたかった。強く、強く……壊れてしまうほど。

いや　　きつと自分は、いつか本当に彼女を壊してしまうだろう。壊れて、冷たくなつた語らぬ彼女を……それでもなお、抱きしめて愛していると囁くのか。

狂っている。

想像して、胸が締め付けられるほど悲しくなった。

狂っている。狂っている。

それでも、愛してる。

「大好きです」

アリスの眉が、怪訝そうに寄る。突然何だ、とでも思っているのだろう。

ルアは絞り出すような声でもう一度「大好きです」と繰り返した。

自分でも唐突な言葉だとは思つ。だけど潰れてしまいそうなこの想いは、どんなに言葉を尽くしてもまだ足りなかった。

好き？大好き？愛してる？欲しい？

（違う。違う違う違う違う）

（！）

そんなもんじゃない、そんな軽々しい思いじゃないのだ。
憎悪よりも、さらに黒い思い。恋慕よりも、はるかに焦がれる思い。

それは、言うならば 狂気。

「アリス……っ」

腕を握る手に力がこもる。ルアはアリスが先ほどからずっと痛みを耐えていることに気付かなかった。

アリスは、ふっと小さな溜息をついて握られた腕とは逆の方の手で服のポケットをあさり始めた。

何をするかと思えば、取り出したものを呆然とするルアの目の前に突き出す。

「ほら、これあげる」

「あ……」

二本の指で挟まれた、小さなチロルチョコ。

すうっと、潮が引いていくように頭が醒めていった。冷静になった、とは少し違う。文字通り、醒めたのだ。

ルアは戸惑いがちに手を解いてそれを受け取る。チョコの中で最も小さく、最も安い値段で売られているそれはイチゴ味のようだった。くん、と小さく鼻を鳴らすだけで甘いいい香りが楽しめる。

「あんまりルアがうるさく言うから、一応買っておいたの。手作り、失敗したら申し訳ないしね……」

「アリス」

「とりあえずそれでも食べて落ち着いててよ。すぐ帰ってチョコ作るからさ」

「僕のために、ですか……？」

「はあ？他に何かあるっていうの」

ああ……。ルアは震えながら息を吐きだした。

どうして貴女は、欲しいときに欲しい言葉をくれるのでしょうか……。本当に、今までの動揺が嘘みたい。ルアは落ち着いていた。いつものように優しい笑顔を見せ、いつものようにアリスをからかってみせる。

いつもの、ルアだ。

だから少し、もう少し隠れていて下さいね。僕の狂愛……

こんなアリスを、大切に思うから。まだ、壊したくない。壊れたくない。

ルアはあふれる寸前だった。どろどろとした感情に蓋をすると、アリスから受け取ったチロルチョコを大切そうに懐にしまった。

アリスは自分のために作ってくれるというが、優しい彼女は色々な人にもあげるだろう。

それがたまらなく憎らしく、妬ましい。自分だけではない。そのことが、ルアを狂気へと駆り立てていた。

……。
だけ。

このチロルチョコだけは、僕のもの。

アリスがくれた、たった一つの “特別”。

自分は、これだけで十分だ。

これだけで。

「あ、でもちゃんと手作りのも下さいね」

「わかってるわよ！意地汚いなあ」

だって、アリスの味も知っておきたいですから。

f i n . . .

どうも、この頃眩暈と頭痛と耳鳴りがやまない作者です。寝てろって感じですね。

さあ、始まつちやいました、番外編第5弾！

「いつまで続くんだ、このクソ企画 〃（・・・*）」という方！
安心してください、さすがに10弾で終わりにします。（・・・）
長っ！

今回第5章がすさまじく長かったですからねえ……ずいぶん久しぶりな気がします。

ああ、でも作者的には「番外編3弾ってこんなに昔の話だったっけ……？」って感じです。一番苦戦した登場人物紹介が印象的なんですよねえ、あの番外編。

マリオネットの新連載もあり、正直今回はかなりぎりぎりの精神状態でした……。

ギャグがちゃんとギャグになってるか、すつごく不安です。精神状態はルアのヤンデレ化で大体わかりますよねww黒いルアを出すだけのつもりだったんです、本当は。

今回バレンタインの話、どうすればいいのかすごく悩みました。チョコをあげるだけじゃつまらないし、かといってそれ以外にやることないし……。

でもまあ、一番書きにくいルアアリが無事(?)終了したからたぶん大丈夫だよな！と自分を励ましつつ、第5弾まだまだ続きます。

第5弾、ついに普通の漢数字になっちゃいました……。原因は、どこまで続くのかわからなかったこと、ネタがいい加減尽きたこと

です。ちょっと残念(´・`・´)

えー、これで一応ルアアリは終わりです。長くなった気もしますが……ロキアリも一部入ってるのでこんな感じかな、と思います。ルアアリはいつも一番最初に来るので、事の起こりを書かなきゃいけないから長くなりがちなんです。

決して人気のないルアを贖してるわけじゃないです。本当です。信じて下さい(*・`・´)

それはそうと、エロを期待していた方、すみません……。ルアはどちらかという頭の頭の妄想が激しい人なので(あ、作者もそうですw)行動が少なくなりがちです。

ちなみに一番最後のあの文。エロいほうで取ってはいけませんよ!「お母さんの味」的な方で取って下さいね!

第二幕 大好き（双アリ）

「アリス……まだイケないんですか？もう、僕……」
「んう……ダメよ、ルア。まだ、足りないわ……」
「でももう僕、我慢できないです……」
「ダメだってば……あともうちよっと……」
「アリス……美味しそうですね……」
「あっ！だ、ダメ、そんなところ触っちゃ……」
「っう……熱いです、アリス……」
「ば、バカ……っ」

チーンッ

「あ、出来たわね」
「わあ……すごいですアリス！」

ちょうどルアの指を冷やしていた時に電子音が厨房に響いた。私がウキウキと電子レンジを開けると、むわりと甘い匂いが鼻を刺激し

た。
ルアがうつとりとその香りに酔いしれているのをいいことに私は片づけをはじめていた。先程から隣の彼がそわそわしていたせいで、何一つ片付いていない。

「まったく……あそこは火傷するから触っちゃいけないってわかんなかったの？」

「すみません。アリスがまだまだ熱が足りないとか言うから、もうちょっと火力をあげればいいかと思って……」

「気持ちは嬉しいけど、短絡思考。焦げたらどうするの。あと、途中で電子レンジを開けるのもいけません」

「う……だ、だってもう大丈夫かと思って……」

「見た目が平気でも中はまだ生なの。とにかく、不用意にレンジに触らないこと、中途半端に開けないこと。わかった？」

「うう……わかりました」

私はようやくお皿を全部洗い終わって一息ついた。ルアは少しだけしょんぼりと肩を下ろしながらお行儀よく席についている。

この国の男性には珍しく料理一般はできるルアだったが、ブラウニーは作ったことがなかったらしい。しきりに興味を持ってなだめるのに大変だった。

電子レンジを使った簡素なお菓子だったが、妙にハイテンションで喜んでくれた。嬉しいには嬉しいが、あまりのはしゃぎっぷりに若干引く。

「美味しそうです、アリス！ありがとうございます！」

「まあ、私もあんまりお菓子作りはしないんだけどね……ブラウニーなんて初めてよ。案外電子レンジなんかでも出来るものなのね」

「初めてでここまでできるんですか？すごいですねえ……僕なんか10回失敗してようやく習得するような感じですよ」

「……………」

もしかしてルアって、実はもんのすごい不器用？

だとしたらフレイムも随分と辛抱して彼に料理をさせたものだ。今でこそ料理が得意なルアだが、その技術を身につけるまでにどれほどの努力を労したか……。

「ま、まあいいわ。とりあえず食べてみてよ。上手く出来るといいんだけど……………」

ことつと小さな音を立ててルアの前に皿を差し出す。皿いっぱいに盛られたラム酒入りブラウニーはふんわりと形もよく、我ながらなかなかの出来だ。

あとは味だが……少しラム酒がきつかったかもしれない。ここからでもお酒の匂いがほのかに漂ってくる。

私はドキドキと胸を高鳴らせながら一つをつまんで口に運ぼうとするルアをじつと見つめた。

「……………アリス、そんなに熱心に見つめられると照れくさいです」「う、ごめんなさい……………」

ぎこちなく笑われて私は素早く目をそらす。そんなあからさまな反応にもルアは苦笑したが、下を向いていた私は気付かなかった。

やがて感嘆のため息とともに賞賛の言葉が耳をくすぐる。

「すごく美味しいです、アリス。柔らかくて、甘くて、ちょっとほろ苦くて……………これなら、お店に出してもいいくらい美味しいです」「い、いくらなんでも褒めすぎよ……………」

過剰なほどの褒め言葉を連ねながら、あっという間にルアは一つを

食べ終えた。

次の手を伸ばす前に、改めたようにこちらを向いてにっこりほほ笑む。

うわぁ……いわゆる王子様スマイルってこういうやつか……。

（なんか、ルアがやると妙に似合うのよねえ……。イオがやったらただの胡散臭い道化師^{ドクロ}だけど。フレーム様がやったら間違いなく腹黒スマイルだわ。ロキがやったら……槍が降りそうね）

「今日はありがとうございました、アリス。アリスとお出かけして楽しかったです」

さすがルアとでも言うべきか。こういう感謝とか、謝罪とか、挨拶とかそういうものにはきつちりと礼儀が適っている。私は軽く頭を垂れるルアをみながら徐々に心が温かくなっていくのを感じた。一生懸命作った物を、美味しいと喜ばれて。こんなふうに、一緒にいて楽しかったと言われて。

この瞬間だけは、常に後ろ向きな私でも確かな幸せを感じることができた。

また作ってやってもいいかな、となんとなく思う。いつもいつもひっついてきてこの頃無性にウザかったストーカー野郎だけど、こいつの無邪気な笑顔を見れるなら……。

しかし、幸せの余韻に浸る私の前に容赦なく嵐はやってきた。

「へえ。アリスとお出かけ、ねえ」

白雪姫は毒りんごを口にして血が凍ったと聞く。血液の融点は氷点下18度だ。だとしたらこの部屋の温度は、それ以下なのだろう。さて、冷凍版白雪姫と同じ状況下におかれたわけだが。同時に背後から地獄で燻る炎のような赤いオーラも見える。幻覚であってほしい。精神科に行ってもいいから、幻覚であってくれ。

重い沈黙。いや、沈黙なんてものじゃない。声が、でないのだ。まるで催眠術にあったように、悲鳴は喉まで出かかっているのに最後の最後で出てこない。生存本能が告げる。

あ、こりゃ死んだわ。

………つてノリ軽っ！もうちょっと踏ん張ってもいいんじゃないの？！

いや、一人漫才をやってる場合じゃないのだ。マジで、逃げないとヤバイ。

………現実から？

つてそれただの現実逃避だし！もう黙つててよ私の（さつきあつさり処刑宣言したけど）生存本能！

私なんかはまだいい。現実逃避できる余裕があるのは、彼の瞳を直視していないからである。メデューサさながら。

ちょうど私の背後に彼が佇んでいるとして、向かい側に座っているルアは白い肌をさらに青くして震えていた。最早病人の域を超えている。

今にも窓から飛び降りて逃げだしそうな彼であったが、凍りついているのは私と同じらしく震えているくせに指一本まともに動いていない。

「今日の予定は、なんだったかなあ……ルア」

コツ。硬い靴底が床を叩く。ゆっくりと一步を踏み出す様子が、これまたホラーであった。

早く振りかえってどこかへ避難しなければならぬ。そう思うのに首がさっぱり動かないのは、やはりこのホラー独特の暗いオーラが邪魔するからだろう。心なしか天気は陰り、どこかで遠雷がなった。早い話が、足が竦んで動けないのだ。メデューサに睨まれ石化したかのように固まる私の腕を、横から引つ張る者がいた。

「姫さま、こっちこっち」

「早くしないと首刈られちゃうよ」

聞きなれた声が魔法のように石化を解いてゆく。私はごくりと唾を飲み込むと、その声に従ってようやくと身体を横にずらした。

私を“安全地帯”に逃してもなお不安なのか、二人の勇者は庇うようにして私の前に出る。二人の大きな上背に隠れてメデューサこと怒れる女王さまの姿は完全に見えなくなった。

「姫さまはなんも悪くないから！悪いのは全部あのバカな白ウサギだからね！」

私の視界を隠すように抱きしめるディーが慰めているのか、強い口調で言う。

「そうそう、フレイム様の約束をすっぱかして姫さまを“でえと”」

に誘う白ウサギが悪いんだよ！」

デューと私の前に立ちはだかり防御態勢を取っているダムもしきりにうなずいた。

彼らが私を助けてくれなければどうなっていたことが……。

フレイムはまだ笑顔と青筋を浮かべたまま動こうとしないが、あれは間違いなく突進体勢だ。あのままじゃ彼の攻撃の軌道上にいたことだろう。

いくらか冷静さを取り戻した私は、事の矛盾に気付き信じられないというかのようにルアの方を凝視した。

「ちょ、ちょっと待ってよルア！あんたさっき、フレイム様は城を留守にするって……今日は仕事お休みってことじゃなかったの?!」

「あ、アリス……う」

情けなくもルアは水色の瞳に涙をためてこちらを見つめている。

うっ……そ、そんな「たすけてください」的なるうる光線を発しないですよ……。

彼を責めるつもりがうっかり傾きかけた私を、鋭い視線が射竦めた。殺気がびりっと一瞬だけ空間を震わせる。

「へえ……ルア、そんなこと言ったんだあ。今日は僕と一緒にルイセント卿を訪問するはずだったのになあ。女王のほかに補佐が2、3人必要だって、言ったよねえ?」

「い、いや、でもそれは、僕じゃなきゃいけないわけでもなくて、え、えっと、よ、よくこんな早くに帰ってこれましたね……」

珍しくどもりながらルアが言うと、フレイムは小さく肩をすくめて笑顔を浮かべてみせた。

ただし、両手によく研がれた鉞を構えながら。

「ああ、それかい。実はルイセント卿にお詫びの伝令をやって今日は取り止めにしたんだよ。どっかの誰かさんが約束をフケたおかげでねえ」

「へ、へえ……そんな気を遣わなくても結構でしたのに……」

「気だつて遣うさ。だって今日は　大事な従者の命日になるんだから……ねえ？」

ざらりと、銀色の刃が妖しく光る。それが命をかけた鬼ごつこの開幕だった。

瞬時に意味をくみ取り、同時に生存危機を本能で読み取ったルアは脇目もふらずにその場を逃げ出した。まさに、脱兎の如く。それを追ったフレイムも負けないほどの素早さで身体を動かす。

「待てっ!!」

「と言われて待つ人はいませんよあつ!」

振りまわした鉞をすんでのところで避けるルア。先程までの笑顔をかなぐり捨てて盛大に舌打ちをするフレイム。やがて二つの背中が厨房の奥へと消えていった。

ガチャンとガラスの割れる音と獣のような咆哮が向こうの方から聞こえる。
ルア……まさか窓を蹴破つて外に出たんじゃないでしょうね。ここ4階よ……。

「んー……やつぱ高い所じゃ獣人アイツの方が有利かあ……。フレイム様、流石にこんなところから降りたら怪我しちゃうもんねー」

「や、やつぱり窓から逃げたのかしら……」

デイーの残念そうなため息に私は顔を引き曇らせた。ルアを心配す

る前に、今ごろフレームはどのようにして怒りを晴らしているのだらうと不安になる。

無闇に武器を振りまわしてなきやいいけど……。

「ふうー……でも危ないとこだったな、姫さま！あのまま白ウサギの傍にいたら巻き添え食らってたぞ」

「そ、そうね……ありがと、ディー、ダム。助かったわ」

「えへへっ」

「どーいたしまして！」

照れくさそうに笑う彼らの頭を届く範囲でポンポンと撫でる。まだまだ子供なのか、こうすると少しだけくすぐったそうに身を揺らせて笑うのだ。

普段は生意気でマセてるなとしか思わないが……こういう可愛い一面もあるのだから憎めない。

私はしばらくの間彼らが出ていった方を心配そうに眺めていたが、もともとルアの身から出た錆なのだと思いますし、ようやく身体を動かした。

硬直していた身体が伸びをするうちに解れていく。ぽきぽきとあらゆる部分の関節が小さな悲鳴をあげた。

ふと思い出し、時計へと視線を走らせる。

「もう3時なのね……今日はルアなんかのために半日以上浪費しちゃったわ……」

「ねーっ、白ウサギなんかのために！」

「今日は僕らと遊んでもらう約束だったのに！」

「は？そんな約束した覚えないけど……」

「今するの！」

この図体のでかい後輩たちはとても可愛いと思う。20代にしか見

えなくても、幼い言動は時々本当に可愛らしいと思う。……大抵の場合を見た目とのギャップに顔が引き攣るのだが。だが、可愛い言動の裏に潜む思考回路を理解することはどうやら不可能なようだ。

あまりにも無邪気に笑う彼らの顔を見て、私は重くため息をつく。マイペースすぎてこっちの身がもたないわ……。

「わかった、わかったわ。今から遊ぶのね……。でも何して遊ぶの？今から外に出たらすぐ日が暮れちゃうわよ」

正直に言つとこのまま部屋に戻ってベッドへとダイビングしたいのだが、ここまではつきりと誘われては断りづらい。

何とかして彼らの気をそらすため、私は何気ない風を装っていった。目をキラキラと輝かせていたデイーは不満げに唇をとがらせる。

「いいじゃん、夜になっても！一緒に遊ぼうよー」

「ダメよ、いい子はちゃんとおうちに帰らなきゃ。夜の森にはね、

それはそれは恐ろしい　紫の変態が出るわよ」

子供に言い聞かせるように人差し指を立てて二人に聞かせると、ダムの方が苦々しげに顔を歪めた。

「そりゃ、姫さまにとっては最大の脅威だな……」

「僕らは別に安全なだけだね……」

「と、いうことで。遊ぶのは明日にしましょ？」

「むう……。じゃあさ、城の中でもいいから遊ぼうよー！」

城の中……か。ボードゲームの類だったら適当にやればできるかもしれない。外に行つて鬼ごっこをするよりはまし、か。

しかし、私が承諾するよりも先にダムがブーイングをあげた。

「えーっ、また人生ゲームやんの？俺もうあれ飽きた！」

「うん、ダムが飽きたら僕も飽きる。モノポリは？」

「あれもつまんない！ディーって俺よりもずっと打算的なんだもん」

「えー……ポロ負けした時のダムの顔、可愛くて好きなんだけど」

「やだやだやだっ！そういう系のゲームで俺が勝てた例ないもん！家で遊ぶんなら俺やらない！」

「だ、ダムがやらないなら僕もやらないよ！」

……これは、遊ばなくてもいいってことですかね？

ディーはわずかにしょんぼりとしていたが、ダムがやらないと言いだした途端に興味は失せたようだった。唇をとがらせ、拗ねた顔のまま立ち上がる。

ダムとディーが意見で決裂するなんて、珍しい。一人ついていけない私に、ダムがさりげなく近寄り、耳元に囁く。

「姫さま、疲れてるんだろ？ディーは俺に任せてゆっくり休みなよ」

「だ、ダム……っ」

なんて良い子なんだろう！その一瞬だけダムの背後に眩いばかりの御神光が見えた。

感謝の気持ちいっぱい光線を送ると、ダムは恥ずかしそうに笑いながら「別にいいよ」と返した。

「それに、この間ディーにさんざん負かされたからもう嫌っていうのも事実だし」

……ダムが多額の借金を抱え億万長者を前にして悔し涙を流すシーンが目につかぶ……。

確かに似ていると言われる二人だったが、口を開けばかなりの確率で見分けがつく。それほどまでにディーは打算的で、ダムは単純であつた。

その結果、当然ディーはダムを貶めることになる。この先ダムがディーにゲームで勝つということは、万が一にでもなさそうだ……。

「でもありがとね、ダム。ディーを制御できるのはやっぱりあなた一人だし……」

「えへへっ、どういたしまして！あ、でもお礼だったら言葉よりお金でくれよな！」

照れ隠しなのか、はにかみながらも視線をそらして言う。私はそんなダムに苦笑しながらさすがにお金は上げられないな、と考えた。

「あ、じゃあさつき作ったブラウニーなんてどうかしら？ルア、ほとんど食べなかつたからまだ残ってるんだけど……」

「ぶらうにい？」

「えつとねえ、テーブルの上に……」

あるはずなんだけど。しかしその言葉が最後まで紡がれることはなかった。

ずんつと、上から体重をのせられ息をつまらせる。ちょうど後ろから抱きしめられる形で、頭に顎を載せられているのだろっ。重みで私は前につんのめりそうになつた。

「ひいめえさあまあ」

妙に間延びした声が頭上から聞こえる。

私は床に手をつけてその体重を支え、首にかかる腕をほごうともがいた。しかし長袖の制服に包まれた腕はほごうとするたびに強

く締め付けるばかりだ。

さすがに息が苦しい……っ！はっと鋭く息を吐きだしたのと同時に、がくと上に乗っかっていった頭が肩に落ちてきた。不自然に熱い額が露出した首筋に押しあてられる。

「つめたぁーい……きもちいー……」

「ちよっ……とっ！苦し……っ」

私は必死こいて後ろでほつと息をついている男　　デイーの腕を叩いた。しかし苦しんでいる様子が逆に滑稽おかしいらしい、デイーは声を立てて笑うとさらに腕の力を入れた。
ちよ、マジ冗談なくそろそろヤバ……っ。

「おいデイー！やめろよっ、姫さま苦しがつてんだろ！」

そしてここで再三度救世主登場。ヒーロー

私の血色を見かねたダムは、ひつたくるようにしてデイーの腕から私を連れ出した。いや、強引に引きずり出したと言ってもいい。きつく掴まれた腕の関節が悲鳴をあげた。

手荒かどうかは置いといて、とりあえずこれで窒息死は免れたわけだ。私は新鮮な空気を吸い込みながら咳を繰り返した。

「あ、ありが、とっ……」

「大丈夫、姫様？つたく……デイー！愛情表現にも限度つてもんが……っ」

さすがは兄貴、いつもは弟に負かされっぱなしだけれど、こういう時に限っては凜々しい顔をして睨みつけるものだ。

しかし当の弟気味は全くものともせず、へらへらと笑ってみせた。翠玉の瞳は甘く蕩け、頬は微かに赤みが差している。こうして見る

と彼も一端の美声年なのだと言われ確認させられる。
普段は幼い言動から可愛いという印象しか受けないが……顔の形自体は大人びているのだ。じっと見つめられると変な気分になる。

「姫さま、遊ぼうよ」

くっ小さく袖を引かれて、私は困惑した。そんなに遊びたかったのだろうか……瞳は涙で潤っている。

しかし戸惑ったのは兄貴も同じだったらしい。ダムはわずかに眉を動かしてディーの手首を掴んだ。

「何だよ、ディー。俺やらないって言うてんじゃん」

「……それがあ？」

「それがって……」

「別に、ダムだけやらなきゃいいじゃん。僕は姫さまと遊びたいの。ダムは邪魔だからあっち行って」

「なっ」

パシッ

ディーが、ダムの手を振り払った。否、正確に言うと叩き落とされた。

厳しい顔をしていたダムの顔からさあっと音を立てて血の気が引いていく。よほどショックだったのか、私を庇うように抱きしめていた腕からすべての力が抜けた。

それを見計らって、今度はディーが私の腕を掴み強く引っ張った。今度はきつく締めすぎないように、それでも逃げられないように、私に抱きついてくる。

状況についていけずに呆然としていた私はその時初めて、彼の口元

から甘い香りが漂ってくることに気付いた。

「僕、姫さま大好き！ダムなんかよりもずっとずっと大好き！だから二人で遊ぼうよ、姫さま」

「ちよっ……ま、待ってデイー！あんたまさか、テーブルの上のお菓子食べたんじゃない……」

「うん？食べたよー、なんか身体がふわふわして変な感じー」

それは俗に言う、ほろ酔いというやつだ。いや……誰よりも大好きな兄に向かってあっちへ行けというくらいなのだから泥酔なのかもしれない。

私は低く呻いて額に手を添えた。ブラウニーに入れたラム酒は多めとはいえ、ほんの僅かだ。

まさかデイーがここまで酒に弱い人間だとは思わなかった。フレイムといいルアといい、さらにはロキヤイオまで相当の酒豪だから、傍にいる双子もそうだと勝手に思い込んでいた。

そつえば、彼らが酒を飲んでる姿は見たことがない。

「ごめんなさい、デイー……悪いけど今日は遊べないわ。ダムも仲間外れにしちゃ悪いし……何より貴方、早く寝た方がいいんじゃない？相当酔ってるみたいだし」

「ね……る？ベッドで？」

確かこの城に布団はなかったと思うけど……。

この時私は、「寝る」には二つの意味があることを失念していた。

一つはもちろん、就寝の寝る。もう一つは 寝具での、遊戯。

……もちろん枕投げとかそついったものじゃない。

「うん、そつ。ベッドで」

「僕と、姫さまが？」

「そうね……私もさっさとシャワーを浴びてベッドに行きたいかな」
「……なんか姫さま、積極的だね。それとも早急なのが好きなの？」
「は　？」

「いいよ。そつちのお遊びとは予想外だけど、僕姫さま好きだし。
あ、でもシャワーは時間かかるからパスね」

………
な、なんだか、会話がかみ合っていないような気がするんだけど………。

しかし時は無情に過ぎ、決して戻りはしない。気付いた時には呆然
自失としているダムの目の前で、デイーは私の身体を抱き上げた。
180半ばの長身に抱っこされ、視界が一瞬狂う。天井がこんなに
近いなんて……。
俵担ぎにされながら、私はテーブルにあった黒い物体を見つけた。
拗ねたデイーが自棄になつて食べまくつたのか、半分以上減つてい
る。

いけない………ダムにあげるって約束したのに。

「だつ、ダム！助けて………っ」

「俺なんか俺なんか俺なんか、どうせ弟にも愛想尽かされる駄目人
間なんだよな邪魔って言われたデイーに弟にデイーにデイーにデイ
ーにあつち行つてつてさつきまではべつたりだったののになにな
んでこんな兄離れが唐突なんだよというか何で兄離れすんだよデイ
ー俺の傍にいるつて言つたじゃんか傍にいるつて世界一大好きだつ
てなのに姫さまの方が好きつていうしさじゃあ俺はなんだよ2番目
か3番目かそれともそもそも好きじゃないつてかなんでいきなりそ
んなふうになつちゃうんだよっば言い方がきつかったのか姫さま
側についた俺が気に入らなかつたのかでもだからつていきなり嫌い
になんなくてもいいじゃん俺だつて心の準備つてもんがいや心の準
備なんて一生できないんだろっけどさ………」

「ダムっ!!」

「ふえっ?!は、はいっ!」

どんよりと黒いオーラを周りに振りまきながら延々と呪詛（少なくとも一人ごとにしては暗すぎた）を連ねていたダムは私の呼び声によく反応した。

デイーはつまらなそうに鼻を鳴らし、ダムの方をねめつける。正気に戻ったダムはその鋭い視線に再びあちらの世界へ舞い戻りそうになったが、状況が状況だけにそうもいかなかったらしい。

必死で動揺を隠しながら立ち上がり、私を担ぎあげるデイーの前に立ちはだかる。

「ちょ、ちょっと待てよデイー!姫さまをどうするつもりだ!」

「どうするって……ダムには関係ないじゃん」

「はうああっ」

ちょ、こらそこ!弟の言葉一つで大ダメージを受けるな情けない!

「か、関係ない……関係ないってゆーなっ!俺はお前のおにーちゃんだぞ!」

「だから?」

「ぐはっ」

「つーか都合のいい時だけ兄貴面されてもねー」

「うがっ」

「普段バカだし?単純だし?単細胞だし?僕の方が色々と有能だし?」

「ががががっ」

「顔は同じなのになんでこんな餓鬼かなあ。泣き顔ウザい。笑顔はキモい」

「げぼおっ」

「ぶつちやけ兄弟辞めたい」

「ぎゃあああっ！」

ダム選手、相手に一撃も与えられないままノックアウト！フルボツコです！瀕死状態です！

……ごめん、ダム。さっきは言葉なんかで傷つくなって思ったけどこれは誰が言われても死にたくなるわ。毒舌恐るべし。

とにかくこれで私を救ってくれる救世主は呆気なくも儂く散ってしまったわけだ。すっかり灰になってしまったダムを一瞥し、デューは部屋から出ていった。

無論、私を肩に担いだまま。

私の部屋の扉を乱暴に開けたデューは、電気も点けずにベッドへと足を運ぶとそっと私をベッドに下ろした。その存外に優しい仕草に少し驚く。

デューは開きっぱなしのカーテンを全部閉め終わると私の隣に腰かけた。二人分の体重にぎしりとベッドが軋む。

「……顔色一つ変えないんだね」

「そりゃあ、状況的には非常にまずいんだろうけど」

私はそこでいったん区切って隣のデューをちらっと見た。

膝に添えられた拳は、手の甲が青白くなるほどにきつく握りしめられている。

「こんな顔をしてる人の傍で狼狽うろたえるわけにはいかないと思って」

部屋に行く途中で容易に気付くことができた。

しっかりとした足取り、力を込めた肩、前をひたすら睨みつける瞳。こんな状態の彼を、どうして酔っていると思えるだろう。

ブラウニーを食べたのは本当だろう。だが、酒の勢いだけでダムにあそこまで冷たくしたというのは見当外れだ。

それを裏付けるように、デイーは今顔から血が引くほど後悔に苛まれている。

「お酒、強いの？」

「そうでもない。普段飲まないから弱いかも」

「ふうん」

会話が続かない。相手も会話を続ける気はないらしく、膝を抱えて自分の殻の中に閉じこもろうとする。

1メートルとない所に私がいるのにそれはないだろうが……。

「ねえ、後悔するくらいなら何でダムにあんなこと言ったの？」

「……姫さまには関係ないもん」

2、3拍以上置いて返ってきた答えがこれだ。

私は喉の先まで出かかったため息をぐつと堪えて、なるべくきつい口調にならないよう努めた。

「ダムにも言った言葉ね、それ」

「……ダムなんて、関係ない」

「ダム、すごく傷ついたと思うんだけど」

「……っ、うるさい……っ」

膝に顔を埋めているから表情は窺えない。だが、小さく聞こえるその声は不自然に掠れていた。

私はそつと手を伸ばして彼の髪に触れた。寝癖なのか、変な方向にはなっている赤髪がある。

デイーは頭を撫でるのにも反応せず、ますます自分の身体をきつく抱きしめた。彼がやると自己を守るためではなく、片割れを抱きしめるためにやっているように見えるのだから不思議だ。

「本当はあんなこと思っちゃんないんでしょ？」

「……もういい、姫さまうるさい……」

「兄弟を辞めたいなんて……誰よりも貴方が、兄弟であることに誇りを持つていたじゃない」

「うるさいっ……姫さまは第三者でしょ？これは僕らの問題だ！」

「……さっきはダムなんて関係ないって言ってたのに？」

「ちがうっ、あれは……あれは！」

「貴方の本心ではなかった？だったら教えてよ。なんで貴方はあんな嘘」

「黙れって言うてんだろ！」

ふいに髪に触っていた右手の手首をきつく握られた。そのままぐつと上半身を押しされ両手首を白いシーツへと縫いつけられる。

驚いて逃げようとする私をさせまいとでも言うように上から黒い影が覆いかぶさった。

どうやったたらあの話の展開でこんなふうになるのか。いや……場所が場所なだけに文句は言えない、か。

私は真上からきつく睨みつけてくるディーの顔をまじまじと見た。

ダムほどではないが、ディーも感情を隠すのが下手だ。なるべく無表情を装っているつもりなのだろうが、顔は明らかに歪んでいる。

今にも、泣きだしそうに。

絞り出す声は、まるで今の今まで泣きじゃくっていたように震えていた。

「姫さまには、わかんないよ」

「……そうかもね」

「姫さまと、ダムが、楽しそうに話してて……僕だけ、除け者で……」

……。ダム、僕が一番だって言ったのに……っ」

「……今でもそうだと思っわよ」

「そんなの嘘だっ！だつてダム、この頃遊んでくれないんだもん！僕が何回誘ったつて嫌そうな顔するんだもん！」

……それは実は、ダムが滅茶苦茶ゲームに弱いからであつて、別にデイーを嫌いなわけでは……。

ダムとしては兄としての威厳が地に落ちるのが嫌だつたのだろう、なるべく家の中での遊びを避けていたようだ。

そうして疑いは募り、今日爆発した……か。

私はぐつと引つ張つて右手をデイーの手の下から抜くと、彼の頬を指先でなぞつた。

もしかしたら、これまでに彼も泣いていたのかもしれない。不安で寂しくて、切なくて、構つてほしくて、だけど強くは言いだせなくて……。

「それで、今日のはあんなひどいことを？」

「そうだよ……っ！ダムなんて、傷ついちゃえばいいんだ！僕だつてあいつの言葉に傷つけられたんだ、ダムも同じ傷を負えばいい！傷つけばいい……っ」

デイーはくしゃりと顔を歪めて叫んだ。まさに絶叫と呼ぶのに相応しい、心の悲鳴。

傷つけばいい、といいながらその言葉に傷ついているのは、デイー自身。ダムを貶しながらも、馬鹿にしながらも、デイーの言葉は必ず刃となって彼自身の心を切り裂く。

本当に、大切に想っているからだ……。おそらく、自分以上に。

だから、それを傷つける相手は自分であつても許せない。自分以上に大切な存在だから、彼を傷つけられない。

「ねえ、デイー」

私は痛みに満ちた彼の瞳をまっすぐ見上げ、伸ばした指先でその前髪を掻き分けた。

狂気的なまでに崇高で、同時に粘着質な愛。歪んでいるが故に真っ直ぐで、真っ直ぐであるが故に歪んでいる。

だけど、本人達はそのことに気付かないだろう。だから第三者である私が、教えてあげなければ。

「それでも……ダム、傷ついていると思う」

「……っあ……」

デイーの瞳が驚きで見開かれる。特別なことを言っただけではないが、その一言だけで十分だった。

彼は突き放すようにして私から手を放すと、上半身を起こしてベッドから離れた。

そのままつんのめりそうな勢いで部屋を走り抜け、勢いよくドアを開ける。

「ダムっ!!」

「……っ!え……」

ばたんという騒音とデイーの切羽詰まった呼び声に反応したのは、向かい側の壁に背中を預けて膝を抱えていたダムだった。さすが兄弟というべきか、先程までのデイーとよく似ている。

違うのは、頬に行く筋もの涙の跡があるということだけ。

デイーはダムの姿を見つけた途端息をするのをやめ、一步一步を慎重に踏み出す。

それはダムも同じだった。どちらともなく息をつまらせ、探り合うように恐る恐るお互いの瞳を覗きこむ。

最初に反応を示したのはダムの方だった。涙でびしょぬれの顔を歪ませて、さらにその瞳から際限なく涙を落とす。

尽きることのない涙を、デューはダムの前に膝をついて指で掬っていった。

そうするとますますダムは嗚咽を大きくして泣きだした。

「うつく……きらっ、嫌われたのかと、おも、て、俺、おれっ……」
「……うん」

「俺、なんて、デューにと、てはお荷物、で、要らないのかなって、思ったら、不安で……！姫さまに、デューを取られるかと、思って……っ」

「……うん。僕も同じこと思ってたよ」

「俺っ、胸、痛くて……、やっぱりデューが一番好きで……っ、俺……俺　デューの一番じゃなきゃ嫌だよ……っ」

一瞬の、沈黙。

彼らはこの瞬き一つの間、一体どれほどのことを想っただろうか。デューが流した一筋の涙に、一体どれほどの想いが込められていただろうか。

それは確かに、第三者にはわかんない。本人達でさえ、計り知れないであろう。

デューは腕を伸ばしてダムの身体をゆっくり抱きしめる。ダムも最初は裾を掴んでいただけが、恐れ交じりにも背中にも背中にも手を回していた。

ただわかるのは、触れた肌から伝わるこの確かな温もりだけ。

「……大好き……」

そう言ったのはダムだったのか、デューだったのか……もしかした

ら二人同時にかもしれない。

大好きは、君だけ。

好きや、愛してるだったら他の人にもあげる。

姫さまは好きだよ。フレイム様はむしろ愛してる。黒ちゃんもまあ好きかな。先輩は嫌い。白ウサギは死んじゃえ。

でも大好きは、一番だけ。

一番大切に、好きよりももっともっと好きな君だけにあげる。

他の人には絶対あげないよ。

僕の大好きは、君だけにあげる。

だから、君の大好きも僕だけにチヨーダイ？

「今日はありがとう、姫さま」

ようやく泣きやんだ二人はしっかりと手をつないだままぺこりと頭を下げた。やはり二人でいた方がこいつらしいな、としみじみ思う。

だが私がいてもいなくてもこいつらはやがて仲直りしたのだろう。他の人が気付くのよりももっと早くに、お互いが離れることに耐えきれなくなつて。

しばらくはそれでいいと思う。兄離れとか弟離れとかも大切だと思っけれど、やっぱり二人とも笑っていられるのが一番だ。

私にはっこりと笑うと、「どういたしまして」と返した。

ダムは少し照れくさそうに頭を掻き、ディーは反対にすごく幸せそうにダムにべったりへばりついている。

うん、兄弟っていいな。これが普通の兄弟かは別として。

「あ、そうだ。テーブルにあつたお菓子自棄食いしちゃってごめんね。美味しかったよ」

「ああ、いいのよ。あれ余り物のバレンタインチョコだし、どうせみんなに配るところだったしね」

「バレンタイン？あ、そつか。だから今日白ウサギが命を顧みず姫さまと買い物に行つたんだね」

「命を顧みず……ね」

というかバレンタインに命を賭すのはむしろ女子の方なのでは……？
そういえば今回のバレンタインは色々と変だった気がする。まず強請られるようにしてチョコを作らされたところからが間違いだったのだ。

「うーん……じゃあ何かお返ししないとなあ……」

「えっ、別にいいわよそんなの。どうせ余りものだし」

「そういうわけにはいかないよ。今日いろいろお世話になつたし。」

あ、そっだー！」

何かを思いついたのか、デイーはポンと手のひらを叩くと眩いばかりの笑顔を見せた。

うっ……って、天使の笑顔だわ……だけどこっついう爽やかスマイルには大抵黒いものが含まれてるのよね。

「姫さま、もうちょっとこっち来て」

「え……こ、こっつ？」

「もうちよつともうちよつと」

って……だいぶ至近距離に迫っているんですが。

デイーとの距離約20センチになったところでようやく彼は頷くと身体を屈めてきた。私が感づく前に長い指が顎を捕らえ、動きを封じる。

唇を、温度の違うそれが優しく覆った。数秒と待たずにそれは温もりを残して去っていく。

「ハッピーバレンタイン、アリス」

耳元でそう囁いていったのは、身体の熱をあげるためだったのか。私が最初に見たのは、デイーの飄々とした笑顔とその横で呆然とするダム顔だった。もちろん、私の顔はダムの方によく似ている。

「な、な、な、な、な……っ」

「デイー！や、やっぱりお前ばかりずるいぞ！」

「えー、だってダムはチョコ貰ってないしい？どうせダムじゃ唇にはできないでしょ」

「く、く、く、唇って……」

ダムが真つ赤になりながら何かを言う前に、デーはすりと彼の
間を抜けて逃走した。ダムも怒鳴り声を上げながらそれを追う。
哀れにも残された私は、その場にへたり込むしかない。
なんだか、怒りを通り越して笑えてくる。

ああ、そうか、そうだったんだ。

何で今日疲れるかって？そりゃあ、色々振り回されたからでしょ
うよ。

なんで振り回されるかって？そりゃあ、今日という日だからでしょ
うよ。

ふふ、ふふ、ふふふふつ！

この、忌々しい、人生最大の厄日！

「バレンタインなんか

死んじまええええつ！！」

だがしかし。

バレンタインはまだまだ始まったばかり。

f i n . . .

さて、ハイスピードで2つほど終わったわけですが、アリス、随分とぐったりしてますね？大丈夫ですか？

「……………（ノ―）（ノ）」 注：アリスだったもの（

あれ、口から何か白いものが。連続使用はさすがにきつかったですか……。

仕方ない、一つ休憩のためにもマイク殿の特別出演を先に回しましょうか。

次はロキの予定だったんですが……良いですね？

「まあ……仕方ねえだろ。それよりさっさとアリスを運ぼうぜ」

おお、なんと優しい夫もどき！いつもはひっそりと影を隠して（存在感がなくて）妻に従順で（尻に敷かれて）、どんな時でも妻（の機嫌）を気遣う理想の夫ですね！

「お前それ（内が本音だろ？！そんなんじゃねえよっ、仮にもヒロインが白目剥いて魂飛ばしてんのお前は何でそう茶化すんだ！」

あらまあ、なんとヒロインあるまじき醜態。ちよつとちよつと、カメラさんアリスをうつさないで下さいよ。

まあそんなダメな夫とマグロのように倒れ伏しているアリスはほつとして。

マイク殿、よろしく願います。

「はあ……と言っても自分は何をすればよいのでしょうか……」

えー、では本編に全く関係ない、もっと言ってしまえば語る意義もないですが、自己紹介をどうぞ

「自己紹介、ですか……。上手く言えませんが……えっと、山田マイクです」

「山田?!日本の名字?!しかも何そのだっさい名字!」

……全国の山田さん、申し訳ありません。決して悪意があつていったわけではないのです。

イオ、驚くのも無理ないですが、口には慎んで下さいね。いちいち謝罪するのも面倒ですから。

「え、じゃあこの名字スルー?!俺の行動とかにはよく規制がかかるのに、こつこつ疑問点は素通り?!」

「えっと……年は46歳で、息子が八人、と孫が一人……です」

「うわほんとにスルーしたしこの野郎。しかも無駄に子たくさんだね」

「そ、それから妻が一人に、不倫相手が……」

「重っ!いきなり重っ!しかも指で数えてるし!どんだけいんの?!」

まあ、愛だとか恋だとかそんなものは、所詮泡沫の幻ですからね、ふっ……。

「あのさっ、この小説一応恋愛ものなんだけど!俺とアリスが熱烈に求めあつて最後は愛を告白しあうっていうラブロマンスなんだけ

ど！」

頭の中の妄想を既成事実のように語らないで下さい。気持ち悪い。ではでは最後に、自分の上司達について語って下さい！あ、今の場にはないので遠慮なく語ってくれていいですよ！

「あ、そっすか？いやー、もうほんつとあの白ウサギうざくつてさあ、暇あれば自分の自慢話ばっか。『貴方にはこれしきの事も出来ないんですか？』だって。あー、やだやだ。これだから万能人間は女王もさあ、なに俺より30下のくせに驕りたがぶつて命令しちゃってるわけ？つか知ってる？あのガキの私生活、ほんつとひどいんだってよ。白ウサギが毎日整理してるけど、家庭的・恋愛的な面の経験値は全くのゼロ！今時モテないね、あのガキは」

「……同一人物？山田舞九郎さん？」

山田マイクです。きっと鬱憤がたまってるんですよ。

いやー、清々しいまでに貶しまくってますねえ。……つと、ここで注意。

マイク殿の言葉には多少潤色が施されています。本編ではもっとマシなキャラ……のはず。

「いや鬱憤とかそういう問題じゃないから！豹変してんじゃん！明らかに“マイク”って名前に合っていないしゃべり方してるから！どっちかというと“ジョン”とか“ステイブ”とかそっち系だから！」

こらこら、名前で人の人格まで決めつけてはいけませんよ、イオ。人間はみな個人として尊重されるのです！

「……なんか、いいこと言ったって顔してるけどさあ……単にはぐらかしてるだけだから、それ」
「双子はあれ、キモいっすね。いつもいつもべったりくっついて暑苦しいっただらありやしない。大体男同士でくっつくってどうなんすかねえ。もてない証拠っすよ、やっぱり。異性にもてないからこそ、同性に逃げ場を見つける。いやあ、ボー　ズラブってこうやって発生するんすねえ」

全国のHOMOの皆様、およびお腐れ様方。暴言、偏見、大変申し訳ありません。無論ネタです。

さて、マイク殿も余計なことをぺらぺらとしゃべり始めたことだし、そろそろロキアリを開始しますか。

イオ、マイク殿へのツッコミをよろしくお願いしますよ。

「え……って、これで特別出演終わり？この雑談だけ？つか何で俺がツッコミ役？！」

えー、では引き続きロキアリをお楽しみください。

「ちょっと待って！俺、俺はどうすんの！俺このタイプ苦手えええ

」！

第三幕 愛しい貴女と貴方に（ロキアリ&イオアリ 前半）

時は物語より22時間と13分ほど遡って。

「きゃあ、かわいい」

徹頭徹尾棒読みでレストが呟く。ロキはいささか不機嫌そうな声音にため息をつきたくなった。

何も自分だつてこんな物、好きで着てるわけじゃない。変な対抗心を抱かれても困る。

レストの鋭い視線に気付くことなく、また空気を読むこともなく、壁に寄り掛かった男は手を叩いてはしゃいだ。

「すげーすげえ！ロキめっちゃ似合ってる！可愛い可愛い！」

「マルス……お前それ、褒めてるつもりか？」

「何言つてんだよ！正直な感想を言っただけだつて」

単に貶しているのか、レストの敵対心を増幅させようとしているだけなのか……これだけのことを悪気なく言えるのだからすごい。

レストはむっとしながら自分とロキの格好を無遠慮に見比べる。

レストは薄ピンクのエプロンを着こなしていた。白薔薇の装飾が施されたレース付きのエプロンで、誰がどう見ても女用だ。小柄な顔と童顔に不自然なほど似合っている。

対してロキは、薄い黄色の質素なエプロンだ。レストのようにきめ細かい刺繍はされていないとはいえ、ポケットがいくつもついていて実用的だ。何故か胸元にでかでかと猫の顔が縫い付けてある。

「なんか……保育園のお兄さんだよな！」

「何でもいいよ。だって俺の方が可愛いでしょ、ね？」

自信満々な笑みを創って首をかしげて見せるレスト。さすが女装界のトップ、技巧に満ちていても可愛らしい。だが、それを凌ぐ無神経さをもつ男が此処にいた。

「フーかレストは見慣れてるし！いやー、でもロキがこんなにエプロン似合うなんてぶらごおっ！」

「地獄に落ちろクソ野郎」

マルスの顔面に拳をめり込ませたレストはぞっとするような低い声で呟く。

自分よりも二回り以上小柄な少年に殴られたマルスは、鼻を押さえながら悶絶して床をのた打ち回っていた。恐ろしい馬鹿力だ……。そのまま蹴りを腹部に何発か入れたレストは、ようやくくすつきりしたのか煌びやかな笑顔を浮かべるとロキの方を向き直った。

「じゃ、始めようか！」

「……おう」

何故昼間っからレーテの家を訪ねて、笑顔のレストに冷や汗を流しているのかという点。

マリアナ海峡よりも深い事情があった。

「いやー、にしてもロキがチヨコ作りだなんてねえ」

レストは湯銭にかけたチヨコを練り混ぜながら堪えきれないとも言つようにくつくつ笑った。その手捌きは見惚れてしまうほど手際が良い。

落ち着きながらもあつという間に作業を終えてしまうのだ。技術を教授してほしくて尋ねてきた身としては少々レベルが高すぎた。

「……ちょっと待て、そこどうやったんだ？」

「は？普通に掻き回してるだけだけど？」

「俺のはそんなにふわふわにゃないぞ！」

「ああ、それはこうやって器を傾けて、回すんじゃなくて横に振る感じで……」

「こうか？」

「ちょっと傾けすぎ！こぼれるこぼれる！」

「大丈夫だろ、これぐらい……うわあっ！」

「……はあ……言わんこつちゃない……」

中身の半分をシルクに溢してしまったロキはレスト以上に大きなため息をつく、右手に握りしめていた泡だて器を置いた。

先程から1時間ほど同じことを繰り返しているが、一向に成果が上

がらない。相変わらずチョコをかきまぜる手は不器用だし、調味料の量も間違える。

レストに申し訳ない気持ち半分、諦め半分で再びため息をついた。その横で洗い物をしていたマルスは快活に笑う。

「ダッセー！お前、ずっと一人暮らしだったんだろ？そんなんでどうやって生きてきたんだよ」

「……るせえ。チョコなんて作れなくても適当に生きてきたんだよ。金なら奪えばいいし、奪った金で店にでもどこにでも入れればよかった」

「あ、そっか。なら今回もそうすればいいんじゃないかねえの？普通に市販のチョコで良いじゃん」

……痛いところをついてくる。

押し黙ってしまったロキに、マルスはさらに無神経な言葉を投げつける。もちろん悪意はない。

「つーかチョコなんて誰にあげるんだ？そんなにうまいもんでもないだろ。ニンジンの方がうめえよ」

「そんなのはお前だけだ」

ちなみにルアは基本的に好き嫌いが少ない。ニンジンだけ好きという趣向はないようだ。

にへらと笑うマルスを鬱陶しげに睨む。

冷蔵庫を開けて生クリームを取り出していたレストは小さくため息をついた。

「呆れた。この時期でチョコって言ったら目的は一つでしょ。バレンタインだよ、バレンタイン！」

「バレンタイン……って、ああ、なんかしらねえけどチョコがたく

「さんもらえるあの日か！」

「そうそう、毎年処理に困るんだよねー」

「そっかぁ……もうすぐバレンタインなんだな。袋用意しといたほうがいいか？」

「うーん……2つか3つ、ってところだね。マスターのも合わせるとう袋は必要かな」

「もうめんどくさいからスーパーのビニール袋でいいよな」

「いいんじゃない？たかがチョコだし」

「お前ら、いつか刺されるぞ」

たぶん、非リア充（ ）とか純真な乙女心を持つ人（基本）。レストなら ってこともありそうだが）とかに。

ロキの一言をさらりと無視すると、レストは目を細めて肩肘で脇腹をつついてきた。

「で、こんなにあくせく頑張ってたね！誰のため誰のためえ？」

「お、お前らには関係ねえだろ！」

「そんなこと言っちゃっていいの？今ここでこうやって、俺は誰のために時間を割いて指導してるんだっけ？」

「う……っ」

「ま、別に言わなくてもバレバレだけどねー」

言い返せずに言葉に詰まるロキに、十分な優越感を得たらしい。ふんつと鼻で笑うと、再び作業を開始した。

一方マルスはまだもどかしそうに唸っている。

「ニンジン……いや、チョコも確かに上手いよな。ビターは苦くて嫌いだけど……ま、上手いよ、上手い。待て待て待て、俺はニンジン主義のはずだぞ？こんなところでニンジンを裏切っているのか！」

いや、でもチョコ……特にホワイトなんかはめっちゃおいしいし……
…あ、じゃあニンジンとチョコを合わせればいいんじゃない？オレン
ジ色のチョコ……！」

………なんておぞましいものを想像してるんだこの馬鹿は。

時は21時間と34分ほど遡って。

ロキは疲れ切った体をぐったりといすに預けたまま、口喧嘩をする
二人を薄目で一瞥した。

いや……口喧嘩というよりも説教に近いだろうか。自作のチョコク
ッキーを可愛くラッピングをしながらレストは眉をつり上げて言葉
を募る。対してマルスは反論するが、どこか弱々しい。

「脳みそ腐ってんじゃないの?!何この食べ物!っーかこんなゲテ
モノどうやって作ったわけ?!」

「い、いや、これはニンジンのすりおろしとチョコレートを混ぜた
もので……砂糖のかわりに間違っって小麦粉いれちゃった……」

「いれねえよ普通！塩ならまだしも、小麦粉とは間違えないよ！」
「で、でも神秘的だろ？！見た目はあれだけど、ニンジンが入ってたら何でも食えるって！」

「ちよつとちよつとちよつと！俺に近づけないでよ！捨てる馬鹿！……うっわなんか臭い！」

……元気だなあ……。

ここにいとレーテがやけに老けて見えるのもわかる気がする。あまりのテンションの差に疲れを感じた。この二人と付き合うには多少落ち着きを持っていないといけないのかもしれない。

喧嘩は、レストが振り上げたこぶしがマルスの顔面にめり込んだことで決着した。基本的にマルスはレストに手を出せない。おかげでレストはやりたい放題だ。

ロキは自分の作ったチョコレートを薄いガラスの箱に入れて鑑賞した。

初めてにしては上手いとレストは褒めてくれたが、やはり店で作ったものには劣る。

そのことが先ほどから気に触って仕方なかった。レストのチョコクッキーは売ってるやつより美味しそうなのに……。

「やっぱり買った方がよかつたか……」

「はあ？何で。十分おいしそうじゃん。少なくともこれと違って食べても死ぬことはなさそうだし」

そういいながらレストはオレンジ色の物体をかき集める。

それをどうするのは定かではないが、きつと後でこっそり食べるのだろう。

レストはそういう奴だ。不味い、下手と詰りながらも、大切に思う人の気持ちを踏みにじったりはしない。

……お腹、壊さなきゃいいな……。

「……俺の、そんなにうまそうじゃないし。買った方が美味しいならそっちの方がいいかな、って……」

「あのさ、ベタな言葉だけど、要は気持ちだよ？美味しいかどうかはある程度まで問題じゃないの。ある程度……まではね」

そっぴいながらなんとも言えない顔で手元のオレンジの物体を見る。
……確かに、何事にも限度は必要だな。

「だけど……なあ……」

「あーウザいウザいウザい！男がうじうじすんな、気色悪い！クツキーが湿気る！ほらほらほら、用が済んだならさっさと出てってよね！」

「あー、はいはい、わかったわかった。出てくから……って、今何時だ？」

キャンキャンと吼えるレストを無視して目で時計を探し始めた。
何故か食卓に目覚まし時計を見つける。……しかし針は動いていなかった。

だがわざわざ時計を見ずとも、窓の外から真っ赤に染まった空が見えた。

そっぴいえば……昼夜逆転のレストが起きてるってことはつまり、夜更けが近かったってことだったな……。

「……悪い、できれば殺さないように善処してくれ」

「だからねー、ちゃんと自分の気持ちは伝えた方が……はあ？」

何の前触れもなく、急激な眠気がロキを襲う。ちらりとレストの顔を見ると、状況を察したのか顔を引きつらせていた。

「まさか……出るの？」

……幽霊のような言い草だな。

ロキは背もたれに全体重を預けながら、口端をあげて小さく笑った。そうしている間にも意識は闇の方へと引きずりこまれていく。

ああ、この何もなくなる感覚。これが嫌でたまらないんだ。

「やつほーい！グッモーニン、ネズミちゃん！」

目覚めた瞬間、レストが額を狙って撃ってきたのでとりあえず避けといた。

自分は撃ってないのにすぐ近くで銃声のはじけるといふのは不思議な感覚だ。近すぎて逆に危機感がわからない。

たいして動きもなく全発よけたイオは、ある程度レストから距離を取りながらシニカルな笑みを浮かべた。

「できれば殺さないようにって言ったのにー」

「言ったのはロキ。君はイオ。よって無効」

「もー、なんでそんなに俺を嫌うかなあ」

「もー、なんで全発避けちゃうかなあ」

「……………」

「……………」

たぶんいつも衝突するのは、キャラが被っているからだと思う。無言で再び銃を打ってきたレストに、イオは「あっかんべー」の動作をしながら後退した。

マルスが昏倒していてよかつたとしみじみ思う。レスト一人ならなんなく切り抜かれるところも、あのやたら図体のでかい男がいるとかなり困難になる。

「ネズミちゃんネズミちゃん」

ふざけたようにステップを踏み、開いていた窓の縁に足をかけた。狭く長くするのが城だとしたら、帽子屋邸はその逆だ。敷地は大きくとも、高さがない分落ちても死なないようになっている。

さすがに外までついてくるようなことはないだろう。イオはそう踏んでレボルバーを回すレストに笑いかけた。

盛大に顔をしかめられる。ちよつと傷つくなあ……………。

「刺しても刺してもささらない物、なーんだ」

「……………撃つても撃つても当たらない奴なら目の前にいるけど」

「だって当たったら痛いじゃん」

「でも当たってくれないと殺せないよ」

お互い、不毛なやり取りだということとは重々承知している。もういい加減このやり取りにも飽きたものだ。

2発、猫耳のすれすれを銃弾が走った。長いを許すつもりはないらしい。

次第にいらついてきているレストを無機質な目で見降ろしながら、手を上げて制す。レストは銃を下ろしこそしなかったが、訝しげに眉を寄せた。

「客観的に見て意見してよ。今日、ロキはどうだった？」

「なに、いつも通り覗き見してたんじゃないの？」

「覗き見って……俺はただ単にあの子の視点から物語を観察できるだけだよ。客観的じゃない」

「……よくわかんないけど、なんだか必死だったよ。可哀想なくらい」

「普通バレンタインに物をあげるのは女子から男子だって教えなかつたわけ？」

「だって頼まれてないもん」

「あはっ、そのひねくれた性格、ムカつく」

「殺し屋は必要最低条件しかこなさないものだよ、イオさん」

「ま、いいや。言いたいことはこれだけだから。 ロキのこと、ありがとね」

意外な台詞だったのか、トパーズの瞳が大きく開かれる。

一瞬銃口が揺らいだ隙に、イオは窓の外へと身を投げ出した。冬の風が露出の多い肌を切り裂く。後ろからボーイソプラノの怒号が聞こえたが、わざわざ振り返るはずがなかった。

空はまだ夕焼けの名残か、薄く白んでいる。この時間帯は、月も星も消えてしまいそうな儚さを孕んでいた。

「夕月夜……か」

イオはひとしきり屋敷から離れたところで、崩れ落ちるように地面に倒れ伏す。

うつむけになって、地面に頬を当てた。太陽の恵みが残る、まだかすかに暖かい地面。こんなことでしか太陽の存在を感じることができない自分がひどく疎ましかった。

ここが森でよかった。もしここに人目があれば、通報されていただ

ろう。

横を見ると、ちょうどそこに街の西区があった。

遠いここからでもかすかに、繁華している様子が聞こえる。バレン
タインの前日……だからだろうか。

そういえば、ロキの作っていたチヨコをまだしっかりと見ていなか
った。

イオは重い立つとすぐに仰向けになり、ずっと手に持っていたチヨ
コを月の光に晒した。

「すつごお……めっちゃ凝ってんじゃん」

透明なガラス張りの、手乗りサイズの小物箱。その縁には銀色のフ
レームが紋様を成していて、どこか清廉さを醸し出している。

明らかに値打ちものと思われるこれも、実はロキの手作りであるこ
とをイオは知っていた。

料理が苦手なかわりに、こういった小物や装飾品には職人技を見せ
つけるロキ。

何事もオールマイティであり、それ故にすべて中途半端で終わって
しまうイオとは大違いだ。

「あ、でもチヨコの形崩れてる。不器用なのか器用なのかわかんない
ねー、ほんと」

小さく笑いながら、ようやく存在感を表してきた月の光にガラスを
反射させる。水をモチーフにしてあるのか、夜の闇によく映えた。

その中に転がる、ちよっと不格好なチヨコレート。大きさも形もバ
ラバラで、なんとか原形をとどめている、といった感じだ。

アリスがこれを見たら、どんな顔をするのだろうか。

「アリス、なんかロキに対しては素直だからなあ……普通に喜びそう。俺にもあれくらい素直になつてくれていいのにいー」

ロキの視界越しに捕らえる、彼女の笑顔。少し悪戯っぽく口角を上げ、何の飾りもなく彼女は笑う。

イオは冷たい夜風を胸に吸い込んだ。吐き出すついでに濡れた笑みがこぼれる。

決して涙を流すことなく。決して願いを口にすることなく。決して恋慕を気付かれることなく。

彼は、笑った。

「……俺の時は、あんま笑ってくれないなあ……」

不気味なほどに美しい月を、薄雲が隠す。

イオは冷たいガラスを額に押し付け、小さく呻きを上げた。

目をきつく閉じる。やけに鮮明なビジョンが、瞼の上に広がる。

明るく笑うアリス。その横で拗ねたような顔をしながら顔を染めるロキ。

まるで恋人同士のように寄り添って談話する二人を、イオは額縁の外から眺めるだけだった。

やがてロキの周りにディーとダムが集まり、不機嫌顔のルアがロキとアリスの間に入っていく。

双子とルアの口喧嘩。やがて銃戦。そんな彼らを呆れたように観客するアリスとロキ。

二人は顔を見合わせ、苦笑する

……

「……っ」

耐えられなくなつてイオは地面を叩いた。一体どれだけの苛立ちをぶつけたのか、周りにすんでいた鳥達が鳴き声を上げて逃げていく。夜の闇に消えるようにして、獣の慟哭が森に溶けていった。

「アリス」

時々、真夜中を過ぎてから窓から侵入することがあった。もちろん鍵はかかっているが、ピッキングの免許（盗人講座で取得可）を持っているイオの敵ではない。

アリスは、大体8割の確率で眠るように死んでいた。あ、間違えた。死んだように眠っていた。

昼間、双子やルアに絡まれて相当疲れているのだろう。イオの手が頬に触れても何の反応もない。

「……アリス」

耳元でそつと呼びかける。アリスは寝心地が悪そうに寝返りをうつた。自然、イオと顔合わせの状態になる。

イオは頬を撫でていた手を彼女の頭へと移し、色素の薄い髪を梳くように撫でた。レストにやってもらったのか、その髪は出会った時よりも切り揃えられて見える。

「起きて」とも「おやすみ」ともいえなかった。何の考えもなしに、

唇は彼女の名を紡ぐ。

「アリス」

ぴくりと長い睫毛が微かに動き、とろけた瞳がイオの姿を捕らえた。イオは思わぬ事態に息を詰める。しかしアリスはまだはつきりと目が覚めていないのか、ゆるりと首を傾けると無防備にも笑ってみせた。

「…………イオ？」

。

イオは答えずに、ゆっくりと目を閉じた。幸福感とでも表現できそうな温かさが胸の内にじんわりと広がっていく。再び目を開けると、アリスは微睡まどろみの内にいた。薄く開けた瞼を開いたり閉じたりしては、小さく指を動かしている。

イオはその指に自分の指を絡ませると、なるべく小さな声で囁いた。

「起きなくていいよ、アリス。まだ朝じゃないし」

「で、も…………イオ、夜ずっと一人じゃ、退屈でしょ…………？」

退屈、だなんて。イオはからりと笑う。

誰もいない静かな森で、夜行生物たちの産声と鳴き声と断末魔を聞きながら、ただじつと月を見つめる日々は　　退屈なんてものじや生温い。

気が狂ってしまうほどの、或いは何一つ感じなくなってしまうほどの、辛苦。

それを少しでも紛らわそうとするため、イオは森よりも街を好む。必然的に夜間営業の店へと足を運ぶようになったのだ。

心配そうに、アリスは絡めた指に少しだけ力を込める。

イオが宥めるように彼女の頭を撫でると、子供のように不満そうな顔をした。

本当に……いつも思うのだが、キャラが違いすぎる……。こちらが素顔とわかっていても、このギャップには戸惑わずにいられない。

「アリスが何で俺の心配なんかするの？俺は大丈夫だよ。一人でも平気。そういう人間なんだ」

嘘。嘘。嘘。

なにもかも、嘘で塗り固めてきた。心の悲鳴を聞きながら、身体の軋みを感じながら、平気で嘘を吐く。笑う。

いつか自分の存在も嘘になってしまえばいい。そんな禍々しい願いすら抱きながら、精巧に作られた仮面をかぶっていた。

「……嘘」

なのに、アリスときたら。

イオは脱力したため息をつく。どっと疲れが溜まったのか。それとも、溜まっていた疲れが一気に抜けたのかわからない。何か考え込むように瞼を閉じた。

ずっと人が気付かなかった仮面を、或いは気付いても指摘できなかった仮面を、いとも簡単に見抜いてくる。さらには、それを外せときた。

無遠慮なのか、お構いなしなのか……。無意識でこう言っているのであれば、それはひどく残酷なことだ。

貴女の一言でどんなに心が満たされるのか、知りもしないくせに……。

「何でそう思うの」

「……胡散臭い顔してる」

「胡散臭いって……俺まだ二十歳前だから！せめてもっと若々しい表現して！」

「でも、嘘……ついてる……」

「……………いいんだよ。もうおやすみ、アリス」

アリスは、なおも引き止めるようにシャツをゆるく握ってくる。その手を両手でそっと包み込むと、安心したように手から力が抜けた。彼が促さずとも、限界は近づいていたらしい。瞼がゆっくりと下りていき、やがてその瞳を隠し静止する。

ようやく寝就いた彼女の髪を撫でながら、イオは小さく微笑んだ。

嬉しかった。

この暗闇の中で髪も目も見えないというのに、自分とロキを見分けてくれたことが。

小さくだけれど、確かに自分の名前を呼んでくれたことが。

何の遠慮もなく、何の恐れもなく、仮面に触れてくれたことが。

胸が張り裂けそうなほど、嬉しかった。

「だけどね、アリス」

規則正しい寝息を耳にしながら、イオは虚空に語りかける。

明るい口調は、奥に潜む悲愴を隠すため。紡がれた言葉は、表に溢れる失意を忍ぶため。

「アリスが笑ってて、双子ちゃんが絡んできて、ルアが邪魔をしてくる。全部、ロキの世界の光景なんだ。……俺が下手に触って壊している世界じゃない」

子供をあやすように布団の上からポンポンと軽くたたくと、彼女はわずかに身じろぎをした。

心地よさそうに寝ている姿を見てみると、こちらもなんだか眠くなってくる。

イオは何の躊躇いもなくアリスのベッドに潜り込むと、彼女の頭に腕を巻きつけた。

この間同じようなことをしたら、ルアの面白い反応が見れたのだ。

イオは彼女が起きてしまわぬよう、思い出し笑いを必死で堪えた。

こうすることに罪悪感や羞恥はない。別に何が減るわけでもないし、誰に迷惑がかかるわけでもない。もしそうだったとしても、基本的に自分が楽しければそれでいい。

寝惚けたアリスは、それが何かもわからないまま人肌を求めて身体を寄り添わせてくる。

イオは苦笑しながらゆるりと抱きしめ、彼女に温もりを分けた。

冬は好きだ。体温の高い自分は時折こうやって相手から存在を求められる。これが夏だったら、暑苦しいと言われて邪険にされるだけだろうが。

「……アリス」

朝になれば、自分は消え再びロキに戻る。自分は額縁の外へ弾き飛ばされ、闇に囚われて。明るく光るロキの世界を羨ましげに見ながら　そんな自分を浅ましいと感じるのだろう。

アリスを抱きしめる腕に、わずかに力がこもる。

どうして、俺達は双つなんだろう。独つきりだったなら、お互いの世界を別つ必要などなかったのに。

どうして、俺達は独りなんだろう。双りきりだったなら、お互いの

世界を侵すことだってできたはずなのに。

「独つ」の人格ならば。それとも、「双子」の人間ならば。小さく、うなり声を上げる。

「寂しいよ」

こんな思いなど、覚えずに済んだのに

……

時は6時間と34分遡って。

ロキは早朝にもかかわらず、すでに精魂尽き果たしたように倒れ伏していた。

その両脇を長身の双子が固め、どこから拾ってきたのか細い木の枝でツンツンとつついている。まるで死んだ芋虫さながらの扱いだ。

「うつわぁ……完璧死んでるよ黒ちゃん」

「そんなに白ウサギの説教長かったのかなぁ……」

「いや、俺の推理では黒ちゃんの死因は恥ずかし死にだな！」

「あー、なるほど。さすがダム名探偵！どんな迷宮入りの事件でもイチコロだね！」

「ふむふむ……つまりこういうことだな。黒ちゃんは自分の羞恥心

により死んだから、これは自殺だ！」

「おおおお！さすが迷探偵ダム！身体は大人頭脳は子供！迷宮だらけの迷探偵！真実は」

「お、おいディー！そろそろ著作権にかかわるからやめとけ！」

……アホか。

朝から疲れるほどのハイテンションで騒ぎだす二人の間で、「死体」はむくりと起き上がった。

別にホラーでもなんでもなく、ダムの言うとおり自分が恥ずかしくて撃沈していたのだ。

イオが悪いとはいえ、子供のようにアリスを抱き枕にしてしまうとは……。

今思い出すだけで顔が赤くなる。当初はほぼパニック状態だった。

「お、黒ちゃん起きた！」

「黒ちゃんおはよー！トランプしよ、トランプ！」

「うるせー……しねえよ。二人でスピードでもやってる」

「でもスピードって二人じゃできないじゃん！」

……。

あれ、スピードって二人でやるゲームじゃなかったけ？

あまりにも二人が強くなるので、ロキは一瞬自分の常識を疑った。脳内で再確認して、小さく頷く。

「……二人でできるだろ。つかむしろ二人じゃないとできない」

「黒ちゃん、冗談言うなよ。俺とディーが争えるわけねえだろ！」

「そうだよ、黒ちゃん！ダムと勝負したってどうせ僕が勝つんだから！」

「でい、ディー？あの、それは……俺と勝負したってつまんないってことなのか？そうなのか？」

「まさか！ダムと遊ぶのはいつだって楽しいよ！ただ手応えがない
っただけで」

「おいディー、あんま兄貴を泣かせてんじゃねえよ。ダムも男な
らめそめそ泣くな気色悪い。どっちにしる俺はやんねえよ……眠い」

「そんなツれない……」

「一回でいいからやるーよー！」

「そんなケチな男だと姫さんに嫌われちゃうぞー！」

「そうだよ！姫さんは心の広い男が好きなんだよ！」

アリスに嫌われる……か。

ロキは胡坐をかきながら小さくため息をついた。

アリスはルアに誘われて外に出ていつてしまった。それを止める度
胸は自分にはないし、理由もない。彼女を縛りつける権利など自分
にはないのだ。

ロキは見渡しの良い窓から、はしゃぐルアの後ろ姿と彼に寄り添う
アリスの背中を見送った。

嫉妬するかしないかと言われたら、間をおかずにすると答えるだろ
う。アリスの隣にいるルアが、たまらなく憎らしい。それと同時に、
ひどく羨ましかった。

俺も、素直に誘えたら……

女々しいと、自己嫌悪する。

いちいち彼女の行動に目を奪われ、声を掛けられると挙動不審に陥
り、好きという自覚があるにもかかわらずいざという時に手を伸ば
せない。

そのくせ彼女に対する執着心は人一倍なのだから最低だ。嫌われる
と聞いて落ち付いていられるほどの余裕はなかった。

「……やればいいんだろ、やれば。ったく……都合のいい時だけア

リスの名を出しやがって……」

「やрий！覚悟しろよ、黒ちゃん！」

「僕らがタッグを組めば最強なんだからね！」

……何でこいつら朝っぱらからこんなに元気なんだ……？

はしゃぎ立ち上がる二人の間でロキはすでに疲れたように肩を落とした。

時は6時間と3分ほど遡って。

「ああ、ダム。ルアを見なかった？」

何の前触れもなく部屋に入ってきたフレイムは、ロキの存在を丸ごと無視してダムに尋ねた。

女王フレイム。この城の最高権力者であり、ロキが最も嫌いとする少年。ロキはあからさまに顔を顰め、そそくさとデイーの方へと寄った。

一体何の用だ……？

ゲームを強制中断されたダムは、しかし嫌な顔一つせずにデイーと相談し、結論を出す。

「さあ？朝は見掛けたんだけど……」

「やっぱり知らないか……。まったく、あの男はどこへ行ったんだ」

「フレイルム様、仕事？」

「殺しだつたら白ウサギなんかじゃなくて僕らがやるよ！」

「あ、あ、でもちよつと待ってて！今黒ちゃんとスピードやってるんだ！」

「それがさ、さっきから何度もやってんのにぜんぜん勝てないわけ！黒ちゃん強すぎ！」

「へえ……」

フレイルムは小さく頷きながら、ゲームの様子を覗きこんだ。

スピードとクローバのカードを集めた手札を切っていたロキは、ちらりと彼の方を気にするそぶりを見せたが、それ以上は何も言わなかった。

彼が近くにいるのは癪だったが、邪険にする理由がない。わけもなく疎かにはできなかった。

しやがみこんでゲームを観戦するフレイルムを余所に、ディーとダムは興奮したように意気込む。

「今度こそ覚悟しやがれ、黒ちゃん！」

「こてんぱんにしてやるんだからな、黒ちゃん！」

「はあ……これ終わつたら解放してくれよな……眠い」

一度承諾してしまったのが運の尽き。あれからはば連続でスピードばかりをやらされていた。

こちらはそこそこ手を抜いてやっているというのに、双子はまだ一度も勝てていない。それもそうだろう。お互いの指が動きを阻みあっているのだから。

一人でぶつかってくる方がはるかに効率いいのになあ……。欠伸を

するロキの傍で、フレイムがぼそりと呟いた。

「黒ちゃんて定着してるな、黒猫……」

蔑むような言葉に、ロキはわずかに顔を強張らせた。眠気で下がっていた猫耳も警戒のためか、ピンと上に立つ。

ロキは下唇を少し噛んで苛立ちを押さえた。むかむかする気持ちはわかるが、この城で女王と争うのはさすがに無謀な気がする。

苛々するロキを知ってか知らずか、フレイムは少ししゃがみこんでゲームの様子を見守っていた。その顔には明らかな疲労が見て取れる。

また遅くまで業務をこなしていたのだろうか？ご苦労なことだ。

……なんて思ってるうちにまた勝利してしまった。雑魚すぎる……。

悔しさに悶える双子の目の前で、ロキは大きな欠伸をした。

「な、なんでだあ?!」

「もう一回、もう一回だけ!」

「……何度やつても無理だと思っけど」

フレイムの冷めきった声に、双子が同時に顔をあげる。

敗因を聞きたいとねだる双子に、彼はめんどくさいと顔をしかめながらも、細かく説明を始めた。

「二人でやるのがいけないんだよ。見た限り、指が当たったりしてそこで手間取っているようだった。指が多ければいいってもんじゃないんだからさ、一人ずつやってみたら?」

「一人?」

……まあ、普通そう思うよな。

だがこの馬鹿ども二人には別々に分かれてゲームをするという概念がないらしく、お互いの顔を見合わせると首を傾げた。

「一人で、だつて……」

「でもさあ、僕ダムと一緒に遊びたいよ……」

「俺もディーと遊ぶ方が楽しい！」

「やっぱ二人一緒がいいよね！」

ああ……これはいつもの兄弟愛パターンじゃねえのか……？

ロキは朦朧とする意識の中でフレイムに文句を言ったが、言葉にする気力もない。双子は次第に声のトーンを上げ騒ぎ始めたが、幸か不幸かロキから注意がそれ、二人で遊ぶようになった。

ようやく双子から解放されたロキは、ふらふらの足取りのまま窓を潜り抜ける。

ここは……6階ぐらいか？普通の人間だったら即死でもおかしくない高さを、楽々と着地した。

からりとしたいい天気だ。湿気の多い日にはねまくる髪も今朝はだいぶ落ち着いていたことだし、肌がべたつく心配もないだろう。温かくて、乾いた日。こんな日は　　お昼寝しかないだろう。

「……久しぶりにあの場所に行くか」

つまらなそうにズボンのポケットに手を入れる。

何か硬いものが指に触れたかと思ったら、棒付きキャンディーだった。イオの好きそうな紫芋味だ。……どこで売ってるんだ、こんなの。

無言のまま袋紙を外し口の中突っ込むと、変に甘ったるい味がした。薩摩芋と栗とミルクを1対3対2の割合でブレンドしたような

……。
顔をしかめて自分の中に住まう“もう一人の自分”に文句を言う。

「……まじい」

口端から突き出た白い棒をやはりつまらなそうに噛みながら、ロキは城を脱出した。

「うーん……お酒がちょっと多すぎですかねえ。未成年にはキツイでしょう、これは」

「そうかあ？普通にうめえけどなあ……」
「アリス、マルスのいうことは絶対信用しちゃいけないからね。こいつマスターの作ったコゲコゲ料理でさえ美味しいっていったんだから」

レーテ、マルス、レストは順々にチョコレートの感想を言うてくる。私は一人ひとりの意見に耳を傾けながら、これ以上食べられないよ

うにとバスケットを背後に隠した。
さっそくもう一つに手を伸ばそうとしていたマルスはひどく残念そうにウサギ耳をへたらせる。いやいや、もう後少ししか残ってないんだ。心を鬼にしてダメと言おう。

「アリス、もう一個」

「3つ食べたでしょ。これ以上食べるとロキの分がないから」

「だってロキなんて今いねえじゃんか！」

「まあそうなんだけど……でも城にも帽子屋にもいないとすれば、どこいったのかしら……」

私は自分よりも20センチ近く背の高い黒髪の青年を思い浮かべて、小さくため息をついた。

あれから城の人に聞いてみたところ、どうやら彼は外に出たらしい。しかし所在ははっきりしない。

人嫌いのロキだったら森にいると踏んで帽子屋のもとを訪ねたのだが……無駄足だったようだ。

「ロキがここを訪ねてくることなんてほとんどありませんからねえ……あいつは基本的に人に懐かないんですよ。逆にイオは馴れ馴れしすぎますけどね」

「ほんとにね。はあ……足して2で割りたい……」

彼の過去を知るレーテと彼の現在を知る私は互いに目を見合わせ、肩をすくめた。ほんとに……昔から根本的なところは変わってないらしい。

今まで大人しくしていたレストは、伸びをしながら間延びした声で言った。本人曰く、夕方が近づいてくると眠気が冷めて言葉もすっかりしてくるらしい。その分毒舌になるが。

「ロキ兄ちゃんならいつもの場所にいるんじゃないのー？ 今日いい天気だったし、俺もいこつかなーって思ったぐらいだもん」

「いつもの場所……？」

「お昼寝のベストプレイスだよ。あそこは虫もいないいい匂いだし、すごく綺麗なところなんだ」

楽しげに笑いながら説明するレストに、簡易な地図を描いてもらうことを要求する。

その代償としてチョコ一つをあげなければならなかったが……仕方ない。

もうすぐ日が暮れる、急がなきゃ

……

T o b e c o n t i n u e . . .

えー、あまりにも長いのでカットの方向で。読者の皆さま、次回お楽しみください。

つたく……ロキがあんなにうじうじするから余計な行数取られちゃったじゃないですか。本編に出てこないからって番外編を長めにしようだなんて卑劣な……っ。

「どう考えてもエプロンの下り要らなかったけどな。レストとマルスの会話なんてこれっぽちも要らなかつたけどな。双子とのゲー

ムだっでぜんっぜん要らなかつたけどなっ！」

まあまあそうカッコカしないで。カルシウム摂ってますか？

物語に無駄はつきものですよ。というかむしろこの物語自体が無駄の塊ですよ。

それはいいとして、この頃イオは大人しいですねえ。ベッドに潜り込む R 指定だとはかり思ってたので、なんも起きなかったのが逆に不気味です。

「レーテ……貴方俺をなんだと……いや、まあいいや。あは、そういうシーンは本編でのお楽しみじゃほうえっ」

「くたばれ変態」

アリス……貴女いつの間に電光石火なんて習得したんです？この頃ポケモンなみに技のレパートリーが増えてますよね、ほんと。

「うぐっ……は、腹に頭突きって反則じゃない？！アリスの馬鹿！石頭！」

「うるさい黙れ！変態ごときが私の寢床に潜るなど言語道断！100万ボルト！」

「ちよ、ちよ、ちよっ！それ卑怯卑怯！」

つて、あ。スタンガン。

いやー、いいですねえ、逃げ惑ってるイオの姿。滑稽で愉快です。

……いまいちどんな小説だったか忘れちゃいますけど。

注意。恋愛小説です。主人公が頭突きで戦ってようが、スタング
ン振りまわしてようが、恋愛小説です。

ってことでようやく期末試験終わりました、作者です。

もう言い訳のしようがない遅れっぷり……。とりあえず……復帰し
たことを祝つとく事にします……。

まだ小学生、中学生の皆様にご連絡です。高校生に浪漫を求めては
いけません！！とにかく勉強三昧の日々ですorz

ごめんなさい。ほんとにごめんなさい。

次は……近々更新します。

えっと、もうなんかかわかると思いますが、弱りきってます。文章
が支離滅裂になっているかもしれませぬ。生温かい目でスルーして
下さい（泣）

第三幕 愛しい貴女と貴方に（ロキアリ&イオアリ 後半）

風が囁く。

花が嗟う。

草が擦る。

鳥が囀る。

居場所なんて、どこにもなかった。

母とともに暮らした家はとっくに買収され、短い間身を置いていた施設も焼失した。

城の主人である女王からは疎まれ、屋敷の主人である帽子屋は自分から拒絶した。

街の喧騒は耳が痛くて、森の沈黙は息が詰まる。

この花畑でさえ 俺に、出ていけというように。

風は戦ぎ。

花は薰り。

草は擦れ。

鳥は哭く。

自分が世界にいる間、片割れは闇に囚われる。片割れが世界にいる間、自分は闇に奪われる。

世界に拒絶されて独りであることと、何もない闇の中で独りであることと
一体どちらがより孤独で、どちらがより悲しいのだろうか。

昼寝が好きか嫌いかと聞かれれば、正直どうでもよかった。

夜に片割れが目一杯行動しているせいか身体は疲れ切っているし、睡眠を要求してくる。自分はそれに答えるだけだと言い聞かせ、意識を闇に落とした。

だが、本当は心の奥底で感じていたのかもしれない。

闇に沈むのは、ただの負け惜しみ。精一杯の意地。

世界に拒絶されているのではない、自分から拒絶しているのだ。

闇の中に独り残されるのではない、自分から望んで入っているのだ。

そんな幻想を、ひたすら繰り返していた。或る者は愚かフレイムと笑い、或る者は哀れと嘆くが、今更止められない。

悲しみを、苦しみを 孤独を、忘れよう。たとえそれが一瞬の欺瞞まやかしだとしても、甘く誘う闇から逃れることはできない。

眠れ、眠れ。いつかその眠りが永遠のものになるを願って。

「ロキ」

私はようやく探していた姿を見つけて小さく息を吐いた。散々歩いたが、なんとか夜更けまでには間に合ったようだ。最も、空はもう赤みが差している。

ロキは花畑にごろりと仰向けに寝転び、黒い目隠しをして熟睡していた。いつもの不機嫌そうな口元がわずかに開かれている。私はそのあどけない寝顔に小さな笑いを零した。

薄い色の夕日が急げとでも言うように背中を押してくる。残された時間はわずか。その間になんと少しでもチヨコを渡さなければいけない。

ぐっすりと眠っているところを起こすのは気が引けたが、このまま立ち尽くしているわけにはいかなかった。

私は物音を立てないように忍び足で近寄り、ロキの隣にしゃがみこんだ。無遠慮に、彼の寝顔を観察する。

「……相変わらず綺麗なお顔で」

嫉妬を通り越して殺意を抱くよ。小さく呟くと、なんだか余計に

虚しくなった。

そつと指を伸ばし、彼の額から汗で濡れた前髪を引き剥がす。この時期に汗をかくなんて……一体どんな悪夢に苛まれているのだろう。

ロキの身体は冷気に晒されていたというのに不自然に熱かった。風邪でも引いたのだろうか、この馬鹿は……。

「腹出して寝るなって何度も言ったでしょうが……。ほらロキ起きて。ロキくーん？」

「……るせえ。なんでお前がいんだよ」

ロキはごろりと寝返りをうつと、私に背を向けたまま低い声で呟いた。てつきり寝ていたと思っていた私は軽く目を見開く。

「あれ、起きてたんだ」

「……お前、大股すぎ。100メートルも前からガサツな足音が聞こえてたよ、バーカ」

「う、うるさいわね！ 急いでたんだからしょうがないでしょ！」

「……そんなに急いで、誰に用だったんだよ」

ぶすりと拗ねたように聞かれ、私は一瞬戸惑った。何で今日のロキはこんなに機嫌が悪そうなのだろう。

隣に座りこみ膝を抱える私を無視するようにして彼は横になり、広い背中を見せる。それは冷たいというよりもむしろ、傷ついたという風貌だった。

私が子供をあやすように耳を撫でると、少しだけ固まる。今度こそ本気で怒気を孕んだ声をあげた。

「……おい、そこ触んな。獣人の耳は搦んじやいけないって教わんなかったのか」

「いやそもそも獣耳はやした変態なんて私の世界では稀少だったけどね……。触られると気持ち悪いの？」

「いや……。むしろ気持ちいいってか、なんつーか……。ぞくぞくする」

「……よし、やめよう。ほらやめよう。今やめよう。その言い方、嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしない。

パツと手を離してそそくさ背後へ隠す私をむっとしたように目で追い、ロキは小さくため息をついた。

そのため息に一体どんな真意があったのか、私にはわからない。ただ、聞くものを悲しませるような切ないため息だった。

「大体、お前もうちよつと節度もつたらどうだ？　すぐべたべた触りやがって……」

言われてみれば確かによく触っているような気がする。

そんなに男慣れしているタイプではない　　というかむしろ異性は苦手だ　　私だが、「獣人＝動物」という等式が脳内で成り立っているらしく、触れることに躊躇はなかった。

……もちろん特例イオを除いての話だが。

「い、ごめん……。触られるの、嫌だった？」

「……嫌だ」

間をおいて拒絶され、私は小さく項垂れる。私の立場からしてみれば頭を撫でられるのは褒められている気がする。悪い気分ではなかったのだが……。

何事も客観的に見なければいけない。溜息をつきながら心底反省して、手を引っ込めようとする。

その手首を、ロキが引きとめるように掴みあげた。痛いほどの力にわずかながら顔を引き攣らせる。

「他の、奴に……べたべた触んな。……ムカつく」

……………デレた。

「……なんだよその顔は」

「い、いや、何でもないデス……」

言いづらそうに口をもごもごさせ視線をそらすと、ロキは明らかにむっとしたようにこちらを睨みつけてきた。その頬が紅潮していると思うのは私の妄想ではなさそうだ。

くすくすと声を押し殺して笑う私から、ロキはうろつろつと視線を外した。

耳まで赤くして背中を向ける彼が可愛くて仕方なくて、私は思いつきり彼の頭をわしゃわしゃ掻き糞った。ロキが悲鳴に近い怒号をあげるが、全力で無視する。

「何なんだよお前はっ!」

うつ……………怒らりた……………。

両手首を取られて強制的に頭からサヨナラさせられる。散々撫でられた頭はす出してみる目もないほどにぐしゃぐしゃだった。

ロキは上半身を持ち上げて、ぎろりと私を強く睨みつける。手に込められた力が彼の怒りを表していた。

「ろ、ロキ……?」

……………」

「ロキくん、あ、あの、ちょっと痛いんだけど……」

不自然な格好で万歳させられ、腰やらアキレス腱やらが痛む。口

キは静止したまま怒りのこもった目で睨みつけていた。
ふいに、その瞳がぐらりと揺らぐ。

「……………何なんだよ……………お前、は……………」

「ろ、き？」

「……………なんで」

息をつく暇もなく、抱きしめられる。後頭部に熱い手があり顔を肩口に押し付けられているので、うまく声を上げられなかった。

抱きしめられて初めて気付く、身体の震え。彼はまるで傷を負った獣のように怯えていた。

「何で……………追ってくるんだよ……………っ。追いかければ逃げるのに、俺が逃げた途端追ってきやがって……………！」

……………うん？

なーんかその文句、聞いたことあるぞ？ 近づけば離れて、離れたら「離れないで」と言う……………。

私はロキの腕の中でバタバタと手足を振りまわし、なんとか顔をあげることができた。ものすごい勢いで抵抗されたロキは一瞬呆然とする。

何で暴れた？ そんなの決まりきっている。不服だからだ！

「あのねえっ、何度も何度も言うけど、私は別にツンデレじゃないのー！」

『ツンデレを肯定してしまったらもうその人はツンデレじゃなくなる。なぜならツンデレとは常にツンデレの自覚がなくやるものであるから。また、もし肯定したらそれはツンデレの真似事をする特殊なぶりっこととして見下されてしまう。故に真のツンデレ

とはツンデレを否定する者のことであり、決して自分をツンデレと呼ばない者である。　　って誰かが言ってたよー、アリスく」

『言っわけあるかあっ!!』

先日イオと交わしたツンデレ談議（というか一方的にマシンガントークされた）が高速で耳に蘇る。

どいつもこいつも私のことをツンデレだなんて呼びやがって……

！ 私の憤慨の一言から始まったその談義は、小1時間ほど続いた。あの時の脱力感を私は一生忘れない。

『アリスったら、ツンデレなんだからあ』

『ツンデレのツンはあてになりませんからね、拒否権はありません』

『姫さまってツンデレじゃないの?』

『ツンデレ以外の何者でもないですね』

『アリスのツンデレ比は15：3だからね。黄金比だよ』

イオのみならず、ルア、双子、レーテ、レストからもツンデレ認定されている。その他の奴はおそらくツンデレという言葉すら知らない輩だろう。

こんなに大勢の人にツンデレといわれるの自体屈辱的なのに、その上ロキにまで言われるなんて……！

私は怒り狂っていた。それはもう、シリアスな雰囲気まで木っ端微塵にってしまうまでに。

「言わせてもらいますけどね、あんたにだけはツンデレとか言われたくないわ！ このツンデレが！」

「な、なんだよいきなり！ 何で俺が怒られなくちゃいけねえんだよ！ ツーかツンデレって何だ！ 新手の呪文か！」

「んなわけないでしょうが！ ええい、説明すんのも忌々しい！ 大体っ、私は逃げも隠れもしてない！ 堂々とあんたに向きあって

んでしょうが！」

「……っ！」

私が息せきこんでまくし立てると、ロキの瞳に萎えかけていた憤怒が蘇った。その炎は、どこか悲しい。

「逃げたじゃねえか！ 俺が好きって言った時、思いっきり！ ルアの奴とはイチャついてんのに……っ」

「はああ？！ 私がいつ、どこで、あのルアとイチャついたっていうのよ！」

「俺の前で他の男の名前を呼ぶな！」

「じゃあ何、『変態白ウサギ括弧私が二番目に抹消したい奴、無論一番は変態紫括弧閉じ』とでも呼べばいいの？！ 不便すぎるわボケ！」

「俺のこと以外考えなければいいだろ！」

「なっ……っ」

なんだかどさくさに紛れてものすごいことを言われた。ロキを睨みつけたままわずかに頬を紅潮させる私に一步出遅れて、ロキがその意味に気付いたらしい。一瞬フリーズすると、見る見るうちに赤くなる。

本来だったら絶対ロキは露わにしない、醜いとすら感じる独占欲。身体が自然に熱くなつていくのを感じながら、私は深呼吸をして息を整えた。

戸惑う自分がある。悦ぶ自分がある。そして 哀しむ自分がある。

いずれは還ってしまつと理解わかっているのに、どうして彼らは私と必要以上に拘ろうとするのだらう。どうせ、どうせ別れるぐらいなら、出会わなければよかったのに……。

ぶるぶると頭を横に振る。また悪い癖だ。何かあるたびに暗い考

えへと脇道をそれてしまふ。今は話の趣旨を戻さないと……。

「あのー、ロキくん？ 気持ちは嬉しいんだけど、さすがにそれは

……」

「……うるせえ。迷惑なのはわかってるよ。ただ……」

「ただ？」

「……… やっぱいい。言わねえ」

言いかけて止めるな、気になるだろうが。

私が小さくため息をつく、それすらも彼の気に触ったのかむつと眉をひそめられる。目線を斜め下にそらせて唇を引き結ぶ彼の頭に、軽く手をのせた。そのまま慎重に耳を撫でる。

髪の色と同じ、漆黒の耳。上質の毛並みだ。彼がルアみたいに普通の猫になれたら、きつとすらりとした美人な黒猫になるだろう。

「寂しかった？」

「………」

「………じゃ、明日一緒にお出かけしよう！」

「………！」

ほんの少しの変化。眉をぴくりと動かし猫耳がわずかに持ちあがった、たったそれだけの変化が、彼の感情を物語っていた。

そんな感情の機微がわかるようになるまで一緒にいたのかと思うと、嬉しくも切なくもなる。

手を叩いて明るく振る舞うと、鬱陶しげに睨まれた。しかしその頬は傍目からもわかるほどに紅潮している。

「どこがいい？ やっぱ街かなあ……特に買い物する必要はないんだけど……」

「……… 此処で、いい」

左手の甲に温かいものがのせられる。それがロキの手の平だと気付くのに、そこまで時間はかからなかった。

無意識を装って手をかぶせる不器用な彼に、私は不覚にも吹き出してしまった。当然ながらものすごい勢いで睨まれる。

拳銃の名手と聞くからごつごつしているのかと思ったが、意外にも彼の手の平は滑らかだった。……まあ本音を言ってしまうと、肉球がついているのを期待してただけ。

「何処へも行かなくていい。……一緒にいてくれれば、それでいい」

一瞬だけ私を横目で見て、それから下へと目を落としてしまう。

ロキの隣は、不思議と心地よい。彼とともに過ごすこの穏やかな時間が、日常の数少ない嗜好品だった。

彼のような存在をなんとたえればいいのか……。身体中の疲れ　主にルアのストーカー行為とイオの変態行為による

を一気に癒してくれて、温かく包みこんでくれる……。

「あ、温泉」

「はあ？」

「そう、そう温泉よ！　ロキって温泉に似てるんだわ！　癒しキャラって感じで！」

「……………お前それ、俺を貶してんだろ」

突然はしゃぎだす私に対して、ロキはげんなりとため息をつく。

温泉というたとえばはまずかっただろうか。お母さん、お袋といわれるよりはマシだと思ったのだが……。

「大体、癒しキャラだなんて初めて言われたぞ。お前感覚おかしいんじゃないの？」

「失礼な！　なんで？　レスト君（昼限定）に次ぐ癒しキャラだと思うんだけど」

「だって……すぐ怒るし、女に優しくとかできないし……」

ああ、短気なところも無礼なところもちやんと自覚はしてるわけね、直せないだけで。そういえば、最初に会った時は酷かった。初対面で「どけよ」と命令され、無遠慮に重いと指摘され……。

……あ、なんか殴りたくなってきた。殴っていいかな、いいよね。

ばっつ

「いつ……てえ！　てめえ何すんだアリス！」

「いや、ごめん。あまりにもムカついたものだから。これで過去のことはチャラにしましょう」

「な、なんなんだよお前はもう……」

うーん、涙目のロキを可愛く思うなんて、私も結構Sっ気あるかもしれない。

「初めても、こんなふうに出会ったんだっけ。このお花畑でロキが昼寝しててさ、私が走ってきて、それから森へ行って……」

「おい待て。お前普通にスルーしたけど、結構お前俺にひどいことしたよなあ？　まさか昼寝の最中に肘鉄が鳩尾に決まるとは思わなかったぞ」

「細かいことを気にしていると禿げるわよ、ロキ」

まだ何か言いたげなロキを無視して、私は手元の花を一輪摘む。

初めての時はピンクや黄色、赤など、華やかな色が多かった。冬が終わり日も長くなるうとする今では、白系統の落ち着いた花が多い。白の中にわずかに水色が混じるその花弁。2月に咲く花……どっ

かで見ただことあるのだけど、なんだっただけ。

「ローズマリーって言うんだ。巷ではスノーフラワーって呼ばれる。薬草だからな、あんま抜くなよ」

「へえ……。やけに詳しいんだね。もしかしてお花とか好き？」

「……嫌いじゃない」

あ、大好きなんだな。

「昔俺が風邪をひいたとき、レーテの奴がそれで薬湯を作ってくれたな。結局失敗してそれを飲んだ俺は2、3日死の淵を彷徨っただと」

「へ、へえ……。強烈ね……。レーテってそんなに料理下手なの？」

「あれは料理じゃない」

きっぱりと全否定したロキは、その薬湯を飲み干した時の恐怖を思い出したのか、ぶるりと震えた。そんな彼の様子に苦笑が漏れる。言われてみればレーテがまともに料理している姿を想像できない。紅茶を入れるのは上手いから、得意料理「カップラーメン」といったところだろう。

うん？料理？そういえば私も午前中調理場を借りて

……

「あああああつー!!」

「いつ……アリス！ 耳元で叫ぶな！」

猫耳を両手で押さえて訴えるロキの姿。うん、すごく可愛くてじっくり観察しておきたいが、今はそれどころじゃない。

素早く後ろを振り返って夕日を確認する。真っ赤に染まった太陽は、すでに半分以上を地平線に食われていた。いや、むしろ完全に沈んでいなかったのが奇跡だろう。

私は急いでポケットの中を探ると、ラッピングされたチョコレートを取り出した。幸い、形は崩れていない。

「はい、ハッピーバレンタイン、ロキ」

「俺、に？」

「うん、皆に配ってるの。作りすぎちゃったからね」

「みんな？」

ロキが奇妙な顔で私を見つめる。落胆よりも疑問の色が濃い。

とりあえず彼の手にチョコを押し付け、私は安堵のため息をついた。なんとか“ロキ”に渡すことができた。日が落ちてしまっただけでは遅すぎる。

「……なあ、アリス。バレンタインのチョコって、普通好きな人だけに渡すんじゃないのか？」

「え……いや、たぶんもう半分社交辞令化しちゃってるかな。友達や同僚にあげたり、先生にあげたり……」

「そ、そんなに軽いものなのか？！」

「誤解しないでほしいけど！ 軽いか重いかなんて込める気持ちで変わってくるんだからね！ このチョコには少なくとも象一匹ぐらいの重みがあります！」

なにしろ何時間も彷徨って捜し出した相手にあげるチョコだ。クラスメートに配るようなチョコと一緒にしてほしくない。それなりに気持ちは重いはず。……象一匹が何キロかは知らないけど。

ロキは口を曲げて苦虫を噛んだような顔をした。やがて疲労の込められたため息を漏らす。

「そんなもんなのか……。渡すかどうか悩んでた俺が馬鹿みてえじやねえか」

「はい？ 何を……」
「象十匹分だ」

ぐいと手首を引つ張られ、乱暴に何かを押し付けられる。角の部分が手のひらの固い肌突き刺さり、私は痛みに顔をしかめた。

渡し終えた途端に口キは手首を離し、そっぽを向いてしまう。私はその背中をぽかんと見ながら、手の平のそれに視線を落とした。

「綺麗……」

掌にぴったり収まるぐらいの小物箱。豪華な宝石などは一切使われておらず、その代わり細工の端々に職人の凝りを見せている。側面を覆うガラスは二重になっていて、小さく傾けるとその中に水が入っていることがわかった。

銀色のフレームが赤い夕陽に反射してきらりと光る。これが月の光であれば、なおさら綺麗だっただろう。

私は、その箱を開けることもなしにただただ感嘆の息をついていた。やがて先程から横目でチラチラ様子を窺っていたらしい口キから、苛立ちの声がかかる。

「おい、開けるよ」

「あ、うん、ごめん」

あまりの精巧さに一瞬我を失ってしまった。私は決して傷つかないように、そっと小物箱の蓋を上あげた。

「……チヨコ？」

「以外の何かに見えんのかよ」

「いや、うん、まあ……チヨコ、だね。たぶん」

「たぶんって何だよ！」

だってあまりにも……形が悪すぎる。私は数個あるうちのつぺんの奴をつまんで、小物箱と見比べてみた。

うん……なんというか、よくドラ エであるよね。宝箱を開けたらミミックでした……的な。いやさすがに毒ではないのだからうけど……うーん、なんとも言い難い。

「……なんだよ」

「いや何でもないよ、うん」

「うるせえ！ いいから食べえ！」

さすがに怒りゲージがマックスに達してきたのか、ロキが怒鳴る。私はこわごわと製作者曰く”チョコレート”を口にした。

舌の上で不格好なチョコが解ける。ゆっくり舌で転がすと、香ばしい臭いが口の中に広がった。不思議なことに、クッキーでもないのに噛み砕いた時に歯につかない。味は少し苦めだが……甘いものがそこまで好きではない私にとってはかなり好みの味だ。

私が口を開くまで、十数秒かった。

「すごい……美味しいよ、これ」

「……本当に？」

「うん！ なんかすごい！ こんなに見た目と味にギャップのある食べ物って初めて見た！」

「……お前それ微妙に褒めてないぞ」

不満げに溜息を吐かれるが、他に表現のしようがない。私は口の中のものを全部味わい終わると、2個目を取り出した。

「……あれ？」

「どっした」

「なんかこれだけ、ものすごく形が整ってるような……」
「……………?! これは……………」

今までのごつごつしたのとは比べ物にならないほど見目麗しいトリユフ。きちんと球を象っていて、中は柔らかいチョコ、外は硬いチョコ、仕上げに茶色のココアパウダーをまぶしてある。市販で売っている高級チョコレートみたいだ。

たった一つ、妙に形が整っているチョコをロキはひったくるようにして奪うと、声をあげる暇もなく自分の口の中へ放りこんだ。

「あぁっ！ ちょっとロキ！」

「これだけは食べんな！……………つたく、あの野郎……………俺の奴にさりげなく紛れ込ませやがって……………嫌味か！ うっわしかもこれ滅茶苦茶うめえ……………」

「ええ?! 何それ食べてみたい……………」

「だからお前は食うな！ ム力つくから！」

「んな横暴な……………」

大体それロキが作ったんじゃないの……………。ぶつぶつと文句を言うが、ロキはむすりとは押し黙ったまま何もしゃべらない。

小箱の中のチョコレートを半分ぐらい食べ終わると、私はロキの手元に目を移した。軽く握られたまま手を付けられた形跡はない。

「ロキ、それ……………ほんとは3つあったんだけど、ごめんね、レスト君に1つ取られちゃった」

「え……………あ、ああ、別に……………いい」

「ちよっとお酒が入ってるけど、あんまり甘くないからロキも食べれるかな、って……………」

早く食べてほしい。たったその一言を言えば済むのに、なかなか

言葉にできなかつた。夕日はもう沈みかけている。もってあと数分というところだろう。

私の焦れる視線に気付いたのか、ロキはようやく包装紙に手をかけた。赤色のリボンを解いて、黄色の袋から一つ、ブラウニーを取り出す。

ゆっくりと口へと運ばれたそれは、少しずつ姿を消していった。豪快というイメージが強いロキからは想像もつかないほど丁寧な食べ方だ。

「……………美味しい」

「そ、そう？ だったらよかった……………」

「その……………ありがとう、とう」

1個を食べ終わり、ロキは指先を舐めながら小さくお礼を言う。私は喜んでもらったことが心底嬉しくて、彼の横顔を見ながら顔を綻ばせた。

しかし反対に、チョコを1つだけ余したロキは難しい顔をして黙りこんでいる。じつと残りのチョコを見ている姿は、まるで睨めっこをしているようだ。

「あれ……………どうしたの？」

「む……………む……………」

「ロキ？」

「やっぱ……………でももともとあいつが俺のに紛れこませたのが悪いんだし……………いや、でもさすがに食べたのはやり過ぎ、か……………ムカつくけど……………」

断片的に言葉は聞こえてくるが、何の事だかいまいちよくわからない。長い独り事は苦笑混じりのため息で締めくくられた。

不思議そうな顔で首を傾げる私に気付いたロキは、口端をあげて

小さく笑う。

「お前には悪いけど、あと一つ、他の奴にやってもいいか？」

「は……？ まあ、ロキがいいなら別にいいけど……女の子？」

「んなわけねえだろ」

「じゃ、レーテ？ 一応ここに来る前に帽子屋の皆にはそれぞれ配つただけど……」

「だから違うって。ま、俺も奴がせつかく作ったチョコ食べちゃったわけだしな……それに」

それに。その後続く言葉はなかった。ロキは言いかけたままも少しで沈みきる太陽に目を向け、息の抜けるような笑い方をした。空が、赤い。私が住んでいたところよりも空気の良いこの場所は、地平線を隠す高層ビルもなければ光を遮る雲もなかった。ただ綺麗な赤色が空一面に広がり、少しずつ、月がひきつれた群青に浸食されていく。

太陽が沈みきつてもなお、広がった赤色は抵抗するように西の方向を塗りつぶしている。やがてその色も薄れ、赤のあったその場所に銀色の星がきらりと瞬いた。

星に合わせるように、街が光を付けていく。遠目から見ると星も街の光も同じくらい幻想的だった。感嘆のため息をつき、いつの間にか止めていた息を吐き出す。

「綺麗ね……」

「貴女の方が綺麗だよ」

「あんたその台詞、痛いとは思わない？」

くつくつと隣で人を馬鹿にしたような笑い声が聞こえる。あの純粹でウブなロキがこんな笑い方をするわけがない。

私は呆れたように横を一瞥した。紫色の尻尾が右へ左へと揺れている。悪戯っぽい金色の瞳がこちらを捕らえた。

「おはよー、アリス」

「……一応言っておくけど、今は夜よ」

「俺にとっては一日の終わりが全ての始まりだよ」

「どこかの引きこもりみたいな生活してるのね」

「あは、あながち外れてないかも」

のんびりとイオは笑い、小さな欠伸をする。彼が覚醒する姿は、いつ見ても奇妙だった。太陽が地平線に欠片までのみ込まれた、その瞬間にがらりと変わる。夕日の色が彼の髪に乗り移ったかのように赤みが増し、鮮やかなピンクへと中和していくのだ。

私はそつと手を伸ばして寝癖のついた髪を指で梳いた。ロキだと絶対嫌がるに決まっているのに、イオは気持ちよさそうに笑みを広げる。

「……なんか今日はやけに機嫌よさそうね……」

「そりゃあ、一年に一回、世界中の男子が期待に胸をふくらませ、また最上級の絶望を味わう日だからね。一部の男子にとってはただでチョコが貰えるラッキーな日でしかないけど」

「何の皮肉よ。どうせあんたも“一部の男子”の一人なんですよ」

後で知る話だが、私の周辺の男子は全員“一部の男子”に含まれていた。双子のファンクラブなんかはチョコの買い占めを行い、街で一悶着あったそうだ。結局それを処理するフレームの苦労ばかり増えていく。

ちらりと横目で盗み見ると、やはりそこにはいつもの端正な顔があった。人の好みは様々だが、ここまで来るとそんなことも言っ

られない。見るものすべてを惹きつけてしまうほどの美貌。絡め取るように曇惑的な仕草。砂糖菓子のように甘く、それでいて氷菓のように冷たい表情。

髪の色や猫耳が目立つだけじゃない。彼の存在一つ一つに、どうしても目を奪われてしまうのだ。それが女性なら尚更のこと……。

こうやって近くににいるから、彼の魅力が痛いほどにわかる。

私は彼を観察したい視線を下に落とし、ローズマリーを一本つまんだ。地面から抜くようなことはせず、花をそつと触る。

「……あんたの分、用意してないから」

「ん？ 何を？」

「……………チヨコ」

「ああ、チヨコ！そういうえば全員に配ってるんだったね」

……………馬鹿みたい。私は、一体何を期待していたんだろう。どんな言葉を言っただけじゃなかったんだろう。

くだらない嫉妬で拗ねて用意しなかったのは私なのに……………どこかでちゃんと渡したがっている。

自己嫌悪でさらに首をもたげる私を見ながら、イオは小さく微笑んだ。

「なあに落ち込んでんの、アリス。俺のことで怒る以外の反応見せるなんて珍しいね」

「べ、別に落ち込んでないわよ！」

「じゃあなんで悲しそうなの？」

「悲しんでなんか……………つ、ただ……………」

頭の上に温かい手を感じる。私がロキの頭（主に猫耳目当てで）を撫でるのが好きなように、イオもよく私の頭を撫でてきた。……

まあ奴が撫でるのは頭に限ったことではないのだが。

手が背中へと回り、温もりを分け与える。軽くさすりながらポンポンと叩かれると、言葉もそれに押し出されるように飛び出してきた。

「何で、あなたにだけ用意しなかったのかって……少し、後悔してる」

「なあるほど。でも、俺のこと嫌いなわけじゃないんでしょ？」
「は?!」

どうしてそうなる!そうつつこもつとして彼の方を振り返ったが、その瞬間に左手首を掴まれ動きを押さえこまれる。華麗ともいえるほど手際よくイオは私を抱きかかえると、その姿勢のまま立ち上がった。よくわからないままに足が地面から離れる。

呆然とする私を自分よりも目線の高い位置まで持ち上げ、背中を支えて安定させた。この細腕のどこにこんな力があるのか……。金色の瞳が悪戯っぽく下から見上げる。こうしてみると、イオもなかなかの童顔であった。子供のような甘えた仕草がどこか色っぽい。

「ね?俺のことが嫌いだからチョコをくれないわけじゃないんでしょ?」

「そ、それは……っ」

そうだけど……。

だが、こいつには普段から「大嫌い」を連発している。今更それを否定するようなことを言うわけにはいかなかった。

「だ、だって、ディーがいつぱい食べちゃって……それで足りなくなっちゃたんだもの……」

「双子ちゃんが？ふうーん、見るからに甘党そうだもんね。ってことは、やっぱり俺が嫌いだからくれないんじゃないんだよね？」
「だ、だからっ、そ、その……」

言葉が詰まる。能弁というわけでもないけれど、私に訥弁という言葉は似合わないはずなのに……。

なにもかも、この上目遣いがいけないのだ。金色の瞳に月の光が映り、こぼれるような色気を醸し出している。

私が瞳の魔力に囚われて動けないでいると、イオは調子に乗ってさらに私を持ち上げた。最早幼児にやる「たかいたかい」の状態である。悲鳴を喚き散らす私に対して、彼は艶然と微笑む。

「俺のこと、嫌い？」

「だからっ、そういうわけじゃ……」

「じゃあ、好き？」

「その二択しかないの?! 普通っていう選択肢は?!」

「あは、中途半端な関係はイケないよ、アリス」

「そういう意味じゃねえーっ!」

「じゃあどういう意味さ？」

「ぶっちゃんけあんま近寄ってほしくないってか、うざったいってか……いい加減降ろせえっ!」

だがどんなに相手に色気があっても、女の方が皆無では甘い雰囲気も裸足で逃げ出すだろう。じたばたと暴れだす私に手を焼いたのか、ようやくイオは手を離れた。

……急に。

「ぎゃあっ!」

「わーい、空からアリスが降ってきたあ」

突然支えを失い中に取り残された私は、必然的に重力の法則に従い、下に落ちた。つまりは元居たイオの腕の中へと。パニックで思わず彼の首にしがみつく。

「こ、こ、こんの駄猫……っ！このまま絞め殺してやるっか！」

「アリスったら、自分から抱きついてくるなんて積極的い」

「う、うとううるさいっ！じ、じ、地面、地面……っ、あ、あつた……」

ようやく足の踏み場を見つけて私は心底安心した。大きく吐き出した息が、イオの首筋を撃った。ピクリと、彼の耳が小さく震えるが、私はそのことに気付かない。

この時に安心しきって身体から力を抜いたのが、後々私の後悔の種となる。

突然、背中に回っていた腕に力を込められた。肺が押しつぶされて、息ができなくなる。彼の速い心臓の音が間近で聞こえた。やがて私の鼓動も加速していき、区別がつかなくなる。

「な、なに……っ」

「どうして」

「イオ……？」

「どうして、俺にだけないの……？俺とロキは同じだから、要らないでも思った？」

ぐらりと、私の中で何かが揺らいだ。

イオは苦手だ。近づきたくない。近づいてほしくない。こうやって……ふざけてたかと思えば、急に泣きそうな声を出して。甘えていたと思えば、縋りつくような仕草をして。

……彼が、わからなくなる。彼を知るたびに私は迷宮に入りこんで、いつか抜け出せなくなってしまうんじゃないかという恐怖と闘

うはめになるのだ。……揺らいでしまいそうな自分が怖い。

「違う！そんなこと思ってない！」

これは事実だ。確かに胃袋は同じだが、味覚が共通しているかどうかもわからないし、それ以前に、気持ちの問題がある。

ロキとイオが同一人物だなんて、とても思わない。今までずっと二人の人間として扱ってきた。なのにこの時だけ都合よく一人の人間にして、ロキへの感情とイオへの感情とを混ぜ合わせるなんて……そんな残酷なこと、できるはずがない。

私はそのことをわかってもらおうと、彼の背中に爪を立てた。彼は気付いた素振りすら見せない。

「でも俺、ロキの間は痛みも、気持ちも、味もわかんないんだ。ただスクリーンを見ているだけなんだ。だから……っ、ほんと……」

ほんと？ 何？

……最低だ、私。目と鼻の先でイオが苦しんでいるのに、私は彼の言葉の続きを待っている。

私は、心のどこかで、彼にチョコをあげたかったんだ。なのに勇気がなくて、その機会を掴めずにいる。だから、彼に欲しがってもらいたい。……なんて浅ましくて卑劣な、私。

長い沈黙が続き、イオはそつと私の身体を解放した。黙り俯きこむ私を、痛々しいほど綺麗な瞳が見つめる。私はいつまでも、その瞳を直視できないでいた。

小さく、鼻を嚼る音が聞こえる。ついで頭上から降ってきたのは、場違いなほど明るい声だった。

「なあに暗い顔してんのさ、アリス。どうせチョコはもう全部ロキ

の胃の中に収まっちゃったんでしょ？なら今更俺がどうこう言っただってしょうがないじゃん。俺は大人だからそんな小さなことでうだ言ったりしないもんねー」
「……………うん」

小さな、こと……………か。もちろん、彼がこの雰囲気をぶち壊すためにそんな表現を使ったのだとわかっている。それでも感じる、胸の痛み。

象一匹分の重さよ。そう笑いながら口キにはチヨコを渡した。口キへの気持ちがあればほどの重さだとしたら……………イオへは、どう言ったのだろう。

チヨコは気持ち。値段でも、味でも、手作りかどうかでもなく渡す時の、気持ち。

今ならまだ、間に合う。

「イオっ」

「ふにゃあ？」

「変な鳴き声をあげるんじゃない！ 行くっつ！」

「あ、アリス……………？」

「チヨコ買いに行くよー！」

突然の剣幕に呆然とするイオの腕を無理矢理引いて、私は街の光へと歩き出す。照れくさいから彼の顔はとも見れなかった。

「どんなチヨコがいい？ 買える範囲なら、好きなものあげる」

「え……………だったら俺はアリスが欲し……………」

「軽い口きくとはっ倒すぞてめえ」

小さいだなんていわせない。そりゃあ、毎年うんざりするほど貰

っているイオにとっては星の数ほどいる女の子の一人だと思っけれど……そんなの、何が関係あったんだろう。

他の人なんて、どうして気にする必要があるので。私は私として、イオに気持ちを渡せばいいんだ。

「紫芋チヨコ……ねえ。ほんとにそんなの売ってたんだ。うっわ、毒々しい紫……」

「失敬な。俺から見ればコーラチヨコとかソーダチヨコとかある方が信じられないね。何が好きで炭酸をチヨコで食べるんだか……」

「まあ確かにあれはあんま美味しそうじゃなかったわね」

くだらない会話を重ねながら、私たちは肩を並べて店を出る。わりと品の良い店だったが、イオはそれほど高くないチヨコを示してきた。手の中にラッピングし終えた紫芋チヨコが収まる。

それにしても……。私はちらりと隣で機嫌よく鼻歌を歌っているイオを見やる。

予想していたことだが　まさに注目的だ。

友達と来ているらしい私よりも年下の少女達。恋人の腕に絡まりながら歩く艶めかしい女達。小さい子どもの手を引く若い婦人。時には可愛い顔をした少年。誰もがこちらをちらちらとみては、頬を赤く染めている。

彼の方に視線を縛りつけられている、というのがせめてもの救いだった。もし私の方を一瞥でもしたら、彼女らは眉をひそめるだろう。まあ、仕方ない。私も何でこんな美形の隣にいるのかわからないもの。

「いやー、でもひっさしぶりだなあ、こっち側にくるの。西部に比べてやっぱり南部は治安がいいね」

「久しぶりって……こっち側には滅多に来ないの？」

確か西部は治安が悪いってルアに聞いたけど……。

「だって西部が一番森に近いんだもん。それに娼婦さん達もいっぱいいるし」

「あんた百回くらい死んだ方がいいと思うよ、うん」

女の子の前でそれを言うかクソ野郎。脇に肘鉄を食らわせる私に對して、イオは機嫌よく笑っている。

そんなに喜ばれるとそれはそれで心情複雑なんだけど……。

「もう少し落ち着いたところにいこっか。こころ辺に公園あったし」

「……ここがいい。切実にここがいい」

「あは、ガード固いなあ」

当然だ。夜の公園だなんてそんなところに連れ込まれてたまるか。嫌な予感しかない。

「歩きながらでもいいでしょ。はい、チヨコ」

「アリスったらムードないなあ。もっと言うことあるでしょ。』あたし、ずっとイオくんのが……』とか」

「裏声を使うな！気色悪い！」

ぞっとした。まじで鳥肌が立った。ちょっと下手な裏声が妙に似合ってるからこれまた気持ち悪い。

一気にげっそりとした私は、彼の服を引っ張って人並みの落ち着いた通りへ出る。繁華街というだけあって人がたくさんいる。こんな中ではさすがのイオも何もできないだろう。

「とにかく、はい！」

ずいっとチヨコを彼の胸に差し出す。少し声が大きすぎたようで若干人の目を引いたが、状況を察してくれたらしい、すぐに引き離された。

そうだよ、今日はバレンタインの夜。当然恋人連れも多いわけ……って私とこいつはそういう関係じゃないから！ 何事もなかったかのように目をそらさないでっ！

「……………」

「な、なによ」

「……………だってまだ何も言われてないもーん」

だあああつ！！ 何でそこで拗ねる！ ガキかお前は！

いやいや待て待て。こいつと同列にされちゃあ全国の小学生以下のお子さんが気の毒だ。

私は深くため息をつきながら、仕方なく言葉を探した。もちろんイオの言ったとおりに言うつもりはさらさらない。だが何か言わな

いと受け取ってくれなさそうな雰囲気だ。

「世界で1635番目に好きよ」

「はあっ?! それむしろ嫌いなんじゃないの?!」

「じゃあ……ゴージャよりは好きよ」

「ゴージャどんだだけ嫌いなんだよ! 世界で何番目なんだよ!」

「あーもう、うっさい! あんたなんか嫌いに決まってんでしょ
うが!」

「ぶっっちゃけてるしこの子! 開き直らないでよ!」

……ダメだ。いつの間にかコントになってる。周りの恋人達から笑われてるよ畜生。

それどころか、イオの機嫌が急降下してきた。すうっと瞳から光がなくなっていく、唇はむっと引き結ばれる。

……これはまずいかも。上機嫌な時の彼は変態度がアップするけど所詮ふざけているだけだから振り切れる。問題は不機嫌な時だ。DSスイッチが入る。

「さつきから何なのさ、アリス。俺のこと、ほんとに嫌いなわけ? それともここじゃ恥ずかしくて言えない?」

場所がどこだとしても言わないわよ! 心の中で盛大に突っ込むが、もちろん声には出さない。

腕が伸びてきて、私が逃げ出す前に腰を引きよせられた。あつと
いう間に周りのカップルと同じ体勢になる。

ドクンと、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえた。慌てて離れようとするが、イオはしっかりと背中勝手に手を回してそれ以上の動きを封じている。

「ね、俺のこと嫌い?」

「しょうがつ」

「え……」

「嫌いじゃないから……っ、チョコをあげるんでしょうがつ！」

「はは」

一瞬の沈黙。小さく、イオの口から吐息のような笑い声が漏れた。腕から力が抜け、私は解放される。ようやくチョコを受け取ってくれたイオの顔は、暗闇に紛れてよく見えなかった。

「なんか私……すつごく恥ずかしいことを言った気がする。いやでも、これでいいんだよね？」「嫌いじゃない」「好き」なんて等式私の中では成り立ってないんだからね？！いい、いいんだよね……？

自分の言葉を思い出して顔を真っ赤にする私とは真逆に、イオは至極冷静に包みを開ける。

「……うん、やっぱり美味しー 昔懐かしい味だねっ」

「む、昔から食べてたのね、それ……。さすが変態紫……」

「ちよつと、俺のその名称はもう定着しつつあるの？」

何事もなかったように機嫌よく振る舞うイオに、私はほっと溜息をついた。ここで変な反応をされたら何の言い訳もできなかった。

よほどの大好物なのか、イオはあつという間にチョコを食べ終え、指先のチョコを舐め取っていた。色っぽい仕草なのだが、指に付いているものが紫色でなんだか不気味だ。

「あー、それにしてもアリスの手作りチョコも食べてみたかったなあ。今度また作ってね？」

「わかったわかった。あれ……でも……」

「ん？」

「確か口キの食べ残しが残ってたはずなんだけど……」

そうだ、すっかり忘れてた。ロキが眠る寸前残していった謎の言動。

イオは片眉をひそめて、ポケットの中を探した。あっさり、右のポケットからくしゃくしゃの包装紙が見つかる。その中に一つ、形の整ったチョコが出てきた。

「ロキが、アリスのチョコを残す……？ アリス、これもしかして毒入り？ それとも天地がひっくり返るほど不味いとか？」

「あんたぶつ殺すわよ！ 毒なんて入れてるわけないでしょ！ 味見もちゃんとしたから大丈夫……なはず！」

「うーん、そうだよねえ……どんなに不味くてもアリスの作ったものだったらロキは食べると思うしなあ」

「こ、こいつマジで殺してえ……！ なんか私のチョコに文句でもあんのかつ！」

私の繰り出した右ストレートをひらりとよけながら、イオは包装紙をポケットにつっこんでチョコだけ取り出した。

「ねえ、最後にロキはなんて言ってたの？」

「はあ？！ さあ……なんかよくわかんないけど、ロキが渡してくれたチョコの中で妙に形の綺麗なものが一つあって……」

「あ、それたぶん俺の」

「へえ、あんたの……あんたのおっ？！」

「うん、俺が作ってそつと忍ばせといたの。どう、美味しかったでしょ」

「お、美味しかったって……わ、わかんない。ロキが先に食べちゃったの」

「へっ？！ ……うーん、その展開は予想していなかった。思ったよりもロキって嫉妬深いんだね……」

……？ どうしてそうなるんだろう。頭の中で疑問符を浮かべて首を傾げる私に気付くことなく、イオは憂鬱そうにため息をついた。

「しっかし……媚薬とか入れなくてよかったあ。まあそれはそれで面白い結果になっただろうけど……って危なっ！」

「うるさい黙れ大人しく死ねっ！」

私は右手と左手で強く握りしめ、斧のように乱暴に振り回した。こいつは何ふざけたことをほざいているんだ！

だが、「イケメンは顔面を殴られてはいけない」という法則があるのか、イオにはまるで当たらない。ひらりひらりと軽い身のこなしで避ける彼は、楽しそうな笑い声をあげた。

いつの間にか別の意味で注目を集めている。今まで甘い雰囲気の中にいた恋人も真つ青の喧嘩のやり方だ。

「それでー？ ロキはその後、どうしたの？」

「はっ……はっ……こ、こいつなんで当たらねえんだ……。そ、それからロキは……なんていつてっただけ……」

えっと、確か残りのチョコレートを別の奴にあげてもいいかって聞かれて、私が承諾して……それからぶつぶつ呟いてたのよね。ムカつくけどチョコ食べちゃったのは悪かったって

あ。

「……それ、ロキがイオにあげたチョコだよ」

「え？」

今までへらへらと笑っていたイオの顔が凍りつく。

私は彼が呆然自失としている間に頭の中を整理した。うん、確かにそれで話は通じる。あれがイオの作ったチョコだとしたらロキが

あんなに怒ったのもなんとなくわかるし、その後すぐに罪悪感を感じたのだろう。

……ロキ、でもあんたわかりにくすぎ。

「ロキがイオに残しといたチョコ……だと思っよ、うん」

「どうし、て……」

「うーん、やっぱりイオのチョコ食べたこと悪いと思ったんじゃない？それとも半分こにしよう、とか……」

「半分こ、か。懐かしいね……」

イオは瞼を閉じると、唇だけで小さく笑いを象る。一体何がどう懐かしいのか、私にはわからないが　その笑顔は、どこか遠かった。

一瞬、一瞬だけ、私は彼の世界から追い出された。まるで世界が呼吸を止めたように、時間が動きを止める。唇を合わせようとしていた恋人たちも、母親に抱きつこうとしていた子供も、すべて止まる。

「ロキ……」

切なげに、彼の唇は紡ぐ。私の知らないイオが、そこにはいた。

私のことを考えていないイオが、そこにはいた。ギュッと、胸が押しつぶされそうに痛む。

イオ。呟きたいのに、唇が動かない。触れたいのに、腕が上がらない。止まる世界の中で、イオは指にずっと持っていた溶けかけのチョコを口に入れた。舌で溶かしながらゆっくりと味わう。長い瞼が、ようやく持ちあがった。

世界が、ゆっくり動きだす。彼の瞳に、呆然とした私の顔が映った。ひどく間の抜けた顔だ。慌てて顔を引き締める。

「うん、美味しいよアリス」
「そ、そそそそう！ よ、よかったわね！」

彼の顔を凝視していたのを気付かれたくなくて、私は踵を返して彼に背を向ける。明らかに不審な行動だったが、それ以外に方法が思いつかなかった。見とれていた、だなんて口が裂けても言えない。そっと、後ろから腕が回り、私を抱きしめる。背中にあたる熱が温かかった。

カップルポーズパート2……。彼の顔を見ずに済むのに、何故か先程よりも鼓動が早い。耳に生ぬるい吐息がダイレクトにかかる。彼の鼓動が、こんなにも近い。

「……うん、この姿勢だったらアリスは殴れないね！安心安心」

「は？」

「俺が作ったチヨコはロキが食べたわけじゃん？ で、アリスが作ったチヨコをロキが俺にくれた……。ってことは俺とロキはラブラブ？ 公認の恋人？」

「はあああ？！」

「いやー、ホモとか近親相姦とか全部ぶっ飛ばして究極のナルシストかぁ。新境地だね！ アリスもそう思わない？」

「お、お前は……っ」

よし。紫の変態。お前の変態度に敬意を示して極上の肘鉄をくれてやるっ。

安心して成仏するがいい。

「私のトキメキを返せえ っ！ー！」

『もう一人の俺へ

いいか、俺は怒ってる。

なんでかわかるか？ お前、この間言ったこと全然わかってねえじゃん！

美味しいケーキは半分こって言ったろ！ お前絶対一口しか食わねえんだもん。いつつも俺に大抵残しとくもんな。

お前が優しいのはわかってるよ。俺が甘いもの好きだから残してくれてんだろ？

でもやっぱり俺はもう一人の俺にも食べてほしい。ちょっとじゃなくて、俺と同じ量だけ食べてほしい。

こうやって俺ともう一人の俺でユウレツつけんのって、よくないと思う。というか俺がいやだ！

だから、今度は絶対半分こにしような！ 約束だからな！

俺より』

それは、半分に分けられた一きれのケーキと一緒に添えられた、
優しい少年からの手紙
……

F i n . . .

なんか珍しくイオがエロくありませんねえ……。そういうの期待
していた読者さまにはがっかりですよ。

「あのさあ、貴方は俺をなんだと……。俺だって清纯な男の子だよ
！」

……なんか三角関係っぽくなってませんでした？

そうですね……チョコから考えると、「アリス　　ロキ　　イオ
アリス」的な感じで。

ロキが驚異的なまでにモテモテですね。

「こらちよつと待て！　「ロキ　　イオ」はやめる気色悪い！　つ
ーかこんな変態大っ嫌いだ！」

「そうよ！　何で私の方も「イオ　アリス」ってなってるの?!
“アリス>>越えられない壁>>イオ”の間違いでしょ！」

「えっ……あ、あの、アリスー……？」

はあはあ。なるほど……じゃもう一回。

“アリス　　？　　ロキ>>>越えられない壁>>>イオ”って感じ
ですか？

「なにそれ！　　というかそれただのロキアリじゃん！　　俺完全に蚊
帳の外じゃん！」

え………違ってますか？

「……………（、；、；）ウッ」

我が家に平等という観念はありません。より強い者が勝ち、より狡猾な者が多くを得ます。

具体例で言うと枝豆。枝豆は、皿に盛られた瞬間から勝負です。一人一握りずつがばつと持っていく、一心に食う。手前の枝豆がなくなったら即座にもう一握り持つてくる。

ひたすらそれを繰り返し、手が小さいからといって両手で持つていこうとした妹を詰り泣かせ、両親の怒号を無視し、ただただ枝豆を食べる。

まさにそれは、枝豆戦争

……

はい、嘘です。さすがに妹を泣かせてまでは取りません（・・）
どうも、お久しぶりです。今月に入ってからスイカバーとひときも離れられなくなった作者です。あ、まちがった。スイカバーの恋人です

今回はロキアリ&イオアリということで長くなりました……。予想外の長さで、予定していたフレアリが入らなかつた……。orz
ロキとイオというと清纯と不純ということで並べるとものすごい落差がついてしまふんじゃないかと心配してましたが、思ったよりもエロが少なくなりましたね……。

今回のメインテーマはロキくんをデレさせることです。せ、成功したでしょうか？わりと本編では言わないようなことまで言っちゃってますけど……。

しかし、イオくんの方は……。もうダメだこの子、病院へ送ろう。

えー、少しわかりづらかったと思うので簡単な補足をかいたときま
す。本文と照らし合わせてみて下さい。

【Part 1・チョコ】

イオがチョコを作り、ロキの作ったチョコに忍び込ませてアリスに
食べさせようとした

ロキ、怒りイオのチョコを食べた。アリス、ロキにチョコあげる

ロキ、イオにチョコを残す

アリス、イオにチョコをあげる

イオ、ロキの残したチョコを貰い食べる

【Part 2最後の謎の手紙】

イオの台詞 「 半分こ、か。懐かしいね……」

イオに名前が付けられる以前、イオとロキは美味しいケーキを貰
うと毎回半分こにしていた。

だがイオはロキにもっと食べさせたくて、自分が食べる分を減ら
した。

ロキはそれに対して怒り、半分こという協定を持ちだした。
それ以後、二人はずっとケーキを半分こに分けていた。

……って感じですよ。わかりにくくて申し訳ありませんorz

えー、ところでこの頃なんだかキャラ全員がイオに対して冷たい
ような気がするんですが……いいえ、違います。彼らはイオを嫌い
なわけではありません。

これは、彼らなりの愛なのです!!……………たぶんね。

第四幕 ミッドナイト・ラヴ（フレイム＋イオ＋アリス）

子どもが母親に等身大の人形をねだる声が聞こえる。

最初は泣いていた母親も、子供に大声で泣かれては買わざるを得なかった。

しばらくして子供と母親が手を繋いで店を出てくる。

母親の腕には、大きめのクマのぬいぐるみ。

はしゃぎながら小躍りで先を行く子供。

そんな彼の背中を苦笑しながらも愛おしげに見つめる母親。

微笑ましい光景であった。だがあくまでそれは“光景”であって、それ以上でもそれ以下でもない。他人の現実はそれ以外のものには成りえない。

僕は温かそうな母子を冷めた目で見送りながら、冷え切った腕をそつと摩った。

冬も終盤というのに、今夜はやけに冷え込む。町の西部に蔓延る捨て子たちなど、今夜で多くの凍死者が出るかもしれない。

「…………ルアを追ってきたはずなのに見失っちゃうなんてなあ…………」

今日の晚餐は絶対にウサギ鍋にしようと思って張り切ってたのに……………！

せつかくルアのために研いどいた鉞も、結局何を切り裂くでもなく僕の腕の中に収まってしまっている。さすがに目立つから大きめの赤いカバーをかけているので、周りには楽器か何かに見えている

のだろう。

しかも、しかもだ。僕はそつと、硬いブーツの上から足を撫でた。小さなため息は白く濁り空气中に霧散していく。

「あつれー、僕一人い？」

物思いに耽つてしていると、突然真横から甲高い声が聞こえた。僕は嫌々ながらもそちらを向く。

そこにいたのは、華美な装飾品を至る所につけた女二名だった。人間というよりも、安っぽい宝石の塊といったところだ。分厚い化粧のせいで目が普通の人間よりも倍近く大きくなっている。はつきり言つて、気持ち悪い。

おそらく20前半ぐらいの女は、くねくねと気味の悪い仕草をしながら僕に近寄つてきた。無遠慮に観察され、僕はあからさまに眉をしかめた。

くそ……っ。こんな状況じゃなければこんなゴミ屑……。

「すつごおーい、カワイー！ 目とかめっちゃでかくない?! 女の子みたあーい」

「こんなところに座つて、どうしたのー? お母さんとはぐれたあ?」

「きやははつ、そんなわけないつて! 僕、暇してんでしょ? よかったらおねえさん達と遊ばない?」

「可愛い系のイケメンだよねえ!。どこまで初めてなんだろー」

「……………失せる」

「きゃあーっ、失せるだつてえ! 怖あーい」

「バーカ、あんたが怖がらせてんのよ! もうちよつとソフトに誘

いなさいよねえ」

誘うのにソフトも何もあるか。僕は憂鬱気にため息をつくど、ブーツの外側の小さなポケットから、折り畳みナイフを取り出した。女たちはそれに気付かない。

こんな繁華街で騒ぎを起こしてしまうのは気が引けるが、これ以上付きまといてくるんなら仕方ない。殺そう。

僕には、その権限がある。

「……お前らは、上流階級の出じゃないんだな？」

「は……？」

「僕、何言つて……」

「そんなはずはない、か。僕の顔を知らない時点でパーティーに加える身分ではないというのも明らかだし、そもそも下品な雌豚の匂いがする。上流貴族に見せかけて男を釣る輩かな」

淡々と分析をし終え、くすりと笑う。化粧で白い顔から、さらに血の気が引いていく様が見ていて滑稽だった。

そつと一人の首筋に手を添え、隠し持っていたナイフの刃を出す。脅しだけで十分だった。切り裂かれてもいないのに断末魔のような悲鳴をあげた彼女らは、来た方向へと一目散に逃げていった。

悲鳴のせいで、周りの注目を浴びる。僕は冷たい目で群衆を一瞥すると、背後の壁に背中を預けた。

冷え切った空気は、残りの体力まで残酷に奪っていく。これ以上そとにいと、凍傷してしまうだろう。

さあ、これからどうしようか……。いつもは迎えに来てくれるはずのルアは、今自分から逃亡中だ。双子などは司令塔がないと全く役に立たない。

他に頼りは……。僕が城の連中に思いを巡らせ始めた、その時。

予想もしなかった声が耳朵を打った。

「…… フレイム様？」

「げっ。女王」

…… たぶんこの世界で嫌いなものを3つあげよと言われたら、
「ヒー」とこれとこれが入るだろう。

大っ嫌いな女に、目障りな男。それらが、恋人のように肩を並べて歩いていた。

「…… アリスにチエシヤ猫……。何でこんなところに……」

「あ、これはですね、明日もチョコを作ってほしいとこの変態野郎がうるさいので少しお買い物……。 ああ、具合悪そうですけど、大丈夫ですか？」

これが大丈夫そうに見えるか。そう詰ろつとした瞬間、ピリッと右足に鋭い痛みが走った。

大きな買い物袋を持ったアリスが心配そうに駆け寄ってくる。後ろからついてくるイオは、はつきり不満そうな顔をしていた。

「…… つう」

「ふ、フレイム様っ」

「右足の捻挫に左足の肉離れ。おまけに凍傷になりかけてんじゃん。何をどう行動したらこんなことになるんだか……」

イオは離れた位置から観察し、冷たく診断を下す。

何でこいつ、そんなことがわかるんだという疑問が頭をかすめた
が、すぐに納得する。そういえばこの男の本業は闇医者だったか……
…。

「……ルアを追ってたら、足を捻った。多少痛かったけど、我慢して走り続けたらこうなった」

「あは、ばっかじゃないの。痛みは身体の警告信号だよ？それを無視するなんて、白ウサギの教育に問題があるのかな」

……ルアからは確かに同じようなことを言われたが。そもそもこんな惨めな格好になっている根本の原因は、あの馬鹿男なのだ。

イオは冷めた瞳のまま楽しげに笑い、懐から両刃ナイフを取り出す。

「足が使い物にならずに、戦闘能力は半分以下。につくき女王陛下を討ち取る絶好のチャンスだよー」

迷いなく刃を首筋にあてられ、少し引かれる。冷たい感触の後、つうつと首を液体が流れる感触がした。

まあ、予想していた展開だ。逆の立場だったらもっと手早く相手を始末しただろう。ただムカつくのは、相手がこいつということだけ。猫には弱い相手をいたぶる傾向がある。きっとすぐには死なせてもらえないのだろう。

だが僕は、もう一人の存在をすっかり思考に入れてなかった。

覚悟を決め無駄な抵抗をやめた僕に対し、イオはどこか慈悲のある笑顔を向けた。

「大丈夫。俺はこれからアリスとデートするから、そんなに貴方に構っている暇はないの。すぐに始末してあげる」

「誰と、デートですって？」

僕でさえも戦慄するような、底冷えする恐ろしい声。僕とイオが

そちらを向くと同時に、何の前触れもなくナイフが叩き落とされた。ついでに隠し持っていた僕のナイフも足で蹴られ、遠くへと飛ばされる。

最強の男と称される二人の武器を同時に奪った女　　アリスは、まるで童話に出てくる赤鬼のようだった。

「イオつ、あんたねえ……！　弱ってる相手に危害を加えようだなんてどういうつもり？！　卑怯もいいところよ！　大体デートの約束なんてした記憶ないし！」

「……アリス貴女、絶対格闘家になれるよ。今の手捌き、見事でした……」
「確かに素人のチョップとは思えないね……」

思わず同意してしまい、たった今自分を殺そうとしていた男を見上げる。

「すごく不本意ではあるが、状況が状況だ……仕方ない。」

「おい、猫」

「ネコネコつてさつきからさあ。一応俺は人間の分類に入んの。そんなあなたもそこらへんの飼い猫みたいに呼ばないでよね」

「僕をおぶれ」

「あー、でも名前で呼ぶのだけはやめてね。貴女に名前を呼ばれるとか、寒気が　　は？」

「聞こえなかったか。僕をおぶって城まで連れていけ」

「はああっ?!　何で俺がっ!」

「アリスにそんな力があると思うか。心配するな、後ろから襲ったりはしないと約束する。移動する手段を失ってはこちらも不便だからな」

「あーそりゃ御親切にどうも……じゃないよっ！　何で俺が女王を運ばなきゃなんないのさ！」

「馬鹿か。此処にいと直凍死する」

「そこからへんで野垂れ死んでいいよっ！ 大歓迎だよ！」

やはりそう簡単に事は運ばないか……。顔を引き攣らせて喚くイオを煩わしげに睨み、僕は片足をそつと摩った。痺れて血の流れが堰き止められているのか、感覚が鈍い。正座の後のような痺れは、痛覚すらも薄くしてくれる気がした。

古びた壁に両手をつき、なんとか身体を持ち上げる。身体の重心を置いた左足に、燃えるような痛みが走った。

「ぐ……っ」

苦悶の悲鳴を押し殺し、硬い壁に爪を立てる。額にじつとりと浮かぶ脂汗を袖で乱暴に拭い、前方を見据える。普段だったら大したことのない道のりも、今は延々と続く針の道に思えた。

歯をきつく食いしめて痛みを堪えながら、右足を前に出す。手で壁の凸部分をしっかりと掴み、左足を素早く右足の前に出した。

捻った左足を庇いながらの歩き方は、ちよつとした衝撃でもバランスを壊してしまいそうだった。右足に必要な以上の負担がかかり、喉からこらえきれない呻き声が出る。

「ふ、フレイム様！ そんな足で……無茶です！」

焦った様子でおろおろするアリスが鬱陶しかった。

気に障る言動、頭に響く声、遠慮がちに差しのべてくる手

何もかもが、気に食わない。どうしてこんなに彼女個人が憎たらしいのか、理由はわからないがとにかく大嫌いなのだ。

アリスは手を貸そうかどうか迷っているようだった。視界の端に居座って、その黒い瞳に迷いの色を浮かべている。

僕は左横の彼女をきつく睨みつけると、口元に薄笑いを浮かべた。

痛みで意志とは関係なく、笑みが歪む。

「臆するくらいなら……最初から関わろうとするな。……僕を恐れ
ているのなら、逃げだせばいいだろう……？」

そう、その瞳。何よりもその瞳めが一番癢に障るのだ。

僕を臆する瞳。僕を恐れる瞳。僕を遠巻きにする瞳。……そんな
瞳で、僕を見るな。城の使用人たちはもちろん、あの馴れ馴れしい
双子たちでさえときどき僕のことをあの瞳で見た。

恐がられるくらいなら、最初から近づかない。拒絶されるくらい
なら、こちらから拒んでやる。そんなことを繰り返していたら、誰
も僕の中に踏み込むようなことはしなくなった。

それでいい。他人に警戒されて孤独を味わうくらいなら、最初か
ら何の助けも同情もなく一人であつたほうがましだ。

「フレイム様」

「だってさ、アリス。女王は一人で帰るっていつてんだからさ、ほ
つとごうよ」

アリスは、伸ばそうとしていた右手をおずおずと引き戻した。悲
哀色に染まった瞳を伏せて、その拍子に黒髪が耳の上から垂れる。
イオは落ち込む彼女の腕を引っ張り、さらに促そうとしていた。
まったく、仲睦まじいことだ。僕は彼ら一対をちらりだけ見て、
もう一步を踏み出した。

一人で歩いて帰るしかない。一人で。

痛みが脳髄にまで響いて、全身の感覚が麻痺してくる。意識を失
うのも時間の問題と思えた。

ようやく、5歩目の右足を踏み出す。距離的にはまだ2メートル
も離れていないか……。僕は背後の視線を感じながら小さく自嘲し

た。

「あっ……」

「？！」

ドンツ……と。わずかな衝撃が脇腹から左足にかけて走る。平常の時であれば気にもしないような、本当に小さな衝撃であった。

実際、ぶつかってきた幼い少年は小さく一言「ごめんなさい」を告げると、振り向きもせず走り去ってしまった。だが、自分の方はそもいかない。

時間がスローモーションに流れる。支えを失った身体はあまりにもあっけなく崩れていった。膝をつく過程も飛ばして前に倒れていつてるのだろう、地面がやけに近くに見えた。

次にくる衝撃にこらえ、受け身を取るうとするがきつと間に合わない。僕は咄嗟に両目をきつく瞑った。

「フレイム様っ」

一瞬だけ、視界が暗くなり感覚も途切れる。その瞬間に何があったのかはよく把握できなかった。ただ、誰かが手首を強く掴みそのまま引つ張り上げる。

ぎりぎりのところで補助を得た僕は、その弾みで目を開けた。気付けば、もとの姿勢だ。右手で壁を触り、右足を庇うようにして重心を左に傾けている。

ただ、一つ違うのは　鼻をくすぐる、甘い花の香り。

「アリス……」

「肩、貸します。一緒にお城に帰りましょう」

お互いの髪が頬を擦るほど近くに、アリスの横顔はあった。その

瞳には恐怖も戸惑いも遠慮もなく、城に帰るといふ決意に爛々と輝いている。凶らずも僕はその黒の瞳に見惚れてしまった。

腕を肩に回され、しっかりと肩を組まされる。こうしているとまるで負傷し合った残留兵士のようだ。

正直言つて、愉快的な状況ではない。だがこれで両足にかかる負担が半分以上軽減されたことは悔しいながらも事実だ。

この香りは、アリスの使っているシャンプーの残り香だろうか。どんな香水でも嗅いだことのない、淡い仄かな香り。

「……土遊びでもしていたのかい？ 花の匂いがする」

「へ？ ああ、たぶんローズマリーだと思います。つい先刻までそこにいましたから……」

「ローズ……？ 薔薇の一種なの？」

「いえ、たぶん違うと思いますけど……。スノーフラワーでわかりますか？」

「……ああ、あの花か。薔薇以外の花にはあまり興味はないからね。だけど……まあ、悪くない香りだ」

「へへっ、そうでしょう？」

悪くないとたっただけでこの喜びよう。アリスの思いがけない子供っぽさを発見し、小さく笑う。

もちろん、アリスへの好感度がアップしたわけではなかった。たとえ何が起ころうとも僕がアリスに心を奪われることはないし、許すこともない。ただ、少しおかしかっただけだ。

だが笑い合うこの光景をそうとは受け取らない輩がいた。先程から背中に感じていた殺気がぶわりと強まる。

突然の浮遊感。

「うっ……」

「い、イオ?!」

アリスと僕の間には滑り込むようにして入ってきた腕が荒々しく僕の腰を掴み、まるで荷物のように持ち上げた。

足が地面につかないということと、唐突すぎる圧迫で一瞬目の前が白くなる。こ、この男……アリスに見えないように肘鉄を……。

イオはぐったりとする僕の身体を俵担ぎにし、こめかみに青筋を浮かべながら晴れやかに笑った。晴れやかに、といっても一般的にはそう見えるだけで僕には脅迫の笑顔となんら変わらないのだが。

「大変そうじゃん、女王。優しくて紳士的な俺が無償で運んであげるよ」

(何をぬけぬけと……っ！)

今まで野垂れ人でもいいと冷酷に見放していたこの男が、どうしてこうも早変わりをしたか。理由はなんとなく想像ついていた。

フレ임は首を回して、うろたえているアリスを視界にとらえる。

「あ、あの、イオ……その運び方もすごく負担が大きいと思う……」

「なーに言ってるんのアリス。女の子はお姫様抱っこ、野郎は俵担ぎって昔から相場が決まってるの」

僕はおぶって運べと言ったはずだが……その選択肢はそもそも存在しないのか。

何か文句を言おうとして息を吸い込むと、その服についた匂いに気がついた。アリスが付けていたのと全く同じ香り……いや、それよりも濃厚で土臭い。おそらく寝そべっていたのだらう、黒い服にはところどころ草がついていた。

イオはアリスの前をすいすいと進む。人ごみなどこの男には通用

しなかった。彼が人の中を掻い潜っているのではない、人が彼を避けているのだ。どんな人間も目を奪われる美貌。同時に、人の近寄りがたい美貌。……顔が整いすぎているというのもなかなか大変だな。

「誰にも縛られない猫が嫉妬か？ 随分とご執心のようだな」
「黙りなよ」

5メートル後ろで必死に追いつこうとしているアリスに聞かれないうちに、僕はそつと彼の耳元に囁いた。

間髪いれず低い返事が返ってくる。どうやら相当不機嫌らしい。その顔を想像するだけで笑いがこみあげてきた。

「そんなに僕がアリスに触れるのがお気に召さなかったか」
「ああ、気に入らないね。貴方なんかに触られた暁には綺麗なアリスが穢れちゃう」

ずいぶんな言いようだ。遠慮なく吐き出される毒に、それでも僕はくつくつと笑っていた。

どさりと固い椅子の上に下ろされ、両足に激痛が走る。もっと優しく扱えと文句を言おうとしたが、開口一番に飛び出してきたのは悲鳴だった。

心配そうに様子を見ていたアリスが慌てて救急箱を探しに行く。深夜に限りなく近い今の時間帯には、今いる部屋以外どこも真っ暗だ。

「だ、大丈夫ですかフレイム様……っ」

「ッ……大したことない。あまり騒がないでくれるかな、城の者が起きてしまう」

アリスがもたもたしている間に、イオが柵の上から応急処置用の包帯を見つけ出した。

何をするかと思えば、ツンときつい匂いのするそれを大胆に伸ばし始める。僕は仏頂面で僕の足に包帯を巻くイオを見ていた。さすがプロ、手際が比べ物にならない。

「よし、これでとりあえずはオツケー。後は手と足が凍傷になりかかっているからお湯であったためしておくことと、あんま無理して歩かないこと。わかった？」

「あ、ああ……」

こいつが優しいなんて……気持ち悪い。

僕は綺麗に処置を施された両足とイオの顔とを交互に見た。その視線に気付いたイオは、さらに眉間のしわを深める。髪に黒いペンキをかけてしまえばロキと見間違えてしまうだろう。

「言つとくけど。俺が治療しなきゃお節介なアリスが不器用なのに包帯巻こうとするでしょ？俺のアリスに一瞬でも触れる権利、貴方にはないから」

「ぶ、不器用で悪かったわね！」

なるほど……これもすべて歪んだ独占欲の賜物か。そう思うと、一抹の不安が僕の心に芽生えた。

イオとは本格的にはないが、アリスがくる前から殺り合っていた仲だ。この男がどんなに狡猾でしぶといのかも熟知している。

その彼が……こんなにも執着する女、か。絶対にならないと誓っているのだが、いつかは自分も彼女に傾いてしまうのかもしれない。最も、僕の愛は鎖の愛だ。籠の中に縛りつけて、白い翼を筆り取ってやる。何があっても逃げられないようにしておかないと安心できないたちなのだ。

或いはアリスも、僕のような人間に愛されなくて幸せかもしれない。

「さて、後始末も済んだし。アリス、改めて出かけようよ！」

「出かけるって……もう11時過ぎてんじゃない。こんな時間に出たら補導されちゃうよ？」

「ホドウ？何それ可愛いの」

「そっか、この世界に法律を求める私が馬鹿だったわ……」

「ってことで行こうよ！」

「おい、チエシヤ猫」

交際の邪魔をするつもりはないが、目の前でイチャイチャされるのは気分が悪くなる。げっそりと遮ると、イオにきつく睨まれた。

イオはアリスに抱きつきながら警戒するように耳を立てる。こうしてみるとなるほど確かに猫だ。どこまでも可愛げのない猫。

「何。もう用事はすんだでしょ、気軽に呼び付けないでよね。俺は貴方のペットでも何でもないんだから」

「誰が君みたいな駄猫を愛玩するんだ。頼みがある」

「はあ？ 冗談。一切聞くつもりはないね」

「それが君の故郷　西部地方の事でもか」

すうつと金色の瞳が細くなる。体中から殺気を発散させる彼をじとりと睨みつけ、僕はため息をついた。

足が痛む。

「今年はこの寒さだ、西部地方では餓死者と凍死者が大勢出るだろう。今双子が布と食糧の供給に回っている。風の噂によれば帽子屋も一時的に孤児を匿っているそうだ。……お前も奴らと同じ西部地方で多少の情があるなら、手伝いにいけ」

「情、ねえ……。貴方にそんなこと説教されるなんて、夢にも思わなかったよ」

「説教じゃない、これは命令だ」

「命令？ ははっ、俺が貴方の命令を受ける義理なんてどこにあるの。白ウサギのように“カード”に縛られているわけでもないし、双子のように貴方に救われたわけでもない」

「……国民は女王の命令を聞くものだ」

「あーヤダヤダ。そう言うのってさ、なんか堅っ苦しくない？ 命令とか情とかさ、馬鹿みたい。何者にも縛られない存在、それが“おれチエシヤ猫”なんだからさ」

言葉を交わして改めてわかる、この男の面倒さ。こねている理屈がいちいち正論なのだ。

僕は無意識のうちに奥歯を噛み締めていた。

遊戯チエスがいつも規律ルールどおりに進むわけでもないというのを思い知ら

される。反則するのがこの男の役目とはいえ、その理不尽さに身体が熱くなった。

言いようのない怒りが身を焦がす。僕は素早く袖の中から暗器を出す、その切っ先をイオの顔に向けた。

イオは予想していた展開というように冷たい目をしていた。

「やめとけば？ 今度は俺、容赦しないよ」

今襲われたら、間違いなく殺されるだろう。それがわかっているゆえに、フレイムはそれ以上動けなかった。

その時 盤が、ひっくり返される。

「イオ」

「はえ？ んぎゃあっ?!」

突然の事態に、僕もイオも状況を把握できなかった。この場で冷静に把握しているのと言えば、約一名しか存在しないだろう。

イオの長い尻尾を強く引っ張り、腰を抜かす彼に冷たい視線を向けるアリス以外は。

「人が黙って見てれば……っ！ もういい、フレイム様！ こんな役立たず気にしないで下さい！ 私が代わりに行きます！」

……は？

恐らく今日初めて、イオと心が繋がった。ガッツを決めながら正義感に燃える少女を僕は座りながら、イオは床に倒れながら呆然と見上げる。

規格外にもほどがある。今の会話の流れからどうやってたらそうなるんだ……?!

「や、役立たずって……アリス……」

「だってそうじゃない。フレイル様がこんなに可愛らしくお願いしてんのにグダグダくだらないことを並べ立てて断るなんて。懐の狭さにびつくりよ!」

「ちょっと待て。いつ僕が可愛らしくお願いしたって?」

「と・に・か・く! 西に行つてディーとダムに会えばいいんですね?」

「そ、そうだが……。どこにいるかわからないだろう? チェシャ猫のように鼻が利くわけでもないし……」

「気合いで探します!」

「アリス、あそこは危ないって! 女の子一人で行くなんて襲つて下さいと言つてるような……」

「あんだと一緒にいるよりかはマシッ!」

「あう……」

……あのチェシャ猫が。散々嫌味と理屈をこねてマシンガントウクをするあのチェシャ猫が。身体の成分5割はエロで3割は皮肉で2割はやつぱりエロでできているんじゃないかとされているあのチェシャ猫が。

……しょぼくれている。

この時、僕は計り知れない恐怖をアリスに感じた。

「それとも何? 私のかわりにあんだが行つてくれるわけ?」

「う……で、でも俺にはそんな義理……」

「居候してるだけでも数えきれない恩があるでしょうが!」

「い、行つてきます!」

……す……。怒声に追われるようにして窓の外に身を躍らせる

イオを呆然と眺めながら、僕は小さく呟いた。

アリスはまだむっとした顔でパンパンと手を叩いている。こちらをぎろりと睨まれて、僕は思わず息を呑んだ。

しかし彼女の方は睨んだつもりではないらしい。眉尻を下げてひどく優しい面持ちになる。

「ほんとにごめんなさい、フレイム様。足が痛いのにあのバカは…

…」

「……………なんで」

「え？」

「なんで君は、僕をそんなにも気にかけるんだ」

ひどく弱々しい声だった。自分が想っている以上に衰弱しているのか。小さく舌を打つが、それだけのことでこのもやもやが振り払えるとは思えなかった。

この女が、わからない。なんだ、今の顔は。なんで敵である僕にそんな顔を見せる。

そんな　　母親のような顔を。

街中で見送った、クマのぬいぐるみを抱いた子供と、そしてその母親。一瞬だけ、彼女の顔がその母親の顔に重なった。

「……………っ、僕はもう、何もできない子供じゃないんだ……………っ。いちいち口出しするな！」

彼女の顔が途端に曇り、わずかな罪悪感が胸を締め付ける。

わかっている、こんなのはあまりにも失礼じゃないか。先刻も今も、手を貸してくれたのは彼女だ。それを欲したのは自分ではないが、心の奥では誰かが助けてくれると期待していたのに……………。

いつまでも子供な自分に、吐き気がする。結局自分は、すべてを失ったあの日から何も成長していない。

「 謝りませんよ」

静かな言葉に、僕ははっとしてアリスを見た。

怒るでもなく、悲しむでもなく 彼女は微笑んでいた。あま
りにも静かで穏やかな笑みを向けられた僕は戸惑う。

なんだ？ 何を考えている？

「なん、だと」

「フレイム様を心配したことについては、一切謝るつもりがないっ
てことです。まあ、確かに私が勝手にやったことですし、フレイム
様は不快に感じたかもしれないかもしれませんが……」

一拍置いて、アリスは二カツと明るく笑った。

どうしてだろう……僕にはその笑顔が一瞬、夜空に浮かぶ太陽の
ように見えたんだ。

「悪いことをしたなんてこれっぽっちも思ってませんから」

物心つく前から、母親とはくつきり一線を引かれていた。名前を
呼ばれることもないし、笑顔を向けられることもない。他の兄妹
には「優しい母」でも、自分にとっては「他人」でしかなかった。

アリスは躊躇い無く僕の頭に手を伸ばすと、優しく撫でてきた。
僕の足の自由が利かないと油断しているのか、いつもよりもずっと
大胆だ。

アリスは嫌いだ。彼女を見るたびに、どうしてか母上のことを思
い返した。ずっと欲していたのに手に入らなかったものが、すぐそ
こにあるような気がしてしまう。

手が、届くような気がしてしまう。

「きゃっ……」

アリスの声で、僕は我に返った。

その瞬間、僕は驚愕する。何で僕は……何で僕はアリスに抱きついているんだ？！

慌てて突き飛ばそうと思っても、身体が上手く動かない。足の痛みが腕にまで来てるのか？馬鹿な……っ。

だとしたら

離れないのは、心か。

「……し……け」

「フレイム様……？」

「もう少しだけ……このままがいい……」

消え入りそうな言葉が、アリスの首筋にかかる。縋るように服をきつく握る僕の手を感じながら、アリスは瞼を閉じた。

きつい姿勢で足が痛む。でもそれ以上に、胸がずきずきと痛んでいた。心の傷は化膿して、いつまでたっても僕を苦しめる。

だけどころして　ほんの少しの優しさに触れていると、その傷を忘れられる気がした。

「もう、落ち着きましたか？」

「……ああ。悪かったね」

僕は小さく息を吐き、彼女をそつと放した。時間にしてみればそれほど長くはなかったが、一気に夜が更けてしまった気がする。ルアがいたらさつさと寝なさいと説教されているころだろう。

再びソファ―に身を鎮めてアリスを見ると、アリスは先程と全く同じ優しい笑顔で僕を見ていた。同じといっても、心なしか頬が赤らんでいる気がする。

「……そのだらしない顔をどうにかしなよ。顔がニヤニヤしているよ」

「あつ、す、すみません。フレ임様があまりに可愛らしかったもので……」

「チェシャ猫はともかく、君だったら簡単に殺せる気がするんだけど？」

「じ、ごめんなさい……出しゃばりました……」

先程は謝らないと言っていたのに、今回はあっさり謝罪するのか。急におたおたし始める彼女を見て、僕はくすりと小さく笑う。

アリスはそれだけのことなのに嬉しそうに笑った。ちょっとバカっぽい。

「フレ임様、お腹すいてませんか？ 厨房を借りられるなら何かお作りしますけど……」

「僕は一流のものしか口にしない。それに、厨房は空いてるが冷蔵庫には鍵がかかっている」

「そ、そうですか……」

「……何でそんなにしょぼくれるんだ。そんなに料理がしたかったのか？」

「キッチンは借りられるんだ。確かチョコレートは買ってあるんだろっ？ それを使えばいいじゃないか」

「そ、そうですね！ じゃあホットチョコで構いませんか？」

「……食べたことがないから何とも言えない」

「う、ごめんなさい……」

「……美味しく作れよ」

「は、はいっ！」

「……なんなんだ、この女はまったく……」。

喜び勇んで厨房の方へ走っていく背中を見ながら、僕は深々とため息をついた。

あのイオを真っ向から怒鳴りつける女。母親のように優しい笑顔を見せたかと思えば、子供のように無邪気な笑顔を浮かべる。

もしかしたら、自分ももうすでに彼女に振り回される一人なのかもしれない。そう考えるとどうにも憂鬱だった。

そして次の瞬間憂鬱の種が2つ　いや、3つに増える。

「フレイム様っ！」

重なる声が耳に届くのと同時に、突然視界が暗くなった。息もできなくなり、肺が圧迫される。

何の郷愁かと思ひ夢中で腕を振りまわすと、ようやく視界に光が

入った。そこで初めて、頭部をきつく抱きしめられていたのだと気付く。

抱きしめていた犯人は二人。どちらも同じ顔で 比喩ではなくそのままの意味で、同じ顔で心配そうにこちらを覗き込んできた。

「フレイム様、倒れたってほんと?！」

「足を怪我したって……うわ、ほんとにぐるぐる巻き!」

「デュー、ダム……どうして」

デューとダムはこの時期の夜、二人一緒にスラム街に出かけるはずだ。城に貯蓄している食糧をくすねて、貧乏な人々に配る。

義賊まがいなことを許可しているのは、僕自身だった。あそこの治安がどんなに悪いのかも、そしてこの双子がどれだけあそこに肩入れしているのかもよく知っている。

1年や2年じゃどうにもならない西部地方の治安も、彼らの明るい笑顔と温かい食事で心なしか良くなってきている気がした。二人とも毎年それを嬉しそうに語る。

毎年の行事をほっぽり出して、どうして戻ってきた。

僕は今にも泣きそうな彼ら二人を不思議そうに見上げた。二人とも、息が上がっている。走ってきたのか……?

「先輩から話聞いたんだ! フレイム様、白ウサギを捕まえる途中で足怪我しちゃったんだろ?！」

「ごめんね、ごめんねフレイム様……っ! これからはずっと傍にいるからね! どんな時でも離れないから!」

「いや……デュー、心遣いはありがたいけどそれは遠慮しとくよ……」

この二人とずっと一緒にいるといつか窒息死してしまいそうだ。現にさつき死にかけたし。

僕は引き攣った笑みで二人を牽制すると、小さく息をついた。興奮したディーとダムはなかなか離れてくれそうもない。刺激しないようにこのままでいるしかないか……。

しかし……。ガタイのでかい二人にサンドイッチにされながら、僕はふと考えた。

あの猫は何でわざわざ僕のことを教えただ……？

「でも先輩って意外と親切なんだなあ……。ここは俺がやつとくからさつさと城にいけ、だつてさ」

「ねー、なんかすつごく不機嫌そうな顔してたけど、優しくて気持ち悪かった」

(……あ、そつか。僕とアリスを二人きりにさせたくなかったんだ) だから一番の恋愛障害となる双子をよこしたのか。妙に納得する。

「二人とも……僕なんか気にしないで仕事に戻っておいで。僕はもう大丈夫だから……」

「何言つてんだよ!!」「」

二人同時に怒鳴られ、思わず僕は身をすくめた。いつもは駒としか思っていない二人でも、足が使えない今では十分な脅威だ。

ぎゅうつとディーとダムに柔らかく抱きしめられ、僕はなすすべもなく力を抜く。先程のアリスとは違い、彼らは体温が高い。走ってきたから余計に暑苦しいはずだ。

だけど……どうしても、嫌いになれない。

「俺ら、すっごい心配したんだからな……っ。これ以上心配させんなよ……！」

「そっだよ、フレ임様！ 僕ら、フレ임様が大好きなんだ……。胸が、潰れるかと思った……っ」

(どうして、この子たちは……)

こんなにも無条件にこの僕を愛してくれるのだろうか？ 無邪気に、純粹に、ただ一回命を救われたという事実だけで こんなんにも愛をくれる。

息苦しいほどの愛。眩すぎて目をそむけなくなる尊敬の眼差し。嘲笑うのも躊躇うほどの信頼。 心地いいと思ったことな

んで、一度もない。だけど、いつの間にか当たり前となっていた。

もしかしたら。もしかしたら、僕の欲しかったものは

……

「フレ임様っ」

パンツと扉をたたき割るようにして、転がり込んでくる。僕は双子の腕の隙間からその来訪者を覗き、目を見開いた。

開いた目から涙がこぼれ落ちそうになり、慌てて閉じる。僕のよく知る心地よい声が、震えていた。

「よかった……無事だったんですね……」

一瞬だけ見た彼の姿は、笑ってしまうほどボロボロだった。きつと半分は一日中僕が追いかけたから。けどもう半分は……急いで駆け付けてきたから。

双子の腕がわずかに固くなる。相変わらず双子とこの男は仲が悪いようだ。

「トウアイドルが真っ青になって走っていく姿を見たものですから……何があったかと思いました。大事がないようで何よりです、フレイム様……」

「……っ……もとはといえっ、お前が逃げるからだろう！ 馬鹿ルア……っ」

アリスに双子、ルアまでもが。何でこんなに必死になっているんだ。馬鹿じゃないのか。

馬鹿、馬鹿と何度もルアを罵倒する僕は、ついに目を開けることができなかつた。きつと今日を開けて、優しく微笑む彼を見てしまえば、溜まっていたものがすべて吐き出されてしまう。

馬鹿といわれるたびにルアが優しい声で「はい」と頷く。双子もいつの間にか便乗してルアの悪口を言っていた。

アリスが大きめのカップを片手に帰ってくる。部屋で喧嘩をするルアと双子を見て驚くのは、数分後の話。

僕のために駆けつけてきてくれて、僕のために心配してくれる。

僕のために必死になってくれて、僕のために安心してくれる。

それがどんなに嬉しいことか。それがどんなに憧れていたことか。

僕がずっと欲しかったものは、すぐそばにあったのか

もしれない

……

ふー。ようやく最後の章、フレアリが終わりましたねえ。よかつたじゃないですかイオ、前回少なかったのでここでたくさん出させてもらいましたよ。

「これのどこがいいの?! 俺メチャクチャ嫌なキャラじゃん! これで俺のファンが減っちゃったらどうすんの!」

安心してください。いるから減るんです。ふっ……ほとんどお手紙を貰ったことのない僕に対しての嫌味ですかね、それは。

「そうじゃないけどさあ……。大体今回俺とアリスのイチャイチャが少ない! エロい俺がない! 俺からエロを抜いたら一体何が残んのさ!」

きつと塵ほども残らないでしょうね。

「そ、そんなにきつぱり肯定しちゃうの……?」

ところで女王の方はどうです? アリスはなんだか機嫌がよさそうですね。

「だってフレイル様がめっちゃ可愛いんですもの……っ！」

びりっ　びりびりびりっ

「ちょ、ちよつとフレイル様？！　なに台本破いちゃってんの？！」

「いや……内容が不快だったもんで」

「レーテ、フレイル様は大変お気に召さなかったそうです！　ごめんなさい、私は楽しかったです！」

まあ足が折れてたりイオに殺されかけたりと散々でしたもんね……。

では女王、このフレアリの中で一番不快だったことはなんですか？

「アリスと一緒にいたシーン全部」

「ふ、フレアリなのに……（；；；）ウッ」

夏休みの宿題終わってねえーっ!!

いえ、いいんです。この番外編が終われば私はそれで満足です。

鬼教師に怒鳴られようが夏休み明けのテストで追試になるうが、こちらを優先したいのです……orz

こんにちは、どうも作者です(´・・´)

夏も終盤ですね。皆さまはどうかこんな駄文なんかよりも宿題を優先させて下さい……。

ようやく番外編終了です！今回は5編という驚異的な長さでした。しかも真夏にバレンタイン(ワラワラ)

最後の華は我らがフレ임様が飾りました。この頃なぜか異様な人気を誇るフレ임様です。やはり悪役というものは代々愛されるものですね！

今回のフレアリは、結構以前に感想をいただいた支倉葉月様の意見を参考に書いてみました。

「フレ임様を癒せるのはアリスだけ」という意見だったのでちょっと意識してみたらこんなことに……。色々付属物が付いちやいましたディーとかタムとかルアとかが、こんなもんでしょうか(A；・・・)

感想を下さった支倉葉月様、改めてありがとうございます！

フレ임様は母親の愛から突き放されて育ってきました。だからこそ愛に貪欲なのですが、同時にすぐ傍にある愛に気付かないのです。

ルアを無理矢理そばに置いたり双子を駒と称したりするのはそう言うわけですね。

まあこういうと前女王が悪いように聞こえますが……彼女にも事情があったのは本編の通りです。

愛しているから故愛せなかった母親。愛が欲しかったのに愛を見つめる目を失ってしまった子供。

そう、これは壮絶なる愛の物語なのです……！！

……ま、冗談はここまでとして（；、）

最終的には全員集まって団欒という形になりました。まだアリスに母親を重ねてしまうフレイム様ですが、これから少しずつでも成長していつてほしいです。

たぶんどの過去編をかいてもフレイム様が一番可哀想なので……この子だけは幸せになってほしいと切に思います。

ま、イオくんには悪いことをしたけどね（悪気なし）

ただいま作者（天流希美）の「活動報告」にて、次回番外編のアンケートを取り行っています。

「帽子屋メンバー（レーテ、マルス、レスト）の中でこの人にやってもらいたい！」という要望がある方は、天流希美のユーザーページから「活動報告」のコメントに意見を寄せて下さい。

あなたの一票で次の被害者（ ）が決まる！

『この城のどこかに、“失クシモノ”は必ずある。いい？ アリスにとっても都合のいいことなんだから、大人しく、くれぐれも大人しく、お・と・な・し・く、この城に居てね』

それが、あのにつくきイオが残した最後の言葉だった。その後は疲れて寝てしまったのか記憶がブラックアウトしている。

ただ印象的だったのが、「大人しく」を3連続で言われたこと。

(何よ。それじゃあまるで私が手のつけられない暴れん坊みたいじゃない)

少しの不満と一抹の哀寂。それらを置き去りにして、私の日常は再び動き出す。はずだった。

「あらずううううっ……」

私は抱きつかれても縋りつかれても、決して目につけないことを心に決めていた。

何故かって？ もちろん、彼の株を下げないために決まってる。

ただでさえ泣き声が30分間継続して聞こえるだけで株が急降下しているのに、涙と鼻水でびしょぬれであろう泣き顔を見たらいくら美形でも許せない。

いや、美形だからこそ許せない。もつとしゃきつとしろ、しゃきつと！

「ルア……もうっ！ いい加減にして！」

「う、ううっ、ごめんなさい、ごめんなさいアリス……っ！ 僕が、僕がいたのにアリスの貞操を守れなかったなんて……！」

「だから何度も言っただけど……っ、別に何もされてないってば……！」

何かをされかけたのは事実だが、結果的に言えば無事そのものである。むしろ私はこの状況の方が気に食わない。

何で 何で私が朝っぱらから三人の男に泣きつかれにやならんのだ！

「姫さまごめんなさい！ あ、謝って許されることじゃないけどっ、ご、ごめん、な……」

「ちゃ、ちゃんとフレ임様に言えばよかった……姫さまは初めてなんだから手加減してよって……！」

「だから何もされてないっていつてんでしょ！ デイー、頼むから

危ない発言はやめて！」

涙の量で言えば確実にルア>ダム>ディーだろう。ディーはなんだかんだ言って泣きながらも楽しんでる風がある。

どうしてこうなったかといえば。もちろんそもそもの原因はフレイムにあるわけで。妃発言から始まり貞操略奪の危機に終わるまでの物語を、白ウサギおよび双子計3人はまだ根にもっているらしい。特にルアなどは私を最後まで守れなかったことを悔いていた。別に仕方のないことだったんだからいいのに……それにちょっとウザい。

「うっ、うっ、うっ……」

「ルア……もう泣かないですよ。必死に守ろうとしてくれたのはちゃんと伝わったんだから、ね？」

「うううう……は、はい……」

男子の涙を直に見るのは実に何年振りだろう。ようやく目をこすって涙を拭い始めたルアを見て、私はほっと溜息をつく。

意外なほどに涙腺が弱かったルアは、私が起きて早々泣きながら謝り始めた。床に額を擦りつけるようにして何度も謝る彼を見て、どんなに心が痛かったか。

大体、何もなかったのだ。本当に危ないところだったけど、イオが助けてくれたし……。それからなんだかんだ言っただけでパーティーを満喫しちゃったし……。その間ずっと心配させたと思う。

……うーん、罪悪感……。

「ね、今日は気晴らしに出かけましょ。この頃ずっとダンスの練習でこもりつきりだったじゃない」

私は目を真っ赤に腫らして俯くルアの肩をポンポンと叩いた。白

い耳がへたっている。やはり「僕が守る」といった反面手も足も出なかったことで、シヨックが大きいのだろうか。

何とかして慰めようとそんな提案を持ちだしたが、矢先食いついていたのは別の二人。

「姫さまお出かけするの？ 俺らもついてく！」

「僕らがいっぱい案内してあげるよ！」

……………このガキども。

「……さっきの涙はどこへ蒸発した」

「だって姫さま、いつまでもよくよくよしたって何も変わらないよ！」

「そうだよ！ 前向き前向き、ポジティブポジティブ！」

なるほど、私はたった今その言葉が嫌いになった。

とは言えこいつらの変わり身が早いのは、出会った当初からわかっていたことだ。手を叩きあってはしゃぎまわる二人を、私は憂鬱な心持で見ている。

「そうですね……僕もできればアリスにこの国をもっと知ってもらいたいです。ですが、残念ながら僕はこの城から出られません」

ルアのウサギ耳がますます垂れさがり、同情を誘う。私は彼の思惑にまんまと引っ掛かって目を潤ませた。

ルアにはルアの業務がある。女王補佐官としての仕事は、一度現場を見てみたが、並々ならぬものではなかった。

あの書類の中で今日も仕事をしなきゃなんないなんて……不憫すぎる。

「せめてフレ임様から外出の許可をもらえればいいのですが……」

「わかった！　じゃあ私貰ってくる！」

「アリス……ですが、相手はあのフレイル様ですよ？」

「大丈夫よ、昨日は散々迷惑を被ったんだし！　なんとかなる！」

此処は私が一肌脱ぎましょう！　半袖を肩の部分までたくしあげて、私は意気込んだ。視線を床に落としながらにやりとほくそ笑んだルアに気付かないまま、使命感を胸に部屋を出る。

後に残されるのは、仲の悪い一人と二人。自然、全員が素に戻った。

デイーは使い捨ての目薬をゴミ箱へ投げ、ダムは大きく欠伸をして涙をこぼす。ルアはというと先程までの殊勝な様子はどこへ行ったか、これから出かけるための準備体操をし始めた。

「……腹黒ウサギ。わざと姫さまに行かせただろ」

「そういう貴方達だって、アリスが何かしてくれると見込んでの演劇でしょう？　お互い様です」

「つかマジで大丈夫かな、姫さま。フレイル様、姫さまのこと嫌ってるんじゃないのか？」

「アリスだって建前上といっても妃です。あのクソガキといえども、そう簡単には断れないでしょう」

「ふーん……そんなもんかあ？」

「そんなものです。それに」

うつとりと、ルアは息を吐く。頬を染めるその様子は恋する乙女のように気色悪かったと、後の双子は語る。

「僕のために頑張ってくれるアリス、素敵ですから」

「……性悪」

三人の思惑を知ることなしに、私はフレイムの仕事場である執務室の前に来ていた。

途中何人もメイド服のお姉さんに会ったが、此処の人たちはものすごく物腰が柔らかい。私が迷ってしまつて道を聞くと、それはもう可愛らしい笑顔で丁寧に教えてくれるのだ。

私もそういうお淑やかさを見習わなければならぬ……のは十分にわかっている、が。

やはりノックもなしに叩きつけるようにして扉を開けてしまふのが私であつた。

「フレイム様！ 話があります！」

城のメイドさんが見たら真っ青になりそうな、慌たしい入り方扉を開いた音が静かな部屋に木霊した。

臨戦態勢は万全だ。さあ、どういつ罵倒が飛んでくる。嫌味か皮肉か、それとも一瞥するだけだった。

「…………あれ？」

反応がない。それどころか一切の音がこの部屋から消えている。私は不審に思い、ためしに中に入って見ることにした。床に散らばっている紙をそつとよけながら、散らかった部屋を少しずつ進む。それにしても意外だ。此処はフレイムだけではなくあのルアも使う部屋だというのに、整理整頓がされていない。最も、この紙の山を整理するのは苦難の技だと思うが。

「…………フレイム様？」

執務室の一番奥、女王の持ち物にしてはひどく質素で機能的な机がある。その机の上も、やはり紙の白で埋め尽くされていた。その中にぼつりと、赤一点。

フレイムは、頬を机に押し付けるようにして眠っていた。いつも物騒なものを持っている手の近くには万年筆が転がっており、小さな染みを残している。

「寝て…………る？」

時々睫毛がピクリと動くだけで、それ以外の動向は窺えない。穏やかな寝息を聞きながら、私は用心深く一步一步進んだ。

疲れたら寝る。当り前のはずなのに、彼が寝ているという事実をどうしても受け入れられなかった。

何時でも警戒心を絶やさずに、こちらを睨めつける…………傷を負っ

た獣。決して心を許さない、それがフレイムだと思っていた。

「相当疲れてた……のよね」

業務中に寝てしまっぐらいだ、昨日の騒動を納めるのに相当の労力を費やしたのだろう。……まあ、自業自得とってしまうこともできるのだが。

私はこの機会にとしゃがみこんで、フレイムの顔を覗き込んだ。まだ幼さが残る綺麗な顔。白い肌が暗めの赤によく映えている。そして美形特有、長い睫毛。

……悔しくなんかないんだからねっ！

「……でも、まだ子供なんだよね……」

たぶん、私よりも下だ。レストのような珍現象さえ起こらなければ、きつと年相応か少し下ぐらいの背丈だろう。

普段の冷酷さが抜けた面立ちは、どこか幼く見える。いや

これが、本来の彼か。

私はそつと指を伸ばして、目にかかっていた前髪を除けた。指が少し触れてしまい、ぴくりと睫毛が動く。

唇がそつと開かれた時には心臓が止まるかと思った。

「……え……」

すうっと、白いほほに透明な雫が伝い落ちる。

「……は……うえ……」

10歳のときに兄妹をその手で奪うことを余儀なくされ、その後母を殺し血の味を知ってしまった少年。

冷たい仮面は涙を隠すためのもの。或いは、自分すらも騙すためのもの。

重厚な警戒は傷を隠すためのもの。或いは、これ以上の傷を防ぐためのもの。

この人は　　いや、この子は、本当は……誰を恨むこともできない、優しい子なのだ。

「……はは、うえ……っ」

それがたとえ、自分に愛を向けなかった母親であっても。

「う……ん……？」

フレームがようやく瞼を持ち上げたのは、正午を少し過ぎたころだった。部屋に熱がこもり、いつの間にか首筋にはうっすらと汗が浮かんでいいる。

しまった……… 仕事だったのにつ！ 悔やんでも失った時間は二度と戻らない。

無理な姿勢で寝ていたせいか、少し動いただけで強張った筋肉が痛んだ。フレームは無理に身体を起こそうとし、肩にかかっていたものに気付く。

それが肩からずり落ちる直前に、空で掴み取った。

「……タオルケット？」

どこの誰だ、こんな暑苦しいものをかけていったのは。

むっとするが、それをわざわざ口にするほど子供ではないと自負している。

それにしても……… 本当に誰なのだ？ 召使たちには緊急時以外誰もこの部屋に入るなと厳命してある。ルアだったら仕事を手伝うだろうし、双子なら部屋を荒らされていただろう。

フレームは訝しげにあたりを見渡し、そこで机の上に置いてあった手紙を見つけた。

他の豪華な手紙とは明らかに格が違う、折り紙のように折られた小さな手紙。手に取り、開く。

「……フレーム様へ。ルアをちょっと借りてきます。窓を開けたまま寝てたら風邪ひきますよ　　って何これ」

肝心の「お出かけ」の内容が書かれていない手紙は、フレームの苦悩を約2分増幅させただけに終わった。

はい、双子編の始まり始まり……。
今作ナンバー2のグロをご期待下さい。

こんにちは、作者です）。*）最近はや約転載とか言う便利な機能が追加されたらしくて……早速使用してます。ちなみにまだ夏休みは終わってないですよ）（なら宿題しろ）

今章は題名からわかるとおり、双子編となる予定です。……順調にいけば。

今回からepにつきの長さを何とかしよう（今度こそ！）わりと早くに切ってみました。目指せ、携帯版3ページ！

ですから今章、もしかしたらep20ぐらいまで行くかもしれませんが。予めご了承ください。

さて、冒頭から誰かが狂っているこのepですが……。

狂っているのは誰でしょう？ 片割れという言葉からわかるとおり、ディーかダムのうち一人です。

そして最後の文を見ると、片割れの「ダム」の名を呼んでいます。つてことは冒頭文はディーですね。

何故鏡を覗き込みながらなんでしょう？ 鏡に映っているのは「ディー」なはずなのに、「ダム」の名前を呼ぶなんておかしいですよな。

しかしディーの狂い加減よりも気になることが一つ。

ダム、君ってドジっ子？！（。口。；）

で、中盤は皆でワイワイやっています。ルア君がどんどんヘタレになってきてる（泣）だいぶ時間がたっていますが、女王に押し倒さ

れイオ&レストに救出されてから一夜が経っています。

次回から皆でお出かけです。ただし次回は少し説明が長くなるかもしれません。

お気に入り登録170人ありがとうございます！ 久しぶりにアクセス解析見てみたら50万PV突破……もうそろそろ桁が数えられなくなるw

感想・コメントなども嬉しく読ませていただいております！ 本当にスランプ状態のときには助かりました！

「此処……通常“ハートの城”は、この国のほぼ中央に位置します」

地図の上で白い手袋をつけた指先が動く。その先には確かに赤い丸があり、白い文字で CASTLE と書いてあった。

無事女王様の許可を取り（手紙を置いていただけ）仕度も整え（服着替えただけ）さあ行くぞとなった時、問題が発生した。

目的地が、ないのだ。

この頃城に引き籠りっぱなしの私は、この城の内部は知っていても外の世界はほとんど見たことがない。

無知無能で行くのは手間がかかる。その一言で、ルア教師による講座が開始した。

何故か両脇でデイーとダムまでもが真剣に地図を覗き込んでいる。

「そして城の周りをぐるっと囲むようにして広がるのが“一般人の街”。これは東西南北の4つに分けられ、東部北部西部を“女王”が、南部を“帽子屋”が統治しています。西部のさらに西にあるのが“チエシヤ猫の迷いの森”。森の中心に“帽子屋のお茶会場”があります。そして東部のさらに東に行くと“双子の門”があり、ここから入出国の手続きをします。ここまではいいですか？」

ルアは指で大きな円を描いた。ふむふむと双子が頷く。こいつら……まさか自国の地理を知らないわけじゃないよな？

私は眉をひそめて地図に手を伸ばした。WEST と書かれた街を囲む四角い線を指でなぞる。

「これは何？」

「街の境界線です。此処には白い壁があり、西部を囲っています」

「壁……西部だけに？」

「はい、理由を話すには全区域の治安を知っておかなければならぬのですが……聞きますか？」

顔を見なくてもわかる。明らかに、声のトーンが下がった。それとなく隠しているが……あまり話したい内容ではないらしい。

私は少し迷った末、慎重に頷いた。どこからか小さな溜息が聞こえる。

「東部は上流貴族、北部は中流貴族から庶民までが住んでいます。

人口は北部が最大ですね。この二つの地域ではほとんど取り締まるべき暴動は起きません。南部は住宅街とは別に、商店街が続いています」

「へえ……」

「そして西部。此処には様々なものが点在します。商店もありますし、貴族の屋敷も、庶民の通りもありますね。孤児院である“施設”も此処を中心にして立てられます」

「そ。俺ら西部の施設出身なんだぜ！」

「先輩や帽子屋さんもそこにいたんだよー」

「……僕も居ましたから……」

少しだけ寂しそうにルアが突っ込みを入れる。さらりと無視した双子は、ここぞとばかりに地図へ指を伸ばした。

西部地方のさらに西側を競うようにして指差す。

「俺らはもともと中流貴族なんだけどな、両親死んでからこの施設にきたんだ。で、施設が燃えてからはこっちのスラム街」

ダムの指がスツと動き、西部の中心で止まった。

スラム街 何度か小説で出てきた単語だ。意味はよくわからないが……裕福な街ではない、と思う。

だが、あくまで二人は笑顔を絶やさない。むしろ向かい側に膝をつくルアの顔の方が曇っているくらいだ。

「庶民以下のゴミだめたちが集まっているとこだよ。窃盗、殺人、売春、放火、人身売買……何でもありの天獄さ」

「疫病が流行つてからの西部地方はまるで隔離施設のようだったね。盗もつにも誰も何も持っていない……或いは地獄」

生粋の日本育ちである私には想像もできなかった。金持ちというほどの財産はないが、食に困ったことははっきり言っていない。

私は一瞬ダムの瞳に黒い影が走ったのを、見逃さなかった。それは恐怖か憎悪か……或いは悲しみか。影を晴らすようにして、ダムは明るい声をあげる。

「でもな、雨の中死にかけてた俺とディーをフレ임様が助けくれたんだ！」

「うん！ それからいっぱい御馳走作ってくれてね、ふかふかのベツドも用意してくれたんだよ」

「おっきな部屋もくれたしな！」

「この制服も用意してくれたんだよね！」

「フレ임様最高！」

「フレ임様大好き！」

「……料理を作ったのもベッドメイクをしたのも部屋と服の手配を

したのも全部僕ですけどね……」

ルアの咳きはまるで空気のように無視された。畜生、一瞬不憫で抱きしめそうになっちまったぜ……。きゃいきゃいと騒ぎ始める二人に背を向け、ルアは何事もなかったかのように話を続けた。

「そんなこともあつて暴動が続いたので、先代女王が壁を作りました。東部北部に乗り込まんとする勢いでしたからね、仕方のない犠牲です」

「仕方ないって……そう簡単に割り切つていいの？」

「いいんだよ、姫さま。もう過去のことだし」

「今はだいが治安も良くなつてるしね」

「フレйм様もすつごく頑張つて治安改善を目指してるし！」

「その気持ちだけで嬉しいよ」

「フレйм様優しいよな！」

「あの人のおかげで僕ら生きてるしね！」

「……西部地方の仕事は全部僕に回ってくるんですが……」

……ルア、あんたいろいろ苦労してんのね。

影で努力を続けながらも全く気付かれないルアの姿に涙しながら、私は双子の方を見た。

お互いの肩を叩きながら、相変わらず能天気には笑っている。ふざけてルアをおちよくり、大人げのないルアは顔を真っ赤にして激昂していた。

ルアと双子は、同じ施設にいたのだろうか。だとするとかなりの時間を共に過ごしたことになる。

いつも中の悪い一人と二人だが、案外そこには固い信頼関係が……

「待ちなさいトウーイドル！ 今日こそはその生意気な舌を引っこ抜いてやりますっ！」

……………あると思ったけど実はないのかもしれない。

「一通り説明が終わったところで……。アリス、どこへ行きたいですか？」

「説明というよりも後半は追いかけてこだったけどね……」

それも銃と斧同伴の。広いとはいえ、この城だって屋内だ。そんなところで殺気立ち始めた彼らには一喝とゲンコツをお見舞いしてやった。

きつとあの場で止めておかなければ美しい城のあちこちが破壊されていただろう。考えるだけで空恐ろしい。惨状を目の当たりにした時のフレ임様の反応も恐ろしい。

「そうね……別に私はどこでも……」

「南部地方がいい!」

「貴方がたに聞いた覚えはありません」

この大人……笑顔で突っぱねやがった。先程のお返しだろうか、額にはうつすらと青筋が浮かんでいる。

先程の熱が再発したのか、双子とルアの間で青い火花がパチパチはじけ始めた。こいつら……もしかして精神年齢同年代か？

「……今日のところは南部地方にしましょう」

「アリスっ!」

「やったね! 姫さま大好きっ!」

「ザマーみる白ウサギ! へへっ」

精神年齢的に言えば6歳ぐらいか。これぐらいが一番生意気で可愛い時よね。

まったく同じ顔で得意げになる二人に苦笑しながら、私はルアの方へ視線を投げた。いつの間にかあちらのペースに乗せられているのか、こっちまで子供のようにむくれている。

「大人でしょ、妥協しなさい」

「……………別に、アリスがいいのなら僕に異論はありません」

嘘つけ。今思いつきし不満そうな顔したくせに。

苦虫を噛み潰したような顔の横で、私は小さくため息をついた。やっぱり双子とルアを一緒にするんじゃないかった。毎回こんなやり取りを交わされちゃあこっちの精神が持たない。

こんな時こそ、ロキにそばにいてほしかった。

……いや、彼ならもつとうまく諫められるというわけではないが、少なくとも双子の興味はこちらに注がれる。

それに何より、彼の隣はひどく安心できた。おそらく一番初めに続った相手として体に刻み込まれているのだらう、知らない内に絶大な信頼を彼に寄せていた。

だけど。

森での告白が脳裏に描き出され、私は効果音が付きそうなほど急速に頬を赤らめた。

押し黙っていたルアが不審そうにこちらに視線を向ける。ついでにイチャイチャしていた双子にも気付かれた。

「どうしたんです、アリス。そんなに顔を赤くして」

「姫さま大丈夫？ 風邪か？」

「風邪ならネギを首に巻くといいんだって」

「だ、大丈夫よ……。そんなに心配しないで……」

一気に詰め寄ってきた三人を手で制しながら、私は軽く眩暈を覚えた。もちろんその原因は風邪などではなく、先程の騒動のせいなのだが。

張本人たちはそんなことも知らず、ただ心配そうな目を私に向ける。

どうして……どうしてこの人は、私なんかを気にかけるのだらう。自虐的発想でも何でもなく、純粹に疑問だった。

だってなにしろ、この美貌である。女の子なんて選り取り見取りのはずだ。

到底釣り合うはずのない私の手を取り、気を引こうとするのは何故？ 何故誰もが私なんかを……好きになってしまうの。

まるでそれは、ある種の呪縛のように。

「……………どうして?」

「アリス?」

「どうして、皆そんなに私を気にかけてくれるの?」

「気にかけるって……………好きだからに決まってるじゃないですか」

「そんなあっさり……………じゃあどうしてみんなが“アリス”を好きなの」

少し語気を荒くして言えば、冗談で言っているわけではないと伝わる。ルアは緩めて居た頬を引き締めて、急に神妙な顔をした。

彼が口元に手を当てる時は言葉を探している時か迷っている時だ。今回は前者だった。

「どうしてと聞かれますと、複雑なんです……………。ではこの国のシステムをお話ししましょう。アリス、僕の顔をどう思います?」

「どうって……………普通に美形だと思うんだけど」

「そうですね、僕も美形だと思います」

……………自慢か。

「僕だけではありません。フレイム様もこの双子も、帽子屋たちも……………“カードもち”は総じて美形、それも男性が多いです。これが何故だかわかりますか?」

ルアはきよとんとしている双子の顔を順々に指差していく。そうしてその指はそのまま、私の方へ向けられた。

「“アリス(あなた)”を惹き寄せるためです」

「私……………?」

確かに昨日のパーティーでわかったのだが、誰もがこいつらのような美形というわけではなかった。太っている人もいたし禿げている人もいたし……元の世界と大して変わらない。

なのに、彼らだけは別格に引き立っている。それはいつも一緒にいる私でさえ触れることを戸惑うほどだ。

「いずれは帰る愛しい“アリス”。楽しい“ゲーム”は一夜の夢ですが、この世界は……僕らは、その事実を容易に受け入れることができません。ですから、“アリス”をしきりに誘惑するんです。恋に溺れさせて元の世界を忘れてくれれば“アリス”だって帰ろうとはしないでしよう？」

「誘惑つて……なんか急に生々しくなってきたわね……」

「あくまでシステムですから。そういうわけで、“アリス”と接点の多い僕らはそれなりの容姿を持っているわけです」

そこでルアは一息ついた。説明しすぎて疲れたのだろう、額にうつすらと汗が浮かんでいる。

少し湿った前髪をかきあげる仕草は、不思議なほど色っぽい。なるほど……確かにこれは普通の女性だったら落ちるわ。

「僕らが“アリス”に恋がれ、異様なほどの執着を見せるのも同じ理由ですよ。全ては美しい蝶アリスを狂わせこの花畑せかいに閉じ込めておくための、甘い媚薬かおり。アリスだって貴女のことを忌み嫌う世界になんか長居したくないでしょう？」

「そりゃあ、まあ……」

だからと言ってこんなに変態の居る世界もどうかと思うけど。それ以前に、法律もなく殺人が自由化している世界なんて真つ平御免だ。

頭の中ではそう罵りながらも、彼らを邪険にしないのは……きつと、私も彼らの毒牙にかかってしまっているのだろう。こうやってじっと見つめられると身体が麻痺して目が逸らせなくなる。

「歴代の“カードもち”たちも同じようにしてきました。そしてほとんどの“アリス”がこの世界に留まっている。此処で暮らし、此処で恋に落ち、此処で永遠を誓い、此処で老いていく。そういう幸せもあるのだということを、忘れないで下さい」

指が重なり、手袋に覆われた手の平の熱を甲で感じる。私はそれ以上の侵入を拒むように、床の上でぎゅっと拳を握りしめた。

此処に、私を必要としてくれる人がいる。此処に、私を必要としてくれる世界がある。

それがどんなに望んでいたことが、どんなに幸福なことが……わからないわけではない。

手を伸ばせば届きそうなのに、頭の中で警鐘が鳴る。

私の中で鳴り響くのは誰の声？ 母さん？ お祖母ちゃん？ それとも 誰。

「……帰らないと」

甘い蜜に酔いしれて、帰り道を失くしてしまう前に。

「姫さま、こっちこっち！」

右手をダムに、左手をデイーに引かれ、私は小走りを強いられる。精力あふれるこの二人は先程からずっとこの調子だった。後ろで同じペースでついてくるルアなどは、しきりにため息を繰り返している。

「何で僕がこんな……アリスと二人でデートしたかったです……」

まあ、今回は同意しなくてもない。せつかく初めての街に出てきているというのに、双子ときたら自分の興味ばかり優先させて私を急かすのだ。景色も何もあつたもんじゃない。それでも、カラフルな色取りの町並みはいやでも目につくが。

一言で言えば、メルヘンだった。

派手……ではないが、地味という言葉の反義語である気がする。要するに地味とは到底思わない色　水色、ピンク、オレンジなどをこちゃませに使っているのだ。もちろんそこにセンスなどありはしない。ただ自分の存在を誇張するだけの店々が連なっていた。

「トウアイドル！ 先程から武器屋ばかり……女の子を連れてくるようなところではないでしょう！」

そう、このけばけばしい街並み……立ち並ぶ商店は、所謂闇市と呼ばれるものばかりだった。

可愛い制服を着た女の方が自分の背ほどもある鎌を持って笑っている。

……… 武器屋、そう……… 武器屋だものね………。

「見て、この剣！ かつけえ………」

「こつちのナイフ10式もすごいよ！」

「ツわ、すっごい切れ味………」

「ダム、またこの間みたいに指切らないでね」

「大丈夫だつて！ 心配性だなあ、ディーは」

「そうかなあ………」

いくら居心地が悪かったって、こんなにも無邪気にはしゃぐこいつらにそう告げるわけにはいかない。この子たちにとって武器とは新しい玩具同然なのだ。たとえ私にはどんなに禍々しいものに見えても。

ギラギラと光る凶器たちを純粋な瞳で見る双子に、私は深くため息をつく。

この光景だけでどれだけ神経を削られることが……。

「ごめん、ルア……… 私ちよつと疲れた………」

「大丈夫ですか、アリス。それじゃあ、ここを抜けると中央広場があるんでそこで休んでいきましょう」

「……… ルアは？」

「もちろん、アリスにお供させていただきます」

満面の笑み。こんな時だけこの人が自分より年上ということを知れる。

なんだかんだ言っただけで自分も楽しんでるじゃない。思わず苦笑すると、その笑みをなんと取ったのか彼は嬉しそうに耳を揺らした。

「あの二人はああなつてしまった以上、もう手をつけられません。僕たちだけで行つてましよう」

「まあ……そうかもね。なんか周りのこととか全然見えてないみたいだし……」

新調した武器を嬉しそうに振り回す馬鹿共約2名には、近寄りたくもないし話しかけたくもない。

できるだけ他人のふりをして通り過ぎると、後ろからルアが付いてきた。まばらに聞こえる靴の音から、彼が相当浮き足立っているのがわかる。

「アリス、これからどこ行きますか？ お食事？ イタリアンの店ならこの近くにありますが、そこに行きますか？」

「ちょ、ちよつと待つてよ。少し休んでいこうつて……」

「はいっ！ では30秒休んだら二人でデートしましょう！」

短いとか、何故にデートとか、ぶつ殺すぞこの野郎とか。何一つ言わせないまま、ルアは私の手を引き勝手に歩きだした。

ルアは基本礼儀正しい紳士だが、時々これでもかかってほど強引になる。こんな横暴さは主人似だろう。

小さな通りを抜け、目に入ってきたのは小さな広間だった。豪奢とはいえないまでも洒落た噴水が中央部分にあり、まばらに人波ができている。

ルアは私を噴水の縁に座らせると、優しく微笑んで頭を撫でた。

「此処で待つてて下さいね、今飲み物を持ってきます」

「あ、あのちよつと……」

超ダツシュ。逃げるように（いや、たぶん本人はそんなつもりは

なかったと思うが）走り去ったルアの背中を、私の手が虚しく追いかける。ルアは私の制止に気付くことなく飲み物を取りに行ってしまった。

あの冷静なルアが……ダッシュ。ちよっとシユールな絵かもしれない。

「……って一人かい」

周りはカップル、家族連れだというのに女一人残されるこの孤独感。溜息をついたとしてもやけにそれが響いて悲しくなるだけだ。

そういえば、一人になるなんて久しぶりな気がする。

いつも傍らには双子がいた。仕事はどうしたと怒鳴りたくなるほどべたべたされていると、今度はルアがやってくる。そうしていつも彼らで喧嘩するのだ。

そして　そんな彼らを呆れた目で見やる、猫耳の青年。日常のワンシーン。

「そういえば……ロキ、どこ行っちゃったんだろ……」

私は後ろで滔々と流れる噴水の水に指を浸した。思った以上の冷たさに身体が震える。

最後に彼に会ったのは、昨日の昼頃。今日の朝には、彼の影も匂いも……名残さえも、消えていた。

おそらくイオが城から逃亡してそれっきりなのだろうが、いつも傍にいる彼が此処にいないというのは少し不安になる。

（ん？ あれ、でも別にディーとダムがいなくても不安にはならないわよね……？）

もちろん普段はうるさい彼らが居なくなるのだから静かにはなる

だろうが、寂しいかと問われればノーだ。

双子だっていつも（ウザいほどに）一緒にいるのに、ロキとは違う。腑に落ちずに考え込んでいると、突然足の先に固いものが当たった。

「あ……」

爪先でゆっくりと転がる紅茶の瓶。落としたのだろうか、割れていないのが奇跡だ。

それを掴みあげようと腰を最大限まで曲げて腕を伸ばす。しかしそれよりも早く、白い手袋に覆われた手が瓶を掠め取った。

ゆったりと腰を上げながらも、お辞儀の後のような気品を漂わせている。片方の手は瓶を取りながら、もう片方の手は　　頭の上の黒いシルクハットを軽く押さえながら。

優しく、微笑む。

「お久しぶりです、アリス。と言っても昨日会ったばかりですが」

「レーテ……？　な、んでここに」

私の上に黒い影を落とすレーテは、そっと手を伸ばして私の頭を撫でた。そこに親愛以上の感情がないことに、小さな安心を覚える。

「買い物をしている途中で貴女とルアを見かけたんです。さすがに立场上ルアの前に顔を出すことはできませんからね、少し尾行をしてきたのですが……気に障りましたか？」

「そういうわけじゃないけど……」

全然気付かなかった。

あの耳の良いルアでさえも気付かなかったということは、レーテが相当の曲者かルアが有頂天になっていたかということだ。……ま、

両方だろうけど。

「でも、立場上って何？ ルアとは知りあいなんですよ？ だったら……」

「“帽子屋”と“女王”は対立しなければならない」

私の言葉を、レーテは素早く遮った。穏やかなのに冷酷な響き。冷酷なのに穏やかな言葉。

ゆつくりと広がった笑みには、どこか諦め交じりの悲しさが見え隠れしていた。

「それが“ルール”です。どんなに大切に想っていても、所詮彼は城の官吏、僕は帽子屋の筆頭。いつまでも仲良く、なんて僕らには無理だったんです」

頭を撫でていた手が下に降り、垂れていた髪を私の耳の後ろにかける。慰めるようなその仕草を、そっくりそのまま返してやりたかった。

言葉が出ない。掠れた声で、悲しげな瞳で、ぎこちない仕草で。それでも、無理に笑おうとする彼に、掛けるべき言葉が見つからない。

何か言いたそうに顔を歪めた私の耳に、予想外の方から声が入ってきた。

「おい、馬鹿レーテ」

それは、声。それは、言葉。それは 彼。

静かに呟かれた言葉は、それでも私の耳朶をしっかりと打った。わけもなく胸が引き千切れそうに痛くなる。

振り返りたい衝動。逃げ出したい欲動。
身体から力が抜けるような安堵。体中の筋肉がひきつれるような
緊張。

私は同義語でもあり反意語でもある感情に前と後ろを拘束され、
少しも動けなくなってしまうた。

音もなく、彼が背後を歩いてくる。彼がレーテの隣に立った時、
その黒髪にピンと空を仰ぐ寝癖を見つけた。一気に身体から力が抜
け、緊張が解ける。

アホ毛って……美形にアホ毛って……！

「……ロキ。あんたどこ行ってたの……とかなんとか聞かないから、
ちゃんと髪を梳かしなさい」

「……るせえ。これでも5分粘ったんだよバーカ」

出合い頭に寝癖を指摘されたのが気に食わなかったのか、ロキは
むっと口元を歪めた。その一つ一つの表情が、大した時間はなれて
いたわけでもないのに懐かしい。

彼はそれ以上は何も言わず、私から目をそらした。行き場を失く
した視線は、自然とレーテへと辿り着く。

「お前……俺に荷物押し付けて自分ばっか先行きやがって……」

「だって、僕の柔腕じゃあ折れてしまっしょう？」

「腰をくねらせんじゃねえよ気色悪い！自分で買った分ぐらい持
て！」

「なんて心の冷たい……マルスなら喜んで持って下さるのに……」

「俺をあの手と一緒にするな」

ひたすら嫌がる彼に無理矢理袋を押し付け、ロキは手ぶらになっ

た。

こういう光景を見ると、いくら大人びた彼らでも内面は子供なんだなと思ってしまう。

何やら重そうな荷物を持たされたレーテは、深々とため息をついた。ふと視線を下に落として地面を見る。

「ああ、そろそろお昼も過ぎましたね。それではアリス、僕はここら辺で失礼いたします。早く帰らないとお茶会に遅れてしまう」

「お茶会って……やる時間決まってたんだ」

「はい。何度やっても構いませんが、3時のお茶会だけは必須です」

「そうなんだ……あ、だから初めて会った時もやってたのね」

「ええ。と言ってもマルスとレストはお散歩中でしたが」

「遭難だったろ……」

ぼそりと呟かれたツツコミに反応することなく、レーテは甘いマスクをロキに向けた。

対してロキは、仏頂面だ。イオとロキもそうだが、レーテとロキもよくぞここまで正反対の性格と言えよう。

「ロキも一緒にどうですか？ 今日マルスもレストもないので、だれでも大歓迎です」

「いかねえよ。もともとアリス探して一緒に帰るつもりだったしな」

「そう……ですか。そうですね。では僕は一人さびしく紅茶を飲むとしまししょう」
アフタヌーンティー

ロキに冷たく断られ、レーテが少しだけ悲しそうな顔をする。

私はそんな彼を見てられなくて、切れかけていた会話を無理矢理つなげた。

「一人でもお茶会つてやらなきゃいけないの？」

「そうですね？ それが“ルール”ですから」

「あ、あの……っ。じゃあ私、今度遊びに行くね！ 一人で寂しくないように、ちゃんと行くから……っ」

……

時間がひどくゆっくりと動く。耳に残る雑踏、子どもの笑い声、風が吹き抜ける音。そのすべてが、どこか遠い。

レーテは、一瞬だけ驚いたように目を見開いた。長い睫毛が切なげに震える。

「そうですね。美味しい紅茶を用意して待ってます」

浮かべた微笑は、いつもの遠慮がちなものでも余所余所しいものでもなかった。

穏やか、というには少しきこちなく。無理に、というには少し綺麗すぎる。くすくすと声を押さえて笑う彼に、私はしばらくの間見惚れていた。

どこか清々しそうに笑うレーテを見て、ロキも少しだけ口の筋肉をゆるめる。

ようやく時の流れが正常に戻るころ、レーテは左手を小さく上げて背を向けていた。「それではまた」と言い残して去っていく背中に、暗い影はない。

髪を舞いあげるようにして、耳の後ろを一陣の風が舞った。

哀寂さびしいという言葉は甘いカラメルに包んで。

「冗談冗談というキャンデーの完成。」

孤独ひびという悲鳴は輝くシュガーをまぶせて。

微笑微笑というクッキーの完成。

無音だれもないという事実はふんわりホイップをのせて。

冷静冷静というケーキの完成。

ああ、でも。

やっぱり、紅茶だけは一人じゃ淹れられない。

「寂しくないように、ですか……」

誰もいない森の中心、木々から見捨てられた平地にお茶会場はある。

屋敷から少し離れてはいるものも、獣が迂闊に近づけるほどのところには設置していない。何かあれば使用人たちがすぐに駆けつける距離だった。建物の気配を察知しているのか、獣どころか野鳥一匹寄りつかなかった。

安全のためにとまって作ったこの場所が、今は寂びれた廃墟になっている。

全ては、ルアが絶縁を切りだしイオがレイズを手にかけたあの日から。

時折マルスとレストが此処に居座って騒いでいくものも、決して長くはない。元々冒険好きの彼らは、嵐のように乱入し、過ぎ去っ

ていった。

彼らの背中を見て、どれほど引き留めたいと思ったか。どれほど手を伸ばしたいと思ったか。

自分は、この虚無の空間から自由になりたいのか。それとも、誰かを此処に縛り付けておきたいのか。

「……バカですね。子供じゃないんですから、お留守番ぐらい一人でできますよ」

待ち焦がれる時間が、どんなに永くても。たとえ、二度と戻らない背中を追い求めていたとしても。

寂しくなんかない。

嘘。寂しいけど、ひとりなんかじゃない。

……嘘。ひとりだけど、誰もいないわけじゃ

……

哀寂。孤独。……無音。

不気味なほどに静かな空を、レーテはうんざりと仰ぐ。今まで当然と思つてやり過ごしてきたこの時間を、今はどうも持て余してしまっている。

「アリス……早く来ないですかねえ……」

また、長い長いお留守番ができた。

今度は少し、ほんの少しだけ、短い気がするけど

……

「だーから……っ！ ロキと会ったのは単なる偶然！ 別にあんたとの食事ほっぽって逃げたそうっという魂胆じゃ……」

「ひどいっ……ひどいですアリス！ 僕がいない間によりにもよってこんな猫と駆け落ちしようとするなんて……っ！」

「こんな猫って……イオじゃないんだからまともな方だと思っただけぞ」

私は小さくため息をついて、困り顔でルアの方を見た。

泣いてはいないものも、先程からずっと頬をふくらまして拗ねている。見た目は普通の成人男子のだが、童顔なせいで妙にその顔が似合っていた。

私の右横にはルア、左横にはロキがいて、私はちょうどサンドイツチにされている。

世間の女子から見たら鼻血噴出卒倒ものなのだろうが……何せこの二人だ。体中から発する殺気を隠せていない。

「というか、なんでこんなところに貴方がいるんですか。汚い猫は路地裏でゴミでも漁ってなさい」

「……キャンキャン騒ぐな。うぜえ」

「汚い猫はやはり言葉遣いも汚いんですね。僕らに近づかないで下さい、汚れがうつってしまっ」

「俺の言葉遣いがどうこうより、お前の性格をどうにかしたらどうだ？ 真っ黒に汚れてるぜ」

私の頭上で火花が飛び交う。こんな状態で一体どこにときめけというのだ。

早くも拳を構え始めている二人を両手で牽制しながら、私はきつい口調で言い放った。

「二人とも。こんな公衆の面前で喧嘩なんて始めたら、今後一切口きかないからね」

「う……すみません、アリス……」

「ちっ……何で邪魔すんだよ」

こういう時、ルアはひたすら従順だ。私が怒った顔をすればしょんぼりと頂垂れるし、困った顔をすれば首を傾げて一緒に悩んでくれる。たぶんすごく可愛いやつなんだと思う。

しかし問題はロキだ。自分の意に反したことを言われると、目に見えて不機嫌になる。やめてくれるだけいいが（これがイオだったら注意しても耳を貸さない）……。

「いい加減にしてよもう……。ディーやダムとははぐれちゃうし……」

ぐずるルアを必死で説得して、二人で食事に行くことになって、そしたら不機嫌になったロキを宥めて、結局三人で城に帰って食事をすることになって……。

そんなことをしてたらいつの間にかお昼を回っていた。もちろん、そこらへんで遊んでいた二人の姿は見つからない。

「どうしよう……先に帰っちゃったのかな……」

「あんな餓鬼、心配することありませんよアリス。迷子になったらとりあえず、仕事場に戻っているはずですから」

「仕事場？」

不満げに言うルアの顔を、私は訝しげに覗き込む。

始終私にくつつき、私「で」遊び、ロキをいじっていたあの二人が……仕事？

……想像できません。

「はい。仮にもあいつらは“門番”ですからね、“双子の門”に立つて侵入者を防いでいるはずです」

「ああ、そういえば……。えっと、確か東にある……？」

「そうです、よく覚えてますね。いい子いい子」

ニッコリと笑って私の頭を撫でてくるルアは、ひどく胡散臭い。

ちよっと馬鹿にされてる感じだ。

むつつりとする私は、その手を軽くはたこうとした。が、左から伸びてきた腕にそれを阻まれる。

「……おい」

腕はそのまま私の首に巻きつき、しめ上げるように左へと寄せられた。

もちろん首は締まる締まる。一瞬息の吸い方を忘れたくらいだ。いつになく不機嫌そうなロキは、腕を解いて私の襟首を持ち直すと、そのまま引きずるように歩いていった。

長い脚に必死についていきながら、あっという間にルアと距離を取られる。

「奴らを探すんだろ。さっさと行くぞ」

「な、何やってんですか！ その汚い手をアリスから放しなさい！」
「うるせえ」

ああもつめんどくさい。ほんとこのタッグめんどくさい。

いや、めんどくさい……どうしようも……。

「し、死ぬううう……」

ロキが青くなる私に気付いて、慌てて襟首を離したのは数分後のことだった。

「これが……門？」

私は呆然と、目の前に聳え立つ壁を見上げた。
たぶん、私がこの世界で見たどの建物よりも高い。一番近くで見れば、空と壁が繋がっているような幻覚さえ覚えるのだろう。

鈍色の壁は、東にも西にも延々と延びていた。果てがあるのかすらわからないが、ルアはこう言っていた。

壁は、この国をぐるりと囲んでいるのだ、と。

守るように。

それでいて、閉じ込めるように。

檻の中にただ一つ、楕円形を半分に切ったような形の大きな穴がある。

それが、“双子の門”らしかった。

「はい。フレイム様が貴女にまず最初に見せたかった、この国の現状がこの先にあります」

珍しく深刻そうに、ルアは眉を寄せる。古く、ボロボロになった壁に手をつき、いたわるようにそつと撫でた。

「先代女王が建築を命令したこの壁……。こんなところにも浸食は進んでいましたか」

「おい……どうなってんだよ、これ」

今まで一言も口を挟まなかったロキが、呆然と呟く。その瞳は信じられないとも言つように小刻みに揺れていた。

ただ事ではないと、私はその時初めて気付く。さっきまで喧嘩ば

かりしていた二人が急に黙りこんで俯いているのが、ただ事とは思えない。

「昔見た時はこんなじゃなかった。たった3年で風化がここまで進むわけないだろ！」

「怒鳴らないで下さい。異常事態というのは重々承知しています。だからこそ、“アリス”を迎えたんですから」

「私を……？」

『この世界はだんだん歪みに侵されてきている』

『この国をぐるりと囲む壁、そのすぐ先には砂漠がある。砂漠が大地を浸食してるんだ』

『君がいる限り浸食は完全に止まり、回復の兆しを見せる』

以前フレイムから聞かされた話の一言一言を頭の中で反芻し、しっかりと噛み締める。

歪み、浸食、そして“アリス”。その言葉にどんな関係性があるのか、理解するにはピースが足りなさすぎた。

「この向こうには、本当は何があったの？」

“アリス”……私の中にある歪みのせいで、この世界の“歪み”は浸透してしまった。それは人に、カードに、或いは大地に。イオと初めて会ったときに言われた言葉だ。まだその真意は掴めない。ただ、彼はおそらく遠まわしにこういいたかっただろう。責任を取れ、と。

ルアは口元に指を当て、考え込んだ。やがてゆっくりながらも言葉をついでいく。

「僕も直接は見たことがありませんが……自然が広がっていたそうです。少数民族ですが、人もすんでいましたし。データによると国土も二倍だったそうですね」

「人……。その人たちは、どうなったの？」

「大半は死に絶えました。ですが、毎日のように難民が許可もなく入国しようとしています。それを防ぐのがこの壁と、トウアイドルの役目です」

淡々としたルアの声に、憐みはない。無機質なこの声は完全に仕事モードの時のものだ。

突然の砂漠化。その中で食糧を探し求める家族連れが、脳裏に描かれた。

そうして見つけたこの国でもまた、歓迎されずに捕らえられ……殺される。

説明を終えたルアは一息つくと、鉄製の門に手を置いた。その姿勢のまま、振り向かずに口キへと命令を下す。

「この門は、元来決して開かれてはいけないもの。その向こうを見ていいのは、“女王”と“白ウサギ”、そして“門番”と“アリス”だけです。貴方はここで待っていて下さい」

「……………わかった。別に興味ねえしな」

意外だった。いつもの口キだったら「誰がお前なんかの言うことを聞くか」と言って憤慨していたはずだ。それがよもやこんなにもあっさり……………。

私の視線に気付いたのか、ロキは不満げに唇を歪めた。肩をすくめると、言い訳がましく言う。

「この先にあるのなんか、胸糞悪い光景ばっかだ。いつも返り血で赤く染まった双子が帰ってくるのを見てるからな……想像はつくぜ」

そ、そうだったんだ……。そういえばあいつら、いつつも髪が濡れてたかも……。あれってもしかして、風呂上がりだから？

顔を引き攣らせる私に、さらにルアがとどめを刺した。

「あいつらにも一応モラルはあるようですね。アリスに会う前はちゃんと汚れを落としているようで。よかったですね、アリス。そのまま抱きつかれたら人間の血と肉と脂が服にべっとりぶごおっ！」

「わざわざ言わんでいい！」

別にあの双子が無垢純粋な天使だとかは思っていないが。むしろ（特にディーなんかは）無情卑劣極まりない小悪魔とすら思っているが！

……一応、大切な友達なのだ。身体を洗ってまで隠そうとしている姿を、他の人に無闇に晒してほしくない。

ということ、ルアは一発殴つといた。

地面に倒れる彼の横を素通りして門を開けようと足を踏ん張る。

……が、やはり全長7メートル（目測）の頑強な扉。か弱い女の子一人で開くはずがなかった。

「よーし、こつなつたら……」

すうっと息を吸い込み、肺に空気をためる。

ルアとロキが固唾をのんで見守る中、出来る限りの大声で第一声

を放った。

「開け、ゴマ！」

「バカですか」

「バカだな」

「じよ、冗談なんだから真に受けないでよ！」

いや、ちよつと開くような気もしてたけど！

しかし心底冷めた様子でこちらを見てくる2対の目に、真実を言えるはずもなく。結局両手を必死に振って全否定してしまった。

が、その瞬間。

ギ、ギギイ……

「へ?! な、なに……?!」

「ま、まさか……門が……」

え、何その超展開。ちよ、マジでついていけないんですけど！

やけに重々しい様子で完全に開かれる門を、私とルア、そしてその先を見てはいけなと言われたロキでさえも呆然と見上げるしかなかった。

もくもくと上がっていた砂煙が視界を遮る。聴覚さえも麻痺する中で感極まったようにルアが叫んだ。

「さすがです、アリス！ 完全に開くことのない“双子の門”、その強い呪縛を解く呪文を知っているなんて！」

「ちよ、それでいいの?! こんなんでみんな納得しちゃうの?!」

「成程な……誰もが思いつくが、あまりにも恥ずかしすぎて声には

出せない。そんな難解な呪文を鍵とするとは……先代女王、なかなかのやり手だな」

「ああ、確かに言われてみれば……っていつかそれさり気なく貶してんだよね?!」

「んなわけねえだろ、褒めてんだよ。他にこんな恥ずかし……思いもよらないことした奴いないしな」

「言い直さないでいい! 余計傷つくわバカ!」

砂煙が肺に入り、呼吸を妨げる。馬鹿をしている場合じゃない。

私は口元を両手で押さえながら、門に背を向けて砂煙から身を守った。

目にも多少入ったようだ。拭おうにも、手の甲にも砂煙がびっしりについていてこすれない。

「痛っ……」

「大丈夫ですか、アリス!」

「目に……砂がっ……」

「一旦ここは引きあげましょう。これじゃあ状況の把握ができない」

ルアは私の肩を抱きながら心配そうに言った。彼の心遣いは嬉しいが、ここまで来て引き返すというのもなんだか釈然としない話だった。

私はかろうじて砂がかかっている腕の部分で目を強くこすると、手で目を覆いながらそっと振り返った。

だいぶおさまった砂煙の先に見えた、白い景色。

びつちりと灰色で覆われた天空^{ソラ}。

縦横無尽に吹き乱れる旋風^{かぜ}。

緑を失いどこか怖々しく佇む樹林^き。

大きくひび割れ枯渴した地肌^{だいち}。

そして、白い世界の中心には
た。

絶望の赤が、広がって

「っ……?!」

「見るな、アリス!」

隣からさつとロキの手が滑りこんできて、私の目を押さえるようにして覆った。

一瞬の光景だった。砂煙の隙間から見えた、わずかな光景。なのに、いやに鮮明に脳裏にこびりついている。

「酷い臭いです。トゥーイドルは殺すだけ殺して後片付けもしてないんですね」

「あいつらは俺達みたいに鼻が敏感じゃないからな。多少の匂いなら放置しておくんだろ」

「はぁ……。結局貴方も見てますし。せつかくアリスと二人きりになれると思っただのに……」

「……こんなもんを見ながらかよ」

吐き捨てるように言ったロキの言葉に、ルアは咄嗟に黙りこむ。

重い沈黙がその場を包み込んだ。

ルアは守るように私の肩を抱き、ロキは見ないように私の目を覆っている。この二人は、それぞれの形で私を心配に思ってくれているんだ。

もうこれ以上、心配をかけたくない。私は喉を絞り込むようにして、声を出した。

沈黙を破ったのは、不自然なほどに明るい声だった。

「もう大丈夫だから。は、話には聞いてた、わけだし……こんなの、慣れた……」

「馬鹿かお前」

厳しい叱咤が言葉を遮り、ほぼ同時にぐつと息がつまり爪先がほんの少しだけ浮く。ロキに俵担ぎにされたのだとわかるのに数秒を要した。

改めて担がれると、自分の体重が腹部にかかり結構いたい。

苦しそうな声をあげる私を心配して、ルアが声をかけてきた。

「大丈夫ですか、アリス」

「っ……だから！ 一人で歩けるし、大丈夫だからはなして！」

「今降ろしたら、貴女は意地を張って“あれ”を直視しようとするでしょう？」

ひどく落ち着いた声でいなされて、言葉を失った。

静かな水面下では、押さえきれない激情がうねりをあげている。

それを出さないように出さないようにと、顔に仮面を押し付けていた。

私は平気。こんなのもう慣れた。こんなの、もう。

まるで自分に言い聞かせるように、何度も頭の中で復唱したりして。

閉ざした唇を、ロキの背中に押し付ける。そうすることでもうあえず二人から顔は隠せた。

こんな顔、彼らには見せられない。

私のことをいつも気遣ってくれるルアは、門を開けたことを夜が明けるまで後悔し続けるだろう。

どこか鋭いロキは、私の嘘を簡単に見破ってしまうだろう。

どうか、気付かないで。

「怖い思いをさせて申し訳ありません、アリス……。トウアイドルは心配せずとも勝手に帰ってくるでしょう。城に帰りましょう」

「……うん」

言うのが早いのか、ロキはつまらなそうに舌打ちをすると早足でその場から離れた。

ルアはそれ以上何も言わずに、黙ってその背中を見送るだけだった。そこで動かない、ということは門をきちんと閉めてから追ってくるのだらう。そういうところは律儀というか……。几帳面な奴だから。

頭を無理矢理持ち上げると、案の定少しずつしまっていく鉄の門が見えた。

あの赤い光景も、端から徐々に姿を隠していく。

大地を染めていた赤黒い血も、死体に突き立てられた剣も、零れそうなほどに見開かれた幼子の眼球も、何もかも　扉に阻まれて、再びこの世界と隔離される。

目を細めてじっとその様子を見据える私に気付いたのか、ロキは怒気を含んだ唸りをあげた。

「お前、大概にしとけ。あんな血生臭いもん見たって気分良くなんねえだろ」

「うん……ただど……」

あれが、現実なのだ。この世界で起こった異変。山積みになされた屍。そして……。私が歪めてしまったであろう、その人たちの未来。

私が直視しないでどうするのだ。目を瞑ってしまつては……。何一つ、見えないままだ。

「何か、解決する方法があるかもしれないから」

「……………」

「あの状況だつて……私が原因で起こってるみたいだし」

「……だから？」

「だから、少しでも力添えになればと……むぐつ」

台詞の途中で、何の前触れもなく鼻をつままれた。「なにすんのよ」と抗議を訴えてみたが、どうにも曇りがちで間抜けだ。

鼻をつまんだ張本人は悪びれもなくしれつとした顔をしている。

いや、むしろちよつとこつ、怒っているような……。

案の定、強く睨まれた。

「無駄に正義感の強い馬鹿女だな、あんたは」

「ふぁ、ふぁによ」

「足も遅い、頭も足りない、腕力も脚力もない、戦闘もろくにできない……こんな役立たずに一体何ができるつて？ あの白ウサギも手こずつてる問題なのに」

そ、それは多分、比べる人を間違えているのでは……？

獣人であるルアと比べられてはたまらない。そりゃあ、全能力において彼は私よりも上回るだろう。

だけど、それでも。無力とわかっていても、動かずにはいられない。何もできないと知っていても、何かしたい。

私はロキの手を振り切つて、少しずつ酸素を取り込んだ。

血の匂いが漂っていて、瘴気が充満している。こんなになるまで

……ディーとダムは、一体どれほどの人を屠つてきたのだろう。

彼らが悪いとは思わない。ただ、この運命はあまりに酷むすぎる。

「あんだ、さつき嘔吐いたろ」

「な、なによ。別に嘔なんか……」

声にはいまだ苛立ちが混じっていた。私はすべてを見透かすような冷たい声音に少しひるみながら、気丈に否定しようとした。

しかしそれをばっさり切り捨てて、ロキは続ける。

「お前みたいなお人好しが、あんなの見て大丈夫なわけねえだろ」

声とは相反して、言葉はどこか優しい。そつと、温もりが頭を撫でた。

この世界にきてからやけに頭を撫でられるのが多くなった気がする。身長は中の上ぐらいだから、……そもそもあまり人に好かれる人間じゃないから、そんな経験、ほとんどなかったはずなんだけど。頭を撫でられるたび、髪を梳く彼の指から、見つめる彼の瞳から、胸が痛むほどの優しさが流れ込んでくる。

「もう大丈夫だから。は、話には聞いてた、わけだし……こんなの、慣れた……」

あの時思いつきり馬鹿だと切り捨てられ、内心少しムカついた。同時に、嘘を見破られたのだと確信した。

誰が聞いても無理のある言葉。私ですら、なんと滑稽なものかと思えた。

右手で両目を覆い隠し、唇を力いっぱい噛みしめる。唇は少しだけ切れ、つうつと一筋血を垂らした。

ロキは、なおも続ける。淡々とした声で、優しく頭を撫でながら。

「お前だけは、慣れなくていいんだ。人が死ぬなんてそんな状況

「お前だけは、慣れちゃいけないんだ」

怖かった。苦しかった。悲しかった。痛かった。辛かった。嫌だった。逃げたかった。

弱音を吐くばかりの私じゃ、いつまでたっても変わらない。父に初めて頬をぶたれた時のままだ。

燃えるような痛みを覚えている。引き裂かれた痛みに、最初は何が起きたのかわからなくて。

ただ呆然と、自分の大好きなあの子が泣いているのを虚ろな瞳で見上げていた。私を掻き集めて抱きしめるあの子を見つめていた。

守れなかった、あの子。果たせなかった、願い。忘れてしまった、約束。

私の大切な。

「っ……?!」

え？

私は刺すような痛みを頭に感じ、思わず目を瞑った。継続的に襲いかかる痛み……いや、痛みなんてものじゃない、麻痺を伴った衝撃に混じって、瞼の裏にあの日の光景が映し出される。

「アリス？　どうかしたのか」

父に殴られた日。そうだ、忘れられないあの忌まわしき記憶。なのに　何か、違う。

目の前に怒りに歪んだ父の顔があり、私を持ち上げる。変だ、持ち上げられた覚えなんてない。

ついで、地面に叩きつけられた。フローリングの床……あの硬い床に、顔面を打ち付けた。

飛び込んできたのは　泣きじゃくる、右頬がひどく腫れた幼
い少女。口からは血が、瞳からは涙がとめどめなく流れ落ちている。
何をそんなに謝っているの？　悪いのは、私……貴女を守ること
すらできない、情弱な私。

ああ、すごく痛そう。そうよね、この世界は幼い貴女には残酷す
ぎる。

だから、少し我慢して。今だけは、別の世界で眠って　。

「迎えに、いくから」

「アリス？」

ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのます。

「ゆびきった」

「アリス！」

突然頬をつねられ、私は鋭い痛み到我に返った。頭の中の痛みと
はまるで別物の、些細な痛み。それが、現在に戻してくれる鍵とな
った。

つねった本人は妙に青ざめた顔で私の顔を覗き込んでいる。地面
にそっと下ろされるが、頭に響き続ける鈍い痛みで立つことすらも
ままならなかった。

「おいアリス！　いきなり何なんだよ！」

「い……ったあ……」

「痛い？　どこがだアリス！」

ロキの必死な声も、どこか遠くで聞こえる。いや……違う、これ
は他の声にかき消されているのだ。

じわりと、眦に涙が溜まった。重力に任せて落ちる雫をロキは慌

てて拭う。そんな優しい仕草すら厭わしい思えてしまうほど、私は
混乱していた。

頭の中で何かが暴れだす。鼓膜にキンと音が刺さる。痛い、いた
い、うるさい　　ッ！

そうだ、これは。これは、愛しいあの子の　　……

哭声。

両腕両足に至るまで張り巡らされた鉄の鎖が動くたびに煩く鳴る。その鎖に抵抗しようとして激しく動いた。上がった息もまた、ひどく煩わしい。

あの少年が見たら驚嘆し、また歓喜することだろう。今まで壊れた人形のようにピクリとも動かなかった愛する人間が、こんなにも大きく動いたのだから。

「……………き」

光の灯っていない虚ろな瞳が、白い壁をじっと見つめる。いや、正確にはその先にいる少女を見据えていた。

睨むでもなく、ただ……無言に責めるように、じっと。

その瞳は一見何も考えていないように見える。だが、“無”という水面の下には静かな憎しみが蜷局とくろを巻いていた。

「……………つき」

喉はすでに噎れかけている。

何度も何度も名前を呼んだ。少女が幼いころにつけた、あまりにも短絡的な名前を。

待って、と。気付いて、と。助けて、と。

叫んだ言の葉の何一つ、気付かれることはなかったが。彼女が無視した一言一言が、喉だけでなく心までも枯渇させていく。

「……………つ……………つき」

喉も、心も枯れた。ただ一つ、枯れていないのがあるとしたら涙だろうか。

なぜなら先程からずっと、珠のような涙が黒耀の瞳から零れ落ち

ているのだから。

彼女が門を開けたその時も、苦しみだしたその時も　黒髪の男に背負われてその場を離れた、今でさえも。虚ろだけれど正確に位置を捉えるその瞳から、涙が。

門を完全に閉ざされた今では、もう呼びかける術もない。

彼女を苦しめていた少女の叫びも、あの分厚い壁が遮断しているのだろう。

あの厳つい壁と門は、意図せずとも彼女の身を包みこむようにして守り、少女を悉く阻みとおす。

どうしてなのか。どうして、彼女ばかりが愛されるのか。どうして、彼女ばかりが守られるのか。

どうして、どうしてどうしてどうしてどうしてどうして！

どうして　私は、こんな世界に閉じ込められたままだと
いうのに。

「……………嘘……………つき」

ゆらりと、水面下に潜んでいた化け物が気配を表す。

ずっと信じていた。十数年、彼女の一言だけを糧にこの世界で呼吸をしていた。ずっと、ずっと、ずっと。

生命を維持できる器官が衰え、身体の動きが鈍くなり、声を失い、
ついには瞳の光さえ失ってもなお　信じていた、言葉。

信じていた。ずっと、ずっと、ずっと　ウサギさんが、迎え
にきてくれることを。

なのに。

「この　嘘吐きっ！…！」

ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのます。

ゆびきった。

針、千本。

吐き出す息が白く固まり、ほどなくして霧散していく。昼はあんなに暖かかったのに、どうしてこんなに夜が冷え込むのだろう。

私は白い月に見惚れながら、頭の隅で今日のことを一つ一つ思い出していた。

記憶のフラッシュバック。いや、あれを記憶と呼んで正しいのかもわからない。あの視点は……自分のものではなかった。

「それに、あの声……」

ウサギさん、ウサギさんとしきりに呼んでいた。耳を経由するのではなく、直接頭に響くような声……まるでテレパシーだ。

か細く続いていた声も、ある地点まで来るとぷつりと途切れた。頭痛が収まった後にロキに尋ねてみたが、彼には何も聞こえなかったという。怪奇現象ではあったが、不思議と驚かなかった。

私だけが聞こえた声。私だけに、向けられた声。

「ウサギさんって……ルアのこと？」

「そうとは限らないかもね」

「は うぎゃっ！」

「相変わらず色気のない声。貴女らしいけど」

くすくすと笑う時にかかる息が、耳の裏を撫ぜた。

突然背後から抱きつかれてバランスを崩した私だけけど、このまま放っておくわけがない。足を一步前に出し踏みとどまって、肘鉄

をしかけようとした。
するりと頭と肩の上から重みが抜け、ぎりぎりのところかわされる。

「まだまだ甘いね、アリス」

「イオ……あんた、あいつかわらざるの変態ぶりね」

「ちよつと抱きついただけじゃん。見逃してよ」

最後に彼に会ったのはいつだろう。きつとロキの時ほど長くはなかつたはずだ。

なのに元気そうな彼を見て……こんなに安心してしまっている。胸のざわめきを押さえつけるように私は拳を握りしめながら、目を細めて笑う彼を睨みつけた。

「それで、今日は何の用？」

「用がなくなっちゃ来ちゃいけないんだ？」

「当り前でしょ。今何時だと思ってるの」

「うーんと、10時ぐらいかな？」

「午後4時以降は女の子の個室に入室禁止。わかつたらさっさと出てけ！」

「午後4時って……早すぎ。というかそれ、俺一切入れないじゃん。何そのご都合法律」

そりゃあ、変態防止用に作った決まりだから……。

ただしこの頃は防音対策（おもに双子）や安全対策（おもにルア）にも役立っている。

不満げに口を尖らせるイオに、私は小さくため息をついた。

こういつ子供っぽい仕草に出られるとこちらも強くは返せない。

あっちもおそらくそれを判っていてやるのだろう。

「……どうせ暇なんですよ。一時間だけなら相手してやるわ」
「やった。さすがアリス、優しいね」

手を叩く仕草がいやにわざとらしい。
どうせ断れないのを知ってるくせに……。
攻撃をよけるために離れていたイオが、いそいそと身体をすり寄せてくる。ぴつたりと横にくつつくと、触れた肌から彼の温もりがうつってきた。

何をしてもなく、ただ夜空を見上げながら一言二言言葉を交わす。

時折イオがたちの悪い冗談を言っっては、私を怒らせた。眉をあげる私に、今度は巧みに笑い話を持ってくる。

静かではないけれど、怒ったり笑ったり考え込んだり……。すごく穏やかな時間。

彼と過ごすこの時間が、ひどく心地よい。

「アリス、今日門の外見たんだって？」

一通り世間話を終えた後、イオがメインテーマのように話題を持ちかけてきた。

ルアが喋ったのだろうか……。私の表情がわずかに曇ったのにも気付かずに、イオは明るく続ける。

金色の瞳は、見たこともないほどにキラキラ光っていた。こうしてみると色気放出上手のイオでも年相応に見える。

「いいなあー。俺もそんなはつきり見たことないんだよね。ほら、何だかんだ言っただの扉開かないじゃん？ しかも夜だから何があるのかよくわかんないしさあ」

「そ、そう……」

「ね、ね。どんなだった？ やっぱ砂漠ばっか？ あ、でもアリスが来たからもう回復してんのかな」

「私一人でそんなに変わるわけないでしょ……」

「そうとも限らないよ？ 先代の暴れん坊アリスは3日でお花畑を荒地地にしたらしいし」

「……お祖母ちゃん。一体あなたは何の恨みがあつてそんなことを……」

だが、やはり私に限ってそんなことはあり得ないだろう。今まで秀でたところの一つもなく、平々凡々と生活していたのだから。

何かを変える力なんてない。誰かを救う力なんてない。そんなのは、嫌というほどわかっている。

「そうね……砂漠、だったわ」

死体のことは敢えて言わない。実際に口に出して表現しきれるものでもないし、楽しい話題でもないからだ。

私は記憶の中から赤の部分だけを取り除いて、ポツリポツリとこぼすように話した。

「なんか雲もちよっと暗かったし……あ、風がすごかったの。それで砂煙ができててね……これじゃあ何も見えないからって、帰ってきたんだ」

「ふうん……それが“歪み”の実態なんだ。じゃあさ、ね、人間はいた？」

人間……だったものは、いた。

「わ、わかんないわよそんなの。ただ、変な声が聞こえたけど……」
「声？」

今まで興味深そうに聞いていたイオの眉が、初めて寄った。続けようとする私を片手で制して、もう一方の手を顎にあて考える姿勢を作る。

「そんな話、聞いたことないよ。砂漠が広がっていて、その先には難民がいる。あの壁はそいつらの襲撃から市民を守るためのもの、そうでしょ？」

「私もそう聞いたけど……」

「変な声って、どんな感じ？ 男、女……それとも怪物？」

イオがふざけた感じで言うが、私は笑うに笑えなかった。

男の野太い声でもないし、勿論怪物のような奇声でもない。か細い少女の声……なんだけど。

なんだろう、どこかで聞いたことのある声だった。

「女の子……だと思う。なんかね、聞き取りづらかったけど……ウサギさんって呼んでみたい」

「ウサギさん？ ああ、なるほど。さっきの独り事はそういうわけね」

何がおかしいのか、彼はくつくつと笑い始めた。時折彼の口から発せられる、人を小馬鹿にしたような笑い。

私はむっと唇を曲げながら彼をきつく睨んだ。夜で眠いこともあって不機嫌な時に、理不尽な嘲笑をうけたくない。

「何がおかしいのよ」

「いや、だって。ウサギだからってルアに限定するなんて、随分短絡的思考だなんて思って」

「た、短絡的思考で悪かったわね！ だって他にウサ耳の奴なんか、

マルスぐらいしか
「白ウサギならたくさんいるよ」

くつりと喉の奥で鳴らしたのを最後に、イオは笑うのをやめた。
金色の瞳を細めて、唇を三日月に歪める。

なぞなぞの種明かしをするように指を一本立て、ゆっくりと話し始めた。

「だって考えてもみてよ。もし俺が死んじゃったら、“チエシヤ猫”のカードはどうなると思う？ “チエシヤ猫”という役柄が欠けてしまったら、“ゲーム”の続行は不可能だよ。さあ、“アリス”だったらどうする？」

「え……つと、“ゲーム”を中止して“アリス”を元の世界に返せばいいんじゃない？」

考え抜いた結果にうみだした答えだというのに、失笑で返された。イオは聞き分けのない幼児を見る保育士のような顔になって、肩をすくめる。そして懐から何を取り出すのかと思うと、銀色に光る投げナイフを取り出してきた。

言葉を失くす私に向かって、取っ手の方を差し出す。

「じゃあ、この場で俺を殺してみる？」

「な、何言ってるのあんた……」

「だってこの俺を殺したらアリスは元の世界に帰れるんでしょ？ 念願の帰還じゃん。別に俺じゃなくても、女王でもルアでも構わないよ。こうやって持って、少し身体を傾ければいい」

手が添えられて、小型のナイフがそつと私の手の平に収められた。その硬く冷たい表面に、私は思わず取りこぼしそうになる。こんな物を彼はどうやって使うというのだろう。どんな顔で使うという

のだろう。

「……できない」

「へえ。帰る方法はそれしかないと言われても？」

「たぶん……できないと思う。自分が帰るためにイオを殺すなんて、絶対に嫌」

「あは、アリスらしい弱さだ」

イオは器用にナイフを取り上げて元の場所にしまつと、もう片方の手で私の頬に触れてきた。

触れる指が異様に熱く、なぞるように頬から首筋へと撫でる。あ……彼との距離は、こんなにも近かつただろうか。

イオは首を少し傾けて艶やかな笑みを浮かべた。今までどこか冷たかったその瞳には、金色が蕩けんばかりの熱が籠っている。

「喉が噎せ返るほどの甘さに、風にすら折れてしまいそうな弱さ。だけどそれは、俺に限った話じゃないんだよね。俺じゃなくても、アリスは誰も殺せない。その弱さは、俺にだけ曝け出すものじゃない……」

「よ、よくわかんないけど、誰も殺せないってのは確かにそうよ。誰も死んでほしくないもの」

「……あは。アリスらしい狡さだ」

何か物足りなさそうな顔をして、イオは手を離れた。

とりあえず解放されたことにこっそり安堵のため息をつく。長時間あの色気にあてられると、こちらの気がどうにかなくなってしまいうだ。

「じゃ、話戻そっか。結論から言うと、俺が死んだ程度じゃ“ゲーム”は終わらないよ。空になったポストに、簡単に言うと、代役を

立てるんだ」

「代役……って、“一般人”の中から？」

「ちよつと違うかも。獣人だからね、扱いはもつと特別だよ」

「獣人って確か、イオやルアみたいな、変な獣耳つけている人のことよね。あんまり見たことないけど……」

「変な余計だよ。確かに“一般人”に比べたら獣人は少ないよ。だからこそ、彼らにだけ一夫多妻制が許されているんだ」

一夫多妻制。その単語を通り過ぎた時だけ、彼の瞳が暗く落ちた気がする。暗闇から恨めしそうに睨めつけてくる蛇の目に似ている。覚えてる？ そう呟いた時には不穏な光は失われていたが、笑顔もどこかきこちない。

やっぱり、まだ辛いんだ。

「ロキの父さんも“チェシャ猫”で獣人だった。だから色んな女と交わって、たくさんの子孫を残したんだ。母さんも、うんざりするほどいる愛人の中の一人。ロキが生まれてから7年後、父さんは母さんを捨てたよ」

ロキ、と。まるで他人事のように言うが、その結果降りかかってきた母親の狂気と虐待、そして悲しい死は誰よりも近くで感じてきたはずだ。

彼はいつも主観的にこの話をしない。まるで感情移入をすること自体が罪だとも言うように。

口先だけは淡々と。だけれども、瞳に溢れんばかりの悲哀と憎悪を宿して。

「その前にも女の家に通ってたけど、勿論。母さんは、自分が次世代の“チェシャ猫”を生むための道具にすぎなかったってこと、理解してなかったんだ。ほんと、つくづく可哀想な女ひとだよ」

可哀想な女。その言葉に、一体どれだけの激情がこめられていたのか。

夫に捨てられ狂気に堕ちた哀れな女。自分とロキを壊れるまで苛め続けた憎い女。それでも……母親であった、愛しい女。

私は何一つ言葉に出来なかった。イオは一瞬だけ視線を下に落とすと、気を取り直すように明るく言った。

いつも通りを振るまおうとするその笑顔が、今はただ痛ましい。

「さ、つてことでロキの異母兄弟はこの世界にたくさんいるわけだ。俺は一人も名前を知らないけどね。紫の髪に紫の猫耳、金色の瞳の奴が何処かにいるはずだよ」

「……不気味な集団ね」

「うん、ちよつと我ながら目に痛いかも。で、もしアリスがこうやって俺を殺したら」

私の右手を取って、ずんつと胸に深く突き立てさせる。何も持っていないからいいものも、先程のナイフを持っていたらと思うと落ち付いてはいられなかった。

非難するような私の目に、イオは悪戯っぽい笑顔で返す。

「その中から新しく“チェシヤ猫”を選び出す、と」

だから代役なのか。納得する半面、心が反発してざわめきだす。

それが、彼らが自分の命を顧みない理由なら……絶対に間違ってる。

「ま、^{おれ}“チェシヤ猫”は一度も代替わりはしてないけどね。あとしてないのはルアにレーテに伯爵夫人に……女王だけちよつと特殊だけど、別にしてないかな」

「そつか……フレイルム様は、“女王決定戦”^{コロシヤム}で決まったんだもんね」
「あれ、アリス知ってんの？ なら話が早い。唯一代役が利きにくいのが“女王”と“伯爵夫人”だよ。あの二人は必ず女だからね、自分達の子供の中から選ばなきゃならない。とりわけ“女王”なんて兄弟全員殺しちゃうんだから、嚴重に警備されるはずだよね」

他人事のように……いや、実際他人事なのだろう。

イオはどんなに辛い境遇にあつたとしても、フレイルムにだけは同情しない。唇の端を小さく上げて、皮肉気に笑うだけだ。

「それから“門番”。あいつらは別にそっくりな双子であればどんな子孫でもいいからね、意外と楽に代役は見つかる。でもなんだかんだ言つて、あいつらも一代目かな。昔死にかけたらしいけど」

「え……何それ。初耳」

「俺も詳しくは知らないけど、スラム街で野垂れ死にそうになつたところを、女王に助けてもらつたらしいよ」

ああ、そつか、あの話……。

私は今朝双子が話していた話を一つずつ思い返す。だつたら、雨の中フレイルムに救われたというのはあながち大げさな冗談でもないようだ。

「うーん、だとしたら代替わりしてんのってあの二人ぐらいかあ……」

「あの二人？」

「そ、マルスとネズミちゃん」

さらつと吐き出した言葉に、息が詰まる。何かを飲みかけだったら確実に吹いている場面だ。

あの、いつも騒がしい冒険大好き二人組?! 元々は役職もない

ただの獣人だったなんて……。

「マルスは……あいつ三代目かな？ 一代目も二代目も最近になって死んだらしいから、あいつ自身ほんと最近“カード”を持ったばっかなんだ。でももつとすごいのはネズミちゃんの方。あの子、六代目だからね」

「六?! じゃ、じゃあ、その前に5人もいたってこと?!」

「そうそう。まあ、6人目だから本人もまさか“眠りネズミ”のカードが回ってくるとは思わなかったんじゃない? ま、三月ウサギ”二代目と“眠りネズミ”五代目がほぼ同時期に死んだから、あいつらが画策して暗殺したってもつぱらの噂だけだ」

う……あの二人ならあり得そう。そう思えてしまうことが少し怖い。

だけでも、代役というのは……あまりにひどい話ではないか。

私は古びた工場で何体ものイオのクローンが生成されている光景を想像した。金色の瞳は瞼に覆われていて、髪は寝癖にはねている。顔立ちは一人一人微妙に違うが、やはり同じ父親の血を濃く継ぐからなのか、どこことなく似通っていて……。

下からイオの指が伸びてきて、私の顎を掬った。考え事をしてるのがばれたのか、少し不満顔だ。

そつと、含みを持たせるようにゆっくりと言ひ聞かせる。

「だからね、アリス。別に俺の代わりなんてたくさんいるんだ」

代わり、だなんて。

双子と初めて戦って、毒を複数盛られた時……。あの時、彼が死んでしまっていたらここにいるのは、別の人だったのか。

顎を持ち上げながらも優しく、それでいて少し意地悪気にキスを

する彼は彼ではなかったのか。

似ている、誰か。同じ髪をしていて、同じ瞳をしていて、たぶん同じようにとてつもない美形。

性格も似ていたのだろうか。ムカつく奴で、人の気に障るようなことを言ってくる。何もかも見透かして、痛いところをついてくる。皮肉で、残酷で……悲しいほどに優しい人。

触れていた唇がそっと離れて、彼の瞳が目に入る。

どんなに色が似通っていても……きつと、この瞳に映る感情は違う。

泣きそうに歪む彼の唇も、壊れ物を振れるように怯えながら動く指の先も、きつと彼だけのもの。他の誰かになんて……代われるはずがない。

「だけど、アリス。俺が死んで、他の奴がこうやってアリスに触れても……それを俺と同じとは思わないで」

濡れた唇が再び私のそれを塞ぎにかかる。今度は少し強引に、ずつと深く。

いつから、私はこんなに彼に心を許したのだろう。初めてのキスは、本気で腹が立った。二度目は、ひたすら悲しみに溺れていた。

こんな劣情にまみれた彼、初めてかもしれない。私は唇に籠る熱に浮かされながら、ちよつとばつかしまずい状況に焦っていた。

背後には不自然に広いベッドが待ち寄せている。私は白いシーツを握りしめながら、決して倒れまいと身体を支えていた。

「……ここでアリスに触れてるのは俺だ。似た誰かでも、他の“エシヤ猫”でもない。……理解して」

いい加減抵抗しないと、取り返しがつかなくなる。私はきつく抱

きしめてくるイオの腕の中で、苦しそうに呻いた。

一旦彼の胸を押し返して、隙間を作る。ようやく息が楽になったところで、不安げに見下げてくる彼の瞳をじっと見つめた。

「なら、他の人を“チェシヤ猫”にしないで」

「……アリス」

「簡単に死ぬなんて言わないで。貴方の代わりなんて誰もいないんだから、もっと自分を大切にしろ」

「……アリスは、やっぱり狡いな」

切なげに、彼は笑う。金色の瞳が、水面に映った月のように小さく揺らめいた。

そつと額に小さく口づけられ、私は動揺した。彼を宥めるために探した言葉だったが、逆効果だったのだろうか。

「アリスは、狡い」

「え、ちよ、ちよつとイオっ！」

これはまずい。非常にまずい。いつの間にか身体は後ろへと傾けられ、肩は優しくベッドに縫い付けられている。

危機的状况に私の本能が警告を発した。なんとか彼の腕から逃れようとするが、イオはにやりと口角をあげたまま放そうとしない。

今までの悲しい雰囲気はどこへいった！ 何でこんな臨戦態勢に入ってるの？！

「イオ！ これ以上何かしたら、今度から絶対部屋に入れなからね！ 鍵かけて締め出してやる！」

「いいよ、別に。ピッキングの免許あるもん」

「そ、そんなのあんの……。と、とにかく、放しなさい！」

「あは、やだね」

やだね、じゃねええつ！ 心の中で激しく突っ込みながら、私は精一杯の力を込めて彼を押し返した。

力の限りの抵抗のおかげか、イオは不満げながらも放してくれた。するりと彼の横を抜け、きつく睨みつける。

「あーあ。まだアリス分が不足してんのに……」

「人をガソリンみたいに言うんじゃない！ とにかく、私は別の部屋で寝るから！ どうぞごゆっくり！」

「えー……なんか女の子に逃げられた部屋っていうのも虚しい……」

私はため息交じりの呟きを遮断するようにして、勢いよく扉を閉めた。

「我ら門番に銃を向けた罪、万死に値す」

散々痛めつけ、虫の息となるまで切り刻んだ男とその家族を睥睨して、二人は同時に声を発する。

せつかくここまで生き延びてきたのに。男は下唇を強く噛みしめながら、双子の門番を睨みつけた。

地面にひれ伏しているせいか、上から見下される威圧感は先ほどとは比べ物にならない。口元に浮かぶ笑みも、瞳に浮かぶ光も、何もかもが男を恐怖へと陥れた。

確かに、最初に手を出したのは男の方だ。

だがそれもすべて、突然起こった砂漠化と飢饉のせいであり、男は近隣の国であるこの場所に助命を求めただけにすぎなかった。

素気無く入国を禁止され、怒りに任せて発砲した途端にあの巨大な斧で切り付けられた。

子どもも女も容赦なく……年若い妻は、呆気なく死んでいった。門番の二人は蚊でも殺したかのように、晴れ晴れしい笑顔を浮かべている。

門番　　ディーとダムは、男の鼻先に斧の切っ先を突きつけた。

「されど世は情け、渡る世間に鬼はいない。汝に今一度業に報いるチャンスを与えよう」

古臭く言おうとするが、ところどころ綻びが目立っている。

男はなんとか顔を上げながら、反撃のチャンスを窺った。幸いなことに、まだサバイバルナイフが一本だけ残っている。

妻と、死んでいった娘の仇。なんとしてでも、復讐を。

「我が名はダム」

「我が名はデイー。しかと覚えよ」

ああ……知っている。彼らの悪名は、どこにいても耳にした。門の守護者で、赤の女王の両翼。そのようし、髪の毛一本から足の爪の長さに至るまで……見分けのつく者がいないのだと言う。唯一違つのが、その口調。だがこうやって儀礼的な言葉を使われている今、見分ける術はないに等しい。

突然後頭部を強く蹴られて、男は顔面を地面に打ち付けた。危うく意識がスパークしかける。

ざっざつと砂のこすれる音。何をやっているかは容易に想像できなかった。

顔を再び上げて、目を凝らす。二人の足もとは先程移動して出来た跡が残っている。

二人は素知らぬ顔で、完璧に入れ替わっていた。

「我が名はダム」

「我が名はデイー。真実か、否か」

話に聞いていた通りだ。双子の門番の、チェンジゲーム。これ以上ないほどに酷似している自分たちを見分けさせようというのだ。男はごくりと唾を飲み干し、袖に忍ばせていたナイフを右手に移動させた。

チャンスは、一度きり。おそらく成功しようがしまいが、未来はない。それでも……一矢報いてやる。

「否」

「っ……?!」
「デュー！」

彼らが動揺したすきを狙って、ナイフを眉間目指して投げつけた。うつぶせの姿勢のまま投げたナイフは当然軌道をそれ、デューの右目へと直通する。それすらも、彼の反射神経で避けられてしまった。

つけることができたのは、頬の小さな切り傷。2日もあれば全治するだろう傷だったが、男は不思議な充足感を感じていた。

ああこれで、2日間は彼らの見分けが容易くなる。

「お前の袖に……ついてるぞ。我が妻の残した、血」

嘲笑の言葉は、最後まで紡がれなかった。

突然振り下ろされた斧が勢いよく男の脳天を割る。即死だった。

「……正解。楽に死ぬ、カスガ」

デューは汚く毒づきながら、鋭い痛みを走る右目を押さえた。

ナイフは掠っただけだった。傷も大したことはない。なのにこの痛み……。

心当たりが、一つだけあった。一番可能性が高く、そして一番最悪の事態。

ダムを心配させてはいけないという配慮も忘れて、デューは素早く踵を返すと足早にその場を去っていった。

ああ、目が痛い。

大嫌いな、この目が。

「ルア！」

「アリス。どうしました、こんな夜遅くに」

私の寝間着姿を見たルアは少し驚いたような顔をしていたが、朗らかに笑って迎えてくれた。

うーん、イオの後だとこんなストーカーでも爽やか系に思えてしまっから不思議だ。

「あのさ、悪いんだけど……どこかに空いている部屋ない？ 寝ればソファーとかでもいいから」

「それでしたらアリス、ぜひ僕の部屋にぶごほあっ」

「言うと思ったよクソ野郎」

もうだいぶ野郎おじを殴るのにも慣れた。唯一拳をやすやすとかわす奴と言え……イオだけか。

しかし……この頃殴られる瞬間、ルアが嬉しそうな顔をしている気がするのはい。気のせいであってほしい。

私は吹っ飛んだ彼の胸倉を掴んで強制的に断たせると、もう一発鳩尾に軽く拳をめり込ませた。

「ぐふっ……さ、さすがです、アリス……」

「ふざけてないで、部屋提供しなさいよ」

……これじゃアカツアゲだ。いつから私はこんなに柄が悪くなっただらう。

「別に空き部屋はたくさんあるので構いませんが……僕が用意した部屋、気に入って下さりませんでしたか？ 日本の一般女子が憧れそうなデザインであしらえてあるんですが……」

「そ、そういうわけじゃないの。ちょっとメルヘンだけど、可愛くって好きよ」

「そうですか、ありがとうございます。ではどうしました？」

う……さすがに言えないよね。

夜中変態猫が侵入しに来て、セクハラをされそうになったんで部屋を移して下さい……なんて。

……バレたら発狂してイオを殺しにいきそう……。

「え、えつとねー……ゴツキー！」

「はあ？」

「ゴツキーよゴツキー、ゴキブリが出たの！ 私じゃ駆除できなく
つて……」

イオをゴキブリに例えたと知ったら、世界中にいる女の子が卒倒
しそつだが……。まあ、それくらいしぶとく生きていてほしいと願
をかけた　ということにしておこう。

だがゴキブリを倒せないというのは嘘だ。我が家にもゴキブリは
毎年10匹以上出現したし、そのすべてを喚く母の代わりに殺して
いる。

うーん、我ながら強か……というよりも女の子らしくない子だと
思う。

ルアはその青い瞳を見開いて驚いてみせたが、安心させるように
優しい笑みを浮かべた。

「わかりました、アリス。それでは僕がさつそく行って全滅させて
きましょう」

「さつそくつて……これから？！」

「ああ、もちろん新しい部屋も提供しますよ？　ですが、このまま
放っておいて得するものでもありませんので」

る、ルアが直々に倒すの……？　スリッパ片手に黒い背中を追う
ルア……いや、想像できない。きつとごっつい防具服を着て超強力
殺虫剤を撒くんだ。

それよりも問題はイオだ。いましがた出てきたばかりなので、彼
はまだあそこにいるはず。しかもごゆっくりなんて言っちゃったか
らほんとに寛いでるか……！

ルアとイオが鉢合わせになるシーンを想像して、私は青くなった。
ただでさえ犬猿の仲である二人だ。それも舞台が舞台、私の寝室

という……。

「こ、ここはなんとしても阻止しなければ！ 私の安眠ルームを守るために！」

「い、今やることないんじゃない？！ それよりもさ、ちょっと暇だから遊ぼうよ！」

「え……珍しいですね。いつものアリスなら10時前には寝てしまっただけ……」

「気にしない気にしない！ デイーとダムも帰ってるんでしょ？一緒に七並べしようよ！」

ルアの好きなカードゲームを提示することが、功を奏した。一瞬迷いの色が瞳をよぎり、それはどんどん濃くなっていく。

しばらく勿体ぶっていたが、彼は結局ゴキブリ退治よりもカードゲームの方を選んだらしい、小さくため息をついた。

しかしその実は嬉しいのか、頬がほんのりと赤い。

「仕方ないですね。あの双子と一緒にというのは気に食いませんが、人数は多ければ多いほどいいです」

「そうよねー。人が多ければ七並べ以外にもいっぱいできるよ？大富豪とか、ババ抜きとか！」

「いいですね。ではこの際、フレイム様と……あの変態猫も誘ってやりましょう。今日は皆でトランプ大会です！」

イオの呼称を言葉にする時、ルアの瞳が懐かしそうに細まったのは気のせいだろうか。

もしかして彼らがお茶会のメンバーだったころも、暇を持て余してカードゲームをしたのだろうか。たった三人で、それでも森中に笑い声を響かせて。

「わかったわ。じゃあ私、ディーとダムを呼んでくるから！ 下にいる？」

「ええ、ちょうど帰ってきたところですよ。まったく、こんなに夜遅くまで外をほっつき歩いて……」

昼間はあんなに仲が悪かったけれど、やっぱり二人の親代わりなんだ。

世間の父親そっくりなことを不満顔で言うルアに、私はぷっと吹き出した。

ルアはそれを見て気恥かしそうに目をそらすと、さっさと踵を返してしまった。白いウサギ耳がピコンピコンと小刻みに震えているところを見ると、相当恥ずかしかったらしい。

「べ、別にあいつらなんてどうなっても知りませんけどね！ 一応上司として生死確認を楽にすませたかっただけです！」

「ふふっ……素直じゃないなあ」

小さな呟きは華麗にスルーされた。

ルアは胸に手を置いて肩で数回息をすると、ようやく落ち着いたのか平靜の顔をちらりとこちらに向けた。

「それではアリス、トゥーアイドルをお願いいたします。僕はフレイム様と猫を呼びに行つてきますから。まあもともと、二人とも簡単に来てくれるとは思いませんが、善処します。そもそもあの猫はどこにいるのやら……」

「ああ、イオだったら私の部屋にいると思うわよ」

「そうですね？ それは助かります」

ルアが小さくはにかみながら微笑んで、今度こそその場から離れようとする。

彼の時折見せる優しい表情が好きだ。いつもは過激なことばっかやって、時々すごく怖いこともするけれど……こつしてふとした時に胸を高鳴らせる。

そして時折

こつして背筋を凍らせる。

「

アリス」

長い長い、沈黙だった。やがて聞こえてきた第一声は、先程と同じように酷く甘ったるく優しい声。

なのに、1オクターブ音が低かった。

ゆっくり、スローモーションでもかけてるんじゃないかってくらいゆっくり、彼は振り向く。

般若の幻覚が見えた。

「こつして、イオがアリスの部屋にいるんですか」

ああ、神様。

願わくばどうか、来世はもっと口の堅い人間に産んで下さい。

帰り道はほとんど一言もしゃべらなかつた。

いや、正確には違う。ダムの方からは一言二言世間話を持ちかけたが、デューは「ああ」、「うん」と言うばかりでついには口も閉ざしてしまつたのだ。

ダムはずつと先に行く片割れの背中を見ながら、小さく息をついた。

いつからだろう。あいつが俺から隠れて泣くようになったのは。

いつからだろう。あいつが郊外に自分だけの隠し部屋を持つようになったのは。

いつからだろう。あいつが鏡を見ては、俺の真似をするようになったのは。

「それじゃあダム、僕ちょっと用があるから」

デューがこちらの方をちらりと見て、冷たく告げた。

いつもの彼からは想像もできない態度だ。ダムをからかつて遊ぶのは好きだけれど、こんなに胸が痛くなるようなこと滅多に言わない。

何を聞いても適当にはぐらかすだろう。そのことがわかっていたから、ダムは頷いただけで何も言わなかつた。

彼の背中が闇に溶け、ダムは一人残された。

ずつと傍にいと誓いあつたはずの弟がいない。置いていかれる

のはいつも……自分からだった。
だけど、わかっている。

「ディー」

弟の名前を呼べば、不思議と近くにいる気がした。離れていても心は一つとは、よく言ったものだ。

ああ、今日は……右の肩を切られてたんだっけ。浅そうに見える傷だというのに、結構な痛みだ。その後でディーが怒り狂ったのを覚えている。

ダムはのろのろと城のホールを歩きながら、右肩の傷に触れた。忘れていた痛みがじくじくと蘇ってくる。

「っ……」

コートを脱いで、とりあえず応急措置を優先することにした。

どんなに些細な傷でも化膿すれば命にかかわることくらい、薬剤師なのだから熟知している。

「痛つてえ」

まだ起きて仕事をしている人がいるのか、ホールは静かというわけではなかった。

周りに人がいることが唯一の救いか。これ以上の孤独を感じずに済む。

だけどやっぱり、傍にいないと辛い……。

「包帯……ないや。じゃあこれでやるしか……」

ポケットを探って出てきたのは、薄紫色のハンカチ。右下にピン

ク色の薔薇がちょこんと可愛く縫い付けられている。ずっと前、店頭で見かけて一目ぼれした奴だ。

ああ、そうだ。思えばあの頃から、俺もあいつも狂っていた。お揃いを買いたいと言ったデイーに、俺は色違いがいいと駄々をこね、あいつを困らせた。

大した口論もなくデイーが折れて、あいつが紫を、俺が緑のハンカチを買った。はずなのに。

翌日には、ゴミ箱に紫色のそれが無造作に押し込められていた。

デイーは何も言わない。次の日も、その次の日もちらちらとみていたけれど、何も言いだしてこなかった。

ああ、でも。俺は、知っていた。

俺の目を盗んで一人で外出した、あの日に。デイーはあのお店に行って、すぐに帰ってきた。

俺が持っているのと全く同じ、緑色のハンカチを買って

……

「……お揃いじゃ、意味ねえんだ」

ダムは紫色のハンカチに額を押しあてながら、小さく呻いた。

かつて彼の片割れが忌み嫌い、捨てたもの。どうしても放っておけなくて、ゴミ箱の中からそっと取り出してずっと持っていたのだ。この紫玉アメシストが、片割れが最も厭ましく思うものであり、同時に自分の歪みだとしたら。どうか、瞳めを逸らさないで。

「同じじゃ、意味ねえんだよ……っ」

どうか、気付いて。

「ダム？」

後ろからいきなり話しかけられて、ダムはようやく我に返った。過去を回想しぼやけていた視界が少しずつ明瞭になる。

のろのろと背後に視線を投げると、心配そうな瞳とぶつかった。それが誰のものを数瞬遅れて理解して、慌ててつり上げていた目尻を下げる。

ひどく不機嫌なダムの様子を心配したのか、アリスは駆け寄ってきてすぐ、背中をさすってきた。

温かい掌に、高ぶっていた鼓動は鎮まっていく。

「姫さま……ただいま」

「うん、お帰り」

へらつと笑って言うと、アリスも優しい笑顔を返してくれた。

ああ、こういうの。温かくって大好きだ。

“アリス”に対して興味があるわけではないけれど、アリスは割と気に入っている。彼女にだったらいくらでも甘えられる気がした。

「ダム、どうしたの？ どこか痛い？」

「ちょっと怪我しちゃって。あ、いっけね。着替えてなかった」

下を見ると、思った通り赤黒い血がべったりと白地のシャツに染みついていて。

特別今回は汚れたというわけではないが、ディーと相談してなるべく帰ってきたら風呂に入るようにしている。

今回の“アリス”は人の死体や血が嫌いらしい。こんな恰好で行

ったら嫌われてしまう。

ダムは急に弱気になって、アリスの方を見た。せっかくここまで仲良くなったのに。自分の方もすごく好きになったのに。

纏わりついた赤と一緒に、自分のことも嫌いになってしまっただろうか。

「あの、姫さま、これは……」
「……知ってるから」

アリスは大きな赤い斑点を悲しげに見つめながら、小さく呟いた。背中に回していた手をそつと外して、頬にこびりついていた血の跡をなぞる。

言葉の意味がわからずに首を捻る半面、潤んだ目で見つめられている気がしてドキリとした。

別に特別な感情などない。ダムは心の中で必死に言い訳しながら、ここにはいないロキに土下座した。

「貴方達が身体を張って護っているもの……ちゃんと、わかっているつもりだから」

身体を、張って。

全てをかけて付いていきたいと思うのは、命の恩人であるフレイルだ。彼の命令だったら、何でも従う。

だけど、彼女の言っている意味はどうやら違うらしい。

「……うん」

“門番”のカードは特殊で、帽子屋のように血筋にこだわるわけ

でもチエシヤ猫のように種族にこだわるわけでもない。

ただ、双子に生まれた。それだけで自分たちは、生まれた時から“門番”の運命を背負ってきた。

別に自分たちの仕事が忌まわしいわけではない。門の前に立つて、荒涼とした大地を退屈そうに眺めて……この国を、護る。

そんな建前のもと、自分たちは幾人もの人間を闇へと葬ってきた。

違うのだと、言いたい。やらされてやるわけじゃない。やりたいから……殺るんだ。

頬から額へと移り、血痕をそっと拭いてくれる指は優しい。きつとアリスには血に濡れた自分さえも、罪悪感の狭間で苦しむ善良な人間だと思っているのだろう。

アリスは、甘すぎる。

「ね、それより怪我してるんでしょ？ 見せて……ってこれ?!」

「ん……そう。ちよっとへましちゃったかな」

「ちよつとどこの話じゃないわよ！ 薬と包帯はどこ?!」

右肩の傷を見つけたアリスははたまた急に怒り出した。その百面相についていけずに、ダムは戸惑いながらも小さく笑った。

ああ、この女はひとこんなにも優しくしてくれる。会って数日だといふのにすっかり信頼して。渋々ながら買い物にも連れて行ってくれて。本気で自分のことを心配してくれて。

全てにおいて、甘い。

こんなにも残酷な俺に、心を許してしまうほど

……

「……ディーの、部屋」

カラカラに乾いた喉から、粘着質な言葉が飛び出す。

おぞましい考えだと自分でも思うのに、なぜか後悔はしていない。悔やむ心すら持っていない、非情の人間なのだ。

そんなところに救急セットがあるはずなかった。ダムとディーは薬剤師と言っても毒薬専門だ。医療道具は持ち合わせていない。

自分のついた嘘に、吐き気がする。目の前がふらりと暗くなったのは、怪我のせいじゃないはずだ。

どうしてこんなことを言ってしまったのか。ああ、どうか。姫さま、俺を信じないで……っ！

「うん、わかった。どこ？ 教えてくれれば、取りに行くから」

不審にも思わずに、真っ直ぐにこちらを見つめてくる瞳が痛々しい。騙されるとも知らずに、こつも真剣になれるのか。

疑うことを知らない、愚鈍で純粋な俺の姫。貴女はその甘さゆえに、俺に利用されるのだろう。

言葉が止まらない。口を押さえつけようとしても、腕が上がらない。

気付けば自分は、部屋までの道筋を詳細にわたって説明していた。アリスは難しい顔で聞いている。

「……うん、なんとなくわかった。すつごく難しいところにあるのね」

それはそうだろう。ディーが片割れであるダムに隠れて作った、秘密の部屋なのだから。

アリスは手のひらに指で何度か地図をかくと、決心したように立ち上がった。

晴れ晴れしい笑顔をダムに向けて、エプロンドレスを翻す。

「じゃ、ちょっと待っててね。帰ってきたらみんなでトランプしよう。ね？」

「トランプ……ディーも？」

「もちろん。部屋にいるんでしょう？ ついでに呼んでくるわ」

「……うん。やりたい。皆で思いっきり、遊びたい……」

全てが、終わって。

全てが終わって変わって、アリスがここへ帰ってくる頃には……アリスにちゃんと、謝って。騙してごめんって。利用してごめんって。

そしたらまた、皆で笑いあってもいいのだろうか

？

「うん！」

ダムの声にこたえるように、アリスは振り返って大きく頷いた。一瞬だけ、残酷な心に罅が入り、中から何かが押し上げる。

ああ、止めなければ。アリスの手を掴んで、教えなければ。

ディー
弟は、危険だと。

腕は、結局指の先がじれったそうに動いただけで、本当にそれだけだった。

足早にかけていく彼女の背中を、へたり込んだまま呆然と見つめる。

自分はこんなにも無力で、自分よりもずっと脆弱で小さな少女にすべてを託すしか選択肢はない。

アリスがダムを信じているから、騙すことができた。だけれどもそれ以前に、ダムがアリスを信じているから、騙そうと思ったのだ。

「……ごめんな、姫さま」

俯けば、眦に溜まった涙が重力にしたがって落ちてきそうだった。胸が熱く、その中心部では罪悪感が棘となつて鋭い痛みを与え続けている。ああ、でもこんなものじゃ足りない。これからアリスの受ける苦痛は、こんなものじゃ釣り合わない。

これしか手段がないと言えば謝りになる。自分は、焦りすぎたのかも知れない。

だけど、これ以上一番大切な人の自傷行為を、見ていたくない。

「っ……姫さま、アリス、どうか……っ　俺達を……ディーを、助けて」

大好きなアリスを、奈落の底に突き落としてでも、たとえそれで、自分の身すら滅ぼしてしまっても。

狂ってしまった彼を、救うためならば……

「えっと、ここを右に曲がって……うわ、こんな通路あったんだ」

此処にすみ始めてからもうすぐ一週間というのに、まだ全部把握しきれしていないのだと痛感する。

狭い道通りは薄汚く、あまり使われていないようだった。

私は身体を斜めに傾けながら、壁の間を進んだ。城の中でもプチ冒険ができそう……。

「にしてもすごいわね……。あの二人、建築関係の仕事でもやってたのかしら」

聞けば、城中にある隠し通路の類はすべて双子の仕業だと言う。とても素人技とは思えない出来だった。

私は色の違う壁に手を当て、少し力を込める。隠し扉たるものは、

手応えの末にゆっくりと開いた。

「……ありえん」

整然と並ぶ階段に、思わず声を漏らす。

最早悪戯の粋じゃない。どう見ても地下組織並の出来だ。

こうやって城は双子モグラによって掘られていくのね……。

石階段に、石畳。高級な素材は使われていないとはいえ、その造りにひたすら感動した。

壁を伝いながら階段を下りていき、1、2メートルほどの石畳を堪能する。

「……いけね。ダムが待ってるんだった」

ダムの怪我を思い出して、私は渋々下から目をそらした。

最後の扉は、ありふれた木のドアだった。今までずっと隠し扉だったので、いやに無防備に見える。

ドアノブに手をかけ、勢いよく回した。

「ディー？ 私だけど

っ?!」

黄色の証明が眩しくって、思わず手をかざしてその部屋を凝視する。

秘密基地、というには意外な大きさの部屋だった。狭くもないし広くもない。ちょうど私がもとの世界で使っていた部屋と同じぐらいの大きさ。

しかし、これを普通と呼んでいいのか。

壁という壁に潜む、私とディーの姿。

たった二人しかいないはずなのに、幾人もの視線を感じるような錯覚に陥る。

そのあまりの異常性に、私は絶句して中心の彼を見つめた。

「デイー……？」

「姫さま……どうして」

鏡張りの部屋で、ただ一人。

中心に佇む彼は、ダムと同じように血だらけで。

ダムと同じところを怪我していて。

だけでも、その傷はまだ真新しいのが見て取れる。

傷口からドクドクと流れる血が、彼の足元に赤い水溜りとなって広がっていた。

左手には、血の付いたフルーツナイフ。

「な、何やってんの、あんた！」

慌てて駆け寄って、彼の手からナイフをもぎ取った。そのまま投げようにして遠くへ捨てる。

デイーはまだ呆然自失とした状態だったが、ナイフが落ちる金属音に反応したらしい、わずかに我を取り戻した。

「姫さま、なんで此処に……」

「どうだっていいよ！ あんた今、何してたの?! ねえ！」

流れる血を手で塞ぎながら、私は彼を問いただした。

状況を見れば、大体が把握できる。だが、どうしても不可解だった。どうしてデイーはこんな異質の空間で、自分の肩を刺さなければ

ばならない。

綺麗な紫の瞳^{パインプル}が、戸惑いながらもどこか虚ろに、こちらを見つめてくる。私は彼の感情が読み取れなくて、さらに瞳を覗き込むようにして身を乗り出した。

違和感。

先程のダムの顔が、記憶の片鱗として脳裏に蘇った。

言葉を発しなれば見分けがつかないほどの酷似よう。顔立ちも、背の高さも、髪の毛の長さだって同じに感じられる。

なのに、何かが。

紫の……瞳？

「見たね、姫さま」

デイーが、静かに紡いだ。冷たくって淡々としているのに、どこか優しい響き。

甘い香りの付いたハンカチを口元に押し付けられる。私はそれが何か分らずに拒絶しようとする、後頭部に手が回ってきて優しく押さえつけられた。

目の前の紫の瞳が、ぐにやりと歪む。大きくなったり、縮んだり……果ては融けた飴のように形状を失っていった。

力の抜けた身体を、そっと抱き留められる。さすが180越えの体格、きつと様になっているのだろう。

身体が重くなっていき、頭が重くなっていき、ついには瞼が重くなっていた。

揺らぐ意識の中、思い出す。
最後に見せた、ダムの潤んだ新緑の瞳を

……

「……………ふう」

ようやく纏めておいた仕事が終わりに、フレイムはペンを置いて椅子に深く腰掛けた。

たいして労力を要しないデスクワークだというのに、上半身が筋肉痛になる。半日以上この机と対面していたせいだ。

「くそ……………っ、アリスが来てから徹夜続きだ……………」

眉間のしわを解しながら小さく舌打ちした。

仕事の量は確かに増えた。だがそれは、同時に嬉しい事でもある。あちこちから上がる、領土回復の声。街の中にまでゆっくりと浸透していた“歪み”は、今やその姿を消しつつあった。

「ふん……………彼女程度の存在でも“歪み”を正せるのか？ それとも……………」

“あの子”が、彼女に共鳴しているのか。

後者の方がありえそうだ。フレイムは小さく微笑みながら伸びをした。何本かの骨が嬉しそうに軋みをあげる。

「失礼します、フレイム様。お仕事の程はどうですか？」

ドアが静かに開き、隙間からひよっこりとルアが顔を出してきた。思わず額にナイフを投げてやるうかと思っほどの笑顔である。こいつ……一日中ほっつき歩いといて……。

「終わったよ、全部ね。君の方はまだ残ってるんじゃないのかい？」

厭味ったらしくいつてやるが、ルアは皮肉に気付かず晴れやかな笑顔を見せた。

「明後日までの書類でしょう？ 明日すべて片付けるので構いません」

「……良いだろう。明日、たとえ何があっても、仕事を片付けるまでは部屋を出るな。良いな？」

「御意」

仕事を先延ばしにする彼の態度は気に食わなかったが、彼はやると言ったらやる男だ。

……アリスさえ関わってこなければ。

フレイムはつまらなそうに肘をつきながら、浮かれ顔のルアを観察していた。

いつもは済ました顔で指を練り出し、書類を整理している彼が。フレイムのことを少し下目に見て、唇を忌々しそうに歪める彼が。

……顔全体で、喜んでいる。

彼は、こんなに嬉しそうに笑う人間だったのだろうか。

城に勤めだしたころはまだ幼く、いつも緊張したそぶりで事務を行っていた。フレイムの兄に、よく眉間の皺を指摘されていたのを覚えている。

フレイムの母が死んで、昔の同僚が一掃された時……彼の瞳から、光は失せた。

いつも皮肉気に唇を持ち上げて笑う彼だったが……まさかこんな笑顔が見れようとは。

少しだけ、アリスに感謝する。

「今日はやけにご機嫌だね。何かあったの？」

「あ、はい。今日は珍しくアリスの方から誘ってくれまして……」

「へえ、意外だね。あの女も結構積極的なんだ」

「はい。いつもだったら先にぐっすり寝てしまうのに……」

「ははっ……それは、男にとっては生殺しだね。可哀想に」

「そうですねすよもおー。ってことで今夜は一晩中付き合ってもらいます！」

「まあ、ほどほどにね。明日足腰が使えなくなっでは困るから」

「……はい？ どうして足腰を痛めるんですか？」

「え……？ そりゃあ、ほら……えっと、その、遊戯で」

「トランプでどうして足腰が使えなくなるんです？」

「………トランプ？」

「そうです！ 皆でトランプ大会をしようねってことになったんですー！」

「………トランプ。そう、トランプね」

意気込んで机に身を乗り出すルアの瞳を見ながら、フレイムはげっそりとため息をついた。

トランプ。まさかこの真面目な男からそういう子供の玩具おもちゃの名前が出てくるとは思わなかった。

てっきり「大人の遊戯」の方だと思っていた自分が恥ずかしい……。

「フレ임様もどうですか？　なるべく人数は多いほうがいいんですけど……」

「トランプ、ねえ……」

姉達に妹ともども疎まれていたせいも、大人数での遊戯はやったことがない。いつも兄か妹とスピードをやったり、ルアを加えてバ抜きをやったりした。

そんな自分に出来るだろうかと眉を顰めるフレ임の背中を、ルアは明るい調子で押してくれた。

「大丈夫ですって。説明は僕がしますし、そんなに難しいルールも添加しません。何より、息抜きになりますよ」

「当然だ。仕事の場と遊びの場ぐらい判別できる」

むっとして言い返すと、困った表情を返された。

……やはり今日のルアはいやに機嫌がいい。こんな時、いつもの彼だったら皮肉を言うか睨んでくるかのどちらかだ。

さすがに此処まで人が違つと気持ち悪いものがある。

「さあさあ、急いで支度してください。たまには良いでしょう？」

「急くな。まったく……君まで子供に逆戻りかい？　餓鬼はディーとダムだけで十分だよ」

嫌味をたらたら垂れ流しながらも、フレ임はタオルケットを肩にかけて防寒の準備をする。

こんな寒い夜に一晚中遊びに付き合わされるのかと思うと、嬉しくも悲しくもあった。

トランプ……か。少し懐かしい。そもそもルアと一緒に遊ぶこと自体、何年振りだろうか。

「アリスとルアと僕と……ディーとダムかな？ 5人で何をやるの？」

「ああ、違います。あと変態猫が参加するので6人です」

「チエシヤ猫が？ 君があいつを嫌がらないなんて珍しいね」

「いいえ、大歓迎です！」

この時の満面の笑みが、どうしてかものすごくうすら寒いものに見えた。

フレイムは早速立ち上がろうとしていた腰が重くなるのを感じた。何だか様子がおかしい。ルアの後ろに黒紫のオーラが見え隠れする……。

「喧嘩では歯がたちませんからね、あのクソ忌々しいど変態猫をぶっ潰すのにはやはりゲームです。フレイム様、タッグを組んであいつを嵌めてやりましょう！」

……そういうことか。

詰まる所、またイオがルアにとってとても不快なことをしたのだろう。行きようのないその憤怒を、倒せる機会を与えられたという歓喜に変え、こんなに興奮しているわけね……。

フレイムは怒りとも歓びともつかない方向をあげているルアを睥睨し、小さくため息をついた。

「あつれえー、双子ちゃん？ んー、どっちかなあ」

ふざけきつた軽い声に、暗く沈んでいたダムはびくりと震えあがった。

慌てて顔をあげると、至近距離までイオが接近している。まったく気配を感じさせないところは施設にいたところと同じだ。

吃驚したダムは、思わず裏返った声で何かを喚き両手を後ろについた。

そんな情けない痴態を晒す彼に、イオは嘲るような、それでいて憐れむような鋭い視線を投げる。

右手で隠した口元は、見えなくてもわかる。愉快気に、嗤っているのだ。

「やだなあ、そんなに驚いてもらっちゃ。まるで俺が化け物みたいじゃん？」

「せ、先輩……。いきなり何だよっ！」

「あは、その口調、ダムくんの方かあ。ほんと、いつからだっけ？
貴方が“僕”から“俺”に変え、わざと乱暴な口調でしゃべるよ
うになったの」

イオが今見せている笑顔は、アリスに向けるそれとはまるで質が
違う。この男が自分たちを心底嫌っているのがわかるような
昏い笑みだった。

自分だって、こんな性悪猫大っ嫌いだ。殺せる実力があるなら、
今にでもこのムカつく笑みを痛みに歪む顔にしてやりたい。

二人の時ならともかく、一人では到底敵うはずもない相手とわか
っていて

その細い首に、飛び付きそうになった。

ダムは目を見開き息を殺して、腕にこもる力をどうにか抑える。
絞め殺しても、首の骨を折ってでもいい。

こいつを、今すぐ黙らせなければ。

この男は、知^しっている。

「デイクンも確か、最初の内は必死でダムくんに合わせてようと
したよねえ。なんでか、お兄ちゃんであるダムくんにはわかるかな？」

危険、キケン。

鼓動が早鐘を打つたびに身体は小刻みに震える。背筋につうつと
いやに冷たい汗が滑り落ちた。

その魔性の瞳から一刻でも目を離さなければ。頭の中ではしつこ
いくらいそう唱えているのに、身体が動かない。

金色の瞳がほそまる。口元を隠していた右手が下にずれ、三日月
の形を象った唇が露わになった。

怖い。

「それでも、ダムくんが嫌がるとあの子は一人称も口調もすべて元のものに戻した。ほんと、すっごくめんどくさかったよね、あの頃は」

そうだ、それは自分達が施設にいて、ちょうど10歳の誕生日を迎えるか迎えないかの頃。

おかしかったのはあの頃が初めではない。最初から、何かが歪んでいたのだ。

だけど、その歪みを亀裂へと変えてしまったのは自分の軽薄な意地。

「……先輩は昔っから、ム力つくほど勘がよかったもんな。あんた、何を知ってたんだ」

「何も。ただ、貴方達の“歪み”に興味があったからいじめてただけ」

「っ……俺たちは歪んでなんかない！」

「そんなことないよ。この世界の“カードもち”は全員歪んでいる。俺も、貴方達もね」

ああ、そうだ。いつしか自我を持ち始めた時、それが“歪み”であると気付き始めていた。

いつも傍らにいる存在を横目で見て、思う。嗚呼なんて、歪んでいるのだらうと。

イオやフレイムのようににはっきりと目に見てわかる“歪み”ではなかった。自分たちに“門番”のカードが定められていなければ、気付くことも意識することも、“歪み”になることもなかった。

“双子の門番”は常に、二つの同じ個体であらねばならない。
声も、貌も、詞も、骸も、眸も、髪も、
個人を忘れ、個体であれ。
魂も。

鏡を覗き、写し身と成せ。

類似でも模造でもない
同一であれ。

「貴方達の“歪み”は魂」

イオの笑い声も、自分の細い息も、何も聞こえない。そのたった一言に呑み込まれるようにして、すべてが闇へと葬られた気がした。いつも傍らにいる存在を横目で見て、思った。嗚呼なんて、自分は歪んでいるのだろうか。

この魂さえなければ。ほんのもう少し、我慢さえしていれば。

これほどまでに片割れは、傷つかずに済んだのであるうか。

熱い雫が、乾ききった頬を伝った。

「身体はまったく同一のものなのに、魂だけまったく異質のもの。片方は同質を望み、片方は異質を望む。貴方がディーくんを見分けてほしいがために自分を変えれば、ディーくんは貴方の真似をして同一であるうとする。だけど貴方と同じ思考でありたいがために、貴方に賛同し貴方の望みに添う……と。あはっ、歪んだ兄弟愛だね。それとも自己愛？」

ダムは下唇を強く噛みしめて、浸透してくるイオの言葉に耐えた。彼の言っていることは不思議なほどに正しい。

きっと本人たち以上に、混乱することなく状況を分析しているのだろう。ダムにとって自分の“歪み”とは、ひどく抽象的なものではない。それがここまで具体的になるなんて……。

だけでも、具体化すればするほどその時々光景が脳裏に浮かぶ。

初めて一人称を変えて、周囲の人に驚かれた。それから、喜ばれた。これで見分けが楽になる、と。

嬉しかった。その時ようやく　生まれ初めて、“ダム”を見てくれた気がして。

「……………俺たちは、二人として生まれたんだ。一つになんかなれるわけないだろ！」

「……………へえ、なるほど」

じゃあ。静かに続けるイオの声は、いつもよりも少し低い。

自分のことではいいっぱいだったダムには、悟ることはできないだろう。イオが異様なほどに彼らに干渉する理由、そして金色の瞳にちらついた悲哀と嫉妬。

あまりにも似すぎていて、また正反対の二対。お互いに同情し、また嫉み合う。

「　　じゃあ、一人として生まれた俺たちはどうして二つになつたんだろうね」

「はあ?!　先輩の言ってることぜんっぜんわかんねえし!　つかあんた何しに来たんだよ!　俺をおちよくりにか?!」

逆切れして顔を真っ赤に染めるダムに、イオはやれやれと肩をすくめる動作をする。その笑みがやけにムカついて、思いつきり何かを蹴飛ばしたい衝動にかられた。

「まさか。そつちも結構惹かれるけどね」

「じゃあ何しに来たんだよ!」

「招待されたんだつてば」

何に、とダムが核心を問い詰める前に。

イオはにやりと悪戯っぽく笑って、ポケットから小さな箱を取り出した。

手のひらサイズのケースの中には、何枚ものカードがピッタリと押し詰まっている。

その先頭で、52枚のカード全員から異質なものと畏れられたピエロが、腕をおかしな方向に交錯させてこちらを睨んでいた。

「カードゲーム大会にね」

ケースの中のジョーカーは、恨めしそうにこちらをじっと見て、分厚い唇を不気味に伸ばして微笑むのだ。

こちら、10月30日現在23時26分。作者生存確認。応答願
う。

……………しよっぱなから何してんだ私orz

どうもこんばんは、あとがきではお久しぶりですが作者です。
・
・
・)

予約投稿ができるようになってからすごく楽になったんですが、
なんだか活動報告やあとがきやらが廃れてしまいました……。

あとがきは主に作者の現在の心情と、それからおまけとして解説
をかく場所ですからねえ……………(逆)

えー、今回はあまりにも難しいと思ったのでちょっとまとめて解
説します。

「は？ 別にわかるしww」という方はどうぞガン無視してくだ
さい！)。+・、・・)

今回、かなりイオが悪役になってます。ヒーロー候補の一人なの
に、いいのか……？

白いイオ君(絶滅危惧種)が好きな方、ごめんなさいorz 視
点を城内での出来事にあてている間は大抵黒いイオ君(大量発生中)
です。

反対に、帽子屋に視点移すとフレ임様が超鬼畜のラスボスと
化します。こんな素直にゲームをやってくれる人ではありません。

【解説*双子編】

?歪み

身体はすごく似ていても心は全く違うこと(“門番”は身体も心も同一であるのが普通)

?二人の望み

ダム 見分けてほしい・デイーとは違う存在でありたい

デイー 見分けられないほうがいい・ダムとは同じ存在でありたい

(補足：“門番”としてはデイーの考えの方が正常)

?二人の行動

>1< ダム、デイーと違うハンカチを買う デイーは同じにしたかったが、ここで反発するとダムと気持ちが合わないということになるので渋々同意 デイー、こっそり同じハンカチを買う

>2< ダム、一人称をデイーと変える デイーもそれに合わせる
ダム嫌がる デイー、ダムと同じ心を持ちたくて彼の言葉に従う

(補足：同じ気持ち・心というのはつまり考えが同じということですが。しかしダムの考えとしては「違うものでありたい」と言うのですから、デイーが「同じものでありたい」と思い彼の考えを模倣するたびに、矛盾が生じるわけです)

?ダムとデイー、イオとロキ

ダム&デイー……二人の身体で、(本来だったら)一つの心を持つ。

イオ&ロキ……一人の身体で、二つの心を持つ。

ということ、似て否なるものです。

同情は似ている状況から生まれ、嫉妬はお互いが願いを叶える条件を持っていることから生まれます。

例えばイオなら“一つの心”、つまり自分の存在を抹消してロキにすべて還すということが可能な条件を羨みます。

微かだけれど、高い音が闇の中から聞こえる。

それは夏の夜に聞く風鈴のような、ガラスとガラスがこすれ合う音だった。

或いは、スプーンで皿を叩く音だろうか。それよりももう少し澄んだ音かもしれない。

私は固まりそうに重い瞼をゆっくり持ち上げながら、瞳が光になれるのを待った。

目を半分を開けたまま、ぼやける世界を見回した。部屋に付けられている明かりはそれほど強いわけではないらしい。

「……え……」

白い世界にいくつも引かれた、太い黒線。その正体が少しずつ、わかってきた。

遠いから確実なことは言えないが あれは、鉄格子。

「何、これ……っ?」

身体をわずかにずらそうとして、右足に感じる冷たく硬いもの。上半身を慌てて起こして、それを見る。

白いブランケットに、少し薄汚れているけれどまあまあ清潔そうなベッド。鉄製の足から、鈍色に光る鎖が繋がっている。

その行先は 右足に嵌められた、足枷。

「な、何なのこれ……」

「あ、おはよー。姫さま」

異常な光景とは裏腹に、あまりにも日常的な言葉が鉄格子の方から飛んできた。

鉄格子を挟んで向こう側に、白衣を服の上から無造作には折った長身の男がいた。

彼は、いつものように子供っぽい無邪気な笑みを満面に浮かべている。

「でい、ディー……よね」

「うーん、姫さまってすごいよね。ちょっとしゃべっただけで僕とダムを見分けちゃうんだから」

何が愉快なのか、けらけらと笑いながらディーは鉄格子に顔を近づけた。

私もなんとか立ち上がって彼の方へ寄ろうとするが、鉄格子に指が届く直前で足枷に繋がれた鎖に阻まれた。

これは、これはそう　　檻だ。

どうしてだかわからないが私はここに繋がれて、檻に囚われている。

鉄格子の隙間から覗く明るい笑顔が、今はとてつもなく猟奇的なものに思えた。

「どうしてこうなってるのって顔だね、姫さま」

「ディー……何で、貴方……」

「ん？　なあに」

ディーは董色の瞳を細めて、優しく問いかけた。

ああ、間違いない。アメシストのような、薄い紫の瞳。

「どうして、瞳の色が変わってるの」

しばしの間、時が止まった。

紫色に変色した瞳は、何も語ることなくこちらを見つめてくる。唇で象られた笑みも、張りついたものへとわかっていった。

どうして閉じ込められているのとか、そんな恰好で何をしているのとか。数多の疑念の中から、どうしてか一番先に口をついた言葉。時間が息を吹き返し、デューは手に持っていたガラス棒を再びビーカーの中で動かし始めた。まどろみの中で聞いた音はこれだったのか。

「姫さまが“アリス”じゃなかったら、今すぐにでもその喉を引き裂いて黙らせるのにね」

ッ！

物騒な言葉を飲み込む前に、ガラスの割れる音に震えあがった。

鉄格子に叩きつけられたビーカーとガラス棒は、無残な破片となつて地面に緑色の液体を零していた。

デューは、先ほどとは全く異質の笑みを浮かべてこちらを見下している。

「硫酸でも流しこんで、喉を潰してみる？ それと筆記も出来ないように、手を切り落とさなきゃね。でも残念。ダムは貴

女を気に入ってるから、僕も貴方を好きにならないと」

「……私を、どうするつもり」

「さあね。この瞳を見た奴は全員殺してきたから、どうすればいいかわかんないや。ははっ、こんな良い方すると髪が蛇の化け物、メデューサみたいだね」

明るい笑い声をあげるデイーは、この場に溶け込んでいるかのよう
に狂気的で、浮き出ているかのように日常的だった。

彼が何を考えているのか、さっぱりわからない。一体何が望みで、
何が許せないのか。

……ダムは緑色の瞳で、デイーは紫の瞳。たったそれだけの違い
が、何だというのだろう。

「デイー、どうして……。どうして、目を見られたことが気に食わ
ないの？」

「見られたくも、知られたくもない。姫さまにだって、そういう秘
密あるでしょ？」

「瞳の色なんて、そんな……っ」

「みんな、そう言うよね。ダムはダム、デイーはデイーじゃない。
瞳の色がちょっと違うからって落ち込むことないわよ、ってね」

デイーは腰を曲げると、近くの丸椅子を引つ張ってそこに腰かけ
た。長身に似合った長い脚を交差させる。

紫の瞳でもう一度こちらに笑いかけると、天井へと視線を移した。
何をやるかと思うと、一方の指で左目を押し広げて、もう片方の
人差し指を瞳に差し込んだ。

やっているところを直接見たことはないけれど……コンタクトレ
ンズだ。

彼を数度瞬きをしてレンズが安定したのを確認すると、もう片方
を嵌めないままこちらを向いた。

左目が緑色で、右目が紫色のオッドアイ。いや、違う、これは…

…。

まるで、顔の中心を境にディーとダムが一つの身体に存在しているような。

その異常な発想に、私は自らの頭をかち割って中身を見てみたくなかった。

一度浮かんだ光景は脳裏から離れず、しつこく脳髓まで刺激してくる。

ディーとダムを真つ二つに割って、糸で縫い付けたのなら目の前の“彼”のようになるのだろうか。

「姫さまが何考えてんのか、わかるよ。こうしてみると、二人の身体を無理矢理一つに纏めたみたいに見えるでしょ」

「……なんか、すごく……グロいわ」

「あはははっ！ だろうね、僕も想像はしたくないよ」

今気付いたことだが、やけに今日のディーは感情の起伏が激しい。酷薄な笑みを見せたかと思うと物騒な言葉を連発して、冗談交じりに話し始めたかと思うところやって大爆笑する。

口を挟むのは危険なような気がして、私はディーの発作が治まるのを待った。

彼は腹がよじれるほど笑った後、まだ唇に笑みをたたえながら再び話し始めた。

「ねえ、姫さま。紫ってさあ、緑とちょうど正反対の色だと思わない？ ほら、白と黒、赤と青みたいな感じで。僕、紫なんて大っ嫌い」

「……私もそんなにいい思い入れはないわ」

「あ、それわかった！ 先輩のことでしょ？ 僕もあの人大っ嫌い

だよー、仲間だね！」

ズバリ言いあてられて、私は口を噤んだ。

あの紫の猫耳と髪の毛がちらつくたびに、むかむかというかなんというか……胸がざわざわする。

そう言えば、今ごろは何をしているだろう。ルアに怒られてはいやしないか。もしかしたら乱闘になってるかも……。

……馬鹿みたい。自分がこんな状況になってるのに、なんであいつの心配なんか……。

「……ま、と言っても僕の嫌いとは姫さまの嫌いじゃだいぶ意味が違うだろうけどね」

「な、何でよっ、別にあんな奴……」

「だって姫さま、人を本気で殺したいと思ったことないでしょ？」

嫌いつてまさか、そんなところまで行くのだろうか。殺したいほど、人を憎んだこと……。

私にはないと言いきれた。なのに、たった一言の言葉が喉に詰まって出てこない。

母を殺したイオ、家族と城の人間を虐殺したフレーム。彼らも、殺したいほどその人たちを憎んでいた。

だけど　　誰も、哀しい。望みもしない運命に縛られ、歪みに囚われてきたあの人たちにとっては……憎悪が、最後の救いだっただのかもしれない。

そして、目の前のこの人も。誰かを憎まなければいけない道を歩んできたのだとしたら。

……ああ、やっぱり。私は、どこまでも生温い。

誰ひとり、嫌いとも憎いとも思えないほど……甘かったんだ。

「ムカついたら殺せばいいのに、姫さまはやっぱり変だよ。例えば……あ、そうそう。今日ねえ、ダムの肩に傷をつけた奴がいたんだ。そいつは喉を引き裂いて殺してやった。それから僕に攻撃しようとした死にぞこないの男！ あいつなんか脳天真つ二つだよ！」

まるで成績を見せるように自分の殺人履歴（こころせき）をまくし立てるデューは、その場に不釣り合いなくらいの明るい笑顔を浮かべていた。

本物の悪魔とは、こういうものなのかもしれない。

その手にはべったりと血が付いているのに、それが穢れとも知らず。

その手には銀色の鋭利なナイフが握られているのに、それが罪とも知らず。

狂ったようにナイフを振り回し、血の雨を浴びる。

それでも悪魔は、狂気故に無邪気に、嗤うのだろう。

「あいつの攻撃避けたせいでコンタクト外れるしさあ……。あーあ、また作り直しだよ」

「……それ、カラーコンタクト？」

「そ、度は入ってないけどね。紫の目を緑にするって、結構苦勞するんだ」

言いながらデューは、右片方の目にもコンタクトを入れた。

しばらくの間痛みを堪えるように目を瞑って開けると、私のよく見慣れたデューの顔になる。

彼自身、コンタクトをしていたほうが精神が安定するようで、その場に座り込むと長いため息をついた。

静寂の後、初めて彼は後悔したような声をあげる。

「……姫さま。さつきはあんなこと言ったけど、僕も姫さまのことは大好きだから。こんなところに閉じ込めて、悪いと思ってる」

「悪いと思うぐらいなら出してほしいんだけど……」

「ごめん、それは無理。だって人間って、どんなに懇願して「誰にも言わない」って言っても、所詮はその場しのぎじゃん。絶対に漏らしてはいけない情報なら、確実な口封じをしないとね」

人を殺したり、私を監禁したりしてまで守らなければいけない秘密　それが、紫の瞳なのだろうか。

デューは後ろに手をつき、胡坐をかいた。緑色の瞳を薄く細め、少しかだけ悲しそうな笑みを見せる。

こんな彼の顔、初めて見た。いつもダムという時は元気いっぱいにはしゃいで、人の状態も構わずに自由奔放な遊びばっか強要してくるのに……。

ああ、せめて。足に繋がれた鎖が千切れて、腕が檻の外に伸ばせたら。。。

頭を撫でてやるぐらい、できるのに。

「誰にも知られちゃいけないんだ。僕の“歪み”のこと、誰にも……兄にも」

「デュー……」

「僕らは、限りなく似ていなくちゃいけない。……ううん、同じじやなきや意味がないんだ。見分ける方法なんて、誰にも知られちゃいけない。同じじゃなくちゃ。僕らは……“双子の門番”なんだから」

「でも、いくら一卵性の双子だって、多少の違いはあるのよ。二人の人間なんだから、当然じゃない」

自分の“常識”が通用しないことなど覚悟の上だ。デューが見せる、“同一”に対しての異様な執着。これが彼の“歪み”なのだと

うか。

だが、ディーはあまりにもあつさりと首を振った。何を言っているんだとばかりに軽快に笑ってみせる。

「双子の門番”は常に、二つの同じ個体であらねばならぬ”
い」

「え？」
「声も、貌も、詞も、骸も、眸も、髪も、魂も」

ディーはまるで歌うような調子で旋律を詠んだ。どこか寂しそうな響きに、胸が締め付けられる。

これが……ディーが同じであることに執着する理由。

“門番”は、同一でなければいけないのだ。ただ似ているだけでなく、同じ容姿で人を惑わす。見分けなんかつけさせない。

「……僕は眸が、ダムは魂がそれぞれ違う。姫さまにとっては普通のことでも、“門番”にとっては“歪み”なんだ」

「同じじゃ、ないことが……？」

「そう。だからせめて、ダムに少しでも近づきたいんだ。笑顔も、仕草も、傷痕も……全部全部、似せてみるの。ダムが好きなものは好きって言うし、嫌いなものは嫌いって言う。ダムが肩を怪我すれば、僕も同じところを傷つける」

ディーは膝を抱き、その間に顔を埋めた。大きな掌で肩を守るようにして縮こまる。……あの、自らナイフで刺していた肩を。

ふざけ半分で言っているのだと思っていた。

『僕が欲しいものはダムの欲しいもの、でしょ？』

確かめるように、呼応するように、お互い添い合っていた言葉。

考えてみれば、いつもこうやって持ちかけるのはディーの方からだった。ダムはそれに合わせて頷くだけ。それだけで、ディーは本当に幸せそうに笑っていた。

同じであることがそんなにも大切だなんて、私には理解わかんない。

だけどきつと、ディーにとってはダムと繋がっている強くて脆い、絆なのだ。

同じであれば、心を通わせられる。同じであれば、鏡を見て兄を思い出せる。同じであれば　もっと、近くにいられる。

だからディーは余計、同一でないことに恐怖し、徹底的に隠そうとするのだ。

「誰にも、見分けてほしくない……っ、僕とダムをバラバラにしないでほしい……」

「ディー……」

震えた声で話すディーの髪に触れたくて、私は精一杯手を伸ばした。

頭を撫でてどうつていうことじゃない。ただ、お祖母ちゃんが悲しい時のおまじないとして教えてくれたから……。

だが、いくら伸ばしても檻の向こうの彼には届かない。まるで、どんな慰めの言葉も、彼には無為なことだと嘲笑うかのよう。

泣いて、いるのだろうか。ダムよりも博識で、ちよつと打算的なところがあるけれど、人一倍負けん気の強かった彼が……。

「だから、燃やしたんだ」

「……………え？」

ビリッ

どれだけの力を込めて引っ張ったのか、デリーの着ていた白衣が
繋ぎ目から裂けた。

白衣の下にきていたTシャツをまくりあげると、肩に残る生々し
い刺し傷が顔をのぞかせる。

同じである証明。^{あかし} 狂気である象徴。^{しるし}

傷を大切そうに撫で上げ　　微笑^{わら}った。

「母さんも父さんも　　邪魔なもの、全部」

僕の瞳^{ゆがみ}を見たから、全部燃やしたんだ

……

デー×ダム過去編に突入します

現在から6年前、9歳のころのミニマム双子です

フレイム過去編の次にグロイです。流血注意

ダムは施設に入ってから一人称を変えたので、過去編では「僕」
です

同じであることが、誇りだった。

同じであることが、使命だった。

同じであることが、二人を結ぶ、唯一の絆。

君の背に、ずっと寄りかけられるのなら。

君の声に、ずっと耳を傾けられるのなら。

君の笑顔を、ずっと見ていられるのなら。

どんな狂気でも、溺れてやる
……

『じゃーんけーん』

勢い良く拳を引き上げながら、兄の顔を窺い見る。誰よりも真つ直ぐで勝負事に熱いダムは、祈るように自分の拳を見つめていた。

次はグーを出すのだろうか。いや……ダムは二回続けて同じのを出すことはないから、チヨキかな。

自分たちよりも早くに合図をした子どもたちが、どこか安心したような溜息をつく。ああ、早く自分たちも出さなければ……先生に怒られてしまう。

『ポイ!』

『はい、皆さん、いかがでしたあー?』

出し終わったと同時に、先生の朗らかな声が部屋を満たした。

間に合ってよかった。そう思うと同時に、ダムと自分の手を見て軽い眩暈を覚えた。

対してダムはというと、この“訓練”の意味がイマイチ掴めてないらしく、むっとした顔で全開にした拳を見ていた。

『なんだよー、また僕の負け? ディー、僕の心でも読んでんの?』

『はは……まあ、ね……』

そんなわけがない。もし自分がダムの心を一言一句間違いなしに読めるのであれば、ダムと同じパーを出していただろう。

この“訓練”は、あいこを出すことに意味があるのだから。

先生はぐるっと辺りを見渡すと、こちらの方に視線を投げかけた。何か忌々しいものを見るように、その眦を吊り上げる。

『またあいこじゃなかったのね、トゥーアイドル君』

『先生……』

『まったく、何度言ったらわかるの。貴方達だって双子なんだから、片割れと同じ考えぐらいできるでしょ？ こうやってやるのよ、見てなさい』

先生は部屋の逆側で子供の面倒を見ていたもう一人の先生を手招きして呼んだ。

もう一人の、という言葉に何ら語弊はない。付け加えるのであれば、もう一人、同じ顔をした先生、とでも言うべきか。

まるで鏡で照らし合わせたようにそっくりな二人の先生は対面し、拳を握った。

一卵性双生児養育学校。2歳から始まり14歳までの一卵性双生児を受け付けるその学校は、きわめて特殊な学校であった。

まず第一に、先生生徒、掃除のおばちゃんに至るまで双子しかない。学校内で一つの顔を見つけても、必ず近くに同じ顔が存在するのだ。なかなか気味の悪い話である。

第二に、その授業。学問や体術のほか、特別なカリキュラムがあった。

それが 理想の双子を作る授業。

『じゃんけんぽいつ！ あいこでほいつ！ あいこでほいつ！ あいこでほいつ！ あいこでほいつ！ あいこで……』

先生たちは通算10回ほどやった後、ようやく満足したのか額の汗を拭う仕草をしてこちらに向き直った。

二人同時に、同じ声で同じ言葉を話す。

『このように、普通はあいこが永遠に続きます。それなのにトウアイドル君ときたら、どちらかが勝ってばかり。まったく、貴方がたのように心を通わせられない双子がいるなんて……失望しました』

ああ……常套句だ。二つの声に叱られながらディーはしょんぼりと肩を落とし、ダムは不満顔で仁王立ちになっていた。

別に心を通わせられないのではない。ダムとはよく意見が一致するし、仲だつてすごくいい。たまに食い違つちやうときも、ディーがすかさず意見を翻すことで喧嘩は起きない。

ただ……自分が悪かつただけだ。ダムの心を完全に見透かすことができない、自分が。

ダムと違っている、自分が。

放課後になると、子ども達は何かから解放されたように一斉に教室から飛び出していく。

デューはその背中を一瞥してから、先生に渡された手鏡を覗き込んだ。

120センチに満たない小さな体躯。もうすぐ10歳になるというのに、成長は止まったままだった。

鏡の中に、小さな顔が見える。顔の半分はさらさらとした赤髪で覆われ、目の部分が完全に隠れていた。

せつかく綺麗な顔立ちをしているのに勿体ないと、辺りの大人達から不評の髪の毛。だけど、これこそが自分を守り通す唯一の鉄壁カーテンなのだ。

『デュー、帰ろうよ!』

鏡ばかり見ているデューにむくれたのか、ダムは彼の手から鏡を取り上げて自分の方へ注目させた。

こんな子供っぽい仕草は嫌いではない。自分がダムを嫌いになるなんてこと、あり得ない。

デューは自分と同じ長い前髪を見て、ほっと息をついた。

ダムといると、心が落ち着く。鏡とそっくりな姿を見て、まだ自分達は同じ存在なんだと安心することができる。

たとえ、髪の下に隠れる瞳が真実を語ったとしても

『うん、帰ろうダム』

『今日の夜メシ何かな？ 僕ハンバーグがいいな！』

『うん、僕もハンバーグがいい！』

つい3日前もハンバーグだったのに……。

ダムの趣味に合わせるのは大変だと、ディーはひそかに苦笑した。ダムはいつだって好悪が激しい。野菜炒めは好きでも、その中にピーマンが入っていたら一切手をつけないというふうに。

『やーい、トウイドル！ またお前らへマしたよな！』

『へマしたよな、へマ！ お前らが“門番”だなんてこの国も終わりだよ！』

『全然“一人”になれてないのにな！』

『まだまだ“二人”のままなのにな！』

後ろからいきなり鞆で殴られて、ディーは転倒しかけた。ダムの身体が前にあつたからよかつたものも、このまま行っていたら床に直撃だったのだろう。

ダムの肩に目を押しつけながら、ディーは背後の声を感じていた。

身体が小さいからなのか。他の子供よりも裕福だからか。“門番”のカードを約束されているからか。それとも 自分達が、出来損ないだからなのか。

こうやって、よく虐められた。虐めと言っても陰湿なものではなく、単なる言葉の暴力。

ああ……殴られるなら、どんなにいいことだろう。殴られたら、

殴り返せる。撃たれたら、撃ち返せる。

少しでも危害を与えられたなら　　こちらだって殺せるのに。

『うつるせーんだよ！　一般庶民は黙ってママのところに戻りやがれ畜生！』

『へへっ、こっちから手を出さない限りお前ら、何もできないんだろ？』

『よえーのに威張んな！　“ルール”に縛られて何もできないくせに！』

……こいつら、今すぐ死んでほしい。

殺したい、とまでは願わないから。神様、もしいるのなら今すぐこいつらの頭上に隕石を振らして下さい。

しかし“ルール”に縛られているのは事実だ。“カードもち”というのは不便なもので、“アリス”が来ると決まらない限りなんの優遇も特別任務もない。

デイーはダムの肩から顔をあげ、そいつらを思い切り睨みつけた。髪の間から見えるそいつらの醜顔。顎の肉が垂れている。ははっ……ペリカンみたいだ。

こんな糞餓鬼どもに構っている暇があったら、ダムと一秒でも長く遊びたい。

デイーは睨みに怯む二人を睥睨し、ダムの手を取った。

先程とは打って変わり、明るい調子で語りかける。後ろの二人はガン無視だ。

『行こう、ダム！　僕らには美味しいハンバーグが待ってるよ！』

『でもさあ、デイー……あんな奴らにあんな事言われたくないよ！』

『いいのいいの、あんなの空想妄想幻想！　僕はダムが好き、ダム

も僕が好き。それだけで十分じゃん!」

「も、もうそ……? なんかわかんないけどそれ、食えんの?」

「……食べれないよ。あんな奴らなんて、嘘ばっか言ってるってこと。僕らはちゃんと一つだよ?」

「何言ってるの? 僕もここにいるし、ディーもここにいるよ?」

「一足す一で、二つだよ!」

「はは……ま、物理的にはそうなんだけど。つまり、心は一つってことー!」

「心……うん、そうだな! 僕らめっちゃ仲いいもんね!」

「そうそう、好きだよ、ダム!」

「僕も大大好き!」

「お、おいつ! 無視してんじゃねーよ!」

「出来損ないのくせに! ぜんっぜん違っくせに!」

「あのさあ」

嗚呼、耳障りだ。ダムの声以外の雑音なんて、テレビを消すように消えてしまえばいいのに。

ゆらりとそちらの方を向くと、二つの肉塊がびくりと痙攣した。

見逃そうと思っただけれど、もう許さない。

「な、なんだよ! お、俺らが攻撃しなきゃ……!」

「どうせ攻撃できないんだろ?!」

『空想妄想幻想を勝手にまくし立てるのは構わないけど』

そう、相手が手を出さない限りこちらも手を出せない。なら、手を出してもらえばいいんだ。

ディーは机の上に立って一気に彼らとの距離を縮めた。細くて小

さいということとは、それだけ身軽ということだ。

呆気にとられる二人の手の一方を掴み、素早くボールペンを握らせる。簡単な動作だった。

『 僕とダムの会話に割り込まないでくれる？ 』

手を握りしめたまま、デューは深々と自分のももに先端を突き刺した。

『すげーすげーすげー！　ディーってやっぱすごいね！　あんな方法であいつらぼっこぼっこにするなんて！』
『はは……だつてあいつらウザかったんだもん。せつかく僕がダムと話してんのにさ』

帰りに南部の公園へと通いづめ、ダムと二人で夕陽を見るのが何よりも大切な時間だった。

あのペリカン兄弟を半殺しまでに留めておいたのも、夕陽を見逃さないためである。

ディーは髪に隠れた目を細め、赤く染まっっていく空をじっと見ていた。

つまらない光景だと、いつも思う。ただ青から赤に変わって、昼から夜に変わっていくだけ。

確かに色彩の変化、という点では不思議なものなんだろうが、どうも自分は素直に喜べない。

ディーはこっそり、左隣に座るダムの方を横目で見た。1年前からほとんど変わらない景色だというのに、自分の兄はこいつも夢中になって見ている。

この瞬間だけは、ダムを遠く感じる。いつもダムから絡んでくることが多いのに、夕陽に心を奪われて自分のことなど世界の隅に追いやられた感じだ。

……わかつている。夕陽にダムを取られたなんて、そんなこと考える意味もない。

ただ、少しだけ寂しくなるだけだ。

だから僕はこうやって、彼の裾を引っ張りながら声をかける。

『ね、ダム』

『んあ？ なに、デー』

ダムがちゃんとこちらを見て返事をしてくれたことに安心し、夕陽に不思議な優越を抱く。

さあ、早く沈んでしまえ。ダムの視線が向けられないままに。

『僕今日、怪我しちゃった』

『はあ？！ どこをだよ！』

『……ここ』

そう言っても手を撫でる自分は、ひどく残酷な子供だと思う。

あのガキを半殺しに出来た代償としては軽いものだが、傷は確かに痛む。ダムがその傷を見ながら、痛そうに顔を歪めた。

治してくれ、だなんて言わない。包帯を買ってきてとも、痛そうでしょとも。

痛そう……だなんて。一番笑える。「痛そう」ではないのだ。これから自分が感じる痛みであれば、「痛い」でないと。

『ね、やってよ』

『………』

『ね、ダム』

『……やるよ』

今回は少し返事が遅い。予想以上に痛そうに見えたのだろうか、ダムは大仰なほどに躊躇っていた。

デーは筆箱を取り出し、先端に赤黒い血が付いたボールペンを取りだした。それを、ダムの手にしっかりと握らせる。

『それとも、僕がやるうか？』

『……いい、自分でやる』

一瞬唇をかみしめ、心を決めるような仕草をするダムを見ていると、さすがに可哀想になってくる。

所詮こんなものは自己満足なのだ。自分の自尊心プライドのために、ダムをこんなにも苦しめている。

だけど、ダムが自分のために苦しんでくれるのは、たまらなく嬉しい。

ダムは拙い動きでボールペンを握りしめ、自分の顎の位置まで上げた。

目を瞑ることはできない。それで位置が大幅にずれてしまったら、それこそ最悪だ。ディーまでもが新たな傷を作らなければならぬ。恐いのだろう。ダムの瞳には、はつきりと涙がたまっていた。ディーは宥めるように　　促すように、彼の背中を撫でる。

『刺して』

『　　ッ！　痛ってえ！』

体重に任せてボールペンをももに突き刺したダムは、痛みのおまじり上半身を後ろへと持ち上げた。

勢い余って、後ろにあった噴水に落っこちる。びしょ濡れになりながら、彼は小さな嗚咽を上げていた。

相当痛かったのだろう、可哀想に。ディーはダムの後を追って噴水に飛び込むと、ハンカチを取り出して彼の傷の治療を始めた。

透明な水に赤いものが混じっていく様は、夕陽なんかよりもずっと幻想的だった。

赤が、無色の上に螺旋を描く。やがて螺旋は太くなっていき、無色を完全に塗りつぶすまで浸食を続けていく　　。

『……ごめんね、ダム』

胸が苦しい。

僕達は、一体いつまでこんなことを続けるつもりなのだろう。

怪我をしたら、相手に合わせるようにして傷をつけ、痛みを共有し合っ。

お互いの流した血が混じり合い、絡み合い、溶けゆくまで傷つけ合っっていく。

ああ、胸が苦しくなるほど

幸せだ。

『……っいい。これが、ディーの痛みなんですよ？』

痛みを必死にこらえながら健気にも笑ってくれるダムは、どこまでも優しい。

そんな優しさに付け込んで、今日も僕は彼を傷つけた。同じでありたいがために、彼に痛みを与えた。

傷も、痛みも。全てを君と分かち合いたい。

なんて、甘美な傷なんだろう。なんて、苦い痛みなんだろう。

ディーは自分の傷を強く押さえながら、もう一度小さな謝罪を囁きにのせた。

夕陽は、水面に赤い残滓を映しながら闇に溶けていった

……

『ただいま母さん!』

『ただいま父さん!』

『二人ともお帰りなさい。晩御飯、出来てるわよ』

温かい迎えの言葉と漂う甘い香りに、二人は顔を見合せて笑った。学校は大嫌いだ、この家は好きだ。家庭的な母に、穏健な父。二人はいつも、甘ったるいぐらいに優しい。理想の双子を演じてさえいれば。

デューとダムは競うようにしてリビングに転がり込むと、机に身を乗り出した。

『やった! ハンバーグだ!』

『すごいすごい、当たったよ!』

『ここらこら、摘み食いはいけないぞ二人とも』

新聞を広げながらゆっくりと諭す父の声に、さっそく手を伸ばしていたダムはぎくりと止まった。

その様子を見て、デューはくすくすと笑う。父もつられて笑っていた。

母が最後の料理を持ってきて、手を洗ってきなさいと一言叱る。

なんて平凡な家庭だろう。食に困ることもなく、一つ屋根の下に家族で住まい、皆で笑い合う。

家族全員を殺して最高権威の座を勝ち取った女王も、スラム街でのた打ち回る貧乏人達も、これほどの幸せは味わえないのだろう。

デューは不思議な優越を感じながら、ダムの隣の席に座った。
ダムは行儀悪いことに、椅子の上で胡坐をかいている。デューも
そっくりそのままその格好を真似た。

『今日ね、今日ね。デューがクラスのムカつく奴ぼっこぼこにした
んだよ!』

『ダム、ご飯粒ほっぺについてるよ』

ダムはいつもはしゃぎながらデューの武勇伝を語り始めるので、
聞いているこちら側としてはどうもむず痒い心地になる。

ダムのほっぺから白いご飯粒をつまみあげると、自分の口へ運ん
だ。一粒だけのご飯は、無論何の味もしない。

母は、優しい笑顔を浮かべながらそんな二人を見ていた。こんな
時に話を促すのが、母の役目である。

『あら、その子が何をしたの?』

『別にー。でたらめ撒き散らして、帰ろうとした僕らの邪魔した。
むっかついたから半殺しにしちゃった』

『はは……お前らは本当に喧嘩っ早いな』

父の些細な言葉に、小さな幸せを感じる。

両親はいつも、自分達を名前で呼んだりしない。たいてい「お前
達」「貴方達」「二人とも」といった集合体だ。

いや 正確には、名前で呼べないのだから。彼らにすら、自
分達は見分けがつかないのだから。

自分にはそれが、嬉しくてたまらない。

名前など、自分達がお互いを呼び合うためだけにあればいい。

デュー、ダムと呼ばれて区別されるよりも、トゥーイドルの一言
で片づけてもらった方がいい。

……まあ、さすがに名前がないのは不便だろうけど。

『でね、でね、そいつらめっちゃくちやむかつくの！ 僕達のこと出来損ないだって！ なんだよ、じゃんけんくらいで。大体、じゃんけんに勝ったのはディーなのにさ！ なんであいつらが威張んの？！』

どうやらダムは未だにあの“訓練”の意味を理解していないらしい。あいこを出さなきゃ意味ないのだと、これまでに何度も説明したはずなのだが……。

今までずつと穏やかな顔でダムの話を聞いていた母は、急に眉を上げた。

まずい……この顔、怒ってる……。

『貴方達、じゃんけんであいこを出せなかったの？ どうして？』
『どうしてって、……どうして？』

質問の意味がわからないとでも言うようにダムは首を傾げた。頭に血が上りかけている母は、馬鹿にされたと感じたのか瞳に憎悪の炎を灯した。

そこでようやく、ダムもこの状況に気付く。戸惑いながらディーに助けを求めるが、ディー自身対処法が見つからない。

ふと、今まで様子見をしていた父が冷たい声で水を刺した。

『おい、お前。そんなにカツカしても仕方ないだろう。二人にだって不調の時がある。今実際にやらせてみればいいだろう？』

『あなた……そうね。二人とも、今ここで、じゃんけんをしてみて。必ずあいこを出すのよ』

二つの冷淡な声に怯えながら、ディーは大人しく拳を作った。ダ

ムはこの状況に不本意らしく、むっと唇をひん曲げて二人を睨みつけている。

反抗的な彼を強制的に向かい合わせ、拳を小さく振った。じゃんけんの合図だ。いつもだったらここでダムは、張り切って構えてくれる。

なのに。

『 なんてだよ』

なのに、どうして君は。

親に、反抗してまで。

涙を、浮かべてまで。

僕を、振り払ってまで。

僕と違うことを望む

？

『 なんて何から何までっ、ディーと一緒にじゃなきゃいけないんだよ！！』

突き飛ばされたディーは、そのまま椅子から転げ落ち床に頭を打った。

涙を隠すようにして袖で目を覆ったダムには見えなかったらしい、こちらに気付きもせずに玄関へと走っていく。

母さんの怒号も、父さんの制止も、 僕の叫びも、彼の耳には入らない。

置いていかれる、なんて考えたこともなかった。

いつだって自分達の足幅は同じで、どちらかが遅れたとしても弾けたように笑いながら足並みを揃えてくれる。

小さくなる背中を見上げながら、手を伸ばす。

どうか、振り返ってこの手を取って。何転んでんのと笑って、僕を引き起こして。

お願い　　これ以上、遠くならないで。

『何なんだ、あのガキは！』

父の怒号で、デイーは現実世界へと引き戻された。周りの景色が急に視界に飛び込んできて、頭が痛くなる。

頭が痛いのはそのせいだけじゃないか……相当強く床に打ち付けたらしい。机の足にも当たったようで、額から血が流れていた。

父がこんなに激昂するのは初めて見たかもしれない。今にもデイーの後を追って絞め殺さんばかりに殺気だっている。

対して母は、いつも以上にヒステリックな調子で何かを喚いていた。

『やっぱり、やっぱりそうなのね！　あああつ、どうしましう……っ。やっぱりこの子たちも歪ひんんでいるんだわ！』

『“歪み”……か。まさか我が子にはないと思っていたが……“門番”のカードと引き換えに、双子として当然のことを失ったようだな』

『どうしましょう、どうしましょう！　こんな子供、恥はずかしくて世間には見せられないわ！魂たまが違う双子なんて、“門番”にはもつてのほかよ！』

『当然だ！　女王陛下には“門番”のカードを返上する。それから、学校に通わせるのをやめよう。こんな出来損ない、あの神聖な場所に置いてはいけない』

母さんと、父さんは。二人とも、もともと一卵性双生児だったという。それも、自他ともに認める“理想の双子”だったと。

片割れはどこにいるのと、前に聞いたことがある。母はとても幸

せそつに笑って、こつ言つた。

『完全に一つになったのよ』

それは、カマキリのメスが産卵するために愛する夫を捕食するのと同じように。どうしても一つになれない二つの骸かいたを、一つにするために。

母さんと、父さんは。

それ以上のことは考えられない。狂っていると認識する前に、その考えが頭の隅から追い出された。その後なんて言つたか、覚えていない。

自分達がそうであつたがために、母と父は“理想の双子”には異常な執着心を見せていた。

デイーは痛む頭を手で押さえながら、髪の下から二人を覗いた。運悪いことに、母と目が合う。

母はこちらを振り向くと、目を充血しそうぐらい見開いて、口を横に歪めた。憎しみを顔で表現すると、こんな顔になるのではないだろうか。

『なんてこと、なんてこと！　せつかく我が子が“門番”と聞いて舞い上がったたというのに！　出来損ないの双子なんていらわないわ！』

なんだか、実感がわかない。母がキッチンから包丁を抜き出してこちらへ一歩一歩歩いてきているというのに、B級映画でも見ている気分だ。

なんて安っぽい映画なのだろう。主人公はこの僕。主人公と一番仲がいいのがダム。優しい母と父。何事もない、平和な食卓。それが、こんな狂気にまみれてしまっている。

母と父が双子だったからいけないのか。自分達が双子だったからいけないのか。双子として生まれてきたことは、罪だったのか。

苦しくて切なくて、瞳から涙がこぼれた。デューはそれを無造作に袖で拭おうとする。

長い前髪が邪魔だ。そう思って片手で髪を掻きあげた、
剎
那。

『ッ』

すさまじい絶叫が、母の開いた口から迸った。その音量に、怒り心頭であった父でさえも耳を塞ぎにかかる。

何があったのだろう。そう思う間もなく、足に冷たい感触を感じた。

恐る恐る下を見下ろすと、床に深々と刺さった包丁が見て取れた。なんとも危ないことに、銀色の刃はデューの足首すれすれのところに直立している。

いや 少し切れているところを見ると、かすったのだろうか。

傷つけた。母が、僕を。

『……何なの』

母の手が叩きつけるように伸びて、前髪を強く引っ張った。わずかに漏れかけた悲鳴も、彼女の瞳に映る自分を見た瞬間に喉の奥で殺されてしまう。

長い髪が取り払われ、無防備にもおでこが丸出しになっている。見られている。母に、父に……母の瞳に映る自分に、見られている。

嗚呼、ごめんなさい。
どうか、どうか見ないで。
どうか許して。

『何で、私の子が』

『わかった。この子を殺そう。ダムの方を一人息子として育てればいい』

父の言葉が遠くで聞こえる。実際は母の隣にいるのだから、大した距離ではないはずなのに、何度も反響してここまでたどり着いた感じだ。

母以外、何も目に入らない。いや、正確に言えば母の瞳に映った“自分”以外。

紫の瞳を片方だけ細めて、“自分”は歪んだ笑みを見せる。そうか、知られてしまったのか。なら、お前だったらどうする。

母はボケたように頭をゆらゆら動かしながら、無表情で睦言を呟いていた。父の方が冷静で、彼女の肩を抱きかかえて諭すように言っている。

だけど、ディーの前でダムを殺すと言っているあたり、冷静とはとても言えないのかもしれない。

包丁は、手を伸ばせば取れる位置にある。

母が付けた傷も……確かに、ある。僕には、反撃の権利があるのだ。

『……嫌。嫌よ。私、あっちの子の方が嫌い。生意気』

『そうか、ならダムを殺してディーを置いとけばいい』

『……やっぱり嫌。二人とも、私が死ぬ気の想いで産んだ子なの。殺したくない、殺せない』

『そつだな。ダムを下街に売ったらどうだろう。あの子はたくましい子だ、生きていける』

『……あの子たちを、引き離すのね。ふふ……』

『双子としては出来損ないだったが、一人息子としては自慢の美男子だろう？』

『ふふ、ふふふ、あはっ、あははははっはあっは』

『そうだろう？　そうだろう？』

二人を狂わせたのは、自分だ。

完全に一つの個体となるため、一片割れを自らの手で殺めた（・・・）
（彼らは、知らぬうちに自分達の姿をディーとダムに被せていたのだろう。）

理想として。或いは、悔悟として。

それが、考えも瞳の色も違う双子ときた。過去の自分達とはほど遠い。投影し、愛することも懺悔することもできぬほどに。

引き離す、だなんて。その言葉を聞いた瞬間、胸の奥で凝り固まっていたものがスツと冷えて流れていった。

最早、何の躊躇も背徳もない。ただ、己が本能に従うだけだ。

ディーは腕を伸ばして包丁の柄を握り、勢いよく引いた。呆気なく包丁は抜け、そのまま一歩二歩後退する。

『……母さん、父さん』

刃の先を二人に向けても、彼らは気味の悪い笑顔を浮かべるだけだった。僕らという精神安定剤を失った今、彼らが現世へ戻ることはないのだと思う。

これが、“理想の双子”となった片割れどもの末路なのかと思うと、ぞつとする。

自分とダムも、いつか一つになるために一方に手をかけるのだから

うか。

同じものでありたい。同じでなければ、必ずいつか引き離されてしまう。ずっと一緒にいられなくなってしまふ。

だけど、僕達は決して同じにはなれない。眸も 魂も。

『片割れに、会えるといいね』

一つでありたい。そう思うほどに、引き裂かれていく。

アリスが、行方不明になった。

動揺したのは城だけではなかった。アリスが見当たらないという噂は人の口を伝って、西部のスラム街にまで響き渡っていた。

“アリス”は世界の精神安定剤であり、全人民の宝だ。当然、暴動が多発した。

アリスのことだけを考えたくても、そういうわけにもいかない。ルアは、暴動の処理とアリスの捜索に追われて昨日も寝ていない状況だった。

そんなところに、突然こいつが転がり込んできたのだ。

「……何の用ですか。僕の仕事場に勝手に入らないで下さい」

冷たい声音に、地べたに直接座り込んでいる男はびくりと体を震わせた。抱きしめた白兔の巨大人形が、ぎゅうっと圧迫される。

まったく……片割れがないと相変わらぬの役立たずっぷりだ。

「今すぐその汚い手を放しなさい。それはアリスのために買ったものです。貴方のものじゃない」

「わ、わかってるよ、うるせえな……」

憎まれ口を叩きながらもウサギの人形を放さないのは、片割れが留守で寂しいからだろうか。

……下らない。そんな依存の仕方、やめればいいのだ。寂しいのならどこまでも追いかければいい。決して離さないように、手錠でもすればいい。

このアリスが行方不明という事態に陥って、双子の門番は二手に分かれることになった。

デューは最後まで嫌がって泣き喚いたが、フレイムの命令ならば逆らえない。デューは門番を、ダムはスラム街の統治を任じられた。ダムはウサギの頭に顔を埋めながら、じっと考え込んでいるようだった。

あのお気楽な双子でも、多少はアリスの心配をしているのだろうか……。

「……白ウサギ、案外落ち着いてんのな。もっとあたふたするかと思っただけ」

「だから貴方は餓鬼なんです。まだ何の糸口も見えてないのに無闇に動くなど、馬鹿のすることだと思いませんか」

「っ……お、お前、姫さまのこと好きなんじゃないのかよ！」

「ええ、好きですよ。大好き、愛してます。貴方には関係ありませんけどね」

「ふざけんな！ 好きだったらもっと一生懸命になるだろ！」

……これだから餓鬼は嫌いだ。4年の差はこうも大きい。

ルアは持っていた万年筆を一旦置いて、ダムの方へ一瞥をくれた。ダムは少しだけ怯み人形を握りしめるが、すぐに意気を取り戻したのかこちらを睨みつけてきた。

餓鬼は嫌いだ。どこまでも直線的で、見ていて呆れ果てる。

何度も何度も壁にぶつかって、そのすぐ脇に回り道があるのに、壁に執着して意地でも前を行こうとする。

……救いようのない、馬鹿。

「僕が一生懸命でないとも？」

「っ……だってそうじゃなか！ 全然頑張ってるようには見えないし、余裕ぶっこいてるし！ ほんとに好きなら……ほんとに好きなら、もっと……っ」

息が詰まったように、ダムは言葉を最後まで紡がなかった。

ルアは今にも泣き出しそうな顔で胸を押さえる彼をじっと見つめ、深いため息をついた。

双子は、大嫌いだ。何かと自分の悪口を言うし、自分の命令は何一つ聞かない。これほど使いにくい部下もあつたもんじゃなかった。それに計画性がなくて直球で、どうしようもないほどに頭が悪い。薬剤師でトラップを得意とするのに全く理知的に考えられない。およそ自分とは正反対の餓鬼だった。

だけど。

「 貴方は何を焦っているんです」

「 ……っ?! な、何言っただよ、俺は別に……」

「そうですか。僕には貴方が別のことで悩んでいて、冷静沈着を保っている僕に苛立ちを覚えているようにしか思えませんかね。なんでもっと焦らないのか、なんで冷静でいられるのか、とね。幼稚な子供の考えそんなことです」

「っ、うっせーよ！ お、俺だって、必死なんだよ！ 一生懸命なんだよ！」

「結果の結び付かない努力をひけらかしますか。頑張った、なんて

言葉は言い訳にしか使えません」

……本当は。本当は、この椅子に座っているだけでもつらい。泣き喚いてもいい、縦横無尽に走り回ってもいい、手当たり次第殺してもいい　　アリスを想って、狂いかった。
冷静になど、なれるはずがなかった。理性も抑制も、限界点ぎりぎりの所まで張り詰めている。

追いかけられるものなら、追いかけている。地中深くまで掘り進めて彼女を探してやる。地獄の果てまで追いつめて犯人を鬭り殺してやる。

そんなことをして、彼女が戻ってくるのなら　　ッ。

「っ……何をこんなところで油を売ってるんです。早く出て行って自分のすべきことを成しなさい」

ダムが羨ましい。彼には、自由がある。思う存分外へ出て、アリスをがむしゃらに探しまわる自由が。

だから、こうやっていつまでも迷っている彼に苛立った。

城に囚われていないのだ。机に縛られていないのだ。なのになぜ動かない。

「し、しなきやいけねーことなんて……わかってんだよ！　でも、でもっ……俺じゃ、無理なんだ……っ、　　俺じゃデーは救えねえんだ！」

ダムは咆哮と同時にぬいぐるみを床へと叩きつけた。柔軟性を持つたぬいぐるみは首を45度に曲げて一度大きく弾む。
落ちていくウサギの赤い目が、悲しく光った気がした。

自分の言った言葉が、何度も頭の中で反響している。

救えない。その言葉は、諦めではなかったのだろうか。

ルアの言う通り、頑張るといふ言葉は結果前の言い訳に過ぎない。だけど、自分はそれ以前に頑張るといふ行為すら放棄して、大好きなはずの弟のことを諦観していたのではないか。

どうせ救えない。自分じゃ力不足だ。彼を狂気から醒ませない。

だから、アリスに頼った。

愕然とした。自分のした行為を、もう一度反芻してみる。

自分を心配してくれていたアリスを騙してディーの部屋まで導き、変動をただ待ち通した。

危険は重々承知だったはずだ。狂気に溺れたディーは、理性も分別も失っている可能性が高い。

なのに自分は……“アリス”だから命はとられないという理由だけで、何も知らない彼女に役を押し付けてしまった。

「……俺、最低だ……」

自分は、アリスに何を望んでいたのだ。アリスなら、どんな病気でも治す魔法を使えるとも思ったか。

ディーの傍にいたのは自分なのに。彼の狂気を知るのも、説得すべきなのも自分なのに。

救えないと決めつけて。アリスならと思いこんで。 逃

げていた。

「……一体どうしたんです、トゥーアイドル。顔色が悪そうですが……」

突然叫んだかと思うと静かになったダムを、さすがに心配に思ったのかルアが訝しげに尋ねてきた。

先程からずっと、仕事の手が止まってしまっている。自分が邪魔しているのは明白だった。

「……………だ」

「はい？」

声を出そうとすると、喉からひゅうつと小さな風が吹いた。

ダムはほとんどない唾を飲み込み、何度か発声をしてからもう一度繰り返し返す。

「ダム、だ。……………トウーアイドルって呼ぶな」

「……………確かに呼びにくいのでそちらの方がありがたいですが。では、ダム」

ルアは一瞬微妙そうな顔をしたが、要望のままに名前を呼んだ。慣れていないため、どこかくすぐつたい。

ダムが白ウサギと呼び、ルアがトウーアイドルと呼ぶのは単に仲が悪かったからである。深い意味はなかったはずだが……………今だけは、“ダム”で良かった。

「先程から貴方は何の話をしているんです。貴方の片割れなら、“門番”の務めを果たしているはずでしょう？」

ルアはペンを口元にあて、片眉を寄せた。

彼が疑問に思うのも無理はなかった。ディーは“門番”の仕事に志願して、一生懸命侵入者を排除しているはずだ。

この時間帯以外は。

「……………今ちようどお昼だから、食事運んでると思う」

「は？ 自分の、ですか？」

「……姫さまの。監禁してる」

「何だと」

“アリス”は、餓死こぶしちゃいけないから……」

瞬間。

ダンッ

後頭部の鈍い衝撃よりも、至近距離で目に入るルアの顔よりも、ここまで一瞬で机を飛び越えてきた跳躍力よりも、喉を押さえつける手の冷たさに驚いた。

何が起こったのか、理解できない。

人間というものは、瞬速の速さで机を渡って反対側に移動できるのか。

自分より10センチ背の高い男の首を壁に押し付けて絞めあげることができなのか。

こんなにも 怒りに満ちた瞳を、できるのだろうか。

「アリスはどこだ」

ルアの声は、普段からはとても想像つかないほど低かった。獣のような唸り声を押さえながら言葉を紡いでいるのがわかる。

先程まで淡々と仕事をこなしていたルアは 虚偽だったのか。ダムのため一言で、こんなにも憎しみを露わにしている。

ダムは気管を圧迫される苦しみに耐えながら、ルアの手首を掴んでなんとか気道を確保した。

「俺、じゃないっ、俺が監禁してるんじゃない！」

「だったら何を知ってる！ 言え！」

「こんな、状態で、話せるわけねえ、だろっ」

ちよつとでも反抗すると、逆の手で腕を拘束され絞め上げられた。関節が外れそうな痛みにも絶叫が迸りそうになる。それを止めたのが、皮肉にも喉を押さえつけるルアの手だった。

この小さな身体に、細い腕に一体どれほどの力を秘めているのだろう。ディーという時は手合わせしても必ず勝てたが、今は状況が違う。

助けてくれた、片割れはいない。

ルアは喉を絞めていた手を緩めると、肩の方へ置いた。恐怖で床に崩れ落ちそうになるダムを促すようにして、地面に座らせる。

それが、氣遣いだと信じていた。

だが、ルアは蒼の瞳に激しい憤怒を込めて、鋭くダムを見下ろす。気を許していないのが見て取れた。

「これで話せるでしょう？ 警告しておきますが、人間を牙で殺せるのは何も猫だけではないんですよ」

おもむろに話す彼の口から、白い犬歯が見えた。人間が持つそれとは全く形状が異なっていて、肉食獣のそれのように鋭い。猫もウサギも、的には牙を剥く……か。

こつやって座らせたのは、おかしな行動をすれば即座に喉笛に噛みつく気だからだろう。

残酷で、野蛮で、なんと確実な殺し方。

ダムはひとしきり息を吸うと、緊張のあまりごくりと唾を飲み込んだ。

「監禁してるのは、俺の弟、ディーだと思う。姫さまがいなくなつたあの夜、俺が姫さまにディーのところまで案内したんだ」

「……それは、共犯ということですか」

今の間の間に、一体どれだけの怒りを押さえつけただろう。冷静なんて言葉、今のルアには到底似合わない言葉だった。ダムは静かに首を振る。

「俺は、ただ……姫さまだったら、ディーを救えると思ったんだ。だから……」

「だから、みすみす危険なところへアリスを行かせたと」

ルアの声が震えて聞こえ、次いで腹に鋭い衝撃を覚えた。腹を蹴られたのだ、と気付くのに数秒を要する。それも、とびきり固い革靴で。

ダムは床に蹲りながら、シャツをめくり上げて腹部を診た。白い肌に、痛々しいまでの赤が広がっている。これは明日痣になるだろう。

さすがに非難の視線を投げると、ルアは冷めきった瞳でダムを睥睨していた。

いや……これでも彼にしては抑えているのかもしれない。

アリスの安全を第一に考える彼のことだ、その完璧な均衡を崩されて内心腸が煮えくりかえりそうな心地だろう。

「ぐっ……そうだよ！俺は姫さまの監禁場所まで全部つきとめてある！だから俺の話聞いてくれ！」

「どうして。貴方ももう片方を拷問にかければいい。多少時間がかかると思いますが、貴方の長話などよりも悲鳴の方が愉しいでしょうっ？」

「ふざけんな！このサディストが！」

「アリスのためなら、悪魔にでも鬼にでも堕ちましょうっ」

本気……だろうか。確かに拷問というのは張ったりではないのだ

るう。実際、この城の一部の部屋に拷問部屋があるのを記憶している。

「だけど、それでは駄目だ。このままこいつの怒りにまかせて、俺がデイーの居場所を吐いたとしたら、デイーは間違いなく、殺される。」

とにかくここは、彼を落ちつかせないと……っ！

「頼むから……っ！俺の話聞いてくれ！」

「……こうしている間にもアリスがお腹を減らしているのであれば？」

「ダムはちゃんと毎日3食運んでる！あいつのことだから、へんに危害は加えてないはずだ！」

「……どうしてそう言いできます」

「^{おれ}兄だからだ！」

ルアを強気にも睨みつける。自分で言うっておきながら、その言葉に胸が膨らんだ。

「デイーの一番好きな人。デイーを一番に好きな人。それがこの自分だとしたら……自分しか、デイーを救うことができない。」

ルアは冷たい瞳でこちらを睨みつけたままだった。だが、わずかに怒りを落ちつかせたのか一歩足を引く。

「どうして……どうして、僕に言おうと思ったんです。僕のごとは大っ嫌いでしょう？」

「うん……だけど」

ロキは、昼間でもイオの監視の目があるから駄目だった。同じことをイオに知られていたら、何はともあれ殺されていたと思う。

「フレ임には……言えなかった。自分達がただの駒としか見られていないのは知っている。同情もされることなく殺されていただろ」

う。

消去法から、と答えるつもりだった。

なのに、どうしてかこの舌は、心の奥にしまい込んだ真実を言葉にのせた。

「お前が、俺らのこと一番よく知っているから……」

「……まあ、貴方の家庭教師も務めましたからね」

ルアはその言葉が意外だったのか、小さく吹き出した後気まずげに視線をそらした。

赤くなる横顔は、どうやら先程とは違って怒りのためではないらしい。

仕方ない、とでも言うように長いため息をつくと、こちらを覗きこんできた。

「聞いてあげます。話したいことすべて、吐き出しなさい」

「っ……ああ」

声が震えないようにするのが精一杯だった。思いもかけない優しい言葉に、不意打ちされた胸が熱くなる。

もしかしたら。自分達が、こんなにも彼を毛嫌いしなければ。

……もっと、仲良く出来たのかもしれない。今となっては、遅すぎる期待だが。

一つ一つ、過去のことと現在怒っていることを頭の中で整理する。初めての狂気は　あの夜からだ。

「俺は、母さんを殺したんだ」

あの夜、鮮やかな血の海の中で。
僕は、同じ殺人者リッパーになった。

日が落ちた後の公園は、暗く冷たい空気に呑み込まれていた。デイーと一緒に夕陽を見てから1時間と経っていない気がするのに、こんなに肌寒くなるのだろうか。

噴水の縁を構成する大理石のベンチに腰掛けて、街の明かりをぼうつと見る。

南部の商店街は、夜通し光り輝いている。

光を失った子供が道に迷わないようにするためなのか。

それとも闇を知った大人が道に迷った結果なのか。

赤、青、黄色に点滅しては、眩惑的な光景にダム的心を惹きつけていった。

しかし、ダム以外にも夜の光に惑わされたのか息を切らして公園に入ってきた少年が一人。

少年は目深の帽子を片手で押さえつけながら、必死であたりを見渡していた。

なにか、忘れ物でもしたのだろうか。

『……いた！』

少年はダムの方を向くと、途端に大きな目をつり上げてこちらを睨みつけた。

いや　　正確には、ダムとは向かい側の縁に座り、己の膝を抱いている小さな子供を。

子供の方は少年が走ってくると、突然堰を切ったかのように泣きだした。

怒ろうと思つて口を開いてたのであるう少年は、抱きついてくる子供の頭を撫でながら柳眉を下げている。

『こんな夜遅くまで外出ちゃダメ！　すっごい心配したんだからね！』

少年は子供の顔を無理矢理上げさせると、両頬を引つ張つて「めっ」としかつた。今時そんな怒り方をする人もいるものだ。

子供は少年とお揃いの茶色の瞳からボロボロと涙をこぼしながら、何度も頷いた。

『ご、めんなひやい、ごめんな、にーちゃん……』

『わかつたならもうしない！　ほんとにもう……バーカ』

『ば、馬鹿つて言うなよ！　大体、にーちゃんがオレの服破いたからいけないんだろ?!』

『細かいことにこだわって……それを馬鹿つて言うの!』

ぎゃあぎゃああと騒ぎながら、それでも子供の方は暗闇の中不安なのか、少年の裾をずつと握りしめたまま去つていった。

少年は何も言わない。縫られていることさえ嬉しいとも言つように、子供の手に自分の手をかぶせた。

夜道を歩く二人の去り姿を見送りながら、ダムはふと思う。

自分達は、あんなふうに喧嘩したことがあったのだろうか。

いつだって、デューは優しい。
ダムがどんな悪事をしたって一緒に協力してくれて、一緒に叱られてくれる。

ダムが好きなものは僕も好きと、嫌いなものは僕も嫌いと同感してくれる。

ダムの良いところも悪いところもすべて、丸ごと認めてくれる。

僕も、一緒だよって。

『……それって』

今更になって、気付く。

何かを言おうとするとき、デューは時折苦しそうな顔を見せた。まるで、何かに耐えるように。

『僕に、無理矢理合わせてるってこと……？』

本当は、デューはハンバーグなんか好きでも何でもなくて。ピーマンの方が好きかもしれない。

そう考えると、悲しくなるより先に腹が立った。デューにはない。この、世界に。

どうして、あいごじゃなきゃいけなかったのだろう。

今日の、先生の顔を思い出す。困っているようにも呆れているようにも怒っているようにも見えた。

先生の言葉はよくわからなくて、ダムの耳では右から左へ流れたのに。

デューは……悲しそうに目を伏せて、じっと耳を傾けていたのだ。自分にとっては、勝てば嬉しいし負ければ悔しいただの遊びだった。

た。その相手がディーでも、大差はない。
なのに、ディーにとっては勝っても負けても不満な結果だったの
か。

“同じ”以外の選択肢は、なかったのか。

『だーれだっ』

後ろから回ってきた温もりが急に両目を覆い、ダムは吃驚して声
を上げた。考え事をしていたせい、後ろの気配に全く気付かなか
った。

くすくすと、笑い声が耳に触れる。それだけで誰か、疑いようも
ないほど確信した。

迎えに来てくれた。そう思うと、恥ずかしいようなくすぐりたい
ような気がする。

だけど やっぱ嬉しい。

大好きな弟がすぐ傍にいる。たったそれだけで、今までの苛立ち
も不安も吹き飛ぶほどの幸福に包まれた。

『ディー……ごめんね。僕、勝手に飛び出してきちゃって』

『ダムは悪くないよ。いつだって、僕はダムの味方だから』

『そんなのわかってるよ』

『ダム、だあいすきだよ！』

『わかってるって』

『うっん、大好き。………大好き』

『……ディー？』

今日はどうしたのだろう。何度も聞きなれている言葉のはずなの
に、今夜のはどこかおかしい。

ダムは彼の手をどかして彼に向き直ろうとするが、それは叶わなかった。

思いもがけない力で抱きしめるように頭を押さえつけられる。なんだろう、様子がおかしい。彼は……どうしてこんなに濡れているのだろう。どうしてこんなに震えているのだろう。

『ね、ダム。ダムも僕のこと好きだよね』

質問というよりも確認の言葉だった。

息が耳にかかってくすぐりたい。彼が発する声も、よく聞いてみれば小刻みに揺れていた。

何かから守るように、或いは何かから隠れるように。ダムの身体を包み込んで盾にする。

『何言ってるの。僕だってディーのこと、大好きだよ』

『……うん。別にね、不安になったわけじゃないんだ』

『ディー？』

『……ね、ダム。ずっと一緒にいいよね』

ずっと、ダムの隣に入れたらいいのに。ディーが目頭をダムの肩に埋めて小さく呟いた。

離れることなんて、想像もしたことがなかった。産まれたときから一緒に、どこに行くのだった二人で。なのに、なんでそんなことを言うのだろう。

ダムはその時初めて、肩の熱を感じた。ディーの瞳からこぼれた雫が薄手のシャツに染み渡っていく。

『一緒にいるよ！』

『ダム……』

『何で、なんでそんな悲しいこと言うんだよ！ 絶対一緒にいるん

なくても、僕だけはディーの味方だから』

『……ありがとう。　　ごめんね』

するりと、ようやく目を覆い隠していた手がとかれ、ダムはずっと閉じていた目を開けた。

何も変わらない幻想的な夜。闇に塗りつぶされた公園には、子供の姿などはいる余地もない。

ふと、自分の目元が濡れていることに気が付いた。変だ。別に泣いた覚えなどない。

不思議に思つて人差し指の腹で拭うと、わずかに付着した。

『……え？』

暗い中でよく見えないが、引き伸ばされたその色は……赤。

これは何だと聞こうと思つて振り向いた先には、ディーはいなかった。

慌てて反対側を見まわすと、左隣に確かにいた。

『僕ら是一緒にいちゃいけないっていう人がいるんだ』

こちらに、右手を差し出して。まるでダンスを誘うような仕草に、ダムは状況も忘れて彼の姿に見惚れた。

街の光が逆光となつて、ただでさえ暗くて見えない彼の姿を黒く塗りつぶしている。

そんな中でも、その色だけはやけに鮮烈に見えた。髪を、シャツを、腕を、靴を、ふとももを、手を染めあげている　　赤。

ああ、あの手で。彼は、ダムの目を覆っていたのだ。

『だから、ねえ』

その手を取ってはいけない。頭の中で警鐘が鳴り響く。

それと同時に、その手を取らなければ目の前の彼が消えてしまうような気がした。

少しでも躊躇えば、彼は悲しそうに瞳を細めて手を下げるのだろう。独り歩きだして、街の光に呑み込まれて　消えてしまう。

彼の誘いに乗ったわけではない。彼の言うことを聞いたわけではない。

ただ　ただ、彼を自分のもとへ引きとめておきたかった。

『僕と行く』

生ぬるい血がべったりと付いた手は、ぞっとするほど冷たかった。

残酷描写が含まれます。ご注意ください。

家の中は、ひっそりと静まり返っていた。

元々両親は節電家で、皆が一卓に集まる食事の時などは他の電気を消すのを習慣づけている。

そのせいか、音の聞こえない家は死に絶えたように当たりの間に溶け込んでいた。

弟に手を引かれ、ダムはぎしりぎしりと鳴る床を裸足で歩いていく。

時折大きな音が鳴るのは、彼の足取りがおぼつかなく何度も転倒しかけているからだ。

デューは握りしめた手を決して離さないように、ずっと痛いほどの力を込めていた。

ゆっくり、ゆっくり歩を進める。その先にあるものを想像すると、今にでも尻尾を巻いて逃げだしたい衝動にかられた。

『ダム、怖い？』

デューは初めてこちらを振り返り、血の付いた顔でにこりと笑った。

安心させるためというわけではないことはすぐに分かった。彼が少しでもダムのことを心配しているのなら、こんな強迫めいた笑顔は浮かべない。

促すようにして彼はダムを前に押し出し、ドアノブを握らせた。息が詰まるほど、濃厚な血の匂い。

この先を見てはいけない。この扉を開けてはいけない。そう思うのに、背後のデューは逃がさないとしても言うようにダムの手を握っていた。

『でい、デューは……怖く、ないの……？』

『僕？ もちろん、怖いよ』

だったら何故、こんなことを。

そう続ける前に、耳元でデューが朗らかに笑った。

『でも、ダムとバラバラになる方が何千倍も怖い』

確かに、そんなこと想像もつかないけれど。いや……想像が付かないからこそ、だろうか。

自分にとっては、扉の向こうにあるだろう現実が、最も怖い。空想的な絶望よりも現実的な喪失に恐怖心が沸いてしまうのは、変なことだろうか。

いつまでもドアノブを回さないダムに焦れたのか、デューは横から手を出してきてダムのそれに重ねた。

ドアノブを誘導するようにして指を動かす。だが、あくまで回すのはダム自身だった。

『ッ？！』

ドアを開けた瞬間に漏れだす、異臭。廊下で臭ったのとは比べ物にならないかった。

やっぱり、怖い。これ以上踏み込みたくない。これ以上はいけない。

だが、一度解放されたドアは何もしなくてもその先の世界を広げていった。デーが後ろから扉を押しているのだろう。

闇。

それはなんと優しいものか。どんなに嫌な光景でも、すべてを一切合切包み込んで目隠しをしてくれる。

光。

それはなんと残酷なものか。どんなに見たくない光景でも、覆っていた闇を引き剥がして強制的に曝け出させる。

闇の中、薄ぼんやりとした淡く白い光が浮かんでいた。懐かしい。去年のクリスマスプレゼントに買ったキャンドルだ。

キャンドルは、まるで魔王召喚の儀式のように6つ、円を描くようにして並べられていた。

その光に、中心に蹲る二人が映し出される。

血というものは一か所にたまれば、水たまりのように当たりのものを反射するらしい。血面に映ったキャンドルが、ゆらりと揺らいだ。

『母、さ……っ』

その中心で、母は恐怖に見開かれた目をこちらへ向けていた。

手足が動いたのなら、自分の背後で笑うデーから這いつくばってでも逃げただろう。

口が開けたのなら、鼓膜が破けそうなほどに高い悲鳴をその喉から進らせただろう。

手足を拘束され、猿轡を噛まされてさえないければ。

『な、なんだよこれ……ひっ』

思わず前にふらつきかけ、左足で地面を確かめようとする。その足が、何かぬめりのあるものに触れた。

その場に崩れ落ちて、目の前に転げられているそれを凝視する。幾重にもわたる切り傷。空洞となった目の穴。切り落とされた四肢。断末魔の後であろう口は、ぽっかりと間抜けに開いていてその先に闇が続いていた。

一瞬、それが何であるかわからなかった。いや わかりたくなかった。

わかってしまったら、特定されてしまう。ディーの体中にこびり付いた血の跡……その持ち主が、特定されてしまう。

だけど、このストライプのシャツは。

『ああ、ダメだよダム。父さんはもう死んじやってんだからさ』

後ろからディーの足が伸びてきて、どかすように肉塊を蹴りつけた。そのあまりのぞんざいさに、ダムは悲鳴すらも押し殺してしま

う。
しかし動かぬ屍となった父は存外に重量があるらしく、そう簡単には動きそうもなかった。

苛立ったようにディーは鋭くため息をつくとき、ダムの袖を引っ張って立つよう促した。

『ダム、立って。座ったままじゃ、人は殺せないよ』

『ころ、す………？』

一体、誰を。そう尋ねる前に、デイーが視線で示してくれた。
ああ……あの、キャンドル。あの配置は、やっぱり魔方陣を象っ
ているのだ。最近漫画で見かけて、デイーとかっこいいと騒ぎ合っ
た覚えがある。

だけれども、それは単に魔王を召喚するためのものではなく。
生贄を。

『母さんを、殺して。僕と同じ魔物ひつしんになるんだ』

恍惚の表情でデイーは語る。この時初めて、そしてようやく、ダ
ムは自分の弟が狂っていることを悟った。

父を虐殺して、母を自分に殺させようとしている。自分にあった
傷と同じような傷を作らせたのと同様に、殺人劇にダムすらも巻き
込もうとしている。

ただ、同じ殺人者でありたい。それだけのために。

逃げなければ。そう思うのに、今更になって恐怖で足が竦んだ。
立ちあがることも、ましてやデイーを振りきることもできない。
指すらまともに動かせないほどの恐怖。今度こそ 弟デイーに向け
られた、恐怖。

ダムはデイーに後ろから支えられながら立ち上がった。そのまま、
まるで片足を追っている患者のようにゆっくりと、弟の肩を借りて
歩く。

逃げることはできない。まるで、自分の半身が麻痺したかのよう
だった。こんな不自由な身体でデイーから逃げられるわけない。

『ほら、これ』

デイーが笑顔で拾ってきたのは、10キロはありそうな重厚な斧。

どちらからでも切り刻めるように、両刃になっている。

こんなもの……どこにあったのだろう。

『僕とお揃いのやつ。父さんがね、誕生日プレゼントにっこつそり用意してくれたんだ』

『父さんが……』

『皮肉だよ。僕も、この斧が吸う初めての血が父さんのだなんて、想像もしなかったよ』

デューは少しだけ悲しげに、眉をひそめてみせた。しかしそれは所詮笑顔という仮面での表情。真実かどうかなんてダムにもわからない。

ダムは促されるままに斧の柄を取り、その質量に踏鞴を踏みそうになった。デューが後ろから肩を押さえ、防いでくれる。

武器を持ったことがないわけではない。体術ならば学校でさんざん叩きこまれたし、デューとダムは群を抜いて武芸に長けていた。年齢なんて理由で敗北したことはない。身体は小さくとも、いやむしろ小さいからこそ、機敏に動いて相手を出し抜いていった。

今回も同じだと耳元でデューが嗤う。ただ、相手が抵抗を封じられた女というだけで。

『さあ、構えて』

デューの言葉は、まるで毒薬だ。耳から、肌から染み渡り、ダムを深くまで浸食していく。ダムの意識を蹴落として、苦しめる間もなく息を奪う。

ダムは自分の意思とはかかわりなく、腕が動くのを絶望的な眼差しで守っていた。

ぎらりと鈍く光る刃の先を、母の方へ向ける。まるで、まるでこ

んなのじゃ自分が母を殺す絵面じゃないか。

母を　　殺す？

母は、自分のどこかで他人だった。

好きなものはいくらでも買ってくれるし、美味しい料理を作って待っていてくれる。怠けたところ一つなく、一言で言えば“理想的な”母だったのである。

だけど自分は　　生まれてから一度も、ダムと呼ばれたことがない。

いつだって、ディーとセットで「貴方達」「二人とも」だった。そちらの方が呼びやすいからだと思いたい。決して……決して見分けが付かなかったからじゃないと、思いたい。

いくら心の中で念じようとも、疑念は晴れない。

母は、“ダム”を見たことがなかった。

『何を迷うの、ダム。ダムだって母さんのこと、ほんとには嫌いだったんでしょ？』

耳元でそつと囁かれると、本当にそうであるように錯覚してしまう。

自分は、母も父も　　憎んでいたのだ。二人とも、ダムとディーを区別できなかった。自分の理想ばかり押し付けて、同じものであることを強要した。

幸せな家族。理想的な双子。なんて……なんて偽善じみたお芝居だったのだろう。

憎いのだろうか。望まぬ理想で自分達を雁字搦めにした、母が、父が。……この世界が。

憎いから　　すべて壊すのだろうか。

『　　違っ』

発する声は、情けないほどに震えていた。

だけど、言わなければ。なんとしてもディーを止めなければ…
…必ず後悔する。きっと、今まで通り一緒になんていられなくなる。
数瞬だけの違いかもしれないが、自分はディーの兄なのだからし
っかりしないと。公園であつた兄弟のように…：自分がディーを叱
らなければ。

『こ、こんなの、絶対間違ってる……っ』

『……どうして？　母さんのこと、好きだったの？』

『そ、それも違うと思うけど……殺したいなんて思ったことないっ』

『　　じゃあ、これを聞いたら？　母さんも父さんも、僕らを引
き離そうとした。ダム、君を下街に売ってね』

……なんだ、それ。そんなの、聞いたことがない。でも、ディー
がこんな嘘をつくとは思えない。

考えられるのは　　今日の自分の発言。自分が、どうしてディ
ーと一緒にじゃなきゃいけないんだなんて言って飛び出したから。

とうとう望んでいた“理想の双子”にはなれなかった自分達を見
て、もう要らないとでも……？

『それ以外にもダムかディーどちらか一方を殺すって案も出てたよ
ね、母さん』

ディーはおもむろに母の方を見下げると、その脇腹に勢いよく爪
先をめり込ませた。

吹き飛びはしなかったものも、母は大きな目を零れそうなほど見

開いて、苦しそうな声を猿轡の間から漏らす。

止めようとする正義感も、母に対する憐憫も湧いてこなかった。

ダムは泣きそうな顔で、母を見下げる。こんなに胸が痛いのは初めてだ。

誰に馬鹿にされても、“理想の双子”じゃないと嘯かれても、外面だけは怒って内面ではどこか　ほっとしていた。

それはきつと……心のどこかで、“理想の双子”の理念に反発していたから。

だけど、母も父もそれを許してくれなかった。自分たちよりも理想を愛し、理想からかけ離れた途端に不要物として見捨てた。

愛されてなど、いなかった。

『　　母さん』

あの時、家を飛び出していったのが自分でなくディーだったのなら、自分も父を殺し母を縛りあげただろうか。

……ははっ。考えるだけ無駄、か。

この中で、“理想の双子”を忌み嫌う人間なんてダム一人だけなのだから。

見分けられてはいけない。同一であらねばならない。ディーとセツトで、トウアイドル。

誰も、見分けられない。誰も、違うことを認めない。誰も、名前を呼ばない。

ならば　……

『僕は、誰？』

わからなくなる。意識が混濁して、視界が涙で滲んで、身体から

力が抜けていく。

もたれかかるようにして後ろに体重をかけると、ディーが背後からそっと抱きしめてくれた。

『……ひどいよね。せめて一緒に殺してくれればいいのに、片方だけ生かしておくなんて。ダムと引き裂かれるぐらいなら、僕は

』
『違う』

優しい声で続けようとしたディーの言葉を、ダムはぼつさり切り捨てる。顔は見えないけれど、ここに来て初めてディーが動揺したのがわかった。

同情するようにして言っているけれど、ディーの悲しみとダムの悲しみはまるで異質のものだ。

見分けてほしい。この感情が双子特有のものだとして、正常な双子は見分けてほしくないと思望のならば。

ダムに、味方はいない。

……ディーでさえも。

『僕は、自分が消えていくのが嫌なんだ。誰も、誰も“僕”を見てくれなくなるのが怖いんだ……っ』

『ダムがそれを望むなら、僕もそれを願うよ』

虚構の味方。ディーも、本当はわかっているのだろう。どんなに同一に近づけようとしても　自分達は、違う。

だから、声を殺して泣くのだ。ダムの首元に熱い額を押し付けて、ダムから隠すように。

仮面が融けていく。嘘が剥がれていく。

デューは……いつまで、仮面を付けて嘘を吐くのだろうか。嫌いなことを好きと言い、望まぬことを願うというのだろうか。

苦しい。もう何もかも、終わりにしてしまいたい。

たぶん、それが唯一デューと共通する想いなのだろう。

『壊そう、全部』

どちらが先に言ったのだろうか。もしかしたら同時に言ったのかも
しれない。もう、どうでもいい。

ダムはしっかりと柄を握り直し、母の前に対峙した。恐怖に塗り
たくられた瞳も、必死に逃げようとともがく様ももう気にならない。

どうして、一度でいいから“ダム”を褒めてくれなかったのか。
頭を撫でて、「偉いわ、ダム」と言ってくれただけで……きっと、
一生分の幸せを感じたのに。

斧が、重い。とても一人で持ち上げ切りそうもない。

足を踏ん張って苦戦するダムの背中を、デューが後ろから抱きし
めた。そのまま、斧の使い方を教えるように掌を這わせてダムの手
の甲に合わせる。

デューの力も相まって、ようやく頂上まで振り上げ切った。

重いのは、なんだったのか。斧だったのか、後ろのデューの想い
だったのか。或いは 自分達の積み重ねようとする罪だったの
か。

『恐れれば、目を瞑っていればいい。夏にやったでしょ？ スイカ
割りの要領でいいんだ』

笑えない冗談だ。バッドは黒光りする斧で、スイカは母さんの頭。
声援は断末魔だったか。

それでも、ダムはデイーの言うとおりに目を閉じるしかなかった。これ以上、母さんの恐怖で歪む顔を見ていたくない。自分のやるうとして、見えていたくない。

腕の力を抜くと、主導権をすべてデイーに委ねた。デイーは頷くように息を吐くと、己だけは目を開けたまますべてを見ていた。暗闇の中で、腕に別の力が入る。重力も合わさって、腕は勢い良く下へと振り下ろされた。

だけでも途中でやけに柔らかいストップパーがかかる。それと同時に、遠くで甲高いくぐもった悲鳴が聞こえた。

もう一度、持ち上げる。今度は一回目よりも若干抵抗があった。斧の先端部分が何かに引つ掛かっているらしく、なかなか抜けない。

腕がデイーの手に誘導され、無理矢理上下へと引かれる。にちゃ、と。ねばついた液体が、足元を浸食していった。

『大好きだよ』

炎に包まれた我が家をぼうつと見上げるダムの背中に、額を押し付ける。

ダムが後ろのディーに気付かないわけがないのだが、今は彼の顔を見たくなかった。

ディーはひたすら気を引くようにして、彼の首へ腕を回す。それでも、ダムは弟の方を見なかった。

炎が発するかすかな音の中、嗚咽が時折混じる。それがディーとダム、どちらのものなのか本人達自身にもわからなかった。

『大好きだよ』

噛み砕くようにして、何度も紡ぎだされる苦しみ。

その言葉が、どうしてか今は哀悼の言葉に思えた。

「姫さま、食事だよ」

この生活が続いて、もうすぐ1週間がとうとうとしているのだろうか。窓すらもないところに監禁されているため、時間の感覚が麻痺している。

麻痺しているのは感覚だけではなかった。まったく使う機会がなかったため、足の筋肉はだいぶ衰えていた。きっと、今走れと言われてもできないだろう。

私は左足をそつと摩りながら、鍵を開けて檻の中へと入ってくるディーを待った。

ディーがここを訪問するのは朝と夜の二回だけ。私の眠りが覚めるのを見計らったかのように入ってくるのが多かった。

「今日のメニューはねえ、我らがコック長の腕をふるった餃子に、イワシの塩焼きに、バジルのスパゲッティ！ ね、一緒に食べよう？」

「……中国に日本にイタリアね……。いつそこにインドとフランスが欲しいわ」

「ちゅーごく？」

「とにかく、組み合わせがおかしいってこと！」

「そんなのどうでもいいじゃん。僕は好きなの食べたいの」

普段のデイーは、状況を忘れてしまうほどいつも通りだった。

「冗談を言いながら朗らかに笑うし、いつだって自分勝手だし、イワシのつつき方は目も当てられないほど汚い。」

そのことに安堵し、一方でまた不安にもなった。

私はいつまで、こんな檻の中で“日常”を続けるつもりなのだろうか。

「あの、デイー？」

「姫さまー、早く食べないと僕が全部食べちゃうよ。いっぱい食べなっつて」

「私……いつになったらここを出ていい？」

「だから、僕の両親の話したでしょ？ 僕はなんとしても僕の秘密を隠し通すし、親だって姫さまだって容赦はしない」

「だけど、いつまでもこうやって閉じ込めておくわけにはいかないでしょ？」

デイーから聞いた話だと、私がいなくなったせいで暴動が頻発しているという。しかもそれを、私を探しながらルアが鎮めているなんて……。

きつと相当疲れるだろう。早くこの状況を打開して、彼を安心させてやりたい。

だが、デイーが私をただで放すわけないこともわかっている。

「まあそうなんだけどね。僕も、よくわかんない。僕が何をしたいのか……きつと、よくわかってないんだと思う」

いわしを突くにも飽きたのか、デイーは餃子の皿を持つと、私の隣に腰かけた。古いベッドが二人分の重量にぎしりと音をあげる。彼はフォークで無造作に餃子を突き刺すと、私の口へと運んできた。

腕は縛られてないので自分で食べれたが、せつかくなので口を開けてもらっておく。

一口で食べるのには少し大きすぎた。私は縦半分ほどを歯で挟むと、上を向いて落とすようにすべてを口に入れた。

「うっわぁ……。蛇みたいな食べ方するね、姫さま」

「むっ……。うるひゃい」

「ははは……。やっぱり姫さまって面白いなあ。こんなことばっかしてるから信じてもらえないかもしれないけど、僕姫さまのことほんとに好きだよ」

「私だつて、こんなことされてもあんたを嫌いにはなれないわよ」

この頃、気付いたことがある。

デイーは笑う時、頭を右に傾ける癖があった。少し困ったように、くすぐったそうに笑うのだ。

ダムと一緒にいたなら、きっと気付かなかっただろう些細な違い。

デイーは違うことが“歪み”だと言うが、本当にそうだろうか。

性格や口調、瞳以外にも違つところがあると思っただけ……。

「あ、ここ寝癖」

「へ？」

「ダムだつたらきつとこんなところ跳ねてないわよ。ね？　こんな些細な違いどうつてことないんだから、さっさと私をここから出してよ」

「ふっふっふっ。甘いね姫さま。今朝のダムはもつとボンバーでした。ダムのを梳かした後、必死で同じ髪型にしたんだからね。完成するのになんと30分！」

人差し指と中指、薬指を突きだしてデイーは誇らしげに笑う。

私は駄目かと肩をすくめながら、元気そうなデイーにとりあえず胸をなでおろした。

ダムのことを話し始めると、デイーの顔に花が咲く。兄の悪事やドジ、笑い話を古今にわたって詳細に話したのが常だったりする。よくそんなに覚えているなと思うが、嬉しそうに話す彼を見ているのが好きだった。

だけど、時折思い出したように悲しげな露を零すのだ。

デイーは前髪を掻きあげるようにして私の頭を撫でた。

頭の撫で方にも人の特徴が現れるというのは本当のようだ。

「……姫さまにはほんと悪いことしてるなって思う。でも、もうすぐ終わるから。きつとそのうち、ここも見つかるとよ」

「デイーは……やっぱり見つかってほしくないの？」

「そりゃあそうだよ。僕の“歪み”が知られたら、世間への誤魔化しが効かなくなるからね。父と母のように……引き裂こうとするかもしれない」

謝罪の裏返しは、罪の意識。罪の意識のそのまた裏返しは……まだ続けるという願望と意志。

だけど、彼の場合は少なくとも願望はないと思う。

兄に嘘を吐き、周囲を誤魔化し、追手から隠れ……泣きそくに顔を歪めながら、掠れた声で謝る。

一体どれだけの苦痛であろう。どうしてこの人が、そんなものを望むと言うのか。

ただ、見えもしない何かに急ぎたてられるようにして袋小路へと迷い込んでいく。

「ダムと引き裂かれるくらいなら、僕は

」

上へ、上へ、上へ。

そうして、何もかも見下ろせる位置にまで立つたら。

「アリスは、こんなところに」

西部地方はどこにいても腐った肉の臭いがする。ルアは手袋の付いた手で鼻と口を押さえながら、周りに目を凝らした。

ここ数年、やれるだけのことはやった。国の資産を掻き集めて施設を何箇所かに増設したし、上流貴族に呼び掛けて慈善活動を促した。

「ただ……何も変わらない、この嫌な空気。広がる格差。国の、ゴミ捨て場。」

「あ、ここ。俺らがフレイム様に拾われた所。いやー、運命の場所だね」

「……僕にはただの瓦礫の山にしか見えませんが」

「もうすぐだよ。この先に、でっかい時計塔があんのは知ってる？」

「確か、施設が焼けた跡にできたというものですね」

「どっかから来たお偉いさんが作っていったんだ。愛と平和の象徴とか言ってたけど、どうだかね」

それはおそらく、上流貴族の慈善家だろう。

馬鹿め……そんなでかぶつを作るくらいなら、どうして痩せ細った子供たちに食料を与えてやらなかった。凍えた子どもたちに服を与えてやらなかった。

前に行くダムは、ランタンを持ったまま背中を強張らせている。緊張はしているのだろう。だが、それにしても早い立ち直りだった。今までしみつたれた過去を話していた泣き虫のダムとは大違いだ。

これが、兄というもののか。

……自分は一人っ子で、親を早くに亡くしたから分からないが……兄弟がいたらきつと心強いのだろうなと想像する。

しばらく暗い路地裏が続くと、光の先に時計塔が見えた。
目の前に聳え立つ時計塔は、なんとも壮大だった。だが綺麗とい
うわけではない。大方、事前にも飽きたその貴族が放置したままな
のだろう。

「ふむ、なるほど。まったく意味をなしていないでかぶつですね」

「そ、全然役に立たないでかぶつなんだ」

「ですが設備を揃えれば大きなレストルームになりそうです。この
事態が収まったら、企画してみましよう」

「……ああ、頼む」

両親を失い、この街に放り出された。何とかして同じ境遇の子供
を救いたいと思うのは二人とも共通した願いであるらしい。

双子が視察に行き、ルアがそれを元に計画する。そうやって、こ
の街の崩壊寸前だった治安はぎりぎりながらも保たれてきた。

ルアはもう一度時計塔を見上げた。首が痛くなるほど、高い。こ
れだったら国を囲む壁も越えて外が見渡せるんじゃないか。

「確か、ここに……あつた」

ダムは汚れた壁に指を這わせ、そこに微かな筋を見つける。それ
を下へ下へと辿っていくと、茫々に生えた草むらに紛れてスイッチ
を見つけた。

スイッチと言っても飛び出しているものではなく、巧妙に壁と同
化させている四角だ。壁の色に少し乳白色を加えた感じのもので、
親指の爪ほどの大きさしかない。

ルアはしゃがみこんでそれを眺めながら、「ふむ」と小さく頷い
た。早く押さないものかと思うが、ダムは背中を向けてボタンを睨

んだまま、指を動かそうとしない。

どんなに明るく振る舞ったとしても、檻褸が出る。どんなに固く決心したとしても、逃げたくなる。

だから、弾んだ声を上げるのだ。だから、嗚咽を殺して笑うのだ。だから、決して、塔に背を向けられないのだ。

ボタンをなぞりあげる指先が細かに震えている。冬というにはまだ早すぎる季節なのに、おかしいことだ。

……恐いんですね、なんてことは言わない。自分にはこの男に情をかける理由がないし、たぶん相手もそれを望んでいない。

ただ、彼の思うがままにさせてやるだけだ。たとえそれが彼をますます追い込んでも、それにかけてやる優しさなんて、自分にはない。

「……なるほど。これでは見つかるはずがありませんね」

「当然だよ。ここは俺の自慢の弟の、とっておきの隠れ家だからかな」

いやに明るい声が痛々しい。

「……貴方の助けなど借りずとも、1週間もあれば見つけてました」

「じゃあ1週間分の貸しができたじゃん！ 白ウサギ、全部終わったら何か美味しい料理作ってよ。俺、ハンバーグがいい！」

無理に繋げる会話が哀しい。

「無駄口の減らないクソ餓鬼ですね。僕はコックじゃありません」

「お前料理担当！ 俺とディーはカードの採配してるからさ、……今度こそ、皆でトランプ大会やろう」

時々挟む沈黙が苦しい。

「……まあ、あの変態猫に負けっぱなしというのも癪ですからね」
「先輩強かったもんなあ……ほんと、あの人の弱点って何なんだろ」
「こちらが聞きたいぐらいです。まったく、あの忌々しい猫め……」
「人間って多少は弱点あつたほうが可愛げもあるってもんなのにな。俺みたいに」

「貴方は落ち度が多すぎです。こんな状況になったのもすべて、貴方のせいですよ。貴方が收拾つけないさい」

「うっせー。わかってるって。ちゃんとディーにあつたら　　今
度こそ、兄として叱ってやろうと思う」

それでも、にへらとだらしなく笑って、この男は自分の日常を取り戻そうとするのだろう。

結局のところ、皆似たようなものだ。イオもフレイムも、この馬鹿も。いつだって、弱さを見せないように毛皮をかぶる。

どうして、他人頼ったりしないのだろうか。自分の力で不足なら頼ればいい。頼ってなんとかなるなら、意固地を張って何かを失うよりずっとましだ。

(……何を考えてるんだか。こんな奴に頼られても、僕は最初から見捨てるつもりですけどね)

ルアは頭を振って、邪念を吹き飛ばした。今はこいつの心配どころの話じゃない、アリスのことを考えないと……。

アリスのことははっきり言って心配だった。特に西部地方に案内された時には、青ざめたものだ。だが、ダムの話によるとディーが毎日食事を運んでいるから暴行の心配はないらしい。

ああ、でも。ようやくアリスに会えるのかと思うと今にも膝が崩れそうになる。この5日、一睡もしていないのだ。精神が極限状態

にある上、今は緊張だけで立っている感じだ。アリスに会えたら…
…立てなくなるかもな。

「トウー……いえ、ダム」

「……なんだよ。名前呼ぶなんて、気色悪い」

「貴方が呼べといったんでしょ、このアホンダラが。さっさと案内しなさい。何たらたらしてるんですか」

「わ、わかってる。うっし、押すぞー!」

ダムは人差し指をピンと張って、少し手前に引いた。

彼は、今どんな顔をしているのだろうか。ふと気になる。

きつと、下唇を噛んで目を見開いて 緊張した顔。きつと、

歯を噛み締めて目をきつく瞑って 怯えた顔。きつと、唇を震

わせて目を潤ませて 不安そうな顔。

興味はない。義理もない。手を取るつもりなんて、ないのだけど。

「なあ、白ウサギ」

「その複数名詞呼びやめてくれませんか? うざったいです」

「じゃあ白ちゃん」

「……………白ウサギでいいです」

「……………白ウサギ、一つ……………聞いてもいいか?」

「……………どうぞ」

先程はこの男の過去話に付き合っ、大幅なタイムロスをしてしまった。

聞いてみれば何の事はない、弟の気が狂って両親を殺したというただの殺戮劇だった。同情もできなければ、面白みもない三流の昔話。

だからきつと、自分が少しでも情をかけようとしているのは過去のダムではない。

目を瞑り、弟にすべてを投げ出した情けない餓鬼ではなく今の、ダム。

緊張や恐怖、不安に押しつぶされそうになりながらも、目をそらさずに前を睨みつける今の彼だからこそ、手を差し伸べる価値があるというものだ。

フレイルムがどっかから拾ってきた二人の餓鬼。

兄は常に前に立ちながら、いざって時は弟の影に隠れた。弟は弟で、いつだって兄の意見に承諾して自分の意志を曝け出さなかった。結局、誰もが幼い子供だったのだと思う。打算のために双子を養ったフレイルムも、互いに依存しあった双子も、何一つ気付かないまま心だけが離れていった、自分も。だけど、今は。

もう途方に暮れるだけの子供じゃない。

「この先に行つて、ディーに逢つたら……何ができるかな」

「まず、アリスを救出できるでしょう」

「……うん」

「ディーと貴方には当然然るべき罰を受けてもらいます。命の覚悟はできてますね？」

「……っ、うん」

「全部終わつたら、またみんなでトランプをしましょう」
「……っ?!」

「僕のお手製ハンバーガーを食べながら、あのムカつく猫をこてんぱんにしてやるんです。どうです、魅力的な未来設計だと思いませんか」

んか」

「……………うん！ ……うん！」

ダムは口元を手で押さえながら、何度も頷く。地面についたもう片方の手は、その爪で大地に跡を付けていた。

雨も降っていないというのに、ダムの下の土には小さな水滴が落ちた跡がある。

堪えきれなくなったのだろうか。ああもう、やっぱり不用意に優しい言葉を使うんじゃないかった。

アリス以外に優しくするなんて、自分らしくない。こんな自分がすぐつたくつてしょうがない。

「あーもう！ いつまで泣いてんですか！ さっさと行きますよ！」

「なっ……………泣いてねえよ！」

「じゃあその水滴は何ですか。雨なんて降ってませんからね」

「こ、これは……………涎だ！」

「……………汗って言わないあたりが貴方の個性だと思います。それと、汚いです」

「うるせえ！」

ダムは汚れた袖で乱暴に目をこすると、気を取り直したようにポタンを睨みつけた。

纏わりついてくる負の感情をすべて振り切つて、意志の炎を燃やす……………いい瞳だ。

先程まであんなに迷っていたのが嘘みたいに、押す瞬間は呆気なかった。

カチリ。小さな音がして、ほんの少しだけ四角いスイッチがへこむ。

それと同時に、ルアの目の前のドアが何か重いものを引きずるよ

うな音を立てながら動いた。

隠れ家、というのだからてつきり下の方にあるものだと思っていたのだが、これは。

「隠れ階段、ですか……」

「これだけ大規模なものは一人じゃ作れないから、きつと専門家に頼んだんだと思う」

「上に登る……しかないようですね。なるほど、入り口と出口を最小限に絞ってある。よほど隠し通す自信があったようですね」

「……行こう。この先に、ディーと姫さまがいる」

ディーは胸をそらすようにして背筋を伸ばし、ごくりと息を飲む。なんだその格好は……肩に力が入りすぎだろう。

ルアは見るからに緊張しているダムの背中を呆れ半分不安半分で見守りながら、額に手を吐きため息を吐いた。

階段は、石でできていた。それほど見た目を重視したものではないらしく、かなりでこぼこしている。

ルアはうつかり足を滑らせないように手を付きながら、慎重にダムの後を追った。

暗い。本当に最小限の明かりしか用意されていないようだ。

ダムが振り向き、人差し指を唇にあてた。ルアも頷き、同じポーズをとって了解と応える。

耳を澄ませば、すぐ傍に一人の足音があるのに気付いた。しかし息遣いは4つ。ダムとルアを抜いたとして、残りはアリスとディーだろう。

これほど完璧に足音が聞こえないということは、どちらか一方は歩いていないと考えられる。状況的にはアリスだろうが。

歩いていない、もしくは歩けない状態である。

「……鎖」

「何だつて？」

「鎖の音がします。この先約100メートル行っただころですね」

「んなの、どうして……」

「兎の耳を持つ獣人は、その跳躍力と聴覚に武器を持ちます。どうやら、アリスは鎖で繋がれているようですね」

ドアノブが回り、人が部屋を出る気配がした。ルアは人差し指で静止の合図をする。

こちらに下りてくるかと冷や冷やしたが、ディーは上の方へ向かっていった。

「……行きました。今がチャンスです、終わらせませよ」

「ディーは……」

「後です。まずはアリスを安全な所へ移さねば。それが終わったら貴方の好きにすればいい。何ができるかなんて、貴方が決めることです」

ルアは念のため拳銃の弾を6発確認しながら、目で先にいけと促した。ダムは緊張した面持ちで頷き、狭い階段を身体を横にしてすれ違った。

銃を装填し終えたルアは、彼の背中に追いつこうとやや小走りで階段を駆け上がった。音を立てないように爪先だけで移動する。

「ここ、ですね。一人」

「ああ、一人いるな。鍵は……かかっているか」

「随分と用心ですね……仕方ないです。1、2、3で壊しますよ」

「……アン、ドゥー、トゥルアーだ」

「は？ なんです、その間抜けな呪文」

「で、伝説の掛け声なんだ！ 必ず大声でやしないと呪われるんだぞ！」

「馬鹿ですか。大声なんかだしたらディーに気付かれるでしょう」

「うっ……いい、いいよ！ 俺が一人静かに開けるから！」

「はぁ？ いえ、それじゃ掛け声の意味が……」

「アン、ドゥー、トゥルアー！」

ルアの制止も意味を成さず、ダムはたいした助走もなく肩から扉に突っ込んでいった。

木造の脆い扉は、ダムの長身に耐えきれず大破する。ただでなく彼は勢いよく部屋の中に転がり込んでいた。

なんとか彼の方は受け身を取るが、破壊音は防ぎきれない。ルアは呆れ顔を作るよりも先に聴覚に意識を集中させた。

ディーは隣の隣の部屋で何か作業をしているらしい。焦ったような足音が聞こえないところから察すると……ぎりぎり聞こえてないらしい。

ルアはほつと息を吐くと、ゆっくり部屋の中に入った。

床で頭を押さえながら涙目になっているダムを除くと、自分が一等のようだった。

少しだけ、他のライバル達に優越感を覚える。だけど、そんなことより何より。

「ルア……」

耳に触る彼女の声が、心地よくて。

ルアは、そつと瞳を閉じた。

「ルアっ！」

騒々しくドアを突き破ってきたかと思ったら、目の前でルアが前屈みに倒れた。何とか左足で身体を支えるが、壁に背中と右腕をこすりつけるようにしてズルズルと座り込む。

明らかに顔色が悪い彼を見て、私は頭から血が引いていくのを感じた。

救出を喜んでいる場合じゃない、彼の容態はいつたい……。

1870

「どうしたの?! だ、大丈夫、ねえちよつとルア！」

「っ……………ねむ」

「……………は？」

「アリスの顔見たら、ほつとして……………すみません、今助けますね」

ルアは壁を支えにして立ちあがり、檻の前まで来た。鍵の部分に、あらかじめ用意していたヘアピンを差し込む。

解錠の作業中にも、彼の身体は左右へと揺れた。瞼はほとんど落ちている状態である。

眠い……………のかな。私を心配して眠れなかった、とか……………なんてね。いくらなんでも自信過剰か。

「手強いですね……………ダム、なんとかありませんか」

「いつてて……はあ？ 銃で壊せばいいじゃん」

「アリスの無事を確保できない限り、大きな音を立ててディーに気付けられるわけにはいきません」

「そっか。じゃあ俺がやってみる」

「僕よりも知能が低く、器用さにも欠ける生態系である貴方がやつても時間の無駄でしょう。僕がやります」

「ああそっか。じゃあ頼む。………つてなら何で俺に聞いたんだよ！」

「人は窮地に陥った時、意味もなく人をおちよくりたくなるものです」

「ふっ……ふざけんなあ！」

……あれ？ なんかこの二人、仲良くなつてないか？

ルアなんかは口元に笑みを浮かべて少し楽しそうだ。呼び名も、トウドルという名字（？）から名前に変わっている。

ダムもダムで、あんなにルアのことを散々罵倒して嫌っていたというのに今はその言動に好意すら見られる。まあ……現在進行形で頭の火山が噴火しているが。

「あ。開いたようですね」

ダムが怒号を上げてから数秒とかわらずに、カチャリと小さな音がして鍵が開いた。鉄製の重い檻が、機械のような泣き声を上げながらゆっくり開く。

ルアは、すぐには私のところへは来なかった。檻の中に入って、上下左右をじっくりと見渡す。

壁に手を付きながら眉を顰めると、吐き捨てるように言った。

「こんなところに……一週間も閉じ込められていたのですか……」

「あ、あの、でもね、食事とかは全部用意してくれたし、トイレの

時もちゃんと出してくれたんだよ？」

「お風呂は」

「うっ……」

「なら、何よりも先に入浴ですね。城の大浴場を開放します。大人しく入って下さい」

ルアがわざわざ釘を刺す。というのも、私がいつも気後れして使用人の人たちの部屋風呂を使わせてもらっているからだ。

でもまあ、一週間もお風呂に入らずじまいの乙女なんて……あり得ない。今は水でもお湯でもいいから、何かを浴びたかった。

ルアは私の前に膝をつき、足首の鎖を外しにかかった。こちらはトイレの時とかに毎回外してもらっているので、大して手こずることなく終わった。

私は自由になった自分の足首を数度動かすと、恐る恐る立ち上がってみた。

歩いて、鎖の擦れる音がしない。地団駄を踏んでも、鎖同士がぶつからない。

自由、なのだ。

「アリス、足の調子は大丈夫ですか？」

「姫さま、ちゃんと歩ける？ 何なら俺、おんぶするよ！」

「寝言は寝て言いなさい。貴方のような輩がアリスに触れるなど、あつてはならないことです」

「な、なんだよ白ウサギ！ お前は良くて何で俺は駄目なんだよ！ちゃんと遠慮はしてんじゃねえか！」

「本当に遠慮してるならどっかへ消えてくれませんか。子供の前ではアリスといちゃつけません」

「ふ、ふざけんな！ 俺は子供じゃねえ！」

……やっぱり仲は悪いのだろうか。いや、でもルアは大抵私以外

にはこんなもんだ。

二人とも心配してくれているのだろうが、だんだんと論旨がずれてきている。私は二人の顔を軽く小突きながら、安心させるように明るく笑った。

鎖の感触がない足が、自由を象徴する。大きく開かれた檻が、解放を象徴する。そして目の前にいる二人が……終焉を象徴する。

もう、終わったのだ。

「ちゃんと自分で歩けるわよ。心配しすぎ」

「ですがアリス……無理しなくていいんですよ」

「そうだよ！ 俺、おんぶ得意だぜ？」

ルアは心配そうに首を傾げ、ダムは張り切ったように拳を握る。確かに足は少し痺れているが、走るのにもきつと支障はないのだろう。

私は小さくうつむきながら首を横に振った。ダムの残念そうな吐息を聞きながら、顔を上げる。

このままどうなってしまうのかと、不安もあった。デイーは確かに優しいし、不自由なく世話をしてくれたけど……自由のない日々は、苦痛そのものだった。

ずっとこのままだろうか。心の奥底の絶望感が、彼らの姿を確認した時に跡型も残らず霧散してしまった。

今は不安も絶望もない。ただ残ったのは、どっと押し掛かる安堵と疲労だけだった。

「いいの。あの 助けてくれて、ありがとね」

うまく、笑えていただろうか。この一週間ほとんど笑っていなかったから少しきこちなくなっているかもしれない。

ダムは何故か気まずそうに視線を彷徨わせると、しょんぼりと頂

垂れて拳を下で握った。なんだろう……いつもなら「朝飯前だよ！」
ぐらいは言っつきそうなものなのに。

なんとなく変なダムが心配だ。ルアはちらりとダムの方を見ると、
いつもの優しい笑顔を私に向けてきた。

まるで、気にすることないですよと語りかけるように。

「その言葉はまだ早いです。帰るまでが遠足、と俗に言うでしょう？
このままではディーにまた見つかってしまいますよ」

「そう……そう、ね。 帰りましょう」

「はい。お怒りのフレ임様が待ってます」

うっ……何でわざわざ帰りたくなるようになるようなこと言うかなあ……

やはり、フレ임様も怒っているだろうか。きっと仕事も増えた
だろうし、心配……はさせてないんだろうなあ、きつと。

「あつ、そう言えば姫さま。今、ディーがどこにいるかわかる？」

「え……目が乾いてきたからコンタクト外しに行くって言ってたけ
ど……洗面所じゃない？」

「コンタクト」

しまったと思った時には、墓穴はすでに掘り終わっていた。あれ
ほどディーに秘密を知られたくないと言われ、そのためにここに監
禁されてきたのに……。

私は顔を青くして、慌てて言葉を隠そうとした。

「あ、あのね、そのコンタクトっていうのは……」
「アリス」

しっ。

鋭く息を尖らせて、ルアは警告を発した。私は微かに聞こえる足音に、口を噤む。

耳を空高くまでピンとそらせたルアは、私とダムに下がっているよう合図をした。私は大人しくベッドの方へと非難し、息を潜める。ダムの方はまだ何か言いたいことがあるようで、完全に下がるのを躊躇っていた。入口からちょうど死角になるところまで行き、ルアに口ばくで何かを伝える。

えっと……ディー、を、う、つな？

ルアは少し怖い顔をしていたけれど、渋々頷いた。同じく口ばくで言葉を交わす。

お、と、り、に、なる？ つ、か、ま、え、ろ。

足音が、近い。ドアノブが動く。

ルアは懐から取り出そうとしていた拳銃を名残惜しげに握ると、再び元の場所へと戻した。

完全に無防備な彼の前に、やけにゆっくりと扉が開かれた。

「姫さま？ 僕もう行くけど、何か欲しいもの」

認識と同時に、足が動いた。

白衣のポケットから予備用のナイフを取り出して構えも整わないままに突っ込む。

こんなへなちょこ攻撃じゃあ致命傷は望めないとわかっているけど、冷静に考えることはできなかった。

ただ、排除しなければという警鐘だけが頭の中で響き渡る。ルアを。それが終わったら、今度こそアリスを。

「ルアっ！」

アリスの悲鳴が鼓膜をつんざく。ディーは煩わしげにそちらを瞥した。

せつかく籠に入れて、紐で動きを封じていたというのに、このわずかな時間で解いてしまったらしい。

いつものルアだったら、事も無げにかわしていただろう。少し体を傾けるだけで、反撃の体勢にはいる。2人のときならともかく、ディー1人で相手にできる輩ではない。

……立ち上がれないほどの睡魔と疲労に襲われてさえいなければ。

「っ……く」

ルアはアリスの足下まで受け身前転をして、間一髪銀色の刃から逃れた。

ナイフは標的を失って、床に当たり小さな金属音をはなつ。

その余韻を味わう暇も、体勢を立て直す余裕も与えなかった。

紫色の瞳をぐるりと動かして再び獲物を捕らえる。アリスとルア。幸運なことに、殺すべき相手は固まっている。

ルアは顔をあげて臨戦しようとしたが、もう遅い。

殺すのだ。全部全部、秘密を知ったものを全て。そうすればずっと、ダムと一緒にいられる。

ダムの隣にいられるならもう……もう、何も要らない。

「やめて！ もう……もうやめてえっ！」

「アリス……っ！ いけません！」

アリスはいつだって、愚かなほどに無謀だ。

ルアを庇うようにして彼に覆い被さる。無防備な背中を曝すことがどういふことか、理解していないようだ。

やめる。止める。

やめられるのなら、やめたかった。

母も父も、殺したくなんかなかった。

アリスを何度もからかって、ロキの恋路を応援したかった。

ルアへの暴言や悪口を、ダムと一緒に考えるのが楽しかった。

「ごめんなさい。そんな言葉、自分が口にすること自体冒瀆的だけれど。」

「やめたい。」

「……やめろ」

一瞬の躊躇が、デイーの手足を全て絡め取って動きを封じた。

「いや、その一瞬が背後の彼に、行動する余裕を与えたとも言おうか。」

外の冷気で氷のようになった指が、両手首に強く絡み付く。寒さのせいなのか、それとも自分のせいなのか……触れた手のひらから震えが伝わってくる。

首筋に熱い雫が落ちてきて、デイーは大きく痙攣した。くすぐったかったのでも、吃驚したのでもない。ただ、震えた。

身体の中から力が抜けていく。仕事にくたくたに疲れて、ベッドにダイブした夜みたいだ。

「疲れた？ そう、なのだろうか。」

「ぴったり嵌っているような気もするし、全く違うような気がする。もっと綺麗な理由のようにも思えるし、不純な理由であるようにも思える。」

「もう、やめてくれ……っ」

「ああ、そうか。終わるんだ。」

「自分が止めるのではなく、他人が止めるのではなく。終わる。」

不思議な気分だった。未来永劫の地獄であり、同時に一時の安ら

いだ居場所でもあつた現実に、突然終止符を打たれるのは。不思議で、妙に納得した。

これがこの独り舞台の幕引きだというのなら、自分のやることはただ一つ。

「ダム、泣いてるの？」

首元に、濡れた体温を感じる。抱きしめてくれる腕が、たまらなく嬉しくて痛い。このまま壊されても本望だった。

どうせ死ぬのなら、片割れの手にかかって死にたい。昔ダムと交わした言葉のキャッチボールの一節だ。

どうしてそう思ったのか、今ではよくわからない。

死は、人を何よりも強く束縛する鎖なのだという。

イオ然り、フレイム然り、たとえその人を苦しめることになっても、死はいつまでもその人の中で生きられる。

大切な人だからこそ、刻みつけるのだ。

大好きな人だからこそ、雁字搦めにするのだ。

だけど、実際こんな場面に直面して。

やはり　　ダムを傷つけることは、できなかった。

自分は、ダムを殺してやることさえできないのだ。

それなのにダムに自分を殺してもらえるだなんて、甘い考えは持たない。

「ダム、僕はね。ちゃんとハンバーグ好きになったよ。ピーマンはちゃんと嫌いになった」

ダムの腕が、細かく震える。意外……だったのだろうか。

イオの言っていた言葉が、脳裏に蘇る。この一週間、記憶の外へ

と押し込めておきながらも静かにデューを苛み続けていた言葉が。

『双子ちゃん達ってさあ、あんま似てないよね』

そう……だったのかもしれない。心も、目も。仕草も、口調も。何もかもダムと自分は異なっていて、似てないと嘲弄されても文句の言えない存在だったのかもしれない。

だけど、いつかは乗り越えられると信じていた。

ダムの好きなハンバーグを好きになったように。

ダムの嫌いなピーマンを嫌いになったように。

努力すれば……いつかは、同じになれると信じていた。

両親を殺したのも、アリスをこんなところに閉じ込めたのも、すべてはこのためだった。

時間さえあれば乗り越えられる。なら、ダムと自分を引き裂こうとする輩は邪魔だ。何もかもすべて、無駄な時間稼あがきぎにすぎなかった。

ああ、最初から。最初から、こうすればよかったのだ。

自分がいなければ両親は死ぬこともなかった。ダムは望まぬ人殺しにはならなかった。アリスを閉じ込めることもなかった。ダムが

ダムが悲しむことも、なかった。

ダムは、後ろから抱きしめてくれる、捕らえてくれる、引きとめてくれる。

まるで、自分のこれからを予想しているようだ。

デューは小さく笑い、俯いた。溜まった涙が瞳からこぼれ出て、頬を伝わることなく雨粒のように床に降り注ぐ。

「だからね、ダムの好きなものは好きになるよ。嫌いなものは嫌いになる。ダムを苦しめるものは全部、僕が消してあげるから」

最後の水滴が頬に流れた、その時。

デューは強くダムを振り払って、距離を取った。ほとんど突き飛ばされるようにして不意をつかれたダムは、そのまま尻餅をつく。

ああ、やっぱり。ダムはずっと、泣いていた。

ごめんね、ごめんダム。今までずっと気付かなくて。

ずっとずっと君は、僕を嫌っていたんだね。

ずっとずっと僕は、君を　　好きだった。

「君が嫌いな僕なんて、要らない。君を苦しめる僕なんて　　全部、消してあげるから」

それで、終わりにしよう。

デューは、ダムの制止も耳に入れずに突進するようにして部屋を飛び出した。

階段を、駆け上る。

「私はいいから行って！　ルア、あんたもよ！」

アリスは不安と恐怖でポロポロと涙をこぼしながら、いつまでも動こうとしないルアを何度も叩いた。

ルアは、動けないわけではない。確かに眠気はするし疲れてはいるが、この緊張の中では微々たるものを感じられた。

ダムはすでに飛び出していった。当然と言えば当然だろう、彼は

最初からそのつもりで来たのだから。

しかしルアは違う。アリスを助けるためだけに、ここに来たのだ。デューがこの後どういいう結末を迎えようが、ここで咽び泣いているアリスの方が心配だ。

「僕はいきません、アリス。貴女の傍にいと、もう決して離れないと誓ったんです」

「何で……っ、だって、だってこのままじゃ……っ」

「あいつらがどうなるうと、どうでもいいです！ 僕には貴女だけが、貴女だけが心配なんです！」

彼女の顔を見たとき、どれほど呼吸が楽になったか。彼女が自分を庇うような行動を取った時、どれほど心臓が縮まったか。

もう、放さない。離れない。手を放せば、目を離せば　また、消えてしまう。彼女に触れられず、彼女の姿が見えなくなることに。それがルアにとっての最大の恐怖だった。

アリスは、縋るようにルアの腕を掴む。嗚咽が、痛々しかった。彼女の願いならば、何でも叶えてやりたい。彼女の笑顔を守るためならば、どんな罪も犯してやりたい。

だけど、それでは駄目だったのだ。ルアは、アリスの唯一にして絶対忠実な血濡れの騎士だ。どんなに彼女が咽び泣いても　彼女の無事が、何よりだ。

「なら私も一緒に連れてって！ それならいいでしょう?!」

「いけません！ デューは狂っています。そんな危険な男の傍に、アリスを寄せるなど」

「デューは狂ってなんかいないわ！」

強く、腕を引かれる。その仕草で、彼女がルアを責めているのだとわかった。

連れて行って。もう一度、アリスが強く叫ぶ。その悲痛な叫びをこれ以上聞いていられず、ルアは血反吐を吐きそうな想いで頷いた。

「早く……早くしないと、ディーが……っ」

『ダムと引き裂かれるくらいなら、僕は 死を選

ぶよ』

上へ、上へ、上へ。

そうして、何もかも見下ろせる位置にまで立つたら。

ノクターン
夜想曲を、奏でよう。

満月の墮ちる夜に、
星屑が昇る夢を見ながら。

「デイー！ 待て……っ！」

隠し階段が終わって、時計塔の階段に出た。

目も眩むほど高くまで空洞は続いていて、その周りを階段が幾重にも螺旋を描いている。

ダムはずつと先を走るデイーの姿を見失わないように、前のめりになるようにして階段を駆け上がっていた。

息が苦しい。一体ここは、どれほどの高さなのだろう。

デイーの息も上がっているようだったが、一向に速度は落ちない。それでも、何が何でも引き離されてはいけなかった。

「待って……、待てよデイー！ なんて……なんで逃げんだよ！」

デイーが逃げるなんて、予想もしていなかった事態だった。

いや、そもそも自分は何も予想できなかった。迷わずルアを殺そうとするデイーも、あんなふう……苦しそうに、話すデイーも。

何一つ、分かってやれなかった。気付いてやれなかった。

だから次こそはちゃんと話してほしい。自分もただ聞くだけじゃなく、自分のことを話したい。

少しずつ……少しずついいから、わかりあえたのなら。

「デー……っ」

ついに、階段が終わった。身体を叩きつけるようにして鉄製のドアをこじ開ける。

しばらく使われていなかったせいか、ドアはやけに重々しく、ゆっくりと開いた。ダムはデーの開けたそれが閉じない内に、身体を無理やり捻って入った。

無茶苦茶な姿勢で入ったせいか、そのまま無様にも倒れ込む。ダムはすぐに顔をあげると、素早く弟の姿を確認した。

「夜……？」

一瞬絵画じゃないかと思うほど、素晴らしい星月夜だった。街の禍々しい灯りも届かず、完全なる闇が空を塗りつぶしている。

闇が深ければこそ、自身を燃やして輝きを発する星々は鮮やかに縁取られていく。

頂点に浮かぶ月は、どこかルネティック狂気を思わせる。

「……………」

月に魅せられていたダムは、我に返って弟の方に注意を向けた。

デーは、屋上の一番端に立って淡く儂く微笑んでいた。

月に、一番近い所。

早く彼を捕まえなければ。そう思うのに、疲れと限界を訴える脚はこれ以上思うようには動いてくれそうになかった。

早く、早く。

竹取の姫君のように。

早くしなければ、月に全てを奪われてしまう。

「どうして、僕らは双子に生まれたんだろうね」

「っ……は、も、もう逃げ場はねえぞ……」

一歩一歩、きりきりと痛み始める脇腹を押さえながら近づいていた。
逃げ場所はない。追い詰めているはずだ。なのにいつの間にか

追い込まれている。

デューは消えそうな笑みを浮かべたまま、ダム歩に合わせた後退していった。一歩ずつ、月へと近づいていく。

「どうして、僕らは同じになれなかったんだろうね」

いけない。このままでは、デューが落ちてしまう。即座に察したダムは、近づこうとする足を止めた。

だが、デューは後ろへ下がるのをやめない。先程と同じリズムで、ゆっくりと後ろへ下がりが続けた。

ダムが止まったのに、デューは止まらない。似せてるわけ

ではない。だとしたらこれは、デューの意志。

「君と同じになれない僕なんて要らない」

デューは、自分の目をそつと押さえ、頭をのけぞらせた。倒れ込むようにして、後ろに右足をつく。へりの部分に、靴の踵が擦れた。一瞬、本当に彼が眼球に指を突き入れて大嫌いな水晶体を引きずり出すのかと思った。

そつと手を放した時、そこに紫の瞳があることにひどく安堵感を覚えた。たとえ、その瞳から大粒の涙が押し出されていても。

「君と一緒に居れない僕なんて要らない」

くしゃりと、彼の顔が歪んだ。デイーの本当の泣き顔なんて、何年振りだろう。いつだって彼は、ダムを拭う側だった。

両親を殺した時　あの時は泣いていたのに、自分はその涙を拭うどころか直視することもできなかった。

そして今も……手が、届かない。　間に合わない。

彼は、笑う。

「だいすき」

何もかもが、スローモーション緩慢に動いた。

デイーが左足を大きく後ろへ回し、虚空を踏むのと。自分の足が強く地面を蹴るのが同時で。

デイーの身体の重心が不自然にずれて、彼が虚空を見上げるのと。無駄と判っていないながら腕を伸ばすのが同時で。

デイーが月の狂気に晒されて、乾ききった笑いを零したのと。

左を、誰かが通り過ぎていくのが同時だった。

夜に身を躍らせるなんて、気障な言い方は嫌いだ。

重力に身を任せるのはひどく頼りなくて、コントロール支配が及びにくい。

自分の身体能力は極端に高すぎて、一体どこまでが極限なのか
わからない。言ってしまうえば、それこそ不安定だった。
元々の能力は天才的に高いというのに、イオにいつまでも勝てな
いのはそういうわけだった。

いつだって自分は、慎重に丁寧に冷静に事態を捉える。行動する
前に考える、それが誇りとする自分だった。

なのに、今回は考える余裕さえないのか。

「くそっ」

アリスを置いてきたのは正解だった。何か胸騒ぎを感じて彼女の
先を走ってきたと思ったら……なんだ、この様は。

ルアは頭から空気の塊に突っ込み、ともすれば置いていかれそう
な内臓の浮遊に軽い吐き気を覚えていた。

指の先までピンと伸ばして、できる限りの空気抵抗を失くす。そ
うすることで落下速度はデイーのものをはるかに上回った。

「白ウサギ……！」

耳がおかしくなりそうな風の轟音の中、ダムが自分を呼ぶ声が微
かに聞こえた。

苛立ちを覚える。こんな役回り、本当は自分がやるはずじゃない
のだ。アリスを救出して、アリスと一緒に城へ帰る。それが今日の
完璧な計画プランだったのに。

なのに、何を気違ったかデイーを追って投身自殺もどきに参加し
てしまっている。

ああ、不本意だ。本当にムカつく。

「帰ったら、たっぷり説教が待ってますからね……っ」

あつという間にルアはディーを追い越すと、四肢を駆使して身体を反転させた。身体をちぢこませながらすぐ上のディーを掴み、自分の方へ引き寄せる。

ディーは目を閉じて失神していた。無理もない。上空150メートルほどもあるところから落下したのだ。

ルアとディーの間を吹き抜ける風が、嘲笑うように二人を引き剥がそうとする。彼は躍起になって彼の首元に腕を巻くと、もう片方の手で肩の服を握りしめた。

空気抵抗が強くなって、速度が若干落ちる。だが、笑ってしまうほど微々たる差だった。このまま落ちたら二人とも、骨まで粉々に砕けてお陀物だろう。

「ウサギは……っ、狩られるだけの動物じゃないんですよ！」

蹴る。いや、その表現は正しくないのかもしれない。膝を垂直までに曲げて、足元の空気を踏みつけていた。

一度では意味がない、何度も何度も踏みつけることで少しずつ速度を抑え、同時に時計塔の方へと寄っていった。

地面までの距離はあとわずか。ルアはちらりと後ろへ視線を回し、近くに小さな林があることを確認した。

「とど……けっ！」

両足を曲げて、身体全体をばねにする。時計塔の外壁に爪先から踵までしっかりと付き　思いきり、跳んだ。

身体が別の圧力によって方向を斜め下に変え、先程の何倍ものスピードで落ちていく。

落ちていく？　違う。向かっているのだ。

さっきまでとは決定的に違っていることがあった。ルアはディー

をきつく抱えながら、薄い笑みを広げる。

この状況が、自分で作ったものだということだ。故意なものなら、こちらの自由自在である。

向かっている。クッションと成り得るだろう、林へと。

「届けえっ！」

壁を強く蹴り、ルアは即座にデイーを庇いながら丸くなった。

数瞬置いて、待つていた痛みが鞭のように頭や顔を打ち付ける。枝々や葉々に堅いような柔らかいような感触に、痛いと感じながらも酷く安心していた。

太い枝に背中が当たり、短い息がルアの喉から押し出された。死ぬほど痛い。死んでしまったほうがきつと、何も感じずに済んだだろうに。

ルアは素早くその枝の小さな窪に手を引っ搔けながら、腕の中のデイーを見た。

人の苦勞も知らずに、すやすや寝ている。その安らかな寝顔に、苛立ちと安堵を覚え長い溜め息をついた。

「まったく……今回だけですからね」

「デイー！」

森の中で目を閉じるデイーと、少し離れて木に凭れかかるルアを見つけて私は安堵のため息をついた。

ダムは真っ先に弟にかけて、その容態を調べた。ほっとしたような顔とさあっと血の気が引いていく顔に、本当に心配していたのだと改めて思い知らされる。

「俺ちよつと水のあるところ行ってくるから！」

ルアと私、どっちに言ったのだろう。ダムはデイーを担ぎあげて走り出した。

私が止める間もなく、超特急で視界から消える。本当に……同じ体重の男を背負ってるんだよな？

ルアは私に向かって微笑みかけ、自分の隣をトントンと叩いた。私は誘われるようにしてそこに座り込む。

どうやって座ればいいのか分からないから、とりあえず体育座り

だ。膝を抱いて、ちらちらとルアの方を見る。

「まったく、相変わらずの怪力ですね、あの男は」

「うん……」

「ああ、ディーの方なら心配要りませんよ。意識はありましたし、水でもぶっかけられれば目を覚ますんじゃないですかね」

「う、ん……よかった」

「……嬉しくありませんか？」

「そ、そんなことないよ！ 嬉しい、すごい嬉しい！」

ただ、少し気まずいだけ。

まさかルアが飛び降りるとは思ってもいなかった。確かにディーを助けてと入ったが……そんな、危険なこと。

ディーが助かったのは嬉しい。でもそれ以上に、ルアを危険な目にあわせた自分が憎々しい。

自分では何もできないくせに、ルアに頼って窮地に追い込ませてしまった。

もしかしたら、今ここにルアはいないのかもしれないのだ。

「言っておきますけど。こんなの、僕以外誰もできませんからね」

「え……？」

「ダムにもアリスにも。イオでさえ、跳躍力に関しては僕に劣るんです。一番脆弱な貴女がもがいたところで何ができるといっわけでもありません」

「そ、りゃあそうだけど……」

「貴女が僕に縋ってくれなければ、僕が動くことはなかった。ディはお陀物。予想ですが、ダムも後追い自殺つてところですかね」

「ちよつと、そんな不吉なこと！」

「つまり、ですね」

頭に温かい感触。ああ、どうしてこの世界の人たちはこんなに頭を撫でるのが好きなのだろう。

私も　　頭を撫でてもらえることが、どうしてこんなに嬉しいのだろう。

「貴女がディーを救ったんですよ」

それは少し違うと思う。確かに彼の言う通り、私は彼が動く最大の要因だったのかもしれないが、実際に救ったのは彼だし、私は何もしていない。

だけど、反論することはなかった。彼は私の頭を撫で、私はそれを甘んじて受け入れる。

馬鹿にされている、と怒る人もいるかもしれないが……これだけは、怒れなかった。

頭を撫でるのは、子供扱いじゃなくて褒めてるから。褒められるのは嬉しい。幼少時、ほとんど母親から詰られながら生きてきた身としては……特に。

「やっと……終わりましたね」

「……うん」

「無事で何よりです、アリス」

「……うん」

「さっきから思ったんですけど、アリス」

「……うん」

「こうしていると恋人同士みたいですわね」

「うん、思わないわボケ」

まったく……シリウス真剣な話をしていると思ったらいつもこうだ。

ルアは真面目に言っているのだろうけど、なんとなく気恥かしい。

これはお互い疲れているだけで、別によっかかってもない。

恋人なんかじゃない。そう頭の中で全否定するも、なかなかこの状況についていけなかった。

言葉は不思議だ。言われなければまったく意識しないものも、言われれば途端に大きな存在として私の中で押し上がる。

「アリス。貴女のが好きです」

「ぶっ！」

「……何吹き出してるんですか。汚いです」

「ぐはっ、ごほっ、うげっ……な、なによ突然！」

私は壮大にむせかえりながら、胸を何度も叩いた。かあっと熱が全身を駆け巡り、耳まで赤くなる。

ルアが私を好きなんじゃないかというのは、薄々どころかもろに感じていた。ロキの時とは異なり、そのことに対して大した驚きはない。

ただ、あまりにも唐突過ぎた。それだけだ。

あれ？ でもなら何で私、赤くなってるんだらう……。

「別に改めて言う必要もなかったんですが……言葉にした方が意識するでしょう？」

ルアは私の反応を楽しんでいるのか、意地悪気に笑っていた。それでいて私に向ける瞳はどこまでも優しいのだから、ずるい。

自信過剰ではないが、ルアは確かに私を好き……だと思う。優しい瞳は、甘い言葉は、紳士的な態度はすべて、私に向けられたものだ。

知っていた。意識も多少はしていたと思う。

ただ、それを知っていながら私は　甘えていた。

「アリスに今まで言わなかったのは、アリスを困らせてしまうからです」

友達とも恋人ともいえない関係。答えを出さなくてもいい関係。そんな関係が、心地よかった。そんな関係がいつまでも続けばいいと思っていた。

ルアは私の右手に、左手をのせてくる。絡めた指が、私の動きを封じた。

恋人のような手の繋ぎ方。肩の距離は10センチ。恋人のような甘い雰囲気。

だけどいつだって、恋人の“ような”。それ以上は、お互い踏み込まないものだと思っていた。

「でも、アリスがいなくなつて……ずっと後悔ばかりしていたんです。どうしてももっとちゃんと言わなかったんだろう。もっと見ていなかったんだろう。もっと　　傍にいなかったんだろう、と」

彼の瞳を見てはいけない。そう思うのに、私の身体は金縛りにあったかのように見えない力に押さえつけられて思うように動かなかった。

蒼い瞳。覚えている。この世界に初めて来たときに見た瞳。あちらの世界に別れを告げた時に見た瞳。

あの時と寸分たがわない　　誘惑の、瞳。

「ですから、もう遠慮はしません。手加減もしません。誰にも渡しません。誰にも　　僕だけです。アリスの隣に座っているのは」

ルアの独占欲は、どこか子供じみている。イオのように巧みに誤魔化されているわけでもなく、ロキのように必死に隠されているわ

けでもない。

どこまでも澄んでいて率直な欲望だからこそ 怖いのだ。

好きになってしまえばきつと、戻れない。それこそ指の先まで束縛されてもこの世界に帰れなくなる。

私は、答えを出してはいけないのだ。

ルアは右手で私の前髪を払った。そのまま手袋がはまったままの手で額を撫でる。

額、頬、顎……と。彼の触れた場所から伝染病のように熱が広がっていく。厄介なのは、一度湧きあがった熱がなかなか引いてはくれないことだ。

首のところで、いったん止まった。ルアは何か不思議がるように首を傾げる。童顔な彼は、そうやって子供っぽい仕草をすると私より可愛く見えた。

「アリス、今すごくドキドキしてませんか？」

「は……？ べ、別に」

イオのように艶っぽく言っているわけではない。ということとは、純粹に疑問に思っているのだ。

私は左手を自分の胸のあたりに押し付け、鼓動に耳をすませた。規則正しく、ほとんど乱れることなく生命いのちを刻んでいる。

「どこも変じゃないけど」

「そんなことはありません。ここ」

むっとしたルアは、私の左手を持ち上げて首へと運んだ。頸動脈がどくりと息付いている場所へ、指を誘導させられる。

そうか、さつき彼はここに触れていたんだ。血管の動きが顕著なここは、胸よりも正確に鼓動を測れる。

って、あれ ？

「っ」

ふわりと薫る芳香。私の左手を首に残したまま後頭部へと移動した右手。至近距離で薄く開かれた蒼い瞳。

いつの間に、なんて発想はなかった。私が彼を招き入れてしまったのだ。彼の嘘をまんまと信じて、近づくことを許してしまつて。

息は、できる。ただ、吸い込む空気がいつもよりも生ぬるくて甘いだけで。

言葉だつて発せられる。ただ、そのすべてがルアの中に呑み込まれるだけで。

先程10センチだった方の距離は、5センチに縮まっていた。そして、唇の距離は センチに。

その距離をさらに縮めようとするように、ルアは後頭部を抑えてさらに深くまで口付けた。熱い何か、歯列を割って入っていく。

柔らかく、熱く、甘く、切なく。優しく口内を蹂躪したそれは、銀色の糸をつむぎながら名残惜しげに出ていった。

唇との距離が、急速に開く。余韻を楽しむかのように、彼は短くため息をついた。

そして、私自身。唐突のことだったけれど、拒絶 できなかつた。

「ほら、ドキドキしている」

ルアは私の首に手を当て、幸せそうに微笑んだ。

「ん……っ」

両手で掬った水を勢いよくデイーの顔にかけると、ようやく反応らしい反応を見せた。

ダムは止めていた息を一気に吐き出す。

ずっとうまく呼吸ができていなかった気がする。

ずっと鼓動が聞こえなかった気がする。

ふとしたら、泣いてしまいそうだ。緊張がほぐれて、もつれた糸が安心を紡いでいく。生きている、たったそれだけで。

「っ……な」

紫の瞳が徐々に開かれて、ダムを捉えた。最初は誰だか認識していないように白濁していたが、それも一瞬の内だ。

彼は驚愕に目を一気に覚ますと、ダムから逃げるように這いつくばった。そこではじめて、手をキツく握られていることに気付いた。泣きそうな、それでいてひどく安心したように、顔を歪める。

「なんで……」

「し」

声は、上手く出せなかった。たった一言伝えたいだけなのに、喉は掠れた音をあげて限界を告げる。

ダムは口の中に残っていた水分を辛うじて飲み干すと、何度か発

声練習をした後にゆっくりと言葉を紡いだ。

「白ウサギが、助けてくれた」

「……なに、それ」

「何でもいい。何でもいい、から」

不満げに言い募ろうとするディーの言葉を遮って、ダムは彼の首に腕を回した。

あたたかい。あたたかいのだ。

触れ合っていることで彼の微かな鼓動が振動を伝わって感じられた。

ダムは無性に、彼の胸に耳を当てたくなつた。彼が生きているのだという確かな証拠を、もっと近くで感じたかった。

「……っダム、苦しい」

「……うん」

「息が苦しいって」

「……ごめん」

耳元で聞こえる、聞き慣れた声がたまらなく嬉しい。もっと聞きたくてわざと力を込めると、今度は本当に怒られた。

名残惜しげに彼をはなす。ただ、手だけは握ったままだった。

はなしてしまつたら、今度こそ何か大切なものを失ってしまいうで……怖い。

「生きてて、よかった……」

「僕は、よくない」

冷たい声でぱつぱりと切り捨てられ、ダムは絶望や悲しみを感じる前に呆然とした。

一瞬、彼の言葉を呑み込めずに戸惑う。

……そうか。こつやって戸惑うのは、ディーが自分とは異なる意見を言うから。

はじめて、自分の予想とは違う答えが返ってきたから。

泣きそうなほど悲しくて、抱き締めたいほど嬉しいのは

……

自分とディーが、はじめて対立したから。

「僕は……っ、死にたかった！ ダムと違うまま生きていくくらいなら、いつそ……っ」

「ディー」

「僕の憧れだったんだ！ 同じなら、一番近くにいられる。君を本当に分かっていられる！」

「っ……ディー」

癪癪を起こした子供ののように地面を叩きつけながら、大声で喚く。いつだって、弟の方が頭一個分大人だった。いつだって、兄のような余裕をもつのは弟の方だった。

ずっと……我慢していたんだ。

なるべく泣かないように。なるべく取り乱さないように。なるべく……自分を出さないように。

「ダムと同じじゃない僕なんて 要らない！」

ンッ

張り裂けるような鋭い音。周りで行く末を嘲笑っていた鳥達も驚いて木から飛び立つ。

静寂と沈黙のなか、涙が地面に叩き付けられる微かな雨音と、自分の荒い息遣いだけがやけに大きく聞こえた。

「デューは紫玉アメシストの瞳いっぱい涙を溜めながら、呆然と兄を見つめていた。

先ほど叩かれたデューの右頬に、一筋の涙が伝う。悲しいからではない。ただ重力に負けた、それだけだ。

ダムは叩いた方の手を、赤みをました弟の頬に添える。

「デューは、拒まなかった。きっと　兄が、自分以上に悲しげに泣いているからだろう。」

「俺は」

ダムは、確かめるように、謝るように、デューの頬を撫でる。

彼の不自然な笑顔がぐにやりと歪んで、涙がさらに押し出された。ルアと話している時、デューに会ったら言おうと考えていた台詞こゝろごとがある。彼が月に誘われて墮ちた時、全て真つ白になった台詞が。

一度失った台詞は、二度と戻らなかった。必死に考えていた説得の言葉も、叱りの言葉も。

「ただ　永遠に、気持ちは変わらない。」

「俺は、お前が産まれて嬉しかった」

「……なに」

「覚えてないけど！　俺が先かどうかもわかんないけど……っ！

お前が生きて嬉しかった！」

「や、やめてよ」

「俺は　お前と双子に産まれて、嬉しかったんだ」

来世だって、生まれ変わったって……デューと双子に産まれたい。2人で一つじゃなくてもいいから、似てなかったっていいから。

……君と一緒に、笑えたなら　胸が潰れそうなほど、幸せな

んだ。

デイーの瞳から、涙がとめどなく流れる。呆然とした顔のまま泣くなんて、器用な奴。

彼の涙は止まらない。後頭部に右手を回され、抱きしめられても自分自身、兄の背中に爪をたて縋るようにシャツを握りしめても。

止まらない。兄の涙に助長されるように滑り落ちては、シャツに透明な染みを作っていく。

「なに、それ。そん、な……当然のこと、今更……っ」

「今更でも！ い、言いたかったんだよ……っ、バカ」

「はは……バカ。うん……っ」

「バカっ、……バカ！」

「うん、バカだね。僕は、バカだ」

何度も、デイーを詰る。デイーはそのたびに言葉を呑み込み、頷いた。

同じであろうと合わせているのではない。デイーの声はもっと優しくして……安らかだった。

弟に背中を撫でられながら、鼻を嚼る。涙はまだまだ止まりそうにもなかった。

一生分の悲しみと不安。ここで、全部流してしまおう。もう、自分達が泣くことはないだろう。

片割れが隣にいない。これほど悲しいことはなく、不安なこともないのだから。

「僕は……ダムと一緒にいて、いいのかな……あ」

「……お前がどこ行っても、ちゃんと探してみせるから」

「はは……ダム、探すの下手じゃん」

「うるせ。だったらいなくなんな、バカ」

何度言い募るうとも、デイーの不安は完全には取り除けないらしい。

ダムと一緒にいていいのか、生きてていいのか。そう考えてしま
うのは、幼い頃に刻みつけられた記憶のせいだろう。

違うことを許さなかった両親。異口同音に溜め息をついた先生。
下卑た笑みを浮かべて嘲った同級生。

そして、同じであることを強要した世界。

彼らに、デイーは今も囚われている。見えない鎖を足元に絡ませ
て、枷を五肢に巻き付けている。

最後の逃げ場が、月^{ツキ}だった。
だけ。

「僕は……生きててもいいのかな……」

「俺さ」

明るい声がひどく奇妙に聞こえたらしい、デイーは悲しげな瞳を
ぱちくりさせて兄を見つめた。

ダムの瞼の裏には、ずっと昔、公園で見かけた兄弟の姿が映って
いた。

ずいぶん前に一度見たきりだというのに、今でも鮮明に思い出せ
る。それほどまでに　憧れていた。

「ずっと、お前としたかったことがあるんだ」

「え……？　ゲーム？」

デイーは思い当たらないのか、不思議そうに首を傾げるだけだっ

た。

それも無理はない。望んでこんなことをやりたいというのは自分だけだろうし、自分達には無縁なことだった。

同じでなければいけない。世界の告げた言葉が、諦めさせていた。

ダムはまだ流れそうになる涙を乱暴に拭って、冷たい夜風を吸い込んだ。

にかりと、歯を見せて笑う。

「喧嘩」

「……………ダムと、僕が？」

「そ、殴り合いや詰り合い。思いつきり、大っ嫌いって言ってやるからな！」

大嫌いの言葉に、ディーの顔が曇った。どうして弟はこうもネガティブに考えてしまうのか。……………本当に嫌うはず、ないのに。

彼の思考を覆おうとした厚い雲を吹き飛ばすようにして、続ける。

「そしたら、仲直りしよう！」

「！」

弟の瞳がゆっくりと開いていくのを見て、ダムは満足げに微笑んだ。少しだけくすぐったい気がしたが、言えはすつきりした。

彼の瞼を、そつとなぞる。落ちる時についたのか、細かい傷が眉のあたりに散りばめられていた。

綺麗な、紫。

イオなんかを連想させるとぎつい色じゃない。もっと薄くて穏やかで、澄んだ色。

溜まった涙が月の明かりを反射して光った。宝石みたいだ、とダ

ムは思う。

「俺、ずっと知ってたよ。ディーはほんと隠しことが下手だからな」

ディーが隠そうとしていた秘密。だけど、隠せるはずがない。

一番近くで見つめていたから、長い髪カーテンの隙間からでも垣間見ることができた。

一番近くで過ごしていたから、コンタクトを取りかえる時間帯も覚えることができた。

一番近くの存在だったから　　宝石を、見つけられた。

嬉しかった。

「同じじゃ、意見の対立もできないじゃん。喧嘩も……仲直りもできないじゃん」

喧嘩すれば、お互いの距離は一気に広がるだろう。けどいっばい悩んで、相手のことを考えて、そのうち寂しくなって……仲直りしたら。

きつと今よりもずっと、近くに座れる気がするから。

違うことが嬉しい。二人であることが嬉しい。ディーが生きていることが嬉しい。

たとえそれが、世界に背いた結果だとしても、“歪み”だったとしても　　二人の、双子に生まれて。

「死ぬなんて、言うなよ。一人で死ぬのも、二人で死ぬのも嫌だ」

最後の言葉はどうしても照れくさくて、ディーの顔を見ては言えなかった。ディーをグイと引っ張って、彼の肩越しに額を当てるように抱きしめる。

一人だったら、こんなふうには抱きしめる相手もいなかった。感じる体温もなかった。首元にかかる熱い水滴もなかった。鼓膜を叩く小さな嗚咽もなかった。

背中に回して、きつく抱きしめ返してくれる腕も、なかった。

「二人で、生きよう」

喧嘩して、仲直りして。

殴り合って、拗ね通して。

詰り合って、落ち込んで。

罵り合って、後悔して。

やっぱり、恋しくなってる。

一人じゃ絶対に出来ないことを、いつばいしよう。

二人じゃなきゃ意味のないことを、いつばいやろう。

だって僕らは、二人に生まれたんだから。

双子に生まれた

んだから。

謝ってまた、一緒に笑おう

……

『よっしゃ、できたー！』

『僕も僕も！ あー、疲れた！』

『たつた2、3行書くだけでしょうが』

たつた2、3行でも、文字を碌に習っていないこちらとしては大変な作業である。ダムは自分の歪な字体を嬉しげに見ながら、ふっふっふつと怪しい笑みを零した。

細い紙にお願いを書いて、木に結べばその願いが叶う。唯一“アリス”との世界を行き来できて、それゆえに文化調査の全役を任されているルアが、新しく拾ってきた風習らしい。

なんだかよくわからないが、二つの星がオーロラみたいなのを渡って逢瀬をするらしい。

やけに仰々しい話だったが、気前よく願いを叶えてくれるのだと

いづのだからこちらに損はない。

ルアにお手本を見せてもらいながら、拙い字で願いを書き終えたところだった。

『いやー、こうしてみると俺の字も上達したなあ……………』

『そうだねー、すつごく上手くなったと思う！』

『……………僕には一文字も解読できませんが。まだまだ練習が必要なようです。もっと書きますよ』

『えーっ！　なんでだよ！　十分うまいじゃん！』

『そ、それに、願いは普通一個だけでしょ?!』

『織姫さまは中身も見た目も太っ腹ですからね。百個や二百個、大目に見てくれるでしょう』

『ひゃ、ひゃく……………』

『死ぬ！　手が死ぬ!』

『これも筆記の練習です。さあ、早くその失敗作を飾ってきなさい』

鬼教官ルアに叱咤されて、ダムとデーは渋々近くの木に手を伸ばす。

“笹”という植物がこちらでは手に入らなかったため、代用品としてミニチュアサイズのクリスマスツリーを用意した。

無理矢理紐をくりつけると、木よりも紙の方が大きく感じられた。なんとなく見た目が悪い。

いや……………でも確かにこうやってみると、なかなか解読が難しい字かもしれない。

飾って初めて、「と」と「ず」が左右逆になっており、「れ」が「わ」になっていることに気付いた。要するに、ど下手ということだ。

『ねえ、なんて書いたの?』

『ふっふっふっ、秘密!』

『えー! なんですさ!』

『何でもだもんね! デイーにも秘密! 俺だけの暗号!』

『なにそれ! じゃあ僕もダムに教えてやんない!』

『ちよ、ちよっとまでよ! それはするいつて!』

『なにがさ! ふん』

首をまげてデイーの紙を見るが、確かに読めない。デイーもダムと同じぐらい、字が下手だった。

しかもダムは下手すぎて、自分の字もまともに読み返せない。それゆえにデイーの書いた字もロックされてる暗号と化した。

だが自分が言いだした手前、今更撤回は出来ない。ダムは不満顔で乗り出していた身を戻すと、指でピンッと紙を弾いた。

願いを込めた紙は軽く持ち上がり、そこに書きだされた文字を黒く反射させた。

『ずっとデイーといっしょにいれますように』

拝啓。

天国で元気にやっているだろうお婆様、お久しぶりです。

柿の美味しい季節になりましたね。私が柿を好きだって言った瞬間、白ウサギの馬鹿野郎が柿を箱にいれて貢いできます。

毎日柿だらけで死にそうです。もしそちらに行くことがあったら、柿も持っていくので楽しみにして下さい。

私はというと、デーとダムの一件も落着し、なんだかんだで楽しくやっています。

ただ、ちよっとお婆様に力添えをしていただきたいことがあります。してお手紙を書きました。

……あ、ほんとに力を貸そうなんて思わないで下さいね？ 化けて出てくるとかマジで御免ですから。

毎日は結構楽しいです。楽しい、楽しいのですが……。

「今日こそはちゃんと説明してもらおうかな！」

毎朝詰め寄ってくるこの男にはどう言い訳すればいいでしょう……。

「だから、何度も言ってる通り……」

「城の中で迷子になっていつの間にか森になっていた、そこでも迷って街に出た。拳げ句の果てに人生の迷子になって放浪の旅に出た

……」

ルアが考案し、私が嘯いた台詞をロキは淡々と詠唱する。
漆黒の猫耳が、怒りで震えた。うーん、あんまり怒ってばかりだと、将来の髪の毛が心配だ。

だが、口が裂けてもそんな冗談は言えなかった。私はなるべく彼の怒りに油を注がないように、殊勝なふりして正座する。

同じ姿勢でいること約20分。いい加減足の感覚がなくなってきた。

「んなド下手な嘘信じる馬鹿がいるか！」

「いやそこは、いっちょ鷹揚に……」

「なれるか！　ちゃんと説明しろ！」

「え、つとね、亀を助けたらお礼に竜宮城に連れてかれて……」

「アリス！」

ロキは苛立たしげに壁を殴った。大きな音に首をすくめ、思わず両目を瞑ってしまった。

私は恐る恐る片目を薄く開けて、彼の様子を窺う。

肩で鋭い息を吐き出す彼は、もはやご立腹の域を越えていた。瞳に諦め半分の暗い絶望を宿して私を見つめる。

彼が本気で怒るのも無理はない。事件が終結してから1週間、私は一言ですら彼に真実を告げていないのだから。

「なんで、俺に嘘なんて吐くんだよ」

「……………」

「なんでだよ！　なあ！」

ごめんなさい。その言葉が口の中でゆっくりと溶けていく。

彼には、決して届くはずのない言葉だった。それにもかかわらず、

彼はまるで謝罪に反発するように顔を歪める。

今回の失踪に双子が関わっていると知られば、処罰は免れなかった。

情報を徹底的に隠蔽するルア、口裏を合わせる私とでなんとか双子を匿っている状態だ。

フレ임을騙すのは背筋が凍ったし、ロキに嘘を吐くのは心苦しかったが……。

やっと、スタート地点に立ったのだ。幸せそうに笑い合う彼らを見すみす死なせたくなんかない。

「誰を庇ってんのか知らねえけど……そんなに！そんなに俺が信用できねえかよ！」

「そういう訳じゃ……」

「じゃあなんだよ！」

「それは……」

「なんで……なんで黙るんだよ……っ」

ロキの苦しそうな呻き声を聞きながら、私は下唇に歯を突き立てた。

信用できないわけじゃない。ロキと双子は仲が良い。真実を知れば彼は怒り狂うだろうが……きっと、最終的には許してくれる。

ロキは私の返事が来ないのを悟ると、崩れるように立て膝を付いて、私の目線まで合わせた。今まで頭ごなしに怒鳴っていたのを謝罪するように、首を垂れる。

誠実な彼。真摯な彼。ロキを、信じていないのではないのだ。

ロキに黙っておいてほしいと言ったのは、ディーだった。
いや、正確にはロキではない。ロキの中のもう一人の人物　イ
オに知られるのを恐れたのだ。

『でも、イオとそんなに仲悪かったかしら』

私は訝しげに眉を寄せて訊き返す。

確かにロキの時ほど彼らはオーブンではないが、イオのことだっ
て曲がりなりにも“先輩”と呼んで敬っているはずである。

イオだって、彼らを特別嫌悪しているようには見えない。いつも
ふざけた笑顔でダムをからかうくらいだ。

しかし、私の問いかけに対してダムは恐い顔で答えた。

『あの人だけはダメだと思う』

『ダメって……』

『先輩は“城側”^{じょうがわ}の人間じゃない。フレйм様を敵視している奴な
んだ。先輩に知られて……フレйм様の迷惑になりたくない』

確かに、イオがフレймを嫌っているのは事実だ。

私と会う前にも散々周りをうるついで片っ端から兵士を殺してい
たと言ってたし……もしかしたら、相当折り合いが悪いのかもしれ
ない。

だけど……。私はまだ納得しきれなくて、不満な声を上げる。そ
れを遮るようにして、ディーは苦々しく吐き捨てた。

『似てないって』

『え……』

『似てないって言ったんだ。僕とディーを』

それがどうしたのか。話の意図が汲み取れず一人迷子になる私の隣で、ルアが会得したように小さく頷いた。

ダムも怒りを露わにして唇を歪めている。私だけが、話についていけない状態だ。

ルアは腕を組み直すと、考えを整理しながらゆっくり説明した。

『つまり、チェシヤ猫が故意にディーを刺激したと』

刺激。その言葉にはじめて、少しの合点と違和感を得る。

似てない。普通の人からしてみれば大した言葉ではないが、確かに、ディーの心に揺さぶりをかけるには十分な言葉だろう。

事実、彼は鏡張りのあの部屋でひどく不安げに肩から血を流していた。今思えばあの鏡に映った自分を見て、無理矢理ダムに合わせようと奮闘していたのかもしれない。

ディーは確かにイオの言葉で動揺しただろう。だが、わざわざイオがそんなことをする理由がわからない。

『でも……なんのために？』

『そうですね、考えられるとすれば』

そこで一旦切ったルアは、口元に手をあて気遣うように双子を窺った。アクアマリンの瞳を躊躇いがちに揺らす。

ダムとディーはお互いに目を合わせると、大丈夫だとも言わんばかりに大きく頷いた。

『2人を殺そうとした』

『殺……っ?!』

『あくまで推測でしかありませんが、デイーを情緒不安定にして彼の自殺を狙ったんじゃないでしょうか。実際、デイーは飛び降りを謀りましたしね。デイーが死ねば芋蔓式にダムも死ぬでしょう』

『でも、そんなの……っ』

『はい、偶然の産物です。あの猫もアリスが関わることは計画の範囲外でしょう。ですが、何らかの動揺を謀ったのは確かです』

例えば、デイーを見つけたのが城の兵士だったら。きっと彼は口封じとして、何人でも殺していただろう。

例えば、デイーを見つけたのがフレイムだったら。きっとデイーは闇雲に攻撃して、フレイムの手痛い反撃を受けていただろう。

ぐちゃぐちゃにされるのはデイーだけでない。城の中に、人間の形をした爆弾を投げ込まれたようなものだ。たった一つの言葉で……どれだけの混乱を招くことができただろうか。

だけど。でも。言い訳のようにいつまでも口ごもる自分がいる。

私の知っているイオは、尻が軽くてシニカルな笑いをしょっちゅう浮かべてる奴で、やたらとスキンシップの過激な奴だ。いろんな人間に絡んで、わざとその人の逆鱗に触れて楽しんでる。

ルアやレーテとは旧友で、双子やマルスをからかって遊んでいて母親の喉笛を噛み千切り、ロキに今でも罪の意識を持ち続けている人。

意地悪なようで優しく、むかつくようで哀しい人。

『……でも』

納得はした。それでもなお食い下がろうとするのは 彼をまだ、信じていたいから。

そんなことをする人じゃない。そんな……ひどいこと。優しくて哀しい彼が、するはずない。

『 姫さまは、先輩のこと知らないから』

ダムという言葉が胸を貫き、遅効性の毒を残していく。毒は勿体ぶるようにゆっくりと、獲物を前に舌なめずりをする獣のようにいやらしく、私の脳髓を侵食していった。

知らないのだろうか。その答えも出せないほど、私は彼のことを“知らない”。

彼はココロ表情や態度が変わって、確かに“こんな奴”と断定するのが難しいほど多くの側面を持っている。

全てを知っているなんて謔言を言うつもりはない。だけど なら、私の知っている“イオ”はどこまで？

あとどれぐらい、私は彼のことを知らない？

ずっと話を聞く側だったディーが、重苦しく口を開いた。その場の空気を追い払うようにして、首を何度も横に振る。そのたびに肩ぐらいつまで延びた赤髪が揺れた。

手のひらに長い爪を突き立て、堅い拳を作る。自然と泳いでしまふ紫の瞳は、はつきりと後悔を示していた。

『先輩が原因とまでは言わないよ。今回悪いのは全部僕だし、先輩が言わなくても……同じことをしていたと思う』

『じゃあ』

『ただ、先輩は 危険だ』

違う。イオは、危険な奴なんかじゃない。信用できない奴なんかじゃない。こんな方法でディーを追いこむような、残虐な人なんかじゃない。

確かに第一印象は怖い人だったけど……ほんとはずごく優しい人なんだ。自分の気持ちを全部押し殺して嘘臭い仮面をかぶる、哀しい人なんだ。

言いたいことはいくつもあった。ここにはいないイオに向かって憎悪の念を向ける双子に対して、反発する心は確かにあった。

だけど、ついに反論の言葉が出てこなかったのは、きっと

……

『……わかったわ』

彼を、少しでも疑ってしまったから。

「白ウサギは……知ってんだろ」

しばしの沈黙の後、ロキが一語一語噛みしめるように言った。その少しの間に怒りは収めたらしく、今はただ不満と苛立ちだけをオニキスの瞳に宿している。

どうせ、ここで下手な嘘をついても勘が鋭い彼はすぐに気付いてしまうだろう。私は迷いながらも、しっかりと頷いた。

彼は床に胡坐をかいて座り込むと、背中を丸めて後ろのソファーに寄り掛かった。すぐそこにソファーがあるのに、わざわざ床に座るなんて実に彼らしいと思う。

「そ……つか。なんか、それはそれでム力つく……」

「なんとというか……ごめんなさい」

「お前が謝んな。もう終わったんだろ？ アリスが無事なら……それでもいい」

「ロキ……」

「その……しつこく聞いて、悪かったな。言いたくないなら言わなくって良いから」

ロキは、優しい。不器用で時々わかりにくい感情表現をするが、いつだってその裏には優しさや好意があった。

大きな手が私の頭を軽く叩いて、そのまま乱暴に掻き回した。がさつで、少し痛い。だけど……嬉しい。

そう、終わったのだ。散々ルアを寝不足にさせて、ロキやイオを狼狽させた事件は、もう……。

私は自分の顔が自然に綻んでいくのを感じた。やっぱり、こんなことを言っただけで平和が一番だと思う。

うん、平和愛してる。平和ラブ。

「姫さまあああっ！」

だから私の平和よカムバック。

神様と言うのは現金なもので、たいしてお参りに行ってない私の願いなんぞ2秒で廃棄してしまう。今頃「私の平和」はゴミ箱に丸まっているだろう。

突然ドアをひん曲げて入ってきた大男は、私の首に飛び付くと押し倒すようにして抱きついた。

痛いなんてものじゃない。ロキが後ろからとっさに支えてくれなければ、ほぼ確実に背骨を折っていただろう。

男とロキに上下を挟まれるようにして、私は床に悶絶する。上の男の体重が、もろにかかってきた。

「うぐおおお……っ」

「姫さま姫さま姫さま！」

いつの間にか勝手に決められていたあだ名。こんなメルヘンチックな呼び方をするのは、この城で二人しか存在しない。

私はとりあえず首あたりに抱きついている寄生生物をはがそうと躍起になって腕を押した。

少し緩んだ力の隙に、彼を大人しく座らせて態勢を整え直す。このままでは男と私、両方の体重を全身で支えるロキがあまりにも可哀想だった。

「ロキっ！ だ、大丈夫？」

「っう……な、なんとか。アリスは怪我ねえか？」

「私は大丈夫だけど……」

とりあえず抱きつくのをやめてほしい。私がロキに目でそう語ると、彼は頷いて男を引き剥がす作業にかかった。

両脇をあっさりとられた男は、意外にも抵抗なしにその場に正座させられた。

私も元の位置に座り直し、一瞬のことですいぶん乱れてしまった服を整える。

窒息の危機と圧迫から解放されると、今更ながら怒りが沸々と湧いてきた。私は説教モードに入ると、いきなり突入してきた男

ダムに向って怒鳴りつけた。

「あんだねえっ……明らかに殺意のある突進にしか思えないんですけどー！」

「うっうっうっ……」

「な、なんで泣いてんの?!」

が、大粒の涙を翠の瞳から落とすダムを認識して、へによりと眉が歪む。我ながら、かなりのヘタレだと思う。

ダムは真っ赤に目を腫らしながら言葉にならないとでも言うつように口をパクパク開閉させていた。嗚咽に混じって、その口からくぐもった言語のようなものが聞こえる。

私はとりあえず彼の前に座り込むと、ポケットの中からハンカチを取り出して彼の目を優しく拭いた。次々と零れ出す涙に、ハンカチは早くも透明なシミを広げていった。

「何があったのよ……」

「うえええ……っ、でい、ディーがっ、ディーが……っ」

「ディーがどうしたの?! まさかまた飛び降りたんじゃ……っ」

「あんな奴死んじゃえ!」

「へ……?」

「だってひどいんだ! 俺がこっそり残してたプリンを……っ、あいつが食いやがったんだよ!」

「は、はあ……」

プリン。私はその不思議な発音を改めて口にして、ある種の安堵と虚脱感を覚えた。

なんだろう……ディーに何もなかったと聞いて安心するのと同時に、もうちょっと深刻なことがあってほしかったと落胆してしまう。後者の方はロキも考えいるらしく、隣からあからさまに大きい溜

め息が聞こえた。先ほどのことで機嫌は最悪であるらしく、苛立たしげに舌打ちをする。

「お前、んな下らねえことで泣いてんのか。男だったら泣くな！」
「うううう……男女差別反対！ 黒ちゃんその台詞古いよ！」
「だ、誰が黒ちゃんだ！ その呼び方やめろっつてんだろ！」
「黒ちゃん黒ちゃん黒ちゃん！ 黒ちゃんのバーカ！」
「てめえ……っ、ぶっ殺す！」

嗚呼、神様。どうしてあの平和な光景が銃と斧を交えた乱闘になつてしまうのでしょうか……。後でちゃんとお賽銭するので、とりあえずこいつら2人を冥王星あたりにぶっ飛ばして下さい。

ツケ払いで神様に祈っても叶うはずがなく、ロキは懐から取り出した銃をダムの眉間に定めた。ダムも負けじと片手斧を片手から引き出して腰を低くする。

銃口が火をふくよりも早く。

刃が空を切るよりも早く。

私が怒声を上げるよりも早く。

壊れたドアから、暢気な声が上がった。

「こんばんは。兄がお邪魔してませんか？ あ、いた」

「でい、ディーー！」

「お前なんだその巨大プリン?!」

「こんばんは……?」

人それぞれにツッコミはあったようだが、ディーは何一つ答えることなくへにやりと柔らかな笑顔を見せた。

部屋主である私の許可も取らずに（まあ律儀に取るのはロキぐら

いだけど）大股で入り込み、ダムの前に立つ。

あまりに眩しい笑顔に、ダムは怯んだように後ろへ一歩下がった。

「いやー、予想通り。やっぱ姫さまの部屋に転がりこんできたんだね」

「な、なんだよ！ お前が悪いんだろ！」

「うん、だからごめんって」

「全然誠意がねえ！ つーか、謝ったって俺のプリンは帰ってこねえんだからな！」

「その台詞も想定内。ってことで、はい」

笑顔でディーが持ち上げたのは、直径30センチ、高さ20センチはありそうなホール級のプリン。

一度ルアと双子と買い物に行った時に店頭で見かけたことがある。あれだけの甘味を摂取するのかと思うと胃の中のを全て戻しそうな気がしたので、即座に視線を逸らせたが。

例の巨大プリンをディーは戸惑うダムに手渡し、満足そうに何度か手を叩いた。

ダムは翠玉の瞳をいっぱい開いて、奇妙なものを扱う態度でそれを上下させる。不意に、涙で濡れていた顔が花開くように明るく輝いた。

「これ、俺に?!」

「そ。すっごいでしょ!」

「すごいすごいすごい! わぁ………ありがとうディー!」

「ふふふ………これで仲直りだね!」

「おう! ディー大好き!」

「まったく、調子いいなあ」

「大好き大好き大好き!」

「僕も大好きだよ、ダム」

……さつき死んじゃえとか言っただけか？

何はともあれ、デイーとダムお互いの目からハートが飛び交うことによつて、熾烈な喧嘩は終幕を迎えた。いつもこんな感じだ。心配した自分が馬鹿だったと思う。

本気なのか冗談なのか、いまいち判別がつかない。私とロキは呆れてものも言えず、いつものラブトークを始める二人を肩を並べて見守った。

……そのうち話が脱線して、ルアの悪口に入っただけだ。これもまた日常。

第六章最後の e p です。中途半端なところと思うかもしれませんが、次の章への伏線です。お許しください。

あとがきに非常に重要なお知らせを載せています。最初の一行だけでもお目通し下さい。

今まで応援して下さいました皆様方、本当にありがとうございます。

事件が幕を下ろし、私達は日常に放り込まれた。

実質の敵地である城に在住して肩身の狭いロキは、自然と私の側によってくるし、それに釣られて朝と夜に双子が絡んでくる。

双子がいなくなったのを見計らって、ルアが仕事をさぼって構ってくるし、相変わらずフレイムは私の存在を無視して業務に追われている。

しかしなんのこともない日常に紛れて、変わったことがある。

一つは、イオの姿を見なくなったこと。城の中で見かけることがあっても、何か深刻そうに柳眉を顰めて外に出て行くのが常だった。事件の前にもそんなことがしばしばあったから、極力気にしないようにしてきたが……少し、様子がおかしい。

私が話しかけても余所余所しい笑顔を向けてすぐどっか行っちゃうし……。なによ、いつもだったらうざったいほどひつついてくるのに……ムカつく。

そりゃあ、散々冷たくした覚えはある。けどそれはあいつのスキンスリップが過剰すぎるからであって、抵抗しないと何か大事なものを失いそうな気がしたから……。

でも。彼がいなくなってから、一人月を見上げて肌寒い夜を感じ

ている自分がいた。

彼はどうしたのだろうか。どうして何も話してくれないのだろうか。何か、変なことに巻き込まれているのだろうか。

貴方のために私は 何ができるの？

私はともすればすぐにあいつのことを思い浮かべてしまいそうになる頭を横にふって、考えを追い払った。

駄目だ。状況も知らないのに不安に思っ、頼まれてもいないのに心配するなんて……馬鹿みたい。ほんと、馬鹿みたいだ。

これじゃあ、まるで。

「姫さま！」

「は……はははい！ いかがごさんした?!」

「……何言ってるの？」

「……ごめん。なに？」

「いや、みんなと一緒に出かけないかって話になってんだけど

……大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、頭は至って普通です」

ディーに怪しそうな瞳で見られて、私は肩を縮こませた。

突然話し掛けられて動揺したとは言え……へました。

しかしおかげで、イオの方へ傾きそうになった思考は現実へと戻され、日常の一部へと送り返される。

私はほっと小さな溜息をつきながら、ディーの言葉を促した。

「ま、いいや。ね、行こうよ。今日はこんなに晴れてるよ!」

デューは無邪気に笑って、夜だからと閉め切っていたカーテンを勢いよく引く。

突然部屋中に降り注いだ陽光に、ロキと私はほぼ同時に眉の上に手を翳した。それでもなかなか弱まらない光に、私は目を細めてデューを覗き見る。

アムシスト

紫玉の瞳が、祝福の光をうけて煌めきを宿した。

二つ目は、そう。

ダムとデューがよく喧嘩をするようになったこと。ダムから泣き喚くことが多かったが同じ数だけ彼から大好きと告げた。

不思議なことに、いくら喧嘩しても彼らは1日ともたない。結局どちらかが折れるか謝るかして終わるのだ。

そして……喧嘩が終わった際には、必ず仲直りして二人一緒にいることが多い。喧嘩中に離れていた距離と時間を、取り戻すようにさらなる絆を深めるように。

三つ目は たぶん、一番気付きにくい。

城の中でも気付いた人と言えば、フレイムとロキぐらいだ。城で働く人たちの多くはすぐに頭を下げてしまうので、この些細な変化に気付くことはなかった。

ダムは、新緑の瞳^{トビエトシメ}。愛をあげれば愛を返し、どこまでも無邪気に微笑みかけてくる。

デューは、董の瞳^{アムシスト}。水のように澄んでいて、波紋を広げながらここまで幸せを届けてくれる。

最初は驚く人が多かった。あのフレイムでさえ、5分ほど「へえ」しか言わなかったくらいだ。

デューは照れ臭そうに笑っていたけれど、散々綺麗だと褒められ

て少しは気をよくしたようだ。もう、コンタクトをつけることはなくなった。

終わったのだ。これで、ようやく……

「デイーっ！」

緊迫したダムの声に、私は跳びあがって姿勢を崩した。

何ごとかと思いき口キの方を見てみるが、彼もまだ状況を掴めていないらしい。ひたすらにデイーとダムを睨みつけるように凝視している。

デイーは窓の脇に身を寄せて、肩で息をしていた。弟の代わりにしゃがみこんだダムがそつとしたから窓を覗く。

ただ事ではないことは、すぐにわかる。窓の外に、彼らは何か異様なものを見ているのだ。

「嘘だろ……何あれ、あんなのアリなわけ？」

「わかんないよ。フレ임様に対抗する勢力だから相当なものだと思っただけど……」

「だってあれ　庶民全員引き連れてんじゃねえか！」

「……僕らじゃどうにもならない。フレ임様のところに」

窓の外で待ち構えているだろう脅威に動転するダムを落ちつかせるように、デイーは提案を持ちかけた。

こんな時、彼は兄よりも冷静でいられる。頭の中で考えている分、口数が減るのだ。

デイーの言葉は、「報告しよう」まで紡がれるはずだった。しかし、それを遮るようにして冷たい笑い声が部屋に響く。

私は驚いて、窓の方からドアへと視線を走らせた。突然回した首が痛ましげな音をあげるが、いちいち気にしてられない。

「もう知ってるよ」

鮮やかな、赤。正装^{ドレス}に身を包む小柄な少年は、艶やかな薔薇のように、猛毒の塗られた雰^{とげ}囲気を纏わせる。

その色彩は正直言つて目に痛い。どぎつい赤と、血の凝固したような黒を基調としたロングドレスなのだ、それも仕方ないだろう。

目に入った瞬間に、目をそらしたくなる人。だけどその前に目を奪われてしまう。囚われたら最後、自分の力では決して逃れられない。

フレイムの隣に控えるようにして、ルアが佇んでいた。こちらも赤と黒の制服をいつもよりも仰々しく纏つて、背筋を伸ばしている。こうしてみると、彼も一人の大人に見えた。いつも傍にいる彼を見ていると、年下に見えてしまうから不思議だ。

デーと、ダムと、ルア。誰もが深刻そうに眉を潜めて唇を噛み締めているというのに、その場の華であるフレイムだけは余裕の笑みを浮かべて立っていた。

余裕　？　違う、これは。

「なるほどね。双子に何かしら事件を起こさせて、民衆の関心を惹く。それが本当の目的だったわけだ」

「おそろく」

「そうして下町から順に、“アリス”が危険だという噂を広めた。そこに何か城内で事件があれば、噂は信憑性を増していく。アリス狂の民衆どもは、“アリス”を取って食おうとしている城から彼女を助け出そうと立ち上がる。　相応しい指導者^{リーダー}をたてて、ね」

今度は、何も言わずにただ頷いた。ルアはそのまま項垂れるようにして、首を下げたままにしておく。

フレイムは彼の方を一瞥すると、もう一度同種の笑みを浮かべてこちらに近づいてきた。恐怖に足が竦んで動けない私など見向きもせずに、ダムとディーの間……ちようど窓の真ん中まで歩いていった。

その外側をじろりと見下げて、酷薄な笑みをさらに濃くしていく。

「まさか、ディーがアリスを攫うなんて思ってもいなかったんだろ
うけど」

「っ?! ルア、貴方……しゃべったの?!」

フレイムにばれたら殺される。そう考えたのは、何もディー一人だけではない。その場にいた全員の見解が一致して、内密にしておくことに決定したのだ。

咄嗟に私はルアの方を振り向くと、彼は同じ姿勢のまま頭を下げていた。その瞳はきつく瞑られていて、責めの言葉に怯えているようにも見える。

ディーが、怯えたような、諦めたような溜息をつく。ダムのまわりの空気が一気に張り詰め、はちきれんばかりに殺気が膨らんだ。

誰もが緊張する中、フレイムは視線を窓からそらすことなく、あたかも興味なさげに答える。

「別にいいよ、そいつ殺しても今更遅いだろうし。二人にはまだまだ利用価値があるからね」

「ふ、フレイム様、それじゃ」

「あんまり騒がないでくれる? 僕は今とても 機嫌が悪いんだ」

余裕、なんかじゃない。彼はかつて見たことないほどに 苛立っているんだ。

理解した瞬間、フレイムの周りを取り巻くどす黒いとぐろが見え

た気がした。とぐるは赤い瞳をぎらつかせる蛇へと変化し、笑顔を浮かべるダムに今にも襲いかからんとする。

俊敏に身の危険を感じたダムは、笑顔を引つ込めてなるべく音を立たないようにと身体を硬直させた。

ダムとフレイムの間にはルアが入ってきて、さりげなく彼を庇う。

「ですが、予想以上にうまく事が運んでしまったようです。アリスが行方不明になったことで溜まっていた不満が、ここにきて爆発していますね」

「ふふ……それを逆手に取った、か。やられた」

やられた、と言いながら彼の瞳に宿る闘志と憎悪の炎は一層火力を増した。

ゲーム盤でも見つめるように窓の外を睨み、駒を動かすように指で窓枠を叩く。

知らないメロディーを鼻歌で歌った後、彼は楽しそうにステップを踏んでドレスを翻した。そこで初めて私とロキに気付いたという顔をする。

「見てごらんよ」

フレイムは赤い口紅がたっぷり塗られた唇をあげて、笑った。その笑みは決して優しいそれではない。もっと背筋を凍らせるような

……獣の笑み。

ああ、この笑顔。どこかで見たことがあると思ったら　イオに初めて会った時も、同じような笑みを浮かべていた。

黒い幕越しにこちらを値踏みしてきて、楽しい遊戯^{ゲーム}を期待する残酷で無邪気な子供の笑み。玩具が面白くないものと知れば、簡単に飽きて捨ててしまうだろう。

私は溜まっていた唾を飲み込み、どうしても重くなってしまう腰を持ち上げた。ロキがさりげなく腕を引っ張って助けてくれる。

窓に近づくとつれ、その空間だけ妙に震えていることに気付いた。かなり間隔が短いのでわかりにくい……不定期に窓の外からの振動を受け取っているのだ。

太陽の光を手でよけながら、外を見る。

「え」

最初は、一体何だか分らなかった。ここからならばお城の庭園、赤一色で埋め尽くされた薔薇園が見えるはずなのに。

なのに、赤色などほとんどない。まるで轟をあげる雷雲の上にいるような、黒。ちらほら白がいたり青がいたり緑がいたりしたが……黒がやはり主要だった。

その中でも中心にいて、なぜか際立って目立つ黒がいた。全身真っ黒で赤い薔薇を胸にさしている。洒落たシルクハットに、茶色の杖。

別に彼の姿形が目を惹くのではない。むしろかえって、蠢く黒達の中、彼の似姿は不思議なほどに溶け込んでいた。

視線を集めてしまうのは　彼の、威厳。近づけさせず、離れさせず。一緒にお茶会を開いた時の温厚な人間と同一人物とは、とても思えなかった。

暗黒の瞳が、こちらを見上げる。目が、あった。

「　　っ?!」

隣でルアがそつと動き、窓の鍵を開けた。みせしめるように、勢いよく窓を上にあけて開ける。

その瞬間、今の今まで窓を震わせていたものが一気に部屋に流れ込んできた。

私は即座に耳を塞いで、鼓膜を守る。フレイム以外は情けないことに、両手を奪われて耳を塞ぐことに専念していた。

痛くなるほど押さえてもなお、聞こえる。言葉がはっきりと。

これは 怒声だ。

「アリス”を返せっ！」

多くの人の怒声に答えるように、フレイムは部屋の中心で薄く笑う。支配者であり、絶対権力の持ち主である彼は、しばしこんな笑みを浮かべることがあった。

嗚呼。隙間を縫って入ってくる民衆の声と、視界に残る黒と。全身にひしひしと感じる威圧感と 目の前で嗤う、女王。

なんとなくだが、悟った。これは 戦争だ。“アリス”という、国寶を懸賞とする戦争。

受けてたとうじゃないか。フレイムは小さく呟くと、騒音の中でも聞こえるように、声を張り上げていった。

「ルア、客人を迎える用意を。暴動の指導者^{リーダー} 帽子屋と話
したい」

僕も女王クイーンを動かそうじゃないか。

歩兵ポーンだけじゃつまらない。飽きてしまつ。

騎兵ナイトだけじゃ卑怯だ。苛々してしまつ。

女王きみと女王ぼくの接戦で、血の滾る戦いをしよう。

さあ、最初に王アリスを倒すのはどっちだ？

だって、どちらかの王が倒れない限り、この退屈な遊戯セカイは終わらないのだから……

【受験に伴う長期連載中止のお知らせ * 執筆日時：11月28日】

謝罪と、御礼。

前々から活動報告にて予告していたことですが、ついに受験を跨いでしまいました。高校二年生冬です。

受験前に連載終了を目標に掲げていたにもかかわらず、このような事態になってしまい、深くお詫び申し上げます。

「何であの時書かなかったのかなあ……」「スランプなんて言い訳……」今になって、ものすごく後悔しております。

私の不甲斐なさゆえに、読者様を1年と3カ月ほど待たせてしまっています。見捨てられても仕方ないと、覚悟はできています。

ですが、無事大学に入って（受ければ、の話ですが）からは、再び筆を取ろうかと思っております。

幼いころの思いつきで書き始めた拙文ですが、私なりに深い思い入れがあるからです。

「そんなに長く放置するなら消した方が良い」とおっしゃる方の意見もわからないのではないのです。

いつまでもこの小説家になろうのサイトに残っていること、不快

に思う方がいらっしやいましたら、その方にも深くお詫びさせていただきます。

ですが、この物語を終わらせたい。それだけはどうしても譲れないのです。

この小説をここでいったん中止したのには、いくつか理由があります。

それはここが第六章の終わりであり、第二部の終わりでもあるからです。

少し説明をさせていただきますと、

第一章～第三章 第一部 迷走（起）

第四章～第六章 第二部 籠城（承）

となっております。題名の通り、第一部はアリスが追手から逃げる話、第二部は城を基点とした話です。

この小説には第四部まで収めるつもりです。ここがちょうどターニングポイントである。その理由から、ここでいったん中止にしました。

「楽しかった」「ドキドキした」「一番好きな小説です」「面白かった」「最高です」

たくさん感想、ありがとうございました。

一体どれだけの人に私は支えられてきたのでしょうか。数字に表すこともできません。一人の読者の一言が、私にとっては何倍にも膨らんで力となっていくのですから。

書くための力、だけではありません。読者様の温かい声が、生きる力となっていたと今では思います。

誰にでも死にたい時というのはあります。命を繋ぎとめてくれる何かが、誰にでもあります。私にとってはこの小説と読者様の声が命綱だったのです。

「楽しみにしてくれる人がいる。もう少し頑張ってみよう」「そう思えた私はきつと、最高級の幸せ者なのでしょう。」

「頑張ってください」「応援してます」「身体には気を付けて」「自分のペースで」

たくさんの声援、ありがとうございます。

一つ一つの言葉が、どれほど私の中で響いていることでしょう。何度感想を読み返して、元気づけられていることでしょう。

小説だけでなく、私の身まで気にして下さった方々、ありがとうございます。本当に素晴らしいお言葉、嬉しかったです。

まったりマイペースが基本方針だった私を今では呪いますが、それでも一緒にいてくれた皆様方。本当にありがとうございます。

ありがとうございます。

本当にこの言葉以外見つかりません。小説家志望なのに、語彙が少ないですね。

感想を下さった方々。メッセージを下さった方々。コメントを下さった方々。お気に入りユーザー登録をして下さった方々。お気に入り小説登録をして下さった方々。

そして、この小説を読んで下さった皆様方。

本当に、ありがとうございます。

今日を限りに、不思議の国のアリス*幕の執筆は長期の間すべてお休みとさせていただきます。

愛形 † レンアイ † (前書き)

ルアアリで激甘。友達以上恋人未満。かなり原作沿い。

本編とは全く別の、番外編にもならない小ネタです。詳しくは続きをお読みください。

()

こんにちは、10日前に一時休止宣言をした作者です。謝罪はまた後程あとがきにて……。

今回新たに執筆したこの『愛形』シリーズですが、これは例の、「この小説は二カ月以上更新されていません」表示を防ぐためのものです。

以前寄せられたメッセージに、「逆ハーレムなのにほかのキャラとの掛け合いがない」との意見があったため、思い付きで執筆を開始した次第です。

……まあ要するに、いろんな人にアリスが愛されるお話です(・
)

ルア、イオ、ロキに限らず、フレームや双子、はては帽子やメンバーまでもがアリスに恋心を寄せてます。そういう不謹慎な話が嫌いな方は閲覧注意です！

ストーリーも本編とは別物で、話によって死ネタもあります。キアラとアリスの関係も恋人だったり片思いだったり様々です。

本編とのつながりは皆無です。番外編のように、一つ一つのお話が全部つながっているわけでもありません。本当に小ネタです。

詳しくはあとがきで話しますが、それぞれの愛の形とやらはすべて「くじ引き」で決めました。その為、本編ではアリスにベタ惚れなキャラがナイフを持って迫ってきたり、殺伐としたキャラが甘々だったりします。

なるべく原作沿いにするつもりですが、本編のイメージを少しも崩したくないかたは閲覧注意、かもです。危ないと思ったら前書きで警告します。

あくまでこれは更新停止の警告を防ぐためのものです。更新できる環境になったら、すべてまとめて削除しようかと思っています。

更新は初めのうち1か月に1話、途中から2か月に1話になります。14日をめに頑張ります。

()

それでは、『愛形』シリーズ、開幕開幕。

愛形
+ レンアイ
+

溶けてしまふ。

僕の朝は早い。

太陽が顔を覗かせる前に覚醒を遂げて、10分で用意を済ます。自慢ではないが僕の髪は綺麗なストレートなので、寝癖は全くで
きない。

体を軽い運動で解して、それからが日課の始まりだ。

誰よりも早くに厨房に向かい静寂の中二人分の朝食を作る。一人は横柄で唯我独尊のクソ餓鬼、もう一人は愛しのアリスの分だ。アリスの皿には細心の注意をこめて盛り付けをする。クソ餓鬼の方は知らん。

この城にシェフはいないのかと聞かれたら、勿論5、6人抱えていると答える。何故女王補佐官の僕がこんなことをやっているのかと言つと……あのクソ餓鬼、ことフレイム女王陛下が所望するからだ。

ム力ついたのでこの間焦げた卵焼きを皿にのせたら、怒り狂つて小1時間追い掛けまわされた。

起こす順番はフレイム、双子、そしてアリスの順だ。前から三名は寝ぼけ眼のまま本能的に攻撃してくることがある。

こんなに献身的な僕を襲おうとするやつらの気が知れない。いつか絶対下剋上をおこしてやる。

さて、長々と支度をして漸くアリスの部屋の前。僕は満面の笑みを浮かべてドアをノックした。

2、3回叩いて反応がないのを確認する。仮にも現役女子高生が7時にもなつて爆睡してるってどういふことだと疑問に思つ。

「アリス〜？ 起きてますか？」

すっかり母親役が定着してしまった僕だけでも、こんな時だけは自分のポジションに満足を覚えた。

静かにドアを開けて、最弱の明かりを点ける。薄ぼんやりと灯った白は、それでもやはり彼女を刺激したのか、ベッドの上で塊がもぞりと動いた。

近づいても布団にくるまるようにしたアリスは僕に気付きもしない。ちよつとムツとするが、可愛い寝顔を見れると思うとそちらのほうがり難かった。

ベッドに腰をかけ、起こさないように慎重に、彼女の頬を撫でる。

「ん……」

身じろぎをする彼女に指がピタリと止まるが、瞼が動かない様子をみて再びゆるゆると動き出した。

嗚呼、なんて可愛い。人並み以上に長い睫毛に、少し開いた唇。

穏やかに寝息を立てる様はあたかも美の女神のよう！ いや、むしろそれ以上！

……なんていう本心をこの間ぶちまけたら、本の角で頭を強打された。恥ずかしがる姿も可愛らしくてご飯10杯はいけるが、残念なことにもその後気絶した。

「アリス……」

このまま寝顔を見ていたいのには山々だが、時間が圧しているのも事実だ。フレイムは先に朝食を済ませて仕事に取りかかっていることだろう。仕事狂の彼は、補佐役である僕の遅刻も勿論許してはくれない。

ルアは切なげに溜め息をついてアリスから指を剥がした。そのまま布団に両手を掛ける。

バツ

「いつ……?!」

「アリス！」

先程まで愛撫を忍んでいたとは思えないほどの勢いで、布団を巻き上げた。そう、巻き上げたというのが正しい表現だろう。空中に浮かんだ布団は半回転して埃を撒き散らしながら、どさりと足下に落ちた。

突然体温を奪われた彼女は小さく驚いた声をあげるとくるりと丸まってしまった。

寝ぼけ眼のまま抗議するような様は、まるでハムスターのよう。自然と赤くなる頬をぺしりと叩いて彼女を揺さぶった。

「ほらアリス、朝ですよー。ご飯も出来てますよー」

「んう……… いらぬ、寝たい………」

そんな！ せっかく真心を込めて作ったのに！

だけれども、真つ向に非難できないのはこの可愛い仕草のせいか。アリスは自身のネグリジエを布団替わりにするかのようにな、身を振って抱え込んだ。

あ、白いお腹がチラツと……… じゃないじゃないじゃない！

何を考えてるんだ僕は！

「さてはアリス、また夜更かししましたね！ ダメですよ、双子が誘ってくるからって、付き合っちゃ」

あの二人は体格の分だけ体力も凄まじいのだ。門番の仕事を終えた後も元気良く走り回って、放っておくと2時を過ぎてもまだ騒い

でいる。

そんな奴らに付き合っただれだろ……。僕は苦々しくも息を吐いて、ベッドに腰を落とした。

昼夜逆転の生活を許すつもりはないが、あと5分くらいそっとしておいてもいいだろう。

「まったく……。そんなに双子と遊ぶのは楽しいですか？」

僕には碌に構ってくれないくせに。

拗ねたようにぼやくと、アリスが身体を逆向きにしてこちらに向かいあった。

とろんと溶けた瞳に、ドキリと胸が大きく鳴る。きっと彼女の意識はまだ夢に片足を突っ込んでいるのだろう。こんなに至近距離なのに身体を引きもしない。

……………我慢。うん、我慢。

「だって……。あの子たち、すぐ泣いちゃうんだもん……………」

特に母性本能が盛んな女性に多いのだが、アリスもまた典型的に、年下の涙に弱いタイプだ。華奢な体つきとは言え、相手は180の男なのに……………。

しかも、ダムはともかく、デーは完璧に計画的犯行だ。アリスもあの男の打算的のところ、知らないわけではないでしょうに……………。

深く溜め息をつく、アリスは擦ったそつに身を擦らせた。

互いの息が触れ合うほど近くにいたことを今更思い出し、僕は慌てて息を詰める。

毎日起きた後に必ず歯を磨くから大丈夫だと思うが……………アリスに息が臭いと言われたら立ち直れない気がする。

「じゃあ、僕が泣いても構ってくれますか？」

「あんたのは泣き真似でしょ……おっきいんだから泣かないの……」

母親のように頭を撫でてくる手は、どこまでも優しく警戒心の欠片もない。

だが、それがただ単に心を許しているわけではないことを知っている僕は、眉を顰めて渋面を作った。

アリスは時々僕を子供扱いする。今だって、おっきいと言っているわりには言葉が幼児に向けるそれだ。

それはきつと彼女が無意識に、僕を恋愛対象“外”に落とそうとした行為の表れなのだろう。ひどく不快でもあるし、どうしよもなく悔しくもなる。

「アリス、僕は貴女よりも年上で、大人なんですよ」

「る、あ……？」

思い知らせたい。僕が貴女にどれだけ欲情しているか。どれだけ“大人”の行為に及びたいか。

その痩せた軀を力の限り抱きしめて、白い肌が埋もれてしまっただけでキスの雨を降らせて、僕以外のことなど考えられないくらいに脳味噌をとろけさせて……。

僕はゆるゆると首を振って、切なげに微笑んだ。頭を撫でていたアリスの手首を掴んで、その手の甲に唇を押し付ける。

それでも、無理矢理に行為を進めないのは、彼女を憐れんでしまっただけに愛しているから。

「泣いたりして、アリスを困らせたりなんかしません。貴女にはずっと笑ってほしいんです」

出来ることなら、自分の隣で。

……ああ、いけない。こんな弱気なこと言ってしまったらアリスが心配してしまう。

へにやりと崩れるように笑うと、アリスも微笑み返してくれた。柔らかく弛緩する唇は寝起きの為なのか赤く濡れそぼっている。

うつ……こ、これはヤバい。理性がぶっ飛びそうです……。

「アリス、僕ね、夢を見たんです」
「夢？」

アリスの声は今までよりもはっきりしっかりしていた。話している内にだんだん、意識が冴えてきたのだろう。

それでも僅かな隙間を隔て、僕が近くにいるのを許してくれているのは……少しぐらい、自惚れてもいいだろうか？

寝癖の残る髪に指を絡ませる。細い肌触りは絹よりも上質。

「僕とアリスが恋に落ちて、両想いになって、お互い激しく愛し合った夢です」

「……世間ではそれを妄想と言うのよ」

「失礼ですね。正夢ですよ。3月に見ましたけど」

「ウサギの発情期じゃない。あんた夢の中で私に何したの」

「何って……そりゃあ、とても口には出せないことを色々……って冗談ですってば」

だから引かないで下さい。ウサギは寂しくなると死んじゃうんですよ！

「夢の中の僕はね、一つになってしまいたいと思うほど貴女を愛してたんです」

「卑猥な意味じゃないでしょうね」

「いや、そういう意味も多少は込められてたと思いますけど……じやなくて、いちいちツッコミをいれないで下さい」

「わかったわよ……続けて」

「そしたら、アリスがアイスのようにどろどろに溶けて……」

「アリスがアイス？ 笑った方がいい？」

「……………」

「……………ごめん。続きをどうぞ」

「はぁ……。アリスが溶けたので、僕は嬉々として貴女を食べたんです。床に散らばる貴女を舌で掬って、味わって、嚥下して……貴女が僕の中に取り込まれていくのを感じて、とても幸せでした」

アリスの言う通り、妄想なのかもしれない。夢にしてはあまりにも頻度が高すぎた。

アリスに褒められた日、アリスを抱きしめた日、アリスに口付けた日……決まって、僕はアリスを食べていた。

夢の中のアリスも甘ったるい声で幸せと囁いていた。完全にならなくなるのだから、至高の幸せだ、と。

「夢はいつも幸せなところで終わります。だけど僕は、その先を想像してしまっんです。……地獄のような日々を」

「……………ルア……………」

「だって、貴女がいないんです。いくら探しても、いくら呼びかけても、貴女が見つからないんです。どこにも……僕の中にしか」

言いながら、吐き気を覚えた。夢の中ながら覚えている、あの甘味。甘く喉を焼いた、幸せ。

だけどそれは、なんと残酷な結末を迎えることか。鏡を見ても愛しい女の姿はおるか、残滓すら見いだせない。

笑い合うことも、抱き合うことも、唇を合わせることもできない。幸せの末路はあまりにも虚無なものだった。

「……ただの夢、よ……」

「はい。でもきつと、僕も同じことを考えているんです。貴女が溶けてしまったら、僕は貴女を食べてしまう。だから、アリス」

真剣な面持ちで彼女を見つめれば、彼女は顔をひきつらせた。話
が話だった為か、若干引き気味だ。

僕はそれ以上彼女が逃げないようにと腰に腕を回して抱き締めれば、アリスは面白いほど震える。仕方なく、腕の力を緩めた。

握った手に指を絡ませ、縛もつれさせるようにして何度も角度を変えて握る。

嗚呼それとも、僕は望んでいるのだろうか。糸と糸が絡んで縛もつれてしまうように、僕とアリスも縛もつれて離れられなくなればいい、と。なんて幸せな夢。溶けて食べて消えてしまうより、ずっといい。

「アリス、ずっと固形のまままでいてくださいね」

「……はい？」

「固形物なら、僕もさすがにバリバリムシヤムシヤ食べる気にはなりませんしね」

「へ？ あ、あの……」

冗談まじりに言うと、アリスは呆れ返ったように首を振った。

あながち嘘でもないのだが……こうやって言わないと、貴女は警戒を解いてくれないから。

ひとしきり笑った後、アリスは漸く上体を起こした。肩を回して身体を解す彼女を見ながら、少し名残惜しいような気がする。

「さ、お腹も空いたし……朝ご飯食べに行きましょうー！」

「アリス……もうちょっと寝ててもいいんですよ？」

ほんとは、自分があと少しでも温もりを感じていただけ。
そんな浅はかな考えもアリスにはお見通しなのか、ふわりと包み込むように笑った。

出会う前から話を聞き、恋が芽生えた少女。その細い手首をつかみ、この世界へと引きずり込んだ時から恋に溺れた少女。彼女が柔らかに微笑んだ時から、恋焦がれていた。

僕はアリスの笑顔に耐え切れなくなつて、勢いよく彼女に抱きついた。

僕の腕の中で潰れたアリスは、「ぐえっ」と色気のない声を上げる。もうちょっと情緒のある声を発してほしいものだが、それこそ欲張りというものだろう。

「アリスー アリスアリスアリスー」

すりすりと彼女の肩に額を擦り付ける。甘い芳香が敏感な鼻を擦った。女の香水なんてまっぴらだが、アリスの香りならばずっと嗅いでいたい。

甘えるような行為がアリスの警戒を徐々に解いていったのか、彼女は腕に大した力を入れることなく僕を押し返そうとした。

だがそれで大人しく離れるほど僕は野暮じゃない。大好きな人と二人きりでいられる時ぐらい、大胆になつてもいいだろう。

「ちよつと！ あんたは犬か！」

「失礼な、僕はれっきとしたウサギです」

それに僕は誰にでも甘えるわけじゃないんです。誰彼構わず尻尾を振る低俗な犬と一緒にしないでください。

そう続けるために顔をあげると、先ほどよりもずっと近い距離にアリスの顔があった。それもそうだろう、現在進行形で抱き着いて

いて、僕らの距離はゼロに等しいのだから。

視界いっぱいには彼女の顔があるという事実には幸福を覚えて、僕はさらにアリスへと詰め寄った。

アリスは今更ながら状況が冗談じゃないことに気づき、慌てて抵抗を激しくした。ふふっ……顔を真っ赤にして焦るアリス、可愛いです。

「あ、あの！ ご飯！ 私ご飯食べたいんですけど！」

「僕は据え膳が食べたいです」

「据え膳って何！ この場合の据え膳って！」

「しいて言えばアリスが食べたいです」

「ぎゃああああっ！ あんた固形物は食べないって言ってたじゃんかよ！」

「大丈夫です。アリスはきつと柔らかいです。バリバリなんて音しません」

「そういう問題じゃねえええっ！」

ちよつとつるさい気がするこの声も、乱暴だけれどどこか優しい言葉も、抵抗するようできて強くは拒めないこの両手も……全部全部、愛しくてたまらない。

アリスを食べる気はしない。いなくなってしまうたら、僕は寂しくて悲しくて死んでしまうから。

だけど、食べてしまいそうになるほど愛しいのは本当。どうやったらこの距離を埋められるか、どうやったらもっと近くにいられるか、いつも考えてしまう。

食べてしまったら消えてしまう、だからそれは却下。まだ答えがわかりそうにないので、しばらくこのまま考えさせてくださいね？

「アリスー」

「いい加減にしろーっ！」

……まあ、アリスのそばにいたら、考え事なんてどうでもよ
くなっちゃうんですけど。

憐愛。縛愛。恋愛。

『貴女の一番近くにいたいんです』

愛形 † レンアイ † (後書き)

憐（ルアが大人だと主張したすぐ後。『彼女を憐れんでしまうほどに愛しているから』）
纏（「ずっと固形でいてくださいね」の直前。『僕とアリスも纏れて離れられなくなればいい』）
恋（「アリスー アリスアリスアリスー」のすぐ前。『恋が芽生え 恋に溺れ 恋焦がれた』ひそかに「土 水 炎」になつてる）

砂糖の固形物でも食ってんじゃないかってほどの甘さです。

本編では何かと邪魔者（双子やら双子やらフレイムやら）が多くてギャグ一直線なルア君ですが、きつとギャグもエロもシリアスもなんでもできる万能キャラなのだと思います。

ただ、万能すぎていまいちキャラ立ちがしないことも……。今回もヤンデレにしようか忠犬にしようか迷って、結局入り乱れてしまいました。病む一步前の、忠犬的な。

ちよつと病み気味のツンデレな彼も好きですが、子供っぽい彼も好きです。

【以下は『愛形』シリーズの解説です】

どうも、作者です 〓（ノ、・、・、）ノ

まずはじめに言い訳をさせてもらいますと、これらはすべて行き帰りのバス電車にて、携帯でカチカチやりました。パソコンはもち

ろん封印したままです。

受験勉強はしてるんですよ！ こゝ心はまだ折れてませんから！
あれだけ皆様に励ましの言葉をかけてもらいながらのこのご投稿
してごめんなさい……。更新停止を少しでも防ぎたかったのです…
…。

体に負担をかけないようにします！ 無理なくマイペースに、
もちろん勉強も並行して、頑張りたいと思います！

どうかもう少し、お付き合いいただけたら幸いです……。なんだ
か私って二枚舌ですけど……。

話は転換して、『愛形』シリーズですが。さすがに本編を携帯で
進めたくはなかったので、小ネタの寄せ集めに手を出してみました。
受験終わったらブログでも開いてやりたかったこと、「みんなの愛
の形」です。

ジャンルとしては、「甘め」「病みめ」「切なめ」があります。
きつと3：3：4ぐらい。

ヤンデレ！ といったらディーを思い出すと思うのですが、必ず
しもそうとは限りません。何故なら すべては神の定めによっ
て決断されたことだからです！（中二病乙）

嘘です、あらかじめネタを考えて、あみだくじで決めました。以
下がその結果です。

（ ）

・ルア レンアイ

・イオ キョウアイ

・ロキ モウアイ

- ・フレイム ユウアイ
- ・デー センアイ
- ・ダム ヘンアイ
- ・レーテ ギアイ
- ・レスト ハクアイ
- ・マルス ジュンアイ
- ・アリス シツアイ

()

はい、漢字を連想してみてください。とりあえずイオさんは一発KOで死ネタフラグがたつてますね。

基本この順で行きますが、思いついたら書く形式なので順番が入り乱れる可能性があります。

今のカタカナから連想される3つの漢字をたどって、『愛形』を書いていきたいと思えます。更新はのったりしますが、受験勉強と並行して頑張つていきたいと思えます！

もちろん携帯で！

それでは、ハッピーバレンタイン！ (*・・・)ノ。+∴。

∴*∴。+。∴*。

イオアリで激病。かなりバイオレンスな状態です。イオ アリ(???)。長くなったので三部にしました。原作の3年後ぐらい? こんな未来は嫌だ。

監禁・暴力警報発令中。愛ある鬼畜というか、愛が痛いというか
……。

キャラ崩壊警報発令中。本当のイオはきちんと好きな子の幸せを
考えてやれる子です。

愛形
十 キヨウアイ 忘名草
十

俺だけのアリス

夜も中頃になれば強烈な眠気もだんだん覚めてきて意識がはつきりしてくる。ようやく動くようになった腕を壁に付き立ち上がると、闇の隅で影がびくりと震えた。

1カ月経っても変わらない初^{ウツ}な反応に、俺は堪えきれず小さく笑

ってしまった。いい加減慣れればいいのに、あの子は無意識に俺を誘うことをやめない。

俺とあの子がいるこの“聖域”を誰にも侵されてないことを確認しながら、少しずつ彼女のほうへと近づいていく。

わざと足音を立てると、少しだけ開いた赤い唇から小さな悲鳴が漏れるのがわかった。可哀想に、怯えてる。だけどそんな顔も可愛いわ。

「アリス」

名前を呼べば、身体を震わせる愛し子。血の気の失せた青白い顔に浮かんだ唇は完璧な真紅^{ルージュ}ではない。黒く変色した口紅に、俺は不快げに眉を顰めた。

アリスに着せたドレスに飛び散った口紅も、もとの鮮やかな色を失っていまは赤黒く腐ってる。なんてことだろう、この子には目も醒めるような赤が一番似合うのに。

どうしようかと思案する俺を、潤んだ黒曜石の瞳が恐怖を孕んだまま見上げる。

安心させるようにアリスの目の前で膝を折ると、大きな瞳から真珠の涙が零れた。

彼女のものというだけで、どうしてこんなにも美しく見えてしまうのだろう。俺は唇で丁寧に涙を吸い取りながら、幸せそうに微笑んだ。

「しよっぱい」

昔だっただらきつと「当たり前でしょ」と笑いながら紡いでいた唇は、今はもう泣き声しか漏らさない。

それでもいい。アリスのものは、涙も悲鳴も、全部全部綺麗で甘美なのだから。

嗚呼、でもたまには名前を呼んでもらいたいな。

「ねえ、アリス」

「……っ！ ふっ……」

綺麗な唇を汚した口紅に舌を這わせて舐めとる。パリパリと音をたてて徐々に剥がれるそれは、鉄錆の味を残した。

けて好きな味ではないが、舐めている唇がアリスのものであることを思うと、どうしようもなく愛しい。

アリスは、恥ずかしがりも抵抗もしない。擦ったそうにすることも拒絶することもない。

アリスは、色々なことを忘れてしまった。ちょっと前はあんなに呼んでいた他の男の名前も、今は彼女の記憶から消えている。

アリスが覚えているのは俺のことだけ。俺だけ見て、俺だけに乞う。俺の名前だけ呼んで、俺の存在にだけ怯える。

俺のアリス。俺だけのアリス。なんて、甘やかな響き。

「俺の名前、呼んでよ」

「ひっ……い、」

「声小さいよ、アリス」

「い、……い、や……」

「どうして？ ねえアリス。俺の名前覚えるでしょ？」

優しく微笑んであげれば、更なる恐怖に引きつるアリスの顔。

そういえば、最初に逢った時も同じような状況だった。あの時は俺が四肢と首に枷を嵌められて、黒い布越しに貴女の影を見ていた。嗚呼、懐かしいね、アリス。今は全く逆の状況だけれど、あの時と同じように貴女は俺に臆するんだね。

そんなに怯えなくても、いい子にしてれば何もしないのに。怖が

りなところも可愛いよね。

「アリス、ほら」

唇の間に親指を押し込んで、言葉を促す。唾液に濡れていく様はひどく淫靡だ。

興奮気味に彼女の喉奥へと乗り込もうとする指を、小さく震える唇が阻む。嬉しそうに微笑んだ俺はその先の言葉を待ちわびて

「たす、けて、“ ”」

パシッ

口内を愛撫するその手で、アリスの頬を張った。じんじんと痺れる手のひら。俺が痛いと感じるのだから、打たれたアリスはさぞかし痛いだろう。可哀想に。

頬に熱を溜めたアリスは一瞬忘失した後、堰を切ったかのように泣き喚いた。俺とアリスだけの部屋に、悲痛な泣き声が響き渡る。

嗚呼、涙で濡れた頬も、洩れそうな喉を突き破ってでてくる声も、恐怖で歪んだ顔も。全部全部可愛い、可愛い可愛い可愛い可愛い。可愛いけどさ、アリス。

バシッ

「あぐっ…………ふえっ…………」

「頭の悪い子」

先程よりも力をこめて叩くと、アリスは口の中を切ってしまったのか、涙を流しながらも叫ぶのを止めた。

口端を伝って流れる唾液混じりの薄い血を舌で舐めとりながら、

優しい仕草とは裏腹に左手でアリスの前髪を乱暴に掴む。

掴んだまま上へと持ち上げると、悲鳴とは別の呻き声が発せられた。痛いのかな、でもごめんね？ こうしないとアリスの顔、ちゃんと見れないから。

「本当に馬鹿な子だね、アリス。俺は“俺の”名前を呼んでっ言っただよ？」

バシッ

「他の男の名前なんて聞きたくない。ねえ、アリス。俺の名前、覚えてるでしょ？」

バシッ

「キスしたじゃん。デートも、告白も、結婚も！ 好きって言うてくれたじゃない！ この頭は、好きな人の名前も覚えてないの？ このお口は、好きな人の名前も言えないの？ ねえ！」

バシッ

台詞の合間に手のひらを容赦なく往復させる。乾いた音が耳に小気味よかった。

何度目かの罰を下そうとしたところで、このままではアリスは何も喋れないことに気付く。

仕方なしに憤りを抑えて叩く手を止めてやると、アリスの唇が恐怖に戦慄いた。生温い息と熱い涙とともに零れる、待ちわびた言葉。

「ひっ、い……い、お……いおお……」

小さいながらも紡いだ名前に俺は狂喜とともに不思議な安堵を覚えた。震えるアリスの肩に顎をのせ、優しく優しく彼女を抱き締める。すり寄せた頬は濡れていて熱を孕んでいたが、それすらも愛しい。

よかった……。あまりにもアリスが素直じゃないから、俺のことも忘れたんじゃないかって不安になっちゃったよ……。

アリスは忘れんぼうだから、その度に身体に刻み込んでおかないやならない。他の男のことなんて忘れてもいいけど、俺の名前まで忘れないでよ。

だって俺は、アリスの恋人なんだから。

「いい子……」

頭をそつと撫でれば、我慢仕切れなくなったでも言うようにはらはらと落ちていく雪。

何がそんなに悲しいの？ あ、それとも嬉しいの？俺もアリスの恋人になれて、最高に幸せだよ……。

機嫌を直した俺はあることに気が付いて声をあげた。随分と痩せてしまった肢体。機嫌悪そうに虚空へと向けられた両眼。

ああなんだ、そんなこと？俺は苦笑混じりに顔を離すと、いつまでもいじけて此方に焦点を合わせないアリスの頬を撫でた。あつつい……。

「アリス、お腹空いてて苛立ってたんだ？」

「……………」

「ごめんね、俺どうしても日中は思うように身体を動かさなくて。お昼ご飯食べてないよね？」

「……………うえっ……………」

嗚咽をあげるアリスを宥めるように唇にバードキスを繰り返して落とす。

ディープなのはアリスも緊張してしまうようで、最初の頃、入れた舌を噛まれてしまった。あの時初めて、アリスを気絶させるくらい叩いちやった、かな？

涙のしよっぱさと唇の甘さを名残惜しそうに味わうと、俺は漸く重い腰を上げた。薬の副作用でまだ気怠さが抜けませんが、動くには問題ないだろう。

日中は本当に不思議な時間だ。確かに自分の視界で自分の身体だということに、まるで言うことを聞かない。

こんなにも大事に大事に閉じ込めているアリスを、逃がそうとさえしたのだ。

俺は何かの病気なのだろうか？ 夢遊病というのはわかるが、太陽が昇ると身体が勝手に動く病気なんて聞いたことがない。

病名も治療法もわからない俺は、仕方なしに応急処置として強い痺れ薬を夜明け前に投与している。

一度打てば半日は呼吸するのがやっとというそれは、何度も服用すれば確実に細胞を破壊し、臓器の機能を少しずつ奪っていくことだろう。

別に早死にしたいわけじゃないけど、こうしないと昼間の俺がアリスを逃がしちゃうから……。言い訳がましく心で呟く俺は、血反吐を吐くようになった今でも薬を打ち続けてきた。

「それじゃあアリス、何食べたい？」

「……………」

「泣いてばっかじゃわかんないよ。ねえアリス、何食べたい？」

「ふっ……………かえ、して……………」

「ねえアリス、何食べたい？」

「かえして、よお……」

「ねえアリス、何食べたい？」

「返して……！ ルアとレーテを返してよおっ……！」

ドガッ

……………ん？ ああ、いけないいけない。またアリスを殴っちゃった。

アリスはお腹が空いてるんだよね？ だから悪い子になっているんだよね？ ああ、可哀想可哀想。早くお腹の膨らむもの作ってあげなきゃ。

だって機嫌の悪いアリスは、恋人の神経を逆撫オレでするのが上手だもんね？ 恋人はアリスのことがだあいすきだから、つい怒っちゃうんだもんね？

ああ、早く早く早く。美味しい美味しいご飯を作ってアリスを喜ばせてあげよう。アリスを満たしてあげよう。

食べ終わったら、恋人らしく俺に笑いかけてくれるよね？ アリス。

アリスと“かんこく聖域”を繋ぐ鎖の音を背後に、俺はデタラメな鼻歌を歌いながらその牢屋を後にした。

狂愛。

『さあ、俺の名前を呼んで?』

もはやごめんなさいとしか言えない。バイオレンスな病みイオが書きたかつたんです。キャラ崩壊は仕方のない犠牲です

にしても、やりすぎちまつたな感がどうしても拭えない…… (・
・、) しかも三部って！ 三部って！

先に予告しておきます。この一話だけ見るとイオさんは非常に楽しそうにアリスを殴ってますが (コラ)、この先は誰もが可哀想なお話です。

「こいつらってまさか、もう死ん (ry) ってな人約二名も、バイオレンスイオ君も、監禁されたアリスも、そしてアリスが助けを求めた “ ” 君も、最高のバッドエンドを迎えます。

……ですから、以下に当てはまる人のみ、次回と次々回をお楽しみください。

()

死ネタ平気

バイオレンスイオ君に一切不快感を感じなかった

残酷・流血描写平気

ヤンデレばっちこい

()

上の一つでも「うつ」と来た人は、キョウアイ編はスルーすることを勧めします。

それでもなお、続きが気になるという方は私の方までメッセージを下さい。1週間以内に返信頑張ります。

【追記：誤解を招く言い方すみません！！「ヤンデレ・グロ嫌いで話も気になる」ということだったのかだけ教えて」という方に「話の概要」を教えるという意図のものです！第二話、第三話自体は来月、再来月に普通に更新されます。「ヤンデレ・グロばつちこいやあ！」な人はお手数ですが、一か月後の更新をお待ちください……。申し訳ありませんでした（泣）】

次回は、一か月後の【4月14日午前0時】に投稿予定です。

えー、タイトルの読みは“わすれなぐさ”です。勿忘草をもしりました。

イオは「他の男の名前」を「忘れてしまった」と語っていますが、実際は「忘れてしまった」のではなく、アリスは「言えない」のです。

「他の男の名前」を呼べば殴られると知っているアリスは、自然植えつけられた恐怖から「抵抗」も「拒絶」もできなくなります。イオはそんなアリスを見て「色々なことを忘れてしまった」と語っているのです。

あー、それから「黒く変色した口紅」については第三部で説明するかと思われます。

わかる人にはわかるかと思いますが、Sound Horizonの「stardust」を参考にしています。『酸素に触れた赤は やがて黒に近づき示す』 二人はもう永遠に 一つにはなれないという事実を『』

ヒントは、「赤から黒に変色した」とこと、「鉄錆の味」です。
鯖^{サバ}じゃないです、錆^{サビ}です。

それでは次回、また悪夢が……。

えっ、ていうか今日ってホワイトデーだよね？ いいのかこんな

んで!

それでは、ハッピーホワイトデー!

* . . . * : . . . p) * ` (, p q) , * (q . . .

愛形 十 キヨウアイ 不叫和音 十 (前書き)

前話に引き続きイオアリで激病。(作者の)狂気が止むところを知らない。キヨウアイ第2部です。前話からお楽しみください。イオアリとのたまつときながら、アリス登場してません。ゲストとしてマルスとレストが出演。

死ネタ注意!!

残酷・狂気描写注意! 変態紫がとことん狂っていきます。

包丁がまな板を叩く音に混じって、玄関の扉を開ける音がした。

此処厨房は広大な屋敷のほぼ真ん中に位置し、音も良く響くため、耳の良いイオなんかはどんな音でもキャッチすることができた。

お客さん？ ならいつも通り、殺しておかなきゃ。

キャベツを刻んでいた包丁を休めるが、どうやら今度の客はいつものものとは少し違うらしい。

やけに騒々しい足音。はしゃぎっぱなしの低音と、それを呆れ混じりで諫める高音。

記憶に残るその声に、俺は思わず顔を綻ばせた。よかった、帰ってきたんだ。いつ始末しようかと思ってたんだ。

俺は手をきれいに拭いながら、2つの声へと近づいていった。

「うっはあー！ 久しぶりの我が家だあー！」

「まさか1ヶ月半も森で遭難するなんて……と、とりあえずお風呂

……」

「何だよレスト。3日前に水浴びしたばっかじゃん」

「3日……?! ああああ！ い、言わないで！ そんなに長い間身体の垢を落としてなかったなんて……！」

「なんだ？ アカってそんなに汚ねえもんなのか？」

「汚いよ！ 不潔だよ！ れっきとした汚物だよ！ 君のせいで僕の体に大量の垢が……っ、ああもう！ マルスのハゲ！」

「は……ハゲえ?! ざけんな！ 俺はこんなにフサフサだぞ！」

「キヤアアアッ！ フケだらけの頭をこっちに向けなさい！」

「フケ……? なんだ、それ。レストは嫌いなものが多いな。好き

嫌いをするとマスターに怒られんだぞ！」

「お風呂に入らないで異臭放ってる方が怒られるよ！ もう我慢できないうつ、今すぐお風呂沸かしてきて！ 今すぐ！」

「はあ？ や、やだよ、レストが入るんだからレストが洗えよ！」

「……なんでそこでもつてんの」

「うつ……」

「言いな」

「だっ……だつて夜のお風呂つて不気味じゃなか！ ゆ、幽霊とかいたら……っ」

「なっ……何言ってるの！ 殺し屋が幽霊怖がるなんて、ば、ばっかじゃないの！」

「………のわりにはレストも震えてんじゃ……」

「うつ、うるさいよ！ そんな非科学的なもの、存在するはずが……」

「ねえ」

「「ぎゃああああっっっ！？」」

突然背後から話しかけられたマルスとレストは、野太い声と黄色い悲鳴を上げて飛び上がった。

話しかけた張本人である俺はというと、一斉に机の下に滑り込んだ2人を眇める。呆れを通り越して軽蔑の眼差しを送ると、いち早くレストがこちらの存在に気付いた。

「いつ、い……イオ、さん？」

「疑いようもなくそうだけど。……何やってんの」
「じ……これは！」

レストは漸く自分の格好が目に入ったらしく、隣で未だに震えている相棒と自分、両方を見やりながら青ざめた。

簡単に言ってしまうえば、頭隠して尻隠さず状態。しかも2人揃って全く同じ格好というのだから、外面を異様に気にするレストとしてはこれ以上に屈辱的な絵面はないだろう。

「あ、あの、あのあのあの、こつ、これには、その、ぶつ、深いわけがございませすので……っ！ ああああっ！ もう！」

慌てて机から這い出したレストは何か言い訳をしようと両手を振りながら口を開くが、でてくる言葉はとも日本語とは思えない。軽蔑の色が濃くなっていく視線に耐えきれなくなったのか、逆ギレという道に逃げ込んだ彼は、もう一方の相棒を思い切り踏みつけた。

哀れ、踵の高いブーツの下敷きとなったマルスは短い悲鳴を一つ上げただけで動かなくなった。薄情な相棒は物言わぬもう一方をストレス発散道具のように踏みつけた続ける。

「だから言ったじゃん！ 幽霊はイオさんだっただよ！」

「え、ちよつと。それニユアンス違うから」

「こんな不気味な幽霊、変態が化けて出てきたに決まってるじゃん！」

「何勝手に殺してんの。しかも変態はまだしも不気味って。不気味って！」

「ああもうヤダ！ ぜえったい変態の祟りだよ！ マルスが37564円しかお賽銭しなかったからだよ！」

「多っ？！ つーか数字不吉！ 神様に喧嘩売ってると思えな

「いよ！」

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！ ぼ、僕もうお風呂入ってるから！ マルスなんてもう知らないんだからね！」

「ああ、それならさっき俺が沸かして……って何ツンデレ発言を残して去ろうとしてんの！」

「マルスのハゲ！ もう大っ嫌い！！」

「破局?!」

相棒間ドメスティック・バイオレンスが延々と行われているのを端目に、俺は懸命にツッコミを入れていた。

レストは多分半分も聞いていない上、俺だってもともとツッコミ気質ではないのだが……こいつら本当に調子狂う。

「だけど嫌いなわけじゃ「なかった」んだけどね。俺は小さく苦笑しながら、脱兎の如く駆け出そうとしたレストの腕を掴んだ。」

先程の幽霊騒動の名残があるのか、一瞬彼の身体がびくりと大袈裟に震えた。だがそれは刹那のこと、いつも通り嫌悪感丸出しの気丈な瞳で睨まれる。

「何か用？ ぼく……俺、さっさとお風呂入りたいんだけど」

「うん、沸いてるよ」

「へ？」

「お風呂、沸いてるよ。俺が沸かした」

「……あつそ、どうも。ていうか何でイオさんがここにいんのさ」

「今までどこに行ってたの？ 俺、心配したんだよ」

「俺が先に質問してただけ。大体、なんであんなに心配されなきゃいけないわけ？ 気持ち悪い」

「今までどこに行ってたの？」

「……ちよつと」

「今までどこに行ってたの？」

「い、イオさんには関係ないでしょ?!」

「今までどこに行つてたの？」

腕を掴んでいた手に思い出したように力をいれてみる。ぎりりと骨が圧縮されていくとともに甲高い悲鳴が短く上がった。

マルスに介入されたらまずいと考えた俺はゆっくりと力を緩める。レストは声を上げるのをやめたが、血の気の失せた顔で俺を凝視していた。

俺は少しでも相手の警戒心を取り払おうと、にこやかに微笑む。すると、レストの瞳が大きく見開かれガタガタと一層大きく震えだした。

アリスにも同じような反応を返されたことを思い出す。……そんなに俺の笑顔つて胡散臭いのかな？ ちょっとショックだ。

「今まで」

「もつ……、森だよ！ 1ヶ月半ずっと森の中さまよつて……木の实とか野兎とかで食いつないできたんだ！ これで満足でしょ?!」

野兎つて……レストはともかく、マルスは共食いということにならないのだろうか？ イオは吹き出してしまいそうになるのを必死にこらえて、考えを待らせた。

森にいたというのは本当だろう。マルスの方向音痴能力を以てすれば1ヶ月半どころか1年は森の迷い人となりそうだ。文句を言いながらも大人しく付き合っているレストも、間違いを正せる程の記憶力と方向センスを持っているわけではない。

とすれば、街に下りて人とは接触していないのか。いや、街に下りていたら今この場で自分と和やかに対峙することはないはずだ。

街は、“アリス”がいなくなったという噂で持ちきりなのだから。

俺はくすりと笑うと、レストの腕を漸く離してやった。彼は赤く鬱血した腕を庇うようにして俺から3歩の距離をあけると、敵意と恐怖の入り混じった瞳で俺を睨み上げた。

力の差は歴然としている。今この場で息の根を止めてやってもいいんだけど……放浪の拳げ句に殺されましたっていうのはあまりにも哀れな気がする。

それにこの2人は“何も知らない”。2人の漫才を見ていると馬鹿らしくも楽しいから、生かしておいても問題ないかな、なんて。

そこまで考えた俺は胸の内にくすぶっていた仄かな殺意を押し込めて甘く微笑んだ。

「うん、満足。引き留めてごめんね？ お風呂、ちゃんと沸かしてあるから」

「そ……そ、う。そ、それじゃ僕、お風呂入ってくるからっ……」

口調まで「僕」に戻っちゃって……緊張してるのかな？ ふふっ、可愛い……。やっぱり弱くて小さくて可愛いものはなるべく殺したくないしね。

俺は足をもつれさせながら全力で逃げていく小動物の背中を見ながら吐息を漏らす。その直後、もぞりと足元で大きな塊が蠢いた。軽く気絶していたマルスは踏みつぶされた背中をさすりながら机の下から這い出してきた。心なしかハニー色の瞳にはうつすらと水の膜が張っている。

「いてててっ……相変わらず容赦ねえのな、あのバカ」

「可愛い顔して結構バイオレンスだね、ネズミちゃんって」

「そうそう……ってうおええっ?! ……な、なんだ、イオのバカか」

そういえばマルスは俺と顔を合わせる前にレストによって強制終

了させられてたんだっけ？ そんなことをぼんやりと思いながら俺は小さく頷いた。

マルスはさり気なく悪態を吐いたというのに何の反応もなく、不審そうに眉を顰める。

小さな沈黙が数秒。その余白の間に俺は本来の目的を思い出して顔に生気を満たした。

「そうだ。アリスの為にご飯を作ってたんだっけ」

アリスの為。魔法の言葉は胸に染み渡り、じんわりと快感を残す。ご飯を食べさせてあげれば、きつと笑顔をみせてくれる。きつと、きつと！

子供のように無邪気で無垢な笑顔に直面するマルスは目を見開いたが、そんなこと構っていられない。早く、早く。アリスの笑顔がみたい。大好きで大好きな、アリスの笑顔が！

俺は踵を返すと料理場へ急いだ。「待てよ！」という声と騒々しい足音がついてくるが、どうでもいい。俺の頭は既にアリスの鮮やかな笑顔で一杯だった。

そうだ、キャベツを切っていたところで邪魔されたんだっけ？

火は使ってたっけ、いやまだだよ。あれ、邪魔って何だっけ？

そうそう、うさぎちゃんとネズミちゃんだ。だって、アリスが行方不明ってわかったらうるさいだろうし、レーテがどこにもいなくなったら不審に思うだろうし、もしかしたら俺とアリスの“聖域”に入っちゃうかも。ああ、だからめんどくさいからみんな殺しちゃったんだ。この屋敷の使用人も、アリスを探してたルアも。みんなみんな殺しちゃって、腐ってきたからこの間捨てたんだっけ。レーテとルアは捨てなくなかったけど、しょうがないよね。アリスは汚いのなんて嫌いだろうし、俺も臭いつくの嫌だし。あれ、2人のお墓つてもう作ったかな？ いや、確か2人共俺のことすごくすごくすこ

「そりゃあ羨ましい、マスターも少しは見習ってほし……ってそうじゃねえよ！ 何もお前がやんなくても料理人がいるだろうが！」

「いないよ」

「……………は？」

「お風呂も料理も買物も全部俺がやってるよ。アリスの為に」

「ちょ、ちよつと待てよ！ いないってなんだよ……社員旅行つてやつか？」

場を明るくさせるために笑いながら発したボケは、見事に横をスルーしていった。

無言で否定を告げる俺の姿に、マルスは更に困惑したように足を一歩引く。

その瞳に確かな“恐怖”が落ちて溶けるのを敏感に察した俺は、頭の中の警鐘にゆるりと頷いた。

不協和音。

「だから俺がアリスの為になんでもやってあげるんだ」

「いないって……じゃ、じゃあ、マスターは……」

マスター……レーテのこと？ ああ、レーテか。

俺は親友の最期を思い出して何とも形容しがたい感慨に襲われた。くつくつと喉の奥で昏くく笑う。変だな、確かに失って悲しいと思うのに、よりアリスを独占できたかのように充足している。

……、だけでも思い出せない。彼はどんな言葉で俺を怒らせたのか。

ただ、レーテの時もルアの時も。不協和音が聞こえたのだ。

「……………っ、おい！ マスターはどうしたんだよ！ まさか、俺らの

いない間に女王が……っ」

「腐ったよ」

「……え……？」

嗚呼、不協和音がうるさい。

なんだっていうんだ。俺は忌々しげにこめかみを叩きながら溜め息を吐いた。

警鐘は甘美に囁く。アリスを手放したくないなら殺してしまえ、と。不協和音は悲痛に喚く。もうやめてくれ、と。

本当になんなんだ……。何か大事なことを忘れている。思い出したいと思うのに、思い出してしまったら何かが終わってしまうような気がした。

「……って」

「え？」

「腐ったってなんだよ！ 腐ったって……ま、マスターは、まさか……っ」

「だから、腐ったから捨てたの。俺が」

説明不足かと思って親切にも「殺した」と付け加えようとしたが、必要なかったようだ。マルスは得意の鉤爪を装着もしないで俺に殴りかかってきた。

俺は凄まじい殺気をいち早く察知して少し身体を後ろに傾ける。

鼻先を拳が掠めるのを無表情で見送った。

「っ……、冗談でも許さねえ！ ぶっ殺してやる！」

「穏やかじゃないなあ。よっぽどレーテのこと好きなんだね」

「当たり前だろうが！」

ああ、俺だってレーテのこと好きだった。ルアのことだって、敵

対しているとはいえ諦められないほど好きだった。

好きだった、親友だった……のに。俺はどうして殺してしまったんだろう。

それは後悔の念なんかではなくて、ましてや懺悔する気にもなくて。ただ、空白となっっている記憶に対する純粹な疑問。

二人は殺される寸前、何といていた？

レーテには、“アリスと二人で過ごせる部屋”を提供してほしいといった時。

『……正気ですか？ ダメです、やめてください。あなたが辛いのはわかりますが、そんなことをしてもアリスは貴方のものにはなりません』

……どうして。どうして、俺が辛いのか？ だって、この間ひっそりとした森の奥で結婚式を挙げて、二人きりで誓いの口づけを交わしたんだよ。

どうして、俺が辛くなるの。アリスは永遠に俺のものなのに。

あはっ、ねえ、覚えてる？ “カード持ち”しか誘わない、あの密事のような式。

あのアリスが真っ白なドレスを着て俺の隣に立ってたの。すっごくすっごく綺麗だった。大好きって囁いたら、アリスは恥ずかしそうに笑って、俺に、好きだよって言うてくれたんだ。

『……………イオ、もうやめてください。それ以上は貴方が余計に辛くなるだけです』

？ だから何を言ってるの。俺は全然辛くないよ、だってすっごく

「っ……?!」

記憶の断片から覆いが剥がされ、その尋常ではない容量にズキンと頭が痛んだ。頭の中を駆け巡るレーテの言葉と己の絶叫。

俺は唾をまき散らす勢いで口元をにいつと笑みに歪めながら、取り出したナイフを片手に床を蹴った。

いつもよりも軽く跳躍する身体。一瞬先には、呆然とこちらを見下ろしている、端正な顔が目の前にあった。

何の躊躇いもなく、その喉にナイフを振り下ろす。あまりに突然の豹変にマルスは最期の時まで事態を把握しきれていなかった。

ズブリと、堅い肉に刃が突き立てられる感触。何度味わったことだろう。性的なものに近い興奮が身体を駆け巡り、俺は鋭く息を吐いて唇だけで笑んだ。

あれほど煩かった不協和音がピタリと止む。微かな絶望の余韻を遺して、それは深い闇へと引きずりこまれていった。

骨に当たってそれ以上動かなくなったナイフを強引に4分の1回転させると、ごりつと軟骨を歯で噛み砕くような音がした。

そのまま強く自分の方へ引いて異物を抜き出してやれば、一瞬遅れて鮮やかな桜が舞う。

勢いよく吹き出す真紅の血飛沫を見て想うのは、愛しい少女のことだけ。赤がよく似合うあの子にふりかければ、どんなに綺麗なことだろう。

そう思うとたった今絶命したマルスでも「惜しい奴」と思えた。こんな殺し方じゃなくて、アリスの為にもっと血を残しておけばよかった。

「……あ、でももう一匹残ってるか」

俺は自身の顔に降りかかった鮮血を乱暴に拭いながら喜色を浮かべて笑った。といつても、血は腕にも満遍なく飛び散っているのであまり意味はないのだが。

そうだ、今度の“口紅”の材料は腐らせないように冷凍庫に保管しておこう。レーテのときもルアのときも、あとそれからこの使用人のときも、全部数日で腐っちゃったから。

新鮮で冷たい血を振りかけて彼女の唇を湿らせてあげれば、きっとアリスも喜ぶだろう。記憶の中のアリスは言う。

『私、赤って好きよ』

俺も、好き。だってアリスによく似合うから。それに、“どちらかといえば”俺の方を連想させるから。

いつもの花畑での逢瀬。俺は、彼女の頬に手を伸ばし優しく撫でた。太陽の光に照らされて、脳裏で幸せそうに微笑むアリスは続ける。

『でも、黒はもつと好きだわ』

ダンッ

ぱらぱらと、へこんだコンクリートから破片が落ちた。思い切り壁を殴った拳は痺れるような痛みを以てして、俺の意識を正常に異常なものへと戻した。

微かに荒くなった息を整え、記憶のアリスを抹消した。少しもつたいたい気もするが、黒が好きだなんて残酷な嘘を吐くアリス何て思いきり傷つけてしまいたくなるから。

そう、そうだよ。なんて残酷な嘘。

黒は、“ ”の色なのに

……

？

「 ” って、誰だっけ……？ 」

ずいぶんと聞き慣れている名前。それでいて、なかなか言い慣れていない言葉。

聞き慣れているのは、アリスがよく救済を乞う名前だから。言い慣れていないのは、たぶんそいつが死ぬほど嫌いだから。

ああ、でもどうしても思い出せない。その男の顔も、声も、印象も。一番近い存在だった気がする。だけど、決して触れられない存在でもあった。

思い出せない、思い出したい、思い出してはいけない。頭が痛む、心が軋む、世界が歪む。俺はすっぽりと抜けた記憶と現実の間を彷徨いながら、覚束ない足取りで廊下を歩いた。

耳に届く、シャワーの音。血塗れのナイフを片手に俺は音へと近づく。

赤いアリスの姿も、黒い“ ”の姿も、ぐにやりとへし曲げるように歪んで闇へと消えた。その闇が狂気なのだ。頭の片隅では理解しているが、闇の浸食を防ごうとする理性はすでに跡形もなく消えていた。

狂気を、受け入れる。自分をこれ以上壊さないために。

「ネズミちゃん？」

さあ、もう一匹。

一度止まっただはずの不協和音が、弱々しく泣いた。

叫聲。

『もじやめてくれ！ イオ……っ』

アデュー。ここはあえて開き直ろうかと思う

しかしなんともあつさりとした死に様でした、マルス君。本当はもうちょっとバトルやらを交えてみたかったんですけど、予想以上に長くなってしまふのと、携帯投稿ということで断念しました。

レスト君死亡シーンはもはや全面カットです。最初の方にさんざん怯えさせたからもういいかなと思ひまして。あと可愛い子が死ぬところはなるべく書きたくない 本音

ルア死亡回想も同じくカットしました。当初は書こうと思っていたんですが、ぶつ切り方がレーテ同様にイオが狂って終わりそうになったので、それじゃあ面白みがないと思って消しました。

あ、一応マルス&レストペアはフレイム・イオを凌いで本作最強ペアですが、あくまでそれは二人一緒の時の話です。一人一人になるとレーテぐらい(ビリから3番目)の強さになります。

だからイオはすぐには手は出さなかったんですねー、と余談を試みる。

今回の伏線回収。

前話の“口紅”は殺した人間の血です。初めは赤くても、空気に触れて参加すると黒く変色します。

ルアとレーテは無論死亡しました。フラグはムラなく回収するぜ。

肝心の“ ” なんです、もうそろそろわかってきたとは思いますが……。

今回のヒントは「黒を連想させる人」であることと、「イオにとつて一番近くて、触れない存在」であることです。

きつと顔も声も印象も思い出せないのは、一度として会ったことがないからです。

えー、今回の“不協和音”は解説する機会がないと思うので、ネタバレかもしれませんがここではばらします。

イオが誰かを殺す前に必ず鳴った“不協和音”。「もうやめてくれ」と喚く。

殺した後には絶望を残して止まります。

これは、「ロキ」の声です。

ロキに夜の意識はありませんが、多分どこかで叫んでいるのでしよう。うん、多分。

次回最終回は【5月14日0時】です。最高のバッドエンド目指して頑張ります！

それでは、アディオス！

愛形 十 キヨウアイ 幸福日記 十 (前書き)

イオ アリス (???)。キヨウアイ完結編です。相変わらずの監禁状態、死ネタ満載です。

前話から密接に繋がっています。忘名草、不叫和音を先にお読み下さい。

作者が考え付く限りのバッドエンドです。誰一人として救われません。幸せなみんなしか受け付けない人は注意！

死ネタあり。詳しくは書いてませんが暴力描写も。

可哀想です。ひたすらに可哀想です。だが後悔はしていない

びたりと、裸足の足裏が冷たい石の上を這う。血を極限まで吸い込んだシャツは両手で引きずる2対の死体よりも重く感じられた。

レストの方はそう簡単には殺せなかった。血塗れの俺を見た瞬間、俺のシャツを汚す赤がマルスのものと察知したのか、仕掛ける前に逃げをうった。

いや、逃げたのではない。そう気付いたのは、マルスの死体をキツく抱きしめて震える少年の姿を見た時。

大粒の涙をハニーブラウンの瞳から落としながら自嘲の笑みを浮かべた。

『最期の言葉が、大嫌いになっちゃった』

ナイフを片手に詰め寄ろうとしていた足が止まる。高揚した殺戮衝動が消えたわけではないが、目の前の少年に僅かな興味が湧いたのも事実だ。

レストの瞳は、壊れていた。確かに腕の中のマルスに向いているのに、その実何の光景も映していない。まるで濁ってしまった泉のようだ。

くしゃりと動かなくなった相棒の髪を柔らかくとかしてやる。その様は、まるで母と子。こんなにも優しく接してあげられるのに、それを甘受できるのは屍だけだなんてなんという皮肉だろう。

『僕を殺すの?』

『うん』

『どうして?』

どうして? そう聞きたいのはこちらの方なのに。

俺はただ、アリスと二人きりでいたいだけだ。レーテは部屋を貸してくれないし、ルアはアリスを連れ出そうとした。

俺はただ アリスの隣に居たかった。

なのに誰も、誰も許してくれないんだ! お前は違う、だなんて! どうして! アリスは、アリスは俺を、アリスは俺を、選んだはずなのに! アリスに選ばれたのは俺なのに!

思いの儘にぶつけてしまったのは、何故か。答えるならば、レストが俺によく似ているからだろう。……いや、昔の俺、に。

狂人の話を嫌な顔一つせず聞いていたレストは、突然弾けたように笑い出した。鮮やかとも言える笑い声がしばしその場を埋め尽くしていく。

始まるのが突然なら、終わるのも突然だった。ピタリと止んだ笑い声の代わりとでも言うように、レストは満面の笑みを可愛らしい小顔に浮かべる。

『馬鹿だよ、イオさん。 “二人” の幸せを誰よりも願っていたら、その末に狂っちゃうなんて!』

『 “二人” ……? 』

『記憶もないんだあ!』

キ、憶。 欠落した “ ” のことを思い出した。覚えていない。確かにいたはずだ。確かに、いた。でも どこに?

ギョロリとなにかを探し求めるように回った俺の眼を見て、レストはさらに笑みを深くした。深く、深く、悲しく。

「自分の頭、だなんて」

あの瞬間に、最後の砦が崩れ落ちた。今ではもう、不協和音も己の正気の声も聞こえない。完全なる狂気に飲み込まれた瞳は幸せそうに歪む。

きっとこれは、レストなりの復讐なのだろう。自分の相棒を殺した相手を正気のままに殺してしまうのはあまりに惜しい。更なる苦痛を。狂気で麻痺した甘美な苦痛を。

「幸せだよ」

呟いたのは、レストを見返す為ではない。

俺の声に反応したのか、奥に潜む闇がびくりと震えた。その瞬間に俺の意識はレストから一人の少女へと向いた。

「アリス！」

「いつ……?!」

歓喜した俺の身体は理性を放棄して震えるアリスに抱きついた。ぐっと腕に力を込めると、決して小さいものでない悲鳴が上がった。

「は、はなして！ ぐるしい！」

その言葉が真実味を帯びていることに気付いた俺は、慌てて腕をほどいて身体を離れた。アリスは弱くて小さい。もっと大切に扱わなければ。

じゃないと、嫌われてしまう。嫌われるのだけは絶対に嫌だ。もしそんなことになったら ううん、考えたくもない。

アリスは相変わらず怯えたように俺を見ていたが、今日はいつもと少し違った。俺の服に、髪に、顔に着く赤黒いしみに気づいたの

か、極限までその瞳を拡張する。

むせ返るような血の匂いの中、彼女は過呼吸寸前の息のまま俺に向かって叫んだ。

「こっ、こんどは、今度は誰を殺したのよ！」

久しぶりにまともな彼女の声を聞いた気がする。この頃のアリスときたら、呻き声や悲鳴しか上げなかったから。相も変わらず優しく耳を擦る彼女の声に恍惚としながら、俺はしばし沈黙した。

ごちゃりと考えていたことがうつすらと影を潜めていく。甦りかけていた記憶を覆ったのは、幸福感か、それとも幸福という名をかざした狂気か。

アリスがここにいる、俺の腕の中に。俺の、俺だけのアリス。

「そ、ご飯作ってた最中だったんだけど、早くしないと変色しちゃうから」

俺は名残惜しげに彼女から体を離すと、思わず置き去りにしてしまった屍たちを乱暴に引きずってきた。

ここは暗い。猫の俺は夜目が利くからいいけど、アリスはこんな燭台の光じゃろくに見えないだろう。

そう考えた俺は、ナイフを取り出しながら一方の頭をつかみあげてアリスの目の前に突き付ける形で見せた。アリスの喉からひきつれた声上がる。

「ま、る……うあ」

「そう、でこっちがネズミちゃん」

マルスの死体を無造作に横に置いて、もう一方の方の死に顔をアリスに見せびらかした。その様子はまるで、母親に自分が書いた絵

を自慢げに渡す幼子のよう。

半開きの瞳のまま硬直したレストの顔を見た瞬間、アリスの中で何かが瓦解した。俺はそれに気づかないまま、レストの首筋にナイフを立て、力を込めて横に引く。

噴出した赤はアリスの唇を、顔を、髪を、ドレスを、満遍なく赤に染めた。腐ってしまった黒を覆うがごとく赤く赤く赤く赤く……。

そう、文字通り、覆ってしまえばいい。大嫌いな黒なんて、全部全部覆って、隠してしまえばいいんだ。そうすればアリスは本当に俺のものになる。俺のものになる、と
思っていた。

「……い」

「え　　？」

はつきりと聞こえた呟きに、俺はあり得ないと思いつつも自分の耳を疑った。俺のこの優れた聴覚は、どんな小さな音でも攫ってしまう。たとえそれが、今までずっと隠してきた真実だとしても。

戸惑い混じりにアリスの顔を見ると、そこには自分の知らない少女がいた。

怯えているのでも、震えているのでもない。笑顔も泣き顔も、どこにもない。

ただ、空虚であった瞳に確かな憎しみを燃やして、下唇をきつく噛みしめて、こちらを睨みつけてきていたのだ。

「あなたなんか嫌いっ！」

いつも、反抗的な態度を取られたのならば条件反射のように手が出たのに。なのに、今回はレストを放り投げたても未だにナイフを握る手も、鉛のように重くて一向に動こうとしなかった。

嫌いの文字が頭の中をじゅくじゅくと染めていく。あまりにも遅い理解能力。どこまでも俺らしくない。

ようやく振り下ろした拳は、アリスの頬に重く沈みこんだ。がしやんと、彼女を束縛する四肢の枷と鎖が大きく鳴る。

「アリス……？」

ああ、殴られたのはアリスだというのに。痛いのはアリスだというのに。 どうして、俺の方が泣いているのだろう。

迷子になった子供のようだ。どこか客観的に、俺は自分を観察する。 どうして。 探し求めていたのは、目の前の少女じゃないのか。 どうして、こんなに不安になる。

アリスはお茶飲み友達を二人も失って、いつもよりも精神が不安定なんだろう。俺は眉を下げて、震える彼女の体を優しく抱きしめてあげようとした。

次の言葉さえ、なければ。

「っ……嫌い！ あ、あんななんかっ、誰が好きになるもんか！」

ドゴッ

重い追撃は、アリスの鳩尾にめり込んだ。肋骨が折れる感触を、拳の先で確かに感じる。嗚呼、治療してやらないと。いつもだったらそんなことを頭の片隅で思うのに、今はそんな余裕さえなかった。これ以上の言葉を防ぐように、彼女の首に指を絡める。アリスの声は好きだ。アリスは好きだ。でも、その先の言葉は聞きたくない。アリスはむちゃくちゃに髪を振り乱しながら、顔を涙でぬらしながら、それでもなお俺を睨み付けていた。

なんてきれいなアリスの瞳。でも、それに移る俺は何て滑稽。醜くも涙を流しながら、縋るようにアリスの首を絞めている。

黒の瞳に浮かぶ色が憎しみだけ、だなんて。金の瞳に浮かぶ色が哀しみだけ、だなんて。

「どろしてっ……」

「うあっ……ぐ、」

「どろしてそんな悲しい嘘言っの!」

「う、い……ギ」

「嫌いだなんていわないで! ねえアリス、俺の名前を呼んでよ! 好きだって言っよお!」

嫌いだなんて、嘘。アリスが俺を憎んでいるだなんて、嘘。

だって、だって。俺とアリスは恋人同士で。結婚式まで上げて。

いっぱいいっぱい、好きって、言ったのに。

でも本当は、気づいていた。

アリスは照準の合わない瞳を揺らしながら、確かに俺を見た。俺を見て、微笑んだ。微笑んだ。

あまりに嬉しくて、両の手から力が抜ける。嬉しい嬉しい嬉しい

! アリスが俺に笑ってくれた! 笑ってくれた!

さあ、“今度こそ”好きって言おう! ちゃんと自分の気持ちを伝えよう! もう誰にも譲らない、渡さない、誰にも、“ ”に

も っ!

「愛、してる、ロキ」

思い切り力を込めた掌の中で、固い何かがひしゃげる

音がした。

「アリス、明日は晴れるんだって」

「涼しい一日だってさ、アリス」

「ねえ、明日は二人でどこかにお出掛けしようか」

「いつまでもこんなじめじめしたところじゃアリスにもカビが生え
ちゃう」

「あは、冗談だよ。そんな怒らないでって」

「どこに行きたい？ やっぱり南部地方かなあ」

「あそこは服もいっぱいあるしね。何でも買ってあげる」

「黒い服でもいいよ。うん、俺もう我が儘言わないから、さ」

「あ、でも森の中を散歩っていうのもいいね」

「あははっ、アリスって意外と散歩とか好きだよねえ。おばさんく
さいの」

「……冗談です、スミマセン。レーテも散歩好きだから、ついでに
誘おうよ」

「ネズミちゃんやウサギちゃんもそこら辺を彷徨ってたりして」

「森の奥にね、泉があるんだ」

「すごく綺麗なんだ。アリスにずっと見せたかったんだよ」

「それから、ねえ、明後日は何しようか」

「女王のところにも行ってみる？」

「久しぶりにルアをからかいに行こうか。あの子ってほんといじめられ体質だよな」

「ねえアリス、明々後日はどうする？」

「一週間後は？」

「一か月後、は……？」

「っ……アリス……」

本当は、気付いていた。

アリスが好きなのは、俺じゃなくてロキの方。結婚式でアリスの隣に立っていたのも、俺じゃなくてロキの方。

恋人、だなんて。アリスはロキのことが好きで、俺はアリスに告げることができなかったのに。

すべては俺の妄想。俺の勘違い。俺の狂気。

祈っていた。願っていた。

俺にとつて、ロキはとても大切な存在で。同時に、どんなものよりも後ろめたい存在で。 幸せに、なつてほしかった。

俺が愛したのはアリスとロキ。ロキが愛したのはアリス。アリスが愛したのはロキ。祝福しなければ、二人の幸せを。

ハッピーエンドのはずだったんだ。あんなに幸せそうにアリスが笑つて、ロキ越しに見守っていた俺もなんだか嬉しくて。

俺は、“二人の幸せ”を永遠に願わなければいけない存在だったのに。

忘れていたのは、俺の方。

ロキのことも、アリスへの想いも、自分の気持ちも。すべて忘れて、すべて歪んでしまった。

これが、ロキとアリスを共に愛してしまった俺への罰。

これが、ロキと俺、共に愛されてしまったアリスへの結末。

「アリス、ねえ、アリス」

「……怒ってるの……？」

「怒らないで、ねえ……アリス、名前を呼んでよ」

「俺の名前を呼んで……っ」

「アリス……？」

「アリスは、忘れっぽいから」

「忘れっぽいから、だから……っ」

「俺の名前も、忘れてしまったの……？」

手を伸ばしたのが、過ちだったのか。

譲ろうとしたのが、過ちだったのか。
出逢ったのが、過ちだったのか。

俺は静かに眠るアリスの首に顔を埋めた。涙はとめどめなく流れ、彼女の体温を一層早く奪い去っていく。

彼女の瞼の裏に残ったのは、俺の姿をしたロキだったのか。最期に向けられた言葉さえもロキに向けられていたものだった。幸せそうに、微笑んで。

一瞬さえも、俺はアリスの中に入ることができなかったのに。それでも、俺はまだ。

「アリス」

……愛してる。

最初で最後の告白は、少女の耳には届かない

……

共愛。

『こんな死別、アハハハハ誰も幸せになどならない』

俺はただ、二人の幸せを祈っていればいい存在だったのじ。

それなのに。……それなのに。自分の幸せを考えてしまった。

やっちまっただぜキャホウイ！〇、ゝ、ゝ〇

結論から言えば楽しかった！ すごく楽しかった！ ヤンデレってこんなに胸がときめくのね……！

(お巡りさん！ お巡りさん！ こっちに変な人が……っ！)

はい、すみません。地面にめり込むほど土下座をしています、現在進行形で。

ヤンデレが好きです。今回のではつきり自覚しました。ヤンデレが好きです。

いやね、確かにシリアスは好きだけどバッドエンドはどちらかと言うと受け付けないタチなんです。断固ハッピーエンド派です。

ただのハッピーエンドではなく、誰もが余りなく幸せになる結末が好きです。悪者倒して世界は平和にみんなハッピーなんて結末は死ねばいいと思ってます。ちゃんと悪者にも幸せになってほしい！ 対照的に、バッドエンドの場合は全キャラ地獄に落ちてもらいます。このキャラが死んだのになんでお前だけ生き残ってるんだよ、というのはあまり好きじゃないです。

……うん、つまりは両極端なわけですね。今回は後者です。

では解説いきます。結論はイオ アリス ロキです。原作同様、

イオはアリスとロキをくつつけようとしたはずが……って感じですよ。アリスとロキは結婚済みです。最後の最後まで進展してません。嫉妬とはまた違います。そんな二人にイオが耐えきれず狂ってしまうお話です。

誰も報われません。アリスも死にました。イオもそこはかとなく可哀想です。

ただ、私だけが楽しかったという（殴

レストの話は書こうかどうか迷ったんですが、マルスをどれだけ大切にしていたかという話をちよつと入れたかったので結局こんな感じで書きました。

結果。イオの狂いっぷりが先だつて全然目立たん。

……いつもツンケンしているレストですが、実は相棒マルスのことをとても大切に思ってます。ですが、最後まで「大嫌い」と言つて素直になれなかったのです。

うん、そこはかとなくイオとアリス、レストとマルスを対比にしてみましたけど……効果ゼロ。ちよつと無理がありました。

（

この後に続けてロキ、女王視点で書くつもりだったのでですが案外さっぱり終われたのでずるずると引きずらないことに。

裏エピソードとしては、この後ロキは恋人アリスが首の骨を折られて死んでいるのに気付き、服毒自殺をします。

やがて時は流れ、事件は明るみになる。ルアが死んだという事実を受け入れられず、双子も狂気に吞まれる（原作が双子編終了しているんで、そこそこ双子はルアのことを好きです）。

毎夜のように敵味方かわらず首を刈り取つて、“ルア”に褒めてもらおうと嗤う双子を哀しげに見つめるのは孤独な女王の姿。

「僕が今もなお狂わずにいるのは、僕がもともと狂っていたからな

のだらうね」

ルアが嫌っていた薔薇の花をそつと撫でながら呟く。

狂気のために正気を保ち、世界の狂気を見つめる者と。正気のために狂気に堕ち、現実を見失う者と。

果たして、どちらが幸せなのだらう。

()

結論。どっちも幸せなわけねーだろバカヤロー (From 作者

To 作者)

なーんて妄想もしてたんですけどね！ 明らかに後半の人たち友情出演臭がしてたんですよ！

これ書くとたぶん二倍の量になるうえに、ちよつと締まりが悪くなるので諦めました。いつか機会があったら書いてみたいです。

【追記：続編書いてしまいましたorz キョウアイ〜幸福日記〜と同時掲載されます。よければ読んでみてください(上のストーリーと若干異なるところがちらほら)】

うん、さすがにこれ以上のイオ鼻屑はしちやいけませんよね……。原作ではヤンデレ要素は全くありません！ これからも引き続き、変態紫として場の雰囲気と和ませていつてもらいたいです。

ヤンデレといえはやっぱりディーかフレイルム様ですが、今回のイオも書いててめちゃくちゃ楽しかったです。うん、バイオレンスって素敵(そろそろ警察まで来てもらおうか?)

最後はイオも一応正気に戻ります。後悔もしてます。最後まで狂っているエンドも考えましたが、やはり切なく終わるのがいいかなと。

……あー、いまさらですが、アリス死んでいます。「固い何かが生かす音」「首の骨が折れる音」で、「彼女の体温を」「一層早く奪い去っていく」「体温が下がり始めている」「冷たくなっていく」てな感じで。すごく今更。

か、解説を解説しなきゃいけないほどわかりにくい解説になって
いますが、不明な点がございましたらメッセージの方へご申告くだ
さい。

それでは、長々と失礼しました。

愛形 十 狹隘 幸福の果てに 十 (前書き)

キョウアイ(忘名草、不叫和音、幸福日記)の続編です。必ずそちらを先にお読みください。アリスはほとんど出てきません。イオも出てこないに等しい。

キョウアイでアリスが死んで、イオが狂気から醒めて、その後のロキとフレーム、デイー視点です。

【幸福の果てに】 ロキ視点、翌朝。

【ロイヤルミルクティー】 フレーム視点、3日後ぐらい？ 事件が明るみに出た直後。

【涙の色はソライロ】 第三者 デイー視点、ロイヤルミルクティー後。そして仏滅は訪れる。

またしても悲劇。誰も報われません、報われるはずがありません。

ぬるーい残酷描写。

後味いとわろし。

死ネタ注意！

愛形
十 狹隘 幸福の果てに
十

幸せだった。きっと言葉で言ってしまうえばそれだけのこと。だけど、言葉ではとても表せないほどにその意味は大きい。

彼女が俺に笑いかけるたびに、恥ずかしがるたびに、「好き」と告げてくるたびに、俺の中で「幸せ」が生まれる。

その一方で、どこか不安を感じていた。

幸せ、幸せ、幸せ。だけどそれはどれも、永遠に続くものではない。終わりがあることも予感していた。

だけど、その先がどうしても想像できない。幸福という甘露に浸った俺は、それを奪われた時に一体どうやって息をすればいいのだろう。

水を奪われた魚が。空を奪われた鳥が。感じるのは
昏くらい絶望。

そして唐突に、幕は引かれる。

「んっ………?」

身体に違和感を感じて、俺は小さく身じろぎをした。昨日から飛んでいた記憶が忌々しい。何とか思い出そうとするけれど、不意に襲った頭痛が邪魔をした。

ああ、でも、思い出す必要もない。一カ月以上、俺は同じ光景ばかり見せつけられて絶望をひたすらに感じていたのだから。

視線の先には鎖に囚われたアリス。悲痛そうに俺の名前を呼んでは、涙を流す。手を伸ばして慰めてやりたいけれど、体に力が入らなくて。喉すらも引き攣れたように言葉を発するのを禁じて。

薬を投与されたのだと気付くにはそう時間はかからなかった。俺は悲しみにむせび泣き、苦しみに叫びをあげるアリスをただ見ていることしかできなかった。

なのに。

「……あれ………?」

声が、出せる? なんとか動く瞼を上げてみると、いつもよりずっと近い位置に眠るアリスがいた。

いつもは3メートル以上間を開けているというのに、なぜか今日はアリスを抱きしめたままだ。しかも、腕も動く。ぐっと力を籠めれば、思うようにアリスを抱きしめなおすことができた。

「身体が、動く………声も、出る………」

まさか、あのイオが薬を忘れたのか? ごくりと喉が動いた。

まさか、まさかまさかまさかまさか! 驚愕とともに歓喜が湧き上がる。あのイオが抜かるなんて相当のことがあったに違いないが、俺の思考はそこまで回らなかった。

こんな機会を逃すわけがない。早く鎖を解いて、アリスを解放するのだ。それから？ 保護してもらえばいい。女王のところへ戻ろう。あいつだつたらイオを止められる。イオからアリスを守ってやれる。そうだ、早く早く早く！ イオは狂ってるんだ、だから早くしないと！

早くしないと！！

「…………早くしないと…………？」

違和感。

湧き上がっていた血が水を被せられたかのように静まり、熱かった心臓が吹雪いたかのように冷えた。アリスを抱きしめる腕に力を込める。込める、込める込める。

反応は、なかった。

「うそ、だろ」

顔を上げるのが怖い。だって、こんなに力一杯腕を込めているとこのうに、なんでアリスは目を覚まさないのだ？

うそだろ。もう一度呟く。うそだと思うのなら、アリスの瞼を持ち上げて瞳孔反射を確かめればいいのだ。それをしないのは、わずかでも希望を持ちたいから。それをできないのは、幸せの果てのものを見たくないから。

早くしないと。その後続く言葉は、もうない。早くとも遅くとも、もう何もないのだ。

自嘲する。時が止まった、気がした。

わかってしまう。

頬に当たる彼女の首筋は、柔らかな音を発していなかったのだから。

『幸せになつてね』

「馬鹿じゃねえの、お前」

手紙の一つをぐしゃりと握りつぶす。今まで大切にとっておいたものの一つであったが、もう何の未練もなかった。

手紙、というには少し短すぎる。どれも一文のものばかりで、同じような内容のもの。自分とアリスの幸せを願う文面だけが、ただ簡潔に記されているだけのものだ。

時折長いものがあつては、恋人繋ぎの仕方、女の子の趣味など、テクニシャンな“もう一人の自分”からのアドバイスばかり。目を凝らして必死に読んでいた自分を思い出して、何度目かの自嘲を漏らした。

流麗な文字で綴られている祝福。ただよく見てみれば、何度も消しゴムで消した跡があつて紙は擦り切れていた。あのイオが、文面を熟考するなんて。笑おうとして、やめた。

こんなこと、幸せだったころは気付かなかつた。素直に受け取つて、はしゃいで、アリスに見せて、二人で笑つて。

でも今ならわかる。紙に残る涙の跡も、細かく震える字も、何度

も書き直した文も。

全部全部全部全部

気付かない“ふり”をしていた。

『女の子には優しくすることー』

「優しく、したよ」

ぐしゃっ

『昼寝ばかりじゃなくて、ちゃんと買い物にも付き合いなよ』

「買い物だって行ったさ」

ぐしゃっ

『キスは深く！いつまでバードキスで済ますつもりだー！』

「自分、だって、」

ぐしゃっ

『手を繋ぐときは指を絡めて。これがいわゆる恋人繋ぎってやつだから』

「好きだった、くせに」

ぐしゃっ

『一日10回は好きってことじゃない』

「お前だつて言いたかつたくせに……っ」

ぐしゃっ

『おめでとっ』

「どっ、っ」

ぐしゃっ

『幸せになつてね』

「どっして……っ！っ、ぶ、く……」

どうして、お前ばかり。どうして、俺ばかり。

ぐしゃりぐしゃりぐしゃり。きつと何十分もかけて書いた手紙を、掌で握りつぶしていく。そこに記された悲しみと“幸せ”ごと、壊れてしまえばいいのに。壊れてしまえば、いいのに。

涙は出なかった。きつと俺には泣く資格も幸せになる資格もない。気付いていたのに。イオだつてアリスが好きなこと、気付いていたはずなのに。

ただ、乾いた嗚咽だけが喉を突く。息ができない。いや、このまま止まってしまえばいい。きつとイオの苦しみは、こんなものじゃなかっただろうから。

俺ばかり幸せになった。お前が必死に作り上げた“幸せ”の上のののうと乗り上げて、足元で悲鳴を上げるお前の心が聞こえないように耳を押さえた。

お前ばかり悲しみに耐えた。俺に対する罪悪感だろうか、我慢して我慢して、好きなのに口にも態度にも出すことなく、壊れていく

自分の心の首を絞めた。

“幸せ”だった。けどそれは、なんて残酷なもの。

「一番最初に死んだのは、もしかしたらお前だったのかもな」

俺とアリスが“幸せ”になったところからお前は死んでいて。屍だけが虚ろに動いて手紙を綴って。綴って、綴って、泣いて、綴って、狂って、綴って、綴って、綴って、狂って、綴って。

俺は小さく笑みを零しながら、最後の一枚を見た。今までよりもあからさまに震えている字。濃く、濃く、濃く、紙を突き破るほどに鉛筆の芯を突き立てた跡があった。

途中で止まっている。なんて中途半端なところ。ついに耐え切れなくなったのか、紙が破けていた。ついに耐え切れなくなったのか、お前の心が壊れていた。

『結婚おめでとう。幸せにな』

なあ、イオ。お前はいつ、幸せだったんだ？

俺は最後の手紙を手の平で丸めると、イオが使っていた机の中を探し出した。場所は前から知っていたので案外に早く見つかった。俺は無機質な瞳で小瓶を見つめ、一人笑った。

ラベルの張られていない小瓶。半透明のガラスの中に、幾錠もの薬が詰まっていた。

精神安定剤。いつからイオは、こんなものを呑むようになったのだろう。いつから俺は、そんな彼から目を逸らしていたのだろう。

「お前を殺したのは、俺、なんだな」

知らないふり、見ないふり、聞こえないふり。だけど知っていた、

見えていた、聞こえていた。

俺は小瓶の蓋を開けようとした。が、ずいぶん固い。長い間使われずにいたことがありありとわかった。

仕方なしに、俺は床に小瓶を叩きつける。小さな音がして小瓶が割れ、中の錠剤がばら撒かれる。砕けたのは、小瓶か。最期の自我か。

俺はガラスの破片の中から錠剤を摘み上げて、水もなしに飲み下した。一つ、一つ、一つ。ゆっくりと嚥下していく。お前の狂気を、苦しみを。

時折破片と一緒に指について、俺は気にせずにそのまま口に運ぶから、口の中や喉の奥が切れて痛い。罰だとは思わなかった。こんな罰、生温くて笑えもしない。

20何錠かになろうとしていた時、ようやく意識がぼつつとしてきた。催眠効果もあるらしい。俺は嬉しくなって、破片ごと残りの錠剤を掴むと、そのまま飲み下した。

痛い、痛い、苦しい、息が、喉が、痛い、痛い痛い痛い、ああでも 幸せ。

俺は酩酊感と睡魔に襲われつつある躰を引きずって、ベッドに寝かせたアリスのもとへと急いだ。壁に半身をついて、少しずつ進む。ようやく辿り着いた先には、アリスがいつものエプロンドレスを着て眠っていた。鎖は取り外され、体は清められている。血塗れの白いドレスは、見るに堪えなかったので捨てた。

「アリス……」

開けていたベッドの横に身体を横たえ、弱い力でアリスを抱きしめる。ああ、起きたままの体勢だな。そこでようやく、思考が廻った。イオもこうやって、最期のときまでアリスを抱きしめていたの

だ。

冷たくなっていくアリスの肌に触って、何を思っただろう。瞼を上げないアリスの寝顔を見て、何を感じただろう。

「い、お……」

冷たいアリスを温めるようにして、さらに力を込めようとした。腕がうまく動かない。もう、俺の瞼も限界かもしれない。

こぼり。口から溢れだした血の塊が、俺とアリスの間のシーツを赤く濡らした。ああ、アリスに掛からなくてよかったな。これ以上、彼女が俺たちの罪で汚れてしまう様を見てしまうのは嫌だったから。

「一人は、寂しいか、ら……」

独りで迎える夜はきつと寒い。だから、温めあおう。寂しくないように、寒くないように、寄り添って眠ろう。

俺は重い瞼を閉じて、深く息を吐き出した。その際に口の端から再び血が溢れだしたが、もう息が苦しくなることも胸が痛くなることもない。

幸せの果てにあるものは？ そんなもの、決まっている。

「幸せ、だよ」

だって、腕の中に愛しい貴女がいる。瞼の裏に大好きなお前がいる。さびしくないよ。さむくないよ。

もうひとりになんて、させないから。

ちに気づいてあげられてたら、こんなことにはならず済んだのでしょうか？

うん、でもきつとアリスはロキ一筋だったんだよね！……って、じゃあこの物語の一番の悪役は誰でしょう？ そんなものが存在せずとも、喜劇は突如として幕を落とすものです。

人はこれを狂気と呼ぶでしょうか。人はこれを悲劇と云うでしょうか。けれども、彼らは確かに幸せに逝ったのです。

愛形 十 狹隘 ロイヤルミルクティー 十 (前書き)

キョウアイ続編Ver.F。キョウアイシリーズを呼んだあとじやないとまったくさっぱりです。事件が明るみになって、その後。フレ임様が超まとも！ 悲しくなるほどにしっかり正気を保つてます。

アリスは出てきません。イオも出てきません。フレ임様は二人の死には特にご関心がないようです

キョウアイシリーズでAIRだったルアが主体です。ルアを失ったフレ임は、てな感じで。

次代の“白ウサギ”が登場しています。今後一切登場させるつもりはありませんが。

時系列は「過去1 現在 過去2」って感じで。

『僕が死んだら』

『何、遺言？ そんなもんそこら辺にメモっといてよね』

『……違いますよ。僕が死んだら、貴方はどうなってしまっただろうなって思いました』

『何それ、笑うところ？ 君が僕を変えるほど重要な人物に見えるわけ？』

『んなわけないですよねー』

『安心しな、“白ウサギ”の座はすぐに補充してやるから』
『ですよねー』

『……どうしたのさ、急に』

『いや、別にどうしたってわけでもないですけど！ この頃あまりに忙しいので僕過労死するんじゃないかと思ひまして』

『あ、そこにある書類も追加ね』

『フレイム様?!』

『つべこべ言つてないで手動かしな』

『人が珍しくシリアス気味に言ってるのにこのガキは……!』
『うるさい。くだらないこと言つてないで、やれ』

『横暴な! …… フレイム様、』

『……集中しな』

『僕が死んでも』

『うるさい』

『……泣かないで下さいね』

『くだらない』

泣くはずないだろ。そう笑いながら返したというのに、君は泣き出しそうな顔で笑っていた。

どう答えれば君にそんな顔をさせずに済んだのか。今でも、分からないんだ。

「帽子屋ファミリーは壊滅。アリスを殺してチェシヤ猫も服毒自殺か……」

あまりにあっさりとした幕引きであった。知将と名高かった帽子屋も骨で見つかり、その部下2名は腐る寸前に発見された。そして帽子屋邸の客室に眠る2人。

眠る、というのが一番正しかったのだろう。大した外傷もなくアリスは首を折られ、ロキは薬を大量に飲んだまま逝った。2人とも口元に笑みを称え、ひどく幸せそうな死に様と言えよう。

いや、3人とも、か。この事件の主犯も加えれば、だが。

「……どこまでも狂った戯曲だな」

とうの昔から狂ったままの自分が言うのだから、相当なのだろう。それとも逆に、狂っている自分が狂っていると思うことは世間という“正常”なのだろうか？

そこまで考えて、笑った。

これが？

「女王さま」

「ん……？ ああ、“白ウサギ”か」

突然思考に横槍を入れられ不機嫌そうに振り返った僕は、彼の姿を視界に入れた瞬間に顔を綻ばせた。

頭上で小さく揺れる白いウサギ耳。少し低めの背丈。穏やかで紳士的な笑み。

“彼”を彷彿とさせるのは、そこまで。

銀色の長髪に、赤い赤い瞳。どれもこれも、まさに“白ウサギ”といったものだった。“歪み”なんて、どこにもないかのように。

「……君の髪は綺麗な銀色なんだね」

「はい？ “白ウサギ”はみんなそうですけど」

「それに瞳も。僕の好きな赤だ」

「変なことを言うんですね、女王さま。僕は“白ウサギ”ですから、当然ですよ」

「……そう、だね。あいつが変な色だったんだ」

白い耳に黒い髪、蒼の瞳だなんて。ミスマッチにも程があるよ、君。

そうからかえば、“彼”はいつも頬を膨らませてむくれた。可愛くなんて決してなかったが、妙に印象的な顔だったのをよく覚えている。

そんな“彼”は、今はドコ。

「女王さま」

「ん……ああ、どうかした？」

っ……危ない危ない。本当にふとした時に“彼”のことを思い出してしまい、反応が遅れる。

そちらの方に目を向けると、綺麗な笑顔が浮かんでいた。嗚呼、“彼”はあまり自分には笑いかけなかったな。

「中に入りましょう、冷えてきました」

『またこんな薄着で出歩いて……！ 風邪をひくのは勝手ですが、看病するのが誰なのかよく考えて行動しなさい！』

「……ねえ。風邪をひいたら、君が看病してくれるのかい？」

「は……？ えっと、はい。女王さまのご命令ならば」

『なんで僕が！ 命令命令って、職権乱用もいい加減にしるー！』

「……そう。君は、良い“白ウサギ”だね」

「ふふっ、お褒めの言葉ありがとうございます」

『言葉よりも休暇を下さい。僕だってアリスと遊びたいんですー！』

頭で響く懐かしい声を追い出すようにして首をふり、僕は大人しく白い青年の手を取った。

また一つ、気付いてしまう。

「手袋、しないんだ」

「はい。あんまり好きじゃないんです、マフラーとか手袋とか」

「……そう」

『だって嫌じゃないですか！ この世界の色んなところにばい菌が溢れかえってるんですよ！』

「……潔癖症」

「はあ？」

「なんでもないよ」

適当にはぐらかして、彼の手を不自然でない程度に断る。

彼に接すれば接する程、“彼”を思い出す。彼と“彼”を比べてしまう。やめなければとは思っただけけれど、きっとこれは無意識なのだ。

僕は溜め息と共に一つ自嘲を零して夕日に背をむけた。

執務室に戻ると、そのあまりの変わり様に思わず息を止めた。

僕と“彼”が必死になって書類を漁っていた部屋。二人とも仕事

熱心のため（といっても“彼”は愛するアリスのためなら平気で仕事をほっぽったが）整理整頓をするということもなく、床に紙がばら撒かれている状態だった。

後ろからついてきていた“白ウサギ”が言葉を失っている僕を見て、嬉しそうに跳ねる。ああ、なんて幼いのだろう。確か年は13と聞いたか。

「すごいでしよう！ 僕、ここがあまりにも汚かったので整理したんです！」

『フレーム様。この地方に関する資料をここにやっといたはずなんですが、知りませんか……って、あーっ！ それはメモ用紙じゃないんですよ！』

「いろんな書類があったので一応クリップにまとめておきましたが……あ、いらなさそうなのは全部捨てたのでご心配なく！」

『紙を無駄にしないでください！ 何でもかんでも捨ててばかりいると、いつか罰が当たりますよ！』

「……女王さま？」

『フレーム様、お茶をお持ちしましょうか？』

ああ、もうやめて。いちいち僕の記憶を、心をかき乱さないで。君なんて、どうでもいいのに。僕の許可なしに死んでしまった君なんて、大嫌いなのに。

鼻がつんと熱くなつて、僕は胸の痛みをこらえるように執務室の机を殴りつけた。ばんっという大きな音と、後ろで聞こえる彼の小さな悲鳴。

鈍く広がっていく拳の痛みが、胸の痛みに勝ってしまえばいいのに。直接的な痛みだけが僕を支配して、もう“彼”のことを思い出させないようにしてくれたらいいのに。

「あ、あの、僕、何か悪いことしましたか……？」

「紅茶を」

「女王様……？」

「紅茶を持ってきて。ロイヤルミルクティー、砂糖3つ、今すぐ！」
「はっ、はい！」

僕の剣幕に怯えをなしたのか、彼は足音も荒く部屋を飛び出していった。彼が来てからなるべく優しく接したから、ぶつけられた苛立ちにびっくりしていることだろう。

ああ、取り繕う言葉を考えておかなきゃな。そう思うと同時に、ようやく部屋が静かになったことにほっと息をついた。

インクの匂いに満ちたこの部屋は、きっと侵されることはないと思っていた。

僕は悲しげに目を伏せながら、机を指でなぞる。時折暇つぶしに描いた落書きも、零した紅茶のシミも、綺麗に消されてしまっている。

怒ることはない。整理してもらった方が、好都合なのだ。紙を踏んで転ぶこともないし、書類をなくすこともない。“彼”とそのことで喧嘩することも……。

「……ばか」

がりつと引っ掻けば、固い机の上にわずかに傷ができた。ああ、こうやって残しておけばよかった。インクやシミなんかじゃなくて、傷を刻めばよかった。

ああでも、そんなことをしたら机ごと買いかえられちゃうかも。彼は“彼”と違って、貧乏性じゃないから。

「消えていくんだね」

君が愛用していた香水の香りも。君が此処に居たという痕跡も。君が生きていたという証でさえ。

全部全部、滲んで霞んで消えていく。どうせなら本当にすべて、消えてしまえばよかったのに。

「なら、僕の中からも君を消してよ」

飾られた花瓶の中から、薔薇を一輪抜き取った。

この部屋には、この城には、薔薇以外の花は植わっていない。半分趣味、半分嫌がらせの行為だった。僕は薔薇が好きで、“彼”は薔薇が大嫌いだったから。

赤い、赤いこの色が嫌いなのだと彼は言う。最初に見た赤の印象が、僕の初めの殺人だったから。白い白いあの部屋で、兄さんや姉さんを赤く赤く染めたことが、頭から離れないから。

優しく、ひねくれていて、ちっとも僕の言うことを聞かなかった“彼”。いなくなっただけでいい。1か月前は、確かに笑っていたのに。

ねえ、早く帰ってきて。

じゃないと、僕、もう

……

「ルア、」

「フレ임様！」

騒々しい叫び声とともに踏み込んできた足音に、僕は閉じようとしていた瞼を勢いよく開けた。瞳には自分でわかるほどの水膜が張ってある。危ない、ここで目を閉じたりしたら、零れてしまうところだった。

1か月と1週間も我慢していたのだ。こんなところで、“彼”との約束を反故にしたいくはない。

入ってきたのは、疑うまでもなくあの双子だった。いつものように顔中に血糊をべっとりと付けて笑っている。

その両腕には、人物を特定できないほどぐちゃぐちゃにされた首が二つ、大事そうに抱えられていた。

ああ、そうか。この子たちも狂ってしまったんだっけ。

「見て見て！ 今日はいーっぱい殺したんだよ！」

「みーんな弱つちいの！ 全然抵抗しないしさあ」

そりゃあ、抵抗なんてできないだろう。全員、武器も持たないただの庶民だったんだから。

僕は心の中で呟いて、それでも繕うように笑みを浮かべた。“彼”がいたころは、この二人にこんなに優しくできなかった。ただの駒だと認識し、それ以上の扱いを努めようとしなかった。

穏やかな笑顔を向けられたことがよほど嬉しいのか、二人は血に濡れた顔をぱあっと明るく咲かせた。前は蔑笑していたそれだけけど、今はかえって愛しく思えてしまうから不思議だ。

双子が狂ったのは、2週間ほど前からだ。

最初は泣きながら“彼”を探し回った二人だけれど、最前線で捜索に当たったことの負荷もあって、その精神は脆く儂く崩れ落ちた。

「白ウサギ、喜んでくれるかな！」

「こんだけ敵倒したんだ、報酬いっぱい貰おうぜ！」

まるで、本当に彼がいるかのように。気付いていない、とは違
のだろう。だって、一番最初に“彼”を見つけたのは双子だったか
ら。

そう、あえて言うのなら、“彼”はいまだに生きているのだ。双
子の中で皮肉げな笑いを見せて、彼らを手ひどく叱って、朝乱暴に
起こして、報酬に応じた買い物をして、3時のお菓子を作って。
ひどく楽しそうに笑う彼らの腕の中で、ごろりと首が動いた。

最初は敵の惨殺だった。忠実に門番の仕事をこなし、虚空に向か
って“彼”の名を呼びかけながら笑っていた。

次に、貴族。その次は商人。それから兵士。使用人。だんだんと
見境なく殺人を行うようになり、最近では大切にしていた西部の庶
民を惨殺してくるようになった。

敵でもない人間の首を抱えて、たくさん殺したから褒めると笑う。
何とも滑稽で狂った光景だった。

「フレイム様、白ウサギ知らない？ さつきから探してるんだけど、
いないんだ」

「あ、もしかして厨房？ そろそろご飯だね、僕お腹減った！」

「今日はハンバーグがいいな、白ウサギに頼んでみる？」

「もぉー、ダムったらまたハンバーグ？ 今日は僕カレーがいい！」

「えーっ、やだよあれ、辛いじゃん！」

「そりゃあ、カレーだからね」

「じゃあさ、じゃあさ。先に白ウサギ見つけた方の勝ちっていうの
は？」

「あっ、いいかも！ フレイム様は何がいい？」

突然話題を振られて、僕は一瞬言葉に詰まった。料理なんて、料

理長に頼めばいい。プロの料理が美味しくないはずがないんだ。

なのに、僕は、彼らは、“彼”に料理をねだった。嫌がる“彼”を無理矢理厨房に押し込んで、所望する料理を作らせた。

嫌がらせだったのだと思う。不器用な彼の料理はだんだん上達したとはいえ、プロの味には劣るものだったし、何よりぐちぐちと不平不満を聞かされながらの食事だ。若干不味い。

なのに、なぜ。“彼”がいなくなってもまだ、君たちは“彼”を求めるの……？

「っ……食べたく、ない」

「「フレイム様？」」

「あいつの作ったご飯以外、食べたくない……」

嗚呼、どうして。昨日までは平気で料理長の作ったものを食べていたというのに。どうして、どうして。

双子の瞳が光を失って、心配そうにこちらにかけてくる。僕を挟んだ二人は、慰めるように頭と背中を撫でた。

「フレイム様、どうしたの？」

「白ウサギに言っただけでも作ってもらおうよ？」

どうやって。だって、あいつは、もう。

「死んだんだよ」

嘲笑うように言ってやれば、二人は不思議そうに首を傾けた。その心底純粹なしぐさに、どろりとした憎しみが沸き立つ。

どうして。どうしてどうしてどうして！

気付けば、優しくなだめていた二人の腕を強く振り払っていた。がたんと大きな音がして、椅子が床に倒れる。僕は二人から後ずさ

るようにして距離を取りながら、長く伸びた髪を無茶苦茶にふり乱した。

ああ、髪がだいぶ伸びてきたな。あいつがいなくなってから、切ってくれる人がいない。

『その長い髪うざくないですか？　僕がバリカンでさっぱりさせてあげますよ』

「どうして気づかない！　どうして平気でいられる！　あいつが、あいつがいなくなったのに、どうしてお前らは泣かないんだよ！」

『フレイム様』

「へらへらへらへら笑って！　あいつがいらないんだぞ？！　何で……っ、なんで泣かないんだよ！」

『僕が死んでも』

「お前らはっ、お前らは、泣けるのに……！」

『……泣かないで下さいね』

「僕は、」

泣けない。だって、“彼”と約束したから。“彼”の言葉に失笑し、泣くはずないだろと返してしまっただから。

ねえ。ねえ。僕、泣いてないんだ。ちゃんと約束守ってるんだ。新しい“白ウサギ”だって補充したし、君が大変だと嘆いていた書類だって全部終わらせたんだ。

だから、もういい加減、

帰ってきてよ、ルア……。

「フレイム様？」

突然背後で“彼”と同じように呼ぶ声が聞こえたから。思わず振り返って、「お帰り」と言って抱きついてしまつところだった。

プライドが駆け寄ろうとした足を留め、平静を装った声で「何」という。思考はグルグルと回る。未だに呆然とする双子から目を離し、声のした方へ向き直った。

白い耳、ウサギの耳。ああ、帰ってきたんだね。お帰り、バカ。君が居ないうちに全部仕事片づけちゃったよ。休暇をあげるから、アリスと遊んどいで。ああでも、その前に紅茶が欲しいな。淹れてきてよ。ロイヤルミルクティーで、砂糖が3つ。

「ロイヤルミルクティーで砂糖が3つ、淹れてきました」

優しく、微笑む。

『あんまり甘いものばっかだと体に悪いですからね！
ストレートの無糖です！』

嗚呼、そうか。君は、本当に。

「もう、いないんだね」

呆然と呟いた僕の頬に、熱いものが伝った。

『じゃあ、約束しよう』

『はい？』

『君が死んでも僕は泣かない。そしたら、幽霊でもゾンビでも何でもいいから、僕に逢いに来てよ』

『……何が狙いですか、フレイム様』

『ふふっ、骨だけになった君を存分に虐めてやるよ』

『どこまでも性格悪いですねこのガキは！』

『いろいろ超常現象とやらの観察もしたいしね』

『僕は実験用のモルモットですか！』

『嫌い、騒ぐな。とにかく、僕は泣かない。そしたらちゃんと逢いに来て』

『ハードル高くないですか……大体、僕の意味でどうこうってわけにはいかないんじゃない？』

『気合でなんとかしなよ』

『無茶振り?! はあ……仕方ないですね。帰ってきたときには飛び切り苦い紅茶を淹れてあげます』

『うっ……』

『ふふふふ、せいぜい泣かないことですね』

『な、泣くはずないだろう、君が死んだぐらいで!』

ああ、べしつじつじつ。

君に逢う術は、もない。

愛形 十 狹隘 ロイヤルミルクティー 十 (後書き)

詩人は綴る。彼らは愚かしいまでに狂おしい生き物であった。

ドラえもんとどら焼きってどっちが先にできたんだろう……？
こんにちは、作者です(´・`・´)

今回はルアを失ったフレ임様の話です。この二人は依存関係にあるため、どちらかが死んだらきつと何かが起こります。

フレ임様はルアに泣かないと約束した手前、泣くこともできません。彼は元から狂っているため、双子のように狂気に溺れることもできません。

前回のあとがきに書いたものとちよつとずれたストーリーになってしまいました……なんとというダメ作者……orz
フレ임様は狂ってません。この人には珍しく、すごくまともです

あ、なんかすごくどうでもいいですが。

ロイヤルミルクティーとミルクティーってどう違うんだろう……？
ロイヤルの方が甘いのかな？

はい、脱線しました。話よ元に戻れ！

フレ임様は新しく就任した“白ウサギ”にルアを重ねて、比較してばかりいます。ああ、ルアの方が明らかに劣ってるし小言が多いな、と思いながらもどうしてか胸が締め付けられる、そんな話です。

ルア、完全に母親です。それが嫁です

きつとルアは小言をぶちぶち言いながらもフレイムのことを一番に思ってるんだろうなあ、と思いながら書きました。ロイヤルミルクティーに砂糖3つではなくて、ストレートにしたのはきつとフレイム様の健康を慮ってです。

新しい“白ウサギ”にもロイヤルミルクティーと言いつけながら、どこかでストレートを持ってきてくれることを期待していたんですね。ルアのように。

嗚呼どうしよう、今無性にフレイム様を幸せにしたい。夢でもいいからルアに登場してもらいたい……！

基本的にフレイム様は不幸路線を一直線に行く子だと思えます。この話も書いてて一番こっぴどい……こっぴどい、げふっ、胸が痛みました。

大切なものは、失って初めて大切と気付くのでしょうか。だって、失ってしまう前は、当たり前のもだったから……。

愛形 † 狹隘 涙の色はソライロ †

(前書き)

キョウアイ続編Ver.D。そして物語は終焉を迎える。アリス、イオはほぼいません。名前が一回だけでてきたくらい。

ロイヤルミルクティーその後の話で、ディー視点です。ルアを失った彼らを選んだ結末とは……？

壮絶なるバッドエンド。幸せ？ 何それ美味しいの？

残酷描写あり。ある意味今までで一番グロい。というか気持ち悪い。

死ネタあり。来世で逢おう、みんな！

後味？ 吐きそうなほど不味い。

狂気再来。なんかちょっとしたホラー(？)要素も。

いつも二人で行動する彼らは、トイレでさえも例にもれなかった。同じ時間帯に同じものを同じ量だけ摂取するせいか、尿意が訪れるのはほぼ同時だ。だからこの夜も、ダムの方が先に目を覚まして、デイーをトイレへと誘った。

ダムは寝惚け眼をこすりながら、デイーは大きな欠伸をしながら、仄暗い廊下を歩いていた。かろうじて見える時計は1時を指していた。

『んうー……？』

トイレを済ませて無言で部屋を帰ろうとしていたちょうどその時、暗闇で動く影を見つけた。ごそごそと動いているそれは、闇夜に溶けるようなコートを着込んでいる最中のようである。

二人は手すりから身を乗り出して階下の人物を眺めていた。彼らは基本的に警戒ということを知らない。

『誰え？』

間延びした声でそう問えば、びくりと影が肩を震わせた。同時に揺れた白いウサギ耳が、闇の中存在を主張する。

こちらに向けられた白い顔は、自分たちがよく見知ったもの。いつもからかつては遊んでいるその人だったが、デイーの自殺寸止め事件以来彼に嫌悪を抱くことはなかった。

睡魔による意識混濁も原因だったのだろう、二人はウサギ耳の青年に、ひどく柔らかな笑みを向ける。青年がその無邪気な笑顔に息を呑んだのも知らずに。

『なんだあ、白ウサギじゃん……』

『どこ行くのお……？』

『……ディー、ダム。寝てたんじゃないんですか？ 眠るように死んでいたと思ってたんですが……』

『トイレだよ、トイレえ……』

『つーか勝手に殺すな、馬鹿ウサギ……』

『いいからもう寝なさい。お子様に夜更かしは禁物ですよ』

『うつさい、チビのくせに』

『成長期に見捨てられたくせに』

『……黙りなさい』

険悪な雰囲気はなくなったというものも、三人集まれば文殊の知恵、どころか三人集まれば毒舌大会だ。

遠目からでも彼の苛立ちオーラを感じた二人はくすくすと笑うと、さらに手すりから身を乗り出した。

ほんの少し、彼に近くなる。もっと近づきたいと思えば、回り道をして階段を降りる必要があった。ただどこで彼らは、安易に考ええてしまう。

どうせ明日も会えるだろう と。

『ねえ、どこ行くんたよー？』

『こんな時間にどうしたのさあ』

『さあ、どこでしょう？』

ふわり。柔らかく微笑んだ彼の顔が、今にも闇に溶け込んでしまふいそうなほど儂いものだったことに、二人は気付かない。

ただ、笑顔を向けられたことが単純に嬉しくて、素直にはしゃぐ。無邪気な笑みを返すと、珍しく和やかな雰囲気とその場を包んだ。ああ、ここにフレ임様がいれば完璧なものな。彼の笑顔を階上から見ながら、安らかな眠りに落ちているだろう主人に思いを馳せた。

『フレ임様には行先言っただろうな、白ウサギー』

『また仕事投げ出したあ、とか言われてプンプンさせんなよなあ』
『っ……そう、ですね』

歪む。本当に微かな変化だった。距離にして10メートルは離れているだろう、青年と二人。しかも電気はほとんど消され、その場を照らすのは窓から入る月影だけだ。

なのに、どうしてか二人にはわかってしまった。青年の眉が微かに歪み、サファイアの瞳が悲しく揺れたことに。

二人が一瞬たじろぎ、顔が歪んだわけを聞こうとした時だった。

青年がその歪みを仮面で覆い隠すかのように微笑んだのだ。

柔らかく、優しく。儂く、綺麗に。 悲しげに。

彼らにはわからなかった。どうしてこの人は今、こんな泣きそうな顔で笑っているのだろう。わからなかった。わからなかった

それが、惜別の笑顔だなんて。

『怒って、しまいますよねえ……』

ただ、困惑だけが二人を包み込む。彼らから見ても、この青年は強い。戦闘能力にとどまらず、彼の心には芯が通っているのだ。

強く、真っ直ぐな心。そんな心の持ち主だからこそ、不安定なフレ임や双子の存在を支えられていた。

なのに今の彼は、こんなにも小さくて儂い。そのことに言いよう

のない不安を感じて、気付けば限界まで手すりから身を乗り出していた。

『そ、そうだよ！ フレイム様が怒るとめっちゃ怖いんだからな！』
『いったん暴れると誰にも止められないし、俺らにも八つ当たりしてくるし！』

『僕たち、とばっちりなんて御免なんだからな！』

『そうだよ、馬鹿ウサギ！ だから……』

『早く帰って来い！』

いってらっしゃい。いつも心の中では呟くのに、いざという口には出せずに他の言葉で代用してしまう。

それが彼らにとつての、「早く帰って来い」。帰ることを当然とした、なんて傲慢でなんと滑稽な文句。素直に言えない自分たちが、少し情けなく感じていた。

だけど今は。今はむしろ、こっちの文句のほうが正しいような気がする。

正しい送り言葉なんていらぬ。送り出したくなんてない。どこへ行くかわからない、いつ戻るかもわからないところへ、この人を……。

早く戻ってきて。早く、早く。まだ行ってもないのに、そんなことを思ってしまうのはなぜか。二人にはわからなかった。

『あのがきを』

なのに、彼は頷いてくれない。わかりましたとも、当然でしょうとも。ただ、柔らかく柔らかく、哀しく微笑むだけで。

そのことにもどかしさのようなものを感じて、二人は思わず手すりに足をかけて二階から飛び降りそうになった。

お互いがそれに気づき、どこか恥ずかしくなって、互いを牽制してしまふ。二人にはただただ、月光に照らされる彼の笑みを見送ることしかできないのだ。

『フレイム様を、頼みますよ』

それが、双子と彼の約束。

小さく「ルア」と呼びかける声が、闇夜に虚しく響いた。

ぼろぼろぼろぼろ。涙の色が青、だなんていったい誰が言ったんだらう。

ことり。不思議そうに首を傾けても、フレйм様は何も言ってくれない。

ぼろぼろぼろぼろ。涙がいくつもいくつもフレйм様の目から流れて堕ちる。ずっとずっと泣いているのに、まだ枯れないんだ。

涙という調味料をストレートティーに加えてから、フレйм様はカップに口をつける。甘いのがだあい好きなフレйм様は、苦そうに顔を歪めてから、またぼろぼろぼろ泣き出すんだ。

「ねえ、白ウサギ」

「なあ、白ウサギ」

フレйм様はなんだか寂しがり屋になった。ある日突然泣き出したかと思ったら、涙が止まなくなつた。すぐくすぐく、寂しがり屋になった。

だから僕らはフレйм様が寂しくないように、ずっとフレйм様のそばにいる。仕事するときも休憩のときも、お風呂のときも食事のときも、寝るときも起きるときも。

僕らだけじゃなくって、白ウサギだっている。ずっとずっとフレйм様の隣で悲しそうにフレйм様の髪を撫でてるのに、フレйм様ったら全然気づかないんだもん。

時々、白ウサギが可哀想に思えてくる。悲しそうなフレイム様を見てたら、白ウサギも悲しくなるんだって。そんな二人を見てるのは僕らも悲しい。

『なんですか？』

フレイム様、フレイム様。気付いてあげて、気付いてあげて。白ウサギはそこにいるよ。フレイム様の隣でぼろぼろぼろぼろ涙を流しながら、頭を撫でてるんだよ。

ぼろぼろぼろぼろ。止まんない、止まんない。僕らには、二人の涙を止めるすべなんて知らない。

「泣って、何色なんだろう？」

「白ウサギは何色だって思う？」

幼稚な問いかけを試してみる。ああ、でも意外と深い問題かもしれない。倫理的な意味で。

フレイム様が流す涙は、きれいなきれいな赤。紅玉ルビみたい。集めてネットワークスにして首にかけたたって思うけど、掬っても掬っても拾えやしないんだ。

白ウサギが流す涙は、きれいなきれいな青。人工的じゃない色、っていうのかな。とにかくキラキラしててきれい。飴みたいに瓶に詰めて、大事に取っておけたらいいのに。

僕らは涙を流さない。フレイム様も白ウサギも泣いてるんだから、僕らも、って思うけど、どうしてか出てこないんだ。

代わりに僕らは乾いた笑いを零す。全然きれいじゃない。宝石にも飴にもなりやしない、僕らはこんなの嫌い。僕らが笑ったびに、フレイム様は一層激しく泣き出すし、それにつられてルアも泣いちゃうんだ。こんなの嫌い。

『そうですねえ……』

白ウサギがふっとフレイム様から視線を外して、窓の外へ向けた。フレイム様はそれにも気づかないでぼろぼろ泣いてる。名前を呼ぶほど恋しいなら、気付いてあげればいいのに。

僕らも窓を見た。白ウサギが見るから、僕らもつられて外を見た。すごい、晴れてる。支配者はずっと泣いてるのに、天はム力つくくらい良い天気だ。

さすがのフレイム様でも、天気のこととはどうしようもないんだなあ。そんなことを思っていたら、また笑いの衝動がこみ上げてきた。フレイム様を怒らせないように、必死に肩で笑いを堪える。

「外なんて見てどうしたの、白ウサギ」

「世界は泣いてないよ、白ウサギ」

そう、世界は悲しんでなんかいない。アリスの訃報が届いた時は国民全員が悲しんだけれど、今はただ新しい“アリス”をと騒ぐばかり。こんなんじや姫さまが可哀想。

ああ、でもやつぱり一番可哀想なのは白ウサギ。ああ、居ないんだ。じゃあ新しいのに変えなきゃ。たったそれだけだった。嗚呼、可哀想。

新しいのは偽物。だって全然、白ウサギに似てない。ガキっぽいし、料理も不味い。僕らを起こしてもくれないし、やつすい笑顔なんてふりまいちゃって。

白ウサギだったらここにいる。フレイム様の隣に、僕らと一緒にいる。僕らはそれだけで幸せ。それだけで笑顔。

でも、フレイム様は笑ってくれない。ぼろぼろぼろ。

「泣いてるのはフレイム様だよ、白ウサギ」

「なのはどうして世界を見るの、白ウサギ」

『涙は、空の色だと思ひまして』

お空？ 言われて僕らは、世界の、空だけを見上げる。

青い、青い、青い。でも濃くはない。均等な色が続くのかと思つたら、ちよつと白くぼやけてたり。

不思議。世界はこんなに残酷なのに、空だけは世界から切り離されたように不思議な色をしてる。

「あつ、そうか！ 空は青くも赤くもなるもんね！」

「すごいすごい！ だから涙の色は空色なんだね！」

「きれいだね、白ウサギ！」

「すごいね、白ウサギ！」

「っ……うるさい！」

はしゃいでいたら、フレ임様に怒られた。でも、むかしのような覇気や畏怖は感じられない。ただ怒鳴るだけ。感情に任せて、怒るだけ。

僕らはきよとんと目を丸くして、フレ임様を見つめた。泣き腫らして疲れきつた顔。あんなにきれいな顔立ちだったのに、今はひどく痛ましい。

ぐうつと、胸が苦しくなった。でもどうして？ 涙が出てこない。泣きたいよ、泣きたい。フレ임様みたいに思い切り泣いて、フレ임様を慰めたい。

「あははっ」

「えへへっ」

でもどうして！ どうして僕らは笑うことしかできないの！

僕らは頭のイカれた道化師クラウンのように。観客あなたの笑顔を咲かせたくて、歪な顔で笑ってる。

苦しい、苦しいんだ、フレ임様。どうかそんな顔をしないで。どうかもう一度笑って。

笑って！

「お前たちは、羨ましいね……」

フレ임様は僕らからすぐに目を逸らすと、花瓶の中のバラを全部抜き取った。棘がまだついてるのに、茎をぎゅっと握りしめてる。赤い赤い涙がフレ임様の手のひらから流れた。瞳から流すそれとは違って、どろりと濁っていて密度も濃い。

手の涙と一緒に、花弁がひとひら舞い落ちた。ひらひらひらひら。何度も旋回して、床に落ちる。

鋭い棘をもつ強い花なのに、こんなにも儂いさまを見せるのか。僕らは純粹に驚いた。そのさまがどうしてか、あの日出送った白ウサギの背中と重なった。

「狂えて、しまえた」

『フレ임様』

ずっと空を見つめていた白ウサギが、再びフレ임様へと視線を戻した。ずいぶん伸びてしまった髪を撫でる。

さらりという音はしない。窓を開いてないから当然風が舞い込んでくることもなく。青白い指が髪と髪の間を通り抜ける。

動かない、動かない。僕らの目に映る白ウサギは確かにフレ임様の髪を撫でてるのに、軽いはずのフレ임様の髪はピクリとも動かない。

「僕も狂いたかった……！」

『フレイム様、どうか』

「僕も君たちみたい狂ってしまったかった！」

『どうか、泣かないで』

聞こえない。触れない。見えない。そんな白ウサギの存在をそこに“いる”と表していいのかわからないけれど、一度否定してしまつたらもう戻れない気がした。

フレイム様の手を、左右から取る。包み込むようにして両手で握れば、温かい体温が少しは流れていく。

どうすれば、この人は笑ってくれる？ どうすれば、僕らはこの人を救える？

白ウサギに頼まれたんだから、僕らが何とかしないと。ううん、白ウサギに頼まれてなくても、僕らがフレイム様を救わないと！

フレイム様が見えるのは、僕らだけ。白ウサギは何かしてあげたそうだけど、触れることができないから。僕らが何かを言って、フレイム様を救つてあげる。

「フレイム様、どうか」

「僕が今もなお狂わずにいるのは……」

「どうか、泣かないで」

「僕がもともと狂っていたからなのだろうね……」

白ウサギの言葉を鸚鵡返しにしてみるけれど、フレイム様の目はこちらを見ない。何も聞こえていないように虚ろな瞳を宙に向ける。一瞬、自分たちが白ウサギと同じように見えない聞こえない存在になってしまったような気がした。途端に恐怖に駆られて、フレイム様の手をぎゅっと握りしめてしまう。

さすがにフレイム様も痛かったのか、弾かれたように体を震わせると、交互に僕らを睨み付けた。ああ、よかった、よかった。僕らはまだあなたに触れられる。僕らはまだあなたを救える。

「フレイム様は、狂いたいの？」
「狂いたいののに、狂えないの？」

『なら、狂ってしまいなさい』

どろり、どろり、どろり。毒が僕らの身体の中を這いずり回って、にやりと唇を歪める。これが、フレイム様の言う“狂気”なのだ。どこかで理解していたが、捕らえられたが最後、もう僕らは逃げられなかった。

そして今のフレイム様が求めてやまない毒。もともと“狂気”を孕んでいるこの人は、どうしても僕らの持つ毒を得られないらしい。ひどく哀れだった。悲しかった。だけれどもその感情が、フレイム様に向けられたものなのか、それとも自分たち自身に向けられているのかどうかまではわからなかった。

狂気のために正気を保ち、世界の狂気を見つめる者と。正気のために狂気に堕ち、現実を見失う者と。

果たして、どちらが幸せなのだろう。

「そう、だよ」

ぼろぼろぼろぼろ。涙が止まらない。
にこにこにこにこ。笑顔が止まない。

「なら、一緒に狂おう」

「一緒に狂ってしまおう」

「え………？」

『狂いなさい』

呆然とするフレイル様の両手を取って、軽い身体を担ぎ上げる。ああ、瘦せたな。元から軽い人だったけど、今は本当に体重を感じない。それもそうか、あれだけ涙を流したんだから。

後ろからダムがフレイル様を落とさないようにと支えてくれている。そのまた後ろで、白ウサギが妖しい笑みを浮かべながら足音もなくなってきた。

中央階段を駆け上がるときに、何人かとすれ違った。僕に担がれたフレイル様を驚いたように見つめてくるけど、結局はそれだけ。何も聞いてこないし、手も出してこない。ほんと、残酷で冷たい世界。

ねえ、フレイル様、フレイル様。僕ら、あの雨の日にあなたが差し出してくれた手に救われたんだ。こんな腐りきった世界で、あなただけが僕らの光だったんだ。

たとえあなたが僕たちを駒としか思ってくれなくても。貴方が大好きだよ、フレイル様。あつ、もちろん一番はダムだけどね！

だから、今度は僕らが救ってあげる！

「うあつ……」

びゅう。強い風が吹いて、僕らの髪を一掻き混ぜていった。ようやく辿り着いた天辺で、僕らは感嘆の溜息を吐く。

空は青かった。どこまでも、どこまでも。薄い薄い、青。涙の色。僕は抱き上げていたフレイル様の身体をそつと下すと、ダムと顔を見合せてはにかむように笑った。

フレイル様は、これからやることを大体察してしまったのかその綺麗な紅玉をゆらりと揺らす。

ゆらりゆらゆらくらくらり。いくら揺れたって、そこに宿った光は消えない。だからこそ、この人はあんなにきれいな涙が流せるん

だから。だけど、その光のせいでフレイル様は苦しんでるんだよね？
僕らの瞳は、もうとつくの昔に濁ってしまっている。だから涙なんて出ないし、あなたを笑わせることもできない。哀れとは思えど、やはりそこに感情を入れることはできない。

「大丈夫だよ、フレイル様！」

「ジェットコースターみたいな感じだったー！」

「怖くなんかないよ」

「寂しくなんかないよ」

フレイル様の背中を促して、手すりへと押しやる。人の命を軽んじるこの国では、自殺防止用の設備が何も施されていないかった。まあ、自殺する奴なんてあんまないけど。

ついに手すりに身体が密着した。ここから少し体を逸らせれば、簡単に墮ちる。下にはバラの庭園が見えた。ああ、あのバラ達は僕らの命を吸って赤く色付くんだろうか。

手すりにフレイル様を先に立たせ、僕らは両サイドを固めるようにして後から立った。決して大きいとは言えない手すりの上は、思った以上に不安定だ。

冷たいフレイル様の手を繋ぐと、フレイル様も弱い力で握り返してくれた。多分、迷いはまだある。きつと恐怖も。生への執着も。だけどそれ以上に、あいつに会いたいんだ。

「ねえ、聞いていい？」

小さな声だった。聞き逃してしまいそう。

なあに、と聞くとフレイル様は悲しそうに瞳を細めて薄い唇を開く。

「君たちの言う“ルア”はどこにいるの？」

ああ、本当に頭のいい人。こんな時でさえ、正気でものを考えるだなんて。

僕は自分の口元が喜悦で歪んでいるのがわかった。何故かって？ そりゃあ、ダムがそんな顔をしているから。僕らは同じではないけれど、とてもよく似ている。

「僕らの後ろにいるよ」

「そう、俺達の後ろで」

「あなたを突き落そうとしている」

わざわざ後ろを見なくても分かった。脳内スクリーンに描き出される映像。

にいいいつと大きく口を開けて笑った“それ”が、異様に指の長い手を目一杯広げて今か今かとフレ임様の背中を舐めるように凝視していた。

もうすでにスクリーンの中で展開していたが、“それ”は幾度もフレ임様を殺していた。時には銃で、ナイフで、縄で、鎌で、毒で。そして今は、屋上から突き落として。

どんっ、ひゅるるる、ぐちゃ。赤い花が咲いた中脳味噌をぶちまけたあなたを“それ”は大切そうに抱え込んで、こっぴうんだ。

『ただいま』

「……そう」

もちろん現実のフレ임様は死んでなんかいない。今こっぴうって僕らと手を繋いでいる。堅く、堅く。

後ろの“それ”は相変わらず、フレ임様を突き落そうと躍起に

なっているようだった。すり抜ける腕をいらだつように見ては再び歪んだ笑みを顔いっぱいに咲かせ、何度も何度も。

「やっぱり君たちは 狂っているんだね」

くすり。小さく笑ったのか、否か。もうそんなことどうでもいい。悪戯がばれてしまった子供のように、クスクスクスクと僕たちは口元に手を当てて笑った。

「そつだよ」

「俺達は狂ってる」

「白ウサギはもう死んだ」

「もうそんなのとっくにわかってる」

「だって僕らはいいつの死骸を見た」

「骨だけだったけど、すぐにあいつってわかったんだ」

「早く帰って来いって言ったのに」

「早く帰って来いって言ったのに」

「なのにあいつは帰ってこなかった」

「ただいまも言わなかった」

「だから僕らはいいつを造った」

「だから俺らはいいつを創った」

「完成したのが“それ”」

「フレイム様を何度も殺したやつ」

「完成品だよ」

「失敗作だよ」

「贋物だよ」

「本物だよ」

「想像したんだ」

「創造したんだ」

「僕らとずうっと一緒にいて」

「フレイム様の隣にいて」
「僕らのもとに帰ってくれる白ウサギを」
「ただいまって言うてくれる白ウサギを」
「だって現実の白ウサギは帰ってこなかったから」
「だって現実の白ウサギは帰れないから」
「だから想像したんだよ」
「だから創造したんだよ」
「だから“それ”はただの思念」
「あるいはただの妄想」
「見えるはずがない」
「聞こえるはずがない」
「触れるはずがない」
「認識できるはずがない」
「僕らは気付いた」
「だって俺らの想像だから」
「でもフレイム様は気付かなかった」
「だって俺らの創造だから」
「当たり前だよな」
「当たり前だよな」
「でも僕らは想像を止めない」
「でも俺らは創造を止めない」
「それ”はご飯を作ってくれた」
「それ”は朝起こしてくれた」
「それ”は報酬をくれた」
「それ”は買い物にも付き合ってくれた」
「それ”は笑いかけてくれた」
「それ”は口喧嘩もしてくれた」
「それ”は狂えと言った」
「それ”は狂えと言った」
「それ”は狂えと言った」
「それ”は狂えと言った」

「それ”は狂えと言った」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「それ”はフレイム様を殺したかった」
「だからそれが俺らの願いとなった」
「だからそれが俺らの望みとなった」

「あなたを救いたい」

狂っている。でもそれを、自覚はできている。いや、ずいぶんと客観的に見ているから自覚とは言わないだろうが。

ああ、でも嬉しい。フレイム様は僕らが狂っているとわかってなお、僕らの手を離さなかった。それはつまり、僕らの願望を受け入れ共に堕ちるということ。

あれだけの狂言を聞いても平然と佇んでいるフレイム様を流石だなと思いつつ、僕らは後ろで悪戦苦闘している“それ”に視線を向けた。

“それ”は僕らに気づくと、ぎらついた眼差しから一転して困惑の瞳へと変えた。それもそうだろう、“それ”の存在は、すべて僕らが握っているのだから。

泣きそうな顔でおろおろする“それ”に、大好きであった面影はどこにもない。あの芯の強かった心など、一欠片も入っていない。端正な形をした、悍ましい化け物といったところか。

「だからお前は白ウサギじゃない」

「白ウサギは死んだ、俺らはそれを見た」

「お前はただの贗作」

「お前はただの失敗作」

「僕らの寂しさを埋めるためだけに生まれてきた出来損ない」

「俺らが想像して創造したただのまやかし」

「お前にフレイム様はやらない」

「お前にフレイム様は殺させない」

「お前は僕らの思念」

「お前は俺らの妄想」

「贗作」

「失敗作」

「本物であったならば」

「本物の白ウサギなら」

「僕らを止めていただろうね」

「フレイム様を助けただろうね」

ぐずり、と。幼児が作り上げた泥の塊が崩れるように“それ”は壊れた。それも当然だろう。存在意義をなくした。いや、そもそも想像主であり創造主である僕らからの信仰をなくした。

僕らは見る影もなくぐちゃぐちゃになったそれを頭の中でゴミ箱にポイすると、興味を失って再びフレイム様を見た。

フレイム様の瞳にもう迷いはない。綺麗な光はまだ消えてないということ、この人の正気はまだ残ったままなのだろう。綺麗だけれど、なんと残酷な光か。

つないだ手を確かめるように持ち上げて、僕らは両サイドで笑った。フレイム様は相変わらず笑いもしなかったけれど、涙を流すこともなくなつた。

「それじゃあ、行こう」

「ルアのところへ」

同時に踏み出した3つの足が踏むものなんて、何もなくて。踏めるかもなとどこかで期待していた空気はひどく重かった。ちょっと重心がずれただけでぐつと息が詰まる。

僕にとっては、二回目かも。あのときは白ウサギが助けてくれたんだっけ？ 懐かしい。

落ちる。堕ちる。絡み合うようにして。纏れあうようにして。

「ねえ」

突然口を開いたフレイム様に、僕は久しぶりに焦りという感情を覚えた。どうしよう、どうしよう。今更嫌だと言われても、もうどうしようもならない。

だけど、僕の考えは杞憂に終わったらしい。僕が一番初めに落ちて、真ん中にフレイム様、一番上はダム。必然的にフレイム様を見上げる形になる。いや、もう上も下も右も左もわからないのだが。

息の抜けるような笑顔だった。僕らが浮かべていたものとはまるで違う。とても穏やかな笑顔。

「ありがとう」

ねえ。ねえ。白ウサギ、フレイム様があったって。僕は、どうやって返したらいい？ 何を言ったらいい？

だってどう考えたって、僕らは悪。悪いのは僕らなんだ。勝手に救うとか何とか言って、心中まがいなことをして。

死が救いだなんて、どこのカルトだよ。いまだきそんなのめったにないよ。うっわ、馬鹿。ホント馬鹿。今更後悔し始めてる僕なんて、馬鹿以外に表現する言葉がない。

『フレーム様を、頼みますよ』

ごめんなさい。ごめんなさい。約束、守れなかった。ちゃんと覚えてたのに、何もかも狂ってたけどこれだけは覚えてたのに。

フレーム様を守れなかった。自分たちから、守ってやれなかった。白ウサギ、お前はこれのことを言ってたんだね。強いフレーム様が誰かに殺されるはずがない。なのに頼みますだなんて、不自然だと思ってたんだ。

ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……っ。同じところへ行けるとは思っていない、でもどうか、どうかフレーム様だけは白ウサギと同じところにいかせてあげて。

フレーム様は自分で死んだんじゃない、僕らに殺されたんだ。僕らが殺したんだ。僕らの狂気が。だからどうか、フレーム様だけは許してあげて……っ。ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

「ごめんなさい……っ」

今更流れた涙は、頬を伝うことなく宙へと投げ出されて霧散した。その垣間一瞬、僕は涙の色を見た気がする。

透明で、その涙越しに見える空。

涙は、
虚色^{ソライロ}だった。

第一発見者である白ウサギの少年の供述である。

三人の死体はほぼ同じところに落ちぐちゃぐちゃに混ざり合っていたから、三体を分けることは難しかった。

森の中で三つの笑い声を聞いたという旅人は云う。ならば、三人を一つの墓に入れればいい、と。

城の中で一つの泣き声を聞いたという詩人は云う。彼らの遺品にはぜひ前白ウサギの骨を入れてやれ、と。

園の下に三人の死体と一人の遺骨を埋めた白ウサギは云う。これではまるで、本物の家族のようですね、と。

白ウサギは嗤う。彼らは狂おしいまでに悲しい生き物だった。

その後、どこからともなく一つの笑い声、二つの泣き声、そして一つの怒鳴り声が聞こえるようになったとか。

なんじゃこりゃ (. . .) 書いてここまで後悔したのはフレイム様過去編以来です。

まず意味わからん！ デイー視点ってなにこれ、文まで支離滅裂になの？！ (それはただ単にあなたの文章力が壊滅的なのでは？)

自分で書いていて背筋が冷えました。ずっと会話文ってちょっと怖い。句読点がない文や無駄な文字の羅列も十分狂気じみてますが。

うん、最後ちょっとしたハプニングになってたら嬉しいです。ついでにぞつとしてくれたら本望です。

屋上までいった時点で皆様「ああ、こりゃ死ぬな」とは思ったでしょうけど、どうでしたでしょうか？ 前半でフレイルム様の頭を撫でていた“ルア”に決着をつけてみました。

それでは、白ウサギについての解説を書いていきます。

()

白ウサギの死体を見つけた双子は狂った。

自分たちの「寂しさを埋めるためだけに」脳内で「白ウサギ」を「想像（創造）」した。

最初はそれで満足していて、二人は「笑顔」でいられた。

【ロイヤルミルクティー】編後、フレイルムが泣き崩れるようになった。

フレイルムが大好きな二人は彼に笑ってもらいたくて「白ウサギはそこにいる」と言う。

だが当然その「白ウサギ」は彼らの「思念（妄想）」でしかないため、フレイルムには「見えない」「触れない」「聞こえない」。「認識できない」。

二人はフレイルムも「狂って」しまえば「白ウサギ」に逢えると気付いた。そうすれば笑ってくれると思った。

二人の「願い（望み）」を映した「白ウサギ」が「狂えと言った」。

だがフレイルムはもともと狂気の人であったため、狂うことはできないという。

彼らの「想像（創造）」した「白ウサギ」はフレイルムを笑わせることはできない。ならばその「白ウサギ」は必要ない。「贋作（失敗作）」でしかない。

二人は「本物の白ウサギ」に逢いたいと思った。フレイルムを逢わ

せたいと思った。

それならば死ぬしかないと思った。フレイムを自分たちの狂気に巻き込んで殺すしかない。

二人の「願い（望み）」を映した「白ウサギ」が「フレイム様を殺し」たいと言った。

二人の脳内で、「白ウサギ」は何度もフレイムを殺し、喜んだ。

だが二人は大好きなフレイムを「贖作（失敗作）」などに殺させたくはなかった。それならば自分たちの手で逝かせてやりたかった。

だから二人は「白ウサギ」を「想像（創造）」するのを止めた。

「本物の白ウサギ」ならば「自分たちを止めた（フレイム様を助けた）」と言ってその存在を完全否定した。

もともと二人の「思念（妄想）」で成り立っていた「白ウサギ」はその存在を保てなくなった。

三人は「本物の白ウサギ」に会うために身を投げた。

（ ）

……なんじゃこりゃ（二回目）。うん、自分でも書いててごちゃごちゃしてます。まさにカオス。

要するに二人はただ、フレイム様に笑ってほしかったんですね！イカれた道化師はフレイム様を笑わすためだけに笑っていたのです。涙を流すこともできなかったのです。それはまるで呪縛。あるいは、ルアとの最後の約束。

その呪縛が解かれたのは、最後の最後でフレイム様が笑ってくれたからです。だからこそデューは涙を流すことができた。だけれどもルアとの約束は結局破ってしまった。……なんという矛盾。

ルアはきつとアリスを助けに行くときに自分の最期を見透かしていたんですね。だから【ロイヤルミルクティー】でも【涙の色はソライロ】でも約束を残して消えた。ちよつと残酷ですが、彼なりの優しさだったんでしょう。

きつと幸せになった！ 死こそが最後の救いだっただけ！ そうでも
思わないとやってけません（（）・・・）

まさかここまで長くなるとは…… 1話だけに留めときゃよかった
Orz

最悪のエンドですが、お楽しみいただけただけの方には最高の感謝を！
あまりの狂いっぷりに断念してしまった方には心からの謝罪を……
……。
長かったです、キョウアイ編はこれにて完結です。どこかわか
らない点等ありましたら、メッセにてよろしく願います！

貴女はこれを悲劇と表しますか。貴方はこれを喜劇と
表しますか。ならば私はこれを、スケルツォ諧謔として幕まく悲喜をしましょう。

愛形 † モウアイ † (前書き)

ロキアリで甘め。ロキ アリス ALL。シリアス ギャグ
シリアス的なノリで。

なぜかレーテがでしゃばってます。荒ぶるおじいちゃん

小説界の掟(作者のことを言ったり小説のことを言ったりetc)
を堂々と破ってます。

レーテのキャラ崩壊が甚だしい。

愛形
十 モウアイ
十

あの晴れた日、狂い咲く花々の中微睡んでさえいなければ。

「撒いた、か？」

俺は若干息を切らしながらひとりごちるように小さく呟いた。苛々とした声に腕の中の温もりは、微かに身じろぎして同意を示す。

「ほんと……今日はいつにも増してしつこかったわね」

大人しく横抱きにされていたアリスは身を捻って俺の腕から逃げた。

逃げた、という表現がやはり正しいのだろう。ルアに抱きつかれる時や双子に引っ張られる時のような、抵抗する色こそ見せなかったものも、望まぬ行為だったことは確かだ。

手持ち無沙汰になった両の腕は存在を確かめるようにお互いを組み合わせる。無意識の行動だからこそ、寂しいと訴える腕に苛立ち

を覚えた。

思わず舌を打った俺を、大きな黒の瞳が心配そうに見上げる。

「ごめんね……腕、痛かった？」

「は……？」

「私をもっと早く走れば良かったんだけど……。ごめん、ね、重かったよね……」

馬鹿かあんたは。そんな照れ混じりの暴言が喉を強くえづいた。寸でのところで堪え、口元を手で押さえる。

2ヶ月。自分が彼女の隣に立てることを許されてから、2ヶ月だ。そんなにも長い時間を経ておきながら、いまだに自分はアリスを傷つけてしまう。

どうしても素直になれない性格なのを両者共承知済みなのだが、自己嫌悪ともどかしさを覚えずにはいられなかった。

俺は優しく、優しくと頭の中で反芻しながら彼女の頭に手をのせた。そのまま手の平に収まってしまつのではないかと思うほど小さい。

「重くなんか、ない。っ……いちいち、き、気にすんな」

「ロキ……」

「だ、大体、あの連中は身体の造りが化けモンなんだ。お前の足が多少早くなつたぐらいで撒けるはずねえだろ」

「……うん、ありがとう」

口調はひどく荒々しいのに、頭を撫でる手は何か怯えるように慎重で不器用だ。その意図を読み取ったアリスは、眉を下げながら微笑んだ。

恋人は時々こんなふうに笑う。バカな子供を生温かい目で見つめる親バカの顔ですね、とルアが酷評を与えていたことを思い出す。

子供扱いされているのだと気付きながらも、俺はこの笑顔がどうしても嫌いにはなれなかった。

「でもよかった。今日は2人で過ごしたかったから……」

「そう、だな……」

「ほんと、あの馬鹿共……毎度毎度なんなのかしら。城を抜け出す度に駆け落ちみたいに騒いじゃって」

『駄猫はいりません。アリスだけ残って下さい』

『君、僕の玩具をどこに連れてく気？』

『姫さまは俺らと遊ぶんだ！』

『黒ちゃんばつかズルいよ！』

朝の言葉を思い出したのか、アリスの顔があからさまに引きつった。女王に至っては人間の人權を完全に無視した発言である。

アリスはとにかく人気者だ。いや、人気っていう可愛いレベルじゃない。愛されて、執着されて、欲しがられる存在。

そんな彼女が、2ヶ月前のあの日に気持ちを受け入れてくれたことがいまだに信じられない。

都合のいい夢なんじゃないかと思うことがある。浅ましい願望が生み出した、幻覚ではないかと。

(だから、俺は今でも……)

俺は彼女の頭を撫でる手を止めて、彼女から引き剥がした。気を悪くしないようにとさり気なく距離を取った。

普段はこちらが参ってしまうほど鈍感なくせに、こういうことにはやけに鋭いアリスである。

肌が触れ合うことを拒むかのように離れた俺を見上げながら、不審そうに、苛立ったように、悲しそうに、眉をひそめた。

「ロキ、」

「見つけましたよ」

アリスの言葉を遮って、甘さを含む低温が空気を震わせた。思わず意識を持っていかれそうになるほどの覇気と、肌に突き刺さるほどの殺気。

だがやけに覚えのある気配に、俺とアリスは顔をひきつらせながら振り返った。

黒。それはきつと、昼のチェシヤ猫にも使われる代名詞だが、この男以上にこれが似合う者もないだろう。

その後ろには、存在感こそ主人のそれに劣るものも、確かな腕を誇る暗殺者2名が佇んでいた。1人は眠そうに身体を傾け、もう1人はそれを支えている。

「レー、テ」

「お久しぶりです、アリス。長いこと見かけなかったので寂しかったですよ」

「いや3日前に会ったばかりだから」

「一日千秋です。3日なら三千年間ですね。三千年ごしの愛、なんだか素敵じゃありませんか？」

「ありません。骨も無くなってます」

レーテのアプローチを巧みにかわしながら、アリスは苦々しげな会話をした。

恋人が他の男と話していて嫉妬しないのかと聞かれれば、そりゃあむかつきはする。

だがあくまでベクトルは相手から彼女に向けられている一方的なものであり、怒ったところでどうしようもないのだ。

そもそも、一体誰に怒りをぶつけるといつのか。アリスは論外だ。彼女に執着する面々だって……気持ち痛いほど、わかるのに。

「嬢ちゃん！ これからお茶会メンバーで嬢ちゃんの為にパーティーやるんだ！」

「来て……くれる、よ……ね……？」

レーテと言葉の攻防戦をしていたアリスは、無邪気な声と欠伸混じりの声にたじろいだ。昔から分かっていたことだが、アリスは子供に弱い。

こいつらを連れてきたのはこのためか。無言でレーテを睨むと、爽やかに黒い笑顔を返された。

「と、いうことです、ロキ。たとえアリスが君を選んだとしても、こんな日にアリスを独り占めするのは感心しませんねえ」

「あ、あの、でもね、レーテ。これは私が……」

「俺が望んだんだ」

アリスの言葉を遮って話に割り込んだ。レーテは話の腰を折られたことに不快を覚え、端正な柳眉を歪める。

いや、話の腰を折るといふのは不自然か。レーテの呟きは、確かに俺への牽制だったのだから。

なら、レーテが怒ったのはアリスの言葉を遮るような行為へか。フェミニストな彼なら十分あり得る。

「こんな日だからこそ、アリスと二人きりでいたいんだ。だからア

リスは行かせねえ。お茶会なら勝手にやっててくれ」

「お茶会ではなくパーティーです。風の噂によれば、城の方々もこの日の為に前々から準備していたそうじゃないですか。可哀想ですねえ、せつかくのパーティーなのに主役を連れ出されてしまって」

「えっ……ルア達、パーティーの準備してたの……？」

「そりゃあ、愛するアリスの為ですから。ああ、でもアリスは僕達のパーティーに赴いて下さいね？ 最高級のお菓子と紅茶を用意してお待ちしております」

ぐらりとアリスが揺らいだのが音で聞こえるようだ。

お菓子と紅茶に釣られるほど子供ではないが、「アリスの為」というのに罪悪感を覚えたのだろう。

優しい彼女は、俺以外の人間にも気遣いができる。だけど、俺は

……

「あの、レーテ、」

「っ駄目だ！」

困ったように笑って、不承不承ながらもアリスが頷いたかのように見えた。その瞬間、抑えていたどす黒い感情がぶわりと膨張する。荒々しく彼女の腕を引つ張り、動きを封じるように腕に閉じ込める。アリスが痛いと訴えるのを、意識のどこかで聞いていた。

「ふざけんな！ アリスの隣にいいのは俺だけだ！ パーティーなんかに行かせるか！」

「なんて、醜い」

空気が色と温度を下げて変わったのが分かった。

珍しく本気の怒りを見せるレーテに、マルスとレストでさえも怯えたように身を引いていた。

「浅ましい独占欲ですね。押し付けがましい。懐のなんて小さいこと。視野も狭い。君、それでアリスを幸せにできるとでも？」

「……うるせえ」

醜い願望だなんてこと、自覚している。今は容認されていても、いずれはアリスを苦しめる願望だってことも。

だけど、望まずにはいられない。望まずにはいられない。

俺が盲目的に愛してしまうなら、アリスもその瞳を潰してしまつて。

俺がアリス以外見えないというなら、アリスも他の人間なんて愛さないで。

此処は夢の世界ではないのか。俺の妄執が、願望が作り上げた、理想の世界なのでは？

だって、そうでなきゃ説明がつかない。アリスは何故俺の隣にいて、俺の名前を呼んで、俺に微笑んでくれる？

だけど、なら何故。此処が理想の世界だというなら何故。

俺は、理想の俺ではいられないだろう。どうしてアリスの幸せを願う俺ではなくて、アリスを縛り付けるばかりの俺なのだろう。

嗚呼、此処はドコ。俺はナゼ。

「自己欺瞞の願望を押し付けるだけの君の愛は、いつか歪んでしまつてでしょう。ねえ、ロキ。あまりにも盲目的な愛は人を幸せにするものではないのですよ」

眩暈を覚えた。わかつてはいたつもりでも、いざ面と向かって突き付けられるとキツイものがある。

出会った当初は、確かに幸せを願っていたはずなのに。いつの間にかそれは執着へと変わり、業は深くなった。

望めば望むほど、叶えば叶うほどに、アリスの幸せを見失っていき。盲目みえなくなってしまう。

アリスを掴む腕から力が抜けかけた。レーテが意地悪くほくそ笑むのがわかったが、この男の為では決してない。

俺はアリスしか見えない。アリス以外のことなんて、考えられない。
い。

男はそれを浅ましいと云う。俺はそれを愚かしいと思う。
レーテ
だけど、彼女は。彼女だけは　　っ……。

「嬉しい、よ」

そんなことを言うから、離せなくなってしまう。期待してしまう。また深く、業に嵌って、浅ましくも愚かしくも歡喜してしまう。

盲目という言葉がお似合いだった。俺の世界から様々なものが排除され廃棄され、遠慮がちに俺の服を掴みはにかむ彼女の笑顔で一杯になっていく。

それはとても浅ましいことで、愚かしいことで。だけど、何よりも幸せなことだった。

「私は、ロキがずっとそばにいてくれたら、幸せだと思う」

「……アリス」

「そ、それにね、私だってロキのことはっか考えてるし、ロキしか見えないし……なんというか、お互い様？」

上半身の中心部で暴れる心臓がうるさかった。密着するアリスにすら聞こえてしまうのではないかと危惧してしまつくらい激しく鳴り響く。

ああ、でもそれでもいい。素直な言葉にのせられない想いを高鳴

る鼓動で感じて。内に籠もる熱で感じて。

アリスの視線が俺から外された。それでも離されない、服を握る小さな手。言葉はレーテに向けられているのだとしても、意識は俺に向いたままなのだとわかる。

「あの、ね、二人きりで過ごしたいって言ったの、私からなの」

「……そうですか」

「だから、ごめんなさい。今日は、どこにも行けない。また後日口キと伺わせてもらおうわ」

「余計な付属物ですね……ですが、君一人となると、お茶会に誘っても来てくれないのでしょうか？」

「……うん。やっぱりそばに居たいと思うから」

レーテはしばらく考えこむように顎に手を当てていた。その風体はアリスに恋する一人というより、一人娘の結婚を渋る父親のものだった。

やがて小さく、ため息を吐く。

「なるほど、わかりました。『心理作戦』につくきあのカップルを綺麗に破局 〴〵はどうやら失敗のようですね」

「……お前それでも友達か」

「青いですねえ。友情と恋情はまったく別枠ですよ」

「青いつて……お前と同じ年だよ」

「黙りなさい、青二才。……まあいいです。こうなることはある種予測済みで、こんなものも用意してきたのですから」

にこりと艶やかに微笑んだレーテが上半身を折り曲げ持ち上げたのは……黒い、鉄製のもの。

あまりにもその笑顔に不釣り合いなそれを見て、俺は体中の血が足元へと落ちていくのを感じた。

だが俺よりも過剰に反応したのがアリスだ。色白を通り越して青白くなった顔色で、こぼれそうな瞳をレーテへと、正確には彼が持つそれへと向ける。

「あ、あの、レーテ、さん？」

「敬称など必要ありませんよ、アリス」

「わ……私、アクション映画でしかそういうの見たことないんだけど」

「珍しいですか？ 屋敷に行けばもっと大型のがあるんですが……」

「あの、そ、それって、もしかして、まさか」

「はい。マシンガンです」

ひゅつと変なところを使ってアリスが息を呑む音が聞こえた。俺は引き攣りそうになる頬を必死で整え、彼女の体を抱きしめる。

いや、まあ確かにわかってはいたのだ。俺、ルア、レーテの中で最も穏やかな彼は、キレると手の付けられない破壊神になる。実際お目にかかったことはないが、ルアとイオが喧嘩をした際にバズーカを連射されたのだと、のちのルアから聞いた。

だが、まさか本当にこんな行動に出るとは……。

最初に感じた殺気はこれかと、俺は苦々しくも思った。

「アリス、略奪愛というのはご存知ですか？」

無邪気に、だけれどもこめかみに青筋を浮かべながら微笑み、小首をかしげるレーテ。それを合図に、俺はアリスを横抱きにして来た道を逆走した。

背後でけたたましいばかりの銃声が聞こえるが、気にしていられない。一瞬でも足を休ませたら蜂の巣だ。

レーテでよかった。そう思うのは失礼だが、レーテは銃の腕はそれほどよろしくない。せいぜい足元をきゅいんと銃弾がかするだけ

だ。……十分怖いけどな。

俺は腕の中のアリスをもう一度抱えなおすと、自慢の跳躍力で空へと舞い上がった。今時分自分が立っていた場所に、的確な銃の雨が襲いかかる。

「ちいッ……レスト、マルス！ 追いなさい！」

「アイアイサー！」

「……さあー」

俺が射程距離内から逃れると、こちらに聞こえるほど大きな舌打ちをして、レーテが部下に命令した。マルスは嬉しそうに、レストはにやりと笑いながら気怠そうに首肯する。

つくそ……こいつらを用意したのもこのためか！

マシンガンの照準が定まらない空中ならば安全かと思っただが、そううまくはいかないらしい。レストもマルスも同じ獣人だ。跳躍力なら俺に劣ることはない。

落ちるときの浮遊力に伴って、今まで呆然自失としていたアリスが我に返った。俺の肩越しに首を出して、それぞれの武器を出す三人に向かって叫ぶ。

「ちよつと！ あんた仮にも“常識人”って設定じゃないわけ?!」

「ドントマインドです。どうせそんなもの、作者すら忘れてる無駄設定ですから」

「ちよつ！ マスターそれ禁句！」

「番外編だから……大丈……ぶ……」

「大体、弾が5、6発当たったところで彼は死にませんよ。人殺しさえしなければ常識人の範疇です」

「え、とりあえずどこからツッコめば？」

「落ち着いて、一つずつツッコミを入れて下さい。貴女は貴重なツッコミ要員なんですから」

「うん、そんだけ当たったら普通死ぬわとか、常識の範囲広すぎるわとか、色々言いたいことあるけど……とりあえずその禁句をやめんか！」

「えい」

背後で禁句（設定とか作者とか要員とか……こいつら番外編だからって調子乗ってんな……）が飛び交う中、レーテが妙に可愛らしい掛け声をあげてマシンガンを発射した。

キュインという音と共にアリスと俺の耳横を銃弾が掠めた時はさすがに肝が冷えた。限界を超えた速度で少しでも彼を引き離す。

「っ……死ぬ！ 仮にロキが死なないとしても私が死ぬ！」

「大丈夫です。主人公は不死身です」

「なにその設定？！ つーか死んでるからね！ 前話で至極あつさり召されちゃってるからね！」

「僕らの胸の中で生き続けます」

「死ねゲスが！！」

……アリスもさつきから綻破りしてるし……。

これ以上世界観を崩されたらたまったもんじゃないので、俺はアリスの頭を強く押さえつけて黙らした。

むぐつと呻く声が聞こえるが、知ったこっちゃない。つーか耳の側でぎゃあぎゃあ騒いでるほうが悪い。難聴になったらどうしてくれるんだ。

「口閉じてろ。舌噛むぞ」

俺はずれおちそうになるアリスの身体を抱えなおすと、温存していた力を使って高く高く跳んだ。

会話中に随分引き離れたおかげか、マシンガンも部下たちの攻撃

もここまで届かない。
レーテ達の怒声を背中でききながら俺達は繁華街へと身を躍らせた。

「撒いた、か」

同じようなことを言ったなと頭の隅で考えながら、さすがに荒くなつた息を整えた。

三人のしつこさはいつそ清々しいほどのものだった。街に入る前にレーテはマシンガン捨て、拳銃を構える。それから二手に別れて探しているようだ。

しかもなお悪いことに、ちらほらと目立つ赤の制服が見える。あれは女王の城のものだ。あちらも総出を上げてアリスを探索しているのだろう。

今は目立たない路地裏に身を潜めているが、いつ見つかるか知れたものではない。長居は禁物だった。

「あ、あの、ロキ？」

「ん……あ、ああ、悪いわり」

抱えたままであったアリスをそつと下ろす。ずっと全速力で地上を走り、何度も空中へ飛んだせいで、彼女の足取りは覚束なかった。

心配そうにのぞき込むと、お世辞にも血色がいいとは言えない顔。俺は苦虫を噛み潰したような心地のまま、彼女の頬を撫でた。

「ごめん……な。俺のせいで、こんな……」

「何言ってるの。私が標的なんだから、私の責任よ」

からりと妙に乾いた笑みをみせる。だが、そこにいつもの元気はなかった。その事実がさらに深く、俺を自己嫌悪の海へと沈める。

俺がアリスを連れ出したのが最初^{はじ}めの過ちだった。こうなることはわかっていたはずなのに、アリスに苦しい想いまでさせて、俺は……。

謝罪の代わりにともいうようにアリスの髪を優しく梳く。サラサラの絹糸が指の間をすり抜けていく様は、心地よくももどかしくもあつた。

「ロキ、あのね」

ふわりとアリスが柔らかく笑つたのを境に、俺は弾けたように彼女から“離れた”。

今まで彼女に触れていた指から自分の鼓動が聞こえる。熱は指の先へと集中し、貧血を起こしかけた俺は一歩足を下げて踏みとどまる。

夢想。妄想。幻想。似たような言葉が脳内で輪廻を描く。一度疑ってしまえば、この世界が、このアリスが、現実のものでないと妄信するのは容易かった。

そう、俺はいつだって彼女に触れるのが 怖かった。

「っ、待ってロキ！」

咄嗟に逃げを打とうとした俺の腕をアリスが掴む。肌で感じる体温にどくと胸が高鳴るが、すぐに恐怖が俺を襲った。

目の前のアリスがひどく怖いものに見えた。シャボン玉のように脆く儂く……触れてしまえばきつと跡形もなく消えてしまう。

触れて夢が壊れるのが怖い。壊れて現実に戻るのが怖い。現実で、感じるであろう絶望が怖い。

「なんで……なんで私のこと避けるの！」

振り払おうとした腕が動きを止めた。アリスがしがみつく方の腕に、幾滴もの雫が落ちる。変だ、だって、空はこんなに青い。

惚けていられるのもそこまでだった。俺は呆然と、嗚咽を漏らしながら腕を引き止める彼女を凝視する。

泣か、せた？ 俺……が……？

「アリ」

「私が」

遮る声は、可哀想なほどに震えていた。

「私が嫌いなら、そう、言っ……。嫌いなど、直すから、だから、」

「アリス」

「はなれないで……！」

触れる肌から伝わる不安。振動する鼓動から伝わる恋慕。アリスのものである温もりが、俺の恐怖をゆっくりと浄化していく。

俺は息を詰めて、彼女を抱きしめた。熱が、鼓動が、こんなにも近い。触れている。でもどうか、消えてしまわないで。

嫌いなわけではない。噛みつくように言えば、腕の中のアリスがびく

りと震えた。

「……怖いんだ」

「ロ、キ」

「夢が覚めるのが、怖いんだ……！」

「ロキ」

アリスに名前を呼ばれてしまえば、歯止めが聞かなかった。胸の内に蜷局巻く感情をブツ切れに吐露する。

単語に近い言葉でしかなかったが、アリスは黙って聞いていた。子供を宥めるように背中をそっとさすられる度に、一つ、また一つ、好きだという言葉を紡ぐ。

「触れられない」が「怖い」に、「怖い」が「消えないで」に、「消えないで」が「そばにいて」に、「そばにいて」が「愛してる」に。

連鎖反応のように変わっていく感情と言葉。やがてアリスのこと以外何も考えられずに、馬鹿の一つ覚えのごとく「好きだ」を繰り返すようになった頃、徐にアリスが口を開いた。

「私も、夢なんだって思った」

あの晴れた日、狂い咲く花々の中で。微睡みの中で感じた、痛い
としか形容できない衝撃。

「この世界に連れてこられて、ルアに追いかけて……ロキに、
逢って」

あれが、夢の始まりだったのではないか。あれ以来俺はずっとず
っとずっと、永く幸せな夢に囚われているのではないか。

「すごく幸せで、夢なんじゃないかって、思う」

そるは、割れてしまえばなんとも儂い泡沫^{ゆめ}。

目が覚めた世界に咲く花々の中に、君はいない。

「だから」

だけど。

「抱きしめていて……っ」

言われるが早いか、俺はアリスの言葉を直接呑み込むように唇を合わせた。

なかなか甘い雰囲気になれない二人にしては突発的なキスであった。啄むようなものから、感触を確かめるようなものへ、やがてお互いの熱を絡ませるようなものへと変わる。

唇をいったん離しても、熱の籠もった視線が絡み合う。視界の外では、指と指が。物足りなさを感じれば、再び唇を繋ぐ。

互いの熱を確かめるように身体を密着させる二人が女王・帽子屋連合軍に見つかり、せつかくできた甘い空気をぶち壊されるのはまた別の話。

この幸福はまるで夢。

この熱はまるで現実。

ここが夢だと云うのなら、何度でも幻想に溺れよう。

ここが現実だと云うのなら、何度でも互いを確かめよう。

だって、君が俺の世界なのだから。

妄愛。望愛。盲愛。

『今日この日、俺の世界は産声を上げた』

愛形 † モウアイ † (後書き)

あ、だめだ、蜂蜜吐きそう……。

激甘です、ゲロ甘です、ヤバ甘です。前話書いた後にこんなもんよく書けたなって感じですよ。

あ、もちろん「キョウアイ」のロキverとかそんな設定はないです。実はこの後死んじゃいますとかそんな未来はないです。この二人には永遠に幸せになつてほしいです。

というかこの話のあとにあの悲劇が起こつたら胸が痛すぎる。トラウマになつてもうロキアリ書けない気がする

「夢」だと思つて「夢」から覚めるのを恐れ、アリスに触れるのを拒むロキ君と、「夢」だと思つて「現実」であることを確かめたいがため、ロキに触れたがるアリス。そんな二人の倒錯劇でした。やっぱりロキアリは両想いでこそ輝くと思うんです。というかこの二人はそれぐらいじゃないと一向に発展しない……。

イオアリアルアアリはやっぱり一方通行でこそ輝きますよね！
こう、なんか、嫌よ嫌よ言いながら絆されちゃうアリスとか（
なにこれ変態）

そしてロキアリと言つたらこれ、お邪魔虫。

今回はイオアリのとき同様帽子屋ファミリーに友情出演してもらいました。

え、というかこのおじいちゃん誰？

途中から原形もとどめずキャラ崩壊しました。一回やってみたかったタイプのギャグです。本編ではご法度中のご法度。

最後の台詞は「アリス＝ロキの世界」「産声＝誕生」「ロキの世

界が産声を上げた日「アリスが生まれた日」ってことで、アリスの誕生日でした。

うん、それがどうしたって話

みんなこの日こそはと思ってアリスをパーティーに誘う（というか引きずり込む）つもりだったんですが、当のアリスはロキと二人きりでいたいという……。

……解説すればするほどこの話でどれだけロキ君が報われてるか思い知らされますね。

この幸せの10分の1でもイオ君に分けてあげたかった……！

あの子には救いも光もないのか……！（自分で病ませといて何を言う）

さて、今回はフレアリかな？ 今回ので特にわかったかと思いますけど、話によってアリスの好かれ度が違います。

ルアアリとイオアリは本編通り、ロキアリはみんなアリスが好き……ってな感じ。完全なる設定無視です。本編と愛形とはこれっばちも関係がないことを再通告しておきます。

ですから！ フレアリが甘々でも、切なくても、病んでても、本編は相変わらず殺伐とした二人なので悪しからず……。はぁ……フレイム様にも幸せな恋が巡りますように……。

もともとレスト同様身長からして恋愛要員じゃなかったんですね、残念ながら……（……）

愛形 † ユウアイ † (前書き)

フレアリで微甘め。アリスを好きだけど愛情表現をいろいろ間違えてしまうフレイムと、フレイムを突き放せなくなったアリス。フレ(無自覚) アリス(庇護欲)。
フレイムがアリスを自室に軟禁してます。何をしてもなく、ただ傍に置いていただけだが……。

前半フレイム様鬼畜です。とことんアリスを虐めたがります。てか虐めてます。

後半は甘切なめのテイスト。どんなに口が達者で強くても、フレイム様はまだまだ子供なのです。

愛形
† ユウアイ
†

「退屈なんだよ」

キョトンという擬音がつきそうな顔をされた。アホ面。そんなふうに毒づいてやってもよかったが、この顔も嫌いではないので黙っておく。

アリスはお世辞にも頭が良いとは言えない。もとの世界ではどうだったか知らないが、僕の言葉が一発で理解できないなんて頭がいいはずがない。

僕はかけていたメガネをゆっくり外して、裸眼で少女を見つめた。レンズを隔てない小顔は、多少整っている程度の平凡顔。こんな相手にするはずかない、と当たり前のように思っていたのだが……。

「もっと可愛い顔をしたらどうだい？ アホ丸出しだよ」

人の趣味ってわからない。まさかこんな小物を気にかけてしまうなんて。僕はあの馬鹿なストーカーウサギとは違うのに。

しかも今のところ、非常に腹立たしいことだが、僕から彼女への一方通行だ。権力にも言わせてこの執務室に縛り付けている。

「……突然退屈とか言われて驚かない人間がいますか」

「僕の妃である君がいちいちそんなことに驚いてどうするんだい」

「妃でも人間です」

「そう？ 僕には人のお菓子を貪るハムスターにしか見えないけど」

からかいを込めて指摘すれば、備え付けのお菓子と口元の間を往復していた手の動きが止まった。

しばらく逡巡したのち、結局手はパタリと膝の上に落ちた。クツキーやらチヨコやらケーキやらを詰め込んだ頬袋が不満げにもごもご動く。

お菓子詰めのアリス、か。食べたらきつと甘い。

「食べられたくないなら外へ出る許可を下さい。此処は食べる以外ほんとに何もやることないんです」

そんなこと言いながら、美味しくて止まらないだけのクセに。当然だ、プロの料理人を脅して作らせた、最高作なんだから。

僕はお菓子を前に我慢しているハムスターを見て、意地の悪い笑みを浮かべた。

「食べないのかい？」

「うっ……け、結構です。これ以上は太りますから」

「太ればいいよ。ぶくぶくに肥えて、醜くなればいい。そこらへんのハムスターみたいに」

「女の子に向かってなんつーことを……」

「だって君が醜くなれば、君を好きになる奴がいなくなるだろう？」

僕は椅子を蹴るようにして立ち上がると、彼女の座るソファアへと近付いた。

植え付いた恐怖からか、びくりと僅かに彼女の身体が震える。これでもまだだいたいぶマシになったものだ。最初のころなんて、真っ青になっていたのだから。

そんなに怯えなくても痛いことなんてしないのに。内心溜め息をつきながら、それでもサディステイックな笑みを崩さなかった。

机を隔てて、真向かいに座る。添え物のように置かれた僕用のフオークを右手でつまみ上げて軽く振った。

「そうすれば君は僕のものになる」

「……太った状態ですよ？」

「関係ないね。大切に閉じ込めて飼って殺してあげる」

「殺すの方に比重を置いてませんか？」

「……君は一体僕を何だと思ってるの」

「キングオブサディスト」

「僕は女王だ」

さり気なくツツコミを入れながら、僕は再び違う意味で溜め息を吐いた。

怯えなくなつたのはいいが、この頃随分反抗的になつたじゃないか。ペットに噛みつかれっぱなしというのは気にくわない。

手元に置かれていたショートケーキの苺をフォークの先で引つかけると、彼女の口元まで運んだ。

今まで極力動かさないうよう努力していただろう彼女の頬が、はじめて引きつった。戸惑いと恐怖、猜疑が混じつた表情を射抜くように見ていた僕は、小さく口角をあげる。

「食べないの？」

「ですから、太るの嫌なんですって」

「それは僕への遠回しな拒絶と受け取るべきかな」

「滅相もない。至極純粋な乙女心です」

「乙女つていうのは苺が好きなものだよ」

「偏見です。私はみかんが好きです」

「まったく、うるさいネズミだね。いいから食べな」

半ば無理を強いるようにケーキの乗ったフォークで唇のドアをノックする。固いはずの銀食器ごしにも、彼女の唇の柔らかさがわかる。

眉を顰めて渋っていた彼女だが、僕が引かないと分かると早々に

諦めを見せた。

小さく開かれた唇の間を、零さないようにしてフォークを潜らせた。これが結構難しい。

「ちよつと、もっと口開けなよ。喉の奥刺すよ」

「……」

「ほら、あーん」

「あ、あーん……」

漸く広がった入り口に、僕は悠々とケーキを運んだ。即座に唇が門を閉ざして、それ以上の侵入を防ぐ。

馬鹿なハムスター。本当に喉をフォークで突かれると思って怯えてるの？ そんなのただの脅しに決まってるのに。

僕はそつと肩を竦めると、大人しくフォークを抜いた。若干生クリームが残るそれを、もう一度ケーキに刺す。

「どう、美味しい？」

「ん……よ、よく分かりません……」

返ってきた望まぬ答えに、今までの嗜虐的愉悦はどこへか、僕はたまらなく不快を覚えた。

よく分からないってなんだ。それに、その顔。なんで僕から目を逸らすんだい？

嗚呼、気に食わない。ム力つく。君は「美味しいです」とか言ってそのバカ面で笑ってればいいのに。

「分かんないってなに。君の舌は飾り物？」

空いていた左手を伸ばして、逃げ腰のアリスの頭を掴む。ちよつと力を込めれば、顔をしかめて抗議をしようと口を開けた。

僕はそのチャンス逃すことなく、頭を掴んでいた左手を彼女の口に突っ込んだ。

「あぐつ?!」

何をされたのか分からず混乱の色を濃くするアリスに構うことなく、奥に縮こまった舌を親指と人差し指で器用につまみ出した。

反射的に抵抗して逃げを打とうとする舌に爪を立ててやればアリスが小さく呻いた。自他共に認めるサディストは鬱蒼と笑う。

アリスの舌は今し方ケーキを食べていたせいか、生クリームの名残がべつたりと付着していた。おかげでぬるぬると滑ってかなり力を込めないとすぐに逃げられてしまう。

口を大きく開かされて赤い舌を強制的に外気に触れさせられて。可愛いや美しいとはほど遠い顔の癖に、僕の口内は興奮だからに渴いていた。

ああ、どうしてこの女はこんなにも僕の嗜虐心を操るのだろう！

「飾り物なら要らないよね？ 僕に頂戴よ」

そんな冗談を呟きながら歪んだ笑みを浮かべれば、真に受けたのかびくりと震える肢体。

こんなんじや虐め足りない。もっともっと、身動きも出来なくなるほどの支配を。

僕は乾いた唇をペロリと舐め、思い出したようにフォークをケーキから抜き出した。

生クリームが付着した白と銀の先端を、アリスの舌の上にのせる。痛みを伴わないように、だけれどもしっかりと意図が伝わるように。

「人って、舌噛むと死ぬっていうじゃん？ あれね、噛み切った舌

が喉に詰まって死ぬんだって」

「んんーっ!」

「ねえ、だからさ。僕がこの舌を切り取ってホルマリン漬けにしても、君は死なないよね？ 喋れなくなるだけだし、良いかな」

恐怖を煽り立てるような冗談に、僕は悦に入りながら喉奥でくつりと笑った。

もちろん、本気ではない。僕自身、抵抗の色を濃く見せながら拙く僕の名前を呼ぶ彼女の声が好きだったし、死なないという情報も不確かだ。シヨック死する可能性もあるみたいだし。

震える彼女をひとしきり満喫したあと、僕はようやく彼女の舌をはなした。途端、身体ごと仰け反らせてアリスは僕から距離をとる。嗚呼、いつもの反応だ。僕はムツとして眉をひそめた。いつものことだ、そう流せばそれだけなのに、どうしてか胸がムカムカする。でも、どうして？ アリスを支配するのはとても楽しい。快樂と言ってもいいかもしれない。彼女が怯えれば怯えるほど、満ち足りていく。

なのに、何か足りない。決定的な何かが。

「ねえ」

「ひっ……………」

「……………なんで怯えんの」

何故で聞かれたら、当てはまるものは数え切れないほどある。それぐらい徹底的に虐めた。

嗚呼、でもムカつく。胸焼けしそうだ。こんな顔ばっか、僕に見せて……………。

……………ん？

突然答えが思い浮かんできて、僕はにんまりと意地悪く笑んだ。今だったらあの変態猫にそっくりな顔だと言われても反論できないだろう。

僕がこういう顔をする時は決まってアリスは怯える。何かよからぬことを考えているのを察知したかのように。

「ねえ、アリス」

「は、はい……？」

「笑ってよ」

「……………はひ？」

どこかのメロドラマに出てきそうな台詞だが、状況が全く違う。

別に血まみれで死にかけている男が言っているのではなく、先ほど彼女をいたぶったフォークを右手にした絶対的支配者である僕が、唇を笑みの形に歪めながら言っているのだ。

アリスの目にはさぞ滑稽に、かつ恐ろしく映っていることだろう。僕は笑みを深めてアリスを観察した。

「あ、あの、無理……です」

「なんで」

「だっていきなり……！」

「いいから笑いな。そのバカ顔ならいつも通りへらへら笑えるでしょ？」

「楽しくなきゃ笑えません！」

……………何言ってるんだ、この女は。

ふつりと苛立ちが沸いた。楽しくなきゃ笑えない？ そんなはずはない。チェシヤ猫なんて年がら年中笑ってるし、僕だつてくだらない小太りの貴族に囲まれて笑うし……………。

笑顔なんて、売り物同然だ。いや、もっと安い……………ただの社交辞

令。そんなものも出来ないなんて……どこまで僕に逆らう気だ。
いや、違う。

「……………」

「あ、あの、フレイル様？」

違う違う違う！ 僕はそんなのがみたいわけじゃない。ただ、アリスが僕に怯えた顔だけ見せるのがムカついた。だから笑えと言ったのに。

なのに、この新たなムカつきはなんだ。どうしてこの僕がこれしきのこと動揺しなきゃならない！

「君は」

「ふれい……………」

「君は僕といて楽しくない？」

言うてから、気付いた。胸を締め付ける感情に気づかないふりをして、眉を少し歪めるだけにとどめる。きつと彼女には怒ったかのように見えただろう。

なにこれ……………これじゃあ、まるで僕が。そこまで考えて、馬鹿らしくなってやめた。頭を横に振って必死に考えを追い払う。

ふざけるな、怖気がする。キャラ崩壊もいいとこだ。この僕が、さびしい、だなんて。

……………マジで鳥肌立ってきた。さびしいってなんだ！ 子供じやあるまいし……………よりもよってこの僕が！

おろおろと戸惑うアリスがやけに癪に障る。イエスカノーの質問なのに、どうしてこのバカはすぐに答えられないのだろう。

嗚呼だけど。一番頭に来るのは、どこかで一方の答えのみを期待している自分。はにかんだ笑みを見たいと思っっている自分。どろどろに甘すぎて、反吐が出る。

「ちっ……もういい。何もしゃべるな」

「あの、フレ임様」

「何もしゃべるなど言っ……」

「フレ임様は、私といて楽しいんですか？」

「はあ？」

同じような問いを返されて、今度は僕が呆れる番だった。

僕が質問したのに、どうして答えないわけ？ そう質問してやれば済んだことなのに、どうしてか今日の僕は咄嗟に答えを探ってしまった。

そもそも、僕が彼女に興味を持ちだしたのはいつからだろう。毎日のように自室に軟禁して、空いた時間に虐めるようになったのは初めは怯えや戸惑いを見せるアリスが、だんだんとあきらめてきて、何でもないことのように僕の隣にいて……少しずつ変化していく彼女の様が、何というのだろう、嫌いではなかった。

僕は彼女の頬に手をやると、耳の裏側を擦るように撫でた。愛玩動物を撫でるように優しい手つきをしようと、すぐに彼女の頬が赤く染まる。

そうだ、一番最初は何でもない事のはずだったんだ。ただ少し興味をひかれたから、からかうのが面白かったから。つまり、彼女は僕の

「遊び道具」

「は？」

「君は僕の最高の遊び道具だからね。楽しくないわけがない」

「……………」

「君は僕の玩具だよ、アリス」

自分自身に言い聞かせるように繰り返せば、今まで少しの変化しか見られなかったアリスの表情が大きく歪んだ。

フオークで脅した時よりもずっと悲しそうに、ずっと痛々しげに体を震わす。黒い瞳から零れ落ちそうになる涙に、僕は呆然とした。もちろん、引かれるとは思っていた。いや……恐がられる、とでもいうのか。いつもの反応だ、もう慣れた。所有欲を丸出しにした僕に、アリスはきつと怯えを見せて震えるだろう。そんなことを考えながら頬を撫でた。

なのに、なんだこれは。予想の範疇を大きく外れた彼女の反応に、僕の方が怯えるように身を引いた。

僕が怯えるだなんてあり得ない。普段は傲慢に言い放つのに、今はそんな余裕さえない。

身を引いたことで、手が彼女から離れていく。あ、と思った時には、彼女はもうすでに僕の手から消えていた。

糸が、解けていく。せつかく結んだ糸が。

「なに泣いてんの」

「っ……な、泣いてません！」

「じゃあこれは何さ」

目じりに溜まった涙を掬おうと再び手を伸ばせば、見事に身体全体を使つて拒絶された。

逃げようと腰をひねらせた彼女の肩をきつく掴み、自分の方を向かせる。無理矢理親指で目元を拭くと、堰を切ったかのように次々と涙があふれていった。

重力に従順なそれは、僕の手から逃げ出すようにすり抜け、生意気なことに床に落ちて霧散した。思い通りに涙を掴めなかったことに軽い苛立ちを覚える。

気付けば、僕は彼女を柔らかいソファに押し倒すようにして無
心で彼女の涙を拭っていた。

掌で、指で、唇で。触れる頬は、湿っぽくも熱い。頬に満遍なく
キスの雨と愛撫を降らせているようだ。そう考えると、どくと胸
が熱く疼いた。

アリスは泣きやまない。嗚咽も上げずにただ静かに、涙だけを落
とす。僕は何も言わずに、抵抗の少なくなった彼女の体を組み敷き
ながら涙を唇で受け止めた。

「君、水分不足で干からびるよ」

あるいは塩分不足で栄養失調になるとか。口の中の味がだいぶし
よっぱくなつたところに、僕はふと呟いた。

アリスの涙は止まったわけではないので、とりあえず指で代行す
る。

アリスの涙は、アリスのもの。アリスのものは僕のものだ（こう
いう考えをアリスいわく、ジャイアニズムと言うらしい。語源は青
狸のアニメから、だそうだ）。僕のをわざわざソファに落と
してやるつもりはない。

「そしたら、責任もってちゃんと看病してください」

アリスの声は、ずいぶん泣いたせいか微かにしゃがれていた。

人を氣遣うなんて馬鹿らしいけれど、アリスに対してだったら別
に悪い気もしない。

僕は涙を拭っていた手でそつと首元を撫でた。水滴が彼女の首に
触れて冷たかったのか、ひくりと小さく鳴る。

「ミイラの看病なんて御免だね」

「私も死ぬなら灰になりたいです」

そんな言葉の応酬。甘सानていらぬ。言葉を繋いでいるだけで、気付くことだつてある。

解れ、解れた糸。きつとたくさんの人と繋がつていた。ルアとも、チエシヤ猫とも、双子とも、帽子屋とも。

そんな糸をぶちぶち千切つて全部僕のものゝ結んだ。だつて僕は女王、君は僕の玩具。命令して何が悪い。強制して何が悪い。

嗚呼、でも。それでも。無理矢理に結んだ糸は、はたして強固だつたのか脆弱だつたのか。

僕は、所有することゝしか自分を満たせない。支配することゝしか安心できない。すべては、女王様と玩具「ごっこ」でしかなかつたのに。

解放しよう、だなんて。きつと昔の僕なら甘ちゃんだと嘲笑つた。未来の僕なら狂つてゐると罵るだろう。

だけど、彼女の涙におびえる今の僕だつたならば　少しは彼女に優しくできるだろうか。

「ほら、泣いてばかりいないで。君は帽子屋のところいきな」

「フレ임様……？」

「これが最後の命令だ。僕の視界から失せろ」

言葉はひどく冷たい。声がどこか生温かいのは、口に含む涙の味のせい。

僕は体勢を立て直すようにしてソファから降りると、アリスに背を向けて窓の外を見た。

ああ、曇天か。笑いもせず泣きもせず、宙ぶらりんな僕のように。暗く気鬱な雲の海を眺めては、きつと小鳥も悲しげに鳴いてゐた。

逃げて、逃げて、逃げて。雲が気まぐれに雷を落としてしまわぬうちに。流れて流れて、必死に飛び回る君の上を付け回す前に。

どうか、僕の視界から、意識から、消えて。追えないと思うところまで。少しでも手が届くところであれば、また子供のように欲しがってしまう。

ああ、アリス。僕は君に嘘を吐いたままだったな。

「退屈なんかじゃ、なかったよ」

アリスが消えたであろう部屋で、僕は小さく呟く。ポツリと、呟きに合わせるように水滴が窓に当たった。

なんなの、この雨。未練がましく、アリスを留めるようにして降ってきて……馬鹿みたい。

ただ、構ってほしくて。退屈、憂鬱、暇だとぼやいてはアリスに遊びをねだった。君という時間はとても、とても。

「とても楽しかった」

「私も、です」

背中に感じた温もりに、心臓が一瞬止まりかけた。首筋に濡れた柔らかい感触を感じる。散々触ったせいかわ、それが彼女の頬だとすくに理解した。

こんなに彼女は小さかっただろうか。緩やかに活動を再開させた心臓の手前、そんなことを思った。それとも僕が、多少は大きくなつたのかな。

アリスを捕まえることはできない。追うことも、束縛することも。だって彼女は今、僕を後ろから抱きしめているのだから。

「……どうしてまだここにいるの」

「居ちや悪いですか」

「僕は出て行って言ったんだけど」

「視界の外にはいます。出てけとは言ってません」

……何こいつ生意気。

僕はむっとして彼女の腕を振りほどこうとしたけれど、かなり必死に縋っているのかなか外れない。それどころか、より一層しがみつかれた。

……こんなことにまで嬉しいとか思っちゃってる自分、死んじまえ。

「君、どM？ 散々虐めたのに、まだそばにいたいとかチエシヤ猫並みの変態じゃないの」

「決して異常な性癖を持っているわけでもありませんし、変態紫と同列なのは甚だ不本意です」

「じゃあなんで」

「そばにいるの、ですか」

「っ……」

言葉を取引きされて、僕は言葉に詰まる。なんだか自分が劣勢にいるようでむかついた。むかつくついでに、心臓がやけにうるさかった。

こんなに近くに彼女がいたことなど、今までにあっただろうか。

記憶を掘り返してみたけれど、思い返すのはアリスを虐める僕の姿だけで。

ほんと、なんで今僕に抱きついてるのだろう。不思議でたまらない。

「雨が」

そう言われて僕は窓の外を見た。相変わらずの曇天。降り出した雨は窓に幾滴もの水滴を残していた。

ああ、そうか。帽子屋は森の中。曇天の下じゃあ森は暗いだろうし、雨の中じゃあ濡れて寒いだろう。だから行くのを躊躇った、のか。

ゆっくりと彼女が片腕を解く。伸ばされた指先は、しかし僕の頬へと触れた。

「雨が、降っていたから」

だから、もう少しだけここに居させてください。

馬鹿な子。ここに居たら、もう逃げ出せないことも分かっているくせに。

振り返った僕の頬は、濡れていた。

優しい微笑みを見せていた君を、こんどは僕が抱きしめ返す。

ああ、本当に僕らしくない。

遊愛。結愛。優愛。

『小指に結びなおした糸が、赤色であってほしいだなんて』

愛形 † ユウアイ † (後書き)

頭が臭い……orz

断水・断ガス生活5日目です。これを執筆しているころはもう7月ですが、今ちょうどホワイトデーを過ぎたあたりです。

家の倒壊はしなかったですが……町がだいぶ壊れてしまいました
(泣)

そんな私情は銀河系の彼方までぶっ飛ばしまして。

「楽しみです」の声が結構多かったフレアリです！ 鬼畜って書いてて楽しいなあ……

「モウアイ」もそうでしたが、「ユウアイ」は話をなかなか思いつけませんでした。「キョウアイ」は嬉々として書いてちゃったんだけどね！ ストーリーも何もかも綺麗に思い浮かんだんだけどね！ 漢字を上げるところから始まり、候補は「誘・憂・結・友・遊・優」でした。

当初は前半3つを使って「退屈だから、君からキスしてよ（なんでやねん）」的な誘い攻め（？）にしようかと思っただんですが……

うん、見事に計画が狂った

名残として前半フレイルム様が積極的に虐めてます。前半後半で別人格なのはこの計画変更が原因です。

フレイルム様いじめっ子。超サディストな構ってさん。好きな子は虐めたくなるタイプだと思います。しかも無自覚だから夕チが悪いですよ。

書いてから気付いた。前半いらねえ！ 漢字が関連してんのって

全部後半だけですよね……ハムスターがどうのこうのって完全にいない会話でしたorz 鬼畜が好きな人用の文章です

幼少時に愛をもらえなかったフレイルムは愛を知らず、故に自分の中の恋心に気づかない子です。「嫌いの反対」＝「嫌いじゃない」的な。

ツンデレじゃないです、決して。フレイルム様までツンデレだったらアリ幕のツンデレ率が異常なことになりますからね！

なんか『愛形』シリーズのアリスって話によって人が変わってる気がする（だめだろそれ）

今回のアリスは淡々と言葉を返すインテリタイプでした。うん、気付いたけどアリスの表情描写がない。駄目だこりゃ（汗）

アリスはフレイルムよりも1つ年上ですので、いつもよりも少し冷静です。最初は怯えていた彼女だけれど、暴力を振るわれないと気付いてからは少しずつフレイルムに情が移ってきてます。

恋愛感情ではないにしても母性本能の強い彼女は泣いてるフレイルムを放っておけなかったんですね。基本的に年下にはめっちゃ甘い子です。これがルア君だったらもれなく放置プレイだったと思う。

今回比喩は少なかったんですが……分かりにくいところだけ。

ケーキの味がわかんなかったのはきつと「あーん」なんてやられて恥ずかしかったからです、きつと。

舌噛んで死ぬ話をはるか昔に聞いた話です。信憑性は全くありません、良い子も悪い子も真似しないようにね！

フレイルムはきつと怯えるアリスの顔だけを支配しているのが嫌だったのでしょうか。好きな子の表情は全部僕が支配したい！的な。

最後の方の比喩は、雲 フレイルム、小鳥 アリスです。

アリスが「雨が降っていたので」といいましたが、これは空の方ではなくフレイルムのことを指します。「フレイルムが泣いている」「雲が雨を降らしている」的な。

あとがきで説明しなければわからない小説ってorz
来月はデイアリで「センアイ」です。なんも考えていない……。
【追記：来月はレテアリのギアイに変更されました】

愛形 † ギアイ 始曲 † (前書き)

レテアリで切ないというか酷い。酷い男×酷い女的な、とにかく酷い。レテ レイズ前提。連作で、3つほど続く予定。ハッピーエンド目指すならそれ以上。

キャラ崩壊万歳！ レーテがもんのすごい性質の悪いド鬼畜に変化しております。アリスもどことなく酷い人。

今のところバッドエンド……というか悲恋エンド予定。アリスを幸せにしてやる余力がないのだと思う。

【この後悲恋悲恋ほざいてますが途中で路線変更してハッピーエンドに。アリスの幸せを願う方も気兼ねなくお進みください】

ちょっとあだるていく(?)な二人。まじかよってところまで進んできます。

大事なので再度言います。レーテ酷い人！ 道徳心の欠片もありません！ アリスを始終いじめています、フレイム様とは別の意味で。

愛形
十 ギアイ 始曲
十

「付き合いましたよ」

一瞬、言葉が出なかったのを覚えている。彼女は、淡々とそんなことを言うような人には見えなかったから。

「これは取引よ」

フェミニスト、とはよく言われるが特定の女性を愛したことはかつて一度きりしかない。

だからってもちろん男色の気はなく（紫色の変態に絡まれることはたまにあるが）、彼女が亡くなってからは一人で生涯を終えるのだろうか、とぼんやり考えていた。

寂しくないわけではない。ただ、亡くなったあの人に操は立てておきたかった。

たとえ、自分が愛されていなかったとしても。自分は紛れもなく、彼女を愛していたのだから。

「なるほど。」

で？ それはどういった取引ですか？」

だからこそ、目の前の少女がその言葉を発した時には体温が急に下がるような気がした。

先ほどまで和やかに進んでいた二人きりのお茶会に、冷たい空気が流れた。この頃頻繁に来訪するお茶飲み友達に、どろりとした感情を抱く。

ああ、これは多分、殺意とか憎しみ、不快感といったものなんだろうな。頭の隅でそんなことを考えながら、僕は商談用の笑みを張り付けた。

「そうね……こういつちゃ悪いけど、虫除けと云ったところかしら。貴方は私を好きになったりはしないでしょう？」

滑稽おかしなことを言う女ひとだ。今さっき「付き合いますよう」といった舌の根も乾かぬうちに、こんどは「好きになったりはしない」と来た。

自分の口元が笑みの形に歪むのがわかり、それを隠すようにして熱い紅茶を飲んだ。とても歪みきった笑い。珍しく告白されても楽しいと思っただのは、それが「取引」だと付け足されたためか。

僕の視線が促すままに、少女はひどく淡泊な調子で続ける。それが一層この場の空気を冷たくさせた。

「私はいずれもこの世界に帰らなきゃいけない人間。なのに、みんなして私のこと追っかけてまわして……正直、」

「迷惑している、ですか？」

ウサギ耳のストーカーと、黒と紫両方の人格を持つ猫耳青年を思い浮かべた。

確かに彼らの愛は、友人である自分から見ても粘着質なものだ。元の世界に帰してやるうだなんて思わないだろう。

彼女は一瞬黙り込んで、紅茶に視線を落とした。今日の紅茶は口―ズヒツプ。中央に添え物のバラの花びらが浮かんでいる。

「……執着されたくないの」

やっと零した言葉に、僕は友人たちに憐れみを感じずにはいられなかった。

彼らの求愛行動は確かに目に余る。だが、それでも彼らなりに彼女のことを「愛している」のだ。

それを彼女ときたら、邪魔なもののようにあしらうのか。いくらお茶飲み友達とはいえ、そんな勝手気ままな彼女に小さな苛立ちを覚える。

「それで？ 貴女の望みは何ですか？」

「……聞いてくれるの？」

「勿論。“アリス”のご命令であれば」

そんな皮肉混じりの言葉を返してやれば、彼女の顔がわずかに歪んだ。

顔を歪めたいのはこちらの方だ。僕はさんざんイオの恋路を応援してきたというのに、いきなりその相手から「付き合って」だと？ 誤算にもほどがある。

ああ、本当に一体何が悪かったのだらう。城に居候している彼女と帽子屋邸に居座っているイオ。二人をくつつけるために頻繁にお茶会を催したのが拙かったのか？ それとも、いつものフェミニストな性格が出てしまったのか？

「……安心して。私も別に、レーテが好きなのじゃないから」

僕の思考をなんとなく読み取ったのか、アリスはそっけなく言い放った。未だに瞳は逸らされたままだ。

傾けたティーカップ越しに、彼女を観察する。別に嫌いなわけではない。“アリス”を嫌いになれるはずがないし、そもそも自分は女性には優しい部類だ。

だけど。自分には、“あのひと”がいる。もうとつくの昔に逝ってしまっただが、彼女への恋情はいまだに途絶えることを知らない。

「ただ、本当にカモフラージュが欲しいの。このままじゃ、私……」
「自分を求める彼らに同情して帰れなくなります、か？」

「……そうやって言葉尻を取るの、やめてくれる？ 好きじゃないわ」

とがった口調に流石に気を悪くしたのか、彼女はわずかに眉を歪めて言った。

こういう凜としたところは彼女の魅力だと思う。惹かれるかどうかは人によってだが。自分は全く別タイプの女性が好きだ。

僕は一度首を振ると、取り繕うような笑みを浮かべた。笑うのは得意だ。どんな場面でも柔らかい笑みを浮かべられる自信がある。嘘くさいと言われてしまえばそれまでなのだが。

「すみません。しかし、なぜ僕なのですか？ 他の男を掃^{はら}うとして、別に僕でなくともいいのでは？」

「……貴方は、私のことを好きじゃないから
「酷いことを言いますね」

やんわりといなしながらも、否定はしない。こういうところが大人の狡さだな、と思う。

彼女を好きか嫌いかと聞かれたら、もちろん好きの方にベクトル

は傾くだろう。しかしそれは、決して恋愛的なものを孕まない。
だからこそ、彼女は都合がいいのだと嗤う。

「私は貴方という恋人を隠れ蓑にして、帰る方法を探す。貴方は私を利用すればいい。利害は一致しているはずよ」

ねえ、取引しましょう？　そう言っただけで笑んだ彼女の姿は月に浮かんで妖艶で。ぞくりと背筋が震えるのがわかった。

ああ、これが“アリス”の姿か。今まで平々凡々な少女だなんて思ってきたが、ふとした時に自分を楽しませてくれる。本当にそれは突然で、予想もしないほどに。

無垢で、純粹。清廉な印象を与え、それが余計情欲を誘う。汚して、自分の色に染め上げたい。一体どれほどの男がそう考え蜜に惹かれて行ったことだろう。

ぞくりと、無意識のうちに溜まっていた唾を嚙下する。しかしやはり、そういった対象としては彼女を見れぬことも心の奥底でわかっていた。

誰もが惹かれる“アリス”に自分だけは染まらず、なおかつ彼女を手中に収めることができる。たとえそれが一時の戯れ事にすぎないとしても、その囁きは何と甘美であろう。

断ろうという気は起きなかった。“あのひと”への操立ても、彼女に溺れなければいだろうと軽く流してしまった。

実際、“あのひと”が亡くなってからも何人かの女性と関係は持ったのだ。肉体関係まで行った人も含めて、なんとも冷めた感情であったが。適当に付き合っただけ、適当に抱いて、適当に別れる。後腐れのない、ある意味腐りきった、悪戯事。

今回もそれと同じだ。自分が彼女に恋慕を抱くことはない、決して。彼女は周囲を欺くことに自分を利用し、自分はただの戯れとして彼女を利用する。

取引。先ほど彼女が言った言葉に、今度は愉悦を覚えた。唇を弓なりに歪めて、空のティーカップをかちやりと置いた。

「構いませんよ、アリス」

その瞬間に、生温いお茶飲み仲間としての関係は砕かれた。残るのは、半分の月の下で微笑む恋人たち。両者の微笑みが、探り合うようなものだったことを誰が知ろう。

手を伸ばして、彼女の手を取る。貴婦人によくやるように、人差し指と中指の爪に唇を落とした。

アリスは動揺を見せない。自分はそんな彼女の様子にくつりと喉奥で笑いながら、キスをしたその唇で残酷な台詞を吐いた。

「ただし、2番目の恋人です」

幕を開いたのは、どちらだったのか。

アリスの瞳がわずかにぐらついたのを見届けた僕は、再び彼女の手に口づけをした。

さあ、遊びましょう。僕の2番目。

人生はなんと怠惰なものだろう。

朝起きて、ご飯を食べる。うつらうつらと太陽が昇っていくのを眺めて、空腹を訴えるお腹に従って昼食。微睡むままにベッドに横たわり、3時になったら半ば強制的なお茶会を開く。そのまま冷めていく紅茶を啜って、夜を迎える。

そんな毎日の中で、どうして飽きもせずこんな少女が自分の隣にいるのか。僕は半眼を件の少女に向けた。

彼女の名前はアリス。4週間前から、僕の“二番目の恋人”だ。

「アリス」

「なに？」

「退屈ですね」

「そうね」

「散歩でもしたらどうですか」

「此処の森は複雑なんでしょう？ 迷って帰ってこれなかったら困るわ」

「マルスとレストを連れていけばいいでしょう」

「余計迷うでしょ」

「……確かに」

今日は珍しくマルスとレストが帰ってきている。遠征（当初の目的はただの買い出しだったのだが……）帰りということもあり、疲れ切った二人は倒れるように寝ているころだろう。起こすのも可哀想だ。

溜息を吐くと、口元に運ぼうとしていた紅茶の水面が小さく揺れた。躊躇いなく口に含み、絶妙な味に頬をゆるめた。

「ふう……アリスの淹れるお茶は美味しいですね。ご家庭でもやっていたらしたんですか？」

「まさか。母さんは紅茶を飲まない人だったし……フレイム様のところで散々淹れさせられたのよ」

そういうと、アリスは小さく笑った。ずいぶんと久々に見せる笑顔だと思う。それがあの唯我独尊女装男の話題で、というのが些か気に食わないが。

……気に食わない？ 馬鹿な。浅ましい所有欲でも沸いたつもりか。

緩く頭を振って考えを弾き出すと、皮肉げな笑いを見せた。

「それはそれは。女王とはずいぶんと仲がよろしいようで」

「そう、ね。なんだかんだ言って暴力も振るってこないし……あ、

「ただどフレイム様だったら、『一日僕のそばにいなかったら殺す』とか『一時間でも視界の外にいたら城中総出で探して監禁する』とか脅してくるのよ！ いったも思うけど、過激な人よねえ……」

それはもしかしくなくとも、アリスへの恋愛感情ゆえだろう。しかし当のアリスは鈍ちんなのか恋愛対象としてみてないのか、ひどく重いため息をついている。

彼女は基本的に自分へ向けられる恋愛のベクトルを把握していない。かろうじてルア、ロキぐらいだろう。まさかフレイムやイオに好かれているとは毛ほども自覚していないらしい。

……こんなで本当によく告白（擬似的なものではあるが）なんてできたな。少し感心してしまう。

「しかし本当に美味しいです。甘味馬鹿の女王もなかなかのご趣味です」

ゆらり。水面が振動に揺れる。サディスティック嗜虐的な愉悦に歪む僕の心そのままに。

かちり。時計がまた一つ刻む。残酷な僕の言葉を彼女の耳から遮るように。

「レイズが淹れてくれた紅茶の味によく似てますね」

だがそれは、赤く彩られた虚実。うつつ今は亡きレイズには紅茶を入れた経験がなく、何を入れてもひどく苦かったのを覚えている。

だけど、それでも僕は笑顔で美味しいですと囁いた。舌に残る苦味と、甘く疼く胸。はにかむ彼女の顔を忘れられるわけがない。

ならば何故、なにゆえ嘯いたのか。穏やかな微笑みを張り付けて、彼女を

観察した。

瞳孔がほんの少し開かれる。カップを握る指が小さく震える。それでも瞼を閉じて平静を保とうとする彼女がたまらなく可愛らしかった。

ああ、自覚はしていなかったが自分は相当なSらしい。傷つく彼女を見て喜悦に浸るだなんて。

「だから美味しく思えてしまうのでしょうかねえ……」
「っ……レイズさんって、どんな人……？」

おや。いつもと違う反応を返されて一瞬たじろいだ。いつもの彼女ならば、ここでいったん深く息を吐いて話題の転換を試みるのだ。どんな話題に転回しても、愛するレイズの話に帰結させるのを毎度楽しむわけだが……。

たじろいだ。その事実が、自分を一気に劣勢に追い込んでいるような気がした。舌を軽く噛み、そんなはずはないと思いつつ。

アリスからレイズのことを聞いてくるだなんて珍しい。だけれども、レイズの話題だなんて好都合じゃないか。レイズの長所を連ねていけばいい。アリスを劣等感に追い詰めるように、つらつらと。

「レイズは」

この時、一瞬詰まってしまったのは、何故。アリスの顔が哀しみに歪んで見えたのは、何故。

僕は半ば意地のようになり、言葉を続けた。ずっとずっと思い続けてきたレイズの姿を脳裏に描く。忘れるはずがない。けれども今はどうしてか、いつもの温もりを感じない。

それどころか、胸を占めるのは針を刺すような痛みだけ。それを隠すようにして、僕は頭の中のレイズをより鮮明に映し出した。

「素晴らしい女性でしたよ。教養もあって、家事も得意で。本当に、一目惚れだったんです。優しくって、笑顔が綺麗で、肌がとても白いです。髪は長くて、美しい漆黒で、サラサラ指の間をすり抜けて。ああ、本を読むときは眼鏡をかけてました。赤縁のお洒落なもので、いつもは美しいという印象なんです。それをかけると年下のように可愛く見えて……。大好き、愛してるんです」

そうだ。嘘じゃない、決して。彼女を思い出すと身体が疼く。彼女を思い出すと鼓動が速くなる。彼女を思い出すと頭が蕩ける。大好きだ。今でもまだ、忘れられない。愛している。

きつとこれは、この痛みは、レイズがいるというのにほかの女に手を出した罰なんだ。そう思わずにはいられなかった。

それこそ飢えた肉食動物のように“ほかの女”にも手を出したけれど、アリスだけにしか反応しなかったという事実をまるきり無視して。

一人の夜は、寂しかった。悲しかった。仮初でもいいから誰かに傍にいてほしかった。

言い寄ってくる女の群れの中で、黒髪の美人を見つけは恋人にした。最初の夜はいい。しかし一週間も経つと、吐き気を覚えて手酷く捨てる。そんなことを繰り返していた、レイズイ怠惰な毎日。

求めているのはレイズ一人。満たしてくれるのはレイズ一人。

アリスは、“日持ち”がよかったというだけ。たまたま長く過ごせただけ。だけどこの痛みは　そろそろ“期限切れ”なのかもしれない。

「アリス」

突然レイズの話を持ち上げた僕に驚いたのだろう、アリスの目が軽く見開かれた。自分でも驚きだ。レイズの話ネタに、とことん

アリスを追い詰めてやろうと思っていたのに。

もうこれ以上は無理だった。これ以上の付き合いは禁物だと、長年商売で培ってきた直感が告げる。手遅れになる前に、さっさと突き放してしまえ、と。

「……アリス」

「な、何」

別れの言葉は簡単。

飽きました。別れます。

相手の返事に耳を傾けず一方的に別れを突き付けるその言葉に、抵抗する女は勿論いた。

その後はひたすら無視を決め込んで、大抵はそこで引き下がる。

それ以上にしつこい女には見かねたマルスとレストから直接手を下された。

さあ、アリスは一体どんな反応を返すのだろうか？ 久方ぶりの興

奮を覚え、僕は唇を三日月型に歪めた。

愛らしい瞳を限界まで見開いて懇願するのだろうか？ 他の女同様に、僕にすがりついて「捨てないで」と？ その腕すら振り払ってしまえばどんな顔をしてくれる？

ああ、本当に今回の僕はどこかおかしい。いままさに切り捨てようとしている女に興味を抱き続けるなんて。

逸る鼓動を抑えつけながら、僕はなるべく優雅に微笑んだ。首を傾げた拍子に耳に掛かっていた髪が一房、崩れ落ちる。

「そろそろ貴女への興味も失せました。僕としてはもう終わりにしたいんです。ですから 別れましょう」

「っ！」

ほら、思った通り。こぼれ落ちそうなほど、黒い瞳が見開かれている。僕は愉悦にさらに笑みを歪めながらそれを紅茶のカップで隠した。

それで、その次は？ アリスは直情型だから、激昂するかもしれない。しきりに怒鳴りつけた後で、弱りきった小動物のように体を丸めるだろうか？

さあ、次はどんな反応で僕を楽しませてくれるんです？

「わかったわ」

どくん。

心臓が一つ高く鳴って、それきり微弱な鼓動しか刻まなくなってしまうた。

僕は呆然とアリスの顔を眺めた。先程の一瞬の動揺はなんだったのか、まるで何もなかったかのように紅茶を飲んでいた。

どうして。思い通りにいかなかった不快感よりもそんな困惑が先に立った。どうして、彼女はこんなにも平然としている。

だって、昔の恋人の話をしただけであんなにも苦しそうに顔を歪めていた彼女が。別れるなんて言われて平然としているはずが……。

「だって、取引だったんでしょ？」

胸に渦巻く疑問に答えるように、穏やかな声が響いた。

溢れ出しそうになっていた感情がその一言によって、潮が引いていくように体の奥深くまで戻っていく。はてさて、それが何の感情だったか。それすらも気づかせないほどに、あっという間に。

まだ残る動揺を鎮めるように僕は一度瞼を閉じた。アリスを傷つけるつもりだったのに、僕のほうが揺らいでしまうなんて……。瞼の裏に移るのは、濃い闇。だから僕には気付く術などなかった。視線のその先で、アリスがどんな顔をして唇に歯を立てているかなんて。

「取引、……そうでしたね」

落ち着いた頃合いにため息とともに吐き出す。瞼を開けると、相も変わらず凜とした顔のアリスが瞳に映った。

“取引”を持ちかけてきたころと寸分違わない、気丈な表情。何も変わっていない。何も変えられていない。その事実、僕は無性に苛立つ。

苛立ちのままに唇を歪めれば、それをどうとったのかアリスの眉が訝しげに寄った。

「そうよ、忘れたの？　そもそも私は、あなたをカモフラージュとして利用したいだけなの」

「忘れてなどいませんよ」

そう、忘れてなんか。

これは真実の愛なんてものからは程遠い、偽りの愛。互いに互いを互いの了承を持って利用しているだけに過ぎない。

アリスは僕を利用することでほかの男の視線を欺き、僕はアリスを利用することで夜の淋しさを欺く。愛、と呼ぶのもおこがましい。確かに自分は了承したはずだ。今でも納得している。

ただ、どうしてか。平然としている彼女が無性に恨めしい。

「あなた、女の子を振った後はずいぶん手酷く扱うんですね。」

無視したり、追い出したり」

「飽きてしまったんだから仕方ないでしょう？ それ以前には散々甘やかしてあげたからいいんです。欲しいものも買ってあげたし、デートにも付き合ってたし……」

自分の台詞に、はて、と首をかしげる。

そういえば自分は、アリスに優しくしたことがあっただろうか。考えてみれば、買い物はおろかこのお茶会場から離れたことがない気がする。

自分が迎えに行くわけでもなく、昼頃に訪れるアリスを自室で出迎えアリスが淹れた紅茶を飲む。目立った会話もなしに昼、夕を迎え、夜に突入。体を重ねた後もアリスは決まった時間に屋敷を離れていくようで、朝目覚めれば僕一人が白いシーツにうずくまっている。

幸福とはとても呼べない、何とも無欲で淡々とした擬似恋愛だった。

体の繋がりはあるといつても、手を繋ぐこともキスもしたことがない。ただ温もりが欲しいだけの自分にそんなものはいらなかったし、アリスも強請らないから必要ないのだと思っていたが……。

こう考えてみると、あまりに不自然だ。アリスは無欲すぎる。僕は素気なさすぎる。これだったら、“取引”の前のほうが深い関係であったというもの。

「それじゃあ隠れ蓑としては何の意味もないのよ。だから別れましょう」

「……………」

最後のほうの台詞はほとんど頭の中に入ってこなかった。聞きようによっては侮辱の言葉なのだろうが、今はどうでもいい。

別れましょう。再度念押しをするようにアリスが言って初めて、言葉が頭にしみ込んできた。だけど心はずんがらどつ。最初から彼女へ向けた心なんてないのだから、それも理か。わかりました。それだけを言えばよかった。なのに。

「明後日」

「え？」

ああ、僕は何を言っているんだ。

目の前で大きな瞳を丸くしているアリスよりも、僕自身のほうが内心では驚いていた。だけれども社交スマイル。これだけは板についているのか、無意識に小首を傾げてほほ笑む。

「明後日に女王主催のダンスパーティーがあります。そこで最後にしましょう」

希望制であるそれに、本当は出席するつもりなどさらさらなかったのだが。何故かついてしまった言葉に呆れながらも、最後だと思つて肩をすくめた。

アリスはしばらくぽかんとアホ面を披露していたが、驚きが過ぎると今度は心底困つたような顔になる。

ああ、なんでその顔を「別れる」と言った時にしないんだ、この女は。

「ダメよ」

まさか否定の言葉が返ってくるとは思わなかった僕は、今度こそ笑顔の仮面を引き剥がした。

唇をきゅっと寄せて冷め切った瞳でアリスを睨み付ける。

胃がむかむかと痙攣をあげて、いましがた入れたものを押し出そ

うとしていた。ああ、なんて腹立たしい。思い通りにいかないことが、こころも不愉快なものなのか。

「どうしてですか」

「だって……ダンスって、私天才的に下手くそなの。最後の思い出にあなたの足を踏むなんて、そんなのいくらなんでも悪いし……」

アホみたいな答えが返ってきて、途端に頬を緩める。安堵に覆いかぶさるようにして襲ってきた感情は、笑いであった。

だって、真面目な顔で「ほんつとにへたっぴなのよ?!」と念押しをしているのだ。なんだ、この馬鹿な娘。可愛すぎる。

抑えきれない笑みを漏らしながら、僕は身を乗り出してアリスの顔を覗き込んだ。面白い娘。今はじめて、“アリス”ではなく彼女自身に興味を抱いた気がする。なんだか今更の話だ。

「安心してください。たとえ貴方が破壊的なダンスの才能をお持ちでも、それを上回るリードができるのが僕ですから」

「で、でも、一曲のうちイオの足は17回、ルアの足は13回踏んだのよ?」

おやおや、それはすごい。二人の涙目が目に浮かぶようです。

「二人にダンスを教えたのは僕なんですよ?」

「へ……?」

「あの子たちもまだまだ未熟ですからねえ……戦闘能力は僕を上回っている、それ以外にかけては負け知らずですから、僕」

「そ、そうなの? 意外とすごいよね、あなた……」

「意外とは失礼ですね。この年で大富豪まで上り詰めている時点で僕がすごい人だと気づきなさい」

「うっ……で、でも……やっぱり、私」

「大丈夫ですよ。ちゃんとリードしますから」

柔らかな微笑めば渋い顔をしていたアリスも気圧されるように頷くしかなかった。

アリスの了承を得た僕は妙に軽い気分になった紅茶を片付け始める。

なぜこうも自分が躍起になって約束を取り付けたのかは疑問だが、満足はできたからそれで良しとしよう。傍らで片付けの手伝いをしてくれるアリスを見て、ふと初めに自分が言った言葉を思い出す。

『ただし、2番目の恋人です』

1番はもちろん、レイズ。今はない彼女だとしても、これだけは譲れない。アリスであってもこの座には座ることはおろか、触れることすらできない。

だけど。2番目、というのもおかしな話だ。2番目の恋人、というならそれは2番目に好き、ということ。ならばこんなにも傷つきたいと思ったり、泣けばいいと思ったりはしないはずなのに。

扱いも無意識のうちに、今までしてきたこともないような最下級なものになっていった気がする。言葉で彼女を傷つけ、行動でその傷を抉る。最初からそのことばかりに快感を見出し、気遣いというものを忘れていた。

「……………」

プライド、だ。

だって、こんな最低な扱いのまま別れたら、男がすたるじゃないか。それは何となく嫌だ。だからこれは、プライドの延長線上の思考なのだ。

「アリス」

「え？ 何？」

「明日は9時にこちらにいらしてください」

「9時って……早すぎるわ！ ルアが10時になるまでは危ないから外に出ちゃダメって……」

「あの男はあなたの母親か何かですか。それに、今更な話ですね。夜中に僕を見捨てて帰っていくくせに」

「見捨てて……あれはフレ임様が添い寝をしないと寝てやるもんかって言うから！」

「ほう……」

あんのクソ餓鬼。豆腐の角に頭ぶつけて死ね。

「アリスは僕との情事後も他の男と密会していたんですね。売女ですか」

「ばっ、ばい……?! んなわけないでしょ！ フレ임様寝かすつけてからようやく自分一人で寝れるのよ！」

そうか。本当に添い寝をさせてやっているわけではないのか。僕はほっと心の中で安堵のため息をついた。

だって、僕がその温もりを得られないというのに何の繋がりもないあの餓鬼がそれを得られるなんてどう考えたっておかしい。理不尽だ。癪に障る。

「結局4時間睡眠だし……だから私、朝は弱い。これ以上早くは……」

「なら、今宵はあなたを抱きません」

「へ……?」

「今すぐ帰って寝る準備でもしてください。女王の子守はルアに任せればいいでしょう。□うるさい母親には『これ以上関与したら1

週間口きかないからね』と言ってやれば万事解決です」

「は？ あ、あの……」

「9時までにごここに来てください。少しでも遅れたら、その日一日中ねちねちと嫌味を言ってあげますから」

「それ最悪だ！」

「話はそれだけです。それでは、おやすみなさい」

ちょうど4時を過ぎたところにそのセリフを吐き捨てると、僕は残った食器を片手に持って踵を返した。

背後にはまだ呆然アリスが佇んでいるだろうけど、これ以上の話は何もない。僕は再び根城へともった。

後片付けをあらかた使用人に言いつけた僕は、カーテンの閉め切った自室へと足を踏み入れた。

籠った空気の中に、アリスの匂いはない。アリスがここに来るのは僕を呼ぶ時と情事の時だけだからであろうか。夜伽はすれど夜明けはしない彼女は、この部屋に痕跡すらも残さない。

こうしてみたら、本当にアリスとは何もなかったみたいだ。ただのお茶飲み友達で、下らない世間話を楽しげに交わす仲で。体を繋げる快樂は知らない。だけれども、心を繋げる心地良さは知っていた。そんな昔の二人に。

「……馬鹿ですね」

今更こんなことを夢想して、何になるというのか。もうこじれてしまった関係は二度と元には戻らない。あの時安易に“取引”を飲んでしまった自分に、ひどく嫌悪を覚えた。

あと二日だけの“恋人”。振ったのは自分のほうなのに、その期限がひどく残酷なものに思えて仕方なかった。

あと二日経てば、僕とアリスの関係は白になる。それは擬似恋愛

だけでなく、清らかな友情であったものもすべて。まるで、最初から何もなかったかのように。

僕は昨日の行為で少しばかり乱れたベッドシートの上に体を横たえた。そこにはない温もりを求める。

本当に、どうして欲しいときにいないのか。この腕はこれ以上ないほどに冷たく凍えているというのに。温めてくれるとあなたは“取引”したのに。

伸ばされた腕が宙を掻き、何も得ることなく自分の胸へと戻ってきた。聞こえるのは一つの鼓動だけ。さびしい、と思うのに、なぜ。

「……アリスを帰したのは間違いでしたかね」

どうせなら、この腕に閉じ込めて出られないようにしておけばよかった。城にも帰らせないで、ずっとここに繋ぎ止めておけば、自分はこんな淋しさを感じることはなかったのに。明日の計画も順調に進んだだろうに。

僕には珍しい舌打ちをしながら、寒さを紛らわすように布団を頭まで被った。

明日ぐらいは、アリスのことを考えてあげよう。僕は今まで僕のことばかり考えてきたから。せめて明日だけは、アリスを喜ばせてあげよう。

そう、それはプライド。このまま終わってしまったらきっと、自分のプライドが許してはくれないだろうから。

明日ぐらいは。明日だけは。そんな呪文を頭の中で復唱しながら、僕は無理やり意識を眠りの方向へと向ける。

布団の中の擬似的な夜は、苛立たしいほどに閑散としていた。

独りとは、こんなにも淋しいものだったんでしょ……？

擬愛。

『愛してなんかいませんよ。ただ、欲しているだけです』

愛形 † ギアイ 始曲 † (後書き)

うん、とりあえず土下座の姿勢であとがきを書かせていただきます(・・・)

なんだか突発的に悲恋ものが書きたくなった！ ってことでバリバリ悲恋エンドまっしぐらです。

えー、アリスが愛されていない話はそういえば初めて書きましたね。フレイム様もなんだかんだでアリス大好きっ子でしたし。イオは行き過ぎてたし、ロキとルアはラブラブだし。

ちよっとしたシリラスラブにはまっってしまったんだ。許せ、アリス。

レーテは本編でもある通り、レイズ大好きです。最初はその事実を曲げてアリスとラブラブ予定だったんですが……何しろくじ引きで当たったタイトルが“ギアイ”ですから。どす黒いのしか思いつきません。

ということ、レーテは寂しさを埋めるためにアリスと付き合い合う設定に。アリスはこれ以上この世界に執着しないように、という名目で付き合うことを提案してきます。

なんか最初の台詞からして他のとは一風変わった話です。アリスにこのセリフを言わせる日が来るとはorz

レーテさんはきつとダンスがとてもお上手だと妄想。どっかで真逆のこと書いてたらごめんなさい

基本的にレーテはイオとルアの兄弟子的存在です。何事もまず年長の方から教わっている幼少時の二人。きつとレーテにねちねちねちねち嫌味を言われながら必死に練習したんでしょう。

あと何度かこの設定使いましたが、アリスはダンスの才能マイナス方面まっしぐらです。ヒールの踵でルアの足を踏みつけてやると

いいよ！ 泣いて喜ぶから！

フレ임様のダンスはルアが教えてます。フレ임様もきつとこ
ういう教科は苦手としていそう。双子は独学かな？ 庶民っぽくで
たらめだけど外してはいないっていう天才型だと思う。

今回のフレ임様、類を見ないほどに気色悪……ごほっ、ごほっ、
甘えん坊に育っています。添い寝ってなんだ添い寝って。あだると
とまではいかないけれど独占欲は人一倍強い人。

さて、あと3つほど続くとおもいます。キョウアイ同様3つを分割
して、一か月毎に更新していきます。次回は【9月14日】。

愛形 † ギアイ 硝子 † (前書き)

レテアリで切なめ。今回の章からちょっとずつ切なくなっています。相変わらずレテさん酷男。

3つじゃ終わらないので4分割することに。フィーバー！(？)

レテさんの辞書には道德と言う言葉はない！

アリスが幸せじゃないです。ちょっとキャラ崩壊気味？

嘔吐描写あり。もうちょっと喘ぎ声(吐き声？)をつまく表現
したいorz

『愛してます』

『私も……お慕い申し上げておりますわ』

表面だけの愛に歓喜する心。だが、長年商売で育んだ直感言葉の裏に潜む嘘に気づき悲痛な悲鳴をあげている。

純粹の裏は嫣然。愛の裏は淫楽。美貌の裏は欲望。

分かっていたはずなのに、今更何を。彼女がどれだけ汚れた人間だったとしても、自分が彼女から逃れられるはずもないのに。

『ッ……愛してます。あなたを、あなただけを、僕は……』

だからあなたも愛して下さい。そんな言葉を言ってしまったえば最後、嘘の仮面は外れて彼女は僕の腕からすり抜けてしまうのだろう。

柔らかい肢体を強く抱きしめると、少々キツイ香水が鼻をついた。その匂いに、僕は違和感を覚える。“彼女”は香水なんかつけていたのだろうか？

『私だけ？ ご冗談を。あなたは他の女を愛してしまっただじゃない。私だけに捧げる愛ではなくなってしまったじゃない』

レイズの顔が嘲笑に、悲愴に醜く歪む。抱きしめたままの角度でそれをみることが出来なかったが、胸と胸の間に差し込まれた手が拒絶を示していた。

僕が、レイズ以外を？ そんなはずはない。それができたら、こ

んなに胸が痛くなるはずなかった。

『僕にはあなただけです。あなたしかいないから、苦しいんです。あなたじゃなきゃ駄目だから、苦しいんです』

愛しているのに、愛されない。それがどんなに苦しいことか、この人に分かるだろうか。仮初めの関係すらも求めてしまうこの虚しさ。

ふっ、と冷たい息が耳にかかると同時に、腕の中の重みが消えた。絶望を感じる暇もなく僕は周囲を見渡す。

レイズ。恋人の名前が木霊する空間に、闇が浸食していく。ああ、このままでは見失ってしまう。なにを？ またなくしてしまう。だからなにを！

『レーテ』

悲しげにそう呼ぶ声は、先程まで腕の中にいたものより若干高い。女の子らしい可愛い声だと常々思うのに、今はひどく沈んでいる。

あの澁刺とした明るさはどこにいったのだろう。嫌みまじりの冗談は。拗ねたような尖った声音は。

どうして、この人はこんなに悲しげに笑んでいるのだ。僕は闇の中、姿も見えぬ声に問いかける。

『どこにいるんです？ 出てきて下さい！』

『レーテ……』

『どこにいるんです！』

『しゅめん、なさい』

突然の謝罪に僕は焦燥した。最初に聞こえたものより明らかに小さくなっている。しかも、しっかりと距離感をもった弱さだ。

方向だとか何とかを考えている余裕はなかった。地面へと断定できるほど視界は明瞭ではないのだが、を強く蹴って声の方へと駆け出した。

足に絡んでくる闇はひんやりとした感触で、生き物のように足首を這ってくる。その気味の悪ささえ、気にかけていられない。

『もう、苦しいの』

『何を……』

『もう、嫌なのよ!』

『何を言っている!』

焦燥感に声を荒げながら僕は闇に向かって腕を伸ばす。がむしやらに手を彷徨わすものの、掴むは虚無、感じるは冷気のみ。

寂しい? 悲しい? 虚しい?

そんな生ぬるい感情じゃない。敢えて言うのであれば、それは狂気。失ってしまったえば自分は狂い踊り、もの言わぬ廃人になってしまうのだろう。そんな予感が確かにした。

『待つて下さい!』

だから僕は、腕を伸ばす。

闇に足を雁字搦めに拘束されたって。

ぼう。闇の中、どうやっても届かない離れに薄暗い光が2つ、宿った。届くはずがない。分かっているても、痛いほどに腕を力一杯伸ばしてしまっ。

『もう遅いわよ』

光の一つが、酷く冷めた声音で嘲笑った。自分がいくら想っても想い返してはくれなかった、光。

それに出遭って初めて、熱情に限りなく近い愛情を知った。一方的に想うことの狂おしさを知った。

その色は、紅。総てを煌々と照らし引き付けるが、しかし一度触れてしまえばそれを真黒に灰かいすまで尽きない残酷さを秘めている。

『もう、遅いの……』

声にまで涙がまじっている、もう片方の光。自分がいくら愛さなくても傷つけても、悲しげに目を伏せるだけで変わらず笑んでみせた、光。

それに出逢って初めて、同情に限りなく近い憐憫を覚えた。無条件に愛されることの心地よさを知った。

その色は、蒼。総てを溺れさせておきながら、その瞳は自分だけを見、自分だけをその蜜で潤してくれた。

紅に灼かれた自分を、蒼が包み込んで冷やし。

紅の熱を失った自分を、蒼が寄り添って温めた。

光が、2つ。闇が密度をグンと引き上げて僕の腕を呑み込んだ。

『『さようなら』』

待って……

「アリス ツ……………!!」

「うええええっ?! はっ、はいいいい!」

最初に感じたのは、痛み、だった。それも耳元で可愛げのない奇声を上げられたことによる、鼓膜の痛み。

僕は数秒自失したように呆然としていた。寝起きのせいか、はたまた悪夢のせいか、心臓は滑稽なほど不規則に波打っている。

ゆるゆると視線を動かすと、少女が渋い顔をして眉をたらしめているのが見えた。その華奢な手首をどういうわけか、僕が握りしめている。

「あゝ」

出てきた声は酷く掠れていた。僕は口内の唾を出来うる限り集め嚥下し、喉を潤す。

「アリ、ス……どう、したんですか」

言葉も途切れ途切れにしか出せない。びっしりと汗ばみ肌にくっつくシャツが不快で、僕は僅かに眉をひそめた。

アリスは決まり悪げに視線を逸らしながらもごもごと口を動かした。

「だって……い、いきなりベッドから腕がにゅって！ にゅって！」

「……あの」

「何?! 何のホラー?! しかもあなたの腕病的に白いのよ！」

もうちょっと焼けなさいよ、バカアッ！」

「ちよっと」

「この暗い中でベッドに白い腕よ？ そりゃあ悲鳴もあげるわよ！」

むしろ全力で逃げ出さなかったのが不思議なくらいよ！」

「少し落ち着いて下さい」

話の内容が支離滅裂になったところで僕は彼女を宥めようと肩に手を伸ばした。

触れるか触れないかの瞬間、指の先でその体が大きく揺れた。ふむ、どうやら怖かったのは本当らしい。

僕は小動物のような彼女に苦笑を漏らしながら、肩はやめてその頬へと指を伸ばした。末端冷え性の僕にはありがたい体温に触れ、肺の奥から息を吐き出した。

何だろう……いつもだったならなんの情緒も湧かないこの温もりが、今はどうしてかたまらなく愛しく思える。

「怖がらせてしまったことは謝ります。すみませんでした」

「べ、別に……。なんか怖い夢でも見たの？」

怖い、夢。僕はまだじつとりと汗の感触が残る首筋にもう片方の手を置き、静かに頷いた。

そう、夢を見た。しかもいつも冷静沈着を象る自分が動悸を不規則に揺らし、汗をびっしりかく程の悪夢。瞼を閉じて記憶の闇を探った。

だが得てして夢というものは朧なものだ。意識しようとするればするほど手の内からするりと抜け出し遠ざかったしまう。

結果残ったのは背中に貼り付く濡れた感触と漠然とした不安だけだった。

「……すみません、今何時ですか？」

「え？ 8時半ぐらいだと思っけど……」

「そうですね。小姑の目をかいくぐって早くに来れたみたいですね」

冗談めかしてそう微笑むと、アリスの頬に朱が走った。僕は相変わらずの笑顔でその反応を楽しむ。

「し、仕方ないじゃない……っ、レーテったら、私が起こさなきゃ
お昼まで寝てるんだから！」

「……っ、そう、ですね」

まさかここまで早起きしたのが、自分を起こすためだったなんて。
城からこの屋敷まで、かなりの距離がある。彼女の移動手段は徒
歩以外ないから、きつと2時間ぐらい前には起きていたのだろう。
アリスが自分のためだけに頑張ってくれる。胸に湧き上がってき
た感情を、僕はいつものように“優越感”と履き違えてしまった。

「僕は、アリスがいなければ一生起きられはしないのかもしれないかもしれませ
んね」

「っ……」

自然口をついてしまった冗談に、今度はアリスが反応した。

不意に震えた体に驚いた僕は触れていた指を離してしまった。温
もりはいともあっさりと遠のいてしまう。

名残惜しく、無意識に再び伸ばされた腕はアリスの冷たい一声に
よって静止した。

「明日にはこの関係も終わりよ」

ぴしりと凍りついた僕に向けられる笑顔の、なんとなくこちないこ
と。ああでも、今の僕には作り笑いすら浮かべられない。

「だから、お互い依存するのはもうやめにしましょう」

「」

そう、ですね。

やっこのことでそれだけ返すと、僕は口を抑えながら重い体を無

理矢理に立たせた。耳に掛かっていた長い前髪を垂らして、顔の半分を覆う。

見られなくなかった。ひきつりきった笑みを浮かべる口元も、動揺の色の間で揺れる瞳も。

見られなくなかった。アリスには。アリスだけには。

「……汗、かいたので、シャワー浴びてきます。アリスはレストとマルスを起こして一緒に朝食をとっていて下さい」

「う、ん。わかったわ。……レーテは？」

「は？」

「だから、レーテは朝ご飯どうすんの？」

「……あまり食欲がないので、結構です。構わず食べて下さい」

アリスの瞳に心配の色が濃く宿るのを拝む前に、僕は彼女に背中を向けた。

足早に部屋を発ちがむしゃらにシャワールームを目指した。数人の使用人とすれ違い挨拶されるが返す余裕もなかった。

あまり、どころではない。ロングシャツの袖で口元を覆いながら僕は壁に手をついた。隠した口の中で暴れる酸味が警告している。

「つ……おえつ、うつ、……つはあ、あ、……うえ」

寝着を脱ぐことなく駆け込んだバスルームで、胃の中で渦巻いていた異物を解放した。広い浴場に散漫する嘔吐物特有の刺激臭を紛らわすかのようにシャワーのコルクを捻る。

ザッ　　ザアアア……

半拍おいて溢れ出したお湯の雨は、僕の頭から順に穢れを落とすていく。額にベタつく汗も、足下の嘔吐物も。

シャツの中へ生ぬるい液が流れてくるといふのはなんとも言い難い感覚であったが、すっかり濡れた服を今更脱ぐという気も起きなかつた。

ザアアア……

はあ、はあ、はっ、はあ……

けたたましい水音に負けず劣らず煩わしい自分の荒れた呼吸。胃の中身はもはや空っぽだというのに、嘔吐感だけが先を急いで喉を刺激してくる。

僕は機嫌の悪さをありありと宿した黒曜石の瞳を備え付けの鏡へと向けた。

白く曇った鏡に映っていたのは、鏡に片手をつき、もう片方の手は胸をシャツごと握りしめている自分の姿。だらしなく開かれたままの口とは裏腹に、その両眼は気味悪いほどギラギラと光沢を放っていた。

口端から残った胃液が唾液と混じって零れたのを見て、顔をシャワーのヘッドへと向け、真正面からお湯を受ける。

「……………畜生……………」

断罪のごとくお湯に打たれながら吐き出した言葉。

それをもやはり、清浄なお湯は連れ去って洗い流して、何もかもなかつたことにしてしまうのだ。

「レーテ！」

少女は僕の姿を目に入れた瞬間、今まで談笑していたマルスとレストを置いて小走りに駆け寄ってきた。

心配そうに眉を下げ、上目遣いにこちらの顔を伺ってくる。

僕は即座に無表情の上に穏やかな笑みをのせた。今度は上手く笑

えているはずだ。先程のような失態はもうしない。

「大丈夫？ 本当に顔色悪そうだったけど……」

「心配をおかけして申し訳ありません。もう大丈夫ですよ」

「そう……？」

解れた彼女の表情に安堵を覚えた僕は、ふっと視線を純白のテーブルクロスの方へ向けた。

僕、アリス、マルス、レスト。4人分の食器に一級の料理が食べられる時を待っている。てっきり3人はもう既に空にしているかと思っただが、皿上の料理は1つも欠けることなくそこに鎮座していた。

僕の視線を感じたのか、夢と現を彷徨うレストがむくりと顔を上げて言葉少なく説明してくれた。

「アリスが……ますたあ来るまで……ふああ、待ってよお……って

……はあう、ふっ……」

「僕が……？」

「そうだぜマスター！ 体調悪い時はいっぱい食っていっぱい寝ていっぱい運動するのが一番なんだ！」

寝ぼけ眼のレストを背負うマルスが爽やかな笑顔で親指を立てた。朝からよくもまあこんなに元気だなと感心してしまう。

いや、というか前半2つはともかくラストはマズいだろう。下手しなくても悪化する。なんでこのアホの子はこういう間違いを犯してしまうんだろう。

あ、もしかして今まで風邪引いたことがないから分からないのかも。冗談混じりに立てた仮説は、しかし次の瞬間論証される。

「バカは……風邪、引かないもんね……」

「おつよ！ 俺、今まで風邪引いたことないんだぜ！」

すごいだろ？ 自慢げに語るマルスから思わず視線を逸らす。純粹の名を翳したただのバカ、という表現がお似合いだ。

「あの……レーテ」

そこでようやく、今まで黙っていたアリスが会話に加わった。いや、会話から外れた僕に話しかけてきた、というのが正確か。

アリスの眉はまだ僕への心配が絶えないのか、相変わらずハの字形を象っていた。

「大丈夫？ ほんとに食欲ないなら、無理して食べなくても……」

ふむ……お腹が空いていないのは事実だ。だがもう吐き気も収まったことだし、朝はしっかり食べるに越したことはない。

僕は数秒の間唇に指を当てて考えていたが、肯定の結論を出して一層華やかに笑んだ。

「そうですね、頂きます。今日は外出するので朝食は摂った方がいいですからね」

「え……外出？」

不思議そうに尋ねる彼女と同じように首を傾げるマルス達を促して、テーブルの前につく。

軽い挨拶と共に始まる朝食。洋風の料理に一度二度手をつけると、アリスがその話を引き合いに出して朝餉の肴にした。

「そういえば、今日外出するって、どこに？」

「うーん……特に考えているわけではないんですが、南の商店街に

は行こうかと」

「買い物か？ そんなら俺らに任せとけ！」

「君に任せたら3週間帰ってこないでしょう。また遭難するつもりですか」

「というか根本的に目的が違う。別に今どうしても必要なものがあるというわけではない。」

「モーニングティーを一口含み喉を温く潤した後で訂正しようとした。しかしその際にアリスが口を挟み、誤解されたまま会話は続行された。」

「え、じゃあ私が朝早く呼ばれたのってお留守番のため？ 役に立つとは思えないんだけど」

「むくつ……げほ、けほつ、な、何を言ってるんですか。君も一緒に行くに決まってるでしょう」

「……荷物持ち？ それもあんまり役に立てないと思うわ」

「どこの世界に女性に荷物持ちをさせる男がいますか！ 全く、鈍いにも程がありますね」

「ですから。少し苛立ち紛れに続けた言葉に、僕を除いた全員が目を丸くした。」

「デートをしようと言っているんです」

一言で表するなら、沈黙のデートだった。それも、お互い恥ずかしくてもじもじしてしまおうような、初々しいものではない。

やけにゆっくりと歩を進めながら、後ろに付き従う気配に注意を向ける。距離は相変わらず一定、１メートル半を保っていた。

「アリス」

「な、何」

「どこ、行きたいですか」

「別に……どこでも」

「……何か欲しいものはありますか」

「うーん……特には」

「あ、あのネックレスはどうです？ 似合いそうですね」

「だ、ダメよ！ ゼロが何個付いてると思ってるの?!」

「そうですね……」

栄華を誇る商店街の入り口で、ほぼ膠着状態となる二人。周りの男女は腕を組みながら、女は甘えた声でアクセサリーを強請り、男も甘んじてそれに答えている。

対する僕らは煌びやかな店に足を赴けることも互いに絡み合うこともなく、まるでただの散歩道とでも言うように黙々と歩くことばかり。

僕としては由々しき事態だった。レイズは勿論のこと、他の幾多の女性にもこんな冷めた態度はとらなかつた。

僕が多少強引に彼女の手を引いてエスコートしてもいい。今までも何人かはそうしてきた。無邪気な笑顔で談笑を誘ってもいい。いつものように。

だが、いずれにしても。

(今更、ですよねえ……)

そう、今までが冷たすぎたのだ。多少の会話はすれども何をすることもなく、紅茶を飲む。微笑みはすれども、それは互いにどこか作りに上げたものだった。

だからいざこざという事態になり、突然仮面を付け替えるというの

も憚られた。別に冷たくしたいわけではない。今日は、今日だけは、アリスに楽しんでほしいというのに……。

自分の浅はかさに鋭い溜め息をつく。この状況下でそれがアリスにどういう意味でとられるか、考えもせず。

視界の外で、彼女は悲しげに俯き下唇を噛み締めていた。

「アクセサリーがお気に召さないなら、何か見たいものはありますか？」

「……別に」

「別について……他に言葉はないんですか」

「……別に、無理しなくてもいいのに」

「は？」

何を言っているのだ。突然の急展開に付いていけず、無意識に眉間の皺を増やしてしまう。慌てて眉尻を下ろしたが、商人がこんなにも表情を曝してしまうなど名折れもいいところだ。

アリスはいつものすました仮面をどこへ置いてきたのか、ひどく苦しげに目を伏せていた。2歩彼女が踏み出し、スーツの裾を力無く掴んだ。

母親に行かないでと縋る顔だな、と思った。どうして自分は彼女にこんな顔をさせているのか。

……違う。今に限ったことではない。ずっと前から彼女が心から笑うところを見ていない。意図的であれ無意識であれ、僕が何かを言う度に、いつも無表情の下でこんな顔をしていた。

どうして、何故、僕は。今日は、今日だけは、笑ってほしいのに。笑って。

『もう、遅いの……』

「私の元気がなかったから、だから外に連れ出してくれたんですよ

う……？」

そうです。笑って下さい。今更だなんて、もう遅いだなんて言わないで……。

ずっと、ずっと前からあなたは笑ってないんです。昔はあんなに綺麗に笑ってくれたあなたなのに。

僕と付き合ったその日から、あなたは
笑わなくなっ
てしまっ
た。

「でも、無理してこんなことしなくても 私はあなたと紅茶を飲んで
いるだけで、十分だから……他は望まないから」

嘘です。嘘です嘘です！ 満足だという人間がどうしてそんな悲しげな顔をするんですか！ 泣きそうな声で、何が十分だ！ 望まない。その言葉が謙虚なものとしてではなく、僕への拒絶のように映った。ずぐりと胸が鈍く痛む。

「だから、もう……帰りましょう？」

『別れましょう』

催促する言葉が、昨日自分が彼女にぶつけたものに重なった。確かに自分が発した言葉のはずなのに見知らぬ冷たさと刃を纏っている。

袖を控えめに引っ張るその手が自分から離れていくそれに重なり
頭に血が上った。

「っ？！ な、」

「ふざけるなっ！」

裾を未だ掴む右手を引つたくるようにして捻り上げ、精一杯の力を指に込めた。

曲がりなりにも僕だって男だ、これほどの力を込めれば痕だつてつくだろう。それをどこかで望んでいる自分がいた。

痛みと恐怖に歪む彼女の顔にも関わらず、突然の怒声に集まった注目にも関わらず、僕は彼女をキツく睨み付けた。

彼女をこのまま帰したくない。このまま別れたくなんてない。

焦燥と怒り、自己嫌悪に任せるままに言葉を吐く。彼女の気持ちすら考えられないほど、我を失っていた。

「あなたを連れ出したのは、別にあなたを喜ばせたかったわけではないです」

「痛い！ はなして……っ！」

「あなたの為なんかじゃない！」

「痛いってば！ やだ、や」

指に力を込める。離さないと熱情的に語る手とは対照的に、出てきた言葉は自分でも目を見張るほど冷たいものだった。

「このまま別れたら、僕の沽券に差し障るでしょう？」

ピタリ、と。小さな抵抗をしていたアリスの動きが止まった。見開かれた漆黒の瞳がゆったりとした動作で上がり、僕のそれと重なった。

悲しみも、怒りも、絶望も。何一つ浮かんでいない。或いはそれらが複雑に混じり合い新しい何かを生み出しているのか。

後悔はいつだってもう遅いと思った瞬間に襲ってくる。

こんな台詞を言うつもりでなかった。狼狽えても「もう遅い」。

彼女を傷付けた冷たい刃は生々しい鮮血を伴って僕の胸へと返ってきた。

振り払うだろうか。そう思うと自然に力を込めたはずの指は震える。振り払って、叫ぶだろうか。

大嫌い、と。

「そう、ね」

笑った。いや、笑おうとした。眉尻は少し下がり、瞳は薄く細められ、唇は緩く弧を描いている。完璧な微笑のように見える。

その完璧さが、逆に不自然極まりなかった。

「ごめんなさい。忘れて。貴方の都合も考えなきゃね」

皮肉でも何でもなく、だからと言って本音のはずもない言葉。言うならば、どこまでも虚ろな言葉だった。何の感情も、感慨もない。中身が空っぽだからこそ、その言葉は僕の心に重く深く響いた。

見惚れるほどの笑顔は何かのサーブिसのように彼女の顔に張り付いて、彼女をすべて覆い隠してしまう。

確かにアリスの笑顔は見たいと今しがた願ったはずだ。だが、何かが違う。こんな、こんなのは。

だって、アリスの瞳は暗い絶望を映しているのに。

「アリ」

「いいの、忘れて」

瞼をそつと下して、唯一彼女の心が示されていた瞳の色さえも隠してしまう。そんな小さな動作でさえ、まるで拒絶のようで。

心臓に杭を打たれる。彼女の手首を取って、無理矢理彼女の瞼をあげさせてしまえばいい。アリスはいつだって、僕に従順だった。

ピクリと動いた指は、しかしそれ以上の動向を示さなかった。中途半端に開いた口からも、命令も謝罪も飛び出してこない。

「私、ね。森に行ってみたいの。この間イオがすごく景色のいいところを教えてくれてね、ちょっと道危ういんだけど……レーテと一緒に見てみたいの。ダメ？」

僕の服を少し引っ張り、上目遣いをしてくる様は完璧な“恋人”だ。平凡平凡とさんざん言われてきた容姿も、レストの女人指導が利いたのかひどく淫靡なものに見える。

僕は一瞬息をのみ、それから自分が得意の笑顔はずしていることに気が付いた。考えてみれば、先ほどからずっとである。なんていうことだ、僕は下唇を噛む。

一呼吸おいて仮面をつける。いつもの仮面、いつもの笑顔。そのはずなのに、完璧なアリスの笑顔を前にするとそれがどうしようもなく稚拙なもののように思えた。

「随分と遠いところですね。また今度、ではいけませんか？」

「ううん、だめよ。だって明日はパーティーでしょう？」

つまり明後日以降は一切縁を切るつもりでいる、と。言葉の裏で強く言われて、付けたばかりの仮面が剥がれ落ちそうになった。眉をピクリと小さく上げ、何とかそれだけに留める。

本気ですか。その言葉が喉まで出かかったが、それを言ってしまうのは何とも浅ましい気がした。

別れましょう。そう言ったのは確かに僕のはずなのに、今更それを取り消したいと思う自分がある。浅ましく、愚かしくも。

「とても綺麗なところなの。結構大きな泉だね、ほら、イオって森の事なら何でも知ってるじゃない？ あんまり人目につかないとこ

るでも知ってて……」
「アリス」

明日まで、の言葉を忠実に守っているアリスに憎しみがわいた。不条理とわかっていてもしばらく前から暴走気味だった感情はすでに僕の支配下から抜け出している。

僕はせめてそれを逸らすように、アリスの柔らかな唇に人差し指を当てた。そういえば今までキスの一つもしなかったのだな、とここで改めて思い出す。

明日まで、明日までなら。僕もそれに従って、精一杯アリスの“恋人”を演じよう。

仮面の笑顔には仮面の笑顔を以て。虚無の言葉には虚無の言葉を以て。

どうせ、明日までの恋人だ。

「行きましょう。僕も見てみたいです。“恋人”と一緒に」

幸せそうな笑顔が見たかった、なんて言わない。

言ったって、何も変わりやしないんだから。

よ。

何もかも、「もう遅い」「んです

行ってしまう、行ってしまう。

12時の鐘が鳴れば魔法は解ける。夢は終わる。

どんな熱帯の夜だろうと、どんな極寒の傷だろうと。

魔法は解ける。夢は終わる。すべて消える。

硝子の靴も、残さないまま。

仮面で隠し、笑顔で欺く。

欺愛。

『悲鳴を上げているのは、どちらの心？』

愛形 † ギアイ 硝子 † (後書き)

夏休みに入りましたなう)。・。・。()

とりあえず時間短縮のためあとがきや返信から顔文字が消えていくと思います。心はいつでもサンバ踊っているから決してローテーションじゃないんだからね！

ギアイ2話目です。ホントはこの中に泉デートも入れたかったんですが、1万字を超えていたので断念。携帯で言つと9ページ？ちよつと長いですね、ホンマ。

もつと簡潔簡単に短く圧縮できないのか私……orz こう、どうも文がねつちよりしすぎてていかんです。

いや、正直レーテさんお目覚めのところ丸々カットしたってよかったんですよ！ でもできなかつたんですよ！

理由は単純。レーテさんのお風呂シーンが書きたかつたから

お風呂つて素敵。なんか大人っぽい雰囲気も出せるしホラーにも最適だしほんとオールマイティー！

でも私自身お風呂は大嫌いです。何が嫌って個室と水音、閉ざされている湯船が怖すぎる。きつとトイレよりも怖いですよ。だって今は水洗だから便器から手が出てくるわけでもないし。でてこようとしてつかえてたら逆に哀れだし。

シャンプーを流しているときが一番警戒時ですよ、うん。自分の髪の間から何かが見えたらと思うとぞくぞくしますね。

あれ？ 恐怖？ 興奮？ いや、私にとってはどっちも似たようなものです。

はい、脱線しました。

レスト君の台詞つて何故だか一瞬チラツてみると喘ぎ声に見えま

す。

いや、欠伸なんですけどね！ 台詞の合間合間に欠伸かましてるだけなんすけどね！ ここは全年齢対象のノーマルラブ推奨の小説です。

ちなみにレスト君の“歪み”は昼夜逆転なので朝から昼過ぎにかけてはずっとこんな感じですよ。

不安と困惑、焦燥とプライドの間で揺れ動くレーテさん。もうなんかいろいろ間違ってます。

なんというか、レイズのことをいまだに愛していると思っ込んでるんですね。だからこそアリスはどうでもいい存在であり、別れるのだって惜しくないと思っっていた。思っっていた、はずなんですけど……。

後半、レーテさんはレイズのことをほとんど考えていません。1話はしきりにレイズと比べていたはずなのに、2話では名前すらほとんど上がりませんでした。

しかもアリスと別れる日を思うと胸が痛くなったり、怒りに駆られたりする、と……。

いい加減自分と向き合えよレーテ！！ と声を大にして言っかけてください、うん。

非常に暗い話ですが、あと2回ほど続きます。このまま物語は悲恋へと……。

バッドエンドって「明 暗」って移行していくのが主流らしいですが、私の書くバッドエンドはどれもこれも徹頭徹尾「暗 暗」な気がします。

うーん、もうちょっと動きをつけたいのは山々なんですけどね……。そもそもバッドエンド自体があまり書きなれていないので難しいです……。

来週のサザエさんは？

あ、間違えた。来月のギアイは？

【10月14日】夏休み終了

！

愛形 † ギアイ 泡沫 † (前書き)

レテアリ第3話目。相変わらず切なめシリアス。ここで物語が一気に転換します。

ロキ君が少々出張ってます。あら珍しい。

前半4分の1は都合によりアリス視点になっております。

4段落に分かれておりますが、時間軸がちょっとごちゃごちゃです。?(アリス)???(レーテ)的な感じ。うーん、わかりづらくてごめんなさい。

愛形 十 ギアイ 泡沫 十

ちやぷん……

小さな音を立てて指先が水面を割って無理矢理己の存在を押し入れる。拒絶するようなその冷たさに思わず肩が跳ねるが、構わずにゆっくり指を進めていく。

爪、第一関節、第二関節、中指、薬指、小指、親指、指の付け根、手のひら、手首 ……

「いつ……」

ピリツと小さな痛みが走り、私は思わず水の中から手を引き抜いた。バシャン。大袈裟な音を上げて映り込んだ自分の顔が大きく歪む。

ともすれば過呼吸になりそうな肺を必死で宥めながら、何事かと思い痛んだ手首を見た。

そこにあつたのは、まるで手枷のように克明に刻まれた、赤い痣人の握力だけで、よもやこれほどまでにくっきりと跡を残せるものなのだろうか。

「、あ……」

小さな吐息を皮切りに、我慢して溜め込んできたものが遂に決壊した。溢れ出した涙は碌に頬を伝いもせず水面に跳ねていく。

「ああ、あああつ……うつ、あう……あつ、ああう……」

軽快な水音、はくはくと痙攣する肺、意味を成さない言葉の数々。もしかしたら彼方にある“彼”にも聞こえてしまつかもしれない。そう思つて水に濡れ冷たくなつた手で口を覆うが、大して効果はなかった。

諦めて両手を胸の中心へと押しやり代わりに下唇を強く噛んで泣き声に蓋をする。そうすると嗚咽が出口を失つて、身体の中でダイレクトに響いた。

『このまま別れたら、』

「っ、やめて……！」

『僕の泣券に』

「もういい！ もう十分だから！ もう、もう……っ、いいっ……」

『差し障るでしょう？』

「もう、や……」

あまりにも。あまりにも酷いじゃないか。酷いじゃないか。

はじめて、一緒に歩いたのに。

はじめて、一緒に街を見たのに。

はじめて、一緒に恋人らしいことをしようとしたのに。

『……………』

ひどく退屈そうに吐かれた溜め息。酷いじゃないか。酷いじゃないか。どうして、どうしてどうしてどうしてどうして。

本当は、一緒に歩くのだって嬉しかったのに。

本当は、氣遣ってくれたのだって胸が熱くなったのに。

本当は、前に行く広い背中になんて鼓動がうるさかったのに。

本当は、本当は、本当は……

「どう、して、とか……バカみたい……っ」

どうしても何も、どうしようもなかったのに。どんなに抗ったって、あの人の一番は決して揺らぐことなどないのに。

私は変わらず涙を水面に落としながら、自嘲するように唇を歪めた。感情を押し込めて、ずっとずっとずっと、演技をしていた自分がひどく滑稽だった。

酷いじゃないか？ 酷いじゃないか？ 馬鹿を言うな。酷いのは私だ。酷いのは私だ。沢山の人を傷付けた。傲慢にも、無い物を強請った。手に入らないと予め分かっているものをこそ、欲しがった。酷いじゃないか。酷いじゃないか。皆、こんな感情を持って余しておきながら笑って背中を押してくれたのか。酷いじゃないか。彼らの想いに気付きもしないで、いや、敢えて目を逸らして、自分の望みを果たそうとした。酷いじゃないか。こんな私こそが一番、酷いじゃないか。

「イオ……っ」

『そっかあ……じゃ、仕方ないなあ。ここは思い切つて、アリスを誘拐監禁調教……しないしない。しないからそんな拳握らないでっつば！』

茶化すようにして空気をぶっ壊したイオ。こみ上げてきた涙も不

吉極まりない漢字6文字を聞いた瞬間に、眼孔の奥へと引きこもってしまった。それからは容赦なく拳を繰り出したけど。

でも、分かっていた。あの場はああいう風に荼化することで私を慰めてくれたのだ。本当は、瞳の奥には狂おしいほどの悲愴を潜めていたのに、誤魔化すように目を細めて笑った。

「ッルア……」

『いいんです、アリス。僕はあなたが好きです。大好きです。だから、僕の傍でなくとも、あなたが幸せでいてくれれば、それでいいんです。いいですよ、アリス』

ぐずる子供に言い聞かせるようにゆっくりと、区切りを入れながら話したルア。涙腺が決壊して彼のシャツに縋りながら泣いていた私を、それ以上何も言わずに胸に招き入れてくれた。

気付いていた。気付いていた。柔らかく頭を撫でるその指が細かく震えていたことも、それが全然“いいんです”に適っていないことも。気付いていながら、彼の絶対的とも言える優しさに甘えた。

「ろ、き……っ」

『っておい！ な、泣くな！ い、いや、泣いてもいいけど、だ、だから泣くなつて！ ああああつ、もう！ んなに泣くと干上がるぞ！』

小さな「頑張れ」の言葉にぶわりと許容量を超えて溢れ出した涙。私以上に動揺したロキは、背中を撫でたり頬を抓ったり鼻を摘んだり、とにかく私の気を逸らして慰めようとした。その挙動不審な行動に益々泣き崩れる私に、終いには二人仲良く泣いていた。

優しくて哀しくて、不器用でぶっきらぼうで、繊細で不格好な人。

懸命に私の涙を拭おうとする様が無性に嬉しかった。どうして彼じやないんだろうとも思った。きっと彼の手を取る女性は至高の幸せ者だ。そう思うのに、それを望まないのは何故。

「……ふ……い」

『人魚姫の話は知ってるかい？』

私に視線を注いでいるのにどこか遠くを見ながら、彼は言った。自由をあげる、と。

『君の好きなようにしな。全て許してあげる。ただ、思うようにして、願いを叶えて陸に立ち、王子の隣に立つてもなお』

耳から垂れていた髪にそっと触れ、耳にかけ直す。ふれる温度の優しさに目の奥が熱くなった。

『報われないと言つのなら』

泡にならないで。

彼はただ静かに、言った。

『必ず戻っておいで。王子の胸に刃を突き立てなくてもいい。君さえ戻ってくれるなら、僕はそれでいい。必ず戻ってくるんだ。大丈夫、』

悲劇になんか、させない。

「フレイム、様……」

「じめんなさい ……」

水が一際大きく跳ね、陸にその痕跡を残す。
冷たさが全身を突き刺す中、手首に残った赤い痣だけが熱く疼いた。

2179

握ったのは、泡沫。

手をはなしたその瞬間に、私を置いていってしまつので
しょう……？

「こつち……のはずなんだけど」
「……迷ったみたいですね」

先程から同じ所を何度も通っている気がするのは、気鬱な影を落とす木々が見せている幻惑か、それとも本当にそうなのだろうか。

こんなことならマルスやレストに付き添って森の探索を進めておけばよかった。……いや、あの二人に付いていたら遭難するか。さすがに屋敷の主人が何ヶ月も屋敷を空けるのはまずい。

「うーん……さすが“迷いの森”、というところでしょうか。チエシヤ猫の住処だけあって随分ひねくれてますね」

「ちよつと、落ち着いてる場合じゃないってば。早く探さなきゃ。

帰れなくなっちゃったらどうしよう……」

「大丈夫ですよ。一応生存率は20%くらいですし」

「低っ！ いやそれ低い数值だから！ 全然大丈夫の域じゃないからあああ！！」

僕の一言を聞いた途端に目を丸くして発狂したように（僕にはどうしてもそうにしか見えない）喚き散らすアリスを面白いものを見る目で眺めながら、ぼんやりと考えていた。

このまま帰れなくなつていい。帰さなくなつていい。明日になれば歪みに歪んだ戯曲はぎこちなくも着実に終演に近付いていくのだから、いつそ明日など始まらない方がいい。

明日の12時には、魔法が解けて夢は終わり、すべてなかったことにされてしまう。まるで灰を被った少女の話だ。違うのは、アリスなら硝子の靴を残すような馬鹿ではないことと、もし硝子の靴を手に入れても、二度と関係は修復できないこと。

僕は気怠げに上空を見上げた。良く言えば緑が多い、悪く言えば暗鬱としている森には日は殆ど差さない。日照時間を測ろうとも、肝心の太陽が見えない。

残された時間はあとどれくらいだろう。あと1日と半日ほど後には、この温もりは残酷にも名残を残して去っているのだろうか。

このまま。このままここに遭難していたらどうだろう。明日も明後日も、出口を探しながら森を彷徨っていたら。ずっと、この鬱蒼

とした森に二人、ずっと一緒に閉じ込められていたら

……

「おい。何騒いでんだあんたら」

思考を遮ったのはよく知る低音だった。呆れたようにも苛ついて
いるようにも聞こえる。恐らく9：1ぐらいだろう。

さすがに驚きで心臓が跳ねたが、動揺を笑顔で隠して声のした方
を見上げる。緑と同化しえない黒は難なく木の上に見つかった。

「騒いでいるのはアリス一人です。あんたら、とは心外ですね」

「ロキ！」

アリスのこのリアクションの大きさは何とかならないのだろうか。
いつもは寒々とした落ち着きを纏っているのに、一度スイッチが入
ると途端にこれだ。

喜色満面に目をキラキラとさせるアリスにあてられたのか、ロキ
の顔が茹で蛸のごとく真っ赤になった。はぁ……相変わらずの純情
ボーイですね……。

さり気なく身体をずらしてアリスの視線がロキのそれと交わらな
いようにしながら、内心の溜め息を殺した。

「こんな所で何をしていますか？ お昼寝には向かない場所
ですが……」

「そりゃこつちの台詞だろ。何しに来たんだ？」

形の整った眉が綺麗に歪められる。確かにこんな場所、よほど食

べ物に困窮した者が物好きしか訪れないだろう。

僕が答えるよりも早くアリスが相変わらずの笑顔で顔を出す。

「良かった、ロキ。ねえ、こちらへんに大きな泉知らない？ 泉についてももはや湖みたいな大きさなんだけど……」

「でかい泉…… ああ、あのやたら深い水溜まりか」

「水溜まりって……情緒の欠片もない言い方ね」

「そこに行きたいのか？」

不思議そうに聞くロキに対し、アリスは嬉しそうに頷いた。無意識に拳を握りしめたのは、心の奥底で帰したくないと思っていたからか。

アリスの頼みだ、アリス信奉者の一人であるロキなら十中八九断れないだろう。ついでに案内と言いながら始終ついてくるに違いなし。そしてアリスと楽しそうに喋って……。

何が“恋人”だろう。傷付けるばかりで、慰めることもせず、何が“恋人”だろう。形すらもどこか歪だった。ましてや中身なんて、がらんどろ。虚無。これなら、ロキの方がよっぽど……。

「レーテ？」

突然名前を呼ばれて思わず声をあげそうになった。どんなに突発的といっても眉をあげさえもしない僕が……本当にらしくない。

バクバクとうるさい心臓に内心で舌打ちをしながら、例のごとく笑顔を浮かべた。

やはり笑顔というのはいい。簡単に作れるし、何より自分を殺すのに最適だ。僕の内面を知ることなく上辺を見て騙されてくれる。誰も僕を見ない。見ない。

「大丈夫？ ロキに案内してもらえなくなったんだけど……」

「そうですね。それでは早速行きましょう。日が暮れては都合が悪い」

「うん……そうなんだ、けど……」

そう、それでいい。何の疑いもなく言葉と笑顔を信じればいい。誰もがそうしてきたように。誰もが……僕を見なかったように。

ふっ、と。柔らかい感触が頬に乗った。我に返って見てみると、そこには自分よりも一回りは小さな手。紅茶指導がよほど厳しいのか、少し荒れた手のひらが包み込むようにして頬に触れていた。

「気分でも悪いの？」

「……そんなこと、ないです」

今更、だ。

誰もが惹かれ、その手に収めたがった少女。器量も並でこれと言った特徴もなかったため、“アリス”という肩書きに惹かれているのだと思った。“アリス”の名に全く興味を示さず、生涯たった1人しか愛さないと誓った自分には関係ないと思っていた。

今更、気付いてしまう。誰も、“アリス”など求めていなかった。ただ、胸にポツカリと穴を持つ人間ばかりがこの少女に惹かれてしまう。この温もりに縋ってしまう。

母親を失ったイオとロキ。友を手放したルア。家族を殺したフレイム。そして、“アリス”への恋慕はなくとも、心に闇を飼う自己レイズを失った、からではない。ずっとずっと前から心に巣喰っていた穴をレイズで埋めようとした瞬間に、嘲笑いながらさらに穴を広げられただけのこと。結局、レイズですら埋められなかった穴を。

「レーテ……？」

「……もう、少し」

アリスの手を、それ以上離れないようにと自分の手を上から重ねて頬に繋ぎとめる。少し力を入れると、アリスの手を通して彼女の鼓動が流れてきた。

漏れるような溜め息を小さく吐いて、ゆっくりと瞼を下ろす。

満たされていく。満たされていく。心臓に空いていた穴の中に温かい水が入り込み、傷だらけになった穴の壁を癒していく。羊水のような温度の水で、穴が満たされていく。きつと、あとに残るのは、見つける度に虚しくなる穴ではなくて。

見渡す限りの、綺麗な泉。

「もう少し、このままで……」

どうして。どうして、今更なのだ。こんなにも終わりに近づいて、どうして今更。

気付いてしまう。気付いてしまう。今更。

この人を、愛してしまっていた。

『別れましょう』

自分の放った言葉が、今度は確実に胸を抉った。

「泉……ですか」

「ああ、泉」

「……泉？」

「だから泉って言うてんだろ」

「……対岸が見えないんですけど」

「だけど泉だろ。水が湧いてんだから」

「……そうですか……」

規格外だ。行く最中にいくら深くて広いと聞いても、誰がこの大きさを予想するだろう。アリスが湖と言ったのは言い得て妙だった。紆余曲折した道の果て、茨に囲まれた空間にその“泉”はあった。帽子屋邸周辺同様木が遠慮するように泉周辺10メートルを開けて茂っている。

こんなにも莫大な土地をどうして誰もとらないのかと一瞬商売人らしい考えがよぎった。領有して観光地が何かにしてしまえば物好きの上流階級には受けそうなものである。

が、そんな思考回路をいち早く察知したロキは無碍にもそれを否定した。

「見た目は小綺麗だけど案外危険だぞ。深い上に水草が絡むからな、溺死者続出だ」

「そうなんですか……誰も取り合わないはずですね」

「滅多に見つけられないしな。たまに遭難者が辿り着いて水浴びしようとして飛び込むんだよな。水草が生えてるから深さわかんねえし。んで、溺れ死ぬと」

「いや、助けましょうよ」

「無理」

「は？」

「お前、猫が泳げると思っているのか？」

「……猫かきとか」

「できねえよ」

「…………泳げないんですか？」

「悪いか」

「……………いえ」

とすると、あのイオも泳げないのだろうか。普段から完璧を誇る（性格を除いて）彼の意外な一面を見た気がする。泳げないと聞いた途端、夜の彼を無性に突き飛ばしたくなった。

僕は一旦言葉を区切り、横で大人しく会話を聞いていたアリスに念押しした。

「アリスも、くれぐれも落ちないようにして下さいね」

「うん…………。でも、こんなに綺麗な泉なのよね」

アリスが残念そうに水面を見る気持ちも分からないではない。確かに言葉の通り、泉は神秘的なまでに綺麗だった。

透き通った水は中に生息する大量の水草のせいで透明感のある青緑に着色されている。中央の方で滾々と湧く水が水面や水草を揺らめかせ、太陽の光を反射した。

「そうですね…………。確かに、これは一見の価値があります」

「でしょ？ こっからじゃ見えないんだけど、あっちには色々花が咲いててね、すごく綺麗なの。見にいきましょう？」

ああ、またこれだ。精巧に練られた“恋人”らしい言葉に、言いようのない虚しさを覚えた。自分の中の恋慕に気付いてからずっとこの調子だ。彼女の甘い台詞を聞く度にズキンと傷む胸をそっと押さえる。

自分が招いた結果だ。それが痛いほど分かる為に余計、口は重くなった。今更何を言えればいいのだろうか。散々彼女を傷つけておいて、今更何を。

それに。

「……アリス」

『これは取引よ』

取引内容は、僕と付き合い他の数多あまたの手を逃れること。条件は僕がアリスを愛さないこと。アリスに執着せず、元の世界へ帰ることを阻まない僕だからこそ、アリスは僕を選んだ。

怖い、そう怖いのだ。この気持ちを告げた瞬間に、彼女は冷めた笑いを浮かべるのではないか。手を伸ばすその前に、あなたもなのね、とその唇が蔑むのではないか。

あと1日。たったそれだけの期間だけど、ここで溝に捨てたくはなかった。そんな言い訳をしながら、本当は恐怖で身体が竦んでいりのが嫌ってほどわかる。

「先に行つて下さい。必ず見つけますから」

断られることは予想していなかったらしい、アリスは一瞬呆然としたあと、あの完璧な笑顔を浮かべた。

「わかったわ。必ず見つけてね」

甘い毒を流し込むように“恋人”らしい言葉を残す。そのくせ、何の未練もないと言わんばかりにあっさり背を向けるのだ。

遠ざかっていく華奢な背中に、言いようもない虚しさを覚えた。

明日も、やはりこんなふうにならわってしまうのだろうか。名前を呼んでももう彼女は応えてくれなくて、伸ばした手は宙を掻いて、僕じゃない次の“隠れ蓑”と契約して、「もう遅い」と嘲笑って…。

「っアリス！」

気付けばあっという間に小さくなっていった背中に叫ぶ。意図的に、というよりも条件反射のようなものだった。脳が命令しないことをした身体に一瞬戸惑う。

頭の中のアリスとは反して、現実のアリスはいとも簡単に振り返った。不思議そうに首を傾げている立ち絵が愛らしく、哀らしい。引き攣る喉をなけなしの唾で潤し、必死に次の言葉を紡いだ。

「必ず……見つけます」

「……うん」

遠くで頷いた影がひどく悲しげに見えたのは都合のいい幻影だったのか。

無意識に伸ばしていた手は、力尽きたように落ちた。

「……意外だな」

静寂を破ったのは第三者とも呼べる男の低音だった。

「……ロキ」

「あなたがそんなに嵌ってるとは思わなかった」

腕を組んで眉を寄せている様は随分とご機嫌斜めのようだ。一瞬困惑するが、すぐにこの男もアリス信奉者の1人であることを思い

出す。

まさか彼を恋敵として敵視するようになるとは、レイズを唯一として愛していた頃は思いもなかった。いや、そもそも人間不信気味だったロキが誰かと時を共にすること自体信じられなかったのだが。

こちらをじとつと睨みつけてくる瞳を静かに見つめた。僕の方が背丈は低い、彼は常に猫背のために僕が見下す感じになる。

「……僕はそんなに嵌っているように見えますか？」

「相当、な。あんたはずつとあのケバい女を愛すものかと思っただから、意外だった」

「レイズはケバくなんかありませんよ」

レイズ、と名前を出した瞬間に胸が痛んだ。アリスと付き合っただけでもたらされた、あの杭を打ち込まれるような感覚だ。

「俺はその女が嫌いだ。なんか最初から嫌な感じがした。香水の匂いも酷かったしな」

「レイズの悪口を言うのはあなたとも言えども許しませんよ。レイズは素晴らしい女人でした。彼女は完璧だったんです」

完璧。ただそれだけの言葉に引っかかりを感じる。

そうだ、アリスが浮かべていた笑顔も“完璧”ではなかったか。

「アリスが好きとか言いながら他の女を庇うのかよ」

「視野が狭いですね。長い人生の中で恋が一度だけだとしても？ レイズは間違いなく僕の初恋で、一番の恋人でしたよ」

「アリスにも同じことを言ったんだな」

ぶわり、正面から殺気を浴び、前髪が少し浮き上がる。刺客に慣

れている僕と言えども、その肝を冷やしてしまうほどの殺気だった。

「その女が一番でアリスは二番って言ったのか」

『ただし、二番目の恋人です』

どうして。どうして、ロキがこの台詞を知っている。その場にしたのか？ いや、彼の性格ならそれを耳にした瞬間に僕を殴り飛ばすか何かするだろう。

なら、アリスが？ でも何のために。彼女の目的はロキのように彼女に懸想する男から身を隠すことだ。不仲であると思われる発言を伝える必要性がない。

瞬間的にそこまで考え、思考が止まった。いや、止まらざるを得なかった。頬に重い衝撃が走り、平均体重よりも下の体躯が面白いほど吹き飛んだ。いや、地面にたたきつけられたとでも言うおうか。右頬に熱い拳がきたと思ったら瞬く間に左頬が冷たい地面を感じた。知らぬ間に止まっていた息を無理矢理吐き出し、腕を突っ張って身体を起こした。追撃が来ないことを確認して殴られた頬を触り、冷たい手の甲でその熱を冷ます。

「……僕が憎いですか」

「っ……アリスに止められてなかったらお前なんて殺してる……！」

「ふふ……そんなにアリスが好きなんですネ」

だけどそれはどこかお門違いだ。アリスの心は間違いなくアリス自身のものであり、他の誰にも、僕にも、渡されたことはない。

結局のところ、僕も彼らと同じ穴の貉なのだ。“恋人”であっても、そこに愛はない。虚飾の関係。それすらも、この男には憎むべきものなのか。

「お前、なんかに……っ！」

お前なんかにわかるか。

その言葉を聞いた途端、僕は留め金が弾けたように笑い出した。弾けたように。狂ったように。有り余る悲しみを、笑いに込めた。

「ならあなたには分かるんですか？ この関係がどんなに虚しいものなのか、あなたには分かるんですか！ 分かるはず不是吗ねえ、ロキ。付き合わなければ、取引なんてしなれば、出逢わなければよかったですら思う僕の気持ちなんて！！」

「取引、」

「あなたも知っているんでしょう？ アリスに教えられたのかなんなのか知りませんが、二番目の恋人の件を知っているあなたなら知っているはずだ。アリスは、僕が彼女を愛していないからこそ僕と付き合っただんですよ」

声は確かに水っぽくて喉がヒリヒリと痛いのに、不思議と眼球は乾いていて、そこから雫が溢れるということはなさそうだ。

ひどい八つ当たりだということも理解している。ロキがどれほどアリスに恋い焦がれているのか、欠片ながらも知っていながらあんまりな言葉だ。

取引の言葉に黒曜石の瞳を見開いた後、ロキの顔は怒りで赤く染まった。それも仕方ないだろう。彼の気持ちを否定しておきながら自分の気持ちを押し付けるなんて、浅はかもいいところだ。いつから僕はこんなにも余裕のない大人になったのだろう。

こちらを親の仇のように憎々しげに睨み付けてくるロキをどこか虚ろに見上げる。甲から血の気が失せるほど拳を握っている。また殴られるのだろうか。人より丈夫とはいえ、痛いものは痛い。

「取引ってのは、あんたがアリスを好きじゃないから、あんたを隠

れ衰にするってやつか」

「……………そうですね。知ってるじゃないですか」

「あんたがっ！ あ……………あんたが、レイズを好きだから……………っ！」

「そう。だからアリスは、彼女に生涯執着しないだらう僕を……………」

「アリスはそう言うしかなかったんだらうが！！」

……………

……………

え？

思わず鸚鵡返しに問いかけそうになった僕の言葉を、ロキは先程よりもさらに荒々しく遮る。怒りでなのか興奮でなのか、彼の眺から水滴が飛沫となって宙に霧散した。

首を圧迫するようにして襟首を掴まれ、強制的に持ち上げられる。自分の苦しげな呻きと低い「立てよ」という命令とが、どこか遠くのもののように聞こえる。

「あんたがっ、あんたが普通にアリスと付き合うわけねえから！

虚しい関係でもいい、て、そう言って、あのバカは……………っ！」

「……………待て」

『付き合いましょう。……………これは取引よ』

「あんたにわかんのかよ！ あんたの言う“完璧”を目指して毎日毎日毎日！ 涙で腫れた目を水で冷やしてっ、無理に笑ってたアリスのことなんて、あんた知ってんのかよっ！」

「……………け……………っんな」

『ごめんなさい。忘れて』

「隠れ蓑だとか、俺らが邪魔だとか……………っ、アリスが、アリスが考

えてるなんて本気で思ったのかよ！ あのバカお人好しなあいつが！
！ そんなこと本気で思うわけねえだろうが！
「う、るさい……っ」

『大丈夫？』

「あんなのは！ あんなのは、俺とルアで考えた三文芝居だ！ あ、あんたはレイズしか見えてなかったから、だから！ ただのきっかけ作りのはず、だったのに……！」
「違う……っ、アリスは、」

『必ず見つけてね』

「なあ、もうあんたもアリスが好きなんだろう？ そうなんだろう？
なあ！」

「……あ……ぐ」

『……うん』

「ならなんで！ なんであいつはまだ泣いてんだよ！ 好き合ってるのに、なんで泣いてんだよ！！」

好き合ってる。拙い言葉なのに、唯一それだけが鼓膜を叩き頭の奥へと浸透してきた。

その瞬間、堅く閉ざされていた瞼が開き、眩いばかりの光景が網膜を突き抜け脳裏のスクリーンに映し出された。

『……おや……美味しいですね』

『お菓子も作れるんですか？ 今時の子供はすごいです』

ねえ』

『なにむくれてるんですか。ふふ……僕からしてみればあなたなんてまだまだ子供ですよ』

『いい天気だ……ねえ、今日は外でお茶にしませんか？』

『僕も料理してみましようかねえ……』

『すみません、コンロの使い方を教えてくれませんか？』

『……失敗しちゃいました……はあ……』

『アリス』

『レーテ』

「あ……う、あ……」

そうだ。どうして、気付かなかったんだ。いや、どうして気付くうとしなかったんだ。欲しいものは、聞きたい言葉は目の前にあったのに、目を閉じ耳を塞ぎ続けていた。

脳裏に流れたのは付き合ってから今日までの日々の中で、実にくだらない場面ばかり。お茶に誘ったり、世間話をしたり、料理を―

緒に試みたり……。そのままならすぐさま日常に埋もれてしまいうな、くだらない、それ故に温かい場面。

その度に僕に伝えてくれるアリスはどんな顔をしていた？ どんな声で僕の名前を呼んだ？

どうして見なかった。どうして聞かなかった。アリスの顔は、仮面ではなかった。アリスの声は、慈悲深いものではなかった。

そんなものじゃない。彼女のそれはもっと、切なく狂おしく、幸せだと、語っていたのに。

「……………ロキ」

激昂して息を荒げる彼の手はいまだに僕の襟首を持ち上げたままだ。喉奥から込み上げてくる熱い感覚に相まって、息が苦しい。

その拳をそつと撫でて離すよう示すと、彼は意外にも素直に従った。ようやく踵が地面につく安心と同時に強烈な眩暈を感じた。覚束ないながらもしっかりと地面に根を張る。

「たくさん、傷つけました」

「……………ああ」

「たくさん、泣かせました。僕はその涙を拭うどころか、気づきもしなかった」

「……………あのバカは、意地っ張りだから……………」

「ええ、本当に。僕も、ちんけなプライドばかり気にして、本当に……………本当に」

落ち着いて話せていたはずなのに、声はいつの間にか湿気ていた。片手で口を抑え、息を数秒止める。

ロキは僕よりもはるかに穏やかに話していた。その顔にはいまだ怒りと悲愴がうかがえるけど、劇場に任せて怒鳴ったりはしない。

涙を喉の途中で飲み込み、呼吸を整えてから「お互い、どうしよ

うもない馬鹿でした」と続ける。

愚かだった。愚かだった。

確かに感じていたはずの心の安寧とぬるま湯につかるような心地好さに、気づかないふりをしていた。寂しさを埋めるためだけで、愛しているわけではないと言いついた。

やがて彼女に溺れている自分に気が付き、今度は下らない自尊心プライドを翳してその温もりに足掻こうとした。彼女を突き放すふりをして、自分の心から逃れようとした。

終わりになつて初めて、気づく。後悔する。恋しくなる。彼女を求める心に対して、僕は「今更」と言う言葉を突き付けて押さえつけた。彼女を傷つけてばかりいた自分が、何を今更。

「もう」

手を伸ばしたって、彼女はその手を取ってはくれない。

名前を呼んだって、彼女は振り向いてはくれない。

愛していると叫んだって、彼女は愛してはくれない。

決めつけて、逃げていた。

「もう、遅いのでしょうか……？」

拒絶されるのが怖くて、嗚呼、でもそれはなんて愚かなこと。

「まだ間に合う」

はっきりと発せられたロキの言葉を、僕は最後までしっかりと聞くことなく走り出した。

今度は逃げるのではなく、彼女を「見つける」ために。

今度こそ、見つけ出す。

偽愛。

『君が涙で、溺れてしまう前に』

愛形 † ギアイ 泡沫 † (後書き)

こんにちは、作者です。ただいま夏休み後半、8月の頭ってころです。

ギアイとヘンアイを並行して書いているんですが、ギアイのほうに乗って乗って乗って……ヘンアイ停滞中です。

うん、仕方ない。だってギャグだもの。ギャグなんてテンションが高いときにしか書けないもの！（ちなみに作者のテンションはハイ：ロー＝11：3ぐらいです）

ってことでギアイ3話目でございます。

もうお分かりかもしれませんが、このギアイはレーテ アリス、です。こういうのを両片想いっていうのかな？ 紆余曲折して両思いになるのも、ちょっとした勘違いで破局になるのも、私はどちらも好きです。

さあ、ようやく本格的になってきました。もうほんと、ようやくって感じですね。ようやくレーテさん恋愛感情発覚。遅すぎる。

「取引」の件もロキくんがばらしちゃいましたね。ロキだからこそ、正直にばらしました。これがイオやフレ임様だったら破局してから告げます（非道）ルアなら遠まわしながらも言うのかな……？

さて、今回は全体として大きなテーマ（比喻？）が2つあります。気付かれましたでしょうか？

「灰かぶり」と「人魚姫」です。

……いやいやいや。「不思議の国のアリス」の中に「灰かぶり」と「人魚姫」ってどうなんだよ。

そういう突っ込みはなしです。ノープロブレム。だって番外編だ

もの。

話に沿っている、と言うわけもなくただ雰囲気ですね、雰囲気。

レーテ 「灰かぶり」の王子様

アリス 「人魚姫」の人魚

ですね。古文でいう縁語みたいなものですが、

レーテ 「12時の鐘」「魔法が解ける」「硝子の靴」「見つけ出す」

アリス 「フレイムの話」「悲劇」「水」「泡沫」

等々……。

【11月14日】次回でギアイ最終話です！ 長めでしたが、最後までお付き合いいただけると幸いです！
ではでは。

愛形 † ギアイ 終曲 † (前書き)

レテアリで4話目。全部詰め込もうと思ったけどここで切っておきたかったのでちょっと短め。起承転結の転つていったところ。かなり切迫しています。しかし物語の進行は遅いです。

最終章行かなかった……orz 本編はあと1話です。もう少しお付き合いください。

時間、心の余裕により、愛形シリーズはギアイとその後日談でいったん締め切らせていただきます。ただしセンアイとヘンアイ(一部)はもう仕上がっているので、推敲の後投稿するかもしれません。しないかもしれませんが。

続きは受験終了後にも……。

愛形 十 ギアイ 終曲 十

近くで何かが水に落ちる音がした。

「水……？」

昨日は雨は降っていない。故に水溜まりもできるはずがなく、第一水溜まりが跳ねるような軽快な音ではなかった。

もっと深く重く、人の大きさほどもある何かが水面に叩きつけられ、水の世界へと引きずり込まれた、ような。

この近くの水場と言えば、一つしかない。そして今現在その水場付近に存在するのは、自分とロキと ……

「アリス……？」

『深い上に水草が絡むからな、溺死者続出だ』

「っアリス!!」

息を整える為に休めていた足を燃え上がるほど動かす。アリスを探すために酷使した体は既に悲鳴をあげていたが、構っていられるはずもなかった。

心臓が過去最多の鐘を打っている。口に出すのも憚られる不安を訴えるその部位を黙らせるように掴み、唇をキツく噛み締めた。

「アリス！ どこです！ どこにいるんです！」

この台詞、どこかで聞いた気がする。今頃になって鮮明に蘇る悪夢に盛大な舌打ちをして僕は音のした方へと駆ける。

泉を遠巻きにするように生えていた木々が、まるでそこにあるものを守るように、まるで僕の行く手を阻んで台本を押し進めるように、その部分だけ生えていた。

アリスが言っていた花畑というのはこの先だろうか。水音は、確かにこの奥から……。

『もう、遅いの……』

「っ……！」

腰ほどまでにも茂っている草を掻き分け、木の枝から垂れる太い蔓を乱暴に払う。

こんな状況でなければ「無法地帯ですね」と苦笑しただろう。今は全て焼き尽くしたくなるほど憎らしい。

『もう、遅いの……』

「……っるさい」

葉の縁が刃となり無防備な手の甲に赤い筋を残す。痛覚が追いつかない。その方が好都合だったが。

『もう、』

「うるさい黙れっ！」

頭でしつこく響く声をねじ伏せて腕を最大まで伸ばす。唐突に、木々の壁が途切れた。僕は半ば倒れ込むようにして前のめりになった。その際に右目の下を細い枝が掠り傷を残す。

自分の体重を支えきれずに倒れた先には、先程とは一風変わった景色が見えた。確かに花畑だが、綺麗かどうかなど判別つかない。それどころじゃない。

「アリス！ どこにいる！」

ここで間違いないはずだ。ここで……！

「……………」

「アリス?!」

小さな悲鳴と、かすかな水音。5メートルほど先にある水面がしきりと揺らめいていた。

何かを考える前に走り出す。途中で愛用のスーツは脱いだ。どうせ傷だらけでもう使えない。

「これ、は」

水際に揃えられた物を見て蒼白になった。それは、ここ数週間で見慣れた女物の靴。彼女の性格故か、最期を飾るようにぴっちり揃えられている。

灰かぶりも同様に片方の靴だけ残して去っていったらしい。王子はそれを見つければ四苦八苦して灰かぶりを探したというが……。

「ふざけるな……っ！ 靴だけあっても仕方ないだろうがっ！」

染み付いているはずの敬語もかなぐり捨てて盛大に毒づく。苛立ちのままに靴を蹴り飛ばし、片方が泉に落ちる、その前に僕は水中へと飛び込んだ。

(ぐっ……)

なんだ、この冷たさは。氷が浮かんでいてもおかしくないほどの温度に心臓が竦み上がる。心臓が弱い人間ならあっさり死んでしまいうそだ。ロキは溺死と言ったが、実のところ心臓マヒが死因じゃないだろうか。

一瞬動きは止まったものも、再起は俊敏だった。腕を大きく回して頭を下に向ける。靴があそこにあつたということはそう遠くにはいないはず。左右前方にいるか、あるいは……。

(下、か……?)

ロキが言った通りこの泉は深く、水草が競わんばかりに群集しているため視界不明瞭だ。進むにしてもわざわざ水草を掻き分けてしか進めない。

地上なら舌打ちをかましているだろう状況に焦りが募った。足で水を勢いよく蹴り、深く深く潜る。

(アリス……！)

水音が森の静寂を破いてから1分以上経っている。人間が息を止められるのは約2分、これ以上のタイムロスは危険だ。いや、もしかしたら、もう……っ。

(どこだ、どこに……！)

地上が“チエシャ猫の迷いの森”というのなら、その言葉は皮肉にも忠実に水中にも引き継がれていた。腕で大振りに掻いたとしても視界が晴れるのは前方1メートル、一瞬だけ。この中から探し出すのは絶望的に思えた。

冷静に考えれば自分の身すらも危険とわかるのに、今はただ腕がむしやりに動かす。どこだ、どこだ、どこに……っ。

(……！)

瞬間視界の右端に見えたのは白いもの。僕は何も考えることなしに手を伸ばし、水を掻く。覆い隠していた水草が大きく揺らめき、その中から彼女がいつも身につけているエプロンドレスが見えた。

(アリス！)

すぐに体の向きを変え、彼女のいる方向へと泳ぐ。その手で青々と生える水草を除けると、ようやく彼女の蒼白い顔が見えた。

瞼は堅く閉じられていて、僕がその腕を掴んでも反応をしないとこから見ると、意識を失っているらしい。今度こそ舌打ちをした。口の中から少量の空気が漏れる。

地上へ地上へと向かうその空気たちを追って浮上しようと試みる。が、下からぐんと嫌な抵抗が掛かった。

(この水草……っ！)

アリスの手足にしっかりと絡みついた水草は、まるで水中の食虫植物のように彼女を逃すまいと邪魔をする。

無理矢理彼女を引っ張って千切ろうとするが、そんなに柔な造り

でもないらしい。さらに水中では込めたはずの力も散漫となる。元々水中で生を培ってきた水草に適うはずもなかった。

(くそっ!！)

一秒だって無駄にできない。僕は一旦足を水面に向け、顔の前にアリスの足がくる位置まで潜る。彼女の足に複雑にこんがらがった水草どもを一拳に掴みあげ、渾身の力を込めて引きちぎった。

ぶちぶちぶちっ。地上ならそんな痛ましげな悲鳴を上げていただろう。まったくいい気味だ。

(早く! 早くアリスを……!)

体を宙返りさせて正規の体勢に戻し、彼女の腰を片腕でしっかりとホールドして足を動かす。今度こそ障害もなく水面が近付いた。

何だかんだで僕もかなりの時間空気を吸っていない。口内が痛み、肺がハクハクと鳴りだす。だが今は何よりもアリスだ。

右肩に力を込めて、僕よりも先にアリスを水面へと押し出す。水中全体に、水面が割れる音が盛大に響く。無論、僕もすぐさまそれに続くつもりだった。

(っ?! 何だ?!)

「ん、う……っ」

突然顔面に襲いかかってきた水の塊に、口に溜めていた貴重な空気を泡として逃がしてしまふ。慌てて左手で口を押さえた時には半分以上の空気を失っていた。

リズムカルに襲う水中の“波”になおも翻弄されながら、僕は何とか体勢を整えようと奮闘する。しかし前のめりになれば足元を掬

われ、後ろに傾けば顔面を強い“波”が打つ。そんな状態でまとも
に泳げるはずもない。

(これはっ……泉の湧き水か！)

水面近くになって顕著に現れた水の流れ。しかも、飛び込んだ当
初は凍えるほど冷たかった。これは泉の中央から冷水が湧き上がり、
広大な水槽の上を通過して循環しているのだろう。

循環。その言葉に、言いようもない恐怖を感じた。泉の湧き水は、
水面に顔だけ出しているアリスと、もう殆ど空気の残っていない僕
の顔を横殴りに流す。

(まずい……っ)

水は自動的に僕らを岸へと運んでくれる。だが、完全に渡す前に
その手の平を裏返すのだ。

湧き水は水槽の上を通り、その壁にぶち当たると、途端に
下降する。

(っ！！)

とつさにアリスの服を掴んでいた手を離れた。この循環の輪に組
み込まれるのは水中の僕だけだ。水面に上がったアリスへの影響は
少ない。

そしてその判断は正解だった。今の今まで救世主のごとく導いて
いた流れが、反旗を翻して僕一人を沈めにかかった。

凄まじい力だ。あっという間にお別れしたはずの忌々しき水草と
対面することになる。そうして水草は、新たな獲物が来たと涎を垂
らさんばかりの勢いで僕の体に巻き付いてくるのだ。

足を拘束され柔らかな手枷を嵌められ、身動きもとれなくなる。

抵抗すればするほど複雑に絡み合い、脱出は不可能となった。

無様ねえ……。

必死にもがく僕の耳に、嘗ては愛しいと復唱して固執し続けた女の声が聞こえた。

記憶の中の彼女はもっと優しく穏やかに取り繕っている。だとしたら聞こえる嘲笑は紛れもない幻聴だ。そんなのに構っている暇も余裕もない。

僕は酸欠で朦朧とする意識の中、両手にだけ神経を集中させて水草を引きちぎり始めた。

何をそんなに足掻いているの？ 力を抜いてしまえば楽だということに……。

(うるさいです……黙っていて下さい)

私だけを愛しているのではなくって？ なら今ここで死になさいな。私のところへいらっしやい……。

(うるさいです……)

あの子は“二番目”でしょう？ なぜ“一番”の私よりもあの子を優先するというの……？

(うるさい……っ)

ふん……不実なのね。そんな貴方だから、“誰も貴方を愛さない”のよ。わかっていらして？

(うるさい黙れ！)

おお怖い。まあいいわ。どうせ、“もう遅い”わよ……。

(黙れレイズー！)

呪いのように付きまとってくる言葉を最後の水草ごと引きちぎって、僕は力尽きた。

待ってましたと言わんばかりに、開いた唇の間から空気を押し出して水が己をねじ込めてくる。

抵抗を失った僕の腕を、新たに柔らかな水草がそつと包み込む。嬉々として四肢にまとわりついてくる水草は、食虫植物というよりもむしろ娼婦のようだった。甘えるように先端で頬を舐める。

(アリ、ス……)

いらっしやいらっしやい、歓迎するよ。艶美に囁く水草達は外界の未練を断ち切るように視界を碧で覆っていく。

いらっしやいらっしやい、人魚姫が最も愛した人間の王子様。人魚姫のかわりに泡になりに来たんだね？ それとも人魚姫にその心臓を抉られたのかな？ まあどちらにしても同じことだね。この物語は悲劇と相場がきまつてるのさ。さあ、力を抜いて、目を閉じて、全て忘れて。そう、それでいいんだよ、王子様……。

嗚呼、おかえりなさい、私の仔犬……。

(……あ……り、す……)

水面から差し込む光を掴もうと、最後の力を振り絞って力無く手を伸ばす。

一際太く、女性の腕ほどもありそうな水草が、それを宥めるように前を遮った。優しく優しく、もう放さないと囁きながら碧の檻へと閉じ込める。

最後の光も失われた。

嗚呼、

真　　つ　　黒　　だ　　。

o

o

o

.

o

o

.

.

o

o

o

o

.

o

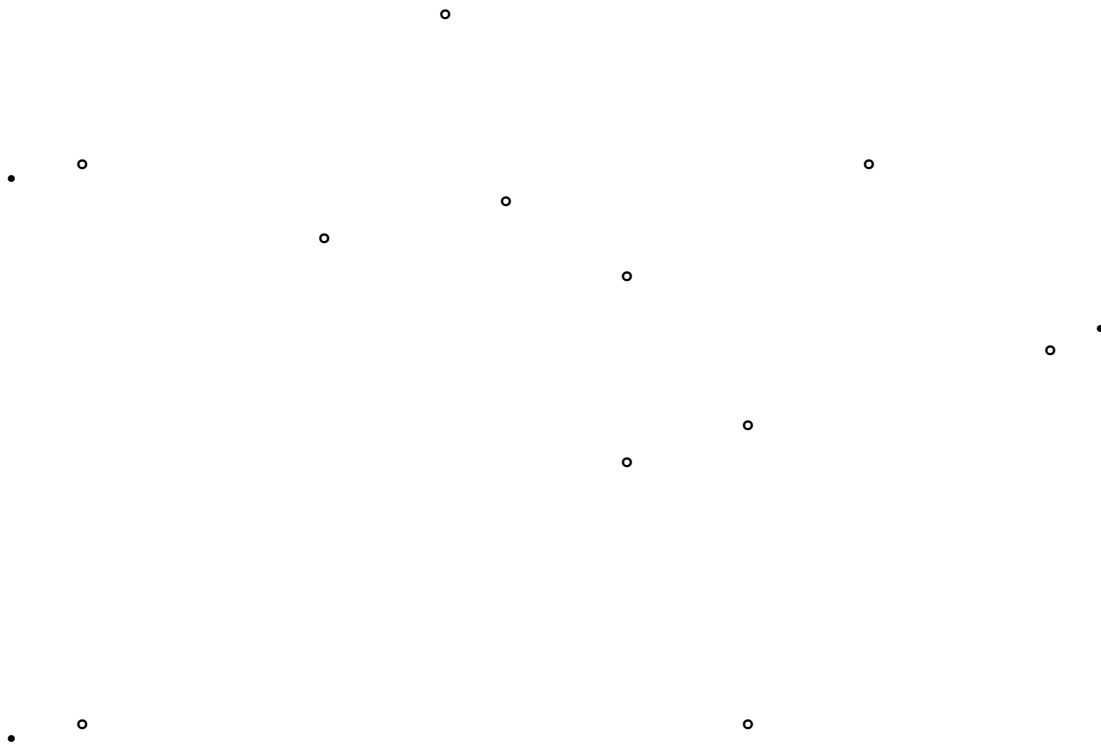
.

o

.

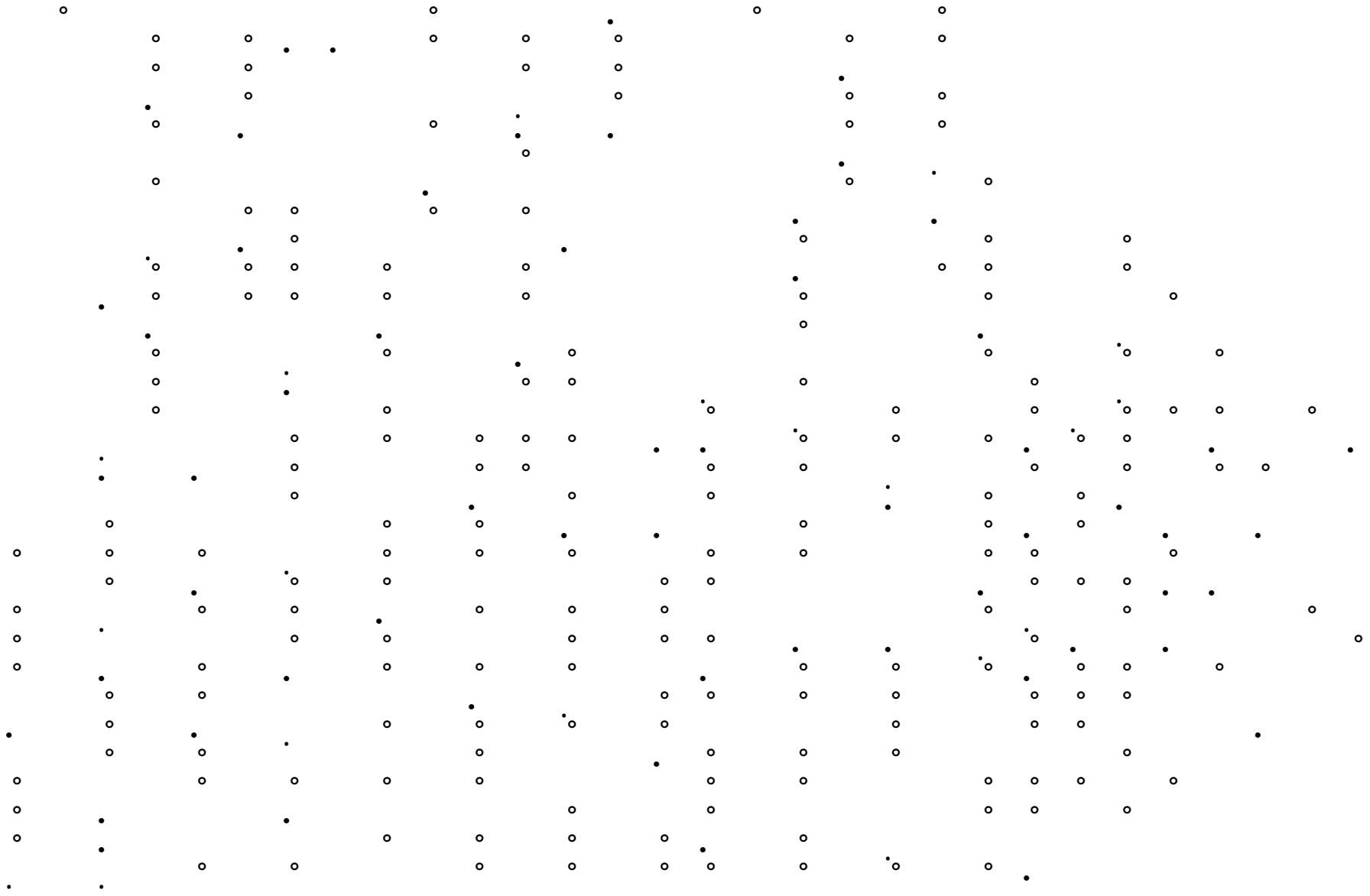
o



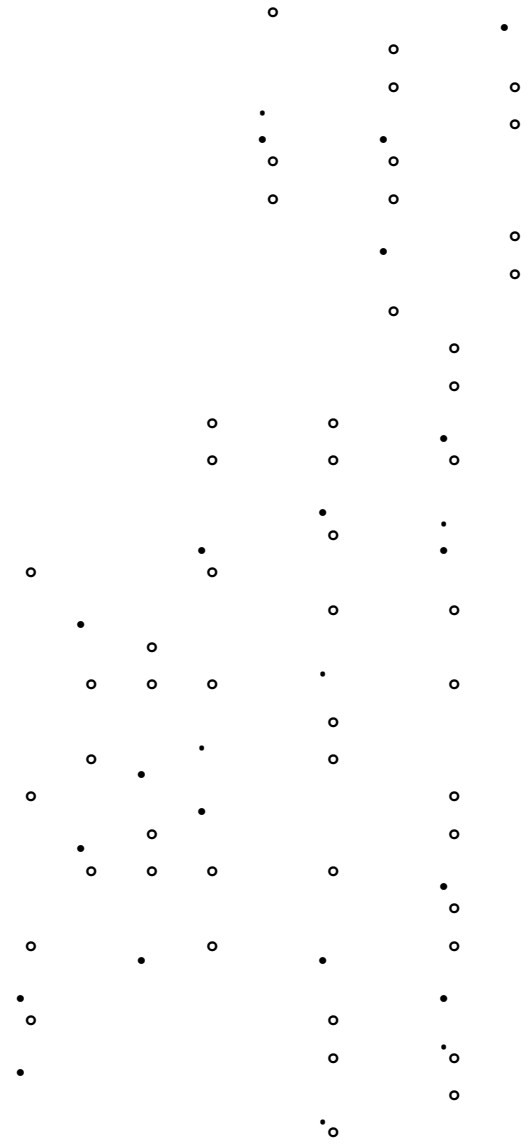








ツ
!
!



愛形 † ギアイ 終曲 † (後書き)

全部レーテのターン！ のはずが、なんだかおじいちゃん我を失って動乱してますね。普段冷静な人ががむしゃらになるのってなんか素敵。

今回は何と携帯で丸一日で仕上げちゃいました。自分に拍手。

どうしよう、ギアイが書くの面白すぎてたまらない。電車の座席に座りながら鬼気迫る勢いでメール投稿している作者の凶、うーん、恐ろしい。時々刺さる視線が痛いです。

やっぱり私はギャグよりもシリアスを書くのが好きです。いやギャグもジャンルとしては好きですけど……あのテンションを保てないorz

さあ、前回ようやくレーテが自覚し、アリスに手を伸ばそうとしたのも束の間、今回はアリスが大ピンチです。それを救おうとして次はレーテが……。

なるべく鬼気迫るように書いたんですが（ボタンを早打ちする作者の顔も鬼気迫る物でしたが）、少しでも緊迫感やらを感じてもらえると幸いです。

最後の方、レイズの幻影がやたら気持ち悪いですよね。でもああいう貴族めいた喋り方は憧れる物があります。いやしませんけども、アリ幕で本当の意味で悪に染まってる人っていつたらやっぱレイズなのかなあ……。フレ임様は本来心の優しい人間ですので、似非悪役です。レイズは何度書いても好きになれません。

最後の。と。と。の羅列、途中でお気づきになるかもしれませんが、泡です。番外編と言うことなので気兼ねなく遊んじやいました。

一番最後、泡が急増してますよね？ 普通、どんな時に泡は増え

るでしょう？

さて、来月こそギアイ完結です！ 長かった！ まさか存在感空
気なおじいちゃんまでここまで引き延ばすとは思ってなかった！

レテアリはもちろん本編では皆無です。レーテ（バツ1）、フレ
イム（小さい）、双子（お互いへの興味が強い）、レスト（小さい）
、マルス（お馬鹿）は恋愛対象外です。番外編にも時々しか出てき
ませんが、愛形を機にメインキャラたち以外にも関心を払ってみた
らいかがでしょう？

ちなみに作者はユウアイ、ギアイを通してフレイム様とレーテが
お気に入り、モウアイを通してロキ君への苦手意識が高まりました
た……。だってモウアイどうしても納得いかなかったんだもの！

今回は【12月14日】、さあどうなるレーテ！

こんなところで1か月も更新しないでもいいのかという。もう少し
辛抱ください。

たくさんの感想、いつもいつも励まされています！ 受験生思っ
た以上に大変ですが、全力を尽くして戦いたいと思います！ では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8348f/>

不思議の国のアリス*幕

2011年11月16日22時44分発行